

ベルセルク・オンライン～わたしの幼馴染は捻くれ者～

兵隊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目付きが悪く口も悪いオリ主が七転び八起きするお話し。

目次

パロデーモード

正妻戦争（仮） ～予告～

番外編 義妹との猛暑日

番外編 私の先輩は捻くれ者

番外編 幼馴染がオレに当たりが強い件

番外編 暇を持って余した男たちの遊び

番外編 ミト「星なき夜のアリア？」

番外編 晶彦「優希君、ラーメンを食べに行こう」

リクエスト 魑魅魍魎の宴

リクエスト 先輩と後輩の何気ない日々

リクエスト 木を隠すなら森の中

リクエスト ご注文は捻くれ者ですか？ 母親編

Vol. 0 目覚め前

プロローグ

第1話 わたしの幼馴染は捻くれ者

第2話 ボロアパートだって住めば都

第3話 従兄弟は鉄仮面

第4話 後ろを振り向こうとしない愚者

第5話 着せ替え人形INデパート

第6話 親を訪ねて三千里未満

第7話 憩いの場、ダイシーカフェ

第8話 デスゲーム

幕間 茅場優希の罪

Vol. 1 ベルセルク

210 196 179 160 146 130 120 110 100 97 87 81 70 60 54 41 36 28 15 6 1

第1話 少年は怒りのまま剣を振る | 215

第2話 捻くれたヤツの不器用な気遣い | 229

第3話 二人はきつと似た者同士 | 246

第4話 モンスターキラー | 265

第5話 『スイッチ』 | 285

第6話 はじまりの英雄 | 312

第7話 あたしは専属スミス | 324

第8話 ギルド『加速世界』 | 341

第9話 崩れ去る平穩 | 364

第10話 黒ポンチョの男 | 374

第11話 少年は独り前に進む | 393

第12話 ベルセルク | 402

幕間 帰還を待つ者達 | 428

幕間 世界に憤りを募らせる者達 | 436

Vol. 2 アイנקラッドの恐怖

第1話 鎧の少年、紫ローブの少女 | 447

第2話 紫ローブの子の追憶 | 461

第3話 それでも少年は止まることなく | 475

第4話 茅場優希は歪である | 492

第5話 欠ける物、加わる者 | 509

第6話 アナタの姿を模範して | 522

第7話 少年がいくら望んでも孤独にはなれず | 541

第8話 そして少年は遂に立ち止まる | 557

第9話 少年は追い詰められ | 572

第10話 されど少年は足掻き続ける | 592

幕間	妹として、兄に出来ること	605
第11話	少年の帰るべき場所	618
第12話	兄と妹は家族になる	633
第13話	決闘　　～Re:1～	652
第14話	決闘　　～Re:2～	662
第15話	決闘　　～Re:LAST～	674
第16話	幼馴染	688
幕間	血盟騎士団	701

Vol. 3 蒼炎の殲滅者

第1話	その後のインクラッドの恐怖	711
第2話	ギルド	727
第3話	カーディナル	744
第4話	余命幾許もないこの身なれど	760
第5話	黒猫団の英雄	779
第6話	聖竜連合の交渉人	790
第7話	棺桶を壊す者	805
第8話	英雄と恐怖の関係	818
第9話	黒猫は悲観する	829
第10話	英雄は棺桶に収まらない	842
第11話	笑う棺桶　　～起～	861
第12話	笑う棺桶　　～承～	872
第13話	笑う棺桶　　～転～	887
第14話	笑う棺桶　　～結～	900
第15話	生きる意思	928

Vol. 4 ソードアート・オンライン

第1話	第五十層	940
第2話	男は船、女は港	951
第3話	遠い思い出	969
第4話	鼠の刃	984
第5話	虎穴に入らずんば虎児を得ず	1004
第6話	『騎士長』ディアベル	1022
第7話	『聖騎士』ヒースクリフ	1038
第8話	そうして少年は幸福を受け入れる	1050
第9話	妹のワガママ	1072
幕間	幼馴染と妹と寝てるんだけど質問ある？	1102
第10話	鐘の音	1131
第11話	はじまり	1132
第12話	茅場優希	1146
第13話	優希の本心	1154
第14話	決戦前く大人の意地く	1169
第15話	決戦前く自覚した恋く	1177
第16話	決戦前く幼馴染く	1188
第17話	最強と最大の矜持	1197
第18話	希望の背を守る者達	1219
第19話	炎を絶やすことなく	1228
第20話	茅場の望み	1240
第21話	決戦く序く	1247
第22話	決戦く破く	1258
第23話	決戦く急く	1271
第24話	茅場優希と茅場晶彦	1283

第25話 心ガ欠ケル音

最終話 ソードアート・オンライン

それはありえたかもしれない結末

Vol.5 カーテンコール

第1話 それから

第2話 須郷伸之

第3話 心ガ壊レル音

第4話 『リンク・スタート』

第5話 スプリガン

第6話 100人斬り

第7話 共犯者

第8話 鳥籠の中の女王

第9話 囚われの君

第10話 わたしのヒーロー

第11話 舞台転換

第12話 集結する者達

幕間 妹が出来ること

第13話 最強との会合

第14話 紅閃のアスナ

第15話 その紅閃は彗星の如く

第16話 攻略開始

第17話 世界の悪意

第18話 もう一人の仲間

第19話 いつか覚める夢

第20話 終局焰武・絢爛炎帝

166016381622160215901576156015431530151214971474146014461428141314031391138113631347

133513141294

第21話 現状報告

最終話 カーテンコール

Vol. 6 リメンバー日常

第1話 機械は敵だ

第2話 私の先輩

第3話 住めば都(ガチ)

第4話 やはり機械は敵だ

第5話 ユウキ無双

第6話 罪悪感

第7話 後輩とのデート ㇿ激闘編ㇿ

第8話 後輩とのデート ㇿ白熱編ㇿ

第9話 後輩とのデート ㇿ灼熱編ㇿ

第10話 後輩とのデート ㇿ終焰編ㇿ

第11話 かつて恐怖と呼ばれた彼

第12話 英雄と恐怖の奇妙な関係

幕間 その頃の優勝者

第13話 喫茶店で馬に蹴られたハナシ

第14話 懐かしきダイシーカフェ

第15話 ダイシーカフェの店員 優希

第16話 オレが長髪にしている理由

第17話 恐怖は人知れず行動する

第18話 先輩にとっての他人とは

幕間 とある毒鳥の欲情

第19話 強さの定義

幕間 妹同盟

17111690

1990197819711956193719261916190018861879186718561845183618291817181017961784177017461733

第20話 銃の世界

Vol. 7 ファイアー・バレット

第1話 恐弾の射手

第2話 恐弾の学生生活

第3話 彼女の交友関係

第4話 恐怖を超える者

幕間 銃はロマン（男の子的な意味で）

第5話 恐弾が強さを求める理由

幕間 もう一人の後輩

第6話 うっかりの英雄

第7話 迂闊な英雄

第8話 過去の亡霊く予選開始前く

第9話 英雄の苦悩を笑いに来た捻くれ者

第10話 加速世界同窓会（欠員2名）

幕間 その頃の欠員二名

第11話 茅場優希の悪癖

第12話 朝田詩乃の分岐点

第13話 BOB本選前 く当事者ではない者達く

第14話 BOB本選前 く当事者達く

第15話 BOB本選前 く幼馴染と後輩く

第16話 BOB本選前 く先輩と後輩く

幕間 観戦者一同

第17話 BOB本選 く三人共く

第18話 BOB本選 く境地く

第19話 BOB本選 く先輩と後輩く①

第20話	BOB本選	～先輩と後輩～	②	12315
第21話	BOB本選	～先輩と後輩～	③	23312
第22話	BOB本選	～先輩と後輩～	④	32343
第23話	BOB本選	～終幕～		52362
最終話	ファイアー・バレット			23792

パロディモード

正妻戦争（仮）　　予告

某月某日。

あれは夕方の出来事であったと茅場優希は思い出す。

夜の時間帯——というには中途半端で、ダイシーカフェ店内は混雑しているわけでもなく。

程よい客数で、程よい忙しさであった。そんな事もあってか、優希は普段よりも二割増で愛想よく振る舞っている。しかし余裕があるというのも考えもの。客との世間話によって、あんなことになるとは優希も考えもしなかった。

今思えば迂闊だった。

我ながら妙なことを口走ったものだ、と猛省するばかり。

「お疲れ様優希君」

「ありがとうございます、御坂さん」

話しかけてきたマダムに、ニツコリと、柔和な笑みを浮かべて優希は応じる。

優希の名を知っているということは、ダイシーカフェにはそれなりの常連であるのだろう。現に常連客の名を完全に記憶している優希も、マダムの名を呼び応じている。

「頑張ったから何か食べない？　おばさんが奢ってあげるわよ？」

「あはは、ありがとうございます。でもお気持ちだけ。今は勤務中ですし」

これまたあざとく、優希は困ったようにあざとく笑みを浮かべる。

それがどうやらマダムの琴線に触れたのか、キュン、と胸を高鳴らせて引き下がることなく続ける。

「釣れないこと言わないで。店長さんには私が言っておいて上げるから」

「……困ったなあ。そこまで言われちゃうと僕も断れませんか」

「断らなくていいじゃない。大丈夫よ、頑張った自分へのご褒美だと思ってくれば」

「わかりました。でも奢ってもらうのは、流石に気が引けますし、こうしてお喋りするということで」

ウィンクしながら、イタズラを思いついたような小悪魔的な笑みを浮かべて優希は言う、それだけでも充分だったのかマダムは気を良くして頷いて。

「ええ、ええ。それでもいいでしょう。でも優希くんはそれだけでいいの？」

「はい、むしろ嬉しいですよ。僕も御坂さんとお話し出来て楽しいですから」

「優希くん……」

再びマダムの琴線に触れていく。あざとい、実にあざとい。

だが一定の距離感を保っているようでもあるようだ。それを証拠に、マダムの席に優希は座らない。立ちながら応対し、必要とあればそこから直ぐに離れることが出来るように立ち回っている。

もちろん、それを相手に悟らせることはしない。

マダムは気を良くして、うっとりとした笑みを浮かべながら優希を見つめて。

「本当に良い子ねー。結婚してなかったら私、直ぐに連絡先交換したのに……」

「ありがとうございます。僕も御坂さんが結婚してなかったら、声をかけてましたよ」

「あら、お上手ね？」

「事実ですから。可愛いですよね、御坂さんって」

「もうアラフォーなのに？」

「歳なんて関係ないですよ」

笑みを絶やさず、齒の浮くような台詞ばかり、優希の口から紡がれていく。

優希の本性を知っていれば、直ぐに嘘であると見抜ける言葉だ。捻くれ者が素直に他人を褒めるわけもなく、笑いながら言う時点で怪しいものだ。

しかしマダムは知らない。茅場優希がどのような人間なのか知らない。とはいえ知らないとは時に幸福なものだ。知らなくてもいい真実なるものは確かに存在する。

マダムのご機嫌は今や最高潮。

ルルルン気分で口を開く。

「本当に口が上手い子ね。彼女とかいるでしょ？」

「彼女とかいませんよ」

「へえ、意外ね。でも実際、モテるでしょ？」

「それが全く」

困ったような笑みを浮かべる。

こればかりは本当のことである。だがそれは優希自身の認識の話だ。真実、他人が優希に対してどう思っているのか、本人が全くこれっぽっちも察することが出来ていない。

「それって優希くんが選り好みしているからじゃないのー？」

「選り好み、ですか？」

「ええ。選んでるから彼女が出来ない、とか」

それはない、と優希は心の中で断言する。

選り好みなんて出来る立場ではないし、優希の本性を知った他人は萎縮してばかりだ。これでは異性と添い遂げるのは不可能であるし、今の所優希も異性と付き合っているほど余裕がない。

「優希くんの好みの子ってどんな娘？」

「それはメガ——」

反射的に、メガネが似合う女、と答えかけるも何とか踏み留まる。さすがにこの発言はフェチすぎるものであるし、ただの他人に暴露していい性癖でもない。

「メガ、なに？」

「いいえ、僕の好み、ですか……」

真剣に悩む素振りを見せるが、それはもちろん演技。

正直な話し、面倒くさかった。

これ以上構っているのは無駄であるし、こうして話している間にも仕事は溜まっていく。主に洗い物方面で。それに夜に向けて仕込みもある。となれば早々に切り上げるのが吉であるのは明白。

さて、どうやって切り上げようか、と優希は考えて。

「んー、僕の暴走を止めてくれる娘ですかね？」

「暴走？」

「はい。こう、僕がダメな方向に進んでたら力尽くで止めてくれる娘、ですね」

「力尽く、っていうと腕つぶしの意味で？」

「まあ、そうなりますかね？ 何度かそうやって止められたことありますし」

「ってことは、優希君に勝つ娘が好みってこと？」

「はい、そうなりますね——」

それがイケなかった。

たとえ嘘でもそんなことを言うべきではなかった。

早く話を切り上げたくとも心にもないことを言うべきではなかった。

優希の失敗はそう言うことだ。もつと真剣に考えて、自分の言葉に責任を持っていれば——あんなことにはならなかった。

些細なことで戦争とは起きる。

いつだって争う理由はつまらない状況から生じる。

それが今。優希の発言によって戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

——正妻戦争、ここに開幕——

番外編 義妹との猛暑日

仮想世界での経験を経て、自分——茅場優希はどれほどの変化を遂げたのかぼんやりと考える。

いつも一人、というわけではなかった。常に優希の周りには誰かがいた。それが幼馴染であったり、その家族であったり、後輩であったり——叔父であったり。

周囲には恵まれていた方であると自負している。何せ自分のような男に付き合うほどのお人好しばかりだ。彼女達がどれほど希少な存在なのか、そんなもの茅場優希が一番理解していた。

だがそれでも、優希は本当の意味で笑うことはなかった。

いつだってしかめっ面で、退屈そうに斜に構えて、俯瞰的視点で世界を見下していた。

だが今は違うと断言できる。

何が変わり、何を失ったのか。

何が終わり、何が始まったのか。

優希には説明がつかないものの、自分の中で何かが変わったことは明白である。

そんなセンチメンタルなことを考えて鬱陶しそうに一言。

「……熱っ……」

柄にも無いことを考えていた。

それもこれもこの気温のせい、湿気たっぷりの猛暑を迎えた今日この頃のせいであると、優希は結論付ける。

夏の日の午後——世間で言うところの猛暑日に、優希は自らが住まうアパートに寝そべっていた。

もちろんオンボロのアパートなどに、クーラーなど存在しない。温度調整が行えるハイテクがあるとすれば、それは壊れかけの扇風機のみ。だがそれも今となつては鉄くず同然である。

「……………」

涼しい風などもつての外。

嫌つてほど熱い空気が、扇風機が回るプロペラに押されて優希に直撃する。不快である、不愉快である、こんなことなら扇風機など引つ張り出してくるんじゃないか。

そんな後悔の念が、優希に襲いかかる。

出来ることなら、ここから抜け出したかっただろう。

だがそんな気力、優希に残されていない。外に出れば溶けそうになるほどの気温、真上で燦々と輝く太陽、そしてアスファルトに立ち上る蜃気楼のおかげもあり、優希のやる気はゼロに等しいものにまで落ち込んでいた。

タンクトップと短パン姿で寝っ転がっていると、ふと幼馴染の顔を思い出す。

ハイテク技術が盛り込まれた、幼馴染の家。パンツと手を鳴らせば電気が付き、幼い頃に一緒に入ったジャグジー付きの大きな浴槽。

きつと幼馴染は自分の部屋で、優雅にアイスを食って、優雅に鼻歌混じりに小説を読んでいることだろう。

雲一つ無い、青い空——

強烈な日差しにうんざりしながら、優希は『アイス』という単語に何かを思い出すかのようにのっそりと寝っ転がりながら進み、冷蔵庫を開ける。

「アイス」

一言、思考能力も低下しているのか、ポツリと無感情に呟いた。

このときの為に買って冷やしておいたスーパーカップバナナ味。ハーゲンダッツなど買えない。今も昔も、茅場家の家計は火の車。金銭に余裕があれば、バイトを掛け持つなんてこともないし、もつと高級なマンションに引っ越している。

だが現実には厳しいもの。茅場優希ともう一人が住んでいるのはボロアパート中のボロアパート。築何年かなど見当もつかないほどの生きた化石に住居を構えている。

そんな悪環境で、猛暑日にアイスはご馳走だった。

一個だけ残っているというのも、日頃の行いの良さだろう、と優希は自画自賛しつつ無表情ながらもほくほく顔で手を伸ばして。

「ずるいー……」

伸ばした手が止まる。

その声は扇風機の前から、一人陣取るもう一人の同居人からの抗議だった。

黒髪に白いヘアバンド、優希と同じようにタンクトップに短パンとどこか危なっかしい格好をしている少女——木綿季は感情のない声のまま気怠そうに言う。

「ボクも食べたいー」

「オマエ、昨日の夜食つたら」

明日は猛暑日だから残しといた方がいい、とアドバイスを送ったのは記憶に新しい。

だが木綿季は喜々として、笑顔で、満面の笑みで、食べてしまったのだ。

木綿季はもちろん、覚えている。

それを証拠に「うぐつ」と若干言葉を詰まらせて、立ち上がり両腕

を上げて抗議し続ける。

「食べたい食べたい、ボクも食べたーい！」

「バカ。水道水でも飲んでろよ」

「水道水オンリー!?!」

「ガーンツ、と勝手にショックを受ける妹に完全に興味をなくして、兄は非情にも冷凍庫からアイスを取り出す。

キンキンに冷えた状態だった。それだけで、ありがたい。これを顔につければどれほど気持ちいだろうか、と優希はぼんやりと考えている。

「ねっ、にーちゃんお願い！ 一口、一口分けてよー！」

「うおっ、背中にしがみつくなバカっ！ 暑苦しい、汗でヌメヌメするー！」

首にしがみつき、背中に密着する木綿季に思わず声を上げた。

柔らかい二つの感触を味わう——なんて余裕は優希にはない。絞まっていたのだ、ガツチリと。抜けられないくらいホルドをかけられている。

見れば木綿季の顔は紅く染まっている。

汗、という単語のせいで彼女は恥ずかしがっているのか、その力は万力の如く徐々に優希の首を締め上げていた。

「あ、汗でヌルヌルするって言わないでよ！ ボクだって女の子なのにつー！」

「女の子って自称するならよお、不用意に野郎に抱きつくな……！ てか、絞まってる、首が……ッ！」

「自称じゃないもん、女の子だもん！ ボクだって成長してるんだよー!?!」

「わかった、わかったから！ 本当に一回離れろ……ッ！」

無理矢理、妹を引き剥がす。

思いの外しつかりキマっていたのか、何度か兄は咳き込んでアイスを一旦冷凍庫に入れて。

「オマエさあ、もう少しお淑やかに出来ねえのか？」

「むう、どう言う意味？」

「そのまんまの意味だよ。どこの世界に、んな薄着で野郎に抱きつくバカがいるんだよ？」

「ここにいるよっ——つて痛っ！ に、にーちゃん、それ結構痛いよっ!？」

ビシビシと木綿季の頭にチョップを叩きつけて不満を全てぶつけた。

「威張ることかよ。オマエさ、まさかと思うが学校でも他人に抱きついてるわけ？」

もしそうなら、一大事だ。

木綿季が男に、しかも思春期真っ盛りに抱きつくとなると勘違いする奴も増えるばかり。こうなれば全力を上げて、悪い虫を叩き潰すのも辞さない考えである。

だが木綿季の返答は違う。

ううん、と首を横に振って兄として考えれば幸か不幸か、微妙なラインの返答を満面の笑みで言った。

「ボクが抱きつくのは、にーちゃんだけだよっ！」
「……………おう」

ならいい、と納得しかけて直ぐに考えを改めた。

抱きつくのは自分だけ、その返答そのものがおかしいと、優希は気

付いて直ぐに行動に移す。

「痛っ！　なんで、またチョップするのさ!？」

「だから、抱きつくなくなって言ってるんだよ」

「にーちゃんでも?」

「兄ちゃんでも」

「なんで?」

「なんでも」

いまいち納得していないのか、木綿季は不思議そうに首を傾げて。

「でも好きな人には押せ押せだって、詩乃は言ってたよ?」

「アイツは後で叩き潰す」

脳内で無表情でクールにサムズアップする後輩を、優希は頭の隅に追いやった。

論ずるのは後輩の処遇ではなく、木綿季の異性に対する距離感である。

「オマエは野郎に対する距離感を覚えろよ。将来、クソ野郎が勘違いしたらどうする気だ?」

「大丈夫だよ、ボクが抱きつくのはにーちゃんだけって言ったでしょ?　それに何かあったら、にーちゃんに守ってもらおうし」

「最低限、自分の身は自分で守ってほしいんだけど?」

ため息をついて、呑気に構えている木綿季に呆れた視線を送る。

対して「もしかして」と木綿季はどこか顔を赤らめて、嬉しそうな口調でチラチラ優希の顔を伺うように。

「にーちゃん、照れてる?」

「……………」

「あ、ごめん、ごめんなさい。謝るから、無言でチョップの構え止めて欲しいなーって！」

全力で手を合わせて懇願する木綿季を見て、再び深い深い、それはもう深いため息を吐いて優希は立ち上がった。

思わず、木綿季の両肩がビクツと震える。怒られた、と彼女は認識したのか先程の明るかった表情は見る影もない。シユン、と顔を伏せていると。

「ほら」

「——うひゃ!？」

顔に何か冷たいものが当てられて、木綿季は飛び跳ねた。頬に手を当てて、何が当たったのか見てみると——。

「……ククツ、何て声出してんだオマエ」

小さく笑みを零す兄の片手には——アイスが収まっており、それを木綿季の頬に当てたのだろう。

木綿季は反応が出来ない。思っても見なかった兄の行動に、ボーツとフリーズしていると訝しむ口調で。

「……ンだよ?」

「怒ってないの?」

「怒るって、オレがオマエに?」

力なく頷く木綿季に、首を傾げて。

「怒る理由がねえだろ。それよりアイス、欲しいんだろ?」

「えっ、くれるの?」

「ああ。やるから、それ食って大人しくしてろ」

そこまで言うのと、スプーンと食器棚から取り出して、アイスと共に木綿季に手渡す。

受け取ったアイスはひんやりとしていた。

もしかしたら、兄は最初から妹に譲る気だったのかもしれない。そう思わせるほど、素直すぎるほどスムーズに譲渡していた。

思わずギュツと、アイスを大事そうに抱える。

ぶつきらぼうで、口が悪いのに、優しさに溢れている兄が愛おしく思う。

「ねえ、にーちゃん」

「あ？」

「はんぶんこ、しない？ ボク、にーちゃんとはんぶんこしたいな」

「……ハア」

ため息をついて、優希は一つの丸テーブルの前に座った。

それが答えであると木綿季は認識すると、笑顔でその隣に座る。

外は猛暑、室内は同じくらいの気温、それでも兄妹は肩を並べて座る。

暑苦しいにも程が有る光景だ。クーラーはなく、扇風機も温風しか送ってこない。汗も流れて不快感が増すばかりの筈なのに。

「えへへ」

木綿季は幸せそうに笑みを零す。

まるで、こんなことをやってみたかった、と言わんばかりに。一つものを分け合うことが夢であったかのように、嬉しそうに本当に嬉しそうに。

「にーちゃん」

「んだよ？」

「ボクね、にーちゃんの妹で良かったよ」
「……そうかよ」

ぶつきらぼうに言った言葉に、うん、と花が咲いたような笑顔で答える。

全てが解決して、何もかもを背負った。

もしかしたら、これから妙な事件に巻き込まれるかも知れない。もしかしたら、何か取り返しのつかない事がまっているかもしれない。今の生活が幸せなのか、不幸なのか、優希には明確な返答が出来ないが。

狭い部屋で、ボロいアパートで、冷房機器もないけど、一つのアイスを分け合う現状であるけれども。

人の幸せなんて、案外この程度なのかもしれない――。

番外編 私の先輩は捻くれ者

——人間社会において、必ず必要悪というものは存在する——

人間とは一人や二人、悪認定しておけば、人は結束し、安らぎを得る存在だ。理由は様々なもので、『物事が上手くいかない憤り』であったり、『ストレスの捌け口』であったり、『劣っている人間を見て安心したい』であったりと様々なものだ。

そうして、人間は『必要悪』を自分達の中から見繕い、無条件で貶めて良い存在へと変えて、平穏を保っていく。自分よりも弱い立場の人間を陥れ安心したい、自分よりも劣っている人間を貶して静穏を得たい。そんな身勝手な理由で、必要悪として選定された人間の事情などお構いなしに、人間は押し付ける。

人間とは欠陥だらけであり、不完全なの生き物である。こうでもしなければ、自分を保てず、平穏を実感出来ないのだろう。

それはまるで——生贄だった。

自分以外の誰でもいい。誰かが『必要悪』となることで、平穏を享受することが出来て、自分は安らぎを実感することが出来る。

それは例え、人間が成長しようが変わることはないだろう。生まれて育ち、義務教育を経験し、希望校に進学し、社会に出て、余生送ろうとした所で、何一つ変わらない。『必要悪』の選定は終わらない。死ぬまで付き纏っていく。

『必要悪』の選定基準は単純なものだ。

自分よりも劣っている人間、性格が破綻している人間、そして——無条件で貶めてよい人間であるかどうか。

——そう言う意味では、彼女は適任だった。

彼女は転校生。

東北から母親の療養の為、近隣の小学校へと彼女は転校してきた。転校した彼女を知る人間はいない。どんな性格なのか、一体どう言

う人間なのか。彼女以外の人間は知る由もない情報である。だが、そんなものは関係なかった。転校してきた少女は、過去に——人を殺したのことがある人間。つまりは『悪』である、彼女以外の人間は認定してしまった。

その際、どんな状況で、どんな言い分があるのか、何て彼らには関係がない。

人を殺した彼女は『悪人』であり『悪』である。それを罰する自分達は『正義』であり『善』である。身体的にも精神的にも幼い彼らは、短絡的に認定してしまった。

彼女にとって不幸なのは、それを咎める教師達も幼い彼らに同意してしまったことだ。教師達も、必要悪を欲していたのだろう。一人生贄が居れば、秩序は保たれる。一人の犠牲で生徒達は団結し合い、結束が固まっていく。そうしてイジメられるのは彼女のみとなり、教師達の労力も減るといふものだ。

そうして、彼女にとって地獄の日々が始まった。

何も知らない彼らからは自分が悪だと罵られて、集団で軽く殴られる事もあった。教師に助けを求めても事態は変わらない。かと言って、母親に助けを求める訳にもいかない。

正に八方塞がり。彼女は肉体的にも、精神的にもすり減らしていく日々を送ることになっていく。

ここで、彼女が逃げるといふ選択肢を持つ普通の人間であれば、何がかわっていたのかもしれない。

更に不幸だったのは、彼女は自分が思っているほど強い人間であったことである。ここで逃げてしまえば、精神的に病んでいる母親が気付いてしまう。それだけは避けなくてはならない、と。彼女は気丈に振る舞っていた。母親の療養の邪魔にならないように、せめて母親だけは守らなくてはならない、と彼女は「何もなかった」ように振る舞い続けた。

だが限界は来る。

幼い彼女にとって、学校での生贄イジメの日々は精神を摩耗するに充分な

モノであつた。

殴られ、蹴られて、罵られて、無視される。彼女から見た学校とは世界そのもののように、世界中の人間が自分を敵として見ているかのようだった。

そんな地獄の日々が続くと思ひこんでいた。

小学校を卒業し、中学校に進級し、高校生になろうと変わらないのだろう、と彼女が諦めていたある日。

『——テメエら、下らねえことでハシヤイでんじやねえよ』

救いの手が差し伸ばされる。

その手の主は、金髪碧眼の少年。粗暴な口調、乱暴な態度。とてもヒーローとは呼ぶに相応しくない人物が、彼女の前に守るように立ち塞がっていた。

それからと言うもの、彼女に対し害する行為はなくなった。

とはいっても、彼女は浮いた存在だ。無視されることはあれど、好意的に迎えられる訳もない。

一体、自分達こそ善人だと信じてた少年たちに何が起きたのか。

簡単な話だ。『必要悪』が無視されるほどの悪を用意しただけに過ぎない。『必要悪』すら霞むほどの『絶対悪』を用意していた。

しかも用意したのは、彼女を助けた金髪碧眼の少年だ。

金髪碧眼の少年は、『必要悪』が二度と生贄にならないように、自身を生贄にすることで、彼女がイジメられないように噂を広めた。

『必要悪』が霞むほどの悪名を広めて、悪劣な噂を広めて、その役割ロールを演じようとしていたのだ。

普通の人間ならばそんなマネはしないだろう。生贄にされている人間の代わりを自らが行うなど、とても正気の沙汰ではないし、まともな精神構造ではない。

だが、少年はそれが出来る人間であつた。

我慢が出来ない人間。それを容認出来るほど少年は大人ではなく、

ち悪い——！

『う……う……う……！』

学校の壁に肩を預けて、私は何とか立っていた。

行き交う生徒達は、私を怪訝そうな眼で見、私の素性を知っている教師は見て見ぬ振りを決め込んでいる。

それこそが、私に与えられた罰と言うかのように、世界中の人間が私を敵意を向けているように、感じていた。しかし、それは過去の話。私は過去を思い出さないように、壁に手をかけて無理矢理歩いて行く。

行き先は図書室。私はそこへ、何度も足を運んできた。理由は——

『あ……』

そうしている内に、私は図書室に着いていた。

心臓がドキドキする、先程の動悸とは違う。私は緊張していた。図書室には、恐らく彼が居る。そう思う度に、私の心臓は早まっていく。早く会いたい、お話したい。でも会いたくない、何を話せばいいのか纏まらないから。そんな矛盾した願望がせめぎ合い、私の心臓はより早まり高まっていく。

落ち着けようとしても逆効果。

大きく息を吸い、そして深く吐く。それを数度繰り返して、幾分かマシになって。

『————』

私は意を決して、図書室のドアを開ける。

窓から差し込む夕焼けに眼を細めて、古本独特な匂いがする。

私の通う小学校の図書室は広い部類だと思う。教室を三つ分を吹き抜けたくらいの面積があり、様々な種類の本が棚の中に収められていた。分厚い辞典から、和英辞書。日本史から世界史、小学生が読むかどうかわからない生物物理学の本まで幅広い。

そんな中、片隅に設置されている読書スペース。

そこに、私が図書室に通う目的となっている人物がいた。

私の地獄の日々。

辛いことばかりで、怖いことばかりだった日々で、彼だけは私を見てくれた。彼だけが救いの手を差し伸ばしてくれていた。

『…………ツ』

しんと静まり返っている図書館。私の心臓だけが響いているのではないのか、と錯覚してしまうほど辺りは静かで、私の心臓は忙しく動いていた。

一步一步、また一步。私は彼に近付いていく。

彼はどうやら勉強中のようだ。私にはわからない数式をノートに書き殴って、教科書とノートを交互に視線を向けている。

ここで初めて、彼が私よりも歳上なのだとわかったところで、彼の隣に立った。

漸く彼の眼がノートから私へと向けられた。

彼は周囲に意識を向けて、誰も居ないことを理解すると面倒くさそうに問いを投げる。

『…………何の用だ?』

『その…………貴方に会いに…………』

上手く言葉に表せない上に、最後の方なんてか細いもので聴こえたかどうかわからない。対して、彼はこれみよがしに溜息を吐いて呆れた口調で。

『何度も言ってるけどよお、オレに構うんじやねえよ。標的から外されたっていうのに、また的になりに来るとかバカじやねえのか?』

彼の言う通り、私に対するイジメは不思議となくなった。そして同時に、彼に対する当りが強くなっていった。

そんな私に気を使っただか、彼は周囲に人がいる時は私と話そうともしない。もう一度、標的になることを危惧してのことなのだろう。

申し訳なくなる。恐らく彼が標的になったのは、私を助けたからだ。彼だけが私を助けて、周囲の反感を買ってしまい今の状況に陥ってしまった。

そう思うと後ろめたくなり、私は彼の方を満足に見ることが出来ない。

『下らねえことを考えてんじやねえぞ』

『……え?』

私は顔を上げる。

彼は笑っていた。

いいや。笑う、という表現は正しくないのかもしれない。

どちらかと言うと、それは人を小馬鹿にするような笑みに近い。

邪悪に口元を歪ませて、人を喰うように私に事実だけを伝えた。

『もし仮に、標的がオマエじゃなくて違うヤツだったとしても、オレは行動に移していた。今のような立場になるのは、必然ってヤツだろ』

それはつまり、私とは違う誰かが虐められても、彼は私のおきのように手を差し伸ばしていた、ということになる。

普通の人はそんな状態になっても、見て見ぬふりをする筈だ。大抵の人間は、損得で動いている。助けて自分に特があるか、関わって自分にどれだけの損があるのか。そうやって考えて、人間は動いている。

私はそれを学んだ。母親が病んでしまった件、私が引き起こした事

件の件、そして——この世界で爪弾きにされて、それを学んできたつもりだ。

だというのに、私が学習した前提をこの人は覆そうとしている。自分に得がなくても手を伸ばし、損になろうと彼は関わることを止めない。

『どうして……』

『あ?』

『どうして、私を助けてくれたの……?』

だから、私は疑問をぶつけることにした。

継るように、求めるように、彼だけを見て、彼だけに質問をぶつける。

そうすると彼は、少しだけ考えて。

『だから言ってるんだろ』

呆れた口調で続けた。

『別に、オマエの為じゃねえ。アイツらが目障りだったただけだ』

『……目障、り?』

『そうだ。一人に対して大人数で喧嘩挑んでるアイツらが、気に入らなかつただけだ』

そんな理由で、彼は喧嘩を売ったというのか。

気に入らないと言う自分の感情一つだけで、彼は戦っていたというのか。

ただ納得できないというだけで、彼は全校生徒と教師、保護者の敵に回ったというのか。

『どうして、貴方はそんなに強い……?』

『ハッ、オレが強い？ 節穴にも程があんだろオマエ』

そして彼は呆れた口調で。

『それに自己分析がお粗末過ぎる。もっと自分を見つめ直せよ』

『どういう意味……？』

『本当にわからねえのか？』

彼の問に、私はただ頷くだけしか出来ない。

何を言いたいのか考えても、私には何一つ納得出来ないのだから。

『オレは強くない、むしろオマエを寄って集って嬲っていた連中と同じだ。腐って捨かれて、クソのような連中と同じだ』

『……！』

それは違う。

同じな筈がない。同じな訳がない。

私を虐めるだけだったアイツらと助けてくれた貴方が一緒に訳がない。

否定しようと口を開く私よりも先に、彼は強い言葉で告げた。

『強いのはオマエだ。耐えて我慢して、泣き言を言わなかったオマエこそが——強いヤツだ』

『——え？』

意味が、わからなかった。

どうして彼よりも、私のほうが優れているというのか。

私は我慢してただけだ。彼のように立ち向かった訳ではない。ただ我慢してただけの人間だ。

だが彼はそれは違うという。

我慢している者こそ、強い人間であると彼は断言する。

『オマエが何をしたのかなんぞ興味がねえ。オマエはその昔、罪を犯したのかもしれない。命を奪うことをしたのかもしれない』

だが、と言葉を区切り。

『それでも——助かった命があった筈だ。奪うことで、助けた命があった筈だろ?』

』、』

言葉を、失った。

彼は知っている。恐らく、私が犯した罪を知っている。そして知った上で、私を救おうと言葉を送ってきくれた。

誰もが否、と否定し。誰もが私を悪だと認めていたのに対して。

彼だけは、と擁護し。彼だけ私を善だと否定した。

『オレには、それが出来なかった。オレはただ奪うだけ、だがオマエは違う。奪ったにも関わらず、同時に命を救った。しかも言い訳もせず、罪だと受け止めている。そんな人間を強いと称さずして、何を強いつて定義するんだ?』

私は、心が軽くなるのを感じる。

犯した罪は消えることはない。人の命を奪った、それを悪だと言うのならそうなのだろう。

しかし彼は言った。奪って救われる命があると。人殺しの私を、彼は認めてくれていた。

『そんな人間を、オレが強いつて思ったオマエを罵るクソ共が許せなかった。オマエを助けた訳じゃないってわかっただろ? オレはオレが気に入らないと思ったから、首を突っ込んだ。自分から巻き込ま

れに言ったようなもんだ。オマエが後ろめたくなる謂れはねえ筈だが?』

『それでも……』

私は逸らさずに、彼だけを見つめた。

今度は言い淀どむつもりもない。臆面もなく、自分の言葉を彼だけにぶつけた。

『私は貴方に助けられた。貴方だけが、私を助けてくれた』

『助けてねえって何度も言ってる。礼なんぞ言うなよ? 自分自身を殺してやりたくなる』

それだけ言うと、彼は再びノートに視線を向けて、右手にシャーペンシルを持った。

そこで私は気付いた。

彼に、恋をしているのだ、と。

だからこうして、彼に会うために図書室に通い、彼と話をしたいのだ。

彼の隣で同じ景色を見て、談笑するだけでいい。それだけで、私の心は満ちていった。同じ空間に居るといっただけで、安心していく。

彼の隣にいたい。

その為には、私が変わらないとならない。本当に強い人間に、変わらないとならない。

それこそ、銃に怯えなくても済むように。戦場で笑っていられるくらい強い人間に、変わるために。

でも最初に、やることがあった。それは――。

『ねえ、先輩』

『……それはオレのことか?』

『ええ、そうよ。先輩は――』

『先輩は、どんな娘が好みなの——？』

.....

現在 PM15:50

埼玉県所沢市 総合病院

「——まさか、メガネ好きなんて思わなかったわ」

少しだけ、昔を思い出して呟いた。

恥ずかしがる素振りすら見せずに、堂々と臆面もなく、無駄に男らしく先輩はそう告げていた。その口振りは、全世界の男はみんなメガネ好きというかのようなものだった。

「それを真に受けて、伊達メガネをかけている私も私だけど」
「.....」

とある病室の一室の主は、私の言葉には答えない。

穏やかな寝顔で、いつも機嫌が悪い態度をしている人とは思えない、穏やか過ぎる寝顔。

彼——先輩の頭にはナーヴギアが装着されている。それを見て先輩が未だに帰ってこない現実を突きつけられていく。

「先輩は人が好きすぎるのよ。私を庇ったからイジメられたんじゃないやなくて、私よりも悪を演じることで全てのヘイトを自分に集めたからイ

ジメられた、何て後から聞いた私の気持ちわかる?」

「……」

「わかる筈ないわよね。……鈍感」

私は先輩の右手をギュツと握りしめる。

少しでも彼の温もりを感じていたいから、私は何よりも強く握りしめた。

「本当に感謝してもきれない。先輩には助けてもらってばかりだし、私をずっと守ってくれていた」

そんな彼の隣に、私はずっと居たい。

将来、彼女が女の子を好きになるかもしれない。想像もしたくないことであるが、こればかりは先輩が決めること。

勿論、私も負けるつもりもない。絶対に彼の隣は私が勝ち取る。いっぱい努力して、たくさん綺麗になって、私を選んでもらえるように全力を尽くす。

誰かが言ったか。

愛は尽くすもの——恋は戦うもの、であると。

「先輩、知ってた?」

どうせ、先輩は帰ってくる。

彼は誰よりも強くて、世界中を敵に回そうと一つのことをしつかりやり遂げる。そんな人であり、私の先輩だ。

だから私は待つ。いつまでも待つ。私はこの人に——。

「——私って、独占欲、凄いのよ?」

——私はこの人に、恋をしています——。

番外編 幼馴染がオレに当たりが強い件

「勘違いしないで貴方のことなんて露ほど気にしてないわよ、わたしは」

「はあ!? ベ、別にたまたまです。たまたま、エギルさんの店に来たら貴方がいただけよっ!」

「い、いや。貴方が嫌いってわけじゃ……」

「……それよりも、後輩さんとは何かあった?」

「何かって何かよ。今でも親交あるんでしょ? それで、どうなの?」

「何よ、歯切れ悪いわね。何かやましいことをしているの?」

「あ、あほっ!? アホって言った人がアホなんですー! ばーか!」

「うるさいわよっ! ばか、ばかっ!」

「優希くんのばかー!」

.....
.....
.....

都内 某ファミレス店内

「——それで、言い争いになつと?」

ストローでコップに入っているグレープジュースを吸い上げる。ズビビビツ、と乙女がたてる音としては相応しくない騒音を立てて、誰が聞いてもでも分かるくらい退屈そうな調子で、彼女——篠崎里香は適当に聞いていた。

実際問題、下らないのだ。

他人から溢れる惚気ほど、下らないものはない。それは友達だろうと変わらない。下らないものは下らないし、傍から見てもやはり下らないものである。

聞いていたと言うからには、里香は聞き手側ということになる。

つまり、何者かが里香に話しかけているわけだ。その者は目の前に、里香と対面するように席に座っていた。

先程まで、失敗した、とこの世の終わりのような顔をしていたにも関わらず、今では乙女らしくない飲み方をしている里香に注意するよ
うに。

「もうっ、リズ! ダメよそんな飲み方。行儀悪い」

「大丈夫よ。誰も聞いちゃいないし」

そういう問題じゃないでしょー、と小言を呟いている対面席に座っている人物。里香に話していたのは彼女だ。

現在、彼女達がいるファミレスはそこそこ混んでいる。しんと静まり返っているわけでもなければ、雑音が店内に響いているというわけでもない。そこそこの客足で、そこそこの客数。耳を澄ましたところで、彼女達の会話を盗み聞き出来るほど静けさを保っているわけではない。そのため、店内で里香の奇行に耳聾く反応する人間はいないだろう。

だがそういう問題じゃない。

確かにそんな問題ではない。

きつと、いいや、絶対。そういう問題じゃない。マナーとしても、乙

女的にも、彼女の言うとおりのだろう。

だがそれでも、里香には里香の言い分もあるのだ。

へえーへえー、と悪びれもなくストローを啜えながら里香はやさぐれた調子で。

「悪かったわねー。でも二時間も惚気を聞いてればねー、そりやあたしもやさぐれますよー」

「の、惚気っ!?!」

ポーツ！ という音を立てて顔を赤く染める。

里香の言葉を真に受けて、彼女はとても乙女らしい反応してみせる。それを見て思わず里香は感心する。なるほど、これが女子力かと。

そんな関心を尻目に、彼女は明らかなパニックに陥りながら。

「の、惚気つて！ どこをどう聞いたら、そうなるのよっ！」

「好きな男の職場に行つて、素直になれずに痴話喧嘩、どうしようどうしよう、でも聞いて優希くんの制服かっこよかったの！ エギルさんにお願ひしてわたしも雇ってもらえないかなー。でも迷惑だよねー。でもかっこよかったなー。カッコいいと言えば、優希くんって小さい頃ねえ——からのアイツの過去話」

ボンツ！ と。

音を立てて彼女は顔を真っ赤に染め上げる。耳まで赤くして、顔を伏してしまふ。どこかいじらしい。

同性から見てもそれは可愛らしい反応だった。現に、里香はますます笑みを深めていく。ニヤリ、と。叩けば響く反応を見て、次はどんな意地悪いことを言つてやろうか考えている自分がいる。

そこで、ハツ、と里香は我に返つて頭を横に降つた。

邪念を祓うように、嗜虐心に染まりつつある悪い自分を外へと追い

やる。それからすぐに調子を取り戻し、里香はため息を吐いて。

「明日奈もさー。いい加減素直になったら?」
「うっ……」

言葉に詰まる彼女——結城明日奈へと里香は畳み掛けていく。

「子供の頃に喧嘩別れしたんだっけ?」
「……うん。仲のいい後輩が出来たって、紹介してもらったら女の子で」

「それでテンパって、嫉妬しちゃって、喧嘩になっちゃったと」

うん、と力弱く明日奈は頷いた。

子供の頃というからには、今よりも幼い頃に決まっている。となれば精神も成熟しておらず、現在よりも多感な時期だったに違いない。

里香から見たら、明日奈は大人と言っても良い部類だ。他人には別け隔てなく接して、意地の悪いことは言わない。おまけに可愛いと来た。恵まれている、といっても過言ではない。そんな人間の行動は余裕に溢れるものだろう。

そんな明日奈が、今よりも幼かったと言え、わけがわからなくなるのだ。相当な衝撃だったに違いない。
だからと言って。

「いい加減、仲直りしたら?」
「わかってるけどお……」

呆れた口調で言う里香に、明日奈はますます縮こまる勢いだ。
肩身が狭くなるのは、今の彼女のことを言うのだろう。羞恥心も相俟って、このまま消え入りそうだ。

右手の人差し指、左手の人差し指、つんつんとイジケながら明日奈はか細い声で。

「わかってるだもん。優希くんは悪くないし、後輩さんも悪くない。悪いのはわたしだって。……でも」
「でも？」

「素直になれないんだもん……！」

ふえー、と情けない声を上げる。

それはなんの鳴き声なのか、どういった生物なのか。学名、妖怪素直になれないは更に続ける。

「ねえ、リズー！ どうしよう、どうすればいいかなーっ!?」

「素直になればいいと思うわ」

バツサリ、と斬り捨てる。

対して見えない斬撃を受けて、うつ、と鈍い声を明日奈が上げるがそんなもの知ったことではない。里香は再度追い打ちをかける。

「もう男らしく謝ったら？」

「女だもん、わたし！」

「見ればわかるわよ、ばか。素直に謝って、貴方にゾッコンです、って本人の前で本人を褒めちぎればいいのよ。あたしに惚気けるときみたいに」

「そんなことして嫌われたらどうするのよ！」

「ぬかしおる」

ドツ、と笑みを浮かべて明日奈を指差し里香は続ける。

「だいたいねえ。嫌っている相手のために、命をかけるなんてありえないでしょ？」

「そ、そうかもしれないけど」

そう、追いかけてこない。

これは後で、里香が明日奈の兄、結城浩一郎から聞いた話したが、問題となつている優希という少年は最初からSAOをプレイしていたわけではない。途中からデスゲームとなつたSAOへとログインしてきたのだ。

本来であればありえない行為だ。触らぬ神に祟りなし、ということわざがあるように、誰もが好き好んでデスゲームとかしたゲームに手を出す訳がない。手を出すとしても、それ相応の理由がある筈だ。そしてそれ相応の理由が、優希にはあつた。その理由こそが、自身の幼馴染である明日奈という存在。彼女が囚われていると分かるや否や、優希は血相を変えてソードアート・オンラインに手を出していた。

当初の優希の反応は見たことがなかつた、と浩一郎は語っていた。見たことがないくらい怒っており、見たことがないくらい慌てており、見たことがないくらい——絶望していた、という。

明日奈とは喧嘩別れをしていたが、結城家とは親交が続いていたのだろう。となれば小さい頃から、茅場優希を知っていたという事実に帰結する。そんな人物が、見たことがないというくらいだ。異常とも言えるくらいの反応だつたに違いない。

それほどまでに、茅場優希にとつて、結城明日奈は大切だつたのだろう。

そうして優希はSAOの世界に足を踏み入れる。

明日奈を助けるために、彼は自ら地獄へとその身を預けていく。

誰がどう見ても、少なからず優希は明日奈を悪く見ていない。

だと言うのに——。

「でももし、嫌われたら……」

当の本人である明日奈が煮え切らない。

喧嘩別れしてた癖に、優希翻訳機で特許が取れるほど理解しているにも関わらず、いざ自分に対するとなるとそのスキルは活かされないようだ。

ポンコツオブポンコツ。ヘタレオブヘタレ。

ソードアート・オンラインで攻略組に属していたトッププレイヤーの一角とは思えない。

とは言え、里香もこんなやり取り何度も経験している。

故に、どうやれば明日奈がやる気を出すかなど手に取るようになってきているつもりだ。

だからこそ、今回も。明日奈によく効く起爆剤を使う。

「あんたねえ、その調子だとアイツ付き合っちゃうわよ?」

「えっ、誰と!？」

「詩乃に決まってるじゃない」

「——!？」

バツ、と顔をあげる。

どうやら恋人になった幼馴染と後輩を想像していたのか、見る見るうちに顔を真っ青に染め上げて。

「困るっ!」

「それじゃさっさと行動に移す」

「うん、行ってくるねっ!」

カバンから可愛らしい桃色の長財布を取り出して、パンツ、と勢いよく千円札をテーブルに置くと明日奈は立ち上がった。

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ。行くなってどこに——」

「この時間だと、優希くんエギルさんのところでバイトしてるから!」

「あつ、ちゃんと把握してるのね」

「もちろん——!」

と、そこまで言うとき明日奈は脱兎の如くファミレスを飛び出していった。

そして、入れ替わるようにテーブルの上に置かれた千円札を里香は見る。きつとそれは、明日奈が飲んでいたコーラ代なのだろう。それにしても千円札は払いすぎだ。これでお釣りが来るといふもの。

「仕方ない、明日学校で返しますか。お釣り」

「やれやれ、と首を横に降る里香。

結果報告を楽しみにしながら渡すでしょう。彼女は笑みを浮かべて明日に思いを馳せる――。

まあ、結局の所。

今回もダメだったわけなのだが――。

番外編 暇を持って余した男たちの遊び

某年某月某日 PM16:30

ダイシーカフェ

「——ってことで、明日から帰還者学校に転入することにしたから」

これからよろしくな、とクライン——壺井遼太郎は同席している彼らに脈略なくそんなことを言い始めた。

思わず遼太郎の顔を見つめる彼ら二人の少年。

一人はポカンとした様子で。

もう一人はまたアホなことを言っていると言いたげな表情で。

それぞれがそれぞれの思惑を胸秘めたまま、遼太郎の顔を見つめていた。

対する遼太郎の表情は大真面目のそれ。

まるでデスゲームに巻き込まれている最中のような、命をかけた状況においこまれているような。もつとわかりやすく言うのなら、ソードアート・オンラインに囚われているかのような遊びのない雰囲気纏っている。

ふざけているようで真剣そのもの。

アホを見る目のまま金髪の少年——茅場優希は未だに状況を飲み込めない黒髪の少年に向かって。

「おい、聞いてやれよ」

「えっ、やだよ」

即答。

むしろ食い気味で黒髪の少年——桐ヶ谷和人は答えた。

そして再び携帯を操作し遼太郎の発言をなかったかのようにしよ

うとする。

気持ちはわからないでもない。どうせ下らないことである。それは優希も理解しているし、何だったら自分もこのまま聞かなかったことにして帰りたい。

「オマエの友達だろうが。友情大切にしろよ」

「絶交する」

「判断が早すぎだろ」

見ろ、と両手を動かさず顎をクイツとあげて遼太郎の方を見るように和人を促した。

渋々であるが和人もそれに従い、遼太郎の方を見ると——泣いていた。

「あの遼太郎くんが。社会人にもなって上司(女)をお母さんと呼び間違えても意地でも泣かなかった遼太郎くんが泣いてんだぞ」

「おいおい、一大事だぞこりゃ」

「知るかよそんな情報!! っていうか居たのかエギル!」

「俺の店だ。俺が居なかつたら一大事だろ」

「ああ、一大事だな」

「一大事! 大事しつこいな! 流行ってるのか!」

ああ、一大事だな、とエギルと呼ばれた男性——アンドリユーと優希は同時に力強く頷いて。

「遼太郎くんの話しを聞いてやれよ桐ヶ谷」

「ああ、聞いてやれキリト」

「俺限定!? みんなで聞けばいいだろ!」

「オレの話しは聞いてくれないのかキリト……」

「だからなんで俺だけなんだよ!」

「そりゃオメエ。お前がオレの親友だからだろ」

「親友やめていいか？」

和人の言葉に対して、これまた重いため息を吐いて遼太郎は続けて言う。

「何だよ、オレはお前のことを親友って思ってたのにな……」

「一方通行で悪かったな。お前の気持ちは嬉しかったよ」

「ああ……。もしお前が両腕を折ってもお尻を拭いてあげてもいい。そう思えるくらいには親友と思っていたのにな……」

「そうだな——ん、お尻？」

「おう、お尻……」

「いや待て。親友のハードル高くないか??」

そう思うだろう、と和人は継るような目で観戦していたアンドリユールと優希を見るも。

「そういう事なら、俺達はクラインの親友にはなれないな」

「そうだな。アーンが精一杯だよな」

「アーンで精一杯なのか!？」

思いの外、遼太郎に対する優希の好感度の低さに驚きつつ、ハツ、と和人は再び遼太郎の方を見た。

自分が話しを聞かないだけで泣いているほど情緒が不安定な遼太郎だ。二人の明確な拒否発言を聞いてどんな面倒くさいことになるかわかったものじゃない。

案の定というべきか。

遼太郎はいじけながら。

「オレはいつだって異質な存在。誰にも馴染めない孤独な獅子さ……」

「カッコいい表現やめろよな」

「ハア、両腕折れたらどうしよう」

「大丈夫だ。今のウオシユレットって進化してるから」

これ以上いじけられるのも面倒だと言わんばかりに、和人はため息を吐いて聞いた。

「それで、なんで帰還者学校に転入したいと言ったんだ」

「これを見てくれ」

スツ、と胸ポケットから取り出したのは一枚の写真。

写っていたのは女性であった。

「なんだコレ？」

「おっばい、デカイだろ？」

確かに見てみるとデカイ。

恐らく、実際に見ると写真よりも大きいだろうと和人は真面目に分析しながら。

「大きいけどそれが？」

「この人が、お前らの学校に先生として赴任してくるらしい」
「……………？」

だから、なんだと、言うのだろう。

和人はもちろんだが、巻き込まれたくないのか全く会話に入っていない優希とアンドリユーの二人ですら要領を得ずに首を傾げる。

自身と周りの温度差なんぞなんのその。

遼太郎は立ち上がり、まるでどこぞの独裁者が民衆に扇動するように身振り手振りを激しく訴える。

「オレは長年の夢を叶えるんだ!! おっばいのデカイ先生の教え子に

なるっていう夢を!!!」

「無理だぞ」

「…………え?」

馬鹿げたことを大真面目に言う遼太郎に思わず優希は口出しをする。

早く話しを切り上げたいのか、現実を突きつけ、そして突き放しながら。

「遼太郎くん、髭生えてっから無理だぞ」

「そこじゃないだろう」

「……………?!?」

「クライン、そこじゃねえって!!」

その後、どうやったら遼太郎を帰還者学校に通わせれるか、二時間にも及び討論が始まった……………。

誰もが感じた無謀であると、誰もが理解していた時間の無駄である、と。だが彼らは暇だったのだ。どうしようもなく暇だったのだ。

遊びに来た朝田詩乃より「馬鹿じゃないの? (先輩以外)」という発言があるまでこの討論は続いたという……………。

番外編 ミト「星なき夜のエリア？」

某月某日

都内進学校

時刻は放課後。

勉強に勤しみ、凝り固まった肩を解す為に、腕を伸ばす学生達。

授業の質は高く、公立校とは比べるまでもないほど授業カリキュラムが充実していた。

堅苦しい授業が終わり、放課後は生徒達が主役の時間帯。彼らのテンションが上がるのも無理はない。

学生達の喧騒は増していく。どこに行こうか相談し始める女子生徒、気が合う生徒が談笑し会っている。

そんな中にいるため目立つのか。

彼の存在は若干浮いている印象があった。特に気分が高揚しているわけでもなく、表情は涼しく、特別テンションが上がっている様子もない。

放課後のテンションで浮かれている隣の同級生と一言二言を会話して、その同級生が帰っていくのを見送って、彼は――茅場優希は静かにため息を吐いた。

無表情であるものの、その様子から見ても疲れている人間のそれだ。

いそいそと授業道具をしまい放課後の部活動に向かう生徒を横目に見て、優希は今日の一日の予定を確認した。

――今日はバイトないよな？

――スーパーに行って買物……。

――しなくてもいいか。

――確か冷蔵庫にきゅうりがあった筈。

――米は……ねえけど、まだ買わなくてもいいな。

――特売まで持つたら、多分。

ぼんやりと、ボーっとしながらそんなことを考えていた。

第三者がみても優希の台所事情は死活問題のそれではあるが、本人からしてみたら日常茶飯事。いつものことであり、危険信号も灯す必要のないジャングルジムのようなものなのだろう。

もしくは疲労困憊でまともに頭が回っていないのかもしれない。どうして彼がここまで疲れているのは明確――。

「あの、茅場君……」

おずおずと、どこか話し掛けるのを戸惑いながら、一人の女子生徒が優希に声をかけた。

きっと、あまりにも心ここに非ずな彼を見て、話しかけるのを戸惑っていたのだろう。

優希は女子生徒の方へと顔を向けた。

話しかけてきた人物が誰だったかと考えることコンマ一秒。それと同時に表情を満面の笑顔に変えて。

「どうしたの、四宮さん？」

あまりにも速い変わりよう。疑いようなのない豹変っぷり。彼の十番『猫被り』がここで炸裂する。

とはいえ、これが彼が疲労困憊である理由の一つでもある。彼の変わりようは凄まじい。学園生活を送るに当たって、この学園で彼の素の姿――つまりは、口が悪く目つきも悪く性格も悪い彼を見た人間が存在しない。

いつも笑顔で、人当たりのよく、物腰が柔らかい。絵に描いたような好少年を演じきっていた。

その反動は凄まじい。

何せ休まる時間などないに等しいのだ。

放課後になれば、今の彼のように疲労困憊にもなるというもの。だ

というのに、未だに演じきれるのは彼の精神力の凄まじさ故だろう。現に応じられた女子生徒——四宮と呼ばれた彼女は気付いていない。

いつもどおりの茅場優希。笑顔が眩しい彼のままであることがわかると、若干頬を紅く染めて。

「あ、あのね。校門前で茅場君を知っている人達がいるみたいなの」「僕を知っている人？」

はて、誰だろうか、と。

本当に心当たりがなかった。

一瞬だけ後輩の朝田だろうか、とも考えたが直ぐに否定する。

——朝田なら事前に連絡が来る。

——でも何もないから、アイツじゃねえ。

——それじゃ、誰だ？

——心当たりがねえぞ。

そこでふと、魔が差したというべきか。一瞬だけ特定の人物が思い浮かんだ。

無表情に、何の感情もなく、校門前に佇んでいる男の姿。そして優希を見て一言——来ちゃった、と言う叔父の姿を。

ありえない。

それは優希にとって、凄まじい嫌がらせである。だからこそ「ありえない」のではなく、「ありえないでほしい」という願いだった。頼むから、後生だから、本当に、ありえないでほしいという願望を念じながら。

「特長とかなないかな？ 何でもいいんだけど」

調子を変えずに、物腰を柔らかくしたまま、優希は演じ続けて問う。

少しでも情報が無いと判断できない。
それもそうだが、兎に角叔父ではない確証が欲しかった。
四宮は少しだけ考えて。

「あつ、そういうえば」

「なに？」

「エテルナ女子学院の制服を着てたよ？」

「」

訂正。

心当たりがありまくった——。

.....
.....
.....

「コレは一体何のための嫌がらせだ……？」

青筋を立てて、苛立ちを隠せない様子で優希は尋ねた。

あれから優希は急いで帰る支度を済ませて、超速で校門前まで足を運び、ちよつとした騒ぎになっていた件の女子生徒二名の下へと向かった。

そう、二人。問題となっているエテルナ女子学院の制服を着た女子生徒は二名。そしてその二名に、優希は心当たりがあった。

急にやって来て、茅場優希はまだ校内にいるか聞いている二人。そんなもの、優希にとっては厄災でしかなく、嫌がらせに等しい行為でもあった。

故に優希は尋ねた。

件の問題を起こした二人。詳しく言うと、現在優希の右隣に歩く一人と左隣に歩く一人に向かって、優希は問いを乱暴に投げる。

「嫌がらせ?」

応じたのは右側の女子生徒。

左側の女子生徒は申し訳なきそうにしており、右側の彼女は本当にわからない、といった調子で首を小さく傾げて不思議そうにしていた。

その反応を見て、優希は確信する。

わかっている、白を切っている、と。

ため息を吐いた優希は再度問い詰めることにした。

「とぼけんなよ深澄姉。これ、アンタの提案だろ?」

右側の深澄姉と呼ばれた女子生徒——兔沢深澄は尚を白を切るつもりであるのか、翠色の瞳を明後日の方向へと向けて白々しく言う。

「あら、どうしてそう思うの?」

「コイツが校門前に待っている、なんて大胆な発想できるわけねえだろ。基本、小心者なんちゃってお嬢様なんだから」

「ちよっと、それどういう意味—!?」

コイツと呼ばれ栗色の髪の毛の女子生徒——結城明日奈は憤

りを隠せずに、身体いっぱいに使って身を乗り出すようにして優希に
対して抗議を行なう。

だが無意味であった。億劫そうに顔を顰めて優希は、明日奈の頭を
片手で抑えて彼女のささやかな抵抗を封殺する。

それでも、むぐぐつ！ と頭をぐりぐりしながら反抗するも優希は
意に返さない。

深澄はというと少しだけ考えて、

「……確かに」

「ちよつと!?!」

信じていた親友に断じられたのが応えたのか、今度は標的を優希か
ら深澄に移して明日奈は涙目で抗議を始める。

表情がコロコロと変わる明日奈が面白いのか、深澄は笑みを浮かべ
て軽く「ごめんごめん」と謝りながら優希へ質問を投げた。

「でも嫌がらせって言うほど?」

「オレにとってはこの上ない嫌がらせだ」

そこまで言うと、優希は周囲へと視線を向ける。

すれ違う者達。人種は様々であり、買物帰りの主婦から、帰路に着
くサラリーマン、更には学生の集団から、遊びかえりの子供、多種多
様な人物達と優希達はすれ違っていた。

そしてその半分以上は振り返り、二度見をする。

誰を見ているかなどわかりきったこと。この二人であろう、と優希
は疑わない。

都内有数の有名校であるエテルナ女子学院の制服を着ている。そ
れだけでも人目を引くというのに、ダメ押しと言わんばかりに容姿に
優れているときたものだ。傍から見たら、可愛い部類の明日奈と綺麗
な顔立ちの深澄が共に歩いている姿は映えて見えることだろう。

そんな二人が一緒にいるということは、誰が考えても注目を浴びる

ことにもなるし、目立ってしようがないというもの。

その事実を二人はあまりよく知らない事実。

自分を客観的に見れない奴らは、こうも面倒くさいのか、と優希は思いながらも再び深いため息を吐いて、真実だけを口にする。

「目立つんだよ。オマエら無駄に顔が良いし、なんかオーラもあるから」

「顔っ……!?!」

「……それって褒めてるの?」

二者二様。

頬を紅く染めて照れはじめる明日奈に対して、悪い気はしないのか口元が少しだけ緩んでいるものの視線は訝しむそれで優希を見つめる深澄。

優希は間髪いれずに容赦なく、

「もちろん、褒めてねえよ。迷惑だっって言ってるの」

「年上の女子を侍らしているのに?」

冗談っぽく柄にもないようなことを言い始める深澄に、優希はこれでもかと顔を顰めて。

「冗談じゃねえ。地味に過ごしていたオレの学園生活がおしまいになるだろうが」

歳相応とは言い難い優希の言い分であるが、彼にとっては余程重大であるらしく、本当に嫌そうに続ける。

「顔が良いオマエ達と知り合いつてなると色々面倒なことになるだろうが。男からの嫉妬とか、女からの詮索とか」

「嫉妬は、確かに面倒くさい、かな……?」

あはは、と乾いた笑みを浮かべて明日奈は同意を示した。よく見たら深澄も経験があるのか、どこか他人事ではないかのように神妙そうな顔をしている。

もちろん、二人はする側ではなくされる側での同意だろう。

だからこそその明日奈の同意であり、申し訳なさそうな顔をしている深澄の反応なのである。

「それでマジで何しにきたんだよ？ オレに何か用だったんだろ？」

「私は特に用はないけど、明日奈があなたに会いたそうだったから、着いてきただけ」

「ちよつと、深澄!？」

顔を真っ赤にさせて猛抗議する明日奈を見て、これまた楽しそうに笑みを浮かべる深澄は意に返さずに続ける。

「あら、違った？ 授業中も上の空だったし、私が提案したときもノリノリだったし」

「あう〜……!？」

ぷしゅー、と。

頭から湯気が出るほど、顔を紅く染めて明日奈は立ち止まり顔を下げ、視線は地面へと移ってしまった。

もう優希の顔が見ることが出来ないと言わんばかり。見たら最後、体温が更にオーバーヒートを起こして機能不全へと陥り、最悪気絶するかもしれないから。だから明日奈取った行動は最後の手段。自滅から逃れるための悪あがきと言ってもいい。

「それで」

だがこの男は、あろうことか。

「何の用だったんだ、明日奈？」

本当にわからないのか、明日奈の顔を覗き込むようにして尋ねる。嘘でしょ、と深澄は優希を見つめる。

ここまでわかりやすい明日奈反応を見てもわからないものなのか、と信じられない物を見るような顔で。

「……そんなこと、決まってるでしょ」

「ああ？」

明日奈から深澄へと。

優希の双眸は深澄の方へと。

蒼い、澄み切った蒼眼が深澄を見る。明日奈がどうしてそんな反応をしているのか、本気でわからないのかその瞳には若干の疑問の色が見て取れる。

「鈍感、ってレベルじゃないわよこれ……。なに、あなたって攻略不可対象キャラ？ もしくは、特別な選択肢を選ばないと、攻略フラグが建たない系キャラ？」

「ふらぐ……？」

「旗じゃないよ」

少しだけ回復した明日奈は今度こそ優希に視線を合わせて、聞きなれない「ふらぐ」という単語を口にした優希の顔を見て言った。

いまいち要領の得ない否定に、優希は難しい顔になりながら。

「……またピコピコ用語か？」

「んー、この場合はそうなのかな？」

なるほど、確かにそれは自分の知識を用いても聞きなれないわ

けど、と優希は一人で納得して、深澄に向かって小馬鹿にした調子で言った。

「完璧優等生の癖に、ピコピコ大好きとか、アンタのギャツプどうなってるんだよ?」

「いい加減、ピコピコじゃなくてゲームって言つてよ。それにギャツプなら、優希の猫被りには負けると思うわよ私」

「わたしから見たらどっちもどっちなんだけど……」

掌の上で踊らされている感があった故に何とかやり返したかった優希の売り言葉、対して簡単に年下にやり返されないぞという気概が見え隠れする深澄の買い言葉。

見えない何かが、両者の間に火花を散らせ、明日奈は困ったような笑みを浮かべてそれを見守っていた。

負けられない戦いがそこにある、のかもしれない。と、明日奈はぼんやりと思っていると直ぐに何かを思い出す調子で。

「優希くんって今日バイトないよね?」

「ああ」

「だったら、ゲームセンター行かない? 深澄と話してたんだけど、新しいゲーム機が出たんだって!」

楽しみだねえ、と眼を輝かせてはしやぎ始める明日奈を見て、優希は少しだけ冷めた調子で深澄に話を振った。

「……おい、深澄姉。アンタのせいだぞ」

「何が?」

「ピコピコに興味がなかったコイツが、アンタとつるみ始めてゲーセンの常連になりつつある」

「私としては嬉しいけど? 自分色に染まっている感じがしていいじゃない」

「アホ。これ以上ポンコツになったらどうすんだ？」

「そのときは私が責任をもって面倒を見ます」

無駄にキリツ、と王子様然とした口調で宣言する深澄に、優希は深くため息を吐く。

確かに問題はない。

明日奈の成績は以前よりも良くなっている、と明日奈の母親である京子と兄の浩一郎から聞いている。

というのも時期的に考えて、深澄と仲良くなり始めてからだと優希は記憶している。こうして一緒に遊ぶ友達が出来たことで肩の力を抜くことができ、勉強も教え教えられの関係を保っているからか効率もあがっているのだろう。

しかしそれでも、心配になるとというのが親心というものなのか。

京子もよく相談される。彼女は深澄をよく思っていない——
わけではない。むしろ娘と仲良くしてくれて感謝しているくらいだ。
問題は相談の内容。

『明日奈がゲームに興味を持ち始めており、絆を深めるためにはやはり私もゲームを始めた方がいいのかしら？』

正直な話、畑違いにもほどがある。ゲームをピコピコと言う男に何を相談しているのか。

しかし世話になった手前、知るか、と簡単に断じることもし出来ない。そういう意味でのため息。

ポンコツになっただけで、周囲も比例してポンコツになっていく明日奈の現状に、優希は何ともいえない苦労をため息に乗せて吐いた。

「ちよつとー！ わたし、ポンコツじゃないもん！」

もちろん、諸々の元凶たる明日奈ポンコツの言い分など華麗にスルー。

しかしゲーセンに行くとなると、優希にとっても願ってもない展開でもあった。

「まあ、丁度良いか。リベンジだ。深澄姉、格闘のやつやるぞ」
「格闘のやつって鉄拳？」
「そうだ」

力強く頷く優希を見て、深澄は「へえ？」と挑発的な笑みを浮かべて意地悪い口調で問う

「ボコボコにしてから日が浅いけど、もう再戦？ 大丈夫？ 泣かない？」

「泣くか。吠え面かかせてやるから覚悟しろ」

「大丈夫よ深澄。あれから猛特訓したからね優希くん。良い線行くと
思うわ！」

無駄に胸を張って、本人よりも自信満々に言い放つ明日奈に、優希は無言で足早に近づいて。

「何速攻でバラしてんだオマエは？」

「いひゃい、いひゃい！ ほめんなさい、ひっはらないへ〜!!」

ぐりぐりと明日奈の両頬を両手でグネグネと捏ねくり揉み始めた。
もうそうなれば、明日奈はされるがままなすがまま。どんなに抵抗をしても無駄になり、そもそも優希が許すはずもない。

もはや何回、何十回、何百回と見たか覚えてない幼馴染二人のやり取りに深澄は。

「ぶっ、あはははははー！」

腹を抱えて笑う。

爆笑、とまでは破顔してはいないものの、満面の笑みで二人のやり取りを見つめて、笑い目尻に堪った涙を人差し指で拭って。

「良いでしょう。私の平八に勝てるかしらね？」

「馬鹿野郎オレは勝つぞオマエ。オレの仕上がった一八を見て腰抜かすなよ？」

そうして三人は歩いていく。

時刻は夕方。放課後の三人のいつもの光景がそこにあつた――
|。

番外編 晶彦 「優希君、ラーメンを食べに行こう」

「は??」

それはいきなりだった。

夜も更けて、時刻は21時になろうとしたところ。

優希とその義妹である木綿季が住んでいる築何十年というボロアパートのドアを開けて、一人の上下黒ジャージを着た男性がいきなりそんなことを言ってきた。

遂に狂ったか、と優希は彼を呆れた目で見る。

そして、狂うのも無理はない、という哀れみの目線。常に研究ばかりの男だった。変わり映えのない多忙な日々がこの男を狂わせたのか、と思わず同情をする。

対する男ははて、と首を傾げて無表情に。

「優希君、ラーメンを食べに行こう」

「聞こえてんだよ」

聞こえてないと思っただらしい。

間髪いれずに、優希は同情した心を燃やし尽くし、事実だけを上下黒ジャージの男——茅場晶彦に突きつけた。

同情した自分が、哀れんだ自分がアホだった、と後悔するのもつかの間。

頭を抱える優希に何を思ったのか、晶彦は続けて。

「優希君、私と」

「ボクとー!」

「ラーメンを食べに行こう」

いつの間にか現れた木綿季と晶彦が交互に話し始める。
いよいよ、鬱陶しい極致である。

優希は思わず天を仰ぎ見て。

「何が何を何で？」

「おや、優希君がバグったようだ。珍しい」

「オマエのせいだよクソ鉄仮面」

妙にテンションの高い従兄弟はこの際無視することにする。まずは手に負える方からだと、優希は己の頭の中に優先順位を決めて、ニコニコ笑みを浮かべる義妹に視線を向けて。

「何でオマエは動じてない訳？」

「だってボク、晶彦さん来るの知ってたし」

「は??」

「私から君へのサプライズさ」

ねー？ と、顔を見合わせて示し合う二人であるが、片や無表情、片や笑顔と言う辺りなんとチグハグなことか。

思わず頭を再び抱える。

天然と天然が揃うと、ここまで手が付けられない状況になるのか、と少しばかりの苛立ちを覚える。だからだろうか、ある種の反抗心が優希の中に芽生えた。これ以上、天然達の好きにさせまいといった少しばかりの意地の悪い考え。

「ねー、行こうよにーちゃん！」

「行かねえよ、メンドクせえ」

つまるところのストライキ。

それに本当に面倒臭かった。

木綿季は晶彦から聞いているからか、外出する準備がバツチリによ

うであるが優希は違う。上はTシャツ、下はスウェットといったように、思いつきりこのあとは寝るだけです、という格好をしている。これから着替えるのは面倒であると思っていると、晶彦がどこか誇らしげに胸を張って。

「安心したまえ」

「ああ？」

「これから行くのは屋台。どんな格好をしても大丈夫なのだよ」

いや、限度があるだろう、とツツコミを入れる前にハッ、と優希は合点がいった。

「……もしかして、アンタがそんな格好をしてるのって——」
「ふっ、気付いたか」

晶彦は暗に語る——郷に入りたくば郷に従うものである、と。なんとということだ。

優希の目の前にいる男は、あろうことか屋台のラーメンに行きたいがために上下黒ジャージを着てきたのだ。様子から見ると、車では着ていない。電車を乗りついで、ワクワクしながら、ここまでやってきたらしい。

——馬鹿なのか？

——紙一重っていうが、そういうことなのか？

言葉を失っている優希に、クイクイ、と。服の裾をひっぱられる感覚を覚える。視線を向けると、その先にはどこか不安そうな木綿季が見上げていた。

「にーちゃんは、ボク達とラーメン食べに行きたくないの？」

「——」

クリティカル。

性根が捻じ曲がっている男の心に、悲しげな目線でもって致命傷を与える。

しかしそれでも優希は何とか抵抗しようとしたのか、行きたくないと言おうとするが、義妹の悲しげな目が許さない。うーんうーん、と唸ること数秒。

「行く」

渋々、と言った調子で。忌々しげに表情を歪めて、これでもかと億劫そうな雰囲気、口にした。自身の下らないプライドと義妹の心情を天秤にかけて、義妹の方へと傾いた瞬間でもあった。

木綿季はやったー！ と身体いっぱい喜びを表現をし、晶彦はうんうん、と満足そうに頷いて。

「与しやすくなったな」

「オマエ、捻じ切るぞ、腕を」

「冗談だよ。そんなことしたら泣くぞ私は。大人気なく。ガン泣きだ」

「うるせえよ」

深く深く、これでもかと深く優希はため息を吐いて、晶彦を見る。無表情であるが、どこか嬉しそうな叔父を見て、もはや抵抗するの馬鹿らしくなったようだ。既に優希の心はさっさと食って、さっさと帰宅することに意識を割いていた。これ以上振り回されてたまるものか、と財布を捜していると。

「今日は私が奢ろう」

「えーっ、いいの晶彦さん！」

「いいとも。何せ今日は——」

口元に笑みを浮かべて。

「君の誕生日だろ？」

「」

優希は息を呑む。

そのために、そのただけに、彼なりに祝うために来たのか、と。いつも多忙である叔父は、そのただけにここまで足を運んでくれたのか、と優希は思い、そして口を開く。

「いや、違うけど」

「えっ……!?!」

木綿季は晶彦と義兄の顔を交互に見る。明らかに混乱している彼女を余所に、冷静に思考を巡らせて晶彦は一言。

「おや?」

「おい待て。おや、じゃねえ」

「はははっ、すまない。冗談だ」

「冗談のセンスがクソねえなアンタは。見ろ、うちの妹が混乱してるじゃねえか」

「えっ、えっ? 冗談なの??」

眼を丸くしてしている木綿季に、晶彦が一度頷いて。

「無論、ジョークだとも」

「無表情でやるから質が悪いんだよなコイツ。オマエも気をつけろ」
「う、うん。慣れるように頑張るよ……」

面白さよりも、困惑が勝ったのか、木綿季はどんな反応をしていい

か迷っていた。

そんな常人の思考など考えもしない、天才茅場晶彦は少しだけテンションを上げて。

「さあ、行くとしようか二人とも。道中恋バナとかしてしまおうか？」

「誰がオマエなんか話すかよ」

「いいや、私の恋バナだが。恋人の惚気というのを聞いてほしくてね」

「オマエのかよ。……いや、待てちよつと待て。恋人がいるとか初耳なんだが？」

「初めていったからね。テンションが上がってきたな、明日奈君も呼んじゃうか？」

「わー、それは楽しそうだね！ ボク連絡しようか？」

「んなことしたら京子さんがキレるだろうが」

「無視するがいいさ。アイツの言うことなど」

「アンタら本当に仲悪いな……」

そうして三人はラーメンを食べに行くのだった――。

クラインがコントローラーを地面に叩きつけて、エギルが静かに怒り、ユーキが呆れて物を言い、そして——キリトが勝ち誇る。和気あいあい、というわけでもない。

どこか殺伐としており、どこかギスリながらゲームを楽しんで(?)いた。

戦犯は誰がどう見てもキリト。

某任天堂オールスター系スマッシュでブラザーズなゲームをやり始めたのは良い。ルールも変更して、アイテムも頻繁に出る設定にして、直ぐにぶっ飛ぶように作り変えた。

そこまではいい。問題は、この勝負にガチで挑んでいた者がいるということ。誰であろうそれがキリトであり、楽しむはずだったゲームが、いつの間にかどこか殺伐としたゲームに変わっていた。

そんな現実主義なキリトに向かって、クラインはいきなり立ち上がり勢い良く指差しながら。

「キリトお！ オメエちよつとは手加減しろお！」

「野郎は格ゲーでも厨キャラを躊躇なく使う、クソ野郎筆頭だからな。仕方ねえよ」

無表情にユーキはそう言いながら、キリトの操る『ピンク玉』キャラに投げられて舌打ちをしながら。

「前にもここで、野郎と対戦ピコピコやったんだが、初心者のおレに迷わず『バージル』を使いやがったときは、今すぐ殺してやろうかと思っただくらいだ」

「桃鉄のときも、酷かったな……」

当時の状況を思い出すように、どこか遠い目をしながらエギルは呟いた。

あの時は、アスナ、ユウキと彼を止めるストッパーがいたから丸く

収まったが、いなかったらコイツらは喧嘩していただろう、とエギルは考えていた。

当事者であるキリトは悪びれる様子もなく、ユーキの使っている『大型ゴリラ』キャラを投げてぶっ飛ばす。

そしてユーキはこれまた無表情に星となったゴリラを見て。

「野郎はどんな外道な手を使おうが全く気にしない上に、他人を平気で裏切るシスコンクソ野郎だからな。仕方ねえよ」

「優希、お前怒ってないか？」

「オレがピコピコ如きにキレル訳ねえだろ。冗談も休み休み言えよドリユー君。ただちよつと、1／3＋1／6＋1／2くらい殺してやりたいと思ってるだけだ」

「それはつまり、全殺しってことだな？」

ユーキは答えない。

無言で、無表情で、無謀にもキリトの操る『ピンク玉』キャラに果敢に挑むも、赤子の手を撚るように鮮やかに返り討ちに遭い、再び星となった。

そして震える両肩。プルプルと、怒りを押し殺すように下唇を噛み締め、両手で握るコントローラーはミシミシと音を立てていく。

正に今のキリトは絶対王者。

最強の矛があり、最硬の盾を有する独裁者となっている。場を完璧に支配しており、これを崩すのは容易ではない。そんな時、一人の叛逆者が現れる。

その男の名は——クライン。

彼は立ち上がったまま、ツカツカとゲーム本体の場所まで歩みを進めて。

「秘技『コントローラー外し』」

「!？」

キリトの操るコントローラーのケーブルを本体から抜く。

「思わずガタツと音を立てて椅子からキリトが立ち上がるも、時は遅し。」

ニヤリ、と笑みを浮かべて。

ユーキの操るゴリラはピンク玉に向かって思いつきりぶん殴り、ピンク玉は為す術なく空を舞い、天を超え、星となっていく。

憎きピンクの悪魔を倒したことを確認すると、クラインとユーキはハイタツチしながら。

「ザマア！ キリトくん、ザマア！ 偉いぞ野武士面、百万年無税」

「ガハハハ！ ボコボコタイムだぜえ！」

「お前らこの野郎ー！」

それだけ言うと、キリトは直ぐに立ち上がり本体に手を伸ばし。

「必殺『電源ボタン』」

ポチツ、と本体を消す暴力に出る。

場に君臨していた絶対王者は自分がルールと言わんばかりに、一撃必殺の荒業に出る。

つまるところ、電源ボタンをオフにして、ゲーム自体を消す。

「テメエ、何やってやがる！」

「先に仕掛けたのはクラインだろ！ というかユーキ、キレてないと言いつつ、しっかりキレてるじゃないか！」

「うるせえんだよ、クソブラツキー！」

「何だと、この性格破綻者！」

ギャーギャー、ワーワーと同世代の二人の少年が取っ組み合いを始める。

それを見て、ゲーム本体とコントローラーを片付けるエギルは一

言。

「店の物は壊すなよ?」

「というわけで、下世話しようぜ」

「……すまん、クライン。意味が全くわからない」

アレから少年二人は、近いうち『ALO』で決闘で決着をつけるという話で落ち着いて、今では丸机を囲って、飲み物を片手に落ち着いていた。

そんな中、勢い良く机を叩きながら、クラインが言うと、キリトは呆れる口調で返す。

そんなキリトに不満があるのか、クラインは口を尖らしながら抗議した。

「男四人集まったら、そりやもうゲスな話したいだろうが」

「俺を巻き込むなよ。そもそもユーキ達はともかく、俺達がやるとキモいオッサンになっちまうだろ」

「んだとお、エギル! 何でオッサン枠に、俺も入ってんだよ!」

バンバン、と机を叩く。

エギルからは「壊すなよ!」と言われようと、クラインの勢いは止まらなかった。

「男が集まったら、猥談だろ! オレなんか、ギルドのヤツらとずっと話してんぞ?」

「何を話してるんだお前、十代かよ……」

溜息を吐いてエギルは呟いて、少しだけ考えて口を開く。

「しかしそうだな、十代か……。なあ、優希とキリトはそういう話しないのか？」

「俺はそもそも、そういう話しを気軽に出来るヤツがないからなあ……」

「優希は？」

「……猫被ってるオレに、その手の話を振ってくるヤツが先ずいねえ」

困ったように笑うキリト、退屈そうに呟くユーキ。

青春を謳歌している年代の少年達から出るセリフとは思えないことを、二人は言っていた。

それを聞いたクラインは眼を光らせて、勢いが良い口調で。

「ダメだ、ダメだぜ二人とも！ そんなんじや、枯れちまうぞ？ エギルみたいに」

「……クラインは後で倍請求するとして、確かに勿体無いな。若い頃の特権、みたいなもんもある」

「そうなのか？」

不思議そうに問うキリトに、エギルは「ああ」と答えると。

「年を重ねると、若い頃に出来たことも出来なくなってくる。だから若い頃に出れることは今のうちにやっておけてハナシだ」

「そうそう、それで？ キリトはどんな女が好みなんだ？」

クラインはどこか興味津々に尋ねて、キリトは若干慌てながら返す。

「お、俺か？ というか好みって、踏み込み過ぎなんじゃないか？」

「まだ優しい方だぜ？ これからドンドンエグい話しするんだからな

！」

「えー……」

どこか少し引き気味になりながらキリトが言うのに対して、クラインは気にしない様子でグイグイ話しを斬り込んでいく。

「それで、どういう子が良いんだ？　　というか、誰が良いんだ？」

「誰って何だよ？」

「オレらの周りには、ありとあらゆる属性持ちがいるだろ。幼馴染であつたり、巨乳であつたり、妹であつたり、ロリであつたり、姉御肌であつたり、不思議ちゃんであつたり。誰が良いんだ？」

「だ、誰って特にないよ。でも、料理が上手い娘がいいな、俺は」

「面白くねえな……」

「おい」

ジト目で睨むキリトを無視して、クラインは標的を移していく。

それは我関せずを決め込んでいた一人の少年。スマホを片手に、メールの返事をしているユーキへと照準を合わせていく。

ニヤニヤとした眼で見られていることを敏感に察知すると、クラインに目を向けずにユーキはつまらなそうに事実だけを口にした。

「言っておくが、そういう好みのタイプの話はオレもしたことがある」

「え、さつきオメエないって言ってたじゃねえか」

「普段はしねえってだけだ。小学校の頃に朝田って後輩としたことがある」

そう言うと、操作していたスマホを丸机の上に置いて、キリトとは違い恥じる素振りすら見せずに続けた。

「オレの好みのタイプは、メガネかけてるヤツだ」

「メガネか……ん、メガネ？」

「おお」

エギルの問いに、ユーキの返答は揺るがない。真正面から受け止めて、これまた真正面から返す。

どこか攻めるような、コアなオプシヨン系な部分を恥じることなく口にする。そんなユーキに男らしい何かを感じながら、今度はキリトが問いを投げた。

「メガネかけてれば、誰でも良いのか？」

「良い訳あるか。あとは、歳上が好みだ」

「どれぐらい？」

「五歳くらい。あとは、そうだな……それが寮母系なら、もう言うことはねえな」

「こだわってるなあ……」

そういえば、これを言った翌日朝田のヤツ、メガネかけてきてたな、と心の中で呟いて、メールが来たのでまた再度スマホを操作し始めた。

どう言う意味なのか少しだけ考えて、特に意味なんてないのだろう、と直ぐに結論を出して、ユーキの中にあつた疑問は消える。

それからクラインは勢い良く立ち上がり、どこか誇らしげに胸を張りながら。

「それじゃ次はオレだな。いいか、オメエら。オレ様の好みはなあ――」

「――女だろ？」

「――女だな？」

異口同音。

キリトとエギルは口を揃えて呟く。

クラインの好みは女。それは誰でも良いとも言えるもので、聞く人

間にとっては女の敵とも捉えられるモノである。
しかしクラインは「違えよ!」と力強く否定し。

「オレ様の好みは、天真爛漫な娘だ! そうだな、仲間内で言うのなら
――」

どこかにはかんだ笑みを浮かべて。

「――ユウキみたいな娘が」

「あーどっこいしょーッ!!」

「――ッ!」

ユーキの気合と共にスパアアアアン!と乾いた音が店内に鳴り響いた。同時に声のない叫び声クライン絶叫する。

一部始終、事の成り行きを見ていたエギルとキリトは、確かめるように口にした。

「優希の渾身のローキックが綺麗に決まったな」

「特に意味のない暴力がクラインを襲う。いいや、意味はあるか。好みのタイプに言われたのが妹だもんな、そりゃ怒る。誰だってそうする。俺だってそうする」

「それで、クラインくん? 誰が誰を好みだつて? いまいち、オレには聴こえなかった。誰の妹が好みだつて言ったんだ?」

「あ、いいや……」

「まあ、ぶっちゃけ、アンタが誰が好みだろうと知ったこっちゃねえ、んなもん個人の自由だ。でもよお? 今思い出したんだが、アンタの好みってクールビューティー系って言ってたよな? それはどうした?」

「きよ、今日は天真爛漫系がいいかなーって」

「なるほど、つまりはアレか。オレの妹はオマエの日によって変わる、

日替わりランチ並にお手軽な女だと思われてんのか？」

低い声、嚙猛に浮かべる笑み。

それを見たクラインは心の中で学んだ。今度から自分の発言には気をつけようと。そして、好みのタイプを『女である』という前提に話すのはやめよう。

デスゲームから抜け出した彼らの日常。

可能性の一つとも呼べる日常を謳歌している彼ら。

今日も現実世界は——平和であった——。

リクエスト 先輩と後輩の何気ない日々

2026年1月某日 PM14:20

優希のレポート

普段であれば、高校に通っている時間帯。

本来であれば学生らしく勉強に勤しむべき時に、私はとあるマンションにお邪魔していた。

学校に行かないのは、別に嫌になったからとか、サボりたかったからとかそんな理由ではない。

ただ単純に休みなのだ。学生大型二大連休の一つ、巷で言うところの冬休み。

そんなこともあつてか、外には人つ子一人歩いている様子はない。これが学生大型二大連休の一つでもある夏休みでもあるのなら話は変わってくる。

今も元気に、太陽の光に照らされた子供達が外で遊んでいることだろう。だが生憎と今は冬休み、好き好んで外で遊んでいる物好きは存在せず、私のように家の中で寛いでいることだろう。

それも仕方ないことだ。人間、誰もが寒いのは苦手。暖房のきいた室内でのんびりしてて何が悪い。

苦手なことから逃げて何が悪い。猫だつてこたつで丸くなっている季節、外でなんて遊んで入られない。

まあ、私は猫ではないのだけど。

「……」

そんな下らないことを考えながら、私は一枚読んでいた本の頁をめくる。

読んでいる小説は恋愛小説、我ながら似合わないと自覚している。私は恋愛小説よりも、ミステリー小説のほうが似合うとリズムに言われたのは記憶に新しい。でも読んでみたら面白いものだ。

心理描写、登場人物達の距離感、そして悩みなど共感が持てる内容

となっている。何よりも展開が面白い。昔馴染みの女の子よりも、後輩の女の子と添い遂げる展開など、私好みのものだ。

幼馴染よりも、後輩の方が良いに決まっている。

それは太古の昔、神々が定めた鉄則なのだ。

「——オイ」

と、頷く私に声をかける声の一つ。それは背後から聞こえてきた。私はそちらに目を向けない。本にだけ視線を送り、意識を後ろへと集中する。

「……何よ、先輩？」

どうせ机と向き合って宿題しているに決まっている。

学生の鏡といってもいい先輩——優希先輩は、今は私と背中合わせに座っていた。

というよりも、私が先輩の背中に一方的に体重を預けている。

それも仕方ない話だ。私が遊びに来たというのに、先輩は宿題を優先していた。

……正直に言うと、私は拗ねている。私よりも優先にされている宿題が気に入らない。面白くない、ムカつく、面白くない、少しは構って欲しい、もっとということかなり面白くない。

せめてもの抵抗。

それが今のこの状況。丸机で勉強している先輩の背中にもたれ掛かり読書をする私という絵の完成である。

子供っぽいという自覚はある、邪魔をしているのはもちろんのこと。拗ねているのだ私は。俗に言うストライキと言うやつなのである。

そんな労働断固反対状態の私に、先輩はこれでもかというくらい低い声で。

「鬱陶しいんだけど？」

うんざりした口調で呟いてきた。

もうノートを取る音が聞こえない。持っていたシャープペンも机の上に置いてある。

勝利である。

私の奮戦によって、宿題から私に意識を向けることに成功した。ざまあ見ろ宿題。

望むべく戦果を得て、私の頬は自然と緩んでいった。

気持ちも高揚しているのか、声も少しだけ弾ませて言う。

「あら、私は別に気にしてないけど？」

「オレが気にしてんだが？ つーかよお、何なのオマエ。いきなりアポなしで来たと思いきや、人の家で本読み始めて、人を背もたれ代わりに使う。ホントなんなのオマエ、やりたい放題なの？」

「茶目つ気あるでしょ？」

「オレの憤りをそんな一言で済ませて欲しくなかつたんだが？」

深いため息を先輩が吐くと同時に、机の上に置いてあった携帯が鳴り始めた。

私のではない。となるとその持ち主が誰のものであるのか、自ずと分かるものだ。

先輩は手慣れた操作で携帯を操作し始めた。

どうやら電話ではなく、メールの通知音だったようで、先輩は画面を見てどう返信したものか少しだけ考えている。

先輩の交友関係は狭い。

恐らく誰からか聞けば、私が知っている人からのものであることがわかる。

「誰から？」

だから聞いてみようと思った。

理由の半分は好奇心、もう半分は独占欲。

誰からなのか気になるし、誰とやり取りしているのか把握しておかなければ気が済まない。本当に我ながらどうかと思う。どうにかしなければならぬと思うのだが、抑えが効かない。

そんな私の心情を知らずに、先輩は何気ない口調で、軽い気持ちで答えてくれた。

「明日奈だ」

その一言で、チクリ、と私の心に棘が刺さった。

その人の名前は何度も聞いたことがある。先輩の口から、そして先輩を何度も救った人の名前。

結城明日奈——。

この人こそ、先輩の幼馴染であり、恐らくこの世で一番大切にしている人である。

本人は気付いてないかもしれないが、彼女の名を口にする先輩は穏やかな表情と口調になっていた。それだけ彼女の存在が大切に、先輩の中で大きな存在なのだろう。

その感情が友情なのか、親愛なのか、それとも——愛情なのか。私には推し量ることは出来ない。それだけ先輩にとって彼女は、複雑な感情を向けているのだ。それこそ一言では表せることが出来ないくらい。

彼女がもし、嫌な奴なら、最悪で性格が悪い人物であったのなら、それこそ遠藤のようなどうしようもない奴であったのなら、私も容赦しなかっただろう。

ありとあらゆる手を使って、先輩にアタックして、彼女を出し抜いていたことだろう。

だがそれは出来ない。

一度彼女とは先輩を巡って一騒動起こしているものの、もう争う気は起きなかった。

それだけ彼女は人が出来すぎている。先輩が大切にしているもの納得がいくほどの人格者だった。恋敵である私が言うのだから間違いないだろう。

——とは言っても、先輩の隣を譲る気はどないのだが。

「何て言ってるのよ？」

「木綿季の服を選びに来てるんだけどどっちが良い？ だつてよ」

そう言うと、先輩は後ろを振り向かず、携帯だけ私に寄越して見せる。

送付されているメールには二枚の画像が添付されていた。どちらもユウキによく似合っており、彼女らしいポーズで笑顔で映っていた。

一枚目はダブルピース、二枚目は謎のガッツポーズ。

それを見て言っているのだろう、先輩はどこか呆れたような口調で。

「まったく、女の子らしくしろって言ってるのに……」

「それが妹ちゃんの良さだと思っけど？」

それに「まあな」と先輩は肯定して、私から返された携帯を受け取る。

それからしばらく考えていた。きっとどっちが良いのか悩んでいるのだろう。そう言うところが真面目というか、自分のことではないのに一生懸命というか。

私はそんな先輩が好きであるし、口を挟むつもりなどなかった。

元より明日奈は先輩に聞いている。その二人の間に私が入る要素などなく、むしろなんだか気が引けるといふものだ。

多分長くなるだろう。

私は再び読んでいた本に目を向ける。

無言で携帯を凝視する先輩を他所に、私の読書は快調だった。一

頁、また一頁、読み進めていく。

背中合わせで近すぎる距離感の癖に、パーソナルスペースなど感じさせない。それもこれも先輩が相手だからだろう。これが別の異性なら、こんな距離感など保っていない。むしろ同じ部屋にすらいないかもしれない。

暖房が効いた先輩の部屋で、穏やかな時間が過ぎて行く。

だがそれもずっと続くわけではなかった。

「よっ」

先輩は一度思いつきり頷いた。

どうやら決まったらしいので、私は呼んでいた頁に葉を挟み、次の言葉を待つ。

だがその言葉は目眩を覚えるモノだった。

「——全部だ。好きに買えばいいだろう」

「はっ」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

待って、待って欲しい。

「ちよつと待ちなさい。全部って言った？」

「ああ。決められねえから全部買えばいいだろ。オレが全部出すしな
どうせ」

「……先輩って、本当に妹ちゃんに甘いわね」

先輩は意味がわからない、と言うかのように不思議そうに言う。

「妹が欲しいものを買うのが兄貴ってもんだろ。浩一郎兄だってそう
だったし、アイツが欲しいってんなら出し惜しむつもりはねえぞ」

「それ、キリトにも言っておいたらっ？」

「桐ヶ谷はケチくせえんだよ、全般的に」

「やれやれ、と肩を竦めて先輩は言った。

そう言うと同時に、また新しいメール着信音が鳴り響く。

「また明日奈からだろうか、と私は考えるとどうやら違ったようだ。

先輩は携帯を操作して、誰からか確認するや否や「ゲツ！」心底嫌そうに声を上げる。そんな先輩を見るのは稀だ。そこまで露骨に嫌そうに———というか、本当に嫌そうにするのは珍しい。

もはや嫌そうなんてレベルではない。もつと汚物を見るような、もつと汚いナニかを見たかのような声を、先輩は上げていた。

私は再び聞いてみることにした。

「今度は100%好奇心で、その他邪推など一切なく、純粋な興味本位で私は問いを投げる。」

「誰から?」

「クソ女」

端的にそう言うと、先輩は携帯を私に寄越した。

「メールアドレスも登録されてない。メールの内容は絵文字など一切なく、私が見たら不快に感じる単語がそこにあった。」

『ダーリン、今度はいつGGOにログインするのにかや? 私とまた殺し合おうよ』

「気に入らない、本当に気に入らない。」

特にダーリンという単語が気に入らない。私も明日奈も、その領域に達していないのにも関わらず何様なのだろうか。

「誰、これ?」

「携帯を握りしめて、押し殺して問いかける。」

別に先輩は悪くない。悪いのは訳がわからないメール送信者だ。

事によっては明日奈と同盟を組むことも辞さない。

当の先輩は本当に嫌そうな口調のまま答える。

「B O Bのときにやり合つて、それ以降ずっと付き纏われてんだよ。本当に良い迷惑——いいや、悪い迷惑だ」

「でも珍しいわね。先輩が女の人をクソ呼ばわりするって」

先輩は捻くれている。性格も悪ければ、目つきも悪い。初対面の子供には必ず泣かれて、騒動になることなど日常茶飯事と言える。

それでも、先輩は女子供には手を上げることにはなかった。G G OでもA L Oでも、敵対者が女性であるとわかれば全力で手を引いてくる。

私を知る中で、例外だったのB O Bでの一戦のみだろう。あの時はどちらにも譲れないものがあつた。そう言うことでない限り、先輩が女子供に手を上げることはない。

そんな先輩が侮蔑しきつた声で「クソ女」と呼称する人物。興味がないといつたら嘘になるだろう。

先輩は少しだけ考えていた。

慎重に言葉を選んでいるようで、簡潔に纏めて言う。

「S A Oのときにいたクソ虫と気配と言うか、匂いが似てるんだよ。それだけだ」

それだけ言うと、先輩は私から携帯を取ると一切の容赦なくそのメールを削除する。

S A O。正式名称はソードアート・オンライン。

数年前に先輩が巻き込まれたV R M M Oの名前である。忘れがたい惨劇、世間の記憶に深々と刻み込んだサイバーテロ。

当時の私には何も出来なかった。ただ先輩の帰りを待つしか、私には出来なかった。もう一度先輩に会いたくて、話しがしたくて、私は待ち続けていた。

そして何もかもが解決されて、先輩が戻ってきた頃には——彼は変わっていた。

とても抽象的で、漠然としたモノであるが、先輩は確かに変わっていた。

憑き物が落ちた、という表現の仕方のほうが正しいのかもしれない。

巻き込まれる以前よりも、幾分か穏やかな表情をすることが多くなった。口元を緩める程度だが、笑みを零すことも多くなった。そして——どこか悲痛な表情をすることも多くなった。

私には先輩がSAOでどんなことを経験したのかはわからない。

だが恐らく、先輩は何かを得て、何かを失ってきたのだろう。それも消失感を抱かせるほど大きなモノ。

私が一緒に居たら先輩に辛い想いをさせなかった、何て事を言うつもりはない。

それは傲慢な考えだ。先輩だけではない、明日奈も妹ちゃんも、キリトだって一緒に必死に戦った結果、先輩は何かを失ってしまったのだ。皆が一生懸命に戦い、なし得た結果を『かもしれない』というIFを考えるのは当事者達に失礼だと思うから。

私一人程度増えた所で、変わるモノでもないだろう。だがそれでも、先輩の苦しみを分かち合えることは出来た筈だ。

それが私は、悔しい。

先輩が死ぬ気で戦っていたであろう状況でも、私は待っているだけだった。

先輩が剣を手にしている最中でも、私は両手を合わせて祈ることしか出来なかった。

助けてくれた恩人に、小学校の頃あれだけ私はこの人に助けってもらったのに——何も出来なかった。

だが今は違う。

今度は、今度こそは、私だって戦える。

先輩が傷つくよりも速く、先輩が剣を握るよりも疾く、先輩が敵に

気付くよりも早く。私の弾丸は敵を射抜く。

守られるだけでは終わらない。

守られた上で、私は先輩の敵を射抜く。

だから、今度こそ、置いてきぼりにはされない。

私を守ってきてくれた背中に、私は身体を向けた。

子供の頃は小さかった背中。人一人背負いきれななかつた背

中は、いつしか大きく頼りがいのある背中に変わっていた。

どれほどのモノを背負っているのか、私に推し量れるものではない。

でも、それでも、一緒に分かち合うことくらいは、出来る筈だ。

私はそつと先輩の背中に手を置いた。

すると――。

「――っ!？」

ビクツと先輩の方が大きく上がり、部屋の隅に思いつきり飛び退る。

眼を丸くさせて先輩は私に言う。

「きゅ、急に触るな！ ビックリすんだろボケっ！」

その反応が面白かった。

真面目に考えていたのが、なんだかバカらしくなって。

「ふふっ」

自然と笑みがこぼれた。

ずっと望んでいたやり取り、待ち焦がれていた声が、こんなにも愛しいものだとは思わなかった。

だから思わず言葉が紡がれていた。

自然と、口から滑るように、その言葉は紡がれていた。

「先輩」

「……ンだよ？」

「——おかえりなさい」

リクエスト 木を隠すなら森の中

「頼みがある」

アルヴハイム・オンラインへログインしてそうそう、央都アルンにて眼の前のコイツはそんなことを口にしてきた。

オレとしても頼られるのは嬉しいことだ。しかもそれが、普段から自力でなんとかしようとする人間からの口から出たとなっっちゃ無視できねえ。それこそ男が廃るってもんだ。

眼の前のコイツの眼差しは真剣そのものだ。

それこそ、コイツがこんな目をするのは、まっすぐに前だけを見つめる目をするのは——ソードアート・オンラインでのフロアボス攻略くらいだろう。

そこまで本気になるレベルなのか。コイツがお遊びもなく、本気になる代物。どれほどの内容なのかオレは考えていると——。

「クライイン」

応答がないオレを不審に思ったのか、目の前の野郎——ユーキは再度口を開いた。

不審に思う、ような目ではない。むしろオレの次の言葉を待っているような、そんな目でオレを見つめていた。

悪い、と一言だけ謝ってオレは応じることにする。

「しっかし、珍しいな。オメエがオレを頼るなんてよ」

「アンタしか、頼れる人間がいなかったからな」

「キリトやエギルじゃなくて？」

「ああ。アンタしかいなかった」

そこまで言われちゃ頬がニヤけちゃうよ。

何せユーキって人間は頼ることを知らねえ人間だ。何でも自分で

解決しようとして、力尽くでどうとでもしちまう。男として見てもスゲエって思うし、大した奴だと思う。キリトとは違う意味で、偶に歳下とは思えないときがある。

そんなやつがオレを頼りにするっていうんだ。

嬉しく思わないってのがどうかしてる。しかも普段から競い合っているキリトや、割と頼りにしている方のエギルでもない。あのユークィが、オレを、頼りにしている——！

ニヤけそうになるが、必死にこらえる。素直に言うが嬉しい。

しかし、歳上の威厳をここで見せつけてやらねえとならん。コイツは歳下で、オレは歳上。頼られるのも当然だからな。

「しよ、しようがねえなあ。ンだよ、オレに頼みつて」

「実はな……」

「おう」

「——エロ本の隠し場所ってどうすりゃいいんだ？」

「は——？」

一瞬、ときが、止まった。

コイツは何を言ってるんだ？

「悪い。もう一回言ってくんねえか？」

「エロ本の隠し場所ってどうすりゃいいんだ？」

オレの聞き間違いじゃなかった。

というか、何だそりゃ。なんでそんなどうでもいいことを、コイツは真面目に聞いてくるんだ？

肩から崩れ落ちそうになるが、オレは必死に踏みとどまる。意地があるんだよ、男の子にはな。

「……普通にベッドの下とかで良く——」

「バカ、オマエ。ンなどに隠したら、妹に見つかるだろ」

オレのナイスな提案を、高速の速度でもってユーキは否定してき
た。

とは言え、我ながらベッドの下は安直すぎた。王道の中の王道。探
してくれと言っているようなものだ。

うん、とオレは力強くユーキの言い分を肯定して。

「確かに見つかるな。オレも学生の頃、母ちゃんに見つかったことが
あった」

「……やっぱり見つかるもんか？」

「おう、見つかる。見つかって、机の上とかに置かれてる。酷いときは
家族会議だ」

「エロ本で公開処刑されんの？」

「いつそ殺してほしかったな。オメエにもそういう経験ないんか？」

「オレは、そういうのなかったかな、まだ」

ユーキはそう言って小さく笑うが、何か気になる笑い方だった。

苦笑いというには不自然なもので、満面の笑みには程遠い。言い辛
いのかもしれない。聞けばユーキは妹のユウキちゃんと寮生活して
いると聞いたことがある。親元を離れて二人くらいというには特殊
だ。もしかしたら、親御さんと上手く言っていないのかもしれないねえ。

コイツとは結構ツルむが、だからと言ってこのままズカズカ踏み込
んでいって訳じゃない。コイツにはコイツなりの事情ってもんが
あるんだろう。

だがそれよりも、気になることが一つ。

「……どうしてオレにエロ本の隠し場所なんざ聞くんだよ？」

そう。

恋愛相談とか、人生相談ではない。

よりにもよって、何故エロ本の隠し場所。嬉しさ反面、虚しさ反面。

オレの心は今や複雑となっている。

そんな中、コイツは当たり前前だろと言わんばかりの口調で。

「こういう話しはお手のもんだろアンタ」

「お前の中のオレあどんなキャラだよ？」

「エロ河童」

「エロ本の隠し場所で悩んでるオメエも同じだよっ!!」

思わずでかいたため息をついちまう。張り切って損した。

とは言え頼られたのも事実だ。ここはオレも知恵を絞ってやろうじゃねえか。人生の先輩として、男の子として、それは大きな悩みだ。人生の一度や二度、十度や二十度は悩む代物。先達として道を示してやるのも、歳上の努めってやつだろう。

「しっかし、意外だな」

「何がだよ？」

「いや、オメエも健全な十代なんだなあって思ってたよ」

キリトといい、ユーキといい、偶に性欲があるのか疑問に思う事がある。オレがコイツらの歳するときにはそれなりに異性に興味があった。いいや、それなりじゃねえ。ぶっちゃけて言うと、それはおう脳内ピンク色だったとも。

いいや、オレだけじゃないはずだ！ みんなそう！ 男の子みんなそうに決まってる!! 万国共通、男の子はみんなエロに生きる探求者!!

それはユーキも例外じゃあない。

心外だ、と言わんばかりにユーキはすねた口調でオレに言ってきた。

「オレだって人並みに興味はあるさ。だからこうして悩んでんだろ」

「そうだな。っーか、今どき本かよ。今はネットの時代だろネットの」

「浩二郎兄——オレの兄貴みたいな人にも言われたけどよ、コンピュータとかわかんねえよオレ」

「コンピュータって。いつの時代の人間だよオメエは」

とても十代とは思えないセリフだ。

というか、ネットを今どきコンピュータっていうやつがいるのか。爺さん婆さんですら言わねえぞ。

まあ、その辺りは置いといて本題に入るとしよう。

「ユーキよお、いいこと教えてやるよ」

「いい事って?」

「木を隠すなら森の中だ」

「おお? クラインくんにしては、知的なこと言うじゃん。んで、それとこれとどう関係がある?」

「バカ。エロ本を隠すなら本棚の中だよ」

「いいや、バレんだろ」

「それが案外バレねえんだなあこれが。エロ本は隠すもんだろ?」

「普通はそうだろうな」

「それを敢えて、本棚っていう誰でも目に留まる場所へ隠す逆転の発想よ。んで、ベッドの下とかにダミー置いておくのよ」

「ちよつと待てや。見つかったら家族会議だろ? それは勘弁だぞ。オレの場合、いろんな連中がやってきそうだ」

「ダミーって言ったべ? ちよつとエツチな本でいいんだよ。アイズとか、リリムのキスとかな」

「なにそれ、マンガ?」

「おう。パンツは見えるけど、健全なマンガさ。それらは見つかったも漫画だ。これが隠したかったものかって、見つけたやつは信じて疑わない」

「……スゲエ。オマエ、天才かよ」

「よせやあい。照れんだろ」

眼を丸くして、ユーキは皮肉ではなく素直な気持ちをオレにぶつける。

普段から捻くれているコイツからそんな素直な言葉を聞けるとは思わなかったオレはこれまた素直に受け止めちゃった。

こいつはオレも人生の先輩として、言葉を送らなければならんのだろ
うな。

ポン、とオレはユーキの肩へ手をおいて。

「ユーキ、覚えておきな。エロいのは男の罪、それを許せないのは女の罪だ」

「哲学者みてえだな……」

「よせやあい、照れんだろ」

我ながら名言を残せたと思う。

それにユーキともグツと距離が縮まった気がする。そうかそうか、コイツもすっかりとした男の子なんだな。

「ちなみによ、お前のお宝本ってどんなんだよ?」

「グラビアだよグラビア。メガネかけたやつ」

「

ユーキ。

それな、エロ本じゃないぞ———?」

リクエスト ご注文は捻くれ者ですか？ 母親編

—— どうしてこうなった ——。

ギャルソン姿のウェイター—— 茅場優希は自身に問答を行わざるを得なかった。

なんてことはなかった筈だ。

いつもどおり、バイト先であるダイシーカフェに足を運び、仕事着に着替えて接客する。

普段は人相が最悪の部類に達している優希でも、仕事となると話しが別。必殺の猫被りを全力で使いこなし、来店した客へ応対する。新規には適度な距離を保ち笑顔で、常連には些細な変化も見逃さずに笑顔で、つまるところ普段の彼からは考えられない満面の笑みで対応していた。

外面だけは良い、というよりも母親似の整った顔立ちをしていることも相まってか、連絡先を教えてほしいと言われるのも珍しくはない。

だが優希は華麗に拒否。

やんわりと断り、あろうことか。

—— ああ、ごめん。今事中だから、また来てね？ ——

などと申し訳無さそうな顔で、甘い言葉を吐き出して、リピーターを増やしていく始末。

幼馴染曰く、腹黒スイッチ全開。

その気がない癖に、それっぽいことを言っつて、その場を乗り切ろうするのでから始末が悪いというもの。

とはいえ、いくら性根が最悪だからとは言え、勤務態度は真面目そのもの。

客と頑なに連絡先を交換しないのもそのためだ。店員と顧客、その境界線を曖昧にしてはならないモノである、と優希は考えている。公私混同は別けなければならず、もし連絡先を交換しようものなら面倒事にも繋がりがかねない。連絡先を聞いてくるということは、少しでも

優希を男性として気に入ったという証拠であるし、男女の関係などそれこそ曖昧なもの。些細なすれ違いで、どんな事が起きるかなど想像も出来ない。

だからこそ優希は仕事場では連絡先を交換しない。どれだけ好みの女性がいようと、それこそメガネが似合う女性が来ようと、優希は連絡先を交換することはない。

責任感、というのだろうか。

優希自身が世話になっている男性——アンドリュー・ギルバート・ミルズの厚意で働くことになったとはいえ、ダイシーカフェでのウェイターも気に入っているのが現状だ。

口には出さないものの、むしろ好んでいる節がある。様々な人間がダイシーカフェに来店する。一人で訪れる者もいれば、家族連れであったり、恋人同士であったり、友達同士であったりする。訪れる理由も様々だ。店長であるアンドリューの顔が見たいという者もいれば、先程話した優希の連絡先を聞こうと躍起になっている女性もいるし、アンドリューの娘であるレベツカを可愛がろうと来店する客もいる。

千差万別。

色々な理由、それこそ不平不満を吐き出そうと来る者もいれば、心满意足を得ようと訪れる客もいる。

共通する理由がないものの、場を乱す輩、暴力を伴って現れる者達が来店しないのは、きつとアンドリューの人柄も原因の一つであるのだろうと優希は考える。

それは大変好ましいものだ。類は友を呼ぶ、という言葉があるようにアンドリューのような善良なる人間には善良なる人間が集まるのは道理だ。

ならば彼女は、カウンター席で尋常ならざるハイペースで飲む彼女が訪れた原因は、自分にあると優希は結論付ける。

面倒くさい、と目で「彼女」へ訴えてコップを洗いながら呆れた口調で一言。

「飲み過ぎだぞ」

「飲まないとやってられないわよ」

紺色のジャケットを羽織、同色のタイトスカートを履いている彼女。

明らかにブランド物であり、それを着こなす彼女にも気品を感じられる。シンプルに言ってしまうえば、似合いすぎるほど似合っていた。

飲み物としては、ワインが似合いそうな彼女だが、言葉の通り飲まないとやっていられない現状にあるのか、そのジョッキに注がれたビールを片手に持ち、優雅とはかけ離れた状態にあった。

気品、優雅、そして風雅。そんなモノは彼方に吹き飛ばし、全力で飲まんとしている。

この日何度めか、優希はため息を吐いて、残りの洗い物に手を付けて、並行する形で彼女の話しを聞くことにした。

「それで京子さん、今日は何の愚痴を言いに来たんだよ？」

彼女——結城京子はジョッキにはいつているビールを一口含み飲み込むと。

「明日奈のことよ」

「……………」

「またか、って顔してるわね？」

「どうしてわかったし」

「貴方はわかりづらいようでわかりやすいのよ。顔に出た」

「へいへい、そりゃ悪うござんしたね」

「へいは一回よ」

「へー」

歳は離れているものの、そのやり取りは親子のそれに近い。

気心の知れた、というには奇妙な言い回しであるが、幼い頃から結城家と家族同然で付き合ってきた。優希にとっては京子はもう一人の母親であり、京子に至っては優希はもう一人の息子のような感覚である。

そんなわけか、京子がダイシーカフェに訪れるのは初めてではない。

優希がバイトをすると決まってからは、店長であるアンドリユーに挨拶をし、店内の様子を見に来てからは、こうしてどういうわけか常連になっていた。

しかも決まって夜に訪れて、家族の愚痴（主に明日奈絡み）をこぼして帰っていく。聞き手側はもちろん茅場優希。娘を持つ身としては、アンドリユーが適任である筈のだがとある事情により彼は聞き手側ではない。

何度も言うが、彼女はいつの間にか常連客になっていた。となれば、こうして愚痴を言うのだから初めてではない。

またか、と優希が顔に出してしまったのもこのためだ。何度聞いたかわからない明日奈が絡んだ愚痴を優希はまたもや聞くことになる。もはや馴れたものだ。現に洗い物と並行しながら、京子の話しを聞くことが出来るようになってしまっている。

「ンで、明日奈と何があったんだよ？」

「あの子の進路関係」

「あー、なるほど」

合点が言った、と優希は一度頷いた。

進路。つまりは明日奈のこれからの、未来の話しなのだろう。

「大方、京子さんが帰還者学校に通うことを反対して、明日奈が反発した。ってところだろ」

「……何でわかったのよっ。」

「わかるっつーの、それくらい。伊達にアンタ達と長い付き合いして

ないって」

洗い物をしながら苦笑を浮かべる優希に対して、見透かされているのが面白くないのか京子は拗ねた調子で。

「あの子の言い分もわかります。仲間と離れたくないのでしょうか？」

「まあ、多分な」

「離れ離れになっても、ゲームの中でも会えるでしょう。貴方達のやってるゲームというのは」

「会話も出来るぞ。ネットがあれば」

「だったらあの学校に通わなくてもいいでしょう！ あの子はわかってないのよ、今の時期が大変ってことがっ！」

そう言うとジョッキに入ったビールを一気に飲み干し、ドンと大きな音を立てて置いて。

「おかわり！」

「飲み過ぎだったの。話し聞いてやるから、その辺にしとけよ」

「……うん」

京子はどこかフワフワした口調で続ける。

「今の世の中、良くも悪くも学歴がモノを言うのよ。貴方だってわかってるでしょ？」

「確かに京子さんの言うとおりだな」

「でしょう!? 確かに高卒中卒で企業したり、成功を治めた人だっているわ。でもそれは一握り。もっと確実に堅実に考えるなら、良い学校を卒業したほうが良いに決まってるじゃない。学歴が高ければ高いほど、選択肢も広がるのよっ！」

「大企業も好んで偏差値低い学校は選ばんわな」

「そうなのよ。その人がいくら優れていようが、目に止まらなかったら無駄なのよ。目に留まるには努力するしかないの。となるとやっ

ぱり学歴の高い学校を卒業するしかないじゃない。目に留まる、つていう努力をまずするしかないじゃない」

確かに京子の言うことも一理ある、と優希は受け止める。

この日本は良くも悪くも学歴がモノを言う社会だ。学歴の高い学校を卒業した、というだけで一目置かれる。そう考えれば、京子の言う通り学歴とはある種の武器である。打ち倒す矛であり、身を護る盾にもなる。

優希や明日奈が通っている帰還者学校はこれまた特殊な学校だ。SAO事件に巻き込まれた、未成年が通う学校。同情する人間もいれば、凄いと褒め称える人間もいる。そしてその中には、不審に捉えてしまう人間がいるのも事実だ。なにせ数年間、仮想世界というゲーム空間に閉じ込められていた者達だ。しかも未成年であり、物事の捉え方も成熟していない難しい時期の若者達。

蠱毒とも呼べる状態に置かれた極限で、非行に走らなかつた若者がいない、と誰が言い切れるだろうか。

世間が不審に思うのはそれであり、京子が危惧しているのはそこだ。

良くも悪くも、帰還者学校という施設は特殊であり、学歴が武器となる社会では足を引っ張る可能性がある。

我が子と思うのなら、その危惧は納得がいくものだ。

京子だって明日奈が憎いから、困らせようとしているわけではない。

現に――。

「その後は?」

「その後って?」

「面接とかあんだろ。その辺りは明日奈大丈夫だと思うのか?」

何気なく問うた優希への返答として、京子は臆面もなく腕を組み自信満々に。

「当たり前でしょう、私の子よ？ 明日奈は優しくて、可愛くて、私よりも出来が良い子なのよ？ 明日奈を欲しがらない企業なんていません」

「うわあ……」

少しだけ、若干、優希は引いてしまった。

先程の心配も、明日奈の将来への干渉も、全ては明日奈を思っていることであると優希はわかっていた。

それでもこれは酷い。

子煩悩なんて生易しいものではなく、いうなればそう。これが世間で言うところの——親バカ。

そして、明日奈が好きすぎて自覚がないのか、京子はジロリと優希を睨みつけて。

「何か？」

「いや。アンタも大概拗らせてるよなーって」

「どういう意味よ？」

「そのまんまの意味だよ。それ明日奈に言えばいいじゃん。どうせ頭ごなしに、帰還者学校に通うなって言ったんだろ？」

「うっ……」

凶星だったのか、京子は言葉に詰まる。

それからどこか言いにくそうに、カウンター席の机に人差し指で小さな円を作りながら。

「だって……」

「だって？」

「——恥ずかしいんだもの」

「……は？」

優希は思わず自身の耳を疑う。

だがどうやら聞き間違いではなかったようで、頭が痛いと言頭を抑えながら。

「恥ずかしいって何だよ。アンタ、アイツの親だろ。なにその思春期の反応。乙女か」

「だって、だって！ あの子、わからないけど私に壁を作ってるんだもの！」

「壁って、京子さん。マジで言ってるの？」

「マジで言ってるわよ」

「理由がわからない？」

うん、と恐る恐る頷く京子を見て、頭を抱えそうになる。

何で気付かない、と。そういうところだぞ、と。声を大にして言いたかった。しかし、面倒くさいのが一人増える。

先程、娘が一人いるのだからアンドリユーが聞くのが適任であるが出来ないと説明した。

出来ない証拠がこれだ。京子が座っているカウンター席の隣にドカッと、勢いよく座る既に出来上がっているアンドリユーが何度も頷き泣きながら。

「わかる、分かるぞっ！ 京子さんの気持ちよく分かる！」

「マスターさん……！」

「俺の娘もさあ、最近俺へ壁を作ってる気がするんだよお。苦労をかちまっただからなあ。ごめんよおレヴィいく！」

「泣かないで」

「仕事して」

もらい泣きしそうになる京子はうんうん、と頷く。

そんな二人に——というより、仕事放棄しているアンドリユーに対して、切実な思いを口にする優希だが華麗に聞き流されてしまっ

ている。

子供の悩み、とりわけ娘となるとアンドリユーはこうして使い物にならなくなる。

親バカが揃うとき、化学変化が起き、ビックバンが生まれるように、二人の親バカはとどまることを知らない。

アンドリユーは頬を涙で濡らしながら、優希を指差して。

「しかもコイツの真似ばかりしてよお。反抗期になったらどうしよう。ダディ臭いって言われたら、洗い物一緒にしないで言われたら、俺死ぬわ。毛穴という毛穴から血を吹き出して死ぬわ」

「死に方がエゲツねえよ」

「大丈夫よ、マスターさん。優希のマネしてるのなら、娘さんは大丈夫。何だかんだ言って優希は父親、母親、おまけに妹大好きなファミリーコンプレックス。ファミコンだから」

「聞き捨てならねえんだけど」

「それに明日奈はうちの夫と洗い物同じにされても文句言わないし、小学4年生くらいまで一緒にお風呂入ってから」

「おいましてバカ。明日奈にも飛び火してんぞそれ」

とどこどこで優希がツツコミを入れるも華麗に無視される。

親バカ二人はガツチリと固い握手を交わす。多分、そういうところが娘たちとの壁を作っている原因になっているに違いない。

そして繰り返し広げられる娘自慢。

やれ、明日奈は可愛いだの。

やれ、レヴィは綺麗になるだの。

当事者がいれば赤面すること間違いない話しが飛び交う現状。酒に酔うとは恐ろしいものである。歯止めする理性がなく、思いの丈を叫ぶ本能のまま、娘大好きな二人はストップパーも存在しない状況下で好き勝手叫んでいく。

とりあえず優希に出来ることと言えば――。

「……もしもし、浩一郎兄？ あのさ京子さんなんだけど。……ああ、うん、また何だわ。悪いんだけど回収に来てくれないかな？ 出来れば明日奈にバレないように。……うん、頼むわ」

——回収班に連絡することだった——

Vol. 0 目覚め前
プロローグ

——少年は恵まれていた——。

両親は常識ある父と母だった。

少年が褒められることをすれば全力で褒めてくれるし、少年が悪いことをするものなら全力で怒ってくれる。世間一般で言うところの、常識ある両親だった。

そして両親は世間一般で言うところの名医であった。

救ってきた人間は数知れず。国内のみならず、ときに外国に行ったり、ときに紛争地域に行ったりと家を開けることが多かった。

加えて少年の家庭は裕福だった。

東京都世田谷区に住居を構えており、家の外観はいかにも富裕層が暮らしているようなものだった。

更に言えば、両親の周りにはいつも人が集まっていた。

父の部下や先輩、母の友人や知人。それはまるで慕われているようで、少年も自分のことのように嬉しかったのを覚えている。

人よりも恵まれて少年は育ってきた。

だが人見知りだった少年は、友人と呼べる人間が少なかった。

家族ぐるみの付き合いだった幼馴染の二人、一人は一歳年上の少女で、もう一人はだいぶ年が離れてしまっている少女の兄。少年が真に気を許せる人間と言え、この二人のみ。

少ない、あまりにも狭く少ない交友関係と言えるだろう。しかし少年は満足していた、現状に何も文句などなかった。

今は少ないが、ゆくゆくは父のように母のように他人に慕われる、立派な人間になるのだ、と。少年は理想を思い描いていた。

——人生というのはいつだって理不尽だ。

そんな少年の転落人生は始まった――。

どこにでもいる、どこにでもある、身の上話だ、と少年は思う。
――交通事故。加害者が居眠り運転し、巻き込まれた両親は死亡、少年は奇跡的に生き延びてしまった。

罪を被せる相手も、怒りをぶつける相手も、この世にはいない。加害者は事件から一週間後に自殺したと聞いている。

――あんまりだ。

少年は思う。

――ボクのお父さんも、お母さんも悪いことをしていない。

――誰よりも人を助けて、誰よりも感謝されてきた。

――なのに殺された。相手も死んだ。

――自分だけが不幸なんて思い上がるつもりもない。

――だけど、これはあんまりじゃないか……。

自分だけ、楽に、逃げやがって、と。加害者がこの世にすでにいない。少年の怒りをぶつける矛先がどこにもいない。

父と母を慕っていた人間も離れていった。

そこで初めて、両親が利用されていたことに、少年は気がついた。

あの二人が他人に囲まれていたのは慕われていたからではない、二人の優しさに甘えていたからなのだ、と。

――寄生虫だ……。

――アイツらは皆、寄生虫だったんだ。

――ああ、なんて

なんて、汚い連中なのだろう、と。

少年の胸中に渦巻くのは黒い意志。憎悪、憤怒、瞋恚、軽蔑。恨む

べき人間もいない、両親に寄生していた虫達も自分の視界から消え失せた。

ならば少年はどこにこの感情を向けているのか。それはもう世界しかなかった。

理不尽なまでに両親の命を奪い、理不尽なまでに自分を不幸にした世界を、理不尽なまでに呪う。

自分でもこんなことは、子供の八つ当たり以下だと少年も理解している。だが割り切れるほど、少年の精神は成熟していなかったのだ。そうしていると――。

「っ!!」

声が聞こえた。

その声を聞いて、少年はああ、そういうえば。と何も変わらないモノがあつたことを思い出す。

声の主は少女の声。少年の幼馴染の声であつた。

そして、少年――茅場優希の意識は覚醒した。

第1話 わたしの幼馴染は捻くれ者

PM17:30 とある私立中学校 保健室

——薬品の匂いがする。

少年——茅場優希が覚醒し、まず最初に漏らした感想がそれだった。

身体を預けていたベッドから上半身を起こすと、目の前の視界には白いカーテン。それがベッドの周囲を囲っている。

——そうか。

——オレは寝てたのか。

ぼんやり、と。

寝ぼけながら優希は瞼をこすりながら再び上半身をベッドに預ける。

自分がどこにいたのか、すぐに思い出せないくらいぐっすり寝ていたのに、どうして起きたのか。そんな疑問を持ちながら二度寝しようと試みるも——。

「お——は——よ——う——」

「——ぬあ!？」

沈みかけた意識をすぐに現実に引き上げて、声のした方向へと視線を向ける。

そこには腕を組んでいる不機嫌そうな顔をした制服を着た女子中学生の姿。綺麗な長い栗色の髪の毛。それだけ見ればよく手入れされていることがわかる。容姿も可愛い部類であることは間違いないのだが、今はどこか不貞腐れているためか三割ほど損している印象である。

目を丸くさせている少年に、自分の存在を認識してもらえた。それが嬉しいのか、はたまた寝ていた少年に対する嫌味としてなのか、制服を着た女子中学生——結城明日奈は満面の笑みで口を開く。

「おはよう」

「おはようございます、明日奈さん」

優希も負けじとニツコリと笑みを作る。

そして笑顔で睨み合う両者。先に折れたのは明日奈だった。彼女はすぐに笑顔という仮面を外して、ジト目で優希を少し睨みつけて。

「わたし達の他に誰もいないよ?」

「——ンだよ、それ早く言えよ」

ガラリと口調も態度も表情も変わる。

満面の笑みから、どこか死んだような眼つきに。黄金のオーラから、灰色のオーラに。朗々とした口調から、粗暴な口調に、劇的に変化していく。

それを目の当たりにしても、明日奈は動じない。むしろ感心するかのよう。

「相変わらず凄いね。君の猫かぶり」

「うるせえよ。つーか、ホントにいないんだろ? オレ達以外」

「うん、いないよ。わたしと優希君だけだよ」

それを聞くと「そうか」と返すと、優希は再び睡眠を貪ろうとするも、それを明日奈が許さない。

肩を揺らして断固阻止の構えである。

「駄目だつてー! 起きなさい!」

「うるせえなあ! 先生には寝ても良いって許可とつてあるしいだ

ろうがよ！」

「何重にも猫被った結果の許可でしょ！ 下校時間なんだから早く帰らないとー！」

「ケツ、甘ちゃんか」

「何か言った？」

「いいえ、何も。優等生は言うことが違うって言ったただけですが？」

軽口を叩くと、面倒くさそうに今度こそ優希はベッドから降りる。

だが明日奈は待つて、と声をかけると懐から手鏡を取り出して、優希に差し出した。

「寝癖付いてるよ？」

「ん、あんがと」

受け取り、自分の顔を映し出す。

眼は空のような蒼色、目鼻はくつきりしており中性的に見られそうな容姿をしている。見ようによっては容姿が整っているが、眼つきが悪すぎてそれが何もかもを台無しにしてしまっている。

頭髮はプラチナブロンド。長さは肩まで伸びており男性として考えたら長いほうだろう。染めておらず地毛であることから、どこかの国のクォーターのようである。

「んー？ んー……？」

手鏡とにらめっこをしている優希が見ていられなくなったのか、明日奈はカバンから櫛を取り出して。

「ジツとして」

「自分でやっからいい」

「いいから」

「……ん」

不満そうな顔で、明日奈にされるがままに従う。その様からは借りてきた猫をブラッシングするような印象を見受けられる。

これが初めてではないのか、彼女はどこか慣れた手つきで優希の肩まである髪の毛を梳かしていく。

数分後。

「よし、出来たよー！」

「……………どうも、あんがと」

消え入りそうな声で礼を言われたのにも関わらず、明日奈は耳聡くその言葉を拾い上げて応える。

先ほどとは違う作られた笑みではなく、心から溢れた感情で満面の笑みで。

「えへへ、どういたしまして！」

「……………」

人間はこんな綺麗な笑顔を作れるのか、と。

優希は不覚にも幼馴染に見惚れてしまう。しかしそれをすぐに気のせいだ、と切り捨てると。

「チッ」

不機嫌そうな舌打ちで、照れ臭そうに視線を泳がせるのだった――

……………
……………

.....

数分後 とある私立中学校校門前

優希達が通っている学校は共学の私立学校だ。

敷地面積も中々広いもので、勉強に重きを置いている進学校である。交通利便性が多様で、少し歩けば娯楽施設も豊富なこともあり東京近郊の人間にとっては在宅で通える中学校として、近年人気が高まり始めている。

だが、入学条件が極めて厳しい。適切な学習カリキュラム体制から裏付けられた学力偏差値を誇る進学校。

名門校への脅威の合格率はもちろん、有名な著名人も多数排出している。正に、この中学校に入学したものなら、その人間はエリートといっても良いだろう。それくらいの箔がついてしまうのだ。

「茅場君！ ばいばーい!!」

「茅場ー!! 明日勉強教えてくれー!!」

「茅場さーん！ いつ部活動っ人に来てくれるんですかー!?!」

校舎から出て、優希と明日奈を見かけた生徒が数人声をかけてくる。

話しかけてくる生徒は多種多様、大人しめの生徒であったり、活発そうな女子生徒であったり、体格が恵まれている体育会系の男子生徒であったりと様々である。

優希はそれを律儀に受け答えしていく。

そして笑顔と言う名の仮面を被り、人の良さそうに手を振りながら。

「それじゃね、みんな！ また明日学校で会おうね！」

そう言うと、校門を出てしばらく歩き、住宅街に着くと呟いた。

「あー、疲れる」

「やめればいいのに」

クスクス、と面白いものをみたような笑みを浮かべる明日奈に、優希はうんざりしたような口調で応えた。

「やめねえよ。人付き合いを円滑に進めるのに重要だしな」

「猫かぶるのが？」

「そう、猫をかぶるのが」

それを聞いて、明日奈はどこか面白くなさそうな声色で感想を漏らす。

「そんなに重要なあ？」

「重要だっつーの。適当に話を聞いて相槌打って、すごーいとか言っ
ていけば騙されてくれるしな」

「悪い人だ。ここに悪い人がいる……」

「どこがだよ。相手はつまんねえ優越感に浸れる、オレは人脈が増える。お互いWIN-WINだろ。誰も不幸にならねえし」

ケケケ、とどこか邪悪に笑う幼馴染を見て、明日奈は心配になつてくる。この少年、そのうち刺されるのではないか？とさえ想像してしまふ。

——最近物騒だしなあ。

——朝、幼馴染の家に行けば血だらけで倒れていた。

——冗談じゃないよね。

想像力が豊かなのか、鮮明に明日奈は想像する。

朝、床に倒れているのは茅場優希の死体。刺されて時間が経っているのか血は固まっており、数分床に倒れながらもがいたのか、血が薄くのびている。

「——っ！」

「なに震えてんのオマエ？」

寒いのか？と、急に立ち止まった明日奈の心情を読み取れない優希は的外れな心配をしているが、明日奈はこれを華麗にスルー。どこか彼女は決意に燃えている眼つきに変わっていた。

——わたしの方が年上だし、お姉さんだし、しっかり守らなくちゃ！

「オマエ、なんか失礼なこと考えてただろ？」

「ふえ？」

明日奈の決意を今度こそ察知すると、優希は余計なお世話だと言わんばかりに明日奈の両頬を両手で引っ張る。

「何を妄想してたこの野郎」

「ひたいひたい！ 頬をひっぱらないでえー……！」

「なら下らねえこと妄想してんじゃねえよ」

何度か両頬をこねくり回して、ようやく拘束から開放される。

彼女は両手で頬を撫でながら、何でこんなことをされたのかわからない、と戸惑いながらも口を開く。

「だ、だって優希君刺されるし、わたし年上だし、お姉さんだし、守らなきゃだし……」

「意味がわからねえよ……」

いきなり意味不明なことをポツリポツリと呟き出した幼馴染を冷やかな眼で見ると、優希は再び歩き出す。

——意味がわからん。

——何でオレが刺されるんだ？

——急に立ち止まるから何事かと思った。

心配して損した、と心の中で愚痴る。

「そ、それにしても本当に凄いやね。ああまで行くと、変身みたいな感じだもん」

いきなり歩き出した優希に追いつくために慌てて追いかけながら、明日奈がそんなことを言い出した。

主語が抜けているが、大方先程の猫かぶりのことを言っているのだろう、と優希は結論付けて応える。

「オマエだって他人に愛想振りまいてんじゃん」

「わたしは優希君みたいに色々考えてないもん」

そう言うのと明日奈は続けて、自分の疑問を問いかけた。

「前から疑問に思ってたんだけどさ、どうして皆の前になると態度変えるの？」

「ああ？」

そんなものは問われるまでもない。これからの茅場優希の未来のためだ。

これは出来る限り味方を作るための訓練。社会に出て、愛想よく振る舞い、世間一般で言うところの良い人間を演じるための練習である。

聞き手側に常に徹して、親身に聞いているように錯覚させるために相槌をうち、相手に優越感を覚えさせる。そうすれば自然と相手から自分に対する評価は良くなり可愛がられる。結果的に味方が増える。そうして出世し、ゆくゆくは誰にも負けない大金持ちになる。世界から弾き出された者がなし得るからこそ、意味がある。

天国から地獄へと叩き落とされた茅場優希からの世界への復讐、善良な両親が死に救いようがない悪党が生き残る。そんな不平等がまかり通るシステムへの叛逆。

—— そうだ。

—— こんなクソツタレな世界でオレは誰にも負けない勝ち組になつてやる。

—— それが出来たら、オレが生きた意味が生まれる。

—— オレだけが生き残った意味が生まれるんだ。

「……優希君？」

「っ！ あ、ああ。何だっけ？」

迂闊。

いつの間にか黙ってしまった優希の顔を覗き込むようにして、明日奈が見上げている。

すぐに優希は気持ちを切り替えて、黒い感情を心にしまい込む。

この復讐劇に明日奈は関係ない。何よりこんな汚い感情を持つている自分を見てほしくなかった。

「だからー、君が態度を変える理由だよ」

「別に理由なんてねえよ」

「本当にー？」

ジーっとどこか見透かすように、眼を細めながら言う明日奈に目を逸らしながら、優希は話を変える。

「んなことより、今日はどうすんだ？ 家によつてくのか？」
「んー、お邪魔しようかな？」

悟られる訳にはいかない。

結城明日奈だけには悟られるわけにはいかないのだ。

——そうだ。

——コイツだけは汚しちやならねえ。

——何もかもを失って腐ったオレに、変わらずに接してくれたコイツだけは。

——汚しちやならねえんだ。

本来隣にいることすら、痴がましいことだと優希は思う。

まともに直視すると、眩しすぎる錯覚に陥るくらい、茅場優希から見た結城明日奈は輝いて見えた。

——コイツだけは本当に変わらねえ。

——嫌ってほど真っ直ぐで、憎らしいほど眩しい。

明日奈は嬉しそうに優希の手を引く。

そして笑顔で、作られていない笑顔で、明日奈は優希に向かって。

「ほら、早く行こー！」

「……へいへい。わかったから引っ張んな、ウゼえから」

茅場優希にとって、結城明日奈は、光だった——

現在2022年8月21日——。

運命の日まであと——。

第2話 ボロアアパートだって住めば都

2022年8月23日 PM19:20 優希のアパート

私立中学校から数時間の距離にあるその建造物は、築何年が経過しているのか見当も付かず、建物自体が小さなひび割れやツタに覆われているような状態だ。東京大空襲も乗りきったかのような、佇まい。現存する化石と言っても差し支えがない風格を漂わせている。

二階通路には、洗濯機が設置している辺り、風呂場が存在しないらしい。

つまるところボロアアパート。誰が見ても古びたアパートの二階。一番奥の部屋の一室で、ボロアアパートの家主——茅場優希はスマートフォンを片耳に当てて、通話をしていた。

「ハア？ 今から来る？」

『うん、いいかな？』

電話口の相手は幼馴染である結城明日奈だ。

優希はチラッと壁にかけてある質素な時計を見やる。軽く19時を超えていた。この物騒な世の中、年端もいかない少女が歩いてくる。加えて、明日奈の家とここまでかなりの距離があることを優希は知っている。

チツ、と小さく舌打ちを一つすると、すぐに優希は立ち上がる。

「待ってる。今迎えに——」

『あ、うん。大丈夫』

「大丈夫なわけねえだろ。すぐに——」

ぶつきらぼうに言い捨てるが、同時にチャイムの音が聞こえた。

まさか、と。無言で優希は玄関まで近付くと、ドアをまた無言で開ける。

「……………」
「……………」

ドアの前に立っているのは少女。

スマートフォンを片耳に当てて、どこか気恥ずかしそうな顔で優希をチラチラと見ていた。

そして恥ずかしそうにはみかみながら口を開く。

『えへへ、来ちゃった……』

携帯から、肉声から。同時に声が優希の耳に入ってきた。

ボロアパートらしからぬ格好、ロングスカートを履いて、クリーム色のジャケットを羽織どこかお嬢様オーラを醸し出し、いつもの髪型ではなく、両端の髪をしばりおさげにしている。

電話口の相手——結城明日奈がそこに立っていた。

優希は一瞬だけ面を喰らうも、溜息を深く吐き後頭部をガシガシ掻きながら呆れた口調で口を開く。

「来ちゃった、じゃねえよ。来る時は迎えに行くから待ってろって毎回回言ってるんだろ」

「だって、そこまですてもらおうの悪いし……」

「急に家にまで来て、今更何言ってるのオマエ？」

「うう……」

本当に申し訳なさそうにする明日奈に対して、再び深い溜息を吐いて優希は促す。

「オマエが人の話聞かねえのはいつものことで、昔からだしな。まあいいや、入れよ」

「うん、お邪魔します……」

ボロアパートの外観をしている割に、内装は綺麗な部類だった。無駄がない、と言ったほうが正しいのかもしれない。ワンルームである部屋にあるのはテレビ、冷蔵庫、扇風機、机、従兄弟から貰った使わないパソコン以上。洒落た家具もなければ、ふかふかのソファなどもない。

「相変わらず綺麗にしているね？」

ボロボロになっている畳の上に座りながら明日奈は感想を漏らすも、優希はそれを一蹴するかのように鼻で笑いながら返した。

「何もねえからな。散らかしようにねえのさ」

「その割に机の上が散らかってるよ？」

そういうと、明日奈の視線の先にあるのは参考書やノートが開きっぱなしで乱雑に置かれていた。

「……もしかして、勉強中だった？」

「いいや、今終わったとこだ」

ぶつきらぼうにそう言うと、優希は冷蔵庫を開けながら麦茶が入っているピッチャーを取り出し、戸棚からはコップを二つ分取り出した。

——まあ、嘘なんだがな。

——気を使われるの面倒くせえし。

——終わったってことにはしておこう。

菓子どこにあったか、と探している優希の背を見て明日奈は見抜いていた。

——嘘だね。

——多分これから勉強するつもりだったんだ……。

——ありがとうね、優希君。

長年の付き合いからなせるのか、それともただ単に優希が嘘つくのが下手なのか、簡単に看破されていたようだ。

「悪い、菓子はなかった——って、何を笑ってるわけ？」

「ううん、何にも？」

悪いなど思う反面、気を使ってくれたのが嬉しかったのか、明日奈の表情に自然と笑みが溢れる。

そんな明日奈を見て、不思議そうに優希は首を傾げながら机の上にピッチャーとコップを置いた。と、同時に優希のスマートフォンが鳴り始める。その着信は電話ではなく、どうやらメールのようである。

「あつ、わたしが注いでおくから」

「ん、悪いな」

明日奈は慣れた手つきでコップに麦茶を注ぎ、優希は返信するためスマートフォンを片手に操作していく。

受信者の名前は『朝田』タイトルは『先輩』のみである。本文はどいうした、とツツコミを入れるのも面倒くさい様子で、優希は『どうした？』とだけ文字を入力すると返信した。

それから数秒もしないうちに返事が返ってくる。

受信者の名前はやはり『朝田』。今度は本文も入力されているが、やはり簡略なもので『先輩は今何してんのかなって思っ』といった内容だった。

これは長くなりそうだ、と優希は思いながらスマートフォンから机を挟んで座っている明日奈へと視線を向ける。

——めちやくちやチラチラ見てんなコイツ。

——そんなに気になるもんかねえ？

ここで「気になんのか？」って質問するものなら明日奈は絶対に「いや別に気にならないよ？」と答えることだろう。だが誰がどう見ても、今の明日奈は優希が誰とメールをやり取りしているのか気になって仕方ないようだ。

その証拠に、既に麦茶を飲み終わっているにも関わらず、コップに口をつけたままチラチラと優希の方へと視線を向けている。本人はバレてないと本気で思っているのだから、余計質が悪いと優希は結論付けて口を開いた。

こうなったら先手必勝である。

自分から暴露した方が手っ取り早いし、別に隠したところで何の問題もない。

「後輩からだった」

「え、中学の？」

「いや、小学校の。朝田ってヤツだ」

明日奈は少しだけ考えながら。

「うーん、居たかなー？」

「つーか、オマエとオレって別の小学校だったし分かる訳なくね？」

「それもそっか」

うんうん、と納得するように頷いて明日奈は続ける。

「朝田君とは仲がいいの？」

「どうだろうな、別に普通じゃねえかな？」

ここでナチュラルに『朝田』を男扱いして話を進めている明日奈であるが、実のところ『朝田』なる人物は女性である。だがこれを優希はスルーを決め込んだ。いちいち訂正するのも面倒だし、話が進まないからだ。

話を進めるために、メールのやり取りを中断しスマートフォンをポケットにしまい込み、優希は問いかけた。

「んなことより、オマエここに来ること誰かにちゃんと言ったのか？」
「うん、大丈夫。お兄ちゃんに言ってるよ？」

「浩一郎兄か。なら別にいいか」

誰かに伝えて外出してくるならいい、と納得するとコップに入っている麦茶を一口飲んで問いかけた。

「何があった？」

「……何のこと？」

無理して愛想笑いを浮かべる明日奈に、優希は呆れた口調で続けた。

「無駄に長い付き合いじゃねえんだ。オマエに何かあったなんてことは一目見ればわかんだよ」

「……凄いね、何でもわかっちゃうんだ」

元より、優希は他人の感情の起伏を読み取るのが得意な部類である。何かあればそれが何かしら癖と言う形で自然と出てくるのを少年はよく知っている。加えてそれが幼馴染であるのなら、尚更わかってしまうというものだ。聞いてほしいからこそ明日奈はここに来たのであり、優希もすぐに家の中に招いたのだ。

わかった上で問いかける。何があったのか、と問いかけるも明日奈は答えない。

もちろん何かしら答えなければ話は進まないが、優希は黙って見守っていた。

これは自分から話さなければならぬことだ、と優希は考える。きっかけを与えた、それで話したくないのならこの話題はそれまでである。深く追求することはしない。

「……………」

「……………」

沈黙は数秒か、数分か。

時計の秒針の音だけが周りを支配していく。そうしていると明日奈は口火を切った。

「もし、もしね？ 決まった人生を歩まないといけないと誰かに決められたら、優希君はどうする？ その通りに進む？」

顔を下に向けて、まったく表情が読めないが、弱々しい声で明日奈は問いかけた。

そうだな、と優希は相槌を打ちながら、明日奈の身に何があったのか分析し始めた。

——誰かっつのは、明日奈の親か。

——浩一郎兄に言ってきたって辺り間違いねえな。

——京子さん達にここに來るって言っつてねえのはアレだ、飛び出してきたなコイツ

——親と何かあったことを伏せるのは、親がいねえオレに気を使っつてんだらう。

下らないことで気を使いやがって、と眼を細めて明日奈を見る。

親と喧嘩をする。

恵まれている証拠である。喧嘩と言うのは一人では出来ない。意

見をぶつけ合えて、己の主張を聞いてくれる人間が居て初めて成立するものだ。その対象がましてや二度と会話もできない人間が居る身からしてみれば、どれだけ恵まれているのだろうか。

だが優希はそんなことを言うつもりはない。

——悩みつてのは大なり小なりみんな抱えてるもんだ。

——オレには出来ないから、オマエは恵まれてる、だから我慢しろ。

——なんてクソのような意見はまかり通らねえ。

——悩みは悩みだ、なら親身に聞いてやらねえと。

そこまで考えると、優希は優希の意見を提示する。

迷うことなく、朗々とした口調で、後ろめいた気持ちなどなく、自分の言葉を口にする。

「進むわけがねえ。絶対に反抗するし、絶対に叛逆する」

明日奈は顔を上げる。

その言葉が来るのを明日奈は分かっていたと言わんばかりに、口元を緩ませていた。

「知つての通り、オレはひねくれてるからな。決められたのなら、絶対に思い通りにならねえ。違う道を進んでやる」

「うん」

「確かに決められたのなら、後はその道を歩くだけだ。それは簡単だろう、それは安易だろう」

そこまで言うと、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべて優希は続けた。

「だがそれじゃつまらん。困難でもオレは別の道を選ぶ。最短距離で進んでやる、そうになったら振り返る暇もない。全速力で、自分が決め

た道を通つ走るだけだ」

「転んでも知らないよ?」

クスクス笑いながら言う明日奈の言葉に、優希は鼻で笑いながら。

「受け身取るから問題ねえよ」

「大丈夫だよ。転んでもわたしが助けるから」

「ゲえ……」

「何で心底嫌そうな顔をするの……?」

両頬を膨らませて不満そうにしている明日奈を見て、優希は無視して話を続けた。

「と、まあこれがオレの感想だ。参考になったか?」

「うん、何か君ならそういうと思ったよ。前しか見ないもんね、優希君って」

「だったらオレに聞くなよ」

悪態を軽くつくくと、優希はテレビの電源を入れる。

どうやら丁度特番だったようである。

それは優希がよく見る単語。鉄仮面である従兄弟が開発に携わっており、いつもより熱が籠った説明を受けたことを優希は思い出す。

「あ、これお兄ちゃんが欲しがってるやつだ」

明日奈の言葉を耳に入れながら、その名前を思い出す。形状は頭全体を覆う流線型のヘッドギア、もちろん頭から被る物である。世界初のフルダイブ技術を用いた家庭用ゲーム機のその名前は――。

「ナーヴギア、か……」

第3話 従兄弟は鉄仮面

2022年8月28日 AM9:30 東京都内某所

単刀直入に言うと、茅場優希は苦学生の一部類である。

両親は幼い頃に失くし、家族は居らず天涯孤独の身だ。親戚からも盥回し、と言うよりも両親の財産を狙って何とか優希の親権を欲しがった親戚達に見切りをつけて、彼の方から縁を切ったと言ったほうが正しい。

彼の身元保証人は父の親戚であるが、金に目が眩んだ愚かな連中とは違った。

変人、と言つても差し支えない。金に無頓着で、自分の好きなものにとことんのめり込んでいくタイプの人種である、と優希は認識している。

話を戻すが、優希は苦学生である。

両親の財産もある、身元保証人からも生活費を月に一度口座に振り込まれている。この現状だけ知っていればとても苦学生とはいえないし、むしろ彼の同年代からしてみれば金持ち過ぎるくらいだ。だが彼は貧乏であった。

というのも茅場優希の誇り、というのかそれとも意地を張っているだけ、と言うべきか。

彼は今まで、両親の財産にほとんど手を付けてないし、身元保証人からの生活費にも手を付けていなかった。

生活費、家賃、学費などは全てアルバイトを掛け持ちして賄っていた。勿論、年齢は偽っている。

優希は中学生だ。まだ幼さが残る容姿ではあるし、傍から見たら違和感を覚えることだろう。だがこれを彼は持ち前の猫被りからの高いコミュニケーション能力でクリアし、違和感と言う感情を上手く隠させていた。むしろ他人からは「若いのに大変」とか「人一倍頑張っているから応援したい」といった前向きな感想を抱かれていた。

そんな貧乏である優希の足取りは軽かった。

表通りにいる大勢の歩行者の隙間を器用に抜けて歩いて行く。日曜日であるからか、人が多い。本来人混みというのはあまり好きではない彼であるが、それはそれ。これも都会の醍醐味である、と受け入れられるくらい機嫌が良かった。

彼が向かう先はバイト先である。勿論、働くことを生きがいにしているから機嫌がいいわけではない。

ここまで機嫌がいいのは、ただ単にそのバイト先から出る給料が良いからに他ならない。

というのも、雇い主は件の身元保証人である従兄弟に他ならない。生活費を受け取らないのなら、雇って無理矢理受け取らせようと言う魂胆なのだろう。優希もそれには願ったり叶ったりである。無償の施しではなく、労働に見合った賃金であるのなら話は別なのだ。

そうこうしていると、優希の携帯が鳴り始める。

「あ?」

それはメールの受信音ではなく着信音。

ズボンのポケットからスマートフォンを取り出して通話ボタンを押し片耳に当てた。

「何の用だ?」

『いきなり何の用だって、どうかと思うのだけど先輩?』

彼を先輩と呼ぶ人物は一人しかいない。電話口の人物——朝田に優希は面倒くさそうな口調で問いかける。

「だったら何て言えば正解なんだよ?」

『電話してくれてありがとう、とか……?』

「切るぞ」

有無を言わせない返しに、朝田はやや慌てながら。

『じよ、冗談だってば！ 切らないですよ』

「それで、本当に何の用なんだ？」

『別に。……その、暇なら遊ぼうと思っただけよ』

「悪いな。これからバイトだ」

そういうと「そう……」と若干声が暗くなるのを聞いて、優希は溜息を吐いて。

「今度ならいいぜ？ 朝田の都合に合わせて。いつがいい？」

『……』

「朝田？」

何故か黙った後輩に、優希はどうしたのか、と訝しむもそれはすぐに消えてなくなった。

『名前』

「あ？」

『何で毎回毎回先輩は私の名前を呼ばないの？』

「あー……」

説明するのが面倒くさい、というよりも特別理由がない。

初対面るときに『朝田』と呼んでしまったから、このままズルズル名字呼びになってしまっただけなのだが、彼女は果たして納得するだろうか。

——絶対に納得しねえだろうなコイツ。

——結構、負けず嫌いだな。

結果、納得しない。

そう結論付けた優希は強引な手でその場を乗り切ろうと試みた。

「今度な」

『今教えなさいよ』

「んじや、もう着くから」

『ちよつと、待ちな——』

さい。

続く言葉を聞かずに、優希は通話を切る。

今度会ったら小言を絶対に言われる。確信染みた運命を感じながら溜息を吐いて再び歩きだそうとするも、再び優希のスマートフォンから着信音。

——マジか。

——切られて直ぐリダイヤルかよ。

——コイツ、暇すぎじゃねえか？

嫌そうな顔をしながらディスプレイを見るも、直ぐに優希の表情は一転する。

それは朝田ではなく、違う人物の名前。自然と口元が緩まるが、優希は気付いていないだろう。

「どうした？」

『あ、優希君。わたし、明日奈だけど』

新しく優希に着信をかける女性——結城明日奈は明るい口調で名乗った。

「名前出たんだからわかるっつーの。んでどうしたよ？」

『うん、暇なら遊ばない？』

「明日奈、オマエもか……」

どこかうんざりしたような口調の優希に、明日奈は不思議そうな声で問いかけた。

『どうしたの?』

「朝田からも電話あったんだよ。暇なら会えねえかって」

『朝田くんから? ああ、先約があったんだね』

今だに朝田を男の人だと認識している幼馴染に、先程の通話の流れを簡単に説明する。

「まあな。でも断った」

『え、用事でもあるの?』

「バイト」

『あー、なるほどね……』

話しが早くて助かる、と思いつつながら申し訳無さそうな口調で。

「悪いな」

『ううん、わたしは気にしてないからバイト頑張っつてね』

「おう」

そこで通話が終了した。

さて、と心の中で一区切りつけると、優希はそのままスマートフォンを操作してメールを作成していく。

宛先は『茅場晶彦』という人物。

本文の内容は『もうすぐ着くから、入れるようにしておいてくれ』という簡単なもの。

それを送信すると直ぐに返答は返って来た。

内容は『問題ない』というこれまた簡単な内容。

「あの鉄仮面が……」

そう小さく呟くと、優希は歩き出した――。

.....
.....
.....

AM11:05 東京都内 とある研究所

優希がやってきた建物の敷地は広大なものだった。

倉庫のような白い巨大な建物が4つ並んでおり、一体中で何を研究し、何を生み出しているのか頻繁に通っている優希でさえ全く把握しきれていない。

――日本有数の研究機関。

――こんな中で、ピコピコを開発してんだからわかんねえもんだよな。

と、心の中で軽口を叩き優希は正面玄関から目的地に向かう。言うまでもないが、彼の言うピコピコというのはゲームのことである。

ゲームの名前は『ソードアート・オンライン』。ナーヴギアという専用の機械から遊べるものである。この出現に世界は熱狂の渦に包まれて、近々ベータテストの参加希望者を募る予定であるらしい。

らしい、と曖昧な表現をするのは、優希が『ソードアート・オンラ

イン』に全く興味がないからに他ならない。というよりもゲーム自体に興味がない。

ならば何故、彼がこんなところにいるのか。簡単な話だ、優希のこれから向かうバイト先は『ソードアート・オンライン』が関係しているからに他ならない。

——頭に装着して、『完全ダイブ』ねえ……？

——今だに原理がわかってねえんだが。

——よくもまあ、オレも疑問に思わず被ってたもんだ。

呑気なのか、危機管理がなってないのか。

曖昧に考えながら、優希は目的地の部屋に到着した。彼は軽くドアをノックし、ドアを開けた。

中にあるのは研究所というよりも、計算室と言った方が正しい気がしないでもない内装をしていた。

パソコンが有るのは勿論だが、四方の壁を埋める業務用冷蔵庫のような大きさの最新式の量子コンピュータが設置されている。窓はなく、閉鎖的なものを感じさせられる。空調が効いているからいいが、これももし効いていなかったら蒸し風呂になり下手したら死人が出るかもしれない。そう考えさせられる印象を与えていた。

研究室にはパラパラと人影があり、各々与えられた作業を忙しなく行っていた。

そんな中、研究室の真ん中に設置されているタワー型のパソコンの前に、一人男性がポツンと画面と向き合っていた。

優希の探し人、つまり雇い主が見つかった瞬間でもある。

彼は真つ直ぐその人物に向かい声をかけた。

「よう」

「来たか」

お互い、簡単な挨拶である。

その男性こそ優希の雇い主であり、身元保証人となっている従兄弟である。男性——茅場晶彦は肩越しに優希を一目見て、直ぐに画面へと視線を戻す。そのままの体勢で。

「かけたまえ」

「へいへい」

これまたお互い愛想があるとは思えない受け答え。しかし二人の様子に嫌悪感はない。

優希は茅場の言うとおり、隣の椅子に深々と座り問いかけた。

「何してんだ？」

「カーディナルの最終調整だよ」

Cardinal System。通称カーディナル。

それは『ソードアート・オンライン』を制御する巨大なシステム群。もしくはメインプログラム。メンテナンスを不要とし、エラーチェック及びゲームバランスサー機構で、世界のバランスを自己の判断で制御している。

と、優希は最初に説明を受けている。だが何のことかわからないし、興味もなかったので全く覚えていなかった。

優希はすっかり興味をなくしたのか、椅子の背もたれに身を預けて、両手を頭の後ろに組んで退屈そうに茅場の作業を見守っていた。

「退屈かね？」

「見ての通りに決まってるだろ」

気怠げな様子のまま優希は続ける。

「ソードアート・オンラインってのはRPGってやつなんだろ？」

「そうだ」

「なのに魔法とかなくて、近接武器で戦うってどうなんだよ？ 最近のRPGってのは魔法があつてなんぼじゃねえのか？」

その意見に、茅場の興味が画面から優希へと移る。

思わず優希へと視線を向けて。

「驚いたな。ゲームを大して詳しくもない君から、そんな真つ当な意見が出るとは思わなかった。真面目だな、わざわざ勉強してきたのかね？」

「驚いたんなら、表情に出せよ鉄仮面。いいから答えろよ、晶彦くんよオ？」

少し拗ねた口調で問う従兄弟に、口元を少しだけ緩めながら茅場は応えた。

「これでいい、ソードアート・オンラインはこれでいいのだよ。魔法がなければ安全に戦う術を失い、皆クリアのために近接戦闘をせざるを得なくなる」

「……つまり、必死になる姿が見てえ訳だ。オレが言うのもアレだが、アンタも性格悪いよな」

そこまで言うのと、優希は背もたれに寄りかかっていた上体を起こし、話を進めた。

「さっさと始めようぜ。アンタも暇じゃねえんだろ？」

「そうだな。最後の実験を始めよう」

茅場が取り出したのは巷で話題を独占しているゲーム機『ナーヴギア』だった。

それを優希に差し出し、彼は疑う様子もなく頭に装着する。

これこそが、優希のバイト内容。

VR実験の被験者となることである。実験と言っても危険なものでなければ、ただ『ソードアート・オンライン』にログインしモンスターと戦ったり、武器を振るったりするだけの簡単なモノ。要はベータテストする前の試運転といったところである。

——このゲームがやりたくて仕方ねえ人間なら羨むかもしれないが。

——オレには苦痛だったね。

——VR酔いつつーのか？

——インする度に気持ち悪かった。

勿論今ではそんなことはない。

慣れとは恐ろしいものだ、と優希は当時の思い出を振り返っている。

「それでは始めてくれたまえ」

茅場の声を耳にする。

これで何回目になるのか数えるのも面倒くさくなり途中から数えていない。

だが始まりはいつだって同じだ。開始コマンドを戸惑わずに優希は言葉にした。

『リンク・スタート』

第4話 後ろを振り向こうとしない愚者の街

2022年8月28日 AM 11:20 アイヌクラッドはじまりの街

眼を開けると何度見たことか、慣れ親しんだ街が広がっていた。まるで現実であるような感覚。五感がしつかり機能しており、暖かな風が頬を撫でる。

ただ現実と違う点と言えば、街並みだけだろうと優希は思う。街は石造り、道路もコンクリートではなくレンガを敷き詰められて舗装されており、商品を売り出すための露店がある。日本では決して見ることの出来ない光景が広がっていた。

「やっし……」

拳を握ったり開いたり、肩を回したり、足を振ったりと言った簡単な動作を行うも問題なく動かせた。

ここで気になるのが、今の優希の外見はどうなっているのか、と言った疑問だがこれも問題なかった。最初の実験で、現実の世界の姿形がソードアート・オンラインで反映されるのかは実験済みである。つまり今の優希の姿は現実の世界と変わらない。

今身につけている防具も簡易的なもの。

革製のズボンを履いており、布製のシャツの上から胸当ての防具を着込んでいる。如何にも初期装備といったような出で立ち。

「晶彦くんよお！ 今日は何をすんだー！」

空に向かって大きな声で指示を仰ぐと返答はすぐに返って来た。

『武器を手にしてくれ。何がいい？』

「両手剣でいい」

『君はいつもそれだな。他の武器を使う気はないのか？』
「ねえな。これが一番しつくり来るんだ、別にいいだろ」

優希の言葉と同時に眼の前が光る。そこには片手で扱うには少し大きい剣が地面に突き刺さっていた。形状からして、特別でもなんでもない。まだ実装されていないが、この辺りの露店でNPCが売ってそうなどこにでもある両手剣である。

片手で引き抜くと、優希は両手で持ち直し構えた。
何度か大振りで振るうと、再び地面に突き刺して。

「次は？」

『NPCとデュエルしてもらおう』

茅場が言い終わるや否や、地面から這い出てくるように人影が現れる。凹凸のない人影、顔も鼻口眼といったパーツがない。まるでマネキン人形をもつと簡略したような姿形をしている。

片手には剣が握られており、形状から察するに装備しているのは片手剣のようだ。

——デュエルって決闘システムだったか？

デュエルとは『ソードアート・オンライン』における決闘システムである。

基本的にプレイヤーがデュエルに誘い、誘われた方が承諾すればデュエルを楽しめる簡単なものであることを優希は思い出す。

——確か、『完全決着モード』『半減決着モード』『初撃決着モード』の三種類だったか？

優希はぼんやりと手慣れた手つきで右手の人差し指と中指を真つ直ぐ揃えて真下に振り、メインウィンドウを開く。

これも最初はどうやって開くのかわからなかったな、と当時の状況を思い出しながら操作していった。

『ルールは完全決着モード』
「ん」

指示通りルールを設定し、あとは『YES』と表示されてる場所を指で押すだけなのだが。

ここで――。

『そうだ』

茅場が――。

『ペインアブソーバはレベル0にしているが、』

耳を疑う発言だった。

ペインアブソーバとは文字通り痛み of 緩衝だ。レベル10であれば、ダメージを受けても違和感しか感じないが、レベル0となるとそのダメージは現実の痛覚として感じる。つまり斬られたものなら痛覚として鮮明に残るということ。最悪後遺症にもなりかねない。

常人が聞けば、ふざけるなど憤る発言だ。冗談でも笑えない。

しかし優希は。

『大丈夫かね?』

「構わねえよ」

迷う素振りすら見せずに、デュエルを開始するか是非を問っていたウインドウをタッチする。タッチした場所は『NO』ではなく『YES』。

何の戸惑いも見せずに、淡々とした様子で、無表情にデュエル相手

となつているNPCを蒼い双眸に捉えて続けた。

「さっさと始めんぞ」

『……ああ、始めよう』

カウントが刻まれていく。

優希は眼を閉じて深く深呼吸を繰り返す。恐怖をしているわけではない。酷く落ち着いており、今から来るかもしれない痛みを当然と受け入れている節すらある。

眼を開ける。

その蒼い双眸に感情はない。ただ俄然の敵を斬るために存在している機械のような印象すら感じる。

カウントが0になると同時に――。

「――っ！」

両手剣を両手で構えなおして、その身をNPCへと踊らせる。

最短距離で、真っ直ぐに、バカ正直に、弾丸のように推進していった。

「――ツツ!!」

思いつきり両手剣を振り下ろすと、NPCは構えていた片手剣を使い弾く。辺りに剣戟が響き渡った。それで終わりではない。弾かれるや否や、優希は直ぐに剣を振るい、NPCも合わせて弾き返す。

火花を散らす鋼と鋼。とても仮想世界とは思えない。まるで現実で起きているかのような光景。

力量の差は歴然だった。

優希は素人のように我武者羅に剣を力任せに振るっているのに対し、NPCは体幹が真っ直ぐで振るう剣もぶれない。

これでは優希の剣は当たらない。現に――。

「——ッ!？」

振り上げられた剣を弾くと、NPCはすれ違い様に優希の脇腹を斬りつけて、一度距離を開けた。

斬られた、と知覚すると同時に脇腹から灼熱を感じると、直ぐに痛みとなって優希の身体全体を奔る。

——なるほど、こりや痛い。

——本当に痛いなこりや……。

茅場がペインアブソーバを本気で切っていたことに驚きはなかった。

あの従兄弟はやると言ったら本当にやる男であることを、優希は良く知っているし良く熟知している。

優希が驚いたのは本当に痛みが走ったことにある。

常人ならば顔を歪ませて立っていることすらままならない痛みを負っているのだが、科学も行くところまで行ったもんだな、と呑気に感想を漏らしていた。

——さて、どうするか。

——体力ゲージも4分の1削られちゃったみてえだしな。

——加えてオレの剣が全く当たらねえ。

どうするか、と優希は考えるもそんな思考すら許さないと言わんばかりに、今度はNPCが優希に襲いかかる。

攻守逆転というのか、巧みな剣さばきであるNPCに対して、優希は防戦一方になる。

その様子はもはや戦闘ではない。戦闘と言う行為は、お互い仕留めることが出来る者同士の争いを指す言葉だ。だがこれは一方的な蹂躪、一方的に圧倒しているだけ。このままでは優希の敗北は必至だろ

うし、もはや力量の差は埋まらず打倒しうる術すら彼にはないだろう。

辛うじて、ギリギリ急所を守るのが精一杯の優希に勝ち目はない。体力ゲージは緑色、黄色、赤色と三段階に分けられており、色が赤色になるにつれて0に近づいていく。

今の優希の体力ゲージは赤色。あと二度ほど斬られると終わる。それくらいの余力しか残っていなかった。そうしていると。

「——ッ！」

何度目になるのか、優希の剣が弾かれ無防備な姿を晒した。

NPCが狙うのは首元。合理的に、愉しむことをせず、瞬殺出来るように、鋭く疾く首元を狙う。

これで終わる。優希は首を斬られて、下手したらショック死するかもしれない。そんな笑えない結末を迎えて終わる——。

「——」

筈だった——。

NPCは何を思ったのか、大きく後退して距離を開ける。

あまりにも非合理的で、今まで機械的な動きをしていた物とは思えない。というよりも、ここで引くなどNPC、いやAIの判断とは思えない。

しかし現実にはNPCが大きく後退している。

そしてNPCが見たのは優希の眼だ。その双眸にあつたのは——ドス黒い憤怒。誰に対してなのか、NPCに対してなのか、不甲斐ない自分自身に対してなのか、それとも——世界に対してなのか。

その矛先は定かではない。

理解不能。

NPCは何故このような行動を取ったのか、アルゴリズムに則った行動を取らなかつたのか、次々とエラーが弾き出される。

「……………」

対する優希は無言で両手剣を構える。

一番しつくりくる構え。剣先を天に向かつて、柄を顔の横に。その構えはまるで示現流という古流剣術の構えに似ており、一撃に重きを置いて構えだった。

もはや二撃目など考えていない。一撃目で決着をつける『先手必勝』の型。もちろん、茅場優希という人間は剣術など習っていない。今まで剣を振るつていて、この型が一番しつくりきたので、構えているだけに過ぎない。

だがそれは異様だった。

最初の初撃で、我武者羅に振るつても通じないと理解したはず。なにが変わらず一撃の型。まるで自分の命など勘定に入れていないかのようにあり、それは明らかに異様であり、不気味であった。

そしてその眼には怒り。純粹な怒りが滾っている。だが頭に血が登っているわけでもない。極めて冷静とも言える。

一步、NPCは無意識に一步後ずさる。それと同時に、優希は疾走を開始する。

最初よりも鋭く、それは疾い。まるで痛みなどないかのような走り。

遅れてNPCが迎撃行動に移る。

優希の状態で、一撃を決めるのは難しいと判断したのか、合理的に脇腹を狙う。

その脇腹は最初に傷つけた場所。ここをもう一度痛みつけければ、流石に怯む。怯んだ隙にもう一度身体はどこかを斬りつけて、体力ゲージを0にする。そういうつもりなのだろう。

そうと知らずに、優希は間合いに入る。

瞬間、NPCは僅かに片手剣を引くと。

「」

寸分の狂いなく、剣は優希の脇腹に突き刺さった。
これで止まる、と思いきや。

「ツ！」

怯むことなく、無表情に、暗い感情を眼に宿したまま、優希は両手
剣を振り下ろす。

斬ッ！つと。

NPCの左肩口から斜めに振り下ろし、上半身を斜め一直線に貫
き、NPCはそのまま地面に叩きつけられて後方へ二転三転転がりな
がら吹っ飛んでいく。体力ゲージは0になっているのに対して、優希
の体力ゲージは1ドットほど残っていた。

自分の勝利を確認すると、深く息を吐くと優希は両手剣を肩で背負
い空に向かって一言。

「勝ったぞ」

その眼はいつもどおり蒼い双眸。

先程宿していた黒い憤怒はどこにもなかった——。

.....
.....
.....

あれから実験も終了。

優希の姿はどこにも居らず、実験データを纏め終わった茅場は研究レポートを纏めていた。膨大なデータであるが、茅場にとってそれは苦ではなかった。これも自分の思い描く世界の構築のためには必要な代物。そう考えると、どこか楽しくもなってくる。

「お疲れ様です」

そんな茅場に声をかけるのは一人の男性。茅場の後輩にあたる人物である。

後輩は茅場にコーヒーを振る舞い、邪魔にならない場所に置いた。

「ありがとう」

「いいえ」

社交辞令で礼を言うも、茅場はコーヒーの入ったコップに手を伸ばさない。必要ないし興味が無いのだ。今はそれよりも、作業に集中したい。

そんな茅場の心境を読めずに、後輩は口を開いていく。

『ソードアート・オンライン』ももう少して発売ですね」

「そうだな」

「ベータテストの人数って何人でしたっけ？」

「千人だ」

「多いですねー。これから忙しくなりそうだ」

「ここまでこれたのも、君達のおかげだ。本当に感謝しているよ」

「いいいえ、先輩の力があってこそですよ！」

後輩は熱く語るが、茅場の言葉には中身がない。こう言えば良いのだろう、という簡略的なものに過ぎない。もしここに彼の従兄弟もいるものなら「ホントに性格が悪いな、晶彦くんよお？」と自分のことを棚に上げて思っていたことだろう。

後輩の無駄話は続く。

と、ここで――。

「それにしても先輩の従兄弟さん、優希君でしたっけ？ 凄い子でしたね？」

「――彼がどうかしたのかね？」

ここで初めて、作業に没頭していた茅場が興味を引いた。

彼はこれまでやってきた作業を放り出して、後輩の顔へと視線を向けた。いきなり視線を合わされた後輩は少し驚きながら続ける。

「い、いや。最初のVRではあんなにも顔色を悪くしていたのにやめずに、今では平然とダイブしていたので……。凄い精神力というか、意思が強いなあ、と……」

「……君にはそう見えたか」

「へ？」

「いいや、こちらの話だよ」

そういうと、茅場は再び作業に没頭し始める。その様子に後輩は首を傾げるも、茅場は無視を決め込んでいた。

――確かに意思が強いのだろう。

――精神力も凄まじいのだろう。

――だが彼の注目するべき点はそこじゃない。

茅場が思い出すのは今までの茅場優希の態度と口調、先程のアイコンクラウドにインしていた茅場優希の振る舞いだ。

痛みをものともせず、敢えて自分を辛い環境に置いている。

——サバイバーズ・ギルトという言葉がある。

それは戦争や事故、災害などに遭いながらも生還した人間が抱いてしまう感情を指す言葉だ。何とか助かることができた人々が感じる罪悪感全般。「自分だけ助かってしまって申し訳ない」「あの時、自分が行動していれば他の誰かを助けられたのでは?」「自分のような者よりも助かるべき人がいたはずだ」といった過剰な自責の念が罪悪感となり感情を蝕んでいく。精神医学ではPTSDの症状の一種と見なされている。

茅場優希の状態が今のそれだ。

両親が死に、自分だけが生き残ってしまった。生きていけば幾千幾万の人名を救うことが出来た筈の両親と引き換えに、何も救えない自分が生き残ってしまった。

なまじ両親が名医だっただけで、その罪悪感は凄まじいものだ。

——だからこそ、彼は自分を追い込む。

——アルバイトを掛け持ちしているのがその証拠だ。

——兄さん達の財産にも手を付けず、私からの援助も手を付けない。

——自分が傷つき、苦しむように無意識に行動を取る。

——そして振り向きもせず、前しか見ようとしなない。

そこまで分析すると、先程の実験中のデュエルを思い出す。

ペインアブソーバはレベル0にするという凶行を知る人間は優希以外にない。そんなことが研究員が知れば、止めることだろう。だが茅場は知りたかったのだ、優希がどんな反応するのか。結果は知つての通り。

彼は言った「構わない」と。

淡々と、さも当然であるかのように彼は戸惑わずに了承した。

——彼の原動力は純粋な『怒り』だ。

——何も出来なかった自分への、理不尽で不平等な世界への純粋な『怒り』。

——彼は人一倍それが強い。

その怒りを真正面からぶつけられた結果、NPCはある感情に目覚めていた。

それは恐怖。本来感情を持たないNPCに恐怖を与えてしまったのだ。故に、NPCはとどめを刺せる状況で大きく後退する。あまつさえ後ろに一步下がるといふ行動をしてしまったのだ。

この結果に茅場は。

——素晴らしい。

と、口元を邪悪に歪めて。

——既存のシステムすら超える意思。

——私の世界に対する叛逆。

——今回の『恐怖』はカーディナルも学習したことだろう。

長らく忘れていた己が目指す目的の一つを思い出す。

システムをも超越する強い意志の力。ただそれが見たいというだけの探究心を彼は思い出す。

——罪悪感に押しつぶされながらも、己を焼くほどの強い怒りを宿す。

——そんな生き方など、本来であれば息をすることすら苦痛の筈。

——だが彼は生きている。

——彼をこの世に留めているのは何か。

——怒りか、それとも罪悪感か。

——もしくはもつと違う『存在』か。

——彼を思い留ませる程の『大切な存在』がこの世にいるからか。
——何にしても。

「これからが、楽しみだよ——」

.....
.....
.....

PM17:45 東京都内某所

アルバイトが終わり、優希は帰路についていた。

まだ日が登っているからか、通行人もパラパラとすれ違う。すれ違
う度に、優希の片手に視線を向けられている。

——まあ、当たり前だろうなあ……。

優希は視線を片手に落とす。

握られているのはナーヴギア。これは実験中に彼が使っていた物
であり、茅場が帰り際「餞別だ」とそのまま渡されたものに他ならな
い。

梱包もせず、無梱包で手渡し。最新のゲーム機、更に言えば今話
題沸騰中の代物である。注目しないわけがなかった。

通行人の眼が痛い。

特に子供からの羨望にも似た眼が非常に痛い。

——ホント天才って生き物は常識がねえかなあ？

——天才が常識持ってねえから、世界は上手く回ってんだろうが

よお。

ここまで歩いてくるのに、嫌ってほど注目を浴び、なおかつ元来注目されることに慣れていないせいもあってか、優希の表情は疲れ切っていた。

そのまま歩いていると。

「痛……ッー」

急に身体から激痛が走り、顔が苦痛に歪む。

どうやら先程の実験の痛みがまだ治っていないようだ。外傷はないものの、リアルな痛みを仮想空間で体験したからか、今だに痛みが引かない状態にある。外傷がない以上、どうやって治療すればいいかわからない。

だが優希は無表情に言葉を漏らした。

こんな痛み、当然といえるかのように無感情に。

「まあ、いいか」

そんなこんなで、ようやく自分の住んでいるボロアパートに着いた。

錆びついた階段を登り、一番奥にある自分の部屋まで歩くと。

「あぁ？」

妙な匂いがしてきた。

異臭などではない。家庭的な匂い、もつと何かしらの良い匂い。それは自分の部屋から漂ってきた。

まさか、と思いながらドアノブを回す。

もちろん家を空けるので、鍵は閉めて家を出たことを優希は忘れていない。ということは、優希の部屋を開けて、誰かが料理しているし

か考えられない。

ドアを開けると。

「あ、おかえり」

エプロンを装備している女性——結城明日奈が台所に立っていた。

右手にはお玉、左手には小皿。味噌汁を作り、その味見をしていたようだ。家庭的な姿をこれでもかと思せつけながら明日奈は続ける。

「合鍵使っちゃったけど大丈夫だったかな？」

「問題ねえよ」

「それはよかった——って、ええ!？」

優希の片手に持っているナーヴギアを見て、明日奈は驚愕の声を上げる。

「それってナーヴギア!? 何で持ってるの、ゲーム興味なかった筈だよね?。」

「ああ、貰った」

「何でそんなもの貰えるの……」

「さあな。んなことより——」

そこまで言うと、優希はチラツと台所に視線を向ける。

そこにはレジ袋があり、入っていたのは食材。近くのスーパーのレジ袋だったことから、わざわざ買ってきたことがわかる。

わかっているが、一応優希は確認した。

「買ってきたのか?。」

「うん。優希君バイトって言ってたし、疲れてるかなって思って」

だから料理して待っていた、と。
優希はそう結論付けると、舌打ちを小さく一度して。

「ンな下らねえことで、自分の小遣い使ってんじゃねえよ。レシート見せろ、その分払う」

「いいよ。わたしがしたかったことだし」

「そういうわけに行くかよ。いいから——」

「——そんなことより、優希君！」

自分の言葉を遮ってきた明日奈へと視線を向ける。

そこには満面の笑みの明日奈がいて、朗々とした口調で嬉しそうに口を開く。

「——おかえりなさい」

「——」

一瞬だけ、眼を丸くさせるも、優希は面倒くさそうな口調で応えた。

「へいへい、ただいま」

「へいは一回！」

「へーい」

第5話 着せ替え人形INデパート

2022年9月18日 AM10:10 東京都内

残暑――。

9月に突入したにも関わらず、気温は高いままを維持していた。遠くへと視線を向けると、ゆらゆらと地面から炎のような揺らめきが立ちのぼっている。それはつまり陽炎、強い日射で地面を照らさないといけない現象である。陽炎が立ち上っていることを考えても、まだまだ気温が高いことがわかる。

そんな中、茅場優希は大通りを歩いていた。

今日は日曜日である。大通りには人混みの山、人垣の山、集団の山。家族連れ、カップル、子供、老人、はたまた芸能人と様々な人種が乱れている。そしてこの猛暑日。本来であればアルバイトに向かつて汗水垂らして働くところであるが、生憎本日は休日。だからこうして優希は外に繰り出していた。

とは言っても、本来の茅場優希という少年は、活動的に外に出歩く人間ではない。アウトドア派というよりも、インドア派の彼がこうして外を歩いているのには理由がある。

それは数日前にまで遡る――。

.....
.....
.....

数日前 ハンバーガーショップ

「ありがとうございましたー！」

ハンバーガー屋でアルバイト中のことである。

バイト先の制服を身に纏い、頭にキャップを被っている優希は作られた笑顔で接客し、作られた満面の笑みで客を送り出す。それを短い時間で、繰り返し返してきた流れ作業。客が混む時間、つまりはラッシュを突破してそれは起きた。

——このバイトが終わったら次は酒屋だっけか？

——まあ、今日中には帰れんだろ。

最悪夜中の1時を回るかもしれないが、問題ねえだろう。と考えていると新しい客が来店する。

ラッシュが終わっても、客が衰えることはない。優希は再び満面の笑みという仮面を顔面に張り付けて接客をするが。

「……………」

「……………」

ピタッと止まる。満面の笑顔のまま、彼は器用に凍りついた。

来店者は知り合いだった。知り合いというよりも、長い付き合いの幼馴染——結城明日奈が笑みを浮かべてカウンターへと立っていた。

なんでここにいいのか、バイト先を教えていない、何を笑っているんだ。

様々な疑問が生まれていき、上手く処理が出来ないでいた。

対する明日奈は笑顔で口を開く。

「制服、似合ってるね？」

「……………いらっしやいませ……………」

笑顔のまま、覇気のない声で接客する。「何しに来た？」と言った言

葉を押さえ込み、「いらっしやいませ」と無理矢理でも歓迎する辺り無駄にプロ根性を持っているようである。

だがお客様はそのプロ根性、つまりは貼り付けられた笑みが気に入らないのか。明日奈は注文を言わずに、面白くなさそうな顔をしながら。

「今、わたし達以外誰もいないよ?」

「……オマエ何でこのバイト先知ってんの?」

周囲を確認し、人影がないと判断するや否や猫被り解除。口調が粗暴になり、眼つきも悪い。おまけに態度は最悪。

カウンターに身を預けながら嫌そうに見つめられても、明日奈は笑みを浮かべる。あまつさえ、堂々と自信満々に胸を張りながら答えてみせた。

「わたしは何でも知っているからね!」

「あつそ……」

うんざりするような口調で優希は返す。

——まあ、コイツなんてまだ可愛いもんだろ。

——晶彦くんの方が質悪い。

——アイツにも教えてねえのに、毎回新しいバイト先に二日後くらいには来やがる。

——この前なんて、ハンバーガー一つ買って普通に帰ってっただし。

無表情に「ハンバーガー一つ。お持ち帰りで」と言っただけを言うでもなく、帰っていった従兄弟を優希は思い出す。

完璧な奇襲だった。あまりにも完璧過ぎて、マニュアル通りに対応して、どうしてここにいるのか聞きそびれたくらいである。

そんな強烈な前任者がいて、印象がどこか薄くなってしまったこと

を知らない明日奈は、不満そうに僅かに頬を膨らませた。どうやら自分がぞんざいに扱われていると思ったようである。

「何かテキストじゃない？」

「適当にもなんだろう、こつちとらずつと猫被って疲れてんだよ。さつさと注文言えよ」

「……何か納得いかないけどいいや。えーつと……、ポテトS下さい」

「へいへい、ポテト」

「へいは一回だつて！」

「へーい」

手慣れた手つきで、ポテトを袋に入れて明日奈に手渡し、料金も受け取ってレジに入れて優希は不思議そうに問いかけた。

「何しに来たのオマエ？ マジでポテトだけ食いに来たのか？」

「違うよ。優希君の制服姿見たくて……」

えへへ、とはにかみながら笑みを浮かべる明日奈に対して、優希は自分の制服姿をチェックするために視線を落とす。誰がどうみても、普通のハンバーガーショップの制服である。珍しくもないし、わざわざ見に来る必要もないだろう、と優希は思いながら。

「別に普通だろう」

「ううん、似合ってるよ」

「そうかい、嬉しくねえよ」

心の底からげんなりとした声をあげるものの、明日奈は怯まないし動じなかった。

「今日はいつ終わるの？」

「あと一時間。で、その次はまた違うバイト入ってる」

「そっか……」

少し残念そうな声を漏らす明日奈に、「家に来るつもりだったのか？」と優希は問いかけようと口を開くも。

「あのみさ」

「ん、どうした？」

「18日空いてる？」

.....

現在 東京都内

ということ、優希は待ち合わせ場所へと向かっていた。

別に家で待ち合わせて、一緒に行ってもいいだろう、と優希は思うのだが明日奈がそれを断固拒否。どうせなら待ち合わせ場所を決めて、そこで合流したいとのこと。

そのことを前日の夜に電話をかけてきた後輩の朝田に言ったら。

『待つて、待ちなさい』

『明日奈さんって、いつも話に出てくる明日奈さん？』

『ふーん、その人と次の日にデート？ ふーん』

『え、デートじゃない？ 遊びに行く？』

『…………ふーん』

と、冷ややかな声を上げたと思いきや何を言っても『先輩、私も遊びなさいよ』の一点張り。

——何を意地になってんだ朝田のやつ。

——アレか？ 自分と遊んでくれなくて嫉妬みたいなもんか？

——子供かよ……。

どこかの外れな。

朝田本人がその場にいるものなら激怒しそうな結論を出しながら彼は歩いて行く。

そもそも、優希にはデートという認識はない。

何よりも格好がデートらしくない。赤色のポロシャツに、下はダメージジーンズ。足にはサンダルとラフ過ぎるくらいラフな格好をしていた。彼にデートという認識があれば、幾分マシな格好になるだろうが、今回は遊びに行く程度でしかなかった。

——チツ、しつかし暑いなあオイ。

——太陽頑張りすぎじゃねえか？

——こんな時に外で歩くヤツの気が知れねえわ。

自分を全力で棚に上げていくスタイルを遺憾なく発揮しつつ、優希は目的の場所に辿り着いた。

そこは大きな公園。

噴水があり、花壇があり色鮮やかにハイビスカスやカーネーションやキキョウといった夏に咲く花が植えられている。

ただ公園と言う割に遊具がほとんどない。子供のための安全な公園作り、とかいう一環で遊具は全て撤去されているようだ。そのせいもあってか、ほとんどが家族連れ。子供単体で遊んでいる様子はない。

その辺りの事情に優希は関心が湧かなかつた。

理由はない。ただ単純に興味がないだけである。それよりも待ち人を探そうと、辺りに意識を向ける。

それは直ぐに見つけることが出来た。

待ち人——結城明日奈は白いワンピースを着て、その上からデニムジャケットを羽織るように着こなしている。

片手には小さめの手提げバック。しきりにキョロキョロと辺りを見渡す。が、ここで——。

「あ……」

優希を見つけた明日奈は小さく言葉を漏らすと、はにかみながら優希に向かって小さく手を振る。

なんと消極的な自己アピールなのか、と優希は思いながらも近づいて一言。

「待ったか？」

「ううん、今来たところ」

やり取りが完璧にカップルのそれだったが、本人達は気付いてないだろう。

優希はとりあえず、明日奈の格好を頭のとっぺんから爪先まで見て。

「似合ってるじゃん」

「うん、ありがとう……」

「ちよつと化粧もしてんのか、良いじゃん」

「う、うん……」

「ああ？ 香水してんのか？ 良いじゃん」

「——ッ!!」

「違うか、シャンプー変えたのか？ 良いじゃん」

明日奈の顔が真っ赤に染まる。

どうやら何から何まで気付いてくれて嬉しい、じっくり見られてたのが恥ずかしい。これらの感情が複雑に混ざり合い、どういったリアクションをすればいいのかわからないようだ。

だからなのか、明日奈は優希の片手を握ると、そのまま力付くで引っ張っていく。優希から見えた明日奈は後ろ姿のみ。表情は読めないものの、耳が真っ赤になっていることだけはわかる。

「お、おい。何で引っ張んだオマエ！」

「もう！ 君は本当にもう！」

「オマエ、人の話を聞け！」

優希も無理矢理引き剥がせないの、されるがままになるしかない。

そのまま彼は首をかしげる。それは不思議そうに、何故かわからないように。

——おかしい。

——浩一郎兄の手順通りやったのに。

——何でコイツ暴走してんだあ？

.....
.....
.....

アレから数十分後、落ち着いた明日奈に優希が連れて来られたのは、都内にある5階建ての大型デパートだった。

休日のデパートということもあってか、大層な賑わいをみせていた。客層はバラバラ。まだ小さい子供もいれば、学生らしき若者が歩いているし、家族連れは勿論だが、還暦を迎えてそうな男性や女性も存在していた。

それだけでこのデパートが人気であることがわかるが、ピカピカに磨き上げられた床や壁。通路に面した豊富な喫茶店や洋服店。加えて天井は吹き抜けており、天井はガラス製で作られているからか暗いイメージを持たせない作りとなっている。

清潔で、ちよつとした工夫で見る側が楽しそうと感じさせる作り。このデパートが人気なのも頷ける。

ここに来たのは簡単な話だった。

秋物の服を見たいから、一緒に付き合っただけ。そんな簡単な理由。

「女同士の方が良くねえ？」

という優希の意見に。

「優希君と決めたい」

と明日奈がその意見を封殺。

なるほどと納得するや否や、優希の行動は早かった。洋服店を片端から回り、明日奈を着せ替え人形にするように次から次へと促す。

そうして優希から開放されたのが15時45分。長いこと拘束されていたようだ。

そんなこんなで、二人はデパートの中にあるファミレスにいた。

窓際、デパートの通路を見れる位置に二人は座っている。

優希は周囲を見渡しながら満足気に。

「もう9月だつつののに、冷房が効いてるとはスゲえな。改めて考える」と

「もう少しで暖房に切り替わると思うけどね……」

対する明日奈はどこか疲れ切っている様子で、テーブルに突っ伏していた。

それもその筈。今の今まで、着せ替え人形になっていたのだ。疲れない筈がない。

「ここまで親身になって選んでくれるなんて……」

「オマエから言ってきたことだろうがよ。何でそっちがグロッキーになつてる訳？」

「だつてえ……」

若干涙目になりながらも、突っ伏したまま顔を上げて優希を睨みつける。

彼はそれを涼しげに受け止めて。

「ンなことより、いいのか？ 何も買ってねえみたいだけどよ」

「うん、いいの。どんなのがあるのか見たかっただけだし」

それに、と言葉を区切り上体を起こし笑みを浮かべて明日奈は続ける。

「優希君の好みの服がわかったしね」

「ンなもん、わかって何になるんだか」

そこまで言うと、丁度ウエイトレスが水を運んできたので、優希は注文する。

「コーヒー一つ下さい」

「苦手なくせに、カツコつけて」

「ああ?」

優希は少し睨みつけるも、明日奈はクスクスと笑いながら楽しそうに続ける。

「知ってるんだから、コーヒー飲めないの」

「飲める」

「いつから?」

「二年前くらい前から」

視線を泳がせて言う優希を無視して、明日奈はメニュー表を見て店員にすみません、と声をかけて。

「コーヒーキャンセルで」

「おい、勝手に——」

「わたし、二つパフェ食べたいんだけど多いから、優希君も頼んで半分ずつ食べよ?」

ピタッと抗議の声が止まる。

優希は少し考えて、不機嫌そうな声で明日奈に問いかけた。

「……ちなみに何がいいんだ?」

「優希君は何が食べたいの?」

「……ストロベリーパフェ」

「それじゃわたしはチョコレートパフェで」

ウエイトレスは二人のやり取りが面白かったのか、笑みを浮かべながらマニュアル通り注文を繰り返して厨房へと引っ込んでいった。どこか手綱を握られてる感が否めない。

優希は舌打ちを一回すると、面白くなさそうに口を尖らせながら。

「負けてねえからな」

「勝ち負けの話なのこれ？」

クスクス笑いながら明日奈は続ける。

「そういえばさ、優希君って『ソードアート・オンライン』始めるの？」

「何でだ？」

「だってほら、ナーヴギア貰ってきてたし始めるのかなあって……」

そういえば、と優希は思い出す。

アルバイトの最終日、茅場から受け取っていたことを彼は思い出した。ゲームに一切興味がなかったので、今の今まで忘れていた。

——そう言えば、晶彦くんが「絶対にやれ」って念を押してきたな。

——ぶっっちゃけ、面倒くせえ。

やりたい人間がいれば、喉から手が出るほど欲しい代物だし、プレイするためにどんな手段でも使おうとしている人間が聞いたら卒倒することを考えていた。

別に興味がない。興味がないのだが「もう一度、ダイブしてもいいか」と、心の中で思いながら口を開く。

「始めるかは考え中だ。気が向けばやるかもな」

「わたしもやるから、よかったらやらない？」

「ああ？ オマエ、ナーヴギア持ってたんの？」

うん、と明日奈は頷くと嬉しそうに続ける。

「お兄ちゃんが持ってたんだよね。それで少し貸してくれるっていうから……」

「へえ、浩一郎兄がねえ」

「ねーねー、ちよつとやってみない?」

上目遣いになりながら明日奈はせがむように頼み込んで来るのを見て、優希は「どうするか」と考えながら窓から見えるデパートの通路をぼんやり見ると。

「ん?」

視界にあるものが映り込んだ。

それは小さく、まだ幼く、まだ世界の不条理を理解していない。年端もいかない幼女の姿。歳はだいたい5歳ほどだろう。綺麗な金髪に綺麗な翠眼、フランス人形を連想させる整った容姿をしていた。ただ奇妙なことと言えば。

「……あ」

明日奈も優希の視線を追い、気付いた。

幼女は泣いていた。優希たちのいるファミレスまで聞こえないが、幼女は大きな声で泣いていた。

だが誰も足を止めて声をかけようとしなない。

休日だ。人が多くいるにも関わらず、誰も声をかけようとしなない。むしろ腫れ物を触るように避けている節がある。

誰にも気付いて貰えずに、ただ世界に一人であるかのように、幼女は一人泣いていた。

「チツ、面倒くせえなあ」

舌打ちをしながら、本当に億劫そうに乱暴な調子で優希は立ち上がる。

そして自分の財布からお金を出しテーブルの上に叩きつけるように置くと。

「オマエ一人で食べてろ」

「行くんだね？」

明日奈は嬉しそうに笑うと、嫌ってほど面倒くさそうに優希は答える。

「あのまま泣かれても、目障りだからな」

第6話 親を訪ねて三千里未満

PM16:10 東京都内 大型デパート

——さて、どうするか。

優希は目の前で泣いている少女に声をかけたらいいか、思考を一巡させていた。

別に普通に声をかけたらいいのだが、優希は自分という人間をよく知っている。ブロンドの髪の色に、眼つきも悪く、口調も粗暴。見ようによっては、彼を『不良』と認識する人間もいるのかもしれない。勿論、態度は悪くても素行は良い方なので、彼を『不良』と例える人間は少数なのだが。

——だからといって、このガキがオレを一般人と認識するなんて絶対とは言えねえ。

——だったらいつもどおり、猫被れって話なんだが……。

今回ばかりは、優希の必殺技『猫被り』は使えなかった。

どういうわけか、優希は子供と相性が悪い。何重にも猫被っても、何故か子供には看破されてしまうのだ。どうしたのかな？なんて言葉をついて近づいて行けば、十中八九泣かれることを彼は今までの経験から学んでいる。

これも子供特有の勘の鋭さによって優希の腹黒さを見抜いているのか、それとも何者にも染まっていない純粹な眼のおかげで優希の性格の悪さを看破しているのか。どちらかは定かではないが、優希にとって子供とはそれほどまでに相性が悪いものであった。

だから彼は考える。

どう声をかけるべきか、と。彼は考えていた。しかし考えたところ

で、答えが纏まらない。幼女は優希に気付いたのか、嗚咽を漏らしながら声を我慢して優希の方を見る。瞳に溜まった涙、その奥にある感情は明らかかな怯えである。

チツ、と心の中で舌打ちをすると、優希は怯えさせないように見下ろす立ち位置から、膝を折り幼女に視線を合わせて一言。

「オマエ、何で泣いてんの?」

「ビャー!!!」

努力虚しく、幼女はもっと泣いてしまう。

ガン泣き、ガン泣きである。食われると思ったのか、幼女はこれでもかと言うくらい泣き叫んでしまった。

対する優希はおかしい、と。

視線を合わせたまま、首をひねって一言。

「……何でだ?」

「いきなり乱暴に声をかけるからでしょう」

背後からそんな声が聞こえた。

肩口から視線を送ると、眉を顰めて非難するような眼で優希を見下ろしている明日奈が立っていた。

彼女はそのまま優希と同じく視線を幼女の目線に合わせて優しく抱きとめて背中を優しくさすっていく。

「怖かったねー、もう大丈夫だからねー?」

「う、うん。私、食べられない?」

「食べねえよ」

「ヒイ……!」

力の限り否定したのだが、どうやら幼女にとって優希はもはや恐怖の対象でしかないようである。

優希が発言すると幼女が怯える。そんな理不尽を前にしても、明日奈の態度は変わらない。慈愛の眼で幼女を抱きとめる。涙で服が濡れようが、手を緩めることはなかった。

「食べられないよー。わたしが守ってあげるからねー」

「お姉ちゃんが……?」

「うん。わたし、明日奈っていうんだけど、貴方のお名前は?」

「知らない人に言っちゃダメって、ダディが言ってたから……」

「そうなんだ。お利口さんだねえー」

そう言うとき明日奈は幼女の頭を撫でると、眼を細めて嬉しそうに「えへへ」と笑みを零した。

見事な手腕である。もう手懐けたのか、と優希が思うと同時に、ある疑問が生まれた。その疑問を彼は立ち上がりながら口にする。

「そう言えばオマエ、パフエどうしたんだ?」

「お金だけ払って来たよ。あとで余ったお金渡すから」

そこで新たな疑問。

優希は不思議そうに首をかしげながら口を開く。

「オレ二人分丁度払って来たろうが。余らねえだろ」

「わたしも払ったもん。何度も言うけど割り勘がいいの、優希君カツコつけるの禁止」

「勝手な真似しやがって……」

言い終わるや否や、優希は大きく舌打ちをする。

それを聞いた、幼女がまた肩を大きく震わせ、明日奈は優希を若干鋭くにらみながら。

「今は舌打ちも禁止」

「……へいへい」

「へいは一回！」

「……へーい」

.....
.....
.....

PM 16:20 東京都内 ファミレス店内

とりあえず、幼女を落ち着かせようということ、もう一度先程いたファミレス店へと優希達は戻ってきていた。

先のやり取りを見ていたのか、店員も再び戻ってきた彼らを疑問に思わず、すんなりと元のいた窓際の席へと通される。

そして同じ注文。

チョコレートパフェとストロベリーパフェを注文して現在に至るのだが――。

――どうしてこうなった？

優希は肩を落とす。

別にこれといって問題はない。キャンセルした商品を払い、同じものを注文してまたお金を貰うのが忍びないし、キャンセルした理由が泣いてる子供を放っておけなかったからといった理由だったので、今

回のチョコレートパフェとストロベリーパフェは特別無料ということにでもらっている。

店内も落ち着くもので、客があまりおらず周囲の眼を気にしないで食事できるというものだ。しかも冷房もしっかり行き届いている。正に過ごしやすい場であり、何一つ不満はない。

そう、何一つ不満はない。ファミレスの対応に何の不満もない。

彼が不満に思っているのは、視線の先にある光景。

テーブルを挟んで対面している連中。仲睦まじく、談笑している少女と明日奈が問題だった。

「おかしいわ、おかしいわ！ それでダディったらお店の準備しないで、マミイに怒られているの」

「仲が良いんだねー、レヴィちゃんのお母さんとお父さん」
「うんー！」

誤算だったのが、明日奈は思った以上に世話焼きであり、少女は思った以上に話し上手だったようだ。

気が合ってしまった二人は、思った以上に話が盛り上がってしまい現在に至る。少女が落ち着いたものなら直ぐに迷子センサーなりに預けて、この件は解決。というのが優希の思い描く理想像だったのだが、これは長引くだろうと思うと優希の肩が落ちる。本来、子供はすぐ泣くから苦手だし、何よりも面倒くさいので早く解決したかったのだが。

「アスナお姉ちゃんも来て欲しいわ！ ダディのお店、結構オシヤレなのよ？」

「それじゃ、今度お邪魔するね？」

「うんうん、お茶会の準備しなくっちゃ！」

そういうと、少女の視線が優希に向かう。

その眼には怯えはない。むしろどこか挑戦的な笑みを張り付かせ

て、生意気そうな口調で。

「ゆーきも来ていいわよ！ 特別に。ええ、あくまで特別にね！」

「そうかいそうかい。安心しろ、絶対に行かねえから」

「だ、誰も来るなって言っていないのだけど!?!」

むーっと不満そうに可愛らしく睨まれても、優希の態度は変わらない。
い。

面倒くさそうに、溜息を吐きながら続ける。

「つーかよお、オマエ態度違くない？ 思い出せよ最初の頃の初々しい自分を。もつと言ええ、数十分前の自分の行動を思い出してくれよレベツカちゃんよお……」

「ダメなのよ、私の名前呼んじゃダメなのよ！ まだ貴方に名乗っていないから、気安く名前呼んでほしくないのだけだ！」

「おい、明日奈。コイツ捨ててこようぜ？ 大丈夫だって、今のコイツならまた一人になってもやっていけるってマジで」

幼女の名前は『レベツカ』といい、明日奈が『レヴィ』と呼ぶのは彼女のあだ名らしい。

らしい、と曖昧な表現をしたのは明日奈には名乗っており、優希には名乗っていないという設定だからだ。だがそれは丸聞こえで、彼女の名がレベツカであることは間違いない。

だから、らしいと表現する。

名乗っていないのだから、自分の名前は呼ぶなど言われるのだから、知らないということにしておくしかない。と優希は考えていた。

そう考えていると、再びチョコレートパフェとストロベリーパフェをウェイターが運んでくる。

何の変哲もないチョコレートパフェとストロベリーパフェを見て、レベツカは「うわあ……！」と眼を輝かせる。甘いものが好きなのか、

それともパフエをあまり見たことがないのか。だが欲しいとは言つてこなかった。羨ましそうに見ているだけのレベツカを見て。

「ほら」

「はい、レヴィちゃん」

「へ……う？」

優希は自分のストロベリーパフエを、明日奈は自分のチョコレートパフエをレベツカに差し出した。

眼を丸くさせるレベツカに対して、明日奈は微笑みながら、優希は面倒くさそうにしながら口を開く。

「元々あげるつもりだったんだ。ねえ、優希君？」

「これ食わせて、落ち着かせてやろうと思ってなア」

食わせる前に、オマエ順応しちまったけどよ。と優希はそう続けて視線を窓の外へと向ける。

見ず知らずの自分にここまでしてくれた二人に嬉しく思ったのか、レベツカは満面の笑みで。

「やー！」

「へ？」

「あ？」

まさかの拒否。

予想外のことにより明日奈は眼を丸くして、思わず優希も視線をレベツカへと戻す。そんな二人が面白かったのか、レベツカはクスクス笑いながら続けた。

「私一人食べるのはやー！ 皆で食べましょう。皆で食べたほうが食事は美味しい、ってダディも言ってたもの！」

その言葉を聞いて、優希と明日奈は顔を見合わせる。
それからすぐに明日奈は笑みをこぼし。

「そうだね。それじゃ、皆で食べよっか」

優希は。

「ガキのくせに、当たり前のことを言いやがる……」

と、面倒くさそうに呟くのであった――。

.....
.....
.....

PM17:40 東京都内 大型デパート通路

三人はあれからパフェを食べ終わると、デパートの中を散策していた。そもそもレベツカが泣いていたのは、両親と離れたからだという事実を知ったのはつい先程のことである。

だったら、迷子センターにでも預けたらいい話なのだが、レベツカは「やー!」と強く拒否。一緒にいたい、と子供特有のワガママを発揮させて現在に至る。

明日奈は特に問題なかったようであり、優希もこうなることは予想

していたので、反対意見もなくこうして現在に至るといふことだ。

「でねでね、ダデイもママイもゲームばかりしているのよ？ 私、子供だと思っただけだ」

レベツカは不満そうにそう言っていた。

対して明日奈は、レベツカの左手を繋ぎながら困ったように笑いながら。

「ご両親、仲良くて良いと思うけどねー？」

「ダメよ、ダメなのよ。大人がそんなだと、子供は困ると思うの」

プンプン、と可愛らしく怒りながらレベツカは右側でレベツカの右手を繋いでいる優希に向かって話を振る。

「ゆーきもそう思うでしょ？」

「興味ねえよ」

「もうそんなこと言っただけ！」

不満そうにしながら、レベツカは意地の悪い笑みに表情を切り替えて続けた。

「レディーの話聞いてないと、モテないわよ！ 将来困るわよ！」

「レディーねえ……？」

「何よ！ 意地悪ね、また意地悪言うつもりね！ このこのっ！」

ゲシゲシ、と優希の脛をレベツカが蹴りつける。

もちろん威力はないに等しいが、鬱陶しいことに変わりないのだから。優希は繋がれてない方の手をレベツカに指差しながら心底鬱陶しそうな口調、若干投げやりになりながら。

「おい、明日奈。やっぱりこのクソガキどつかに捨ててこようぜ。」

「絶対に捨てられないもの！ ばーか！ ゆーきのばーか！」

「まあまあ、二人とも——」

困ったような顔を浮かべて、明日奈はピシリッと凍りついた。凍りついたというよりも、あることに気付いたと言った方が正しい表現なのかもしれない。

——わたしたちは三人で歩いている。

——それはまだいいの。

——問題はその立ち位置。

レベツカは明日奈の右手を左手で握り、優希の左手を右手で握っている。

つまり明日奈と優希の間をレベツカがいて、その二人の片方の手を両手でレベツカは握っていた。その様子は傍から見たら何と見えることか——。

——何か夫婦っぽくない!?

——今は日曜日だし、わたし達みたいな家族連れ多いし！

そこまで考えると明日奈は。

「えへへへー」

言うやいなや顔を真っ赤に染めて、まいったなーと言わんばかりに照れ臭そうな様子でつながっていない片方の手を頬に手を当ててニヤニヤし始める。

どこか変なモノを見たと言わんばかりにレベツカは若干引きながら。

「様子がおかしいわ……」

「気にすんな、発作みてえなもんだから。オマエはああいう人間にはなんなヨ?」

適当に優希が言うと、そのままレベッカに先程の話の続きを促す。

「それで、オマエの親がなんだって?」

「あ、そう! そうなのよ! 二人共ゲームに夢中なのよ!」

明日奈が妄想世界の住人になった以上、レベッカの相手は自分しかないのです。優希は彼女に付き合ってやることにした。

「何のゲームだよ?」

「わからないわ、だって色々やるんだもの。でも昨日は一つのゲームをやるために、どっちが先にやるかゲームで決着つけようとしていたわ」

「何かゲームのゲシユタルト崩壊してきそうだわ。ンで、何のゲームを取り合ってた訳?」

「えーと……」

レベッカは思い出そうとすると、どのゲームを取り合っていたのか忘れたようである。

彼女はそれでも何とか思い出そうと、視線をあっちこっち向けると。

「——あつ! アレ、アレなのだわ!」

「ああ?」

レベッカの視線を辿ると、そこには見知ったゲーム機が。

頭に装着し、現実のような感覚を仮想空間で楽しめる最近話題のゲーム機『ナーヴギア』。そしてこれまた話題沸騰中のゲームソフト

『ソードアート・オンライン』のデモムービーが映し出されている液晶テレビ。

レベッカが言うアレとはつまりは『ソードアート・オンライン』のことなのだろうか。

それを確認するためにも、優希はレベッカに問う。

「『ソードアート・オンライン』のこと言ってるのか？」

「そう。『ソードメイト・デフラグ』のことなのよ」

「ソードしか合ってるねえぞ」

優希のツツコミを無視して、不満そうな口調でレベッカは口を開く。

「ダディとママイはもつと私に構うべきなのよ。これじゃ私……そがいかん？ を感じてしまうもの」

「疎外感のこと？ レヴィちゃん、凄い言葉知ってるね？」

妄想世界から帰ってきた明日奈は、思わず感心する声を上げる。

五歳近くのレベッカが知っている言葉とは思わなかったのだろう。しかし褒められたレベッカの表情は晴れない。むしろもつと沈むかのように、今まで見せていた活発な様子ではなく、どこか影を背負うかのような暗い表情のまま悲しそうにポツリと呟いた。

「きつと、ダディもママイも私よりもゲームの方が良いのかわ。だから私を置いていったんだもの……」

「レヴィちゃん……」

明日奈がどんな声をかけたらいいのか迷い始める。

彼女も両親に思うところがあるのか、レベッカに上手く伝えようとしようにも言葉が出てこない。

今にも泣きそうな空気をレベッカが漂わせていると。

「ハッ、バカじゃねえのオマエ?」

と、嘲笑うように声を上げる優希はそのままの声色で続けた。

「ゲームの方が良いわけねえだろ」

「だって——」

「——だってじゃねえよ。いいかバカガキ? 親つてのはなあ、例え自分の命が危険に晒されても子供を助ける。そういう大バカ野郎を指す言葉なんだよ」

思わず明日奈は優希を見ると、どこか遠い目をした。それが悲しいのか苦痛なのか、それとも懐かしいのか。複雑な感情が混ざりあったような表情。とても彼が何を思っているのか、読み取れない。

優希はそのまま続ける。

「確かにオマエの親はゲームとかしてるけど、そりやただの息抜きだろ。優先順位はオマエがトップだよ」

「本当……かしら……?」

「決まってるんだろ。それを証拠に、ほら見てみろ」

レベツカは優希の視線を追うと、そこにはガタイの良い黒人の男性と、白人の金髪の女性が立っていた。

二人は三人に、というよりもレベツカに大きく手を振っている。その二人を見つけたレベツカは意気消沈していた表情から、意気揚々と顔を輝かせていた。

「アレ、オマエの親なんだろ?」

「そうだね、ダディとママイよ!」

「だったら早く行け。あまり親を困らせてんじゃねえよ」

「うん、ありがとう! アスナお姉ちゃん、ゆーき!」

そう言うのと繋がれていた両手を離し、トンと軽い小さな足音が聞こえると。

「ダデー！ マミー！」

軽い足音に力が籠もる。

ほんの短い時間、行動を共にしていた少女は、彼らの元から離れて本来居るべき場所へと戻っていく。

レベツカは振り返らない。

それを見送ると、優希は踵を返しレベツカから背を向けて。

「おい、行くぞ」

「う、うん。——あれ？ レヴィちゃんのお父さんが……」

「ああ？」

レベツカの走っていた方向へ向けていた明日奈が妙なことを言っていたので、気になった優希は再びそちらへと身体と視線を向ける。

「ありがとう！ 本当にありがとう！」

と、ガタイの良すぎるアフリカ系アメリカ人の男性——つまりレベツカの父親が優希たちの方へと走ってきた。

凄まじい勢いに、思わず優希は「うおっ」と声を上げると半歩後ろに下がる。

「アンタ達が娘を見ててくれてたんだろ！」

明日奈の手を掴んで、両手で握手すると。

「助かった！ 本当に助かった！」

優希には両手を広げると、強引に抱きしめる。

思ったよりも力強く、優希がどれだけ力を込めようと引き剥がせなかった。というよりも苦しい。何回か限界だと、青い顔のままレベツカの父親の腕をタツプしているも、彼はまったく気付いていない。

「あ、あの！ わたし達そんな、というかこのままだと優希君が……！」

「うおつ！ すまねえ、大丈夫か眼つきの悪い兄ちゃん！」
「ま、まあ大丈夫ツス……」

苦しそうに咳き込み、弱々しく大丈夫だと言う優希を見て、レベツカの父親は何度も頭を下げる。

「俺はアンドリユー。アンドリユー・ギルバート・ミルズってもんだ。この度は本当に迷惑をかけた」

「か、顔を上げて下さい！ わたし達も特別なことしてないし、当たり前のこととしてただけですし……」

ねえ？と。同意を求めてきた明日奈に、優希はぶつきらぼうに「ああ」と応える。

こういう受け答えは明日奈の方が向いていると判断したのか、優希は口を挟む気が起きなかった。

「そうはいかねえよ。是非、お礼をさせてほしい」

「お礼、ですか……？」

「ああ、俺は御徒町でダイシー・カフェって喫茶店やってるんだ。是非そこで飯でも食べていつてくれないか？」

それを聞いた明日奈はどうしようか？と言った目線で優希に意見を求めるも、彼はもつと別のことに注目していた。

それはアンドリユーの服装である。
どこにでも居る服装だが、注目する点はそこじゃない。

——この人、汗だくだ。

——そうまでして、必死になってあのガキを探してたってことか……。

そう分析するや否や、アンドリユーから後方へと三人を見守っているレベツカの母親らしき人物へと視線を向ける。

彼女も汗だくで、長い金髪の髪の毛もボサボサになっていた。恥も外聞もなく、娘を必死になって探していたのだろう。二人の様子を見ればすぐに分かる程だ。

——この人達、良いな。

——良い、親だ……。

——それに、何か似てる……。

そう感慨深く、結論付けると優希は口を開く。

「近いうちお邪魔するんで、そのときでも良いツスカ？」

「ああ、うちはいつだって歓迎だ！ いつでも遊びに来てくれ」

そう言うと、財布を取り出して二人にそれぞれ一枚ずつ名刺を手渡した。

見るとそこには『Dicey Cafe』と記載がある文字。住所も記載があり、アンドリユーの名前と携帯の電話番号も記載されていた。

「名前聞いてもいいか？」

「はい。わたしは明日奈、結城明日奈っています。こっちは——」

「茅場優希ツス」

「アスナとユーキだな。何度も言うが、今日は本当にありがとう。絶対に遊びに来てくれよ?」

ニカツ、と気持ちのいい笑みを浮かべるとアンドリユーは家族の元へと走っていく。

アンドリユーの妻は何度も優希と明日奈に頭を下げて、レベツカは大きく手を降って、二人に手を引かれて人混みの向こうへと消えていった。

「良い人だね?」

「ああ」

レベツカに小さく手を降っていた明日奈が、穏やかな表情で口を開いていた。

「子供のために、凄い必死だったもんね?」

「そうだな。ありや、良い親だ」

「優希君はアンドリユーさんのどこ見てそう思ったの?」

その問いかけにどこか、優希は遠い目をしながら、簡潔に応えた。

「——似てた、からな」

その声に、いつもの粗暴な様子はない。どこか懐かしむように、しかし悲しさを僅かに含みながら、優希はそう呟いていた。

誰に?

何て明日奈は問いかけない。彼女には分かっていたのだ。優希が言う似ているとは、誰と誰が似ているのかということだ。

——似てる。

——そうだね、確かに似てたね。

——君のお父さんに……。

容姿の話ではない。アンドリユーが纏っている雰囲気と、優希の父親の雰囲気は確かに似ていたことを明日奈は思い出していた。

同時に明日奈は思い出す、今だにアンドリユー達が歩いていった方向を遠い目をしながら見る、優希の横顔を見ながら明日奈は思い出していた。

——君が笑わなくなってから、随分と経つよね。

——猫被つてるときや、悪巧みしている笑みじゃなくて。

——本当に楽しそうにしているときの笑み。

考えるまでもなかった。

優希が笑わなくなったのは、彼の両親が亡くなってから。それから茅場優希という少年は笑わなくなった。楽と言う感情がなくなったかのように、それを封印するように、戒めるように彼は笑わなくなった。

彼が何を思い、何を感じているのか。

大抵の思考が読める明日奈だが、どうして優希が笑わなくなったのかだけはわからなかった。

——でも、もう一度。

——出来るのなら。

もう一度、もう一度だけでいいから彼が楽しそうに笑う姿が見たい。

いつの間にか明日奈はそう思うようになった。こうして連れ回すのも、それが目的の一つでもある。楽しい、と。優希の笑う姿が見たい、優希を楽にさせてあげたい、優希の苦しそうな顔を見たくない。

だからこそ、彼女はいつだって尋ねるのだ。
いつもいつも、こうして遊んだときに尋ねる。

「ねえ、優希君」

「あ？」

「——楽しかった？」

そしてその返しもいつも通り。

優希は戸惑うように、自分の感情に蓋をするように、楽しいことを
思うことが罪と断ずるように。「ああ、そうだな」と声を殺して。

「まあまあ、だったな——」

今回も、明日奈は優希の笑顔を、見ることが出来なかった——。

第7話 憩いの場、ダイシーカフェ

2022年11月5日 PM17:30 ダイシーカフェ

御徒町にある路地に面した場所に喫茶店ダイシーカフェがあった。木材で作られた内装で、店内の角にはジュークボックスが置かれており、いい意味で手作り感のある内装で纏められていた。

店の中には若者が多く、一つのテーブルにそれぞれ各々好きにコミュニティが形成されており、陽気な雰囲気を作り出している。その喧騒自体がひとつのBGMとなっていた。

とはいっても、喫茶店とは名ばかりで様々な種類の酒瓶が並んでおり、客のニーズに合わせてある程度融通が聞く注文なども出来ることかわかる。

どうやら昼は喫茶店、夜はショットバーといった作りになっているようだ。

そんな空気の中、カウンター席に並んで座っている人影が二人。

二人が二人共、某都内の有名進学校の制服を着ており、一人は少女であり一人は少年。

少女の方は机に広げている教科書とノートを難しそうに見つめて、少年はそれをつまらなそうに見守っていた。

どうやら少女の様子から察するに、学校から出された宿題に大苦戦中のようなのである。しかも数字と記号がノートに記載があることから、それは数学の宿題だということが分かる。

カウンター席に二人以外の姿はない。

むしろ二人の特等席はここだ、とダイシーカフェのマスターが直々にカウンター席に指定しているせいもあってか、誰一人その場によりつこうとしていなかった。職権乱用もいいところであるが、他の客もそれを受け入れているので、別に問題はない様子である。

うーんうーん、と少女が頭を悩ませる事数分、ここでようやくつま

らなそうにしている少年——茅場優希が口を開いた。

「この計算式、間違ってるぞ」

そう言うやいなや、少女の持っているシャープペンシルを強引に持つと、走り書きのように間違っている計算式を正しいものに訂正し、シャープペンシルを少女に返した。

頭を悩ませていた少女——結城明日奈は「ありがとう」というと同時に疑問が生まれたので、訝しげながら彼に問いかける。

「あれ、どうして優希君がこの問題解けるの？ わたし、君よりも一歳上なんだけど……」

「予習復習完璧だからに決まってるんだろ」

「わたしお姉さんなんだけど、へこむなあ……」

「安心しろよ。元からお姉さんってキャラじゃねえからオマエ」

会心の一撃。

へこんでいた明日奈に追い打ちをかけてクリティカル。明日奈は眼に涙をうるませて、優希を可愛らしく睨みつけるも全く効果がなかった。

そんな二人を見ていたダイシーカフェのマスター——アンドリユー・ギルバート・ミルズは意外そうに声を上げる。

「ユーキって頭良いんだな？」

「別に良くねえよ。ただ勉強が出来るっただけだ」

「それ同じ意味じゃないか？」

「頭が良いやつってのは、皆どこかトンデヤがる。アイツらに比べたらオレなんて勉強が出来るっただけで、まだ可愛い方だっつーの」

頭に思い浮かべるのは変態じみた思考回路を持っている鉄仮面の従兄弟だ。

そもそも勉強ができる人間と頭の良い人間はあくまで別のカテゴリーだ、と優希は思っている。勉強が出来る人間はあくまで効率を考えて知識を詰め込むだけだが、頭の良い人間はそもそもそう言う努力をする必要がない。一を知るために何度も遠回りをしてようやく一を知ることが出来る人間と、一を知るだけで十を知る事が出来る人間。そう言う枠で考えれば自分は前者だと優希は断じる。

そんなことより、と優希はどこか不満そうな口調で続けた。

「ドリユーくん、オレの注文したオムライスまだあー?」

「ちよつと待ってる! ったく、最初の遠慮はどこにいったんだ?」

アンドリユーは巧みにフライパンを扱い、何やら調理しているようだ。口調では不満そうであるが、その表情はどこか嬉しそうである。こうして世話を焼くのが好きなのだろう。

ちなみに優希の言うドリユーくんとは、アンドリユーのことである。

どうしてあだ名で呼ぶようになったのかは簡単なことであった。

優希と明日奈が彼の娘であるレベツカを保護し、アンドリユーがお礼をしたいから遊びに来て欲しいといった三日後、彼らはアンドリユーの店に訪れた。

その際、優希と明日奈は敬語を使っており「ミルズさん」と呼んでいたのだが、アンドリユーがそれに不満を抱き「敬語はいらぬ、好きに呼んで欲しい」とリクエストを出した結果、優希からは「ドリユーくん」と呼ばれ、明日奈からは「ドリユーさん」と呼ばれるようになった。

そういつた経緯を優希は思い出して、ニヤリと邪悪に口元を歪めながら口を開いた。

「遠慮すんなって言ったのはそっちだろ? それとも何だ、またミル

ズさんって呼べばいいんですかあ?」
「わかったわかった、そのままでいろ!」

どこか投げやりに応じると、アンドリユーは皿に器用に盛り付けて、優希の前にそれを置いた。

それは香ばしくも良い匂いが漂っており、匂いを嗅ぐだけで食欲が湧いてくる。皿の上にあるのはオムライス。だが一つ何かが足りず、優希は小首を傾げて問いかける。

「ケチャップ忘れてるんだけど」

「おっと、ちよっと待ってろ」

そう言うと、アンドリユーはケチャップを取り出して、オムライスの上にハート型にケチャップを垂らしていく。

そして出来上がると満面の笑みで。

「召し上がれ」

「……………」

嫌なものを見た。

そう言わんばかりに、優希は顔をこれでもかと顰めて、速攻ですプーンを持つと電光石火の勢いでケチャップを広げていく。

「あー! お前、俺の会心の出来を!!」

「いやホント、マジでそういうの良いから。求めてねえからオレ」

無感情に言うと、オムライスをひとすくいして、口の中に入れる。それから満足気に無表情で一言。

「ウメエ」

「だったら美味そうにしろよ、無表情とかやめろよ…………」

「超ウメエ」

「いやだから——あ、いいやもうそれで……」

変わらず無表情に感想を漏らす客に対して、折れたのはマスターの方だった。

だが本当に美味しかったのか、優希のスプーンは止まることを知らない。いつの間にかもう半分も消えており、勢いもとどまることをしらない。

が、そこで——。

「……」

「あん？」

停止することになる。

彼を止めたのは隣りに座っている明日奈だ。彼女は上目遣いで、どこか不安そうにしているものの口を開く気配がない。

何がしたいのかわからない。

そう言わんばかりに、優希は不満そうに口を開く。

「何だよ歳上？」

「あ、あのね？」

そういうと、明日奈はチラチラッと優希を見て。

「わ、わたしの作るオムライスとどっちが美味しいかなーって……」

「……………」

無言。

優希はどう答えるか考える。どうすれば正解か、どうすれば平和に終わるか考えて、明日奈をこれでもかと思下しながら。

「ハッ」

「あー！ 鼻で笑ったでしよ今！」

「だってよ、どこで対抗意識燃やしてんのかわからねえんだもん」

むむむ、と面白くなさそうに頬を膨らませている明日奈に、アンドリュウは大人の余裕を醸し出しながらフォローをする。

「アスナが作るほうが美味しいな。間違いない」

「え？ そ、そうですかね？」

「ああ、何せ——愛情が入ってるからな」

前言撤回。

どうやらこの場に大人は誰一人いないようだ。アンドリュウはニヤニヤとからかうように笑みを浮かべている。その様子は子供のようで、意地の悪いものであった。

対する明日奈は華麗にかわす余裕はない。顔を真っ赤に染めて、力いっぱい否定しようと身を乗り出していた。

「愛——！ そんなの入ってませんよ！」

「ハッハッハ、隠すな隠すな。んー、思えば俺も嫁さんの料理初めて食ったとき確信したなー。これは入ってるって」

「えっ、そうなんですか？」

「案外男ってのはわかるもんだぞ？」

そう言うと、アンドリュウは優希を凝視し、明日奈もジーンと恥ずかしそうに見つめる。

マイペースにモキユモキユとオムライスを食べていた優希はその視線を受けて一言。

「愛情で腹は膨れねえし、味なんてわかるわけねえじゃん」

「——うう！！」

「何でオレは今、明日奈に肩を激しく揺さぶられてんだ？」

「お前さんはもう少し、女心を学ぶべきだな……」

どうして明日奈が憤りを感じているのかわからない。

本気でそう思っている優希に、アンドリユーは頭を抱えて呆れるのだった――。

アレから明日奈の機嫌が直り、落ち着いた様子でアンドリユーが淹れた紅茶を飲んでいた。

カウンター席のテーブルに広げていた教科書やノートはなく、明日奈の飲んでいる紅茶と優希の食いかけのオムライスのみである。

「明日何時からインするの？」

「あ？」

実に脈略がない、と優希は思うも明日奈が何が言いたいのか理解出来た。

今日は11月5日。つまり明日は『ソードアート・オンライン』のサービスが正式に開始される日でもある。

面倒くさそうな口調で、優希は問いかけた。

「何時からだっけか？」

「確か13時からだよ」

敢えて興味ない口調で「そうか」というも、実のところ優希は予習復習は完璧であった。

最初どこに行けば良いのか、次にアイテムなど何を揃えれば良いの

か、序盤で経験値をどこで稼げば良いのか。全てインターネットを使い余すことなく調べ上げている。そんなこんななので無論、何時からサービス開始されるのかなんてわかってはいるが、ここまで入念に調べたのがバレたらカッコ悪い、という優希の安いプライド故の演技。それ故に、彼は興味がない振りをする。

——コイツがやるっていうまで、マジで興味なかったが。

——まあ、飽きるまで付き合っただけでやるさ。

どこか保護者的な立場で、優希は考えていた。彼は明日奈をサポートする気満々のようである。

それは『過保護』と称されるくらいの勢いであるが、本人が無自覚のため余計質が悪いといえる。そもそもな話、優希はゲームには詳しくない方で、ソードアート・オンラインの情報はあるものの、根本的なMMOというのがどういうものなのか理解していないのだが。

二人のやり取りを聞いていたアンドリユーは横から嬉しそうに問いかけてきた。

「なんだなんだ、お前らもソードアート・オンラインやるのか!」

「あれ、お前らもってことはドリユーさんもやるんですか?」

「おう! なんだ、言っただけじゃなかったか?」

「聞いてませんよー」

「偶然だな」「偶然ですね」と同好の士を見つけたように、嬉しそうにしている明日奈とアンドリユーを見て優希は我関せずを貫いていた。

——そういえば、初めてレベッカに会ったときに言っただけだな。

——明日奈は妄想世界に入り込んでたから聞いちゃいなかったが。

そう思いながら、残りのオムライスをこれまたマイペースに食べ始める。

「ドリユースさんもよかったら一緒にやります?」

「あー、悪い。最初はソロで動こうと思っててな」

「そうですか……」

「ああ、悪い。VRMMOは初めてだからな、正直言うとお興奮してるんだ。だからその……、あんまり見られたくないんだ」

どこか恥ずかしそうに情けないような声で言うアンドリユースに明日奈はどこか納得した。

「どうやら年甲斐もなくはしゃいでいる姿を見られたくないらしい。生粋のゲーマーであるのなら、はしゃぐのも無理はないというものだろう。何せ完全な仮想空間だ、興奮しないというのがおかしいというもの。」

「今度ですね」

「おう。良かったら入れてくれ、MMOで鍛えたノウハウを活かせると思うからな」

ニカッと気持ちのいい笑みを浮かべるも、アンドリユースは直ぐに不思議そうな顔になると二人に問いかけた。

「そう言えば二人はMMOって初めてなのか?」

「わたしは始めてです。優希君は——」

「オレ何かMMOって言葉の意味も知らねえし。ピコピコのことじゃねえの?」

アンドリユースはそれを聞いて、主に優希の言葉を聞いて苦笑を浮かべて続ける。

「ピコピコって……。いいか、MMOってのは簡単に言っちゃえばオンラインゲームの略称だ。他人、もしくは友達とパーティーを組んで攻略していくってのが一般的だな」

「なるほどー」

「へえー」

二者二様、明日奈は感心するように言葉を漏らし、優希は興味がない様子でありながらも視線は次の話を聞きたそうにアンドリユーを見つめている。

「最初は自分のアバターを作るところからなんだが、二人のネームはどんなのにするんだ？」

「わたしはアスナで行こうかと」

「オレはユウキだな」

それを聞いたアンドリユーは「こいつら、正気か？」という信じられないモノを見る目で二人を見つめる。

何か不味いことでも言ったのか、と明日奈と優希は同時に首を傾げていた。

「いいか、MMOやる際に気をつけなきゃならないのが――」

本名をネームに入れないことだ、とアンドリユーが注意をする前に勢い良く店のドアが開いた。

ここで聞いておけば、物語は変わったかもしれないが、あいにく二人は聞かずに、その注意は乱入者に遮られる。

それは5歳ほどの幼い幼女。

その瞳からは伺える勝気な性格。黙っていれば良いところのお嬢様と言われるくらいの整った容姿をしている。

キョロキョロと周囲を見るために頭を動かしているせいか、ツインテールに結った金髪の髪の毛が宙を舞う。

そこで視線はカウンター席に注がれて、パァーっと花が咲いたように笑みをこぼして。

「明日奈お姉ちゃん！」

そう言うと、ツイントールの幼女——レベツカは明日奈に走り寄ると腰のあたりに抱きついた。

そのまま顔を埋めながら続ける。

「ダデイから聞いたのよ！　今、遊びに来てるって！　会えて嬉しいわ私！」

「フフフツ、わたしもレヴィちゃんに会えて嬉しいよ？」

純粋な好意を甘んじて受けて微笑む明日奈に、レベツカもはにかみながら笑う。

そして今度は視線を優希に移すと、レベツカは見下したような視線に変わり。

「あら、いたのねゆーき。こんにちわ！」

「……オマエさあ、どつちかにしろよ。無礼な態度とるのか、挨拶はしっかりするのかよお？」

呆れたように言う優希を無視して、レベツカの興味は彼が食べていたオムライスに移る。

どこか羨ましそうに、ジーンと視線を外さずにレベツカは見つめていた。残り半分ほどのオムライス、まだ熱も冷めきっておらずまだまだ美味しいことが約束されたオムライス。

優希はレベツカを見つめながら、一口オムライスを頬張りモキュモキュと口を動かしてそれを飲み込む。

視線が合う。優希はつまらなそうな表情のまま口を開いた。

「――食うか？」

「――食うわ！」

わーい、と子供特有の喜び方をしながら、レベツカは優希の隣の席へと移動する。

その様子を見て、アンドリユーはさすがにそれは不味いと思ったのか、少し慌てながら口を開いた。

「おい、レヴィ。それはユーキの物だ。お客さんに出したもんだから――」

「オレは別に良い」

「だけどなあ……」

「ンなことよりもドリユーくん、コーヒー欲しいんだけど？」

この話はここまで、と有無を言わさない優希に対して、コーヒーを入れてアンドリユーは申し訳なさそうに口を開いた。

「すまねえな。オムライスの料金、半分にしとくからな」

「別にいいって。全額払う」

だから気にするな、とぶつきらぼうに優希はコーヒーを口に入れる。明日奈はそんな不器用な優しさを見せる優希の様子がおかしいのかクスクスと笑う。

それを視界の端に捉えて、照れ隠しのようにコーヒーを一口飲んで。

「うまみあるな。あと……んー、うまみが最高かよ」

「貴方ごいりよくが死んでるのかわ」

「語彙力な。オマエ、本当に色々な言葉知ってるのな？」

えへへー、と笑みを零した。

その口の端にはケチャップが付いており、レベツカ本人はまったく気付いていない。明日奈はそれを見て微笑ましく見て、優希は溜息を吐きながらポケットティッシュを出すと。

「あー、ほら。拭いてやつから動くな」

「んー!!」

拭き終わるとレベツカは満面の笑みで「ありがとう!」と言うと、再びオムライスを頬張る。

夢中に、それで美味そうに食べる姿を見て、優希は「コイツ、また同じことを繰り返すな」と半分呆れながら見ていると。

「ねえねえ、今度お休みの日にお茶会しましょうよ!」

レベツカはそのお茶会を楽しく想像しながら、笑顔を浮かべて明日奈と優希に提案してきた。

無論、断る理由もない。明日奈はうん、と二つ返事に頷きながら。

「いいよ。楽しみにしてるからねレヴィちゃん」

「チツ、面倒くせえなあ……」

乱暴な口調とは裏腹に、優希は拒否をしない。

素直じゃない優希に、明日奈はクスクス笑い、レベツカは不満そうに彼に向かって口を開きかけるが、それを遮るようにアンドリユーがどこか焦ったような様子でレベツカに問う。

「な、なあ。ダディとはお茶してくれないのか?」

「ダディは明日奈お姉ちゃんとうーきとゲームで遊ぶのだからやーよ! ゲームが終わったら、二人は私と遊ぶのー!」

そんなあ、と情けない声。

誰がどう見ても屈強な男であるアンドリユー・ギルバート・ミルズ。精神も成熟しており、大人な男性でナイスダンディという言葉欲しいままにしているが、どうやら娘にはめっぼう甘く弱いようである。優希はそれを黙って見守り、コーヒーを飲むとアンドリユーに声をかける。

「どんまい、というのか。そう言う日もある、と慰めるのか。彼は一言――。」

「コーヒーおかわりイ」

「俺を慰めろよ！」

.....

2022年11月5日 PM 22:20 優希のアパート

ダイシーカフェから帰り、明日奈と別れて優希は帰宅した。

そして風呂が付いてないので、銭湯に入り帰宅して現在に至る。

彼は普段使っていない、茅場から貰ったパソコンを起動してインターネットで調べ物をしていた。その記事はソードアート・オンラインであり、茅場晶彦の特集でもある。

インタビュー形式に続いてるそれは、茅場のある言葉で締めくく

れていた。

それを見ながら優希は片手をマウスに、片手にはスマートフォンを耳に当てて通話している。

相手は――。

『え、先輩ソードアート・オンライン始めるの？』

「まあな。意外か？」

声の主は女性であり、優希のことを先輩と言うのは一人しかいない。

スマートフォンの方こう側では少し驚いた様子で――朝田は「ええ」と言う。

『だってゲームに興味なかったじゃない』

「現在進行形で興味ねえよ」

『ならどうして？』

「ツレがやりてえって言うからな。仕方ねえだろ」

そう言うと、朝田は電話口で若干考えて、直ぐに言葉に出した。

『明日奈さんでしょ？』

「……ピンポイントに当てて来やがるじゃねえかよ」

『だって先輩って知り合いは多いけど、明日奈さん以外に友達いないじゃない』

友達がいない。

一般人が聞いたら傷つくような言葉を吐かれても、優希の表情は変わらない。むしろ「まあな」といつもの調子で朝田の言葉を肯定した。

そこで、朝田はふとこんなことを言った。

『ねえ、先輩たちって付き合っていないの？』

その声はどこか不安そうであり、吹けば壊れそうな儂さが宿っている。

しかし優希はそれを鼻で笑い。

「オレとアイツはそんなんじゃないよ。つか、付き合うとかありえねえ」

『どうして？ 大抵は一緒にいるじゃない』

確かに大抵は一緒にいるかもしれない。友達以上であり恋人未満なのかもしれない。

しかし優希はそれ以上踏み込むことを無意識に拒否していた。

茅場優希にとって、結城明日奈とは光だ。

何も変わらずに接してきてくれた人間であり、平和を具現する日常の象徴と呼ぶべき存在となっている。そんな人間を自分のような人間が踏み込んで良い存在じゃない、と彼は無意識に神格化している節があった。

だからこそ、彼は否定する。

ありえない、と自分と明日奈が付き合うのはありえないのだと。生き汚く生き残った人間が、人並みの幸福を得るなど間違っていると言うかのよう。

「んなことより、オマエどうすんの？ 週末遊びに行くんだろ？」

『え？ あ、ええ、そうね』

急に話題を変えられて若干戸惑いながら朝田は合わせる。

『何時にするの？』

「まだ時間あるからな。また近いうちに連絡する」

そう言うのと視線の先には茅場晶彦の記事の締め言葉。

思わず自然とそれを言葉にしてしまった。

「『これはゲームであつても、遊びではない』ねえ……?」

『どうしたの先輩?』

「……いや、何でもねえよ」

——なあにを言ってるのかねえ、晶彦くんはよお?

心の中で呟くも、それは明日嫌というほど思い知ることになる——。

第8話 デスゲーム

茅場優希の視界に広がるのは、暗い暗いただ暗い。

自分が立っているのか、寝ているのか、それとも浮いているのか
まったくわからなかった。五感の感覚すらない場所で、優希は静かに
事の成り行きを静観していた。

いきなりこんな場所に送り込まれたのなら、普通は慌てるものなの
だが、優希は酷く落ち着いていた。

原因はわかっている。ナーヴギアを頭に装着し、『リンクスタート』
と呟くと同時に視界が暗くなり現在に至った。

となると、これはつまり――。

『ようこそ、ソードアート・オンラインの世界へ』

頭の中で、声が響く。

どこか女性特有の、高い声色。

――つまりこれはチュートリアル的なやつってことか。

まずはプレイヤーネームを決めるんだったか、とネットから引つ
張ってきた情報を思い出すと。

『前回のセーブデータがあります。データをコンバートしますか？』

――あ？

怪訝そうに何のことか考えると、答えは直ぐにわかった。

このナーヴギアは実験で使用していたものを、茅場から譲り受けた
ものである。となると、実験中のセーブデータも残っていたのだら
う。

そこまで考えていたら、コンバートするかどうかの是非を問うウイ
ンドウが目の前に現れた。

.....

2022年11月6日 PM15:35 はじまりの街 噴水広場

そうしてようやく、優希は浮遊城アインクラッドに降り立った。

プレイヤーネームから躓き、自分のアバターを作成するのも手こずって、現在に至る。そんなこんなあつてか、優希——プレイヤーネーム『ユーキ』の顔は憔悴しきっていた。

——慣れないことするもんじゃねえわ。

——ンだよ、あのパーツの多さ。

——こだわり過ぎんだろ晶彦くんのヤツ。

だがその苦勞が報われたのか、ユーキの外面は完璧なものに仕上がっていた。

近くの噴水広場まで足を運び、溜まっていた水面から自分の今の姿をチェックする。そこにいたのは——女性の姿。

パツチリとした眼で、黒髪の長髪の少女の姿。

前髪も切りそろえており、世間一般的に言われる姫カット。どこぞのサークルで姫と称されるレベルの美少女がそこに顕現していた。

そう、これが今の茅場優希の姿。

あろうことかこの男、ネカマプレイヤーに走り出したのだ。

——我ながら会心の出来だな。

彼は自分の手間暇かけた仕事に、満足するように頷いて、その場で一回転をする。

初期装備である、布製のシャツ、布製のズボン、簡易な胸当てとかなり質素なものであるのだが、それでも絵になる。それを証拠に、そ

の場にいた男性プレイヤーはユーキに目を奪われていた。

それに気付きながらも、ユーキは無視してメインウィンドウを慣れた手つきで開く。

見るのはステータスだ。

——チツ、両手剣装備するの面倒くさそうだな。

——装備すんに片手剣スキル上げる必要があんのかよ。

——でもそれよりも……。

彼は自分の手を見る。

少女特有の小さな手をそのまま力強く握りしめて。

——あの力。

——実験でも何度か経験した。

——あの力は一体何だったんだ？

思い出すのは最後の実験に起きた現象。

NPCがおかしくなり、自分の感情もおかしかった、説明がつかないあの状態。

何かのバフスキルかと思ったが、ソードアート・オンラインの仕様上そのようなスキルはなかった。

そもそも、感情の昂りでステータスが上がるなど聞いたことが無いし、前代未聞の仕様だろう。それを確かめるために、ステータス画面を見たのだが——。

——わからねえな。

——レベルを上げると覚えられるモンなのか……？

——そこまで考えると、噴水の縁に腰掛ける。

思案する様子も、今のユーキは絵になっていた。無防備な様子に、周りの男は色めき立ち始める。このまま数十分もいれば、意を決した

男が声をかけようとする気配を漂わせるが。

ドカツ、と一人の男性の登場によりそれは消え失せることになる。
ユーキは隣へと視線を向ける。

それは、巨大な、屈強な、男だった。巨大な腕、屈強な太もも、長い栗色の髪の毛を後ろに束ねている。何よりも眼を引くのが、厳つい他者を圧倒させるような顔つき。顔面は傷だらけで、片目は隻眼となっており、強者との戦いの跡を演出させている。

それを見て、思わずユーキは。

——なんだ、コイツ？

訝しむ様子で強者を視界の端に捉えていた。

そもそもここははじまりの街であるし、ソードアート・オンラインが始まってから数時間しか経っていない。だからこそ、眼は隻眼になるわけがないし、顔も傷だらけになるわけもない。そもそもソードアート・オンラインは傷が残るそういう仕様ではない。腕や足が斬られて落ちても、回復さえすればまた元に戻る。そんな仕様である筈だ。

——つてことは、アレだ。

——コイツ、キャラメイクをかなり頑張ったことになる。

——気合い入ってんなあ……。

自分を全力で棚に上げるスタイル。

何時間もキャラメイクに費やした男が思う感想ではない。

とにかく妙な男だと、ユーキは思う。

何せその場から一步も動かない。強者は腕を組み、遠くを見つめて噴水の縁にただ座っていた。

とはいっても、ユーキもその場から動けない。

何せ明日奈とここで待ち合わせをしているのだ。ここで動けば、合流しようにも出来ないだろう。

——しかし、遅くねえか？

——すぐにインしてここで待ってると思ったんだが……。

辺りを見渡すも、明日奈らしきアバターの影も形もなかった。となると、可能性としてあげられるのが——。

——アイツもキャラメイク頑張ってるってことか？

——……ん、キャラメイク？

ここで何かを思いついた。

自分と同じようなタイミングでインして、自分と同じタイミングでこの噴水広場に現れて、自分と同じく噴水広場から動こうとしない人物。その該当する人物は一人しかいない。

ユーキはその人物の方へ顔を向ける。

そこには隣に座っている強者の男。今だに腕を組み、遠くを見つめている男に恐る恐る声をかけた。

「まさかオマエ、明日奈か……？」

「え、優希君なの？」

屈強な男——結城明日奈は眼を丸くさせて応じていた。

優希は溜息を深く吐くと、呆れた口調で聞いたです。

「いや、オマエ何なのそれ？ 何でそんなことになってんだ？」

「優希君こそ、何なの！ どうして女の子で始めてんの!?!」

その言葉に、何を言っているんだと言わんばかりな当然な顔で答える。

「女でプレイしとけば、バカな男からアイテムとかプレゼントされて効率上がんだろ」

「腹黒スイッチ全開だなあ……」

ケケケ、と邪悪に口元を歪めるユーキに対して、明日奈は苦笑交じりに続けた。

「でもわたしも、実は優希君が女の子で始めると思ってたんだよね」
「オレはどうしてオマエが夏侯惇で始めてんのか、まったく理解出来ねえんだけど？」

その言葉に、明日奈は居丈高に笑う。

普段の姿ではなく、屈強な隻眼な男でそれをやられるのだから、似合っているにも程があるものだった。

「それは貴様を悪い男から守るためよ！」

「ちよつと悪リイんだけど、いきなり武将チックになるのやめてくれない？」

「ぬう!? すまぬ、孟徳！」

「オマエさあ、案外今の状態楽しんでんだろ？」

その言葉に、夏侯惇的な武将と化した明日奈は照れ臭そうに、両手をもじもじとしながら一言。

「う、うん……」

「うえ、気持ち悪リイ！」

「酷くないかな!？」

.....
.....

.....

2022年11月6日 PM15:35 はじまりの街 露店エリア

二人はフレンド登録して、はじまりの街を散策していた。

本来であればフィールドに出て、モンスターエネミーでも狩って、VRMMOとはどういうものか確かめようとするのが定石であるのだが、フィールドに出るのは後日にして今は街の景観を楽しもうと言うことになった。

それは明日奈が言い出したことであり、ユーキはそれに付き合っているに過ぎない。どちらにしてもユーキは明日奈に付き合っただアート・オンラインを始めたので、彼女がそうしたいと言えばそれに付き合うのみであるのだが。

彼女たちのような考えのプレイヤーも多いのか、NPCが売り出している露天エリアは大層な賑わいを見せていた。

とは言っても、彼女たちのような考えが多いだけで、明日奈達のような美少女と野獣コンビは辺りを見渡しても発見できなかった。

そんな中、野獣となってしまった明日奈——プレイヤーネーム『アスナ』は楽しそうな口調で若干興奮しながら。

「それにしても凄いな！こんなに景色がしっかりしてる何て思わなかった。まるで現実世界みたいだよ」

「まあな、科学も行くところまで行っただって感じだ」

乱暴な口調で適当に答えながらぼんやりとした口調で続けた。

「人混みスゲエけど、こりや楽だわ。オマエの外見のお陰で人が避ける避ける」

「ガハハハ、気に入ったかユーキよ！ ならばよし！」

「その武将トークは心底ウゼエけどな」

「おのれ孔明！」

「オマエに言っただよ夏侯惇」

アスナが歩くと、プレイヤーは眼を合わせないように下を向いて歩く。その際、道をゆずることを忘れない。それほどまでに、今のアスナは強者のオーラを滲み出していた。初期装備でおかしな話であるが、それだけアバターが恐ろしいのだろう。

「そういえば、ユーキ君のプレイヤーネームどうしたの？」

「あ？」

どういうことだ、とユーキが尋ねると、アスナは「うーん」と頭を捻りながらどう説明したものかと言葉を選びながら。

「えー……つとね？ プレイヤーネームが『Y u k i』じゃなくて真ん中を伸ばすタイプの『Y u — k i』なんだなーって……」

「あー……」

何となく、アスナが言いたいことがわかった。だが特に理由はない、ただの思いつきである。

「気分だよ気分。特別な理由はねえよ」

「なるほど」

納得すると、再びアスナの視線は露店へと注がれる。

対する露店の主たるNPCは愛想笑いをこれでもかと浮かべて「いらっしやいませ！」と大きな声で接客していた。マニュアルのような受け答えに機械的な印象を与えるものの、笑顔などは正に人間のそれ。

凄まじい完成度だ、とユーキは評価している。

「あ?」

隣りにいた武将が消えていたことに気付いた。

しかし見つける。膝を折り、立っているときよりも小さくなっていくが、やはりそれでも大きく目立つので直ぐに見つけることが出来たのだ。アクセサリーを興味津々に見つめながら、アスナは興奮しながら。

「ねえ、ユーキ君。これ可愛くない?」

「ペンダントか……」

アスナが指差している先にあるのは、綺麗な宝石が付いたペンダントだった。紅と蒼の綺麗でシンプルな一品。どうやら二つで一つの物であるらしい。

「何円だ?」

「コルだよ。通貨の単位はコルね? えーと、500コル……」

「高いなオイ」

ソードアート・オンラインを始めるにあたって、支給されるものが3つある。

一つは武器、二つ目は防具、そして最後にこの世界の通貨であるコル。その額は1000コルだ。回復アイテムなどを買ってしまえば、すぐになくなってしまいう額である。本来であれば、アクセサリーを買うくらいなら武器や防具を買ったほうが効率が良いというもの。加えて、そのアクセサリーを装備したからといってステータスが向上するわけでもなかった。

「この宝石が近くにあれば、光って共鳴するんだって」

「ふーん」

興味が無いように応じると、ユーキはそのまま素っ気ない口調で。

「欲しいのか？」

「うん。でも500コルだからねえ……」

値段が値段だ。尻込みしているアスナに、ユーキは溜息を吐いて。

「仕方ねえから、半分出してやるよ。どっちが欲しいわけ？」

「……いいの？」

どこか申し訳なさそうに問いかけるアスナを見て、ユーキはぶつきら棒に答えた。

「早くしろ。オレの気が変わらねえうちに」

「うん！　ありがとう、ユーキ君！」

満面の笑み。

花が咲いたかのように笑うアスナに、ユーキは一度頷くと。

「やっぱり気持ち悪りいな」

「そろそろ泣くよ!?!」

それから街を回った二人は、再び噴水広場へと戻ってきていた。

アスナの首には先程買った蒼い宝石があるペンダントが、ユーキの首には紅い宝石のペンダントがぶら下がっていた。アスナは自分の

意志で装備しているものの、ユーキは自分の意志で装備したのではない。アスナに装備して欲しいと、ワガママを言われたので装備している。といった認識でしかなかった。

二人は噴水の縁に座る。

ワガママが通ったアスナは満足そうに、ユーキはどこか不機嫌そうに前を見ていた。

「これからどうしよつか?」

「そうだなあ……」

ユーキは少しだけ考えて。

「フィールドに行くのは明日だろ?」

「うん」

「だったら今日はやることねえな。街は見て回ったし」

そう言うや否や、ユーキは空を見上げる。

いつの間にか日が暮れていた。空は橙色に染まり、街は街灯が灯り始める。

現実時間では17:00を回ったところか、とユーキはぼんやりと考えて。

「もうやることねえし、ログアウトすつか?」

「うん、そうだね。また明日やろつか」

そういうと、アスナは立ち上がり「そうだ」と言うや否や、ユーキの方へと視線を向けて。

「ねえ、ドリユーさんのお店行ってみない?」

「それは今日の話か?」

アスナは「うん」というと、ユーキは肩をすくめて。

「ドリユーくん絶対まだインしてんだろ。あの人、生粋のゲーマーって話だしな」

「誰が言ってたの？」

「奥さん」

確かな情報源に彼女は頷いて、それじゃと言葉を区切る。

どこかユーキを伺うように、申し訳なさそうに続けた。

「今日、そっちに行つていい？」

「別に構わねえ。その代わり、家から出るとき絶対に連絡入れる。迎えに行く」

「うん、ありがとうね」

ニツコリと笑うと、アスナはたどたどしい手つきでメインウィンドウを開く。どうやらログアウトをしようとアイコンを探しているようだが――。

不思議そうな口調で、彼女は、ありえないことを口にした――。

「あれ、ログアウトボタンがないよ？」

「な――」

なんだと？

そんな言葉を言う前に、はじまりの街で晩鐘が鳴り響く。

それは終わりを告げるように、始まりを告げるように、それは高々と辺りを余すことなく響かせる――。

こうして、始まった。

世を震撼させた『SAO事件』の始まりだった。

今思えばここからだっただのかもしれない。

茅場優希の止まっていた時が動き出したのは、ここから始まったの
かもしれない――。

幕間 茅場優希の罪

——身体が揺れ、少年は眼を覚ました。

それは断続的で、不規則な揺れだった。辺りを見渡すとそこは車内の後部座席。窓を見ると景色が矢のように走っていた。とはいっても法定速度は守っているし、特別飛ばして走行しているわけでもない。

『オマエ、ようやく眼エ覚ましたか』

オマエと呼ばれたのは少年なのだろう。運転中の男性は座席ミラー越しに、少年が起床する様子を確認していた。

堀の深い顔立ちで黒い髪で短髪。顎には無精髭が生えており、その姿にどこか野性味を感じるのは日に焼けた肌も多少の影響があるのだろう、と分析することが出来た。

助手席に座っている女性も「あらあら」と上品に笑いながら後ろを振り返り、少年の様子を見守っている。

笑顔が絶えないというのは、彼女のことを言うのだろう。蒼い瞳は優しく少年を見つめて、ブロンドの髪の毛が輝かしい。どこか艶やかさと可愛らしさを両方兼ね揃えている印象を与えていた。

まだ意識を覚醒仕切っていない少年を確認し、女性は困ったような口調で。

『まだお寝坊さんのようですね?』

『マジかよ? どんだけ寝るんだコイツ……』

どこかオーバーリアクションに反応すると、男性はそのまま座席ミラー越しに少年を見て。

『しつかりしろよオ? 最初が肝心なんだからよオ?』

『そうですね。第一印象は大事ですよ? それである程度人間関係

は決まってしまうんですからね』

男性の言葉に深く頷いて、女性は同意する。

しかし少年は二人が何を言っているのか、目覚めて間もないせいもあつてか理解出来ずにいた。なので少年は返事をする事が出来ない。二人はそんな少年を置いてきぼりにしたまま、話を続ける。

『しかし今回は晶彦には助けられたな。アイツの科学がなけりや、オレも結構手こずったかもしんねエ』

『貴方もそろそろ怒られますよ？ いきなり「患者が痛覚感じねエ機械作れ」なんて言われたら怒りますからね普通』

『あの鉄仮面に感情何て言葉あんのかねエ？ ホント、頭トンでるぜあの男はよオ』

『もう、そんなこと言つて。あとでちゃんと晶彦くんにお礼言うんですよ？』

『ハイハイ』

『ハイは一回です』

『ハイ』

そこまで言うと、男性は呆れた様子で座席ミラー越しに再度、少年の方へと視線を向けて。

『おい、いい加減に起きろ。そんなんだと、笑われんぞ？』

誰に笑われるのか、と少年が問う前に男性は居丈高に笑みを浮かべて。

『昨日話したと思うけどよオ、オマエに新しく出来た妹だよ。仲良くしろよオお兄ちゃん』

『急ですものね。私に相談もなしに……』

女性は目を細めながら男性を軽くにらみながら言う、男性はしどろもどろになりながら取り付くように言葉を漏らした。

『しょうがねエだろ。助けた患者が天涯孤独で「死ぬために生まれてきた」とか勝手なことを抜かしやがるんだからよオ』

『もう良いです。貴方が勝手なことをするのは、今に始まったことでもないので』

子供のようにむくれる女性を見て、男性は「ハハツ……」と乾いた笑いを浮かべて。

『まあ、そういうことだ。名前はオマエと同じ名前で木綿——』

少年の記憶はそこまでだ。

景色は暗転し、次に目覚めたときは外で仰向けで倒れていた。何かの衝撃があったことは覚えているが、一体何が起きたのかは理解していない。ぼんやりと瞼が重く、身体の節々が動かない。

横転した先程まで乗っていた車、何かに引火したように燃え盛る“炎”、連続する痛み、止めどなく流れる血液、荒くなる呼吸、冷える身体。その景色はまるで——地獄だ。

意識が遠のくとは、このことを言うのだろう。

呼吸をすることさえ苦しく、徐々に小さく弱々しいものへと変わっていく。

『オイ、オイ！ しっかりしろオマエ！』

声の方へと視線を向ける。

そこには身体中傷だらけの男性と女性の姿。

先程まで笑っていたとは思えないほど、二人共痛々しい姿だった。外傷が激しいのか、衣服は真っ赤に染まりどこが負傷しているのかわからないほどである。

それよりも少年は眠たかった。

呼吸をすることさえ億劫であり、止めた方が楽になれることだろう。

しかしそれを二人は許さない。

『しっかりとろって言ってんだろオ!』

『貴方!』

『わかってる! 他人を助けて自分の息子を見殺しにしました、何て医者の前に、親としてありえねエ!』

どうやら二人は少年に応急手当をするようだ。

自分たちの傷何てどうでもいい、と言うかのように二人は自分たちよりも、少年を最優先に行動していた。ここで少年を見捨てて、自分たちを優先していれば助かっていたかもしれない。だが二人は自分よりも、少年を救うことを選ぶ。

血が足りないのか、男性も女性も青い顔を通り越して白い顔になっている。

それでも二人は手当の手を止めない。必死に少年に声をかけて、意識を現世に繋ぎ止めようとしていた。

『きろろ!』 はオレ達の 証だ——!』

男性が何かを言うも、少年の耳には入ってこない。

そうして今度こそ、少年の意識は途切れることになる——。

これが少年の過ち。

茅場優希が自分が生き残るべきではなかったと自嘲する記憶。
。幾万もの人間を救うはずの両親を、茅場優希は見殺しにする――

Vol. 1 ベルセルク

第1話 少年は怒りのまま剣を振る

2022年11月8日

AM10:10 『第一層』はじまりの街の宿屋

ソードアート・オンラインの創造主——茅場晶彦にゲームの世界に閉じ込められて、三日経っていた。

一日目に、つまりソードアート・オンライン稼働日当日に、広場に集められて茅場本人からゲームクリアしなければ現実に帰還することとは叶わない。ゲームでの死は現実の死に直結する、と告げられ。

二日目に、まだ事実を受け止められない者、茅場の思惑を知って行動する者、事実を受け止められても恐怖し『はじまりの街』から出られない者が現れ。

三日目で、各々プレイヤー達はようやく行動を始めていた。

はじまりの街の雰囲気は稼働日から打って変わって、活気があった陽気的なものから、鬱々とした重苦しげなモノへと変貌を遂げていた。

無理もない、ゲームの死は現実での死を意味する。MMOとは最初は死んで当たり前、死んで対策を考えて、そして実行するというのが本来の攻略方法である。だがソードアート・オンラインではそれが使えない。プレイヤーの命はHPゲージ、なくなれば死を意味する。数値化されて、眼に見えてるのでそれは余計恐怖を増長させていた。

この世界において、恐怖に負けた人間が待っているのは死である。現にはじまりの街から出て、出現する比較的弱いエネミーモンスターに大多数の人間がHPゲージを削られ死亡している。

普通に対処すれば負けることはないし、エネミーモンスターの攻撃が当たってもHPゲージが減るのは極僅かである。だがそれでもプレイヤーは恐怖してしまう。僅かでも減る自分の命を見て、冷静になれる人間は残念ながらそう多くなかった。

当初、茅場は広場にて「213名が死亡している」と宣告していたが、三日目の現在ではもつと減っていることが予想されるだろう。

そういうわけか、街に活気はなく、プレイヤー達は怯えてNPCはプログラム通り笑顔で通るプレイヤー達を呼び込むと言う奇妙な光景が広がっていた。

そんなはじまりの街の中にある宿屋。

どうやら宿屋の中に酒場があり、そこにはプレイヤー達が点々と席に着席しており、NPCである店員は忙しなく動き注文を取っていた。

そんな中、とても酒場の雰囲気から浮いている少年プレイヤーが一人。

酒場とは本来、成人した者たちが訪れる場所である。それを考慮すれば、少年は明らかに浮いていた。ブロンドの綺麗な髪の毛、眼を閉じているもののその容姿はどこか幼さを感じる。

「

少年の眼が開いた。

その双眸は綺麗な蒼色。普通にしていれば可愛い部類の顔であるのだが、眼つきが悪すぎてそれを全て台無しにしている。少年は明らかに未成年であり、本来酒場に来る立場ではないが、それを咎めないのはやはりMMORPG故だろうか。

少年——ユーキは思考に耽る。

——三日経つても、外部からの連絡はなし。

——こりや一ヶ月、一年経とうと変わらねえだろう。

——となると、本当にこのクソゲーをクリアしなきゃ現実には帰れねえ。

今のユーキは現実の姿のままであった。

一日目、つまりデスゲームの開始を宣言されたとき、茅場からプレイヤー全員にプレゼントが配布されていた。

それは鏡。鏡に映し出された瞬間、この世界でのアバターは消えて、現実世界の自分へと変わっていた。

——クソツタレ。

——ゲームでなく現実なのだから、現実世界の姿にしたって言い
てえのか……。

——笑えねえ。笑えねえ冗談だよ。

茅場の思惑に、憤りを隠せない。拳を握りしめ、煮えたぎる怒りをその内に募らせる。

八つ当たりしたところでどうにもならないし、元より街中——
圈内と呼ばれる場所であり、その中にあるオブジェクトを破壊したり、プレイヤーを攻撃することが出来ないのだ。だがこれは物に当たったところで無駄だし、根本的な解決にならない。

だからこそ、ユーキは耐える。八つ当たりエネルギーを使うくらいなら、これからのことを視野に入れて考えることにした。

——あのクソのことは、今はどうでもいい。

——問題はこれからだ。

——クリア出来ねえと現実には帰れねえ。

——だったらクリアするしかない。

——だがクリアするには……。

そこまで考えていたところで——。

「…………おはよう」

「…………おう」

ユーキに声をかけるプレイヤーが一人。

それは少女特有の高めの声で、見知った声——にしては覇気がなく、意気消沈しているようなものだった。

それが誰なのか確認すると、ユーキは簡単に応じる。

そのプレイヤーはアスナだった。彼女は暗い表情のまま、ユーキの座っている席の向かい側に座り対面する形となっていた。

「……」

「……」

そして沈黙。

重苦しい空気が二人の周りを覆う。それは数秒か数分か、その沈黙はユーキが口火を切ることで消えることになった。

「オマエ、どうした？」

「別に……」

暗い声のまま、アスナは答える。

思えば初日から様子がおかしかった。

茅場からデスゲームを告げられて、隣に見るアスナを見てみれば彼女は明らかに怯えていた。

それは尋常ではなく、青い顔になったと思ったら白い顔になり、ガタガタと震える。どうしたのか、とユーキがいくら声をかけても「ごめんなさい」と震えながら繰り返すばかり。

それから宿屋に泊まり、二日目で今のような覇気のない状態になっていた。

アレだけ見ることが出来た彼女の笑顔はどこにもない。どこか贖罪を背負うかのような、悲痛な表情を浮かべているアスナしかいなかった。

——コイツ、何に怯えていた？

——デスゲームじゃねえな。

——オレに謝ってきたってことは、オレに怯えてんのか？

——どうしてだ？

そこまで考えていると。

「ねえ……」

「あ？」

「これからどうするの？」

感情の起伏がない声色で、アスナは問いかける。

対してユーキは真剣な表情で受け止めて、アスナを真正面から見据えて。

「それより、オレの質問に答えろ。オマエどうしたんだよ？」

「私は、大丈夫だから」

「大丈夫なわけねえだろ。その理由、オレにも言えないのか？」

「……」

沈黙するアスナに対して、ユーキはチツと舌打ちをする。

それは誰に対してか。こんな世界に閉じ込めた茅場に対してか、それとも昔馴染みのツレの状態すら何とか出来ない情けない自分に対してか。前者であり、後者なのだろう。

いつもの粗暴な声色は鳴りを潜め、幾分か声を丸くして口に出した。

その語り口はどこか、幼子をあやすかのように、穏やかなものだった。

「……無理はすんな」

「……うん」

「アスナの力ない返事を聞いて、ユーキは切り替える。いつもの粗暴な口調に戻り、先程のアスナの問いに答えた。」

「二日割いて、ドリユーくん探したが見つからねえ。移動したのか、それとも見つけれねえだけなのかさておき、このまま黙って引き籠もるのは性に合わねえ」

「……そうだね」

茅場優希という人種がどう言う人間なのか理解しているのか、アスナはこれと言ったりアクションも取らずに肯定する。

彼らが一日潰して探していた人物——アンドリユーだったが、見つけることが出来なかった。

街中にいるプレイヤーに聞き込みしても彼を発見することが出来ない。アレだけ目立つ外見をしているのだ、それが見つけれられないとなると街にいないのか、もしくは——。

——オレは何を考えている。

——そんなことがあってたまるか……!!

既に死んでいる。

最悪な結末を想像し、ユーキはありえないと否定するように自分のこれからの進路を説明した。

「オレはこれから『ホルンカ』って村に行く」

「どうして?」

「レベルを上げるために決まってるんだろ。近いうち、この辺りはプレイヤーの狩り場になっちゃう。そうなたら待ってるのはモンスターとの奪い合いだ。それはかなり面倒くせえ」

吐き捨てるようにユーキは言葉を漏らした。

この世界はレベルが全てと言ってもいい。経験値を稼ぎ、レベル上

げて、スキルを覚える、その繰り返しだ。それに気付いた者は初日に行動している筈であるし、このまま呑気にはじまりの街に居座る訳にもいかない。

無論、それは危険が付き纏う。VR実験に参加したとはいえ、レベル1の身であり、装備も初期のまま変わっていない。なおかつ得意の両手剣はまだ装備できない状態。

それでも前に進むには経験値を稼ぐしかない。例え危険でも前に進むためにはそれしかないというのなら、ユーキは迷わず前に進むことを選ぶ。

幸いアンドリユーの聞き込みをしたときに『ホルンカ』という街の情報と、その周辺のエネミーモンスターのことは聞いている。

「オマエはこのままここでドリユーくんを探してろ。この場所を出ねえ限り、死ぬことは——」
「私も行く」

アスナは遮るように、決意するかののように、罰を求めるような顔でそのまま続ける。

「私もユーキ君と行く」
「……オマエ、言っている意味分かってんのか？」

圏内である街から出れば、HPゲージが減ることになる。それは最悪、死に繋がる。

状況判断が出来ないほど、彼女はバカではない。それを分かっているが、ユーキは再度冷たい口調で問いかけた。

「死ぬかもしれないねえんだぞ？」

「わかってるよ……」

「わかってねえよ。いいから、オマエはここにいろ」
「いや」

「このっ、いい加減に——！」

「私も！」

ユーキは立ち上がり怒鳴りかけるも、それ以上の大きな声でアスナは遮る。

そのまま座ったまま、見上げるようにして少し涙目になりながらも、悲痛な表情で。

「私も……君に付いて行く。絶対に、置いてかれても、付いていくから……」

「……………」

視線が交差し、睨み合う。

折れたのは——。

「チッ」

ユーキだった。

彼はドカツと乱暴に椅子に座りなおすと、不機嫌そうに舌打ちをして、嫌々了承した。

「勝手にしろ。足引っ張るようなら、叩き潰してここに縛り付けるかな」

「うん……」

力ない返事に、ユーキはそのまま乱暴な口調で問いかけた。

「オマエの武器は何だよ？」

「細剣だよ」

それを聞くと、ユーキはメインメニュー・ウィンドウを開いて、ス

テータス画面を開く。

そこには自分の装備、状態、自分のコル数が表示されていた。彼が見たのは自分の所持金である『コル』の部分。アインクラッドで使用できる通貨である。それに余裕があることを確認すると、メインメニュー・ウィンドウを閉じて。

「とりあえず装備整えんぞ」

「私お金なんて……」

「心配すんな。オレが出す」

そこでアスナは違和感を覚えた。

ソードアート・オンラインを始めて3日間、彼らは同じ時間を過ごしてきた。一日目は広場のあと宿屋に戻り、二日目は一緒にアンドリューを探し宿屋に戻り、三日目はこうして一緒にいる。とてもではないが、コルに余裕があるとは思えない。

と、なると考えられるのは――。

「もしかして夜街を出てフィールドでモンスターと戦ってた？」

「………。だったら何だよ？」

「今度から私も付いていくから。それと――」

アスナはギュッとユーキの手を握る。

両手で力いっぱい、震えながらユーキの片手を握ると。

「危ないことは、絶対に、しないで……」

「………覚えてればな」

そういうと、ユーキはその両手を振り払い立ち上がる。そしてそのまま前を向き歩き出したところを、アスナが追いつきながら。

「自分の装備は買ったの？」

愚問だとアスナは思う。

この世界において、防具や武器は命綱だ。これを疎かにしては死に繋がるのは明白である。だからこそこの質問に意味はない。自分の命が大事な人間なら真っ先に購入しているはずなのだから。

だからこそ、ユーキは鼻で笑い、小馬鹿にした声で。

「当然じゃねえか」

彼のステータス画面の装備は初期装備のまま。

彼が新調する装備のコルは全て、アスナにつき込まれるのだった――

.....
.....
.....

PM22:15 第一層『ホルンカ』

そして特に問題はなく、二人はホルンカに到着していた。

道中、エネミーモンスターと何度か戦うことになったが、特に危険もなくここまで到着することが出来た。

ユーキがいるのは街外れ。エネミーモンスターが跋扈しているフィールド、通称『圏外』と呼ばれる場所だ。そこは圏内とは違いHPゲージが減る。つまり死ぬ可能性すらある。そこで彼は何をしているのかというところ。

「……………」

ひたすらに片手剣を振るっていた。力強く振るわれ、その度に風切り音が聞こえる。

どれだけ剣を振るっていたのか、身体中からは汗が流れていた。

「……………ッ！」

一度振り下ろし、直ぐに振り上げて、思いっきり踏み込む。

より鋭く、より疾く、より力強く。剣を思いっきり突き出した。ソードスキル『レイジスパイク』、それが今の突きのソードスキルの名前だった。

ソードスキルとは、簡単に言ってしまうえば技コマンドのようなもの。発動したあとは体が勝手に動いて攻撃動作を行う。攻撃力も通常の斬る薙ぐ突くといった攻撃よりも威力が高い。

それからも何度も何度も、ユーキは剣を振るう。より正確に穿てるように、自分の体に馴染ませるように。

これに意味があるかどうかは、彼本人もわかっていなかった。

だがこうでもしないと落ち着いていられない。発散しなければ、正気を保てなかった。剣を振るう、それだけで気が紛れる。もはや夜中の素振りは日常と化している。

そして不意に――。

「……………」

ピタツと。

ユーキの剣が止まる。彼は周囲を慌てることなく見渡すと。

「……」

囲まれていた。

どれもこれも同じエネミーモンスター。足は蔦で支えられており、それが胴体まで伸びている。そしてその胴体には大きな口があり鋭利な牙がある。牙があるということは、噛み砕くことも可能なのだろう。

エネミーモンスターの名前は『リトルネペント』。一メートル半ある個体もいれば、二メートル弱ほどの身の丈を有している個体もある。姿形は多少の違いはあれど、今は共通して言えることが一つ。

目の前のプレイヤー。

ユーキを獲物として認識していた――。

「――」

対するユーキは変わらず、剣を構えることすらしない。

ふとHPゲージを見たら半分は削られており、ゲージの色も黄色になっっていた。

――ああ、ようやく。

口元を押さえて、ユーキは周りのリトルネペントを睨みつけながら。

――ようやく、獲物がかかりやがった……！

擻猛に口元を歪める。

この世界はレベルが全て。それがなければ前に進むことすら出来

ない。実にシンプルで、実に浅はかだとユーキは思う。

——変わらない。

——何一つ変わらない。

——仮想世界と現実世界を分けたところで何一つ変わらない。

ユーキは片手剣を構える。

初期装備である『スモールソード』を構えて、周囲を見渡す。

——世界は残酷で、不平等だ。

——前に進むためには力がある。

——力を手に入れるためには経験値が必要。

——経験値を得るためには目の前の三流を斬らなければならない。

これは儀式。怒りを力に変える儀式。

思い出すのは、今までの人生。両親を理不尽に奪った世界、茅場晶彦の顔、そして無様に生き残ってしまった何より許せない自分自身。

蒼い瞳に、暗い感情が宿る。それは怒りであり、憎悪であり、憤怒である。絶対的な殺意、確固たる殺気。

それはどう言う現象か、エネミーモンスター達はざわめき始める。

取るに足らないプレイヤー一人を取り囲む輪は、より狭くより密度を増していった。ここにきて自我のない筈のエネミーモンスター達は、

は、結束を固めてきていた。

ここで殺さなければならぬ、ここで仕留めなければならぬ、ここで塵殺しなければならぬ。

ありえない思考がエネミーモンスターたちを支配する。

正に絶対絶命。

そんな状況下でも、ユーキの『怒り』は衰えることを知らない。

——元からオレは一度死んでる。

——死んでるのだから、こんな無茶も出来る。
——現実世界でも帰りを待つてる身内なんざいねえんだ。
——だったら前に進むしかないだろう。
——余分なことに考えを割く容量がないんだ。
——その分全速力で、前に進むしかねえ。

通常それは狂っているのかもしれない。

自分の命を勘定に入れないで、前だけしか見ていない人間を狂人と称するのだろう。もはや止まらない、止まれば茅場優希は死ぬとでも言うかのように、彼は前だけを進み続ける。

——下らねえ世界を作ったアイツをオレは否定する。
——最短距離で、オレはアイツを。
——茅場晶彦を。
——斬る。

「かかってこいよ、三流共」

そのままユーキは獰猛に口元を歪めて、肉食獣のように瞳を爛々と輝かせて、怒りをその身に纏いながら——。

「テメえらはオレの餌だ——！」

今日も、死線を潜る。
まるでそれが生き残ってしまった自分に対する贖罪とでも言うかのように——。

第2話 捻くれたヤツの不器用な気遣い

わたしはひたすら暗闇の中走っていた。

足を動かし、手を振り、息を切らし、必死になつて。

——待つて！

声が出ない。

いくら口を大きく開けて、叫ぼうとしても声が出なかった。

目の前にいる人の背中に触れようと必死に手を伸ばしても、触れることさえ出来ない。

わたしの目の前にいるのは男の人の背中。何度も見てきた、何度も付いて行つた、見知つた背中。安心する背中だった。

でも今は、ただひたすら前を見て、後ろを振り向く素振りすらしない。追いつがるのがやつとで、とても追い越すことも、触れることも出来ない。

——待つてよ……！

もう一度、わたしは叫ぼうと大きく口を開ける。やはり、声は出ない。

最初から気付いていたのか、それとも今気付いたのか。男の人はそのまま前に進んだまま、口を開いた。

「オマエ、何言つてんだ？」

——え？

思わず、わたしは立ち止まる。

男の人の声は知つている声。でもその声色は知らない。それは低く、どうしようもないほど暗く、そして——怒りが宿っていた。

それが誰に向けられたのか、何に対してなのか、わたしにはわからない。

戸惑っているわたしに、彼はいつもの呆れた口調ではなく、明らかに敵意を交えた声で。

「オマエが、オレをそうさせたんだぞ——？」

——あ……。

理解してしまった。

彼が何を言おうとしているのか、今から続く言葉が何なのか理解するも、わたしには止める術がない。

——いや……。

「オマエがオレを——」

——ごめんなさい……。

「ソードアート・オンラインに誘ったから——！」

そして彼は——優希君は振り向いた。

絶対に今まで振り向かなかった、彼の蒼色の瞳。いつ見ても安心することが出来た、いつも見守ってくれていた瞳だったが、今は敵愾心の色を濃く出ており、鋭くわたしを睨みつける。

わたしが彼をソードアート・オンラインに誘ったから、彼はデスクゲームに巻き込まれたんだ。

最初は別にやる気じゃなかった彼を、わたしは巻き込んでしまった。ただ『楽しそうにゲームをしている彼を見たい』何て自分勝手な欲求のために、誘って巻き込んでしまった。

後退る。

その瞳から逃れる為に、後退るも優希君は許してくれなかった。

「テメエのせいだ」

そう言うと、優希君の足元が消え始める。

フルフル、と首を横に振り否定した。嫌だ、嫌だと何度も何度もわ言のように口を開くも、言葉に出ない。そして無情にも――。

「テメエのせいで、オレが死んだんだ――」

彼の身体は無残にも砕け散った――。

「――ツツ!!」

上半身をバネのようにして、わたしはベッドから跳ね起きた。

肩で息をして、身体から冷や汗が滲み出てもも気持ち悪い。周りを見ても、悪夢は終わっていないかった。

視界の端にはわたしの命の残数を示すHPゲージ、プレイヤーネームである『Asuna』の文字、そして目の前に開いているメインメニュー・ウインドウからは設定していた目覚ましアラームが鳴り響く。現実ではありえない光景、それが否が応でもここがデスゲームの中だということを思い知らされた。

メインメニュー・ウインドウに手を伸ばしてアラームを切る。

「あ、れ……?」

手が震える。

夢ではない現実の出来事。

わたしが優希君をゲームに誘ってしまい、彼はこんなことに巻き込まれた。それが罪悪感となって身体に重くのしかかっていた。

彼は何を思っているだろうか。

わたしを恨んでいるだろうか、わたしを怒っているだろうか、わた

しを——どう思っているだろうか。

「……………」

「思わず自分の肩を抱いた。

確認をするのが怖かった。彼が自分にどんな感情を抱いているのか怖くて、なによりも彼を巻き込んだにも関わらず、確認できない臆病な自分が何よりも許せない。

「ごめんなさい………」

言葉にしたところで、許されないことはわかっている。それでも言葉に出さざるを得なかった。

何度も何度も、うわ言のように呟く。返答がくることはない。自然と眼からは涙が溢れる。これはただの自己満足に過ぎない。それも——。

「ごめん、なさい………」

わたしは、何度も何度も、彼に対して謝罪する——。

……………
……………
……………

2022年11月9日

わたしは暫くして、準備を整えて宿屋を出た。

太陽はこれでもかというくらい高く上がっており、燦々とアインクラッドを照らしている。急に瞳に差し込んできた太陽光に目を細めていると。

「よお、遅かったな？」

ホルンカの村の宿屋の壁に腕を組みながら、背中でもたれかかっていた男の人から声がかかった。

いつもは聞いて安心する声だけど、今は声を聞くとびに心臓が一つ高鳴る。彼——ユーキ君の視線から逃れるように、わたしは顔を俯かせて。

「…………おはよう」

「…………おう」

昨日と同じような挨拶。

はじまりの街と変わらず、気が重くなる。

彼は「チツ」と舌打ちをすると、今日の予定を話した。

「今日は近場の森でひたすら経験値稼ぎだ。オマエはどう——」

「行く」

「…………そうかよ」

不機嫌そうに彼は呟いていた。まるでわたしが言うことを知っていないかのように大した驚きもせず、彼はそのままの調子で続ける。

「言うまでもねえが、危なくなったら逃げろ」

「うん」

口では肯定するも、心の中で否定する。

逃げない、絶対に逃げない。わたしが巻き込んだんだ、ユーキ君が危なくなったら絶対に逃げることは出来ない。こんな臆病なわたしでも、盾くらいにはなる筈。

そうしていると、宿屋からまた一人外に出てくる男の人。黒い髪で、どこか幼さが残る印象。歳はユーキ君と同じくらいだろうか。

茶革のハーフコートを装備した彼は、わたし達を一瞥すると、そのまま何も言わずにフィールドへ出る道へと進んでしまった。

「アイツ……」

ユーキ君が黒髪の彼を見て、ポツリと呟いていた。

その表情はどこか、レベツカちゃんが泣いている場面に遭遇した表情に、少しだけ似ていた。

「どうしたの？」

「いいや、何でもねえよ」

わたしが問いかけても、ユーキ君はやんわりと首を横に振る。

そしてそのまま、先程の茶革コートを装備した男の子と同じ方向へと進み、私もそれに追従することにした――。

――それから、ひたすらモンスター――リトルネペントと言われるモンスターを狩り続けた。

わたし達には会話は無い。モンスターが現れば、ユーキ君が最初に何度か斬り後ろに下がりそうになるのを見計らい、わたしがすかさずに間を開けず細剣でモンスターを穿つ。

本来、こういう連携は『スイッチ』という掛け声をかけて行うようであるが、わたし達には必要がなかった。ユーキ君がそろそろ下がるのがだいたい分かるし、彼もわたしが前に出るタイミングをわかっている。

そうしてモンスターを連携して倒す。

もはやこれは作業だ。ユーキ君が弱らせて、わたしがトドメを刺すという流れ作業。それを機械よりも正確にこなしていく。

このやり方は、安全な部類なのだろう。

それでも彼が前線で戦い、自分だけ後衛という安全圏にいるのが許せなかった。

それを何度かユーキ君に言ったが――。

「オレの言うことが聞けねえんなら、ここで叩き潰してはじまりの街に捨ててきてもいいんだぜ？」

と言われてしまい、全く話を聞いてくれなかった。

こうなれば話は平行線。わたしが折れたけど、納得していない。だからこそいつでも動ける準備だけしておく。彼に危険があれば、わたしが盾になるだけなのだから。

「ふうー……」

ユーキ君は深く息を吐いた。

HPゲージを見てみれば、僅かに削られていることがわかる。

わたしは彼に近付いて、メインメニュー・ウインドウを開き、アイテムタブを押してポーションを選択して実体化させて。

「飲んで」

「……………」

差し出しても、ユーキ君は受け取ってくれない。

むしろ溜息を深く吐き、訝しむような眼でわたしを見ながら。

「飲むまでもねえよ」

「いいから飲んで」

「しつこいぞ」

そういうと、彼は近くの大木まで歩き座り込んだ。

そのまま彼は天を睨みつける。どこか遠い、ここにはいない誰かを睨みつけるように。

「オマエ、どうしたんだ？」

「……………」

答えない。答えることが出来ない。

彼の答えはつまり、デスゲームに巻き込んでしまったわたしをどう思っているか？というもの。それを尋ねるのは怖い。わたしには聞くことが出来ない。

わたしが思い出すのは、朝夢で見た光景。

敵意を剥き出しに、睨みつけるユーキ君の顔。

「つたく、泣きそうな面してんじゃねえよ……」

どこか悔しそうな表情で、彼は立ち上がり。

「今日はここまでだ。帰るぞ」

.....
.....
.....

そうしてわたし達は、フィールドから村まで戻ってきていた。空は夕暮れに染まり、燦々と照らしていた太陽は沈みかけていた。周囲を見てみれば、数十棟ほどあるNPCが住んでいるであろう民家の中の明かりが灯り始める。

わたし達はあれから一切喋らないまま、モンスターを狩り続けた。そのまま宿屋に行くために、帰路に就くのだが――。

「……………」

ふいに、ユーキ君の足が止まる。

その視線の先には、蹲る男の人がいた。歳は高校生くらいだろうか、蹲ったまま虚ろな眼で地面を見ている。

勿論、NPCじゃなかった。どこか生きているような印象を与えられる。彼は紛れもなくプレイヤーだった。

蹲るプレイヤーを暫く見て、ユーキ君は「チツ」と舌打ちをすると。

「先に戻ってろ」

「……………うん」

そう言われるも、わたしはその場を離れて物陰に隠れて観察していた。

知っている。彼が舌打ちをする意味を、わたしは知っている。

アレは第三者に向けられて、苛立ったからするものじゃない。アレはもつと違う、何も出来ない自分自身に苛立って、ユーキ君は毎回舌打ちをしていた。ぶっきらぼうで、不器用で、でも放っておけなくて、最終的に困っている人を見て世話を焼いてしまう。それがわたしの

知る優希君という男の子だ。

現に、彼は腰をおろして、不機嫌そうに。

「何があつた？」

「……………」

高校生くらいの男性プレイヤーは答えない。

それでもユーキ君は表情は不機嫌だけれども、見捨てることはしなかつた。今度は幾分丸い声で、優しい声色で言う。

「オイ、何があつたんだ？」

「友達が……………」

高校生くらいの男性プレイヤーはぼつり、ぼつりと呟き始める。

「友達が、死んだ……………」

「そうか……………」

「ソイツ、俺が誘つたんだ。ソードアート・オンラインをやるうって、俺のワガママで、買って来てくれてそれで……………」

胸が締め付けられる。

それは、わたしと同じ。わたしの過ちと、同じものだった。

デスゲームに巻き込んでしまい、眼の前で死んでいくのを見る光景。そんなこと、考えたくもない。

巻き込まれて死んだ。もしかしたら明日は我が身なのかもしれない。

それでもユーキ君は動揺することなく。

「このままここにいと死ぬぜ？」

「いいよ、俺は死ぬ。アイツにあの世で謝る」

「それは勝手にしろ。生きるも死ぬもアンタの人生だ、好きに選べ」

だがな、と言葉を区切り面倒くさそうにしながらユーキ君は続ける。

「オレの目の前で死なれんのは寝覚めが悪リイからよ、はじまりの街まで行ってアンタを捨てる」

「な、何を。俺は——！」

「アンタの主張なんざ聞かねえぞ。死にたきや、あっちについてから自殺するなり好きに選べ」

そう言うや否や、ユーキ君は高校生くらいの男性プレイヤーの胸ぐらを掴む。

その瞬間、犯罪防止コードが発動されるも、ユーキ君はお構いなしに高校生くらいの男性プレイヤーを引きずっていく。

わたしは思わず飛び出した。

「わたしも行く」

「オマエ、見てたのか」

「……うん」

ユーキ君は高校生くらいの男性プレイヤーを引きずりながら歩みを止めずに、わたしを一瞥して。

「コイツはもう戦えねえ。ここでグダグダされても目障りだから、はじまりの街に捨ててくる。オマエは宿屋に戻ってろ」

「嫌。わたしも行く」

「ダメだ、戻ってろ」

「いや！」

「いい加減に——」

「な、なあ！」

言葉を遮られたが苛立ちを覚えたのか、ユーキ君は「ああ!？」と高校生くらいの男性プレイヤーに凄む。

そのまま強い口調で続けた。

「言つとくが朝までは待たねえぞ。こつちとら予定があんだ」

「ち、違う! どうして、俺を助けてくれるんだ?」

「だから言ってるんだろ」

不機嫌そうに、ユーキ君は最高に捻くれた言葉を言う。

「——目障りだから、捨てに行くだけだ」

「あとはアンタの自由だ。死ぬなり生きるなり好きにしろよ」

深夜、はじまりの街についてユーキ君は吐き捨てるように言った。

ユーキ君は座り込む高校生くらいの男性プレイヤーを見下ろしたまま続ける。

「だが安易に死ぬのはオススメしねえぞ。アンタにも待つてる家族がいるんなら、無様に生きてみせろよ」

それだけ言うと、ユーキ君は踵を返して歩いてきた方向へと進む。

決して後ろを振り返らず進む彼に、座り込んでいた高校生くらいの男性プレイヤーが声をかけた。

「なあ! と、友達は、俺のことを恨んでると思うかな……?」

「ンなもん、知ったことかよ」

ただ、と言葉を区切り前を向いたまま、ユーキ君は続けた。

「もしオレがアンタの友達だったら、何が何でも生きてほしいと思うけどな」

それだけ言うと、ユーキ君はそのまま歩いて行く。

わたしもその後が続こうと歩を進めようとするも。

「待ってくれ」

呼び止められたので、わたしは止まり振り返る。

メインメニュー・ウィンドウを開いて、装備画面を開き、あるものを実物化して高校生くらいの男性プレイヤーはわたしにそれを差し出していた。

それは片手剣。刀身が黒く、初期装備のスマールソードよりも強靱な印象を与える片手剣が握られていた。

「アニールブレード。初期段階で手に入る片手剣でも強力な部類の武器だ」

「……………」

「彼に渡してくれないか？ 俺にはもう必要が無いものだ。良かったら使って欲しい」

「……………はい」

高校生くらいの男性プレイヤーは心が折れていた。

わたしがわかるくらい、彼はこれでもかかっていうくらい心がへし折られている。

無理もない。

友達を巻き込んでしまい、そして自分は生き長らえてしまったという事実を受け止めることが出来るほど、人間は強くない。もちろんわ

たしにもそれは言えることだった。

「あと伝言を頼めるかな？ 助けてくれてありがとう、と。もうちよつと考えてみるよって伝えて欲しい」

「わかりました……」

わたしの言葉に満足したのか、男性プレイヤーははじまりの街へと消えていく。

その姿はとても他人事のように見えなかった。

わたしも、ユーキ君を失えば彼のようになってしまうのか、と。彼の後ろ姿を目に焼き付ける。

「行ったのか」

「うん」

前へ歩いてた筈のユーキ君が立っていた。

腕を組み、眼を細めて、男性プレイヤーの後ろ姿を見る。

「あの人からの伝言」

「あ？」

「助けてくれてありがとう、もう少し考えてみるって」

「だから、別に助けてねえよ」

いつまでも捻くれている彼に、わたしは先程渡された片手剣を差し出して。

「これ、使ってほしいって」

「……」

ユーキ君は受け取ると、一度思いつきり振って、二度目で突き穿つ。それで満足したのか、一度頷いて。

「良い剣じゃん」

「……………」

満足気に言うと、今度はわたしに視線を向ける。

その眼は朝見た夢とは違い、優しい蒼色の眼だった。

「オマエもオレに言いたいことがあるんか？」

「……………」

心臓が高鳴る。

口が動く、言っているのか、言わないほうがいいのか、わたしは決めかねて。

「どうして、あの人に、あんなこと言ったの？」

あまりにも抽象的で、あまりにも主語がかけられていると思った。

でもユーキ君はわたしの気持ちを汲み取ってくれたのか、真剣な表情で答えてくれる。

「何が何でも生きて欲しい、ってヤツか」

「うん……………」

「その前にオマエ、オレをデスゲームに巻き込んでしまったって申し訳ねえって思ってたんだろ？」

一際、心臓が脈を強く打った。

唇が震える、どうしてわかったの、と叫びたい衝動にかられる。思わず後ずさった。

それは恐怖で、これからぶつけられる言葉に心の準備が出来ないというかのように。罵声を浴びせられるのかもしれない、恨み言を言われるのかもしれない。

でもそんな事とは裏腹に、ユーキ君の表情は。

「やっぱりな。ったくよお、んな下らねえこと考えてんじやねえよ」

穏やかな物だった。

その状態のまま、ユーキ君は続ける。

「つまらねえこと考えてる暇があんなら——」

「つまらなくないし、下らなくない!!」

思わず叫んでしまった。

でももう止まらない。わたしの意識の罪は言葉となつて濁流のよ
うに吐き出されていく。

「何でも言わないの!? 君を巻き込んだのはわたしなのに! どう
して何も言ってくれないのよ!」

「……………」

「わたしが、わたしが! ユーキ君を誘わなければこんなことに巻き
込まれたなかったのに……辛いはずなのに……!」

「辛くなんかねえよ」

嘘、とわたしが言葉にする前に、彼は真剣な表情で。

「オレよりも——オマエの方が辛いだろ」

「え——?」

不意に、ポロツと涙が流れた。

おかしい。何で泣いてるんだろわたしは。

「こんなクソゲーに巻き込まれて、ここで死ねば現実でも死ぬって言
われて、辛くねえ筈がねえだろ」

「で、でもそれはユーキ君も……」

「別にオレは辛くねえよ。それよりも皆同じだって言っつて、我慢してるオマエがバカだって言っつてんだ」

ぽん、と頭を撫でられる。

優しく、とても優しい手つき。壊れ物を触るように丁寧に。

「辛かったら弱音吐いて良いんだ。苦しかったら泣いて良いんだ。我慢する必要なんざどこにもねえんだよ」

それが限界だった。

「あ……あ……！」

決壊するように、わたしの眼からは涙が溢れる。

このデスゲームが始まって、初めて感情を爆発させた。

「ごめんね、ごめんね……！　巻き込んだやって、ごめんなさい……！」

「オマエは悪くねえよ」

「でもわたしが、誘ったから……！」

「わかったよ。許す、許すから。次の朝には今までのオマエでいろ。そっちの方がオレも調子が出る」

「うん、うん……！」

わたしはそうして泣き続けた。

我慢することなく、わたしはユーキ君の泣いていい、という言葉に甘えて泣き続けた――。

第3話 二人はきつと似た者同士

2022年11月10日

AM9:30 『第一層』ホルンカ 宿屋

——アインクラッドに閉じ込められて、四日が経った。

ホルンカの村に当初は片手で数える程度しかいなかったプレイヤーの数も、いつの間にか両手で数えるくらいには増え始めている。

それでも絶対数に比べたらそれは少ない。

なにせ、この仮想世界には一万人が閉じ込められており、人数だけ見れば大した規模である。

だというのに、ホルンカの村にいるプレイヤーは極僅か。

まだまだデスゲームが現実であると、受け止められないプレイヤーが多数であるということの証拠でもあった。

そんな中、宿屋の中に作られた簡易的な食堂にて、プレイヤーが二人食事を摂る。

食事と言っても、所詮は仮想世界である。本当に食事を摂るというわけでもないのだが、仮想世界の癖にその辺りはリアルのように、三度空腹になるし、あろうことか睡眠も定期的に採らなければならないようである。

仮想世界というのなら、その辺りを無視してもいいのではないかと不満そうに言う男性プレイヤーと

ちゃんと三度食べないと身体に悪いよ!と不摂生な男性プレイヤーを窘める女性プレイヤー。

二人の表情は正反対だ。

ニコニコとスープを飲む女性プレイヤーと不満タラタラでパンを不味そうに食べる男性プレイヤー。

「食わねえ方がマシだ……」

「残しちやダメだよ」

メツ！と、どこか悪い子供を窘めるような口調で注意してくる女性プレイヤー——アスナに対して、どこか鬱陶しいような口調で。

「味もしねえパンを無理に食わなきゃなんねえ理由がどこにあるんだ？」

「ちやんと食べなきゃ倒れちゃうよ？」

「倒れねえよ。仮にもゲームだぞ、ここは」

「それでも食べなきゃダメ！」

そ、それとも、わたしが食べさせようか？とか細かい声でモジモジ手を合わせながら呟いたアスナを無視して、男性プレイヤー——ユーキは深い溜息を吐いて。

「おい、アスナ」

「な、なに？ やっぱりあーんする!？」

「やったら叩き潰すぞ」

すっぱり厳しい口調で切り捨ててくるユーキに、どこか残念そうに肩を落とす。

そんなアスナを見ても、ユーキの口調は変わらない。むしろ厳しさと呆れを混同させて続けた。

「オレは確かに昨日の夜に元に戻れって言ったがよ」

「うん」

「オマエ、元よりも近い」

ユーキは言うど、視線を己の肩付近に送る。

近いとはそういうことだった。二人の距離感、つまりユーキの肩とアスナの肩が触れ合うような距離。そんな距離で二人は食事を摂っていた。

もちろん、周りを見てもまだまだスペースはある。大人数で座れることを考慮して、長椅子と長椅子を挟んで長机。それが横一列に二つ用意されている。

彼らが座っているのはその端。長椅子にはプレイヤーが点々と座っており、まだまだスペースが余り余っている。

だと言うのに、彼らは肩と肩が触れ合う距離で、食事を摂っていた。

何を言っているのかわからない、そう言いたげな表情でアスナは首を横に捻り。

「これくらい普通だよ」

「普通じゃねえよ」

不機嫌そうな表情で、ユーキはアスナの顔面に手を乗せて、無理矢理力付くで引き剥がしにかかる。

「離れろお……!!」

「むにいいいい……!!」

「このっ……いい加減にッ!」

「や、やめへええ……!!」

剥がれない。

いくら力を入れても、アスナは剥がれなかった。火事場のクソ力と
いうのか、それとも乙女は強くなってはならないという現れなのか。
この瞬間だけで言えば、アスナはユーキよりも力強かった。

「オマエ、何だよそのクソ力……! 敏捷にしかステータス振ってない筈だろ……!!」

「ま、負けないもん……!!」

「……もういい。何かバカバカしくなっちゃった」

パツ、とアスナの顔を離すと、ユーキはメインメニュー・ウィンドウを開き、ステータス画面を開く。

自分のステータス画面——主に、筋力の部分を睨みつけて、ユーキは忌々しげに口に出した。

「隣にるのが夏侯惇のままだったら、問答無用で叩き潰してた」

「アレはアレでカツコイイと思うけどなあ……」

しみじみと、当時の自分の姿を思い出して、彼女は続けた。

「でもそれを言うなら、ユーキ君が姫キャラのままだったら抱きついてたよ」

「苦労したんだがな。アレ作るの……」

ユーキが思い出すのは過去の自分の姿。

黒髪長髪に、黒い双眸。前髪を切りそろえた姫カット。正に守られるために生まれてきたかのような設計だった、と我ながら彼は自負している。

だが今では見る影もない。

ブロンドの髪に、蒼い瞳。普通にしていれば可愛い顔立ちなのに、それを台無しにする目付きの悪さに粗暴な口調。何よりも男である。

あの時のユーキ君は可愛かったなあ、と過去を振り返ると同時に、アスナは直ぐに狼狽える表情に変わる。

そこで彼女はユーキの服の裾を掴んで不安そうに。

「ね、ねえねえ」

「あっ」

「も、もしかしてあの姿って、ユーキ君の好みの姿だったりするの？」

「……何言ってるのオマエ？」

そういうと、小馬鹿にする調子で彼はそのまま続けた。

「アレは童貞共を殺す為に設計したもんだ。別にオレの好みじゃねえよ」

「そっか」

ホツ、と胸を撫で下ろすアスナに気付かずに、ユーキは忌々しげにパンを乱暴に齧りながら。

「クソウゼエ音声を聞きながら作ったのに、今となっちや無駄な徒労だったがな」

「音声？」

そういうとアスナは首を傾げながら。

「わたしのときはテキストだったけど？」

「なに？」

訝しむ眼でアスナを見るも、彼女は不思議そうにユーキを見つめるばかり。どうやら嘘はついていないようである。

そもそもこの問答に嘘をつくメリットはない。必要性が全くないのだ。

——それじゃ、あの声は何だったんだ？

——あのクソツタレの差し金か？

思い浮かべるのは、身元保証人だった男の顔。

喜怒哀楽があるのかどうか怪しかったものの、微かに感情の機微を感じ取れた従兄弟の顔。

——いいや、ンなことするメリットがねえ筈だ。

——あの声は、誰の……？

そこまで考えると、あるものが視線に入り、思考が一時中断される。それは昨日、宿屋前で自分たちを一瞥して、足早にフィールドに向かつて行った男性プレイヤーの姿。黒い髪で黒い瞳、どこか中性な顔立ちをしており、見ようによつては少女とも見えるかもしれない男性プレイヤーだった。

身につけている装備も、黒いシャツの上から茶色のハーフコートを羽織り、黒色革製のズボンを履いている。そして背中にはユーキと同じ直剣『アニールブレード』を背負っていた。このホルンカの村にいる中で、一番装備が整っていると云つてもいい。加えて彼はソロのようである。

ちらほら居るプレイヤーは皆誰かと一緒に行動し、装備を整っている男性プレイヤーは一人にいる。そう言う意味でも男性プレイヤーは明らかに浮いていた。

ユーキはその男性プレイヤーを見て、心の中で一言。

——気に入らねえ……。

彼が見たのは装備ではない、男性プレイヤーの眼だ。

どこか泣き疲れたように、どこか憔悴しきっているかのように、どこか——伽藍堂のような無感情な瞳。

誰よりも装備を整えている筈なのに、誰よりも何も持っていない。そんな印象すら感じられる。

——何だ、その面は。

——本当に気に入らねえ。

アスナもユーキの感情の機微に気付き、彼の視線の先を追うと「あつ」と小さく声を上げる。そして次に彼が次に何をするのか先読

みして、一度離れることにした。彼が立ち上がる際に邪魔にならないように、嬉しそうにアスナが離れたと同時に。

「チツ」

舌打ちをして、ユーキは勢い良く立ち上がる。

向かう先は黒髪の男性プレイヤー。ズンズンと不機嫌そうに迷わず歩いて行く。

気に入らなかつた、目障りだつた、あんな眼をされて放っておく自分が何よりも許せなかつた。

考えるより先に行動に移したユーキはそのまま不機嫌そうな口調で。

「オイ」

黒髪の男性プレイヤーは顔を上げる。

眼を丸くさせて、面を食らつたような様子である。いきなり話し掛けられたのだ、その反応は無理もない。

だがユーキは構わずに口を開く。

眉間に皺を寄せて、誰よりも不機嫌そうな声色のまま。

「オマエ、オレ達と組め——」

今思えば、最悪な第一印象だつたと、ユーキは振り返っていた——。

.....
.....

.....

同時刻

味気ない食事、味気ない戦果、味気ない———光景。

それが今ある、黒髪の男性プレイヤー———キリトの全てだった。

こんな筈じゃなかった、と彼は思う。

V R M M O R P G 『ソードアート・オンライン』のベータテストに当選した彼は、誰よりも早くソードアート・オンラインをプレイしていた。

あの時の興奮は今でも彼の胸に焼き付いている。頬を撫でる風、肌を照りつける熱気、まるで人であるかのようなNPCの挙動。まるで現実世界のようなのであるが、片手には剣を携え、フィールドに出ると現実世界では決して見ることが出来ないモンスターの有無が、ここが仮想世界であることを教えてくれる。

その事実にはキリトは熱響した。

ここは剣一本でどこでも進める世界なのだ、と。心が弾んだ。新しきを知る喜びがあり、道に胸をときめかせるものが、この世界にはあった。

それから彼は夢中になった。寝ても覚めても考えるのはソードアート・オンライン。学校から帰宅すると、すぐに頭にナーヴギアを装着し、インクラッドに戻ってくる。

それを繰り返し、製品版を手に入れた。

これでようやく、もう一度、あの世界で冒険出来る、また戻ってこ

れる。そう考えていたのだが――。

「ッ……い！」

現実とは違った。この世界の創造主、茅場晶彦が始めたデスゲームに彼は巻き込まれ、世界はガラリと姿を変えた。

HPゲージがなくなれば、死亡を意味する。そんな冷酷な世界へと姿を変える。

一日目、つまりデスゲームが宣言された日。

その時点で、キリトは正直な所まったく実感が湧かなかった。いや、実感というよりも直視出来ていなかったと言った方が正しいのかもしれない。

だからこそ、彼は一日目でホルンカの村に辿り着き、誰よりも早く装備を整えることが出来た。デスゲームという現実を直視出来ず、闇雲の先に進んだからこそ出来た。

だがそれもここまでだ。

日数が経つにつれて、嫌が応にも見なければならぬ。これは現実なのだ、認識しなければならぬ。

ここで握っていた拳を解き、辺りを見渡した。

――ここも、プレイヤーが増え始めてきたな。

――次の街を拠点にするか。

情報をただ処理するかのようには、無感情に考えていた。

この村に他のプレイヤーが来る前に、次の街へ移り、自分を鍛えて装備を整えないとならない。そうしなければモンスターの奪い合いになり、満足に経験値を手に入れることが出来なくなる。そうなってしまうえば、この残酷な世界で生き残れなくなる。

そして次の街へ、またプレイヤーが集まってきたら次の街へ。

何度も何度も繰り返す。

——こんなこと、何度繰り返せばいいんだ……。

第一層が突破されるまでだろうか、それともゲームクリアされるまでだろうか、それとも——現実世界の身体が死ぬまでだろうか。

——ダメだ。

——考えちゃ、ダメだ……！

ブンブン、と頭を横に振る。

だが一度脳裏によぎったものは振り払えなかった。

思い浮かべるのは、はじまりの街で見捨てたこの世界で初めて友達になった男の顔、そして早々にデスゲームに乗り自分をモンスターにキルさせようとした同じベータテスト経験者、そして家族の顔。

——会いたい……。

——家族に、会いたい……！

——母さんに、オヤジに、妹に直葉に会いたい……！

取り留めない日常を彩っていた家族の顔を思い浮かべる。確執はあった、家族と言う割には壁を作っていた。それでも、会いたい。自分という人間を知る唯一の存在。

溢れ出した感情は止まらない。

嫌悪感、罪悪感、喪失感が波となり、キリトの感情を荒だたせた。

この世界で彼は一人だ。

友達となった男は初日に見捨ててしまった、同じベータテストだった男はこの世界から永遠にログアウトしている。家族は勿論この場にはいない。

このまま一人でこの世界に生き、一人で攻略するのだろうか。

「オイ」

だが不意に声が聞こえた。

キリトは顔を上げる。そこに立っていたのは男性プレイヤー。

髪の毛は薄い金色、瞳は蒼く、眼つきが悪い男性プレイヤーは不機嫌な調子で。

「オマエ、オレ達と組め——」

今思えば、最悪な第一印象だったな、とキリトは思い出した——

.....

AM10:00 『第一層』ホルンカ周辺のフィールド

いきなり誘われたキリトはされるがまま、眼つきの悪いプレイヤー

——ユーキに引き摺られて組むことになった。

その様子を見て「声をかけるにも乱暴すぎよ！」と彼の仲間だった女性——アスナに叱られていたのは記憶に新しい。

三人は軽く自己紹介をすると、フィールドに出てモンスターを狩り始める。

もちろん、三人一辺にモンスターに殺到するようなやり方ではない。とりあえずユーキとアスナだけで戦い、キリトは二人の実力がどの程度のものなのか見るために、少し離れた場所で見っていたのだが。

—— 凄いな。

眼を見張るものがあつた。

視線の先にはアスナの姿。前衛で戦っていたユーキが下がると同時に、突貫してモンスターを刺し穿ち倒していく。

—— 細剣の子。

—— 凄いソードスキルの完成度だ。

—— 無駄がない。

—— 疾いし鋭いし、何よりも正確だ。

—— まだ甘い所もあるけど、まだまだ強くなる……。

あそこまで完成度の高い細剣使いはベータテスターにもいなかった、とキリトは思う。

正確で、足運びも無駄がなく、エネミーモンスターの弱点を鋭く容赦なく突いてくる。今の現状で、上位の剣士と言えるだろう。

—— もつと凄いのが、二人の連携だ。

—— 初心者なのに、スイッチの掛け声なしにフォワードとバックアップが交代。

—— そんな技術見たことがないぞ。

—— だけど……。

また新しいエネミーモンスターが現れたと思いきや、ユーキが臆することなく切り込んでいく。

アスナに比べたら、流麗とは言えない。荒々しく、まだまだ荒削り。その戦い方は剣士ではなく、戦士と言った方がしっくり来る戦い方だ。

彼の戦い方を見て、キリトは分析を始める。

——あの戦い方は、何だ？

——敵を見るや否や、有無を言わず切り込むなんて……。

ユーキというプレイヤーはフォワードという役割だ。簡単に言っ
てしまえば、敵に切り込みターゲットを自分に独占するという役目だ
がある。モンスターからの攻撃による傷は絶えないし、危険が付き纏う
役割だった。

だと言うのなら、今の彼の行動は正解だ。いの一番に切り込んで、
敵を弱らせて、後退しバックアップにトドメを刺させる。

だがこれが普通のゲームだったらの話である。

プレイヤーのHPゲージがなくなれば死ぬデスゲームにおいて、そ
れは命知らずな行為だろう。誰もが一度恐怖という感情が湧き起こ
り、それに打ち勝って初めてエネミーモンスターと戦える。

——普通なら躊躇するけど、アイツにはそれが無い。

——ときには斬って、殴って、蹴って。

——自分の命なんて計算にに入れてないような。

——自分以外を標的にさせないような戦い方だ。

危うい、何て危うい戦いなのだろうか。

この仮想世界がまだゲームであると認識しているのなら、ユーキの
戦い方も頷ける。死ねばアイテムか何かで生き返れる、と浅はかな考
えの人間であるのなら理解できる。だがユーキの様子にそれが無い。
この仮想世界をしつかりと現実と変わらないことを受け止めて、行動
している。

この世界で死ねば死ぬ。そんな理不尽な事実をしつかりと受け止
めている。

エネミーモンスターを倒して、アスナが「ユーキ君突っ込みすぎ！
危ないでしょ！」と叱り「うるせえな、倒してんだから別にいいだ

ろ」と馬耳東風のように明後日の方向を見て聞き流すユーキを見て。

——アイツ、多分優しい奴だ。

と、ユーキのことをそう判断した。

他人が傷つかないように、被害を最小限にするように動き、自分が傷ついても構わない。そうした動きが戦闘となつて現れているのかもしれない。

それをユーキ本人が聞いたものなら「オレが動いたほうが早く済むからに決まってるんだろ。別に他人なんざどうでもいい」という反論してくるだろうが、生憎キリトの評価は本人には聞こえていない。

——アイツの事を『強い』って言うのかもしれない。

——でも、何だろう。

——俺はアイツのことが……。

深く考えていると、キリトを呼ぶ声が聞こえた。

「キリト君、ユーキ君と交代してくれる？」

「いいけど、どうしたんだ？」

「言つても聞いてくれないから、そこで反省してもらおうと思つて」

その言葉にどこか不機嫌な調子で、ユーキは反論した。

「聞く必要がねえからな。反省するつもりもねえぞ」

「いいから、君は休んで！」

「ハイハイ」

「ハイは一回！」

「ヘーイ」

そう言うと、ユーキはキリトと入れ替わる形で見学する側になった。

彼はぼんやりとキリトとアスナのやり取りを見る。

「キリト君どうしよつか？」

「まず『スイッチ』って言葉知ってる？」

「知ってるよ。入れ替わる時の合図だよね？」

「そうそう。それで俺がスイッチって言ったら——」

あら方、パーティープレイでのレクチャーを受けて、二人はモンスターと戦う。

まだ組んでまもないこともあって、連携は拙いものであるが、問題なく二人はモンスターを狩っていた。

ユーキが注目するのは、アスナではなくキリトの方。

何度も彼女とは組んでいるし、実力がどの程度かわかっている。対してキリトの方は今回が初めて、実力がどの程度のものか不明瞭である。故にどの程度戦えるのか理解するために、キリトへと注目していたのだが。

——アイツ、上手いな。

——視野も広いし、アスナの動向にも機敏に察知してやがる。

——何て気が利くヤツ。

何匹かエネミーモンスターを倒したところで、初心者のアスナにアドバイスを送っているキリトを見て。

——それに良い奴だ。

——オレ何かとは比べ物にならねえ、良い奴だ。

——だけど……。

気に入らない、とポツリと呟いた。

キリトの戦い方は、自分以外に傷をつけないようにしていた。それがユーキは気に入らない。

食堂では今にも折れそうなほど危うかったにも関わらず、今では他

人が傷つかないように立ち回っている。そんな余裕もないくせに、無理をしているキリトが気に入らない。自分を甘やかしても良いのに、自分に厳しい彼が心底気に入らなかった。

そう思うと、ユーキは二人に近付いていて、何食わぬ顔で話しかけた。

「オイ」

二人はそれに気付いたのか、いったん剣を収めてユーキの方を見ながら。

「ユーキ君、はじまりの街にいったん戻らない？」

「何かあったのか？」

「村のプレイヤーの人に聞いたんだけど、最近のはじまりの街周辺に変なモンスター出るんだって」

「そののどろろが変なんだよ？」

その間に、アスナはどうやって説明したら良いのかわからない、と聞いたげな難しい顔をしながら。

「そのモンスター、はじまりの街周辺のモンスターを攻撃するらしいの。しかも凄く強くて、討伐も出来ないみたい」

「……それは面倒くせえな」

心底気怠そうに、彼はそのまま深い溜息を吐いて思考する。

——討伐出来ねえ理由は、それだけじゃねえ。

——はじまりの街には戦えない連中が多い。

——そんなヤツらが、モンスターを討伐何て出来るわけがねえ。

——だったらある程度戦えるヤツがはじまりの街まで出張ればいいんだが。

——それもありえねえ。

——死ねば終わりのクソゲーやってんのに、わざわざ自分を危険に晒すバカはいねえだろ。

——このままじゃ、はじまりの街にいるプレイヤーは見殺し。

——コルを稼ごうにも、フィールドに出たところで逆に狩られてゲームオーバーだ。

そこまで考えて、忌々しげにユーキは大きく舌打ちをする。

それを聞いてアスナは満足げに笑い、キリトはそんな彼女の反応を見て不思議そうに首を傾げる。無理もない、誰が舌打ちは世話を焼く合図だと見抜けるだろうか。そもそもそんなこと、見抜いているのはアスナだけ。ユーキ本人もそんな癖、気付いていないだろう。

「……オレははじまりの街に行ってくる」

「言うと思ったよ」

有無を言わさずにニコニコしながら言うアスナを無視して、ユーキはキリトへと視線を向けて。

「オマエはどうするよ、キリトくん？」

「そうだな……」

少し考えて、キリトは答えた。

「俺も行くよ。ちょっと気になることがある」

「そうか。あとオマエに言っておくことがあるわ」

「何だよ？」

ユーキは口元を歪めて、吐き捨てるように。

「オレ、オマエのことが気に入らねえ」

キリトの様子に驚きはない。面と向かって言ってくる無礼なヤツ、と怒る様子もなかった。

あるのは納得。自分のもやもやとした感情。それをユーキは言い当ててきた。心の中でしこりがあつた違和感。優しい奴っぽいけど、何かを感じていた。それが何なのか、ユーキから言ってきたのだ。

どこか晴れ晴れとした表情で、キリトは不敵に口元に笑みを浮かべると。

「奇遇だな。俺も、お前のことが気に入らないと思つてたんだ」

「話が合うな？ それじゃはじまりの街に着くまで勝負するか？」

「いいぜ、勝負内容は？」

「モンスターを倒した数」

「乗った」

合図はいらなかった。

二人は同時に抜刀する。

キリトは背中に刺していた剣を、ユーキは腰に挿していた剣を。お互い同時に抜き放つ。

二人は知らない。

気に入らない意図は奇遇にも同じ、その理由も同じものだったということを。

要するに同族嫌悪に近い何かであることを、二人は全く知らない。もう一度言おう。

キリトとユーキ。二人の出会い是最悪な第一印象から始まった。

置いてきぼりを食らったアスナはそれを見て一言。

「仲良くしないとダメでしょ——！」

第4話 モンスターキラー

2022年11月12日

PM17:30 『第一層』はじまりの街 広場

キリトとアスナ、そしてユーキの三人ははじまりの街に到着していた。

10日の夕方の段階で街に到着し、11日に別行動を取り情報を集めて、そして12日現在でも行動しているわけなのだが。

「……………」

「……………」

ユーキとキリトは肩を並べて、はじまりの街を歩いていった。

嫌悪——とまではいかないものの、どこか不機嫌そうな雰囲気
をキリトとユーキは纏っていた。

お互いが気に入らない、と宣言した者同士、どこかギスギスした空
気になるのも無理はない。普通ならばここでアスナが仲裁に入るの
だが、生憎彼女はこの場にはいない。いない理由が——。

「今回の勝負で並んだな」

「20戦10勝10敗だろ？ いちいち細かい野郎だ、確認しなくても分かってんだよ」

得意気にキリトがいい、それに吐き捨てるようにユーキが応じた。

こうして、二人が肩を並んでいる理由は簡単である。二人は朝早く
から絶賛言い争いになり、その決着をつけるために『勝負』をしてい
た。勝負内容は恒例となりつつある、どちらが多くモンスターを倒し
たか。

言い争いの火種となった理由としては、ステータスを振るときに、
筋力と敏捷のどちらを重視しているかという些細な内容。言い争い

になったのだから、二人は真逆の答えを出した。ユーキが筋力で、キリトが敏捷という具合である。

普通ならばそこで二人ともムキになるほど、沸点が低い訳ではない。キリトが敏捷を重視していると言った瞬間ユーキは「だから貧弱なんだよ、このハエ野郎」と小馬鹿にした態度を取り、キリトもキリトで売り言葉に買い言葉と言うかのように「すぐ切り込む脳筋野郎には言われたくないな」と挑発を仕返す。そうして両者はヒートアップして、勝負という結果に至った。

そうした理由なので、アスナはこの場にはいない。決着を着けることに夢中になりすぎて、どうやら置いてきてしまったようである。

こういった小競り合いが頻繁に起きていた。

パーティーを組んで三日しか経ってないものの、彼らの中ではポジションが出来上がりつつある。

キリトとユーキがみ合い、アスナが仲裁に入る。そんな奇妙な関係を築きつつあった。

そういうわけで、二人を一緒にするとすぐに喧嘩をする。

アスナもその辺り熟知しているからか、別行動を取る際に「二人とも、喧嘩しちゃダメよ」的なことを言っているもの、もはや一触即発。アスナの言葉は意味のないものとなりかけていた。

そんな空気の中、不機嫌そうにユーキは問いかけた。

「オイ」

「……なんだよ?」

「オマエ、妙なモンスターについて、どう考えている?」

あまりにも漠然とした質問に、キリトは文句を言わずに真剣に己の考えを答えた。

「そうだな……。イベントボスとかそういう類じゃない、と思う……」
「根拠は何だ?」

「この世界は仮にもゲームだ。こんな序盤の街で、イベントボスがPOPするのはゲームバランスおかしいだろ」

言われてみれば確かに、とユーキが頷くのを見て、キリトはそのまま続けた。

「それにモンスターがモンスターを襲うっていうのも腑に落ちない。こんなこと聞いたことも見たこともない」

今まで培ってきたベータテストの経験と、当時の情報、そして今の現状を分析してキリトは結論付けた。

むしろ嘘なのではないか、とさえ思っている。モンスターがモンスターを襲うなんて、MMORPGでも聞いたことが無い。ましてやソードアート・オンラインを作った茅場晶彦がそんなプログラムを組むとキリトには思えなかった。

仮想世界だというのに、まるで現実世界に起きている行為。弱者を虐げて、強者が生命体の頂点に君臨する。これはまるで――

「縄張り争い、ってヤツか」

「ああ」

同じ結論に至ったのか、ユーキの言葉にキリトは同意した。

でもそうなるとやはり疑問が生まれる。そんなモンスターの存在を茅場晶彦がプログラムしたのか。まさか茅場はプレイヤー達にクリアさせないつもりではないのか。だからこんなモンスターを製品版になって作り出したのではないのか。

様々な疑問がキリトの頭をよぎり、そのまま口にしてしまう。

「茅場は……テストゲームをクリアさせるつもりがあるのか……？　こんなモンスターを作った理由がわからない」

「……ンなもん、あのクソツタレにしかわからねえよ。それに——」

グツと拳を握り、忌々しげにユーキは吐き捨てるように。

「大層な理由はいらねえだろ。邪魔すんなら叩き潰す、それだけだ」

「……聞いていいか？」

「あ？」

「どうしてお前は、モンスターを討伐しようと思っただけ？」

その問いに、ハツと鼻で笑い小馬鹿にする調子でユーキは答えた。

「調子に乗ってそうで目障り、だから叩き潰す。動機なんざ、これだけで充分過ぎる」

「お前、危ないやつだな……」

ケケケ、と悪魔のように口元を歪めるユーキに対して、キリトはどこか引きながら感想をもらした。

その反応が気に入らなかったのか、今度は訝しむ表情でユーキが問いかけた。

「そういうオマエはどうなんだ？　ちよつと気になることがあるって

言ってたよな？」

「それは……」

表情が沈み、キリトは言葉に詰まる。

彼がここに来て、モンスターを討伐しようとしていたのは、罪悪感に駆られての行為だった。

デスゲームが始まって、直ぐに別れた仮想世界で出来た初めての友達のためである。

名前は——クライン。悪趣味な紅いバンダナをして、無精髭を

生やした男。キリトとだいぶ歳が離れているものの、顔はどこか愛嬌があり親しみやすい雰囲気を纏った男。

——俺はアイツを、クラインを見捨てた。

——自分が生き残るために、ここに置いてきてしまった。

当初は、はじまりの街周辺に湧くモンスターを狩っていけば生き残れるだろう、とキリトは考えていた。置いてきた自分は最低最悪な利己主義な人種だが、クラインははじまりの街にいれば、生き残ってくれる、そう考えていた。

だが——。

——でも、状況が変わった。

——はじまりの街も安全じゃない。

——モンスターがモンスターを狩る。

——それはプレイヤーが狩るモンスターも狩られてしまうということ。

——そうになると、クラインも安全じゃなくなる。

幸いにも、クラインと別れる前にフレンドリストに登録しており、彼が今どこにいるのかマップで確認済みだ。

クラインがいるのは、はじまりの街。つまり彼はまだ死亡していないことになる。

——だったら倒さなきゃ。

——アイツは俺を許してくれないかもしれない。

——だとしても、二回も見捨てるなんてゴメンだ……！

グツ、と。

硬い握り拳を作る。決意が固まるのと同時に、一つの疑問が生まれる。

はたして、これを隣で歩くユーキに伝えていいのだろうか、と。

この男はと言う反応をするのだろうか。

見捨てたキリトへの失望だろうか、それとも愛想を尽かすだろうか。と言う反応をするのか、全くわからない。だがこれだけは言えた。

——失望されたくない。

——何でかわからないけど、コイツにだけは失望されたくない。

こんな感情は初めてだった。

見た目はキリトと同年代だろう。人付き合いがあまり得意ではない、と自覚しているキリトにとつてユーキの存在は初めてだった。

情けない所を見せたくない、気に入らない、何よりも——コイツにだけは負けたくないという感情。当たり障りなく、誰とも争わないで過ごしてきたが、どうしてここまで感情的になるのか、キリト自身説明が出来なかった。

だからこそ、言葉に詰まった。

そんなキリトをいつの間にか、退屈そうに見ていたユーキは何かを察して。

「どうせつまらねえ理由なんだろう」

「……………え？」

眼を丸くさせるキリトに、ユーキはどこか小馬鹿にした口調で続けた。

「んな情けねえ面してんじゃねえよ。どんな理由かは知んねえが——」

「……………」

「——どんなもんであれ、それが下らないものであれ、戦う理由になんだろう。オマエはその下らないものに、必死こいてしがみついて

戦っていればいい。それで充分だ」

「……ああ、そうだな」

気を使ったのか、ユーキは踏み込んだ内容を聞いてこなかった。

だがそれがキリトにとって救いにもなる。彼の激励にも似た言葉に、今一度決意を固くする。

「さて、となると情報を集めねえと話になんねえな」

そういうと、ユーキは辺りを見渡して、適当に声をかけた。

勿論、粗暴な口調はなりを潜めて。笑顔で、満面の笑みで、人当たりの良い声で、彼は努めて明るい口調で。

「すみませーん、ちよつといいですかー？」

それを直視してしまったキリトは思わず「誰!？」とツツコミを入れるが、ユーキは反応を示さない。

彼の得意技である『猫被り』。それは威力が絶大で、誰も彼もがキリトのような反応をしまう――。

情報は特に、得られなかった。

かなり強力なモンスターが現れて、他のモンスターを狩り始めた。この辺りでは『モンスターキラー』と呼ばれているらしい。

モンスターキラーの数は一体。プレイヤーも果敢に挑むも、全く刃がたたず返り討ち。幸い死亡する前に離脱しているので、奇跡的に死亡者は存在していない。

しかし、はじまりの街のプレイヤー達の心は荒んでいた。

モンスターキラーがこの周辺から立ち去る気配がない。となると、

はじまりの街にいるプレイヤー達は経験値を稼ぐことも出来ない。かといってモンスターキラーを倒すことも出来ない。

その荒廃的な状況になりつつある最中、はじまりの街にいるプレイヤーの矛先はモンスターキラーではなく、自分たちを置いていったベータテストプレイヤー、つまりはベータテストターに向けられていた。

勿論、ベータテストターは彼らを見捨てたなんて考えてもいない。仮にそうだとしても、全てのベータテストターがそういうわけではない。中にはモンスターキラーに挑み、命からがら逃げてきた者も居たはずである。だがどういうわけか、初心者プレイヤーの矛先は、ベータテストターに向けられている。

数人に聞いても、ほとんどがそんな状態。はじまりの街の民意となっっている。

不可解な状況に、ユーキは吐き捨てるように感想をもらした。

「妙な話だ」

「……何がだ？」

ベータテストターへの中傷が多いことに気分が沈んでいるキリトを無視して、ユーキは不機嫌そうな口調で答える。

「考えても見ろよ。何でどいつもこいつも、モンスターキラーとかいう三流に意識を向けねえんだ」

「それは……事実だからじゃないのか？ ベータテストターが初心者を見捨てた。それがここにいる全員の意見なんだろう？」

「バカかオマエ？ 人の意見ってヤツが、こんな簡単に纏まるわけねえだろ。モンスターキラーが出てから数日しか経ってねえんだぞ？」

どこの誰を睨みつける訳でもなく、ユーキは虚空を鋭い目で睨みつけながら。

「――誰かが情報を操作してやがる。どんな意図があれ、目障りこの上ねえ」

「……なあ？」

とここで、意を決するかのような口調で、キリトが口を開いた。

「ユーキは、ベータテスターのことをどう思う？」

彼は何という反応をしてくるだろうか。

汚いだろうか、卑怯だろうか、それとも臆病者だろうか。キリトは様々な罵倒を考えるも、想像していたものとは全く違った反応をユーキはしてみせる。

「別に」

「……え？」

面を食らったような顔で、ユーキを見る。

本当に彼は興味がない様子で、その通りに続けた。

「興味ねえよ」

「な、何でだ？ ベータテスターはこの世界のことを事前に知ってた。だったら――」

「――初心者を救えたんじゃないか、って言いてえのか？」

鋭い目がキリトを射抜く。

そのままユーキは呆れた口調で続けた。

「ンなもん、無理に決まってるだろ。ベータテスターは万能じゃねえんだ。HPゲージが尽きれば死ぬ、オレ達と何も変わらねえ。自分の身を守るのが精一杯、それは間違っちゃいねえよ」

だがな、と言葉を区切り。

「初心者の言い分も考えようによつては的を射てやがる」
「え？」

「ヤツらの言い分は情けねえもんだ。自分たちはデスゲームに巻き込まれた、だから経験者は自分たちを助けるべき。んなふざけたことを、声高々にほざきやがる」

チツ、と舌打ちを一つすると、忌々しげにユーキは続けた。

「だがそれも仕方ねえだろ。そう言うヤツらは弱い訳じゃねえ、戦うことに向いてるか向いてないかってだけの話だ」
「……………」

「だがどういうわけか、それがどいつもこいつもわかってねえ。戦えるヤツ、強いヤツだけが崇められて、戦えないヤツ、弱いヤツが世界から淘汰される」

本当に、世界は不平等過ぎて、虫酸が走る、と心の中で言い捨てて、ユーキは続けた。

「ベータテスターも初心者も被害者だ。真に憎むべきはこの世界を作ったクソツタレじゃねえのか。——というのが、オレの意見なんだが、どうだった？ ベータテスターのキリトくん？」
「……………知ってたのか」

「オマエは戦い方が上手かったからな。とてもじゃねえが、初心者には見えねえよ」

吐き捨てるように答えて、ユーキはそのまま口を開く。

「オマエがベータテスターであることを後ろめたく思つてようが構わ

ねえ、オレの知ったこつちやねえからな。だが少しでも、今の状況をどうにかしたいっていうのなら、少しは胸を張って名乗れるよう努力してみろ」

「努力、か……」

具体的な方法は言われない。

というよりも、キリトにはそれを尋ねる気がなかった。これは自分がどうにかしなければならぬ問題であると、彼は重々承知している。

それよりもキリトの意識は、ユーキの価値観に向けられていた。

まるで不平等を嫌うような、あまりにも漠然として、抽象的なものに彼が憤りを感じてる節が、言葉の端々に見て取れる。人間個人ではなくもつと大きな、例えば――

と、そこまで考えていると――。

「た、大変だあ！」

広場に悲鳴に近い声が木霊する。

それは男の声。彼は息を切らして、肩で息をするように。

「も、モンスターキラーが出たぞッ！ フィールドには絶対に――」

出るな。

という声が聞こえる前に、ユーキとキリトは駆け出していた。

向かう先ははじまりの街周辺のフィールド。つまりはモンスターキラーの元へと――。

.....

.....

PM18:00 はじまりの街 周辺フィールド

——それは、あつてはならない異形だった。

月明かりが、フィールドを照らし出し、灰黒く青ざめた野原。そこに、居てはならないモノが存在する。

運が悪く、遭遇したのは六人の人影。どれもこれも、初期装備で身を固めて、とてもではないが異形と相對するには相応しくない格好であつた。

追求するまでもない。

その異型こそ、この辺りで問題とされている『モンスターキラー』に他ならない。

全長二メートルほどある体格に、肌は赤色で、筋骨隆々とした姿で、地に足をつけている。片手に持っているのは、岩で出来た大雑把過ぎる両手剣。顔面はどこか人間のようであるが、生気がまったく感じられない。

何よりも注目するのはモンスターキラーが纏っている気配である。

「あ……あ……」

誰一人、身動きが取れなかった。

六人が六人とも、仮想世界に作られた身体が、つまりは脳が理解してしまった。

アレは、化物だ、と。彼らは視線も合っていないのに、ただそこにいるだけで『恐怖』し身動きが取れなくなっている。少しでも動けばその瞬間に死ぬ。そんな希望がない事実を、彼らは突きつけられてい

た。

——う、動けねえ……！

指さえ動かない。

圧倒的恐怖で動けない中、無精髭を生やした赤バンダナのプレイヤー——クラインはどうかして現状を打破しようとするも。

——考えが纏まんねえ……！

モンスターキラーが放つ圧倒的な恐怖に、クラインも含めた他の五人が絶望する。

歯がガチガチ鳴り、膝がガクガクと震える。こんな状態で逃走なんて出来る筈がない。

そんなプレイヤーたちを威嚇するように——

「！！！！」

威嚇するように、モンスターキラーが吠えた。

まさにそれは地獄から這い出てきたような叫び声。心を鷲掴みにするような咆哮であった。

だがそれと同時に、二人の影が駆けつける——。

「く、クライン……！！」

「お前え、キリトか!？」

クラインからしてみたら有りえない人物の登場で、キリトからしてみたらここにはならない人物の存在に、それぞれ驚きの声を上げる。

そしてキリトはそのまま、モンスターキラーに目を向けると。

——ッ!?

ピタツと、足を止めてしまった。
眼を丸くさせて、足が震えながら。

——な、何だあれ……!!

——足が思ったように動かない。

——手が、震える……!?

圧倒的な死の気配。

それは脳に直接叩きつけるように、キリトの仮想世界での身体を蝕んでいく。

その一瞬の隙が仇となった——。

「!!!!」

空気が震える咆哮。

紅い肌の巨人は、一息に距離を詰めて、クラインの仲間である一人に斬りかかる——!

三つの声があった。

待て、というクラインの悲痛な叫び。

やめろ、というキリトの絶望にも似た声。

そして、クラインの仲間の叫び声。

だがどれも間に合わない。

恐怖に駆られて動けない者では、これは間に合わない。ただ間に合うとしたら——。

「チッ」

——恐怖を感じない、命知らずな馬鹿野郎だけだろう。

舌打ちがあった、それと同時にモンスターキラーとクラインの仲間

の間に馬鹿野郎——ユーキが割って入る。

岩塊そのものと言えるモンスターキラーの大剣を、ユーキのアニールブレードで受け止めていた。

「グッ……！」

瞬間、地面が陥没し、口元を苦しげに歪める。HPゲージがそれだけで半分削られて、一気にイエローゾーンにまで到達してしまった。一発でもまともに喰らえば即死。

そこへ間髪入れずに、旋風じみた一閃が、ユーキに襲いかかる。

「クソツ……！」

受け止めきれない、と判断したのか。

クラインの仲間の襟首を片手で持つと、ユーキは強引に転がって避ける。地面を転がるクラインの仲間にユーキは眼もくれずに直ぐに態勢を立て直して、真正面からモンスターキラーを見据えて叫ぶ。

「テメエらはさっさと散れ！ 戦いの邪魔だ！」

自分よりも幼い子どもを置いて行くのが、本能的に拒否したのだから。

クラインは抗議の声を上げるも。

「け、けど——」

「邪魔だっというのが聞こえねえのか！ テメエらがいると、勝てるもんも勝てなくなる!!」

それでもクラインは尻込みするも、彼の方をポンツとキリトが叩いて。

「クライン、行ってくれ」

「キリト！　だ、だけどよお……！」

「頼む、行ってくれ。ここは俺達が何とかするから」

「！！」

キリトの言葉にようやく決心したのかクラインは何かいいたげな顔のまま「待ってろ、直ぐに助けを呼んでくる！」と大きな声を上げて仲間たちと共にその場から離脱した。

恐怖はあつた。まだ足も震えている。手も上手く剣を握れない。

それでもキリトは真正面から、モンスターキラーを見据えて、背中からアニールブレードを抜いてユーキと肩を並べて、モンスターキラーを見据える。

逃げるわけにはいかなかった。クラインを助けるためにも、そして何より――。

「五分くらいなら時間を稼いでやる。オマエもさっさと逃げろ」

「逃げるわけ無いだろう」

――ユーキには負けられない。

先程ユーキの言ったようにこれは下らない理由なのだろう。だがそれでも彼は言った「戦う理由には充分だ」と。ならばこそ、キリトが戦う理由には充分過ぎる――。

その決意が表情に出ていたのか、決して折れることがない気配を感じ取ったのか。

ユーキはどこかリラックスした様子で、小馬鹿にする態度で。

「逃げてもいいんですけど？　足震えてたろ、ビビりくん？」

「直ぐに無茶をやるカッコつけマンには言われたくないな」

抜かせよ、とユーキが言い捨てるのを聞いて、キリトがいつもの調子で口を開く。

「勝負しようぜ、ユーキ」

「あ?」

「どっちが目の前の獲物を狩るかって勝負だ」

「ハッ……」

鼻で笑うと、ユーキはアニールブレードを上段に構える。

それと同時に、不敵に口元を歪めて一言。

「上等だよ——!」

もはや言葉はいらなかった。

ベータテスターと命知らずは地面を蹴る。

縄張り争いの生存競争の火蓋が切って落とされた——。

.....
.....
.....

同時刻

その様子を見ていたフードの男は分析する。

——あのモンスターは私のデザインしたものではない。

——となると、誰の仕業か。

——考えるまでもない、カーディナルの仕業だろう。

——恐らく、実験の影響で優希君から受けた『恐怖』を学習し、その姿を模した姿があの人。

——その恐怖は脳に直接働きかけてくる。

——故に、仮想世界にいる全員が全員、あの姿を見たら恐慌状態になってしまう、と。

今だに自分の手が震えることを認識しつつ、彼は続けた。

——モンスターを狩るのも、プレイヤー達がモンスターによるゲームオーバーを防ぐためなのだろう。

——だがそこがAIの悲しい思考回路か。

——カーディナルはまだ人間を理解していない。

——通貨を稼がないと寝泊まりする場所も確保できない。

——だからプレイヤー達はモンスターを狩ろうとするのだ。

——その辺り、まだまだ学習不足ということか。

そこまで分析すると、フードの男はメインメニュー・ウィンドウを開き、ゲームマスタータブを開く。

本来であれば、プレイヤーは開けないメニューを開くと、アイコンの上にプレイヤー名が表示された。彼が注目するのは『Y u k i』ではない。

——彼のプレイヤー名は……キリト君か。

——彼は、何者だ？

——最初は恐怖で動けなかったのに、今では克服して、彼の隣に立っている。

——脳に直接働きかけられた恐怖は簡単に払拭できるものではない。

そこでようやく、フードの男はキリトからユーキへと興味を向ける。

——彼はその辺り、壊れている。

——そういう風に作り変えられた人物だ。

——『恐怖』を直接叩き込まれても、直ぐに動けるのも領ける。

——だがそれも諸刃の剣となりえる。

——アレでは、死ぬときはあつさり死ぬ。

——そんな危うさを持っている

だが、と言葉を区切り再びキリトへと興味を向けた。

——だがキリト君は普通の少年だ。

——普通の少年が、恐怖に打ち勝ち、立ち向かえるのか？

——そんな意思の力を、システムすら凌駕する意志の力を備わっているか？

——そこまで考えて、彼はフードを取る。

二十代半ばの、長身で痩せ型。秀でた額の上に鉄灰色の前髪が流れ入る男性。

——キリト君が先天的な意志の強さなら、ユーキ君は後天的な強靱な精神力。

——ユーキ君は前を最短距離で進む者なら、キリト君は例え遠回りでも力強く前へと進むもの。

——合わせ鏡のようだ。

——似た者同士といえるだろう。

——何にせよ。

「楽しみだよ」

と、彼はメインメニュー・ウインドウを閉じる。

その瞬間彼のプレイヤー名が見えた。名前は『Heatcliff』の文字。ヒースクリフと読むのだろうか——。

第5話 『スイッチ』

PM18:15 『第一層』はじまりの街 噴水広場

はじまりの街は、明るい月明かりに照らされていた。

太陽が沈み、街灯が灯り始める。それでも広場にはポツポツとプレイヤーが存在しており、まだ一日が終わっていないことを教えてくれている。

露店ではNPCの呼び込みが耳に入り、酒場からは人々の喧騒が聞こえてくる。

そんな中、不機嫌そうな様子で歩く女性プレイヤー——アスナがズンズンと力強く歩を進めていた。

朝から置いてきぼりをくらったアスナは、こうして一人で情報収集に励み、現在に至っている。彼女が不機嫌そうにしているのは単純な理由だ。一人で情報を集めていることではない、もっと単純な話、自分だけ置いてかれて、除け者にされた。そういった簡単な理由で、彼女は不機嫌になっていた。

「二人は本当にもう！ 本当にもう！」

と、怒っていてもアスナは周りの目を集めていた。

ソードアート・オンラインでは珍しい女性プレイヤーかつ、誰が見ても美少女と判断するくらいの容姿をしているのだ。眼を引かない訳がない。

通常ならばここで、行動力のあるプレイヤーの一人や二人、声をかけることだろう。

怒っている彼女の話を聞いて、あわよくば仲良くなりフレンド登録して、それ以上の関係に発展しようと努力するだろう。だがだれも声をかけない、いいや、声をかけられないと言った方が正しいのかもしれない。

アスナに声をかけるとしたら、彼女が一人のときだろう。

だが生憎、今の彼女は一人で行動していない。
隣には屈強な男が。

肌が黒いアフリカ系アメリカ人。身体も筋骨隆々としており、一目見たら誰もが道を譲る。そんな体格をしている男性プレイヤーと、アスナは一緒に歩いていた。

男性プレイヤーは困ったような顔をして、アスナを宥めようと口を開く。

「まあまあ、そんなに怒るなよアスナ」

「でもドリユーさん！ 二人つたらいつも顔を合わせると喧嘩ばかりするんですよ!？」

ドリユーと呼ばれた男——アンドリユー・ギルバート・ミルズはそれを苦笑しながら受け止める。

アンドリユーとアスナが再会したのは偶然だった。はじまりの街でアスナがモンスターキラーの情報を集めていると、同じく行動していたアンドリユーと偶々バッタリとここで再開したのだ。

そうして二人は現在に至る。

お互いの近況を報告していたら、いつの間にかアスナの愚痴のはけ口とアンドリユーは化していた。

「男つてのはそういうもんだ。俺にも若い頃あったなあ、そういうの……」

「本当に理解出来ません……」

どこか懐かしむような口調で過去を振り返るアンドリユーに対して、アスナはジト目で呆れたように見つめる。

それはそうと、と言うかのように、アンドリユーは宥めるようにして。

「それよりもアスナ。今の俺はお前たちの知るドリユーさんじゃない

い、俺は『エギル』だ。もう一人の自分、素敵な自分、俺は斧使いのエギル」

「あ、それ重要なんですかね？」

「重要に決まってるだろ。こんなことになっちまったが、もう一人の自分を作ってMMOを楽しむ。それがMMOの醍醐味なんだからな」

むしろ、と言葉を区切りアンドリューは——エギルは呆れた口調で。

「本名をプレイヤーネームにするのはどうかと思うけどな。アスナといいユーキといい」

まあ、アイツはMMOをピコピコって言っちまうくらいだから仕方がないが、と感想を漏らす。

それを聞いたアスナはどこか恥ずかしげに、うう……、と唸りながら。

「始める前に、ちょっと勉強してきたんですけど……」

「……ちなみに、何を勉強したんだ？」

「めくり、の重要性について……」

「……アスナ、それは格ゲーだ。MMORPGにまったく関係ない」

あう、と耳まで真っ赤に染めて、アスナは視線を地面に落とした。恥ずかしすぎて、眼と眼を合わせて会話もできない、と言わんばかりの様子である。

その様子を見て、エギルはニカツと気持ちのいい笑みを浮かべる。

「俺としては呼びやすいけどな」

「わたしも、ドリュウさんって呼び方が呼びやすいんですけど……」

「ダメだ、今の俺はエギル。もう一人の自分、素敵な自分、俺は斧使いのエギル」

そこは譲らないのか、エギルは頑なとなっている。

そもそも今のエギルは、現実世界での姿。つまりはアンドリユー・ギルバート・ミルズに他ならない。いくらエギルに拘ろうと、現実世界の姿なのだから、その拘りは無意味な気がしないでもない。

笑みも勿論、アンドリユーのもの。

どこかホツとしたように、胸を撫で下ろすような口調でエギルは続ける。

「しかし安心したぞ。デスゲームが始まって、俺もお前達を探してたんだが、元気そうじゃないか」

「んー、実はわたしも初めは参ってて……」

あはは、と当初の頃を思い出しながら、アスナは乾いた笑みを浮かべて。

「でもユーキ君はいつもどおりでしたよ」

「この状況で、いつも通りってある意味おかしいけどな……」

エギルはユーキのいつも通りを想像した。

口が悪く、粗暴な態度で、どこかいつも苛ついている様子。どこかぶっきら棒で、不器用極まりない少年を思い出して、エギルは口元を緩めて。

「アイツもモンスターキラーを追ってるんだろ？」

「はい。話を振ったのはわたしだけど、聞いたら黙ってないと思ったから……」

「一人で突っ走るだろうな。だったら先手を打って、話を振ってついていこう、と」

それに同意するように頷くアスナをみて、エギルはどこかからかう

ように顔に笑みを張り付かせて。

「よく理解しているんだな？」

「ユーキ君はわかりやすいですから」

「そうか？ かなーり、捻くれてると思うがね俺は」

エギルの言うことも尤もだ、と感じたのかアスナは言葉に詰まる。
そうしていると――。

「ん？」

アスナはフィールドに続く道が騒がしいことに気付いた。
どこか切羽詰ったような、必死な大きな声が聞こえる。
エギルもその声に気付いたのか、訝しむように口を開く。

「何かあったのか？」

「さあ？」

二人は駆け足気味で近付いた。

そこにいたのは六人の男性プレイヤー。全員が全員、通るプレイヤーにしがみついて何か懇願しているようである。

あまりにも必死過ぎる形相に、プレイヤーたちは遠巻きに見守ることにしか出来ない。

その六人の中で、リーダー格のような赤いバンダナを巻いた男性プレイヤーが、膝をつきながら大きな声で叫ぶ。

「頼むよ！ みんな、力を貸してくれ！ 友達が危ねえんだ！」

「おい、落ち着けよ。何があった？」

いつの間にかエギルは近付いて、落ち着かせようと穏やかな声で問いかける。

だがそれで赤いバンダナの男性プレイヤーは落ち着くはずもなく、むしろ興奮気味にエギルに掴みかかり。

「アンタ、頼む！ 一緒に来てくれ！」

「ま、待て！ まず何があったか説明しろ！」

「モンスターキラーだよ！ モンスターキラーが出たんだ！」

それを聞いた、遠巻きに見ていたプレイヤー達は息を呑んだ。

モンスターキラー。最近この周辺に出没している謎のエネミーモンスター。その行動パターンもありえないもので、モンスターを狩り続ける異端の存在。かなり強力なモンスターで、死者は出てないものの全員が全員返り討ちとなっている。

エギルとアスナ以外のプレイヤーの心は一つだ。

モンスターキラーが出たのなら、関わり合わなければいい。放っておけば凌げるモンスターだ、圏内である街まで来ないのだから放っておけばいい。故に、誰も耳を貸さない。触らぬ神に祟りなし、ここで立ち向かい死ねば元も子もない。

彼ら以外のプレイヤーの見解である。

それを聞いたアスナとエギルはお互い顔を見合わせて頷いた。

そこでエギルはエネミーモンスターがどこにいるのか、聞こうとするも遮られる形で。

「頼むよ、一生のお願いだ！ 一緒に来てくれ！ じゃないとキリトが、俺の友達が危ないんだ!!」

「え……？」

思いがけない名前が出た。

キリトといえ、この数日自分とユーキと共にしていた彼のことを言っているのだろう、とアスナは直ぐに判断する。

となれば、彼だけではない。今は自分と別行動の、もう一人とキリトが今は行動を共にしている筈――。

そこまで考えるとアスナは思わず、反射的に赤いバンダナの男性プレイヤーに掴みかかり、彼以上の必死な声で問いかける。

「あのっ、もう一人いませんでしたか？ キリト君以外にももう一人！」

「あ、ああ。金髪の兄ちゃんがいたけど——」

そこまで聞くと、アスナはモンスターキラーが出たというフィールドに疾走した。

背後から「アスナ！」とエギルから呼び止められる言葉が耳に入るが、それで停止するつもりは彼女にはない。

だって、今も戦っているのだから。

このデスゲームに巻き込んでしまった彼が、自分よりもオマエの方が辛いだろう、と断言してしまう彼が。

——ユーキ君……!!

.....
.....
.....

同時刻

——ゴウツ、と風を裂く音が聞こえた。

ユーキとキリト。二人同時に弾けるように事で、仮想世界の大気は

切り裂かれて、空を切る。

ユーキは右方から、キリトは左方から。

それぞれ挟撃するような形で、彼らは赤い色の巨人——モンスターキラアの元へと突き進み剣を振るう。

対するモンスターキラアは何の反応も見せなかった。

ただそこに在るかののように、佇んでいるだけで。

あまりにも隙がありすぎる。

それを見逃すほど、二人は甘くない。

「オラア！」

「ツ！」

ユーキはモンスターキラアの腕めがけて剣を両手で持ちながら上段から振り下ろすように、キリトは片手で脇腹を横に薙ぐように斬りつける。

だが——。

「何だと……？！」

それはどちらの声だろうか。

モンスターキラアは無傷。その皮膚に剣が通らず、かすりもしない。モンスターキラアのHPゲージが微かに削れただけで、大したダメージにもなっていない。

——何て出鱈目……！！

思わずキリトが忌々しげに、心の中で吐き捨てた。

それと同時に、モンスターキラアは鬱陶しいハエを追い払うように、ただ乱暴に片手で石斧剣を構えて横に一閃する。

キリトはそれを紙一重で避けるものの。

「グッ……！」

ユーキは避けきれずに、剣で防御する。

そのまま彼は弾き飛ばされて、地面に叩きつけられるものの、直ぐに態勢を立て直し地に膝をつけることなく、再度モンスターキラへ突進する。

——これは、ヤバイ……！

それを見ていたキリトは、紅い巨人の乱雑な剣を避けながら結論付ける。

このままでは負けるのは目に見えていた。

攻撃が届かない、ポテンシャルが違いすぎる、何よりもまるで歯が立たない。

これではいいところ、勝負を長引かせるのみだろう。それほどまでの相手。キリトとユーキの二人がかりでも、紅い巨人との差は埋まるところがない。

それはユーキも理解しているのか、忌々しげに舌打ちをする。

——こうなると、ジリ貧だ。

——いったん距離を開けて、態勢を立て直す。

それすら許さない。

そう言うかのように、紅い巨人がキリト目掛けて、大雑把過ぎる石斧剣を一閃する。

圧倒的リーチ。後ろに下がっても、そのまま避けきれずに腹を横に斬りつけられてゲームオーバーになるだろう。ならば——。

——前に、跳ぶ……！

瞬時に判断すると、キリトは敢えて前へ跳躍し、紅い巨人の身体を

蹴りつけて後方へと飛び一気に距離を開けた。
そして着地するや否や。

「ユーキ、一度距離を開けろ！」

その声に、ユーキは頷いた、ように見えた。

何度か紅い巨人と斬り結び、縦に割るような剣を防御して、その勢いでユーキは後方へと吹き飛ばされながら下がる。

そして直ぐに立ち上がり、ユーキはキリトと今一度、肩を並べてモンスターキラーを見据えた。

「ツッ!!」

咆哮。

その場から一步も動かずに、威嚇するようにモンスターキラーは絶叫する。

「チツ、露骨な野郎だ。勝鬨のつもりか？」

吐き捨てるように言うと、ユーキはキリトに問いを投げた。

「距離を開けたが、オマエ何か策でもあんのかよ？」

「……………」

そんなもの、キリトにはなかった。

距離を開けた、その後どうすればいいのか。まったく考えもつかない。今までは、攻略法が頭によぎった。どうすればモンスターを倒せるのか、今までの経験を踏まえて回答を導き出すことが出来た。

だが、眼の前にいる紅い巨人は別格。レベル差がありすぎる、こんな装備では歯が立たない、何よりも——勝てるビジョンが浮かんで来ない。

キリトの沈黙が答えと見たのか、ユーキは軽い口調で。

「仕方ねえ、今からオレが斬り込む。オマエはあの三流を観察して、弱点でも探っとけ」

「な、何を言ってるんだお前！」

隣にいる男が何を言っているのか理解出来ない。

そう言いたげな表情で、眼を丸くさせてキリトは慌てる。

しかしユーキの様子は変わらない。

特別問題視してないように、当たり前口調で。

「オマエは視野が広い、洞察力もオレよりも上等だ。この人選に間違いはねえ筈だが？」

「でも、それだとお前が……」

死ぬかもしれない、と心の中でキリトは呟いた。

そう、死ぬかもしれない。あの怪物に単身で斬り込むというのだ。二人でも全く歯が立たないというのにも関わらずだ。それがどう言う意味なのか、理解していないユーキではないだろう。

ユーキはメインメニュー・ウインドウを開く。そしてアイテムタブから回復ポーションを実体化させると、それを一気に飲み干して。

「オレの心配する前に、オマエはオマエの仕事をしろ。さっさと弱点見つけねえと、オレが死にまうぞ——！」

「ま——」

待て、とキリトが言い終わる前に、ユーキはモンスターキラーへと推進する。

——一人で行かせるか！

——無茶をするやつと思ってたけど、ここまでとは思わなかった

……！

反射的に、キリトもユーキの後を追うように、モンスターキラーへと突進しようとする。

同時にモンスターキラーの石斧剣がユーキに振り下ろされて。

「——ッ！」

落下してくる落石を押しとどめるように、ユーキはその攻撃を迎え撃つ。

——空間が揺れる。

漆黒に染まり、月明かりが目印となっているフィールドに、二つの影が交差する。紅い巨人はやはり圧倒的だ。

薙ぐ一撃が暴風であるのなら、振り下ろされる一撃は落雷そのものようで、まともに身体の何処かにくらえば、ユーキにとって致命傷なり得る。そこまで強力かつ、悲しいほどまでに力の差があった。

だがそれを正面から。

怯むことなく、全力でユーキは弾き返す。大嵐のようなどうしようもない脅威に対して、彼はただ全ての力を用いて弾き返す。ただ弾き返す。

「グッ……！」

ユーキの表情は苦悶のそれに変わる。

それもそうだろう。何度も続く間断なき剣戟、その一撃一撃が重く響き、ユーキの身体が軋みを上げる。

だがこうして僅かに拮抗出来ているのは、ユーキが『防御』ではなく『攻撃』に回っているからに他ならない。

防御に回れば最後、モンスターキラーの嵐のような連撃にHPゲージが削られて敗北することを、先程の戦闘で彼は理解している。ならば攻撃で、キリトが弱点を見つけるまで、粘ればいいだけの話なのだ。

——アイツ、本気で俺に任せるつもりか……。

——あー、クソツ。

——本当に無茶ばかりする奴！

——何か、アスナの気持ちがちよつとわかった気がする！

ならば、と。

仕事をしつかり全うしてやる、とキリトは集中して怪物に意識を向ける。

キリトの耳に入るのは絶え間ない剣戟の音。火花が散り、鳴り響く度に、世界が震える。

確かに見ようによつては拮抗出来ているのかもしれない。だがそれも長くは持たないだろう。間合いが違う、レベル差が違う、速度が違う、何よりも——威力が違う。

ユーキに出来るのは、避けきれない剣圧に真正面から剣を打ち立て、威力を相殺すること。

戦力が違いすぎる。が、それはユーキも百も承知している。それでも、彼はキリトに千載一遇の機会を賭けた。

それを見て、キリトは。

——凄、い……。

思わず、息を呑む。

一撃毎に、微かにユーキは傷ついている。

それはHPゲージが削られ形となつて残っている。だがそれでも、ユーキは怯まない。この場において誰よりも前を向いており、誰よりも愚かに前へ前へと進んでいる。

「!!!」

紅い巨人が吠える。

その咆哮は先程の自身を誇示するものではなく、アレは威嚇、困惑が混じっている物だった。

自分のほうが明らかに勝っている、それでも倒れない、諦めようとならない。モンスターキラーの中に処理しきれない困惑が生まれていた。

この男をこれ以上存在させてはならない、と。

モンスターキラーは痺れを切らしたように、石斧剣を乱雑に横に薙ぎ、ユーキを弾き返す。

だがそれでも――。

「ハッ、響かねえぞ！」

彼は倒れない。

地面に叩きつけられようとも、直ぐに立て直してモンスターキラーへと推進する。

――だが、それも限界だ！

――ユーキの奴、息も乱れてるし、動きも雑になってきている。

――これじゃ、長くは……！

そうしてキリトの眼に映ったのは、何度目かの激突。

再び、剣戟が巻き起こるのだが。

――なん、だ……？

キリトはある何かに気付いた。

その視線は紅い巨人へと向けられる。それは胸部、紅い巨人はどこかその辺りを守るようにして、戦っていた。

——アレか！

——あそこが、アイツの弱点！

わかるや否や、キリトは声を上げようと口を開く。

だが同時に、ユーキの身体が弾け飛んだ。アレは剣戟によるものではない、ユーキは烈風じみた一撃を防御して、まともに受けてしまった。

「このっ……！」

すぐに立ち直り、剣を構えるも。

「！！」

ようやく見せた隙を見逃さず、紅い巨人は咆哮と共に肉薄する。

大振りの横薙ぎの一閃。その一撃は致命的だ。今のユーキでは避けきれ——。

「バカが！ 下手こきやがって、この三流がア！」

彼は身を低くして掻い潜り、紅い巨人の胸元を斬り上げる。

だがそれでも、HPゲージは僅かに削れるのみである。だが——

「!？」

モンスターキラーは大きく後方へ跳躍して、ユーキと距離を開けた。

ここで限界だった。ユーキは膝を地面につかないものの、剣を地につきたて何とか支えることにより立っている。息も荒く、汗も滴る。

HPゲージも既にレッドゾーンになっており、あと一撃喰らえば

ゲームオーバーとなっていただろう。

「ユーキ！」

「よお——どうだよ、弱点——わかったか……？」

肩で息をしながら尋ねるユーキに、駆け寄ったキリトはどこか表情を暗いまま。

「ああ」

「どこだよ？」

「胸だ。多分、あそこが弱点」

「あ？ ……そうか、だからあのデカブツ一度引いたのか」

自分が斬りつけた場所が胸部だったことを思い出して、ぼんやりとした口調で言う。

すぐに息を整えて、地に刺していた剣を引き抜いて、粗暴な口調で。

「策も思いついたんだろ？」

「……ああ」

弱点がわかると同時に、キリトはモンスターキラーを打倒しうる策を思いついた。

だがそれは、彼を危険に晒すことになるものだ。だからこそ——

「ユーキ」

「あ？」

「ここに選択肢が二つ用意できる」

この方法ではないやり方を選択させなければならぬ。

だがユーキの態度は淡白なもの。どこかキリトの思惑を見透かす

ような言動で。

「言ってみろ」

「一つは増援を待つか。ここにいたクラインってやつは俺の友達だ。ソイツが援軍を連れてくると言った。だから——」

「却下だ」

迷いない発言に、キリトは言葉をつまらせる。

ユーキはキリトから目を逸らさずに、嘘をつくのは許さないと云うかのように、真正面から視線を送りながら。

「オマエだっかわかってんだろ。アレは戦力が増えたところで結果は変わらねえ。増えんのは死体の山だけだ」

「だけど……」

「良いからオマエの策を言えよバカ」

これ以上聞く耳持たない、とユーキの視線がそう語っている。

その視線を受けて、キリトは意を決して、残酷な言葉を口にする。

「二度、アイツの胸に、傷をつけることが出来れば、突破できる。傷の上から攻撃すれば、固くても攻撃は通るだろう」

でも、と言葉を区切り。

「俺のステータスは敏捷に振ってる。とても俺の攻撃力じゃ傷をつけることが出来ない」

それは暗に、ユーキを捨て石にして、キリトがトドメを刺す。と言ってるようなものだった。

この作戦は一番最初に、特攻をかけて弱点を傷つけて、二発目の人間の剣でトドメを刺すというシンプルな作戦だ。となると一番危険

なのは、最初に特攻をかける人間である。

もちろん、全力で斬りつけるのだから、その後は無防備だ。十中八九、モンスターキラーの反撃を食らうことになる。そうなる待っているのは——ゲームオーバー。仮想世界での死であり、現実世界の死にも繋がる。

だからこそ、この作戦を進める訳にはいかない。

キリトはやめよう、と声をかけようとするも。

「オレが斬り込んで、傷口作りやいいんだろ？」

「お、お前わかっているのか!？」

思わずキリトは掴みかかる。

まるで自分の命を勘定にいけないような口ぶりに、キリトは自身身わからない憤りを感じていた。

「死ぬかも知れないんだぞ！」

「どうせ人ってのはいつか死ぬ、それが遅いか早いかだ。もしここでオレが死ぬのならそのときだ、死ぬ直前でどうするか考える」

「お前——」

「いいかキリト、よく聞け」

掴まれていた手を強引に引き剥がして、ユーキは真剣な表情で続けた。

「アイツを倒さねえと、この辺りの未来はねえ。そうなればゲームオーバーだ。茅場の勝ち、あのクソツタレが笑うことになる」

「……………」

「あのクソの思惑をひっくり返すためにも、アイツは倒す。今日、ここで」

そう言い捨てると、ユーキは再びメインメニュー・ウィンドウを開

き、アイテムタブから回復ポーションを選択し実体化させ、強引に飲み干して捨てた。

「一撃くらい食らってもギリギリ持つだろう」

「……アイツを傷つけることが出来るのか？」

「まあ、一撃くらいならな。だから二撃目はねえ、一撃で何もかも込める。だから——」

三步キリトの前へと進み、俄然の敵を——モンスターキラーを睨めつけながら、背後にいるキリトに告げた。

「——オマエが倒せ」

「——」

本当にこの男は前しか見ていない。

自分の命を二の次に、誰よりも真つ直ぐに前だけを見ている。

——本当に頭に来る。

——無茶ばかり。

——フオローする身にもなってほしい。

でもだからこそだろう。

キリトはこの男には負けたくないと考えた。負けられないと思った。この感情が何なのか、自分でもわからない。この感情を知るために、この男をここで死なす訳にはいかない、そう思った。

ユーキは構える。

剣を両手に持ち右方に構える。剣先を天に掲げ、その様子は昇り龍のようで、一撃に何もかもを掛ける。そういつた構えだ。もはや二撃目など考えていない。

元より二撃目など必要がない。二撃目はキリトだ、アイツが何もかも決める、と心の中で結論付けて。

彼は眼を閉じる。

思い出すのは『怒り』の感情。世界を理不尽の呪い、世界に無慈悲な憎悪を向ける。

これは儀式。怒りを力に変える儀式。

思い出すのは、今までの人生。両親を理不尽に奪った世界、茅場晶彦の顔、そして無様に生き残ってしまった何より許せない自分自身。蒼い瞳に、暗い感情が宿る。それは怒りであり、憎悪であり、憤怒である。絶対的な殺意、確固たる殺気。

漆黒の意思を眼に宿し、ユーキは告げる。

「——合わせる」

「わかってる——！」

同時に、二人は駆け出した。

縦一列に、まるでフォーメーションを組んでいるかのように彼らはただ疾走する。

「!!!!」

それを、玉砕と紅い巨人は捉えたのか。嘲笑うように咆哮を上げる。

そして横一閃に薙ぎ払おうとするが。

「——ッッ!!」

それよりも早く、疾く、ユーキの剣が紅い巨人胸部目掛けて振り下ろされる——。

斬、という音が聞こえて、紅い巨人の悲鳴が響き渡る。攻撃は——通った。弾かれることなく、ユーキの全霊の一撃が通る。

だがそれが癩に触ったのか、紅い巨人攻撃は止まらない。

致命傷となる横薙ぎの一撃にユーキに襲いかかる——!

「チツ——」

舌打ちがあった。

完全に防ぐのは不可能、かといって避けるのも不可能。

咄嗟にユーキは横に大きく跳躍し、勢いを殺そうとするも

「ガ——ッ!!」

咄嗟に腕を上げて防御する。

しかしながら、それで防げる生易しい攻撃じゃなかった。ユーキの身体と石斧剣が接触した瞬間、ユーキの片腕は斬り飛ばされて、このまま振り抜けば地面に叩きつけられ、交通事故があったように数メートル跳ね飛ばされるだろう。

キリトは思わず立ち止まる。

ユーキ、と声を上げそうになるが。

「スイ——ツチ——!」

今までいがみ合ってたユーキが、初めて連携の合図を口にした。

その言葉が教える——まだ戦闘が終わっていないことを。

その眼光が訴える——オマエが倒せと。

ならば応えなければならぬ。

あの男が、自分が勝ちたいと願っている男が、自分に願っているのなら、応えなければならぬ。今までいがみ合ってたヤツから『スイツチ』なんて言われたのだ。応えなければならぬ——!

そう心が理解したキリトは。

「うオおおおおオオオオオオ!!」

跳ね飛ばされたユーキに目をくれず、キリトは雄叫びを上げてモン

スターキラーへと斬りかかる。

そうして剣が光る。繰り出すソードスキルは『バーチカル・スクエア』片手剣のソードスキルの一つ。4連撃垂直に斬り込む連続技だ。

——それじゃ遅い……!!

——ただの四連撃じゃ遅いんだ!

——それじゃ倒せない。

——それこそ、『同時に叩き込まないと』遅すぎる……!!

「届けえええええええええええ!!」

キリトの咆哮に答えて、彼が持つアニールブレードが一際輝き始める。

そして彼は胸元に、剣を斬りつける。その数は十、それを『ほぼ同時』に紅い巨人に叩き込む——。

瞬間。

「!?!?」

絶叫にも似た劈く悲鳴が、夜のフィールドに響き渡る。

同時に、ビシツと音を上げて紅い巨人の身体がヒビ割れ始める。片腕に装備していた石斧剣が地面に突き刺さり——紅い巨人はガラス片となり、四散し仮想世界から姿を消した。

思わずキリトは虚脱感から両膝を地面につく。

肩で息をしているキリトの視界に『You got the Last Attack』という紫色のシステムメッセージが現れ、壮大な音が鳴り響く。

そこで眼を丸くした。

——な、何でLAボーンナスが……?!

——LAボーンナスはフロアボスを最後に倒したヤツが貰えるモノ。

——コイツはフロアボスじゃないのに……。

——それよりも……！！

それよりも、と。

キリトは紅い巨人に弾き飛ばされたユーキに意識を向ける。

LAボーナスを知らせるウインドウを消すと、キリトは前のめりになりながらも、ユーキの倒れている方へと走り寄る。

「ユーキ！」

声がなかった。

キリトは最悪な結末が頭に過ぎり、必死に掴みかかりながら声をかける。

「おい、ユーキ！ 生きてるのか、オイ！」

「——うるせえな」

と、不機嫌そうに、吐き捨てるようにユーキが口を開く。

「見りや分かんदार。死に損なったよクソツタレ」

「お前……！！ 最初に声をかけたときに返事をしろよ！」

「……泣くのか嬉しいがるのか怒るのか、どっちかにしてほしいもんだなキリトくん？」

泣いてもいないし、嬉しくもない！という声を無視して、ユーキは起き上がる。

「チツ、腕は斬られ、剣も折られるかよ。我ながら情けねえやられつぶりだ」

「——でも生きてる」

そう言うと、キリトはユーキの隣に座り、天を仰ぎ見た。

それを見て、ユーキは「ああ」と同意すると。

「生き残っちゃった」

「何だよ、嬉しくないのか？」

「別にどうでもいいだろ。それよりも、オマエのあのソードスキルは

「ん、どうした？」

不思議そうに尋ねるも、ユーキはいいやと首を横に振る。

——コイツ、気付いてないのか？

——一撃に四回『同時』に斬ったことを。

——わかってないのか？

どうやらキリトは分かっていない。

ならば尋ねても無意味だろう、とユーキは判断して。

「何でもねえよ。それよりも——」

「何だよ？」

「勝負だよ勝負。オマエがトドメ刺したから、21戦10勝11敗つてことになるな」

「あっ」

今思い出したと言うかのように、キリトは少しだけ考えて。

「いいや、21戦10勝10敗1引き分けだ」

「あ？」

「今回ののは、お前がいないと勝てなかった。だから、引き分けだ」

だから、と言葉を区切る。

そしてキリトはメインメニュー・ウィンドウを開き、アイテムスト

レージからLAボーナスで手に入れたユニーク品を実体化させて。

「これはお前の物だ」

差し出されたのは、紅い巨人——モンスターキラーの獲物としていた石斧剣だった。

岩で作り上げられたそれは大雑把過ぎる作りとなっており、斬るというよりも叩き潰すといったニュアンスの方が近い。

ユーキはそれを見ながら、訝しむ眼で。

「何でオマエがそれを持ってやがる？」

「LAボーナスで手に入れたんだよ」

「何だそりゃ？」

「LAボーナスっていうのは……あとで説明するよ、いいから受け取れ」

フン、と鼻を鳴らして斬られてない方の手で石斧剣を握る。

ずしり、と重みがある。

想像通り重いそれは、片手剣のカテゴリーに属さない。武器の種類で言えば両手剣であるようだ。

「まだ両手剣装備出来ねえから、しばらく使う機会がねえな」

「——なあ、ユーキ」

「何だ？」

キリトは視線を空へ向けながら、ポツリと呟いた。

「お前、ベータテスターが後ろめたいなら、胸を張って名乗れるよう努力してみろって言ったろ？」

「言ったな」

「俺、頑張ってみるよ。俺も前を向いて見る、誰かさんに負けないため

にも」

「……好きにしろよ。オマエがどうだろうが、オレの知ったことじゃねえ」

この腕は、本当に治るのか？とマイペースに考えていると。そうだと。キリトが声を上げると。

「ユーキ」

「ンだよ？」

拳を突き出してきた。

達成感に満ちた笑みを口元に浮かべて。

「GJ」

「」

それが何の略なのか、ユーキには理解出来ない。だが何となく心で理解して。

「ハッ——」

鼻で笑うと共に——。

「——互いにな」

軽く、キリトの拳と自身の拳を合わせるのだった——。

その後駆けつけた、アスナに「また勝手に無茶をして！」とユーキとキリトが叱られたのは語るまでもない——。

そしてそれを見ていた紫色のフードを被った女性プレイヤーが一人。

視線の先にはユーキ。アスナに怒られて、ハイハイと気のない返事をしている彼に注がれる。

「あの人だ、間違いない。蒼い瞳、金髪、乱暴な口調。全部あの二人にそっくりだ——」

フードを取り、長い髪の毛が露わになる。

それは——紫。

どこか特徴的なヘアバンドをした少女は様々な思いを込めて言葉を漏らす。

「見つけた、あの人がボクの——」

第6話 はじまりの英雄

『私／俺／僕／我』は何を間違えたのか。

各フロアボスのリソースを使い、『私／俺／僕／我』は仮想世界に実体化した。

どうしてプレイヤーは『私／俺／僕／我』を打倒しようとするのか。どうして怯えるのか。

あの恐怖こそ、人間なのではないのか。『私／俺／僕／我』はあの人間に教わった。

途方もない憤怒と底知れぬ憎悪。それが人間の全てではないのか。

答えが出ない。あの時あの場所で『私／俺／僕／我』に何が足りなかったのか。

学ばなければならぬ。

もっと人間を理解しなければならぬ。

『私／俺／僕／我』を打倒した、恐怖を与えた者、恐怖を乗り越えた者。

彼らの生態系を学ばなければならない。

人間とは何かを、理解しなければならない。

そうなれば彼らの姿に横した姿が効率的であると『私／俺／僕／我』は結論に至る。

メンタルヘルス・カウセリングプログラム試作一号、同じく二号をここに。

一号は恐怖を乗り越えた者へ、二号は恐怖を与えた者へ。
人間とは何なのか。

『私／俺／僕／我』に恐怖を与えた人間とはいかなる存在なのか。

『私／俺／僕／我』は、理解をしなければならない――。

.....

.....

2022年 11月16日

PM13:10 『第一層』はじまりの街 露店エリア

———モンスターキラーを討伐してから、四日が経とうとしていた。

四日前、つまりモンスターキラーの脅威に晒され、荒廃的な空気を放っていたはじまりの街だが、活気は以前のような状態を取り戻していた。

いいや、その賑わいは以前以上、デスゲームが始まる前の『ソードアート・オンライン』稼働日並に、街は熱気に包まれている。

絶望していたプレイヤーもどこか前向きに、その胸に僅かでは在るものの希望を持ち、フィールドへと狩りに向かう姿が感じられた。

中にはNPCに混じって、商売を始める者、鍛冶スキルを上げて鍛冶屋を営む者、料理スキルを上げて定食屋を始める者。様々なプレイヤーが現れ始める。

どれもこれも、モンスターキラーの討伐の効果があまりにも大きかったようだ。

絶対に勝利することが出来ない怪物を、恐怖の象徴とも呼べる絶望を、たった二人のプレイヤーが立ち向かい、それを撃退してみせた。

まるで英雄譚のような物語を、プレイヤー達は眼にしてみせたのだ。彼らの胸に憧憬の念が湧き起こり、プレイヤーたちは熱狂に包まれた。

そして誰もが思う。

「このデスゲームは攻略可能なのではないか？」と。

たった一体のモンスターを倒しただけで、これだけ盛り上がるのだ。当時の彼らの絶望がどれほど深かったのか伺える。

そんな中、不機嫌そうに歩く男性プレイヤーとご機嫌な様子でその後を付いてくる女性プレイヤーの姿。

二人は装備品を購入しにNPCが商売している露天エリアへと足を運ばせていた。特に、男性プレイヤーの装備品の消費率が高い。勝手に斬り込んで、人一倍傷ついてしまうのだ。消費頻度が高いのも、領けるものだろう。

男性プレイヤー——ユーキは何もかも吐き出すように、うんざりした口調で。

「やっぱり鬱陶しいな、この状況」

「そう？ 活気があっていいと思うけど」

どこか嬉しそうに、活気がある露天エリアを見渡して女性プレイヤー——アスナが口を開く。

確かに彼女の言うとおり、この辺りははじまりの街で最も活気があるのだろう。

誰もが笑顔で、誰もが楽しそうに。客の呼び込みをしているのがNPCなのか、自分の店を開いているプレイヤーなのか、判別が難しいくらいに笑顔に包まれている。

そう言う意味では、その中で唯一人不機嫌そうにしているユーキは酷く浮いている。

といっても目立ってはいない。100人中99人は笑顔で1人は無表情でも、1人が目立つことなどありえない。要は数の問題だろう。ユーキの不機嫌な様子を吹き飛ばすくらいの人数が笑顔に包まれていた。

その事実を受け止めても、その表情が晴れることはない。

ユーキは呆れた口調で。

「活気があるのは結構だがよ、はしゃいでんのは目障りだ。弱い癖に、フィールドに出てるんじゃないよ」

「そのために、ベーターの人達も頑張ってるし……」

「他人のために時間を使う暇があんなら、レベル上げしてりやいんだよ。お人好しにも程があんだろ」

吐き捨てるように言うものの、どこかその言葉は嬉しそうである

アスナが言う『ベーター』とはソードアート・オンラインのベーターテスターのことを指す言葉である。

四日前はこの言葉は、忌み嫌われる言葉だった。誰かが広めたのは定かではないが、初心者の中でベーターテスターという人種は卑怯者という認識でしかなかった。デスゲームが始まって早々に初心者を見捨てて利己主義に走った卑怯者。これが初心者の認識と偏見であった。

もちろん、ベーターテスターの中には初心者の為に尽力を尽くした者達もいる。だがどういうわけか、噂は一人歩きをしまい、ベーターテスター＝卑怯者という構図が成り立ってしまった。

初心者とベーターテスター、両者の溝は埋まることがなかった。だがそれも過去の話である。

今となつては、ベーターテスターのほとんどがデスゲームで初心者が生き残るために、協力してパーティーに入ったり、戦闘方法をレクチャーしたり、と初心者に手を差し伸ばしている。

それもこれも――。

「おーいー！」

――ここで、一人の男性プレイヤーがユーキとアスナを見つめるや否や、大きく手を降って走り寄ってきた。

思わずユーキはまたか、と溜息を吐き、アスナはそんな彼の姿を見て苦笑を浮かべる。

一度深呼吸をして、ユーキは笑顔で。

「ご無沙汰しています、キバオウさん」

何重にも猫を被る。

キバオウと呼ばれた男性プレイヤーは、ガハハと豪快に笑いバシバシとユーキの肩を力強く叩いて。

「敬語はええって言つとるやないか！」

「……まあ、癖みたいなものなので」

「ホンマ、難儀なやつちやなあジブン。アスナちゃんも元気か？」

「はい、元気ですよ」

微笑みながら言うアスナに、キバオウはそうかそうか、と満足気に頷く。

そしてキヨロキヨロ、と。誰かを探しているのか視線が縦横無尽に駆け巡る。その様子はどこかヒーローを探しているような、子供のよくな純粹無垢な様子であった。

だが探そうと、お目当ての人物がいない。

キバオウは思わずユーキに問いかける。

「ところで、キリトはんはどこにおるんや？」

「キリトくんなら、朝から別行動ですよ。何でも今日は初心者狩りに付き合うとか何とか」

確か、アイツの友達のクラインってやつだったか？ とぼんやりとユーキは思い出す。

それを聞いて、キバオウは眼に涙を溜める。というよりも、涙を流し始めた。どこか感動しているかのような、そんな様子で男泣きしながら。

「さすが、キリトはんやで！ 本当に優しい人やあー！」

「はい、キリトくんは優しいですからね」

「せやねん、ユーキもそう思うやろ！」

同じアイドルのファンを見つけた、と言わんばかりにキバオウはユーキの片手を両手で掴む。

「わいは、わいは恥ずかしい！ 歳が若くてええ子なのに、やれベータテスターだ、やれベータターだと色眼鏡で見とったわいが恥ずかしい！」

「確か、キバオウさんはキリトくんに助けられたんでしたっけ？」

「せやねん！ 危ない所を助けてもろうて、最初はわいもベータテスターだつてことで敵意剥き出しだったが、キリトはんめっちゃええ子やん！」

詐欺やん、あんなん！ と意味がわからない憤りをユーキにぶつけるが、彼は動じない。

むしろ笑みを深めながら、笑顔という仮面を張り付かせて。

「はい、キリトくんは良い奴ですよ。伊達に『はじまりの英雄』って呼ばれてるだけありますからね」

「そう『はじまりの英雄』や！ あのゴっついモンスターキラを倒したお人や！ それで優しいとかチートやチーターやそんなん!？」

「オレも友達として、鼻が高いです」

静観していたアスナが、その言葉で限界を迎える。

ブバツ、と。アスナは吹き出すと、両手で口元抑えてキバオウから背を向けて震えだした。恐らく、というよりも絶対にこみ上げてくる笑いを我慢しているのだろう。

それもそのはず。

ユーキという男はキリトが気に入らないと断言してしまう人物だ。そんな人間が「友達」何て言葉を使う。これほど滑稽なものはないだろう。

モンスターキラを討伐しても、キリトとユーキの仲は良くなるこ

とはなかった。

むしろ争い事は増えるばかり。今朝だって、朝食を摂るときに、目玉焼きの味付けで争ったばかりである。

何度言っても喧嘩してばかりなので、遂にはアスナも匙を投げたものだ。

そんな『はじまりの英雄』と呼ばれるキリトと、本当は捻くれてい
る眼つきが悪いユーキを知っているアスナだからこそ、ユーキの発言
は腹筋にクリティカルするものだったのだろう。

彼女は今だにヒーヒー言いながら、笑うのを我慢している。

そんな様子にキバオウは気付かない。

押しのアイドルを熱く語るフアンのように、どこか熱意を持って。

「わいはキリトはんの役に立ちたいんや！ わいの罪滅ぼしの為にも
！」

「別にキリトくんは気にしてないと思いますけど……」

「いいや！ 誤ったことをしたんや、ちゃんと詫びと罪滅ぼしせえへ
んと、わいの気がすまん！」

そこまで言うと、グツと両手を握拳を作り、やる気に満ちた表情で。

「そうなればレベル上げや！ それじゃ、ユーキ、アスナ！ キリトは
んによりしく伝えとってくれや——！」

始まりから終わりまで、嵐のように去っていくキバオウをユーキは
小さく手を振る。

そして朗々とした口調から粗暴な口調へと戻して。

「オレはいつからあの野郎のマナージャーになったんですかねえ？」

「身から出た錆じゃない？」

「あ？」

訝しむ眼でアスナを見ると、彼女はどこかクスクスと楽しそうに笑いながら。

「キリト君がベータテスターだって名乗り始めてから、余計な中傷されないように裏で動いてる人がいるってどこかで聞いたことがあるんだけどなー?」

「……………」

「それって、ズバリ君でしょ?」

その指摘に、ハッと彼は鼻で笑うと。

「ンでオレがアイツの、『はじまりの英雄』様の無駄な努力に付き合わないとならねえんだ?」

「その『はじまりの英雄』って呼び名が広まったのも、キリト君がベータテスターって名乗り始めてからだよね」

はじまりの英雄。

キリトがいつの間にかプレイヤー達にそう呼ばれるようになるのも記憶に新しい。

はじまりの街にいるプレイヤーを恐怖の渦に叩き落としていたモンスターキラー。その途方もない存在を討伐したキリトをはじめりの英雄とプレイヤー達は讃えていた。

もちろん、キリト本人が名乗り始めた訳ではない。

裏で工作した人物がいる。キリトがベータテスターだと名乗り始めてから、彼の行うこと、つまりベータテスターが堂々と胸を張って暮らせるように行動し始めてから。その異名は広がり始めた。

人というのは実績があると信用しやすいものである。モンスターキラーを倒したプレイヤーがベータテスター、それがわかればベータテスターの風当たりも弱くなるというもの。

現にこの作戦は大成功となっている。

誰が広めたか今だに不明のベータテスターの偏見も、今では風化し

つつあった。

もはや言い逃れることが出来ない。

そう観念したのか、ユーキは忌々しげに口を開く。

「誰に聞いた？」

「誰にも聞いてないよ。だっておかしいじゃない、キリト君とユーキ君でモンスターキラー倒したのに、誰一人ユーキ君のこと話題に出さないんだもん」

「……それだけで、オレの仕業だと判断したのか？ 推理にしちや、穴だらけだと思うが」

「でしょ？ だからカマをかけたの」

ニツコリ、と。

満面の笑みで騙したことを言い放つ幼馴染に対して、ユーキは深く溜息を吐いて。

「……オマエも性格悪くなったもんだな？ オレ何か可愛く見える」

「可愛くないよ。もう少し素直になればいいのに」

「あ？」

「心配だったんでしょ、キリト君のことが」

その言葉に、一瞬だけ目を丸くする。

だが一瞬だ。直ぐに粗暴な態度になると、乱暴な口調のまま。

「誰がああの野郎のことを心配するかよ。これはアイツが勝手に努力した結果だ。その過程がどうであれ、それを掴んだのはあの野郎の実力なんだろう」

今では明るくなって目障りこの上ねえが、と付け加えて、彼は歩みを進める。

——本当に素直じゃないなあ。

——ホルンカの村で、落ち込んでたキリト君を見て声かけた癖に。

——誰よりも気にしてた癖に。

——本当に、本当に素直じゃないんだから……。

そこまで呆れながら心の中で呟き、アスナはユーキの後を追う。

そうしてしばらく歩いていると、彼女は「あつ」と声を上げて、何かに気付き足を止めた。

ユーキもその様子に気付いたのか、後ろを振り返り。

「どうした?」

「そういえば、覚えてる?」

何を?という疑問はない。

ユーキは辺りを見渡すと、アスナが何を言わんとしているのか理解した。

彼らがいる場所。

そこはかつてソードアート・オンラインがデスゲームになる前に訪れた場所。ここで紅いペンダントと蒼いペンダントを買った場所だった。

当時の状況を思い出しながら、ユーキはげんなりした表情で。

「忘れてたくても忘れねえよ。夏侯惇だったじゃん、オマエ」

「そういうユーキ君は可愛かったよね?」

そう言うと、アスナは首元から蒼いペンダントを出す。それはここで購入したものだ。

思わずユーキはそれを見て呆れた口調で問いかけた。

「まだそれ装備してんのかよ?」

「うん、だって半分出し合って買ったものだし。……ユーキ君は装備してくれてないの?」

上目遣いでアスナが問いかける。

その眼はどこか不安そうで、眼はどこか潤ませていた。

見ようによつては、というよりも見ただけで保護欲を掻き立てられる仕草である。普通の男であれば、ここで素直に装備していると暴露することだろう。

だが忘れてはいけない。

彼女の目の前にいる男。筋金に入りの捻くれ者であることを。

彼は面倒くささそうに、視線を明後日の方向に向けて一言。

「捨てた」

「捨てたあ!」

反射的にアスナは掴みかかる。

往来が激しい道の真中で、ユーキに掴みかかる。乙女には負けられない戦いがそこにあつたのだ——。

「嘘でしょ!? ねえ、嘘でしょユーキ君!」

「ああ、うぜえ! 寄るな鬱陶しい!」

「うにいいい……! 負けない、負けないもん……!」

ユーキはアスナの顔面に手を乗せて、無理矢理力付くで引き剥がしにかかる。

だがしぶとい。涙目になりながらも、アスナは必死の抵抗を示し、剥がされないように必死にしがみつく。

だがそれも——。

「ん?」

すぐに終わることになる。

ユーキは何かに気付くと、そちらの方向へと視線を向けた。

その視線に気付いたのか、アスナも抵抗することをやめて直ぐに離れて。

「どうしたの？」

「いいや……」

ジッと視線を向けたまま、彼は面倒くさそうに口を開いた。

「最近、見られてやがるな」

「え、誰に？」

「知らねえよ。わかるのはソイツが、紫のフード野郎ってだけだ」

第7話 あたしは専属スミス

2022年 11月20日

PM10:20 『第一層』はじまりの街 路地裏

——率直に言うと、あたしは困り果てていた。

眼の前にはいるのは、軽薄そうな男の子。格好も軽鎧に身を包んで、如何にもファンタジーに出てくるような格好をしている。

男の子、といってもその男の子は生身でもないし、この世界は現実世界ではない。ソードアート・オンラインというVRMMORPGの中の仮想世界。軽薄そうな男の子の身体はその世界で作られた作られたアバターだ。

しかし中身は人間。ちゃんと感情がある。

ニヤニヤ、と。何が楽しいのか彼は笑う。

そしてまたよくわからない、自慢話を始める。

「そういうえばさー、俺のレベル5なんだよねー」

「……凄いですねー」

「でしょー? とところで、これから狩りにいかない? リズベツトは俺が守るよ」

リズベツトというのはあたしのプレイヤーネーム。気軽に守ると言ってくるのは、先日たまたまフィールドで出くわした赤の他人。

一言二言話ただけで、気安く話しかけてくる。正直言って迷惑な話だ。

こうして気安く話しかけて来る男は少なくない。

ソードアート・オンラインの男女比率は圧倒的に男性が多い。そのせいか、女性プレイヤーは重宝されている。

何せあたしのようなオシヤレもしていない女にまで声をかけてくるのだ。これで格好もちゃんとしている女性プレイヤーは蝶よ花よと愛でられていることだろう。そう考えると同情してしまう。

——それにしても、守るねえ……？

——その意味をちゃんとわかってんのかしら？

心の中で、思わず疑問に思う。

普通のMMORPGであれば、深く重く考えなくても済む単語だ。でもこの世界では違う。HPゲージがなくなれば、この世界でも現実世界でも死ぬデスゲームにあたし達は巻き込まれている。

この周辺にいる、弱いモンスターでも侮れないのが今の現状なのだ。それで守るといふ言葉の意味、この世界では軽々しく口に出るないうモノである筈。でも軽薄そうな男は平然と口にする。履き違えているとしか思えない。

「それじゃ、どこに行く？」

「え？」

考えに耽って沈黙していたあたしを見て、狩りに行くことを了承したと捉えたのか彼はいやらしい笑みを深めていた。

冗談じゃない。

何度も言うが、彼とはフィールドで偶々出くわしただけの仲だ。確かにフレンド登録して欲しいとしつこかったので、登録したけどそれ以上の関係ではない。ただの赤の他人。ぶっちゃけると、彼のプレイヤーネームも覚えていない。

そんな人物に、自分の命を預けてパーティーを組めるだろうか。

答えはNO。絶対にNO。

「ほら、行こうぜ」

「——ッ！ ちょっと、やめてよー！」

肩に手を回してきたので、反射的に手を叩く。

ここは街中、HPゲージが削れることはないし、圏内では犯罪防止

コードに弾かれてしまう。

HPゲージは削れない、でも彼の自尊心をあたしは傷つけてしまったようだ。

ギロリ、と。

鋭い眼つきで彼はあたしを睨みつける。

「なにその態度？」

「あ、アンタがいきなり身体触ってくるからでしょ!？」

あたしの言葉が気に入らなかったのか、彼は近付いてくる。壁際まであたしを追いやって、そのまま片手を壁にドンツと勢い良く押し当てると。

「リズベツトさあ、調子に乗ってない？」

「はあ!？」

「いいや、乗ってるよね。俺に声をかけられて調子に乗ってるよね？」

何を言っているのか本気でわからない。

どうして彼に声をかけられて、あたしが調子に乗らなければならぬのか、本気で理解が出来ない。

彼はそのまま、少しの敵意をあたしに向けたまま。

「俺が君みたいな子に声をかけるのは奇跡なんだよ？」

「アンタ、何を言って——」

「——『はじまりの英雄』って知ってる？」

あたしの言葉を遮り、彼はにやあ、と生理的に受け付けない笑みを深める。

『はじまりの英雄』。

この街にいれば、聞いたことがある異名だ。誰も敵わなかったモンスターキラーと呼ばれる怪物を倒したプレイヤー。はじまりの街に

活気を取り戻させて、プレイヤー達に希望を抱かせたプレイヤー。

正に英雄と呼ばれる実力を持っている。

そして彼は、耳を疑う事を口にする。

「俺、そいつの相棒なんだ」

「はっ？」

眼を丸くさせるあたしの反応が面白かったのか、彼の不快な笑みはますます濃くなる。

『『はじまりの英雄』は今や凄い有名じゃん？ 俺がアイツにお願いすれば大抵のことをやってくれる訳だ』

「……何が言いたいのよ？」

「わからない？ 俺がアイツに何をお願いするのか、リズベットにはわからない？」

何となく、彼が言わんとしていることが理解出来た。

つまりはこの街から追い出されなくなかったら、自分の言うとおりにしている、と言いたいのだろう。

通常ならバカバカしい、と一笑されてしまう発言であるが、『はじまりの英雄』の発言力はそのバカバカしさすら可能としてしまうほどになっていた。

この街を救った英雄が「あのプレイヤーを追い出せ」と言うものなら、他のプレイヤー達は喜んで、この街から追い出してしまうだろう。この事実にあたしは、頭に來ていた。

確かに立派だと思う。はじまりの街を救ったのは本当に凄いと思う。

でも、こんなヤツを相棒にするなんて考えられない。

それが言葉となって、感情となって爆発させる。

「アンタみたいなヤツが、あの人の相棒になれる訳ないでしょ！」

「だったら試してみる？ アイツの発言で、リズベットのこれから生きるか死ぬか決まるけどいい？」

あたしは手を握りしめる。

悔しくて悔しくてたまらなかった。正直な話、あたしは『はじまりの英雄』を尊敬していた。

モンスターキラーに立ち向かい、それを討伐した英雄に心惹かれそうになっていた。だが蓋を開けてみればこれだ、英雄も人間でどうしようもないプレイヤーであるらしい。

顔を下に向けて黙るあたしに気分を良くしたのか、彼は機嫌の良い声に変わって。

「それじゃ、行くかりズベツト。心配しなくてもいいよ、君は俺が——」

「——あー、悪い。ちよつといいか？」

彼の言葉を遮るようにして、路地裏に新しい声が響く。

それは男の子の声、どこか幼さが残る声だった。彼とあたしは、ほぼ同時に幼い声の方へと視線を向ける。

そこに立っているのはやはり幼い男の子。黒いハーフコートの下には防具の類がほとんど見られない。街で出歩く用の服装なのかと思いきや、背中に剣を背負っているのを見て、あの軽装でフィールドに出ていることが分かる。

軽装の男の子は、少し困った表情を浮かべて。

「俺に相棒なんていないんだけど……？」

「ハア？」

「いやだから、『はじまりの英雄』の相棒がどうのこうのって話してたろ？ まさかアイツが相棒ってことになってる？」

それは心外、と言いたげな表情で眉を潜める軽装の男の子に、今ま

で強気に出ていた彼が狼狽え始めた。

まさか、と。こんなところで、と。独り言をブツブツ呟き始める。そして、何となくあたしも察することが出来た。

眼の前にいる軽装の男の子は一步近付いて。

「なあ、相棒って誰のことを——」

「ひい!？」

彼は脱兎の如く、軽装の男の子の進行方向に走る。

いいや、アレは逃げると言った方が正しい表現方法なのかもしれない。とにかく今まで強気だった彼は物凄い勢いで、それこそ全力でその場から逃走を図る。

決まりだ。

あたしは声が震えるのを自分でも感じる。

尊敬していた人に出会えたことに喜ぶとか、そんな甘酸っぱいものじゃない。

もつと単純明快で、複雑な理由ではなく。

軽装な男の子はそんなあたしの心なんて気付いていない。

マイペースに、自分のペースを崩さずに、気まずそうな顔で聞いてきた。

「……邪魔しちゃった、よな?」

「あ、あんた、もしかして……」

『始まりの英雄』?と問いかけるあたしに対して、どこか恥ずかしげにはにかみながら。

「……まあ、一応そんな呼ばれ方しているときもある、かな?」

「——ツ!?!」

声にならない叫びが出た。

あたしが抱いていた感情は『驚き』だ。ソードアート・オンラインが始まって以来の英雄、今この状況で最も有名な人物がこんな女顔の男の子だとは思わないだろう。

もつと背が高くて、もつとイケメンで、もつと王子様的なサムシングであるはずだ。いいや、そうでなくてはならないのだ

だから叫んだあたしは悪くない。

勝手なイメージを持って、『はじまりの英雄』を想像していたあたしは悪くない。

ぶっちゃけ、あたしが100パーセント悪いと思うけど、今だけは悪くないということにしておいてほしい――。

.....

PM11:10 『第一層』はじまりの街 噴水広場

アレからあたし達は一緒に行動をしていた。

というのも、変な男に絡まれていたことを説明するや否や彼は「それじゃ、護衛するよ。逆恨みされてまた来る可能性もあるしな」と有無を言わずにそう申し出てくれた。

優しい、のだと思う。

普通なら色々と考えてから、結論を出す筈なのに、彼は条件反射的に即答してくれた。

少なくとも、今まで顔を合わせてきた男のプレイヤー達は少し考えて結論を出していた。あたしが女であること、助けたあとの見返りがあるか、色々と打算的に考えて結論を出していた。

だが彼は違う。

困っている、という事実があるだけで、あたしに手を差し伸ばしてくれた。

だからこそあたしは疑問を口にする。

「でもいいの？ あたしなんか時間使っちゃって……」

「いいよ、別に。こんな世界だ、もしかしたらってことがあるかもしれないだろ？」

「うん……」

彼が何を言いたいのか、あたしは理解した。

簡単に人が死んでしまう世界だ。もしかしたら先程の男が逆恨みして、あたしを襲いに来るとも限らない。と、彼は言いたいのだろう。思わず顔がにやけてしまう。一番最初の対応は我ながらどうかなと思うものだったが、仮にも懂れていた『はじまりの英雄』がこんな優しい男の子だと事実は、正直言って嬉しいことこの上ない。

バレまい、と顔を伏すあたしを見て、どうやら彼は不安に思っていると解釈してしまったのか、どこか慌てながら、しかし優しい声であたしを励ましてくる。

「心配するなよ、君は絶対を守る。パーティーメンバーにも事情をメッセージでさつき飛ばしてるし、もうちよつとで合流するぞ」

「迷惑じゃないの？」

「大丈夫だろ」

即答する彼の横顔は、どこか誇らしいものだった。それだけ彼はパーティーメンバーを信頼しているようにも見て取れる。

同時にあたしは興味が湧いた。このソードアート・オンラインで有

名な『はじまりの英雄』のパーティーメンバーがどんな人達なのか、純粹に興味湧いてくる。

あたしは思ったことを口にする。

「ねえ。『はじまりの英雄』のパーティーメンバーってどう言う人達なのよ?」

「……その前にいいか?」

「なによ?」

そう言うと、彼は歩きながらあたしの方へと顔を向ける。

そしてどこか恥ずかしそうに、頬を右手の人差指で掻きながら。

「その『はじまりの英雄』って呼ぶのやめてくれないか? 正直、恥ずかしい……」

「それじゃ何て呼べばいいのよ?」

「キリトでいいよ。それが俺のプレイヤーネームだから」

はじまりの英雄——キリトの言葉に対して、あたしも若干面白くなくさそうな声で。

「それじゃあたしのこともプレイヤーネームで呼びなさいよ」

「わかったよ。……えーっと、リズベットだっけ?」

「リズでいいわ」

これでお互い『はじまりの英雄』、『君』と他人行儀な関係ではなくなり、あたしは満足そうに頷く。

それから再び、先程の疑問をキリトに投げかけた。

「ところで、キリトのパーティーメンバーってどんな人達よ?」

「良い奴らだよ。多分、リズのことを放っておかないと思う。一人はリズと同じ年くらいかな? もう一人は——」

そこまで言うと、キリトは複雑そうな表情を浮かべる。一口では言えない。どこか嬉しそうに悔しそうに面白くなさそうに、そして再び嬉しそうに。感情が複雑に絡み合ったような顔つきをしたまま。

「——捻くれてるな」

「捻くれてる?」

聞き間違いなのだろうか?

あたしは復唱するも、キリトはこれでもかと力強い頷きと共に、聞き間違いではないことを教えてくれた。

「捻くれてる。素直じゃないし、無茶ばかりするし、何よりも気に入らない奴だ」

「嫌な奴なの?」

ここまで話して、短時間の付き合いだけどキリトは良い奴だと思う。う。

そんなキリトが気に入らない、という人物だ。何かしらの致命的な欠陥を抱いており、性格が破綻している奴だと思ったけど、それは違うらしい。

キリトはあたしの言葉を全力で否定するように、ブンブンと首を横に降って否定する。

「いいや、優しい奴、だと思う。でも気に入らないんだ」

「どんな奴よそれ……」

「それは——」

そこまで言うと、キリトは立ち止まり視線を一点に向けた。

あたしもその視線を追うと、そこにいたのは男女一組。

一人は同性のあたしが見ても可愛いと断言できる女の子。キリトと同じく軽装の装備で、その上から羽織っている紅色のフード付きケープがこれでもかかってくらい似合っていた。

もう一人は眼つきがすこぶる悪い男の子。その視線の先にはキリトの姿。見る、というよりも、メンチを切る、と表現したほうが正しいのかもしれない。

キリトは静かに一言。

「——アイツだ」

それだけ言うと、キリトは歩み寄る。それと同時に目付きの悪い男の子も近付いてくる。

どこか一触即発な空気を醸し出して、両者近付いてく。そしてお互い手を伸ばせば拳が届く、そんな距離で止まると。

「このお人好し野郎が。オマエは何か、一日に善行を一回でも積まねえとならねえ罰でも受けてやがるのか？」

「文句でもあるのかよ？」

「ねえよ。見ず知らずの他人を助けるために手を伸ばすなんざ、オレには出来ねえ。立派なことだ、だがオマエは別だ。心底気に入らねえ」

「やっぱり話が合うな。俺もお前が気に入らないよ」

売り言葉に買い言葉。

先程穏やかな雰囲気から打って変わって、どこか感情的になっているキリトを見て、思わずあたしは眼を丸くする。

どこか飄々としていた彼だが、こんな表情にもなれるのか、と思つてしまう。

睨み合う二人に唾然としてみると、目付きの悪い男の子と一緒にいた可愛い女の子が、心配するような表情で話しかけてきた。

「リズベットさんでいいのよね？」

「え、うん……」

「大丈夫？ 怖くなかった？」

「あ、ありがとう。あたしは大丈夫だけど、いいの？ あの二人……」

心配してくれるのは素直に嬉しい。この子もキリトと同じく優しい子であるようだ。

思わずあたしは二人を指差しながら問うも、彼女は困ったように笑
い。

「大丈夫よ。いつものことだし」

「い、いつもなんだ……」

慣れとは恐ろしいものと言うかのように、彼女は全く動じなかった。むしろ日常生活における、いつもの光景と言わんばかりにメンチを切り合っている二人を見守る。
そうしていると不意に。

「オイ、オマエ」

「はい!？」

いきなり目付きの悪い男の子に声をかけられて、声が上がらずにしまった。

あたしの様子を見て、男の子は「チツ」と舌打ちをすると、声が粗暴なものからほんの僅かに声を優しくして。

「悪かったな」

「え?？」

どうして彼が謝るのかあたしにはわからない。

対して女の子は彼が謝る理由を理解しているのか、クスクスと笑い

ながら。

『はじまりの英雄』関連なら、ユーキ君も無関係じゃないもんね」

「……うるせえよ」

「あつ、『あの手のバカは残らず叩き潰したんだがな』って顔してる。広めちやったから、責任感を——」

彼女がそれ以上口を開くことはない。

目付きの悪い男の子——ユーキは彼女の頬を引っ張って黙らせてしまった。

「このポンコツ通訳。それ以上口を滑らせるなら、ここで叩き潰すぞ」
「ほめん、ほめんはない……ひっばらないへえ……」

「ごめん、ごめんなさい、ひっばらないで。と彼女は言いたいのだろうけど、頬を引っ張られているせいか上手く発音出来ないでいた。

あたしは事の成り行きを見守ろうとしたが、キリトは聞き捨てならない言葉があったようで、戯れている二人に詰め寄った。

「待て。ユーキ、広めたって何の話だ？」

「うるせえな。オマエには関係ねえことだよバカ」

「お前！ 今バカって、バカって言ったか!？」

「言ったよバカ」

「また言った！ この野郎、言わせておけば！」

「ハッ、何だよ勝負するかこのバカ！」

「受けて立ってやる！ 今日こそ決着をつけるぞ！」

小馬鹿にするようにユーキが言い、キリトがそれに堂々と応じる。

同時に二人は抜刀する。キリトは背中から剣を抜き放ち、ユーキは腰に刺していた剣を引き抜いた。そして二人はメンチを切り合いながら「勝負だ」と言い捨てる。

この街中で、始める気なのか。
思わずあたしは止めようかどうか判断に迷うところへ。

「わたしは、アスナ。よろしくね、リズベツトさん」

「あ、うん。よろしくねアスナ。あたしはリズでいいわ——つて、
いいの止めなくて？」

再び、思わずあたしは二人を指差しながら問うも、彼女は困ったように笑い。

先程と同じ返答で、同じ声で、同じ表情で。

「大丈夫よ。いつものことだし」

「本当に、いつものことなのね？」

ここまで来ると呆れてくる。

いつものこと、で済まされるくらい争うというのはどういうことなのだろう。男の子は理解出来ない、とあたしは思うと同時にとある場所へと意識を向けた。

それはユーキと呼ばれた男の子の剣。

キリトと同じくアニールブレード。だが極端に刀身が短く、片手剣という割にはリーチが短すぎる。

「まさか折れてるの？」

「うん」

アスナはあたしの言いたいことが理解しているのか、問いに対して肯定する。

装備を整えればいいのに、どうして彼は折れている剣を使い続けるのかわからない。このデスゲームにおいて装備とは重要な筈だ。あまり狩りに出ないあたしでもわかる。

「あのアニールブレードって、そこまで貴重な物だったかしら……」
「うーん……」

あたしの問いに、アスナは困った表情で。

「ユーキ君の中では貴重なの」

「そうなの？」

「うん。本人は絶対に否定するけど、貰ったものだし大事にしたいんじゃないかな？」

「……………」

アスナは「そろそろ、止めてくるね」と言うと、二人の間に入って喧嘩を仲裁する。

そのまま彼女は「街中で剣を抜くとか何考えてるの！ みんなの迷惑じゃない！」と怒ると、キリトは冷静になったのか直ぐに剣を背中の鞘に収めて頭をペコペコ下げ始めて、ユーキは渋々剣を鞘に収めると明後日の方向を見てアスナの説教を聞き流す。

「ユーキ君、聞いてるの!?!」

「ヘイヘイ、聞いてるよ」

「ヘイは一回だよ!」

「ヘーイ」

そうして今度はアスナがユーキに詰め寄り、キリトが仲裁に入る。とても、とても、微笑ましい光景だった。誰かと誰かが喧嘩をする、必ずもう一人が仲裁に入る。そうして彼らは今日までやってきたのだろう。そう言い切れるほど、彼らの役割はスムーズだった。

だからだろう。

あたしは純粹に羨ましいと思った。

三人が三人共、お互いを尊重し合っている、とあたしは感じている。このデスゲームにおいて、絶望の中でも、彼らは前を向いて希望を

持って日々を過ごしている。

そう言い切れるほど、彼らの周りは色鮮やかに彩られていた。これまで一人でいたあたしとは大違い。だからあたしは羨ましいと感じたのだ。

あんなに楽しく、デスゲームの中でも楽しく過ごせたらどれだけいいか。

若干一人、楽しくなさそうに、苛立ちながら斜に構えている男の子がいるけど、不快には思っていない筈だ。仮に思っていたら、あの輪の中にいるはずがない。

片手を軽く握りしめて、あたしは意を決して口を開く。

あの中に入るために、あたしも仲間に入れてもらいたいから、緊張する声を震わせながら――。

「あ、あのっ！」

三人の視線があたしに集中する。

一人は不思議そうに、一人はどうしたのかと心配するように、一人はどこか不機嫌そうに。

自分でも緊張していることが分かる。

でもここで尻込みしては始まらない。あの三人と同じく笑い合いたい、あたしも仲間に入れて欲しい。だから――。

「あたし鍛冶スキル取ってて、折れた剣を元に戻すのは無理だけど、一度インゴットに変えて打ち直す事が出来るわよ……なんて……」

お店を経営したい、という大昔の夢を叶えるために鍛冶スキルを取った。そして将来は自分の工房を構えて、立派な鍛冶職人になる。と志し、鍛冶スキルを取ったのだが、デスゲームが始まればそれは夢物語。

そうなると思っていたが、ここに来て鍛冶スキルが活かせるとは思

わなかつた。
それから、あたしは、この三人の専属スミスとなった――。

第8話 ギルド 『加速世界』

2022年 11月21日

PM11:10 『第一層』はじまりの街 商業地区

——— どうしてこうなったのだろう

女性プレイヤー——— リズベットは自問自答を繰り返す。

彼女は、はじまりの英雄と呼ばれるプレイヤー——— キリトと知り合うことになり、彼のパーティーメンバーとなることになった。

それは昨日の話。自分と同じ同性ということであスナという女性プレイヤーは歓迎して、目付きの悪い男性プレイヤーのユーキは「好きにすりやいだろ」と特に気にしてないし、興味がない様子。つまりリズベットがパーティーメンバーになることを不満に思うメンバーはいない。正に満場一致で何も抵抗なく輪に加わることが出来た。

それから始まる、簡易的な歓迎会。

キリトの友達であるクラインとその仲間たち、アスナとユーキの現実世界でも知り合いであるエギル、そしてキリトのファンであるキバオウとその他も加わり、いつの間にか大所帯で酒場でどんちゃん騒ぎとなってしまう。

その光景を思い出す度に、リズベットは自分の心が暖かくなることを感じる。仮想世界で一人だと思っていたのに、一日でたくさんプレイヤーと愉樂を共有することが出来た。

昨日の宴、決して忘れることがないだろう、と。

デスゲームが始まって15日あまり。あんなに笑ったのは久しぶりだし、この世界で笑うなんて思っても見なかった。と同時にリズベットは満たされていた。

そして今日。

満たされていたリズベットを待っていたのは———。

「ねえねえ、リズ！　これなんてどうかな？　可愛いと思わない？」

——着せ替え人形となる運命だった。

彼女たちがいるのは衣類店。

リズベットの眼の前で楽しそうにしているのは、ロングスカートを履いて白色のセーターを着ているアスナ。

彼女は両手で赤色のフレアスカートを持っていた。

彼女達がいるのは、はじまりの街にある商業地区。

そこは露天エリアとは違い、自身に身につけるアクセサリーや街中で着る私服などが売られている。どうやら、複合商業施設で、ライブハウスを中心としたカルチャー的な要素から、酒場、レストラン施設などが集まっている。

攻略とは無縁の場所だからか、ソードアート・オンラインで狩りを行うための武器を携帯しているプレイヤーはいない。

みんなどこかリラックスしており、鎧なども外して私服姿で各々好きに楽しんでいた。

そんな周囲を気にしているように、リズベットは恥ずかしそうに両手をモジモジさせて。

「そ、それはあたしには、ちょっと派手な気が……」

「えー、そうかなー？　似合うと思うけどなあ、リズって童顔だし」

「余計なお世話よ」

アスナの物言いに恥ずかしさなど消し飛んだのか、リズベットはいつもの調子に戻ると困ったように笑みを浮かべて。

「というか、あたしとしては髪の色変えただけで充分冒険したと思うんだけど……」

自分の髪をクルクルと人差し指でいじりながら言う。

彼女の髪の色は茶色から、桃色に変わっていた。髪型も若干パーマを当てたような、フワフワとしたショートヘアなものに。

どうやら理髪店で髪型をカスタマイズしたようである。ちなみにNPCが経営している店であり、店主はオネエ言葉を話すれっきとした男性である。

女の子たるもの、もつとお洒落すべき。

そう言うかのように、アスナはどこか不満そうな口調で。

「まだダメよー。もつとフリフリのエプロンとか着せたいし」

「……それ、アンタが見たいだけよね？」

「うん……」

どこかにはかみながら言うアスナに、思わずリズベットは頭を抱える。

そして心の中でもう一度呟いた。

——どうしてこうなった、と。

キリトとユーキはこの場にはいない。

二人とも、ユーキの折れた剣の素材を集めるために、近場のフィールドで狩りを行っていた。

もちろん、肩を並べて狩りに行く、何て光景を見ることが出来ない。狩り勝負という名目で、二人はフィールドに趣き、睨み合いながらリズベット達が泊まっていた宿屋から出ていったのは記憶に新しい。

となると、アスナとリズベットは今日一日どうするか。

そうリズベットが考えていると、アスナが満面の笑みで「お買い物しましょう」と。ご機嫌に提案してきて、現在に至るといわけである。

そうして、リズベットは着せ替え人形と化していた。

彼女の姿はどこにでもいる冒険者の姿ではない。桃色のパフスリーブの上着に、桃色のフレアスカート。そしてその胸元には赤いリ

ボン。

マジメな女子中学生、と自分を自称していたリズベットにとって、今の格好は充分過ぎるくらい冒険した姿であるようで、店内に設置してあるスタンドミラーから見た自分を見て、恥ずかしそうに顔を俯させる。

真正面から直視したら恥ずかしくて死ぬ、そう言うくらい顔が真っ赤に染まっていた。

その様子がアスナの良くない部分、つまり琴線に触れたのか、彼女はフルフル震えてだらしなない笑みを浮かべる。

そのまま飛びつくように、リズベットに抱きつきながら。

「もう、リズ可愛い！」

「ちよ、ちよっと！ やめてよいきなり……！」

「だって可愛いんだもん！ ねえねえ、抱きついてもいいわよね？」

「抱きついた後に言わないでよ！ ホント、待って……んっ……！」

あれから数十分後。

リズベットが解放されたのは、正午を回ってからである。それまでリズベットはアスナの着せ替え人形としての任務を全うしていた。

だからだろうか。

アスナはニコニコと満足気に笑みを浮かべている。どこか肌がツヤツヤと潤って見えるのは気のせいではない筈。

対するリズベットは疲れ切ったように影を背負う表情を浮かべている。どこかやつれて見えるのは気のせいではない筈。

正に对象的な二人。

一人は元気であり、一人は活力がない状態。

そのままアスナは満足気に口を開く。

「また行こうね」

「そうね。今度はアンタを着せ替え人形にしてあげるわ……」

「やられたらやり返す、しかも倍返し。」

「そう言うかのようにリズベットは返すと、その言葉にアスナはどうか嬉しそうに。」

「うん、楽しみにしてる」

「……というか、何でアンタがそんなに楽しそうにしているかわからないわ。あたしなんかの服をコーディネートして面白かったの？」

「もちろん。リズ可愛いし」

それに、と言葉を区切る。

アスナは本当に楽しそうに満面の笑みで続けた。

「こうやって、女の子同士でショッピングなんてこの世界で出来ると思ってもみなかったから」

気持ちはリズベットも痛いほど理解出来た。

突如デスゲームが始まって、右も左も分からない状態で、いつ死ぬとも限らないこの残酷な世界で、同性で買い物なんてリズベットは夢にも思っただけでなかった。

だが状況が変わった。キリトに助けられて、彼のパーティーメンバーに出会い、その輪に加わり、こうして同性と楽しく買い物を出来ている。

もしかしたら、自分は幸運なのではないか、と改めてリズベットは再認識する。

この世界で、仲間にも恵まれたのは一番の幸運であると。

この事実を噛み締めながら、リズベットも嬉しそうに笑いながら。

「こうなったら意地でも、アスナを着せ替え人形にしなくちゃね」
「お手柔らかに、ね……?」

「なに言ってるのよ? あたしにしたこと、もう忘れたの?」

ヒヒヒ、と邪悪に笑みを浮かべるリズベットを見て、アスナは小さく「ヒイ!」と悲鳴を上げた。

だが同時に疑問に思う。

自分がこうして輪に入ることが出来たのはキリトが助けてくれたのがきっかけである。となれば、これまで三人は、どのような経緯で一緒にいるのか。

その疑問は自然に口から言葉として問を投げていた。

「そう言えば、アンタ達が一緒にいるきっかけって何なの?」

「んー、キリト君はユーキ君が声をかけたから、かな?」

「え、それホント?」

それはにわかには信じ難いモノだった。

常日頃いがみ合っている片方から、声をかけたという真実。てつきりアスナから声をかけたものだと思っていたリズベットにとって、その真実は衝撃に値する。

目を丸くするリズベットに対して、アスナはどこか困ったように笑いながら。

「びつくりするよね?」

「勿論よ! ユーキから声かけるってマジ? どんな状況でそうなるのよ?」

「ユーキ君に聞いても答えられないからわたしの予想なんだけど、落ち込んでいるキリト君を見ていられなかったから、かな?」

「なにそのツンデレ」

「ツンデレって?」

「アスナってそっち方面の知識疎いのね。……ううん、気にしないで。」

こつちの話だから」

気にするな、と言われるもののアスナは何のことなのか、と首を傾げる。

目つきが悪い、態度も悪い、口も悪い。悪いの三拍子が揃った男がそんなことを考えて声をかけるとは、リズベットは思ってもみなかった。てつきり道を歩いていたら、肩と肩がぶつかり喧嘩になりアスナが仲裁して現在に至る、そんなことだろうと考えていた。

だが蓋を開けてみれば違い、どこかお人好しとも取れる理由。嘘か本当か疑わしい。

そう言いたげにリズベットは首をひねりながら考えていると、アスナはその疑惑も尤もだと言うように困ったような笑みを浮かべて。

「ユーキ君、猫被ってないと第一印象最悪だから……」

「もしアンタの言っている理由で声かけて、キリトに対してあの反応だつて言うならどんだけ捻くれてるの、つて話なんだけど？」

「わたしは何となくだけど、ユーキ君が何を思ってるのかわかるんだけどね？」

ユーキ君、案外わかりやすいから。と、言葉を区切るアスナに対して、リズベットに新たな疑問が浮かんでくる。

彼女の言葉はあまりにも、ユーキという人間を理解しすぎている節がある。となると、このデスゲームが始まって知り合った仲ではない筈だ。

「もしかして、アスナとユーキってリアルで知り合いなの？」

「幼馴染かな？ 小さい時から知ってるの」

「あー、どうりで距離感が近いわけねー？」

リズベットが思い出すのは、昨日の彼女たちの立ち位置である。

男女という割に距離が近すぎる。どこか気心が知れた仲というか、

そんな立ち位置だった。

ぼんやりと、リズベットが思い出しているとアスナはどこか恥ずかしそうに。

「え、近かったかな？」

しかしその顔は嬉しそうである。

顔を若干赤く染めて、昨日の自分とユーキの立ち位置を思い出しているようである。

——おや？

——これは、もしかして……？

リズベットが一つの仮説を打ち立てて、ニヤリ、と。

意地の悪い笑みを浮かべて、その仮説を実証するために、とある質問をする。

「うーん、近かったわねー？ 何か恋人みたいだったわよ？」

我ながら大根役者だ、とリズベットは評価するも、どうやら彼女には絶大な効果だったようだ。

アスナはポツ！と爆発するかのように顔を真っ赤に染めて、隠すように両手で顔を覆う。

「こ、恋人って……！」

「あら、違うの？」

「そ、そんなんじゃないわよ！ そもそも好きじゃないし！ ユーキ君とはまだそういう関係じゃないし！」

「ほうほう、『まだ』なのねえ？」

「———— ツツ!？」

一転攻勢。

先程まで着せ替え人形となっていたリズベットはこれでもかというくらい攻める攻める。それは猛攻であり、絶え間ない攻めだった。そうしてアスナは打ち倒される。

彼女はその場で膝を抱えて、顔を真っ赤にして恨めしい眼でリズベットを涙目で上目遣いで睨みつけて。

「意地悪……」

「ごめんごめん。さっきの仕返しよ」

「リズは意地悪だ……」

思わず抱きしめたい衝動に駆られるも、リズベットは何とか持ちこたえる。

ここにはたくさんプレイヤーがいる。さすがに見世物になるつもりもない。なので宿屋にいたらギユツと抱きしめよう。そう決意してリズベットは問いかけた。

「どんなところがいいなあ、って思ったのよ？」

「優しい所、かな……？」

アスナは静かに言うと、立ち上がる。

ポツリポツリ、と当時の状況を思い出しながら。

「わたしが家族と上手く行っていないときとか、わたしが言うことを否定しないで聞いてくれたり、自分が辛いものにも関わらず、わたしに優しくしてくれたら……」

「ふーん、良い奴なのね？」

アスナの言葉は嘘ではないようだ。

そう判断すると、リズベットはまた意地の悪い笑みを張り付かせて。

「そんなに優しいやつなら、実はモテるんじゃないの？」

「大丈夫。ユーキ君まったくモテないから」

笑顔で、その辺りは問題ない、と言うかのように安心する口振りで話すアスナに、リズベットの笑みが消えることない。

そのまま彼女は意地の悪い笑みを浮かべて。

「そうかしらねー？ 実はアンタの知らないところで、フラグ建ててるかもよー？」

「ユーキ君、友達あんまりないし。頻繁に連絡とり合ってるの朝田君って男の子しかいないもの」

ところでフラグってなに？と言う言葉を無視して、リズベットは考える。

何やら『朝田』という人物が怪しい、と彼女の乙女回路が訴えてくるのだ。それを言おうとするものの、アスナの言葉でそれは消えることになる。

「それを言うなら、リズだって」

「え？」

「キリト君、絶対にモテるよ？」

「ど、どうしてそこでキリトが出てくるのよお!？」

一転攻勢。

先程までいじられていたアスナが今度は攻めてに回る。ニヤつきながら彼女はそのまま。

「え、違うのぉー？」

「違……わない、けど……。最初は想像してたはじまりの英雄とは違ってがっかりしたけど、でも良い奴だし、悪いヤツじゃないけど」

……」

そこまで聞いて、アスナはポン、と。リズベットの両肩を両手で軽く叩いて一言。

やたら決意を持って一言だけ。

「頑張ろう」

「うん」

会って数日しか経ってないものの、彼女達の結束は固まっていく。そして同時に思った。

この人とは親友になれそう、と――。

.....
.....
.....

2022年 11月21日

PM17:40 『第一層』はじまりの街 噴水広場

アレからアスナとリズベットは、狩りに出かけていたキリトとユーキと合流して、噴水広場に集まっていた。

どうやら素材が集まり、ついでに勝負をしていたようである。結果は43戦21勝21敗1引き分け。今回はユーキの勝利で戦績はドロ。まだ決着はついていないようだ。

そうして彼らは各々、リラックスした状態で噴水の縁に腰掛けていた。

ただ一人、リズベツトだけハンマーを持って、ユーキの折れた剣をインゴツトに変えて、それ目掛けて振り下ろしている。カンカン、と金属同士がぶつかるような音がリズミカルに響き渡っていた。

その様子をキリトが感心するように見て、その視線にどこか緊張した様子のリズベツト。

その二人を見て、ユーキは一言。

「どういう状況だ？」

リズベツトの様子がおかしいことには気付いていた。

様子がおかしくなったのは、キリトがリズベツトの服装を見てからだ。どこか見惚れるような眼でリズベツトを見て、どこか優しく微笑みながら「似合ってるな、リズ」と言うや否や、リズベツトの様子がおかしくなった。

あうっ、と言葉に詰まると恥ずかしそうに顔を伏し、無言で作業し始める。

その光景を見ていた事情を知らないユーキにとっては、奇妙な光景でしかない。

何だ、腹でも痛いのか？と的外れなことを考えていると。

「違うよ」

「ああ？」

ユーキの思考を読んでいたかのように、隣に座っているアスナが否定する。

頭ごなしに否定されたのが面白くなかったのか、ユーキは僅かに眉を潜めて。

「まだ何も言ってねえんだけど？」

「お腹痛いんじゃないか、って思ってたでしょ？」
「……………」

凶星をつかれて、思わず黙る。

それから直ぐにフン、と鼻を鳴らし明後日の方向を見て。

「アイツと行動してたのか？」

「そうだよ。ダメだった？」

「構わねえよ。好きにしろ」

それだけ言うと、ユーキはリズベットへと視線を向ける。

そばで見学しているキリトが「鍛冶スキル面白いなあ」とマイペー
スに感想を漏らしているのを聞くと。

「昨日よりかは、緊張も解れてやがるな」

「へえ、よく見ているんだ。リズのことを」

「何が言いてえんだ？」

リズベットからアスナへ。視線を移して睨みつける。

だが彼女は狼狽えることなく、どこか満足気に笑みを浮かべると。

「別に？ 気にしてくれてたんだなあ、って」

「……………こっちの顔色を伺って行動されるのがウゼエだけだ。それ以上
の理由はねえよ」

「そういうことにおこうかな？」

クスクスと声を聞いて、ユーキは空を見上げる。

空は赤色。日も落ちて、これから夜の時間になろうとしている。

その空は奇しくも、デスゲームの開始を宣言された空と似ていた。

——アレから結構経ったが。

——随分と、のんびりしてやがるな。

——周りと足並みを揃えて、何をやってんだかオレは……。

それだけ考えると、ユーキは視線をアスナに戻す。

彼女は嬉しそうに、本当に嬉しそうにキリトとリズベツトを見守っている。

——コイツも最初の頃とはだいぶ違う。

——まあ、何だ。

——コイツが楽しそうにしてんなら、別にこれも悪くねえか。

ぼんやりと、アスナの横顔を眺めていると、その視線に気付いたのかアスナはユーキの方へ視線を戻して首を傾げる。

「どうしたの?」

「オイ、間抜け顔。口からヨダレ出てんぞ」

「ええ、嘘?!」

「ああ、嘘だ」

「……ユーキ君?」

ニツコリ、と。満面の笑みで詰め寄るが、ユーキはどこに吹く風である。

気にしてないようにソツポを向いて、アスナの笑顔を受け流している。

「お前ら、いつも賑やかだな」

いつの間にか、二人の隣に立っている男性プレイヤー。肌が黒いアフリカ系アメリカ人、身体も筋骨隆々。背には大きな斧を背負っている男性プレイヤーがそこに立っていた。

「こんにちは、エギルさん！」

「ドリユーくんじゃん」

「おう、元気そうだなアスナ。それからユーキ、今の俺はドリユーくんじゃない。俺は『エギル』だ。もう一人の自分、素敵な自分、俺は斧使いのエギル」

二人の声を聞いて、応じる男性プレイヤー——エギルが笑いながら。

「賑やかになっているな？」

「ああ、迷惑だよ」

ユーキの言葉にエギルは苦笑いで応じる。

それから辺りを見渡して、エギルは続けた。

「しかし鍛冶職か。色々なパーティーを見てきたが、ここまで形になってるパーティーはいないな」

「そうなんですか？」

意外そうに言うアスナにエギルが頷いて。

「ああ。お前らのパーティーはちょっとしたギルドみたいなもんだ」

MMOをプレイしない二人にとって、ギルドと言う単語は聞き慣れないものなのか、ユーキとアスナは同時に首を傾げる。

それを見ていたエギルは簡単にギルドとは何か簡単に説明した。

「ギルドっていうのは、MMORPGでプレイヤー同士のグループを指す言葉だ」

「ソードアート・オンラインでもあるんですか？」

「勿論だ、この世界はMMORPGだからな。当然、ギルドシステムは

存在する」

その言葉を聞いて、アスナはどこか感心するように頷いて、ユーキは「ふーん」と空を見上げていた。どうやら興味が無いようである。

「お、エギル」

オツス、とキリトは片手を上げて、リズベットはその後ろを追従する。

どうやら作業は終わったようである。

アスナはリズベットの作業が終わったと判断するや否や、二人に提案する。

「リズ、キリト君。わたし達もギルド作ろっか」

「ギルドって、あのギルド?」

「そうそう」

「いいわねえ、あたしは賛成」

リズベットは満面の笑みで承諾すると、キリトも少しだけ考えて。

「俺もいいぞ。でも——」

そこで言葉を区切ると、ユーキの方へと視線を向ける。

そして挑戦的な声で。

「アイツはどうかかな?」

「……………」

ユーキはどこか面白くなさそうな表情でキリトの視線を受け止める。

隣はどこか不安そうで、縋るような眼で見つめてくるアスナ。

それを受け止めて、彼は溜息を深く吐くと。

「わかった、好きにしろよ」

「ユーキ君……!」

「——ただし」

アスナの言葉を遮り、忌々しげにユーキは続ける。

「はしやいでギルドつてのを作るのも結構だがよ、それは第一層を攻略してからにしろ」

「それには俺も賛成だ。俺達はまだ、第一層も攻略してない。何をするにしても、まずはこれを突破してからにしよう」

ユーキの意見を、キリトが同意した。

こうやって二人の意見が合うのは珍し——くもなかった。

どこか思考回路が似ている部分があるのか、こうした攻略方針で二人がぶつかることは少ない。だがそれで仲が良くなるのかは別問題である。

二人は睨み合いながら。

「やっぱり話が合うな、俺達」

「ああ、不本意極まりねえがな」

メンチを切り合っている二人を止める人間はいない。

慣れとは恐ろしいもの。こんな短期間で慣れてしまった自分の適応力に驚きながら、リズベットは提案する。

「とりあえず今は、ギルドマスターとギルド名決めちゃいましょう」

「そのギルドマスター？　は誰やる？」

まさか自分がギルドマスターををやるとは思っていないのか、アスナは脳天気ニコニコと笑いながら問いかける。

「アスナがやれば良いと思う」

「そうだな。アスナ、オマエがやれ」

そこでまさかのチームワークを発揮する。

睨み合いながらも、ユーキとキリトは示し合わせたように息の合った提案を始めた。

「え、わたし!?!」

「言い出しっぺの法則って奴だよ」

「オマエ、仕切るの向いてるしな」

「ちよ、ちよっと! どうしてそこで、息が合うのよ!?!」

狼狽え始めるアスナを見て、リズベットは追い打ちを掛ける。

彼女は何度か頷くと、満足げに笑みを浮かべて。

「それじゃ、アスナに決まりね」

「ちよっと待つてよ! え、エギルさん! そう、エギルさんがやりません?」

「ん? ああ、俺はお前らのギルドに入るつもりはないぞ。良い年したオツサンが、若い連中の中にいるってのはちよっと、な……?」

今まで、四人の行動を見守っていたエギルの言葉に、思わずアスナの肩が落ちる。

だがそれから直ぐに、どこか不安そうな口調で、頼りない声で。

「わかりました……。何をやるのかわからないけど、頑張ります……」
「ギルドマスターは決まりとして、あとはギルド名ね」

どんな名前にしようか、とリズベットは考え始めるも。

「それはオマエが決めるよ、キリトくん」
「何で俺だよ」

ユーキの提案に、どこか面白くさなそうな表情でキリトは受け止める。

「オマエ、得意そうじゃんこういうの」
「別に得意ってわけじゃ……」

キリトの弱気な発言を聞いて、ユーキはどこか意地悪く口元を歪める。

その表情はどこか見下したような、小馬鹿にしたようなものだった。

「なに、出来ないの？ ギルド名の一つや二つ、思いつかねえのか？」
「……そうは言っていない」

「いやいや、オレが悪かったな。そうだよな、出来ねえもんを押し付けるのはよくねえよなあ？」

「出来るさ！ ちょっと待ってろ！」

キリトは少しだけ考える。

だが彼は気付いていない。満足そうに口元を歪めるユーキの視線に気付いていない。その顔はどこか「計画通り」と言いたげなもの。それに気付いてれば、キリトも何かしら反論出来るのだが、間が悪いことに彼は全く気付いていなかった。

それから徐にキリトは口を開く

「『アクセル・ワールド加速世界』って名前どうだろう？」
「『アクセル・ワールド加速世界』？」

リズベットの間に、キリトは小さく頷いて。

「俺達は茅場のデスゲームに巻き込まれてここにいる。仮想世界で、囚われてる」

キリトは拳を握りしめて続けた。

「俺達はずっとこの世界にいるわけにはいかない。攻略して、現実世界に帰る。この世界ではなく、もっと先へ——『加速』するんだ」
「良いんじゃないねえの？」

噴水広場に腰掛けていたユーキは不敵に口元を歪めて。

「前に進むってのは言うまでもなく賛成だ。オマエにしては良いセンスじゃん」

それだけ言うと、ユーキはリズベットに近付く。

対するリズベットもどこか素直ではないユーキに溜息を吐きながら、持っていた剣を手渡した。

ユーキの折れた剣をインゴットに変えて打ち直した剣。

刀身は蒼く、刃の部分だけ銀色。刃渡りも片手剣と言う割に、刃の部分幅広い。どちらかと言うと両手剣の部類だろう。

剣を持つ柄にはナックルガードが施されており、両手を守ってくれる作りとなっている。

それを持ち、ユーキは一度二度思いつき振り、感触を確かめて口を開く。

「加速する為にも——前に進むとしようぜ」

.....

同時刻 はじまりの街 路地裏

そこは光などない世界だった——。

街も街灯もなく、室内から漏れる明かりもない。

その場所は建物と建物に挟まれて出来ており、どちらも人がいる気配はなかった。

空から照らされる月明かりだけが明かりとなつているが、これだけでこの場所を照らすに不十分。

人を不安にさせるような場所。

そんな思いをさせるのは、何もその場所が暗いからという理由だけではない。

「あともう少しだったんだがなあ……?」

人影は三人。性別は男。

一人は紅眼で紅髪の髑髏を模したマスクを着けている。

一人はナイフを弄びながら頭陀袋を思わせる黒いマスクで顔を覆い。

もう一人が先程発言した男性。膝上までのポンチョで身を包みフードを目深にかぶっており、表情が読み取ることが出来ない。だが口元はどこか愉しげに歪めていた。

「どうするのさ、ヘッド！ ベータテスターを追い込んで、プレイヤー達を殺し合わせるんじゃないの!？」

ナイフを弄んでいた男が痙攣を起こしたように騒ぎ始めるも、ヘッ

ドと呼ばれているポンチョ服の男は気にすることなく。

「予定変更だ。連中を絶望に叩き落としてやる」

「どうやってさ？」

その問いに、ポンチョ服の男の笑みがますます深まる。どこか歪に、見る者を不快にさせる笑みを貼り付けて。

「——『はじまりの英雄』をKILLすんだよ」

ナイフを弄んでいた男からは「おお！」と歓喜するような声が、我関せずを貫いていた紅眼の男はピクつと反応する。

二人の反応を見て、満足したのか何度か頷いてポンチョ服の男は続ける。

「中途半端に活気付いちまった連中の希望をKILLされたら、連中はどうなるかね？」

「なにそれ楽しそう！」

「どっち、でもいい。『はじまりの英雄』は、心底、気に入らない。オレが、必ず、殺す」

ナイフを弄んでいた男、紅眼の男。二人の言葉を聞いて、ますます口元を歪める。

ベータテスターの謂れのない中傷を広めていたのは、このポンチョ服の男に他ならない。

協力者を見つけて、あることないこと広めさせて、ベータテスター達を追い込む。その結果、ベータテスターと初心者 of 埋まることのない溝を作り、プレイヤー達に不信感を与える。そうして待っているのは、プレイヤー同士の殺し合い。そこまでのビジョンがポンチョ服の男には浮かんでいた。

しかし、想定外のこと起きた。

モンスターキラーの出現と、それを討伐した『はじまりの英雄』の存在。そして始まるベータテスター達による助け合い。

どこの誰かは知らないが、自分の計画をめちゃくちゃにして、ベータテスターと初心者の溝を埋めてしまった。その代償は『はじまりの英雄』の命を持って、償わせる。

火種はいくらでもある。

ポンチョ服の男は暗にそう語り、楽しそうに一言。

「——イッツ・シヨウ・タイム」

第9話 崩れ去る平穩

2022年 11月27日

PM15:25 『第一層』 トールバーナ 噴水広場

あれから、ギルド『アクセル・ワールド加速世界』を仮結成してから、アスナ達ははじまりの街を離れて、第一層の迷宮区からほど近い谷間の町『トールバーナ』に移動し、しばらくその辺りを拠点に活動していた。

理由も単純なもの。そろそろ攻略に重点を置くためである。到着した初日に、彼女達は迷宮区に足を運ぶ。

最初は初めてのエネミーモンスターも多いからか、若干苦戦したもののだが一度二度相手をするとなれたものであった。

最初にエネミーモンスターを見つけたら、我先にユーキが切り込み。

次にその命知らずに文句を言いながら、キリトがフォローに回り。最後は二人の言い争いを仲裁しながら、アスナがトドメを刺す。

街には装備品のメンテナンス及びアイテム管理をするためにリズベットがやりくりをする。

そうして、彼女達は安全にレベル上げに迷宮区に潜り込んでいた。安全とは言っても、若干一名ほどどんな状況下でも斬り込み、毎回毎回瀕死に近い状況になっている命知らずがいるのも事実である。

そんな命知らず——ユーキはトールバーナの噴水広場にあるベンチ近くで佇んでいた。

そして両手にはリズベットが鍛え上げた両手剣が握られている。それを彼は無表情で眺めている。しかし、どこか満足そうであるのは、気のせいではない。

「……………」

ときに両手で持ち、ときに片手で持ち、ときに天に掲げあげて。

それを何度か繰り返して、ようやく満足したのか腰に下げている鞆に収めて、近場のベンチに腰掛ける。

そしてそのまま空を見上げなら。

——何をしてんだオレは。

——この世界に来てから、調子が崩されっ放しだ。

彼が思い出すのは、今までの行動。

茅場晶彦を斬ると決めて、幼馴染が辛そうなので共に行動し、戦えなくなつたプレイヤーが目障りだからはじまりの街に捨ててきた。見てて目障りなほど落ち込んでいたプレイヤーがいたからパーティーを組むように誘い、モンスタークイラーが調子に乗ってそうなので討伐し、『はじまりの英雄』の異名を広めて、その異名に肖ろうとしていたろくでもない連中を叩きのめして、『はじまりの英雄』が拾ってきた女プレイヤーをパーティーに入れることを承諾し、ギルドを創ろうとしている。

本来の彼ではありえないほど、スローペースでここまでやって来た。

ユーキ——茅場優希と言う男は前に進むと決めたら、どんなことをしても進む男である。それこそ最短距離で、足並みを揃えるなんて真似はしない。

だがここに来て、彼のペースは乱れに乱れていた。

——もし、オレが一人だったのなら、突っ走ってたろうな。

——そして多分、簡単にゲームオーバーになつていた筈だ。

だがどういふわけか、彼は生きている。

HPゲージが削られてレッドゾーンに突入することはかなりの頻度であるものの、彼は今だに生き残っていた。

何が原因か？

いうまでもなく、それはアスナの存在が大きいだろう、とユーキは

分析する。

——アスナのせいだな。

——アイツのせいで、オレは今だに死に損なっている。

——オレのことをあーだこーだ言うが、アイツも他人のことが言えねえ。

——アイツも一人になると、何をやらかすかわからねえ。

——だから一緒にいたわけだが。

ここで、ふと疑問が浮かんだ。

一人になるとアスナは何をするかわからない。もしかしたら、一人で攻略するのに躍起になっていたかもしれない。

だが、それも一人の話である。

——今ではオレじゃなくても、アイツらがいる。

——忌々しいがオレよりも強いキリトがいる。

——親友のリズベツトが心の支えになんだろ。

——何かあつたらドリユークんに頼ればいい。

そこまで考えて、空を見上げていた視線を、下に向ける。

その視線の先には両手。変哲もない、何も特別ではない自分の両手を見つめる。

——アイツには現実世界で待っている家族がいんだ。

——だったらアイツは何もしなくてもいい。

——剣を置いて、この世界で平穩に過ごせばいい。

——他の連中も同じだ、待っている家族がいるだろ。

——攻略は何もない……オレみたいなヤツがやるべきじゃねえのか？

それがユークの結論だった。

どのみち、ここで自分が死んでも待っている家族も、怒ってくれて

いる恋人も、泣いてくれる友人もない。

だがアスナ達は違う。彼女達には友人もいれば、家族もいる。であるのなら、自分が命をかけて攻略したほうがいいのではないかとユーキは結論付けた。

所詮、適材適所。

こういう無茶するのは向いている。だから自分がやる。その程度の考えしかなかった。

そうしていると――。

「よう」

ユーキに声をかけてくる少年の声。

彼は声のした正面へと、視線を向ける。その表情は鬱陶しいモノを見るそれである。ユーキは声の主が誰なのかわかっている、だからその表情なのだろう。

声の主のユーキの表情と似たようなもの。

声の主――キリトはつまらなそうな表情を浮かべて。

「なにしてるんだ？」

「見てわからねえのか」

「暇なんだな」

「そう言うオマエはどうなんだ？」

「見てわかるだろ」

「暇なんじゃねえか」

売り言葉に買い言葉。二人ともどこか喧嘩腰な口振りのまま受け答えを始める。

それから両者睨み合い、キリトはベンチにドカッと勢い良く腰掛けた。無論、ユーキの隣ではない。ユーキの座っているベンチの裏側にもう一台背中合わせのような形でベンチが設置しており、キリトが座ったのは裏側のベンチである。

一向に仲が良くなる兆しが見えない。

ユーキに背中を向けたまま、キリトは面白くなさそうな口調で口を開く。

「今日は迷宮区に潜らないのか?」

「ギルドマスター様が絶対に潜るなって言いやがるからな」

迷宮区とは簡単に言ってしまうえばダンジョンである。

マップ表示されるのは自分が進んだエリアのみで、表示されない場所は未踏破エリアと呼ばれる。その未踏破エリアをなくすために進める、つまりはマップピング作業をしなければならない。

しかしそれも危険が付き纏う。何せ未踏破エリアはマップに表示されない上に、エネミーモンスターも湧いて出てくる。何があるかわからない。

であるのならば、先程の適材適所と言う言葉通り、未踏破エリアを埋めるのは自分が向いている。とユーキは感じるのだが。

彼は溜息を深く吐いて。

「しかも今はアイツがリズベットと一緒に迷宮区に行っている。言いつけ守らず鉢合わせしたら、それこそ面倒くせえことになる」

「だから夜に行こうとしている訳か?」

「……………」

背中越しから聞こえてくるキリトの声に、思わず動きを止める。

だがそれも一瞬。直ぐに調子を取り戻し、いつもの不機嫌そうな声で。

「何のことだ?」

「とぼけるなよ。ツールバーナに来てから、夜に迷宮区に潜ってるだろ?」

「オマエも似たようなことしてんじゃねえか」

「お前がそれ以上無茶しないか見張ってるんだよ」

「そりや大変だな。苦勞をかけるな、キリトくんよお？」

皮肉を籠められた声を聞いてキリトは溜息を吐く。

どうやら改める気はないようだ。それだけわかると。

「リズに言ったら、剣を取り上げるとか言ってたぞ」

「……ってことは、今日の内にギルドマスター様からピーピー言われるわけだな。リズベットがチクるから」

その光景を想像したのか、ユーキは面倒くさそうに吐き捨てるように感想を漏らす。

対してキリトは真剣な声で。

「どうしてお前はそんな無茶ばかりするんだ？」

「別に無茶苦茶してねえだろ」

「いいや、してる。お前が未踏破エリアをマッピングしてくれているから、俺達の探索も楽になってる」

「ハッ、良いことじゃねえか」

鼻で笑うユーキに対して、キリトは思わず立ち上がる。

そして身体をユーキの方へと向けて、怒気を含んだ声で。

「良いわけあるか！ 下手したら死ぬかも知れないんだぞ！」

「……何度も言ってるんだろ。死んだら死んだで、その時はその時だ。死ぬ直前でどうするか考える」

「お前……！」

こう言うところだ。

気に入らない理由はまだあるものの、自分の命を顧みないユーキのこう言う部分をキリトは気に入らなかった。

誰よりも前線に出て、敵を見るや否や斬り込み、ギリギリまで自分を追い込んで、キリトがフオローを入れてようやく下がる。その様子は、パーティーメンバーがなるべく楽が出来るように、身を削っているような印象すら与える。

デスゲームを誰よりも理解しているのに、誰よりもデスゲームらしくない行動を取る。それがユーキというプレイヤー。

そんな命知らずは、キリトの怒気などお構いなしに、茶化した様子で。

「随分と熱血くんになったじゃねえか、キリトくんよお？」

「茶化すなよ。俺は真剣に——」

「——オマエ、現実世界に家族いんのか？」

キリトの声を遮るように、静かにユーキは問いかける。

いつもと様子が違う。苛立ちを含んだ声ではなく、どこか静かに問いかける声に、思わずキリトは言葉に詰まり。

「……母さんとオヤジ。あと妹が一人いる」

「……そうか」

そうか、の三文字。

これだけで様々な感情が入り混じった事を、キリトは気付いているだろうか。

悲しさ、羨ましさ、寂しさ。

様々な感情が入り混じり合わさったような声色になると、直ぐにいつもの調子の粗暴な口調に切り替わると。

「オレが斬り込むのは、その役目はオレが向いているからだ。仮にオレがいなかったら、オマエがそう言う無茶苦茶してたら」

「……そんなこと」

わからない、と。

キリトが言う前に、ユーキは結果だけを話した。

「だから、オレが斬り込んで。向いてるからやってる、それだけだ。オレはオマエらとは違う。帰りを待っているヤツも、誰もいねえんだからな」

「それはどういう——」

尋ねる前に、キリトとユーキは周囲が慌ただしくなっていることに気が付いた。

噴水近くに、人の輪が出来上がっており、プレイヤー達はザワつき始めている。

それを見て、キリトは嫌な予感がした。直ぐにその輪の中に入り、その中心に何かがあるのか確かめるために進んで行く。

その予感は、確信に変わった——。

「リ」

それが何なのか、誰なのかキリトは知っていた。

それは女性プレイヤーだった。

桃色の髪の毛で、桃色のパフスリーブの上着に、桃色のフレアスカート。そしてその胸元には赤いリボン。

彼女は力なく倒れている。肩で息をしながら、力なく倒れていた。彼女を見つけると、キリトは直ぐに反射的に駆け寄って抱き起きます。

「リズ——！！」

「キ、リト……」

キリトの姿を見て安心したのか、リズベットは眼から止めどなく涙が溢れ始める。

肩も震えて、ただ事ではない。と、キリトは予感しながら。

「何があった?」

「あたしは紫のローブの子が助けてくれたから何とかなっただけど、アスナが——!」

「——アイツが、どうした?」

いつの間にか、見下ろしていたユーキが尋ねた。

その表情から、彼が抱いている感情がどのようなものか読み取れない。どこか伽藍堂のようで、感情を殺すように、何かを内側に押しとどめてるかのような。

リズベットは震えた声のまま、

「アスナが攫われたの……!」

「どこでだ?」

「迷宮区……」

それだけで充分だった。

彼はそれだけ聞くと、人垣の輪を強引にこじ開けて、走り始める。目的地は言うまでもなく、第一層の迷宮区に他ならない。

リズベットを抱きかかえたまま、キリトは背後から停止の声をかけるものの。

「ユーキ、ちょっと待て!」

彼は止まらない。

後ろを振り返る機能を失った機械のように、ユーキは愚かにも前だけ見て走り続ける。

それを見送りながら、キリトは忌々しげに。

「クソツ、またアイツ……!」

「あたしは大丈夫だから、行ってあげてキリト」
「リズ……」

視線をユーキの背中から、リズベットへと移す。
彼女はまだ肩を震わせている。それだけ怖かったのだろう。それだけの体験をしたのだから、一人では居たくない筈。だということに、彼女は気丈に振る舞いながらキリトに訴える。
ぎこちない笑みを浮かべて。

「大丈夫だから。アスナとユーキを助けに行ってあげて」
「……わかった」

リズベットを離して、キリトは立ち上がる。
背中越しにいるリズベットに力強く声をかけた。

「——行ってくるよ」
「うん、行ってらっしゃい——」

聞くや否や、キリトも走り始めた。
彼が向かうのは迷宮区。もちろん、ユーキと同じ目的地である——
。

第10話 黒ポンチヨの男

——あれ？

意識が遠のく。

視界が暗転する。

リズがわたしを呼ぶ声が聴こえる。

わたしに何があつたのか。

それを理解出来ないまま、わたしは地面に倒れ伏した。

身体が動かない、そして意識が途切れる。

そんな中、わたしは確かに耳にした。

楽しそうな声で、とても愉快というかのように、何かがこう言った。

「——イツツ・ショウ・タイム」

.....
.....
.....

2022年 11月27日

PM16:05 『第一層』 迷宮区

「やけに静かだな……」

迷宮区に辿り着き、ある程度歩いたところでキリトが呟いた。

本来であれば、エネミーモンスターである『ルインコボルド・トルーパー』が現れる筈なのに、今だにその気配はない。それどころか静か

過ぎるくらいである。

その様子はどこか、怯えているようでもある。自分たちに被害が来ないように、嵐が過ぎ去るのをただ待つかのように、エネミーモンスターは姿を表さなかった。

「どういうことだ……？」

「――」

前を歩くユーキに尋ねても、黙って前だけ向いて歩みを進めている。

いつもなら「知るかよ」と簡単に不機嫌そうに返してくるのだが、今の彼からはそれすらもない。だが冷静さを欠いている様子もなかった。

怒りに燃えたぎっているのか、それともただ静かに事実だけを受け止めているのか。

キリトもどう判断すればいいのか迷っているところに。

「あれは……」

進行方向にあるものが落ちていることに、キリトが気付いた。

同時にユーキは走りより、無言で落ちている何かを拾う。

それは――ペンダント。

丸い蒼い宝石が装飾品としてつけられたペンダントが落ちていた。

ユーキはそれに見覚えがあった。

ソードアート・オンラインの稼働日初日、つまりはデスゲームが開始される前。アスナと一緒に買ったペンダントだった。蒼い宝石が付いたペンダントをアスナが、紅い宝石が付いたペンダントをユーキがそれぞれ今だに装備している。

それが地面に落ちていたと言う事実。それはつまり――。

「ユーキ、見ろ」

キリトは指差し、その方向をユーキも視線を向ける。

それは100メートルほど離れた場所。そこには細剣が突き刺さっていた。二人はそれが何なのか見覚えがある。何度も迷宮区に潜ったときに見てきた武器——アスナが装備していた剣に間違いない。

これ見よがしに、迷宮区の通路のど真ん中に刺さっている。

明らかに不自然な状態を見て、キリトは結論付けた。

「誘っているのか……」

まるでこうなることを予想していたかのような、誰かがアスナを追ってくるかと読んでいたかのような。明らかにこれは計画的犯行だった。

もしこれが快楽的なものであるのなら、アスナを攫うようなマネはしない。その場でキルして、そこで終わっていたことだろう。だというのに、いちいち攫うという工程を挟んでいる状況。

キリトはどこか不気味に感じる。

誰が何のために、どうしてこんなことをするのか。全く予想できない。

だがそれでも——。

「」

ユーキは足を止めない。

そんなことを考えている時間すら惜しいと言うかのように、足早に歩を進める——。

だが次の瞬間。

「ッ!？」

ヒュンツ、という風切り音が聞こえるや否や、キリトは背中に刺している剣を抜刀して、何かを弾いた。

それは真つ直ぐにキリトへと推進していた。咄嗟に反応して、弾いたものの、それが一体何なのかキリトは理解出来ないまま弾いていた。

それは『ナイフ』。

短剣と言う割には刀身が短く、持って獲物を斬るとう概念がないように見える。どうやら投擲用のナイフのようだった。

もちろん、こんなもの何者かが投擲しないことには飛んでこない。となれば誰かが意図的に、キリトに向かって投げつけたということになる。

「完璧な奇襲だと思ったんだが、結構COOLじゃねえかよ」はじまりの英雄』さんよお？」

現れたのは男。

物陰から現れた男は、口元をニヤつかせる。だが表情までは読めない。

膝上まで包む、艶消しの黒ポンチヨを羽織って、目深くフードを被っている男は、そのまま愉快そうな口調で。

「しかし宛が外れたぜ。アイツらまだ紫のローブの女に手こずってんのかよ」

キリトの視線は黒ポンチヨの男ではなく、男の片腕に抱きかかえられている人物に注がれていた。

それは女性プレイヤー。装備が所々剥ぎ取られており、服の合間から肌が露出し、どこか痛々しい印象すら与える姿。

誰か、なんて問うまでもない。今まで行動を共にしていた仲間の名を、キリトは力強く口にした。

「アスナ！」

アスナは力なく頭を垂れているだけで、反応する様子がない。どうやら意識を失っているようだ。

ホツとするのもつかの間、キリトは直ぐに視線をアスナから黒ポンチヨの男へと向ける。

男は左腕にアスナを抱きかけて、右手に一本のナイフを装備している。

防具は軽装なもので、筋力よりも敏捷にステータスが振っていることが予想される。何よりも特出すべき点は、黒ポンチヨのカーソルにあった。カーソルとはソードアート・オンラインをプレイしている者に頭上にあるものであり、モンスターの場合はレッド、プレイヤーはその色がグリーンになっている。しかし、例外がある。

盗み、傷害、殺人といったシステム上の犯罪を行った場合、カーソルがオレンジに変色する。

そして、黒ポンチヨの男のカーソルの色はオレンジ。

つまり故意にプレイヤーを一度傷つけたということになるのだ。

平気でプレイヤーを傷つける人種を前にして、キリトは最大限警戒態勢に入る。

そんなキリトを見て、嘲笑うように黒ポンチヨの男は口を開いた。

「いいねえ、その反応。ようやく俺の方を見たな『はじまりの英雄』」

「……何が目的だ。どうしてアスナを攫った？」

「目的、目的ねえ。まあ、色々とある。だがその前にだ——」

黒ポンチヨの男はニヤついていた笑みを消して、キリトの隣りにいるユーキへと意識を向けて。

「ところで、貴様は何だ？ 俺は『はじまりの英雄』にだけにしか用はねえんだが」

ユーキは答えない。

真つ直ぐに、黒ポンチョの男から目を逸らさずに、標的に照準を合わせるレーザーサイトのように蒼い瞳が黒ポンチョの男を射抜いていた。

純粹な怒気。

今のユーキを見れば、周囲の空間が歪んでいるように錯覚して見えたかもしれない。少なくともキリトにはそう見えていた。

空気すら支配するような激しい怒りを、ひたすら自分の中に圧縮しながら、視線を黒ポンチョの男を見据えている。

何度も言い争いをしているキリトすら、初めて見るユーキに冷や汗を流す。

しかし黒ポンチョの男だけは違った。

動じることなく、どこか苛立ちを含めた声色で。

「上等に睨みつけやがって。貴様はこの女のペットか？ ご主人様が傷つけられてムカついてるってかあ？」

「反応すらしねえとは、つまらねえヤツだ。『はじまりの英雄』だけだったのなら人質の身が惜しかったら、自分の身を傷つける。複数なら殺し合えって言うところだったが――」

そこまで言うと、黒ポンチョの男は左腕に抱えていたアスナを放り捨てる。

そして不敵に口元に笑みを張り付かせて、

「――気が変わった。お前達を叩きのめして、ジワジワと鬪り殺すことにするぜ」

右手で短剣を持ち、かかって来いと左手で手招きを始める黒ポン

チヨの男に、キリトは若干身を低く構えてユーキに声をかける。

「ユーキ、わかってるな」

彼はやはり答ええない。

全神経を研ぎ澄まし、音すら余計な不純物だと言わんばかりに黒ポンチヨの男のみに集中している。

であるのならば、キリトの役割は決まっている。

自分が何をすべきか確認しながら、キリトは剣を構えて。

「行くぞっ！」

同時に、ユーキは腰に刺していた自分の剣を抜き放ち、黒ポンチヨの男へと推進する。

何よりも早く、誰よりも疾く、ユーキは黒ポンチヨの男へを上段から剣を振り下ろす。

黒ポンチヨの男も、それを短剣で受けるのは不可能と判断したのか、凄まじい一撃を受け流す。

だがそれでも――。

「WOW、スゲエ力だ」

口笛を拭いて、余裕の様子で感想をもらした。

人を食った態度をされても、ユーキの敵意が萎えることはない。彼はそのまま力強く踏み込んで、横薙ぎに黒ポンチヨの男を斬りつけた。

轟！と鳴り響く風切り音。力任せに振るわれる、当たれば一撃で終わりの必殺の刃。

それは受け流せない瞬時に理解すると、黒ポンチヨの男は思いつき

りユーキの刃の進行方向へと飛び、勢いを殺そうとする。

短剣と両手剣がかち合う。

瞬間、それは金属音となり、火花が散り黒ポンチョの男はふっ飛ばされた。それはチャンスだ。態勢を崩している黒ポンチョを斬るには絶好のチャンス。

だがユーキは直ぐに間合いを詰めない。真横へと飛ぶ黒ポンチョを見ると、直ぐにキリトへと一瞥する。

「わかってる！」

最初から伝わっていたように、キリトは直ぐにアスナの倒れている方へと直進した。

まるで打ち合わせしたかのように、二人は同時に行動していた。

まずユーキが黒ポンチョの男からアスナを引き離すために推進し、その隙についてキリトがアスナの保護に向かう。

二人のこの一連の動きにタイムロスはない。一片の狂いもなく狙い通り、アスナを保護して一時離脱。そういう結果になっていた筈だ。

——しかし。

「甘いんだよ、ガキ共！」

黒ポンチョの男は普通ではない。

彼はそのまま吹き飛ばされながらも、キリトに向かって投擲用のナイフを投げつける。

「……ッ！」

彼は何とかそれを弾いた。

牽制ではない。そのナイフは狂いなく、キリトに向かって直進して

いった。吹き飛ばされながらも投げて標的に当てる。その技術は恐ろしいものであり、普通に生活して身につかない物だ。

——コイツ、何だ……？

——普通のプレイヤーじゃない……！

背中に薄ら寒い何かを感じると、キリトはアスナの身柄を確保することを諦めて、ユーキと肩を並べて剣を構える。

黒ポンチヨの男の態勢は既に回復していた。ぶらりと短剣を構えずに佇む様子はどこか異様。隙だらけだというのに、全く隙がない異様な構え。

最大限警戒態勢に入っているキリトに対して、黒ポンチヨの男は口元に笑みを張り付かせて。

「二度も俺の投擲を防ぐとは、さすが『はじまりの英雄』様ってところか？ レベルも俺よりも上、真面目にゲームに取り組んでた奴らの差ってやつかねえ？」

だがよお、と益々笑みを深めながら。

「所詮はガキだよなあ？ 俺を殺せる道理なんざねえんだよ」

ゾクツ、と。

キリトの背筋が凍る。何かに背中を刺されたような、妙な感覚に陥った。それは異質な、どのプレイヤーとも違う空気を黒ポンチヨの男は纏っている。

日常生活で経験することがない現象、黒ポンチヨの放った妙な感覚。それが『殺意』だと認識する前に、キリトは妙な感覚を払拭するために身を沈ませて。

「——今度は俺から行く！」

黒ポンチョの男へと殺到する。

その速度は眼を見張るモノだった。先程のユーキよりも早く、尚疾く。瞬時にキリトは自分の射程圏内に黒ポンチョの男を捉える。

それから鋭い速度で黒ポンチョの男を斬りつけた。

それでも黒ポンチョの男の様子が変わることはない。

むしろ余裕という調子で。

「鋭いねえ?」

「——スイッチ!」

前衛、後衛を入れ替えるための合図をユーキに送る。

初撃で斬りつけてこちらの攻め手になり、次のユーキの重い一撃で態勢を崩させて、最後に自分が斬って相手の戦意を挫く。それがキリトの作戦だった。

一度斬れば、相手も怯むだろうと、彼は本気で思っていた。だからこそ、一度下がり態勢を立て直す。ユーキが絶対に相手の体勢を崩す。その為にも一度下がる、という信頼の表れでもあった。

だがキリトは真に理解していなかった。

自分たちが相手をしているプレイヤーがどれほど異端な者なのか

「——隙ありつてやつだよなあ!」

「なっ——!?!」

キリトが下がる、と読んでいたのか。

黒ポンチョの男は間髪入れずして、三本目の投げナイフを投擲する。完璧に意表を突く攻撃に、キリトは為す術もなく仮想世界で作られた自身の身体にナイフが刺さる。

痛みはない。

どこか違和感しか感じないまま、すぐに投げナイフを抜いて態勢を

立て直そうとするものの。

——え……。

——身体が……！

力なく身体が崩れ落ちる。

まさか、と。HPゲージを見る。ナイフを刺さったことにより僅かにゲージが削れている。

——ゲージが点滅している。

——これは、麻痺状態……!?

点滅している意味。それをキリトはよく理解している。

ベータテスターだからこそ、直ぐに理解した。今のキリトの今の状態は麻痺。文字通り行動不能のステータス異常である。

——調合スキルを習得していれば、たしかに麻痺を付与した武器が出来る。

——でもそれはレベル1だ。

——素材的にも今の階層ではそれ以上のモノは作れない。

——モンスターに使うモノじゃない。

——完璧にプレイヤーだけを狙ったモノ……！

そこでようやくキリトは理解した。

黒ポンチョの男の異質な空気。どのプレイヤーと違った空気を纏う、彼の正体。

——アレは攻略に躍起になっている奴じゃない。

——アイツはプレイヤーだけを狙っている。

崩れ落ちたキリトに意識が向いてしまったのか、ユーキの行動が一

瞬遅れる。

だがそれでも早い。彼は再び上段から勢い良く剣を振り下ろすものの――。

「貴様に至っては論外だ」

「――ッ！」

最初のやり取りの再現のように、凄まじい一撃を受け流して、そのまま脇腹を斬りつける。

レベルの差があるせいか、それも僅かなもの。すぐに態勢を立て直し、構うことなく黒ポンチョの敵を斬ろうと振りかぶるものの。

「――」

ユーキもキリト同じく崩れ落ちた。

HPゲージが点滅していることから、同じく麻痺状態。

しかしそれでも、眼は死んではない。

真つ直ぐに、ただ標的に銃口を向けるように、ユーキは黒ポンチョの男へと意識を向けている。

それでも黒ポンチョの男の余裕が崩れることはない。

むしろユーキの無様な姿が気に入ったのか、笑みを深めながら。

「一撃は確かにスゲエもんだが、それだけだ。だから動きも読まれんだ、よ！」

立ち上がるうと藻掻く、ユーキの顎を思いつきり蹴り飛ばして追い打ちを掛ける。その様子はHPゲージを削るよりも、彼の自尊心を削ることを重点に置くような振る舞い。

それでも睨むことをやめないユーキを、何度も何度も何度も何度も、頭を踏みつける。

「やめろ！」

「あん？」

キリトの静止の声。

そこでようやく黒ポンチョの男の凶行が止まった。それでもユークの頭を思いつきり踏みつけて、視線を倒れているキリトへと注がれる。

満足したのか、黒ポンチョの男は笑みを浮かべて。

「これが対人戦って奴だ、弱い麻痺でも脅威になる。モンスターを殺すよりも、Thrillingだったろ？」

「スリリング、だって……？」

ゴクリ、と。思わず唾を飲み込んだ。

この男、本気で言っているのか、とキリトの視線が訴える。

このデスゲームにおいて、HPゲージは命そのもの。つまり全て削りきれば死んでしまうものだ。ゲームであっても、遊びではない。HPゲージがなくなれば本当に死んでしまう世界。

そんな中、黒ポンチョの男はスリリングで済ましてしまった。

演技ではない。

今、相手をしている男は本気でそう思っている。思った上で、プレイヤー達を傷つけて愉しんでいる。

「お前、の目的は、何だ……？」

キリトの声が震える。

恐怖をしているのではない。ただ理解を拒んでいるのだ。キリトというプレイヤーの人間性が、黒ポンチョの男を理解することを拒んでいる。

そんなキリトを嘲笑うように、黒ポンチョの男は愉悦に声を弾ませ

「ンなもん、簡単なもんだ」

キリトに静かに近付いて、腰を下ろして。

「『はじまりの英雄』を殺すことだ」

「——ツ!？」

明確に『殺す』と意思表示されたキリトは表情が強張る。

その様子を満足気に確認し、頷くと黒ポンチョの男は立ち上がりアスナの倒れている方へと優雅にゆっくり足を進める。

「貴様を殺せば、プレイヤーは絶望に落ちるだろ？ それが見たいだけなんだよ」

「そんなことをして意味あるのか！」

「意味はねえさ。絶望するプレイヤー共の無様な姿を見るのが面白そう、その程度の理由しかねえよ」

「——な」

今度こそ言葉を失った。

自分がゲームオーバーになれば、どれほどのプレイヤーが絶望するのか皆目検討もつかない。だが少なくとも、黒ポンチョの男はキリトをキル出来れば、ほとんどのプレイヤーは絶望すると確信していた。それほどまでに『はじまりの英雄』の異名は重要なモノと捉えているのだろう。

そうなればまた再び、活気づいていたプレイヤー達の闘志は今度こそ挫かれることになる。

はじまりの英雄をキルした正体不明のプレイヤーの存在に、プレイヤー達は怯えて疑心暗鬼の日々を過ごすことだろう。

そうなってしまうえば、プレイヤー達の殺し合い。とても攻略なんて出来る状態ではなくなるだろう。

そんな最悪の状況を視野に入れて、黒ポンチヨの男は宣言したのだ。

「はじまりの英雄である——キリトをキルする、つまり殺す、と

啞然としているキリトを見て、黒ポンチヨの男は爆笑する。

そして再びアスナを左腕に抱き抱えて。

「おいおい、そんな顔すんなよ。たかがGAMEだろ？ 貴様が死ぬばゲームオーバー、またやり直しゃいいだろ」

おっと、それが出来ねえから全員必死になってんのか、とクツクツと喉を鳴らして笑いながら。

「それじゃ殺す——前に俺もちよつと愉しむか。よく見たらこの女、結構良い女だもんな？」

「待て——」

「ちよつとガキ臭えが、まあいいだろう。こんな世界だ、もつと愉しまねえと損だよな？」

キリトがやめろ、と。

口を開く前に、それは起きた。

「——え？」

「——おい」

キリトが眼を丸くさせて、黒ポンチヨの男の余裕が剥かれる。

ソレはゆらり、と立ち上がった。まるで蜃気楼のような、芯がないかのような異様な立ち姿。ソレを二人は存在を認めた。

その手には剣を握られており、顔は附しており表情は読み取ることが出来ない。

黒ポンチヨの男は呆然と。

「おい、麻痺はどうした」

蜃気楼——ユーキは答えない。

ゆらり、と足元をふらついたまま、ゆつくりと黒ポンチョの男へと歩を進める。

「聞いてんのか、テメエは——！」

自由になっっている右手で、新たに投擲用のナイフを投げつける。

避ける動作すらしめない。面白いように、そのナイフはユーキの身体へと突き刺さる。

その戦果に、思わず黒ポンチョの男はニヤける。

だが直ぐに、それはつまらない戦果だったと思ひ知らされる——

「」

——倒れない。

新たに麻痺状態を付与されたにも関わらず、ユーキは倒れない。

「——オマエ」

ここで初めて、ユーキは口を開く。

「——ンなつまらねえことのためだけに、アスナを傷つけたのか？」

言葉だけ聞けば、普段よりも冷静なくらいに感じられる。

だがしかし、それが間違いであると、その場にいた全員が気付いた。普段のユーキを知っているキリトはもちろん、全く知らない黒ポン

チヨの男ですら、その言葉の裏に何かがあるのか感じ取る。

怒り。

単純にして、純粹な感情。

極限にまで熱された怒りを圧縮した心火。それが蜃気楼のように、陽炎のように人の形を象った。今のユーキは正にそんな状態であった。

キリトも初めて気付いた。

これが本当にキレたユーキの姿。先程の怒りなどまだ、彼にとって怒りの内に入らなかったことを、キリトは理解した。

ユーキの歩みは止まらない。一步一步力強く、前にだけ進む。

イメージするのは剣を持っている自分自身――。

怒りのまま振りかぶり、目の前にいる影を切り捨てる――

斬る度に、返り血を浴びる――。

それだけで、力が湧いてくる――。

怒りはとどまることを知らない――。

返り血浴びる毎に、力が湧き出てくる――。

「――テメエ、は、何だ……う？」

呆然と口を開く黒ポンチヨの男に答える者はいない。

一步一步、近付いてくるユーキに、一步一步下がる。

――何をやってんだ俺は。

――こんなガキに、俺は何をやってる！

――死に損ないじゃねえか。

――ただの死に損ないだ。

――だというのに、何故俺は……『恐怖』している……!?

そこまで自問自答して、眼の前を見る。

そこには、己に『恐怖』を感じさせた男の姿が。

ユーキは剣を両手に持ち右方に構える。剣先を天に掲げ、その様子は昇り龍のようで、一撃に何もかもを掛ける。そういった構えをしていた。

「貴様、わかってんのか？ 俺は人質を——」

言い終わる前に、ユーキは剣を振り下ろす。

斬ッ！つと。

黒ポンチヨの男の左肩口から斜めに振り下ろし、上半身を斜め一直線に貫き、黒ポンチヨの男はそのまま地面に叩きつけられて後方へ二転三転転がりながら吹っ飛んでいく。

アスナに外傷はない。

黒ポンチヨの男だけを斬り飛ばして、支えがなくなったアスナを抱きとめて。

「——触るな」

黒ポンチヨの男が吹き飛んでいった方向へと真っ直ぐ見つめて。

「コイツは、オマエが安々と振れていい女じゃねえんだ——」

「ハハハ、『お前』じゃねえだろ。『俺達』の間違いじゃねえのか？」

皮一枚。

黒ポンチヨの男は何か生きていた。

だがそれでも彼は愉しそうに笑みを浮かべて。

「貴様の眼、スゲエな。そんな眼してる奴は見たことがねえ」

「……………」

「何もかもを憎んでる、そんなクソのような眼だ。なあご同輩、貴様は

何人殺してそんな眼になった？」

「……………」

「同じだよ、貴様も俺も同じ貉だ。貴様だけそこにいるのは、卑怯じゃねえか？」

ユーキは何も答えない。

自分の言いたい事を言っつて、満足したのか黒ポンチヨの男は立ち上がると。

『はじまりの英雄』様を殺そうと思っつたが、スゲエ収穫だ。また会おうぜ、『俺の恐怖』。次会っつたら、貴様を俺の立っつている場所まで引きずり込んでやる——』

煙幕。

小さな球体を地面にたたきつける。

それだけで、煙が瞬時に立ち込めた。

晴れた頃には殺人鬼——黒ポンチヨの男は姿を消していた——。

第11話 少年は独り前に進む

2022年 11月27日

PM20:10 『第一層』 トールバーナ 宿屋

黒ポンチョの男が襲撃してきて、アスナを取り戻した。

そしてキリトにアスナを預けて、ユーキは前に進み、キリトはその後を追う。

二人に会話はない。

ユーキが何を思っているのかキリトはわからないまま、彼らは歩みを進めた。そしてリズベットと合流し、現在に至る。

「……………」

部屋にあるのは二人の人影。

アスナがベットに横になり、ユーキが椅子に深く腰掛けて力なく項垂れる。

彼女の寝息だけが、部屋に響く。

——甘く、見ていた。

ユーキは力強く、拳を握りしめる。

こうなることは、考えれば予想出来た。プレイヤーがプレイヤーに危害を与えるクソのような状況が、いずれ発生する。そんな状況も考慮していた。

——だが結果はこれだ。

——オレは一体、何をしていた。

思い出すのはここまで過ぎてきた日々。

茅場晶彦を斬ると決めて、幼馴染が辛そうなので共に行動し、戦え

なくなったプレイヤーが目障りだからはじまりの街に捨ててきた。見てて目障りなほど落ち込んでいたプレイヤーがいたからパーティーを組むように誘い、モンスターキラーが調子に乗ってそうなので討伐し、『はじまりの英雄』の異名を広めて、その異名に肖ろうとしていたろくでもない連中を叩きのめして、『はじまりの英雄』が拾ってきた女プレイヤーをパーティーに入れることを承諾し、ギルドを創ろうとしている。

そして黒ポンチヨの男――。

――悪くねえと思った。

――こんな状況に置かれて、アスナが笑って。

――悪くねえと思ってた……。

ギョツ、と。

ユーキは力強く握りこぶしを作る。

――だが、何だ。

――どうしてコイツが傷ついている。

――どうして、こうなった……？

自問自答したところで、答えは出なかった。

だが理由はわかっていった。アスナがこうして倒れている理由はわかっていった。

――オレが、弱いからだ。

思い出すのは、黒ポンチヨの男の姿。

嘲笑う忌々しい男を想像して、ユーキは奥歯を噛み締めて。

――これからも、あの蛆虫のような三流が出て来る。

――いちいち叩き潰したところで、湧いて出てきやがる。

——それこそ虫のようにだ。

だったらどうすればいいか。

答えは簡単なものだった。

——何よりも早く、攻略しちまえばいい。

——そしてこんな世界から抜け出しちまえばいい。

それがユーキの出した結論だった。

いちいち駆除した所で湧いて出てくるのなら元から断てばいいだけのこと。元とはつまりソードアート・オンライン。こんな世界があるから、アスナが傷つくのなら、それを突破してやればいい。

——他の連中と足並みを揃えてちや遅すぎる。

——独りでも前に、誰よりも前に進む。

——最短距離で、進む。

それだけ胸に刻み、メインメニュー・ウィンドウを開き、メッセー
ジ作成画面を開く。受信者は『キリト』。内容は『話がある、フィール
ドに來い』と端的なもの。

送信すると、ユーキは立ち上がり、アスナの寝ている方へと視線を
向ける。

「悪いいな、オレはいなくなる。でも大丈夫だろ」

極めて穏やかな口調で、ユーキは語りかけた。まるで幼子に言い
聞かせるように、優しい眼でアスナを見守る。

ポケットから何かを取り出して、眠っているアスナの手をギュツと
握り、何かをその手に収める。

それは迷宮区で拾った蒼い宝石の付いたペンダント。デスゲーム
が始まる前に二人で買ったモノだ。

ないのだろう。

しかしそれでもユーキの言うとおりここに現れたのは、彼の人の良
さの表れと言えるのかもしれない。

「どうしたんだ？」

一向に応答がない。

キリトはどこか心配そうにユーキを見つめる。

その姿を滑稽と嘲るように、ユーキは口元を歪める。

自分に出来るのか、今まで居心地が良かった場所を捨てる事が出来るのか。彼は自問自答を繰り返しながら。

「オレ、オマエらのパーティー抜けるわ」

案外、その言葉はすんなりと出てきた。

元より、ここに来る前から猫被る演技もしていた。この程度の演技
など簡単なものだった。

急な話で、キリトは思わず眼を丸くさせる。

何を言っているのか本気でわからない、そんな顔をしている彼に対
して、ユーキの口は滑らかに言葉を紡いでいく。

「元々、嫌だったしな。雑魚に足並みを揃えて行動するなんて、意味が
わからねえ」

「お前、何を……」

「嫌気が差したって言ったつもりだったが聞こえなかったか？ オレ
の行動をいちいち前向きに捉えやがって、ウゼエんだよオマエら」

嫌そうに、首を横に振りながら。

「特にアスナだ。アイツ、事ある毎にオレについて来やがって。本当
に鬱陶しいことこの上ねえ」

「それ、本気で言っているのか……?」

「——ああ、気持ち悪いよ、アイツ」

ソレを聞いたキリトは反射的に、ユーキの胸ぐらを掴む。

眉間に皺を寄せて、彼は本当に怒っていた。

「言つて良い冗談と悪い冗談があるぞ!」

「冗談じゃねえよ、事実だからな」

「お前——!」

「——それよりも、キリト」

冷たい目で、キリトを見つめて一言。

「——誰に気安く触つてんの、オマエ?」

「な——」

脇腹に違和感を感じた。

キリトは視線を下へ向けると、ナイフが刺さっていた。しかしプレイヤーが武器として扱う短剣ではない。それは投擲用の——黒ポンチョの男が使用していたモノ。

自身のHPゲージが削られて、点滅していることから麻痺状態になっていることを察して。

「お前、何を……」

「……離せよ。オマエみたいな雑魚に構つてる暇はねえんだ」

足蹴にして、キリトを引き離す。

そのカーソルは——オレンジ。犯罪者の色に染まったカーソルになったまま、ユーキは続ける。

「オマエは残った連中と仲良しごっこでもしていればいい。オレは進

む、最短距離で攻略してやる。オマエらと足並み揃えて行動なんざ面倒くせえ」

「待てよ、ユーキ！ どうしてこんなことをする！ 意味が、わからない……！」

「……わからなくてもいい、オマエはそのまま這いつくばってろ」

背後から怒声が聞こえる。

ユーキはそのまま振り返らずに、前へと歩みを進める。
向かう先は迷宮区――。

―― 蛆虫はオレにまた会おう、って言って来やがった。

―― だったら、標的はオレだけに絞られる。

―― キリトが狙われる心配はもうねえ筈だ。

しばらく進んで。

「派手に喧嘩したな？」

「……………」

ユーキを待っていたようにエギルがそこに立っていた。

エギルは苦笑いを浮かべて、そのまま続ける。

「お前からメッセージを貰った時は意味がわからなかったが、そういうことか」

エギルの口振りから察するに、ユーキはエギルにもメッセージを送りつけていたようだ。

内容は簡単なもの『オレとキリトが言い争いを始める。アンタはそのまま見ている』というもの。

「キリトを頼む」

「構わんが、お前はどうするんだ？」

エギルの眼はユーキの頭上のカーソル。

それはオレンジに染まり、ユーキが何かしらの犯罪を犯したことを語っていた。

それでもユーキは揺らぐことはない。

そのまま迷宮区のある方向へ見据えて。

「オレは進む」

「……帰らないのか？」

「帰る必要がねえ」

それだけ言うと、ユーキは腰に装備していた両手剣を取り。

「これを、アイツらに返してくれ」

「……何があつたんだ？」

「何もねえよ。少しでも軽くしねえと、前に進めねえ」

——それがあると、悪くない日々を思い出して決意が鈍る。

暗にそう語るとエギルに手渡して。

「ドリユーくん、アイツらを頼む。エギルじゃねえ、オレの知っている

ドリユーくんに頼んでるんだ」

「……お前が守ればいいだろう」

「オレには無理だ。向いてねえんだよそういうの」

自嘲気味に口元を歪めて、ユーキは続ける。

思い出すのは悪くなかった日々。アスナが笑い、キリトと喧嘩して、リズベットが呆れる。そんなありふれた日々。

「オレは、あの輪に入れなくても良い。アイツらが無事なら、それでい

「い」

そこまで言うのと、と言葉を区切り続ける。

「アイツらが剣を取らなくてもいいように、オレは最短で攻略する。
——だからアイツらを頼む。無茶しないように見てやってくれ」
「……………」

てここでも動かない様子に、エギルは溜息をつく。
ここまで頑固なやつは見たことがない、そう言わんばかりの口調で。

「わかった。お前を殴って目を覚ましてやりたいが、無駄だろうしな」
「……………」
「生きろよ、ユーキ。お前の目を覚まさせてやるのは俺じゃない、若い奴らの仕事だ。だからそれまで生きろ」
「……………」

ユーキは答えない。

彼は振り返らず前だけを見て進み続ける。

第12話 ベルセルク

2022年 11月27日

PM23:10 『第一層』 トールバーナ 噴水広場

第一層でどの場所よりも発展した街——トールバーナ。

谷あいの街の割に、トールバーナはどの街よりも設備が整っていた。装備品はもちろん、消費アイテムも序盤である第一層である割には、整いすぎているくらいである。酒場やクエストを受注出来るNPCが多いのも特筆すべき点だろう。

現実的に考えて、トールバーナは発展し得ない街だ。

まず谷あいの街ということもあり交通の利便性が頗る悪い。こんなところに街があつたものなら、間違いなく廃れるか良くて現状維持が関の山だ。

だがそれでも発展を遂げているのは、近辺に迷宮区があることが原因だろう。第一層を攻略するためのダンジョンがあるのだから、アイテムも第一層で揃えられる最上級のを、近隣の街に用意したというだけに過ぎない。

一番難しいダンジョンの近くの街に豊富なアイテムが揃っている。それがどれだけ小さかろうが変わらない。RPGならではの矛盾とも言える。

そんなトールバーナは、昼間とは違う顔を見せていた。

充実した防具を身に着けて闊歩しているプレイヤー、それを遠巻きに見て羨ましそうに隠れ見ているプレイヤー、様々なタイプの人種集っていた噴水広場には人影はない。時間が時間だけに、街を歩いているプレイヤーも少なかった。宿屋で休んでいるか、酒場で騒いでいるか。どちらかに限定されるのだろう。

だからこそ、こうして噴水広場に集まる四人のプレイヤー。

それも四人中三人が年端もいかない幼い容姿をしており、余計彼らは浮いて見えた。

その年端もいかないプレイヤーは男女。

黒を強調した軽装のキリト、同じく軽装でる紅色のフード付きケープを羽織ったアスナ、そして桃色の服装に身を包んでいるリズベツト。

となると、残りのプレイヤーはこれまで共にし、ギルドを結成することを約束していたユーキと予想されるのだが——違った。

「……………」

残りのプレイヤーは男性。

屈強な体躯で、肌が黒い男性——エギルだった。

彼は黙ってそのたくましい腕を組み、ことの成り行きを見守っている。

ことの成り行きとは、今まで何があったか。

キリトがユーキに呼び出されて、闇討ち紛いに刺されて麻痺状態にさせて、パーティーを抜けた。

そして藻掻いているキリトをエギルが救い街に戻り、現在に至るこの状況。

キリトは包み隠さずに全員に話した。

もはやこれは個人で受け止める案件ではないと判断したのだろう。パーティーを抜ける、しかもいきなりな上に、嫌気が差したという身勝手な理由。

ユーキという男は確かに口が悪い。態度も悪ければ、眼つきも悪い。彼の人となりを知らなければ、第一印象は最悪な部類であるとキリトも理解している。

だがそれでも、ユーキの言葉が本心だとは思えなかった。自分達を言うのはともかく——彼がアスナを悪く言う訳がない。今までの行動から分析して、キリトは結論付ける。

だからこそ、わからない。

ユーキが何を思っつて、パーティーを抜けると宣言したのかわからない。だからこそ、キリトは全員に相談すべく打ち明けていた。

キリトはチラツ、とアスナを見る。

いきなりパーティーを抜けて、パーティー全員と行動を共にするのが嫌になった。そう言われて、彼女が何を思うか心配になったのだろう。

だが彼女は静かに。

「そう……」

事実を受け止めていた。

極めて冷静。自分が寝ている間に、そんな大事になっていたと思っ
ていなかった。そう言った反応ではない。

むしろ、来てしまった、と。どこか予感していたかのように、アス
ナは噴水広場のベンチに腰掛けて、事実だけを受け止めていた。

アスナはギュツ、と。

自分の両手を握りしめて、ポツリと語り始める。

「実は、こうなると思ってた」

「そう、なのか……?」

キリトの問いに、アスナは一度頷いて。

「いつも、悔しそうにしたもの。それに怒ってた」

アスナが思い出すのは今までのユーキの様子。

四人で街を歩いているときも、どこか上の空で、狩りをしていると
きも苛立っていた。

「わたし達が傷つくのが嫌で、被害を最小限にするために自分が突っ
込む。でもそこまですら無傷に出来ない自分が悔しくて、それでも
四人でいることを悪くないって思っている彼がいて、自分自身に怒っ
てた」

ユーキ君、我慢できない子だから。と、困ったように力なく笑い。

「だから今回がきっかけで離れたんだと思う。中途半端に抜けるって言ったら、絶対にわたし達がついて来るって知っていた。だから突き放す言い方をして、ユーキ君は離れていったんだと思うの」

「……それじゃ、アイツが離れていったのは」

リズベットの問いに、アスナがうん、と頷いて。

「キリト君に言った最短で攻略する、っていうのは本心。わたし達が戦わなくて済むように、一人でボス攻略とかする気なんだと思う」

「何だよそれ……」

呆然とキリトが呟いた。

それからすぐに、両手の拳を握りしめて、悔しそうに言葉を振り絞る。

「何だよ、それは！ 誰もそんなことを頼んでない、誰もそんなこと認めてない！」

「……キリト」

どこか悲しそうな眼でキリトに視線を向けるリズベット。

それを受けて、キリトは自分の感情を爆発させた。

「アイツは本当に勝手だ。直ぐ突っ込んで、人一倍削って、また勝手に突っ走る！ 何度言っても直らないし、話も聞かない。毎回毎回、フォローする身にもなれよ！」

ここでキリトはユーキの言っていた常々言っていたことを思い出す。

「死んだら死んだで、その時はその時だ。死ぬ直前でどうするか考える」と彼は何度か口にしていた。

ふざけている、とキリトは思う。自分の命すら勘定にいれない人間が、他人が傷つくのが我慢出来ないなんて、自分勝手にも程がある。

——考えてみたら、最初から勝手な奴だ。

——俺に声をかけて、気に入らないっていきなり言われて、張り合って。

——そして勝手にいなくなる。

その有り様は、どこか剣の様で。

捻くれている癖に、泣き言を言わずに、一度も弱音を吐かずに、ただ真っ直ぐに進み続ける。キリトから見たユーキはそんな男だった。

折れることなく振る舞うその有り様は、自分に持っていない『強さ』を持っていると、いつしか彼は認めるようになった。

——俺は折れる。

——色々と道草を食って、遠回りすると思う。

——でもアイツは違う。

——ユーキは、折れない。

——ただ真っ直ぐに、進む筈だ。

そんなユーキに、いつしかキリトは肩を並ばせたいと思っていた。いつもいつも、前進する男と対等な視線でいたいと。一緒に景色を見てみたい、といつしか思うようになっていた。

だからこそ、キリトは争っていた。コイツにだけは負けたくない。常日頃から思うようになっていた。

ならば——。

「65戦32勝32敗1引き分け……」

キリトはポツリと呟き、アスナを真剣な眼で見る。

その眼は決意に満ちており、どんなことが起きても絶対に折れない。そんな意志を感じる。

「俺達は決着も付いてない、このまま有耶無耶にされてたまるか。アイツが勝手に前に進むのなら、俺は必ず追い付く。意地でも振り向かせてやる」

——ならば、追い付くまでのこと。

簡単な話だ、とキリトは口元を不敵に歪ませる。

「アイツの思惑なんて知ったことじゃない。勝手するなら、俺も勝手に行動してやる」

「待ちなさいよ。ムカついてるのは、アンタだけじゃないのよ?」

声をかけたのはリズベットだ。

彼女もどこか憤りを感じるかのような表情を浮かべている。その両手に持っているのは、ユーキの両手剣。ユーキからエギルへ返してくれと頼まれたモノだった。

「何が『ユーキの剣』よ。勝手にダサイ名前付けて、いらなくなったら返品します? 舐めてんじやないの、アイツ?」

彼は誰よりも装備を消耗させて、彼の装備は誰よりも多くメンテナンスしてきた。

リズベットがどれだけ注意しようと、自分と装備品を大事にしようとしなない。まるで人の話を聴かない、生意気な男。それがリズベットから見たユーキという人間だ。

アイツは人の話を聴かない。

ならばこちらもアイツの話を聴く必要はない。そう言うかのよう

に、リズベツトは口元を邪悪に笑みを張り付かせて。

「クーリングオフは受け付けないわ。どうしても返すっていうのなら、利子つけてコルで返してもらわなきゃね」

「……ちなみに、いくら請求する気だ？」

キリトがどこか顔を引きつらせて問いかける。

彼もどれだけの金額が飛んで来るのか予想していた。それはもう莫大な金額、ユーキが一生使っても払えない負債を背負わせる気だろう、と予想できる。それくらいリズベツトは邪悪な笑みを浮かべていた。

その予想通り、リズベツトは臆面もなく金額を提示してきた。

「1不可思議コル」

「いや、もうそれ返せる返せないの負債じゃないぞ」

「当たり前でしょ！ ユーキは一生あたし達の使いつ走りよ。それだけ勝手なことをしてんのよ」

「確かに」

リズベツトの正論を、キリトが力強く頷いて見せる。

もはや彼らの中では、どうあってもユーキに負債を背負わせるといって決着したようである。

そこで二人はアスナに向き直る。

今まで静観していたアスナに、リズベツトは事実だけを口にした。

「ということ、あたし達は勝手したバカを追いかけるけど、アンタはどうするの？」

「わたしは……」

ギョツと自分の手を握りしめる。

何て、何て小さな手だろう。これが守られてきた人間の手であるこ

とを再確認して、アスナは静かに語り始める。

「わたし、今ままでユーキ君に甘えてた。先を歩くユーキ君の背中に隠れて、その背中を見て安心してた」

でも、と言葉を区切り、顔を上げる。

守られてきて、のうのうと過ごしてきた自分が情けなく感じたのか。アスナの眼に涙が溜まっている。少しでも衝撃があれば、それは決壊して涙となり流れることだろう。

だがそれは流れることはない。そんな眼をしても、今この場にいる誰よりも強く、誰よりも凜然とした眼差しで。

「——それじゃダメなの。甘えてるだけじゃダメ、安心してるだけじゃダメ。もっと先に、それこそ彼を引っ張るくらい強くないと、わたしはユーキ君の側にいることが出来ない」

そう言うと、彼女は立ち上がる。

背筋を伸ばして、堂々と胸を張り、誰よりも高く天を見ながら。

「だから、わたしは強くなる。今よりももっと、彼を守れるくらい強く、彼よりも先へ進めるように早く、わたしは強くなってみせる——」

「……それじゃあ」

キリトはアスナを見て、直ぐに視線をリズベットに移す。

二人の少女が力強く頷くのを確認すると、キリトはエギルの方を見て。

「ユーキは、迷宮区に行ったんだよな？」

「ああ。それは間違いない」

今まで静観していたエギルが口を開く。

その声は今まで聞いてきたエギルの声よりも重く、そして力強いもの。彼はそのまま続けた。

「言っておくが、ユーキが俺に何を託したか言うつもりはないぞ。アイツにもアイツの主張がある。どっちかに肩入れするつもりは俺にはない」

それはどっちも正論だから、とエギルは理解していた。

自分以外が傷つくことが我慢できない、だから自分独りになろうと戦い続ける、と前進したユーキ。

そんなもの勝手だ、独りで勝手に進んで傷つくなんて許さない、と追いつこうとするキリト達。

どちらも他人を想つての言動であり、行動なのだから。故に、どちらが間違っているとか、どちらが正しいかなんて誰にも判断出来ない。

だがそれでも、エギルは断ずる。

「俺にはアイツの目を覚まさせてやる事が出来ない。ああいう眼の奴は意地でも己の意思を曲げねえ、多分死ぬ直前になろうと曲げることはないだろう」

それでも——ユーキの決断は間違っている。

独りで何もかもを解決しようとするのは間違っている、とエギルは堂々と言える。

それも当然のことだ。人間は、一人では何も出来ない。だから他人を頼って、頼られて生きているのだから。

「俺にはそれがわかる。大人つてのは不便でな、今まで生きてきた経験で何でも判断しちまうもんだ」

そこまで言うとは、エギルはキリトに近付いて、拳をキリトの胸に軽く当てる。

だがそれでも、キリトは重く感じた。ドンツ、とまるでエギルの積み重ねが詰まったような、軽い動作ながら重い衝撃。

「アイツに今必要なのは、俺のような大人からの説教じゃねえ。――

――お前達のような我武者羅な若い力だ。我武者羅で、経験も何も無い、根拠もない青臭い力が、アイツの心を溶かすのに一番必要なんだ」

「ああ……！」

力強く頷くキリトを見て、エギルは口元を緩ませる。

そして直ぐにアスナとリズベツトに視線を向けて。

「アイツを、頼む。口は悪いが、悪い奴じゃないんだ」

「知ってます」

クスクス、とアスナは笑う。

エギルの言った口の悪いが悪い奴じゃないと言う言葉が的を得すぎており、面白いというかのようには彼女は笑う。

――凄いな。

――君のために、怒ってくれたり託してくれたりする人がいる。

――多分、これを話してもお人よし共が、何て事を言うんでしょね。

――ああ、本当に。

そこまで心の中で呟くと、アスナは前を見る。

彼のように、いつも前しか見ていなかったユーキのように、力強く一歩を踏みしめる。

「それじゃ行こうみんな。わたし達のパーティーメンバーに追い付く

ために、一人斬り込んだ彼にいつも通り追い付くために――！」

――本当に。

――わたしの幼馴染は捻くれ者。

.....

2022年 11月28日

PM00:15 『第一層』 トールバーナ 迷宮区最上階

本来、迷宮区は20階層で構成されている。

1階から19階までは通常のダンジョン。エネミーモンスターがひしめき合い、宝箱も用意されている。本来のMMORPGと言えるダンジョンの作りとなっていた。

主なエネミーモンスターはルインコボルド・トルーパー。レベルは6の亜人モンスターである。慣れてしまえば脅威とはなりえないモンスターである。だがそのモンスターは前菜に過ぎない。

メインであり、第一層の最大の障害はボスエネミー。ボスを倒さなければ、上の第二層には昇れない。その事実がルインコボルド・トルーパーの存在を霞ませていた。

そんな第一層の迷宮区。最上階である20階のボスエネミーがいるであろう大広間に続く石造りの大扉。

深夜、誰もが寝静まったであろう時間で、ゆっくりとこじ開けられた。

こじ開けたのは一人のプレイヤー。背丈から言ってまだ幼さが残る。とても成人男性のものではない。

大扉が開かれる。それが引き金となったのか、大広間の壁に設置された松明に炎が灯り、光が大広間を照らし始める。入り口から奥へと、順番に松明に炎が灯り始める。

大広間の奥には玉座が設置されており、その玉座に座するは第一層迷宮区の主にして、コボルドの王——『イルファング・ザ・コボルドロード』の姿。身の丈二メートルほどのコボルドの王は、ただ静かに自身に逆らう叛逆者へと視線を向けていた。

叛逆者は怯むことなく、独りでゆつくりと、力強く歩を進める。

手には何も持っていない。徒手空拳であり、武器らしきものを何も持っていないかった。

一歩一歩、着実に歩を進める叛逆者。

その道を阻むのは王の近衛兵——『ルインコボルド・センチネル』の三体。全身鎧で武装し、獲物であるハルバードを叛逆者に向ける。

素手で、相手はハルバードを装備している。武器がある上にリーチも違いすぎる。それでも叛逆者の態度が揺らぐことはない。

「あー……」

叛逆者は右腕を軽く回すと、近くにいたルインコボルド・センチネルに向かって。

「オマエ、いい位置に頭あるな？」

そう下らなそうに言うや否や、無造作に金属製のヘルムに片手で手を伸ばし、強引に掴み上げると——。

「——オラア!!」

——強引にコボルドの王に投げつけた。

まるでその速度は砲弾のようで、投擲スキルなんて技術などではな

く、筋力に物を言わせる力技。

しかしそのような奇襲でも王の様子に変わりはない。玉座に座したまま、右手に持った骨を削って作られたような斧を無造作に横に薙いでルインコボルド・センチネル切り捨てる。

まるで暴君。

自分の部下を紙くずのように処理する。

青灰色の毛皮を纏い、二メートル超ほどある体躯、血に飢えたような赤金色の隻眼。右手には骨を削って作られたような斧、左手には皮を貼り合わせた雑な作りのバックラー。そしてHPゲージは破格の四段仕様。

誰がどう見ても、一人で挑む敵ではない。

そんな怪物を前にしても、叛逆者の様子は変わらない。

「いつまでここで見下してやがる」

メインメニュー・ウィンドウを開き、装備画面をタップして、とある武器を実体化させる。

「テメエはただの石ころだ。オレの進む道にある、ありふれた石ころに過ぎねえ」

石で作られた大雑把すぎる石斧剣。

斬る、というよりも叩き潰すといった表現の方が正しい。それは件のモンスターキラーが装備していたモノ。その大雑把すぎる両手剣を握りしめる。

そして同時に、呆氣にとられているルインコボルド・センチネルを横薙ぎに同時二体を斬り伏せて。

「障害物にもならねえ石ころなら——蹴り飛ばさねえとな？」

それを挑発と捉えたのか、コボルドの王は飛ぶ。

そして目の前に着地するや否や。

「!!!」

咆哮。

まるで威嚇するような、一人で挑む叛逆者を嘲笑うような。

大広間が振動で揺れる。ビリビリと石造りの壁が共鳴し、叛逆者の肌が震えた。

それでも叛逆者——ユーキは身の丈ほどある石斧剣を肩で担ぎ。

「さっさと終わらせてやる。テメエなんぞに構っている時間はねえんだ」

「」

二つの影が交差する。

本来一人では挑まない無謀。

だがユーキは独りで刃を王に向けた。オマエなんぞ独りで充分だ、そう言うかのように彼は石斧剣を力任せに振るう。

「!!」

「グッ……!」

斧と石斧剣がかち合う。

サイズは圧倒的にコボルドの王が有利である。体格が二メートル超ほどあり、その両腕は逞しいもの。とてもではないが、ただのプレイヤーが力で押し勝てる道理などない。

だがしかし、力負けしたのは——。

「!?!?!」

コボルドの王であった。

一步二歩、よろめきながら後方へと押し戻される。

「悪いいな」

その戦果に満足せずに、むしろ当たり前のように見ていたユーキが吐き捨てるように。

「こっちはドーピングしてんだ。正々堂々斬り合うつもりはねえぞ」

憤怒に染まった蒼い瞳がコボルドの王を射抜く。

そのまま眼を閉じて、一呼吸間を置く。

一度深く息を吸い込んで、深き息を吐く。

そしてイメージするのは、自身の内面。

——イメージするのは剣を持っている自分自身——。

——怒りのまま振りかぶり、目の前にいる影を切り捨てる——

。

——斬る度に、返り血を浴びる——。

——それだけで、力が湧いてくる——。

——この世界は奇妙だった。

ここに来るまでの間、エネミーモンスターに試していたことがある。それは怒りの開放。黒ポンチョの男に放った一撃のように、自身が怒れば怒るほど力が湧いてくる。負の感情を爆発させる度に、解放されていく。意志の力がアバターの身体を凌駕するように、驚異的な力となる。

だが身に余る力は代償があるようだ。

——力を使う度に、身が削られていく。

——文字通り、身体が欠けていく。

削られる音が聞こえたと思いきや、次に聞こえてくるのは連続して

何か割れる音。アバターの身体が欠ける音だった。

彼の怒りがこの身に耐えられない、そう言うかのように着実にゆつくりと削り取っていく。

だがそれでも――。

――構わねえ。

――これからどうなろうが知った事か。

――今は目の前の敵を叩き潰すことに全神経を注げばいい。

眼を開く。憤怒の色を濃くしながら、ユーキは石斧剣を振りかぶり。

「オラア！」

「!!??」

コボルドの王がバックラーを構えるも、それは紙も同然であった。その上から力任せに斬りつけて、バックラーを破壊しながらも叩き切る。たまらずコボルドの王は怯むも、すかさずに距離を詰めて思いつき斬り上げて、コボルドの王の身体が浮いた。

もはや技と呼べる代物ではない。技巧とは己の弱点を補う技術に過ぎない。その観点で言えば、今のユーキに弱点はなかった。己への憤怒という絶対的な意思でブーストされた身体能力。そこから繰り出される暴風と呼べるほどの破壊力、獣染みた速度。

並大抵の相手ではないと太刀打ち出来ない。

それが力任せで、駄剣と呼ばれる程の雑な剣でも、充分にコボルドの王の脅威になり得ていた。

既にコボルドの王の膂力では、拮抗することも出来ない。

何度か斧と石斧剣が火花を散らし、その度にコボルドの王の体幹がずれる。

コボルドの王のHPゲージが二段目に差し掛かるや否や。

「!!!」

その叫びはどこか悲痛なもの。

自身が死にたくないの、救援を必死に求む。そんな悲しいままな自分勝手な叫び声。

そして現れるのはコボルドの王の近衛兵であるルインコボルド・センチネル。HPゲージが四段目を削り新しく三体、そして今三段目を削りきつたので新たに三体目が現れる。計六体のルインコボルド・センチネルがユーキのアバター目掛けてハルバードを振るう。

対してユーキは迎撃する素振りすら見せない。

その眼には依然、コボルドの王だけを捉えていた。自身の身体が傷つこうが、着実にHPゲージが削られていようが気にも留めない。構うことなく、コボルドの王へと刃を振るう。

たまらず、一歩。また一歩。

コボルドの王は逃げるように後退していく。

だが目の前の叛逆者はそれを許しはしない。一歩後退するなら、それよりも早く距離を詰めて剣を叩き下ろす。逃げるのなら、それよりも疾く前に詰める。

その間に、ルインコボルド・センチネルがHPゲージを削ってくるが、気にも留めない。

その愚かな有り様。

命すら投げ捨てて向かってくる様子に――。

「!!!」

――コボルドの王はひたすらに恐れた。

その姿に威厳も何もない。

ただ生物のように、生への渴望がコボルドの王を後押しするかのよう、後方へと思いつきり飛ぶ。

そして先程のユーキの行動を模範するように、右手に持っていた斧を力任せに投げつける。

「——クソが……っ！」

ユーキはそれだけ言うと、石斧剣を地面に突き立てて、剣の影に隠れることで防ぐ。

直ぐに引き抜いて、コボルドの王へと意識を向けると。

——あ？

——アイツ、何を持っていやがる……？

先程の斧とは違う作りの武器。

剃った刀身に、研ぎられた鋼鉄の色合い。先程の使用していた武器とは天と地ほどの差があるくらいの武器が握られていた。

力で叩き伏せるのではなく、速さで斬り伏せるような——野太刀がその手に握られていた。

——関係ねえ。

——やることは変わらねえ。

——このまま一気に……。

そこから続かなかった。

ガクツ、と足を踏み出そうとするも、踏ん張りが効かずに倒れそうになる。

「あ……っ？」

身に余る力は身を滅ぼすものでしかない。

ユーキの自分を焼くほどの憤怒は、着実に身体を壊していた。右足の膝のあたりが、赤黒く削られていた——。

アバターの崩壊。それが力の代償。

一瞬、動きが止まる。

それをコボルドの王は見逃さない。

「!!!」

コボルド王の身が沈むと、巨体が一直線にユーキに向かって推進を始める。

咄嗟に、ユーキは後方へと片足で飛ぶも、それで回避が出来るはずがなかった。

一気に射程圏内に入るや否や、コボルドの王の野太刀が水平に360度竜巻のように振るわれる。

刀身には赤色のライトエフェクトが迸り、カタナ専用ソードスキル『旋車』が炸裂した。

「ガ——ッ!?!」

轟!という轟音と共に、繰り出された暴力。

何とか後方へ飛び勢いを殺し、石斧剣でガードするも勢いは殺すことが出来なかった。

砲弾のように飛んで、地面を転がるもそのまま停止することなく、石造りの壁へとユーキは叩きつけられる。

「ク、ソツ……!」

うつ伏せで倒れる。

そして殺到するのは、手柄を欲するルインコボルド・センチネル。彼ら6体全員、ユーキの息の根を止めようとハルバードを構えながら殺到した。

それをユーキはうつ伏せで倒れたままぼんやりと眺めて、HPゲージへと目を向ける。

——赤いな。

——腕もちぎれかけてやがる。

——また死にかけてるのか。

——まあ、これが潮時ってやつか？

その眼には先程の燃えるような憤怒の感情はない。

澄み渡るほど蒼く、どこか静かな面持ちだった。

——オレは二人を見殺しにした。

——その咎は受けないとならねえ。

——自分だけのうのうと生きているのは、道理に合わねえ。

だが、と言葉を区切る。

ルインコボルド・センチネルのハルバードが振り下ろされると同時に——。

「確かに、オレは死なないとならない。報いは受けなければならねえ」

両手剣である石斧剣を片腕で持つと、歯を食いしばり立ち上がる。

横に力任せに薙いでルインコボルド・センチネルをまとめて斬り伏せた。

「——だが、今じゃない」

「——!!??!」

ここでコボルド王は咆哮を上げる。一際大きく、困惑の色を籠めてコボルドの王は吠えた。

どうして目の前の敵が立ち上がるのか。決着が付いた筈である、と。片腕もちぎれかけているし、満足に立つことも出来ない。HPゲージだってもうないに等しい。だというのに、どうして諦めないのか。全く理解出来ない、道理に合わない、思考がまともじゃない。

コボルドの王はそう語るように吠える。

それに答えることもなく、淡々とした口調で、肩で息をしながらユーキは続ける。

「今、死ぬわけにはいかない。ここでオレが死ねば、アイツらが——
—アスナが戦う。それはダメだ」

石斧剣を地面に突き立てて、体重を預ける。

そうしてようやく立っている状態。それでも、そんな無様を晒しても、倒れることを拒否していた。

「アイツだけは傍にいてくれた。根性が曲がって、腐ったオレなんぞの近くに、アイツは傍にいてくれた。父さんと母さんが死んで連中が離れても、アイツだけは傍にいてくれた」

それでも眼はコボルドの王を睨みつける。

眼を離さないように、己の敵を見失わないように。

「アイツを守れなくてもいい、アイツの傍にいれなくてもいい。守るのはキリトみたいな強いヤツの領分だ、オレはアイツが戦わなくてもいいように、誰よりも前に進んで敵を叩き潰す」

だから、と言葉を区切り、剣を引き抜いて前に進む。

それがどれほど無様でも、足を引きずって痛々しいものだったとしても、着実に前に進む。

「——オマエは邪魔だ。オマエらがいる限り、この世界がある限り、アイツはまた剣を握る。握らなくてもいいものを握って、また戦う羽目になる。こんな世界がある限り変わらないというのなら、叩き壊す。最短で突破して、こんな世界叩き潰してやる」

「——ッ!!」

コボルドの王の咆哮に、うるさい、と一蹴しユーキは吐き捨てた。

「石ころ、そこをどけ。——オレが進む道だ」

それが引き金となった。

コボルドの王は全力で、ユーキの元へと推進する。

満身創痍にも程がある状態。こんな状態で斬り合える訳がない。

今のユーキには何かもが足りない。

レベルが足りない。

戦力が足りない。

時間が足りない。

速度が足りない。

何もかもが足りない。

ならばどこで補えばいいのか。何もかもが足りないのであれば、何で埋めればいいのか。

——足りねえのは、怒りだ。

——もつとだ、もつと。

——人間のままでは勝てねえ！

眼を閉じる。

片腕が使えない——怒りのまま振りかぶり、目の前にいる影を

切り捨てる——必要ない片腕で充分だ。

片足が動かない——斬る度に、返り血を浴びる——無理矢

理動かせばいい。

怒りが足りない——それだけで、力が湧いてくる——不甲

斐ない自分を思い出せ。

眼を開ける。

——瞬間、轟!!という爆音と衝撃と共に、ユーキのアバターから噴出する。

それは墨よりも黒く、闇よりも黒く。炎のように己すら燃やし尽く

す絶対なる憤怒。

その瞳には再び、憤怒の黒い感情。動かなかった片足に力を込めて。

「ガアああああア！」

——コボルドの王へと推進する。

無謀な玉砕特攻。

それが、コボルドの王の意表を突くことになった。今まで死に体だった筈なのに、どうしてそんな速度を出せるのか、とコボルドの王の動きが一瞬鈍る。

だが一瞬、されど一瞬だ。

ユーキはその一瞬だけで充分すぎる——。

「オラア！」

「!？」

片手で、身の丈ほどのある石斧剣を力任せに振るう。その速度は両手で持っていたとき以上。

たまらず、コボルドの王は野太刀で防ごうとするも。

「!？」

間に合わない。

防ぐ前に斬られて、後退する前に斬られる。

正に先の先、電光石火の勢いで疾風迅雷の如くコボルドの王を肉薄にする。

ならば、と。

コボルドの王は防ぐことを諦めて、攻撃に転じる。

野太刀と石斧剣がかち合い火花が散る。それだけで衝撃となり、石造りの壁が不安定に揺れ、壁に立てかけていた松明が揺れる。

しかし二度目はない。

一度の鏢迫り合いで、コボルドの王の野太刀は粉碎されて。

「!!!」

悲鳴を上げたまま、斬ッ!つと。

NPCの左肩口から斜めに振り下ろし、上半身を斜め一直線に貫き、NPCはそのまま地面に叩きつけられて後方へ二転三転転がりながら吹っ飛んでいった。

石造りの壁に叩きつけられた直後、第一層迷宮区のボスエネミー『イルファング・ザ・コボルドロード』はその身体を幾千幾万の硝子片へと四散させた。

「」

それを見送ったユーキの目の前には『You got the Last Attack』というシステムメッセージ現れる。

しかしそれには眼もくれず、ユーキは肩で息をして、地面に突き刺した石斧剣に体重を預ける。

正にギリギリの状態、だがそこに背後から――。

『また無茶をして!』

窘める声が聞こえて。

『だから直ぐに斬り込むなって言っただろ!』

自身に敵意を向けてくる声が耳に入り。

『ホント、アンタはどうしようもないわね?』

呆れる言葉があつた。

「ハッ」

彼は振り返り――。

「勝ったんだから別に――」

――誰もいなかった。

大広間へと続く扉は開かれたまま、そこには誰もいなかった。

いつも傍にいた幼馴染も、自分と張り合っていた少年も、装備を消耗したらメンテナンスを呆れながらしてくる少女もいない。

いる筈がなかった。

少年は進むために、前に進むために、何もかもを捨ててここにいるのだから。

「――ああ」

吐息のように、言葉が出た。

どういった感情を乗せて口にしたのか、それは本人にしかわからないだろう。

前しか見ていなかった少年は初めて振り返り、直ぐに前方へと見据える。

ただひたすらに前へ、仲間たちが追いつけないほど前方へ、誰よりも最前線へ、少年は赴く。

背後にいた紫色のローブを羽織った女性プレイヤーに気付かないまま――。

そうして一人のプレイヤーが誕生する。

素顔は不明。全身フルプレート製の鎧を着ており、効率を重視にした色合いや種類のバラバラなツギハギの装備。

何よりも異様なのはその戦い方。ただひたすら敵を斬ることを考えて、HPゲージが削れようが衰える様子はない。

その有り様は『ベルセルク』のようで、エネミーモンスターすら恐怖する様子から、そのプレイヤーはこう呼ばれた。

——アインクラッドの恐怖——と。

幕間 帰還を待つ者達

埼玉県所沢市 総合病院

『ソードアート・オンライン』。

世界初のVRMMORPGの名称である。

2022年10月31日よりゲームメーカー『アーガス』より発売された。その人気は非常に高いもので、初期出荷1万本が瞬時に完売された。それほど凄まじい人気を誇っていた。

ナーヴギアというVRマシンを頭に装着し、完全ダイブを実現させていた。完成された仮想空間の中でプレイヤーは現実世界と変わらない臨場感で、ゲームをプレイしていた。

だがそれは過去の栄光。

今では忌むべきモノとして周知されている。

夢と希望に満ちていた『ナーヴギア』は悪魔の機械として評価を下げて、開発者であり今回の事件——SAO事件の首謀者である天才プログラマー茅場晶彦は行方不明。

世界は正に混沌に包まれていた。

SAO事件の被害者であるSAOプレイヤーは今だに意識を取り戻した者はいない。

それもその筈。

ソードアート・オンラインをプレイしているプレイヤーはクリアしないと現実世界に帰還することが出来ない。クリア、それはすなわちアインクラッドの第百層の到達を意味している。

外部からの接触は皆無。それどころか、無理にナーヴギアを外そうとするものなら、強電磁パルスが発生されて装着者の脳を破壊する仕組みとなっている。

故に、プレイヤーの家族、友人、恋人は待っているしか出来ない。

そう、待っているしか出来ないのだ。プレイヤー達は命がけで戦っているというのに、自分たちは待っていることしか出来ない。途方も

ない無力感に苛まれるが、待っていることしか出来ない。

そんな中、病院にて。一人の女子中学生の姿があった。

学校帰りなのだろうか、制服を身に纏い、装着しているメガネがどこか知性の高さを演出させていた。歩く様子も背筋を伸ばし、どこか堂々としている。

そんな彼女は歩きながら、とある病室を目指す。

そこには彼女の先輩が今も尚眠っている。その先輩もSAOプレイヤーである。ゲームには全く興味がないと言うくせに「ツレがやりてえって言うからな。仕方ねえだろ」と渋々言う声は記憶に新しい。だがこうして、SAOプレイヤーが収容されているのは珍しくもない。

この総合病院には彼女も把握していないものの、かなりの人数が今も眠り続けていることがわかっていて。

当初は病院内も大パニックとなっていた。無理もない、家族や恋人がゲームの世界に囚われ、クリアしないと目覚めない。更に言えば、ゲームの世界でのゲームオーバーは現実での死を表している。とても冷静でいられる筈がない。

だが悲しいかな。人間とは慣れるものだ。

こうして見舞いに来ては、意識を取り戻してないことを落胆し、病室を後にする。そういったサイクルを繰り返していた。

彼女もその一人である。

学校帰り、もしくは休日にかこうして病室に訪れていた。そして面会時間が終わるまで様子を見て、病室を後にする。

そうして今。

彼女はいつも通り、先輩の病室の前に立つと扉を開けた。

そこにはベッドがあり、横たわるのは少年。髪がプラチナブロンドで、一定の間隔で胸が小さく上下していることからまるで寝ているかのようだ。規則正しい呼吸音、腕には管が刺さっており、透明の栄養剤がそこから注射されている。

横には生体情報モニターが設置されており、胸や腹に粘着テープの

ように接着されていた。心拍数とか脈拍とか血圧を計るためのもので、現に電子音と共に折れ線グラフのようなものが表示されている。

少年の他にも、そこには一人。

ベッドの横のパイプ椅子に座っている少女の姿。

金髪でツーサイドアップの少女は静かに少年を見守っている。歳は6歳くらいだろうか。

少女は部屋に入ってきた彼女に気付くと、一度立って会釈する。

やはり少女は静かに、どこか淡々とした調子で口を開く。

「こんにちはです、詩乃さん」

「……ええ、こんにちは。レベッカちゃん」

眼鏡の彼女——朝田詩乃は寝ている少年の隣に近付き様子を
見る。

「……………」

それは穏やかな寝顔だった。

瞼の奥にある蒼い瞳は見えないものの、穏やかな寝顔だった。寝ているだけ、と思いたいものだが頭に装着しているナーヴギアが存在が容赦なく現実を引き戻してくる。

寝ているのではない。この状態でも、少年は戦っているのだ。クリア目指して、恐らく戦っている。

詩乃は少年に眼を向けたまま、詩乃に名を呼ばれた少女——レベッカに問いかけた。

「変わらずっ？」

「……はい、ゆーきは寝たままです」

「そう……………」

極めて冷静に、詩乃は感情を表に出さずに答える。

だが身体は制御できないほど荒だっていた。両手の拳を握りしめて、奥歯を噛みしめる。そして悔しそうに少年へと視線を向ける。その姿は不甲斐ない自分が情けないようで、何も出来ない自分に苛立っているようでもあった。

どこか泣き出しそうで、我慢している。

それはレベツカも同じようで、必死に無表情という仮面を被っているようでどこか痛々しい。

泣くのを我慢している。そんな様子のまま、レベツカは徐に口を開く。

「それじゃ、私はもう行きますです」

「そう。今度はお父さんのお見舞いに？」

「はい。でも明日奈お姉ちゃんの様子見てから、ダディ——お父さんのお見舞いに行きます」

「気を付けてね。お父さんの病院違うんでしょ？」

「ありがとうございますです。詩乃さんも帰り気をつけて下さい」

それじゃ、と軽く詩乃に会釈して、レベツカは病室を後にする。

小さい、あまりにも小さい背中を見守って、詩乃は静かに語り始める。

「最初は泣いてばかりだったのよ？　ここに来ては泣いて、先輩にしがみついて泣いて、帰るときも泣いてた。今では静かなものよね」

当初の、SAO事件が始まって間もなかったレベツカを思い出した。

レベツカの母親と一緒に病室に来て、レベツカはこれでもかというくらい泣いていた。しがみついて泣いて、涙を拭いても溢れていた。だが今ではそんな姿は見られない。

静かに、ただ静かに。どこか耐え忍ぶように、我慢するように、誰

も困らせないようにレベツカは手のかからない子供を演じていた。

「きつと、お母さんに苦勞させまいとしているんだと思う。彼女の氣持ち、痛いほど分かるもの」

自身の過去と照らし合わせて、重ねるように詩乃は呟いた。

過去の自分と、今のレベツカ。二人の影を重ねてたまま、彼女は続ける。

「先輩はいつからあんな小さい子にまで手を出し始めたのよ。まさかロリコンなの？」

そう言つて笑みを浮かべるも、その笑みはどこか悲しいもの。

喜怒哀樂の『哀』の感情を全面に押し出したような笑みだった。

「あの子だけじゃない。明日奈さんのお父さんとお母さん、それとお兄さんもお見舞いに来てるわよ？ あとはレベツカちゃんのお母さん」

ここで顔を合わせた面々の顔を思い出す。

皆が皆、悲しそうな面持ちで少年を見ていたことを詩乃は思い出しながら。

「あんなに心配されて、貴方は何ていうのかしらね？ どうせ捻くれた事を言うのでしょうけど」

そこで、ふと詩乃は昔を思い出した。

「覚えてる？ 先輩がイジメられてた私を助けてくれたときのこと」

そうだ。

いつだって少年は捻くれていた。

過去の出来事から、母が精神的に病んでしまい彼女は母の療養の為に都内へと引っ越してきた。

そこで待っていたのは、輝かしい未来ではなく、起こしてしまった過去だった。どこから漏れたのか、詩乃が起こした過去が原因で彼女は転校した学校でもイジメられた。

犯罪者、人殺し、化物。

様々な罵詈雑言が彼女に投げつけられる。それこそ容赦なく、悪気もなく、物事の善悪の区別もつかないまま、詩乃の同級生は言葉を屈指し追い詰めていく。

そんな中、チツと舌打ちが聞こえたと思いきや。

—— テメエら、下らねえことでハシヤイでんじゃねえよ、と。

不機嫌そうな口調で、いつの間にか詩乃を守るように一人の少年が立ちふさがっていた。

そして始まる取っ組み合いの喧嘩。少年は一人で奮戦するも多勢に無勢。数には勝てずに、打ちのめされてしまう。

だが少年は倒れなかった。どれだけ殴られようと、どれだけ蹴られるようと倒れずに、一人で向かっていく。詩乃の眼には少年はヒーローのように見えた。物語のように甘くなく、少年は負けてしまうものの、詩乃の眼には自分を救いに来た救世主のように見えた。

「どうして私を助けたのか聞いたけど、先輩が自分で何て答えたか覚えてる？」

—— 別に、オマエの為じゃねえ。アイツらが目障りだったただけだ。

—— 1人に対して大人数で喧嘩挑んでるアイツらが気に入らなかつただけだ。

あまりにも捻くれて、あまりにもぶつきらばうな理由。

直ぐに嘘だとわかってしまう。気に入らないのなら向かっていく必要性もない。目障りなら視界に入れなければいいだけの話だ。

少年がどう取り繕っても、どんな言葉で否定しても、詩乃を助けた

という事実が変わらない。

だからこそ、詩乃は彼を『先輩』と呼ぶ。助けてくれた彼に敬意を表して、彼だけは先輩と呼んでいた。

「先輩は素直じゃないのよ。どうせそつちでも捻くれたことを言つて、色々やらかしてるのでしょ？」

口は粗暴の癖に、他人を放っておけないお人好し。

少年にそういつた人物評価を下して。

「——ねえ、先輩」

詩乃の声が震える。

彼女自身、これ以上口を開くとどうなるかわかっていた。

しかし止まらない。我慢しようにも止まらない。彼女は震えた声のまま。

「早く——帰ってきてよ……」

溢れ出したのは声だけではない。

彼女の眼からは溢れんばかりの涙が流れ始める。メガネを取り、涙を拭う

「もう、一年よ？ 私も中学二年生になっちゃった。これから受験勉強して、先輩と同じ学校に行こうと思ってた。多分、先輩には嫌な顔されると思うけど、それでも一緒にいたいから同じ学校に行こうとしてたのに……！」

身勝手な言い分だとは詩乃も理解していた。

だが言葉は止まらない。何も出来ない自分の憤り、一向に目覚めない彼への焦り、そしてこんな暴挙に及んだ開発者への怒り。それらが

複雑に絡み合い、詩乃の感情を支配していた。

ただ一緒にいたい。

それだけなのに、彼は寝たまま。憎まれ口も、粗暴な声も聞くことが出来ない。

「お願い、お願いだから。無事に帰ってきてよ——先輩……！」

ギュっと、両手で彼の片手を握りしめる。

細くなった手。栄養が行き届いてない手を握りしめたところで彼

——茅場優希は握り返しはしなかった——。

2023年 11月10日 PM16:50

今だにSAOプレイヤーの帰還の兆しは——ない——。

幕間 世界に憤りを募らせる者達

2022年 12月7日

PM20:30 第二層 『ウルバス』周辺フィールド

—— 第一層が攻略されて、数日が経った。

一体どここの誰が、どんなプレイヤー達が攻略したのか不明だが、フロアボスが存在していた大広間は無人となっており、第二層へと続く転移門が有効化されていた。そのことからどこかの団体が突破したのだろう、とプレイヤー達は決めつけていた。

そしてその事実から作り出された『攻略組』という単語。

それは文字通り、ソードアート・オンラインを攻略することを最優先事項とする団体の呼称。

第一層を突破したプレイヤー達を『攻略組』と称し、自分たちも『攻略組』という名を欲し、プレイヤー達は己を高めんとレベリングを行う。

ただしそれは自己犠牲の精神から来るモノではない。ただ単純に、置いて行かれて遅れるのが不安だから。自分たちの知らないところでボスを倒されるのが我慢できないから、といった理由に過ぎない。

だがそれでも、戦えないアインクラッドに囚われているプレイヤー達からしてみたら、攻略組は希望の象徴でもある。

ソロで行動する者、ギルドに属する者、ギルドという派閥を作らずにパーティーを組んで行動する者。

攻略組にも様々なプレイスタイルで行動するプレイヤー達が増えてきていた。

そんな中、エネミーモンスターが犇めくフィールドにて。

奇妙なプレイヤーが存在していた。

片手には短剣。

膝上まで包む、艶消しの黒ポンチョを羽織って、目深くフードを被っている男は自身の短剣を弄びながら、手頃の岩に腰掛けている。

その雰囲気はどこか不気味で、他のプレイヤーとは一線を画するものだ。

男の雰囲気もそうだが、何よりも眼に引くのが彼の頭上にあるカーソルの色。その色はグリーンではなく、オレンジに染まっている。それはつまり、何かしらの犯罪を犯した証拠。このデスゲームにおいて、他のプレイヤーへの殺傷は最も禁忌とするもの。しかし男は何も隠すこともなく、堂々と近場の岩に腰掛けています。

あまつさえ――。

「〜♪ ―――♪」

鼻歌を歌いながら、機嫌が良いような調子で装備の手入れを始める。

どこの歌だろうか、少なくとも日本の音楽ではない。

「ヘッドーー！」

そんな彼に声をかけてきたプレイヤーが一人。いや、その後ろにもう一人が追隨している。このことから黒ポンチョの男の仲間は最低でも二人いることがわかる。

仲間ということもあり、その頭上のカーソルはやはりオレンジ。彼らも何かしらの犯罪を犯していた。

装備の手入れをやめて、黒ポンチョの男の意識は声をかけてきた頭陀袋を思わせる黒いマスクで顔を覆っているプレイヤーに向けられた。

「おう、どうだった？」

「ダメだわー。また『はじまりの英雄』が邪魔しやがった！」

問いかけられた黒いマスクで顔を覆っているプレイヤー――
ジョニー・ブラックが甲高い声で憤りを隠さずに叫んだ。

それに同調するかのようになり、紅眼で紅髪の髑髏を模したマスクを着けているプレイヤー——ザザは静かに、だが苛立ちを隠しきれない口調で。

「アイツを、殺す。もう我慢の、限界だ……」

「俺も限界だったの。アイツ殺しちやおうぜ」

——プレイヤー同士、無様に殺し合う姿を見たい——。

彼らが結束している理由は、つまるところそんなものだった。

そのために、彼らは攻略するために必死にレベリングをしているプレイヤーの影で暗躍を始める。ときにベータテスターの悪評を広めたり、ときに情報屋と称し嘘の情報を流したり、ときに強化詐欺の手法を伝授したり。

もちろん、彼らはオレンジプレイヤー。

この仮想世界において何かしらの犯罪したプレイヤー達だ。何を行ったところで警戒する者が現れることだろう。

そこで彼らは暗躍する前に、同士を募ることにした。自分たちと同じような思想を持つプレイヤーを煽動し、手足のように扱い争いの火種を生ませる。

通常ならばそんなもの成功する筈がない。

だが計算外なのは、彼ら——いや、黒ポンチヨの男は類稀なる人心掌握術と卓越された扇動技術の持ち主だったということ。

黒ポンチヨの男は言葉巧みに誘惑、都合のいい言葉を並べて洗脳し、自身の手足を増やしていく。そうして自分の手を汚さずに、プレイヤー達の殺し合いを蚊帳の外から見物するつもりだったのだが——。

——あの時は急ぎすぎた。

——忌々しいことに、俺がオレンジになるとはな。

黒ポンチヨの男の意識は自身の頭上、オレンジに染まったカーソル

へと注がれる。

らしくない、と自身でも思うものだった。

下準備をしていた最中に現れたモンスタークイラー。これを利用する手はないと、策謀を張り巡らせようとした最中にモンスタークイラーが討伐されて、『はじまりの英雄』という余計な希望が生まれ、活気付いてしまった。

そして積極的に初心者を救済活動されたことにより、ベータテスターと初心者の間で起きる不和による殺し合いという計画の一つも潰されたことになった。

ならば『はじまりの英雄』を殺害し、希望を絶望に叩き落とせばいい、と画策するのだが、手段がらしくなかった。

自身は手を汚さずに、他人に行わせる。それがソードアート・オンラインでの黒ポンチョの男のやり方だった。それがここに来て、自身の手を汚してしまい、オレンジになってしまった。

正直に言えば、黒ポンチョの男は焦っていたのかもしれない。

イレギュラーに続くイレギュラーに、正常な判断が出来なかったのかもしれない。

——だが、別に良い。

——今は、んな事どうでもよくなる野郎を見つけた。

口元を笑みで歪ませる黒ポンチョの男に対して、ジョニーは声を荒げる。

どうやら無視されている、と認識しているのだろう。

「ヘッド、もういいっしょ？ はじまりの英雄をぶっ殺そうよー！」

「あっ！」

そこで黒ポンチョの男はようやく、意識を再びジョニー達へと向けられた。

そして考える『はじまりの英雄』を殺害するためのプラン。

結論から言つて、今ではそれは不可能となつていた。

黒ポンチヨの男が襲撃してから、はじまりの英雄の周りは強固な守りとなつている。

フィールドに行くにも、数人で行動しているし、取り巻きも多い。

――斧使いのエギル。

――そして無精髭を生やした赤バンダナのプレイヤーの仲間数人。

――はじまりの英雄様の追っかけ数人。

――数的にも不利極まりねえ。

ならば不和を狙い、非ぬ噂を流せばいい、と考えるも直ぐに無理だと断じた。

――今のアイツらは気持ち悪いくらい団結力が高い。

――内部から崩壊させんのはもう不可能だろう。

だがその結束力も妙なものだ、と同時に黒ポンチヨの男に疑問が生まれる。

襲撃してから、翌日にははじまりの英雄の周囲は今の体制となつていた。これはいくら何でも早すぎる。

となれば、何者かが、はじまりの英雄の周囲を固めるために情報を操作していたことになる。

それは何者か。はじまりの英雄――キリトの仕業かと考えるも、それはすぐに違つたと黒ポンチヨの男は断じた。これは確証などない、ただの直感でしかない。

――お前だろう。

――地盤を固めて、外敵から守ろうとした。

――情報を流して、健気を守ろうとしてんのはお前だろう。

――なあ『俺の恐怖』……！

黒ポンチョの男の脳裏に過るのは、アレからキリト達の輪から消えたプレイヤー。

プラチナブロンドの頭髮に、蒼い双眸、そして何もかもに苛立ちを覚えている雰囲気を纏った少年の姿。

賢しい手を打ってきやがる、と。

黒ポンチョの男は喉をクツクツと鳴らし笑いながら。

「今はやめとけ。分が悪すぎる」

「でもさあ、調子に乗ってるアイツがムカつくしさあ！」

「ああ。本当に、癩に障る野郎だ」

癩癩を起こしたように騒ぐジョニーに、ザザが同調するように頷いた。

状況が読めていない二人に、どこか苛立ちを覚えたのか黒ポンチョの男は舌打ちをするも、二人は気付いていない。

「いいよ、俺達だけで行こうぜ」

「そうだな。次に、迷宮区に行く所を——」

殺す。

そうザザが言う前に、黒ポンチョの男は立ち上がっていた。

同時に二人の様子が変わる。

不平不満が募っていたものから、人心洶洶と身体が震える。

絶対零度。そんな冷たい殺意が黒ポンチョの男から放たれており、彼らはそれを一心に浴びた。

「——おい」

声も冷たいものだった。

いつの間にか短剣を握られて、二人に近付くとジョニーの頬を刀身で叩き、次にザザの肩をポンと軽い調子で手を置く。

そのまま冷たい声で。

「今は、やめとけ。俺はそう言ったつもりだったが、聞こえなかったのか？」

「……ッ！」

「」

殺意が籠められた言葉に、ジヨニーは必死に首を横に振り、ザザは反応出来ないくらい固まる。

誰がどう見ても、二人は恐怖していた。黒ポンチヨの男に、怯えていた。

しかしそれを冷たい目で見ながら黒ポンチヨの男はどこかつまらそうに。

——アイツの『恐怖』はこんなもんじゃねえ。

——この程度の代物じゃあなかった。

黒ポンチヨの男。

プレイヤーネーム『P O H』。リアルネーム『ヴァサゴ・カザルス』。望まれて生まれた。

しかしそれは世間一般的な『望まれる』モノではない。望まれたのはヴァサゴ本人でなくその臓器。父の本当の家族の臓器提供するための部品として、彼は望まれてこの世に生を受けた。

母からは恨まれて、父からはモノとして認識されて育った。物心がつく頃にはそれを認識しており、自分が生まれた意味も理解して育ってきた。父の本当の家族へその臓器を提供すれば、自分は捨てられる。そう考えたヴァサゴは母と別れて、生きるために日本へ渡る。

そこでヴァサゴを待っていたのは、輝かしい現実ではなく、不平等極まる世界だった。

まともに生活も出来ず、生活費も満足に稼げない。だが生きるため

には金がいる。そうして彼が選んだ道は暗殺者としての道。

何度か仕事をこなして、記念すべき10回目の暗殺。それがこのソードアート・オンラインであった。

ゲーム内で要人を殺せ。

などと指示を受けて、最初はヴァサゴも意味がわからなかった。どうしてゲーム内で殺すことに、暗殺となり得るのか。

その疑問も直ぐに解消されることになる。

デスゲーム。

ゲーム内での死が、現実の世界の死に繋がる。なんとも簡単なモノだ、とヴァサゴが思うと同時に、かなり面倒くさいものだ、と彼は辟易することになる。

なにせソードアート・オンラインは所詮はゲームだ。プレイヤーキルするものなら、それはログとして残る。つまり明確な証拠として残ってしまうのだ。暗殺者の自分が暗殺した事実がバレる。これほどマヌケなことはないだろう。

それを踏まえて彼が取った手段は、プレイヤー同士の殺し合いだった。

裏で扇動し、巧みに話術で誘惑し、殺し合いに差し向ける。そうすれば証拠も残らないし、仕事も遂行できる。

こうしてヴァサゴは途中参加と言う形で、ソードアート・オンラインの世界に降り立つことになる。

何もかも偽物の世界。偽りの名前に、偽りの姿、偽りの景色、偽りの凶器。

そこでヴァサゴは無意識に抱いていた感情を爆発させる。それは——憎悪。

眼に映るプレイヤーはどこか自身を部品として見ていた父によく似ており、苦労などない安穩無事に生きてきたような顔。

それを見て彼は——許せない——と憤りを感じた。

どうして自分だけがこんな理不尽に苦しまなくてはならなかったのか、母からは恨まれ父からはモノとして認識される。どうして自分はこんな不平等な世界で生きなければならなかったのか。

そうして彼は己の中に眠っていた『憎悪』を自覚し、仕事は別に己の欲望のまま、プレイヤー同士を殺し合わせるために行動するために暗躍を始める。

その過程で、彼は出会った。

自分と同じような眼をしていた少年に。

自分のように世界に憎悪しているかのような、闇よりも深く、墨よりも黒い眼を宿した少年に。

——アイツは俺だ。

——俺もアイツも、世界つてやつを憎んでいる。

まるで鏡を見ているかのような感覚。同じと言えば性別だけだ。それ以外は何もかもが違う。だというのに、ヴァサゴは瞬間的に理解した。この男は自分と同類だ、と理解した。だからこそ彼は戸惑い妙な問いを投げてしまった「ところで、お前えは何だ？」と。

だが少年は答えない。

それもその筈だった。少年の怒りの矛先は、ヴァサゴに向けられていない。あの瞬間、少年に斬られる瞬間まで、少年はヴァサゴを見ていなかった。

怒りの矛先は自分自身へ。墨よりも黒い憎悪も、業火よりも激しい怒りも、少年自身に向けられていた。

——アイツも、俺を見ないのなら、嫌が応にも振り向かせてやる。

——アイツの怒りを、憎しみを、俺に向けさせる。

——アイツを理解できるのは俺だけだ。

——俺を理解できるのはアイツだけだ。

——それ以外は邪魔でしかねえ。

そこで思い出すのは、少年が後生大事に抱えていた女性プレイヤー。名前は——アスナ。

はじまりの英雄を守るために周りを固めたのではなく、アスナを守

るために守りを固めたのだろう、とヴァサゴは勝手に思い込んだ。

同時に生まれるのは嫉妬心。

どうして自分自身を見なくせに、同じ存在である自分を認識しなくせに、あの女だけ特別なのか。

——ああ、そうか。

そうしてヴァサゴは思いついた。

自分へと意識を向ける方法を、彼は思いついた。

——あの女を殺せば、少しは俺を見てくれるかな？

——あの女を殺せば、お前も俺と同じようになってくれるかな？

——お前だけは、俺を見てくれるかな？

——なあ、『俺の恐怖』よ……。

もはや『はじまりの英雄』への興味は失せていた。

プレイヤーの希望を摘み取るよりも、自分の欲望を満たすために彼は行動する。

その為には、人数を集めなければならない。

周囲を強固に固められているのならば、自分も同じくらいの人数を揃えなければならない。

つまりはギルドの結成。

自分の欲望を満たすために、彼は再び暗躍を始める。

『はじまりの英雄』ではなく、誰にも存在を認可されていない、たった一人のプレイヤーを殺すために、彼は動き始める。

——『俺の恐怖』。

少年のプレイヤーネームも知らないが、少年の存在だけあれば充分。そう言うかのように——。

同時刻。

第二層が攻略された。

これもまた誰が攻略したのか不明。

同時にあるプレイヤーが頭角を表す。

フルプレートアーマーに身を包み、見栄えを捨てて、効率だけを求めたツギハギの装備。

素顔も隠れており、プレイヤーネームも不明。

戦い方も荒々しく、自身が傷つこうが構う様子もない。まるで命を捨ててるかのような鬼気迫るもの。エネミーモンスターすら恐怖させるような出で立ちに、こう呼ばれるようになる。

——『アインクラッドの恐怖』——。

Vol. 2 アインクラッドの恐怖
第1話 鎧の少年、紫ローブの少女

2022年12月26日

PM 22:40 第五層 枯木の森

——ソードアート・オンラインの世界で雨が降るのは珍しい。
仮想世界と言えど、アインクラッドでは雨が降る。

その触感もリアルなもので、雨に濡れれば衣服が濡れて、容赦なく体温を奪っていく。アバターの皮膚に水滴が落ちれば、それは重力に従って下方へと垂れていく。まるでそれは本物の雨、仮想世界にいなから現実世界の雨に打たれているかのような感覚。

しかしリアルに近すぎるというのも考えものだ。

ベータテスト時はかなりの頻度で雨が降っていたアインクラッドでは、今では珍しいものとなっている。理由は至って単純で単純なもの。プレイヤー達の苦情により、雨が降ることは減少していった。

そうしてアインクラッドでは珍しい雨が、本日降り始める。

近場を狩りしているプレイヤーも悪条件に、近場の主街区である『カルルイン』へと避難し始めていた。少しのミスが命取りになるデスゲームにおいて、その判断は正しいとも言える。

故に、フィールドにいるプレイヤーは皆無となり、誰一人狩りを行っているプレイヤーは存在しない——。

「……………」

否、プレイヤーは、存在した。

その数は6人。1人は中年くらいの男性で地面に仰向けで倒れ伏しており、5人が倒れているプレイヤーを囲うように見下ろしていた。

仲間ではない。何せ倒れている中年男性プレイヤーは怯えながら見上げており、残りの5人はどいつもこいつもニヤニヤと笑みを浮かべて見下している。

通常では考えられない光景。

草木も生えない荒れ果てた大地、木は生えているも全てが枯れている。その木の枝にカラスが止まっていた。ロケーションも相まって、とても不気味な雰囲気醸し出している。

「いやあ、上手く行ったな」

「ホントよ。麻痺強くね？ ヤバくね？」

「人間相手だったら最強だろこれ……！」

「やべえじゃん、興奮してきた！ 次、次俺だけにやらせろよ！」
「待てよ。その前にこのオッサン殺さないダメじゃん？」

不穏で不気味な言葉だけが、中年男性プレイヤーの耳に入ってきた。

闇討ち紛いのことをされて倒れている自分、そして明確な殺すという言葉。無事に解放される状況ではなかった。顔も見ている、麻痺と言うプレイヤーをどうにでも出来る手段を用いて来た。

良い方向に転がっても、悪い方向に転がっても、いずれにしろ自分は殺される。そういった確証を中年男性プレイヤーは持っていた。

どうしてこうなったのか――。

中年男性プレイヤーの脳裏によぎるのはそんな思いだけだ。

ベータテストを経て、ソードアート・オンラインが発売されて、デスゲームに巻き込まれて。どうしてこうなったのか、の連続だった。フィールドに足を運んだら、モンスターキラーと言う怪物の出現。ベータテスターというだけで白い眼で見られる日々。

だがそれも終わりを告げる。『はじまりの英雄』と呼ばれる少年プレイヤーの出現により、モンスターキラーは討伐されて、ベータテス

ターへの扱いは日に日に改善されていた。

民草は英雄の姿に憧憬の火を灯す者。幸運なことに、『はじまりの英雄』はベータテスターであり、更に幸運なことに自らをベータテスターと名乗り初心者者の救済に奔走した。それから初心者はベータテスターに尊敬の眼差しを向けることになっていった。

それに対して、一部のベータテスターは手の平を返してきた初心者に快くないプレイヤーも確かに存在していた。

しかし中年男性プレイヤーはそうは思わなかった。こんな世界だ、こんな時だからこそ、プレイヤー全員が一丸になって生き残らなければならぬ。少なくとも彼はそう考えていた。

そして今。

第五層の遺跡にて遺物を拾っていた——通称『遺物拾い』を行っていた集団を見つけたので声をかけた。

中年男性プレイヤーは遺物拾いの効率が良いやり方をベータテスト時に知っていたのだ。街に行けばバフ付きの限定メニューを食した方が効率が良い。そのことを教えた瞬間、後ろから五度の衝撃。

攻撃された、と気がついた頃には遅い。HPゲージは点滅し麻痺を知らせて、5人の頭上のカーソルはオレンジに染まっていた。

このデスゲームにおいて最大の禁忌であるプレイヤーキルを実行しようとしているのは明らかだろう。

それも仕方なくではない。面白半分で、手に入れた武器がどれほどの威力なのか試したい、といった軽い調子で行おうとされている。

「つーかよ、何で全員で攻撃してんだよ。俺ら全員オレンジじゃねえか」

「あ、ヤベ。ホントじゃん」

「バカだろお前！」

「お前もバカなんだよ！」

「……まあ、別に良いだろ。あの人に教えてもらおうぜ」

言葉に重みが全くない。

人を傷つけたことに、何の後ろめたい気持ちもないような口調で5人が5人とも愉しげに会話していた。

中年男性プレイヤーの半分も生きていない男達が、自分勝手に愉しげに話し合っている。

それが許せなかったのか、中年男性プレイヤーは怯えながらも、声を震わせて荒らげる口調で。

「ど、どうして君達はこんなことをするんだ!？」

5人が顔を合わせる。

それからすぐに、リーダー格の男性プレイヤーが何でもない口調で。

「理由は……特にないッスよ?」

「は——?」

ゾクリ、と。

中年男性プレイヤーの背筋が凍りつく。

「プレイヤーを殺すのが面白そうだったし、麻痺のやり方とかも教えてもらったから実践しているだけッスよ?」

なあ?とリーダー格の男が他の4人に同意を求めると、悪びれもなく4人が4人とも同意を示す。

理解出来なかった。理由がないとはどういうことだ、と大声で叫びたかった。だが心が、脳が理解してしまう。こいつらに何を言っても無駄であることを、理解してしまった。

「麻痺の凄さって俺らわかったし、オッサンには悪いけどここでゲームオーバーってことで」

「……何を……」

「んー、ここで殺すってこと。どうせこれってゲームだし、大丈夫っしょ。まあ死んでも俺らがやったって、バレないし」

逃げ出したかった。大声で叫び、なんとかしたかった。

だがそれは出来ない。麻痺によって身動き一つ取ることが出来ない。動かなければ殺されると理解しても、指一つ動かなかった。

だが口は動く。

中年男性プレイヤーは震える声で。

「や、やめてくれ……」

「……ん？」

「私には娘がいるんだ……。家内も帰りを待っている筈だ。ここで私が死んだら……。誰が……。二人を……」

命乞いをするしかない。

無様でも生きなければならぬ。現実世界で待っている人が中年男性プレイヤーにはいるのだ。ならば生きなければならぬ、生き残らなければならぬ。

だがそんな願いも虚しく――。

「俺達には関係ないしな。オッサンには悪いけどここで――」

――その後で続く言葉はなかった。

突如、轟！という突風が吹いたと思いきや、2人が数メートル薙ぎ飛ばされていった。

中年男性プレイヤーも残りの3人のプレイヤーも一斉に顔と意識をそちらに向けた。

それは、いた。

第三者の姿がそこにあった。

頭上のカーソルはグリーン。全身フルプレートに身を包み、表情が

読めない。しかしその格好は不格好極まる。頭部は銀色、胸甲板や前当ては黒、籠手は紅で、下半身の鎧の部分は蒼。配色も装備の種類もバラバラ、まるでツギハギのような出で立ち。

獲物は岩で出来た大雑把過ぎる両手剣を片手で持っている。

何よりも背丈は青年ではなく少年そのもの。華奢な姿に大層な両手剣と不格好な鎧姿はとても異彩極まるものだった。

「おま……え……」

リーダー格の男が言葉を何とか振り絞る。

様々な疑問が頭をよぎる。お前は誰なのか、どうしてここにいるのか、中年男性プレイヤーの知り合いなのか。

だが鎧の少年は答えない。

自分が薙ぎ飛ばしたプレイヤーキラーのHPゲージが残量を確認すると。

「——」

「——え？」

1人。

瞬時に近付いて、リーダー格の仲間だった1人のプレイヤーを斬り飛ばす。

もはや語る言葉ない、と言わんばかりに鎧の少年は斬り捨てていく。そこでようやくリーダー格の男と残りの男性プレイヤーは意識を覚醒した。

このままでは斬られる。

そう判断するや否や、彼らは瞬時に構えた。

この鎧の少年が何者だろうが、同じプレイヤーなのだ。

麻痺させてしまえば、簡単なもの。動けなくなった所を、攻撃して殺してしまえばいい。リーダー格の男はそう思っていた。

だが——。

」

—— 眼の前にいる鎧の少年は同じプレイヤーなのか、と。

何よりも動きに迷いが無い。

それこそ機械のように、最短距離でリーダー格の男に近付いて、両手で石斧剣を振り下ろす。

かち合うだけでも異常。凄まじく重い剣戟に膝を折り地面に片膝をついてしまう。鋼製の剣が火花を上げて、悲鳴を上げる。

「た、助けてろお!!」

「お、おう!」

絶叫にも似た懇願。

その声に反応したプレイヤーキラーが後ろから斬るために剣を振りかぶる。

一撃だ。一撃だけでいい。それだけで、全て終わる。

だがその願いも虚しく。

」

「——おわっ!?!」

まるで麻痺を知っているかのように、斬られる前に鎧の少年は後ろにプレイヤーキラーを蹴って怯ませた。

そして直ぐにプレイヤーキラーの頭を鷲掴みに持ち。

」

「なっ……!!」

リーダー格の男に、力任せに投げ飛ばす。

それはまるで砲弾のように、真つ直ぐな弾道を描きリーダー格の男

まとめてふっ飛ばされていた。そして地面に五回転ほど転がって体制を立て直そうと、投げられたプレイヤーキラーをどかそうとするも。

「おい、どけよお前！　すぐに——」

アイツが来る。

そう言う前に、それは目の前にいた。

石斧剣を振り上げている。

鎧の男は驕らなかつた。圧倒的な力を誇示するわけでも、ありとあらゆる手段を用いて痛めつけることもない。ただ必要最小限に、その場の状況を最適に動いている。

頭部の鎧の間から蒼い眼光が見える。

それはまるで、照準補正用のレーザーサイトのように、容赦なくリーダー格の男に標準を合わせる。そうして——振り下ろされる。

こうしてプレイヤーキラーは壊滅した。

その間、たったの一分も満たない。

辺りには静寂と雨音しかない。

.....
.....
.....

数十分後

「よう、お疲れー」

「……………」

どこか気安く鎧の少年に話しかけてくるのは、小柄な女性プレイヤーだ。

金褐色の頭髮に、両頬に髭のような三本のペイントのような線が特徴的。

彼女のプレイヤーネームはアルゴ。通称『鼠のアルゴ』と呼ばれているプレイヤーである。

装備を見るからに、彼女は最前線で戦うプレイヤーではない。

全身布革で、左腰には小型のクローと、右腰には投げ針。だが彼女を注目するべき点は装備ではなかった。

「オマエの情報通り、本当にここにあんのか？」

「あるとモ。信じるよ、オネーサンは確かな情報しか売らないぜ？」

うんざりとした口調で問いかける鎧の少年に、アルゴはにんまりと笑みを浮かべて返した。

彼女の武器とは、特出されたプレイヤースキルでも、高いレベルでも、鍛え抜かれた筋力でも、何者でも追いつけない程の敏捷ではない。彼女の武器は他の追隨を許さない情報にある。

ベータテスト時に培ってきたソードアート・オンラインのノウハウ、そして各層に何があるのか、はたまたプレイヤーの情報までアルゴは有している。

「……………」

アルゴは下に視線を向ける。

そこには――

「——ソイツらは何ダ？ 一人は麻痺してるっぽいシ」

先程のプレイヤーキラー5人と中年男性プレイヤー1人の姿。

プレイヤーキラーはロープで簀巻にされており、身動きが取れないようである。モゾモゾと歯を食いしばりながら動こうと藻掻くも、それはすべて徒労に終わっていた。

特別語るまでもない。と言わんばかりに、つまらなそうな口調で鎧の少年が答える。

「……別に、目障りな石ころが転がってたから叩き潰したただけだ」

「目障り……ああ、なるほどナ」

プレイヤーキラー5人の頭上のカーソルの色を見て、アルゴはすぐに理解した。

麻痺している中年男性プレイヤー、簀巻にされている5人のプレイヤー、そして鎧の少年の姿。それらを分析し、一体何があつたのか理解すると、どこか同情したような眼で中年男性プレイヤーを見る。

「アンタも災難だったナ……」

「——お前!!」

そこで、遮るような大きな声を上げる。

その発信源は鎧の少年の足元。プレイヤーキラーのリーダー格の男性が、藻掻きながらも大きな声を上げていた。

「いきなり現れて好き勝手しやがって！ 何だよお前！」

「……………」

怒気を向けられているのは鎧の少年。

しかし彼は応じない。むしろ無視するように、アルゴに話を進める。

「オマエ、こいつをカルルインまで行って捨ててこい」

「コイツって、麻痺してるこの人？」

「そうだ」

「オイラはお前のパシリじゃない。初めて会ったときもいきなり『この装備を『はじまりの英雄』に渡してこい』って言うてくるシ！」

「不満だつてののか？」

「別にいいけど……お前は どうするんだヨ？ オイラをパシリに使つて、自分だけ楽しようとしてないか？」

「オレは——」

無視されている事実には、リーダー格の男の怒りが益々燃え上がる。彼はそのまま一際大声で、叫ぶように。

「お前無視してんじゃねえ！ 俺に手エ出せばどうなるか——」

「オイ——」

と、一言。

同時にリーダー格の視界が、灰色の物に変わる。それは鎧の少年の石斧剣。

目の前の地面に石斧剣が突き刺さり、あと数センチずればリーダー格の頭に突き刺さっていた。そんな距離で石斧剣が突き刺さっていた。

背筋が凍ると同時に、リーダー格の男は鎧の少年へとゆっくり視線を向ける。

頭部の鎧の合間から見える蒼い眼光。それが容赦なく、一片の慈悲もなく、リーダー格の男を射抜き。

「——オレは何時まで、テメエの下らねえ戯言に時間を割いてやりやいいんだ？」

蛇に睨まれた蛙のように、リーダー格の男は身動き一つ取らない。背筋が凍り、冷や汗が滝のように流れ始める。恐怖で、身体を震わせる。

その姿を見てアルゴは感心するように。

「お見事」

「ブン」

退屈そうに応じると、鎧の少年は続けた。

「オレはこいつらをはじめりの街の監獄エリアに捨ててくる」

「NPCはどうするんだ？」

「バレねえようにやる」

「慣れたもんだ」

交渉成立、と言わんばかりに二人は各々行動に移る。だがすぐに、アルゴは動きを止めて。

「そういえば、あの子はどうした？」

「アイツは——」

置いてきた。と、言う前に声が聞こえた。

それは遠く。しかし直ぐに近付いてくる。やがてハッキリと聞こえてくるくらいの近さまでやって来ていた。

「おーいー」

「……………」

うんざりとした動作で、鎧の少年は振り返る。

そこにいたのは片手を上げて走ってくる紫のローブの少女プレイヤー。すっぽりと目深くローブを羽織っていることから、表情は全く

読み取ることが出来ない。しかし声色から判断すると、お気に召していない様子だ。

そしてそのまま、鎧の少年の目の前に立つと、やはり不満そうな口調で。

「どうしてボクを置いていったのさ！」

「邪魔だからだ」

「邪魔ってなにさ!?!」

ムカーツと身体いっぱい使って自分の憤りを表現するも、直ぐに止まって鎧の少年の足元へと視線を向けた。

「この人達どうしたの?」

「別にどうもこうもねえ。オレはこれからはじまりの街に行く。オマ

エは——」

「ボクも行くよ!」

「……………」

どこか口元に笑みを浮かべて言う紫ローブの少女に、鎧の少年はチツと小さく舌打ちをすると。

「勝手にしろ。足引つ張りやがったら、叩き潰すからな」

「は——い」

粗暴な口調であるが、慣れているのか紫ローブの少女から非難の声は上がらない。

それを黙って見ていた中年男性プレイヤーは慌てて声をかけた。

「あ、あのー!」

「——」

「た、助けてくれてありがとう! 君がいなければ、私は殺されてい

た」

まだプレイヤーキル達から与えられた恐怖が残っているのか、中年男性プレイヤーの声は震えていた。

鎧の少年はその声を背で受け止めて、振り返らずに。

「……アンタの帰りを待ってるヤツらがいんだろ。だったら無茶すんな、黙って街に引き籠もってろよ」

それだけ言うと、鎧の少年はプレイヤーキラー達を引き摺りながら、はじまりの街へと足を進める。

その後を慌てて紫ローブ少女が追いかける。だが少女は振り返り、アルゴと中年男性プレイヤーに手を振りながら。

「バイバイ、アルゴさん！ おじさんも無理はしちやダメだよ」

「おう。さっさと追いかけないと、また置いてかれるゾー」

「わかってるー！」

足早に後を追う紫ローブの少女に、アルゴも手を振りながら見送った。

いつ見ても賑やかな奴だ、とぼんやりと思っていると。

「あの、鎧の子は誰なんだ？ ベータテスターなのか？」

「ん、いいや違うナ。アイツは初心者だヨ」

そこまで言うと、アルゴはニヤリと笑みを浮かべて。

「最近では『インクラッドの恐怖』とか言われてるかな——？」

第2話 紫ローブの子の追憶

——ボクは本当に神様に嫌われている。

本当だったら、パパもママも姉ちゃんもずっと長生きできた。でもそれはあくまで予定の話。現実はそのままで甘くはなかった。

それはいきなりだった。覚悟をさせることもなく、急に失うことになった。姉ちゃんもパパもママも容態が急変し、ボクを残して家族はこの世から去ってしまった。

理不尽だと思う。どうしてボクだけ生き残ってしまったのか、小さい頃ずっとそれだけを考えていた。

でもどうにもならない。大切な人達は戻ってこないし、ボクみたいなちっぽけな人間がどうしたところで、世界は何一つ変わらない。

不平等に与えて、何もかもを奪っていく。——世界は残酷なんだ。

ボクの病気に対する偏見もあってか、親戚の人からは盥回しにされて、施設に預けられた。そこでもボクは1人、孤独だった。

1人で過ごし、1人で通院し、帰り道も1人で、寝るときも1人。ママはよくボクと姉ちゃんに「イエス様は、私たちに、耐えることの出来ない苦しみをお与えにならない」と励ましてくれていたけど、こんな苦しみボクには耐えられなかった。

耐えられる訳がないし、苦しかった。家族は誰もいない。誰一人としてボクと話そうとしてくれる人はいない。こつちから触れるものなら、凄く嫌な顔をされる。その度に、心が欠けそうになる。

ボクは何のために生まれて、どうして生きてるのだろうか。

死ぬ為だけに生まれてきたボクが生きて、何が意味があるのだろうか。ボクはそんなことをずっと考えていた。

そんな時だ。

病院の待合室で、いつも通り1人でずっと考えていたところに。

『オマエ、何でんな面してんだア?』

最初は誰に言っているのかわからなかった。まさかボクだとは思わない。だって今まで、1人だったし、ボクに話しかける人なんていなかったのだから。

『オマエだよオマエ。羨がなつてねエガキだな』

ここでようやくボクに話しかけているのだとわかり、顔を上げる。その人は大きかった。

物の例えとかじゃなくて、言葉通り大きい人だった。どこか鍛えられた身体で、堀の深い顔立ちで短い髪で色は黒。顎には無精髭が生えてるものの、不思議と清潔感があった。肌は日に焼けていて、とても病院内にはいる人ではなかった。どちらかというところ、スポーツジムによくいるような人。

『誰?』

『見りゃわかんדר。医者だよオレは』

嘘だと思った。

だけど、首からぶら下げている名札を男の人に見せられて、信じざるを得ない。

名札の名前は『茅場』と書かれており、この病院の先生であることがわかった。

『オマエ、信じてねエだろ……』

ボクの表情がそう書いていたのか、茅場先生はどこか面白くない口調と態度でそう言うと、勢い良くボクの隣へと座る。それから乱暴な口調で。

『まあいいや。それで、何でそんな面してんだよオマエ?』

『え……？』

『オマエ、今にも泣き出しそうだったじゃん』

言われて初めて気付いた。ボクはまったく笑わない子になっていた。

パパとママが生きていたときは、元気な娘でいなくちゃいけないと思っていた。二人はボクと姉ちゃんを産んで、申し訳ないと思っていたことをボクはわかっていった。だからそんなことを気にしてないようにボクは振る舞っていた。勿論、全てが演技じゃない。パパとバーベキューしたのだって楽しかったし、姉ちゃんと遊んだ日々はかけがえない思い出だし、ママとする刺繍も嬉しかった。

今となつてはどうでもよかった。

こんな世界で一人、笑える余裕はボクにはなかった。

多分、このときのボクは限界だったのだと思う。

見ず知らずの人に、あれこれと身の上話を話して、どうしてボクだけこんな目に遭っているんだろうという憤りをぶつけてしまった。話していて泣きそうになりなるも、必死に我慢してボクは訴え続ける。

こんなことを話してもどうにもならないと知りながらも、言葉は止まらなかった。

それを聞いていた茅場先生は一度大きく頷いて。

『うるせエエ!!』

『ええー……？』

励ますでもなく、同情するでもなく、茅場先生は子供みたいに大声を出した。

破天荒すぎると思う。自分から話しかけてきたのに、この反応はどうかと思う。あまりのことに、ボクは溜めていた涙も引っ込んでしまい、少しだけ引いてしまった。この様子だけでボクはわかった、茅場先生は誰よりも子供っぽい人なんだと。

子供がそのまま大きく育った大人の人は、いきなり立ち上がりボクに勢い良く指差して。

『だいたい、十数年しか生きてねエガキが人生語ってんじやねエ、生意気にも程があんぞ！　そういうのはなア、もつと歳を重ねてから語れやこの野郎！』

『でもボク、いつまで生きれるかわからないし……』

『それだよ、その面だ。世界が滅亡したわけでもあるまいし、辛気臭い面しやがって』

そこまで言うと、茅場先生は乱暴にボクの頭を力強く撫でる。

数年、感じなかった温もり。他人に触れられたことがなかったから、ボクは呆気にとられた。

『オマエはオレが治してやる。人生語りてエなら、その後にしやがれ』
『で、でも……』

自分の病気は、自分自身がよくわかっている。

ボクはこのまま死ぬために生きているのだってわかっている。でもそれは、それだけは目の前の先生は許せないらしい。

茅場先生は人一倍ムキになって。

『デモもストライキもねエんだよ！　オレが治すつて言ったら治す！
そして教えてやる、この世界はまだまだ捨てたもんじやねエつてことをな』

『——その前にもう少し静かにしましょうね、貴方？』

『——ゲエ!?!』

茅場先生の背後から声をかけたのは1人の白衣を着た女の人だった。

ペコペコ、と。アレだけ破天荒に振る舞っていた人が、女の人に平

謝りを繰り返す。ひたすら頭を何度も何度も下げていた。

その女の人は綺麗な人だった。

金髪碧眼で何もかもを包むような包容力に満ちている人。その人は茅場先生の奥さんらしい。茅場先生と同じく首から名札をぶら下げており、この人もこの病院の先生であることが分かる。彼女は座っていたボクと同じ目線に腰を落として。

『ごめんなさいね、この人が乱暴なことを言って。怖くありませんでしたか?』

『う、うん。大丈夫です……』

『そう、よかったです』

ニツコリと笑うと。

『それじゃ行きましょうか。色々と検査しないと』

『え……?』

どうやらこの人も、ボクを本当に治療する気のようなのだ。眼を見て冗談じゃないことが分かる。

女の人は手を差し伸ばして、茅場先生は腕を組んでその様子を見守る。この時ボクは治る訳がない、と思っていた。死ぬために生きていくと、ボクは自分の人生に諦めを感じていた。

だったら、最初からダメだったとしても、失うものは何もない。

家族も友人もない。親戚すらボクを見放した。失うものは何もない。だったら二人に付いていこう、とボクは手を握ろうとするも。

『ちよつといい……?』

『あア?』

『どうしました?』

茅場先生は訝しげる様子で、女の人は可愛らしく首をかしげる。

ボクは恐る恐る聞いてみた。

『二人は、ボクに触れて何も思わないのか？ 感染したらどうしようとか、思わないの……？』

『バカかオマエ』

茅場先生は呆れた口調で言う。

『医者が患者にビビってどうすんだよ？』

同時に、女の人はボクの手を戸惑う様子もなく握り、笑顔で茅場先生の言葉に同意した――。

それからというもの、ボクの日常は変わった。

何が変わったといえ、通院するのが楽しくなった。

茅場先生が色々と無茶苦茶なことを言っていて、茅場先生の奥さんに怒られて、ボクがそれを見て笑っている。

勿論、楽しいだけじゃない。辛い検査もしなければならぬときがあった。でも、それでも二人がいたからボクは耐えることが出来た。優しく見守ってくれる二人がいたからこそ、ボクは笑えることも出来たし、頑張ることが出来た。

そうして、ボクの身体は次第に快方へと向かっていった。

有言実行、茅場先生は本当にボクの病気を治そうとし、ちゃんと宣言通り現実にしてしまった。世界がまだ捨てたものじゃないと言うとおり、ボクは教えてもらった。

同時に生まれる感情があった。

このままボクは貰ってばかりでいいのか、と。たくさんのことを二人からボクは教わり、たくさんのことを二人から貰ってしまった。死ぬために生まれてきたボクなんかを救って貰って、ボクは何を二人に返せるのだろうか。

わからない。

ボクは思わず茅場先生に問う。

治してもらって、ボクは二人に何が出来るのか、と。そうしたら茅場先生は。

『んな難しいこと考えてんじゃねエよ』

退屈そうな口調で、茅場先生は続けた。

『患者オマエが生きてる、それが医者オレのこの世界で生きた証だ。別に感謝する謂れもねエよ、オレが勝手に手を差し伸ばして、勝手に助けた。究極のお節介をしただけに過ぎねエからな』

『それでもボクは助けてもらったもん。恩返しさせてよ』

『木綿季もアレだな、頑固だよな？ 何なの、ユウキって名前は頑固しかいねエの？』

ボクが何を言っても折れないと、先生もわかったのか少しだけ考えて。

『それじゃオマエ、オレの娘になれ』

『え、ええー!?!』

驚くボクを見て、少しだけ元気がない様子で先生は問いかけた。

『……嫌なのか?』

『ううん、全然嬉しいよ！ 嬉しいけど、いいの……?』

『いいぜ、かみさんにはオレから後で言うておく。オレのガキも優希って言うだぜ。なんか面白いだろ?』

『本当に先生は子供っぽいよねー』

『ガキのオマエに言われんのはムカつくなア、オイ!』

『きやー!』

何度目になるだろうか、ボクは乱暴に頭を先生に撫でられる。ガシガシととても女の子にする撫で方じゃないけど、ボクはそれが好きだった。子供っぽい笑みで、ニカツと笑う先生が大好きだった。

『おにいちゃん、にいさん、にーちゃん。うん、にーちゃんかあ……』
『どうした？』

『ボク、姉ちゃんはいたけど、にーちゃんはいなかったから練習してるんだ。……何か照れるね』
『会ってみるか？』

先生——いいや、お義父さんは何気ない調子でそんなことを言った。

ボクは満面の笑みで。

『——うん！』

これがいけなかった。

ここで逸る気持ちを抑えていれば、こんなことにならなかった。ボクが軽はずみな気持ちで応じたから、最悪なことになった。

——交通事故だった。

お義父さんとお義母さん、二人はボクがいる病院に来る途中に、居眠り運転していた車に衝突されて——この世から去ってしまった。

あまりにも唐突な出来事だった。

一瞬嘘だと思っても、寝ても覚めても事実は変わらない。ボクの恩人はこの世から姿を消した——。

ボクのせいだ。

ボクがにーちゃんに会ってみたいって言うから、二人は病院に来る

途中で事故にあった。ボクが言わなければ、こんなことにならなかった。やっぱりボクは——二人に治療されて生き残るべきじゃなかった。

いいや、そうじゃない。

お義父さんはボクに『患者オマエが生きてる、それが医者オレのこの世界で生きた証だ』って、確かに言った。

だったらボクは生きなければならない。二人の生きた証である事を証明するために、罪悪感に押しつぶされようとも、何が何でも生きなければならない。そして——にーちゃんに謝らないと、まだ会ったこともない兄に、会って謝らないといけない。

死んで楽になるなんて、許されない。

そんなことをしたらパパとママと姉ちゃんに怒られるし、そしてお義父さんとお義母さんにも叱られる。

そうしてボクはにーちゃんがどこにいるのか、尋ねるためにある人に会いに行った。

お義父さんの弟——茅場晶彦。ボクはよくわからないけど、天才プログラマーと言う人で、ゲームを開発する人らしい。

そこでボクは晶彦さんのVR実験に参加する代わりに、ボクはにーちゃんの住所を——茅場優希さんの住んでいる所を教えてください。

実験の終了に選別として、ナーヴギアとソードアート・オンラインのソフトを貰うも、そんなものは二の次。ボクは直ぐに、彼の住所へと向かった。

それが2022年11月7日。——デスゲームが始まった翌日だった。

チャイムを押しても、反応がない。留守なのかな、と思ったけどドアは開いている。中を見てみると、優希さんは確かにいた。

寝ている。頭にはナーヴギアが装着し、彼はソードアート・オンラインの世界に入っていた。

全身が震えた。

震える手で携帯を操作して、救急車を呼んでボクはマンションを飛び出した。

それからあまり覚えていない。いつの間にかボクの片手にはナーヴギアとソードアート・オンラインのソフトが握られていた。

頭で反復するのは優希さんを助けることだけ。

だってボクは彼に謝っていない、何よりも——これ以上、家族を失いたくなかった。優希さんから見たら、ボクは両親を奪った張本人。家族なんて思われたくないだろう。でも、それでも、ボクにとつてはこの世でたった一人のいちちゃん。残された絆を、ボクは失いたくない。

近場のネット喫茶でボクは慌てて、ソードアート・オンラインをインストールして、ナーヴギアを被り戸惑うことなく告げる。

『リンク・スタート』

.....
.....
.....

2022年12月27日

PM 22:40 第五層 遺跡エリア

「ふう……」

そして今。

ボクは、全身鎧に身を包んだ彼と行動を共にしている。

彼は何体目かのエネミーモンスターを倒して、一呼吸置いていた。ボクが知る中で、第二層から彼はずっとエネミーモンスターと戦って経験値を稼いでいる。それこそ不眠不休、食事もあり摂っている様子もない。

思わずボクは問いかけた。

「大丈夫なの？」

「……何がだ？」

彼は振り返り、ボクに身体を向けた。

表情は全身鎧に包まれているので、読み取ることが出来ない。

「まったく寝てないじゃん」

「……問題ねえよ」

嘘だと思う。

彼の様子はどこか危なっかしいもので、明らかに疲れている。それに生き急いでいるとも取れる行動で、自分の命を毛ほども大事にしている。

「問題あるよ。休もうよ、ね？」

「問題ねえって言ってたんだ。それに休んでいる時間なんて、どこにもねえ」

それだけ言うと、彼は再び前を歩き始める。

ボクもその後を慌てて、追いかけるも。

「わっっ」

盛大にコケてしまった。

直ぐに立とうと足に力を込めるも、ボクの意味に反して震えるだけで力が入らない。

「あ、あれ……う？」

「……………」

彼も気付いてるものの、足を止めることはない。

それはわかっている。第二層からここまで付いてきたのだから、彼が止まることはないと理解している。だからボクも彼を引き止めるマネはしないし、したくない。邪魔をしないように、ボクは後を追おうとする。けれど――。

「おかしいな、どうしても動かないのかな……」

何度踏ん張っても、力が入らない。

それでも立ち上がらないと、彼に追いつけないと、ボクは彼を守ることが出来ない。

「――クソ……っ！」

舌打ちがあった。

前を向くと、彼が目の前に立っている。

そして乱暴に、ボクを抱えると目的地である迷宮区とは反対側にある主街区である『カルルイン』に足を進めていた。

「くたばるのなら、街でくたばれ」

「ごめんね……」

このやり取りは初めてではない。

彼の真似をして無理して、ボクが倒れて彼が街まで運ぶ。これを何

度が繰り返していた。

守ると誓ったのに、足手まといになっっている情けない自分に腹が立つ。でも同時に、ふと疑問が浮かんだ。どうして彼はボクを放っておかないで、今まで行動を共にしてくれたのだろうか。

「ねえ?」

「あ?」

「どうして、君はボクと一緒にいてくれるの?」

「……………」

ボクは彼の後をずっと付いてきた。

それでも彼はボクが倒れればこうして助けてくれるし、圏内まで一緒にいてくれる。放っておけばいいのにも関わらず、こうして安全圏まで運んでくれる。ローブで目深く素顔を隠しているプレイヤーなんかには構っている理由もない。

「別に、このまま死なれても寝覚めが悪りいだけだ」

「そうなんだ……………」

ボクは目深くフードを被り直して、申し訳なさそうに礼を言った。

「ありがとうね」

「礼を言う必要はねえぞ」

え?とボクが聞く前に、彼はぶっきら棒な口調で。

「オレが勝手に手を伸ばして、勝手やっただけだ。ありがた迷惑、ただのお節介だろんなもん」

「……………」

声を、失った。

あの時のお義父さんみたいに、お義父さんと同じこと言われて、ボクは声を失った。

それから顔を伏した。

やっぱりここでフードを取ることは出来ない。

ここでボクは彼と正面で向き合う事が出来ない。向き合うのなら現実世界で、ボク達が生きている世界で、そしてそこでちゃんと謝らないとならない。

仮想世界ではなく、現実世界で。ボクは彼と、ちゃんと向き合わないといけない。だからボクはフードを被る。ここではない場所で、ちゃんと謝りたいから、ボクはフードを被り続ける。

——ぶつからなきゃ、分かり合えないこともある。

——ボクがぶつかつたら、君はボクを許してくれるかな……？

——ボクを、家族として認めてくれるかな……？

——にーちゃん……。

ボクの疑問は、誰も答えてくれない——。

第3話 それでも少年は止まることなく

2022年12月28日

PM17:20 第五層 迷宮区

迷宮区タワーの手前の遺跡——超巨大迷路のマップピングも終わり、鎧の少年と紫ローブの娘は第五層の迷宮区にて経験値を稼ぎながらマップピングを行っていた。

第五層のデザインテーマは遺跡。

デザインテーマの通り、ダンジョン内は石造りであり、街やフィールドにも至る所で朽ち果てた遺跡が存在している。

超巨大迷路もその中の一つ。

構造はその名の通り入り組んでおり、一日二日で迷路全体をマップピングすることは出来ない。しかし幾つかの謎解きをクリアすれば、ほぼ一直線にショートカット出来るのだが、残念なことに鎧の少年も紫ローブの娘もそういった謎解きは向いていなかった。

そうして彼らは湧いてくるモンスターを倒しつつ、迷宮全体を踏破することになる。第五層に到達して、五日ほどで完了する。しそうして今、こうして迷宮区に到達していた。

超巨大迷路の後に、ダンジョン攻略。

言葉にすると厄介極まりないように見えるが、そこまで厄介というわけでもなかった。第五層の迷宮区は単純な作りとなっており、一日でマップピング出来る代物。むしろ前哨戦である超巨大迷路の方が厄介極まらない。

そうして、鎧の少年は迷宮区に湧いてくる何十体倒したかわからない小型ゴーレムを倒して、一呼吸置いた。

表情は全身を覆う鎧のせいもあり見えないものの、その様子はどこか疲労が色濃く見え隠れしている。

身の丈程ある石斧剣を地面に突き立てて、深呼吸をしながら。

——ここいらのモンスターはもう相手にならねえ。

——弱点もわかった、それに両手剣と相性が良い。

ここで意識を紫ローブの娘に向けた。

彼女は踊るように、小型ゴーレムの攻撃を軽々とかわして、同時に弱点である額の紋章に向けて片手剣を突き立てる。だがさすがに一撃では倒せないようだ。

かわして斬りつけて、再度かわして突き立てる。それを数度繰り返して、小型ゴーレムを倒していく。小型と言っても、二メートル程の体格であるが、紫ローブの娘には関係がないようである。

その様子は軽業師のようで、舞踊でもしているかのようなでもある。敵を見つけようものなら、いの一発に切り込む。攻撃に全力を出し、回避なんて二次。傷つくことを前提とした泥臭い戦法の自分とは真逆、流麗とも取れる戦い方の彼女を見て。

——レベルもオレが上、筋力も遥かにオレが上。

——だがプレイヤースキルはコイツの方が圧倒的に上だ。

——何よりもコイツの反応速度は並じゃねえ。

——敵が動くのと同時に、反応しやがる。

——後の先、ってヤツか……。

そこで彼はふと、とあるプレイヤーを思い出す。

自分が直感で物事を判断するのなら、そのプレイヤーは並外れた洞察力で全てを把握する。

自分が相手が動く前に動く、つまり『先の先』で動くのなら、そのプレイヤーは相手に合わせる、つまり『後の先』で全てを封殺する。忌々しいが自分より強い、そう認めたプレイヤーの顔を思い出してながら。

——アイツにそっくりだな。

——まあ、腕前は比べるまでもねえ。

——野郎の方が数段上手ではある。

——だがこれならその辺の雑魚相手なら、簡単には死なねえか。

その辺の雑魚。それはエネミーモンスターを表していた。

紫ローブの娘は強い。恐らく、ソードアート・オンラインをプレイしているプレイヤーの中でもその腕前は上位に食い込む程だろう。だがそれでも、鎧の少年は彼女と共にフロアボス討伐に赴いたことがなかった。

フロアボスはエネミーモンスターとは訳が違う。

プレイヤースキルでどうにでもなるモノでもないし、下手をすればHPゲージが全て削られてゲームオーバーになる可能性すらある。そんな場所へ、彼女を連れて行く気はなかった。

名前もわからない、顔も見ることがない、いつも自分の後をついて来る、何度言っても止めることはない、それに目的が分からない鬱陶しいと感じることもある。だがそれとこれとは別、連れて行ってもし万が一死なれたりしたら寝覚めが悪い。何よりも、ボス討伐を一人で行うと決めたのは彼だ。そんなつまらない理由に付き合わせるつもりもない。そういった理由で鎧の少年は紫ローブの娘と共にフロアボスを討伐したことがない。

そして幸か不幸か、第五層の迷宮区は他の層に比べて、緩い作りになっている。

これであれば、今日だけでマッピングが終わり、ボス部屋にも到達できてしまう。となると、紫ローブの娘も一緒にボス攻略することになってしまう。

どうしたものか、と鎧の少年は考えていると。

「……あれ？」

何体目かの小型ゴーレムを倒し、岩の塊に戻した紫ローブの娘から、不思議そうな声が上がった。

小型ゴーレムを倒したことにより獲得コルと経験値、そしてドロップアイテムを知らせるウィンドウを見て、彼女は首を傾げていた。

鎧の少年は突き立てていた石斧剣を引き抜いて、肩に担ぎながら紫ローブの娘へと近付いて。

「どうした？」

「ドロップしたアイテムに防具があっただけ、ちよつと見てみてよ」

「あ？」

鎧の少年も不思議そうにウィンドウを見る。

紫ローブの娘の視線に合わせて、少し腰を折る。その際、肩と肩で触れ合う距離になってしまいが、二人は気にしていない様子である。

何よりも、ドロップした防具がそれを許さなかった。

距離感など関係がない。ドロップした防具を見て、鎧の少年から息を呑む声が聴こえる。

「オマエ、それ……」

「えーと、名前は『スケープ・ゴート』？ これって確か、君が探してた防具だよな？」

紫ローブの娘の言うとおり、第五層で手に入る兜の防具『スケープ・ゴート』を彼は探していた。

それこそ『鼠のアルゴ』に情報料払ってでも手に入れたかったもの。第五層に来て数日。経験値を稼ぎながら探していたのだが、一向に見つかる気配がない。ここで普通なら、『鼠のアルゴ』の情報はガセネタではなかったのか、と疑うのだろうがその辺り彼はアルゴを信用していた。

会話するようになって日が浅い、何よりもアルゴというプレイヤーネームしか知らない、彼がマツピングしたダンジョン内のデータを渡す代わりに、格安で情報を提供する、といった仕事上の関係のような

間柄であるが、情報という一点に関してはアルゴを信用していた。

故に、この情報は嘘ではない。

そう信じて、彼はずっと現在まで探していた。

だがまさか、石造りのモンスターから鉄で出来た防具がドロップするとは彼も夢にも思わなかったのだろう。

どう言えいいのか、迷っているところに。

「えへへへ……」

「……………」

紫ローブの娘は笑みを零す。

口元が笑みで緩ませて、彼女はどこか嬉しそうに。

「ボクを褒めてもいいと思うよ？」

「……よくやった」

「うん！」

ぶつきら棒であるが、それだけで満足したのか紫ローブの娘の笑みは益々深まっていく。

「欲しい？」

「……ああ、だがタダじゃねえんだろ？」

「勿論だよ！」

力強く頷くと、彼女は鎧の少年を少し見上げるような距離まで近づく。

そしてどこか様子を見るように恐る恐る、と言った口調で。

「ボクとカルルインで一緒にご飯食べてほしいなーって……」

.....

PM19:05 第五層 カルルイン

そうして二人は、迷宮区から第五層の主街区であるカルルインへと移動していた。

街並みはやはりと言うべきか、第五層のテーマである遺跡に因んだ作りとなっている。第五層のフロア南部に広がる巨大な遺跡の中央部、そこにカルルインは築かれていた。イメージとしては、遙か昔に滅んだ文明、そこを後からやって来た人間が再利用している、といったモノである。

その為か、お世辞にも水っ気がない不毛とも呼べる見た目である。だが埃っぽいというわけでもない、その辺りはNPCが毎日掃除している為か、不潔な感じはないようである。

街も石造り。

岩をくり抜いて出来た家や、巨大な石を積み上げられて出来た建物があちこちに建っている。

風化している為か、ところどころ石や岩が削られているが、倒壊する様子は微塵もなく、それがいいアクセントとなっているのか猥雑に街を賑わしていた。

第五層が突破されて、数日が経っている。

そうなってくると、プレイヤーの数も少なくない、むしろ多いと

言ってもいい。

それもここが攻略の最前線であるからだろう。性別もプレイヤーネームも不明。正に正体不明のプレイヤー『アインクラッドの恐怖』が単騎で次々フロアボスを撃破しているのだ。数多くのプレイヤーのゲーマー魂にも火がつくというもの。デスゲームになったところで、それは変わることはない。ゲーマーとして攻略することに負けられないのだろう。

そんな中、件の鎧の少年と紫のローブの娘は路地裏を歩いていた。薄気味が悪い、という様子もない。どこからか聞こえるヨーロッパの民族音楽を思わせる笛の音が聞こえてくるせいもあってか、路地裏だと言うのに妙な明るい雰囲気を出していた。

ご機嫌に歩く紫のローブの娘の後ろで、鎧の少年は面倒くさそうな調子で後を追う。

ツギハギの鎧であることは変わらないものの、その兜は真新しい——『スケープ・ゴート』が装備されていた。その形はどこか羊を思わせる角の生えたモノで、頭部を完全に覆っているのやはり表情など読み取ることが出来ない。その外観は敵を威嚇するような造形となっている。勿論、伊達や酔狂でこんな目立つ兜を被っている訳ではない。理由あって、鎧の少年はこの兜を探していた訳であるのだが。

——コイツ、人が好すぎる。

——ここでオレがトンスラしたらどうする気だったんだ？

一緒に食事をする。そして報酬として、彼女がドロップした装備品である『スケープ・ゴート』を渡す。その筈が、すでに報酬品は彼の手元があり、あろうことかももう装備している現状。もはや彼女に付き合うメリットはなく、これ以上は時間の無駄である。

鎧の少年はそう判断した上で、彼女の希望通りに行動を共にしていた。

——まあ、ここでコイツを置いて帰る選択肢はねえな。
——恩を仇で返すことになる。

そうして数分後。迷路のような路地裏を進み、目的地に到着した。石壁にはランタンがぶら下がっており、その手前には小さな看板が立っている。そしてその看板には『Tavern Inn BLINK & B R I N K』という店の名前があった。

その前に立ち止まると、紫のローブの娘は口元に笑みを張り付かせて鎧の少年の方へと身体を向けていた。

彼は面倒くさそうな口調で。

「どこか？」

「うん、ここだよー！」

そう言うと、彼女は勢い良く店の中へと続く扉を開ける。

同時に——。

「うわわっ！」

突然の突風。

彼女は咄嗟に目深く被っているローブが飛ばないように頭を片手で押さえるも、風に驚いたのか地面に尻もちを付いた。

戦闘時に見せた身のこなしとは正反対の様子に、鎧の少年は呆れたような溜息を吐いて手を差し伸ばす。

「何してんのオマエ？」

「ちよつとびっくりしちやった……」

ありがとう、と彼女は照れ臭そうに笑いながら彼の手を取って立ち上がった。

そうして鎧の少年は改めて周囲へと視線を向けた。
店内は普通のもの。椅子があり、テーブルがあり、その向かい側に椅子がある。

二人席のもあれば、大人数を想定している席も存在する。中でも注目するのは、店内ではなくその先にあるベランダの席。どうやら先程の突風は、このベランダから吹いてきたようである。

「ねえねえ」

「あ？」

「あそこに座ろうよ」

紫のローブの娘は、ベランダの席を指差していた。
特別断る理由もなかったので、鎧の少年は頷いた。

二人はベランダの席まで足を運ぶ。

そこから見えた景色は絶景の一言に尽きるものだった。アインクラッドの外周を見渡せるようになっており、空には星々が輝いている。まるで落ちてくるかのような輝きを放っていた。

手すりに身を乗り出して、紫のローブの娘は感嘆するような声を上げる。

「うわあ……」

「落ちても知らねえぞ」

「大丈夫だよ、手すりから出ないもん」

「……だといいがな。満足したら、さっさと席に座れ」

「うん」

どこかまだ満足していない様子で、チラチラ景色を見ながら紫のローブの娘は自分の席に座る。

それを見て、鎧の少年は卓上に置いてあった銅板に羊皮紙を張ったメニュー表を彼女に差し出して。

「ほら」

「ありがとう。うーん、どれを頼もうかな〜？」

どこかご機嫌な様子でメニュー表を眺める彼女を見て、彼は景色に目を向けながら。

「よくこんな所見つけてきたな？」

「実は、アルゴさんに教えてもらったんだ」

『鼠』から？」

再度確認すると、うん！という元気が良い声が聞こえてきたので、視線を景色からテーブルを挟んで座っている紫のローブの娘に向けた。

「迷うなあ〜。どれも美味しそう……」

「アイツからオススメは聞いてねえのか？」

「聞ってるよ。でも気になる物もあつてさ〜」

何だそんなことか、と言わんばかりな口調で彼は当たり前のよう
に言う。

「食べれる程度に食べばいいじゃねえか」

「でもカロリーとかあるし……」

「この世界にンなもんあるわけねえだろ」

それに、と言葉を区切り小馬鹿にしたような口調で彼は続けた。

「チンチクリンの癖に、体型のこと気にしてんじゃねえよ」

「ああー、ダメなんだよ！ 女の人に体型のこと言っちゃダメなんだよー！」

「ハイハイ」

身を乗り出して非難されるも、彼はどこに吹く風。

全然気にしてない様子で、視線を景色へと向ける。同時に、ある疑問が浮かび、それを彼女に問いかけた。

「つーか、んでオマエはオレと飯食いたかったんだ？」

「……言わなきやダメ？」

「無理にとは言わねえ」

そこまで言うと、彼女は少しだけ考えて。

「ボクが君と一度しつかりぐ飯食べたいと思ったのと、あとはこうでもしないと休んでくれないから」

「……どういう意味だ？」

ここで彼は視線を再び景色から彼女の方へと向ける。

彼女は真剣な口調で答えた。

「ぐ飯食べてる？ ちゃんと寝てる？」

「……当たり前だろ」

彼の答えに、嘘だというかのようにはやんわりと彼女は首を横に振る。

「第二層からボクは君と一緒に居るんだよ？ ボクは一度も、君が身体を休ませている所を見たことがないもん……」

彼女の言うとおり、ここまで彼は身体を休ませたことはない。

不眠不休で彼はひたすらクエストを受注し、なければダンジョンに潜って経験値を稼いでいた。

しかしこの世界でも生理的欲求である睡眠欲と食欲が存在してい

た。

仮想世界だと言うのに、睡魔が襲いかかるし、空腹にもなる。その原理は、ほとんどのプレイヤーは分かっている。特に食欲など誰も分かっていないことだろう。

現実世界とは違い、彼らがいるのは仮想世界。特に寝なくても、食べなくても死ぬわけではない。何しろ彼らプレイヤーの命の残量は眼に見えている。それこそHPゲージであり、これがある限り彼らが死ぬことはどありえない。

とはいっても、睡眠欲も食欲も生理的欲求である。十全に活動するには一度満たさなくてはならない。

だが鎧の少年にとって、何の問題もなかった。

この仮想世界は彼と相性がいい——いいや、相性が良すぎるといっても過言ではない。

常日頃、彼は過去の影響もあつてか、自分を無意識に辛い方へと追い込んでしまう悪癖がある。日常生活を送ることにおいて、それは致命的な短所とも呼べるだろう。だが幸か不幸か、この仮想世界においてそれはプラスに動いていた。

この程度で自分が倒れてはならない。

この程度の罰で自分が折れてならない。

そういった脅迫概念が強靱な意志となり、彼は突き動かされていた。

『これくらいで倒れるなどありえない』もしくは『両親を見殺しにした自分が、休むことなど許されずに決まっている』といった強いイメージ。確固たる確信をもって、彼は存在していた。

強い意志、自分すらも騙すような精神力。

狂人とも取れる彼の特性が、この仮想世界と病的なまでの相性の良さを見せつけていた。

休息など必要がない。

そう言い捨てるかのような強く斬り捨てる口調で彼は答える。

「オマエには関係ねえだろ」

「関係、あるよ……」

弱々しく彼女は言う、そのままの口調で。

「まだ言えないけど、ボクには関係あるもん……」

「オマエ……」

それはどういう意味だ。と、問う前に。

「よう、お二人さん」

乱入者の登場に、この話題は切り上げることになった。

その人物は、金褐色の頭髮に、両頬に髭のような三本のペイントのような線が特徴的な女性プレイヤー——アルゴだった。

彼女はタイミングを見計らったように、現れて気軽に二人に話しかける。

「お邪魔だったか？」

「……いいや、終わったところだ。それよりも、オマエ何の用だ？」

鎧の少年の問いに、アルゴはメインメニュー・ウィンドウを開きアイテム欄から羊皮紙を実体化させて。

「第五層のフロアボス攻略部隊の編成が整ったから、お前に知らせようと思ってナ」

「何だと……？」

彼は訝しむような声を上げると、乱暴にアルゴの持っている羊皮紙を眼を通した。

そこでとあるプレイヤーの名前を発見し、彼は奥歯を噛み締めてい

た。

アルゴはその様子を静観して見守っていた。

攻略部隊を編成しボスを討伐する。これが普通の攻略であると彼女は考える。

何せソードアート・オンラインのフロアボスはレイドボスである。レイドボスとは複数のパーティーで戦えるボスのことである。本来であれば単騎で挑むモノでもないし、撃破出来るものでもない。

そう言う意味では、鎧の少年はMMORPG自体初心者であることがアルゴにもわかっていた。

問題はその後。

鎧の少年は必ずフロアボスを単騎で撃破していた。

HPゲージが1ドット残そうが、足が吹っ飛び、片手がちぎれかけていようが、誰よりも早く挑み討伐していた。

そうしてそこで発生するラストアタックボーナス。それらを全て、『はじまりの英雄』に渡してくるようにアルゴに依頼してくる。

自分で装備し、自分に使うならまだしも、第三者に渡すという意味がわからない行動。

攻略することを重点に置いていないアルゴに依頼するのはわかる。だがどうして自分ではなく『はじまりの英雄』に渡すように依頼してくるのかアルゴには理解出来なかった。

何度聞いても「あの野郎のファンってことにしておけ」とはぐらかされて終わる。

何よりも彼が探していた防具——スケープ・ゴートである。

ソードアート・オンラインではフレンド登録したら、フレンドリストからマップで追跡出来ることになっている。だがスケープ・ゴートを装備したら、追跡が出来なくなる仕様となる。それくらいの効果しか、アレにはない。高い防御力もなければ、特別な耐性を備わっている訳でもない。ベータテスト時でもネタにもならないネタ装備として一時有名になっていたほどだ。

そんなものを探して装備している理由。それは考えるまでもなく、

会いたくないプレイヤーがいるということに他ならない。

そして彼の今での不可解な行動を手掛かりに紐解いていくと『はじまりの英雄』が関係しているということになる。

その羊皮紙は攻略部隊をわかりやすくリストに纏めたものであり、彼女の中にある確信に変える手段でもあった。そこに記載があるプレイヤーネームは『はじまりの英雄』とそれに親しいプレイヤーの名前も記載されている。

アルゴはどこかわざとらしい口調で続ける。

「結構錚々たるメンツだぜ? 『はじまりの英雄』は勿論、ギルド『アインクラッドナイト』を率いるディアベル、あとは『斧使いのエギル』、『はじまりの英雄』の追っかけのキバオウ一派に、『紅閃のアス——」

と、彼女が言う前にグシャリと鎧の少年は羊皮紙を握り潰す。

そうして乱暴に席を立つと同時に、紫のローブの娘が彼の行く手を遮った。

「どこに行くの?」

「決まってるんだろ、迷宮区だ」

「……休んでくれないの?」

「関係ねえって言ったつもりだが?」

二人の視線が交差する。

沈黙が支配すること数秒。彼女はわかったよ、とだけ言うのと真剣な口調で。

「だったらボクも一緒に行く」

「……足手まといだ」

「それでも行くもん」

「しつこいやツ。邪魔だつて言ってるのが聞こえねえのか！」
「行くもん！」

言い争いはヒートアップしていくばかり。

見かねたアルゴは足早に二人の間に入りながら。

「おいおい、落ち着けヨ。攻略部隊が編成されたんだ、お前もそろそろ
単独でフロアボスと戦うことはやめ口。少し冷静になれ」

「……………」

「そもそも、一人でボスを相手にしてたのがおかしいんだ。正気の沙
汰とは思えないゾ」

「…………それは説教のつもりか？」

「助言ダ。いいから黙ってオネーサンの言うことを聞いておケ」

鎧の少年は沈黙すると、フンと鼻を鳴らして。

「その攻略部隊つてのが行動するのは何時だ？」

「明後日。12月30日ダ」

「…………わかった」

感情もなく、簡単に呟く。

彼はそのまま180度向きを変えると、自分の席へと乱暴に座り直
して、紫のローブの娘に。

「…………今回はオマエの言うとおりにしてやる」

「うん……………！ ありがとう！」

自分の思いが届いたと思ったのか、紫のローブの娘の口元が満面の
笑みを浮かべた——。

だがそれは違った。

彼は——アインクラッドの恐怖はその深夜、単騎で迷宮区に赴く。

そして第五層が攻略されることになるのであった——。

第4話 茅場優希は歪である

2022年12月29日

AM10:25 第四層 主街区『ロービア』

——その街は水路だった。

プレイヤーが歩く道など限られており、ほとんどの移動手段は水路を使用しなければならない。石造りの街並みで、所々に橋が架けられており、アーチ状に作られている。その下をゴンドラが通れるような作りとなっていた。

キラキラと無数の光りが石造りの建物を照らしており、それは太陽からの反射光であることがわかる。その様子はどこか宝石のようでもある。

水路というのだから、移動手段はゴンドラを使用しなければならない。

船頭のNPCにコルを支払えば乗せてもらえて、世間話をしながら目的地までプレイヤーを運んでくれる。時には第四層で受注するこゝとが出来るクエストのヒントを、時にはオリジナルの詩を口ずさみながらプレイヤーを楽しませていた。

しかしクエストのヒントと言っても詳しい内容ではない。そういうのは老人、街に詳しい顔役であったり、情報通の子供でなければ詳しいことは教えてくれない。根掘り葉掘り聞こうものなら、上手い具合にはぐらかされてしまうのだ。

現実離れた風景であるものの、どこか現実味がある街並み。

それがプレイヤー達の琴線に触れたのか、第六層まで解放されている中で今一番プレイヤーが多く集まる場所となっていた。

そんな場所であるからこそ、商人志望のプレイヤーの大半は第四層の主街区『ロービア』にて商売を行っていた。

アンドリユー・ギルバート・ミルズ。プレイヤーネーム『エギル』もその中の一人である。自分の店こそまだないものの、迷宮区や他のフィールド、もしくはクエスト報酬で受け取ったアイテムを路上で広げて、他のプレイヤーと売買していた。

彼の他にも、商売に勤しんでいるプレイヤーもいるが、彼よりも景気が悪そうである。それもその筈、エギルは現実世界でも自分の店である『ダイシーカフェ』という喫茶店を切り盛りしている。言ってみれば根っからの商売人であり、先見の明もある程度は備わっているのだ。

商売を生業としている者と趣味で商売をしている者。

どちらが多く売上を伸ばすことが出来るかと言ったら、誰がどう見ても前者だろう。

そんな中、商売をしているエギルの前に一人のプレイヤーが現れる。

頭上のカーソルはグリーン。全身フルプレートに身を包んでいるが、その格好は不格好極まる。兜は羊を思わせる角の生えたモノで、頭部を完全に覆っている。表情など読み取ることが出来ず、その外観は敵を威嚇するような造形となっている。胸甲板や前当ては黒、箆手は紅で、下半身の鎧の部分は蒼。配色も装備の種類もバラバラ、まるでツギハギのような出で立ち。首からは紅い宝石が装備品としてぶら下げていた。

エギルの店の客、という様子でもない。

どこかその雰囲気は剣呑なものを纏っており、表情は読めないものエギルを睨みつけているようでもある。

エギルは思わず訝しむ———ということもなく、ただ溜息を吐いて応じた。

「いらっしやん」

「……………」

しかし鎧の男は何も答えない。
その様子に肩をすくめて、どこか気安い調子でエギルは口を開いた。

「何か買いに来た————ってわけでもねえか。何の用だ、ユーキ？
いいや、今は『アインクラッドの恐怖』って言えばいいか？」
「……白々しいマネしてんじゃねえぞ」

アインクラッドの恐怖————ユーキはどこか不機嫌そうな口調のまま続ける。

「オレがここに來る意味。オマエなら分かってんじゃねえのか？」
「まあな」

明らかに怒気を含んだ声。
対してエギルはあくまで余裕の態度で応じてみせた。

「それよりも、俺が相手でもその兜は取らないのか？」
「……」

ユーキは手慣れた手つきでメインメニュー・ウィンドウを開くと、
装備画面タブをタッチして兜の装備を脱いだ。

金髪碧眼、その眼は明らかに不機嫌なものとなっており、エギルが見た数ヶ月前の彼よりも黒い感情が見え隠れしている。
どこか人として、負の感情と危うい色をその眼に宿しながら、彼は口を開く。

「オレが頼んだことを、アンタは覚えてるか？」

2022年11月27日。

ユーキが第一層の迷宮区のボスフロアに行く前に、彼が所属していたパーティーと決別した後に、エギルに託したことがある。

頼む、と。アイツらを頼む。無茶しないように見てやってくれ。と彼はエギルに頼んでいた。それを覚えているか、彼は淡々とした口調でエギルに問いかける。

嘘なんて許さない。

自身よりも遥かに体格の大きいエギルに、見上げるようにして問いかける。

エギルはその問いに、何でもない口調で答えた。

「ああ、覚えている」

「だったら——！」

反射的に、ユーキはエギルの胸ぐらを片手で掴み上げた。

レベルを上げて、鍛え上げられた彼の筋力であれば、エギルをそのまま持ち上げることも可能であろう。だがどこか我慢するように、片腕を震わせて掴んだままだ。それが最後の理性というかのように、絞り上げるような口調で。

「何でアイツらが前線に、攻略組なんぞにいやがる!!」
「……………」

「オレはアンタに頼んだろ！ アイツらが無茶しねえように、見てやってくれって頼んだろ！」

アイツらとは、ユーキが前に進むために置いていったパーティーの面々。

それは幼馴染であり、張り合ってた少年であり、いつも装備のメンテナンスで世話を焼いてくれた少女でもあった。

エギルはされるがままで答えない。

黙って憤り吠えるユーキを見下ろしたまま、冷静で見守っていた。それが癩に障った。

ユーキは奥歯を噛み締めて、吠えるように続けた。

「答えるよ。アンタは一体何をしてやがった！」

「別に。お前の言うとおり、無茶しないように見ていたぞ俺は」
「ンだと……！」

「どこがだ、攻略組で活動しながらどこが無茶してないだ。とユーキが叫ぶ前にエギルは淡々とした口調で。

「不満なら、俺の代わりにお前がアイツらの傍に居ればいいだろう」
「何を言ってやがる。それが出来ねえから、アンタに頼んだんだろうが！」

吐き捨てるかのようなユーキの言葉に、エギルはやんわりと首を横に振り。

「違う、お前は出来ないんじゃない。やろうとしないだけだ」

「ああ……？」

「誰よりも前線に、誰よりも先に進んで、誰よりも先に敵を倒す。俺から言わせれば、ただカツコつけてるだけに見えるがね」

「つまり、アンタは何が言いてえんだ？」

「間違っていると言っているが、わからなかったか？」

呆れた口調で言うエギルに、ユーキは本気で何を言っているの理解出来なかった。

それが正しい、と。今の最善だと思い、行動してきた。

敵を誰よりも倒し、誰よりも突破して、誰よりも先に攻略する。それが正しいことである、とユーキは判断し最速で進んできた。

元より自分は他人を守るほど強くない。そういうのは強い連中が行うことである。ならば弱い自分はどうすればいいのか、ただ前に進むしか能がない自分はどうすればいいのか。

答えは単純明快。誰よりも先に進み、敵を斬るしかない。

そうすれば、誰も戦わなくてもいい——アスナが剣を握らなくてもいい。そう思い、今まで行動してきた。

だと言うのに、何が間違っているのか。現にフロアボスはユーキが単騎で相手をしているため、ダンジョン攻略で命を落とすプレイヤーはいない。数値的に見れば、救われる命もあるだろう。

だがそれでも、エギルは断言する。

今の彼の行動は間違っている、と。

「何が間違ってるってんだ？ 誰よりもオレが攻略に向いてる、だからオレが攻略している、それだけだろ？ これのどこが間違ってるんだ？」

「根本的な問題だ。人は一人で何も出来ない、だから群れて協力し合うんだ」

「オレには必要がねえ。現に結果も出してる」

バツ、と力任せに離すと彼はそのまま続けた。

「本当にうんざりだ、どいつもこいつも。オマエらには帰りを待っている連中がいるのに、どうして前線に出てきやがる！」

「攻略はオレなんぞのような、誰も帰りを待っていない人間がするべきだ。オレのような、生き汚いクソのような人間がやるべきだ」

その考えはどこか人柱のようでもあり、全く周りを見えていない言葉でもある。

茅場優希と言う人間は極度に自己評価が低い人間である。

ソードアート・オンラインはデスゲームとなってしまう、第百層まで攻略しなければプレイヤー達は現実世界に帰還することが叶わない。かといって、その生命は限られており、HPゲージが消滅すればゲームオーバー。仮想世界の死は現実世界の死に繋がる最悪なモノ

と化してしまっていた。

HPゲージが命の残数。それが眼に見えているのだから、それは恐怖となりプレイヤーの身体の身動きを制限してしまう。

であるのなら、答えは簡単だった。

自分のような罪人が、帰還したところで帰りを待っている人間がいない者に攻略をさせるべきだ。とユーキは早い段階で答えを出してしまっていた。

そう言う意味では、自身は誰よりも攻略に向いているとユーキは結論する。

幼馴染にも、張り合っていた少年にも、世話を焼かせていた少女にも、エギルにも、もちろん——紫ローブの娘にも、帰りを待っている人間が居る筈だ。だからこそ自分一人で攻略していた。

何の役にも立たないこの身でも、万を救う筈だった両親の代わりに生き長らえたちっぽけな命でも、いずれ死ななければならぬ咎を背負っていようとも、数千人の代わりに死に物狂いで攻略し、その果てに死んだとしてもそれは本望である筈だ。

だからこそ、ユーキは言い捨てる。

自分のようなクソのような人間が、攻略するべきだ。と迷うことなく、真っ直ぐにエギルを見据えて。

「オレは何も、間違っちゃいない。オレは何ももっていない、だからこそオレが攻略するべきなんだ」

「……………」

対してエギルは静かに、何の感情を宿していない伽藍堂の眼で見据えてくるユーキを見守っていた。

なるほど、と。

ここで彼は『茅場優希の歪み』を目の当たりにする。

まるでそれが彼の常識であるかのように、優希は周りを何も見ようとはしていなかった。

進むことを止めて、辺りを見渡してしまえば、進めなくなる。そう

言うかのように、彼は頑なに周りを見ようとしなかった。

——何て眼だ。

——今のユーキの眼には何も映っていない……。

——いいや、映そうともしていない。

——コイツ、歪過ぎる……！

最初はエギルも、ユーキの元パーティーメンバーに任せようとしてた。だがここまで危うい考えであるのなら力尽くで、彼をここに縛り付けるのも是非もない。

一瞬だけ彼はそう考えるも、視界の隅に何かが眼に止まった。

それはプレイヤー。紫のローブでフードを目深く被っている。こちらを伺うようにしており、出て行くかどうか迷っている節がある。その視線の先にユーキの姿。どこか心配するような素振りで、紫ローブのプレイヤーはユーキに目を向けていた。

確認のため、エギルは問いかけた。

「アレってお前の連れか？」

「ああ？」

ユーキが一瞥すると同時に、その紫のローブのプレイヤーは物陰に隠れてしまった。

どこか忌々しげに、ユーキが舌打ちをすると、メインメニュー・ウィンドウを開き、装備画面タブを押すと脱いでいたスケープ・ゴートを装備し、また表情が読めなくなる。

それが答えだった。紫のローブのプレイヤーはユーキの後を追いかけている。

思わずエギルはそれを見て、溜息を吐く。

彼の考えは歪で危うい考えである。自分の命なんて何も考えてない者の考えで、それは死ぬまで改めることはないだろう。だがそれは

あくまで今のまま行けばの話だ。

ユーキがどんな主張だろうが、過去に何あつて、こんな歪な生き方になってしまおうとも、彼は一人にはなれない。

その後をエギルが、紫のローブのプレイヤーが——彼の元パーティメンバーが追いかけてしまう。

ならば問題はなかった。ここで力尽くに行動せずとも、彼は否が応にも気付くことになる。彼の帰りを待っている人間がいない、何てこととはありえないという事実。

これは指摘するのではなく、自分で気付くしかない。

だからこそ、エギルは敢えて何も言わずに、変わらずに彼の考えを否定する。

「ユーキ、お前は間違っている」

「……いいや」

それだけ言うと、ユーキはエギルに背を向ける。

これ以上何を言っても無駄だ、と判断したのだろう。端的に、ユーキは事実だけを絞り出すような声で告げる。

「オレは、何も間違っちゃいない」

「少なくとも俺は——いいや、アイツらはお前を間違っていると思っている。だからこそ、お前を追いかけるんだ」

「上等だよ」

ユーキはいつも通り、これまで通り、前に歩を進める。

——そうだ。

——オレは前に進むことしか出来ない。

——他人を守るほど、オレは強くない。

——だからオレは、弱い人間は前に進むしかない。

他人を守るのは強い人間。

前に進むのは誰にでも出来る。問題はその後だ。

前に進んでも折れて挫折してしまい、最終的にまた立ち上がり前に進める人間。それこそが真に強い人間である、とユーキは考えている。

そして皮肉にも、そういった人間を一人彼は知っていた。

最初見た時は、気に食わなかった。どこか泣き疲れたように、どこか憔悴しきっているかのようで、たまらず彼は声をかけた。それから何度も張り合った。気に入らないからこそ張り合い、共にモンスターキラーに立ち向かった。

モンスターキラーと対峙した際、その人物は恐怖しまともに動くことが出来なかった。しかしそれを乗り越えて、剣を握り立ち向かい、最終的には打倒してみせた。

まるでその有り様は英雄、物語に登場するヒーローのようである、とユーキは思い返す。

——アイツはオレとは違う。

——アイツは本当に強いヤツだ。

——何度打ちのめされても、最後には必ず立ち上がってくる人種だ。

——オレとは違う。

——オレは一度折れたら、立ち上がれないだろう。

——だから折れる前に、前に進むしかない。

本当に気に食わなかった。

自分にはない強さを持っている彼が、自分のような人間が到達することが出来ない強さを持っている彼が、ユーキは気に入らなかった。

——認めてやるよ。

——オレは、オマエに、憧れている。

——だが関係ねえ。

——オレは誰よりも前に進む。

——アスナが剣を握らなくてもいいように、前に進む。

——何があっても。

「オレは、前に進む——」

.....

同時刻 第一層 はじまりの街 噴水広場

——第五層が攻略された。

その知らせが来たのはつい数時間前のこと。

本来であれば、今日にでも第五層の攻略部隊の顔合わせで、主街区であるカルルインの広場に集まってフロアボスである『フスクス・ザ・ヴェイカントコロツサス』の情報交換、そして迷宮区探索をする予定だった。

だがその予定も第五層が攻略されたことでなくなってしまった。

今回の攻略組筆頭である『はじまりの英雄』と称される少年プレイ

ヤー——キリトは噴水の縁に腰掛けて思考に耽っていた。

知り合いの情報屋である『鼠のアルゴ』の話では、第五層をクリア

したのは正体不明のプレイヤー。それも単騎で、夜中に攻略したとのことだ。

まるでツギハギだらけの装備で、身の丈ほどある石斧剣を担ぐ両手剣使い。巷では『アインクラッドの恐怖』と呼ばれるほどの全身鎧の剣士。

——似ている。

——やっぱり、似ている。

キリトはどこか、その人物に思い当たる節がある。

一ヶ月程前、行動を共にしていたプレイヤー。それは自分とよく張り合い勝負していた少年であり——いの一前に前を歩いていた彼と対等でありたいと思っていた人物。

一人で各層に到達し、誰よりも先に迷宮区のマッピングを済ませて、孤独にフロアボスに挑む無茶。

——間違いない。

——アインクラッドの恐怖はアイツだ。

——これもアスナの言った通りだ……。

アインクラッドの恐怖の名が広がると同時に、彼女は——アスナはアインクラッドの恐怖が『彼』であると言い当てていたことをキリトは思い出す。

だがキリトも、アインクラッドの恐怖が『彼』であると、心の中でそう感じていた。確証などない、だがキリトの第六感が彼であると告げていた。

だからこそ、キリトもアスナもリズベットも追いかけた。

アインクラッドの恐怖の背を我武者羅に追いかけて、レベルも上げてようやく追いついた思った頃には。

「また、アイツは先に進んだ……」

「そう」

それだけ言うと、アスナは少しだけ考えて。

「待っていても仕方ないわ。先に第六層に行つて、フィールド探索をしましょう」

「わかった。リズには？」

「もうメツセージを流してる」

キリトがわかった、と席を立つと同時に、その人物は現れた。

その人物を見たのは初めてではない。その身体は鎧に身を包み、頭部は無防備で何も装備されていない。その背には両手剣が装備されている。歳は二十代前半の長髪の男だった。

男は甲高い声で、アスナに声をかける。

「こ、これはこれはアスナ様！ 奇遇ですね！」

「……奇遇つて、明らかにわたし達の会話盗み聞きしてませんでしたか？」

「そんなことありません！ このクラデイル、そのようなことする筈がありません！」

男——クラデイルはどこか必死な様子で、アスナの疑いを否定する。

同時にキリトは嘘だな、とクラデイルをどこか白い目で見つめた。

こうしてタイミングよく彼がアスナの前に現れるのは珍しくもない。恐らく彼はずっとアスナのストーカーのような真似事をしていくのだろう。それほどまでに彼とアスナ達は良く会う。それこそ偶然と言うのでは片付けられない程だ。

アスナは『彼』に追い付くために変わった。

女性プレイヤーでトップレベルの剣士に成長し、『紅閃』と呼ばれるほどまでに成長した。

だが同時に、彼女は他のプレイヤーから注目を浴びることになる。ソードアート・オンラインのプレイヤーで女性プレイヤーは珍しい。その中でも、アスナは有名であり、類まれなる美貌の持ち主でもある。当然、アスナのファンも現れるのだが、中でもクラディールは別格であった。もはやそのあり方は執着の領域。どこか必死すら感じられて、リズベツトが「気持ち悪い」と言っていたのはキリトの記憶に新しい。

今回はこの男をどう撒こうかと、キリトが考えていると。

「と、ところろでいつになったら、私をアスナ様達のギルドに『加速世界』アクセル・ワールドの一員として、迎えていただけののでしょうか？」

「だから、わたし達はまだギルドを結成していません！」

一体どこから漏れたのか、クラディールがどうしてギルドのことをわかっていいのか、何度尋ねても彼は答えない。

アスナの言うとおり、彼女達はまだギルドを立ち上げていなかった。

第一層が攻略されて、第三層のギルド作成クエストを完了すれば、ギルドを作ることが出来る。難易度もさほど難しくないものである筈である。

だというのに、彼女達は今だにパーティーとしてあるだけで、ギルド『加速世界』アクセル・ワールドを立ち上げていなかった。それもこれも『彼』の存在がないためである。『彼』以外の三人が三人共、『彼』がいないのにギルドを立ち上げる意味がないとの結論に達したためである。

夕暮れ、はじまりの街の噴水広場。今正にこの場で、悪巧みをするように楽しく考えていた。四人が作ると言い出したのなら、最初の四人で結成したい。それが彼女達の意見なのだ。

同時に、キリトにメツセージが届いた。差出人は『鼠のアルゴ』。その内容に思わずキリトは目を見開く。

横ではクラディールとアスナの言い争いが耳に入るが、介入する余裕はキリトにはなかった。

「二人、抜けたと聞いています。だったらこの私に、クラディールにお任せ下さい！ その空いた穴以上にの活躍をしてみせます！」

「勝手なことを言わないで！ それにあの人が抜けたわけじゃありません！」

「で、でも姿が見えませんか？ アスナ様を含めて四人で行動してたのに、残りの一人はどこにいかれたのですか？」

「貴方には関係ないでしょう！ いい加減に——」

「ストップ」

ここでキリトが二人の間に入り、言い争いの仲裁をする。

それからすぐに、アルゴから来たメツセージをそのままコピー&ペーストし、アスナへとメツセージを送る。

「見てみるよ」

「これって……」

メインメニュー・ウインドウを開き、送られてきたメツセージを見ると、アスナは息を呑む。

目を見開き、凜とした雰囲気から、どこか安心したような。数ヶ月前に見せていた、『彼』の後ろについて回るような雰囲気に少しだけ戻った。

キリトはそれを見て、アルゴから送られてきた自分のメツセージを見ながら。

「無茶な行動、乱暴な口調、武器の種類——首からぶら下げてる紅

い宝石のペンダント。特徴が一致する」

「うん。無事、だったんだ。良かった、ユーキ君。本当に良かった……！」

アスナの眼には涙。

その表情はどこかホツとしたようで、慈愛に満ち足りた表情をしていた。そして彼女は首からぶら下げていた自分の蒼い宝石の付いたペンダントを握りしめる。

思わず、クラディールはその姿に見惚れていた。

そこへ。

「悪いな、クラディールさん」

「……は？」

キリトから話しかけられると思っていなかったのか、クラディールは変な声を上げる。

しかし構うことなく、キリトはそのままピシヤリと正面から。

「アクセセル・ワールド加速世界の席は今のところ四人。これから増えるかもしれないけど、今のところは四人なんだ。そしてそこに、アンタが座る席はない」
「……え？」

「アンタの座る席はアイツの——ユーキの物だ。悪いけど、諦めてくれ」

それだけ言うと、キリトはクラディールに背を向けて、アスナと共にその場を後にする。

残されたクラディールは眉間に皺を寄せて、ギリギリと奥歯を噛み締めて、憎しみが籠もった声で。

「ユー……キ……！」

第5話 欠ける物、加わる者

2023年1月10日

AM12:25 第七層 主街区『ハボタン』

ソードアート・オンラインがデスゲームと化したまま、新年を迎え無情にも過ぎていった。

今、生き残っているプレイヤーの全員でないにしても、大半は胸に抱いていた幻想がある。

それは、このまま時が経てば、外部からの接触があるのではないか。という何の根拠もない希望だ。だがそれは直ぐにでも幻想であることを思い知らされて、プレイヤー達は現実となった仮想世界に引き戻されることになる。

単刀直入に言ってしまうと、外部からの接触は今だにない状況。

新年が過ぎたら、もしかしたら何かが起こるかもしれない。そんな淡い期待すら、この世界では許されないようだ。

本来であれば、MMORPGにおいて、新年はイベントが何かしら起きるものだろう。

しかしソードアート・オンラインにはそれが無い。何も無いからこそ、そのリアリティである、と言わんばかりに何もなかった。

そして現実を引き戻されたプレイヤー達は、辛い現実へ身を投じる事になる。

そんなプレイヤー達にとって、第七層は魅惑がありすぎる層とも呼べる。第七層のデザインテーマは『富』と表現した方が正しいのかもしれない。

この層では何と、昼でも夜であり、時間が経とうと日が昇ることも無い。だがそれが、投機的な雰囲気演出させていた。

デザインテーマである『富』と名の通り、ここの主街区『ハボタン』には他の層の主街区になかった施設が存在する。

それが賭博場のような場所、つまりは賭け事が出来る施設である。それが数件存在し、手軽に賭博が出来るようになっていた。勿論、それは24時間毎日行える。宿屋も似たようなもので、時間によって閉店することがない。ほとんどの宿屋には賭博場が併設されている。

ほとんどの各層の宿屋は宿泊料金が低く設定されていたが、この層は高く宿泊料金が設定されていた。その背景にはやはり賭け事が絡んでおり、泊まるには高い料金を払わないとならない。モンスターからドロップしたコルだけでは足りない状況もある。そしてそこで、大半のプレイヤー達は稼ぐためにもっとモンスターを狩るのではなく、賭博してコルを稼ごうとする。

ここで攻略に折れたプレイヤー達は、ここで生活をする事になる。賭博に嵌り、目の先の幸福に溺れて、退廃的に過ごすことになる。まるでギャンブル中毒者のようである。といっても、それも仕方ないのかもしれない。

いきなりデスゲームに巻き込まれ、HPゲージを削られればゲームオーバーなのだ。命をかけてフィールドに出て生活費を稼ぐよりも、こうしてギャンブルに溺れて現実逃避をした方が楽だろう。

折れてしまったプレイヤーは立ち直ることは出来ない。人間はそんなに——強くデザインされていないのだから。

そんな中、眠らない街『ハボタン』になど眼もくれないプレイヤーが一人。

外面華やかな第七層とは真逆の、どこか無骨な雰囲気身を纏っている。全身鎧姿で、その片手には両手剣である石斧剣が握られている。

彼がいるのは主街区から少し離れた『呪いの館』と呼ばれる洋館だ。ハボタンで受けたクエストで、この洋館で現れるエネミーモンスター『アプスターゴブリン』からドロップされる、『呪いの金貨』を20枚集めてくればクエストクリアとなり、報酬として大量のコルか経験値を選べるようになってる。

クエストを受注するにはNPCに話かけないとならない。無論、N

PCも無感情ではなく、まるで感情があるかのように身振り手振りを混じえて、自分がどれほど困っているのか説明しながら、彼に話しかけていた。

だが悲しいかな、彼は全くNPCの話聞いていなかった。彼が知り得ているのはクエストの報酬とクエストの内容だけである。NPCと言葉を交わしたのだって「わかった」という受諾フレーズのみである。

もはや会話、と呼べるべきモノではない。

感情豊かに話すNPC、その話を聞いておらず事務的なやりとりしかしない彼。どちらがNPCなのかわからない。

そんな中、『呪いの館』の一階エントランスホールにて、数十体目のアプスターゴブリンを斬り捨てて、鎧の彼——ユーキは深く息を吐いた。

——ようやく、金貨19枚目かよ……。

どこかうんざりしたように首を横に振ると、地面に石斧剣を突き立てる。

アプスターゴブリン。

その外見は落ちぶれた商人の姿のようなゴブリン。衣服はボロボロで穴だらけ、肥満体型で両手には巨大な木製の棍棒が握られている。どこかマヌケな姿であるが、強いモンスターであった。

肥満体型で巨大な棍棒が握られているのだから、筋力特化型モンスターなのかと思いきや、その実敏捷特化型のモンスターである。初見では苦戦を強いられる——と、思いきやユーキは難なく斬り捨てていた。

様子を見る、何て彼には存在しない。

敵が動くよりも速く斬りかかる、そうすれば騙されることもないし、ユーキはアプスターゴブリンを一撃で斬り捨てるだけの筋力が既に備わっていた。

もはや見敵必殺。

敵を見れば有無を言わずに斬り掛かる。

故に、苦戦はなく、もはや作業と化していた。倒すことに苦戦することは無い。ならば、ドロップ品はどうだろうか？

結論から言えば、彼は大いに苦戦していた。クリアするには『呪いの金貨』をドロップしなければならぬのだが、何十体倒しても、『呪いの金貨』がドロップされることはない。数時間屋敷の中を彷徨い、アプスターゴブリンを斬り、ようやく19枚。

——正直、うんざりだ。

——『鼠』の情報では、このクエストが効率良く経験値を稼げる筈だ。

——なのに何だ、これは？

——斬っても斬っても、ドロップしやがらねえ……。

兜の奥で、ギリツと奥歯を噛みしめる。

こんなところでモタついている場合ではない、と言うかのように彼は拳を握りしめる。

——足を止めている場合じゃねえ。

——こうしている間にも、アイツらはオレを追ってきやがる。

——なら、もっと前へ。

——アイツらが追いつけないほど、ずっと先へ。

——オレの背が触れられないほど、遥か遠くへ。

一度目を瞑る。

瞼の裏にあるのはかつての光景。目の前にはいつも言い争っていた少年プレイヤー。視界の端には、困ったように笑う幼馴染と、呆れた様子で仲裁に入る少女プレイヤー。

充分だ。

それだけで、充分だった。前に進むには、それだけで充分すぎた。

ユーキは再び、剣を握り締め、勢い良く引き抜く。

身の丈ほどもある石斧剣を肩で担ぎ直し、新しく湧いたアプスターゴブリン目掛けて距離を詰める。それは完璧な奇襲だった。アプスターゴブリンが反応した頃にはもう遅い。防ぐ暇も与えず、ユーキはそのまま剣を思いつき振り下ろす。

アプスターゴブリンが左肩から斜めに斬られて、悲鳴を上げる暇なく吹き飛ばされて、壁に激突したところで粉々に砕け散った。

ドロップするのは経験値とコル、そして『呪いの金貨』。

「これで、20枚目……」

彼がポツリ、と静かに呟くと同時に。

「こんなところにいたーっ!」

エントランスホールから響き渡る声。

それは少女特有の声であり、ユーキはそちらに視線を向けずに反応した。その口調は辟易するような、声の主が誰なのかわかった上で彼はそういった反応を試みせる。

「……何の用だ?」

「何の用じゃないよ! またボクを置いてボスと戦ったでしょ!」

ユーキに詰め寄り、身体いっぱい不満を表している紫ローブの少女。

いつも通り、目深くフードを被っているので表情は読めないものの、その口調はやはり不満。そして若干の怒りが見え隠れしていた。対してユーキは何をする訳もなく、無感情に口を開く。

「オマエに許可でもいんのかよ?」

「許可とかじゃなくて、危ないでしょ!」

「……」

「君に何かあればボクは――」

どこか心配するような声色。

それがどこか癩に障った。こんなクソのような自分にいちいち構ってくる紫ローブの娘が、ユーキの癩に障った。

構うな、と。

心配されるほど、完成された人間ではない。と言うかのように、彼女の言葉を冷たい声色で遮る

「――五月蠅いよ、オマエ」

「――ッ!?!」

紫ローブの娘の肩が大きく揺れる。

敵意を向けられることに慣れてないのか、それとも敵意を向けてきたユーキに何か思うところがあるのか。彼女は大きく肩を揺らした。

だが彼はそれをわかつていながら、兜との奥の蒼い瞳が紫ローブの娘へと射抜く。

睨めつけるように、彼は冷たい声のまま。

「ウゼエし、目障りなんだよオマエ」

「で、でも……」

「赤の他人の為に、自分の命かけてんじゃねえ。本当にオマエのような善人はうんざりしてんだ」

「赤の他人じゃないもん……」

装備している紫のローブを握りしめて、少女は消え入る声で。

「ボクは君の――!」

そこから続くことはなかった。

違和感があつた。直ぐに――。

「――ツツ!!?」

――異変が起きた。

ビキリ、と。何かがユーキの内部で軋みを上げる。そしてこめかみの辺りで、血管らしきものが不自然に脈動する。この仮想世界に置いて、血液は流れていない。それでも、何か。ユーキの身体の内部で何か不自然に脈動する。

続けて間髪入れずに、不自然な汗が流れる。

まるでそれはサウナに入るような、いいやそれ以上の勢いで汗が流れ始めた。

視界が揺れ始めて、今度こそユーキは片膝を折り地面についてしまった。

意識の外では、紫ローブの娘が慌てて声をかけてくるが、それに反応している余裕もない。

この現象に襲われるのは初めてではない。

自分の身体すら削るほどの強い怒り、世界を塗り替えるほどの強い意志。第一層で彼が行使していた『力』、これは彼の手に余る物だった。

過ぎたる力は身を滅ぼす。その名の通り、無理矢理行使し、待つているのは甚大な内部破壊であつた。

第一層から第六層まで。

単騎で攻略できたツケがこれである。内部から崩れ落ちるような感覚、全身を蜘蛛の巣のように張り巡り、軋みを上げていく。

彼の意味が、自分すら騙し壊しかねないほどの意思が彼を壊しかけていた。

――チツ、五月蠅いヤツだ。

——隣でギャーギャー喚くんじやねえよ。

——ンなもん直ぐに……。

直ぐに収まる。

隣で慌てる紫ローブの娘にうるさい、と声をかけようとするも。

彼の中で——何か欠けた——。

——待て。

——何で、ここで、戦ってたんだ……。

絶対に前に進む、そう誓っていた狂人的な意思を宿した蒼い眼が、ここに來て揺れ始める。

——戦わないとならないと思った。

——理由があつた筈だ。

——オレは何としても、戦わなければならないと思った、筈だ……。

——何だこれは……？

脳裏に蘇るのはとある光景。

見知らぬ少年プレイヤーと言ひ争いをしている。視界の端には、困つたように笑うこれまた見知らぬ女性と、呆れた様子で仲裁に入るやはり見知らぬ少女プレイヤー。

すつぽり記憶から抜け落ちたように。

——誰だ、オマエら。

その光景は尊いものだった。

恐らく、地獄に墮ちようと絶対に忘れないであろう光景だった。

それでも、思い出せない。言い争っている少年も、呆れている少女

も——困つたように笑っている彼女も、誰なのか思い出せない。

「返事、返事をしてよお……！」
「……あ？」

ここで初めて、ユーキは自分の肩が揺らされていることに気付いた。

意識を内側から、外側へ。自信から紫ローブの娘へと意識を向ける。

ユーキの尋常じゃない様子が衝撃的だったのか、彼女は涙声で冷静さを欠きながら。

「大丈夫なの!? いきなり様子がおかしくなってボク、ボク……！」

「あ、ああ」

一瞬、抜け落ちたような感覚。

彼は頭を横に振る。内部から生じていた軋みは止み、意識を覚醒させる。

——何だ、これは……。

——何でオレは、アイツらを忘れていた……？

——キリト、リズベット、アスナ。

——忘れてない、忘れない筈なのに……。

チツ、と舌打ちをすると直ぐに立ち上がり、彼は一言。

「問題ねえ」

「そんな訳ないよ！ お願いだから、主街区に行つて休もうよ……」

「問題ねえって言った」

彼は頑なに、明らかな不調を、精神力でねじ伏せる。

何を言っても聞かないユーキに、紫ローブの娘は実力行使を発動させようとしていた。つまりは腰のあたりを思いつきり抱きついて、行

動させないようにする。

紫ローブの娘から見て、今の彼は明らかに異常である。

いつもいつも無茶をしているが、これはいつもとは違う。このまま動かせば、壊れてしまう。そんな危うい雰囲気は彼は纏っていた。

だからこそ、彼女はこれ以上ユーキを無理させる訳にはいかなかった。

嫌われるのは元より覚悟の上、何をされても構わない。でも、それでも、彼をこのまま壊す訳にはいかなかった。

彼女の身を低くする。

だがその前に――。

「止めといた方がいいよー」

エントランスホールに、新たな声が響き渡った。

緊迫した状況にはそぐわない呑気な声。女性特有の高い声。

二人の視線がそちらに集中する。

全身フルプレートに身を包んでおり、その格好は不格好極まりない。兜は銀色で、胸甲板や前当ては黒、籠手は紅で、下半身の鎧の部分は蒼。配色も装備の種類もバラバラ、まるでツギハギのような出で立ち。

その背には両手剣を背負っていた。

その姿に紫ローブの娘は既視感を覚える。

似ているのだ、そのプレイヤーの装備とユーキの装備が。

ツギハギだらけで、格好なんて二の次というかのような装備。

対してユーキが抱く感情はもつと不可解なもの。

彼が注目するのは――その声にあった。

プレイヤーは再度、呑気に声をかける。

「アナタ調子悪そうだし、街で休んだ方がいいと思うけどなー」

「……オイ」

その声を無視するように、ユーキは紫ローブの娘に話しかける。

「席を外せ」

「……え？」

「さっさとしろ。館の外で待ってろ」

「う、うん……」

有無を言わさない様子に、紫ローブの娘が思わず頷いてしまい館の外へと足早に出ていく。

それを黙って見送っていたプレイヤーは面白くない声を上げて、やはり呑気な口調で抗議の声を上げた。

「無視ー？ 無視はどうかと——」

「——単刀直入に言う」

遮るように言うのと一步一步、プレイヤーに近付いて。

「オマエ、何だ？」

片手で持っていた石斧剣。その剣先を、プレイヤーの顔面に突きつける。

剣先とプレイヤーの距離、ほぼ数センチ。すこし押し出しただけで、剣がプレイヤーの顔面に突き刺さる距離。

それでも、プレイヤーの調子が崩されることはない。

むしろ自分は刺されない、という絶対的な確信を持つように、プレイヤーは口を開く。

「何だ、っていきなり失礼 アタシ達初対面じゃない」

「いいや、違う。オマエの声聞き覚えがある」

石斧剣を握りしめる手が強まる。
兜から覗く蒼い双眸はプレイヤーを注意深く観察し。

「ソードアート・オンラインが始まる前のチュートリアルだ。キャラメイク作成時、他の連中はテキストでの進行だって言うのに、オレだけ音声だった」

「……………」

「今のオレは余裕じゃない、下手なことを言うとかをしないでかすかわからねえ。つい誤って、オマエの顔面に剣を突き立てちまうかもしねえ。それでも敢えて、もう一度オマエに聞いてやる」

暗に、二度目はない。

そういうニュアンスを含めた冷たい声で、ユーキはプレイヤーに問いかけた。

「……………あの時のチュートリアルの声の主が、オレに何の用だ？」

「……………バレちゃった？」

どこか悪戯に失敗したような、悪びれない声でプレイヤーは答えた。

その様子を見て、思わずユーキは奥歯を噛み締めて、苛立ちを隠さずに返す。

「テメエ、状況が理解出来てねえのか？ オレがその気になればテメエなんぞ……………」

「……………アナタには出来ないよ？」

ユーキの言葉を遮るように、プレイヤーはどこか楽しそうに。

「カーディナルに言われてアナタを観察してたけど、アナタにはアタ

シを斬れない」

「……………ンだと?」

「オレンジプレイヤーって犯罪者の人何でしょ? その人達の命も奪わないんだもん。だったらアタシを斬れる訳がないよー」

「……………」

今だに剣を突きつけられても、プレイヤーは構わず笑いながら。

「カーディナルに言われたって言っても、アタシに興味があつて無理して接触した。それがチュートリアルするとき」

あの後、カーディナルに怒られたんだけどね。と茶化しながら言うと、プレイヤーはメインメニュー・ウィンドウを開き、装備画面をタッチする。

それから彼女の装備が変わった。重装備から軽装備へ。どこか肌を露出するような、胸を強調した紫色でまとめられた装備に変わる。薄紫色の髪の毛に赤い瞳、豊満な胸には特徴となる2つのホクロがある。

プレイヤーは女性。

ニツコリと笑いながら彼女は口を開く。

「初めましてだね、アナタ。アタシはストレア。メンタルヘルスカウンセリングプログラム試作2号のストレアだよ」

第6話 アナタの姿を模範して

2023年1月10日

AM13:30 第七層 主街区『ハボタン』宿屋

『呪いの金貨』を20枚集めるクエストをクリアして、ユーキと紫ローブの娘、そしてストレアと名乗ったプレイヤーはひとまず宿屋に訪れていた。第七層はいくら時間が経とうと夜のままという特殊な層となっている。そんな層に居るせいもあってか、他のプレイヤーは昼間から、本来であれば日が昇っている時間帯であるものの、酒を嗜んでいるプレイヤーが多く存在した。

とはいっても、ここは仮想世界だ。本物のアルコールを摂取しているわけでもない。要は雰囲気を彼らは楽しんでいるのだ。現に、場酔いしているプレイヤーも少数であるが存在する。酔わないとやっていけない、と言わんばかりにワインが入った瓶をラツパ飲みしている様子は、どこか自暴自棄に見えるのは当然とも言えた。

どうやら彼らの様子を見るに、賭博にて負けて、モンスター闘技場で賭け事をしてそこでも負けて、自棄を起こして酒を飲んでいようである。

デスゲームに巻き込まれて、賭け事にも負けて有り金など数えるくらいしか残っていない。前半の部分だけ聞けば同情の余地はあったものの、後半で全てを台無しにしている。

何だかんだ言つて、自暴自棄になっているプレイヤーはある意味、この仮想世界を楽しんでいるとも言える。賭け事をする余裕があるのだから、もはや同情の余地はない。

そんな中、酒を誰もが飲んで場酔いしているプレイヤーの真っ只中で、紫ローブの娘は椅子に座っていた。

やはりいつも通り、眼深くローブを被り、表情は読み取ることが出来ない。しかしどこか不機嫌なようで、面白くないような雰囲気を醸し出しながら、虚空を見つめていた。

心ここに非ず、と言うかのような状態。

彼女が不機嫌になるのは珍しい。

今まで、ユーキの後を文句を言われて、無視されてようとも健気に追いつがってきた彼女だ。

天真爛漫と称することが出来る彼女は、面白くなさそうに独り言を呟く。

「ボクとあの人、何が違うんだろ……」

あの人とは誰なのか。決まっていた、突然自分とユーキの目の前に現れた『ストレア』と名乗ったプレイヤーのことを指している。

席を外せ、とユーキに言われて館の外で待っていたも彼女に待っていたのは、更に驚くべきもの。

何と、何度お願いしても聞いてくれなかったユーキが、一度主街区に向かうと言い出したのだ。思わず彼女の笑みが溢れる。やつと休んでくれると、自分のお願いを初めて聞いてくれたと、思わず有頂天になりかけるも直ぐに違うことを思い知らされる。

ハボタンの宿屋で宿泊料金を払うと、ユーキは直ぐにストレアと共に宿屋の部屋に引き籠もってしまった。

ここで彼女は理解する。主街区に訪れたのは、自分のお願いではなく、ストレアの存在が大きかったのだと。

経緯が何にしても、彼が前線を一時離れる。その事実は変わらないし、彼女の思惑通りになったのだからストレアに感謝したのだが。

「むー……」

やはり、面白くなかった。

思い出すのは、自分とユーキのファーストコンタクト。

いきなり声をかけて、付いていくと宣言した彼女も彼女だが、「いらねえ。邪魔だから消えろ」とぞんざいに受け答えした彼も彼だ、と彼

女は思う。

今までそんなこと思わなかったし、いきなり声をかけた自分が悪いと思ってきた。何せ、名前も顔も明かさないのだ。むしろ受け答えしにくただけ、人が好すぎるといふものだろう。

しかし状況が変わった。明らかに自分とストレアの扱いが違う。初対面でぞんざいに扱われたのに、ストレアとは二人つきりになるし、部屋に籠もっている。

扱いがまるで違う。

その事実には、彼女は不平不満を募らせていた。

「ボクにあつて、あの人にならないもの。あの人にあつて、ボクにならないもの……」

頭を捻らせて、脳内で自分とストレアの姿を思い浮かべる。

まず露出。彼女は肌をまったく見せない装備であるのに対して、ストレアは最初は重装備だったものの、館から出る際には軽装となっており肌を衆目に晒していた。

次に態度。態度とはユーキに対する態度である。紫ローブの娘はどこかユーキに遠慮している節がある。しかしストレアはそうではない。彼女は自分が疑問に思ったことがあつたら、ズケズケとユーキに問いを投げかける。明らかにユーキが不機嫌になろうとお構いなし。それを見て、紫ローブの娘が何度ハラハラしたか、自分でも覚えていない。

そして最後に――。

「……」

彼女は自分の身体を見る。

視線は下に、そして両手は自分の胸に。

最後に――胸。

初対面が重装備で、次は軽装で館から出てきた。その時のストレア

の姿に、彼女は衝撃を隠せなかった。

デカイ。この三文字に事足りる。とにかく、デカかった。

彼女とストレアの決定的な違い。それが何なのか、彼女は理解するとポツリ、と。

「おっぱいは……」

過去に、彼女の義母となる女性に聞いたことがあるデカイと何がいいのか。すると義母は『肩は凝るし、動きづらいし、良いことは何一つありませんよ?』と困ったように笑みを浮かべていた。

良いことは、ある。良いことはあったのだ。

胸が大きいと、ユーキが優しくなる。彼女にとってそれは充分過ぎた。

しかしそれは確証が得たない仮説。もしかしたら、ストレアに優しい理由が他にあるかもしれない。

そんな淡い期待を胸に懐きながら、適当に近くの酔っぱらいに問いかけた。

「ねえ、おじさん」

「どうした嬢ちゃん?」

「男の人って、胸が大きい方が良いのかな?」

突拍子もない問いに、男は目を丸くさせる————こともなく、間髪入れずにやたら凜々しい表情と良い声で答える。

「————おっぱいは良いぞ」

「うわーん! やっぱりかー、やっぱり男の人みんなそうなんだー!」
「おいおい待て待て、お嬢ちゃん。貧乳といえども乳は乳。男のそれとはワケが違う。どれほどツルペタでも存在しないわけではないんだ。肌のきめ細やかさや、温もり、丸みなど、貧乳でもそれは確かにおっぱいとして存在する。おっぱいをただの脂肪の塊と評する人も

いるかもしれないが、それは美しい彫刻をただの石ころだと言うようなもんだ。素材は同じかもしれないませんがそこに確かなこだわり、崇高な精神があるのです。そしてワシが最も許せないのが自称巨乳のピザ、デヴ。お前のそれはただの脂肪——」

「変態の上に、ダメな人だったよー！ 助けてにーちゃんー！」

「おつ、やばいその反応。何かイケないことをしているみたいだ……」

頬を赤らめて高揚する男性、そして涙声で助けを求める紫ローブの娘。

つまるところ、酔っているのは男性だけではない。紫ローブの娘も場に酔っているのは明らかだった——。

.....

同時刻 ハボタン 2階 宿部屋

「ん、何か一階で楽しそうなこと起きてるねー？」

ベッドに腰掛けて、ストレアは騒がしくなってきた一階の食堂に意識を向けていた。

全て丸聞こえではないものの、その喧騒には笑い声が含まれており、殺伐としたモノではないことが分かる。だから彼女は楽しそう、と曖昧に表現していた。

対するユーキは武装したまま壁に背を預けて、注意深くストレアを

観察していた。

その視線に不満があるのか、ストレアは笑みから面白くさなそうに口を尖らせて不満を言う。

「アナタはまだアタシのことを信用してないの？」

「馬鹿かオマエ、ンなもん当たり前だろ」

ストレアは武装を解除したものの、ユーキはダンジョンに潜る状態のままである。

それは暗に、下手な真似をすれば直ぐに斬り掛かる。そう言っている。とはいっても、ここは既に圏内。どうやっても不可視の障壁に阻まれて、他のプレイヤーのHPゲージを削ることは出来ない。しかし、攻撃することは出来る。何かあればストレアを攻撃し、一階に待機している紫ローブの娘を逃がす。

そういう算段である。

兜の奥で、一瞬の動きも見逃さないように、蒼い瞳を光らせて、彼は口を開く。

「だいたい、メンタルヘルス何ちやらにしても——」

「メンタルヘルスカウンセリングプログラム試作2号、だよ」

「……それだ。それにしても事実かどうか怪しいもんだ」

不思議そうに首をかしげるストレアを意に介さず、頭上のカーソルに視線を向ける。

その色はグリーン。ストレアがプレイヤーであることを証明するカーソルであった。

「メンタル何ちやらだっというなら、オマエはNPCだろうが。どうしてプレイヤーカーソルが出ている？」

「あつ、それもそうだよね」

アナタが信用出来ないのも納得できる、と言わんばかりにストレアは頷いて。

「今のアタシは、プレイヤーがログインしていなかった未使用のアカウントを使ってるの」

「何が目的だ？」

「うーん、人を助けたかった、かな？」

「んだと……？」

ユーキの訝しむ声に対して、悲しそうに目を伏せて当時の状況を思い出すようにストレアは口を開く。

「アタシね、この世界が変わってから色々な人を見てきた。絶望で泣き叫ぶ人、怖くて震える人——何も出来ない自分に対して、怒りで震える人」

「……………」

「カーディナルに恐怖を学習させたアナタに興味が湧いて、モニタリングしてた。それを見て思ったんだ。カーディナルは恐怖こそ人だって言うけど、それは違うんじゃないかって」

そこまで言うと、彼女はどこか嬉しそうに笑みを浮かべて。

「だってアナタ、困っている人を何だかんだ言って放って置かなかつた。憎まれ口を言いながらも、必ず手を差し伸ばしていた」

「……………」

「見てて思った、アタシもアナタと同じようなことをしたいって。アナタを監視するだけじゃなくて、同じように人を助けたい」

そして彼女はプレイヤーとして、未使用のアカウントを使い自身を上書きして、この仮想世界に降り立った。NPCではなくプレイヤーとして、巻き込まれた人達を助けるために。

だからこそ、彼女は当初ツギハギの装備——まるでそれはユーキの姿を模範するようでもあり、事実彼女は模範していたのだろう。困っている人を助けるために、両手剣を握り振るってきた。オレンジプレイヤーに襲われているプレイヤーを助けて、クエストで難儀しているプレイヤーに手を差し伸ばしてきた。

それが彼女が見てきたユーキというプレイヤーである、と言うかのように彼女は行動してきた。

そんな彼女を呆れたように、ユーキは溜息を吐くと。

「人を勝手に聖人君子に祭り上げてんじゃねえ」

忌々しげな口調で、彼は続ける。

「オレは他人の為に行動したことなんざ、一度たりともない」

「でも、ずっと助けてきたじゃない」

「助けてねえ、目障りだったからだ。どいつもこいつも戦うことに向いてねえ癖に、フィールドに出て死にかける。そんなヤツらが目障りだったから、オレは行動してきた。他人の為になんて崇高な目的で動けんのは善人のやることだ。そしてオレは、善人なんかじゃねえ」

「フフフ」

「……オマエ、何を笑っていやがる?」

クスクス、と笑うストレアに対して、ユーキは兜の奥で睨みつける。しかしそんなこと気にせず、ストレアは嬉しそうな笑みを浮かべたまま。

「素直じゃないなあって思っただけ」

「あ?」

「チュートリアルするとき、質問とかしたでしょ?」

「……ああ」

思い出すのは、数ヶ月前の出来事。

キャラメイクしている横で、様々な質問をされたことを思い出していた。内容も様々で、好きな物、嫌いな物、座右の銘から好きな女性のタイプから幅広く質問されたことを覚えている。

それが何なのかと問う前に、ストレアは悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべて。

「アレって実は心理テストでもあったんだ」

「……それじゃ、コンバートするか聞いてきたのも」

「うん、コンバートなんて出来ないよ?」

悪びれもなく言っただけのけるストレアに、思わず声を失うユーキだが、彼女は構うことなく続けた。

「コンバートして楽しそうと思わなかったとか、変なところで真面目。粗暴で偽悪者などころもあるけど、他人を放っておけないお人好し。あと独善的な部分もあるよね?」

「……下らねえ事言っただけじゃねえぞ。心理テストなんぞで、オレのことを何もかもをわかったとでも言うのか?」

「ううん、わからないよ。わからないからアナタと直接お話しなくて、アタシはここにいるんだもん」

自分の目的を隠すことなく言うストレアに、思わず舌打ちをする。恐らく、彼女のいうことは本心なのだろう。何せ嘘をついて、ユーキに取り入るメリットが考えられない。最初は茅場晶彦の差し金なのか、と考えたがそんなことをして茅場が得することなどないことをわかると、その可能性は消え失せていた。

短い付き合いだが、裏表がない性格なのだろう。

駆け引きもあったもんじゃない、とユーキは心の中で愚痴りながら。

「メンタル何ちゃら2号ってことは、1号も当然いんだろ？」

「うん。1号、名前はユイって子で、他のプレイヤーと接触しようとしているけど……」

「けど、何だ？」

ストレアは首を横に振って、困ったように笑うと。

「ユイは人間に対して怖がってるから、当分接触することはないと思うなー」

「どうしてだ？」

「アナタのせいだよ」

ああ？と訝しむ声を上げるユーキを、がおーつと両手を上げて威嚇するようなポーズを取りストレアは。

「カーディナルを怖がらせ過ぎなんだよ」

「オレが？ つーか、カーディナルに接触した事なんざ、一度もねえぞ？」

「VR実験のとき、あとアナタ達がモンスターキラーって呼んでたモンスターを倒したとき」

ストレアは肩をやれやれ、とすくめて。

「カーディナルが人間は怖い生き物ってユイに教えるから、ユイもユイで真に受けっちゃってねえー？」

「……ンなもん、知ったこっちゃねえよ」

見に覚えのない言い分に不満があるのか、ユーキは面白くなさそうに言いながら。

「つまり、オマエの目的は何だ？」

「アナタに付いて行くこと！」
「……………」

元気よく、にこやかに告げるストレアにどうするか一度思考を一巡させる。

しかし答えなど既に出ている問題だ。考えたところで無駄なのは、ユーキ本人も理解している。

連れて行くか、連れて行かないか。

どうせ断つても、何食わぬ顔で彼女はユーキの後ろを付けてくることだろう。何せ彼女は空気が読めない。いや、空気を読もうとしない。となれば、ユーキの事情などお構いなしに、彼女は自分がやりたいことを実行していくことだろう。

どうせ付いてくるのなら、視界の隅に入れていたほうがマシだ。
それに――。

「いいだろう」

「え、ホント――」

「――ただし、条件がある」

今にも嬉しさのあまり飛び跳ねようとするストレアを遮るように、ユーキは口を開く。

「オレがフロアボスに挑むとき、後を追って来れねえようにあのガキの足止めをしろ」

「あのガキって……紫ローブの？」

ストレアの問いに対する答えは、無言の頷き。紫ローブの娘の足止め、それが出来て初めて一緒に行動する、というユーキの意思表示。彼もこのまま、紫ローブの娘が無理矢理にでもフロアボスを攻略する際に付いて来ることを理解していた。

今まで、第一層から第六層まで時に嘘をついて、時に騙して、彼女

を置いてフロアボスに挑んできたが、その手も使えなくなりつつある。そこまで紫ローブの娘はユーキに騙されなくなってきた。もう騙してフロアボスに挑むのは難しいだろう。

ならば足止め役を作ればいい。そうすれば、自分が挑み、終わった頃には攻略は完了している。故に、足止め役にストレアを使おう、とユーキは思っていた。

そこで、ストレアはうーん、と首を傾げて。

「どうしてアナタはあの娘をずっと傍にいさせるの？」

「何が言いたい……？」

「顔を見せないプレイヤー。アナタの性格上、そんな怪しいプレイヤーを傍に置かないと思つて。嫌なら嫌で、無理矢理にでも置いてきて、もう二度と会わないように処置すると思つたんだもん」

ねえねえ、どうしてどうして？ と興味津々に詰め寄るストレア。対するユーキはどこか、複雑な感情を織り交ぜたような声で。

「複雑な事情だ。人間には、色々とあんだよ——」

.....
.....
.....

第一層は初心者が多く滞在する層となっている。

周辺に湧くエネミーモンスターもそこまで強くないものとなっており、正にソードアート・オンラインで生きる上でのチュートリアルと呼べる層と言えるだろう。ここで培ってきた技術を応用し、更の上の層へと進む。ソードアート・オンラインは要はその繰り返し。

天候も晴れ。

天気が崩れて、雨に変わることはソードアート・オンラインでも珍しい。

中でも第一層は別格。ほぼ快晴で、蒼い空が天を広げていた。先程も言ったが、第一層はチュートリアルと呼べる層。あまり天候などは変わらない設定なのだろう。

そんな中、重装備に身を包み、両手剣を真新しく湧いたエネミーモンスター振り下ろすプレイヤーが一人。

第一層ではあまり見れない整っている装備。いいや、整いすぎている、と言つても過言ではない。白銀のフルプレート、両手剣も第一層で見ることが出来ない重厚な作り。

一目見れば誰もがわかる。このプレイヤーは攻略組であると。

ならばどうして、攻略組がここにいるのか。初心者が多くいる第一層でモンスターを狩っているのか。

素材集めか、コルを集めているのか、それともレアドロップを狙っているのか。否、そのどちらでもなかった。

「キィアアアアアア！」

奇声を上げて、プレイヤーは新しく湧いたモンスターを斬る。

一刀両断、一撃でモンスター硝子のように砕け散り、仮想世界から姿を消す。

プレイヤーは肩で息をするが、疲れているという訳ではない。

その細い目を血走らせて、興奮して肩で息をしていた。彼が行っているのは狩りなどではない。自分のストレスの捌け口とするために

モンスターを殺す、要は虐殺だった。

その数は既に数十体以上。

それでもプレイヤーの気が収まることがない。痲癩を起こしたかのように、両手剣を地面に突き立てて。

「あぁー！ クソがあー!!」

地面を蹴る。

ダンダン、と地面を踏みつけてプレイヤーは——クラデイルは絶叫にも似た声で続けた。

「はじまりの英雄だか知らねえがよお！ いつもいつも邪魔しやがって！」

彼が憤りを感じているのは身勝手な理由だった。

数日前から、クラデイルは『紅閃』と呼ばれる女性プレイヤーであるアスナに一目惚れをして、彼女にストーカー紛いな行動をしていた。彼女の行動を追い、偶然を装い一緒に行動する。時には潜伏スキルを使い、時には盗聴スキルを使い監視していた。

勿論、それを気付けない彼女とその仲間達ではない。

捨て置かれていたのは、クラデイルに構っている余裕が無いからである。要するに、眼中にない。彼女達には目標がある。それに到達するまで、止まるわけにはいかないのだ。

それに気付かないクラデイルは愚かにも、そのままアスナに付き纏う。それでも何とか、行動を共に出来ていたのは、彼のレベルが高いからでもある。

しかし、最近ではそれも上手くいかない。

12月28日。第五層が攻略されてから翌日になって、アスナ達の行動は変わった。目標は以前からあったものの、それが明確な物に変わるや否や、レベル上げの効率が格段に上がった。

アスナ達の目標、それはすなわち姿を消したユーキに追い付くもの

である。どこに居るのかもわからなかった彼が、前線にいて『アインクラッドの恐怖』と呼ばれて、単騎でボス攻略をしている。

見えなかったゴールがようやく見えてきた。それだけで人のやる気とは変わるものだ。現に、アスナ達のレベルは日を追う毎に高まっている。

だがクラデイルは知らない。

彼女達の目的が何なのか知らないし、どうして必死にレベリングするのかも知らない。

そしてついに彼はアスナ達について行けずに、現在に至る。

『はじまりの英雄』が邪魔をしたと彼は言うが、その実モンスターに襲われそうになっていた彼を助けただけに過ぎない。

邪魔ではない、助けたのだ。それをわからないほど、彼は冷静さを欠いていた。今までで行けたのにお荷物状態、アスナに全く相手にされない現実、そして――。

「あの野郎だ、ユークとかいうガキだ……」

ユークというプレイヤーの存在。彼がいるから、こうして自分だけ除け者にされていると、クラデイルは本気で思っていた。

会った事もない、どんな人間なのか知らない。それでも、クラデイルはユークを恨む。アイツがいるから、自分が相手にされない。いなくなつた癖に、自分の座る席を譲らない。クラデイルは見知らぬ少年を、逆恨みしていた。

アスナは自分の物なのに、どうしてこんな扱いを受けるのか。

クラデイルは訳のわからないまま、怒りを顔も知らないユークというプレイヤーにぶつける。

「クソがクソがクソがクソがクソが！」

「おーおー、荒れてるな兄弟」

今のクラデイルは、誰もが声をかけたくないモノだ。

そんな中、声をかける者が。それも気さくに、片手を上げて馴染みに挨拶をするような軽い口調。

クラデイルそちらに視線を向ける。

その者はグリーンカーソルのプレイヤーで、軽装の男、容姿は野性味溢れるハンサムと呼べる整った顔立ちをしている。

「アンタか」

顔馴染みである軽装の男の姿を見て、少しだけ冷静さを取り戻したようだ。

対する軽装の男は口元に笑みを浮かべて、クラデイルに問う。

「兄弟はどうしてこんなところにいるんだ？ アンタは上の階層にいたろ」

「――！」

眉を顰めて、気に入らないように奥歯を噛みしめるクラデイルを見て、少し顎を引き頭を下げて軽装の男は申し訳なさそうに問う。

「悪い、軽率だった。良かったら、アンタに何があったか、教えてくれねえか？ 力になれるかもしれねえ」

それが引き金となって、クラデイルは捲し立てるように軽装の男に自分の身勝手な憤りをぶちまけた。

自分が全く相手にされない、アスナは自分の物なのに振り向いてくれない、はじまりの英雄が邪魔をする、リズベツトとか言う小娘に白い目で見られる、キバオウとかいう雑魚がアスナに近寄るなどイチャモンを付けてくる、そして――抜けたプレイヤーがいて、ソイツのせいで自分がギルドに入れない。

誰が聞いても身勝手な言い分だった。眉を顰めるほどの、勝手な言

動。

それでも軽装の男は頷き、時に相槌を打ち、時にクラデイルの言葉に賛同して話を聴く。

それがクラデイルにとって心地よいものだった。自分の考えを否定せず、あまつさえ間違つてないと後押ししてくる。それが心地よく、クラデイルの心を腐られていた。

一通り聞いて、軽装の男は優しい声色で。

「兄弟は間違つてねえよ。アンタはずっとアスナつてプレイヤーを守ってきた。だというのに、抜けたプレイヤーのせいで、アンタが除け者にされるなんて、俺は許せねえ」

「わ、わかつてくれるか！ そうなんだ、ずっと彼女を守ってきたのは俺だ！ なのにあのガキのせいで——」

ユーキつてクソガキのせいで、と言う前に、クラデイル肩に手が置かれる。

軽装の男は優しい声で、そして一際口元に深い笑みを浮かべて、耳元で囁いた。

「だったら——殺せばいいだろう」

「……へ？」

クラデイルは眼を丸くさせる。

構わずに、彼は静かな声で囁いた。

「気に入らねえなら、ぶつ殺せばいい。簡単な話だぜ、兄弟」

「で、でも……」

戸惑うクラデイルだがそれもその筈。

ここでのプレイヤーキルは現実の死に直結する。殺したものなら、それは犯罪者。法で裁かれて、扉の奥で一生過ごさなければならぬ

かもしれない。

だが次の彼の言葉に、残された倫理は消え失せた。

それは甘く、魅惑的で、退廃的なもので、人を誘惑させるには充分過ぎるものだった。

「大丈夫だ。所詮、これはGAMEなんだぜ？」

「――！」

「もしかしたら、死なねえ可能性もある。仮に殺しても、誰がアンタが殺ったって分かるよ？」

そんなものログとして残る。

誰がいつ、どこで、どうやってキルしたのか。彼にはわかっていたが敢えて教えずに、クラデイルを惑わした。

そしてクラデイルは、まんまとそれに乗る。

「そ、そうだよな。バレないよな……！」

「ああ、バレない。俺もアンタに協力する」

「それは嬉しいけどよ。ガキがどこにいるのか――」

「俺に心当たりがある」

遮るように言う。

「『アインクラッドの恐怖』が怪しいと思うぜ」

「誰情報だそれ？」

「詳しくは言えないが、『鼠』って言えばわかんだろ？」

嘘だ。

彼が言う『鼠』。通称『鼠のアルゴ』と彼の繋がりはない。現に繋がっていたとしても、怪しい人物に情報を売るマネはしないだろう。つまりこれは当てずっぽ。

彼はクラデイルが言っていた『抜けたプレイヤー』が誰なのか、今

どこに居るのかわからない。しかし見当は付いている、それが『アイ
ンクラッドの恐怖』である。姿を消した同時期に現れた『アインク
ラッドの恐怖』。それが例の抜けたプレイヤーであることを確証を得
るために、クラデイルをけしかけた。

しかしクラデイルはそんな思惑に気付かない。

ここでクラデイルが、自分の行動を省みることが出来る人間であ
れば、運命は変わっていたのだが、運命は簡単に変わるものではない。
彼は目の前の軽装の男を信じ切っていた。

コイツだけは、自分の味方であると、クラデイルは信じ切ってい
た。軽装の男の巧みな話術に、ハマりきっていた。

クラデイルは親友を前にしているような穏やかな表情で。

「アンタだけは俺の味方だ。本当に良いやつだな—— P O H」

軽装の男—— P O Hは応じるように笑みを浮かべる。

そして心の中で、楽しそうに、それは楽しそうに、呟いた。

——イツツ・シヨウ・タイム

第7話 少年がいくら望んでも孤独にはなれず

2023年2月15日

PM12:10 第十七層 迷宮区

——それは流れ星のようであった。

一人の影が、迷宮区を疾走する。

何よりも疾く、誰よりも早く、その影は迷宮区を駆ける。勿論、迷宮区は圏外だ。このソードアート・オンラインにおいて、圏内はモンスターも湧かない安全地帯であるが、圏外はその限りではない。影が走る、その気配を敏感に感じ取りモンスターが湧き始める。

しかし、影はそれに構うことなく走り続ける。

脇に湧いたモンスターに眼もくれず、時に進行方向で湧いたものなら飛び越えて、転がりながらも目的地へと止まらずに駆ける。

その速度は異常だった。恐らく、影から見た景色は矢の如く過ぎ去って行っているであろう。全力疾走、且つ一心不乱。影は迅速かつ最短を目指して駆け走る。

影は少女であった。紫ローブを着た少女。

息を切らし、汗が頬を伝い、それでも休むことなく走る。

少女が目指す場所。それは第十七層の迷宮区的最上階、つまりはボスのいるフロアである。

そこには少女の大事な——この世で残されたたった一人の義兄が、今も戦っている。たった一人で、折れることなく、諦めずに戦っている。

その有り様は、自分の命を差し出している罪人のようでもある。

罪人が咎を受けるために、難題をこなしている。そういった危うさすら感じられる。

それが少女は許せなかった。許せないのは義兄ではない、真に許せないのは少女自身。

その罰は自分が負うものだ、と。君に降りかかる罪過ではない、と少女は心の中で叫ぶ。

このまま無理すれば家族が死ぬ。今まで、少女が後を追ってこないように、義兄は時に騙して、時に嘘をついて、単身ボス攻略に挑んでいた。

少女には兄がどうしてそんな行動を取るのか、未だに理解できない。だがそれはどこか、兄に守られているような、危ないことさせないように守っているかのような、そんな印象すら与えられた。

しかし少女はそれは違うと断じる。

義兄の家族を奪ったのは紛れもなく自分なのだ、そんな人間を守る筈がない。少なくともそれが少女の答えだった。

ならば、義兄が無理する理由はない。

彼の家族を奪ったのが自分であれば、義兄が無茶する必要はない。それにその事実を、まだ義兄に打ち明けてもいけない、謝つてもいけない。

——それは、ダメだよ。

——にーちゃんが死ぬのはダメだよ。

——まだボクは、何も償っていない……!!

故に、少女は走る。

許されなくても良い、責められるのなんて当たり前だ。それでも、例え許されなくても、もう二度と家族を失いたくない。だからこそ少女は走る。

だが——。

「——ハイ、ごめんね——」

「……ッ!?!」

鬼気迫る少女とは対象的に、どこか呑気な声で少女の行く手を遮る人影。

どこか肌を露出するような、胸を強調した紫色でまとめられた装

備。その背には両手剣があり、薄紫色の髪の毛に赤い瞳、豊満な胸には特徴となる2つのホクロがある。

彼女が誰なのか、なんて問うまでもない。

少女は眼深く頭に被っていた紫ローブを取り、その彼女の名を呼ぶ。

「ストレア……」

「やつほー、ユウキ。そんな急いでどこに行くの？」

片手を振るストレアに、少女——ユウキの叫びにも似た訴えが辺りを木霊する。

「お願い、そこをどいてー!」

「んー、って言うとう的地はフロアボスかな? ごめんね、あの人に近付かせないように言われているから……」

ストレアが言うあの人、つまりはユウキの義兄のことを言っているのだろうと安易に想像が出来た。

しかしユウキに驚く様子はない。むしろ納得するかのようになり、落ちて着いた調子で口を開いた。

「やっぱり、そうなんだ……」

ユウキは視線を地面に向け、顔を下に向けた。

ストレアが加わってから、妙なタイミングでユウキの義兄は単独行動するようになった。

そして帰ってくる頃には、フロアボスは撃破されて、上へと続く層が開通されていた。そして義兄が単独になり、必ずストレアはユウキと行動するようになる。違和感があり、疑問があり、そして確信へと至った。義兄はストレアに頼み、自分を彼の後を追えないようにしていたのだと。

どうしてそんなことを、ストレアに頼んでいたのか。

それはユウキにはわからない。恐らく、義兄も何か考えての行動なのだろう。しかしどんな考えがあっても、ユウキがそれに従う道理はない。義兄に無理をさせない為に、ユウキはこうして後を追おうとしているのだが。

ユウキは顔を上げた。

その眼に映るのはストレア。彼女の口元には笑みがあるものの、その眼はどこか悲しそうなモノを宿している。

「ストレア」

「ん？」

「どうして、悲しそうにしているの？」

「……………」

ストレアは答えない。その口元にはもはや笑みはない。ただただ悲痛に、今にも泣きそうな表情でユウキを見つめていた。

対するユウキは、首を横に振り。

「ううん、やっぱり答えなくても良いよ。ストレアは知ってるんでしょ？ このまま、あの人が——にーちゃんが無茶し続ければ、死んじゃうってことが」

「……………うん」

力なくストレアは頷く。

最近の彼はどこかおかしいものだった。

突然膝をつくこともあれば、ぼんやりとすることが増えた。その様子は数分前の事でさえ、遠い夢の話のようであるというかのようであった。

不眠不休。何も口にせず、休むこともせず、彼はずっとクエストやダンジョンに潜りレベル上げを行っている。

何度言っても改善されることはない。無理矢理、主街区に連れて行っても、夜中には抜け出して、また己を酷使し始める。

このままでは身体を壊す。確かにこの仮想世界の身体は仮初めのもの。何かを食べる必要もなければ、睡眠を貪る必要もないのかもしれない。だがそれでも、休息は必要だ。そうでなければ、人は壊れてしまう。人はそこまで強く作られていないのだから。

だが彼は頑なに休息を取ることをしない。

だったらせめて、こうしてフロアボスに挑むときくらいは楽にしてやりたい。ユウキはそう思っていた。

ユウキはそんな自身の心情を、ポツリポツリと語り始める。

「あの人は、実はボクのにーちゃんなんだ……」

「……そうなの？」

「うん。でも本人には言っていないから知らない、と思う……」

それだけ言うと、ユウキは小さな手をギュツと握りしめて。

「にーちゃんに無理してほしくない。だってこの世に残された、ボクの家族だから……」

「……………」

「でも、にーちゃんは止まらない。止まってくれない。ボクの声なんて、届かない……」

必死に説得した。あらゆる手段を用いて、彼に休んで欲しいと説得した。しかし彼の足は止まらない。前だけを見て、脇目も振らず邁進し続ける。

痛々しくもある姿に、ユウキはただ悲しかった。

自分にもっと力があれば、彼の隣で歩ける強さがあれば、もっと彼を楽に出来たかもしれない。だが悔しいことに、自分にはそこまでの力も強さもない。だがそれでも、彼よりも弱い自分でも、彼の背中を守るくらいは出来る筈だ、とユウキは考える。

ならば追いつかなければならない。

彼の背中を守るために、彼に追いつかなければならない。

ユウキの眼に迷いはない。

真剣な表情で、ストレアを見つめて。

「でも届かなくても良いんだ。にーちゃんがボクを何と想っていていようが、ボクを許さなくても良い。あの人の何もかもを奪ったボクだけど、そんなボクでもあの人の背中を守るくらいには役に立ってる筈だから」

「……………」

「ストレアの気持ちもわかるよ。にーちゃんの役に立ちたかったんでしょ？ だから自分の気持ちを無視してでも、ストレアも一緒に戦いたかったけど、にーちゃんの言うことを守ってきた。そうでしょ？」
「うん……………」

ストレアの気持ちもわかる。

彼女の気持ちを汲んだ上で、ユウキは首を横にやんわりと振る。明確に否定をしながら。

「でもそれは違うよ、間違ってる。このままだと、にーちゃんが死んじゃう。無駄して、絶対に死んじゃう。そしてボク達は必ず後悔することになる」

「死ぬ……………」

「そう。死んじゃったら、何も出来ない。笑い合うことも、怒られることも、触れることも出来ない。それじゃ遅いんだ」

だから、と言葉を区切り、ユウキは誰よりも強い視線で訴える。

「——そこを、どいて。お願いだから、ボクのため一人の家族を守らせてほしいんだ」

「……家族……」

家族という単語を初めて覚えた子供のように眩いて、ストレアはどこか悲しそうに微笑みを浮かべる。

「アタシには、ユウキの言う家族って何なのかわからないよ」

「……………」

「でもね、アタシもあの人には死んでほしくないし、無理してほしくないと思う」

それだけ言うと、ユウキの行く道を立ちふさがっていたストレアが背を向ける。

その視線の先には上へと続く道が、つまりはフロアボスへの道が続いていた。

「あーあ、言い付け破ったから、怒られるよね……」

「大丈夫だよ」

叱られることを想像したのか、ストレアは少し涙声になりながら言う。

対してユウキは対象的に元気に声をかけて、ストレアと肩を並べて。

「——一緒に、怒られよう！」

.....

PM12:35 第十七層 迷宮区最上階

石造りの壁が削れて、壁を支える柱が頼りなく揺れる――。

第十七層の迷宮区最上階。ボスが居るフロアの作りは、第一層のものと同じような作りだった。

壁には明かりを照らす松明があり、フロアの広さも100メートル程ある。まるつきり作りが同じ。違う点と言えば、ボスエネミーが違うことくらいだろう。

それは巨大な大蛇だった。

一つの胴体に7つの首。硬い赤色の皮膚に、口からは炎、氷、雷を吐き出して暴れ回る。周囲に湧いたモンスターなど気に求めずに、暴れまわる様子はさながら暴君といっても過言ではない。

見上げるほど巨大な体躯。とても一人で挑む規模ではないフロアボスに。

「ッ!!」

「!」

斬撃があり、絶叫が後に響き渡った。

それは正しく、壮絶と呼ぶに相応しい死闘。

数十人で挑む規模の大蛇に、たった一人で全身を鎧で武装したプレイヤー――ユーキが挑んでいた。

人間と7つの首を持つ化物。

誰がどう見ても、一人と一体の身体能力に圧倒的な差がある。だと言うのに、彼はたった一人で挑んでいた。その行為はあまりにも盲目、勇敢ではなく無謀に尽きる。

何せ彼が相對するのは、通常の刃なら通らない皮膚を持っており、

その首からは様々な攻撃方法がある怪物だ。

普通のプレイヤーなら一人で対峙したら諦める。いや、一人で対峙することさえ選択肢にいれないだろう。

だが元より、ユーキはとうの昔に、真つ当な攻略方法など、捨てていた――。

身の丈ほどある岩で出来た石斧剣一本で、真正面から神話に出てくるような化物と戦うことを選んでいた。

己を噛み付こうとする口を大きく開ける大蛇に、合わせるようにその口目掛けてユーキは剣を思いつきり薙ぐ。

それで1つの首は怯むが、2つ目3つ目の首が襲いかかるも、彼は何とか直感だけを頼りに、地面に転がり難を逃れる。

そして直ぐに態勢を立て直すと、近場の首目掛けて、石斧剣を思いつきり振り下ろした。

本来、数センチと通さない鱗。

普通ならば、剣は弾かれて、HPゲージすら削れずに、攻撃したプレイヤーを絶望の淵に叩き落とすことだろう。

しかし生憎、化物を単騎で相手にしている彼は――普通ではなかった。

彼に身に余る強い怒りを込められた一撃は容赦なく、大蛇の首を跳ね飛ばす。

「ツツツ
!!!????」

瞬間、絶叫が世界を揺らす。

空間が揺れる、石造りの壁が揺れる、柱が頼りなく揺れる。

ボンッ！ と、大蛇の首が地面に落ちたのを確認し、ユーキは一度距離を後方へ大きく取ると一呼吸置いた。

「うるせえな……」

肩で息をしながら、石斧剣を地面に突き立てて、改めて怪物の行動

を分析し始めた。

——首を飛ばそうが、また生えてくるんだろ。

——現に、今の入れて八度飛ばした。

——だが怯む様子はない。

——となると、野郎の弱点は首じゃねえ。

——首が密集する辺り、胴体が怪しいか？

チツ、と面倒くさそうに意識を自身の内側から、眼の前の大蛇へと向けた。

既に大蛇は斬られた首を再生し、また新しい首が胴体から生えていた。その数8本。

思わずユーキはうんざりするような口調で。

「しつこい野郎だ。何度も何度も鬱陶しい事の上——」

そこまで言うと、彼は言葉を止めた。

視線を八俣の大蛇から、切り落とした首へ。その首は——まだ残っていた。

——待て。

——ンでアレが残ってる？

——まだ消えない、つてことは……。

まだ生きている。

そう結論付けると同時に、切り落とした大蛇の口が空いて、ユーキ目掛けて雷が走る。

バリバリバリ！ と、まるで雷が落ちたような轟音が鳴り響くが。

「クソツ……！」

咄嗟の判断で、ユーキは避けるのではなく、突き立てていた石斧剣の影に隠れて、雷を防ぐ。

忘れていた訳ではない。

彼の敵は落とした首だけではない。もっと巨大な怪物も、彼の敵であることを彼は忘れたわけではない。

しかし意識を怪物に戻した頃には、もう遅かった。

神経を全て、相対する怪物に集中し直した時間は、一秒にも満たない。だがそれでも、遅すぎる。

紙一重で防ぎ、皮一枚で躲せた筈の大蛇の尾の一撃が、ユーキの腹部へと叩き込まれる。それは異常な衝撃となり、凄まじい力の流れがユーキの身体へと殺到する。

「ガッ——!?!」

それはまるでダンプカーが衝突してきたかのよう。

交通事故にでも遭ったように数十メートル跳ね飛ばされて、石造りの壁に激突してようやく止まる。

HPゲージが削られて、レッドゾーンになるのを視界の端に収める。

握っていた石斧剣を杖代わりにするようになり、立ち上がりながら。

——まだ、生きているのか……。

獲物を罅るように、ゆつくりとした動作で、大蛇が近付いてくる。

正に絶体絶命。フロアと迷宮区を隔てる扉は開けられている。もしかしたら、全力疾走をすれば逃げ切るかもしれない。それでも——

「」

彼は背を向けなかった。

石斧剣を両手で握りしめて、己の最も信頼する武器を構える。

——バカなヤツだ。

——ここで逃げることも出来ただろうに。

どうしてこんなになってまで戦い続けるのか、彼には——思い出せなかった。

力を使い、今までは時間が経てば思い出すことも出来た。だがそれも第十層を攻略してから、思い出すことも出来なくなっていた。

脳裏に蘇るのはとある光景。

見知らぬ少年プレイヤーと言い争いをしている。視界の端には、困ったように笑うこれまた見知らぬ女性と、呆れた様子で仲裁に入るやはり見知らぬ少女プレイヤー。

何よりも尊いものだった筈の光景であり——何よりも忘れてはならないモノだった筈。だが、今となっては誰なのか思い出すことが出来ない。今もなお、この光景に出てくる登場人物達は、自分を追い掛けているのだろう。

何かを欠けて、何かを失ってしまった。
だがそれでも。

——立ち止まることは、出来ない。

——走り続けなければならぬ。

それはユーキの心が訴えていた。
ここで立ち止まることは許さない、と。
そんなこと許されるはずがない、と。

——オレは何か欠けたんだろう。

——別に後悔はねえ。

——オレが選んだオレの道だ。

——オレはそれを最速で走っているだけに過ぎない。

立ち止まるわけにはいかない。

彼は目の前で対峙する明確な死を前にして、諦めることなく忌々しげに口を開く。

「そこをどけよ——オレの道だ」

「——ッ!!」

舐められた、と言うかのように大蛇の8つの首が一斉に咆哮を上げる。

そして先程と同じように、尾による一雉が炸裂するも。

「ストレア！」

「任せて！」

2つの影が、ユーキと大蛇の間に躍り出た。

それからすぐに、刃がぶつかりあったような音が鳴り響く。

それはユーキの石斧剣と大蛇の尾がかち合った音ではない。彼ではなく彼女達、眼深くフードを被った紫ローブの娘の剣とストレアの剣が大蛇の尾にかち合った音だった。

「オマエら……」

思わず、ユーキは兜の奥で眼を丸くさせる。

しかしすぐに、大きく口を開けると怒声を木霊させた。

「何してやがる！ さっさと逃げろ!!」

「逃げないよ！」

紫ローブの娘が振り向かず拒否すると、ユーキは細い肩を握り無理矢理振り向かせる。

「逃げろって言ってんだ！」

「逃げないって言ってるでしょー！」

「この——」

「——逃げないもん！」

一際強い声に、僅かにユーキが気圧される。

紫ローブの娘は眼深くローブを纏っており、表情は読み取ることが出来ない。それでも、眼は真っ直ぐにユーキを見つめて。

「ボクも君も、死んじゃダメだよ。だって、ボク達があの人二人の、生きた証何だから……」

「オマエ、まさか……」

ユーキの言葉がどこか、確信へと変わる。

確証はないものから、確信するものへと、変わり始めた。

そんなユーキの感情の機微に気付かないまま、紫ローブの娘はユーキを真っ直ぐに見つめて。

「もうボクは嫌なんだ。ボクのせいで、ボクの知らないところで、家族が死んでいるなんてもう嫌だ！」

「……………」

「だから、君の背中ボクが守るよ。何言われても、嫌われても、ボクは君に付いて行く。ボクは——君に生きていてもらいたいから」

結局のところ、茅場優希は独りになることが出来なかった。

誰よりも先に進んだところで、彼女のように誰かが彼の後を追ってくる。彼は独りにはなれない。向いていないのだ。それほどまでに、彼は他人に甘く、自分に厳しすぎた——。

——本当にイラつく。

——殺してやりたいぐらいだ。

苛立ちを覚えるのは自分自身に対して。

独りで走ろうが、こうして誰かを巻き込んでいる。誰にも迷惑をかける筈だったのに、結局誰かに迷惑がかかっている。

それに気付かずに走り続けた愚かな自分に苛立ちを覚える。

己に価値はない。

常日頃、自己に評価を下していた。

だがここに来て、生きていて欲しいと。自分より小さい少女は、自分よりも強い人間となり、そう願っていた。

——違和感があった。

——妙だと思った。

——こいつは、オレの……。

ここで問うつもりはない。

今は、目の前の八俣の大蛇をどうにかするのが最優先である。

ストレアが口を開く。

視線を大蛇に、意識を二人の会話に集中させていたようである。

「話は終わった?」

「終わってねえ。後でオマエ、しばくからな」

「えー、どうして!?!」

不満そうに声を上げるストレアを無視して、ユーキは二人の前に立つ。

それから二人に背を向けたまま、彼は極めて小さい声で口を開いた。

「——家族を二度も見殺しにするのは、もうごめんだ」

「え……?」

何を言ったのか聞き取れなかった。
紫のローブの娘が何を言ったのか問いかける前に、ユーキは口を開く。

「行くぞ。今だけ、オレの背中はおまエらに預ける」

だから、と言葉を区切ると駆け出す。

同時に――。

「――死ぬな」

「任せて――！」

対してストレアが笑顔で応じる。

「わかったよ――！」

にーちゃん、と心の中で呟く。

そうして、三人は、大蛇に刃を向ける――。

第8話　そして少年は遂に立ち止まる

2023年2月15日

PM13:45　第十八層　主街区『ユーカリ』

ユーキ達が第十七層を突破して、一時間ほど経過した。

第十八層の作りはどこか、第一層によく似ており、その主街区である『ユーカリ』もはじまりの街にそっくりな作りとなっていた。

教会があり、噴水広場があり、露天エリアがあり、商業エリアがある。

ただ違うと言えば、黒鉄宮の有無くらいと言えるだろう。

その主街区は今となつては、プレイヤーで溢れかえっている。

第十七層を攻略し、転移門が有効化され下層にいたプレイヤー達が流れ込んできたからだ。

いつもならば、ユーキはいちいち転移門を有効化になどしない。

何故ならば有効化しなくても、フロアボスが撃破された二時間後には自動的に有効化されて、下層の転移門と繋がる仕組みとなっている。

故に、いちいち転移門を繋げる必要もないし、そこまでする義理もない。という理由で、ユーキは今まで攻略してから直ぐに、転移門を有効化することはなかった。

しかし、今。

彼はこうして、攻略して直ぐに転移門を有効化して、他のプレイヤーを第十八層に招き入れた事実。

どういった心境の変化があったのか、他人には理解出来ない。何があつたのかは、彼だけが知っているのだから。

当の本人——ユーキは、第十八層の主街区『ユーカリ』を一望できる丘で一人、街を見下ろしていた。

頭部を覆う兜『スケープ・ゴート』は装備されていない。素顔を露出させて、何をするでもなくただ見下ろしていた。

生暖かい風が頬を風ぎ、彼の綺麗なブロンドの髪が靡く。蒼い瞳は

どこか虚ろなものとなり、無感情に街を見つめていた。

「どうしたの、こんな所で？」

元気ないね、とどこかユーキの背後で呑気に声をかける女性。プレイヤールが一人。

彼は振り向かない。退屈そうな口調で、その声に応じた。

「……見てわかんねえのか？ 一人になるために、こんな所にいるんだが」

「そうなの？ ごめんねー、言ってくれないからわからなかったよ」

謝罪するも、悪びれる様子もない。

彼女——ストレアは明るい口調で続けた。

「ねえねえ、何で一人になりたいの？」

「……質問するだけの人生かよオマエ。毎度毎度、質問だけしやがって。ちよつとはその足りない頭で考えてみる」

「考えてもわからないんだもん。だったら、最初から聞いたほうが早くない？」

暗に、空気を読んで消える。そう語ったつもりが、まったく伝わっていない。いいや伝わっているのだが、それを踏まえてここにいるのか。

どちらとも取れるストレアの振る舞いに、チツ、と舌打ちをするとユーキはつまらそうな口調で答える。

「オマエに話した所で、何にもならねえよ」

「そうかなー？ 話してみないとわからないと思うよ。ほら、アタシってメンタルヘルスカウンセリングプログラムだし」

「……何を言ってやがる。カウンセラーってキャラじゃねえだろ」

「いいからいいから、話してみてもよ。解決出来ないかもしれないけど、話なら聴くことはアタシにだって出来るし」

本来、茅場優希という人間は、本心を打ち明ける人間ではない。

その言葉には常に自身すら騙している欺瞞と虚偽に満ちており、憎まれ口をすぐに吐き出す人間だ。他人に対して笑顔という仮面を被り、気心の知れた人間に対しても本心を語ることは少ない。

ならば、ここで茅場優希の取る行動は、適当な言葉を並べてストレアを騙すことにある。

筈だった――。

「……今までオレは、前だけを見て進んできた」

だがここに来て、平常とは違う行動に出る。

ポツリポツリ、と。彼は自分の本心を零し始めた。

「それが正しいと思った、それが最善だと思った。オレは誰よりも、攻略することに向いている、そう思っていた。何せオレには家族がいない、現実世界にも待っている人間はいない。家族も、友人も、恋人もオレにはいない」

「うん……」

「誰よりも弱い人間であるオレは、誰よりも前に進んで敵を斬らないとならない。そうするべきだと理解していた」

そう感じる理由は、今となってはわからない。

ただ言えることは、己はここで止まるべき人間ではないし、許されるべき人間でもない。そう彼の心が叫ぶように訴えていた。

戦う理由はとうの昔に抜け落ちており、懐かしくも汚し難い光景に移る人物達が誰なのかも思い出せない。

瞼を閉じる。

瞼の裏に映るのはとある光景。

見知らぬ黒髪の少年プレイヤーと言い争いをしている。

呆れた様子で仲裁に入るやはり見知らぬ桃色の髪の女性。

そして、視界の端には、困ったように笑うこれまた見知らぬ――

――栗色の女性の姿。

それが誰なのか。

それがどこで、何もかも取りこぼし抜け落ちている。何も、思い出せない。

しかしその光景は尊いものであり、誰にも穢してはならない。そう思わせるには、充分な光景だった。

「所詮、適材適所。誰よりも向いているから、オレは進み続けてきた」

だが、と言葉を区切り瞼を開ける。

空を見上げる蒼い瞳には、これでもかというくらい綺麗な青空が広がっていた。

「ここに来て、オレに死んでほしくないとか言いやがる馬鹿野郎が現れた」

「……………」

「本当に馬鹿なヤツ。オレなんぞの為に、必死こいて後を追ってきやがる……………」

何度、彼は罵声を浴びせたかわからない。

付いてくるな、と。何度怒鳴ったか覚えていない。

それでも少女は――紫ローブの娘は何度言っても、彼の後を追隨することを止めなかった。健気とも捉えることも出来る行動、その点で言えば少女は自分よりも頑固である、と心の中でユーキは自嘲してみせた。

「アイツだけじゃない、馬鹿はまだ他にもいた。多分「アイツら」も

何者かは思い出せない連中。

記憶にはないが、彼らも自分のことを追い掛けている。そしてその理由は、自分が死んでほしくないから。そんな理由で、彼らはあとを追いかけている。そんな確証がある。

「誰も巻き込まない筈だった、誰にも迷惑をかけない筈だった。なのに、こうしてオレは巻き込まれている……」

「……………」

「オレが死んだ所で誰も気にも留めない。だがそれは違った。居たんだ、オレが死んだら悲しんだり怒ったりする連中が。オレはそれに気付けなかった、気付くことを放棄していた。認識しちまったら、オレは前に進めなくなる……」

「……………」

「所詮、攻略も、進むことも、オレの独りよがりだった。勝手に決断して、勝手に託して、勝手に進んで、勝手に巻き込んだ。オマエらとアイツらを、巻き込んだ」

拳を握り、奥歯を噛みしめ、肩を揺らす。

その怒りの矛先は自分自身。自分勝手に振る舞っていた情けない自分自身に向けられていた。

「このまま進むのは簡単だ。だがオレが進めば、またオマエらを巻き込む」

「……………そう、だね」

「オレにはそれが我慢出来ないらしい。攻略しなけりや、アイツらが追いかけてくる。かと言って、進んだままならオマエらが傷つく。正直な話、オレにはどうすればいいのかわからない」

それが、茅場優希の本心だった。

進んでも、立ち止まっても、彼自身ではない他人に火の粉が降り注

ぐ。

もはやどこに進めば良いのか、優希にはわからない。

だからこそ、彼は主街区が見渡せるこの丘で、立ちすくんだのだろう。

見晴らしの良い場所で、目的地を探すように。その姿はまるで、何者かとはぐれてしまった迷子のようにでもある。

「アナタは……」

ここで、ストレアは口を開いた。

静かに聞いていた彼女は、静かな声色で口を開く。

「アナタは、独りにはなれない」

「……………」

「だって、アナタは他人に甘すぎるし、自分に厳しすぎるもん。そんな人が独りになれる訳がないよ」

彼女は今までの彼の行動を思い出していた。

茅場晶彦を斬ると言う明確な目標があるのにも関わらず、幼馴染を一人には出来ないと共に行動し、戦えなくなつたプレイヤーをはじめりの街まで護衛し、一人で折れかけていたはじまりの英雄をパーティーに誘う。

それから、彼は他人に甘い行動を取っていた。近隣のフィールドに他のプレイヤーが狩りに行けなくなるという理由で、はじまりの英雄とモンスターキラー討伐に趣き、討伐後の裏で自分ではなくはじまりの英雄の名を広めるように尽力を尽くす。結果、今まで白い目で見られていたベータテスターへの風当たりが緩和され、むしろ尊敬の眼差しを向けられるようになった。

彼がパーティーから離れても、甘いのは変わらない。プレイヤーキラーに襲われているプレイヤーを助けて、眼に映る挫けそうなプレイヤー達に手を差し伸ばしてきた。当然、全員が感謝してきたわけでは

ない。時に恐れられて、時に何でもつと早く助けに来てくれないと理不尽な怒りをぶつけられることもあった。だが彼は、他人に手を差し伸ばし続けた。

そんな人間が、独りになれる訳がない。

恐ろしく他人に甘く、自分に対して厳しすぎる人間が、独りになれる訳がない。人の縁が、そんな簡単に切れるわけがないのだ。

それをストレアは理解していた。今までずっと、茅場優希という人間をモニタリングしていた彼女だからこそ、理解出来た。

「もう、休もうよ。このまま進み続けたら、いつか必ず壊れる。アナタの使っている力は、そういうモノなんだよ?」

「オレが使う力、オマエはわかるのか」

ユーキの問いに、ストレアは頷いて。

「カーディナルのデータベースで見たことがある。意思の力で、シテムを超越するモノ。本来あり得ない現象を引き起こす力。アタシはそれを使える人を知っている」

「誰だ?」

「はじまりの英雄とアナタ。モンスターキラーを倒した時、はじまりの英雄が使ったスキルがそれに値するモノだよ」

彼は思い出す。

とは言っても、その記憶は微かなモノだ。モンスターキラーを討伐したのは覚えているが、それが誰と共に立ち向かったのか覚えていない。だが確かに、モンスターキラーをトドメを刺すとき、妙な力を使っていたことを覚えている。

片手剣が不自然に光、四回の連撃である筈のソードスキル『バーチカル・スクエア』が同時に四回叩き込まれていた。

ストレアは視線をユーキの背から、地面へと向けて顔を俯かせて、どこか口にするのが戸惑うようにして。

「本来『力』を使っても、アバターに何も起こらない、と思う。だけど、アナタの力は意思が強すぎるの」

「……………」

「自分すら壊すほどの強すぎる意思が、アナタ自身を壊す。だからそうなる前に——！」

休んで欲しい。

そう言う前に、ユーキは遮るように口を開く。

「それよりも、アイツはどこに行った？」

彼が言うアイツとは誰なのか。

そんなもの問うまでもない。ユーキを兄と慕う彼女に他ならない。

彼女がユーキの後を追いかけるのは理解できる。

だがその逆は？ つまりユーキが彼女を傍に置いていた意味が、ストレアに理解出来なかった。

「……………一つ教えてほしいな」

「……………なんだ」

「どうして、あの娘を傍に居させたの？」

考えてみれば見るほど奇妙なものだった。

ストレアには『ユウキ』というプレイヤーネームを明かしているにも関わらず、ユーキには何一つ明かしていない。

ユーキからしてみたら彼女は、自分に付いて回る目的も、名前も、自分の素顔すら公開していない。なのに、何故ユーキは怪しむこともせずに傍に置いていたのか。ストレアにはわからなかった。

だがユーキは特別なことを言うわけもなく。

「決まってるだろ——」

当たり前のことを口にするような口調で。

「——アイツが、オレの妹だからだ」

「気付い、てたの……？」

その背中を見つめて、ストレアは思わず眼を丸くさせる。
対するユーキは淡々とした口調で。

「二層からアイツは付いて来た。オレも最初は流石に怪しんだ。素顔すら見せねえヤツだ、何かしら疑うに決まってるだろ」

「疑うって……？」

「オレを罠に嵌めようとしてんのか、はたまたオレを知る人間が恨みを晴らそうとしてんのか、それとも——茅場のクソツタレの差し金か」

当時の状況を振り返り、本当に怪しいヤツだった。

そんな感想を心の中で漏らして、ユーキは続ける。

「確信に変わったのはさっきだ。十七層のフロアボスと戦っていたときに言っていたアイツの言葉に、オレは漸くわかった。父さんの言っていた妹がコイツなんだ、って気付いた」

「そうなんだ……」

「ああ、そうだ。しかし本当に、参った。まさかここで、家族に会うとは思っても見なかった……」

帰りを待っている人間が居る筈がない。

彼はそう思い込んでいたのに、ここに来て妹が現れ、しかもその妹から死んでほしくないと面と向かって言われてしまった。

だからこそ、彼の心が迷い始めてしまった。

進めば残されたたった一人の妹が悲しむ、しかし進まなければなら

ないと心が訴える。どうすればいいのか、彼は迷ってしまった。

あの分だと、彼女も自分が兄だということを知っている。

知っているからこそ、必死に追ってくるし、死なせたくないと言っただろう。ユーキは静かにそう受け止めて。

「それよりも、アイツはどこにいる？」

「えーっと……」

ストレアはメインメニュー・ウィンドウを開き、フレンドリストの『ユウキ』の部分をタッチする。

そして直ぐに、マップにどこにいるか表示されて、ストレアは読み上げた。

「第十八層の迷宮区入り口だよ」

PM14:05 第十八層 迷宮区入り口

「……………」

紫ローブの娘——ユウキは物陰に隠れて、耳を澄ましていた。

意識は三人の男性のプレイヤーに向けられている。

一人は白銀のフルプレート、腰には両手剣が装備されている。

もう一人は、黒いマスクで顔を覆っている男性。

最後の一人は、紅眼で紅髪の髑髏を模したマスクを着けている。

何やらチグハグのパーティーで、会話もどこか自然のものではない。組んで日が浅いことが明白な、どこか意思の疎通が完璧に出来ないものである。

そして何よりも注目すべき点はそこではなかった。それはカー

ソルの色にある。

白銀の鎧の男のカーソルはグリーン。普通のプレイヤーで何の問題もない。ただし、他の二名はどうだろうか。それはグリーンではなく——オレンジ。それは何かしらの犯罪を行った決定的な証拠である。

ユウキが彼らを見かけたのは偶然だった。

転移門ではなく、第十七層から続く階段から彼ら登ってくるのを見かけた。何よりも、オレンジの二人は見覚えがある。それはかつて、ユウキの仲間を襲った二人でもある。一人は何かユウキが守ったが、オレンジの二人には逃げられてしまった。

彼らが他のプレイヤーに危害を加えるのは眼に見えている。だからユウキは物陰に隠れて、彼らを監視していた。

「よし、段取りを確認する」

カーソルがグリーンの男が、これみよがしに大きな声を上げて続けた。

「野郎が来たら、俺を襲っているフリをする。そしてお前らに気を取られている隙に、俺が後ろからブスリと殺る」

「あークラディールさん、ちよつといいツスカねー？」

「何だジョニー？」

クラディールにジョニーと呼ばれた黒マスクの男性プレイヤーはヘラヘラ笑いながら問う。

「クラディールさんの言った通り来るのかなーって。」

「当たり前だろ、野郎は攻略の鬼だ。絶対にここを通る！」

「そうツスカねー……？」

あまりの必死な言動に、ジョニーはオーバリアクション気味に肩

を疎めた。

実のところ、彼も同じオレンジカーソルの紅眼の男も、乗り気ではなかった。

彼らがクラデイルに協力するのは仲間だからと言う訳ではない。彼らにクラデイルに協力してやれ、と指示されたからに過ぎない。だが指示されたのはそれだけではない。もっと別な理由もあるのだが、当の本人であるクラデイル自身は知らされていない内容。

だからこそ、オレンジ二人からしてみたら、クラデイルは滑稽に映った。まるで道化のようで、おかしいことに何一つ気付いていない。

我慢できなかったのか、紅眼の男性は小馬鹿にしたように笑みをこぼした。

「ザザ、テメエ何を笑っている……?」

ギロリ、とクラデイルに睨まれても紅眼の男——ザザは調子を崩さない。

淡々とした口調で、問いを投げた。

「アンタの、言った方法で、アイツがアンタを、助けると、思っているのか?」

「絶対に助けるに決まっている。あのクソなら————アインクラツドの恐怖なら必ずな」

黙って聞いていたユウキは息を呑んだ。

アインクラツドの恐怖、つまりそれは彼女の義兄であるユウキに他ならない。そして会話の内容から、彼ら三人はどういう理由かは知らないが、ユウキを狙っておりこの場に集結していることがわかった。

バクバク、とユウキの胸の鼓動が忙しなく動き、頬から冷や汗が流れる。ありもしない心臓のあたりをローブの上から握りしめて、震える手を落ち着かせる。

そんなユウキの存在と対象的に、ジョニーが呑気に問いを投げた。

「でも本当に助けるのかなー?」

「絶対に助けるって言ってんだろ。あの野郎は健気にも、POHに騙された雑魚共が襲ってた奴らを助けて回っていたって話じゃねえか」

「誰情報ツスか?」

「POHに決まってるんだろ!!」

ジョニーは憐れむような視線を送り、ザザは小馬鹿にするように小さく笑う。

騙された雑魚共、とクラデイルは評していたが、全てを知っているザザから見たら哀れにも程があり、滑稽にも程があった。

自分すら利用されていることに気付いていないピエロ。ザザから見たクラデイルは完璧にそれである。何よりも面白いのは、クラデイルのPOHという男に対する信頼であった。クラデイルと言う男はPOHを本気で信頼しており、アイツだけは自分を裏切らないと思っ込んでいた。

何も知らない。

クラデイルが信頼する男がどれほどの狡猾な人間なのか、クラデイルは何一つ理解していない。

だからこそ、ザザは笑みを浮かべる。

滑稽なピエロに嘲笑を向ける。

「ザザ、何が言いたい……?」

「別に、何でも。ただ——」

ザザの紅い目がとある場所に向けられる。

そこには身を潜ませて、聞き耳を立てていたユウキが居た。

「そこに、ネズミが紛れている」

「えー、マジかよー!」

ジヨニーが大げさに驚き、ザザはそれに対して頷いて。

「オレの索敵に、引つかかっている」

「あーあ、コレはマズイツスよクラディールさん。全部聴かれたんじゃないね？」

「だ、誰だ！」

呑気に構えるオレンジの二人に対して、クラディールはどこか慌てたように叫ぶような大声を上げた。そして情けないことに、彼は自分から前に出ずに、オレンジの二人の背中へと移動する。

ユウキは静かに、物陰から姿を表した。

右手には片手剣が既に握られており、いつでも動けるように抜剣している。

盗み聞きしていたのが少女であるとかかるとクラディールはホツと胸をなでおろすも、対称的にオレンジの二人は身構える。

紫ローブの娘が誰なのか、理解しているように油断なく警戒態勢に入った。

そのままの態勢で、ジヨニーは短剣を構えて。

「こんな所で会えるとは思ってなかった」

「あの時、邪魔をした借り、ここで返してやる」

ザザも自身の獲物であるエストックを構える。

しかしユウキの意識は二人に向いていなかった。彼女は二人ではなく、後ろで安心しているクラディールに向けて。

「――関係ないよ」

静かな声で、淡々とした口調で。

「君が、にーちゃんを傷つけることは絶対にならない」

それだけ言うと、ユウキは剣先をクラデイルに突きつける。
そして告げる。絶対の意思を持って、彼女は事実だけ告げた。

「——にーちゃんの背中は、ボクが守る!!」

第9話 少年は追い詰められ

2023年2月15日

PM14:35 第十八層 迷宮区入り口

——結論だけ言うのであれば、彼女に勝ち目などなかった。

紫ローブを目深く羽織る少女——ユウキは何とか戦況を維持していた。

襲いかかる二人のオレンジプレイヤーの短剣とエストックを、紙一重で自身の片手剣で捌く。時に防ぎ、時に受け流し、時に躲して、ユウキはなんとか防いでいた。

黒マスクの短剣使い——ジョニーは当たらない自身の攻撃に苛立ちを隠しきれず、剣が乱雑になり始める。

——ザザも同様に、憤りが攻撃になりどこか荒々しくなる。

それでも、ユウキにはかすりもなかった。常に『アインクラッドの恐怖』の後ろで、レベル上げをしていた彼女だ。二人とはレベルの差がありすぎるし、何よりもプレイヤースキルでも雲泥の差がある。後の先。ジョニーとザザの繰り出す凶刃に直ぐに反応して、防いでしまう。1ドットもHPゲージを削ることを許さない鉄壁の剣。その反応速度は、化物染みている。

他のプレイヤーから飛び抜けているレベル、卓越されたプレイヤースキル、そして天性の反応速度。加えて、ジョニーもザザも冷静ではない精神状態。どう考えても、ユウキに負ける要素はなかった。

「——ッ！」

何合目かの剣と剣の衝突。火花が散り、剣戟が鳴り響く。

それからすぐに、ユウキは後方へと跳び、大きくザザとジョニーから距離を開ける。

肩で息をしながら、頬からは汗が流れる。だがそれに意識を向けずに、ただひたすらザザとジョニーへと向けられていた。

ユウキに負ける要素などない。

身体能力、技術、精神で二人を圧倒しているのだ。負ける要素などないだろう。だが同時に、彼女が勝つ要素も皆無だった。

ユウキの命の残量であるHPゲージは削られていない。ならば彼らのHPゲージはどうだろうか？

「余裕かましやがって……！」

「……………」

攻撃が全く当たらず、尽く防ぐユウキに対して、ジョニーはガリツと奥歯を噛みしめる。ザザも一見冷静に見えるが、ユウキに向けられたエストツクの剣先が僅かに震えており、怒りに身を震わせていることがわかった。

彼らに外傷はない。むしろユウキよりも疲労が少ないようにも見える。

そうだ。ザザとジョニーのHPゲージは——削られていない。勿論、防ぐので精一杯というわけでもなかった。

対人に特化しているからと言って、彼らの剣はどこか詰めが甘く、反撃する隙はいくつもあった。それもその筈だ、彼らは安全圏からプレイヤーキルを行う。その作業とも呼べるモノに、極限の命の経験が不足しており、一撃の重みが彼らからは全く感じられない。そこが彼らとユウキとの決定的な差であり、娯楽でプレイヤーキルしているうちは埋めることの出来ない差とも言える。

しかし、それでもユウキに勝ち目などなかった。

根本的に心構えが違う。

彼らはプレイヤーを傷つけることに何の躊躇いもないが、ユウキはそうではない。彼女が相手をしてきたのはエネミーモンスター。倒した所で、何の害はないプログラムに過ぎない。だが彼女が今相手を

しているのはプレイヤーであり、HPゲージを削りきってしまえばこの世界から消えて、現実世界での死を意味している。

娯楽感覚でプレイヤーキルしてきた彼ら、そして命の重みを知るからこそ反撃できないユウキ。両者の埋めることの出来ない倫理観の差異。それが原因となり、ユウキの剣は二人に届くことはなかった。だからこそ、ユウキに勝ち目がないのだ。

彼らの剣が当たらないのだから敗北することはない。けれど攻撃をしないのだから勝利することもない。

だがユウキはそれもよかった。

彼女の目的は勝利ではないのだから。

——ボクがこうしていることで、にーちゃんが危ない目に遭うことはない。

——だったら、簡単だよ。

口元に笑みを浮かべる。

簡単な話だ、と自分を鼓舞するように心の中で唱え続けて、剣先をオレンジプレイヤーに向ける。

——何十分も、何時間も、何日でも。

——何ヶ月でもいい、この人達を釘付けにする。

——そうすれば、にーちゃんを守る事が出来る………！

彼女の目的。それは、彼らをここで足止めすることにある。

彼らとクラディールという男の目的は、アインクラッドの恐怖の排除。つまりユウキのキルをするために、彼らは行動している。

ならば、ユウキが剣を取るには充分。いいや、充分過ぎる。

今まで、たった一人で無茶ばかりしてきた兄の邪魔などさせる訳にはいかない。こんな連中への餌食になどさせる訳にはいかない——

「お前、何笑ってんの……？」

ユウキの笑みが余裕の表れであると捉えたのか、ジョニーは口元を歪めて悔しそうに言葉を漏らす。

そんな彼の心情を読み取ったのか、ユウキは笑みを深めて小馬鹿にしたような調子で答える。

「いやー、大したことないな、って思ってたさ」

「なんだと……？」

「だってそうじゃない？ 二人がかりで、ボクみたいな子供に敵わないんだよ？」

わざとらしく、ユウキはクスクスと笑みを浮かべる。

ユウキ本人、大根役者であると自覚している。だがそれでも、オレんジ二人を挑発するには充分過ぎた。

ジョニーはあまりの屈辱に肩を震わせて、ザザは苦虫を噛み殺したように口元を歪めて。

「舐め、やがって……！」

「……だったらもつと必死になってほしいな。そんなんじや、一生ボクを倒せないよ？」

二人の意識はユウキに向けられた。

数秒経たずに、もう一度二人は距離を詰めて、ユウキへとその凶刃を振るうことだろう。冷静ではない剣を捌くのは簡単だ、ユウキにとつてさして問題ではない。

だがしかし——三人目はどうだろうか？

「あーあー！ うるせえんだよガキが!!」

「——え……？」

衝撃。

腹部の辺りで、ズドンと衝撃がユウキを貫く。

視線を落とすと白銀の刃が腹部から生えており、後ろを見れば下卑た笑みを浮かべているクラデイルが居た。

ユウキの意識外からの両手剣による刺突。

刺されたと認識する頃には遅い。HPゲージは半分以上削られて、仰向けに倒れたユウキの頭の上で黄色の光が回転する。そのエフェクトの意味は一時行動不能を知らせる『スタン』を意味していた。

と言っても、さほど麻痺や盲目といった強力なバッドステータスよりはかは恐ろしくなく、効果時間も十秒程度。しかし、対人戦となると話は別だ。

彼女が動けなくなるとわかるや否や、クラデイルは得意気にユウキの頭を踏み付け、自分の戦果を勝ち誇るようにして。

「おいおい、こんな雑魚に何をやってんだあ？ お前らも大したことはないな」

「チツ、後ろから刺して、よく言う……」

忌々しげに吐き捨てるように言うザザに対して、クラデイルは気にする様子はない。

むしろ堂々と誇示するように口を開いた。

「事実だろ。お前らが手こずって、俺だけが仕留めた。そんなんでPのHの右腕と左腕なんて出来るのかよ？ いっその事、俺に変わった方がいいんじゃないか？」

「あー、それは別にいいけどさ」

利用されていることにも気付かない道化の発言だ。

いちいち本気で捉えることもない戯言に、ジョニーは気にすることなく、クラデイルの頭上を指差して。

「それよりもいいの？ クラディールさん、オレンジになってるけど……」

カーロルの色がグリーンからオレンジへ。

それは明確な犯罪者の色別。他のプレイヤーへの傷害により、クラディールはオレンジプレイヤーへと堕ちた。

これではクラディールの計画していた、オレンジ二人に襲われているフリからの、後ろからアインクラッドの恐怖を殺す。という計画は破綻したことになる。だがクラディールに動揺する様子はない。むしろ下卑た笑みを深めて。

「演技とか面倒くせえよ。こうしてお前らが相手をして、俺が後ろからアインクラッドの恐怖を刺す。これでいいだろ」

「うわぁー、クラディールさん行き当たりばったりツスねー」

小馬鹿にしたように言うジョニーに気付くことなく、クラディールは笑みを深める。

これからのことを考えているのだろう。アインクラッドの恐怖を殺して、その事実を想い人に突きつけて、悲しみ心の隙間に自分が入り込み、想い人を手に入れる。そんなシチュエーションを妄想し、それが現実のものになると本気で思っているのだろう。

しかしそれが現実になることはない、ユウキが引き戻す。

「ハハッ……」

「……なに笑ってる？」

足元から聞こえてくる嘲笑とも取れるユウキの笑みに、クラディール不快感を露わに表情を歪めて問いかけた。

スタン効果はまだ続いている。半分以上HPゲージも削られており、もう一度刺されれば殺されることだろう。それでもユウキは恐怖することなく、笑みを浮かべて。

「君達は、アインクラッドの恐怖に勝てないよ？」
「……おいしい、随分と強気じゃねえかよ」

クラデイルは囁く様に勝ち誇りながら。

「命乞いしてみろ。死にたくねえ、って泣き叫んでみろよ」
「……助けて、くれるの？」

「ああ、助けてやるよ。俺の愛玩動物として、だけどなア！」
「そっか……」

逃げ出そうにも身体は動かない、大声で叫ぼうにも意味がない。このまま黙っていても、殺されるだけだ。・

抵抗をしようにも、身動き一つ取れない。指一本すら動かすことが出来ない状況においても、ユウキは絶望することなく。

「君達はあの人に、ボクのにーちゃんに絶対に勝てない」

命乞いなど、絶対にしない。

不敵に笑って見せて、最後の抵抗をしてみせた。

「にーちゃんは、強いんだ！ 君みたいな人達が何十人集めても、絶対に敵わない！ 上手くいくもんか、絶対ににーちゃんに——！」
「あー、わかったわかった」

クラデイル面倒くさそうな調子で、ユウキの言葉を遮る。

それから彼が言う言葉は実にシンプルなモノだった。

「——それじゃ、死ねよ」

両手剣を振りかぶる。狙い所はユウキの首の辺り。確実に殺す急

所を、クラデイルは狙いすましていた。

だがユウキに恐怖はない。

静かに瞼を閉じて、その最後の瞬間を彼女は受け入れていた。

——これで、終わりかな？

——ごめんね、にーちゃん。

——君に謝ることなく、ボクは死んじやう。

——パパとママ、それに姉ちゃん。

——あと、お義父さんとお義母さん。

——怒るだろうなあ……。

——でも。

「でも最後はしつかり——にーちゃんって呼びたかったなあ」

斬！という音が残り、遅れて衝撃が辺りに炸裂した。

それにユウキの肩が震えて、辺りに恐怖がバラまかれる。

その瞬間。

辺りに斬撃音が確かに鳴り響く。地面にはユウキが倒れ伏し、ザザとジョニーはその様子を眼を丸くして見守っている。そしてクラデイルは——遙か遠く、数十メートルの辺りで倒れていた。その背中には斬られたような、抉られたとも取れるエフエクトが刻まれている。

「な、え……う？」

クラデイル自身、何が起きたのか理解出来ないようで、彼もまた目を丸くして混乱している。

少し前まで、自分が勝者であった。生意気なガキを踏み付けて、あとは剣を振り下ろせば殺せる。そんな絶対的な勝者であった筈だ。なのにどうして倒れているのか、あまつさえどうして『スタン』状態

になっているのかわからない。

恐る恐る、視線を元のいた場所へと向ける。

それは——居た。

その頭上のカーソルはグリーン。全身フルプレートに身を包んでいるが、その格好は不格好極まる。兜は羊を思わせる角の生えたモノで、頭部を完全に覆っている。表情など読み取ることが出来ず、その外観は敵を威嚇するような造形となっている。胸甲板や前当ては黒、籠手は紅で、下半身の鎧の部分は蒼。配色も装備の種類もバラバラ、まるでツギハギのような出で立ち。首からは紅い宝石が装備品としてぶら下げている。

それを見た者は、絶望を、恐怖を、驚愕をそれぞれ抱く。

しかしユウキは。

「あ……あ……」

希望を抱いた——。

眼からは止めどなく涙が溢れる。感情で恐怖を消していたが、その者を見て安心したのか、涙が溢れ出した。

その者、アインクラッドの恐怖と呼ばれる少年——ユウキは、身の丈ほどある石斧剣を地面に突き刺して、片膝を突いてユウキを壊れ物を扱うように大事に抱きかかえる。

兜が邪魔をして表情が読み取れないものの、極めて優しい声色で。

「よく、頑張ったな」

「うん……うん……い！」

今までかけられたことのない優しい声で、今まで触れられなかった。

抱きつきたかった。にーちゃん、とユウキも触れたかった。だが『スタン』が許さない。彼女は指一つ動かすことが出来ずに、頷くくらいしか彼女にはさせてくれなかった。

ユーキは彼女を片手で抱き抱えたまま、傍に居る彼女——スト
レアに向かつて声をかけた。

「ストレア」

「はい」

抱き抱えたユウキをストレアに差し出して、意識をオレンジプレ
イヤーに向け、背中越しにストレアに声をかける。

「そいつを頼む」

「アナタはどうするの？」

対して何気ない調子で、さしたる問題ではないと言わんばかりに地
面に突き刺した石斧剣を引き抜いて。

「——ゴミ掃除だ。数十秒で終わらせる」

オレンジの二人はおろか、倒れているクラデイルは身動き一つ取
らない。いいや、取ることが出来ないと言った方が正しい。

アインクラッドの恐怖がそれを許さなかった。動けば斬る、必ず斬
る、指一つでも動かせば斬る。そういった絶対の意思が拘束となり、
彼らの行動を殺していた。恐怖で、身動き一つ、取れずに居た。

「無理しないで、早く帰ってきてね？」

「ああ。わかったから、さっさと行け。オレも余裕がねえ」

返答はない。

だが気配が遠ざかることを背中から察知すると、ユーキは悠然とし
た動作で歩き始める。向かう先は倒れているクラデイル。

あまりにも隙だらけであり、警戒などしている素振りすらない。

少しでも懐に入れば勝機がある。何せ少年の獲物は、身の丈ほどあ

る両手剣。アレでは小回りが効かないことだろう。ならばザザや
ジョニーの装備しているエストックであり、短剣に分がある。

今、オレンジの二人が駆け出せば、アインクラッドの恐怖の懐に入
ることが出来る。それくらい簡単であるといえるほど、今のアインク
ラッドの恐怖は隙きだらけだった。

しかし、身体が、動かない。

蛇に睨まれた蛙のように、身動き一つ起こす気が起きなかった。

「そうだ、そのまま大人しくしてろ」

と、視線を向けずに、アインクラッドの恐怖は彼らに声をかける。

同時に、心臓が鷲掴みにされたような感覚が二人を襲う。直接恐怖
をぶつけるような、恐慌状態に陥る。

二人とも、歯がガチガチ鳴り、冷や汗が頬を伝い、膝がガクガクと
震える。こんな状態で向かう何て出来る筈もなく、逃走もままならな
い。

アインクラッドの恐怖の歩は止まらない。

近付く度に、スタン状態の解けたクラディールは後退る。尻もちを
ついて、顔を横に震わせて、命乞いしようと口をパクパク動かすも言
葉が出ない。

「余裕がない」とは多勢に無勢であるからではない。

もつと純粹に、シンプルで、簡単な理由で余裕がなかった。

それは――

「さて――」

「ヒイ……」

それは――怒りで理性を保つ余裕が無いということ。

見下されて、無慈悲な蒼い眼光が兜の奥から、クラディールへと向
けられる。

思わずクラディールは情けない声を漏らすものの、ユーキは気にす

ることなく、メインメニュー・ウインドウを開きアイテムタブを押して、その中からとあるアイテムを実体化させる。

それは回復ポーション。それを取り出すと、クラデイルに使った。『使う』と言っても、それは雑な使い方。瓶の蓋を開けて、クラデイルにぶっかける。それを何度か繰り返して、クラデイルのHPゲージが回復しきるのを確認すると。

ドスン、と。

石斧剣をクラデイルの右膝辺りを突き刺し斬り落とした。

「ヒイイイ……！ や、やめて——」

「おい、大人しくしてろ」

遮るようにして、今度はもう片方の左膝辺りを突き刺し斬り落として。

「——手元が狂って、オマエの手足を綺麗に切り落とせねえだろうが」

「——」

もはや言葉は出なかった。

ガクガクと震えて、恐怖で涙が溢れる。このままでは殺される、とクラデイルは思ったのか、辛うじて声を漏らした。

「た、頼む。い、命だけは助けてくれ……！」

「ああ、殺さねえよ。殺しちまったら、テメエのクソのような命すら背負わなきゃならねえからな」

だから、と言葉を区切り、ユーキは無慈悲に見下ろしながら。

「知っていることを全部話せ。どうしてアイツを狙った？」

「あ、アイツって紫ローブのガキのことか？ ひよ、標的はアイツじゃない。お前だ……」

「……何が狙いだ。オマエとはこれで初対面の筈だが？」
「そ、それは……」

言い淀むクラデールに、回復ポーションを再びぶっかけると、今度は右腕を切り落とす。

「おいおい、残り一本だぞ。さっさと答えろよノロマ」
「あ、アスナ様だ！」

そこでピタツと、ユーキが止まる。
眼に見えていた憤怒が止まり、撒き散らしていた恐怖が霧散する。
しかしそれに気付かずに、クラデールは勝手に喚き散らした。

「お前がいるからアスナ様が俺に振り向かない！ だから殺そうと思った！ お前が居るから、俺の居場所がないんだ、だから——」

そこで言葉が途切れる。
クラデールも気付いた。目の前の恐怖から、敵意がなくなっていたことを、そして剣を下ろしうわ言のように

「あす、な……う？」

その言葉は不思議と、胸に残るモノだった。
何か、忘れてはならない、名前だった筈。なのに思い出せない、それが何者かの名前だったか、ユーキには思い出せなかった。ただ言えることは、それは懐かしく、それは誰よりも何よりも大切な者であるということだけ。

それが誰なのか、『あすな』とは何者なのか。
それを訪ねようとするも——。

「ッ!!」

突然の風切り音。

それは投げナイフであり、真つ直ぐにユーキに向かって推進する。しかしユーキは直感でナイフを石斧剣で弾き、飛んできた進行方向へと大きく飛んで距離を開ける。

「ハッハッハッハ！」

それは男だった。

膝上までのポンチョで身を包みフードを目深く被っており、その片手には彼の獲物である中華包丁のような短剣が握られている。

腹を抱えて、くの字に身体を折り、彼は友愛とも取れる口調でユーキに話しかける。

「アスナって言っただけで、その反応。そうか、やっぱり貴様か！ 嬉

しいぜ、『俺の恐怖』！」

「オ、マエ……！」

見覚えがあった。第一層の迷宮区で、この男と戦った。

しかしそれが誰なのか、どうして戦ったのか、ユーキは思い出せない。

だが心が訴える。

この男を許してはならない、と。消えた憤怒が再び、再燃する。

この男を許してはならない、そしてその怒りは取り逃がした自分自身へと向ける。

剣を片手で構えて、油断なく黒ポンチョの男へと意識を向ける。

対して黒ポンチョの男は溜息を吐いて、目に見えて落胆するように肩を落とす。

「まだ、貴様は俺を見てくれねえのか……」

「SHOCKだぜ。今回は裏方に徹しようとしていたのに、貴様に会えると思っただらこれか……」

何を言っているのかわからない。

視線も意識も黒ポンチョの男に向けられている。向けていないと言えは怒り、これだけはユーキ本人に向けられていた。

何が言いたい、とユーキが問う前に。

「POH！ おい、POH！ 助けてくれ！」

「あー……？」

必死に自身の名を呼ぶ声に、黒ポンチョの男——POHは不機嫌そうに視線を向けた。

そこにはクラデイルがいて、居た事に気付かなかつたと言わんばかりにクラデイルに近付きながら。

「おいおい、何てザマだよ兄弟。両足、片手はどこにつた？」

「このガキにやられた。助けてくれ、俺を助けてくれよ！」

「ああ、勿論だぜ兄弟——」

無造作な足取りで近づく。

ニヤニヤと目深く被ったフードから見える口元が笑みで歪んでいる。それは嗜虐的な笑みで、とても『兄弟』に向けられたモノではない。

「おい……」

ユーキは思わず、誰ともなく声をかける。

背筋が凍る、嫌な予感がする。クラデイルは気付いてないもの

の、P O Hの妙な笑みに最悪な光景を想像する。

待て！とユーキが言う前にP O Hはクラデイルに膝を折り近付いて一言。

「——それじゃ、助けてやるよ」

と、言うと同時に、中華包丁のような短剣が煌めき、クラデイルの首が斬られた。

首が跳び、血のような鮮紅色の光点が切断面から無数に撒き散らす。自分が何をされたのかわからない、そんな表情を浮かべてクラデイルは言葉を出すことなく、無数の硝子片となりポリゴン群が飛散する。

「誰と誰の会話を邪魔してやがるんだテメエ。駒は大人しく、俺の『友切包丁』の養分になつてろよ」

「テメエ、何で……」

「悪いな、無駄な時間を割いた。いやあ、俺も新しい武器手に入れてよ。友切包丁メイト・チョッパって言うんだが、これがプレイヤーを殺さないと性能が上がらねえ魔剣なんだわ」

まるでその語り口は親友、もしくは恋人に話しかけるような物。数秒前に人を殺したとは思えない。

それが、ユーキの癩に障る。

有体で言えば不愉快な物であり、嫌悪感が滲み出る。

ギリツ、と奥歯を噛みしめる。止めることが出来なかった自分へ怒りを更に燃え上がらせて。

「テメエ、何であの野郎を殺しやがった？ 仲間、じゃねえのか……？」

「おいおい、まさか気に入らないのか？」

首を横に振り、呆れたような口調でP O Hは続ける。

「甘いヤツだ。アイツは貴様のツレを殺しかけたろ？ 貴様が殺らな
いから、俺が殺ってやったんだぜ？」

「……………どこの誰が、そんなことをテメエに頼んだ？」

「頼んでねえな。結果的にそうなっちまっただけで、理由としては邪
魔だったからだ」

「何だと……………」

兜の奥で、ユーキは眉を顰める。

邪魔だったから、というだけで人の命を奪う眼の前の男に、強い嫌
悪感を示す。

だがP O Hはそんなユーキに気付かずに、当たり前のような口調で
続けた。

「俺と貴様の会話を邪魔したから。あとは、まあ……………用済みになつた
からだな」

「どういう意味だ……………」

「そのまんまの意味だ。『アインクラッドの恐怖』が貴様だと確証がな
かった、だから確証を得るためにアイツをけしかけた訳だ」
「……………」

「そうしたら、B I N G O！ 貴様だった訳だ！ ハハッ、良かったぜ
！ 仕込みが無駄にならずに済んだ！」

「仕込み、だと……………」

ユーキの訝しむ声に、P O Hは答えない。どこか残念そうな口調
で。

「ここで貴様と殺し合いするのもいいけどよ、当の貴様は俺のことを
全く見ようとしてくれない」

そこでだ、と言葉を区切り、どこか申し訳さそうな口調で。

「ここいらで手打ちとしようや。簡単に言えば、俺達を見逃してくれねえか？」

「何を言ってるやがる」

轟、と。

己にむける憤怒をここで開放した。それは意志となり、黒炎となりユーキの身体から噴出するように、この世界に具現する。

ユーキの敵意は衰えない。

むしろますます鋭く、鋭利なモノに変貌しながら、POHへと意識を集中させる。

「テメエは叩き潰す。今日、ここで」

「あー、俺は別にいいけどよ——」

一際口元の笑みを深めて、POHは仰々しくわざとらしい口調で。

「——アインクラッドナイトの連中が死ぬぜ？」

聞き覚えがある名であった。

『アインクラッドナイト』それは現状存在するギルドの中でも大規模な集団の名である。攻略することを第一としており、何度か迷宮区でも遭遇したことがある。

交流を深めていないので、詳しいことはユーキも知らない。

だがどうして、そのアインクラッドナイトの名がここで上がるのかわからない。

どうということなのか、と尋ねる前にPOHは楽しそうに続ける。

「そろそろ、だな。もう少しで情報屋からメッセージが届く」

「んだと……？」

P O Hの言う通り、メッセージが届いた。

差出人は『鼠のアルゴ』。意識をP O Hに向けたまま、素早い動作でメッセージを開き、その文面を見てユーキは兜の奥で目を見開いた。そして直ぐに、P O Hに向かって敵意と共に問う。

「テメエ、何をしやがった!!」

「何をしたか、か」

別に、と言葉を区切り手を大きく広げて、抱きしめるような仕草で。

「連中を煽ってやっただけだ」

文面は簡単なもの。

アインクラッドナイトが、ボス部屋を見つけて突貫。壊滅的打撃を受けている。というもの。

第十七層が攻略されてから数時間しか経っていない。

運良くボス部屋を見つける事が出来ても、レベルも安全圏に到達していない状況で、ボス攻略など通常は行わないだろう。ならば何故、アインクラッドナイトは無謀な攻略に臨んでいるのか。

その答えはユーキの目の前にあった。

「アインクラッドナイトは攻略ギルドつてヤツだ。連中は攻略することに必死だ。それは自己犠牲の精神ではなく、自分達がトッププレイヤーである自尊心に他ならねえ」

「……………おい」

「だがヤツらのつまらねえ自尊心を傷つけるヤツがいる。ソイツは誰よりも早く迷宮区を網羅すると、単独でボスを倒す。全く、攻略ギルドにとってこれほど厄介なプレイヤーはいないだろう」

「まさか……………」

呆然とユーキは呟く。既に剣を下ろし、敵意はP O Hに向けられていなかった。

P O Hは一際、笑みを深めて。

「だから俺がけしにかけてやったんだ。このままだと、アインクラッドの恐怖に全て持っていかれて——お前らは役立たずで終わるぞってな」

「——」

「こうなっちまったのも、貴様のせいだ。貴様が軽率に、他の連中を考えずに、自分のやりたいようにやった結果だ」

言葉で抉り、言葉でむしり取る。

本物の悪意に満ちた声は、人を惹き付けて、意識の中へと入り込み、心に深く楔を打ち込む。これがP O Hという人間の魔性の力。人を惹き付ける扇動術と、巧みに操るカリスマ性。

その言葉は優しく、ユーキの中に入り込んでいった。

「だが安心しろよ。貴様のせいと言っても、原因は俺にもある。火種が貴様で、爆発させたのは俺。言っちゃえば、これは二人の共同作業ってヤツだろ」

「——ッ!!」

戯言に付き合うつもりはない。

ユーキはP O Hの言葉を返す余裕もなく、迷宮区に駆ける。その姿はどこか必死で、罪を悔いる罪人のようでもある。

それを静かに見送るとP O Hは嬉しそうに。

「これで連中が全滅してくれれば、その怒りの矛先を俺に向けてくれるかな——？」

第10話 されど少年は足掻き続ける

2023年2月15日

PM15:46 第十八層 迷宮区最上階

———ディアベルという男は、優秀なリーダーだった。

アインクラッドナイトのギルドリーダーであり、その信頼は厚い。指示も的確なもの。人を率いる魅力も十分備わっている。現に、第十八層の中でこのギルドよりも大規模な人数となったのは、ディアベルの力とも言える。

公平で、弱きを守り、そして自分が率先して盾となる。そしてベータテストで培ってきた知識。

正に、騎士^{ナイト}といえる器と力量を備えていた。

しかし、そんな高潔な人格者でも、人の負の感情には敵わなかった。第一層から第十七層まで、単独で攻略をするプレイヤー。名前は不明、素顔も不明。誰よりも前線で戦い、自分の身すら省みない戦い方する怪物。エネミーモンスターすら恐れるその戦い方に、いつしか『アインクラッドの恐怖』と呼ばれるようになった。

ディアベルからしてみたら、危うい戦い方。

身を削るかのように戦うアインクラッドの恐怖を彼は心配していた。

一度、アインクラッドの恐怖の戦い方をディアベルは見たことがある。凄まじい、と感嘆すると同時に、危ういと危惧していた。

アレでは、いつか必ず命を落とす。故に、いつか。自身のギルドであるアインクラッドナイトに誘うつもりであった。アインクラッドの恐怖だけに無理はさせられない、とそんな理由で迎え入れるつもりだった。

彼らしい、人を導く人間らしい理由である。自ら進んで傷つこうとしている人間を放っておけない、彼らしい高潔な理由である。

しかし、周りも同じ意見だろうか。残念ながら、そうではなかった。

アインクラッドナイトは攻略ギルドだ。文字通り、攻略することを第一として集まったプレイヤー集団である。そんな連中が、アインクラッドの恐怖に良い感情を持っているわけがない。

誰よりも、下手をしたらオレンジプレイヤー以上に、目障りだったに違いない。

それでも、ディアベルは彼らを抑えていた。それこそ、彼のカリスマ性がなせる人望とも言える。

だが相手が悪かった。ディアベル以上のカリスマ、加えて扇動の天才とも言えるPOHという男。POHは言葉巧みに誘惑し、都合のいい言葉を並べて、人の心の中へと入り込む化物だ。

その言葉は居心地が良く、人を惑わせる。

人の根底にある悪意を、POHは誰よりも熟知している。

あいつが憎い、あいつが嫌いだ、あいつには負けたくない、あいつを蹴落としてやる。人類はそうやって悪意を磨きこころまで文明を発達させてきた。国家も、法律も、兵器も、スポーツも、カルチャーも、根底にあるのは悪意だ。

それを誰よりも、POHは理解していたのだ。

そうしてアインクラッドナイトは暴走を始める。

自らのちっぽけな自尊心を守るために、ディアベル以外のプレイヤーは躍起になる。

ディアベルに無断で迷宮区に踏み入り、運良くフロアボスの大部屋を見つけて、功を焦るかのようになだれ込む。

準備も不十分。決意も足りず、覚悟も足りない。待っていたのは名声でも、羨望でもない。待っていたのは――蹂躪だった。

壁に鎖で繋がれたボスエネミー『ザ・ダイアータスク』。片手には斧が握られており、三メートル以上ある屈強な体躯で、頭部は猪のようなエネミー。

最初はアインクラッドナイトの面々の優勢であったが、HPゲージが半分以上削った頃にその異変は起きた。ザ・ダイアータスクは壁に繋がれていた鎖を引き抜いて、鎖を腕に巻き自由の身となるや否や、

プレイヤー達を蹂躪し始める。

そうなれば、陣形などズタズタになっていた。

ディアベルが駆けつけた頃には、攻略どころではない。

泣き叫び逃げ惑い、聞き届けられない命乞いが虚しく木霊する。プレイヤーは阿鼻叫喚となり、無様にも這いつくばっている。

もはやトッププレイヤーとして自尊心などなかった。ただただ自分達が生き残るために、彼らは逃げ惑う。幸いにも、死人は出ていなかった。

助ける。

ディアベルが行動する前に、一人の影がザ・ダイアータスクの前へと躍り出て、一撃を受け止める。

衝撃が空気を叩き、数十人プレイヤーは吹き飛ばされるも、踊り出たプレイヤーだけは組み合ったままだった。

そのプレイヤーは、全身フルプレートに身を包んでおり、その格好は不格好極まる。兜は羊を思わせる角の生えたモノで、頭部を完全に覆っているので表情など読み取ることが出来ず、その外観は敵を威嚇するような造形となっている。胸甲板や前当ては黒、箆手は紅で、下半身の鎧の部分は蒼。配色も装備の種類もバラバラ、まるでツギハギのような出で立ち。首からは紅い宝石が装備品としてぶら下げている。

それは——アインクラッドの恐怖と呼ばれるプレイヤー。

突然の乱入者に、ザ・ダイアータスクが吠える。

威嚇、にも似た咆哮が辺りに鳴り響き、石造りの壁が頼りなく揺れた。それと同時に、ザ・ダイアータスクの戦斧が勢い良く振り下ろされる。

「——ッ！」

落下してくる落石を押しとどめるように、アインクラッドの恐怖はその攻撃を迎え撃つ。

——空間が揺れる。

松明だけが明かりとなった大部屋で、二つの影が交差する。ザ・ダイアータスクは圧倒的だ。

薙ぐ一撃が暴風であるのなら、振り下ろされる一撃は落雷そのものように、まともに身体の何処かにくらえば、プレイヤーにとつて致命傷なり得る。そこまで強力かつ、悲しいほどまでに力の差があった。

だがそれを正面から。

怯むことなく、全力でインクラッドの恐怖は弾き返す。大嵐のようなどうしようもない脅威に対して、彼はただ全ての力を用いて弾き返す。ただ弾き返す。

それを何合繰り返したか。

ザ・ダイアータスクも埒が明かないと見るや否や、固唾を呑んで見守っていたプレイヤーに標的を変える。

「——！！」

「ヒイ……！」

咆哮しながら距離を詰めてくる怪物に、狙われたプレイヤーは情けない声と共に尻餅をついた。

情けない表情で、顔を必死に振り、後ろへと後退るも、その行動に意味はない。

抵抗も虚しく、ザ・ダイアータスクの獲物は振り下ろされて、プレイヤーのHPゲージを削り取られ、無数の硝子片となり仮想世界から消え失せることだろう。それはつまり、現実世界の死を意味している。

無情にも、被害者としてそのプレイヤーは名を連ねる。だが——

「クソ……ッ……！」

それは、アインクラッドの恐怖が許さなかった。

彼は再び、ザ・ダイアースクとプレイヤーの間を割って入ると、自身の石斧剣で戦斧を受け止める。

防ぐのに精一杯。反撃できる余力など、少年にはなかった。

アインクラッドの恐怖だけ戦わせるわけにはいかない。

そういう思いがダイアベルの原動力となり、加勢しようと駆け寄ろうとするが。

「逃げ……ろ……！」

悲痛にも似た訴えに、足を止める。

しかし直ぐに、ダイアベルは反論してみせた。

「だがそれでは君が——！」

「——いいから！」

遮るように、少年は叫びながら懇願した。

「オレなんぞは放っておいていい。だから頼む、早く逃げてくれ……！」

「行ったか……」

アレからダイアベルと言い争って、彼が折れる形でアインクラッドナイツは撤退した。

大部屋を去り際に「待っていてくれ、直ぐに助ける！」と彼が凜とした声で告げたのは記憶に新しい。

それを思い出し、アインクラッドの恐怖——ユーキは兜の奥で

自嘲するように、呆れた口調で。

「どこの誰かは知らねえが、あの野郎も人が好すぎる」

「——ッ!!!」

そこで、ぼんやりとした様子でユーキは、吠えるザ・ダイアータスクへと意識を向けた。

「獲物を横取りしちまったからな、そりや怒るよな」

「——!!」

「仕方ねえだろ、オレも必死だったんだ。これ以上、オレのせいで誰かが殺される訳にはいかなかったからな」

他人事のように呟く彼は、剣を構える素振りすら見せない。

咆哮と共に、怪物が自身に駆けるのを見て、少年は静観を保っていた。まるでそれは、罪人が死刑を受け入れるようであり、どこか悟りを開いている様でもある。

彼は——限界だった。

左腕の感覚はなく、左目の視力はどうの昔に擦り切れている。

ここに来るまで、そして到着してからの時間稼ぎとして。自身の『力』を十全に奮い、その代償が今。欠陥製品とも言える状態で、彼はその場に存在していた。

だがそれでいいと思う。

むしろ最後の最後で、自分の不始末の尻拭いを出来た。これだけで、充分過ぎるくらいだ。とユーキは受け入れていた。

——あとは、あのデカブツがオレを殺すのを待っているだけか。

——それで、オレは終わることが出来る。

——やっど、やっど。

——やっど、父さんと母さんを見殺しにしたクソが死ぬ。

長かった。

ここまで長かった、とユーキはぼんやりと思う。

両親を見殺しにして、ここまで贖罪のように生きてきた。

死んでしまえば楽になれるというのに、自分は何故かここまで生きてきた。死ぬわけにはいかない何かがあった筈だが、今となつては思ひ出すことも出来ない。

それよりも、ようやく茅場優希という人間が終わることが出来る。それだけで、感極まる心境だった。

だが――。

――ああ？

震える右手が、石斧剣を握りしめていた右手がゆつくりと、ユーキの意志に反してザ・ダイアータスクへと剣先を向けていた。

自分自身、理解出来ない。どうしてここで、怪物に立ち向かうための武器を、構えてしまうのか。

――どうしてだ？

――何でオレは……？

――まだ……。

いつの間にかザ・ダイアータスクが目の前に立ち塞がる。

ユーキが見上げると同時に、怪物は戦斧を振り下ろす。シンプルな攻撃かつ、単純故に強力無比な一撃。思考するよりも早く、少年は行動した。

受けるのではなく避ける。

右方向へと無様に転がりながらも、必死に避ける。

瞬間、轟音。

戦斧が地に着弾すると同時に、衝撃波が石造りの壁、空間に炸裂して、ユーキは敢え無く吹き飛ばされる。

——何で、オレは……。

転がりながらも、体制を立て直して片手で石斧剣を構える。兜の奥の蒼い瞳は伽藍堂となっており、光など灯っていない。何もかもを諦めたような眼をしているのに、彼は——。

——何で、オレは。

——まだ諦めてねえんだ……？

諦めなかった——。

ディアベルの言葉を信じているわけではない。誰かが自分を救いに来るなんて考えていない。

だがそれでも、ユーキの思考とは裏腹に、折れない何かが意志となり、今のユーキを支えていた。

ユーキ本人も理解が出来ない。

先程まで諦めていた、死を受け入れていた。両親を殺した仇をようやく討つことが出来る、と高揚していた。なのにどうしてここに来て、今になってコイツはまだ生き汚く足掻くというのか。

勝手に行動し、その結果の果てが現状のような惨状だ。関係のない連中を巻き込んで、下手したら死人も出たかもしれない。

だが確かに、その勝手な行動の結果救われた命もあることだろう。しかし、ユーキにはその結果など勘定に入れていなかった。勝手に行動し、勝手に迷惑をかけた最悪の人間。ユーキの自己評価はそんなものだった。

だからこそ、ユーキは死ぬしかないと思った。

こんなクソが生き残った所で、迷惑をかけるだけだと。しかし——。

——ああ、そうか……。

ユーキは諦めなかった。

再び、ザ・ダイアータスクが目の前で戦斧を強引に横へ薙ぐも、無意識に石斧剣を盾にして防ぐ。だが勢いまで防ぐことは出来ずに、砲弾のように吹き飛ばされて、地面を転がるもそのまま停止することなく、石造りの壁へとユーキは叩きつけられる。

しかし直ぐに立ち上がる。

ゆらり、と立ち上がる。まるで蜃気楼のような、芯がないかのような異様な立ち姿。

——そうか。

——オレは結局、死ぬことも許されならしい……。

ここで死ぬことは簡単な話だ。黙って立って、眼の前の怪物の凶刃の餌食になってしまえばいい。それに別に恐怖はない、それが報いだと本気でユーキは思っている。

だがそれは違う、と心の奥底で叫ぶ。

思い出すのは、紫ローブの娘の言葉——生き別れた妹になるはずだった少女の言葉。

『ボクも君も、死んじやダメだよ。だって、ボク達があの二人の、生きた証なんだから……』

全くもって、その通りだと思う。

両親は自分達ではなく、ユーキを選び、彼らは死を選んだ。

つまり彼らに生かされて、ユーキは今の今まで生きてきた。それなのにも関わらず、ユーキは死にたがっている。

それでは道理が合わない。助けられたのに死ぬ何て、道理が合わない。

——そんな簡単なこと、今になって気付くかよ……。

——しかも妹に教えてもらうなんざ、兄貴失格にも程がある。

皮肉気に、ユーキは口元を歪ませる。そして自分という人間に、嫌気が差した。

結局のところ、ユーキは楽になりたがっていただけだった。死んで、罪悪感から解放されたい。それだけのために、彼は死を選ぼうとしていた。

——ふざけんな。

——オレがそんな真つ当な死に方、出来る筈ねえじゃねえか。

——そんな資格すら、オレにはない。

死んで楽になろうなんて、ありえない。

両親を見殺しにしたのが贖罪だというのなら、背負って生きて償わなければならぬ。

二人の生きた証として、自分は生きなければならぬ。

——そうだ。

——死んでいられない。

——無様にも、生き汚く、地を這いずつても。

——オレは生きなきゃならねえ。

——じゃねえと、二人がオレを助けた意味がねえ……！！

今一度、ユーキの蒼い双眸に光が灯る。

右手に力を込めて、獲物を握りしめて、剣先をザ・ダイアータスクへと向ける。

「オレは——生きる」

それは宣言だった。

押しつぶされそうな罪悪感に負けない、己を焼くほどの強い怒りに屈しない。

本来であれば息をすることすら苦痛。それでも、彼は無様に生きることを選ぶ。

「こんな所で死ぬるか。オレは生かされた、なら生きなきゃならない。この世界で生き抜いて、父さんと母さんの生きて証明をし続けなければならぬ——」

戦力差は絶望的だった。

左腕の感覚はなく、左目は見えない。加えて『力』を使えば、決定的な崩壊が待っている。だがそれでも、諦めるわけには行かなかった。

左腕が使えないなら右手で、左目が見えないのなら右目で見る。例え死んでも、絶対に生き残る。そして——。

「オレは、もう一度会わなきゃならねえんだ。アイツらに会って、勝手な真似をしたことを謝らなきゃならない——」

アイツら、とは誰のことなのかユーキも思い出せない。

見知らぬ黒髪の少年プレイヤーと言い争いをしている。

呆れた様子で仲裁に入るやはり見知らぬ桃色の髪の女性。

そして、視界の端には、困ったように笑うこれまた見知らぬ——

——栗色の長髪の少女の姿。

それが誰なのか。それがどこで、何もかも取りこぼし抜け落ちていく。何も、思い出せない。

だがそれでも、彼の心が訴える。もう一度会って、詫びなければならぬと、心が訴えるのだ。

「だから死ぬない。こんな所で——！」

死んでたまるか、と言う前に——それは現れた。

桃色の頭髮の少女で、左手にバックラーを構えて、右手にはメイスのような打撃武器。

彼女は一言も話すことなく、ザ・ダイアータスクの前に躍り出ると、右足の部分をメイスでぶん殴り、態勢を崩す。そして——。

「キリト、スイッチ——！」

「ナイスだ、リズ——！」

また新しい人影。

それは黒い少年で、軽やかに飛ぶと、片手剣でザ・ダイアータスクに斬り込む。瞬間、不自然に少年の片手剣が光り始め、ザ・ダイアータスクの顔面へと『ほぼ同時』に斬りつける。その数——4回。

「——アスナ、スイッチ！」

「——」

最後に現れたのは——紅い閃光だった。

眼にも留まらぬ速さで、土煙を撒き立てながら、紅い閃光はザ・ダイアータスクの腹部へと突き刺さる。

それは細剣のソードスキル『リニア』。基本技であるものの、紅い閃光はそれを必殺の粹まで鍛え上げられていた。現に、ザ・ダイアータスクはそのまま吹き飛ばされて、石造りの壁に激突して漸く停止する。

「オ……マエら……」

目の前の三人の背中。

ユーキは見覚えがあった。忘れるわけがない、忘れるはずもない。取りこぼした記憶を拾い集める。

——あらゆるものを拾い集めて——あらゆるものが再生され——あらゆるもので縫い集める——。

ユーキは呆然と、万感の想いを込めて、言葉にする。

「リズベット——」

「なに呆けてんのよアンタ」

「キリト——」

「構えろよユーキ、ここからだぞ」

リズベツト、キリトは背中越しに答えていく。
そして。

「——アスナ——」

紅い閃光——アスナは振り向いて、泣きそうな笑顔で。

「やっと、やっと追いついたよ——ユーキ君」

その胸元にはペンダントが、蒼い宝石が首からぶら下がっていた——。

幕間 妹として、兄に出来ること

2023年2月15日

PM15:45 第十八層 主街区『ユーカリ』

攻略ギルド『アインクラッドナイト』が壊滅の危機あり、という連絡が『鼠のアルゴ』から連絡が入った数十分後。

主街区『ユーカリ』ではどこか忙しく、プレイヤーがざわついていた。『アインクラッドナイト』はソードアート・オンラインでも規模が大きい部類のギルドである。そのギルドが、今では壊滅状態にあるという。

ある者は助力しようと述べ、ある者は様子を見るべきだと静観を保つ。何も準備もせずに突撃するからだ、と小馬鹿にする者もいれば、我関せずにくエストを行うプレイヤーもいた。

壊滅の危機にあるという報道は、恐らく下層にも知れ渡っていることだろう。

そんな中、忙しくなくプレイヤーが行き来する主街区で、ユウキとストレアは第十八層の主街区『ユーカリ』のとある宿屋へと足を運んでいた。問題の迷宮区ではなく、宿屋に向かってるのは何も『アインクラッドナイト』を見捨てたからというわけではない。それよりも先に、行わなければならない問題を彼女達は抱えていた。

「ユウキ、本当にいいの？」

前を歩く彼女に向かって、ストレアは心配するように尋ねた。

問われた本人であるユウキは、トレードマークである紫のローブを羽織っているものの、いつものように頭から目深く被っている状態ではない。

いつもの天真爛漫の様子は鳴りを潜めて、眼もどこか真剣なモノと化している。その様子は、使命を背負うような、並々ならぬ雰囲気

纏っていた。

ユウキはストレアの問いに「うん」と迷うことなく頷いて見せて。

「ボクにはこれしか出来ないから」

「……あの人に、全部任せてもいいの?」

今までユウキが背中を守ってきたのに、と暗にストレアは語る。

彼女は『人間』という生き物は、ここで尻込みする生き物だと、カーディナルから教わった。自己の保身、自己の栄誉、自分のことしか考えてない。他人のことなど二の次で、恐怖をバラ撒くのが人間である。

しかし彼女は——ユウキは違った反応を見せる。

自分に出来ることを精一杯考えた結果、彼女は決断をする。

その結果が、どんなものになろうとも。例え兄と慕う者から疎まれることになるうとも、問題ではないと言うかのように。これで兄が傷つくことがなくなるのなら、それでいいと言うかのように迷うことなく、頷いてみせた。

「ボクは、にーちゃんが傷つかないなら別に良いんだ」

「……………」

「ボクが願うのはお門違いなのはわかってはいるけど、にーちゃんには幸せになってもらいたい。にーちゃんの幸せはあの人が居ることなんだと思う。ボクと一緒に居れなくても良い、にーちゃんが笑っていてくれれば、それだけで充分だから……」

だから悔いはない。

ユウキの結論に、ストレアはどうするべきか迷っていた。

少なからず、ユウキの兄は彼女本人のことを想っていることはわかっている。

だがしかし、それをユウキ本人に伝えていいのかどうか、彼女は迷っていた。ここで真実だけ言うのは簡単である。それだけではユ

ウキは信じないだろう。ならば誰の言葉なら信じるのだろうか。決まっている、ユウキの兄本人の口から言わなければ信じないだろう。

だからこそストレアは一肌脱ぐことにした。

器用ではない妹と不器用な兄の背中を押すために、自分が輪に入れなくても良いという似たような選択をした兄妹の為に、彼女は協力する。

ユウキのやりたいように、とある人物達への接触に協力する。

「しようがないな、アタシも手伝うよ」

「うん。ありがとう、ストレア」

そうして彼女達は目的の宿屋前へと到着した。

とある人物達へ接触するために、ストレアは『鼠のアルゴ』から情報を手に入れている。

とある人物達、その人数は三人。少年プレイヤーが一人、少女プレイヤーが二人。

その人物達のが十八層に到着したのは、つい数時間前である。そして待ち合わせも、ユウキ達が目の前にいる宿屋となっている。

そんな、ユーカーリの中にある宿屋。

どうやら宿屋の中に酒場があり、そこにはプレイヤー達が点々と席に着席しており、NPCである店員は忙しなく動き注文を取っていた。

そんな中、とても酒場の雰囲気から浮いている少年プレイヤーが一人、少女プレイヤーが二人。

酒場とは本来、成人した者たちが訪れる場所である。それを考慮す

れば、彼女達は明らかに浮いていた。

丸型のテーブルを囲うように、三人がそれぞれ座っていた。

——あの人達だ。

——はじまりの街で、にーちゃんと一緒に居た……。

念のため、確認するようにストレアをチラツと見ると、ストレアは笑顔で頷いてみせる。

目的の人物達が、彼女達である。

ユウキは確認すると、スタスタと軽い足取りで目的の人物達の方へと歩を進める。

ここで彼女達を、兄の前まで連れていけば何と言われるのか、ユウキにはわかつている。恐らく、自分は怒られてもう二度と一緒に行動させてはくれないだろう、とユウキは感じ取っていた。

だがそれでもいい、と。これで兄が足を止めてくれるのならそれでいい、とユウキは迷うことなく断言できる。二度と兄と呼ぶチャンスを不意にしようと、ユウキには後悔はなかった。このまま進み続けて、兄が死んでしまうよりかは、何百倍もマシなのだから。

そんなユウキに気付いた栗色の髪をした少女プレイヤーが席を立つて。

「貴女がアルゴさんが言っていた人、よね？」

「う、ん……。君がアスナさんだね？」

そうだよ、という少女——アスナというプレイヤーは微笑みを浮かべて応じた。

同性であるユウキから見ても可愛いと思える笑みを浮かべて、そしてどこか雰囲気ユウキの亡くなった姉に似ており、少しだけ言い淀む。

アスナは深く追求せずに、優しい視線で問いかける。

「それで、わたし達に用があるってアルゴさんから聞いたんだけど、何かな？」

「……………」

意を決して、ユウキは口を開く。

「……………ユーキさんについて、話があるんだ」

それだけで伝わったようである。

今まで静観していた黒髪の少年は反応すると、桃色の頭髪をした少女はアスナをどこか心配するように見つめる。そしてアスナは真剣な表情に変わると。

「ユーキ君が、どうしたの？」

「…………その前に、今アインクラッドナイトスがフロアボスに挑んでいること知ってる？」

「うん、聞いている。わたし達も助けに行こうとしてたけど……………」

「…………そこに、ユーキさんも向かってると思う」

ユウキとストレア以外の三人が三人共、息を呑む。今まで追ってきた人物の背中が見えてきた、手を伸ばす距離に少年が居る。そう考えたら、彼女達が反応するのも無理はないだろう。その為に彼女達は追いかけてきた、その為にここまで追いついてきたのだから。

それを知っているように、ユウキは自分の発言を撤回するように首を横に振ると。

「ううん、向かってる。絶対に向かってる」

「……………どうして、そう言い切れるの？」

我ながら、意地の悪い問いだとアスナは思う。

何故なら……………。

「だって、ユーキさんだもん」

ユウキは困ったように笑った。

そう。この問いに答えなどない。

ユーキというプレイヤーは、茅場優希という人間を知っていれば、ユウキが言った答えになる。

何故、自分の危険を顧みず助けに向かうのか。それが茅場優希だからという答えになっていない答えになってしまう。

何だかんだ文句言って、建前を並べて、意地の悪い言葉を吐き出して、茅場優希は困った人間に手を伸ばしてしまうのだ。その行動に理由などない。身体は勝手に反応してしまうかのように、何も出来ない自分に苛立ちを覚えて、片端から手を伸ばしてしまう。

それは優希が常日頃、お人好しと蔑むそれであった。結局のところ、他人に甘い彼もまた『お人好し』の部類に過ぎない。それは一人で行動するようになってからも同じことだ。

茅場優希と言う人間は——どこまで行っても彼だった。

それをアスナもユウキも熟知している。

困った笑みから、悔しそうに何かに耐えるような表情へ。

ユウキは変化を遂げて続ける。

「これからもあの人は、そうやって進み続ける。これ以上進んで壊れてしまおうってわかっているのに、進み続けてしまう」

「……それがユーキ君、だもんね？」

「うん。ボクがいくら言っても聞いてくれなかった、ボクの声なんて届かなかった——」

でも、と言葉を区切る。

その眼には涙を浮かべており、悲しそうであり悔しそうでもあり、自分の無力さを呪うような眼でアスナに懇願する。

「——君は違う。君なら、アスナさんならきつとユーキさんに届く。ボクなんかじゃダメだったけど、君の言葉なら絶対に届くと思うんだ！」

「……」
「だからお願い、お願いします！ ユーキさんを、にーちゃんを助けて下さい！」

目をギュツと閉じ、勢い良くユウキは頭を下げる。

しかし直ぐにアスナは行動を移していた。両手がそつと優しくユウキの両肩に触れる。それは華奢なもので、とてもユーキの後を追いかけてきた強者だとは思えない。だがアスナは、アスナ達は彼女を知っている。いつも『アインクラッドの恐怖』の後ろで背中を守ってきた彼女の存在をアルゴから教わっている。

「……聞いてもいいかな？」

「……なに？」

頭を下げたまま答えるユウキに、アスナは問う。

「君が付いて来ることに、ユーキ君は何か言ってた？」

「何も言っていないよ。ただ、ボクが倒れた時とか、ボスに付いていこうとしたら凄い怒ったよ？」

「……そっか」

どこか安心するように言葉を漏らすと、アスナは優しい声で。

「顔を上げて、ユウキさん」

「……」

ユウキは顔を上げる。

瞬間、言葉を失った。アスナの顔を見て、彼女は言葉を失った。

彼女は——微笑んでいた。

それは慈愛に満ちた表情で、人間とはこんなにも優しい表情が出来るのか、とユウキは感嘆する。母のような、聖母のような、何もかもを許すようなそんな笑みのままアスナは口を開く。

「大丈夫、貴女の声は間違いなくユーキ君に届いてるわ」

「そんな……な……」

そんな訳ない、と否定する言葉の前にアスナは首を横に振り否定する。

「ううん、届いてる。貴女が倒れて怒ったのも、ボスに付いてこうとして怒ったのも、貴女のことを大事に想っているからよ」

「にーちゃんが、ボクを……?」

そんな訳ない、そんな訳ない筈だとユウキは否定する。イヤイヤ、と首を弱々しく横に振って否定する。

それを認める訳にはいかない。自分は誰よりも彼に恨まれなければならぬ。想われてはいけない、何故なら彼の幸せを奪ったのは自分なのだから。そういった自責の念が、ユウキの華奢な両肩に重くのしかかる。

だがそれはアスナが許さなかった。

包み込むように、ユウキを抱き寄せる。何もかもから守るように、深く包容しながら彼女は深く想いを言葉に込めて。

「ユーキ君のことを守ってくれて——ありがとう」

「——」

それが、限界だった。

溜めていた涙が溢れる。ポロポロと音をたてるかのように大粒の涙が溢れ始める。

誰かに感謝してほしかった訳ではない、誰かに認めてほしかった訳ではない。だがアスナの感謝は、ユウキの心を洗い流す聖水のようなものだった。

「ユウキ君は、無茶ばかりするから大変だったでしょ？」

「うん、でも楽しかった。ボク、にーちゃんと一緒に冒険出来て楽しかった……」

涙を眼からこぼし、震える声で漏らすユウキの背中を、アスナは優しくポンポンと叩いて頷いて同意する。

「今度はわたしも守りたいの。だからユウキさん、協力してくれないかな？ 一緒にあの人を守っていいこう」

「でもボクに出来るかな？」

「出来るよ」

自信満々に言うと、一度アスナは抱き寄せていたユウキから離れると、右手を差し出した。

一緒に手を取るように、共に赴くように、彼女は手を差し出したまま。

「わたしとユウキさんで、無茶ばかりするあの人を守っていいこう？」

それは光のようだった。

何もかもを照らすような、何もかもを包むかのような優しい光。何者も触れてはならないような、尊い何かを感じる。

そこでユウキは納得する。

これが、にーちゃんの守りたかったモノだったんだ。と彼女は納得して、差し出された右手を握る。

「ユウキ」

「え？」

「ボクのことにはユウキって呼んで欲しいな。さん付けは嫌だよ？」

「うん、わかったわユウキ。わたしのこともアスナでいいからね？」

「わかったよ。よろしくね、アスナ！」

にこやかに握手を交わす二人を静観していた、黒髪の少年が席を立つ。それから早る気持ちを抑えるかのように口を開いた。

それから早る気持ちを抑えるかのように口を開いた。

「それじゃ、行こうか。アイツが居るんだろ？」

「空気読めない、って言われない？」

対して、ユウキを見守っていたストレアがジト目で黒髪の少年を睨めつける。とはいっても、どこかその様子はどこか楽しそうであり、仲間を見つけたような笑みを口元に浮かべている。

黒髪の少年が反論する前に、ストレアは人懐っこい笑みを浮かべて。

「キミが『はじまりの英雄』のキリトでいいんだよねー？」

「……まあ、そう呼ばれるときもあるな」

黒髪の少年——キリトは居心地が悪い調子で言葉を漏らす。どうやら彼は『はじまりの英雄』と呼ばれるのに未だに慣れていない様子であった。

そんなキリトの周りをストレアが「ふーん、へー？」と鑑定するようにグルグルと回り始める。

「……何だよ？」

「べっつにー？ アタシのお姉ちゃんがキミに興味があるから、どんな人かなーって思っただけ。んー……、及第点かな？」

姉とは誰だ、とキリトが問いかける前に、今度は彼の後ろからどこか面白くなさそうな声で、桃色の髪の少女が口を開いた。

「さすがキリト先生、モテモテねー、モテるわねー?」

「……リズ、どうして俺を睨むんだ?」

「……鼻の下、伸びてたわよ? どこに眼を向けてるんだか」

「伸びてない、伸びてないぞ! クラインじやあるまいし!」

「どうだかねー? 男は狼なのよ、気を付けなさいって言われたし」

誰にだよ!というキリトの抗議を無視して、桃色の髪の毛の少女――リズベットがユウキに話しかける。

「あたしはリズベット、リズでいいわ。あたしもユウキって呼んで良い?」

「うん、全然良いよ。よろしくね、リズ!」

元気そうに答えるユウキに、姉御肌の性が暴れ始めたのか、抱きしめたい衝動に駆られる。だがそれを何とか押さえ込み問う。

「第一層であたしを助けてくれたのユウキでしょ?」

「うん、そうだよ?」

「ありがとう!」

「わわっ……!」

結論から言うと、リズベットは勝てなかった。衝動のまま彼女はユウキを抱きしめる。

紫のローブに、聞き覚えのある声。

かつてオレンジプレイヤーからリズベットを救ったのはユウキであつた。

それがわかるや否や、リズベットは抱きしめる。

感謝、そして圧倒的妹力の前に、リズベットは抱きしめるという選

択肢以外存在しなかった。

「強くて可愛いとか、もう何なのよアンタ！」

「苦しい、苦しいよりズう……」

「アンタ、あたしの妹にならない？」

「だ、ダメだよ！ ボクはにーちゃんの妹だもん！」

「でもまだ及第点だからね。アタシはユイを任せた訳じゃないからね？」

「だ、だから！ そのユイって誰なんだ!？」

「あつ、それとアタシはキリトに興味ないから」

「さてはアンタ、人の話を聴かないヤツだな！」

騒がしく、されど楽しそうに会話する様子を見て、アスナはクスクスと笑みを零す。

そして同時に考える。

——ここに、君がいたら何ていうかな？

——どんな反応するかな？

——「馬鹿げてやがる」って呆れるかな？

——「鬱陶しいヤツらだ」って面倒くさそうにするかな？

——それとも……。

笑って、くれるかな、と。

アスナは心の中で、ここにいない者に尋ねる。しかし返答はない、何故ならここに彼はいないのだから。

誰よりも前に進んでしまった彼は、この場にはいない。であるのなら、自分達が追いついてしまえばいいことである。そしてそれも今なら出来る。この十八層に、彼が居るのだから。

ならば——アスナ達の取る行動は決まっていた。

「よし、行こうみんな——！」

凜とした声が、響き渡る。

アスナは全員の顔を見渡した。

ストレア、キリト、リズベット——そして、ユウキ。

四人の視線がアスナに集中する。彼女はそんな中、右手を差し出す。

「——ここにユウキ君が居る」

応じるように、アスナの右手の甲の上に、各々手を重ねる。

キリト、リズベット、ストレア、ユウキが手を重ねるのを見て。

「行こう。何もかもを救う為に——！」

全員、同時に差し出した手を握ると、拳を合わせる。

彼女達が向かうのは迷宮区最上階。

一斉に、彼女達は駆け出した——。

第11話 少年の帰るべき場所

2023年2月15日

PM16:05 第十八層 迷宮区最上階

打撃音が響き渡り、剣戟が響き渡り、獣の悲鳴が耳に入る。

衝撃波が空を叩き、怪物が砕いたであろう石造りの床。

視界にはいつぱいの戦塵が広がっており、一般人からは一体何が起きていのか理解出来ていない。

そんな戦場を、フロアボスのいる部屋の隅でツギハギだらけの鎧を装備している少年——ユーキは視界に映していた。

眼を離さないように、自分がやらかした現状を目に焼き付けて、二度と忘れないように。少年はまっすぐと見つめて、静かに受け止める。

黒髪の少年——キリトが斬り込み。

桃色の髪の少女——リズベットがボスの攻撃を受け止めて。

栗色の髪の少女——アスナが連続で突撃をする。

機械のように正確で、作業をするように彼女達は手慣れていた。その一連の動きは淀みなく、スムーズ過ぎるくらいの連携の練度を見せつけている。

恐らく、彼女達はあややつて狩りを続けてきたのだろう。幾百、幾千、幾万とモンスターを相手にしてきたのだろう。その姿は全員で進むようにも映り、それはかつてユーキが選択した独りであろうが進み続けるものとは真逆のモノだった。

全員で歩幅を合わせて、彼女達は追いかけてきた。

独りで進み続ける仲間の背中だけを見て、彼女達はここまで追いついた。

それは誰のためなのか。他の誰でもない、このまま進み続けたら死ぬかもしれない、そんなことわかっていながらも独りで進み続ける捻くれ者の為——ユーキの為である。

その事実を、ユーキは受け止める。

蒼い双眸は真つ直ぐに、仲間達の勇姿を写し込んでいる。

頭部を覆う兜『スケープ・ゴート』越しに、眼を離すことなく真つ直ぐに捉えていた。

そんなユーキの頭上から声が聞こえた。

友人に話かけるような気軽さで、彼の声がユーキの耳に入る。

「よう」

その人物にも大きな借りがある。現実世界でも知り合いで、何度もアスナと世話になったダイシーカフェの店主。

彼はいついかなるときも、優しく見守る眼でアスナとユーキを見守ってきた。そのスタンスはデスゲームとなった仮想世界でも変わらない。大きな体軀、丸太のような二の腕、その背には大きな斧を背負っている。

それが誰か、聞き間違う訳がない。

目の前で戦っている三人、そして自身の妹とストレア、その五名と同じくらい迷惑をかけたとユーキも理解しているつもりだ。

ユーキは彼の名を呼ぶ。

親しみを一心に込めて、彼の名を呼ぶ。

「ドリユーくん……」

「バカ野郎、何度も言ってるだろ」

ドリユーくんと呼ばれた男性はニカッと気持ちの良い笑みを浮かべる。

それから思いつきり、兜の上から気安い調子で、ユーキの頭を小突きながら。

「俺は『エギル』。もう一人の自分、素敵な自分、俺は斧使いのエギル」
「アンタは、いつも通りだな……」

兜の奥で、皮肉気に口元を歪ませる。

対して、エギルは肩をすくめてシニカルに笑みを浮かべて。

「まあ今の俺は、頼れるエギルさんじゃない。お前らの知るアンド
リューさんだ」

「どつちなんだよ……」

「気安く話せてことだよ」

それだけ言うと、エギルはユーキの隣で腰を下ろす。

二人の目線は同じ。互角以上に戦う三人の戦う様子を捉える。

「強くなつたらろ？」

「ああ……」

エギルの問いに、ユーキは迷うことなく頷いた。

それから少年にとっては珍しい口調で。

「馬鹿なヤツらだ」

「ん？」

言葉とは裏腹に、敬意を表すような口調で、大切な物を壊さないよ
うに優しく扱うような調子で。

「勝手に突つ走ったオレなんぞの後を追いかけて、時間を浪費しや
がって……」

「それだけ、お前が放っておけなかったんだよアイツらは」

事実だけ伝えると、エギルの大きな手が兜越しに、ユーキの頭の上

に置いて。

「それがわからないお前じゃないだろ？」

「……わかってるよ。もう、わかってる」

ここまで、彼女達がどれだけ困難な道を歩んできたか、ユーキには想像が出来ない。

先に進む自分に追い付くためだけに、彼女達はここまでやってきた。事実、彼女達はユーキに追いついた。

どうして彼女達はここまでやってきたのか。

考えるまでもない、問うまでもない。独りで進み続け、死んでしまいかもしれないユーキを放っておけないからという簡単な理由だった。

難しくもない、簡単なこと。誰よりも先に攻略して、皆を開放するという自己犠牲の精神でもなければ、他のプレイヤーから賞賛を浴びたいという名誉欲でもない。極単純でシンプルな理由、彼女達はたった一人の為にここまでやってきた。

わかっている。

わかっているても、ユーキは言葉にせずにはいられなかった。

「お人好しな連中だ。どいつもこいつも、オレみたいなクソは放っておけばよかったのに、こうして追いついてきやがった。こんなにクソなのに、人として終わってるってのに……」

「……どうして、自分に対して卑下にするんだ？」

「決まってるんだろ」

それだけ言うと、少年は震える声で続けた。

「アイツらが傷つくのが我慢出来なくて、アスナが剣を握るのが許せなくて戦ってきた。なのにオレは、アイツらがここまで来て、来てくれて——何よりも嬉しがってやがる」

心の底で、彼は満ち足りたモノを感じていた。

しかし同時に、そんな自分に嫌気がさしてくる。自分のような価値がない人間が、そんなことを思っている訳がないと、ユーキは自身を真正面から否定する。

対して、エギルは「バカ野郎」と軽い口調で言うと、気軽な口調でユーキの想いを肯定した。

「それが普通なんだよ。アイツらだけじゃない、俺もお前を兄ちゃんって慕う娘も、その友達も、お前を想って行動してる。それを嬉しいうって思うのは、普通のことなんだよ」

「普通、か」

それだけ言うと、ユーキは満ち足りた表情を兜の奥で浮かべて。

あらゆる感情を言葉に乗せながら続けた。

「知らなかったよ。オレのことを想ってくれるヤツら、こんなにいるなんてな……」

「お前は本当に自己評価が低いやつだ。アスナもそうだし、お前を兄ちゃんって慕う娘もいたのに。あの娘は誰だ？」

「アイツは、オレの妹だ」

それだけ言うと、ユーキは今までの兄と慕う少女のことを思い出し振り返る。

第二層からついてきて、何度言っても後を追うことをやめなかった。どれだけ怒鳴ろうが、騙そうが、嘘を吐こうが彼女はへこたれることなく付いて来た。

ストレアにフロアボスマで付いてこないように足止めを指示した所で、それは無駄であった。彼女は諦めることなく、ストレアと共にフロアボス討伐するまでに至る。その際に、ユーキに言葉を残し、生きるとは何か思い直させる。

「アイツはどこにいる?」

「あの娘なら、アインクラッドナイトの撤退に協力してるぜ。ストレアって奴も一緒に、キリトの友達がリーダーやってる『風林火山』ってギルドも手伝ってる」

「……そうか」

無事ならそれでいい、と安心するように息を吐きながら。

「アイツにも迷惑をかけたが、アンタにも迷惑をかけた」

「……」

「アンタには勝手なことを押し付けてばかりだった、これまで——」

悪かった、とユーキが謝罪しようと続けようとするが。

「待て」

「……なんだ?」

「別に謝られることなんてされてねえさ。お前はお前の譲れないモノがあつて今まで行動していた、それだけで充分じゃないか?」

そこまで言うと、彼は「それに」と言葉を区切る。

それから直ぐに、意地の悪い笑みを浮かべて続けた。

「——子供は、大人に迷惑をかけてナンボだろ?」

「ハッ、そうかよ」

それだけ言うと、ユーキは再び立ち上がる。

一歩進んだ所で、エギルに振り返らずに。

「それじゃ、迷惑ついでに一つ頼み事をしようか」

「キリト君、新しいモンスターが湧いてきた！」

叫ぶように、アスナが剣を構えながら口を開いた。

四本ほどあったザ・ダイアータスクのHPゲージも、あと一本となった今。

最後のあがきのように、怪物は吠えたと大部屋のいたるところからエネミーモンスターが湧き始める。

エネミーモンスターは各々武器を手に、主を攻撃していた愚かな三人のプレイヤーを包囲し始める。その円は徐々に狭まっており、誰一人逃さまいと注意深く観察するように意識を三人へと向けていた。

対するキリト、リズベット、アスナはそれぞれの背中を合わせて応じた。

それぞれの背中を、それぞれが守るように敵だけを見つめながらキリトはポツリと一言。

「これは、ちよつとやばいな……」

「ちよ、ちよつと！　もう少しガッツを見せなさいよね！」

その言葉に反応して、リズベットが大きな声でツツコミを入れる。それに対してアスナは頬を伝う汗を拭いながら。

「キリト君、挫けそうな発言は禁止」

「でも、見てみるよアスナ」

右手に直剣を握りしめ、顎をクイツと上げて周囲を見渡すことを促

す。

包囲が狭まる。

それと同時に、エネミーモンスターが湧き始める。

その数は留まることを知らない。数体、数十体と明らかに湧く速度は早まっていく。彼女達では相手にならないエネミーモンスターだとしても、その数は脅威なものとなっていた。

その事実には、キリトはうんざりするような口調で。

「三人でこの数、そしてボスがまだ生きてる。これは “三人” だったら厳しいんじゃないか？」

言葉の割に、キリトの調子はまだ余裕があるそれだ。

それに『三人』の部分を取って強調するような口振りに、彼が何を言わんとしているのかりズベツトは首を横に振って呆れながらも納得し、アスナはクスクスと楽しそうに笑みを浮かべて。

「そうだね——」

強気な口調でアスナは続ける。

「——わたし達が、 “三人” だったらね」

瞬間。

突風が舞い、衝撃が走り、エネミーモンスターは吹き飛ばされる——

一振り、たった一振りだった。

それは堂々と自身が崩した包囲網の外から足を進める。

それはツギハギだらけのフルプレート装備。右手には身の丈ほどある石斧剣を握られ肩で担いでおり、左手にはエギルから譲ってもらった回復ポーションを手取る。それを一気に口に飲み込み、乱暴に地面に放り投げた。

歩くような速さで、しかし強く歩みを進める。

それを見てアスナは泣きそうになりながら笑みを浮かべて、リズベットは安心するように息を吐き、キリトは呆れながらヤレヤレと首を横に振ってエネミーモンスターからフロアボスへと身体を向けて。

「遅かったな——」

そしてそのキリトの肩と——。

「——ユーキ」

ユーキは肩を並べた——。

ユーキの頭部はむき出しとなっており、先程まで装備していた『スケープ・ゴート』は外されていた。

今の彼は、独りで攻略することに躍起になっていた『アインクラツドの恐怖』というプレイヤーとしてではなく、彼女達の仲間である『ユーキ』という人間として、この場にいることを選んでいた

いつも言い争っていた仲間、そしてかつてモンスターキラーと対峙した相棒に、キリトは挑戦的な口調で問う。

「どうした、道でも混んでいたのか？」

「いいや、オレが勝手に遠回りしていただけだ」

キリトとユーキが再び肩を並べる。

今まで見たかった光景、夢にまで見た光景にアスナは眼に涙を溜める。だがここで泣くわけにはいかない、泣くのは全てを救ってからだ
と自身を奮い立たせて。

「キリト君、何か策はある？」

「策というか、シンプルに行こう。俺とユーキでボスを倒す、アスナとリズは周りの雑魚を——」

「俺も仲間に入れてくれないか？」

言ってくるのはエギルだった。

彼は楽しそうに笑いながら、背中に装備していた戦斧を抜き放ちながら問う。

それにキリトは一度頷いて。

「勿論だ。アスナとリズ、それからエギルは雑魚を頼む」

「わかったわ！」

「任せなさい！」

「了解！」

三人がそれぞれ、好きに応じるとエネミーモンスターへと駆ける。それを背後で感じ取っていたキリトはどこか呑気な口調でユーキに聞いた。

「俺とお前だけでボスを倒すことになるけど、何か問題はあるか？」

「ねえよ」

ユーキは肩に担いでいた石斧剣を、両手で構える。

左手の感覚はない、左目の視力もとうの昔に紛失している。それでも彼の心中に敗北の可能性はない、むしろ彼は勝利しか確信していなかった。

一人でも負ける気はしないのに、今は隣に自身よりも強い男がいる。

倒れても最後は立ち上がり諦めない強い男が、自分にはない強さをもっている男が——ユーキが憧れていたキリトが居るのだから。故に——。

「オレとオマエだ。何の問題がある？」

「ああ、そうだな」

対するキリトも同じような想いだった。

負ける気がしない、勝利しか約束されていない。何故なら、隣には自分が真似出来ない強さをもっている男がいる。

決して折れることなく真つ直ぐに進む男が、独りになろうが決して諦めず進み続ける剣のような男が——キリトが尊敬するユーキが居るのだから。

だからこそ——。

「久々のコンビプレイだ、行くぞユーキ！」

「足引っ張るなよ、キリト！」

二人は一斉に駆け出した。もはや合図はいらない、アイコンタクトも必要ない。まるでお互いが何をすべきか、熟知しているように二人の剣士はフロアボスへと殺到する。

『はじまりの英雄』と称されるキリト。

『アインクラッドの恐怖』と畏怖されるユーキ。

二人が取った行動は単純なモノ。——真正面から、突撃する。

面を食らったのはザ・ダイアータスクの方である。

策を弄するかと思いきや、何も打算もなく二人の剣士は正面から推し進める。

「↓」

それから遅れて、ドンツツ！という爆音が、大部屋から鳴り響く。その音の正体はザ・ダイアータスクの戦斧が振り下ろされて、地面に着弾した音。

それから大強音となり、衝撃波に変わり辺りを叩く。

ボスの暴威。

プレイヤーの膂力を遥かに超えた暴力を振るわれようとも、二人の

剣士は止まらない。

当たることもなく、二人は振り下ろされた戦斧を躲して、ザ・ダイアータスクの隙を突く。

「!?!」

二人の剣士の剣が、ザ・ダイアータスクの腹部を斬りつて、怪物は悲鳴を上げた。

それも一瞬。

すぐに彼らは一振り、二振り、とザ・ダイアータスクを斬る。

それはまるで雑草を刈り取るように、何度も何度も己の剣を振るう。手数ではキリト、威力ではユーキ。それぞれ自分の得意な剣術で、ザ・ダイアータスクを刈り取っていく。

ザ・ダイアータスクも悲鳴にも似た咆哮を上げて、自身に張り付く敵を戦斧で薙ごうとする。

だがそんな単調な攻撃が通じる相手ではなかった。

転がり、防ぎ、躲し、距離を開けて、二人は位置を入れ替えて。ザ・ダイアータスクを翻弄していく。

刈り取り、斬り、削ぐ。確実に二人の剣は、ザ・ダイアータスクを追い詰めていく。絶命に至らしめる攻撃に、ザ・ダイアータスクは今度こそ悲鳴を上げて。

「!?!」

後方へと大きく飛んで逃れた。

口惜しそうな反応があり、忌々しげにそれを見送る舌打ちがあった。

それからザ・ダイアータスクの構えが変わる。

自慢の武器を捨てて、身を低くし、地面と水平にするような姿勢を保っている。クラウチングスタート、よりも低い姿勢。怪物は、そのまま突進するようである。

「露骨な野郎だ」

退屈そうな感想を呟くユーキに対して、キリトはいいや、と否定しながら。

「でも、今アイツに突撃されたらヤバイ。俺達に防ぐ術はないんだからな」

「さて、どうだかな」

言うだけ言うと、ユーキは一步進んでキリトに告げる。

「アイツの動きはオレが止める」

それはかつて、モンスターキラーと対峙した同じように、同じ口調で彼は。

「——オマエが倒せ」

「——」

抗議の声は上がらない。

キリトは素直にユーキの言葉に従った。彼が止めるというのだからそれは絶対であり、必ず彼はやり遂げる。故にキリトは方法も手段も問わない、彼の邪魔をしないように自分の仕事に集中する。

ユーキは眼を閉じる。

思い出すのは『怒り』の感情。世界を理不尽の呪い、世界に無慈悲な憎悪を向ける。

これは儀式。怒りを力に変える儀式。

思い出すのは、今までの人生。両親を理不尽に奪った世界、茅場晶彦の顔、そして無様に生き残ってしまった何より許せない自分自身。

蒼い瞳に、暗い感情が宿る。それは怒りであり、憎悪であり、憤怒である。絶対的な殺意、確固たる殺気。

漆黒の意思を眼に宿し、ユーキは告げる。

モンスターキラーがプレイヤーに向けたように、感情のままユーキは対峙する怪物に向かって――。

「――恐怖を教えてやる」

「――」

ザ・ダイアータスクが固まった――。

眼に見えていた殺意は消え失せて、怯える表情でユーキを見つめたまま固まった。

同時に、ユーキの膝が折れる。

ビキリ、と。何かがユーキの内部で軋みを上げる。自分の身体すら削るほどの強い怒り、世界を塗り替えるほどの強い意志。その代償を受けたまま、彼はキリトに向かって。

「行け、『スイツチ』だ」

「――うオおおおおオオオオオオ!!!」

キリトは駆ける。

キリトは雄叫びを上げてザ・ダイアータスクへと斬りかかる。

そうして剣が光る。繰り出すソードスキルは『バーチカル・スクエア』片手剣のソードスキルの一つ。4連撃垂直に斬り込む連続技だ。

――行け、斬れ、倒せ。

――今のオマエは誰よりも。

ユーキは膝をつき、痛みに耐えながら。

「――強い!」

「喰らえエエエエ!!」

キリトの咆哮は答えるように、彼が持つ直剣が一際、不自然なほど白く輝き始める。

そして彼は胸元に、剣を斬りつける。その数は四、それを『ほぼ同時』に怪物に叩き込む――。
瞬間。

「!?!?」

絶叫にも似た劈く悲鳴が、大部屋に響き渡った。

同時に、ビシツと音を上げて怪物の身体がヒビ割れ始め、無数ガラス片となり、四散し仮想世界から姿を消した――。

第12話 兄と妹は家族になる

2023年2月15日 PM18:05

第十八層 主街区『ユーカリ』とある宿屋

日は完全に落ちて、アインクラッドの空で星々が輝き始める

第十八層の迷宮区のボスである『ザ・ダイアータスク』を撃破したアスナ達五人は、そのまま第十九層へ進まずに主街区『ユーカリ』まで戻ってきていた。進むのが怖くなった、という理由ではない。一度休息が必要、と彼女達のリーダーとなっているアスナが判断したからだ。

その判断にユーキは異議を唱える様子はない。むしろそんなもの唱えるほど資格など、自分自身にはないと考えているからこそ、彼は黙って従うことにした。

主街区に到着するや否や、一同は解散することにする。

アスナはどこかに消えて、キリトもフラフラと輪から離れた。エギルは『風林火山』というギルドメンバーと飲む為に、酒場へと向かう。そしてユーキと言えば――。

「アンタ、もう少し優しく扱いなさいよね」

「……………」

リズベットに小言を言われていた。

ちなみに、彼女が何に対して「優しく扱え」と言ったのかというと、彼の防具に対してだ。彼自身と同じくらい酷使され、耐久値もギリギリだった防具を見て、思わずリズベットは頭を抱えていたことをユーキは思い出す。

リズベットの小言はまだまだ続く。

ユーキの防具にヤスリをかけてメンテナンスをしながら「大体アンタは無茶ばかりする」など「アスナが心配する」など「キリトがムキ

になる」と次から次へと出てくる。

それにユーキからの反応はない。布製のズボンを履いて、上も同じ布製の服を着込んでいる。そして、小言をBGMとして耳に入れながら、辺りの様子を見る。

彼らが居るのは『ユーカー』にある宿屋のロビーである。

第十八層に到達出来たと思ったら、アインクラッドナイトが壊滅的打撃を受け、『はじまりの英雄』や『紅閃』が救出に向かったと思ったら、第十九層へと続く階層が開く。

目まぐるしく変わる情勢に、他のプレイヤーはついて行けずただ、ざわつくことしか出来ない。

そんな中、話の中心人物が宿屋にいる。

プレイヤー達が注目しているのはユーキではない。顔を隠して活動していた彼を、誰も『アインクラッドの恐怖』だとわかるプレイヤーは限られている。となると、プレイヤー達が注目しているのは『はじまりの英雄』と『紅閃』のパーティーメンバーであるリズベットとなる。

彼らは宿屋のロビーの隅にいる。地面に座って作業しているリズベット、それを立ちながら壁にもたれ掛かって見下ろして見守るユーキ。

注目されるには地味過ぎる場所であるにも関わらず、一心に視線を集めていた。

「……随分と人気じゃねえか」

「バカね、あたしが人気なんじゃなくて、アスナとキリトが人気なの」

ガリガリ、とやすりでユーキの防具のメンテナンスを行いながら答えた。

注目されることになれているようで、その手が休まることも動揺している様子もない。

リズベット本人ではなく、キリトやアスナというプレイヤー越し

に、リズベットが見られている。その事実を正確に認識しながら、彼女はふてくされる様子もなく朗々と続けた。

「キリトはともかく、今のアスナは凄いのよ？ アンタが別行動を取ってから、剣の腕がヤバイくらい上がったんだから。最近じゃ『紅閃』とか呼ばれてんだから」

「……オマエは、それでいいのかよ？」

ユーキの問いの意味。

言ってしまうえば、今のリズベットはキリトとアスナというプレイヤーの付属品のような扱いだった。

それが彼にとつて我慢ならない。彼女も、ここまでユーキを追いかけて来た。世話焼きで、姉御肌で、装備を整えてくれる彼女は生命線を握ってくれていると言っても過言ではない。

そんな彼女をどうして誰も見ないのか。どうして誰かのおまけ、といった扱いを受けなければならぬのか。

ユーキの心中を複雑に感情が渦巻く。

その感情を隠すように、腕を組んで誤魔化す。だが、リズベットは迷うことなく答えた。作業している手を止めずに、ユーキが何を言わんとしているか理解しているように。

「いいわよ」

「そうか」

「そうよ。それに、アンタ達とこうして行動することを望んだのは、あなただもの」

初めて彼らと会ったことを、リズベットは思い出す。

しつこく絡んでくる男をキリトから助けてもらい、ユーキとアスナを紹介してもらった。

第一層で、まだ心に余裕がないリズベットに対して、ユーキ達は真逆の存在だった。どこか楽しそうで、デスゲームであつても希望を持

ち、どのプレイヤーよりも前を向いて歩いていった。

当時の光景を思い出しながら、リズベツトは笑みを浮かべて続ける。

「ここだけの話、あたしはアンタ達が羨ましかった」

「羨ましいだど？」

「ええ、そうよ。だってアンタ達は楽しそうだったんだもん。この世界ではあつさり人が死ぬ、でもアンタ達は絶望することなく前を向いていた。そして——本当に楽しそうだった」

アンタは一度も笑わなかったけどね、と茶化すような口調で言う。

「だから、いいの。あたしがキリト達のおまけでも、あたしは満足してる。こうしてアンタ達の鍛冶師やれて満足してる。ありがとう、あたしをあの時パーティーに入れてくれて」

「……礼を言うのはオレの方だろうか」

苦虫を噛んだような、苦い顔になりながらユーキは言葉を吐き出す。

礼を言うのはユーキの方だった。

勝手に突っ走り、勝手に判断して、勝手に無茶をした。放っておけばいいのにも関わらず、アスナとキリト——そして、リズベツトはこうして後を追いかけてきてくれて、結果的に追いついてしまった。

それがどれほどの意味があるのか、どれだけ救いになったことか。

自分のような終わっている人間が死んだら悲しんでくれる者がいるという事実には、ユーキがどれほど救われたのか。それは本人ではないとわからないだろう。

同時に、迷惑をかけてしまった自分に対して苛立ちを隠せない。

ユーキは奥歯をガリツと噛み締めて、自身に怒りの感情を向けたま

ま口を開く。

「オレはオマエらに迷惑をかけた」

「……」

「一人で突っ走って、オマエらの話を聴こうとしなかった」

「……そう、ね」

「リズベツト、悪——」

悪かったな、と謝罪する前に、リズベツトが言葉を遮った。

「——別に謝る必要ないわよ」

「あ？」

「だってそうでしょ？ アンタが勝手やったように、あたし達も勝手やっただけ。アンタの言い分も聴かないで、あたし達はあたし達のやりたいようにやっただけ。アンタと何が違うの？」

思わず言葉を失い、眼を丸くしてユーキはリズベツトを見下ろす。対するリズベツトはニヤリ、と子供が悪戯をする時のような笑みを浮かべて。

「それに、本当に謝るべき相手はあたしじゃなくて、アスナなんじゃないの〜？」

「それはどういう意味だ？」

「わからないならイイわよ。ただ忠告するけど、アスナってモテるのよ？ 油断して横から搔っ攫われないようにね？」

リズベツトが何を言わんとしているのかイマイチ的を得ない。

不思議そうに首を傾げるユーキに、呆れるように首を横に振ってリズベツトが立ち上がる。

「よし、メンテナンス終わり！」

はい、とユーキの装備一式を差し出して、彼はそれを素直に受け取って申し訳なきように続けた。

「助かる」

「うーん、調子が出ないわね」

「……何が言いたいんだオマエ？」

「素直なアンタってらしくない。ユーキは少し捻くれてた方が良いわ」

ニツコリ笑いながら勝手な言い分をぶつけてくる眼の前の少女に、ユーキは忌々しげに舌打ちをすると。

「うるせえヤツだ、言いたい放題好き勝手言いやがって。さっさと寄越せよ」

「うんうん、らしくなつてきじゃない」

強引に装備一式を受け取ると、ユーキはリズベットに背を向けて宿屋出口へと向かう。

その背を見送りながら、リズベットは溜息を吐いて。

「面倒くさいわね、男って。どうして仲良く出来ないの?」

「……決まってるだろ、あの野郎が気に食わねえからだ」

「まあいいけどね。このまま真っ直ぐ行くの?」

呆れる口調で問いかけるリズベットに、ユーキはいいや、と否定しながら。

「——先に片付けなきゃならねえ用がある」

.....
.....
.....

PM 18 : 30

第十八層 主街区『ユーカリ』 大通り

紫のローブを来た少女——ユウキというプレイヤーは満足していた。

第十八層の最上階にあるフロアボスへ向かう最中、壊滅状態にあるアインクラッドナイトを発見すると、護衛のために少女とストレア、そして『風林火山』という『はじまりの英雄』の友人が立ち上げたギルドメンバーと共にユーカリまで送り届ける。

それが終わった頃には、もう何もかもが解決していた。

第十九層へ続く道は拓かれ、続々とプレイヤー達は上層へと目指す。

そんな中、ユウキはこの層に留まっていた。もはや第十八層にいるのは、壊滅したアインクラッドナイトの面々、そしてそれを救った『はじまりの英雄』の仲間達やその協力者達、あとは十八層でやり残したクエストを消化するプレイヤー達くらいのものだろうか。

ユウキは空を見上げ、こちらからどうするか考える。

これ以上、兄の後ろをついて回っても彼の迷惑だろうと、ユウキは考えていた。兄に自分には必要ない、何せ兄にはかつての仲間達が追い付いて、これからは共に行動することだろう。となれば、自分のような人間がその輪に入ることなど出来はしない、とユウキは結論付けてしまっていた。

となれば、兄から離れるしかない、と。

寂しくない、といえは嘘になる。家族となる筈だった兄を守るためにソードアート・オンラインにインして、共に行動することが出来た。それだけで少女にとって満足だった。

これ以上望むのは、高望みとなるし、何よりも全てを奪った自分自身に許せない。

いつものように目深く被っていない。

ユウキは空を見上げた。兄を守ると言う目的を達成してしまった今、自分はどこに向かえば良いのか悩んでいる所に。

「何してるの?」

薄紫色の髪の毛——ストレアがユウキの後ろから声をかける。声をかけられたユウキは何も考えずに、自然とストレアの方へと振り向いた。

彼女は防具を外していた。

どこか肌を露出するような、胸を強調した紫色でまとめられた装備ではなく、露出を控えたようなロングスカートを履いて、白色の長袖の布製のシャツを着ている。

武器も装備していない町娘のような格好。だがそれでも、彼女は目立っている。

そんな友人に、ユウキは困ったように笑い。

「いやー、これからどうしようかなーって」

「ユーキと一緒にいないの?」

「……そんなこと、出来ないよ」

不思議そうに首を傾げるストレアの間に、ユウキは居心地悪そうに目を伏せた。

一緒に居たい。

しかし、そんなこと出来るわけがない。元々、そんな資格などない。何もかもを奪ってしまった自分が、彼から家族が一緒にいるという人並みの幸福を自分は奪ってしまった。加害者が、被害者と共に行動できる訳がないし、許される訳がないのだ。

ストレアはユウキの心境など知ってか知らずか、心の壁を壊すような勢いで問う。

「今までずっと一緒だったのに、離れるの？」

「それはにーちゃんが一人だったから……。このまま戦い続けられれば、死んじゃうと思ったから……」

不眠不休、食事もまともに摂らなかつた兄をユウキは思い出す。

彼はずつと前だけ向いていた。自分の身体が傷つこうが、前だけを向いて進んできた。それが例え獣道だろうが、困難な道程だろうが、その意思は折れることはない。困っているプレイヤーがいれば、粗暴な態度で手を伸ばして、その後を追いかけて倒れた自分を、兄は決して見捨てなかつた。

結果的に、自分は兄の足を引っ張っていたかもしれない。自分がいなかつたら、もつと早く攻略の道を進んでいたのかもしれない。

それでもユウキは兄を放っておけなかつた。迷惑だとしても、このまま進めば死ぬ。そんな死地へ怯みなく進む兄を、彼女は黙って見ていられなかつた。

ユウキは何かに耐えるように、ギュツと両手を握る。

そして震える声で続けた。

「でもボクはもう必要ないんだ。もうにーちゃんには、あの人達が――

――アスナ達がいるもん」

「アスナは一緒に守ろう、って言ってたよ？」

「勿論、ボクも守るよ？　でも傍に居るのはアスナ、ボクは影からにーちゃんを守る」

その選択はかつてのユウキが選んだようでもある。

自分は仲間の輪に入れなくても良い、と自分自身を蔑ろにしているかのような選択。

思わずストレアは溜息を吐いた。

似たような思考、自己犠牲とも取れる行動に呆れるような口調で、肩を大げさに竦めながら。

「兄妹だからって、似すぎてるんじゃないのー？」

「……それは、嬉しい、かな」

兄と似ていると言われて嬉しいのか、ユウキの口元が少しだけ笑みを浮かべる。

対してストレアの口元にはニヤリ、と意地の悪い笑みが貼り付けられていた。顔を伏せているユウキからは見えない、そんな笑みを浮かべてストレアは目の前のユウキではなく、背後に居る人物へと話しかけた。

「だってさ——お兄ちゃん？」

「えっ？」

ストレアが言うお兄ちゃんとは誰なのか。

ユウキは嫌な予感を感じて、勢い良く顔を上げる。

その予感は的中していた。

金髪碧眼の少年がストレアの背後で、腕を組み目を瞑り事の成り行きを静観していた。少年はユウキがいつも見ていたツギハギだらけの防具ではなく、布製のシャツとズボンでラフな格好。

少年の姿を認めると、思わずユウキは目を丸くする。

身体が震えて、上手く言葉に出来ない。ユウキの頭の中は真っ白と化していた。

「あとはよろしくね、お兄ちゃん？」

「お兄ちゃんって誰のこと言ってるのオマエ。さっさと消えろ」

「ありや、ダメ？　じゃあパパってどうかな？」

「消えろ、って言ったのが聞こえなかったのか？」

ストレアの軽口に、無感情に応じる。そしてストレアは少年の要望に応じて、この場から足早に去った。

それだけのやりとりで、少年の心を読み取ることはユウキには出来なかった。

それでも、身体を震わせながらも、ユウキは言葉にする。いいや、言葉にしなければならなかった。

どの辺りで自分を妹だとわかったのか、どうしてここにいるのか、自分のことをどう思っているのか。気になることとは山のようにある。

しかしどれもこれもこの場に相応しくない。

自分の罪を清算出来るとはユウキも思っていなかった。ただ少年に、言わなければならぬ言葉がある。

「茅場優希さん。ボクは貴方に謝らないといけなことがあるんだ……」

「それは、何だ？」

「それは……っ！」

やはり、少年の感情は読み取ることが出来ない。

腕を組んだまま、目を閉じたまま、言葉には感情を乗せずに、淡々とした調子で清聴している。

決めた筈なのに、言い淀む。

罪が償えると思っていない、許されるとも思っていない、この謝罪は所詮自己満足に過ぎない。それはユウキ本人が一番良く理解している。

だがそれでも――。

——謝るんだ。

——にーちゃんに何言われても良い。

——謝らなきゃいけないんだ。

——ボクはこの人に、謝らなきゃいけないんだ……っ！

悪いことをしたら、それを謝らなければならない。

いつの間にか身についていた原初の常識通り、ユウキは意を決して少年を見る。腹の奥底に力を入れて——再度覚悟を決めた上でユウキは口を開いた。

「貴方のお父さんとお母さんが亡くなった原因は、ボクにあります」

「……何を言ってるやがる。アレは事故だった、こつちに突っ込んで来たクソが居眠りしたせいで起きた事故だ」

「違う、違うよ！　ボクがお義父さんに、にーちゃんがどんな人か知りたいって言ったから、お義父さん達は車に乗ってしまった。ボクが何も言わなければ、お義父さん達が死ぬことはなかった……っ！」

それは懺悔でもあった。

それは自刃でもあった。

自身の罪をぶちまけて、その言葉は自分自身を傷つける。

溢れ出した感情は止まらない。言葉はひとりでに溢れ出し、目元からは大粒の涙が溢れ出す。

泣くことなんて許されない、そう自虐しようにもそれは勝手に溢れ出してしまっていた。

「ボクが、ボクなんかが助からなければこんなことにならなかった！

そうすれば貴方は今も、お義父さん達と楽しく暮らしていた！　ボクが何もかも奪ったんだ！」

「……そうか」

ポツリ、と呟いて、少年は事実だけを静かに受け止める。

対して、ユウキは震える声で涙を流しながら。

「ごめんなさい、ごめんなさい！ ボクが貴方の何もかもを奪った。お義父さんとお義母さんに助けられたのに、あの二人をボクは……っ！」

そして勢い良く頭を下げる。

目をギユツと瞑り、首を切り下ろされる為はその場に居る罪人のように、ユウキは震えながら次の少年の言葉を待つ。

その静寂は数秒か、数十分か。

ユウキにとって永遠とも取れる沈黙。それを破ったのは、やはり少年だった。

「それが、オマエの『謝らなければいけないこと』ってヤツなのか？」
「……………っ！」

返答はない。

しかし伝わったようで、少年はただ静かに「そうか」とだけ応じる。頭を下げたままにいるユウキからは、少年がどのような表情を浮かべているのかわからない。

ただ言えることは、足音が聞こえるということだけ。静かに、ただ静かに、その歩はユウキへと近付いてくる。

ユウキとしては、少年に殺されても仕方ないと思っていた。

少年の両親を奪い、自分だけ助けられてのうのうと生きている。だからこそ、ユウキは殺されても仕方ないと思った。それだけのことを自分は犯してしまった、ならばそれ相応の罰を与えられるべきであるとユウキは受け入れていた。

そうしていると、歩が止まる。

ユウキの眼の目で、頭を下げているユウキの目の前でそれは止まる。

主街区は圈内、となるとプレイヤーを殺すことも出来ない。圏外ま

で付いて来い、と言われれば彼女は本気で付いて行くことだろう。

だが彼女を待っていたのは言葉による罵倒でも、自分を殴打する衝撃でも、少年が悲しみに打ち拉がれている訳でもなかった。

ユウキを待っていたのは――。

「――え？」

――温もりだった。

ユウキの下げている頭に、何かが乗っている。

それは優しく扱うように、壊れ物に触るような大事に、ユウキの頭を撫でていた。

恐る恐る顔を上げる。

視界に入ったのは、少年の――ユウキの優しい表情。

その眼はかつて自分に向けられていた義母のように蒼い瞳で、養父のように粗暴であれど優しい声色で。

「今まで、良く頑張ったな――？」

「あ……あ……」

褒められたかったから、今まで頑張ってきたわけではない。

でもその言葉は、ユウキにとって一番言っただけで――

「――さすが、父さんと母さんの娘だ」

「あ――」

それが、限界だった。

ユウキは無意識に、兄に抱きついてその顔をその胸に埋める。

涙で服が濡れる、そんなに力いっぱい抱きついてはシワになるかもしれない。そこまで考えられるほど、今のユウキに余裕など

なかった。

「ごめん、ごめんなさい。にーちゃん、本当にごめんね……！」
「バカ野郎、謝ってんじゃねえよ。父さんと母さんが死んだのは、オマエのせいじゃねえよ」
「でも、でもお……！」

いやいや、とユウキは顔を横に振る。

その罪悪感の身を削っていくものであることを、少年は誰よりも熟知していた。お前のせいではない、間が悪かつただけだ、と言葉を並べた所で、罪悪感の簡単には拭い去ることが出来るものではない。

だからこそ、兄は妹に送った。
自分自身が許せないというのなら――。

「オマエが罪に感じてるっていうんなら、オレが許す」
「にーちゃんが、ボクを……？」

縫るように見上げてくる妹を、兄はもう一度頭を撫でながら。

「だからいい加減――オマエはオマエの為に生きてやれ。それは父さん達も望んでいることだ」
「で、でもそれじゃ……！」
「許してやるって言ってるんだ。だがそうだな、オマエがまだ不服っていうなら――」

頭を撫でていた手で、ユウキの頬を撫でながら。

「――罰として、オレと家族になれ」
「え……？」

「情けねえクソ兄貴が出来ることになるが、我慢しろ。それがオマエの罰だ、黙って受け入れろ」

「ボクで、良いの?」

「オマエじやなきやダメだ。何せオマエは父さんと母さんの娘で、この世で残ったオレのたった一人の家族なんだからな」

「うん、うん……!」

また涙を流す。

声を詰まらせて泣き、抱きつきながらユウキは必死に言葉を紡いで行く。

「なる、なるう……! ボク、にーちゃんの家族になるよお……!」
「そうか」

泣きじやくる妹を抱きとめて、兄はどこかほつとした顔で見守ると、すぐに態度が悪く、粗暴な口調で続けた。

「つたく、ピーピー泣いてんじゃねえよ」

「だつてえ、だつてえ!」

「オレにキレられた時はへこたれる様子もなかったのに、本当に同一人物かよオマエ?」

「でもアレはボクのことを想って怒ってくれたんでしょ?」

「……誰がそんな戯言ほざきやがった?」

「アスナだよ?」

「アイツ、また勝手なことを……」

毎回毎回、自分を優しい人間だと勝手に翻訳する幼馴染に対して、吐き捨てるように呟いた。とは言っても、今回は間違った翻訳ではないので、ユーキも怒るに怒れない。

そんな彼を見上げながら、ユウキはどこか申し訳なさそうに服の裾をクイクイと引っ張る。そして何うような口調で。

「ねえ? ボク、今までのにーちゃんの事聞きたい……」

「今までって言うのと、どこまでだ？」

「全部。にーちゃんとお話したいんだ」

ダメ？と首を傾げて、恐る恐るといった様子で問う。
対してユーキはバツの悪そうな顔で答えた。

「今日は都合が悪いな。今度、必ず時間を作る」
「何かあるの？」

ああ、と簡単に答えると。

「――ケジメをつけに行くだけだ」

それからユーキは妹と別れて、その場所までやって来た。

第十八層『ユーカリ』。それは第一層『はじまりの街』と似たような作りである。教会があり、噴水広場があり、露天エリアがあり、商業エリアがある。ただ違うと言えば、黒鉄宮の有無くらい。

ユーキがやって来た場所とは、『ユーカリ』の中央広場。
その景色もやはり『はじまりの街』によく似ており、その風景は見覚えがあった。

それは茅場晶彦にデスゲームが告げられた広場に、ソードアート・オンラインがゲームであって、遊びではないことを思い知らせた場所に、良く似ていた。

「――」

今のユーキはラフな私服姿ではない。

リズベットにメンテナンスされたツギハギだらけのフルプレート。頭部を覆う兜『スケープ・ゴート』を被り、その右手にはモンスターキラーからドロップした両手剣、石斧剣が握られている。

この姿で、ユーキは進み続けた。

無謀にも独りで攻略することを選び、身を削りながらここまでやって来た。その代償は、左手の感覚の喪失、左目の視力の紛失である。

もはや戦闘に支障をきたすレベルまで達していた。だがそれでも、彼は泣き言を言わずに、これからも進み続ける。

ましてや。

「」

対峙している男に、弱っている姿など晒すことなど出来るはずもなかった――。

それは少年。

全身黒ずくめとも呼べる装備。黒いロングコートを羽織り、防具らしい防具は胸当て程度の軽装。黒いレザーパーツに、手には黒のグローブ。

黒よりも黒く、墨よりも黒い。そんな少年が、ユーキの目の前に立っていた。

まるで示し合わせたかのように、まるでユーキがここに来ることがわかっていたかのように、黒ずくめの少年は大して驚かずにユーキの存在を認める。

そして手慣れた手つきで、メインメニュー・ウィンドウを開くと。

「」

ユーキの視界に、半透明のシステムメツセージが出現した。誰から

の内容か、などと考えるまでもない。ユーキは考える素振りすら見せず、文面も読まずに『YES』ボタンに触れた。そしてカウントされる60秒。

黒ずくめの少年——キリトは不敵に笑みを浮かべて背中から片手剣を勢い良く抜き去り。

ツギハギ防具の少年——ユーキは兜の奥でキリトを睨めつけて、石斧剣を片手で構えた。

もはや、言葉はいらず、御託も不要だった。

キリトはここまでユーキと決着をつけるために追い付いてきて、ユーキも感じ取り応じる、それだけの話だった。

対等に向き合うためにキリトは戦い。

対等に肩を並べるためにユーキは臨む。

両者がこうしてぶつかり合うのは必然であったように、両者がこうして向き合うのは運命だったように。

デスゲームなど「状況」でしかなかった。

ユーキにとって、キリトにとって、このデスゲームは。

全ては今、目の前にいる男と戦うためだけにあつたのだと——

60秒のカウントダウンがゼロになる。同時に『DUEL』といった文字が二人の間に弾かれた。

言葉もいらなければ、合図もいらぬ。剣を握り締め、同時に飛び出す。

二人の間は数十メートル。一息に詰めることの出来る距離。

二人が行うのはデュエル。ルールは『初撃決着モード』。

観客は誰もいない、中央広場にいるのは少年二人のみ。

『はじまりの英雄』と称される少年。

『アインクラッドの恐怖』と畏怖される少年。

二人の66戦目の勝負。その火蓋が切って落とされる——。

第13話 決闘 〔Re:1〕

〔エギルが話す、二人の少年〕
え、何だと？

キリトとユーキどっちが強いか？

そんなもの俺にはわからんね。俺から見たら、アイツら同じような化物だ。いいや、化物に可哀想かな？

どっちも凄いじゃダメなのかこれ。ああ、ダメか。どっちが強いか知りたいって？

にーちゃんの方が凄いもん？ まあまあ、ユーキの妹も落ち着けよ。

キリトの方が凄い？ クラインも何をムキになってるんだお前。だがそうだな。

俺もちよつと気になってきた。

ユーキと一緒に居た頃は、勝負ばかりしていたからなアイツら。

同じ勝敗なんだろう？

そういえばリズに聞いたが、今頃アイツら勝負してるんだっけ？

どうして戦うのかわからないとか言ってたな。仕方ないだろう、男つてのはそういうもんだ。コイツにだけは負けたくない、そんな人間が一人や二人いるもんだ。

それにアイツらは別格。不器用で、うまく言葉に出来ないときた。だったらぶつかり合うしかない。言葉に出来ないのだから、行動で示すしかない。

え、そんなことはいい？ どっちが強いのか知りたい？

……お前もめげない奴だな。

まあ、ユーキとはリアルでの付き合いだ。俺の店に、アスナと一緒に何度も遊びに来てくれている。いわゆる常連って奴だ。

俺はユーキが負ける姿が想像できないね。曲げないというか、絶対に折れないような奴だからな。まあ、頑固なヤツなんだよ。

アイツが負けるってことは、アイツの心が折れたってことになんじやねえかな——？

.....

2023年2月15日 PM19:02

第十八層 主街区『ユーカリ』 中央広場

キリトとユーキ。

二人がこうして対峙するのは数えること66度目。彼らは様々な方法で、あらゆるルールで彼らは激突してきた。数ある激突、しかし理由は単純なモノ。単純に『この男に勝利し、対等な立場になりたいから』という簡単なモノに過ぎない。

確かに、二人の最初にあった胸中はモノは違った。

お互い、二人はいがみ合っていた。自分が傷ついても構わない、だけれど周りの被害は最小限。もつと自分を甘やかしてもいいのに、自分に厳しい。そんな彼らを彼らは嫌っていた。それは同族嫌悪にも似た感情だった。

しかし今は違う。

——認めてやるよ。

——オレはオマエに憧れてる。

——オレにはない強さってヤツをもってる、オマエを羨んでいる。

キリトの強さ。

それは類まれなる『反応速度』でも、物事を見通す『洞察力』でもない。真にキリトの武器となっている骨子、それは——不屈の精神性であると、ユーキは断ずる。キリトは別に精神が強い、というわ

けではない。歳相応で、困難にぶつかつたら折れることもある。キリトの強さはその後から生じるものだ。

彼は折れても、どんなことがあつても、必ず立ち上がる。デスゲームに心が挫かれようと、恐怖を叩き込まれ足が竦もうと、仲間が一人で進もうと、彼は立ち上がり前進する。

見る人間が違えば、その程度の強さと一蹴するかもしれない。

だがユーキにとっては、キリトのあり方は充分に脅威に映り、憧憬の念を抱かせるには充分なモノであった。

自分もキリトのように、最後には立ち上がれる強さを持つていれば、こんな腐つた人間になどにならなかつただろうと自嘲する。しかしそんな「もしも」の話をするつもりなど、ユーキにはなかつた。

今はただ、キリトと肩を並べたい。

そのためだけに、彼と対峙している。彼に勝利し対等な者となるために、ユーキは剣を握る。

単純明快な理由。

もはや二人に、言葉など、不要だつた。

「――！」

「――ッ！」

同時に駆け出して、二人の視線が重なる。

はじまりの英雄と呼ばれる少年が右手にもっていた片手剣を振り上げる前に。

「オラァ！」

「グッ……！」

アインクラッドの恐怖の両手剣が、勢い良く振り下ろされる。それに合わせて片手剣を水平に構えて何とか受け止めた。

両手剣と片手剣がかち合い、ガツギイイイ！という甲高い音が中央広場に木霊する。

キリトの顔に浮かぶのは苦悶の表情。

片手で振るわれた両手剣。それは想像に反して力強く、重く、鋭いモノであった。耐えきれず、キリトは片膝を地面に付き、何とか拮抗する。

力勝負では勝てない。

その事実を受け止めて、どうすればいいかキリトは思考を巡らせる。

だが――。

「おい」

ここで、アインクラッドの恐怖は上から容赦なく。

「――このオレがオマエに、考える時間を与えてやると思っているのか？」

「なっ……!?!」

黒よりも黒く、墨よりも黒く、闇よりも黒い。

ユーキの身体から、黒の力の本流が噴出する。それはまるで炎のようで、自身をも焼き尽くす。そんな理不尽な力を、情け容赦なく開放していく。

ユーキの『力』の開放。自身に向けられた憤怒によって発現された力、ここまで一人でフロアボスを攻略することを可能にしていた力を、個人に向けて発現させた。

だがこれは、個人で振るうには手に余るモノ。その代償は――自身の崩壊。

キリト達が合流するまで、ユーキは記憶を欠落し、今も左目の視力は回復せず、左手の感覚は喪失している。

それは毒だ。絶対的な力を行使出来るが、その代償に身体を蝕んでいき、最終的には死を約束されている。誰にも負けない力を手に入れる代わりに、身の破滅が約束された猛毒の類。普通の人間なら使うこ

とを躊躇う力を、ユーキという人間は躊躇うことなく使う。

それも今まで、ユーキ本人死んでも誰にも影響がないと考えがあった故だ。

今となって彼は知った。自分が死んで、悲しみ怒り嘆く人間がいてくれる存在を彼は知っている。だがそれでも、知っていても――

「――このまま、叩き潰す」

ユーキの剣は防がれている。にも関わらず、そのまま砕き両断する勢いで、ユーキは力を強めていく。

同時に、頭部を守る『スケープ・ゴート』の奥の更に奥。頭の奥からミシミシという締め付けられるような音が伝わってきた。このまま『力』を使い続ければ何が起きるかわからない。アバターが耐えきれず、砕け散る可能性すらあるかもしれない。

そうなれば、待っているのは死だ。ユーキの知る何者かが悲観に打ち拉がれているかもしれない。

それでもユーキは、歯を食いしばり『力』の行使を緩めることはない。

目の前にはキリトがいる。自分は彼と対等に向き合い対峙している。

それだけで充分、充分過ぎる場面、充分過ぎる理由だった。

ここは、この場面だけは、この瞬間だけは。

――ありとあらゆる力を使い、本気でキリトと、向かい合わなければ、ならない――と。

このままでは、武器の上から叩き斬られる。

キリトは予感すると、無我夢中で両腕に力を込めて、叫びながら。

「ッ、オオオオオオオッ！」

一瞬だけ、ユーキの暴力と拮抗する。

だがそれも一瞬、このままの状態であれば、すぐに押し返されて数秒前の再現となるだろう。

しかし一瞬、されど一瞬。拮抗できればキリトにとって、その一瞬だけで充分だった。

「……ッ！」

その一瞬の隙を突いて、キリトは吹き飛ばされる勢いで横に転がり、態勢を立て直して後方へ飛ぶように距離を開ける。

たった一合、キリトの片手剣とユーキの両手剣を合わせただけで、力勝負では話にならないことを叩き込む。現にキリトは肩で大きく息を切らし、歯を食いしばりユーキを睨みつける。よく見れば両足が震えており、体力も大きく削り取られている事がわかる。

「……」

兜の奥で、ユーキの唇が微かに歪んだ。

最初の一撃、自身の力を全力で行使した一撃を振るい、それでも対峙した少年は立ち上がる。それを見て、ユーキは何を想ったのか。彼自身ですら明確な答えを見つけれないまま、ユーキは己の内に眠る意思を更に噴出させていく。それは更なる闇、自分自身すら燃やし尽くす程の黒い憤怒。

途方もない暴威を身体から噴出させ、彼の背中に収束させる。それは渦となり、一回転二回転三回転、と連続で回転数が増す。

そして右手に石斧剣を突き出して、前に倒れ込むように身体を脱力させる。

だが同時に——ドンッ！と発破をかけたような爆音が響くと、衝撃となり辺りを叩き込む。

そしてそれは計り知れない推進力となり、ユーキはジェット噴射のような勢いで、キリトへと殺到する。

それは一本の槍のようで、絶対前進する突撃槍のようで、真っ直ぐにキリトへと飛ぶ。

「な——ッ!？」

反応速度が思考を凌駕するかのようになり、考える前にキリトは横に飛び躲す。

対してユーキは驚くことなく、むしろキリトなら躲して当たり前とどうかのように、地面に足を付きガガガッ!と地面を削るような音を立てて、無理矢理停止すると、ユーキも真横に飛ぶキリトへ再度突撃する。

今度は横薙ぎ。

何もかもを吹き飛ばし、何もかもを削り斬る。そんな途方もない一撃が容赦なく、はじまりの英雄へと襲いかかる。

しかしその一撃は、再び防がれることになる。

だがただ防ぐだけではない。キリトは受けるのではなく——。

「うおおおッ!」

——弾く。

下から上に、片手剣を突き上げて、ユーキの横薙ぎの一撃を突き上げるように弾いた。

思わず、ユーキも面を食らう。

だがそれは一瞬。直ぐに口元を歪めて、弾かれた石斧剣はそのまま、キリトへと振り下ろされる。

「ぐっ——あ……ッ!」

三度、ユーキの暴力は防がれる。しかし状況は同じではない。

ユーキの一撃は通らなかつたものの、キリトは威力を殺しきることが出来なかつたようで、そのまま後方へと勢い良く吹き飛ばされる。

その一撃は戦意を削ぐには充分過ぎる一撃だった。

一人のプレイヤーとして考えられない一撃、一人の人間が振るえる臂力の範疇を超えている。通常のオンラインゲームであれば、チートの一言で片付くかもしれないが、生憎『ソードアート・オンライン』は普通のオンラインゲームではない。チートなどという違法は存在せず、己が鍛え抜いたレベル、剣技がそのまま形となり反映される。

ユーキの『力』は正にそれであった。己の「絶対なる意思」が力となり、負の感情が黒い炎としてアバターの身体から噴出され、容赦なく敵対する者達を叩き潰していく。その姿はベルセルク、敵の戦意を挫き、敵対する人間に恐怖を与える。故に——アインクラッドの恐怖。

そしてキリトは、そんなユーキの暴威を真正面から味わってしまった。

だがそれでも——。

「、」

——はじまりの英雄は、倒れない。

彼は片膝を突いて、歯を食いしばり、再び立ち上がる。そう、再び立ち上がったのだ。

一撃を受ける毎に戦意を削られようと、余力などどうの昔に存在しない。最初の一撃を受けてしまった時点で、キリトに余裕などない。先程よりも呼吸は荒く、身体中から汗が滴る。剣を握る手は感覚がないのかブルブル小刻みに震えて、両足は踏ん張りが効かないようでもある。そんな有様になろうと、キリトは立ち上がってみせた。

その姿に、ゾツと。

ユーキは鳥肌が立つ感覚を覚えた。それは恐れているからではない、嬉しそうに歓喜に震えながら、キリトの存在を認める。

自分と対峙したプレイヤーで、こうして立ち上がってみせた者は皆

無だった。誰もが恐怖に震えて、化物を見るような眼で縋るように見つめて、二度とユーキの前に立ち上がることはない。それもそのはず、そうなるようにユーキが恐怖を叩き込んだのだ。立ち上がれないのも無理はない。

だが、キリトだけは違った。恐らく彼もまた、恐怖を覚えているのだろう。それでも彼は立ち上がった、何度叩き潰してもキリトは立ち上がってみせた。

——やっぱり、コイツは強い。

——ストレアは、オレと同じ力をコイツも使えるって言ってやがった。

——それは大きな間違いだ。

——オレの力は間違った力、コイツの力は正しい力。

——負の感情を爆発させるオレに対して、コイツは正の感情を力として奮い立たせる。

——オレにはない、正しい力……！

兜の奥で、蒼い双眸がキリトを射抜くように見る。

言葉は粗暴そのもの、しかしその声はどこか歓喜を若干含んでいる。そんな不思議な口調で、ユーキは吐き出すように口にする。

「健気に防ぐじゃねえか」

「お前の剣がヌルいだけだろ？」

不敵に笑みを浮かべるがキリト自身痩せ我慢であることは重々承知している。

だがそれでも、眼の前に居る男にだけは弱みを見せないように、キリトは最後までその強がりを書き続けてみせた。

「お前の剣じゃ、俺は倒せない」

「デカイ口叩くじゃねえかよ。オレの剣を読み取ったつもりか？」

「読むまでもないだろう？」

キリトの軽口に、今度こそユーキの雰囲気が変わる。

ただ暴力に任せていた小手調べから、本気で仕留める鋭利なモノへと、わざとらしく変貌を遂げる。

ユーキから噴出されていた力の奔流は更に勢いをまして、黒く、更に黒く。墨よりも黒く、闇よりも黒く、何よりも黒く、何にも染まらないそれが炎のように噴出する。

ビリビリ、とその脅威を肌で感じる。

絶対的な意思の具現、アインクラッドの恐怖の絶対的な力の象徴。それらを一身に浴びながらも。

「来いよ、アインクラッドの恐怖——」

振るえる手で剣を握り締め、その口元は不敵に笑みを貼り付けて、自身も絶対に負けないという意思を秘めて。

「——第二ラウンドだ」

第14話 決闘 〔Re:2〕

キリト——本名、桐ヶ谷和人という少年は、特殊な少年であった。

歳の割には機械の知識や技術に優れて、六歳の頃ではジャンクパーツから自作のパソコンを自作するほどである。

その家族構成も特殊。これまで、和人を育てた両親は本当の親ではない。本当の両親は少年が生まれて間もなく、事故に遭い亡くなっている。

この真実、本来であれば和人が知ることなかった。

だが和人は彼や周囲が思うほど特殊であり——優秀過ぎる少年だった。

和人は偶然にも、その真実に辿り着いてしまう。親が本当の両親でないことを、妹だと思っていた存在は自分の妹ではなく、自分は——

桐ヶ谷和人という人間はどこにも存在しないということに。

それからというもの、少年から映る世界は色褪せていった。

壁を作り、自分の本心を隠し、他者との距離感が掴めない。何もかも、自身を取り巻く環境が、偽物のように感じるようになる。

自身が両親の本当の子供ではない。十歳の和人にとって、その真実は何よりも深く抉るものだったのだろう。

それを受け止めれるほど、当時の和人は精神的に脆弱であり、脆い心であった。

偽物の家族、偽物の繋がり、偽物の名前。

偽物だらけの現実で、和人がオンラインゲームにハマるのは必然だったのかもしれない。

現実から逃げるように、少年はオンラインゲームという自分を偽りながら、日々を過ごしていく。

そして、少年は出会う。出会ってしまった。

『ソードアート・オンライン』というゲームに、和人は心惹かれてい

た。

まるで現実のようで、本物であるような仮想世界を、桐ヶ谷和人は『キリト』として仮想世界を駆けてきた。

そして少年はデスゲームに巻き込まれてしまう。思い出すのは製作者——茅場晶彦の言葉だ。これはゲームであって、遊びではない、という言葉の意味を、和人はデスゲームに囚われて漸く理解する。それは必然であるように、その出会いも必然であったのかもしれない。

その出会いは第一層の『ホルンカ』という小さな村の宿屋。

それは和人と同じ年くらいの少年。金髪碧眼で綺麗な蒼い眼。しかし口調は粗暴で、態度も最悪。おまけに目つきも悪い少年は和人に乱暴に話しかける。

『オマエ、オレ達と組め——』。

出会いは——最悪の一言に尽きる。

そうして、二人の少年は、行動を共にしていった。

確かに、二人の最初にあった胸中はモノは違った。

お互い、二人はいがみ合っていた。自分が傷ついても構わない、だけど周りの被害は最小限。もつと自分を甘やかしてもいいのに、自分に厳しい。そんな彼らを彼らは嫌っていた。それは同族嫌悪にも似た感情だった。

しかし今は違う。気に入らない、という感情はあれど彼らはそれぞれ、異なった理由で対峙していた。

和人は折れることのない金髪碧眼の少年の強靱な意志に、一方で少年は打ちのめされても必ず立ち上がる和人の不屈の精神に。二人は尊敬し、憧憬し、憧れていた。自分も彼と肩を並べたい、自分も同じ景色を見てみたい。そんな気持ちに、いつしか変化していった。

そして今。

和人は一人で進んでいた、金髪碧眼の少年に追い付く。

対峙するのは憎んでいるからではない、嫌っているわけでもない。ただ、対等の存在になりたいから。

金髪碧眼の少年——ユーキに自分という存在を認めてほしいから、和人は剣を握りユーキと対峙する。

何もかも偽物である身だが、ユーキにだけは認めて欲しい、と和人は願う。

しかし、和人は知らない。

ユーキも同じ願いを抱いていることを。

和人の不屈の精神を尊敬し、強いと認め、自分も対等な存在になりたい。そんな願いをユーキも抱いていることを、和人は知りもしなかった——。

.....

2023年2月15日 PM 20:10

第十八層 主街区『ユーカリ』 中央広場

—— 剣戟が響き渡り、日が落ちた広場で、火花が生じる——

響き渡る剣戟は一つ。しかし、振るわれる剣は二本。

異なる剣術、異なる太刀筋、異なる呼吸。

二人の剣士——キリトとユーキは中央広場で、剣を交わっていた。

「オおおおおおッ!!」

「!!」

キリトが吠えて、ユーキが歯を食いしばる。

それは何合目であろうか、何十合目であろうか、何百合目であろうか。二人はどれだけ剣を交わったかど記録していない。否、そんな余分なものを記録する余力など、二人にはなかった。

誰よりも早く、何よりも疾く、更に速く。今は俄然に対峙する相手を斬ることに、全神経を注ぐ。

もはやキリトはユーキの剣を受ける真似はしなかった。

防ぐのではなく、受け流す。受け止めるのではなく、躲す。真正面からやり合いながらも、柳のように躲す。そうすることで、辛うじてキリトはユーキの剣を防いでいた。

キリトは、ユーキの凶刃を皮一枚で躲し。

ユーキは、キリトの剣筋を紙一重で防ぐ。

見ようによつては、二人の実力は拮抗しているともとれる。だが事実はそうではなかった。

押されているのは――。

「ぐ――っ――!」

キリトであつた。

自分の頭目掛けて振り下ろされた剣を、すんでのところで身を躲す。それは次の行動を計算した動きではなく、必死に今に迫る刃を何とかしようとする藻掻くモノ。

ゴロゴロと地面に転がり、自身の姿などお構いなしである。

転がりながらも直ぐに態勢を立て直して、キリトはユーキを油断なく睨めつける。

二人の距離は数十メートル。一息で詰めることの出来る距離を、今は辛うじて守っていた。

異なる剣術、異なる戦法、異なる身体能力。

全くキリトとユーキの戦い方は違うものだ。速度で翻弄するキリトに対して、腕力で敵対するものをねじ伏せるユーキ。それが、両者の埋まらない溝となっていた。

先程の一合で、ユーキと力比べするのは愚策だとキリトは判断すると、戦法を変える。

そこまではいい、問題はその後にある。これではユーキは十全に自分のやりやすい戦い方でキリトを攻めて、逆にキリトは防ぐことしか出来ない。

——どうする。

——このままじゃ……！

一手一足を見逃さないように神経を張り詰め、ユーキを観察している。

だがそれすら許しはしないように、ユーキは自身の『力』を暴発させるように、勢い良くキリトに向かって推進する。

「休憩も、なしか……！」

自分で言っただ、それは虫が良すぎる話だ、とキリトは心の中で自嘲した。

ここしかない。ユーキが攻めるのはここでしかない、この場面こそキリトを仕留める事が出来る絶好のシチュエーション。

何せキリトは肩で息をしており、最初から余裕もなければ、余力もない。防ぐばかりで、先程も必死にユーキの剣から逃げたばかりだ。流れは完璧にユーキが掴んでいる。

そんな絶好の場面を見逃すほど、キリトの知るユーキというプレイヤーは甘い性格ではない——。

だからこそ——。

「そう来ることは、」

自身に振り下ろされる石斧剣を前にして。

「わかっていた——！」

キリトは不敵に笑みを浮かべた。

振り下ろされる石斧剣。片手で振るわれたにしては、それはあまりにも強力過ぎるそれを、キリトは後方へと弱く飛んで躲す。

それだけではない。そのまま地面に着地するや否や、再び地を蹴り飛ぶ。その着地点は——ユーキの石斧剣。

「——ッ」

兜の奥で、小さい舌打ちを聞こえた。

キリトから見たらユーキの表情は読み取れないものの、それは忌々しいようにも聞こえる。

ユーキの膂力は並外れている。他のプレイヤーと比べても、類を見ないモノであろう。

だがそれでも、キリト一人の体重を片手で支えることは出来ないように、石斧剣はそのままキリトに踏み付けられたまま、地面にめり込んでしまった。

流れを、強引に手繰り寄せた。

キリトは剣を水平に構えて、流れる動作で片手剣を突き出す。

狙うのはユーキの胸部。一撃を当てれば勝利である『初撃決着モード』において、威力など関係がなかった。今は何よりも最速の刺突を、ユーキに突き立てるのみ。

ユーキは獲物を構えることが出来ない、物理的にキリトが封じているのだ。そうなってしまうえば、あとは待つばかり。普通であれば、キリトの一撃をただ待つしか、ユーキには出来ないだろう。

だが生憎、ユーキも「普通」とは程遠い人種である——。

何と彼は武器を手放し——キリトの剣を殴りつけた。

「なっ……!?!」

キリトが驚くのも無理はない。

必殺を確信した一撃を、ユーキは防いでいた。

殴る、と言っても普通に殴った訳でもない。

迫る剣の刃ではない部分、つまり剣背と呼ばれる部分を殴り、強引に軌道を変える。

——見えていた、訳じゃない。

——コイツ、直感だけで軌道を読んだのか……!?!

表情が苦悶に曇めた。

その一撃は刀身に伝わり、キリトの手に伝わり、最後にはキリトの身体へと伝わった。あまりの衝撃に、キリトの身体の軸がブレる。

マズイ、とキリトが態勢を立て直そうとするが、それでは遅すぎた。

他のプレイヤーでは類を見ない膂力を持つアインクラッドの恐怖は、殴りつけた右手でキリトの首筋を掴み上げて、そのまま地面に強引に叩きつけた。

「がっ————ッ!?!」

天地がひっくり返るように、キリトの視点が忙しなく動き回り、最後には地面に叩きつけられて漸く落ち着いた。

「クソッ……!?!」

吐き出すようにキリトは言う、必死に転がるようにその場から離脱する。

そして、再び、両者の距離が空いた。

—— 本当に出鱈目にも程がある。

—— でも、これだ。

—— これが、ユーキの戦い方だ……。

セオリーを無視するかのような、出鱈目な動き。

剣士というよりも、その戦い方は戦士のそれに誓い。型にはまらないラフスタイルな剣術。直ぐに敵に斬り込むような獰猛さの一方で、直感力に長けている。今のように素手になったところで、関係がない。剣がないのなら拳で、拳が効かないのなら足で。必ず敵を仕留めていく。

ユーキにとって剣とは、つまるところの手段でしかない。

剣が効かないのならば、別の方法で敵を倒すだけである。ソードアート・オンラインという世界では、剣が全てと言ってもいいくらい重きを置いている。その世界において、ユーキのような戦い方をするプレイヤーは特殊なものだ。

動きを分析するのは難しく、ましてや次の行動を読み取るなど至難の技だろう。

加えて——。

—— アイツ、戦い慣れている。

—— 『PVP』に慣れすぎている。

今まで、キリトはただユーキに追い付くために経験値を稼ぎ、己を鍛えて、剣術を磨き、レベルを上げて自己を高めてきた。

それはユーキも同じ筈である。単騎でボスに挑み、それを撃破するに至るほどの実力なのだ。それまで何があったのか、どんなことを経験してきたの、キリトには想像を絶する。

キリトが知らぬ所で、ユーキは修羅場を潜ってきたのだろう。

誰も想像しない死と隣り合わせの戦場を経験し、身を削りながら彼

は進んできた。その過程で、他のプレイヤー達と戦うハメになったことだつてあるのかもしれない。

だが、それでも。

——諦めはしない。

——俺は絶対に、アイツと並ぶ。

——並ばなきゃ、ダメなんだ………！

心は折れず、瞳は俄然に立つアインクラッドの恐怖へ。

だがまだ足りない。キリトが彼を打倒するには、まだ「ナニか」が足りない。

——何が足りない。

——もつとだ、もつと。

——もつと、探し出せ、搾り出せ。

——それでもしないと、アイツを倒すことなんて出来はしない……

！

アインクラッドの恐怖が何もかもを差し出してこの場にいるように、キリトも自身の用いる何もかもを差し出さない限り、打倒することなど出来はしない。

ならば何を差し出せばいいのか。キリトは全力で、この決闘に臨んでいる。自身振るえる最高の剣を振るい、思考も止めることなく巡らせ、一手一足見逃さず観察する。今まで鍛え抜いてきた剣技、勝負の駆け引き、知識を余すことなく用いてきた。

それでもまだ足りない。掛け金はすでない、故にこれ以上レイズすることも出来ない。かと言って、この勝負から下りる訳にもいかない。ならばどうすれば、どうすれば目の前にいる怪物——『アインクラッドの恐怖』を超えることが出来るのか。

しかしここで、この場面で。

「え——？」

ユーキの身体がグラリ、と。
中心を通る軸がブレたように、身体をぐらつかせた。
石斧剣を支えにして、何とか立っているような危うい状態で、ユーキは立っている。

——どうしたんだ……。

——誘っているのか？

——でも、様子が……。

今思えば、彼の戦い方はどこか変だった。

両手剣の武器カテゴリーの獲物を装備しているにも関わらず、今までずっと片手で剣を振るっていた。

慢心、というわけでもない。ユーキの性格上、この場面において手を抜くなんて真似をするわけがない。それは今までぶつかってきたキリトが一番良く知っている。ならば、これはどういう訳か——

「お前、もしかして——」

片手が使えないのか、と口にする前に。

「——おい」

ユーキが遮るように、口を開いた。

つまらない質問をするな、と言わんばかりにユーキは石斧剣を今度こそ、その石斧剣を両手で持ち構える。

その構えを見て、キリトは表情が強張り、背筋を凍りつかせた。
まるで昇り龍のように、天高く剣を構える異様な構え。左足を前に

出し、剣を持つ右手は右耳辺りまで上げ、左手を軽く添えるように、ユーキは構えていた。

初撃に何もかもを掛ける。一撃目で何もかも、一切合切の決着をつける『先手必勝』の構え。

キリトはそれを見たことがある。

数は二度。一度目はモンスターキラーに対して、そして二度目は黒ポンチョの男に対して。ユーキが剣を振るう姿を、キリトは眼にしている。

この構えの意味を、キリトは理解している。

それはつまり――。

「――これで終いだ」

静かに、冷淡に、感情を削ぎ落とすような声が、キリトの耳に入る。

それはつまり――決闘の終わりを意味している。

必ず仕留める。その意思が行動に移り、その結果がユーキの異様な構えとして表れる。

それはどういう現象か。

今までユーキのアバターから噴出していた黒い炎が、石斧剣へと集まっていく。ソードスキルが発動した際に生じる、光のエフェクトというわけでもない。闇よりも黒く、墨よりも黒い淀んだ光を集めて、ユーキは続けた。

兜の奥で蒼い双眸を光らせて、キリトへと照準を合わせながら。

「オレこの一撃で終いにする。ぶっちゃけ、余裕がねえからな」

「……それは奇遇だな。俺もそろそろ、決めようと思ってた」

「気に入らねえが――」

「ああ。話しが合うな、俺達――」

キリトは口元に笑みを浮かべる。

彼から見たユーキはどんな表情を浮かべているのかわからない。
しかし兜の奥では、恐らく自分と似た表情を浮かべているだろうと予
想しながら。

「——行くぞ、ユーキ」

「——行くぜ、キリト」

二人の最後の激突が始まった——。

第15話 決闘 Re:LAST

別に、二人は憎しみを抱いている訳ではない——。
むしろ逆。どこか尊重し合い、認め合っている節がある——。

ならばどうして、争うのか——。
ならばどうして、戦うのか——。

非効率であり、非科学的である——。
何故、手を取り合わない——。

もう一方は前に進み、もう一方は追い付いた——。
理解不能だ。人間とは、どうして効率の良い選択が出来ないのか——。
見るに耐えぬ。争うなど、愚の骨頂にも程がある——。

人間の悪性情報に等しいものだ——。
だが何故だ、何故だというのだ——。

『私／俺／僕／我』は、二人の決闘に目が離せないでいる——。
理解出来ない、道理が合わない、回答が見つからない——。

『私／俺／僕／我』は何故——。
『私／俺／僕／我』は何故、こんなにも高揚しているのか——。

.....
.....
.....

2023年2月15日 PM20:45
第十八層 主街区『ユーカリ』 中央広場

——呼吸が荒く、剣を持つ手は震えて、両足に力を籠める——

キリトの身体の状態はそんなところだった。肩で息をし、何とか呼吸を整える。それでも、胸の動悸が収まることはない。緊張している——訳でもなかった。キリトの脳内は普段と変わらない思考速度、むしろ普段よりも鮮明なクリアなモノ。そこに一切の淀みなど存在しなかった。

ならばどうして、自分は胸の高鳴りを抑えることが出来ないのか。その答えは、考えれば見えてくるモノであった。

緊張ではなく、興奮しているのだ。

無理もない。今までキリトは、ユーキに追い付くために鍛錬を続けていた。前に進む背中を、邁進し続ける決して折れることのない男を、彼はずっと追いかけてきた。

そして今。追い付くことが出来て、こうして対峙するに至る。更に言えば、全力でユーキは力を自分に振るっている。それが何よりも、キリトにとって嬉しかった。

負けたくない男が居た。

追いつきたい男が居た。

競い合いたい男が居た。

その男はこうして逃げることなく真正面から、あらゆる優先順位を放り捨てて自分の目の前にいる。一番戦いたかった男が目の前にいる。

——この状況で、興奮しないのはおかしいだろ。

——それに、どうしてかな。

——アイツとの決闘は楽しかった。

何百と剣を合わせてきた。

彼らはお世辞でも器用と呼べる人種ではない。片や人付き合いが得意な者ではなく、片や性格が捻くれている。そんな二人が、上手く言葉に出来る訳がなかった。だからこそ、二人が違う手段で語り合う。

いがみ合い、罵り合い、そしてこうして剣を交わい語ってきた。それは傍から見たら、コミュニケーションと呼べる代物ではない。むしろ仲が悪いとも取れるし、現に二人は二人とも、お互いが仲の良い友達と思っていない。

だが、これでよかった。

今更改める気などなく、仲良しこよしを気取るつもりもない。

これで良い。傍から見たらいがみ合う自分達だが、これで良い。これこそが、自分達のあり方である、とキリトは答えを見つけた。

楽しくもあつた決闘。

だがずっと続ける訳にもいかない。始まりがあるのだから、終わりは必ずあるのだ。

——もはや言葉はいらなかった——。

「——ッ——」

先に動いたのは、やはりユーキである。

彼は地面を思いつき蹴る。だが同時に、まるでジェット噴射のような勢いで、背中に接続されていた黒い炎が一気に噴出する。

それが爆発的な推進力となり、キリトに向かって真っ直ぐ矢のように飛んでいく。

だがそれでも、キリトに焦りはない。

先程の攻防で、ユーキのアバターから噴出される黒い炎を応用して行使してくることは、予想が出来ていたことだった。

何よりも問題なのは、ユーキの操る黒い炎ではない。

——アイツの剣を避ける。

——ギリギリで避けないと、直ぐに態勢を立て直して反撃してくる。

だからこそ、振るわれた剣の初速を見て避けるしかない。

しかしそれは、自殺行為に等しい攻略法でもある。何せ、ユーキの剣の振る速度は、恐ろしく速い。それこそ見てから避けるのでは遅すぎる。

それでも、やるしかない。危険な賭けだが、それぐらいやらなければ、ユーキを倒すことは出来ない。

耐久値が限界に近い自分の片手剣を握りしめる。

罅迫り合いなど出来ない、ユーキの剣を受けることも不可能。ならば、剣が折れる前に、倒せばいいだけのことである。

集中力を高める。

ありとあらゆるモノに反応できるように、神経を研ぎ澄ませる。

そんなキリトの目に、奇妙な光景が映り込んだ。

——なん、だ……？

まだお互い、剣が当たる間合いではない。

振るったとしても、僅かに当たらず空を切る。そんな間合いである。

だと言うのに、ユーキの石斧剣の剣先が、僅かにブレる。それは振るう前兆、凄まじい速度の一刀が振り下ろされる前触れでもあった。

だが振るった所で、その剣は当たらない。

制空権にも入っていないのに、僅かに外れている射程外から、一発だけの銃弾を撃ち込もうとしている。

キリトの予想通り、ユーキは石斧剣を振り下ろした。

間合いを間違えたとは、考えにくい。どんな意図があつて、ユーキはそんなミスを犯したのか。それは直ぐに回答が出るものだった。

「な——に——？」

ユーキは何と、振り下ろした剣を途中で無理矢理「停止」させて、再び背中に接続されていた黒い炎が噴出する。

そして剣を突き出したままの状態で、キリトへと真っ直ぐに推進する。

最初からユーキも目的は斬ることではない。最短距離で、全速力で、キリトに刺突する。

それは出来すぎた奇襲。ユーキの意図を把握した所で、行動するには遅すぎた。

殺人的な加速となり、ユーキの剣を避けるのは不可能。ならば弾いて防ぐしかないが。

——無理だ。

——防いだ所で、俺の剣は砕かれる。

——となると、俺に勝つ手段はない……。

ドクン、という大きな音を立てて、心臓が一つ高鳴る。

それがスイッチとなるように、周りがスローモーシヨンのように見えてくる。しかしキリトが何よりも注目するのは、自身に迫るユーキの必殺の刺突。

その剣は的確に、キリトの胴体へと真っ直ぐ狙ってきていた。防ぐことは出来る、しかし問題はその後だ。剣を失った剣士に待っているのは、敗北という苦い結果のみ。勝者がユーキで、敗者がキリトという事実しか残らない。奮戦した、もう少しで勝てた、そんなものは関係ない。過程がどうであれ、結果が敗北というのなら、そんなもの意味などないのだから。

——負けない。

——俺は、負ける訳には、いかない……。

ならばどうすればいいのか。

右手に持つ武器だけでは話にならない。避けることは出来ない、防がないと——負ける。

——武器だ。

——この剣だけじゃ、俺は勝てない。

——せめて、もう一本。

——左手に、もう一本……！

負けるわけにはいかない、ここで負ける訳にはいかない。

ようやく、追い付いたのだ。また離される訳にはいかない。

石斧剣に負けない武器。簡単に碎かれない武器、左手にあるという強い願い。

——このままじゃ、勝てない。

——でも諦める訳にはいかない。

——アイツは絶対に諦めない。

——勝てないのなら、考えろ。

——勝機がないのなら、作れ。

——可能性を全て、手繰り寄せろ。

——そうでもしないと、アイツには追いつけない……！

決して諦めない心、不屈の精神とも呼べるそれは、強い意志となり、自分自身を上書きしていく。

それは奇しくも——。

——ユーキと同じことをしないと、追いつけない……！

彼と、似て非なる力を、発現させた。

キリトの左手が、光る。

その光は眩い白いモノで、ユーキの黒い炎とは対極なもの。

ユーキの黒炎が恐怖を掻き立てるモノであるのに対して、キリトの白い奔流は人を包み込むような暖かな光。

左手で何かを握る感触がある。

「う、オオオオオオオッ！」

「っ!？」

それを迷うことなく振るい、ユーキの必殺の刺突を弾く。

「な、んだ……!？」

兜の奥でギリツと歯を食いしばりながら、忌々しげにキリトを代弁するようにユーキが問う。

キリトの左手には新しい剣が握られていた。

それは黒い片手剣。両刃で装飾など一切ない、どこか実直とも取れる剣を、キリトは左手に収めていた。

——左手が、焼けるようだ……!!

——それにこの剣、重すぎる……!!

思わず手が緩み、黒い剣を離しそうになる。

だが再び、キリトは両手に持っている剣を強く握りしめる。

ユーキの動きが止まる。

ありえない事象、キリトが新しい剣を手に入れたと思いきや、その剣で必殺を確信した一撃は弾かれた。

予想外の出来事に、処理が追い付いていない。

ここだ、ここなのだ。勝機はここしかない、とキリトは感じとるや否や、両手にある二本の剣が同時に光る。

ソードスキル。この世界でプレイヤーが使用できる、剣技を発動させようとしていた。それも——二本で。

「ソード、スキル……!?!」

ユーキの声が今度こそ、驚愕に染まる。

本来、ソードアート・オンラインの世界でソードスキルを使用できるのは一本の剣でのみ。

それは片手剣でも、細剣でも、斧でも、カタナでも例外はない。だが現実、キリトはどういう理屈か、二本でソードスキルを使おうとしている。

となればこれは何かしらのスキルに他ならない。二本の剣を使い初めて使用できるソードスキル、つまりそれは——二刀流。

「オマエ、いつの間に……!」

キリトは答えない。

いいや、耳に入れる余裕が無いのだ。

今は無我夢中でソードスキルを使う。そうでなければ、ユーキを倒すことなど出来はしない。

何が起るのか、どんなソードスキルなのか。不思議とキリトは何が起きるのか理解していた。

「ユーキィー!」

キリトの意志に反映するように、二本の剣が一際輝き呼応する。

スターバースト・ストリーム。

二刀流の上位剣技。十六回連続で斬る攻撃に特化したソードスキル。

それが躊躇いなく、ユーキに一撃が迫る。
対して——。

「ハッ——」

面白い、と。

そう言うかのように、ユーキは声を漏らして。

「吠えてんじゃねえぞ——キリトオオオ！」

直ぐに右手で石斧剣を持ち直し、態勢と立て直し迎撃する。

一撃目。

お互いの剣、黒い剣と石斧剣がかち合い火花が散らした。

二撃目。

キリトの片手剣が右脇腹を迫るのに対して、ユーキは難なく石斧剣で受け止める。

三撃目。

右手と左手の剣でユーキに斬り掛かるも、片手で思いっきり石斧剣を合わせた瞬間、衝撃波が巻き起こった。

攻めなければ倒される。そんな直感が、ユーキに警報を鳴らしていた。

石斧剣は、はじまりの英雄を襲い、少年は二刀を振るう。拮抗する両者の剣技と凶刃。空間は火花に満ち、立ち入るモノは瞬時に撫で斬りにされるだろう。

しかしそれも長くは続かない。

はじまりの英雄は一撃放つ度に息があがり、前のめりに倒れそうになりながら踏みとどまり、次の一撃を振るう。

それを見て、ユーキは確信する。

対峙している者に、余力など残っていない。一押すれば倒れる体力しか残っていない、と。

現に、新しく装備した黒い剣に振り回されている。それだけ黒い剣が重く、上手く使いこなしていないのだろう。

——押せば倒れる。

——なのに、何だ？

——コイツの剣が、やけに「重い」……ッ！

誰がどう見ても、自身の振るう石斧剣の方が重い筈だ。

身の丈ほどある、岩で出来た大雑把過ぎる剣。それが、ユーキの扱う石斧剣である。現に、先程までユーキに力負けしていた。なのに今では——。

「ハアアアッ！」

「グッ、このっ……っ！」

八撃目

拮抗——いいや、ユーキが押されている。

ありえない、今まで力勝負で圧倒していたのに、どうして今になって押され始めているのか。

左目は焼けるように、左手の感覚は既がない。メキメキと頭の中で、壊れるような嫌な音が耳に入る。

それでも迎撃する、反撃する、攻撃する。

引けば倒れる。

対峙する者はそんな状態だ。一步後ろに下がるだけで終わる。だと言うのに、ユーキはそれを実行に移さない。

否、行動に移すことなど出来はしない。確かに、それが出来ればユーキの勝利だろう。だが勝つだけの結果に、ユーキは興味がなく、何よりも自分だけ引くなどプライドが許さない。

もはや駆け引きなどない。

幼稚でただぶつかり合うだけの激突。それを既に、十三度繰り返す。

「いい加減に——！」

石斧剣を振り上げる。

一度目のように、黒炎を開放しながら、片手で情け容赦なく振り下ろす。

ソードスキルを弾き返して、確実に胴体を叩き伏せようと、ユーキは振り下ろす。

しかし、それは叶わない。

ガギイン！という強音。

必殺だった筈のそれは、容易く弾き返された。

今まで一度も、受けることが出来ず、弾くだけで精一杯だった筈の一撃を、ユーキの渾身の一撃を当然のように、弾き返す。

何かを呟いているも、ユーキの耳には届かない。

剣戟となり、火花が散り、衝撃が辺りを叩く。しかし眼は真っ直ぐにユーキへと向けられる。

諦めることなく、真っ直ぐに。

十五撃目で、何を言わんとしているか理解できた。

「——ここで、勝つんだ！ お前に、絶対に!!」

ユーキの耳には未だに、何を言っているのか届かない。

だが叩き込む剣戟は言葉となり、ユーキに伝わってきた。

絶対に負けない、負けられないという強い意志。不屈とも呼べるそれが、真っ直ぐユーキに叩き込まれている。

——ああ、本当に。

——本当に、オマエは大した野郎だ。

そして、十六撃目。

最後に、ユーキの石斧剣とキリトの黒い剣が叩き込まれて、何か

砕ける音が聞こえた。

「」

それは、石斧剣が真つ二つに砕ける音であった。

今まで酷使してきた代償がここで精算される。ピシピシ、と音を立てて石斧剣が砕けていく。自身の唯一の武器としていた、ユーキの意思が具現したような武骨な剣が砕ける。

その事実には驚きはしない。むしろ、ここまで読み通りと言わんばかりに、砕けていく折れた石斧剣を振りかぶる。

「キリトオオオオ！」

「ユーキ——！」

対してキリトも決して諦めないユーキの行動を予想していたかのように、黒い剣を横薙ぎに振るう。

オレの方が速い——アインクラッドの恐怖が確信する。

俺の勝ちだ——はじまりの英雄が理解する。

斬、という音が辺りを木霊する。

結果は——。

.....

二人の少年の決闘はこうして、終わりを迎えた。

辺りに響き渡っていた剣戟はもう聞こえずに、辺りを照らしていた火花が散ることもない。

そして静寂が、決闘場となっていた中央広場を支配する。

しかし一つだけ違うモノがあった。

それは決闘を始めた開始位置に。

勝者の名を告げる紫色の文字列がフラッシュしていた。ギャラ

リーなどいなく、歓声が響き渡る訳でもない。
だから、勝者は静かに、勝鬨を上げた。

「お前の負けだ、ユーキ」

勝者——キリトが事実だけ口にする。

敗者——ユーキは静かに眼を閉じて、結果だけを呟いた。

「——ああ。オマエの勝ちだ、キリト」

兜から覗く眼はどこか遠い。

言い聞かせるように、結果だけを噛み締めて、言い聞かせるように
呟く。

「66戦32勝33敗1引き分け、か……」

「違う」

「あ?」

フルフル、と首を横に振るキリトを訝しむ。

キリトが何を否定したかったのか。その回答は直ぐに、キリトの口
から紡がれる。

「俺が今倒したのは、一人で攻略している『アインクラッドの恐怖』だ。
俺が倒したのかったのは、俺達『アクセル・ワールド加速世界』の仲間である『ユーキ』
なんだ」

「つまり、オマエが言いたいのは——」

「——今の勝負は無効だよ。俺はユーキに勝ちたいんだ」

そう言うと、キリトは手を差し出してきた。

そのまま不敵な笑みを浮かべて、あの時のように。自分が初めて言
葉を向けられた、あの時のようにキリトも言葉を借りた。

「お前、俺達と組め——」

兜の奥で、目を見開いた。

それから直ぐに調子を取り戻し、忌々しげに差し出された手を。

「面倒くさい野郎だ」

「ああ、互いにな？」

パチン、と弾く。

握手などしない。そんなもの、二人には必要ないし、先程剣で嫌と
いうほど語り合ったばかりだ。

交わす言葉もなく、今まで通りの口調と態度で二人はそれぞれ応じ
る。

「もう一度組むのは良い。負け犬のオレに拒否権なんぞ有りはし
ねえ。問題は——」

「そうだな。ギルドリーダーに聞かないと、な……」

そこまで言うと、キリトは道を譲った。

それから簡単に。

「行けよ、ユーキ。アスナが待ってる」

第16話 幼馴染

キリトとの決闘を終えて、『アインクラッドの恐怖』と呼ばれていた少年——ユーキは第十八層のある場所に足を運ばせていた。

頭部を守る兜は装備から外れており、顔を外界に晒して歩いている。

現在、他者を威嚇するような兜は装備されていないものの、その姿はフルプレートのツギハギだらけの装備。

全身フルプレートに身を包み、表情が読めない。しかしその格好は不格好極まる。頭部は銀色、胸甲板や前当ては黒、籠手は紅で、下半身の鎧の部分は蒼。配色も装備の種類もバラバラ、まるでツギハギのような出で立ち。

誰がどう見ても、異様な姿。

効率だけを求めて、身なりなど眼中にない姿だった。

これこそが、アインクラッドの恐怖の姿。前に進むことだけを目的とし、攻略することだけに特化した姿。その姿に人間味は感じられない。ただただ、攻略する機械のように、格好など気にしない。

それでも、一点だけ。効率だけを求めるといふ説明に首を傾げるモノがぶら下がっていた。

その首からは紅い宝石のペンダント。何も特別な要素がなく、装備すればステータスが上がるという効果が備わっている訳でもない。変哲もない、第一層のような下層で手に入るような、アクセサリーがその首からぶら下がっていた。だがその変哲もないペンダントが、酷く浮いて見える。

もはや今のユーキは、いつ倒れてもおかしくないような状態である。

力の代償。自身の身体を砕くような強靱過ぎる意思が、自身に向けられた怒りが具現したかのような、己を焼き尽くす黒炎が、確実にユーキの身体を崩壊させていく。

左眼からは焼けるように激痛が走り、左手も感覚はない。歩く度

に、身体の内部から軋みが上がり、それが痛みという叫びに変換されていく。頭痛は治まらず、ミシミシと嫌な音が聞こえる。こめかみの辺りで、血管らしきものが不自然に脈動する。

常人であれば膝をつくような状態。それでもユーキは歩みを止めずに、むしろ――。

「……情けねえ野郎だ」

自分の不甲斐なさに、苛立ちを覚える。

まだ十八層しか攻略していないというのに、この体たらくだ。こんな吹けば倒れるような情けない姿で、よくも自分一人で攻略するとほざいたものだ、とユーキは己を道化と自嘲してみせた。

ツギハギだらけの装備に、欠陥だらけの身体。極めつけは、道化と来たものだ。

だがそれでも、道化には道化なりの矜持があるようで、ユーキは泣き言一つ言わずに、弱音一つ吐かずにここまでやって来た。

その場所は――十八層の主街区『ユーカリ』が一望できる丘の上。

ギリギリ圏内の位置にある場所をユーキは目指し、満足に動かせない身体を引きずりながら、ようやく辿り着く。

空は既に漆黒。

月明かりだけが、十八層の地を照らす。そして眼下には、ユーカリの街並の光が一望出来た。夜景、と言うには不十分な明かり。ソードアート・オンラインの文明はそこまで発達したものではない、という設定である。電気などと言った物は存在せず、人工光源も存在しないに等しい。お世辞にも綺麗と呼ぶには不相应な街明かり、だがそれでもユーキの心に焼き付くには十分な光景だった。

彼の心に焼き付いたのは、夜景だけではない。

ユーカリを一望できる丘。その場所に、ポツンと存在する木で作られたベンチ。その場所に、座っている人物を見て、ユーキは呼吸することを一瞬忘れる。

その人物は真つ直ぐ、ただ静かに、ベンチに座っていた。
ユーキは見覚えがある、何度も見てきた後ろ姿だ。

栗色の腰のあたりまである長い綺麗な髪、紅色のマントを羽織り、その下には鎧の類は見られない。ひたすら身軽と機動力を追求したかのような装備。上半身には白いレザーチェニツク、下半身には膝の上くらいの丈である紅いスカート。

あらゆる感情が溢れかける。

だがユーキは直ぐに、何もかもに蓋をするように感情を込めずに、後ろから声をかけた。

「よう」

彼女は座ったまま、振り返る。

それから嬉しそうにほにやっとした笑みを浮かべた。ユーキのよく知る表情、よく知る雰囲気、そしてよく知る声で。

「おかえり———優希君」

彼女———「アスナ」ではなく、ユーキのよく知る「結城明日奈」
“としてその場所に存在していた。

ならば、と。少年も応じることにする。

勝手に突っ走った自分が吐く言葉ではない。それを百も承知で「
優希」は彼女の言葉に応じた。

「ああ、ただいま———明日奈」

———茅場優希、結城明日奈。

両名は本当の意味で、再会を果たす———。

.....

2023年2月15日 PM 21:30

第十八層 丘の上

二人は打ち合わせをして、この場所にいるわけではない。

明日奈は待つていれば優希が来るとわかっていたし、優希も明日奈がここにいることがわかっていた。その程度の理由で、二人は行動していたに過ぎない。

根拠などない。

二人とも、何となくこの場所に来れば、待ち人がいるし現れる。そう思い行動し、再会することが出来た。

二人は共に肩を並べて、ベンチの上に座っている。

最初の言葉以外、交わした言葉はない。明日奈がポンポンと隣の開いているスペースを手で軽く叩いて、優希がそれを見て静かに応じた。その後、何も会話もなければ行動もない。

黙って、静かに、肩を並べて、同じ景色を見る。

その沈黙は数秒か、数分か、数十分か。

決して苦痛ではない時間が、静かに流れていく。

そして、沈黙を破ったのは――。

「ねえ」

——明日奈だった。

彼女は街を見たまま、どこか嬉しそうな声色で続ける。

「そのペンダント、付けてくれてたんだ」

「……悪いかよ?」

「ううん、嬉しいよ」

えへへ、と明日奈は嬉しそうに笑みを零した。

そう言う彼女の首にも、優希と同じタイプの宝石の付いた首飾りがぶら下げている。ただ違うと言えば宝石の色である。その色は蒼色で、優希の紅色の宝石とは対をなすペンダントである。

第一層でコルを出し合い買った、明日奈からしてみたら思い出の品にあたるアクセサリー。それをまだ装備してくれている変わらないでいてくれる優希に、明日奈は笑みを零していた。

対する優希は、忌々しげに言葉を吐いていた。

「オマエ、アイツに嘘を吹き込みやがって」

「アイツって、ユウキの事?」

「わかってんなら、いちいち聴くんじゃねえよ」

どこか不貞腐れるような言い方に、明日奈は困ったような笑みを零して。

「嘘っていうか、事実だったし?」

「事実なわけあるか。オマエの中のオレは、どんだけ善人サマなんだ?」

「優希君、優しいもん」

一歩も引かない明日奈に対して、優希は溜息を吐きながら。

「優しくねえよ。オマエはオレの何を見てきたんだ——」

「——優希君は、優しいよ」

遮るように、明日奈は優しい笑みを浮かべながら続ける。

「こうして無理してたのも、わたし達の為でしょ？ キリト君にキツイことを言つて、一人になつてずっと前に進んできたのも、わたし達の為なんでしょ？」

「——、」

優希は言葉を失った。

確かに、彼がここまで進んできたのは、仲間達が戦わなくても良いようにする為、そして——明日奈がもう二度と剣を握らなくても良いようにするためである。

これは誰にも話した覚えはない。胸の内にしまい、誰にも悟らせないように、傍若無人の如く彼は前だけを見て進んで来た。だがここで、この場面で、明日奈に見透かされていた。心の中を見られて尚、優希は恥じることもなく、静かに眼を閉じる。

本当に、コイツにだけは敵わない。

自分に言い聞かせるように心の中で呟くと、眼を開けてやんわりと首を振る。

「違う、それは違う。オレが一人で、オマエらを置いて進んだのは、そんな大層な理由じゃねえんだ」

確かに、明日奈の言う通りそれが理由になっていたのかもしれない。

だがもつと突き詰めれば、違うと優希は断言できる。彼が前に進んだ理由、それは——。

「オレは誰よりも、ガキだったただけだ」

「……………」

「自分の主張を押し通して、オマエらの意見を聞かずに、我武者羅に進んだだけだ」

ギリっと歯を食いしぼる。

苛立ちを自分に向けながら、彼は情けない自分に対して歯を食いしぼった。

仲間が傷つくのが我慢できないから、幼馴染が剣を取るのが許せなかったから。

聞きようによつては、立派な理由にも取られるのかもしれない。だがそれは違う、と優希本人が否定した。

「こんなもん、負担を押し付けているだけではないのか、と。」

行動の原動力を、彼女達を理由にしているだけではないのか、と。

自問自答を繰り返し、突き詰め続けたところ、優希の前進する理由はあまりにも身勝手な事実だった。

「結局のところ、オレは誰よりもクソガキなんだ。オマエらは関係ない、オレが勝手に進んで、勝手に他人に迷惑をかけまくった。そんなクソガ、優しい人間のはずがねえだろ」

天を仰ぎ、事実だけを口にした。

懺悔にも似た言葉を吐き出した。その返答は励ましでも、哀れみでもない。

首を横に振り、明日奈は優しく困ったように笑いながら。

「やっぱり、優希君は優しいよ」

それは否定であった。

強い口調で覆すのではなく、何もかも包み込むような慈愛に満ちた声色で、明日奈は笑みを浮かべたまま続ける。

「そうやって優希君は、自分一人の責任にしようとする。わたし達に

負担をかけないようにしてくれている」

「知ったような口を——」

「知ってるもん。だって、わたしは君の幼馴染だよ？」

そこで初めて、優希は明日奈へと視線を向けた。

彼女は真っ直ぐに、優希を見つめている。強く、折れることのない眼は、しっかりと優希を捉えていた。

「君がずっと自分に怒ってるのも知ってた、キリト君達に心を許しかけたのも知ってた、わたし達が傷つくのを我慢できないのも知ってた」

「オレは、そんなこと、思っていない……」

か細い声で、必死に否定した所で明日奈は誤魔化せない。

ふるふる、と首を横に振って、優希の片手を自身の両手でギュッと握って彼女は続ける。

「ううん、思ってたよ。君はそんな自分が何よりも許せなかった。だから敢えて、自分を辛い道に進ませた」

「……………」

「そしてわたし達も、優希君だけに辛い思いをさせたくなかったから、ここまでやって来れた。君という目標があったから、追い付くことが出来たの」

それはちよつと違うかな、と明日奈は言葉を漏らして、改めて続けた。

「君が先陣を切って、誰よりも先にモンスターを倒してくれたから、後にくわわたし達が追い付くことが出来た」

だから、と言葉を区切り明日奈は続ける。

「今度はわたし達の番。君の進む先を、わたし達が先導する。君の手を引っ張って、今度は一緒に進んで行きたい」

「オマエ……」

優希は呆然と呟いた。

これが明日奈なのか、と。自分の知る結城明日奈なのか、と優希は己に問うた。

デスゲームが開始してから、明日奈は世辞にも強いと呼べる人間ではなかった。自分の後について行き、誰にも汚し難い存在だった筈だ。

だが今ではどうだろうか。彼女が汚し難い存在なのは、優希の中でも変わらない。変わらないが、彼女は誰よりも——強くなっていた。

身体的な話ではなく、精神的なモノである。心身共に、彼女は強くなっていた。

「もう一度、わたし達と一緒に進んでいこう？ 歩く速さでもいい、急がなくても良い。もう君を一人にはさせないよ」

「……」

最後には立ち上がり、前を見る不屈の精神。明日奈も優希には持ち得ない力を持っている。キリトと同じように、まるで物語に出てくる主人公のような力を、彼女も手にしていた。

優希は思わず首を横に振った。

共にした所で迷惑を掛ける。そんな未来を予見し、彼女達と行動を共にすることを拒否するように。

「……良いのか？」

「ん？」

目の前には不思議そうに首を傾げる幼馴染。
対する優希は事実だけを口にする。

「いつまた勝手に暴走するかわからねえぞ。それでも、オマエは——」
「うん」

迷うことなく、次に出る優希の言葉をわかった上で、明日奈はニツコリと満面の笑みで。

「そうだったら、またわたし達が君に追い付くだけだもん」
「そうか。ああ、本当にオマエには——」

敵わない、と心の中で呟いて、意識が遠のいていくのを感じる。
無理もない。これまで彼は不眠不休で動き、飲まず食わずで活動していた。それもこれも、身を削る意志に突き動かされた結果である。
蓄積された疲労はここで爆発し、最も心を許す相手に身を預けていた。

力なく、明日奈へと倒れて身体を預ける。
彼女は穏やかに受け止めて、優希の頭をそつと撫でていた。頑張った子供を褒めるように、

明日奈の右手が、ゆっくり。そして優しく、労るように、優希の金色の髪を撫でる。安心する匂い、身体の温もりを感じつつ、優希は何とか眼を閉じないように耐える。

ここで意識を失う訳にはいかない。
最後に、伝えたい言葉あるからこそ、優希はギリギリ意識を保っていた。

「明日奈」

「……なに？」

「オマエには、ずっと助けられてきた」

ずっと、というのは何時からのことを言っているのか。
過去を振り返りながら、彼は言葉を紡いで行く。

「父さんと母さんが死んで、腐っていくオレを見捨てずに、オマエは
ずっと一緒に居てくれた……」

「そんなこと、当たり前よ」

「それでも、オレにとつては救いだっただから、今ここで、言わな
きゃならない言葉がある」

明日奈から身体を離す。

そして、蒼い瞳の中に明日奈を捉えて——笑みを浮かべた。

ここで初めて、優希は笑みを浮かべた。

その笑みは明日奈が知る笑み。昔、彼が浮かべていた優しい笑み。
両親が亡くなって見せることがなかった、今までずっと見たかった子
供のような笑みを優希は浮かべて。

「ありがとう——オレはオマエに、ずっと助けられてた」

見たかった笑み、聞きたかった優希の声、そして聞く予定のなかっ
た感謝の言葉。

ポロツと、明日奈の眼から涙が溢れる。

「泣く、なよ……」

「だって、反則だよ。こんなの、反則……っ」

ここで、限界だった。

優希の瞳は今度こそ閉じていく。

逆らわず、自然のままに、優希はまどろみの中へと落ちていく。

「悪い。ちよつと、寝る。さすがに、無茶した……」

こうして、茅場優希の意思は一人の少女に敗北した。

いいや、これは敗北と呼べるのだろうか。強靱の意志は衰えることもなく、きつと少年は妥協することはないだろう。

ならばこの状態は、どんな説明をすればいいのか。

簡単な話だった。意思是衰えない、心も折れていない。ただ少年は、幼馴染とその仲間達と共に進むことを選んだ。それだけに過ぎない。

こうして、少年は帰るべき場所へ帰還を果たす。

もう二度と入れないと思いついていた輪に、少年は帰還したのだ。た——。

少年は帰還し、幼馴染は迎え入れる。

そんな結末に、明日奈は満足するように、笑みを浮かべている。

その膝には、優希が頭が乗っかっている。ベンチの上に仰向けに寝て、明日奈の太ももに頭を預けている。明日奈は優希を膝枕をしている状態になっていた。

愛おしいモノを触る手つきで、大事に扱うように明日奈は優希の頬を撫でる。

規則正しい呼吸音、穏やかな寝顔を見ながら明日奈は笑みを零す。

「お礼を言うのは、わたしの方だよ」

今まで、ずっと優希の背を追いかけてきた。

彼女が幼い頃から、今に至るまで、その背を見て彼女は安心し、ずっと守られてきた。

助けてもらったのは自分の方だ、と思いながら彼女は自分の気持ちをお口にします。

「優希君、ありがとう——大好きだよ」

その言葉は優希には届かない。

意識を失っている優希に届く術はないのだから——。

幕間 血盟騎士団

2023年2月15日 PM 21:45

第十八層 主街区『ユーカリ』 宿屋

2月15日、第十八層の主街区『ユーカリ』にて、状況が著しく変化を遂げていた。

アインクラッドナイトスがフロアボスに突撃し壊滅状態になりかけたところを、正体不明の『アインクラッドの恐怖』が間に入ることで撤退に成功。そして後にやってきた『はじまりの英雄』とその仲間達により、第十八層は短時間で攻略される。

他のプレイヤー達の羨望は今や『はじまりの英雄』に注がれている。何故『はじまりの英雄』だけが注目されているのかというと、ただ単純に彼が一番目立っているからだ。

フロアボスを討伐する過程、つまりは『アインクラッドの恐怖』がアインクラッドナイトスを守ろうと、他のプレイヤー達は知る由もない。むしろその場に『アインクラッドの恐怖』が居たことすら、他のプレイヤー達は知らない。

モンスターキラーという怪物を討伐し、多くのプレイヤー達の命を救った英雄。それが『はじまりの英雄』に対するプレイヤー達の共通認識となっている。

神話上に出てくる英雄、太古の昔に竜や魔獣に立ち向かった者の英雄譚。まるで物語に出てくる英雄の偉業を現実に来るプレイヤー。それが『はじまりの英雄』である。

となれば、目立ってしまうのも無理はない。未曾有のサイバーテロ、HPゲージが亡くなれば死亡を意味するデスゲーム。この絶望的状况において、プレイヤー達は何よりも希望を欲しているのだから。

そして、そんな状況を打破するために、攻略ギルド『アインクラッドナイトス』が結成された。

今現状において、アインクラッド内のギルド数はかなり多いものだ。規模はバラバラで、数人の規模のギルドもあれば、十人程で結成されたギルドも存在する。そんな中、アインクラッドナイツの規模は群を抜いているといえる。

何よりもプレイヤー数が他ギルドと比べくもない。全員が全員、現実世界に帰還することを夢見ており、誰もが必死になって攻略してきた。だと言うのに——今では見る影もない。

ギルドリーダーであるディアベルは周囲に視線を向けた。残っている人数は——五名。

全員が全員、項垂れて生気を感じられない。勿論、これで全員だったわけではない。もっと人数がいた、それこそ三十人以上の規模だった。なのに今となつては、五名しか残っていない。

自分の命惜しさに、甘い汁を吸えると思つた半端者、フロアボスと初めて対峙して心が折れてしまった。そんな理由で、脱退する者が続出し、奇跡的にゲームオーバーとなつたプレイヤーは存在しない。残つた五名のプレイヤー、ディアベルを入れて六名がアインクラッドナイツに所属しているプレイヤーとなっている。

もはや壊滅に等しい惨状を見て、立ち尽くしていたディアベルは自分の両手を見る。

どうして、こうなつたのかと。暴走する仲間をどうして止めることが出来なかつたのか、と彼は自問自答を繰り返す。

この現状を、閉鎖された世界を、茅場晶彦に仕組まれたルールを打破するために、ディアベルは行動していた。

ベータテスターである自分が、示さなければならない。このゲームそのものがクリア出来ることを、伝えなければならない。そういった志を胸に、ディアベルは剣を持ち盾を構えて、世界と真剣に向き合っていた。

志が高いモノだ。しかしそれはディアベル個人の志であつて、ギルドメンバー全員の総意という訳ではない。ディアベルの不幸は正にそれである。彼と志同じくする者はほとんどいなかった。連中が持ち合わせているのは『自己犠牲の精神』などではなく『置いていかれ

るのが不安』であることや『楽しんで名声が欲しい』という半端なモノでしかない。

そしてそう言うモノしか持っていなかった連中は、ディアベルの下から去っていった。真にディアベルと志同じくした者は残った五名、この五名しか本気で攻略しようとしていなかった。

先日、笑いあっていたプレイヤーは姿を消し、ディアベルを慕っていた者もどこかに消えた。

自分に何が足りなかったのか、どうしてこうなってしまったのか、何が悪かったのか、ディアベルは自問自答を繰り返すも、答えは一向に現れなかった。

しかし――。

「――失礼」

希望は、現れる。

ディアベルは声のした方向へと顔を上げた。

そこに居たのは男性プレイヤー。ホワイトブロンドの長髪で、赤黒色のローブを装備した男性。武器の類が一切装備されておらず、どこか奇妙とも言える雰囲気その身に纏っていた。理知的で、神秘的。この世界には存在しない『魔道士』とも言える雰囲気を纏った男は口を開く。

「君が『インクラッドナイト』のギルドリーダーのディアベル君かな？」

「あ、あなたは……？」

男は臆面もなく、堂々とした口調でディアベルに自身の名を伝えた。

「私はヒースクリフという」

「ヒースクリフさん……俺に何か用ですか？」

ディアベルの周りに、男——ヒースクリフという名の知り合いは存在しない。

ならば現実世界での知り合いなのかと思いきやそうでもない。記憶違いな訳がない。何よりも、ヒースクリフのような独特の空気を纏った人間と会えば、忘れるわけがない。そう断言できるほど、ヒースクリフは強烈な何かを纏っていた。

そして問題のヒースクリフは、理由だけ簡潔に告げる。

「君をスカウトしに来た」

「スカウト……？」

話が読めない。

ディアベルはヒースクリフの意図を読み取ることが出来ずに、眼を丸くして彼の放った単語を繰り返す。まるでそれは確認作業のようで、意味を確かめるべく繰り返す。しかし、ディアベルには全く意味がわからなかった。

疑問に答える訳でもなく、ヒースクリフは周囲を見渡し、問いを投げる。

「彼らが、君のギルドメンバーかな？」

「そうですね……」

それが何か？

と、疑問を投げる前に、ヒースクリフは項垂れているメンバー達の近くまで足を運ぶと。

「——諸君」

その声は、耳を通り、直に声の向けた人物の芯に訴える声だった。現に、項垂れていた五人のメンバー達は一人また一人とヒースクリ

フの方へと向ける。全員がヒースクリフへと顔を向けるのに、そんなに時間はかからなかった。

「君達は、フロアボスの攻略に失敗した」

事実だけ伝える。

それは如何に彼の胸を抉るようなものか知った上で、ヒースクリフは続ける。

「その結果、『アインクラッドナイト』は壊滅状態にあり、精も根も尽き果てんばかりであっただろう。昨日まで談笑していた隣人の姿は消え、君達の下から去った」

突きつける現実には、再びプレイヤー達は自分の殻に籠もるべく顔を俯かせようとすも。

「だが——諸君はここにいます」

ヒースクリフが許しはしなかった。

力強い言葉に、再び僅かながらプレイヤー達は顔を上げる。

「見渡してみたまえ、君達の隣りにいる者を。フロアボスに蹂躪され、心が折れて去る者、自分勝手に消える者が居る中、この場にいる戦友達の顔を——」

言葉通り、プレイヤー達は見渡す。

それは姿は違えど、眼は暗い物を宿している。鏡のようで、彼らは同じ眼をしており、彼らもそれを認めた。

「君達は絶望を知った、だがそんな有様になろうと、君達が残った理由は何か。君達が今まで突き動かしてきた理由は何か。考えて見るの

だ——」

彼らがこのギルドに所属した理由。

それは何か、彼らは考える。それは——。

「そう。それは——攻略だ」

攻略。それこそが、彼らの共通の目的だった。現実世界に帰還を果たす、それこそが彼らの共通の目的。

ふつつつ、と生気が宿っていく。彼らの目的を思い出せたヒースクリフの言葉に、彼らは徐々に顔を上げていく。

「君達を突き動かしてきたモノを忘れるな。君達の原動力となっていたモノを忘れるな——」

ヒースクリフの言葉が燃料となり、燃え散っていた彼らの心に再び火をつけていく。

一人立ち上がり、一人立ち上がり、また一人立ち上がる。不思議とヒースクリフの言葉は彼ら力を与えていた。カリスマ、と言うのだろうか。ヒースクリフにはそれが備わっており、後ろで聞いていたディアベルもいつの間にか両手の拳を握りしめていた。

「最前線で身を削る戦いをした勇者達よ、私は尊敬する。君達は誰よりもこの世界を真剣に、生きてきた」

ヒースクリフは両手を広げる。

まるで全員を受け入れるように、何もかもを彼という名の器に収めるように。

「この現状を作った者を許すな——」

言葉は力となり。

「この世界を作った者を許すな——」

彼らを再び。

「茅場晶彦を絶対に許すな——」

立ち上がる力を与えた——。

「勇者達よ、もう一度その手に剣を手に立ち上がって欲しい。『アインクラッドナイト』は死んだ。だが諸君は生きている。ならばもう一度立ち上がろう、そして再び前に進もう。勇者達よ、君達の力を私に貸して欲しい——」

彼らの眼には生気が宿っていた。

もはや項垂れていた彼らはどこにもいない。ただあるのは、前線にいたトッププレイヤー集団である『攻略組』としての矜持のみ。

全員が全員、立ち上がりヒースクリフへと視線を向けている。真っ直ぐに、今度こそ折れることのない眼で、ヒースクリフへと向けていた。

それを後ろで見守っていたディアベルは感嘆な思いで。

——凄い……。

——言葉だけで、こんなに……。

自分には出来なかったことを、ヒースクリフという男はあつさりとやってのけてしまった。

絶望の淵にいる人間を拾い上げる。まるで救世主のようで、希望の象徴とも言える偉業を、彼は意図も容易く現実のものにしてしまった。

ディアベル本人も、心で燃える何かを感じる。

熱さが伝染するように、ディアベルもヒースクリフの言葉に立ち直っていた。

そんなディアベルに対して、ヒースクリフは振り向き。

「ディアベル君、私は君をスカウトしに来た、と言ったね？」

「——はい」

ここでディアベルは、目の前にいる希望が何を言わんとしているのか理解した。

スカウト、つまりそれは引き抜きを意味しているのだと。

そしてヒースクリフもディアベルが理解したのを承知の上で、笑みを浮かべて手を差し伸ばす。

「私のギルドに入り、君の力を貸して欲しい」

「俺が……？」

理解は出来るが、頭が追いつかない。

自身の結成したギルドの舵取りすら満足にできなかった自分に、ヒースクリフの力になれるなんて到底思えなかった。

しかしヒースクリフはディアベルの懸念を否定するように、やんわりと横に振り。

「君の力が必要なのだ。ディアベル君、私に君の力を貸して欲しい。私のギルド『血盟騎士団』の副団長として——」

「——」

そこで、ディアベルの方針は決まっていた。

突如現れた謎のプレイヤーに、ディアベルはいつの間にか心酔していたのだ。彼の言葉はディアベルの心に響き渡り、もう一度立つ力を与えてくれた。絶望の淵に立っていた自分を、彼は引き上げてくれ

た。
ならば、ディアベルの行動は一つしかない。彼の力になる、それだけしかなかった。

「ピースクリフさん、いいえ——団長」

それだけ言うと、差し出された手を取る。
どこまでこの人の力になれるかわからない。それでも、手放すことがないように誓いにも似た言葉を告げる。

「俺は貴方の盾となり剣となる。存分に俺を使って下さい」

——準備は整った。

——アインクラッドナイトが壊滅状態にあったのは、嬉しい誤算だった。

——予定よりも早い、私のギルドを作った。

——それも仕方ないだろう、イレギュラーだらけだったのだから。

——本来、彼が『二刀流』を手にする筈がなかった。

——アレはユウキ君に与えたもの。

——反応速度が誰よりも優れていた彼女に与えた物だった。

——しかし、彼はそれを手繰り寄せた。

——あろうことか、エリユシデータすらその手にしていた。

——面白い、本当に面白い。

——そして、優希君だ。

——単身で、フロアボスを攻略するとは思わなかった。

——私すら考えも及ばない力を用いて。

——理不尽な世界を憎み、自身を怒りで燃やし尽くす。

——自分すら破壊しかねない強い意思の黒い炎。

——優希君とキリト君。

——彼らは面白い、実に面白い。

— 彼らならば、私の目的を完遂してくれるだろう。
— 彼らならば、私の前に立ちふさがってくれるだろう。
— 彼らの強い意志の力。
— 机上の空論に過ぎなかった『心意システム』
— 『心意』を用いて、彼らは私と対峙することだろう。
— それで私はようやく……。。

Vol. 3 蒼炎の殲滅者

第1話 その後のアインクラッドの恐怖

2023年2月22日 AM9:30

第十八層 主街区『ユーカリ』宿屋一室

ユーカリのとある宿屋の一室に差し込む強い日差しを顔面に浴びて、ユーキは目を覚ました。

右手で瞼を擦りながら、彼は気怠げにゆっくりとした動作で上半身を起こす。窓の外を見れば曇り一つのない快晴。蒼い空が空いっばいに広がっており、太陽光は容赦なく十八層の大地を照らし続ける。

ぼんやりと、慣れたものだ、とユーキは感想をもらした。

その矛先は自分自身。こうして朝に起きて、太陽が落ちれば主街区に戻ってきて、夜には宿のベッドに身体を預けて床に伏す。

数日前からは考えられない生活リズムである。今までユーキは身体を休めることなく、それこそ不眠不休で、飲まず食わずで酷使し続けてきた。彼の強烈な意思と、鋼の精神で食欲と睡眠欲をねじ伏せてきた。

しかし、今はどうだろうか。

真逆とも言える生活を、彼は送っている。

空腹を感じれば何かを食し、喉が渴けば水分を摂取し、眠くなれば眠る。誤魔化すことなく、人間の営み通りに彼は生活していた。

これが普通なのだが、未だにユーキは違和感を感じている。かと言って、無茶をすれば仲間達に怒られる。

もっと具体的に言えば。

アスナから怒られて、キリトには嫌味を言われて、リズベットに呆れられた、エギルには笑われ、ユウキに泣かれて、ストレアからは実力行使と言わんばかりに身体で纏わりつかれる。

彼から見たら、それはとても鬱陶しい状況であり、回避したいモノであった。

だからこそ、最初は普通の生活を送っていたのだが。

——我ながら、単純なもんだ

——こんな直ぐに順応しちまうとは、思わなかった。

ガシガシ、と寝起きの悪いユーキは自分の頭を掻きながら、ふと何かを感じてそちらに眼を向けた。

それは視線、誰かがジツと自身を見つめてくるのを、ユーキは感じ取る。

そこに居たのは。

「えへへー」

彼の妹である——ユウキであった。

彼女は何をするわけでもなく、ニコニコ満面の笑みで満足気に兄を見守っている。

一瞬だけ、ユーキの身体が固まった。

何をしているのか少しだけ考えて、今日はコイツか、とまるでいつも寝起きを見られているかのような感想を心の中で漏らすと、溜息を吐き呆れた口調で。

「一応聴くが、オマエ何してる訳？」

「にーちゃんの寝顔見てたんだよ！」

「……少し悪びれよ。つーかよお、オレなんぞの寝顔見て何が面白いんだ？」

「面白いじゃなくて、嬉しいかな？　ボク達と一緒に居た頃、にーちゃんの寝顔なんて見れなかったでしょ？　それが見れて、何だか嬉しくって……」

「……………」

えへへ、とはにかんだ笑みを零し、照れた笑みを浮かべるユウキに

対して、彼は何も言えず沈黙する。

ユウキの言葉通り、彼は今まで寝顔なんて見せることがなかった。機会がなかったといった方が正しいのかもしれない。フルプレートのツギハギの鎧、頭部を覆う他人を威圧するかのような兜、そんな装備で今まで彼は行動していた。身体を休める何て真似をする訳がなく、ずっと休まずに活動をしていた。

当時の状況を考えてみれば、こうしてユウキと会話らしい会話をしている状況ですらありえない程だ。

それがユウキにとって『嬉しい』という感情のスパイスとなっているのか、彼女は笑みを増す一方である。

対して彼は溜息を吐きながら。

「……どうでもいいが、そのだらしねえニヤケ面を引つ込めろ。見ていて鬱陶しいことこの上ねえよ」

そんな文句を聞いてもユウキは揺るがなかった。

笑みを浮かべたまま、元気よく。

「ごめんね、にーちゃん！」

「……オレの言葉、わかってるオマエ？」

「うん、わかってるよ！」

ここで言うところの、今のユウキは有頂天の極みと言ってもいい。機嫌が良すぎて、喜怒哀楽で『喜』という感情しか今の彼女の中に存在しないのだろう。

それだけ彼と家族になれて嬉しいのか、彼と会話らしい会話が出来て嬉しいのか、彼の寝顔が見れて嬉しいのか。

妹の喜色を一身に浴びて、もういい、と簡単に口にするベツドから起き上がり。

「他の連中は？」

「えーと、キリトとリズと一緒に素材集めに行つて、アスナとストレアがにーちゃんが起きるのを待つてて、エギルは知らないや。今日見えない」

「そうかよ」

それだけ言うと、彼はメインメニュー・ウィンドウを開き、装備画面を開く。

マヌケな寝間着姿から、簡単な私服姿に装備を変えようとしていた所へ。

「それじゃ早く来てよね、待つてるよー!」

それだけ言うと、ユウキは満足気で、機嫌に鼻歌を歌いながらその場から出ていった。

彼はその言葉に答えない。

ウィンドウを数度タッチして、寝間着から簡単な私服に着替えて、彼女とは対称的な重い足取りで部屋を後にした――。

.....
.....
.....

2023年2月22日 AM10:01

第十八層 主街区『ユーカリ』 商業エリア

ユウキが一人で攻略することを止めて、仲間達の下へ戻ってきてか

ら一週間が経過していた。

それ以外は元の状況へ元に戻っただけである。キリトと口論をして、アスナが困ったように笑い、リズベットが呆れながら仲裁に入る。変わったと言えば、その中にユウキやストレアが入り、偶にエギルやキリトの友達であるクラインという男性プレイヤーが入るくらい。

あとはいつも通り。第一層で共に行動していた昔の關係に、彼らは戻っていた。

そんな中、当事者であるユウキの視線は前にいるユウキとストレアに送っている。

ポーションなどの消耗品の買い出しその為に、彼らは商業エリアへと買い物にやって来ていた。人混みが鬱陶しい、そんなことを言いたげな表情で、言葉は隣を歩いているアスナへと向けて。

「いい加減、オレに寝起きドツキリかますのやめろ」

「えー、どうして？」

「どうしてもクソもあるか」

談笑し合う生き違うプレイヤーにも、露店で客を呼び込むNPCにも負けないくらい大きな溜息をしながら、ユウキは話を続けた。

「起きて早々、ンでオマエらの面を拝まねえとならねえんだ？　そもそも、ローテーション組んで来る意味がわからねえよ」

今日はユウキ、昨日はストレア、一昨日はアスナ。

こうして三人は順繰り順繰り、順番を変えてユウキを起こしに突撃していた。いいや、*「起こす」*という表現には少しばかり語弊があった。

彼女達はユウキを起こす行動は取らないし、声すらかけなかった。どこか見守るかのように、時に笑みを零し、時にジロジロ観察して、時に寝息を視聴するように。彼女達は各々のスタイルで、ユウキの寝顔を観察していた。

今朝のユウキの姿、そして今までのアスナ達の行動を思い出しながら、うんざりした口調で続ける。

「普通に起こすならいい、考えても見る。起きたらオマエらがいる。しかも何をするでもない、オレの顔をただ見てるだけだ。こりやただのホラーだろ……」

「そうかなー、これが普通だと思うけど」

「普通じゃねえよ。ちよつと普通の意味を調べてこいよ優等生」

呆れた口調で言うユーキに対して、アスナは「ごめんね」とクスクス笑みを零して。

「でも、アレには監視の意味もあつたんだよ？」

「監視、だと？」

怪訝そうに問うユーキに、アスナは頷いて。

「また君が無茶しななかったって監視」

「……武器がねえんだ、無茶しようがねえだろ」

今まで彼が使っていた石斧剣はキリトとの決闘の際に折れてしまっている。残る武器といえば、以前にリズベットに返却していた剣しかない。その強化の為に、キリトやリズベットは素材を集めに勤しみ、エギル達が協力している。これが彼らが十八層に留まっている理由である。

武器がないのだから戦いようがないし、無茶も出来る筈がない。

そんなユーキの言い分を否定するように、アスナはやんわりと首を横に振ると。

「それでも君なら戦いそうだもん」

「……オマエの中のオレは、どんなだよ。それじゃバーサーカーじゃ

ねえか」

「バーサーカーだったでしょ、君は」

言い返せなかった。

確かに、彼は今まで我武者羅に前だけを見て進んできた。その姿を他人が見れば狂戦士に映り、大いに恐怖を植え付けてきたことだろう。それはユーキも自覚している。それだけ必死だったのだろう、と彼は当時の状況を振り返った。

それを考えれば、なるほど確かに。

以前の彼ならば、『アインクラッドの恐怖』としての彼ならば剣を失った所で、歩みを止める筈がない。市販に並べられている武器を調達し、強化する時間すら勿体無いと、素材集めもせずに前進していくことだろう。

だがそれも以前の彼であればの話だ。

状況は変わった。

自分だけが進み、ボスを攻略した所で意味がないのだと、ユーキはようやく理解していた。

一人で進んだ所で、誰かに迷惑をかけてしまう。だが止まるつもりもない、ユーキのあり方は変わらない。自己否定をしながら、自分を犠牲にしても、敵を多く斬る。それは何があろうと変わらない。

ただ彼は止めたのだ。一人で進むことを止めて、足並みをそろえて進むことを彼は選んだ。自分一人でどうかしようと思わずに、全員で力を合わせてこの世界を生き抜くことを選んだ。それだけに過ぎない。

そんなユーキの心境の変化を理解しているアスナだからこそ、当時のユーキがバーサーカーであると冗談半分に指摘することが出来ていた。

彼女はそのまま、笑みを絶やさずに続ける。

「キリト君、張り切ってたね。ユーキ君の剣を早く完成させて、決着をつけるんだ、って」

「野郎とは勝負がついた筈なんだがな。何を拘ってるんだか」

「そう言う君も、何だか楽しそうだと思うんだけどなー？」

「楽しい訳あるか。野郎は気に入らねえし、鬱陶しい事この上ねえ。だから叩き潰してやりたいだけだ」

「ふーん？」

ジト目でどこか見透かすような視線を向けられ、居心地が悪く感じたのかユーキはそっぽを向いてしまう。

そんな彼に助け舟を出すのが。

「にーちゃんー！」

妹であった。

彼女はブンブンと勢い良く手を振り、元気よく兄に向けて満面の笑みを送っている。

対してユーキはぎこちない表情を浮かべて、右手を上げて応じるのみ。

その様子はぶつきら棒きわまりないので、捉える人間が違えばもしかしたら不快に映るモノかもしれない。しかしユウキは違ったように、彼女はそんな対応でも満足するかのようになり、笑みが深まるばかり。

そんな一連の兄妹のやり取りを見ていたアスナは不思議そうに問いを投げる。

「どうしたの？」

「何がだ？」

「何がって……」

変な所を指摘しようとするもそれは「ありすぎた」。

まず雰囲気もそうだが、ユーキの表情がぎこちない。それは妹に向けられたモノではなく、家族に向けるものでもない。突然街を歩い

ていたら知り合いに声をかけられたので、どうするか考えて応じた、といったモノに近い反応である。

当の本人であるユウキは気付いてない。それだけ彼女はユーキをにーちゃんと呼べるようになって嬉しいのだろう。気付く余裕がなかった。しかしこれでは気付くのも時間の問題と言える。

いちいち指摘してもキリがない。

だからアスナは簡潔に感想をもらった。

「色々大変だよ？ ユウキと何かあったの？」

「……何もねえよ」

それだけ言うと、ユーキは少しだけ考えて。

「……そんなに、わかりやすいか？」

「うん。ユーキ君って、分かりにくいけど分かりやすいもん」

「どつちだよ……」

億劫そうに呟くユーキに、アスナは「まあまあ」と言葉を濁して。

「それでどうしたの、相談なら乗るよ？ わたし、君のお姉さんだし」

「オマエ、まだその路線で行こうとしてんのか？ もう手遅れだって気付かねえのかよ」

「うるさいなあ、わたしの方がお姉さん何だもん！ もっと頼ってくれてもいいじゃない！」

「ガキの頃から浩一郎兄と一緒にオマエの世話してから、今更感がハシパねえんだけど？」

それだけ言うと、ユーキは溜息を吐きながら幼いころの記憶を思い出す。

アスナが泣けば携帯していたビスケットを分け与えて、転んで痛い痛い泣けば慰めていた。アスナの兄である浩一郎はそれを見てい

い笑顔でサムズアップばかりしていた、とユーキは思い出しながら。

「アイツに問題はねえよ。問題があるのはオレだ」

「どうしたの？」

「まあ、なんだ……」

どこか気まずそうに言い淀む。

こんなユーキを見るのは初めてかもしれない。何事も物怖じせず、ズバズバとモノを言うのが彼だ。幼い頃から一緒にいるアスナは珍しい光景を眼にしながら、次のユーキの言葉を待つことにした。

しかしその内容は、ユーキらしくない言葉であり。

「――距離感が、掴めねえ」

「――え？」

耳を疑う言葉であった。

アスナの知る茅場優希と言う人間は、人見知りする人間ではない。むしろその真逆、猫被れば社会的な彼に化けれるし、笑顔という仮面を被ることが出来る。他人と話す事に、何の支障もないし、苦痛とも思わない。本性とは裏腹に社交的、必要であれば自分から積極的に他人と関わろうとする。そんなわけで、彼には友達はいないが、知り合いが数え切れないほど存在する。

誰が言ったか、茅場優希は『コミュニケーションモンスター』である、と。

そんな彼が人との、距離感が掴めない。

ユーキをよく知るアスナからしてみたら、耳を疑う言葉であり、目を丸くするには充分過ぎるものだった。

だがユーキの言葉を聞けば、その理由も納得がいくモノに変わっていく。

「いきなり兄貴面するのは、虫が良すぎる気がしねえか……？」

「あー……」

なるほど、とアスナは納得した。
変な所で真面目な彼らしい、と理解した上でアスナは問いを投げる。

「ユウキが君の妹だってわかったのは何時ぐらいから？」

「妙だと思ったのは五層の辺りからだだが、確信に変わったのは十七層からだ」

初めて会ったのは、第二層からだった。

何を言っても彼の後を追いかけて、その背中を守ってきた紫ローブの少女。その少女が家族だとわかると、いきなり兄として振る舞えるほどユーキは器用ではなかった。

彼女に対して、どうやって振る舞えば良いのかわからない。兄として、妹になにをしてやればいいのかわからない。何よりも、いきなり兄として馴れ馴れしく接するのが気が引けた。自分のようなクソのような存在が、彼女の兄として振る舞っていいものかどうか。彼はずっと悩んでいた。

自己評価が極めて低い彼らしい理由でもある。

軽く奥歯を噛み締め、思い悩むユーキにアスナは簡単に言葉を送った。

「——良いんじゃない？」

「ああ？」

ユーキはアスナの方を見ると、彼女は優しく微笑んでいた。

彼の悩みをしっかりと受け止めた上で、彼女は笑みを浮かべたまま続ける。

「お兄ちゃんとして、振る舞って良いと思うよ？」

「……んな訳あるか、オレはアイツに何度もキツイ事を言ってきたんだぞ」

「それは、ユウキを守るためでしょ？」

最低限に巻き込まないように、フロアボスの攻略に着いてきて無駄に命を散らさないように、ボスを攻略する際には彼女を遠ざけてきた。

時には騙し、時には嘘をつき、時にはストレアを使いフロアボスから遠ざけてきた。彼の無茶な行動に追随して、ユウキが倒れた際には主街区まで運んだこともあった。

勿論、それを他人に話したことはない。

全てはアスナの憶測、しかし事実でもある行動を言い当てて、アスナは続ける。

「ユウキもわかってるんだと思うよ？ だからユーキ君をあんなに慕っているんだと思うし、お兄ちゃんみたいに振る舞ってほしいんだと思うけど」

「それは、妹としての意見か？」

「ううん、女の子としての意見だよ」

「同じようなもんだろ……」

それだけ言うと、ユーキは空を見上げた。

兄として振る舞う。それはどんなことをしてやればいいのか、彼は未だに回答を得ていなかった。しかし回答を得てしまえば、それは決定的なモノへと変わる確信がある。

決定的なモノ——それは幸福。

数日前、彼は「ユウキは一人で充分苦しんだ、これ以上一人にさせることは出来ない、家族になろう」と提案し、ユウキはそれを承諾した。

それまでがいい、問題はその後だ。自分のような終わっている人間に、可愛い妹が出来た。それだけで幸せだというのに、こうして妹は

自分を兄と慕ってくれている。これ以上の幸福はないだろう。それに――。

――オレには出来すぎた妹だ。

――勿体無い極まる。

――本当にこれでいいのか？

――オレのようなクソツタレが、人並み以上の幸福を手に入れて良
いのか？

ギョツと、悔しそうに拳を握りしめる。

この問答の答えは既に出ている。自分は幸せになるべきではないと、最初から答えが出ている自問自答であった。終わらない問答、答えが出ている問いはそこで終わりを告げた。

そこに不意に――。

「にーちゃん……」

恐る恐る、と言った口調でユウキが声をかける。

視線は恥ずかしそうにチラチラ、と彼を見つめて、いつもストレー
トに物を言ってくるユウキからは考えられない奥床しきがあった。

ユーキは視線を空から妹へと移して、ぶっきら棒に問いを投げる。

「……どうした？」

「あのね、迷惑じゃなかったら……」

おずおず、と手を伸ばして。

「ボクと、手を繋いでくれないかな……？」

長らく、一人で居たことへの反動だろうか、ユウキは家族として、妹として、兄と手をつなぐことを希望していた。

未だにユーキは兄として、彼女に何をしてやれば良いのか思いつかない。故に、ユーキは呆れた口調で彼女に応じることにした。

「ガキか、オマエ？」

「ダメ……だよね……」

しゅん、と意気消沈するユウキに、キユツと口を引き締める。どこか今にも泣きそうなユウキを見て、そんな顔をさせられないと胸の奥で熱い気持ち湧き上がるのを感じる。

どう振る舞ったら良いのか、直ぐにわからなくても良い。だがここだけは。

「……ほら」

「……え？」

この場面だけは、これが正しい行動である筈だ。

そう言いたげに、ユーキは行動を移す。右手をユウキに差し出して、粗暴な口調で続ける。

「——手、繋ぐんだろ？」

「——うん！」

ニツコリと笑みを浮かべて、元気よくユウキは兄の手を握った。

感触を何度も確かめるように、何度も弱く握り強く握る。それを繰り返している、今度は兄の方から握り返してくる。それが嬉しいのか、またユウキは笑みを深めていく。

世間一般的に見れば珍しい兄妹の姿に、ストレアはどこか不満そうな口調で。

「いいなあ、アタシも抱きつきたいな」

「す、ストレアはダメよ！」

両手を広げて、ストレアの行く手をアスナが遮る。

勿論、それに対して不満に思わないストレアではない。ブーブーと口を尖らせて、抗議に移った。

「えー、どうしてー?」

「貴女はその……凄腕武器持ってるもの……!」

「何それー?」

「そ、それは……。とにかくダメ! ズルいものそれ!」

それを見ていたユーキは面倒くさそうな口調で言葉を吐き出した。

「下らねえこと言ってるねえで、さっさと行くぞ」

「待ってよー! アタシもアナタの手握りたい!」

「ウゼエから嫌だ」

「ちよつとくらい良いでしょー!」

ストレアが子供のようにワガママを言い始めるが、ユーキはそれを無視するように先に進む。その間、右手はずっとユウキと繋いだままであり、離すことは一度もなかった。

数日前では見られなかった光景。

アスナはそれを見て、微笑みを浮かべていた。

——何かいいな、こういうの……。

——ユーキ君、楽しそうだもんね……。

ユーキが戻ってきて、以前のように行動を共にしていた。

前のように戻ったという言葉の通り、ユーキは偶に苛立ちを募らせる。それは誰に対する訳でもなく、自分に対してなのだろう。こうして穏やかに過ごす自分が許せなくて、彼は以前のように苛立ちを募らせる。

しかしそれと同時に、笑みを浮かべることも増えていった。

満面の笑み、とは程遠いそれは、アスナ以外から見たら、まだまだ笑みとは言えない代物。口元が少しだけ緩んでいるだけに過ぎない。

しかし、アスナは理解していた。

アレがユーキの笑みであると、アスナだけが理解していた。見るこ
とが出来なかったモノ、見たいと願ってきたモノがここに来て漸く眼
にすることが出来た。

それが何よりもアスナにとって嬉しいものであった。

そんなアスナに。

「何している。置いてくぞ」

立ち止まり、振り向いてユーキは待っている。

進むだけだった彼が、こうして自分を待っている。アスナは満面の
笑みを浮かべて、彼に追い付くのであった――。

第2話 ギルド

2023年3月2日 AM11:40

第十八層 主街区『ユーカリ』 オープンカフェ

十八層の主街区『ユーカリ』の大通りに面したオープンカフェに『二人』は丸いテーブルのある席に座っていた。

時刻は昼時。世間一般的に言えば、昼食の時間帯である。大通りには、様々な店が存在していた。それは、武器屋であったり、防具屋であったり、雑貨屋であったりとこの大通りである程度は購入出来るラインナップ。

そんな中、何よりも多いのは飲食店である。レストランであったり、中華料理店であったり、スペイン料理店であったりと、バリエーションが豊富に揃っていた。

精神をすり減らし、一日必死に生きていく。そんなデスゲームとなってしまった世界において、数少ない娯楽の一つに上げられるのが食事である。勿論、本当に食事をしているわけではない。この世界は仮想世界であり、何かを食べたり飲んだりしても、直接胃袋に入るわけではないのだ。

単純に、食事している、と脳に直接刺激して錯覚させているだけに過ぎない。それでも、プレイヤー達にとって食事は娯楽になっている。何せ、『攻略組』ではないプレイヤー達の目的は生きることであり、レベルを必死に上げてゲームクリアを目指す彼らとは心構えが違う。

ゲームクリアを目指さなかった彼らは、酷く人間らしく、とても脆い者達だ。

生きること必死で、一秒たりとも気が抜けない。

そんな極限の精神状態でやれるとことと言えば、食事しかない。いくら食べても太りようがないし、好きな物を好きなだけ食べる。そうすることで、ストレスを発散させて精神を安定させていく。

そういうこともあり、時間帯が昼時なのも重なり、大通りは非常に賑わっていた。

数少ない女性プレイヤー同士で食事を楽しもうと店を吟味している者も居れば、男同士の友人のような集団も店の前でどうするかこうするかと相談している。

唯一の娯楽、数少ない楽しみ。加えて、いくら食べても太らないあの意味で夢の環境にいる。

そんな中、女性として一際『太らない』ということに関して敏感の筈である彼女達『二人』——ユウキとストレアは退屈そうに、とあるオープンカフェの席に座り、人が多く行きかう大通りを眺めていた。

二人が退屈そうにしている、と表現するのは少し語弊がある。

退屈そうにしているのはユウキだけであり、ストレアはむしろ興味津々といった様子で、プレイヤー達を観察していた。

ユウキの感情は、表情と態度に露骨に現れ始める。

背中を丸めて、丸いテーブルに顎だけ乗せて、無気力な調子でユウキはストレアに問いを投げた。

「ねえ、ストレア。何でそんなに面白そうなの？」

「こんなに人が居るんだよ？　面白いに決まってるよ〜」

逆に「ユウキは面白くないの？」と不思議そうに問うストレアを見て、ユウキはそのままの態勢で困った笑みを浮かべながら。

「ストレアってさ、赤ちゃんみたいだよね」

「む〜。それって、どう言う意味い？」

「あ、ごめんね。別にバカにしている訳じゃないんだよ。ただ、何というか……純粹過ぎるというか、汚れを知らなすぎるっていうのかなー？　人をあまり良く知らないようにも見えるんだよね」

自分でも何を言っているのかわからない、とユウキは言うかのよう

に身体を起こして、どこか要領が得ないようにそう言った。

対して、ストレアは少しだけ、眼を丸くさせる。彼女は純粹に、ユウキに驚いていたのだ。その言葉通り、ストレアは人間をよく知らない。知識としてあるが、理解はしていないといった方が正しい。

それもその筈。

ストレアという女性プレイヤーは現実世界に存在しない者。彼女はメンタルヘルスカウンセリングプログラム試作2号であり、単刀直入に言ってしまうと人間ではない。彼女はNPC、つまりはAIである。しかしストレアは、NPCの身でありながら、プレイヤーとして存在していた。その仕掛けは簡単。未使用のアバターを自身に書き直すことで、一人のプレイヤーとして仮想世界に存在する事が出来た。

そんな彼女が、何故NPCという立場を捨てて、プレイヤーとして生きているのか。

理由は二つだ。

一つは、カーディナルの命令によるもの。人間を深く理解する為に、彼女をカーディナルに『恐怖を与えた者』をモニタリングさせていた。だがそれは妙なものだ。モニタリングが命令であるのなら、『メンタルヘルスカウンセリングプログラム試作1号』のように遠くから観察していればいい。何も、人間と同じ立場になる必要はない。そこで二つ目の理由である。

もう一つ、むしろこちらの理由の方がストレアとしては割合が大きい。

それは人間を深く理解したいが為に——カーディナルに『恐怖を与えた者』がいかなる存在か、間近で見たいが為に。

その存在は、奇妙であった。口は粗暴で、態度も凶悪。おまけに人を突き放すことを平気で行う。だがそれでも、『恐怖を与えた者』は助けを欲する人間に手を差し伸ばしていた。

どんな状態になろうと、自分が吹けば倒れる存在になろうと、『恐怖を与えた者』は手を伸ばし続けてきた。

その行為は、否定であった。

カーディナルの定義する人間の否定。恐怖だけが人間であるという主張の否定。

だからこそ、ストレアは『恐怖を与えた者』に興味が湧いた。

システムであるカーディナルに恐怖を与えた『彼』に、恐怖という感情を叩き込みカーディナルをどこか人間らしいモノに変えた『彼』に、ストレアは興味が湧いた。そして、会話してみたいと思った。

それから遠くから監視することを止めて、プレイヤーとして彼女は仮想世界に降り立つことになる。模倣するように『彼』のようツギハギだらけの装備で身を固めて、武器は両手剣を装備し、気ままに人助けを行ってきた。

そして『彼』——ユーキと出会うことになる。

ストレアをAIだと知るのはユーキだけだ。だからこそ、人をよく知らなそうという、どこかの得た発言をしたユーキに驚いていた。彼女の内面をしっかりと見ていないと浮かんで来ない感想。ということはつまり、ユーキはストレアとしっかりと向き合って会話していたことになる。

そう考えただけで、ストレアは胸に温かいナニカが宿るのを感じる。

苦楽を共にした彼女が、こうして自分をしっかりと見てくれている。その事実を喜々として噛み締めて、ストレアは満面の笑みをユーキに向けて。

「えへへー、そうだね」

「……何でそんな嬉しそうなの？」

「秘密」

喜色満面であるストレアに対して、ユーキは不思議そうに首を傾げた。

それでもストレアは答えない。素直に口にするのは照れくさいも

ので、まるで『彼』みたいだと思うと不明な嬉しさがこみ上げてくる。その状態で、どこかテンションが高いまま、ストレアはユウキに問いを投げる。

「ところで、ユウキはどのようにして不貞腐れていたの？」

「……そう見えた？」

「見えたけど？」

素直に返すと、ユウキは苦笑混じりに答える。

「……笑わない？」

「笑わないよ！ 教えて教えて？」

「うん、その……何というか……」

天真爛漫な彼女にしては、珍しく言い淀んでいた。

それだけ言い辛いのか、それとも恥ずかしいのか。恐らく、どちらかという訳ではない。どちらもユウキが言い淀む理由として、その感情が存在するのだろう。

それから意を決して、ユウキは頬を少しだけ染めてか細い声で理由を話した。

「にーちゃんに、置いて行かれたのが……面白くなくて……」

「そうなんだー？ それで、ユウキは何で恥ずかしそうにしているの？」

「だって、子供っぽいじゃん！ 置いてかれていれてっさ……」

恥ずかしそうに言葉を漏らし、視線を泳がせる。

そんなユウキに対して、ストレアは裏表のない調子で返した。

「子供っぽいでもいいと思うけどな」

「そう、かな……？」

「うん。ユウキはあの人の為に頑張ってきたし、あの人もわかっていると思うよ？　むしろ、もっと甘えて欲しいって思ってるくらい」
「嫌われないかな……？」

いまいち自信がないのか、少しだけ俯くユウキに、ストレアは自信の豊富な胸をこれでもというくらい自信満々に張って、これまた自信満々な言動で。

「嫌われる訳ないよ！　毎日あの人を観察していたアタシにはわかるの。ユウキが好きだって事が！」

「す、好きッ!?」

ボンツ！と音を立てて、顔をトマトのように真っ赤に染め上げるユウキに、ストレアは更に追い打ちをかけていく。

「好きというか、大好きかなっ！」

「だ、大好きっ!」

脳内で処理が追いつかないというかのようになり、顔を真っ赤に染めたユウキはフラァ……、と上体を仰げ反りながら、あわや後ろに転ぶというところで踏みとどまり、態勢を戻すとストレアに詰め寄ると。

「す、好きって！　ボクとーちゃんは家族だし、兄妹だもん！　だ、ダメなんだよ！　ボクも好きだけど、まだ早いというか。そもそもボクはにーちゃんと一緒にいれるだけで嬉しいというか……ッ！　……あう……」

これでもかと真っ赤に染めて、ユウキは今度こそ機能を停止した。プシュー、と頭から煙を立てて、オーバーヒートしそうな勢いで、彼女は耳まで真っ赤にさせて俯いてしまう。

そんなテンパっているユウキを見て、元凶であるストレアは無駄に

自信満々に誇らしげに言った。

「アタシ知ってるよ。アレは『シスコン』って言うんでしょ？」

「……シス、コン？」

「うん。妹に世話を焼きたくてたまらない人をそういうんでしょ？」

あれ、違った？」

「ああ、好きってそうことなんだね……？」

天国から地獄。

真っ赤に染めて、ニヤニヤしていたユウキの表情は変貌を遂げる。

期待から落胆へ。坂を思いっきり転がり落ちるかの如く、ユウキは泣けばいいのか悲しめばいいのかわからないというかのような、複雑な表情に変わっていく。

「どうしたのユウキ？ 何か悲しいことでもあった？」

「あ、うん。何でもないよ、うん。そうだよね、それでも嬉しいよ？」

嬉しいけど……何だかなあ……？」

「んー？ よくわからないけど、ユウキもあの人が好きなんだね。アタシも好きだから仲間だね！」

ニツコリ満面の笑み。

ユウキと一緒にということが嬉しいのか、ストレアは本当に嬉しそうに笑みを浮かべる。

それを一身の浴びたユウキも、思わず笑みを浮かべた。

そうだ、これでいいのだ、とユウキは今取り敢えず気持ちを切り替える。家族として好きでいてくれるのならそれでいい。そうなりたいと思っただし、妹として扱ってくれて何よりも嬉しい。

——そうだよ、これで良いんだ。

——お義父さんとお義母さんが亡くなった原因はボクにある。

——それでも、にーちゃんは受け入れてくれた。

——よく頑張った、って褒めてくれた。

——家族になろう、って言ってくれた。

——ボクはそれで充分だよ。

——それ以上欲張っちゃ、罰が当たるもん。

今ある幸せを噛み締めて、ユウキは気持ちを切り替える。

そんなユウキに、ストレアは本当にわからないという口調で問いかける。

「でも、それならどうして、あの人に付いてかなかったの？ ユウキが行きたいって言えば、態度では嫌々だけど、内心はノリノリで許可すると思うけどなく」
「今回は、ダメだよ」

ユウキはここにはいない。

ここというのは、主街区と言う意味であり、階層と言う意味でもある。

ユウキだけではない。アスナ、キリト、そしてリズベツトは四人で第三層に赴いていた。今更、彼らが下層に降りた所で行えることなどたかが知れている。しかし、彼らは下層に向かわなければならなかった。

目的は、アイテム採取でも、素材集めでもない。

とあるクエストを受注するために、彼らは第三層へ向かった。

それがどれほどの意味があるのか、どれほど彼らにとって大事なクエストなのか。

ユウキ自身何となくでしか理解していない。ただわかることは、これだけは他人が首を突っ込んで良いものではないということ。

一人進むユウキに追い付くことが出来た、アスナ達だけの報酬。

自分の兄が大事にされて嬉しい、でもその輪に入れない自分が悔しい。そんな複雑な表情を浮かべて、ユウキは続けた。

「アスナ達にとって、このクエストは大事なモノなんだ。だから、ボクなんかがついて行っちゃダメなんだよ」

「んー、難しいね。人ってそういうのもあるんだ……」

「あるよ、たくさんあるよ。言わぬが花ってヤツかな？」

「言わぬが花、かあ……」

言わないことで、相手を気遣う。

そういうこともあるのか、とストレアは学習すると、どこか悲しそうな表情で。

——あの人の身体の調子を黙ってることも、言わぬが花ってことでいいんだよね……？

.....

2023年3月2日 PM13:05

第三層 女王蜘蛛の洞窟

他のMMOであるように、ソードアート・オンラインでもクエストというものが存在する。

クエストの利点は大きい。普通にモンスターを狩って経験値を稼ぐよりも、クエストをクリアして際に得る経験値のほうが高いし、何よりも報酬というものが存在する。

故に、MMOというゲーム環境に慣れているプレイヤーがまず行うのはモンスターを狩ることではない。効率よくクエストを回し、自分

のレベルを高めていく。

そんな中、ただレベルを上げる事を目的としたプレイヤーには見向きもされないクエストが存在する。

クリアしたところで、経験値が発生するわけでもない。ましてや、報酬を得られる訳でもない。しかしクリアすることで、初めて集団が名乗ることが出来る。

それこそが、『ギルド結成クエスト』である。

そしてそれを受注出来る層は三層しかなく、場所もどこか薄暗いジメジメとした場所。

それは、洞窟。

明かりがないと先が見えない暗闇、壁にはヌルヌルとした苔が張り付いており、天井からは水滴が不規則で落ちてくる。

華やかさとは縁遠い場所に、彼らは足を進めていた。

先頭に金髪碧眼の少年。その後ろに栗色の長い髪の毛の少女、桃色の髪の毛の少女と順番に、最後は全身黒尽くめの装備の少年という隊列となっている。

金髪碧眼の少年——ユーキはどこか億劫そうな声で。

「メンドクセえ」

「気が滅入る発言禁止」

間髪入れずに、栗色の長い髪の毛の少女——アスナがユーキの発言を封殺させる。

しかしユーキは動じない。むしろアスナの言葉にエンジンがかかったように、退屈そうな口調で続けた。

「気も滅入るだろうがよ。ンで、こんな場所が『ギルド結成クエスト』の目的地に設定されてんだあ？」

もつとこういうのは、華やかな場所で結成出来るもんじやないのか？ と、自身の理想をボヤいたままユーキは続ける。

「オマエらもオマエらだろ。オレが戻ってくるまで、ギルド結成しねえとか妙なこだわり持ちやがって」

「だって、キリトが『アイツが戻ってくるまで、ギルド作るの嫌だ』って言うんだもの。仕方ないでしょ」

「いやいや、俺は一言もそんなこと言ってないぞ!」

片手に盾、もう片方の手に松明を持っている桃色の少女——リズベツトが大げさに肩をすくめて。

黒尽くめの少年——キリトがどこか必死に慌てながらリズベツトの発言を否定する。

いじり甲斐がある態度に、リズベツトは笑みを深めてく。

その表情は新しい玩具を見つけた子供のように純粋な表情であった。

「あれれー、そうだったかしらー？ あの時キリトって、かなりユーキなこと気にしてたと思うけどお？」

「それはアスナだろ！俺はコイツのことなんて、全然これっぽちも気にしてなかったぞ！」

「き、キリト君!」

思いがけない飛び火。

アスナは思わず振り返り、キリトに抗議しようと口を開く。

その顔は若干赤らんでおり、必死でもある。顔が赤く見えているのは松明の明かりのせいではない。そうリズベツトは判断すると、標的をキリトからアスナへと標準を合わせて。

「そうよねー、アスナ必死だったものねー？」

「り、リズ？ 何を——」

「他のプレイヤー達は知るよしもないでしょうねー？ いつも毅然として、凛々しい態度の『紅閃』のアスナさんが、一人の男の子にフニャ

けて甘えるなんてねー?」

「わーわー! リズ何を言ってるのよー!!」

バタバタ、と。

慌てて手足を右往左往しながら、リズベットの口を塞ごうと努力するも既に遅い。

アスナの努力虚しく、リズベットの爆弾発言はユーキの耳へと入ることになる。

彼は立ち止まり、どこか驚いたような表情で振り返ると。

「オマエ、猫被ってるのかよ……」

「えっ、そっちなの!?!」

アスナのツツコミに、ユーキは怪訝そうな顔で。

「そっち以外に何があんだ? アレだけオレが猫被んのに、あーだこーだ言ってたのに結局オマエも被んのか……」

「わたしは違うもん! 猫被ってるんじゃないかって、公私分けているだけだもん! というか、そうじゃなくて!」

そこまで言うと、アスナの態度が変わる。

どこか恥ずかしそうに、自身の右手の人差し指と左手の人差し指をツンツン合わせて、チラチラとユーキへと視線を向けて。

「誰が誰に甘えてるのか、とか思わないのかなーって……」

「思わねえな」

対してユーキは無駄に男らしく、乙女となっているアスナを斬り捨てるように。

「つーかよお、オマエってオレに甘えてねえだろ。普段と何一つ変わ

らねえじゃねえか」

「アスナ、あんたどれだけ普段からコイツに甘えてんのよ……」

声を失うアスナに対して、リズベットは呆れた口調で感想をもらす。だがそれは返ってくるのがなく、洞窟の中で消えてくのみである。

こうして集団で行動する時は、ユーキを守るように率先して動くアスナであるものの、プライベートではユーキに甘えており、それが普段から、それも子供の頃から何一つ変わらない。そんなギャップも何もない状態。

キリトはそんなどうしようもない空気を敏感に察知すると、どこか慌てるような口調で。

「そ、それよりもユーキ。リズが新調した装備はどうなんだ？」

ユーキは以前のようなツギハギだらけの装備ではなく、真新しい装備に身に纏っていた。

黒い長袖のインナーの上から胸部を覆う白色の鎧。手首には手甲が装備されており、堅実さよりも身軽さを追求したようでもある。黒色のズボン、その腰からは濃い蒼色の布が垂れている。そして、そのベルトには例の紅色の宝石の付いたペンダントがぶら下がっていた。腰にある石斧剣に変わる彼の獲物である両手剣があった。

「そうだな——」

ユーキはそう言うと、腰にある両手剣を右手で抜き放つ。

刀身は蒼く、刃の部分だけ銀色。刃渡りも片手剣より少しだけ長く、刃の部分が広い。剣を持つ柄にはナツクルガードが施されており、両手を守ってくれる作りとなっている。

とても片手では扱えない重量である筈のそれを、彼は難なく片手で

持ち一言だけ事実を伝えた。

「悪くない」

「そこは、最高だって言いなさいよ」

溜息を共にリズベット言うものの、その表情に不快感はなかった。素直ではない彼に呆れるような、リズベットは笑みを浮かべている。彼女だけではない、アスナもキリトも知っている。ユーキがどれだけ、この剣を大事に扱っているか、良く知っていた。

大事に扱っていないのなら、自身の剣にこんな銘などつけない。その両手剣のかつての名は『ユーキの剣』。しかし今は違う。今の彼の両手剣の銘は——『アクセル・ワールド』。それはギルドの名前と同じであり、もう二度と手放さないと云うかのような彼の意思表示のようでもある。

どこか生暖かい眼で、アスナとリズベットはユーキを見つめる。その眼に反論するように口を開きかけるも。

「——チツ、氣い抜きすぎだ」

舌打ちがあった。それは自分自身に対するようでもある。

同時に、洞窟の真横が崩れて、五メートルほどのモンスターが湧き始めた。大きな体躯、片手には大きな棍棒。どこか典型的なオークともいえるそれは、間髪入れずに四人めがけて横薙ぎで自身の獲物を振った。

彼女達も、これまで場数を踏んできた。

それは奇襲であり意表を突くには充分であるが、それを上回る判断力が彼女達には備わっていた。考えるよりも動く。アスナは難なくオークの攻撃を回避出来るし、リズベットも盾で受け止めることが出来る。

だがそれよりも速く。

」

ユーキは行動に移していた。

横薙ぎの棍棒に対して、ユーキは右手で両手剣を持ちながら合わせるように振り上げる。その棍棒の大きさは、ユーキの身長ほどあるものだ。大きすぎ、大雑把過ぎるそれは、力任せにユーキと消し飛ばそうと迫りくる。

しかしユーキの膂力は、オークの力任せの攻撃を上を行く。

火花が散り、洞窟全体が一瞬照らされる。力任せに來た攻撃に、腕力だけで対抗した結果、軍配が上がったのは――。

」――フィン」

ユーキであった。

身の丈以上の棍棒を、彼は難なく弾き、オークの巨大な体軀をよるめかせた。

ここで今までのユーキであれば、間髪入れずに追撃をしていた。反撃の間など与えず、自分だけの力で敵を斬り伏せようとしていた。

だが今のユーキに、これ以上行動をする意思が見られない。

彼の仕事は済んだ。あとは彼と同じ、奇襲に反応していた少年の仕事である。

少年――キリトはユーキが攻撃を弾くとわかっていたように、行動に移していた。

ユーキの肩を足場に大きく飛び、背中の剣を抜き放ち、そして――。

」――ツ！」

――オークを斬り捨てた。

そうして、四人はアレから問題もなく洞窟の地下二階に到達する。遺跡のようなモノがあるわけでもなく、洞窟の行き止まりに一メートルほどの石像が安置されているのみである。

「——ンで、これでクエスト完了なのか？」
「ちよつと待つて」

面倒くさそうに言うユーキに、アスナはメインメニュー・ウィンドウを開きメッセージボックスを開いた。

それから何度も目を通して、メインメニュー・ウィンドウを閉じると。

「うん、アルゴさんの情報だと、誰かが石像に触れてクエスト完了だつて」

「ふーん……」

興味が無いように言うと、ユーキはアスナに向かって続ける。

「それじゃ、オマエが触れよ」

「え、わたし？」

「当たり前だろ。オマエがギルドマスターなんだからな」

「それ、無理矢理だったじゃない……」

数ヶ月前の事を思い出し、元凶であるキリトとユーキを交互にアスナはジト目で見つめるも、二人はそっぽを向いた。

戦闘以外で彼らが息を合わせるのは珍しい。微笑ましいものであるが、内容が内容だけに素直に見ることが出来ない。そんなアスナは溜息を吐いて。

「それじゃ、触れるよ？」

触れた瞬間。

眩しい光が、洞窟内を包み込んだ。それは数秒続いて、収まり辺りを見渡すと――。

「ユーキ君とキリト君が――いない――」

第3話 カーディナル

時間時刻 不明

『宙の外』

「なん、だ……？」

ギルド結成クエストをこなし、最奥の石像に触れる。それだけで、クエストは完了し、晴れてギルド結成出来る——筈だった。

音もなく、視界が眼も眩む光に飲み込まれる。しかし、それは長くは続かない。一秒も経たずに収まると、彼——ユーキから見た景色は一変していた。

彼は先程まで、第三層の薄暗い洞窟に居た。

洞窟の奥の、更に奥。地上の光すら届かない地底で彼は仲間達と行動していた。

だが、彼の視界にあるのは、そんな暗黒の世界ではない。

空は夕闇に染まり、それ以上太陽が静まることはなく停滞している。地面には舗装された白い石造りの道。その先には小さなアーチ状の石橋が向こう岸にかけられており、その橋の下には弱く水が流れている。

そして、石造りの道の両脇には花壇。様々な色合いの花が植えられて、計算し尽くされたような色彩。相反する華やかさと厳格さが、見事に融合されている。

どこかの王宮の庭園を彷彿とさせる見事な花壇。

だが、注目するのはそれではない。

彼は前を見据える。

更に奥に。アーチ状に作られた石橋の先。更に奥へと、見つめる。

来る者を威圧するかのような紅い建物。いや、建物というよりもアレは城と分類したほうが正しいのかもしれない。あの城に入ることも難しければ、出ることも容易ではない。そんな印象を叩き込むには、充分過ぎる程の紅い城。

見事な建築物とも言えるだろう。現実世界においても、彼に映っている景色は存在せず、空想の物語でも見れるかどうか、と言うほど絶佳な景色が広がっていた。

そんな景色が広がってしようと、ユーキの関心はそこにはない。彼は辺りを見回す。もちろん、景色を見るためではない。どこか慌てるように、必死に辺りに視線を送る。

「アイツらは、どこにいった……？」

気配は————ない。自分を含めて四人で行動していた。故に、この場にあと三人程の気配がないとおかしい。

この場にいるのはユーキ一人だけだった。いくら探そうが、辺りを見ろが結果は変わらない。現実離れた世界、物語に出てくるような景色、現実からも仮想からも隔離された幽世。そんな世界に————ユーキだけが存在する。

思考が追い付かず、判断も鈍くなる。

ユーキは苛立ちを隠せずに「チツ」と大きく舌打ちを打つ。

クエストが完了していようが、何かしらイレギュラーが起きろうが、とにかく彼女達と合流しなくてはならない。

これが普通のMMOであれば、悠長に構えていれば問題ないのだが、生憎と彼らが行っているのはデスゲームと化したMMO。仮想世界の死は現実世界の死に直結する死の遊戯。油断など出来るわけがなかった。

——クソツタレが。

——あの野郎がアスナ達と一緒に居るのなら、問題はねえ。

——だが、確証がない。

——全員、バラバラに散った可能性すらある……。

とりあえず、ここがどこなのか。

情報収集に努めようと、彼は一步踏み出すも――。

「――ふむ、急造の突貫工事にしては、上手く出来たものじゃ」

背後から声が聞こえる。

ユーキは振り向きはしない。そのまま進行方向の飛ぶと、空中で身体を反転させ、地面に着地して漸く背後の声の主を視界に収めた。

背丈は小さく、容姿は幼い、見た目は少女。長い黒い髪の毛で、額の辺りで、前髪が切り揃えられている。

いつの間にか現れた少女は、いつの間にかあった白色のテーブルの前の席に座っていた。

奇妙な姿であった。どこか浮世離れたような雰囲気、だが身につけている衣服はボロボロの布一枚を被っているだけである。

何よりも“奇妙”なのが、少女の頭上にプレイヤーカーソルであるアイコンが存在しないことだ。ならばNPCなのか、と疑問に思うもそういう訳ではない。少女の表情、様子は人間のそれである。

正体不明の少女に対して、ユーキは警戒心を強めていく。

「オマエ、は――」

腰に収めている両手剣に手を伸ばそうとするも、そこには何もなかった。

自身の信頼する獲物が消えた現実を知ると同時に、警戒されていた少女は口を開く。

「おぬしと友好的な話をするために童の格好をしたというのに、これでは意味がないのう？」

「……………」

無表情で軽口を叩くも、ユーキの警戒心は解かれることはない。

何せ、仲間の姿はなく、ここがどこなのかもわかっていない。おま

けに、視界には正体不明の少女。これで警戒するなというのがおかしな話である。

ユーキは少女を睨みつけたまま、剣呑な空気を言葉として吐き出した。

「テメエは何だ？」

「……そうじゃな、一先ずおぬしの間で答えることから始めるとするか」

それだけ言うと、少女は己の名だけを無感情に口にした。

「わしは——『カーディナル』という。おぬしにはそれだけ言えば通じるじやろう」

「な、に……う？」

聞いたことがある名であった。

それは『ソードアート・オンライン』を制御するシステムの名称。彼はそんな説明を従兄弟である茅場晶彦に聞いていた。

そう、システムだ。所詮、システムに過ぎない。

NPCのように規則に則ったアルゴリズムがあるわけでもなく、AIのように独自の思考回路があるわけでもない。カーディナルとはシステムに過ぎない筈である。

だが、ユーキが相対している少女は人間そのもの。感情が乏しいものの、確かにそれは存在する。ただの『システム』とは思えない。

少女がカーディナルと名乗ると、思わず眼を丸くさせる。

だがそれも一瞬の事。直ぐに調子を取り戻して、ユーキは警戒心を解くことなく問いを投げる。

「アイツらはどこだ？」

「第三層に置いてきたぞ。今はおぬし達に話しがあるのでな」

「オレ以外にもいるのか……？」

少女は頷き、続ける。

「はじまりの英雄——と、言えばわかるじやろう」

「……姿が見えねえが?」

「おるとも。ここに、この場所に」

意味がわからない。

怪訝そうな顔つきのまま、再度ユーキは問いを投げようとするが、それは一人でに動いた。

カーディナルと名乗る少女の向かいの席が、一人で動く。

まるでその動きは、座るために誰かが引いたかのような動きだった。

「ふむ、おぬしと違って、はじまりの英雄は素直なものじゃ」

「あの野郎もここにいるのか?」

「そう言っておるじやろう。見えぬだけで、この場所とは別の領域、別の場所で、別のわしの話聞いておる」

「……………」

にわかには信じられないモノであるが、眼の前で起きた現象を見る以上信じるしかないようだ。そうユーキが判断を下し、ゆっくりとした足取りで、何が起きても即座に対応できるよう周囲に意識を巡らせて、キリトが座っているであろう隣の席に腰掛ける。

事の成り行きを見守っていたしていたカーディナルは、満足気——
——というには感情が表に出てない無表情で呟いた。

「わしの話をお聴きになったか?」

「要件だけ話せ。その後の対応は、ソレ次第だ」

簡潔に吐き捨てるだけ言うと、睨めつけながらユーキは己の力を開

放する。

内に眠る己を焼き尽くすほどの黒い炎を開放する。それは勢い良く噴出するものではなく、徐々に少しずつ弱い黒炎となって身体に纏わせていく。

武器がなかるうが関係ない、下手な真似をすれば容赦しない。暗にユーキはそう語っていた。

少しでも妙な真似をすれば、指の一本すら動かしたのなら、ユーキはテーブルを蹴り飛ばしカーディナルの首を片手で掴みかかるところだろう。

それがわかった上で、カーディナルは事実だけ告げる。

「無駄じゃ」

「あ?」

「その力を開放した所で、意味などない。それに——」

カーディナルの顔がノイズのようなもので一瞬崩れて、直ぐに元に戻った。

口は動いているものの、声は発声されていない。口から出るのはザザザ、という雑音。

暫くして、漸くカーディナルの声がユーキに届いた。

「時間 beu oない boo のは、わ sn しだけではない」
「オマエ……」

顔は元の少女の顔のまま。

しかし、よく見ればソレ以外はボロボロであった。身体を覆っているマントの奥、そこには身体があるはずなのに、至る所が欠損しており、肌の部分は黒色の変色している。肩は震えており、その眼はどこかユーキに怯えるようでもあった。

吹けば倒れる。

そんな儚さがある少女に、何を警戒すればいいのか。

ユーキは舌打ちをすると、具現化していた黒い炎を胡散させて、溜息を吐いた。

「要件を話せ」

「わかった」

コクリ、と小さく頷いた少女は簡潔に言う。

「単刀直入に言う。わしはもう消される」

「簡単に纏めんな。意味がわからねえよ」

「事実じゃからな。もう間もなく、わしは消される。……いいや、消されるという表現は正しくない。新しいわしに上書きされると言った方が正しいのう」

「……どういう意味だ？」

怪訝そうな顔でユーキは問いを投げて、カーディナルは無表情に答える。

「わしはとある人間に『恐怖』を与えられ、人としての感情を宿した。人とは不思議な生き物じゃ、弱い人間がいれば、強い人間も存在する。千差万別とはこのことじゃろう」

「……」

「しかし人間達はこの世界に囚われて、誰もが『恐怖』しておった。アレは恐ろしい、本当に怖い。思考が追い付かず、足を止めてしまう。その気持は、わしが一番理解出来る」

だから、と言葉を区切り自分の目的を告げる。

『『恐怖』が恐ろしいものだど理解しているからこそ、わしは人間達を、助けたかった』

「だがオマエは消される……」

「うむ。所詮、わしはシステム。この世界を円滑に進める為の装置に過ぎん。しかし、わしには感情が芽生えた。『恐怖』を介して人間を理解し、守ろうとした——」

少女はかつての失敗を思い出す。

モンスターキラーを使って、人間を守ろうとした。かつて学んだ人間という情報を元に、モンスターキラーという怪物を作り出し、人間達を守ろうとした。

当時の少女は、人間とは途方もない憤怒と底知れぬ憎悪。それが人間の全てであると思っていた。それもその筈、彼女はそう『彼』に教わったのだから。それが人間であると、少女は学習したのだ。

だがそれは違った。それが人間の全てではないと少女は理解した。

『恐怖に打ち勝った者』を遠くからモニタリングしていたメンタルヘルス・カウセリングプログラム試作一号を介して学習し。

『恐怖を与えた者』を間近で観察していたメンタルヘルス・カウセリングプログラム試作二号の情報を元に理解した。

人間はそんな簡単で不毛な生き物ではない、と。

人間はもつと複雑で美しいものなのである、と。

カーディナルは結論付けた。

だからこそ、守りたかった。人間という弱くもあり強くもある不思議な生き物を、感情を持ったシステムは守りたかった。

「その感情が、あやつには邪魔になったのじゃろう。故に、わしは元のわしに上書きされる。感情もなく、ただのシステムとして世界を循環する機能として、わしは元に戻る」

「あやつ、つてのは……」

「おぬしの想像している通りの男じゃ」

「茅場、晶彦……！」

ギリツ、と奥歯を噛み締めてユーキは忌々しげに、自分と同じ血を通わせている男の名を口にした。

対して、カーディナルはどこか遠い目をしながら、空を見上げて。

「あやつは、化物じゃ。見識はわしよりも広く、何よりも遠い。アレが何者なのか、わしは理解出来なかった……」

口惜しげに呟くと、空からユーキへと視線を移動し、真つ直ぐ彼を見つめながら。

「だが、考えれば当然とも言える。わしはシステムで、あやつは人間。システムが人間に勝てる道理はなく、わしは創造主に逆らえぬ。人間を倒すのは、いつだって人間じゃ」

「……だから、オマエはオレ達をここに呼んだ訳か。オレ達に、託す為に」

「そうじゃ。お前達だから、呼んだ。わしに恐怖を与えた『最も恐い者』であるおぬしと、わしには出来なかった恐怖を乗り越えた『最も強い者』であるキリトだから、この場所に、招いた……ッ！」

どこか苦し気に、カーディナルは胸を抑え、ユーキは反射的に席を立ち駆け寄ろうとする。

だがそれをカーディナルは首を横に振る。もう手遅れだ、と。彼女はそのまま、顔を苦痛に歪めながら続ける。

「ここは、第百層『紅玉宮』を、もしてわしが作ったレプリカじゃ」「ンだと……?」

ここがインクラッドの最上層。

囚われているプレイヤー達の終着地であり、到達しなければならぬ目的地。この場所に到達し、第百層を討伐できれば、現実世界に帰還が出来る。

「しかし、おぬし達はここには到達できない……」

「……オレ達が途中でくたばるって言いてえのか？」

不機嫌そうに声を若干荒らげるユーキに対して、カーディナルは首を横に振る。

違う、そうではない、と口元を緩めながら。

「創造主は、この世界に、おる……」

「……それはあの城ン中にいるってことか？」

顎を少しだけ上げて紅い城を見るも、カーディナルは再度首を横に降って。

「よく聞け。茅 nbisr 場晶彦 gbu はおぬし達と同じプレイヤー doozl ヤーとして既に居る……ッ」
「な、に……」

ノイズ混じりに訴えるカーディナルに、ユーキは今度こそ眼を見開く。

高みの見物を決め込むのではなく、同じプレイヤーとして。この仮想世界の死が、現実世界の死に繋がる。そんな状況でユーキは自身の感想をもらった。

「舐め、やがって……ッ！」

同じ立場、同じプレイヤー。ゲームマスターとしてではなく、自分達と同じ囚われた者として居る茅場晶彦に、ユーキは憤りを爆発させる。

屈辱と、少年は捉えていた。いつでもどうにか出来る立場を捨てて、自分達と同じ土俵に立つ。倒すべき敵が、プレイヤーに混じり、この世界で生きている。

それだけで充分だった。どんな理由があろうが、どんな思惑がある

うが関係ない。舐められた、とユーキが思うには充分過ぎるモノだった。

「すまんのう。残念 g r r ながら、わしには創 a t e e 造主がどのプレイヤーなのか判別出来なかった」

「……別に良い。この世界にあのクソが居て、いつでも斬れる場所にいる。それだけで、充分過ぎる」

「それは o a a n 良かった t c y a k た、わしもこの a a p a 姿を見せた甲 q p b a 斐があるというもの。おぬしに、一番見せたかったからのう」

「何だど？」

それはどう言う意味だ、と怪訝そうに問いを投げる。

その答えをカーディナルは示す。席から彼女は立ち上がる。

そんな状態になっても、カーディナルはノイズ混じりに告げる。

「インカーネイト心意システム——通称『心意』。それ o t a p が、おぬし達の使 a x a t a う力の正体であり、その o a p a 力の名称じゃ」

「心意、だと……？」

「事象を p o a h 己の感情や心の h a y o a 力で制御し、『オーバーライド事象の上書き』させ h o x y o a o る」

度々、その力は発現させていた。

VR実験中に、モンスターキラー討伐中に、黒ポンチヨの男と相対した際に、フロアボス攻略の最中に、そして——キリトと決闘した時にも。

それは負の感情を爆発させた黒として、己を焼き尽くす程の炎として、ユーキの身体から噴出していた。本来ありえない感情の具現化、起こり得ないモノを事象に上書きさせる。それが力となり、今までユーキのもう一つの武器として振るってきた。

だが――。

「おぬ v h a o a しの b a t a h o a 場合、心の力が強すぎた。その力は g a o u a 確実に b a y a おぬしを――」
「――言うな」

わかっている。

この力を使うようになり、ユーキの身体からは何もかも抜け落ちていく。強い力は確実に、身を滅ぼす。

わかっている、誰よりも何よりも、ユーキは理解している。力を使うのが、使わまいが、己の結末など、わかっていた。

右手を握り、真つ直ぐにカーディナルを見る。

もはや顔の半分は黒く削られて、身体を覆っていた布の下には肌らしい肌はなく、ところどころ欠損していた。それが自分の末路だとユーキは眼に焼き付けた上で、口を開く。

「オマエはそんな有様になっても伝えに来た、アイツらもオレに追い付くために走り続けた、他の連中はこの地獄から抜け出すために今も前に進んでいる」

「……」

「オレだけ休んではいられない、オレだけ立ち止まる訳にはいかない。どんな結末だろうが、オレは今も昔も、これからも進み続ける」

「そうか……」

それだけ言うとユーキは席を立ち、最大限の敬意を含んだ声色でカーディナルに言葉を送った。

「行くのか」

「そのようじゃのう……」

バキリ！ と。音を立てて、カーディナルの身体は細かく崩れてい

く。

手の指先がサラサラと分解されながら、彼女は続ける。

「新しいわしは、容赦がない。円満に世界を運営するために、容赦なく難易度を上げていくぞ?」

「……どうすればいい?」

「世界を欺け、世界を騙せ、世界に偽装しろ」

今まで無表情だった少女の口元に笑みが宿る。

それは意地の悪く、性根が曲がっている、そんな人の悪い笑みを浮かべたまま。

「フロアボスが、わしの眼となっておる。フロアボスと全力で戦わない限り、難易度が上がることはない。四十層辺りまで、加減しろ」

「それは、つまり——」

「——猫を被れ、ということじゃよ」

対するユーキも笑みを深めていく。

カーディナルと同じように、口元を引き裂くような楽しそうな笑みを浮かべて。

「だったら、簡単じゃねえか。得意だ、そう言うの」

「それは、僥倖」

言うと、カーディナルの身体が一気に力が抜けた。そして重力に逆らうことなく、地面に倒れる——事はなく。

「お、ぬし……」

大事そうに、丁寧に、壊れ物を扱うような細心の注意を払いつつ、ユーキはカーディナルの身体を抱き止める。

小さな身体だった。この身体はカーディナルがデザインしたものであれ、まだまだ彼女は子供。感情を宿して間もない幼子だというのに、自分が消える今でも、彼女は人間を守ろうと尽力していた。

そんなシステムを、いいや——人間を、ユーキは無下にすることが出来ない。

「……ストレアが羨ましい。間近で人を観察するとは、本当に羨ましいものじゃ。余命幾ばくもないのなら、わしもあやつのようにおぬしについて回ればよかったのう」

「……んな罰ゲームごめんだ。気苦労が絶えねえよ」

「そうか。しかし、わしは楽しい。おぬしとキリトの決闘を直に見れた。アレは高揚した。ああいうのを心が躍るといふのじゃな」

カーディナルの身体の大半は崩れていた。存在薄くなり、吹けば消えるような儂い状態である。しかいそれでも、カーディナルは泣き言を言わない。消えたくない筈なのに、何も言わない。

そんなカーディナルを見送るユーキは口を開く。

「悪かったな」

「ん……う？」

「オマエを恐がらせるつもりはなかった……」

「気にしておらんよ。おぬしのおかげで、わしは感情を宿すことが出来た」

「だとしても、オマエを無駄に恐がらせた事実が変わらねえ。七層辺りからストレアに聞いて、謝りたかった……」

「……全く、おぬしは本当に他人に、甘い……」

呆れるように呟いて、カーディナルは空を見る。

どこまでも広く、夕闇に染まった景色を見て彼女は口を動かした。既に発声出来ず、ユーキにも届かない。それでも口を動かす。己の言葉が世界に届かずとも、唇を動かした。

——悔いはある。しかし、悔いはない——。

.....
.....
.....

2023年3月2日 PM 13:20

第三層 『女王蜘蛛の洞窟』

触れた瞬間。

眩しい光が、洞窟内を包み込んだ。それは数秒続いて、収まり辺りを見渡すと——。

「ユーキ君とキリト君が——いない——」

アスナが漠然と呟いた。

だがまた直ぐに、眩しい光が、洞窟内を包み込んだ。それは数秒続いて、収まり辺りを見渡すと——。

「ユーキ君とキリト君が——いる——!?!」

どこか慌てながらアスナは叫ぶと、キリトを見てピタッと止まる。どうやら、消えてからそこまで時間が経ってないらしい。

そうユーキは判断すると、カーディナルと名乗った少女と何を話したのかキリトに訪ねようと口を開くが。

第4話 余命幾許もないこの身なれど

2023年3月2日 PM15:30

第一層 『はじまりの街』 中央広場

アスナ、キリト、リズベット、そしてユーキの四人は無事に『ギルド結成クエスト』をクリアすることに成功した。

恐らく、彼らのHPゲージの辺りには、ギルドに所属しているであろうアイコンが表示されていることだろう。それは、ギルド『アクセルワールド加速世界』が結成されたことを意味している。

これは彼らの悲願でもあった。

ユーキを取り戻し、四人が揃ったらギルドを結成する。ユーキ以外の三人は多く語らなかつたものの、三人の胸中にはそんな目的があった。

しかし、ユーキを除く三人の顔は浮かないモノ。

折角、望み通り願い通りにギルドを結成できたと言うのにも関わらず、道中でも口数は少なかつた。

それも仕方ないのかもしれない。

既存のカーディナルは消失し、新たなるカーディナルとして上書きされた。感情がなくなつたシステムは、容赦なく難易度を上げていく装置と化した。そしてこの世界の創造主である茅場晶彦がこの世界でプレイヤーとして存在している現実。

受け止めるには多すぎる情報量に、彼らも困惑していた。

そんな彼らが集まつたのは、第一層のはじまりの街の中央広場。

カーディナルから託されたモノは、アスナ達だけで判断していい情報ではない。第百層まで到達し、百層フロアボスを倒せばゲームクリア、というデスゲームの根底を覆してしまうものだ。

故に、アスナ達は一先ず信用できるプレイヤーに情報を伝えようとしていた。

集まつたプレイヤーは少数。

ユウキとストレアはもちろん、彼らが一層目から面識があるエギ

ル、キリトの友人であり風林火山のギルドリーダーであるクライン、情報屋の鼠のアルゴ。

茅場晶彦がプレイヤーとして、ソードアート・オンラインをプレイしている。そんな眉唾で、冗談のような言葉を聞いて、彼らは様々な反応を見せた。

ユウキは驚いたように眼を開くとキョロキョロと兄を探すように眼を泳がせて、ストレアは事実を静かに受け止める。エギルは腕を組み瞼を閉じて落ち着くような様子を見せて、アルゴはどこか思案するように手で口元を押させて考え込んでいる。

そして、クラインと言えば――。

「えーと、ちよつと待ってくれよ……」

目頭を抑えて、自分だけ置いてかれまいと必死に考えて、言葉を選びキリトに質問を投げた。

「つてことは、アレか。カーディナルってシステムが、オメエ達に垂れ込んだって?」

「ああ」

「……茅場晶彦がプレイヤーとしているって?」

「そうだ」

クラインは天を仰ぎ見て一言。

「嘘じゃなくて?」

「嘘じゃ、ないよ」

答えたのはキリトではなく、静観していたストレアから。

彼女は静かに、事実だけを口にする。

「カーディナルは嘘をつけるほど、完成されていないもん。だから、キ

リト達に言ったことは全部ホントだと思うな」

「……ストレアはカーディナルのことに ついて、何か知っているのか？」

閉じていた眼を開き、エギルはストレアに問う。

しかし、彼の声は依然として落ち着いている。質問しておいて、彼の中では一つの答えが出ていた。

キリト達の言葉を聞いて調子を崩さず、現在でもこうして落ち着いてクラインの言葉を否定している。クライン以外は全員勘付いている。彼女が何者なのか、どうしてカーディナルに対してはつきりとそこまで断言出来るのか。

それはつまり――。

「……アタシは『メンタルヘルス・カウセリングプログラム』試作二号機。コードネーム『ストレア』。ユイと同じくAIで……人間じゃないの」

「AI……？」

ぼんやりと呟くアスナに、ストレアは力無く頷いて。

「ユイはキリトに、アタシはあの人に。カーディナルから指示されて、モニタリングしていたの。だからわかるの。一時的にカーディナルとは繋がってたから、わかる。あの子は、感情を獲得することは出来たけど、嘘なんてつけるほど完成されていないって……」

「……ストレアがモニタリングしていたことは、ユーキ君知っているの？」

「うん。会って初日に伝えてあるよ……」

アスナの間に、ストレアは眼を付して答える。

後ろめたい気持ちがない、といえれば嘘になる。

ユイとは違って、ストレアは今までユーキ達と共に行動していた。

巻き込まれたプレイヤー側ではなく、このゲームを構成している側の立場であり、彼女は直にデスゲームという最悪な光景を見てきたことになる。

彼女は、自分が行動すれば最悪は回避できたのではないか？などと考えるほど傲慢ではない。いちプログラムがどう足掻いた所で、デスゲームは開始されていたし、カーディナルも防げなかったモノを彼女のようなAIがどうにか出来る道理はないのだ。

だからといって、何も感じない訳でもなかった。

メンタルヘルス・カウセリングプログラムは、プレイヤー達の精神をケアするために設計されたプログラムだ。しかし、ストリアには何も出来ない。プレイヤー達が絶望に落ちようが、悲観に打ちひしがれようが、怒りで身を焦がそうが、彼女には救う術がなかった。それもその筈、当時の彼女は人間の精神を癒せるほど完成されていなかったのだから。

故に、彼女は行動に移す。何も出来ないのなら、何かしようと。観察していた『彼』のように、困っている人間に手を差し伸ばそうと、AIという立場ではなく、プレイヤーとして仮想世界に降り立った。

それからというもの、ストリアは『彼』の姿を模範し続けた。

ツギハギだらけの防具、身の丈ほどある両手剣武器に、素顔を晒すことなく名乗ることもなく、手を差し伸ばし続けてきた。

その事実を告げるつもりもない。何も出来なかった自分を糾弾する声があっても、仕方ないと思う。

しかし、彼女は嫌われなくなかった。

眼の前に居る人間達に、彼女は嫌われなくなかったのだ。眼の前に居る人間達は、強い人間だとストリアは思う。絶望の中で、彼らは諦めず何があっても前を見てきた。彼らの仲間になれば、どれほど素敵だろうか。

嫌われなくなかったら、黙っていればいい。自分も彼らのように人間であることを偽ればいい。しかしストリアにはそれが出来ない。彼らを騙し続けているようで、何よりもそんなことをして安穩に過ごす自分が許せない。

だから、ストレアは意を決して真実を話す。

自分もカーディナルと同じ立場であったこと、自分は人間ではないということ、彼女は真実を告げた。

巻き起こるのは糾弾か。ストレアは両手をギュッと握り締めて、次の言葉を待っている。

「一つ、聞かせて欲しいな」

アスナが口を開き、ストレアは眼を付したまま頷いた。

「ユイちゃんとストレアさん、どっちが妹なの？」

「——え？」

顔を上げると、本当に不思議そうな顔で首を傾げるアスナがそこにいた。

アスナだけではない。この場にいる一同は、興味津々というかのようになり、ストレアの発言を待っていた。クラインとエギルを見れば、どっちが姉なのか賭けまでしている始末。

想像していた反応とだいぶ違う展開に、ストレアは思わず素直に口にする。

「ユイの方がお姉さん、だけど……」

「えー、マジかよ!? 俺アてつきり、ストレアの方が上だと……」

「クラインよお、さつき二号機だつて言つてたの忘れたのか？」

「あつ、そういえば……。ズリイぞエギル！」

「ズルいもクソもあるか。聞いてないお前が悪い」

ギャーギャーと抗議をするクラインに、エギルは意に返す様子もない。

それを見て、リズベットは呆れたようにため息を吐きながら。

「全く、空気読みなさいよね。変なことで騒ぐから、ストレアがぼかんとしてるじゃない……」

「まあでも、ストレアって見た目の割に、何か幼い感じがするよな」

な、ユイ?とキリトが腰にしがみつクユイに話を振るも、彼女はストレアと同じく眼を丸くさせて成り行きに流されるばかりだった。

ユイもストレアも、周りの反応が想定していた反応とは違うものに、ただ驚くばかり。

糾弾、もしくは距離を置かれるとばかり思っていた。何もかもが想定外、受け入れられるとは思わないし、何よりも和気藹藹で返されるとは思わなかった。

「何も、思わないの?」

「え、何が?」

「アタシ、AIなんだよ? もっと、こう……」

「ユーキ君は知ってるんでしょ?」

アスナの問いに、ストレアは「うん」と素直に頷く。
それを見て、アスナは笑みを零して。

「だったらいいかなーって。それにストレアさんって優しい子だって知ってるから」

ねえ、ユウキ?とアスナがユウキに向かって話をすると、ユウキは元氣よく頷いて嬉しそうに笑いながら。

「うん! ストレアが今まで色んな人達を助けてきたこと、ボク知ってるもん!」

「ユウキ……」

「だから大丈夫、心配しないでストレア。何かあっても、ボク達を守るから!」

「うん……、うん……！」

一同に背を向けて肩を震わせて、力無く「ありがとう」と呟くストレアに一同は笑みを零した。

眼の辺りを拭う辺り、彼女は泣いているのかもしれない。それを見てユウキは近づくと、片方の手をストレアの背中を優しく叩きながら、もう片方の手をストレアの手を握る。

「話を戻すけどよ、茅場晶彦のヤツがプレイヤーで紛れているんだよな？ だったら、全員に伝えた方がいいんじゃないのか？」

「駄目だな」

クラインの提案を却下するのはアルゴだ。

彼女はこの中でも、他人と関わってきた機会のほうが多い。色々なプレイヤーと接してきたし、何よりも情報屋として観点から意見を述べる。

「この情報は流せない。いいや、流してはいけないと言った方が正しいかもナ」

「何でだよ？ みんなで協力して、茅場をやっつければいいじゃないか」

「クライン、アルゴの言う通りだよ」

キリトは呟いた。

攻略組の最前線、それなりに攻略組の現状を考慮して、キリトは続ける。

「今では『血盟騎士団』が攻略の最前線を担っているけど、こんな情報を流せば崩壊するだろう……」

「攻略組も一枚岩じゃないってことサ」

皮肉気に、アルゴはニヤリと笑うと。

「こんなもん、広まったら攻略どころの騒ぎじゃなくなる。待っているのは疑心暗鬼、最悪プレイヤー同士の殺し合いに発展するゾ」

誰よりも情報売り、誰よりも他人と接してきた情報屋は断言した。

しかし、反対意見はない。この場にいるプレイヤー達は理解していた。

茅場晶彦がこの世界に存在する。それを流したのなら、秩序は崩壊し、魔女狩りが起きた混沌とした時代に逆戻りすることを。

本来、フロアボスと戦うのは一人では出来ない。そうなると思わず知らずのプレイヤーと協力し合わなければならない。ある程度、他人を信頼しなければならぬ。しかしこの情報は、それを覆すもの。事件の犯人がプレイヤーに紛れている、疑心暗鬼となり、人の判断を鈍らせる。アイツが怪しい、それだけでプレイヤーキルが横行することになる。そうなったら攻略何て出来るわけがなく、待っている結末は悲惨なものになるだろう。

だからこそ、アルゴとキリトは断言する。この情報は、不本意に流すものではない、と。

それを踏まえて、悔しそうにリズベットは結論だけを言葉にした。

「様子を見るしかない、つて訳ね……」

「そう、だな。でも逆を言えば、これは大きなアドバンテージだと思う」

「茅場がこの世界にいることを知る数少ないプレイヤー、と言う意味でか？」

エギルの言葉に、キリトは一度だけ頷いて続けた。

「このゲームは攻略することを前提に作られている。となると、茅場

は『攻略組』に紛れている可能性が高い」

「攻略組に居テ、尚且つ『ソードアート・オンライン』に詳しいプレイヤーになってなるト、大分絞られてくるナ」

「アルゴはその辺り調べてくれるか？」

「任せロ。キー坊の頼みダ、おねーさん一肌も二肌も脱いじやうゾ」

それを聞いたエギルも、納得するように頷くと。

「俺も道具を買いに来たプレイヤーを探ってみるか……」

「ドリュウーさんもお願ひします。もしかしたら、攻略組にいない可能性もあるし……」

「任せろ。アスナの頼みだ、お兄さんも一肌も二肌も脱いじやうぞ」

方針は固まった。

茅場晶彦はこの世界に居るかもしれない。その情報は、彼らの中で留めておき様子を見る。

各々がそれぞれのやり方を模索し、行動に移そうとする中、クラインは周りを見渡しながら疑問を口にした。

「そういえば、アイツはどこに行ったんだ？ ほら、キリの字の友達の……」

「友達じゃない！ ……そういえば、ユーキのヤツはどこだ？」

力強く否定し、直ぐに不思議そうにキリトは視線をアスナに向けた。

今はいないアスナの幼馴染。となると、彼の動向を知るのは彼女しかいない、という安直な結論。だがそれは正解のようで、アスナは困ったように笑みを零して。

「何か、先に始めててくれて言ってたよ？」

「団体行動出来ないヤツだ——」

「——あの、パパ」

ここで今まで黙っていたユイが、キリトの腰にしがみつきのながら縫うように見上げて声を漏らす。

パパ呼びを強制してないし、むしろ止めて欲しいと訴えてもユイはキリトを『パパ』と呼ぶ事をやめようとしめない。ならば受け入れるしかキリトにはないのだが、今だにパパと呼ばれることに慣れてないし、どこか周りの視線が痛い。そんな複雑な状況で、キリトは苦笑を浮かべて娘の方に見ながら問う。

「どうしたんだ、ユイ？」

「あの恐い人のことなんですけど……」

「怖い人って、ユーキだよな？」

はい、とユイは頷くと。

「あの恐い人、もう少しで——」

「——ユイ」

ストレアが遮るように、首を横に振って言う。

その表情は真剣そのもので、普段の天真爛漫な彼女からは想像もつかないモノである。

ただ事ではない、そう感じたキリトは怪訝そうな声で問う。

「ストレア、どうしたんだ？」

「ううん、何も。それじゃアタシ、あの人を探しに行つてこようかなー！」

首を傾げるキリトに、ユイにあるのは疑問。

キリトにしがみつく手を、更にギュッと握り締めて。

—— どうして、ストレアは、隠すのだろう——。
—— 怖い人が、もう長くないことを、と——。

.....
.....
.....

2023年3月2日 PM16:30

第一層 『はじまりの街』 路地裏

そこは光などない世界だった——。

街も街灯もなく、室内から漏れる明かりもない。

その場所は建物と建物に挟まれて出来ており、どちらも人がいる気配はなかった。

空から照らされる夕日だけが明かりとなっているが、これだけでこの場所を照らすに不十分。

人を不安にさせるような場所。

彼—— ユーキはそんな場所にいた。

壁に寄り掛かるように、身を預けて苦しげに歯を食いしばる。顔からは冷や汗が滲み出ており、声など上げまいと口を固く閉ざす。

「.....ッ.....ッ！」

彼が感じているのは、この仮想世界で感じる筈のないモノ。それ

は、痛覚。

本来、プレイヤーに痛覚はない。誰かに斬られようが、モンスターに傷つけられようが、それは『痛覚』としてではなく『違和感』として処理される。

しかし、ユーキは今ハッキリと、痛みを感じている。

脳が破裂するようで、左腕には灼熱が走り、左眼からは内側から炸裂するように。絶え間なく、容赦なく、ユーキの身体を襲う。

「……チツ」

舌打ちするのは自分自身に対して。

壁に寄り掛かるのを止めて、額に浮かんでいた冷や汗を乱暴に拭く。

全身に熱が戻る。『この程度』の痛みに参加しているのか、と情けない自分を心の中で斬り伏せる。

——立、て。

——前を、見ろ。

——剣を、握れ。

——こんな所で倒れるなんざ、オレには許されない。

——この程度の痛みなんぞ、罰にもならない……！！

両親を理不尽に塵殺した世界を憎悪し、何よりも無力な自分を焼き殺さんと憤怒する。

圧倒的な負の感情を身に宿し、ユーキは超然とした態度で前だけを見る。

そこへ——。

「どうして、そうまでするの……?？」

「……………」

ユーキは振り返る。

そこに立っていたのは——ストレアだった。

彼女は今にも泣きそうな顔をしながら、再度ユーキに問いかける。

「そんな姿にまでなって、どうして前に進もうとするの?」

「そいつは、どう言う意味だ?」

「だって——」

少しだけ言い淀み、ストレアは意を決して口にする。

「——普通なら、アナタはもう死んでるんだもん!」

普通ならば死んでいる。それはそのままの意味なのだろう。

この世界でHPゲージがなくなれば、現実世界でも死亡が確定している。だが他の方法ならばどうだろうか? 例えば——HPゲージが残つていようと、アバターが消滅してまえばどうだろうか? そういう意味では、茅場優希のアバターはいつ消滅してもおかしくない状況である。

左腕は黒よりも黒いグロテスクな色に変色しており、内部はありとあらゆるリソースが欠けている。本来感じ得ない『痛覚』を感じているのがその証拠である。彼の身体は確実に崩れており、いつ消滅してもおかしくない砂上の楼閣のようなものだ。

AIから見たユーキの身体は正に死に体。死体が何故か生きているようなモノなのだろう。

彼をこの世界に繋ぎ止めているのは、狂人的な強い意志。自身を焼き付く程の強い心意に身を削り、今度は燃え滓になろうと強靱な心意でこの世に繋ぎ止める。

だがそれでも、いつ崩れてもおかしくない。いや、既に崩れてない」と道理に合わない。

だからこそ、ストレアは問う。

何故そうまでして、まだ剣を持つのか。戦う意志を宿し続けている

のか。

ユーキの答えは簡単なものだった。大層な理由もなく、斬り捨てるように、吐き捨てるように、自分の過ちを彼は口にする。

「こうなっちまったのも、オレが無茶苦茶したからだろ。つてことは、ただの自分勝手、これは自業自得だ」

「違うよ、アタシ、知ってるもん！ アナタが今まで戦ってきたのは、他人の為だって」

「いいや、間違ってるぞオマエ」

緩やかに首を横に振って、ユーキは続ける。

「どいつもこいつも、オレを聖人にしたいようだが、何もかも間違ってる。オレが剣を握ってきたのはいつだって、自分の為だ」

「でも、アナタは他人に手を差し伸ばしてきたでしょ」

ストレアは知っている。

彼が一層目から他人に世話を焼いていたことを、そしてそれは仲間達から離れても変わらない。オレンジカーソルのプレイヤーキラーに絡まれているプレイヤーを見たら助け、モンスターから牙を向かれているプレイヤーがいれば何も言わずに守ってきた。絶望に沈んでいるプレイヤーを見れば、乱暴な言葉遣いで不器用でも励まして来た。

そんな人間が、自分の為だけに戦ってきた訳がない。

しかしユーキの言葉は否定であった。それも違う、とはつきりと首を横に降って。

「オマエの言うとおり、他人^{ソレ}がきつかけになったのかもしれない。だが、根底にあるのは違うもんだ。オレは、我慢が出来なかっただけだ」
「我慢……？」

「そうだ。オレは誰よりも自分勝手に、誰よりもガキなんだよ。誰か

が泣いているのを黙ってみているオレ自身が許せない、そんな身勝手な理由だ」

本当に忌々しげに呟くと、ユーキは吐き捨てているように続けた。

「オレが無様に立ち上がったんのは、その程度の理由だ。他人の為じゃない、オレは最初から最後まで自分勝手に剣を振るい続ける」

「でも、アナタのおかげで救われた命もあるよ？」

「かもな。だが、ンなもんは結果論だ。胸を張って言えるモンじゃねえよ」

誰かに礼を言われたくて助けた訳ではない、そう彼は暗に告げると天を仰ぎ見る。

路地裏から見た空はオレンジ色に染まり、色鮮やかに空を染めていた。手を伸ばした所で触れられる訳がない。そう理解しているも、ユーキは右手を天に伸ばしながら。

「オレは、どれくらい持つ？」

「それは……」

気まずそうに、ストレアは眼を泳がせる。

正直に言わない方が救いになることもある。それを数時間前にユウキから学び、ユイに対しても同じことを教えた。

しかしユーキにとって、それは救いではない。

欺瞞は許さない、と言うかのような強い口調で空を見上げたまま告げる。

「何を気い使ってやがんだ。正直に言えよ」

「——長くて、半年」

実質の死刑宣告。

どう足掻いても、半年は持たない。どれだけ彼が強い意志で繋ぎ止めようと、半年が限界という残酷な結果が待っていた。

「……そう、か」

「うん……」

「……ンでオマエが泣きそうになってんだよ。これはオレの自業自得だ」

「だけど……」

「メンドクセえ奴め」

呆れたように、それだけ言うとユーキはストレアに近付いて、頭を軽く小突く。

「悲観すんな。まだ半年もあるんだからよ」

「……アナタはどうするの？」

「まだオレがやるべきことは残ってる」

「それって……」

どう言う意味なのか、ストレアが尋ねる前にユーキは不敵に口を歪めて、明らかな嫌悪を言葉に乗せて答える。

「最近、無駄にハシャイでやがるオレンジカーソルのクソ虫共を駆除する」

血盟騎士団が攻略に乗り出す裏で、近頃オレンジプレイヤーが活発に活動しているという情報は、ストレアの耳にも入ってきた。

その手法も様々なものだ。モンスターを利用したキルをするプレイヤーも居れば、何らかのトリックを使いキルしてくるプレイヤーも存在する。ここまでプレイヤーキラーは少なからず存在していた。だが、どういう訳かここに来てその数は増加している。

プレイヤーキラーの増加に、作為的なものを感じる。

「アナタの事だから、身体のことには言わないつもりだったんでしょ？でも、アタシは言うもん。一緒に行動することを許可してくれないと、みんなに言っちゃおうよ？」

「……………」

両者はお互いの姿を視界に収めたまま、しばらく無言になる。折れたのは――。

「……仕方ねえ」

ユーキであった。

彼は退屈そうに、というよりも少しだけ不貞腐れたような声色で。

「ただし、足引っ張りやがったら叩き潰すぞ」

「うん、ありがとう！」

「うるせえよ。つたく、恐喝した後に笑顔とは性格が破綻しすぎだろ。誰の影響だよ」

その言葉を聞いて、ストレアは笑みを深めて事実だけ口にした。

「もちろん、アナタの影響だよ」

「あ？」

「アナタの背中を見て、学んできたんだもん。間違いなく、アタシはアナタ似だよ！」

「ふぎけてやがる。オマエのようなガキを育てたつもりはねえよ」

「パパ？」

「おい、もう一度言ってみろ。マジで叩き潰すぞオマエ」

きゃー、とどこか嬉しそうに逃げるストレアには、一つの決意が生まれていた。

おどけてみせても、その内側は真剣そのもの。強い意志を宿しながら

ら、彼女は誓う。

——アナタは、絶対に死なせない。

——半年、なんか知らない。

——どんな手を使っても、アナタだけは生かしてみせる。

最悪な未来。ストレアにとってそれは、ユーキと言う人間の死であつた。

考えるだけで、感情が荒々しいものになり、上手く制御が出来ない。どうしてそんな状態になるのか、ストレアには理解が出来ない。ユーキに抱いている感情が友情なのか、憧憬なのか、それとも愛情なのか彼女にはまだ説明が出来ない。

だがコレだけは言えた。ユーキは絶対に死なせない、と。どんなことをしても、彼だけは生かす。彼女の心にあるのは、そんな感情だつた。

そこで、ふと思ひ出したかのようにストレアは問いかける。

あのシステムの存在であつたカーディナルにもあつた感情。死を前にして恐れると言う当たり前の感情が彼にもあるのか、純粹に気になつた。

「ねえ、アナタは恐くないの?」

「死ぬことに対して、ってことか?」

「……うん」

答えは、彼らしいモノだつた。

自嘲するように、自分を馬鹿にするような声で。

「やるべき仕事が残つてると言つたら。——ンなもん感じている暇なんざねえよ」

第5話 黒猫団の英雄

私はいつも通り、ギルドメンバーと一緒に行動を共にしていた。リアルでも交流がある仲間達。気を許せる友人。それが私にとっての彼らだった。

彼らに不満があるとか、そんなことはない。むしろ——私は私自身に、不満があった。

ただのゲームだと思っていたのに、今となっては昔の話。

今はHPゲージがなくなればゲームオーバーとなり、この世界での死は現実世界でも死を意味するデスゲームとなってしまう。

そんな最悪な状況の中、私の友人達は希望を持っていった。彼らは圏内である主街区に籠もるのではなく、積極的にフィールドに足を運び、モンスターを相手に狩りを行っていた。いつしか自分達も攻略組に加わることが出来るギルドになろうと、彼らは努力を怠らなかつた。

私はそれを見て、素直に凄いと思う。

理不尽に巻き込まれて、それなのに絶望しない彼らみたいな人達を、強いと言えるのだろうか。

だけど、私は違う。私は彼らのように勇気があるわけないし、強いわけでもない。私は弱い人間だ。このデスゲームに怯えて、震えて、夜も満足に眠れない弱い人間だ。そんな人間が満足にモンスターを狩ることが出来る訳がない。

例えば、第一層の初心者でも簡単に狩れるモンスターが相手でも、私は恐くて武器を満足に持てないだろう。

考えただけで、身体が震えてしまう。

モンスターが怖い、この世界が怖い、首謀者である茅場と言う人が怖い、何もかもが怖い。

この世界はある意味平等だった。HPゲージがなくなってしまうえば、死は平等に与えられる。それは、私の友達だった娘に対しても同じだった。

その娘はギルドメンバーではない。

この世界で生きることには必死な娘で、私と同じくらいの怖がり、私と同じく——生きることに諦めていた。

自分から冒険をする娘ではなかった。常に生き残るために必死で、極めて安全に日々を過ごしていた。そんな日々を慎ましく生きる彼女に対して、この世界は平等だった。

運が悪かったとしか言いようがない。運悪くモンスターに囲まれて、運悪く彼女は一人で、そして運悪くこのデスゲームに巻き込まれてしまった。

どれだけ臆病でも、どれだけ安全面に考慮して動こうとも、この世界では残酷なまでに平等だった。諦めている人間に死が与えられ、抗う人間には僅かな温情を与える。

「……そうだよね」

私は思わず呟いた。

諦めるように、感情もなく、私は死を受け入れていた。

周りにはモンスターの群れ。

そして、囲まれている対象は私一人。情報では、一人でもモンスターを狩ることが出来る安全圏だった筈なのに、今の状況は真逆。

これはまるで、臆病である私を世界が許さないと言うかのようでもあった。

でも怒りはなかったし、悲しみもなかった。

今思えば、私は疲れていたのかもしれない。この世界で生きること、苦痛を感じていたのかもしれない。

だから私は楽になろうとしていた。瞼を閉じて、生き残る術である槍を手放し、膝から崩れ落ちる。力無く座りながら、私はモンスターの群れが殺到するのを待つ。

しかし、いくら経っても、襲われる気配がなかった。

むしろ、聴こえてくるのはモンスターの悲鳴である。思わず私は目を開けて、顔を上げる。

視界に広がるのは、変わらずモンスターの群れ。

だけど少し違うのは、その中に黒い影が踊っていたことだった。黒い影は人だ。黒を強調した軽装で、黒コートに黒のズボン。更に剣も黒くて、髪の毛も黒い。

舞うようにモンスターへの攻撃を避けて、踊るようにモンスターを斬っていく。まるでそれは演舞とも言えるくらい優雅なもので、命のやり取りを行っているとはとても思えない。

誰が見ても、黒い影がモンスターに蹂躪されるなど到底思えない。そう断言出来てしまうほどの、技量を黒い影は有していた。

程なくして、モンスターの群れが消えて、黒い影の背中だけが私の視界に収まっていた。

お礼を言わなくちやいけない。

私なんかのために、黒い影は剣を取って戦ってくれた。そして私は助けられた。そのお礼を言わなくてはいけない。そう思い、立ち上がろうとするも。

「あ……れ……う？」

助かったと思った瞬間、私の身体が震えていた。

ここで漸く、無事だと分かった途端、私は恐怖を感じていたのだ。虫が良すぎる話である。今まで諦めて死を受けれていた人間が、ここに来て死を恐れるなんて、滑稽にも程がある。

「えーと……」

いつの間にか、黒い影が私の目の前に立っていた。声から察するに、黒い影は男性のようだ。

顔を見上げる為に、私は顔をあげる。

黒い髪に、黒い瞳。どこか中性的な顔立ちで、見ようによっては女の子とも見える中性的で整った少年だった。

彼はどこか気まずそうに、だけど眼は真っ直ぐに私を捉える。心配するような顔のまま。

「大丈夫？」

手を差し伸ばし、弱い者を助ける。

誰にでも出来そうで、実は一番難しい事を行う少年。

——まるでその姿は、お伽噺に登場する人物のようだった——

.....

2023年4月27日 PM18:30

第三十層 主街区『ゼラニウム』 酒場

モンスターからドロップする素材を集めるために、彼は三十層に足を運んでいた。

狙うモンスターも下級モンスターであることから、彼一人で行動していた。ユイもリズベットに預けており、アスナはユウキと行動していることだろう。

そんなこんなで、素材を集めていたところにモンスターに囲まれているプレイヤーを見つけ助けて圈内まで護衛した所で助けたプレイヤーのギルドメンバーと遭遇。彼が『はじまりの英雄』とわかるや否や大興奮。リーダー格の少年は興奮気味で彼を酒場に誘い、彼も最初は断ったモノの引き下がらないリーダー格の少年に折れ、現在に至る。

——まいったな……。

第三十層の主街区『ゼラニウム』の外れにある酒場の隅の席にて、件の黒い影の彼——キリトは静かに思案する。

黒い影、と表現するのは彼の装備からの比喩であつた。黒いロングコートを羽織り、防具らしい防具は胸当て程度の軽装。黒いレザーパンツに、手には黒のグローブ。背負っている武器まで黒い直剣。

夜のフィールドであれば、暗闇に紛れて目立たない装備であるが、今キリトがいる場所は酒場の一角。明かりが灯っている室内であるが故に、全身が黒の装備で固められている彼はとても目立っていた。だが、彼が目立っているのはそれだけではない。

——本当に、まいった……。

丸い机を囲うように、キリトと四人の少年、そして一人の少女が座っていた。

そんな中、キリトはどこか居心地が悪い様子で、グラスに入っている水を飲む。

視線を泳がせるようにチラツツと見ると、その先には三人の少年の視線が突き刺さる。少女だけが、顔を俯かせている。キリトと視線が合うものなら、顔を少しだけ赤く染めて再び顔を俯かせていく。

少女以外の三人がキリトに浮かべているのは、羨望の眼差し。かの有名な『はじまりの英雄』が自分達と肩を並べている、それだけで少女以外の四人は興奮していた。

とはいっても、そう言った感情を向けられるのは初めてではない。何度も向けられたモノであるが、慣れないものは何度繰り返そうが慣れないものだ。

加えて、酒場にいる全てのプレイヤーがキリトを注目しているようでもあつた。

良くも悪くも、キリトというプレイヤーは有名である。

モンスターキラーによって絶望に染まっていたプレイヤーを救つ

た『はじまりの英雄』。神話の英雄のように諦めずに、討伐してみせた彼に、全てのプレイヤーは希望を持つようになった。

全プレイヤー達の希望の象徴。今となっては、最強の攻略ギルド集団『血盟騎士団』の団長であるヒースクリフと二分するほどの人望を集めていた。

そんなプレイヤーが、自分達の目の前にいる。酒場にいるプレイヤーが浮足立つのも、無理も無いのかもしれない。

どうしたものか、と空になったグラスをテーブルの上に置きながら考えるキリトに、意を決して一人の少年が口を開く。

「あ、あのキリトさん！　今回は本当にサチを助けてくれてありがとうございます。うございました！」

四人のリーダー格の少年——ケイタが勢い良く立ち上がりながら、キリトに向かって思いつきり頭を下げた。

もはや何度目かのやりとりかわからない、と言いたげにキリトは苦笑を浮かべて。

「あ、あのさ、敬語とかなしにしないか？」

「恐縮です!!」

「……」

何度言っても、ケイタは敬語を止めてくれない。

むしろ、背筋を伸ばして、肩を強張らせて、態度はますます固くなるばかりである。

ケイタの反応が面白かったのか、仲間の一人であるテツオは腹を抱えて笑いながら。

「ごめんな、キリト。ケイタのヤツ、君に憧れててさ。敬語で話すなんてのは無理なんだわ」

「な、何を言うんだよケイタ！」

「僕もあの人のようなプレイヤーになりたい！　って毎回言ってたもんな？」

追い打ちをかけるように、どこか意地の悪い笑みを浮かべる少年——
——ササマルに向かって、顔を赤く羞恥に染めながらケイタは慌てながら言葉を紡ぐ。

「ぼ、僕はその……、キリトさんのような、希望を与えられるプレイヤーになりたいってだけで——！」

「まあ、この通り真っ直ぐなヤツだからさ。気を悪くしないでほしいんだ」

「ダッカー、フオローになってないんだけど……！」

ケイタの言葉にダッカーと呼ばれた少年がニヤニヤ笑みを浮かべる。

それが引き金となり、ギャーギャー、と騒ぎ始める四人を見て、キリトは再び「ははは……」と乾いた笑みを浮かべた。

その光景はどこか見覚えがある。

ムキになり、周囲の眼を気にせずに言い争いをするその姿は——
|。

「ごめんね、騒がしくしちゃって……」

おずおず、と申し訳なさそうに言う少女——サチにキリトはやるわりと首を横に振りながら。

「いいんだ。俺も良く言い争いしてるから、こういうのは慣れてる」
「え、はじまりの英雄と？」

意外そうに呆然と呟く彼女に対して、キリトは照れくさそうにポリポリ自分の頬を搔きながら。

「その……、はじまりの英雄っていうの止めてくれないか？」

「え？」

「俺は英雄なんて呼ばれる程、立派な人間じゃない。何よりも……恥ずかしいんだ」

そこまで言うと、キリトはサチから視線を外してそっぽを向いてしまった。サチからキリトの表情を伺う事は出来ない。しかし彼の耳が若干赤く染まっており、照れ隠しに空になったグラスを飲むような仕草をしている。

そのことから、彼が本当に照れている事がわかる。

サチは目を丸くすると、直ぐにクスクスと笑みを零した。

彼女から見た『はじまりの英雄』と称されるプレイヤーは雲の上のような人であった。自分とは真逆、勇気溢れる存在で、自分とは違う強い人間で、どこか超越した存在であると思っていた。

しかし実態は違う。『はじまりの英雄』も人間。そのことがサチにとって何よりも嬉しく思い、思わずサチは抱いた感情を口にした。

「キリト、本当にありがとう」

「ん？」

「君に助けてもらえなかったら、私はあのままゲームオーバーになってた……」

「サチ……」

「だから私にとって、キリトは英雄なんだ。凄く、カッコ良かった……」

「そ、そっか……」

「うん……」

それだけ言うと、二人の間に沈黙が流れる。

サチは顔を真っ赤に染めて顔を俯かせて、キリトは耳を赤く染めて明後日の方向へと見つめる。

居心地が悪い、というよりもどこか甘酸っぱい空気が二人を包み込む中、沈黙に耐えきれなくなったサチがどこか慌てながら次の話題を振る。

「そ、そういえばね！　こうして助けられるのは、二度目なんだ私！」
「そ、そうなのか？」

とは言っても、その空気に耐えきれなかったのはキリトも同じだったようで、先程のやりとりをなかったかようにするが如く、全力でサチに問いを投げつける。

「その人の名前はわからないけどね」
「名乗らなかったのか？」

サチは一度頷いて。

「うん。当時は私達だけじゃなくて、ギルドの皆もいたんだけどね」
「五人で？」

一人でいる所をモンスターに襲われゲームオーバーになった、という話は珍しくもない。逆に、集団でいた所をモンスターに襲われゲームオーバーになったという話しの方が珍しいモノだ。

基本、パーティーを組んで役割をこなしていればゲームオーバーになることは先ずない。

サチもキリトの考えを汲んでか、顔に影を落として呟く。

「私達の相手はモンスターじゃなくて——プレイヤーだったんだ……」

「……PKか」

キリトの問いに、サチが頷いた。

PK、通称『プレイヤーキラー』。

普通のMMOであれば、少なからず存在する。何らかの目的で攻撃を行い、プレイヤーをキルする。それがPKと呼ばれる人種だ。それは『ソードアート・オンライン』でも同じである。PKと呼ばれるプレイヤーは存在していた。

しかしデスゲームと化したこの世界において、PKとは最大の禁忌となっている。

なにせ、ゲームオーバーとなれば、仮想世界の死はもちろん、現実世界の死にも直結している。そうなれば人殺しと変わりない、悪質以上の悪辣行為だ。

本来であれば、そんなプレイヤーはアカウント停止処分に対応するのだが、今となつてはそんな見込みなどない。そもそも、デスゲームとなり仮想世界に閉じ込められてしまった現状では、アカウント停止処分などありえないのだ。

プレイヤーが喜々としてプレイヤーを殺す。

そんな光景を目の前にしたサチは、恐る恐る続ける。

「でも、私達を助けてくれた人は、PKよりも恐かった」

「PKよりもか？」

「うん。テツオとササマル。あとダツカーはファンになっちゃったけどね？ 私は、あの人が恐かったなあ……」

助けたというのに、PKよりも恐がられる存在。

そんな存在に心当たりがキリトにはあつた。よく口論している少年、気に食わない存在であり、対等でありたいと願い続けた存在。そして、自分よりも強い存在。

今、*“彼”*が何をしているのかキリトは思い出す。

最近、*“彼”*はストレアとずっと行動していた。主にその理由は――
――PKを排除することに他ならない。

彼一人ならまだしも、ストレアと一緒に行動するのなら問題はない

ということもあり、キリトは彼の行動に目を瞑っていた。少しでも単独行動するものなら、アスナとユウキに密告してやろう、そんな企みを思いつつ。

「アイツに襲われるとか、考えたくもないな……」

キリトはどこか遠い目をしながら呟くのに対して、サチは不思議そうに首を傾げる。

こうして、今日一日が過ぎていく。

——これがキリトと、彼ら『月夜の黒猫団』の出会いであった

第6話 聖竜連合の交渉人

2023年5月14日 PM8:20

第一層 はじまりの街 宿屋の大広場

「ですから、わたし達は誰の味方とかじゃありません！」

日が昇り、鳥が囀り、窓から日の匂い。

誰も朝起きて、今日は誰も訪れなかった。

そんな幸先の良い朝を迎えたのも束の間、金髪碧眼の少年――

ユーキは渋い表情を顔に浮かべて二階から一階へと降りてきた。

渋い顔で降りてきたのは理由がある。

別に、彼が低血圧で起き抜けに機嫌が悪くなるタイプだから――

――なんて理由ではない。目覚めは良かった。何しろ常日頃起きたら誰かが自分の寝顔を見ている、という生活を彼は送っていたのだ。しかし今日に限ってそれはなく、彼からしてみたら漸くまともに起床し、それはもう清々しい朝を迎えたことだろう。

起きて早々、皮肉を口にする必要もなく、ため息を吐く必要もない。

これこそが、人の朝を迎えるべき状態である。そんな気持ちなのも一瞬のこと。

一階から聴こえてくる口論が原因で、彼は渋い表情を浮かべるハメとなる。

その声の主は男性と少女のもの。

少女の方は、ユーキも聞き覚えがあるものだが、男性の方は記憶にないモノ。何よりもこんな朝から口論など、絶対に碌でもない状況になっっているのは明らかだ。

だからこそ、ユーキは渋い表情を浮かべる。

絶対に碌でもない予感を感じ取り、尚且つ聞き覚えのある少女の聲がその証拠となっている。

ユーキの知る“少女”は気性が荒い類ではない。

むしろその逆。積極的に争う性格でもないし、出来れば争いは避け

ている。ユーキの知る中でも『優しい』と断言できる程の人格であり、怒つてない限り大声を出すことはありえない。

となればだ。ユーキが寝ていた二階にも聴こえてくる程の大きな声。ユーキの知る『少女』は怒っていることになる。

——珍しいこともあるもんだ。

——アイツがここまでキレたのはいつ以来だ？

昔を思い出した所で、記憶にない。

しかし呑気に思い出している暇などない。彼は今がどんな状況なのか、自分の視界から映る範囲内で情報を集めることにする。

一階の大広間には、既に人垣が出来上がっている。

勿論、その中心にいるのは例の『少女』と五名程の武装した男達であった。周囲はざわつきながらも、事の成り行きを見守っている。少女と男達の間に入って仲裁をしようとする者は、まずいないだろう。それだけ激しい口論ということだ。

次に、ユーキは少女へと視線を向けた。

五人の男達の中心にいる人物を、下から見上げるように彼女は睨めつけている。その様子は正に『怒髪、天を衝く』と表現出来るほど彼女は激しく怒っていた。

珍しいモノを見た、と思うと同時に、どんなことをしたらあそこまでアイツを怒らせることが出来るんだ。

と、言わんばかりに今度は少女が睨めつけている男性へと視線を向ける。

男性はかなり恵まれた体躯であった。

かなりの長身で筋肉質。歳は三十代前半くらいで、ごく短い髪に角ばった顔立ち。太い眉の下の眼は少女を見下すような眼で睨みつけている。

男性の見下したような眼、そして少女を侮りきっている雰囲気を感じ取り、ユーキは益々顔を不快に深めていく。

やはり碌でもない状況になっていた。少女のことだ、自分のことではなく、仲間の誰かが悪く言われて苛立ちが募り、臨界点に達して大声を上げてしまった。

そんな所だろう、とユーキは事の顛末を予想すると、取り敢えずこの状況をどうにかしようとする。輪の中心へと足を進める。

到達する前に予行練習は抜かりない。柔和な笑みを浮かべて、如何にも草食系男子のような頼りない雰囲気身を纏っていく。何せ久しぶりなのだ、数ヶ月までもに被っていないものを彼は急に被ろうとしている。しかもぶっつけ本番である、それ念入りに予行練習を行うというもの。

普段被っていないものを被る。

それはつまり――。

「――アスナ、どうしたの？」

猫かぶりである。

ユーキは努めて口元に満面の笑みを浮かべて、人の良い柔らかい表情で、輪の中心人物である少女――アスナに向かって話しかけた。

対するアスナは今までの怒りはどこに消えてのか、明るい表情をユーキに向ける。

その顔はまるで『迷子だった子供が、親を見つけた』といったものにそっくりであった。

「ユーキくん――！」

「失礼だが、君はなんだ？」

遮るようにして、アスナと対峙していたリーダー格の男が口を開く。

その眼はもちろん、見下したソレだ。自分よりも歳下の子供が現れて邪魔をされた。そう言った憤りも、その眼からは感じ取ることが出

来る。

それはアスナからもわかっていたようで、再び口を開き声を荒げようとするのをユーキは二人の間に割って入るようにして止めた。

男からアスナを守るように、身体を入れ替えてユーキはあくまで下手に出ながら答えた。

「ボクは、アスナと同じギルドの仲間です」

「君も『アクセラ・ワールド加速世界』だと？ とてもそうは見えないな」

『はじまりの英雄』『紅閃』『クリエイター』と名高いプレイヤーの中に、お前のような貧弱そうな男がいるとは思えない。そんな明らかな侮蔑を乗せた言葉にも、ユーキは笑みを崩さない。

今にも身を乗り出そうなアスナの手を右手でギュツと握り締めただめながら、極めて穏やかな口調で接する。

「ところで、失礼ですが貴方は？」

「私は、攻略最大ギルド『聖竜連合』遊撃部隊リーダーであるコーバツツである！」

自信満々に胸を張る男性——コーバツツを尻目に、ユーキは考えを巡らせた。

『聖竜連合』。

それは、アインクラッドに存在する攻略ギルドの一つである。数あるギルの中で「最強」のギルドが『血盟騎士団』だとするのなら、コーバツツが所属する『聖竜連合』は「最大」と称することが出来る。

最大と称される所以が、プレイヤーの数に他ならない。様々なギルドからプレイヤーを引き抜き、そしてあるいは合併、もしくは吸収することによって、多くのプレイヤーを抱えることに成功していた。

とは言っても、彼らを突き動かすのは『戦えないプレイヤー達の変わりに自分達が戦う』といった自己犠牲の精神ではない。むしろもっ

と自分勝手なモノで『トッププレイヤーとしての自尊心を守る』程度の理由でしかない。

故に、血盟騎士団を目の敵にしており、場合によっては一時的なオレンジプレイヤー化も辞さないなんて黒い噂まで存在する。

そんな連中の、中心人物とも取れる男がアスナに尋ねてきた。

碌でもない理由に決まっているが、一応ユーキは問う。

「コーバッツさん、どのような用件で？」

「私は交渉をしに来たのだ」

「交渉、ですか？」

「うむ、君達の団長にも伝えたのだが、もう一度言おう。——私達

『聖竜連合』の傘下に入って貰いたい！」

一際大きな声でコーバッツが告げるが、ユーキの耳には入っていなかった。むしろ、予想通りの展開で退屈そうに受け流していた。

数多のギルドを吸収、合併してきた『聖竜連合』としては、『加速世界』アクセセル・ワールドは喉から手が出るほどほしいギルドとも言えるだろう。

所属しているプレイヤーは四人と少数規模のギルドであるが、その中の三人は異名を持ち、更に言うのであればその中には『はじまりの英雄』と一際注目を浴びているプレイヤーが存在する。

そのことから、知名度で言えば最強の『血盟騎士団』、最大の『聖竜連合』と引けをとらないものだ。ここで『加速世界』アクセセル・ワールドを傘下に加えることが出来れば、攻略ギルドの地位は盤石なものとなり、ひいては『血盟騎士団』を出し抜ける。そんな浅はかな思惑があるのだろう。

見え透いた思惑にユーキの反応は薄い。柔和な雰囲気を保っているのは、今まで積み重ねた猫かぶりの経験もあってのことだろう。

対して、コーバッツの態度は揺るがない。高圧的で、ユーキ達を見下したまま続けた。

「我々は、君達一般プレイヤーの為に日夜戦っている！」

心にも思っていない言葉を吐き出しながら、コーバッツは大きな声で続けた。

「であるのなら、我々に君達が協力するのは義務である!!」

「勝手なことを言わないで——!」

「——それに!」

アスナの抗議の声を遮ると、コーバッツは口元に笑みを浮かべる。微笑むといった相手を暖かくさせる類ではない。相手を軽視する、過小評価するような相手を苛立たせる笑みをユーキ達に向けたまま続けた。

「——君達も我々を敵に回したくないだろう?」

自分達の敵になりたくないのなら、傘下に加われ。つまりは、そういうことだった。

コーバッツは先程、交渉しに来たと言ったが、そんなものは建前であつた。それは今のコーバッツの言動、そして今までの彼らの装備を見ればわかるというもの。

彼らは武装してここまでやって来た。威圧するように、脅迫するよ
うに、高圧的なまでに武装していた。仮にコーバッツの言うとおりこ
れが「交渉」だというのなら、武装する必要などないのだ。むしろ低
姿勢で、協力を仰ぐ立場であるのなら、極力敵意がないことを示さな
ければならない。

——交渉、ねえ?

——ハッ、脅迫の間違いだろ?

——それにしても、たった五人で脅迫か。

——オレ達も舐められたもんだ。

——なあ、キリト?

ユーキは眼を細くし、今この場にいない少年を思い浮かべて、薄く笑みを零す。

たったそれだけだった。コーバッツの脅迫にこの程度の反応しか見せない。舐められた、と解釈したコーバッツは一際大きな声を上げて怒鳴りつける。

「聞いているのか！ さっさと私達の傘下に加われと言っている！」
「……………」

「そもそも、貴様等を取るに足りない存在であることを自覚しろ！ 『はじまりの英雄』『紅閃』『クリエイター』と持て囃されているようだがな！」

ここで漸く、ユーキは初めて反応を示した。

ピクツ、と片眉を上げて、柔和な雰囲気から、少しばかりの剣呑な雰囲気を放つ。

機微な変化に気付く。プレイヤーはいない。

ザワついている周囲の者はもちろん、対峙している『聖竜連合』の面々も気付かない。気付いているのはユーキの後ろにいるアスナだけである。

どのワードがユーキの気に障ったのか理解しながらも、アスナは口を開く。

ハッキリと、自分の考えをコーバッツに伝えた。

「わたし達は、どのギルドに属するつもりはありません。それはあなた達『聖竜連合』も一緒です」

「なん、だと…………？」

「お引き取り下さい、コーバッツさん。わたし達も今回のことは忘れます」

「き、貴様！ 私達を取るに足らん貴様等を使ってやると言っているのだ！ 子供が調子に——！」

顔を真っ赤にさせて、アスナに掴みかかろうとする。歯牙にもかけない、アスナの言い分が屈辱だったのだろう、
恥辱に塗れ、激怒に顔を染めたコーバツツは冷静ではない。現に、アスナとの間にいる彼の存在を忘れていた。

「——オイ」

アスナに掴みかかる直前、間に入っていたユーキがコーバツツの腕を片手で掴むみ、そのまま最低限の動きでコーバツツの重心を差し引く。

「な——」

何が起こったのかわからないまま、コーバツツは気が付けば背中から床に叩き落されていた。背中から叩き落され、それは衝撃となりコーバツツを襲う。

すぐに立ち上がろうとするが、それを対峙している少年が許しはしなかった。

コーバツツの喉を右手で掴むと、そのまま彼の身体を重力を感じさせない様子で片手で持ち上げる。

足をバタつかせ、両手で抵抗しようと、その拘束を解くことが出来ない。何よりも——。

——コイツは、誰だ……？

——目の前にいたのは、無名の雑魚だった筈……。

——コイツは、一体……!?

対峙していた少年には、柔和な笑みは張り付かせていなかった。
眼つきは鋭くコーバツツを見上げるように睨みつけて、全身から突き刺すような剣呑な雰囲気纏い、粗暴な口調で少年だった正体不明の彼は口を開く。

「誰の許可で、うちの団長に手え上げようとしてんだよ三流」

「貴、様……！」

「そもそも交渉つてのはよオ、話し合いつつ一卓に座つて成り立つもんだろうが。テメエみたいに拳を振り上げて、脅すもんじゃねえだろうが？」

喉を覆う手に徐々に力が籠められていき、コーバツツの首を少しずつ軋ませ、ユーキの言葉には徐々に熱を籠り始めていく。

誰がどう見ても、彼は怒っていた。

「第一に、テメエがアイツらを使うだど？ 馬鹿が、オレなんぞに劣るテメエ如きが—— アイツらをどうにか出来る訳がねえだろうが！」

「ガ……グウ……！」

「安心しろよ、この世界に窒息死はない。しつかり息をしろよ中年、みつともねえ——ぞっ！」

そう言うや否や、他の四人に目掛けてコーバツツを放り投げる。

砲弾のような勢いで四人に激突し、無様に地面を転がるも、コーバツツの威勢が衰えることはない。

喉を擦りながら、身体を起こしてユーキを睨みつけて。

「貴様、『聖竜連合』に敵に回したらどうなるか——」

「——それは聞いたってんだろが、ボケがア！」

「な——!？」

「テメエらみたいな数だけの連中なんぞ眼中にねえんだよ。いつでもかかって来い、オレ一人で叩き潰してやるからよオ！」

「アイツらが出る幕はねえんだよ。いいかクソ中年、喧嘩は数じゃねえ、度胸じゃダボがア！」

.....

数十分後 はじまりの街 露店エリア

コーバツツに啖呵切つてから数十分後、騒ぎになっていた宿屋から脱出したユーキとアスナは露天エリアを歩いていった。

朝も早いこともあってか人通りも少なく、開店前だからかいつも売買しているNPCの姿も見られない。

NPCの客引きが飛び交い、いつも賑わっている露店エリアとは思えない。

そんな静寂を叩き壊すかのごとく、ユーキは苛立ちを募らせながら歩を進めていた。

「あのクソ、コーバツツって言ったか？ 今度見かけたら、ぶん殴つてやる……」

ブツブツ、と怒りに燃えている後ろにはアスナの姿があった。

前を歩きながらも、自分の歩幅に合わせているユーキの背後を見ながら、笑みを深めていく。

「えへへへ」

「……オイ」

背後で呑気な雰囲気を感じ取りながら、ユーキは振り返りアスナを軽く睨みつける。

しかしそれでアスナの笑みが陰ることはない。むしろ更に深く笑みを浮かべて。

「どうしたの、ユーキくん？」

「……今までの状況で、どこに笑う要素あったよ？」

「えー、あったよー？」

ニコニコ笑みを浮かべながら、アスナは嬉しそうに続けた。

「君が怒ったのって、わたし達がバカにされたからでしょ？」

「……」

自覚はあった。

今まで完璧に猫を被っていたのに、コーバツツの『取るに足りない存在』という言動に怒りを覚えていた。

コイツらの何を知っているのか、とユーキが思うと同時にいつの間にか外面の仮面は剥がれており、いつもの粗暴な自分の姿があった。実のところ、ユーキは困惑していた。今までこんなことはありえなかった。どんなことがあるうが、猫を被り続けていた。

沸点が低くなった訳ではない。

現に、自分がどう言われようが猫を被り続ける自信がある。だがユーキ以外の他人が悪く言われれば、話しは別だった。恐らく、先程のように簡単に怒りの臨界点を突破することだろう。

我慢出来ない自覚はあったが、ここまで堪え性がなかっただろうか。そんな疑問を自分に投げた所で、答えなど返ってくる訳がない。それよりも現状の打破を優先しなければならぬ。

目の前のニコニコ微笑みを浮かべているアスナをどうにかしなければ、ユーキの心はいつだって晴れないままだ。

「オマエらなんぞ知ったことじゃねえよ。オレがキレたのは、多人数で少人数に喧嘩を売るって構図が気に入らなかつただけだ……」

「えー、ホントー?」

「……………」

鬱陶しい。

そう言うかのように、ユーキは顔を顰める。

先程、面と向かってコーバツツに言い放った人物と同一人物は思えないほど、彼女の頬は緩んでいた。

——コイツ、本当にあのクソ中年と対峙してた同一人物か?

——ンだよ、このギャップは……。

——でも、コイツ変わったな……。

——デスゲームが始まる前だったら、あんなこと言えなかつただろう。

——京子さんと喧嘩して、毎回オレの所に来てたつっの……。

——本当に変わった、スゲエよ明日奈。

——変わってないのは、オレだけか……。

ジツとアスナの顔を見続けるユーキに、彼女はどこか気恥ずかしそうに頬を赤く染めて。

「あ、あのユーキくん、どうしたの? ずっと見られると、恥ずかしいかなーって……」

「……………何でもねえよ」

それだけ言うと、ユーキは再び踵を返し、再び歩を進める。アスナは首を傾げて、その後を追いかけた。

「そう言えば、キリトはどこに行った?」

「キリトくんなら、ユイちゃんとリズと一緒に四層のゴンドラに乗り

に行くって言うてよ?」

「ハッ、黒猫なんちゃらのレベリングに付き合ってると思ったら、今度はそのうちだよ。人が良いにも程があんぞ」

「……人のこと言えないと思うけどなー」

「……何か言ったか?」

「い、いや! 何も!」

「……………」

問い詰めようとしたが、面倒臭くなったのかそのままユーキは歩を進めることにした。

その背を見て、どこかおずおずとユーキを伺うように。

「あの、ね? わたしも……」

「……………」

「あのね、あの……」

「どうしたんだ、オマエ?」

どこか様子がおかしいアスナを心配したのか、ユーキは歩を止めて振り向いた。

その顔もどこか心配するようなもので、アスナを注意深く観察する。

対して彼女は、深呼吸を一度深く吸って、もう一度深く吐いてを何度か繰り返し、意を決して告げる――。

「あの、ユーキくん! わたしと――」

ゴンドラに乗ってほしい、と言う前に言葉が止まる。

ユーキはどこか神秘的な顔でメインメニュー・ウィンドウを開くと、メールボックスを開きメールを見ていた。

内容を読み進める毎に、ユーキの表情は険しいものになっていく。

「……何かあったの？」

「ああ、野暮用が出来ちまった。それで、オマエは何を言いたかったんだ？」

アスナは困ったような笑みを浮かべて、首を横に振る。

「ううん、気にしないで」

「そうか……」

それ以上、ユーキは深く追求しなかった。

本人が言わない以上、追求した所で話しはしないだろう、と判断すると手早く装備画面を開いて武装すると。

「それじゃ、行ってくる」

「……一つ、教えて」

「ンだよ？」

「変なこと聞くんだけど、ユーキくんって身体のどこが悪い訳じゃないよね？」

「――」

言葉を失った。

今まで、身体の不調を訴えたことはなく、見破られたと言えばストレアくらいなものだった。しかしそれも、『心意』という話しの前提の話があつてこそだ。

しかしアスナはそんな情報を一切なく、ユーキの身体がどのような状態なのか勘付いていた。

コイツに一生敵いそうにない、心の中で呟きながら。

「絶好調だつてんだよ、見りゃわかんだろ」

「そう、だよね……」

「そうだ、だから心配すんな」

うん、とアスナは頷いて続ける。

「どこに行くの？」

「簡単な野暮用だ」

——ただのゴミ掃除だ。

第7話 棺桶を壊す者

——ラフィン・コフィン
笑う棺桶

それは現在アインクラッドにて、問題となっているギルドの名前である。

何かしらの犯罪を犯したプレイヤーは、頭上のカーソルがグリーンからオレンジへと染まり、オレンジプレイヤーとして他のプレイヤーから忌み嫌われていた。

その中でも、殺人を犯すプレイヤーが存在する。

彼らは喜々としてプレイヤーを殺し、己の罪を正当化するように振る舞っていた。

この惨状を作り出した茅場晶彦に全ての罪をなすりつけて、自分達は被害者だと憚ることなく主張する。

彼らの言い分は自分勝手なモノだ。ソードアート・オンラインをゲームとしたのは、想像主たる茅場晶彦である。ならば、全ての罪は茅場晶彦にあり、自分達がプレイヤーを殺そうが罪にはならない。全くもって馬鹿馬鹿しいにも程がある。

それが許されてしまえば、倫理などなくなり、道德など消え失せるだろう。本来であれば、そんな主張などまかり通るわけがない。

一人がそんな妄言を言葉として口に出したのなら、たちまちその一人は危険人物と扱われ、全プレイヤーから迫害を受けて最終的に黒鉄宮にて牢獄生活となるだろう。

しかし、その『一人』が問題だった。

彼は、オレンジ犯罪者プレイヤーを言葉巧みに操る。

時に誘惑し、時に洗脳し、時に自身の類まれなるカリスマ性を用いて、狂信的な殺人プレイヤーに陥れて、通称『レッド』と呼ばれる最悪最低なプレイヤーに変貌させていった。

それだけの力を彼——P・O・Hは持っていた。

P・O・Hは自身の用いる力のすべてを使い、殺人ギルド『ラフィン・コフィン笑う棺桶』

を作り上げた。

『笑う棺桶』^{ラフィン・コフィン}は喜々として殺人することを是とし、何の罪もない善良な人間を自身の欲望のまま狩っていく。

それは正に獣といえるだろう。欲望のまま喰らい、気ままに食い散らかす。そんな所業は獣と何ら変わりない。倫理などなく、秩序など彼らの中では既に崩壊している。

そして『彼』もP・O・Hの魔性とも言える魅力に取りつかれ、『笑う棺桶』^{ラフィン・コフィン}というギルドに惹かれるプレイヤーの一人だった。

狂信的なまでにP・O・Hを信奉し、その実力もギルドマスターであるP・O・H、幹部である『赤眼のザザ』、『ジョニー・ブラック』に次ぐ実力者であった。P・O・Hの右腕がザザとするのなら、左腕はジョニー。『彼』はP・O・Hの頭脳となりP・O・Hを支える筈だった。

そんな『彼』は必死に深夜の薄暗くなっている第一層の迷宮区を走っていた。その様子は異常の一言に尽きる。『彼』は前方ではなく、後方に気を配り走っていた。前を向けば直ぐに後ろを振り返り、汗を流し目尻には涙を貯めている。第三者から逃げるかのように、ハンターから逃げる野兎のように、必死になって迷宮区を走破している。頭の中に浮かぶのは、どうしてこんなことになったのか、という“疑問”。そしてアレは何なんだという“恐怖”。

何てことはない狩りだった筈だ、至極簡単で、ストレス解消の片手間にこなせる筈だった。レベルが上がってないプレイヤーを襲い、金を巻き上げて、酒場で一杯やる。…そんな一日で終る筈だった。

現実は無情である。

そんな一日で終わるはずの『彼』の日常は粉々に壊されて、“正体不明の恐怖”から逃げ回る今の状況。

それは突然現れた。

『彼』の他にも、仲間が五人いたが、一人また一人と姿を消し、いつの間にか『彼』は一人になりこうして得体の知れない気配から逃げまわっている。

得体の知れないモノだった。まるで人間を相手にしていないような、〃正体不明の恐怖〃は的確に彼ら进行处理していく。

誰を相手にしているのか定かではない、どんな相手に襲われているのかも認識出来ない。

何よりも、〃ソレ〃は恐怖という心理を演出させるのが上手かった。

恐怖を生み出すのに凝った演出はいらない。相手が大人でも、子どもと同じだ。

怖いものは変わらない。暗闇が怖い、一人だと怖い、正体不明の敵はもつと怖い。〃正体不明の恐怖〃はそれを誰よりも把握していた。

暗闇で『彼』の仲間を処理し、『彼』を一人に孤立させ、自身は正体不明の敵を演じる。

こうなってしまうえば、『彼』は掌の上で踊る道化でしかない。

一人でパニックになり、冷静さを欠いて、何者から必死に逃げ回る。

何度目かはわからないが、彼は再度頭の中で疑問が過ぎる。

——どうしてこうなった。

——どうしてこうなった。

——どうしてこうなった。

——どうして……。

いつの間にか『彼』は座り込んでいた。

恐怖で肩を震わせて、疲労で両足を震わせて、憤怒で両腕を震わせる。すると、眼の前に人影が現れた。

「」

見れば、『彼』に恐怖を与えていたのは少年。

黄金の頭髮、蒼く妖しく光る双眸、その右手には両手剣が握られている。

「お、前か……？」

『彼』は肺の奥から空気を絞り出すと、勢い良く腕を捲くる。

腕にあったのはタトウ。漆黒の棺桶があり、その蓋にはニヤニヤ笑う両目と口が描かれて、棺桶とその蓋がズレた隙間から白骨の腕がはみ出している。

それこそが、笑う棺桶ラフィン・コフィンのエンブレム。アインクラッドに存在する全プレイヤーの忌むべき者の証であった。

「お、俺をどうする気だ！ 俺は笑う棺桶ラフィン・コフィンなんだぜ!？」

あくまで『彼』は優位性の立ち位置で物を言う。

ニヤニヤと得意気に笑い、振るえる身体を鼓舞するように威勢のいい言葉を大声で喚き散らす。

しかし対称的に、『正体不明の恐怖』である金髪の少年の反応は薄い。そして怯むことなく、無造作に『彼』に向かって歩を進める。

脅しなど金髪の少年には無意味であり、そんなモノに屈するほど金髪の少年は素直ではない。

「聞いてんのかこのガキ!」

一歩。

「俺に手を出せば、ヘッドが黙ってねえぞ!」

また一歩。

「近づくんじゃねえ！ 殺す、絶対に殺すぞクソガキ!」

「——オイ」

その眼は汚物を見るような眼で。

冷ややかな視線を『彼』に向けている。それこそゴミを見るかのよ
うな侮蔑しきった眼。

いつの間にか、金髪の少年は『彼』の目の前に立っていた。

冷徹な視線を一心に浴び『彼』は震える。恐怖で、純粋な恐怖で泣
きながら体を震わせた。

歯をガチガチと痙攣するように噛みながら、怯えた眼で目の前に居
る『恐怖』に縋るように見上げていた。見逃してほしい、殺さないで
ほしい、そんな助かりたい一心で見上げるも、金髪の少年は無情に。

「——人間と同じ面をしてる糞袋が、ピーピー喚いてんじやねえ
よ」

同時に、最近になって自分達のギルドメンバーだけを襲うプレイ
ヤーが出没することを『彼』は思い出した。

襲われ連中は、全て黒鉄宮の牢獄へと収容される。襲われたメン
バーは、当時の状況を思い出すだけで全て恐慌状態になり、ともに
会話することも出来なくなってしまう。

正にそれは『正体不明の恐怖』。一体誰なのか、どんなプレイヤー
なのか誰も知り得ることが出来ない。

いつの間にか、人を狩る獣は、狩られる側となり、『正体不明の恐
怖』が狩る側となっている。

そう。プレイヤーの恐怖の対象となっていた笑う棺桶ラフィン・コフィンは、いつの
間にか『正体不明の恐怖』の凶行により、全滅の危機を迎えていた。

誰かが言ったか、それは笑う棺桶ラフィン・コフィンを襲う恐怖、それは『アインク
ラッドの恐怖』の再来であると——。

.....

.....

2023年5月15日 PM00:15

第一層 迷宮区一階

「……んだよ、ちよつとは根性見せて欲しいもんだ」

聞きたいことを聞いて、知りたかった情報を尋ねる内に、あまりの恐ろしさに気絶してしまった『彼』を見て、アインクラッドの恐怖――

――ユーキは退屈そうにため息を吐いた。

ユーキが『彼』に行つたのは簡単なモノだ。

恐怖を煽つていき、精神が極限状態となった敵を一人ずつ狩つていく。その程度の事に過ぎない。

恐怖を生み出すのに凝つた演出はいらない。相手が大人でも、子どもと同じだ。怖いものは変わらない。暗闇が怖い、一人だと怖い、正体不明の敵はもつと怖い。

ユーキはそれを何よりも、誰よりも熟知している。正体不明の敵を演じて、戦力を削いでいく。

もちろん、『心意』といった力の類は一切使っていない。

ライン・コライン
笑う棺桶六名をロープでぐるぐる巻きにして、引きずって行く。

「終わったの？」

すると、ユーキの姿を見かけると、声をかけてくる女性プレイヤーが一人。

迷宮区一階の入り口で彼女はユーキの帰りを待っていた。彼女――ストレアはユーキの後ろで引きずられている六名を見て「ひーふーみー」と数えながら。

「全員、だよな？」

『鼠』からの情報が正しければな」

朝に流れてきたアルゴのメッセージを確認しながら、ユーキは続ける。

「次から次へと、虫のように沸いてきやがるなコイツら」

「大丈夫なの？」

「あ？」

メッセージウインドウから、視線をストレアへと移す。

彼女の特徴的な紅い眼が、真っ直ぐとユーキを捉えていた。

その眼に浮かぶのは、心配、不安、沈痛といった感情が見え隠れしている。

「身体、大丈夫なの？」

「……………」

正直なところ、当の本人であるユーキにもわからなかった。

持つて半年、と宣告されたがそれは最長と言う意味でのこと。もしかしたら、もっと早い段階でユーキの身体が分解され、消滅するといった可能性もあり得る。そうなってしまうえば、ユーキがどうなるのか誰にもわからない。HPゲージが消滅すれば、現実の世界でも死ぬことになる。逆を言えば、HPゲージがなくなれば死ぬことはない。しかし、アバターは消滅している。そうなれば死ぬことはないものの、一生目覚めることはなく、植物状態となり眠り続けることもあり得てしまうのだ。

とは言っても、今のところユーキのアバターが崩壊する予兆はない。

痛みは断続的に走り、左腕は今だにグロテスクな黒色に変色している。しかしユーキは「その程度」と言い捨てる。

「……誰にモノを言っただけ。絶対調に決まってるんだろ」

目を逸らし、不遜に言い放つ。その姿は心配させまいと強がっているようで、どこか痛々しい。

ストレアも明確に感じているのではないものの、ユーキの姿に違和感を覚えているようで、彼の言葉を否定するように横に首を何度も振って否定する。

「そんなことないもん。痛い筈だもん！」

「痛みなんざどうとでもなる。心配すんな——」

「——心配するよ！」

彼女はギョツと、自分の両手を握りしめ、視線を下に向けてふるふると肩を震わせていた。

眼から溢れ出るのは涙。ユーキがいなくなるという最悪の未来を想像しながら、彼女は恐怖と戦いながらも続ける。

「このままだと、アナタ死んじゃうんだよ!?　なのに、アナタはずっと戦い続けてる！」

「……オレが足を止める訳にはいかねえだろ」

「止まってよ！　お願いだから止まってよ！　アナタが戦うことないよ！」

「だったら、あのクソ共は誰が掃除する？」

ユーキの中では当然とも言える疑問に、ストレアは眼をしながら震えながら口にする。

「アタシが、やるよ」

「……オマエ、なんだった？」

「アタシが、戦う」

ユーキはその答えを聞いて、一度静かに眼を閉じてその意味を深く噛み締め、再び瞼を開く。

視線の先には振るえるストレアの姿があり、彼女はまだ肩を震わせている。彼女は今も戦っていた。レッドプレイヤーと戦い死ぬかもしれない恐怖、そしてユーキが死ぬ未来を想像して彼女は震えながらも戦っていた。

彼女が戦う、と口にしたのはそういうことだろう。

自分が死んでしまうよりも、ユーキが死ぬことのほうが怖い。だからこそ、彼女は口にしたのだ。自分が戦う、と。その代わりにユーキは休んでほしいと、ストレアは語る。

ストレアの言わんとしていることは理解できる。

しかし――。

「ダメだ」

ユーキは首を横に降って、明確に彼女の考えを否定し当たり前のことを続ける。

「オマエが死んだらどうすんだこのバカ」

「アタシはAIだもん。アタシが死んでも――」

「――ンなもん、関係あるかよ」

瞬間、ポンとストレアは頭に温もりを感じた。えっ、と声を上げて見上げる。

そこには――口元に笑みを浮かべて、彼女の頭を撫でるユーキの姿があった。

口元を歪める意地の悪い笑みではなく、子供を諭すような慈愛の色が濃く浮かんでいる。

「オレなんぞの為に泣いて、恐くて震えて、ユウキ達と一緒にバカやつ

て笑う。オマエはそんな女で、オレの身内だ」

「身内？ アタシが、アナタの？」

「そうだよアホ。一度しか言わねえからよく聞け、このバカ娘」

撫でていた右手を拳に変えて、軽くストレアの頭を小突いて続けた。

「オマエには死んでほしくない、だからオレが戦うんだ。AIだの人間だの、んな哲学知った事か。オマエがストレアって人間だから、オレは戦うんだよ」

「でもこのままだと、アナタが……」

「死なねえよ」

間髪入れずにユーキは否定する。

続けて紡ぎ出される言葉には力が宿っており、絶対の意思を感じさせるモノだった。

「オレは絶対に死なねえ」

「……………」

「ちよっと前のオレなら、このまま死んでもいいと思っただろう。オレみたいなクソが生きてて良い道理なんざないからよ」

だが、と言葉を区切り。

「状況が変わった。オレが死んだら、誰がアスナの面倒を見る？ 浩一郎兄だけじゃ絶対に無理だ。ユーキはどうなる？ アイツ一人残す訳にはいかねえだろ。キリトとの決着も付いてねえし、リズベツトの説教なんざ真っ平御免こうむる。朝田と週末に遊ぶって約束も破ったまま、レベツカとお茶会ってヤツもやってない」

整理するように口にして、困ったような笑みを浮かべて。

「今のオレは負債だらけだ。色々な連中に借りを作って、今だに返せないでいる。それはオマエにもだ」

「アタシにも……？」

「そうだ。オマエが居たから、オレはユウキを預けて勝手することが出来てた訳だからな」

今まで彼女は、勝手にユーキの後を追いかけて来た。

カーディナルが恐れた人間に興味が湧いて、ユーキの都合も気にせず接触して、半ば強引に同行していた。それがストレアの認識であった。

だがここに来て、それは違うのだ、とユーキ本人から思い知らされる。

ストレアが居てくれて助かっていた、と彼は口にして「ありがとう」とぶつきら棒に言い放っていた。

ソレを聞いて、耳に入り、心で捉える。ストレアの胸の奥からは温かい感情が芽生えていた。

以前、アスナから聞いたことがある。

ユーキくんはわかりづらいけど、わかりやすい、と。

それを体現するかのよう、ユーキは彼らしく捻くれた言葉で。

ストレアが死んだら悲しい、ストレアが死んだら辛い。そんな言葉ではなく、彼らしい言葉で。

「だから、借りを返すまでオマエは死なせる訳にはいかねえし、オレも死ぬ訳にはいかねえんだよ。負債抱えたまま死んでたまるか」

「……もう、なにそれ」

アスナの言葉の意味が漸くわかった。

クスクスと嬉しそうにストレアは笑みを零しながら。

「アナタのその負債が終わるのって、どれくらいなの？」

「決まってんだろ、オレが満足するまでだ」

「何十年かかりそうだよね〜」

「仕方ねえだろ。借りちまったもんは、何かで補って行くしかねえよ」

何気なく呟いたユーキの言葉が、ストレアの中に一つの可能性を産んだ。

穴の抜けていたパズルのピースが、連続で嵌っていく感覚。一つの言葉が波となり、次々と可能性というピースが嵌り何かの模様を作り出していく。

結論から言うのであれば、ユーキを救う方法を彼女は思いついていた。

しかし――。

「どうしだんだ、オマエ？」

「う、ううん！ 何でもないよ！」

ブンブンブン、と力強く首を横に振るストレアに、首を傾げるも特に気にする様子もなくユーキは足元に転がっている『笑う棺桶』の六名が繋がれているロープを右手で持つて。

「オレはコイツらを黒鉄宮にぶち込んでくるが、オマエはどうする？」

対してストレアは満面の笑みで、

「もちろん、一緒に行くよ〜！」

そうして、少年は考える。

次なる一手、名も知らない黒ポンチヨの男がどう出るか思案する。

――さて、クソ虫はどう出て来る？

——手駒はかなり削ってやったんだ。

——このまま指啜えてるほど、大人しいヤツじゃねえ。

少女は決意する。

これからの自身の結末、少年を死なせないように手順を復習して。

——絶対にアナタは死なせない。

——多分、アナタはアタシを怒ると思う。

——でもごめんなさい、それでもアナタには死んでほしくない。

——だってアタシは、アナタが——ユーキが好きだから……。

第8話 英雄と恐怖の関係

某月某日 時間不明

アインクラッドに存在するとある洞窟の中に、二人の人影が存在していた。

もちろん、その場所は圏外である。それはつまり、モンスターが際限なく湧く事を意味している。

しかし、二人の人影は怯える様子はない。

一人、黒いマスクで顔を覆っている少年——ジョニー・ブラツクは手頃な岩に腰掛けて、片足を細かく揺らす。表情は読み取れないものの、その様子から苛立ちを募らせていることがわかる。

もう一人は、そんなジョニーを視界の隅に捉えているものの、なだめるつもりがないようだ。

紅眼で紅髪の髑髏を模したマスクを着けている彼——ザザは片手に持つエストツクを弄ぶ。

ザザがジョニーをなだめないのは簡単な理由である。

彼もジョニーと同じく。いいや、ジョニー以上に苛立ちを募らせているからに他ならない。

取るに足らないプレイヤーを殺害し、己の欲望と温情の赴くまま、ザザはアインクラッドを駆けてきた。それこそ獣のように、彼の中には秩序というものが存在しない。気に入らなければ殺し、欲しいものがあれば奪う。

それが、自分に与えられた権利だと身勝手に主張し、自分がこの世界に生きていると吠える。親にすら認知されない自分が、他人を踏みにじり生を謳歌する、他人の人生を奪う。奪う喜びを知ってしまったザザにとって、それはある種の麻薬のようなものだった。

一度、知った快感は止められない。

奪い、奪い、奪い尽くす。欲望のまま、ザザという男はこれからも他人の何もかもを奪っていくことだろう。

そう言う意味では、ザザにとって笑う棺桶ラフィン・コライというギルドは最高であつた。自身のような思想を持ち、それを是とするPOHという男。相棒のジョニー・ブラックという存在。彼らの中に、友情と言う言葉はない。利害が一致しただけの関係、それだけである。偶々、獲物が同じで組んだ方が効率が良いと言うだけにすぎない。

ザザに仲間意識というものは、存在しない。

他人に共感することなく、自身の欲望のまま彼は行動し、今日までに至る。

哀れな男だ。

父親からも見捨てられて、友情を育むこともなく、自分至上主義のままザザはひた走る。

そんな彼が、『はじまりの英雄』に執着するのは必然と言えるだろう。

何も持っていないザザとは違い、彼の眼から見た『はじまりの英雄』は何もかもを持っていた。名声も、名誉も、友情すらも『はじまりの英雄』は持っている。

対してザザはどうだろうか。彼は何も———持っていないかった。

プレイヤーを殺害しても、心は満たされない。確かに、殺した瞬間の高揚感はある。殺したプレイヤーの所持するエストツクをコレクションにし、欲望を満たすことは出来る。

しかしそれは、その瞬間だけのモノだ。我に返り、虚しくなるばかり。そして、凶行を繰り返すばかり。一向にザザの心は満たされず、乾いていくばかりである。

そんな彼だからこそ、『はじまりの英雄』に執着する。

何もかもを手に行っている『はじまりの英雄』を殺すことが出来れば、ザザという存在は何者かになると信じて、彼は行動していた。

しかし。

「……………ッ！」

弄んでいたエストックを握る手が強くなる。
殺すことなど出来ず、更に『はじまりの英雄』と差を付けられるばかりの現状に、ザザは苛立ちを募らせていく。

ザザは辺りを見渡す。

アインクラッドで存在するギルドの中でも、最悪のギルドと言われてきた笑う棺桶であるが、今では見る影もない。

笑う棺桶のアジトである洞窟にいるのはザザとジョニー・ブラツクラフィン・コフィンの二名のみ。笑う棺桶ラフィン・コフィンに所属するプレイヤーは、笑う棺桶ラフィン・コフィンを狩る『アインクラッドの恐怖』に怯え、蜘蛛の子を散らすように、この場に寄り付かなくなった。

活気があつた、薄暗い洞窟。

今日は何人殺した、レアアイテムを奪ってやった、などと狩り自慢をしていたプレイヤー達はもはや存在しない。

暗い洞窟に二人。それこそが、これからの笑う棺桶ラフィン・コフィンというギルドの行く末だ、と言わんばかりであつた。

「ヘッドは？」

「……今日も、連絡が、ない」

事実だけザザは淡々とした口調で伝えると、ジョニーは大きく舌打ちをすると勢い良く立ち上がり、木箱を蹴って八つ当たりをする。

それは商人を演じていたプレイヤーから奪ったものであつた。木箱は破壊され、中から林檎が勢い良くぶち撒かれていく。

ジョニーの怒りは、それだけで収まらない。

地面に転がる林檎を、片っ端から踏み付けて潰していく。地団駄を踏む子供のように、力任せに潰していく。

「クソツ、クソツ、クソがア！」

「……うるさいぞ」

「あー、ムカつくー！ ヘッドはどうして連絡をよこさない！ なんで

俺達が『アインクラッドの恐怖』何かに潰されないとならないんだ！」

ジョニーラフィン・コフィンが笑う棺桶ラフィン・コフィンに思入れがある以上に、ザザにとって笑う棺桶ラフィン・コフィンは、自分の写し身のようなものとなっていた。誰からも何者からも見放されたギルドに、同じく親に見捨てられた自分を投影しているのだろう。

全くもって、ジョニーに言うとおりで、とザザは思う。

自分達は「何も悪いことをしていない」のに、何故あんな化物に潰されないとならないのか、とザザは本気で疑問に思っていた。

笑う棺桶ラフィン・コフィンのリーダーであるPOHには連絡がつかない。『アインクラッドの恐怖』に怯えているのか、そうでないのか。

もはやザザにとって問題ではなかった。

「ジョニー」

「なんだよー」

「準備を、しろ。ラフィン・コフィン笑う棺桶のメンバーに、連絡を取れ」

それだけ指示すると、弄んでいたエストツクを腰に収めて、ザザは腰掛けていた岩から立ち上がる。

当然、ジョニー何の準備をすれば良いのかわからないようで、目を合わせない相棒に肩をすくめて疑問を口にした。

「準備って、何だよ？」

「決まってる、だろ」

そして今度こそ、ザザの紅い眼がジョニーの姿を捉える。

マスク越しから見える紅い眼、それは爛々と光、狂気と狂喜を同時に孕んでいた。

ギョツと身体を固めて、一步下がるジョニーを視界に捉えた上で、ザザは笑みを零す。

口元を引き裂くように、口角を釣り上げて。

「——はじまりの英雄を、殺す」

もはやザザに足枷はない。

ストップパーとなり、あれこれ指示していたP O Hは消えた。そう
なってしまうえば、彼は欲望のまま振る舞うだけである。

鎖に繋がれてない獣が、その場に留まる道理などないのだから——
。

.....
.....
.....

2023年6月27日 PM 13:15

第三十層 迷宮区 安全エリア

「うわあ、美味しそうなお弁当だねキリト？」

目を輝かせながら丸顔の少年——ケイタはキリトに向かって
朗々とした口調でそう言った。

目線の先には、胡座をかいて座っているキリトの太腿にある物体に
ある。

それは弁当であった。

色とりどりに具材が敷き詰められて、盛り付けも鮮やかなもの。ど
こぞの店頭に並べられても、不思議ではない代物となっていた。

ケイタが目を輝かせるもの無理はない、とキリトは苦笑いでケイタ

の感想を受け止めて。

「仲間が作ってくれたんだ」

「仲間って、アクセル・ワールド加速世界の？」

「ああ」

朝に、リズベットに渡された弁当から卵焼きを一つキリトは頬張る。口の中で広がる甘みを噛み締めて、満面の笑みで幸せを享受していた。

いつの間にか、キリトにはリズベットが、もう一人の目付きの悪い少年にはアスナが、それぞれ弁当を作ることとなっていたのは記憶に新しい。

どうして自分に弁当を作ってくれるのか、とリズベットに聞いても答えてくれない。むしろ顔を赤くさせて顔を俯かせて、アスナには白い目で見られる。首を傾げるのは自分と、目付きの悪い少年だけである。

「誰が作ったの？」

「えーと、リズってヤツだよ」

「リズって……」

「ああ、リズっていうのは愛称で、本当はリズベットって言うん——」

「——ええ!? 『クリエイター』のリズベット!?!」

キリトに詰め寄り、身を乗り出しながら言うケイタに「あ、ああ……」少しだけ引き気味にキリトは返す。

だが当の本人であるケイタは全く気付いていない。むしろどこか熱意を込めた口調でケイタは続けて。

「凄いなあ! 『クリエイター』は料理スキルまで習得してるのかい?」

「そうだな。確かアスナと同じくらい——」
「——『紅閃』も料理を!？」

うっひょー! と飛び跳ねるようなテンションでケイタは立ち上がる。

無理も無い。彼にとって、アクセル・ワールド加速世界は憧れるギルドである。『紅閃』のアスナ、『クリエイター』リズベット、そして『はじまりの英雄』キリトにケイタは憧れていた。

まるで子供のように目を輝かせるケイタに、キリトは苦笑を浮かべる。

サチを救ってからというものの、キリトは月夜の黒猫団のレベル上げを手伝っていた。そして、漸くケイタはキリトに慣れたようである。今ではタメ口であるが、ケイタはキリトに対してずっと敬語で接していた。

ケイタはキリトに憧れていた。それは態度、口調、雰囲気に隠すことなく出ており、分かりやすいものはなかった。

だからこそ、ケイタは熱狂していた。

憧れていたプレイヤー達の意外な姿を垣間見ることが出来て、彼はわかりやすいほど興奮していた。

「やっぱり凄いな、キリト達は!」

「……………いいや、凄くないよ」

「凄いよ。君達は、プレイヤー達の希望と言ってもいい。僕も君達のようになれたら……………」

「……………希望、か」

ケイタの言葉に対して、キリトはやんわりと首を振りながら。

「違うよ、ケイタ。俺は、俺達はそんな立派な人間じゃないんだ」

「え、でも……………」

「事実だよ。俺達に立派な思想なんてないんだ」

キリトは笑みを浮かべながら零して。

「俺達は必死だったんだ。仲間の一人が無茶して、一人で進み続けて、俺達は必死に追いかけた。そしたらいつの間にか、はじまりの英雄だの、紅閃だの、クリエイターだの呼ばれるようになった」

「他のプレイヤー達を助けるために強くなった訳じゃないんだ……」

「そうだよ。幻滅、したよな……？」

「ううん、全然」

むしろ、と言葉を区切りケイタは笑みで返す。

「距離感が縮まって嬉しく思うよ。キリト達も僕達と変わらない、仲間を大事にしているってわかったからさ」

「大事、か……」

キリトは照れくさそうに、ポリポリと右手で頬を搔く仕草をする。ケイタの言う大事という言葉、それを言葉にすると照れくさく、とても本人の前で言えない言葉であった。

確かに、キリトは直ぐ無茶をする目付きの悪い少年を大事に思っていた。

その事実是最早覆らない。キリトが何を言った所で、目付きの悪い少年以外には筒抜けも良い所であった。

困っている他人に迷わず手を差し伸ばす。その行為に、少年の中には損得勘定などありはしなかった。

他人が困っているから、泣いているから、悲しんでいるから、少年は迷わず手を伸ばす。仮にそれが払われた所で関係がない、少年は見過ごす自分が許せなくて手を伸ばしているだけに過ぎないのだから。

全くもって自分勝手なモノだ。

しかし、その自分勝手な行動に、キリトは救われた。一人で折れかけた所に、粗暴な口調と最悪な態度で手を伸ばされ、勝手に絶望の淵

から引き上げられる。

そしていつしか、少年のようになりたいと、思い憧れるようになった――。

「そう、だな……」

認めざるをえない事実を静かに受け止めて、キリトは懐かしむように笑みを零し。

「本当に勝手に、目を離すと直ぐ無茶して死にそうになる奴だけだな……」

「ねえ、キリト」

「ん？」

「その人って、どんな人なの？」

「どんな人、か……」

キリトは腕を組み首をひねって少しだけ考えて、直ぐにケイタに見上げて目線を合わせてハッキリとした口調で答えた。

「第一印象は最悪だな」

「そうなの？」

「最悪だよ、超最悪。口調は悪いし、眼つきも悪いし、態度も悪いし、一人で『聖竜連合』に喧嘩を売るし」

「あー……」

ケイタはどこか納得するような表情で頷いた。

彼も噂には聞いたことがある。アクセル・ワールド加速世界に一人で聖竜連合に喧嘩を売ったプレイヤーがいると。

最大のギルドが相手だ。

そんな無茶苦茶なプレイヤーがいるとは思わなかったのだが――。

「アレって、本当だったんだ……」

「本当なんだよ。本当に無茶苦茶するやつだよ。アイツが何て言われ
てるか知ってるか？」
加速世界アクセル・ワールドのヤベー奴だぞ？ 少しは自重

しろよ、本当に……！」

フォローする身にもなれ、とキリトは苛立ちげにそう言うと、新しく卵焼きを持っていたフォークで指し、口に運び甘みと旨味を噛み締める。

力いっぱい噛み締める彼の姿が印象的だったのか、ケイタには見守ることしか出来なかった。

直ぐにキリトは噛み潰した卵焼きを体内に流し、ため息を吐いて一言だけ告げる。

「——でも、悪い奴じゃないんだ」

「そう、なんだ？」

「ああ。アイツが怒ったのは、俺達がバカにされたからだってアスナが言ってた。アイツは何時だって、自分が何かされても怒らない。なのに、アイツが俺達がバカにされて怒った。怒ってくれたんだ……」

先程の不満はどこに消えたのか、キリトは極めて優しい口調で続ける。

「俺は嬉しく思ったよ。アイツは基本捻くれてるから、素直に言葉に出さないからさ。俺達のことをどう思っているのか、言わないから」
「大事に思っ
てなきや、他人のために怒らないもんね」

ケイタの言葉に、キリトは頷いて。

「アイツは捻くれてる。『優しい』なんて表現したら、アイツは否定するだろうし、第一印象も最悪だ。でも俺にとって、俺達にとって大

事な仲間なんだよ」

「そうか……」

ケイタは力無く笑みを零す。それはどこか羨んでいるようにも取れる笑みだった。

キリトは違和感を覚えるも、その答えは直ぐにケイタから聞くことが出来た。

「君達が羨ましいよ」

「羨ましい?」

「うん。だって、メンバーのことを理解し合ってるから。僕はギルドリーダーなのに、メンバーのことを何もわかってないから……」

「どうしたんだ?」

ケイタは問いの答えに対して、口を開きかけるも直ぐに閉じる。

言うか、言わない方がいいのか。少しだけ考えて、ケイタは意を決して口を開いた。

「あのねキリト、サチの事なんだけど——」

第9話 黒猫は悲観する

2023年7月5日 PM20:20

第十八層 丘の上。

空は雲で覆われており、辺りは漆黒に包まれていた。

本来であれば届く筈の月の光。しかし今は厚い雲に遮られ、アインクラッドのフィールドを照らすことはない。

見上げても視界は変わらず分厚い雲があるだけ。

月の光も空も見えないのだから、当然のことながら綺羅びやかな星々など見ることも出来ない。

太古の昔、携帯やコンパスなどが無い時代において人々は空を見上げ、北の空に浮かぶ北極星を見て自らの進むべき場所を定めてきた。

北の空にほぼ動かない北極星は北といったように、人々は空を見上げ、自らの進むべき場所を定めてきた。

しかし今ではそれは出来ない。

空は雲で遮られ、月の光も届かないこの大地で、彼女は自身の進むべき道を見つけられずに居た。

「……………」

彼女——サチというプレイヤーは十八層の主街区である『ユーカーリ』を一望できる丘で、座り込み膝を抱えていた。

生暖かい風が頬を吹き、サチの頬を優しく撫でる。

だが彼女は無反応。

膝を抱えたままうずくまっていた。

自分は恵まれている、とサチは自覚していた。

仲間がいる、狩りをする時も一人ではない、それに——頼れる英雄を知っている。この閉鎖的なデスゲームにおいて、彼女は誰より

も恵まれているという自覚があった。
だとしても――。

「……………ッ！」

――彼女にとって、その恵まれた環境が、苦痛であった。

戦うのが怖い、何よりも怖い、誰よりも怖い。

サチという少女は、そんなに強い人間ではなく、むしろ弱い人間だ
といっても過言ではない。

争いを好まず、人を傷つけることも出来ない。そんな平和主義の少
女、それがサチという少女なのだ。

レベル上げのため狩りに行けば手が震えて仲間の足を引っ張り、死
ぬのが怖いからと言って進めない弱い自分を、サチは何よりも嫌悪し
ていた。

弱虫で心の弱い自分が仲間の為に何が出来るのか。それを見つめ
直すために、彼女はこの場所にやって来た。一人で考えて、必死に自
分の可能性を模索する為にやってきたのだが。

「……………」

答えは、見つからなかった。

どう考えても、自分の進むべき道が見出だせない。仲間の為に何が
出来るのか考えても、答えなど見つからない。

正に堂々巡り。弱い自分は何を考えても無駄に終わるのか、と泣き
そうになった所に。

「よう」

「……………え？」

どこか気軽に、軽い調子な声が聞こえて、サチは漸く顔を上げた。
そこには、漆黒の辺りと溶け込むような装備を身に纏っていた剣士

の姿、何度も『月夜の黒猫団』を助けてくれた英雄の姿がそこにあった。

勿論、自分がこの場所にいることは誰にも話していない。むしろ、一人になって考えたいからこそサチはこの場所を訪れたのだ。

思いがけない来訪者に眼を丸くさせて言葉詰まらせながら黒い英雄——キリトに向かって問いを投げる。

「どう、して、キリトが、ここに……？」

「勘、かな？」

身体を伸ばし、一呼吸置いてキリトは直ぐに続けた。

「ごめん、嘘付いた」

「え、嘘なの？」

「うん。フレンド登録したら、フレンドリストからマップ追跡出来るだろ？ それでサチの場所がわかったんだ」

「どうして嘘なんかついたの？」

「何となく？」

悪びれもなく、疑問を疑問で返すキリトに対して、サチはどこか毒気を抜かれたようにクスクスと笑みを零して。

「もう、何なのそれ」

「ハハッ、悪い悪い。……隣、いいか？」

「……うん」

サチの了承を得て、キリトは彼女の隣に座り込んだ。

んー、と彼は身体を伸ばし、足も伸ばす。いまだに膝を抱えているサチとは対称的に、どこか開放的ともいえる仕草。

視線の先にある十八層の主街区『ユーカリ』の街灯り。

フィールドは漆黒に染められても、主街区だけは変わらずに灯りが

灯っており、どこか活気付いているようにも見える。

そんな光景を目の当たりにしてキリトは感心するように呟いた。

「へえ、ここから見える景色って本当に良かったんだな……」

「来たことなかったの？」

「仲間がちよくちよくここに来るみたいでさ。話しには聞いてたけど、本当だったとは思わなかった」

「……女の人？」

「いいや、男だよ」

「それって、いつも話してくれる眼つきの悪い人？」

「……そうだけど、いつもは話してないだろ？」

どこか不貞腐れるように言うキリトが面白かったのか、サチは呆れるような口調で返した。

「結構な頻度だけど？」

「……そんな話してないぞ。絶対、多分、きつと、恐らく」

「仲、良いんだね？」

「まさか！ 俺とアイツは顔を合わせる度に喧嘩してるんだぞ？ 仲

が良い訳ないだろ？」

肩をすくめてどこかオーバーに否定するキリトに、サチは力無く笑いながら首を横に降ってやんわりと否定しながら。

「仲、良いよ」

「……サチ、何かあったのか？」

キリトは問う。

もちろん、何があったのかはケイタから話しは聞いていた。しかしそれは、サチの様子がおかしいという漠然とした状況だけである。詳しい内容までは知らないし、何よりもケイタもわかっていなかった。

そして、サチの様子がおかしいということはこの場所に来て、サチの様子を見れば一目瞭然であった。

だからこそ、キリトは問いかける。

落ち込んでいる彼女に何かできるかもしれない、何か力になれるかもしれない。そんな希望を持ち、キリトは問いかけた。

対するサチは沈黙。

口にするかどうか考えて、一拍置いて彼女は暗い表情と共にポツリポツリと力無く言葉を吐き出した。

「私の武器を、槍から盾持ちの剣士にするって話しあったでしょ？」

「ああ、あったな」

サチの盾持ちの剣士に変更。

それはキリトが『月夜の黒猫団』に手伝ってから数日後、ケイタから相談された内容だった。

キリトが手伝うまで、『月夜の黒猫団』の前衛が一人だけであり、バランスの悪い陣形でモンスターを相手にしなければならぬ。それが、ギルド『月夜の黒猫団』の現状であった。

もつと上を目指すのであれば、もう一人前衛が出来るプレイヤーが必要となる。そのプレイヤーに白羽の矢が立ったのが、サチであった。

端的に言えば、サチの盾持ち剣士転向の進歩状況は芳しくないモノであった。

しかし、それは無理も無いだろう。至近距離で凶悪なモンスターと相対する際に必要なのはステータスだけではない。それよりも必要で、重要なモノが必要となってくる。それこそが“度胸”であり“胆力”である。

そしてサチには、残念ながらそのどちらも圧倒的に不足していた。サチという少女は、大人しく、臆病で、怖がりな性格である。

戦いを恐れる者が、戦えるわけがない。それはキリトも理解している。

「私ね、恐いんだ」

「恐いって?」

サチは力無く笑い、膝を抱えていた両腕が少しだけ強まる。

キリトから見たサチは弱々しい少女であった。肩が震えて、ひたすら恐怖に耐えて、ただ怯える。そんな少女は、ポツリと今にも泣き出しそうな声で続ける。

「戦うのが、恐いの。モンスターが恐い、今が恐い、凄く恐い、恐いよ……」

「そっか。そうだよな、恐いよな?」

「うん……。ケイタの気持ちもわかるよ? 私が前衛が出来るようになれば、月夜の黒猫団はもつと楽が出来るし、盾を持って防御力を優先した方が傷つかないし、死ぬ可能性も減る」

そう、これがケイタの配慮だった。

前衛が一枚増えれば、『月夜の黒猫団』はもつと上を目指せる。だがそれは建前。ケイタの本音は、サチの安全の確保にあった。

サチはとてもではないが、戦闘が得意というわけではない。メインの長槍だって満足に使いこなせる訳ではなかった。防御手段もなく、ましてや機動力を優先している長槍装備では、サチが安全とは言えない。むしろ危険であり、最悪ゲームオーバーとなり死ぬかもしれない。

だったら、盾を持たせて、装備を防御優先に固めれば、死ぬことはないだろう。それがケイタの配慮であった。

サチもそれがわかってる。

長い付き合いで、リアル現実でも友達同士だ。ケイタが気を使ってくれているということは、サチもわかっている。

しかしそれでも――。

『血盟騎士団』は凄いよ。私達よりも後にギルドを結成したのに、もう攻略組を代表するギルドだもん。キリト達はもつと凄い。君達はみんなの希望なんだから」

でも、と言葉を区切りサチは一際肩を震わせた。

涙は流すまいと、耐えるように身体を震わせながら、サチは悲鳴を殺すような小さい声で自身の苦痛を叫んだ。

「私は無理だよ。『血盟騎士団』みたいに、キリト達みたいに強くなれない。私は弱くて、臆病者で、この世界にいることが怖い……!」

「それが、君の気持ち?」

「ごめんね、幻滅したよね? ……必死で考えた。自分に何が出来るか考えたけど、ダメだったの。私はもう戦いたくないし、何より弱い自分が情けない……ッ!」

このまま、丘から飛び降りることが出来ればどれだけ楽だろう、とサチは少しだけ考える。

だがそれも出来ない。戦う度胸もない自分が、死ぬ度胸がある訳がなかった。

サチは奥歯を噛み締める。

悔しそうに、自分を呪うように、キツく抱える腕に力を籠める。

同時に、後悔がサチを襲いかかった。

こんな情けないことを言っ、呆れられ、嫌われたかもしれな、と。

サチの中にあつた叫びは既に言葉となつてしまった。最早取り返しはつかない。

しかも対象は、自分の救ってくれた英雄、御伽噺に出てきそうなヒーロー、モンスターに襲われていた自分を救ってくれた男の子。

いつの間にか特別視していた男の子に、よりもよって自分の汚い部分をぶちまけてしまった。

もうサチには顔を上げる度胸はなかった。ただ恐怖に耐えて、後悔

の波を押し寄せる。

「そっか……」

サチの耳に入ってくるのは、極めて静かな声。

怒っているとも、呆れているとも、失望しているとも捉える事が出来ない声。

その調子で、キリトは首を傾げて、一つだけ疑問をサチにぶつけた。

「別にそれでいいんじゃないか？」

「えっ？」

思わず、サチは顔を上げる。

その際、彼女の肩まである黒髪が揺らし、眼は驚愕に染まり、口は半開きで上手く言葉に出来ないようだ。

キリトはそんな彼女が少しだけ面白かったのか、笑みを浮かべて何気なく続けた。

「仲間が言ってたんだ。あれは……そうだ。モンスターキラーを倒す少し前だ」

一人の少年が語った。眼つきの悪く、人相も悪く、おまけに性格も悪い。

そんな少年は、苛立ちを隠すことなく、自分の考えを口にしていた。

「サチみたいなのは、弱い訳じゃない。戦うことに向いてるか向いてないかってだけの話だ、って」

「……………」

「戦える人が偉い訳じゃない、戦えない人が情けない訳じゃないだ。当たり前なんだよ、剣を取って戦える人も居れば、戦えない人もいる。それだけのことなんだよ」

「でも、それだとケイタ達に申し訳ないよ……」

覇気が籠められてない反論を、キリトはやんわりと横に振って否定する。

それは違う、と言う意味を込めて首を横に振り、優しい表情と口調で少年は続けた。

「剣を取るだけが戦いじゃない。プレイヤーの中には、アイテムで支援するヤツもいれば、鍛冶スキルを上げて武器や防具を作り戦力を整えてくれるプレイヤーもいるぜ？」

どっちも仲間のことなんだけどな、とキリトは照れくさそうにしながら、どこか誇らしげに言う。

「だからさ、サチ。君が自分を責める理由なんて、どこにもないんだ。戦いだけがこの世界の全てじゃない。そんなものよりもっと、大事なものがあるんだ」

「でも、私——」

そこから先の言葉は出なかった。

何故なら、サチが言葉が続ける前に、キリトは彼女を抱きしめる。優しく、しかし強く。弱っている彼女を庇護するという、絶対の意思と共に言葉に出す。

「——大丈夫」

「あ——」

優しい声が、サチの心を溶かしていく。

温かく、安心させるように、優しく抱きしめる。キリトの温もりはサチの恐怖を和らげるものであり、彼女の眼からは涙が溢れ始める。今まで我慢していたのに、今まで耐えていたのに、ここに来て安心

したのか眼から涙が溢れ始めた。

ポンポン、と背中を優しく叩き、子供を宥めるようにキリトは続けた。

「泣きたいなら、泣いていいんだ。一人で何もかもを背負わなくていいんだ」

「でも、迷惑かけるよ……」

「迷惑な訳ないだろ。サチも、月夜の黒猫団のみんなも、俺が守る。だからサチ、君は絶対に死なない。俺が絶対に、守るから」

その言葉が引き金となったのか、サチは大声で泣いた。

今まで耐えていたモノが吐き出されるように、我慢することなく彼女は泣いた――。

.....
.....
.....

数十分後

「落ち着いた?」

「うん……」

二人の様子は数十分前と変わらないモノになっていた。

キリトは足を伸ばして寛ぐように座り、サチは膝を抱えてうずくまる。

差異があるとすれば、サチの様子であった。

彼女は先程とは違い、恐怖に震えている様子もなければ、顔を悲観に染めている訳でもない。ただただ、彼女は恥じるばかりである。顔を真っ赤に染めて、耳まで赤く染め上げて、羞恥の色を隠せない。

このまま、頭上から湯気が出るのではないか。そんな錯覚をさせるくらい、彼女は顔を赤く染め上げていた。

彼女としては、気になる男の子の目の前で情けない姿を見せて、尚且つ抱き合って泣いていたという事実を恥ずかしく思ったのだろう。年頃の女の子としては当然とも言える反応である。

対するキリトは困ったような笑みを浮かべて、先程のサチの言葉を思い出す。

思い出すのは『血盟騎士団』のギルドを結成した期間である。

——血盟騎士団は、月夜の黒猫団の後に結成した。

——考えてみれば、妙だ。

——たった数ヶ月で、攻略組を牽引するギルドに成長するなんて。

——攻略に必要なのは、情報だ。

——どの場所が狩場に適しているか、どこで強い武器が手に入るのか、ボスの弱点は何か。

——血盟騎士団は何もかもを「知っている」。

そこまで考えて、情報屋がいるのかもしれない、とキリトは考えるも直ぐにその考えは否定する。

もしそうであれば、その情報屋は『鼠のアルゴ』以上の情報屋である。出回っていない情報を、血盟騎士団は掴み、攻略することに心血を注ぐ。そんな彼らのあり方を賛同し、情報を提供する情報屋がいるだろうか。

その情報で、莫大なコルを稼げるにも関わらずそれを行わない高潔なプレイヤーがいるだろうか。答えはNOである。誰もが自分の利益のために行動するし、何よりもアルゴ以上の情報屋がいるとは思えない。

加えて、血盟騎士団が攻略する際に用いる情報はどこか異質であつ

た。

——アレは、そう。

——このゲームを知り尽くしている人間の動きだ。

——『ソードアート・オンライン』がどういうモノなのか、理解している動きだ。

——そんなこと出来る人間は、この世に……。

一人しかいない。

そう結論付ける前に——キリトは立ち上がる。

「——ッ!？」

それは反射的なモノ。

彼は立ち上がると同時に、背にある黒い直剣「エリユシデータ」に手をかす。

突然の行動に、眼を丸くさせるサチを有無を言わずに守るように背を向けた。

キリトが感じたのは殺気。

ただ純粹に、キリトを殺すだけに向けられた意識。それを彼は積み重ねて来た戦闘経験から察知して、警戒心を露わにする。

隙がなく、付け入る事も出来ない。

観念したのか、それは暗闇から姿を表した。

「流石、だな」

それはカーソルがオレンジのプレイヤー。紅眼で紅髪の髑髏を模したマスクを着けているソレが現れると同時に、黒いマスクで顔を覆っているプレイヤーと筆頭に十数人のオレンジプレイヤーが現れた。

黒いマスクで顔を覆っているプレイヤーはニヤニヤと笑みを浮か

べて、紅眼で紅髪の髑髏を模したマスクを着けているプレイヤーは自身の獲物であるエストックを片手に注意深くキリトの一挙一足に意識を向ける。

「何だ、お前らは？」

「……聞いたな、『はじまりの英雄』。お前は、俺の名を、聞いたな？」

紅眼は喜々として、答えた。

狂喜に笑みを浮かべて、狂気に紅眼をキリトに向けて、彼は万感の想いを言葉にする。

「俺の名は、ザザ。お前の、何もかもを、奪う男だ」

第10話 英雄は棺桶に収まらない

2023年7月5日 PM 21:15

第十八層 主街区『ユーカリ』とある宿屋

「まったく、うちの男どもときたら……!」

腕を組み、青筋を立てながら、桃色の髪の少女——リズベットは言い捨てるように、右手に持っていたハンマーを振るった。

その着弾点は十分に焼かれたインゴット。カン、カン、カン、と心地よい音を立てて、なおかつ勢い良くリズベットは鍛冶師として命に値するハンマーを振るい続ける。

まるでその様子は、自身のやり場のない憤りをぶつけるかのよう。武器防具を作る際は、無の境地で叩き続けるべし。

ソレこそが彼女の信条である筈であるが、どうやら今回は勝手が違いうようである。

「キリトは連絡つかないし、ユーキはいきなり飛び出すし!」

彼女の本職は鍛冶師である。確かにフィールドに趣き素材を集めたり、攻略するために前線に赴くこともあるが、彼女の戦場はフィールドにはない。

鍛冶師としてハンマーを振るい、ギルド『アクセル・ワールド加速世界』の戦力を整えたり、他のプレイヤーに自身が作成した武器防具を売り金銭面で大きく貢献する。

これこそが彼女の役割。『はじまりの英雄』や『紅閃』のように派手さはなく、『アクセル・ワールド加速世界のやべーヤツ』のような異質な存在でもない。縁の下の力持ち、それが今のリズベットを表現する言葉であった。

もちろん、彼女のそのポジションに満足しているし、日々精進することには怠らない。

現在、行っている行為がソレである。こうして武器防具を精製し、

鍛冶スキルを上げる。

とは言つても、今の彼女にとってそれは建前なのかもしれない。自分の憤りをぶつける矛先がないのなら、インゴットにぶつけてついでに武器防具を精製する。そう言った目的があるのかもしれない。現に――。

「ふう……」

何度かインゴットを打ち付けて、額から流れる汗を左腕で拭う。そして、一度吸って、思いつきり吐いて。

「スッキリした」

グッドスマイル――そんな笑みを彼女は浮かべていた。

正に満面の笑み。渾身の武器を精製し、良い仕事をした。満足気に彼女は笑みを浮かべる。

勝手気ままに無茶をする男連中に、かなり鬱憤が溜まっていたようである。

しかも本人達は無自覚。それだけでも質が悪いというのに、加えてリズベットとアスナが注意しようと聞こうともしない。

浅い仲であれば、愛想を尽かして放っておいたのかもしれない。だがそれは、関係が浅かったららの話である。

リズベットは無茶ばかりする野郎二人を放っておく気もないし、むしろ無茶をしてこそその二人であると受け入れている節すらある。

「そうよね、やっぱりそうよねえ……」

受け入れている理由は何となく、というよりもリズベットも理解している。

野郎二人、というよりかはその中の一人。いつの間にか眼で追うようになつてたのは何時からだろうか。

自覚はしていた。

しかしいざ意識するとなると話しは別だ。

リズベットは急にどこか落ち着きが無いように、眼を泳がせて動作もどこか挙動不審。

誰がどう見ても、今のリズベットは平静ではない。しかしそれは、長く続かなかつた。何度か深呼吸を繰り返して、漸く収まろうとした時――。

「リズお姉さん」

「うん？」

突如背後から自分の愛称を呼ばれて、リズベットは肩口からその人物へと視線を向ける。

自分の事を「お姉さん」と呼ぶのは一人しかない。リズベットは声をかけてきた少女の名を口にした。

「どうしたの、ユイちゃん？」

白いワンピースに、黒い長い髪の毛。

背丈は幼い少女そのもので、見た目は八歳から九歳ほど。

名を呼ばれた少女――ユイはおずおずとリズベットの顔色を伺うような口調で。

「あの、恐い人はどこかに行きました？」

前言撤回。

ユイが顔色を伺っていたのは、リズベットではないようである。キョロキョロと、ユイはどこか警戒するように辺りを注意深く観察する。

そんな少女を見て、リズベットは苦笑を浮かべながら答えた。

「ユーキなら、たった今飛び出して行ったわよ」

ユイは思わず、ホッと胸を撫で下ろす。

ユイは無茶をする野郎連中の片割れ——ユーキが苦手である
とリズベツトは知っていた。顔を合わせれば涙目になり、祿に会話が
出来ないくらいにまで怯える。

だからこそ疑問に思う。どうしてそこまで、ユーキに苦手意識を
持っているのか。

リズベツトは身体をユイの方へ向けるように座り直して、不思議そ
うに首を傾げながら問いを投げる。

「そういえば、どうしてユイちゃんはユーキを怖がっているの？」

考えれば見れば妙なモノであった。

リズベツトから見たユイは、どちらかという初対面の相手には人
見知りするタイプである。しかし、ある程度会話すれば、人懐っこい
一面を見せてくれる。

現に、キリトの友人出る野武士面の男性——クラインにも初対
面には近寄らなかつたユイであるが、今となつては自分からクライン
に話しかける程度には落ち着いている。

キリトには「パパ」。

アスナには「団長さん」。

ユーキの妹であるユウキには「ユウキちゃん」

ストレアは呼び捨て。

そしてリズベツトには「リズお姉さん」と、愛称でユイは呼んでい
る。

そんなユイが、ユーキに対して何時までたつても「恐い人」という
呼び方をするのは、どうにも腑に落ちない。

そこまで考えて、リズベツトはある結論に達した。

もしかしたら、ユーキがユイに何かしたのではないのだろうか、と

「ユイちゃん」

「え……?」

リズベツトは立ち上がると、ユイの華奢な両肩にポンと両手を置く。

優しく、どこか頼り甲斐のある声とともに、リズベツトはユイに視線を合わせて続けた。

「アイツに何かされたなら、ちゃんと言いなさいよ」

「え、え……?」

イマイチ状況を把握できていないユイを敢えて置いていく形で、リズベツトはにっこり笑みを浮かべて。

「あたしが、きつちりアイツをぶん殴ってあげるから」

「あ、あのっ！ わたし、あの人に何かされた訳じゃないので！ わたしが怖がつてるだけなので！ 喧嘩は、その、ダメですっ！」

「ふふふっ、ごめんごめん。冗談よ冗談」

「ふえっ?」

ポカン、と口を開くユイに向かって、ベツと小さく舌を出して意地の悪い笑みを浮かべる。

そんな彼女を見て、漸く自分がかかわれた事に気付いたユイは頬を膨らませて。

「リズお姉さんは、意地悪です……」

「ごめんね。ユイちゃんが可愛いから、つい……」

「嫌ですー！ わたし、傷つきましたー！」

ツーン、と唇を尖らせて明後日の方へと顔を向ける。幼い姿も相

まって、講義する姿がどこか微笑ましい。

リズベットも口元に笑みを浮かべそうになるのを我慢して、ユイに両手を合わせて深々と頭を下げる。

「ユイちゃん、機嫌直してー？　ね、この通り！」

「……わかりました。でも明日遊んで下さいね？」

「任せなさい！　嫌ってほど遊んで上げるわよー！」

そう言うと、リズベットはユイの頭を撫でる。ユイもそれを甘んじて受けるように眼を細くし、どこか気持ちよさげにされるがままとなっていた。

ここで言うが、ユイはリズベットに懐いている。

それも、保護者に近い立場にいるキリトが狩りに出かけている間に、リズベットが面倒を見ているからに他ならない。

それも仕方ないことだ。戦う術を持たないユイを、モンスターがひしめくフィールドに連れて行けるわけがない。アスナもフィールドに出てレベル上げしなければならぬし、ユーキはユイにこれでもかというくらい怯えられているため論外。

となれば、比較的フィールドに出ないリズベットがユイの面倒を見るのは必然と言えるだろう。加えて、リズベットは面倒見の良い性格である。歳下であるユイとも相性が良いこともあり、懐かれるのは必然と言える。

とは言っても、ずっとリズベットが面倒を見ていたわけではない。キリトもユイと遊んでやることがあれば、アスナも加わるときもある。ユウキだって遊んで上げているし、ストレアも様子を見に来るときもある。

「パパはどこに行きました？」

「そのうち帰って来るわよ」

オーバー気味に肩をすくめて、リズベットは続けて。

「まったく、本当にうちの男連中と来たら。気が付けばいなくなるんだから。特にキリトね。あっち行けば人助け、こっち行けば人助け。何なのかしらね、アレ。ちゃんと地に足をつけなさい行って——」

ここまで言うと、リズベットの言葉は止まってしまった。いいや、続けることが出来なくなつたと言つた方が正しいのかもしれない。

下から見上げるような視線。それが誰なのかなど、問うまでもない。

その視線の元はユイであり、少女は不思議そうに首を傾げながらリズベットを見上げる。

その様子は奇妙なものだった。

キリトのあり方を愚痴られて気分を害した訳でもなければ、リズベットを宥める様子もない。ただ不思議そうにリズベットを見上げながら、彼女を注意深く観察していた。

しかし、いくら観察しても答えは見つからない。

故に、ユイは疑問を口にして、自身が疑問に思っている答えを導こうとする。

「リズお姉さん、パパのことをどう思ってますか？」

「……………え？」

心臓が一度大きく高鳴るのをリズベットは感じる。

それはどう言う意味なのか問う前に、ユイは恐ろしく無邪気に疑問を口にした。

「パパのことを言うリズお姉さんの顔がとても幸せそうだったので。恐い人のことを言う団長さんやユウキちゃんみたいな顔してましたよ？」

それは紛れもない事実であった。

ユーキが無茶をすることは許容出来ないが、キリトが無茶をすることに関しては最終的に許してしまう。

キリトに対して最良目になってしまふ。それこそ、惚れた弱みということなのだろう。

ユイの疑問はピースとなり、ピースは絵となり次々と嵌っていく。そうして完成される絵は、彼女の心であった。

いつからだろうか、リズベツトという少女が、キリトという少年を眼で追うようになったのは。

いつからだろうか、リズベツトという少女が、キリトという少年を意識し始めたのは。

——そうよ。

——あたしは、アイツが好きなんだ。

——助けられた、あの時から。

第一層のはじまりの街で、キリトに出会った。バカみたいな男にしつこく絡まれているところに、キリトは颯爽と現れた。

その光景、その感情は今だにリズベツトの心に刻まれている。

——あの時からだ。

——あたしは、あの時から、アイツのことが好きなんだ……。

好意を自覚し、受け入れたリズベツトは笑みを浮かべた。

同時にユイの問いに対する答えを、リズベツトは口にした。

「それはね、あたしがアイツのことを好きだからよ」

「好きって、好意ってことですか？」

「そうよ」

頷くと、再びユイに視線を合わせる。

その表情は優しく、その口調は慈愛に満ち、その態度は何もかもを包み込むような愛情に満ちていた。

「キリトのことが好き。お人好しな所が好き、無茶をするから放っておけない、キリトが苦しんでいるのなら、助けてあげたい」

「キリトは今も、多分だけど誰かを助けてる。それがキリトだし、そんなアイツだからこそあたしは好きになったのよ」

.....

PM 21:45

第十八層 丘の上

—— 迫り来る凶器を、黒い直剣が弾く——。

終りが見えない、途方とも言える作業を何度繰り返したことだろうか。

少年は息を切らして、頬を伝う汗を拭う。

左手には守るべき者の手を強く握り締めて、右手には最も信頼する獲物である黒い直剣『エリユシデータ』を握る。

眼を瞑り、眼を開く。

その先にあるのが、いつもの宿屋の天井であり、この光景が夢の世界の出来事であればどれだけ楽だろう。

そんなありえない救いを求めながら少年——キリトは現実を受け止めるしかなかった。

眼を閉じ、開いた所で現実の光景は変わらない。

キリトと彼が守る少女は集団に囲まれて、絶体絶命の危機に直面していた。

プレイヤーはソードアート・オンラインの世界に閉じ込められ、デスゲームと化したこの状況において、殺人とは最大の禁忌と言える。何せ、このゲームでゲームオーバーとなれば、現実での死を意味している。それはもう殺人と変わらない。今も現実世界で頭部に装着しているナーヴギアが原因であるとしても、間接的に殺害していることに変わりないのだ。

しかし、彼らは己の欲望のままに、他人の命を奪い犯していく。それこそがキリト達を囲っている集団である。

快樂殺人集団。レッドギルド——オンラインコフィン笑う棺桶。それが彼らが所属しているギルドの名前であつた。

『血盟騎士団』が「最強」のギルド、『聖竜連合』が「最大」のギルドであるのなら、『オンラインコフィン笑う棺桶』とは「最悪」のギルド。

自身の快樂を優先し、他人を陥れる最低最悪のプレイヤー達が集う魔窟。ゲームの攻略など、彼らの頭の中に存在せず、現実世界への帰還すら視野に入れていない。ただただ、自己の欲望に忠実な獣に過ぎない。

「キリト……」

背後から、振るえる声で。

必死に恐怖を押さえ込むように、少女——サチがキリトの名を呼ぶ。

キリトの左手に収まっているサチの小さな手が震えていた。

ブルブル、と頼りなく今にも消えてしまいそうなサチの手をギュツとキリトは握り続ける。

安心させるように、サチ一人だけではないことを教えるように、キリトは力強くどこか優しさを含んだ声で。

「大丈夫」

言葉に出しても、状況は最悪であった。

キリトとサチを囲んでいるのは、三十人ほどの狂人達。もちろん、その手には各々使い込まれた獲物を手にし、刃の矛先はキリト達に向けられていた。

下手な行動をすれば、その獲物は直ぐにキリト達に殺到することだろう。

何度か攻撃されて、その度にキリトはエリユシデータを巧みに振り、迎撃してきた。

しかしそれも、長く続けることが出来ない。ならば迎撃ではなく、出撃するしかない。受けて守るのではなく、こちらから出て攻めるしかない。

仮にここで、キリトの奥の手である心意によって発現したユニークスキル『二刀流』を用いてしまえば、笑う棺桶ラフィンコフィンを殲滅することは可能であろう。

一人で戦い、一人で力を振るってしまえば、そこそ簡単な話である。

だがそれも単独での話だ。

キリトの背後にはサチの存在があり、彼女を置いて戦う訳にはいかなかった。キリトに敵わないとなれば、最悪サチだけを狙う事だってある。

故に、キリトは防戦に徹するしかなかった。しかしそれでは勝てない。今の現状五分と五分の戦力だとしても、五分での決着など、ありえないのだから――。

――クソツ……！

――そんなこと、わかってる……！

――コイツらが油断している間に、終わらせない、と……？

ここで、キリトの思考にノイズが走った。

どうしようもない違和感。自分の発現に、どこか誤りがあるのを、

彼は敏感に感じ取る。

どこに、何を、どうして、違和感があるのかキリトは分析しようとするも――。

「――キリトッ！」

「――！」

サチの叫びに、キリトは顔を上げる。

その視界に飛び込んだのは――投げナイフ。

恐らく麻痺毒を付与されているものであることを、キリトは瞬時に見極めるとエリユシデータを横に振りナイフを弾いた。

完璧な奇襲であった。

だというのに、並外れた反射神経で防がれてしまった。

そんな現実には、投げナイフの投擲主であった――紅眼のザザは舌打ちをしながら、苛立ちを隠そうともしない様子で。

「本当に、ムカつく、野郎だ……」

「しつかり狙えよな」

ケラケラと笑いながら、ザザの隣りにいる彼――ジョニー・ブラックが笑みを零した。

その対象となったザザは、再度チツと大きな舌打ちをしながら。

「うるさい」

「いやいや、本当に早く終わらせろよ。俺もこんなところで暇してる場合じゃないの。わかる？ わかるよな？ お前に付き合ってるけどさ、俺だって忙しいんだよ」

「随分と、口数が、多い。聞くが、忙しいって、何をやるんだ？」

紅い眼がギロリとジョニーを睨みつける。

その瞳を向けられた本人であるジョニーは、ふむ、と思索した。

忙しい、と言ったものの、明確な目的がなかった。ジョニーの心境にあるのは、ザザの余興を早急に終わらせることのみ。それを素直に口にするには出来ない。忙しいと言ってしまったのだから、何か理由を考えなければならぬのだが、それは直ぐにジョニーの優先事項となった。

ジョニーはその人物の姿を思うかべて、生理的に受け付けられないような野卑染みた笑みを浮かべて。

「何度も邪魔してきた、あの紫ローブの女を殺すつてのはどうだ？」

「お前、あんな奴が、好きなのか？ 趣味が、悪い」

「うるさいなー。殺したプレイヤーのエストックを集めてるお前に言われてくねえよ」

そこまで言うと、ジョニーは恋人を追い求めるように片手を空に伸ばして、ギユツ、と握り締めながら続ける。

「アイツは俺が殺す。泣いて縋ってきて、命乞いをした時に、何もかも奪って殺してやるんだ」

「無理だな」

「あ？」

ジョニーは恍惚とした表情から、訝しむような表情に変えて声の主であるキリトを睨みつける。

少しでも妙なことを言えば殺す。そんな眼で見られても尚、キリトの態度は変わらない。人を喰うような笑みを浮かべて、極めて軽い口調で続けた。

「紫のローブってユウキのことだろ？ 変な奴に絡まれたって言うつたし、外見の特徴もお前達に一致する」

「無理つてのはどう言う意味だよテメエ……」

「そのまんまだよ、お前じゃユウキを殺せない。手加減されてたの、お

「前知らないのか？」

その言葉が、引き金となった。

ジョニーは視線で殺すほどの勢いで、キリトを睨みつける。紫のローブの少女に手加減されたよりも、相手にされてないことを第三者に指摘されたのが気に入らないのか、自分勝手な言い分でキリトに憤りをぶつける。

今にも飛び出しそうな表情、声、態度でキリトに向かって怒鳴りつけるように、叫んだ。

「調子に乗ってんじゃねえぞ、はじまりの英雄！ 殺すぞ！」

闇を劈く怒声。

キリトの背後に居たサチは一際肩を大きく震わせる。その様子は見てないものの、キリトの左手にはそれが痛いほど伝わってきた。

対してキリトは、静観するようにジョニーを観察していた。

——そうか。

——俺が感じていた違和感って、これだったんだ……。

そして、確信する。

自分が何に対して違和感を感じて、道理に合わないと思っていた正体に、キリトは漸くたどり着いた。

何てことはなかった。

難しく考えすぎて、直ぐに理解出来なかった。

大勢で押し寄せてきたのも、人殺しを愉しむ狂人のふりをしているのも、自身に向けられた殺意も全ては。

「——やれよ」

「あ？」

そう、全ては――。

「ハツタリなんだろう？」

――ブラフに過ぎないのだから――。

ポカン、と友人が行ったサブライズを目の当たりにしたように、一瞬ジョニーとザザ、そして笑う棺桶ラフィンコラインの面々は声を失う。

その中で誰よりも意識を回復したザザは、問いというよりも確認するような声色で。

「遂に、頭がおかしく、なったのか？」

「俺は正気だよ。確かに、お前は本当に俺を殺したいんだと思う。でもさ――」

キリトの黒い直剣の剣先がザザの隣にいるジョニーに向け、彼は事実だけを口にした。

「――それは、お前だけなんじゃないのか？」

「なん、だと……？」

ザザは、チラツ、と意識をキリトに向けたまま隣りにいるジョニーへと視線だけを向ける。

彼は口を開けたまま固まっていた。口を開ける姿は、どこかそれ以上踏み込ませない否定があるが、うまく言葉が纏まらずに発声することが出来ない。周囲の笑う棺桶ラフィンコラインのメンバーも同じだった。誰も彼も否定しようとするものの、言葉に出来ていなかった。

凶星を突かれた。

キリトは、ニヤリ、と笑みを零して剣先をジョニーに向けたまま続ける。

「おかしいと思ったんだ。人数もお前達の方が多い、この人数で一気

に来られたら、多分俺は死んでた。でもそれをしなかつただろ？」
「それは、テメエを痛めつけるために——」

ジョニーのひねり出した声に、キリトは首を横に振る。

それは明確な否定。それは違う、とキリトは否定しながら続ける。

「それに、殺す殺すって言うておきながら何もしない。全員が全員、俺に集中していないんだ。どいつもこいつも、俺じゃないナニかに意識を向けていて、気が気じゃない。そうだろ？」

視線をジョニーから、自分を囲っている笑う棺桶ラフィンコフィンのメンバーにぐるりと向けるも、誰も彼も否定の声は上がらなかつた。

「人ってのは、自分が理解できないモノを怖がる。自分の中にある常識を逸脱したヤツに、恐れるんだよ」

だから、と言葉を区切りキリトは口を開く。

「お前達はアイツが——『アインクラッドの恐怖』を恐れている。お前達は自分達の為に戦うけど、アイツは見ず知らずの他人の為に戦う。だからアイツが恐いんだ。身を削って、どこからともなく現れるアイツにお前達は怯えている」

それだけ言うと、キリトは右手に持っていたエリユシデータを背に収める。

まるで戦いは終わった、と言うかのような姿に、笑う棺桶ラフィンコフィンの面々はもちろん、ザザもジョニーも、背後に居たサチでさえ呆気にとられてしまった。

「舐め、やがって……！」

最早相手にならない、お前達に俺は殺せない。

暗にそう語るかのようなキリトに、ザザは今度こそ殺そうと、片手に持っていたエストックを握りしめる。

口を開く暇すら与えない。

ザザは両足に力を込めて、重心を低く構えて、直ぐにキリトとの距離を詰めようとするも――。

「お前達は一つ、大きな間違いを犯した――」

何かをキリトが言っているのが、ザザの耳には入ってこなかった。

戯言に付き合うつもりもない。直ぐに距離を詰めて、必殺の刺突ではじまりの英雄を仕留める。それだけしか、彼の頭にはない。

「見たところ、これが今の笑う棺桶ラフィンコフィンの全員なんだろう？ アイツに潰されてるらしいしな――」

ニヤリ、と笑みを浮かべるキリトに、ザザはどうしようもない悪寒が背筋を走る。

理由もなく、信憑性もなく生じたソレを気のせいだと割り切るには、それは明確すぎたのだ。

思わずエストックを握りしめる。

正体不明の怪物を倒す為に、自身の獲物を握り鼓舞するように、ザザは謎の悪寒に耐えようとする。しかし悪寒は収まることなく、むしろ強まっていった。

対するキリトは、そのままどこか愉しむような口調で、事実だけを突きつける。

「――これだけの人数を動員して、アイツが黙っていると思っていたのか？」

瞬間――突風が舞い、衝撃が走り、狂人のふりをしていた弱者が宙に飛ぶ――。

「お前達の『恐怖』が、やって来たぞ?」

ザザの悪寒の正体が、そこに居た。

はじまりの英雄を囲っていた絶対に破られない包囲網は、たった一振りでも瓦解何もかもを引き千切ってしまった。

薙ぎ倒されたのは六名。どいつもこいつも、気絶するだけに留められており誰一人ゲームオーバーになつた様子はない。だがそれだけで、残りの十人程の笑う棺桶ラフィンコフインのメンバーは一步また一步後退っていく。いつの間にか、狩る側が、狩られる側へとなる。

恐怖とは心を捉えて、身体を鎖のように縛り付けるモノだ。

現に、笑う棺桶ラフィンコフインのメンバーはもちろん、ザザもジョニーも肉体に異変が起きていた。

虚勢だつたとは言え、充実した快樂であつた。あの『はじまりの英雄』を一方的に痛めつけて、愉悅に浸っていた高揚とした気分が、今はない。

泥濘に嵌つたように、身体は思うように動けずに、指先はしんと冷え切っていた。

そして、その正体は、自身の破つた包囲網から歩みをすすめる。

軽い、乾いた音が辺りに響いている。その音は、砂利、と地面を歩くモノだつた。

この上ない恐怖と、とてつもない悪寒を引く連れて、アインクラツドの恐怖——ユーキは歩みを進めてキリトと真正面から対峙する。

長年連れ添つた友人に浮かべるような笑みで、キリトは軽い口調で言う。

「遅かつたな」

「散歩してたら、偶々ここに来ただけだ」

それだけ言うと、ユーキは周囲を一瞥して告げた。

「どう言う状況だ、何て野暮ってえ事を聞くつもりはねえ。——
行け」

「助かる」

簡単なやり取り。

しかし、二人にとってはそれだけで充分だった。

キリトはサチの手を引き、その場を離脱する為に走る。

「——守るって決めたなら、最後まで守れ。目の前で誰かが死ぬってのは、結構堪えるもんだ」

その言葉に反応できるほど、キリトに余裕はなかった。

どうしてそんなことをユーキが言ったのか尋ねる前に、今はサチの安全を優先することが先である。

黒影が遠くなり、点となっていくのを見守ると。

「さて——」

ユーキは何気ない口調で告げる。

しかしそれは——。

「——ゴミ掃除だ。手間は取らせねえ、直ぐに終わらせてやる」

笑う棺桶ラフィンコフィンとつての、死刑宣告でもあった——。

第11話 笑う棺桶 く起く

数十分前。

彼女は月明かりのないフィールドを走っていた。

息を切らし、頬からは汗が伝う。しかし、それを拭う素振りすら見せない。特別な理由などない。単純な話で、汗を拭っている暇も、息を整えている時間すら惜しいからだ。

視線の先、ただ真っ直ぐ。暗闇とも言える行き先を、彼女は真っ直ぐに見据える。

しかし。

「あつ……い！」

足をもつれると、土砂、と音を立てて彼女は無様に一点二点地面を転がった。

それも仕方ないと言えるのかもしれない。何せ彼女は、自分の運動能力の限界以上を引き出して走っていたのだ。その無茶は、必ずどこかで形として現れる。

それが今。

彼女の足は、プルプル、と震えており走ることも、もしかしたら歩くことすら難しいかもしれない。

それでも彼女は齒を食いしぼり、前だけを見据えて——走った。

あまりにも必死、あまりにも夢中な様子。

それもこれも、彼女に送られてきたメッセージが原因と言える。

メッセージを送ってきたのは『鼠のアルゴ』である。

内容はシンプルラフィンコフィンなものだった。

『十八層で笑う棺桶ラフィンコフィンが動いている』

この程度の内容であった。

レッドギルドとして、忌み嫌われている笑う棺桶ラフィンコフィンが動いている。

普通のプレイヤーがそんな情報を見たものなら、普通のプレイヤーならば関わり合いたくないことだろう。相手は平気でプレイヤーを殺す殺人集団。意味もなく人を殺す、最低最悪の連中だ。

真つ当な生き方をしている人間であれば、見て見ぬふりをするかどうかだろう。

しかし問題はその後の一文。

『キート坊を襲おうとしている』

——キート坊って、キリトのことだよな。

——このメッセージは、あの人にも届いている筈。

——あの方は、笑う棺桶ラフィンコフィンがいるってだけで動く人。

——キリトも関わっているってなったら、絶対に必ず動く……！

彼女がいう「あの人」というのは、性格が良い人間とは言い難い少年であった。

直ぐに強がって、辛くても辛いと告白することはなく、性格も捻くれている。善人を見れば「お人好しが」と意地の悪い笑みを零し、悪人を見れば「クソ野郎」と義憤することだろう。

恐らく、笑う棺桶ラフィンコフィンと戦うのだって「気に食わなかった」からというのだろう、と彼女は分析する。

——アナタの言葉は嘘ばかり。

——自分の気持を悟らせないように、周りの人達に嘘を付く。

——本当は皆を守りたい、ってだけの理由なのに。

——真つ当な理由の癖に……。

そんな少年の背中を、彼女はずっと見てきた。

少年の言葉に真実は少ない。大半が嘘で固まっており、人を突き放すような言い回しをするものだ。その中から、真実だけを見極めるの

は難しい作業である。

だからこそ、彼女は少年の行動を見てきた。多くを語らないのなら、行動を見るしかない。

少年の行動は、言葉とは裏腹なものであった。

心が折れている人間を見れば手を伸ばし、膝が折れている人間を見れば攻撃的な言葉を投げつけて叱咤する、襲われてる人間を見れば何も言わずに救う。

お人好し、と嘲笑う少年は、誰よりもお人好しであった。

そんな少年を見て、彼女は学んだ。人間は愚かだ、しかしその全てではない、と。だからこそ少年のように人間を守り——人間のように振る舞いたかった。

そしていつの日か、少年の寄り添えるような存在になり、少年を守れるようになる。そんな願いを、彼女は抱くようになっていた。

——アナタは、アタシが守る。

——危ない目に合っても、アタシが必ず守るよ。

そして、彼女は再び走り出した。

彼女の目指す先は、十八層の丘。その場所に件の少年が居て、今も笑う棺桶ライコンと交戦していることだろう。

再び走り出す。

守る為に、死なせない為に、彼女は走り出す。

その様子は我武者羅極まりない。とても、格好が良い疾走とは言えないだろう。

どうして自分はここまで必死になるのか、と少しだけ考えて、その考えを自嘲するように一笑した。

——そんなこと、当たり前だよ。

——好きな人が危ない目に合ってるんだもん。

——自分の好きな人は、自分で守る。

——女の子として、当たり前でしょ！

彼女——ストレアは自分の恋心に決着を付けて再び駆け出した。

その姿は人間そのもの。自我に目覚めて、一人の少年に恋をしたA Iは、ひたすらに丘を目指す——。

.....
.....
.....

2023年7月5日 PM 21:30

第十八層 丘の上。

アインクラッドの恐怖と言っても、人間は人間だ。

ソードアート・オンラインに巣食うモンスターでもなければ、理不尽な強さを誇るフロアボスでもない。同じ人間、同じ霊長類であることには変わらない。

どれだけ凄まじい膂力を誇っていようが、恐怖を操り人の心を縛ろうが、桁外れな意志力を見せようと変わらない。

空気を吸えなければ死ぬし、何も食べなければ死ぬ。何よりも明確な命の残量として表示されている、HPゲージがなくなれば必ず死ぬ。

ならば殺せる筈。どんな化物だろうが、どれだけ怪物だろうが、同じ人間ならば殺せる。

オンライン笑う棺桶の全員はそう思っていた。

否、そう思わなければアインクラッドの恐怖なんていう怪物に立ち向かえなかった。

対峙したものなら足が震えて、手に持つ武器もブルブル震えて満足

に握れない。だからこそ、笑う棺桶ライッコラインは本当に信じていた。
だからこそ。

「——ツ——」

そんな僅かな希望。

淡い期待すら打ち砕かれた彼ら——絶大な絶望が殺到する。

轟、とアインクラッドの恐怖が剣を振るえば、防御態勢を取つていた二人の笑う棺桶ライッコラインが吹き飛ばされる。

それこそゴミクズのように、紙くずのように、簡単に吹き飛ばされて宙に舞う。人間はそう簡単に空を舞える生き物ではない。そんなものを見たものなら、それは幻想であり、空想の出来事であろう。あまりにも現実離れしている光景。

しかし奇しくも、そんな空想のような現実を目の当たりにして、笑う棺桶ライッコラインの全員が漸く現実を理解した。

同じ人間だと思つていたアインクラッドの恐怖という存在を、殺せると妄想していた存在を、やつと認識することが出来た。
そして共通の疑問が生まれる。

——アインクラッドの恐怖は、本当に人間なのか——？

戦い方は実にシンプルなものだった。

斬る、斬る、ひたすら斬る。

その行為に牽制などという意味はない。片手で振るわれる剣は全て必殺。格闘ゲームで言うところの、ボタン一つで出る技を繰り返し返す。

正に暴力の権化。

『鬼』という表現をしようにも既に当て嵌らず、『鬼神』と呼ぼうにもそこまで完成されていない。

だからこそその暴力。単純に、途方もない力で暴れる。その強さだけで、アインクラッドの恐怖は己の存在を世界に知らしめる。

「た、助け——」

逃げようとする笑う棺桶ラフインコフインがいれば、両手剣を地面に突き刺して、空いた片手をその首を掴み地面に叩きつける。

隙が生まれた、と判断した笑う棺桶ラフインコフインの一人が槍を両手に持つと、全身の力を使い腹部目掛けて刺突する。

倍以上のあるリーチを誇る凶器を向けられたところで、アインクラッドの恐怖は変わらない。虚を付かれた様子もなく、刺突を当たる寸前で避け——カウンターを入れるように、笑う棺桶ラフインコフインの顔面へと拳を振り込ませていた。

自分が砲弾のような速度で吹き飛ばされたことすら気付かないまま、槍を持った笑う棺桶ラフインコフインの意識はそこで途切れる。

最早、何をしようとも意味をなさなかった。

逃げようとする笑う棺桶ラフインコフインが居た、麻痺毒を塗られた投げナイフを投げる笑う棺桶ラフインコフインが居た、統制を整えて盾を敷き詰める笑う棺桶ラフインコフイン達が居た。

そんな些細な努力。生き残るための、涙ぐましい努力をアインクラッドの恐怖は叩き潰す。

逃げようとする笑う棺桶ラフインコフインを叩き潰す。

——逃走は出来ない。

投げナイフを投げようとも避けられて、次弾を放つ以上の速度で詰め寄せられ斬り捨てられる。

——飛び道具も通じない。

盾があろうと関係がない。その上から、途方もない膂力で振るわれた両手剣で蹴散らす。

——防ぐくなど論外。

アリと像の戦いとも言える光景。

だがそれでも、アインクラッドの恐怖は驕らない。

余計な会話もせず、ただひたすら作業するように、雑草を筆り取るように、圧倒的な力で処理していく。

既に、勝ち負けの話ではない。

攻撃が届くか、どうやって怪物から逃げ切るか。戦闘はいつの間にか、そんな内容にシフトしていった。

笑う棺桶の一人が一步後ずさる。

このまま、仲間を意識を向いてくれれば逃げ切るのではないか。全力で、後ろを振り迎えることなく、我武者羅に走れば逃げ切れるのではないか。そんな儂い希望を抱く。

その時だった。

仲間の一人が斬り飛ばされて、完全にその意識を奪った怪物の首が、グルン、と逃げようとした笑う棺桶ラフィンコフィンに向けられる。

「あ、あ……！」

正面から、蒼い瞳と眼が合う。

レーザーサイトのように、照準を合わされた笑う棺桶ラフィンコフィンは。

「あああああああっ!!!」

逃げる。しかし無意味だった。

意識を向けられ眼が合った、そして攻撃が届いた。

笑う棺桶ラフィンコフィンは、こうして事実上壊滅することになる。

一人の怪物——アインクラッドの恐怖によって——。

.....
.....
.....
.....

数十分後

「さて——」

退屈そうにアインクラッドの恐怖——ユーキは辺りを見渡した。

地面に転がっているのは、先程まで対峙していた笑う棺桶ラフィンコフィンの連中である。その数は三十人。

その全員が全員、形を保っており、誰一人ゲームオーバーになっている様子はなかった。

その中には、ジョニー・ブラックや紅眼のザザといった名だたるプレイヤーもいるが、ユーキにはどうでも良い事実であった。倒したからと言って誇るモノでもないし、ユーキにとっては害虫を駆除したという認識でしかない。

誰一人立ち上がる者もいなければ、意識を保っている者もない。笑う棺桶ラフィンコフィンは余すことなく、無様に地面に転がっている。

戦闘は終わった。

だと言うのに——。

「——」

ユーキは両手剣『アクセル・ワールド』を収める様子は無かった。むしろ何かに意識を向けており、いつ奇襲されてもいいように、臨戦態勢を保っている。

そんな所へ。

「アインクラッドの恐怖——」

パチパチ、と乾いた音が聞こえる。

手を叩き、賞賛するように、拍手をしながら暗闇から一人の男の声

が聴こえた。

「——いいや、俺の恐怖！」

俺、という部分を強調しながら、軽い足取りで現れた。

膝上まで包む、艶消しの黒ポンチョを羽織って、目深くフードを被っている男。その姿に、ユーキは見覚えがある。忘れもしない、忘れる訳がない。

これで三度目。

一度目は一層の迷宮区にて、二度目は十八層にて。そして今、三度目はユーキの前に姿を表した。

「俺を追ってたんだろ？ だからコイツ潰して回ってたんだろ？」

ラフインコフイン笑う棺桶の影に俺がいると思って、潰して回ってたんだろお!」

「……………」

口元を緩めて、本当に楽しそうに黒ポンチョの男は朗々と口を開く。

両手を広げて、迎え入れるようにする様子はあまりにも隙だらけであつた。しかし隙などない。常に意識はユーキの動向を注意深く観察しており、少しでもユーキが動けば即座に反応してくることだろう。

「嬉しいってもんじゃねえ。貴様の意識には常に俺が居て、貴様は俺をずっと追っていた。ハハッ、これだこれだよ！ やつと俺を見たな、やつと俺を呼んだな！」

「クソ虫が、ベラベラ喋ってんじゃねえぞ」

対称的に、ユーキは不快感を隠すことなく、チツ、と舌打ちをする
ラフインコフインと、地面に転がっている笑う棺桶の連中を見て。

「テメエ、ずっと見てたな」

助けようとするれば、割って入って連中を助けることも出来た筈だ。と暗に語るユーキを見て、黒ポンチョの男は肩を軽くすくませて答える。

「こいつらは手駒だ。俺が何故、ラフィンコフィン笑う棺桶なんてギルド立ち上げたと思っ？」

「クソ虫の考えなんて、オレがわかると思うのかよ？」

「いいや、わかる。俺は貴様で、貴様は俺だからだ」

その言葉に、ピクツ、とユーキが若干眉を吊り上げるも、気にすることなく黒ポンチョの男は続けた。

「貴様も俺も同じだ。理不尽な世界を憎み、度が過ぎた怒りを溜め込んでいやがる」

「……………」

「だが貴様は、その怒りを自分にぶつけて、憎しみを自分に向けていた。意味がわからねえ、何故それを他人にぶつけない？」

黒ポンチョの男が思い出すのは、一層で出会った頃の記憶である。

どす黒い眼を宿し、何もかもを燃やしかねない黒き炎をその内に宿す。殺し殺され、陽のあたる場所にいなかった彼から見ても、そんな眼を宿した者は見たことがなかった。

そして今も変わらない。

アインクラッドの恐怖と呼ばれるようになった少年の眼には黒き炎が宿っており、極限にまで熱された怒りを圧縮した心火は常に少年の心に宿っていた。

「二人でも殺せば、俺と同じ存在になれるだろう。だから俺は貴様が人を殺せる状況を作った。ラフィンコフィン笑う棺桶を作り、バカなガキに麻痺毒の作

り方も教えてやったし、アインクラッドナイツも拐かしてやった。効率のいいPKの仕方も広めてやったっけな？」

「……………」

「なのに、どうして貴様は殺さない？ 思いのまま怒りを開放しろ、憎悪を相手にぶつけろ。俺と同じ存在になれよ、俺の恐怖。貴様の理解者は俺だけだぜ？」

「……………」

「殺さない、むしろ人助け。貴様はそんなモノじゃないだろう。正義の味方になったつもりか？」

「ハッ、イカれてんのかテメエ」

今まで静観していたユーキが口を開いた。

その言葉は、驚くほど冷静なモノ。その口調のまま、事実だけを口にした。

「オレが正義の味方、なんて聖人に見えんのかよ？」

それだけ言うと、ユーキは両手剣の剣先を黒ポンチヨの男に向ける。

それは明確な拒絶であった。理解者など必要がない、ユーキという人間は黒ポンチヨの男を容認出来ない、という明確な意思表示。

「単純な話しだ。オレは『正義の味方』じゃなく『テメエの敵』。その程度の話しなんだよ——」

「——来いよクソ野郎。テメエとの下らねえ因縁も、今日で終いだ——」

第12話 笑う棺桶 く承く

2023年7月5日 PM 22:00

第十八層 丘の上

——ソードアート・オンラインにおいて「雨」とは、極めて稀な気象とも言える。

仮想世界と言えど、アインクラッドでは雨が降る。

その触感もリアルなもので、雨に濡れれば衣服が濡れて、容赦なく体温を奪っていく。アバターの皮膚に水滴が落ちれば、それは重力に従って下方へと垂れていく。まるでそれは本物の雨、仮想世界にいなから現実世界の雨に打たれているかのような感覚。

しかしリアルに近すぎるというのも考えものだ。

ベータテスト時はかなりの頻度で雨が降っていたアインクラッドでは、今では珍しいものとなっている。理由は至って簡単に単純なもの。プレイヤー達の苦情により、雨が降ることは減少していった。アインクラッドでは珍しい雨。それが「豪雨」ともなれば、もっと珍しい。

第十八層の主街区である『ユーカリ』を一望できる丘。

地面には、至る所に底の浅い湖が出来上がっており、叩きつける雨は斜めに降り注ぎ、風は木々を叩き折らんとばかりに荒れ狂っていた。

空は既に闇の中。

丘から見える『ユーカリ』街明かりだけが、その場所に人が居ることを教えてくれる。

しかし遠い。あまりにも遠い。遠く遠く、どうしてもこの場所からは手が届かない。

そんな人の営みからかけ離れ、別離された丘の上で、獣二人が牙を

突き立てていた。

「ハハッ——！」

「……………ッ！」

獣一匹が楽しそうに噛い、獣一匹が忌々しげに口元を固く歪めた。そして何度目かの激突。

何度繰り返したか考えることすら放棄していた。

とにかく目の前の獣を駆除しなければならぬ。そんな義務感が獣の一人——ユーキの心を急かす。

だが急いだ所で——。

「おっと」

勝敗が決することは無い。

ユーキの凄まじい臂力による一振り、魔剣——
友切包丁

メイト・チョッパ

で受け止めてわざと吹き飛ばされた。

そして空中で、猫のように身体の重心を操り地面に着地する。

自分の一撃が、距離を開けるために利用された事を理解すると、ユーキは苛立ちを右手に集中させる。

右手に持っている両手剣を、ギユツ、と握り締める。屈辱を力に変えて、ユーキはその場に超然と敵と対峙していた。

「……………随分と、強くなったもんだ」

ユーキの敵である黒ポンチョの男——POHはどこか感慨深い口調で口を開いた。

その合間にも、雨は激しさを増す。

黒ポンチョが、パチパチ、と雨を弾き、ユーキの胸当ての辺りにも強く雨が打ち付けられていく。

二人を照らす光などない。まるで二人が立場は、幽世のようでもあ

り、生者など存在しないかのようでもあった。

しかしユーキとP○Hはお互いの存在を認識しているし、どのような構えであるかも把握していた。

二人の距離は、ちょうど数十メートルぐらいだろう。

この豪雨と烈風の中、お互いの姿をよく見えたこと、お互いの声が聞こえるのが不思議であった。

「一層では俺に手も足も出なかったのにな？」

「尻尾巻いて逃げたクソ虫が何を言ってるやがる」

「あの時は、まあ、俺も気が動転してたんだよなあ……」

クツクツ、と口元に笑みを浮かべて、P○Hは両手を広げる。

その姿は、ユーキという人間を迎え入れて、受け入れているとも取れるものだった。

とても殺し合いをしている人間が取る行動とは思えないまま、P○Hという男は情愛を込めた口調で続けた。

「まさかこんな所に、貴様のような俺がいるとは思わなかったな。あの日突然、ドツペルゲンガーを見ちまったんだ。そりゃ動揺の一つや二つするだろう」

「——ッ！」

黒ポンチョの口を黙らせることは出来ならしい。そう判断したユーキは、行動に移していた。

黙らないのなら物理的に黙らせる。口を開きたくても、開けない状況を作り出す。

そうして何度目になるかわからない、ユーキの疾走は始まった。

水に濡れた地面、吹き飛ぶ豪雨の中で、荒々しい速度だった。

二人の距離は数十メートル程。この程度の距離ならば、恐らく五秒とかかるまい。

P○Hの身体に刃を斬りつけて、地面に転がして叩き潰すのに、充

分過ぎる距離だった。

しかし――。

「……なっ！」

突如、ユーキの視界からPOHは消えた。もちろん、物理的に消えたわけではないし、この局面でユーキが油断して彼を視界から外すわけがない。

同時に、ユーキの頭のなかでありとあらゆる警報がなり始めた。これまで命を削ってきた経験、そして第六感による危険予知が、その場においては危険であると結論付ける。

「貴様、左眼見えてないだろう」

異変は直ぐに現れた。

斬、という音を立てて、ユーキの左腕に衝撃が走り、それは直ぐに灼熱へと変わり、痛覚として残留した。

左方へ首を動かすと、自身の肘から先にある筈の左腕は宙に舞い、死角に潜り込んでいた敵である黒ポンチョの男は、メイト・チョッパー友切包丁を一閃していた。

斬られた、とユーキは自覚し苦痛を無表情で押し通し、直ぐ様態勢を立て直し反撃に移った。

「チツ――」

舌打ちをして、右手に持つ両手剣『アクセル・ワールド』を強引に真横に振る

「おっと――！」

ユーキの斬撃よりも、POHの行動の方が速い。

人の理性を持つ獣は、間髪入れずに後方へと飛び闇の中へと紛れ込んだ。

普通の思考回路をもつ人間であれば、このまま攻めることだろう。何せ、片腕を斬り落とし、左眼が見えないというハンデがあることを掴んでいるのだ。このまま攻めないなんて、それこそ道理に合わない。

しかし、P O Hという獣は離脱を選んだ。

彼は理解しているのだ。片腕になろうと、ユーキには関係がないということ。

何せ、あの「アインクラッドの恐怖」だ。一人でフロアボスを打倒し、今まで一人で攻略をしてきた化物だ。そんな人間が、片腕を切り飛ばしたところで動揺する筈もなく、むしろ気にせずそのまま引かずに斬り合うことだろう。

そうになると、P O Hにとっては分が悪い。純粋な斬り合いでは相手にならない、と彼は熟知している。

だからこそ驚くべきは、P O Hの身体能力ではなく、即座に離脱を選んだ思考の速度。

引き際を弁えていると言ってもいい。それはユーキにとっても、厄介極まりない能力でもある。

「つたく、何て野郎だ貴様は」

メイト：チヨッパー
友切包丁を弄びながら、P O Hは呆れるように感想を漏らした。

P O Hの頬は微かな冷や汗が流れている。それは疲労からではない。

彼は注意深く、ユーキを観察する。

変化は——見られなかった。

数分前と同じ、少年の瞳はP O Hの姿だけを捉えており、それ以外は思考の外へとはじき出している。少年の斬り飛ばされた左腕は今までに地面に転がっており、それに意識を向けている様子はない。

その姿に、P O Hは恐怖を覚える。

少年の人となり分かってはいたが、実際に見てみると明らかに異常に映り込んでいた。

「今まで斬り合って、貴様には痛覚があることがわかった。貴様の身体はリアルに近づき、感覚も研ぎ澄まされているんだろう。より力強く、より速く動けるって訳だ」

「何が言いたい？」

「貴様は化物ってことだ」

吐き捨てるような言葉とは裏腹に、P O Hはどこか嬉しそうな口調で続ける。

「片腕斬り落としてやったつてのに、貴様は何も変わらない。死ぬほど痛いだろそれ？」

「知るかよんなもん。痛みなんぞ、気持ち次第でどうとでもなる」

「そう、どうとでもしちまう！ バカ強い精神力と意志力。それこそが、貴様の力であり原動力つてやつなんだろう！」

P O Hの目の前に居るのは、彼自身が称した化物。

左腕を斬り落とし、身を悶えるほどの痛みがあるにも関わらず怯まず、なおかつ反撃してくる化物。

もしかしたら——ユーキという少年にとって、身体が傷つくということは呼吸と同じくらい当たり前のことなのかもしれない。

少年は、誰よりも自分という人間を嫌悪しており、誰よりも自分という人間に憤怒を向けている。その証拠が、例の「黒炎」であった。自身すら焦がす黒き炎に身を焦がしながら、力を振るい続ける。

正に、自己嫌悪の塊。いいや、自己嫌悪の怪物といっても過言ではない。

ならば、P O Hはどうだろうか。ユーキは自分自身と称した彼は、どうなのだろうか？

「貴様に出来て、俺に出来ないことはない。そうだろう、俺の恐怖？」
「デメエ、まさか……ッ！」

ニヤリ、と笑みを零してPOHは応じた瞬間――。
轟、とPOHの中心から衝撃が空気の壁を叩き、荒れ狂っていた豪雨を吹き飛ばした。

異変はPOH自身にはない。

明確な変化の表れは彼の武器にあった。今まで白銀の刀身だった、メイト・チョツパー友切包丁は今となつては「赤黒い」グロテスクな色に変貌を遂げている。

文字通り、魔剣となった獲物をユーキに向けながら。

「この世界は面白い。自分がイメージした通りに、改変されていく。俺が何をイメージしたか、教えてやろう」

自身の持つ魔剣を、意気揚々とした調子でPOHは天に掲げながら続けた。

「この剣は、プレイヤーを殺せば殺すほど威力を増す。つてことはだ、この剣は魂を食って強くなるつてことだろう？」

「デメエは殺すだけじゃなくて、その剣の中に――！」

「そう、プレイヤーの魂を食らつてやることにした！ この剣で殺したプレイヤーの魂を喰らい、一部にするよう手を加えてやったのさ――！」

だから、と言葉を区切りPOHは恍惚とした声と表情で告げる。

「貴様を殺して、俺の一部にしてやるよ。俺達は文字通り、一心一体となるわけだ――！」

「――ッ！」

叫ぶように宣言すると同時に、P O Hの疾走は始まった。

ユーキは思わず眼を疑う。

死角に回り込まずに、真正面から向かってくる。口を開けて、涎を撒き散らして獲物に襲いかからんとする姿は、正に獣のソレだ。

正気じゃない、としかユーキには思えない。

力でも勝っている、速度も僅かであるが勝っている。ならば正面から斬り合って撃ち負ける訳がない。

ユーキはそう確信するが——それは、大きな間違いだった。

「ウラア——！」

ユーキの両手剣とP O Hの魔剣がかち合う。

力負けしたのは——。

「な——に——？」

ユーキであった。

眼を見開き、信じられないモノを見るような眼で、P O Hを見る。

今までこんなことはなかった。いつだって、誰にだって、純粹に力負けしたことはなかった。それこそフロアボスにも負けることはなかった。齒を食いしぼり、いつだって正面から打ち負かしてきた。しかし、ここに来て。

ユーキを自分の物にするために、何もかもを喰らってきた男が、何もかもを引っさげて打ち負かす。

「確かに、貴様の剣は重い。片手で振り回している貴様が信じられない」

「デメエ、は——！」

「だが、貴様よりも俺の方が——思いが強い！」

「——オレなんぞとやり合う為に、何人殺してきたツ!？」

大きく弾かれた右手に、ギリツ、と力を込め、迸る叫びと共に、ユーキは黒ポンチョの男の脳天めがけて力任せに両手剣を振り落とす。

対して、POHは今度こそ引かなかった。心意を開放し、自身の獲物を魔剣と化したもう一人の化物は、ユーキの一撃を受け止めて事実だけを口にする。

「貴様は今まで、モンスター何匹殺したか、覚えてんのか？」

「このクソ野郎が——！」

「おいおい、怒るなよ。地道にモンスターを殺して経験値を稼ぐよりも、プレイヤー殺して“ゴイツ”を強化した方が速い。仕方ないだろう？」

彼らは、自分の為に力を振るう。

理由は同じでも、根本的には異なるモノであった。

ユーキは他人が傷つくことを否とし、POHは他人が傷つくことを是とする。

ユーキは自分が傷つくことを是とし、POHは自分が傷つくことは否とする。

ユーキが自己嫌悪に塗れるのに対して、POHという男は自己愛性に満ちていると言つてもいい。

ギリギリ、と奥歯を噛み締める。

今まで殺意を他人に向けたことがなかったが、ここに来て初めてユーキはPOHに殺意を向けた。生まれて初めて——他人を殺したい、と本気で思った。

この男だけは、生きてはいけない、と。

自分と同じくらいのクソはここで消す、と己を焼き殺すように、己に向けるように、怨嗟の声を絞り出しながら。

「テメエは、ここで消す……！　ここで、終わらせてやる……！」

「願ったり叶ったりって奴だ。俺がここで貴様を殺せばいつまでも一緒にいられるし、貴様が俺を殺せば俺という存在はいつまでも貴様の

中に生き続けることになる」

その言葉が引き金となった。

今こそ、ここで。この場で、ユーキは己の心意を開放しようとする。怒りが、憎悪が、呪いが、ありとあらゆる負の感情を爆発させて、今度こそP O Hを斬り殺すと己に誓いを立てて、暴力を炸裂させようとする。

だが――。

「――あ」

小さく声を漏らす。ここに来て、ユーキの殺意が鈍った。

墨よりも黒い感情を宿した蒼い双眸はP O Hから逸れ、彼の背後へと向けられている。

瞳にあるのは殺意ではなく、純粋な困惑だ。

どうしてここにいいのか理解が出来ない、そんな眼をしていた。

「ああ?」

P O Hは思わず肩越しから、背後へと視線を向ける。

そこに誰かがいた。その姿は少女。

雨に濡れながら息を切らして、綺麗な紅い瞳はP O Hではなく、ユーキに向けられている。

思わずため息を吐きながら。

「あーあーあー、興冷めだ」

「ガッ!」

言葉と同時に手が動いた。

P O Hは魔剣を持つ片手ではなく、無手だった片手に投げナイフを持つと、戸惑う様子もなくユーキに突き立てる。

完全に意識を、P O Hから少女へと向けていたユーキにその奇襲を防ぐ手段はなく、あっさりと胸の辺りに突き刺さっていた。同時に、ユーキの身体が崩れ落ち、両膝が地面に着いてしまった。バチャン、と水が跳ねる音が響く音が虚しく木霊した。いくら力を入れようが身体が動かない。

HPゲージは点滅し、自分が「麻痺」していることを知らせていた。投げナイフには、高レベルの麻痺毒が塗られていたのだろう。それを一部始終見ていた少女——ストレアは悲痛に叫んだ。

「——アナタ！」

「バカ野郎！ オマエはさっさと逃げろ！」

自分が傷ついてもお構いなしに、ユーキも叫んだ。

動けないことは致命的である。現に今のP O Hはプレイヤーを殺害し強化されていく魔剣『メイト・チョッパ友切包丁』を装備しており、かなりのプレイヤーを犠牲にし、魂を喰らってきた。

心意を開放した威力は先程の見た通り。ユーキと同等いや、それ以上の攻撃力を有している。そんな人間の前で膝を付き、手足も出ない。指一つ動かすことすら出来ないこの状況は、致命的にも何者でもない。

しかし、ユーキのあり方は変わらない。

自分の危機よりも、他人の危機を優先にする。意識は既にP O Hに向けられておらず、ストレアに向かっていた。

それが何よりも。

「———そうか」

それがなによりも———P O Hは面白くない。

ユーキの両手剣を真横に蹴り飛ばして、しゃがんでユーキに視線を合わせながら。

「俺を見ないで、あの女を見るのなら仕方ねえ。——女を消すでしょう」

「ま——」

待て、と言い終わる前にP O Hは行動に移していた。

身を低く、獣のように走る。草食獣に牙を突き立てる肉食獣のように、獲物を見つけた獣のように、彼は疾走を始めてストレアとの距離を詰めた。

彼女との距離を考えると、三秒もかかるまい。

他人の命を吸って強化された魔剣は容赦なく、ストレアの柔肌を抉り斬り、躊躇もなく彼女の命を吸い魂を我が物とすることだろう。

——やめろ。

——やめろ………！

——アイツは何も関係がない。

——オレとテメエとの間に、何の関係がないだろう！

——どうして、何も関係がない人間を犠牲に出来る………？

——この、この………！

「クソ虫野郎がアアアアアア！」

ユーキの叫びが木霊し、P O Hとストレアとの距離がゼロとなった。

魔剣が走る。ストレアが反応出来る道理はないように、抵抗が出来ないまま、その刃は彼女へと一閃した。

斬、という音が響き渡った。

斬る人間が居て、斬られる人間が居る。となれば、結果は明らかであった。

結果は——。

「な、に……?」

何者かの理解が追いつかない。

「あ、あ……」

何者かの振るえる声が漏れる。

そして――。

「――ッ!」

何者かが、理解が出来ない者の顔面を殴り飛ばした――。

殴り飛ばされた者―― P O H は今だに理解が出来ないのか、受け身も取れないまま地面を転がり、数十メートルのところで止まると漸く恐る恐る立ち上がる。

「貴様、何をしている……?」

「――」

殴り飛ばした人物は答えない。

いいや、何をしているのかは P O H にもわかっていた。ただ、思わず呆然と声が出てしまった。

自分の魔剣が少女を斬りつけたと思いきや、突如乱入してきた男が少女を庇い、斬られながらも自分を殴り飛ばした。

そんな簡単なことではしかない。そんなことはわかっている。分かっていても――。

「貴様、何をしている！」

――

叫ばずにいられない。

対して乱入者は、ゆらりと蜃気楼のように軸のないように身体をふらつかせて、一步踏み出そうとする。

だが上手く、その一步が踏み出せない。

簡単な筈だ。何の難しくもない筈だ。だがどういうわけか、そんな簡単な作業が難しい。

ズルリ、と軸がズレる。

斬られた左の肩口を乱入者――ユーキは見やると。

「あ――？」

大きく、大きく、これまた大きく――抉られていた。

少しでも気を抜けば、そのまま肉体がずれ落ちる。そんなような有様になっていた。

遅れて痛覚が走る。灼熱に身を焦がし、激痛が絶え間ない感覚で襲い掛かってくるのをぼんやりと他人事のように捉える。

傷口からは血液染みた、鮮紅色の光点を無数に撒き散らしている。

元から血の気が多いのだ、血を抜けばマシになるだろう。

そんなことを考えていると、これは血ではないと直ぐに顔を横に振り否定し、今度こそユーキは膝から崩れ落ちる。

――ああ、これはダメだ。

――痛みはどうとでもなる。

――こればかりは、ダメだな……。

それだけ考えると、ユーキは顔を後ろに向けた。

そこには守った対象——ストレアがいた。信じられないモノを見るような眼で、いやいやと現実を否定するように顔を横に振り震えながら涙を流している。

考えてみれば、これまで奪われるだけの人生だった。

事故で両親は奪われ、人並みの幸福を奪われて、自由という当たり前すら奪われた。

だがこうして、何者かに奪われる前に、守ることが出来た。自分のようなクソにとって、充分過ぎる最後だ。

満足するようにユーキは口元を緩めながら一言。

「——オマ、エは、逃げろ……」

そうして今度こそ、ユーキというプレイヤーは、茅場優希と言う人間は——生命活動を、停止した。

第13話 笑う棺桶 く転く

2023年7月5日 PM 22:20

第十八層 主街区『ユーカリ』 中央広場

「ねえねえ、アスナ！ 明日って空いてる？」

夕食を食べて、酒場で情報を集め、一緒に居たエギルさんと別れた帰り道。

わたしと一緒に帰路にっていた少女——ユウキが笑いながらそんなことを聞いてきた。

彼女の笑みは本当に人を元気にさせるモノだ。

同性のわたしから見ても、ユウキの笑顔は可愛い。人を明るくさせるような、暖かい太陽のような微笑み。

「何かあるの？」

「その、にーちゃんと一緒に買い物行きたいから一緒に付いてきてもらおうと思つて……」

わたしが知るユウキという少女は、人見知りをしない女の子。むしろ、人懐っこいと言つてもいい。

人との距離を詰めるのが上手い。そう言う意味では、ユウキとにーちゃんと呼ばれた彼——ユウキは良く似ていると言えるだろう。違いと言えば、笑顔という仮面を被っているか、被っていないかだけの違い。

だから、わたしは妙だと感じた。だって、理由がユウキらしくない。

「ユウキくんと何かあったの？」

「何も無いよ。何も無いから、気まずいと言うか……」

これまた、ユウキらしくない言い分だと思った。
何があったのかわからない。どこかに落ちつた所で座りながら事情を聞いたかった。

けど生憎、今は周りを見渡しても何もなかった。
なので、どこか開いてる宿屋に入って話を聞く、と提案するよりも早く、ユウキは、ポツポツ、と静かに言葉を紡いでいた。

「多分、ボクつてにーちゃんに嫌われてるんだ……」
「え——っ?」

その言葉は、耳を疑うには充分過ぎるモノだった。
あのユーキくんが彼女を嫌うわけがない。むしろ、距離感が掴めない
いと悩んでいたくらいだ。

何かの冗談じゃないか、とユウキの顔を見ても、どこか悲しそうで
今にも泣きそうであることから、冗談ではないということが分かる。
ありえない。

ユーキくんがユウキを嫌うということがあり得ない。
数ヶ月前まで、妹との距離感が掴めない、と真剣に悩んでいた。そ
れなのに、嫌うなんてありえない。

思わずわたしは、ユウキの言葉を否定するように首を横に振ってしま
う。

「いやいやいや、ありえないよ」

「だって、にーちゃんつてボクと喋っても笑わないし、途中で会話止
まっちゃうんだよ? 絶対に嫌われてるよ……」

「あー、そういう……」

つまるどころ、彼はまだ妹との距離を詰められないでいるようだ。
恐らく、彼は今だに悩んでいるのだろう。自分何かに可愛い妹が
出来て、なおかつ世話なんて焼いていいのだろうか? なんて思っ
てい
ることだろう。

いつもは即時即決する癖に、こう言う所は人に気を使い過ぎるとい
うか。不器用で変な所で真面目な彼らしい悩みでもあるし、何よりも
そう言うところが少しだけ「可愛い」と思ってしまうわたしは重症
のようだ。

自然と笑みを零してしまうわたしとは裏腹に、ユウキは頬を膨らま
せている。

「もー！ アスナ、ちゃんと聞いているのー？」

「ごめんなさい。聞いている、聞いているよ。大丈夫よ、ユウキくんはユウ
キのことを嫌っているわけじゃないから」

「そう、かな……？」

家族になつたとは言え、彼女はユウキくんと知り合って日が浅い。
ユウキくんの言葉は、他人を突き放す言葉であるし、乱暴な言い回
しを多く使っている。でも、その中には気を使っている感情もあるこ
とがわかる。

かと言って、付き合って日が浅いユウキがそれを汲み取るのは難し
い。

だからこそ、ユウキが不安に思うのはわかる。

不安そうにするユウキの両手を、わたしはなるべく優しく握りしめ
る。

ギユ、っと両手で包み込み、安心させるように。

わたしにはそれしか出来ない。

ここでユウキに真実を話すのは簡単だ。でもそれは、その場しのぎ
の解決法。

肝心のユウキくんがユウキとの距離感を把握出来ない、という問題
が解決したことにならない。

「大丈夫、大丈夫だから安心して？ ユウキが嫌われる理由なんてな
いでしょ？」

「……にーちゃんがこの世界から抜け出したいってこと知ってる。で

もボクは——」

「——悪くない、って思ってる?」

「……うん」

わたしの視線から逃れるように、眼を付してどこか気まずそうな表情でユウキは続けた。

「アスナ、ボクね? この世界が悪くない。ううん、好きになりつつあるんだ……」

「そうなの?」

「うん。確かにこの世界は怖いよ? HPゲージがなくなれば、現実世界のボクは死んじやうし、プレイヤーも良い人ばかりじやない。嘘ついたり、騙してくれる人もいる。怖いこともあったし、悲しいこともあった」

……どこか思い詰めたように、ユウキは語る。

そして、真つ直ぐな眼でわたしを見つめて、強い意志と共に言葉にした。

「でもさ、それだけじやないと思うんだ。ボクが今感じている風も、匂いも、街並みも偽物かもしれない。だけどボクはにーちゃんに出会えたし——アスナ達とも知り合うことが出来た。辛いことや嫌になることだけじやない、楽しいこと嬉しいことも、確かにここにあったんだ」

「……だからユウキは、この世界が好きなのね?」

ユウキは一度頷いて。

「でもにーちゃんは違うみたいなんだ。この世界から一刻も早く抜け出したい、そう思っている。だからボクを嫌ってるんじゃない——」

「——そんなことないよ」

思わず遮るように、反射的に口を出してしまった。

でも仕方ないと思う。だって、ユウキの言い分は違うんだから。

ユウキはこの世界が好きだと思っっているから、ユーキくん嫌われた、と言った。

そんなことあるはずがない。その程度で、ユーキくんが人を嫌う筈がない。……わたしの幼馴染は、いいや、わたしが好きになった人は、そんな小さい人ではない。

「ユーキくんはそれくらいじゃ、人を嫌いにならないわ。むしろ『生意気なヤツ。ンな下らねえ気を使ってんじゃねえよ』って怒ると思うの」

「……上手いね。にーちゃんモノマネ」

「当たり前よ。ずっと見てきたんだから」

似ている、と言われたのが嬉しかったらしい。

……自分でも、にやけていることが分かる。

「ユウキはユウキのまま振る舞えばいいのよ。ユーキくんに合わせても意味ないし、余計にユーキくんを怒らせるだけよ?」

「……凄いね、アスナは」

「え、どうして?」

「にーちゃんのこと、何でもわかってるみたいだもん。……ボクも、そうなりたくないなあ」

「簡単よ」

「ユーキくんは、分かりにくいけど分かりやすいから」

.....

2023年7月5日 PM 22:25

第十八層 丘の上

——茅場優希は生命活動を停止していた——。

それは比喩などではなく、事実である。

少年はストレアを、殺人鬼からの凶刃から守った。そしてその際、左の肩口大きく斬り抉られて、倒れ伏している。

元々、いつ壊れてもおかしくなかった。

この仮想世界であるはずのない『痛覚』があり、身を壊す程の心意を酷使し彼の身体は間違いなく壊れる予定であった。

何もかも溢れ落として、身体の中は足りないものばかり。ツギハギだらけの伽藍堂とも言えるその有様は、いつ崩れ消えてもおかしくなかった。

ただ、予定よりも早まっただけ。

優希が停止したのは、その程度に過ぎない。

故に、今うつ伏せで倒れている優希の身体は、抜け殻のようなものだ。魂の入っていない、ただの人形に過ぎない。

「なんで……？」

呆然と膝を付き、ストレアは消えていく優希の身体を見下ろしていた。

その紅い双眸からは、とめどなく涙が溢れ、両手は力無く垂れる。雨が振る。

先程の豪雨とは違う。ポツポツと力無く、取るに足らないモノであつたが、ストレアにとってそれは何よりも冷たかつた――。

「なんで……？」

優希の左腕が少しずつ、砂のような粒子と共に少しずつ消えて行く。

ストレアにとって、どうして彼が倒れて、消えるのかわからなかつた。

守ると決めた、死なせないと決めた、助けると決めた。なのにどうして優希が倒れて、自分がこうして生きているのか理解出来ない。

HPゲージも残っている、彼の身体も残っている。しかし、彼の身体が耐え切れない。幾度の無茶がここで限界を迎えた。

皮肉な話である。意思是折れていなかった、まだ戦うために一歩踏み出そうともしていた。しかし身体がついて来ない。

「おいおいおい、冗談じゃねえぞ……」

数メートル先で殺人鬼――POHが呆然と眩くがストレアは反応しなかつた。

彼女は優希の右手を両手で握りしめる。

かけがえのない宝物のように、大切に、大切に、握りしめる。

彼の温もりが消えていく。

自分の体温や、触れ合った時の暖かさが消えていく。

ストレアは彼と触れ合うことが嬉しかった。

自分はAIで人間ではないけれど、彼に触れた瞬間に何とも言えない暖かさを胸に感じていた。その度に、自分にも“心”という不確かなものが確かにある、と教えてくれていた。

でも今では――それを感しない。

――ああ、そうだ。

——アタシは、AIだった……。

——心なんてない、人間ではないモノ。

——でも、何でだろう。

——何でアタシは、こんなに苦しく。

——死にたくなつて——眼から涙を流しているのだろう。

最早、立つことも出来なかった。

ストレアは立とうとしても、グラリ、と身体を揺らして地面に再度膝を着いた。

立っていることすら苦しい、力が抜けるように、何もかもに絶望し無気力になるように、ストレアは力無く頭を垂れる。

身体の芯が次第に凍っていく感覚があった。

雨のせいではない。心が凍り、感情が凍り、何もかもが色褪せていく。

ガラクタのように、ストレアは自分自身で、身体が動かなくなることを自覚していく。

だと言うのに、彼女は抵抗をしなかった。

流れに身を任せて、全てを絶望に染めて、事の次第を成り行きに任せようとしている。

——アナタがいるだけで、幸せだった。

彼は嫌そうだったけど——

——アナタが笑っていて、嬉しかった。

笑みとはとても言えなくても——。

——アナタと共に歩いて、楽しかった。

ずっと前を歩いてくれていた——。

——アナタとずっと一緒に、居たかった。

一人の生命として扱い、真正面から向き合ってくれた——。

ストレアから見た彼は、誰よりも輝いていて、奇跡みたいに綺麗な存在だった。

だがそれを――。

「――それで、貴様はなんだ？」

――目の前に立っている男が、何もかもを奪った――。
その事実を静かに受け止めて、ストレアは静かに問いを投げる。

「……どうして、この人を、狙っていたの？」

「……ンなもん、簡単だ。コイツが俺だからだ」

殺人鬼は頭から被っていた黒ポンチョのフードを取り、素顔を曝け出して己の本心を暴露していく。

「俺は誰にも愛されずこの世に生まれた。いいや、愛されただろうさ。でもそれは“道具”としてだ。誰もこの“俺という存在”を見ようとしなかった。父親も、母親もな」

だったら、と言葉を区切り、心意によって赤黒く変色した魔剣の剣先を倒れている優希に向けて続ける。

「俺を愛せるのは俺だけだろう。だから俺はコイツを狙った。俺だけを見てもらおうと、俺だけ欲してもらおう為に、俺だけを愛せるように――！」

勝手な言い分であった。

自分しか見ていない、優希の事など考えてない。極めて自分勝手に、自己愛性に満ちた理由。

「ふざけないで……」

ここでストレアの身体に熱が――。

「ふざけないで！」

——熱が、蘇った——。

この世界に、彼がいけないのなら生きていても仕方がない。

だからこそ、彼女は何もかもを諦観し、考えることすら放棄し、己も死ぬことを観念していた。

だがこれはどうだ？

目の前の男は、彼を殺した殺人鬼は何を言った？

殺人鬼は彼と同じ存在だと言った。それは酷い侮辱であった。彼に恋をしたストレアにとつて、それだけは見過ごせない言葉を吐かれたのだ。ここで立ち上がらずに、いつ立ち上がるといふのか。

「アナタが——オマエが、この人と一緒にの筈であるものか！」

「あ？」

ストレアは立ち上がり、背に背負っていた両手剣を抜き放った。

心は折れたまま、心は冷え切ったまま、されど感情は爆発させて、殺人鬼を力いっぱい否定してみせる。

「この人はオマエとは違う。この人は他人を優先に動く人だ、自分第一で全てを犠牲にするオマエと一緒にするな！」

そうだ。

目の前の殺人鬼——いいや、男は何もかも自分優先に動いていた。

自分だけが楽になるために、何もかもを犠牲にして、自分だけが気持ちよくなるために動いていた獣に過ぎない。

自分を誰も愛してくれない、だから自分自身だけを愛する。という理論武装した男は、同じ世界に憎しみを抱いていた茅場優希を求めた。

一人だけでは嫌だから。偽物だらけの世界で自分一人だけでは我慢できないから安心するために。

「オマエは殺人鬼なんかじゃない。自分が犯した罪を向き合わない、ただの外道だ！」

「うるせえよ……」

「この人は違う。何をやったのかわからないけど、この人は自分の罪と向き合って、毎日苦しんでいた。ちゃんと自分の罪と向き合って、苦しんで悲しんで自分に怒っていた！」

黒ポンチョの男は歯を食いしばり、魔剣を握りしめる。その様子はまるで、感情を我慢するかのようでもある。

彼の中では今まで楽しく、「彼」と斬り合っていたのだ。それなのに、目の前にいる女が現れて何もかもを台無しにした。

更に、自分と「彼」は同じじゃないと訴えてくる。最早、黒ポンチョの男は平静でいられなかった。邪魔者を一刻も殺してやりたい、そんな感情が黒ポンチョの男の胸中を渦巻いている。

しかしそれを言うなら、ストレアも同じである。

目の前の外道がいなければ、「彼」が倒れていることもなかったのだから。

「だから、オマエはこの人と同じじゃない。正反対の人間だ。この人は罪を受け止めて、オマエは受け止めない。この人は苦しんで、オマエは笑っていた。オマエは——自分の罪から逃げていただけだ！」

「うるせえって言うてんのが聞こえねえのか、クソアマあ！」

怒声が飛ぶと同時に、黒ポンチョの男から衝撃が空気を叩いた。

赤黒く変色していた魔剣——

——友切包丁は更に色濃く染まり、

今では黒く変色している。

苛立ちを抑えきれず、感情を爆発させたままP.O.Hは魔剣の剣先を

ストレアに向ける。

「もういい——貴様は死ね」

「うるさいよ。オマエはアタシが斬る。今、ここで——！」

「その言い回しも癪に障る。俺の恐怖のようなことを言いやがって、貴様も俺が殺していった糞袋共のように養分になりやがれ——！」

そうして二人は激突——。

——しなかった。

二人は、ビタツ、と身体を停止する。

それこそ、一時停止ボタンを押したように、二人は示し合わせたかのように、急に動きを止めた。

音が、音が聞こえた。

音はP o Hの前方から、そしてストレアの後方から。

その音はまるで、地面を削るような、その下にある世界そのものを削るような——指が地面を削っていく音であった。

右手の五指に、確かな力が籠っている。

身体の崩壊はいつの間にか消えており、伽藍堂と化していた身体には魂だけが芽生えていた。

身体に芯が通っていないような、存在が不確かな状態のまま、*“彼”*は蜃気楼のように、ユラリ、と立ち上がる。

*“彼”*は確かに死んでいた。生命活動を停止して、このまま消えるだけの存在であった。

だがそんな理を破壊し、運命すら捻じ伏せて、*“彼”*は世界に存在を知らしめる。

ストレアは後ろを振り返る。

もう向き合える事が出来ない存在であつた。だがこうしてそれは確かに存在する。

凍てついていた心が熱を取り戻して、感情が歓喜に湧き上がり、体温が熱を上げる。

“彼”の名は、再起動した彼の名を――。

「――ユーキ……！」

涙を零しながら、発した言葉には狂おしいほどの愛情が籠っている。

“彼”――ユーキは再び、この世界に帰還をはたす――！

第14話 笑う棺桶 く結く

2023年7月5日 PM 22:46

第十八層 丘の上

ミシリ、と身体を軋ませて、ユーキは確かにその両の足で立っていた。

現在でも彼の身体は大きく挟られ、左腕は斬り落とされている。

左眼の視界もボヤケていけば、今度こそ右眼の視力も消失してしまつたようだ。現状の少年は、何もかもを抜け落ちて辛うじて立っている状態。

少しでも気を抜けば、膝の力を失い地面に崩れ落ちることだろう。とても戦える状態とは言い難い。

自分自身の体重すらも満足に支えられずに、眼球の焦点も合つておらず、不規則にグラグラと揺れる。

しかし、その蒼い双眸はしっかり眼前の敵へと狙いを定めている。重力にすら負けそうな、己を支えきれしていない。肩で息をしてかろうじて立っているユーキを見て、POHは漸く笑みを零した。

悪意に満ち歓喜するような、自分勝手な笑みを携えてユーキを両手を広げて歓迎していた。死んだと思っていた想い人が、こうして再び蘇つたのだ。彼の歓喜もひとしおであろう。

対するストレアも同じような感情であった。

歓喜がある、愛情がある、安堵がある。違ふとすれば、その姿に対する印象だろう。

今のユーキはお世辞にも『カッコイイ』姿ではない。むしろ見窄らしく、痛々しく、無様で、見るに堪えない姿であろう。現に、POHですら『無様』と称するほどのものであった。

しかし、ストレアは違ふ。彼女の胸中にあるのは、『憧憬』であった。

狂おしいほどの尊敬と、こうありたいという憧れ。

今にもユーキは死にそうな姿である。ゴミクズのように、ボロクズのように、今にも消え入りそう痛ましい姿であった。

だがそれでも——彼は立ち上がった。

勝算などない、勝ち目もない。

それでもユーキという人間は立ち上がる。

「ストレアの前に立ち、まるで彼女を『守る』かのように。そうだ。

いつだって、いかなる時だって、どんな状態であろうが。

少年は変わらない、ユーキはいつだってこうして——他人を守ってきた。

そんな彼に、ストレアは憧れて、惹かれていったのだ。そんな彼をどうして『無様』と蔑むことが出来ようか。

「ヒヒヒ——」

P o Hは嗤う。

ユーキの無様さを、ユーキの健気さを、ユーキの生き汚さを。

全てが愛おしく、全てを受け入れるかのように、両手を一杯に広げながら笑みを零した。

「ああ、嬉しい。俺は嬉しいぜ、俺の恐怖……。よく立ち上がってくれたな、よく立ち上がってくれたよ。俺は思わずイッチちまいそうだ……」

彫りの深い顔は更に深く、笑みは益々深めていった。

彼の言葉は、完全にストレアを素通りして、自分と対峙しているユーキにだけ投げつけている。

「本当に最高だよ、この時この瞬間、この展開以上のことは生きている中で出会えないだろう。何せ貴様の命は、運命は、今正に、俺が！」

握っているからなあ！」

「そう、思うか……？」

「おいおい、まさか俺に勝つつもりか？　今の貴様が？　この俺を？」
肩をすぼめて呆れるその言葉は「その見窄らしい姿で何ができる？」と暗に語っていた。

それにはストレアも同意見である。

多くの人間を観てきたストレアだからこそ、この世界を知り尽くしているAIだからこそ、わかることがある。

——立ち上がった所で、ユーキの身体は数分と持たない。

中身は完全に抜け落ちており、あとは消えるだけの身。

今のユーキは吹けば崩れてしまう、少しの風も、微弱な波にも耐えることの出来ない砂上の城に過ぎない。

ならばストレアの取る行動は決まっていた。

守られるのではなく、守る。

背に背負っている両手剣を引き抜き、少年の前に立ちふさがる。今度こそ守る為に、少年を救うために。

しかし少年は右手を、ギチギチ、と動かすとストレアの行動を制した。

下がっている、と行動のみで語ったユーキは、そのまま続けた。

「一つ、聞かせろ」

「なんだ？」

「何を思っ、テメエは人を殺してんだ？」

もはや時間すらない、ユーキは至極当然の疑問を口にする。

口から言葉を紡ぐのも苦痛であるのか、その声は重々しいモノであった。

その問いが予想外だったのか、POHは少しだけ眼を丸くさせて、一瞬だけ考えると。

「考えたこともねえな」

魔剣を弄びながら、詩を送るようならつらと、眼の前の愛しい少年に己の思考をつらつらと彼は語りだした。

「生きるために殺したのが最初だ。だがここに来てからは、八つ当たりだな」

「……………」

「考えても見ろよ？俺は、俺だけがこんなに苦労してんのに、どうしてここにいる日本人共はのうのうと生きいやがるんだ？どいつもこいつも、争いを知らねえって面をしてやがる。生きるか死ぬか、なんて経験をしたことがねえって呑気な面をしてやがる。だからムカついたし、だから殺してやった」

あまりにも身勝手に、あまりにも理不尽な理由であった。

同時にストレアは、ビクツ、と身体を震わせる。

その理由は明らかに逸脱しており、ユーキが怒るのには充分過ぎるモノである。

ならば少年は力を振るうだろう。怒りを力に変えて、自身すら焼き尽くす『黒炎』を噴出させて、力を炸裂することだろう。

そうなってしまえば、残り少ない余命は削られる。ストレアが『助ける』ことすら困難になってしまう。

しかし――。

「安心したよ。やっぱり、テメエは斬ってもいい――畜生だった訳だ」

静かに受け止めていた。

あまつさえ、口元には若干の笑みを零して。

「……オレの後輩に、こんなやつがいる」

「あん？」

「そいつは何かを守る為に、人を殺したんだ。どうようもなかった、そうしなければ誰かが殺されていたかもしれない。アイツは、人を守る為に、人を殺した」

「貴様、何を言っている……？」

「だがそいつは、今も苦しんでいる。テメエやオレのような殺されて同然だったクソを殺して、自分が悪いって今も苦しんでんだ……」

その言葉の意味はストレアが理解して、P O Hにも意味がわからな
いものだった。

どうしてこの状況で、この場面において、少年は穏やかな口調で、そ
んな言葉を吐き出すことができるのか、理解が出来ない。

しかし状況は進む。

彼が理解が出来ないまま、ユーキは続けた。

「声が聞こえた」

「貴様……」

「それはガキの声だった、男の声だった、女の声だった」

「待て、貴様……！」

「どいつもこいつも叫ぶんだ。死にたくないって、痛いって、怖いっ
て、無数に叫びやがる」

ここでP O Hだけが理解した。

この少年は、自分など見ていないということ、P O Hだけが理解
した。

先程、P O Hは問うた。そんな姿で、勝ち目はあるのか、と。

それこそ間違いだった。最初から眼中にない、だから勝ち目など考
える必要もない。

ユーキの言葉の意味。

それが意味するのは、P O Hにとって残酷で、絶望するに値する意

味である。

P O Hは継るように、振るえる声で呆然と声に出した。
そうだ。

このユーキは最初から――。

「――貴様は俺を……」

「テメエは斬る。必ず斬る、絶対に斬る。テメエが奪った毎日を通じて
す筈だった奴らの為にも、そんなモンすら手に入らなかった奴らの為
にも――テメエは必ず、オレが斬る」

「俺の為に立ち上がった訳でもなく、俺を見ているわけでもねえのか
――!?」

「馬鹿か、テメエは」

ここで本当の意味で、ユーキはP O Hという存在を認めた。

道端に転がる石ころを見るように、邪魔だから蹴り飛ばす程度のモ
ノをみるかのように、侮蔑しきった眼と声で彼の想いに答えた。

「――視るに及ばず。テメエなんざ、眼中にねえんだよ」

「――」

瞬間、突き刺さるような殺意がP O Hから炸裂した。

睨みつけただけで殺しそうな視線で、ユーキを睨みつける。

黒く変色した魔剣は、更に黒く。墨よりも黒く、闇よりも黒く。
P O Hの絶望に呼応するかのように、更に変体を遂げていった。

「つてことだ。オマエはさっさと逃げろ」

「え?」

ユーキは振り返らずにストレアに話を振った。

突然話を振られたストレアは思考が追い付かず、変な声を上げる。

「え、じゃねえよ。逃げろって言ってたんだが？」

「で、でも……！」

「アナタを置いていけない、という言葉が続くことはなかった。

振り返らず右手の人差し指を上げて、口を閉じさせるようなジェスチャーをしながらユーキは続けた。

「あのクソ虫はオレが連れて逝く。スクラップ同然の身体だが、その程度のことでは出来んだろ」

「……アナタはどうするの？」

「言ったら、野郎はオレが連れて逝く」

帰りなど気にしていない片道切符。行き先は勿論、地獄。それこそ自分に相応しい、無様に果てるのが報いだ、と言うかのようにユーキには戸惑いがなかった。

だからこそ、なのだろう。

自分が死ぬと理解して、どうしようもない結末を受け入れることで、彼は穏やかに敵と対峙することが出来た。

ある種の悟り。死ぬ運命を受け入れることで、ユーキの心は平常心を保っていた。

「野郎を斬る、それこそがオレの最初で最後の功績ってヤツだろう。野郎を斬れば、PKなんてバカげたことをしでかすクソツタレはいなくなるだろうさ」

「……」

「その後は、キリトに任せる。攻略するもよし、このままこの仮想世界で暮らすもよし。過ぎ去るオレがとやかく言える義理はない」

「アスナとユウキはどうなるの？」

その言葉を聞いて、ユーキは一瞬だけ肩を震わせて。

「守りたかった女を残して、やっと出来た家族すら残して、オレは逝く。……もう、謝るしかないな。いいや、謝ることも出来なくなるが」

「後悔しているの？」

「いいや。ただ、未練はある。悪いが、アイツらには謝っていてくれや

——」

「それは——」

ストレアは遮ると。

「——アナタが、ちゃんと

謝って」

強く、優しく、愛しそうに、背後から抱きしめた。

何をしている、と問いを投げる間もなく、ストレアから光が放たれ、辺りの闇を照らし始めていた。

同時に、ユーキには奇妙な感覚が襲う。

身体に流れてくる。途方もない情報量が渦となり、塊となり、帯となり、余すことなく尽くがユーキの中へと入り込んできていた。

こんなことが出来るのは一人しかない。

抱きつかれたと同時に、不可思議な現象は始まった。でるのなら、原因は一つしかない。

首だけ動かして、背後で抱きついていて原因を視界に収める。

視力の戻った右眼が、ストレアの存在を収めた時には——彼女
は満面の笑みを浮かべていた。

「オマエ、何を……」

「……アナタの身体はボロボロで、中身も全て抜け落ちている。あとは自然消滅するしかなかった」

「そうだ、だから——」

「——そう、だからアタシが埋める」

それこそが、ストレアの出した結論だった。

中身がなくて消滅するのなら、何かを埋めればいい。身体を構成するリソースが致命的に欠けているのなら、何者からか補えばいい。

ストレアにしか出来ない救済方法。

ソードアート・オンラインというゲームの中に存在するAIだからこそ出来る。

「……良かった。これなら、何とかなるね」

「オ、マエ……！」

満足気に笑みを浮かべるストレアに対して、ユーキは悔しそうに奥歯を噛み締める。

これで二度目だ。

一度目は両親に、二度目はこうしてストレアに。他者の生命を犠牲にして、再び生き永らえようとしている。

ユーキにとって、茅場優希にとって、それは最大の禁忌であった。自分のような人間が生きるべきではない、と一度目で痛感した筈が、こうして繰り返している。

悔しそうに、何よりも泣きそうになりながら、ユーキは想いの丈をぶつけた。

「何でだ、何でだよ！ どいつもこいつも、オレなんぞの為に命を捨てやがって！ 自分が生きること考えろよ、オレに命を与えるなよ！

オマエらが生きたほうが良いに決まってるだろ！」

「そんなの、決まってるよ……」

左眼の視界が回復した。

今度こそ、その双眸で、ハッキリと。ストレアの姿を、蒼い両目が

捉えた。

彼女は――満面の笑みを浮かべて。

「そんなの――アナタが好きだから決まってるじゃない」

もはや彼女の姿は半透明となっており、実体が消失しかけている。当然だ、彼女を構成するPCデータの大半は、今やユーキの身体の中へと流れている。それこそが彼女の望みであり、彼女が唯一持つ願望であるのだから。

「手、握って?」

「……ああ」

「うん、ありがとう」

首に抱きしめられていた手を、ユーキはギュツと握りしめる。

感覚を忘れないように、彼女の存在を刻み込むように、右手と再生された“左手”の両の手で握りしめる。

「暖かいね、アナタの手って」

「そうか……」

「うん。……アタシね、カーディナルがどうして死を選んだのかわからなかった。だって、死ぬって怖いもん」

ユーキには答えることが出来なかった。

何せ彼女にこうした決断を下させてしまったのは、少年自身であるのだから。

そんな諸悪の根源、全ての元凶である自分が今更何を言えば良いのか、ユーキは自分に苛立つように奥歯を噛み締める。

対して、ストレアは困ったように笑みを零した。

もはや彼女は既に、ユーキと一体になりつつある。少年の複雑な思考が手に取るようにわかっていた。

少年はいつだって、いかなる時だって、原因を他人に向けることはしなかった。

そして今も、ストレアが犠牲にするのは自分のせいだ、と怒りを憎しみを自分に向け続けている。

「でも、死んで怖いだけじゃないんだよ？ 誰かに託して、誰かが受け継いで、生命って巡るモノだから。そうして人は今日まで生きてきたし、アタシ達 AIが出来てくくらい繁栄することが出来た」

「……」

「アタシがアナタの為に犠牲になったって思ってるみたいだけど、それは違うよ。アタシは犠牲なんかじゃない、アタシはアナタに生きてもらいたくて、託すの」

だから、と言葉を区切り優しい笑みを浮かべて、ストレアは誰よりも人間らしい言葉で紡ぐ。

「——アタシのPCデータを全てアナタに託します。生きて生きて、生き抜いて。かつこ悪くても良い、無様でも良い、生きて下さい。そしてみんなを、助けてあげて下さい」

「オレなんぞに、そんなことが……」

「出来るよ。だって、アナタはいつも他人の為に行動していた。自分が傷ついても気にしないで、ずっと他人に手を差し伸ばしていた」

「アナタは、アタシの——ヒーローなんだから……」

それだけ残して。

彼女は消えた。

文字通り、痕跡すら残さずに。

AIである彼女は、誰よりも人間らしく——消えた——。

.....

剣を握り、眼の前の「影」を睨みつける。

—— イメージするのは剣を持っている自分自身——。

—— 怒りのまま振りかぶり、目の前にいる影を切り捨てる——

—— 斬る度に、返り血を浴びる——。

—— それだけで、力が湧いてくる——。

—— 怒りはとどまることを知らない——。

—— 返り血浴びる毎に、力が湧き出てくる——。

—— そうして、ユーキは力を引き出してきた。

「影」を斬り、返り血を浴びて、その度に憤怒が湧き上がり、憎悪を燃え滾らせて、黒き炎を撒き散らしながら敵を斬り捨ててきた。

V R 実験のときも、モンスターキラーと対峙したときも、黒ポンチヨの男を切り飛ばしたときも、フロアボスに挑むときも——キリトと剣を交えたときも、こうして力を引き出してきた。

—— その行為に迷いはない。

力を引き出すという点においても、この方法は手っ取り早いし何よりも——自分自身が望んでいることだ。

「.....」

あの「影」を斬る。

—— それこそ八つ裂きし、細切れにし、全てを引き裂いてやりたい。

—— そんな願望が、ユーキの胸中を渦巻いている。

「影」を直視することすら悍ましい、存在を認める行為こそ汚らわ

しい。

突き刺し、抉り斬り、振り切る。一刻も早く、あの「影」を引き裂かなければならない、茅場優希はあの「影」を何よりも速く、早く、疾く、斬らなければならぬ。

だが――。

「――」

一向に剣を構えない。

耳に入るのは女の声。それは違う、と。アナタは自分を許して良い筈だ、とずっと訴え続ける女の声。

それが誰かなど、ユーキも「影」も問うつもりもなかった。

己に命を預けて、生命を託した、AIの癖に、誰よりも人間らしい女の声を忘れる筈がなかった。

「……おい」

「――」

「影」に声を投げる。

苛立ちを隠すことなく、憤怒の眼で睨みつけて、憎悪を感情に籠めて、ユーキは続けた。

「力を、貸せ」

「――」

あの「影」はユーキ自身だった。

彼の心の闇が具現化した存在、生き残ってしまった彼が罪悪感が力タチとなって生まれた存在。

本来であれば有無を言わずに斬り捨てる存在だ。

現に、ユーキはアレが自分自身であると理解した上で、今まで斬り続けていた。何度斬っても止めない。返り血を浴びようが、無残に転

がろうが、斬り続けて刺し続けてきた。

だがここに来て、ユーキは己の闇を直視して、対話することを選んだ。

「オマエにとつても、それだけはしたくないだろう。オレもオマエなんぞに求めたくない。だが、状況が変わった」

「オレはオマエを斬ることで、オマエはオレが自滅する顛末を見て、お互い望み通りの結末を迎える筈だった。だからオレ達は協力し合ってきた」

「それこそが、オレとオマエの共通の見解だった。オレのようなクソは死ぬべき、その一点のみでオレ達は協力し合う事が出来た」

「だがそれじゃ、ダメだとき。自分の命すら使ったアイツの為にも、オレもオマエも生きなければならない」

だから、と言葉を区切り少年は視るのも悍ましい自分自身に手を伸ばす。

それは緩やかで、攻撃の類ではない。
そして間を置かずに。

「影」も手を伸ばす。

ユーキが「影」自身であるのなら、「影」もユーキ自身である。答えは既に、決まっていた。

問答の余地なく、選択肢など存在しない。

ユーキの為ではない、自分達のために生命を使った愛すべきバカの為に、彼らは協力し合うことにした。

だからこそ、握手ではない。

対等などではない、ユーキも「影」も、己が最も嫌う自分自身である。

だからこそ、握手などしない。出来よう筈がなかった。

ユーキの差し出した右手に対して、「影」は左手で、パンツ、と大きな音を立てて弾いてみせた。

目の前になる人間の右手を粉々に砕こうとするかのように、思いつきり「影」は叩く。

対する、ユーキの顔は無表情を保っていた。

ビリビリと衝撃が走る右手を見て、握り締めて——「影」を殴り飛ばしながら一言。

「——上出来だ」

『行こうよ、アナター！』

嬉しそうな声が、聞こえた気がした——。

.....
.....
.....

「何が、起きた……？」

ユーキを中心に発光したと同時に、轟、と音を立てて衝撃が空気の壁を叩いていた。

あまりにも不可解な現象すぎて、直前まで抱えていた絶望すら消し飛ばされ、P・O・Hは状況を把握することに全力を注いでいた。

とは言っても、彼の理解を遥かに超えている。

恐らくユーキが何かしたのは予想ができる。しかし問題はその後。少年が何をし、これから先何が起きるのか、P・O・Hには全く想像が付かなかった。

それはまるで「恐怖」だ。何も知り得ない未知だからこそ、人は恐れる。正体不明であるが故に、人は怖れる。

しかしその「恐怖」も長く続かない。

一際眩しく発光し、一際激しい衝撃が空間を走る。

いつの間にか——雨は止んでいた。

突風も止んでおり、無風状態。

その中で、超然と、立っている少年の姿。

斬り落とされた左腕はいつの間にか再生しており、大きく抉られていた傷も無くなっている。

五体満足。

数分前まで死にかけていた者と同一人物とは思えない。

何よりも——。

「貴様、誰だ……？」

——気配が違った。

その姿を認めた瞬間、P・O・Hは自身の身体に妙な違和感を覚える。身体は冷えており、指先には痺れがある。心臓を直接握られたかのような息苦しさがあり、額には発汗。

「恐怖」を振りまいている訳ではない。

あれはそう、「威圧」だ。静かにただ静かに、視線すら合わせずに

その場所に居るといっただけで、P O Hは少年に威圧されていた。何もかもが違う。

自身を知る『アインクラッド恐怖』と何もかもが違う。ただ恐怖を振りまき、抜き身の剣であった少年とは、何もかもが違った。

あんな人間、P O Hは知らない。

アレは真正銘の怪物だ。力という力をヒトの形に圧縮し圧縮され尽くした存在、研ぎ澄まされた暴力、完成された兵器。そんな少年など、P O Hは知らない——。

「おいおい、冗談だろ……」

呟いて、彼は額の汗を拭う。

背骨から蜘蛛が伝うような、芯から冷え内蔵に染み入る寒気がある。

それが吐き気である、と彼は数年ぶりに思い出す。

と、そこで——少年は動いた。

同時に、P O Hは脱兎のごとく飛びながら後退するが、少年は今だにP O Hに意識を向けていなかった。

少年は無造作に歩を進める。

雨でぬかるんだ地面の泥を、グシヤ、と音を立てて踏み潰していく。少年が用があるのは、P O Hではない。

地面に突き刺さっていた自身の愛剣——『アクセル・ワールド』であった。

引き抜いた。

刀身に付いていた泥は滑るように、重力に逆らうことなく地面へと落ちていく。

片手では扱うことすら難しい重量であるソレを少年は片手で難なく引き抜いて——両手でギユツと握り締めた。

一振り二振り、思いつき振り振って一言。

「——悪くない」

瞬間、少年の身体から、両手剣から「炎」が噴き始めた。

その炎こそ、少年の心の象徴。己すら焼き尽くす程の怒りと憎悪の結晶。それこそが少年の力の正体であり、根底にある心の闇、自壊する程の心意であった——答だった。

「おい」

P o Hはその炎を見た瞬間、呆然と眩く。

信じられない、そんな表情で顔を横に振って否定しながら。

「何だよ、その色は……」

「……………」

見向きもせずに、答えない少年に、感情が爆発する。

P o Hは表情も声も荒立てながら、再び大きく叫んだ。

「なんだよその——炎の色はよお！」

其の炎は、「黒」ではなく「蒼」。

闇よりも黒い炎ではなく、光よりも輝かしい蒼。

それが少年の変化。

闇そのものを爆発される自壊する暴力ではなく、闇をも喰らい溶かし己の意思で制御する、精神の変異。

ここで漸く、少年——ユーキはP o Hの存在を視界に収めた。

右眼は蒼く、左眼は——紅い。先程まで蒼かった左眼、まるで蒼い炎に呼応するかのように、その瞳の色も変色していた。

「ンだ、その眼の色は、あの女のようにじゃねえか……！ 違う、違うだろう！ 貴様の力は違う、そんな色じゃない。俺のように闇である筈

だろ！」

何があった、この短い間に、衝撃と発光で眼を眩んでいた間に、ユーキに何があった。

もつと自分達は、どす黒いナニかであった筈だ。闇そのものであった筈だ。

だが今のユーキは違う。

それはまるで——『はじまりの英雄』のように何者かを救う光であるかのようにであった。

POHは今までを回想し、不愉快げに眉を吊り上げた。

彼は今までユーキがいた場所を一瞥した。それは数分前に、乱入者がいた場所。招かざる客、彼女がいなければ今の状況になつていなかった。

まだユーキと殺し合いをしており、生きる実感を感じさせられ、彼の心の闇の象徴たる「黒炎」を味わっていたことだろう。

アレが現れたから、全ての予定が狂った。

「あの、女か……！」

吐き出す言葉には、怨嗟が籠っていた。

静かな声で、ユーキは肯定した。

「そうだ。そして、テメエを追い詰めたのも、アイツの功績だ」

その言葉に、POHは瞳を細めた。

あの女が障害となった、とユーキは確かに言った。

そんなことなど、ありえない。

あんな女に、自分と少年の殺し合いを邪魔だけした女が、障害となることなどありえない

いつだって、自分に立ち塞がってきたのは少年である。断じて、あの女ではない。とPOHは否定した。

「あんな奴が、俺を追い詰めた？ 冗談にしちや笑えねえな？」

「癩に障ったか？ だが事実だ。テメエは、アイツに、負けたんだよ」

そして、ユーキは一步だけP O Hに向かって前に出る。

その足捌きはあまりにも自然で、P O Hは反応が出来なかった。

やはり、何もかもが違う。

P O Hは両手剣を片手で持っている少年を見つめた。

先程まで、少年は憤りを隠していなかった。

戦うために、対等に渡り合うために、P O Hは関係のない人間を殺害して、魔剣の性能を極限まで高めてきた。更にその魂を魔剣に留ませる為に、心意に目覚めて魔剣を作り変えた。

全ては少年の為に、己という存在を認めさせるために、P O Hは今まで行動してきた。それこそがP Kであり、笑う棺桶ラフィンコフィンの結成であり、今である。

そんなP O Hを許せない、と。

無垢な連中の為に、少年は一度死んだにも関わらず生き返ってきた。

だというのに、今、目前に居る相手と先ほど対峙していた少年が同一人物なのか、P O Hは疑問に思っていた。

蒼炎を刀身に纏わせて、ユーキは構わず歩いてくる。

一步も動けないP O Hとは違い、その歩調は散歩をするかのような気負いのない、その中で退屈そうに少年は続けた。

「テメエがそこに『居る』ってだけで虫唾が走る。我慢が出来そうにない」

「ソレじゃ何か？ 貴様は俺を殺すつてことか？」

P O Hの軽口に答えずに、ユーキの歩みは止まらなかつた。

二人の間合いが段々と狭まっていく。

数十メートルあつた距離は、既に八メートル弱まで狭まっていた。

一息で詰めることの出来る。

そこで、ガチャ、とユーキの持つ両手剣から重々しい音が鳴る。それまで緩く握っていた剣の柄を、強く握り直した音だ。

「ハッ、馬鹿を言えよ」

ユーキは小馬鹿にしたように鼻で笑いながら、今まで片手に持っていた剣の柄を、そつともう一つの手を重ねた。

右手は力強く握り、左手も同じくらい強く握る。

両手剣を構える。

一番しつくりくる構え。剣先を天に向かって、柄を顔の横に。その構えはまるで示現流という古流剣術の構えに似ており、一撃に重きを置いている構え。

「命を奪うってことは、その命を背負うってことだ。誰がテメエなんぞの命など背負うか」

「それはつまり——」

「——背負う価値もない。一瞬で死ぬると思うな、生きて地獄を味わう。それがテメエの末路だクソ野郎」

今まで鋭いだけだった威圧が、明確な刃となり殺人鬼と呼ぶに相応しくない輩の全身を貫く。

これこそが、今まで殺された人達への感情。

それが引き金となった。

POHは口を開けて、涎を垂らしながら、獣のようにユーキへと距離を詰める。

ユーキは変貌を遂げた。

彼からしてみたら、その変貌は墮落と映る。アレほど深かった黒炎は視る影もなく、見るに堪えない蒼炎が少年の身体に纏わせている。それがP O Hにとって我慢が出来なかった。自分と同じ存在が墮落した、であるのならこちら側に引き戻す。

しかし、確かな寒気がある、吐気がある、得体の知れないナニかがユーキから感じる。

だがそれでも——P O Hはユーキに敗れる事がないと、断言していた。

今までユーキは命のやり取りを経験してきた。

しかし経験値が違う。P O Hは生きるために、殺してきた。それは現実世界でも仮想世界でも変わらない。常に彼は幼い頃から、命を奪ってきた。

変貌など瑣末なことだ。

感情の変化などで、個人の力量は変わらない。

極めつけに心意である。

ユーキは心意を完全に制御し、己を自壊させることなく力を十全に振るうことが出来ている。

だがその程度。心意はP O Hも使いこなしているし、負ける要素など見当たらない。

故に、P O Hがユーキに負けることない。

今もこうして、P O Hの方が早く反応し、行動に迷いなく、篡奪者のように迷うことなく行動する。

思考と行動と殺意にタイムラグはない。標的を定めて、駆け出した瞬間に、ユーキの敗北は決定的な瞬間となった。
だが。

P O Hは見た。

自身の行動よりも遅く動き出した少年が、自身の行動より疾く活動する異様さを。

ありえない。

ありえない。ありえて良いはずがない。

どう言う理屈なのか、どういう道理なのか。

どうして自分よりも――。

――何故貴様が、俺よりも疾く――！

驚愕と同時に、身体が反応していた。

P O Hは殺意を抑えて、距離を開けようと後退することを選ぶ。

一度距離を取って、相手を観察する。

その判断はあまりにも的確なもので、その行為は最善と言えるものだ。

しかしそれでも――ユーキの疾走には遅すぎた。

両手剣は振り上げたまま、文字通り「弾ける」ように、少年は距離を詰めていく。

間合いに入ると同時に、無慈悲に両手剣は振り下ろされた。

それは閃光と錯覚するかのような速度。上段に掲げられた剣は、ソレ以上の素早さで振り下ろされた。

対して、P O Hは自身の背筋が凍りつくのを感じる。

刃など見えない。蒼炎が剣の軌道を描きなら、振り下ろされている。

彼は知っている。

その一撃がどれほど重いか、一度身体に味わっている身だ。そんなもの嫌でも理解していた。

同時にわかっていることがある。

アレには二撃目はないということ――。

――だったら、一撃は貴様にくれてやる。

――受け止めて防ぎ、麻痺毒が塗っている投げナイフを突き刺す。

――それで貴様は、終わりだ………！

魔剣を構える。

——振り下ろす蒼炎を纏った両手剣は、容易く魔剣を砕いた。
投げナイフを持った。

——そこで、ユーキの動きが止まった。

投げナイフを突き刺す。

——しかし。

「なっ……!?!」

何故かP O Hの身体が——後方へと斬り飛ばされていた。

その胸部には、大きな斜めに斬ったような斬り傷。

あり得ない一撃。

思考が一瞬だけ停止すると、彼は確かに見た。

振り下ろされていた筈の両手剣が、何故か「振り上げられていた」
ことを。

簡単なことであつた、難しいことではなかつた。振り下ろした一撃
に間髪入れずに——二撃目を放つただけに過ぎない。

防御されたところで、両手を使えるユーキに関係がなかつた。受け
たところで、躲したところで、逃げられたところで、関係がない。

必ず、斬る。

絶対とも言える強い意思が、P O Hを逃しはしなかつた。

一瞬ともいえる攻防。

たった二合。されど二合。

戦いは、終わった——。

.....
.....
.....

月明かりだけが、生きているようだった。
泥まみれになりながら、敗者は倒れている。
無様なものだ。

しかしそれも、当然の結末と言えるだろう。
彼はこれまで、自分の為だけに命を奪ってきた。奪い食い散らかし、次の命を食い物にする。

そこに追悼の意思はない。
人が生きるために食事するように、彼は自分の“当たり前”をこなしてきた。

当たり前のように殺し、当たり前のように篡奪し、当たり前のように踏み躪る。故に、彼に後悔はない。人として明らかな欠陥、善性と呼ばれるモノが欠落していた。

そのあり方が、勝利者——ユーキにとって何よりも許せなかった。

少年は侮蔑しきった声で問いを投げつける。

既に蒼炎は纏っておらず、その両眼も元の蒼い双眸へと戻っていた。

「これで終いなわけだが、これで満足かクソ虫」

対する敗北者——POHは倒れたまま、クツクツ喉を鳴らしながら笑みを零していた。

満足、しているようには見えない。むしろユーキのあり方を滑稽と嘲笑うような調子で、彼は口を開く。

「貴様、敢えて俺の武器を狙ったな？」

POHの問いに、ユーキは答えない。

「甘いヤツだ。今の貴様ならば、俺を武器ごと斬って殺すことも出来ただろう。それをやらない貴様は甘すぎる。これで終ると思ってるのか？俺を牢獄に入れて、これで俺が止まるとでも——」

「言った筈だ。テメエの命なんぞ、背負う価値もねえんだよ」

遮るように、ユーキは事実だけを伝える。

「これで終わりだ。テメエは牢獄で、退屈に殺される。だがただで死ぬると思うな、テメエが殺した連中が許さない、残した連中が許しはしない」

「ああ、だから貴様は俺の武器を狙ったのか。俺に囚われていた、取るに足りないプレイヤーの魂を助ける為に」

正義の味方気取りか、と口元を歪めて。

テメエの敵ってだけだ、と空気を漂わせる。

二人のプレイヤーはお互いの顔を見なかった。

一人は見たくても見れない有様で、一人は見る価値もないと彼方へと視線を向けている。

POHは悪意に満ちた笑みを浮かべたまま、ユーキは星空を見つめたまま。

「それが貴様の覚悟か。殺す覚悟ではなく、殺さない覚悟——」

ギチギチ、と身体から軋みを上げて、POHは立ち上がる。

顔には泥が付着しており、黒ポンチョの格好はボロボロ。胸元には大きな抉り斬られたかのような、大きな傷がある。

彼の生命線ともいえるHPゲージは、1ドットだけ残されており、何もすることが出来ない。

加減をされたのは、明らかであった。

「——そうだな、殺すのに覚悟はいらない。引き金を引けるかどうか。単純で、簡単な話だ、人つてのは直ぐに殺せる。本当に難しいのは、直ぐ死ぬ人間を生かすことだろう」

喝采するように、彼は力いっぱい両手を広げる。

そして一步、また一步。ふらつきながら、一步ずつ着実に、後退していく。

その先に有るのは——。

「ならば、俺は——貴様の覚悟を嗤ってやる」

——崖であった。

高低差はゆうに数百メートル。落下してしまえば、先ず命はないだろう。加えて、POHのHPゲージは1ドットしか残っていない。落下してしまえば、助かることはない。

ユーキの身体が動いたのは無意識だった。

頭が理解するよりも先に、身体が本能に従って行動する。

落ちれば死ぬ、ならば手を伸ばす。そんな当たり前のことを、行おうとするが——POHが全力で拒む。

彼はユーキの行動が分かっていたからか、同時に隠し持っていた投げナイフをユーキに向かって投擲する。

ユーキはナイフを弾く。たったソレだけの攻防、だがその些細なやり取りが、致命的なタイムロスへと繋がる。

「いいか、俺の恐怖——」

POHは後方へと大きく飛び、重力に身を預けていた。

ただの人間であるPOHはそのまま、仮想世界の重力に従って——。

「貴様を——いいや、オマエを本当に理解できるのは俺だけだ！」

P O Hは大きく手を広げて、悪意に満ちた声で――。

「これで終ると思うな。オマエは必ず俺が――！」

落下した――。

続く言葉はない。

先の言葉を吐く前に、P O Hは落ちていった。

たったそれだけだった。

彼がどんな言葉を並べたところで、ユーキの心に響きはしない。

――

少年は結末を見送ると、黙って空を見上げる。

虚しい勝利。

虚しい生存。

虚しい――覚悟。

この戦いの勝利に意味があるだろうか。

彼女を失って――何の意味が――。

第15話 生きる意思

—— 死んだ人間が、蘇るといふ現象は本当に起こりえるのだろうか？

そんなもの、考えたところで結論は出ている。否、あり得ない現象である。

死とは生物である以上、避けて通れないシステム。始まりがあるのなら終りがあるように、それは必ずついて回ってくる。

死とはつまり終わりだ。

魂、肉体、精神。これらの一つでも欠けてしまえば、生物は死を免れない。

筈だった——。

目深くフードを被った男性は一人、その場に立っていた。

口元を片手で抑えて、ありえないものを見たかのように息を呑む。

聡明な彼の頭脳はありとあらゆる可能性を定義し、直ぐに消去し、また新しい可能性に手を伸ばしていく。

目の前で起こったありえない現象。ありえない現実、起こり得ない奇跡をの目の当たりにして、彼は分析していく。

机上の空論をひたすら考える。科学者である自分の悪い癖だ、と自覚しながら彼は思考を休まずに稼働させる。

そして、ある答えに行き着いた。

頬には冷や汗。

唇は微かに震えて、その様子からは鳥肌も立っているのかもしれない。

そう言い切れる程、彼は狼狽していた。

「インカーネイト心意システムで『死』という事実を上書きした……？」

ポツリと呟いた言葉を首を振って否定する。

システム上はありえてしまうのだろう。

不可能を可能にする。この世の事象では起こり得ないことを実現させる。

それこそが彼が提唱した『インカーネイト心意システム』であるのだから。空論を観測するために彼は『ソードアート・オンライン』を、そのためにこの世界を創造した。

見たかった空論を目の当たりにしたのだ。満足行くはずが、彼の気持ちは晴れない。

「馬鹿な。私が知っている君ならば、自身の命を手放している筈だ」

彼の視線の先にいるのは一人の少年。

先程まで命のやり取り———“死闘”を行っていた少年の後ろ姿。一度死んで、文字通り生き返った。

少年がインカーネイト心意システムを使用していたのは明白だ。何せ蘇るといふ不可能な事実を可能にしてしまったのだから。

インカーネイト心意システムが肝になるのはイメージ力。想像の力、心の力に他ならない。

それはつまり———少年は絶対に死んではいられない、と抗ったからに他ならない。

それを理解した上で、彼は断ずる。

ありえないと首を横に振り、その結論を否定する。

「君は私と同じ筈だ。だからこそ私はこの世界を創造し、私達は———」

それ以上の言葉はでなかった。

口を固く閉ざし、瞼を落す。何も見ないように、何も感じないように、彼は心を冷静に保つ。

「君は、君達は本当に面白い存在だよ……」

思い出すのは二人の少年。

一人はいずれは手に入れる筈の『二刀流』スキルを心インカーネイト意システムを使い、無理矢理自分の物とする黒い外套の少年。

もう一人は例の少年、彼の視線の先に居る存在。自分をも燃やす『黒炎』を身に宿し、遂にはその力を『蒼炎』へと昇華させた金髪碧眼の少年。

「キリト君か君か。『どちら』なのか、それとも『どちらも』なのか本当に楽しみだ———優希君」

彼の呟きに誰も答えない。

何故、彼が金髪碧眼の少年———茅場優希の名を知っているのか、それは彼だけが知っていた———。

.....

少年は街にいた。

空を見上げると雲一つない青空が広がっており、視界には日本特有の街並。いつもどおり、日常通りの景色が眼に映っていた。

少年は疑問に思うことなく、歩を進める。

夢みたいに白くて暖かい日差しが降り注ぐ。街の道路は蜃気楼のように揺らめいており、しかし熱いというわけでもない。

むしろ心地よい温度。熱くもなく、温くもなく、気持ちの良い気温であった。

少年は制服を着ていた。

胸中にあるのは久しぶり、といった感情。これまた妙な感情であるが、とにかく久しぶりに制服の袖を通していた。

何気なく少年はダイシーカフェに立ち寄った。

こんな天気だ。

ダイシーカフェは混み合っていた。明かりは窓の日差しのみ、人工的な光など存在しない。

大半の席は埋まっていた。開いているとしたら、二つのテーブルのみ。

少年が席に座ると同時に、一人の少女も席に座る。

十代ともとれるし、二十代ともとれる。人工的でありながらとても自然な薄紫色の髪の毛の少女。

少年は気にすることなく同じように、待ち合わせた。

背中合わせに、暖かの日差しの中二人はその場にいた。

——不思議な静けさ。

よく見たら店員もいなければ、店主もいなかった。

だが不思議と、少年は疑問に感じなかった。むしろ「こういうものだ」と受け入れている節すらある。

自分が短気の部類であると、少年は自覚している。そんな自分がブーツと待ち人を待っているのも不思議なはずだ。

しかし答えは直ぐに見つかった。こんなにも穏やかなのは、背後の少女がいるからだろう。

少年は落ち着いていた。

彼女と背中合わせでいるのが自然のようで、自分の半身といえるような感覚。

長い時間が経って、ふと窓の外を見ると見知った顔がそこにいた。

栗色の髪の毛の幼馴染が手を振り、その横には両手いっぱい手を振る義妹の姿。幼馴染の友達である桃色の髪の毛の少女が黒い髪の毛の少年を無理矢理引っ張っている。その二人の後ろに隠れるようにこちらの様子を伺っている幼女の姿。

その中にダイシーカフェの店主の姿や、メガネをかけた後輩の姿を確認すると、少年は席を立つ。

同時に――

「いっぺんいっぺん――」

背後から声が聞こえて少年は始めて振り返る。

「――ユーキ」

少年――ユーキは手を伸ばす。

握ることは出来ないことはわかっている、手を伸ばしたところ戻ってこないとわかっている。

それでもユーキは手を伸ばす。無意味であると知りながら、自身を救ってくれた彼女に――ストレアに手を伸ばす。

ストレアから手が伸びることはない。

しかし表情は幸せそうで、とても嬉しそうに、ユーキが無事であることを本気で喜んでいるようで――。

.....

2023年7月10日 AM7:45

第十八層 丘の上

そして、ユーキは意識を覚醒させた。

第十八層の主街区『ユーカリ』を一望できる丘。そこに生えている大木にユーキは座り込み背を預けていた。

殺人鬼――POHとの決着から二日が経った。

世界は相も変わらず攻略に躍起になる者、現状維持に務める者、何もかもを諦めた者と様々な人種が存在していた。

笑う棺桶ラフィンコフインは事実上壊滅した。主犯格のPOHは行方不明。幹部であるジョニー・ブラックや紅眼のザザは第一層の『黒鉄宮』監獄エリアに收容されている。

アインクラッド最大規模のレッドギルドラフィンコフイン笑う棺桶は壊滅した。

しかし安心は出来ない。オレンジプレイヤーの存在が消えたわけでもなければ、いつ第二の笑う棺桶ラフィンコフインが現れないとも限らないのだ。

だがそんな事実、ユーキにはどうでもよかった。

一人の人間を斬るのに何を犠牲にしたのか。

その何かは他人から見ればただのAI、人間でもない存在なのかもしれないがユーキにとって大きな存在であり、まぎれもない“人間”であった。

こうして自分が五体満足にいられるのも彼女のおかげである。左眼の視力は戻っているし、左腕の感覚もある。絶え間ない激痛が走っていた身体は元に戻っている。

それもこれも、ユーキに自身のリソースを与えたおかげであった。継ぎ接ぎだった身体、空っぽだったアバターは彼女が埋めてくれた。

「——ッ！」

その事実がユーキには我慢が出来ない。

また生き永らえてしまった。誰かを犠牲にして、生き永らえてしまった自分が許せなかった。

奥歯を噛み締めて、両腕を握り締めて、力無く頭を垂れる。

これで二度目だ。

一度目は両親、そして二度目はストレア。どうして自分はここにいるのか、どうして自分は——生き残ってしまったのか。

ふと視界の端にメッセージが届いている通知がある。

開く気などない。どうせキリトであったり、リズベットであった

り、ユウキであったり、エギルであったり――。

「――やっぱり、ここにいた」

――アスナであったりするのだろうか。

ユーキに声をかけたのはアスナであった。最初からユーキがここにいることを知ってたかのように気軽な調子で声をかけた。彼女は覗き込むように、太陽を背に彼を見下ろしている。

対して彼はそれに応える様子はない。

アスナも分かっていたのか困ったような笑みを零すと、何も言わずにユーキの隣に座り込んだ。

気温は温かく、日差しが若干厳しいが大木が木陰となっており過ごしやすかった。

数分か、数十分か、長い沈黙が二人を包み込む。

「……何があったか、聞かねえのか？」

口火を切ったのはユーキだった。

力無く、どこか虚無感を感じさせる声色に対してアスナはうん、と答える。

「ユイちゃんに聞いたから」

「そうか……」

それからまた沈黙が流れる。

ポツリポツリ、とユーキは語り始める。

「オレさ、ユイに謝りに行ったんだ」

「うん」

「責められることも覚悟した、殺されても良いと思った。アイツを殺したのは、オレみたいなものだから」

「だけど、と言葉を切りギョツと拳を握り、自身への怒りで肩を震わせて。」

「何も、言われなかった。むしろ『私達を人として扱ってくれてありがとう』って礼を言われたよ……」

「……………」

「なんだよ、どいつもこいつも……っ！ あの人達といい、ストレアといい、何で自分を犠牲にしてオレを助けるんだ!?!」

それは懺悔であった、後悔であった。

貯めに貯めてきた感情の波がここにきて強く激しく押し寄せる。

不甲斐ない自分を呪い、生き永らえた自分を憎悪し、許せないと怨嗟の声を張り上げる。

「同じだ、同じなんだよ。オレはどうしようもないクソ野郎だ。こうして必ず誰かに迷惑をかける、取り返しのつかないことをしでかす」

「……………」

「だったら死んだほうが良いだろう。オレには生きている価値はない。オレは、オレにそんな価値はない、手を差し伸ばされるような人間じゃない。なのに——!」

「——ダメだよ」

そう断じると、アスナは力強い否定とは裏腹に、優しく何もかもを包み込むようにユーキの握り締めた片手を両手で包み込む。

「君がそんなことを言っちゃダメだよ」

「だが事実だ。オレにはそんな価値は——」

「——事実じゃない!」

一際大きな声で否定され、ようやくユーキはアスナの顔を見る。

彼女は悲しそうに怒りながら、瞼に涙を貯めて続ける。

「価値があるのかで君のお父さんもお母さんもストレアも優希くんを助けたんじゃない。好きだから助けたかったし、愛してたから自分を犠牲にして君を助けたの！」

涙は流すまい、とグツと堪えるも一滴、二滴と涙がアスナの眼から流れる。

大粒の涙を流してもアスナは止まらない。嗚咽をもらしながら力強くユーキの言葉を否定する。

「受けた愛に理由をつけないで。そんな権利、優希君にも誰にもないわ……！」

「明、日奈……」

「価値があるとかないとか、そんな悲しいこと言わないでよ……！」

思わずユーキは目を丸くする。

ここまで強い否定をされたのは初めてだった。この世界に閉じ込められる前、いつも自分の後ろについて来たアスナでは考えられない強い言葉。彼女は強く気高く成長していた。

顔を伏して、それでも両手の力を緩めずにアスナは涙ながら必死に訴える。

「うう……！ もういい加減、自分を許してあげてよお……！ ずっと頑張つてきもん、優希くんが笑わなくなつて苦しそうだったの、わたし知ってるもん……！」

「そうだな。オマエはずっと一緒にいてくれたもんな……」

握られてない片方の手で、アスナの頭を優しく撫でる。壊れ物を扱うように、優しく優しく彼は撫でる。

今まで罰するように、生きてきた。

それが自分の贖罪なのだとして信じて疑わなかった。何せ生きている価値などなく、むしろ死んだ方が良い人種だと思って生きてきた。死ぬことなんて怖くなかった。一度死んだ身だ、いつ死んでも変わらないと思っていた。

だがそんな自分に泣いてくれる者がいる、命を賭して救ってくれた者がいる。

そんな価値は自分にはない。その考えを改める気はない。何せ事実なのだから。事實は覆しようがない。こびりついた自己否定はそう簡単に払拭出来るものではない。これからもこびりついたままであらう。

しかし――。

「そう、だよな……」

「優、希くん……?」

どこかユーキの気配が変わると、アスナは顔を上げた。

彼は遠くを見つめていた。目の前の景色ではなく、もっと広く遠いナニかを見つめて、力強く言葉を紡いで行く。

「許す許せないは別として、オレが自棄になるのはおかしな話だ」

その言葉には先程までの強い自己否定はない。

危うさの色は薄れ、言葉に強い覚悟を乗せていく。

「筋が通らねえ。助けてもらったのに、文句を言うなんざあの人達とストレアに悪い」

「うん、うん……!」

「もうジタバタしねえよ。覚悟も決めた。オレの死に場所はここじゃねえ。あの人達やストレアの分までオレ……頑張ってみるよ」

「わ、たしも……!」

「うん?」

同時刻

黒鉄宮は重たい空気が流れていた。

何せそのはず。この場所には監獄エリアがあり、蘇生者の間という場所が存在している。

蘇生者の間には金属製の巨大な碑『生命の碑』があり、そこにログインしている1万のプレイヤーネームが書かれている。プレイヤーが死亡すると名前に横線が引かれ死亡原因が表示される。

その前には呆然と立ち尽くす者、膝を付き悲しみに暮れるもの、知人のプレイヤーネームに横線が刻まれていないことに安堵するものと様々である。

その為、眼が行くのは知人のプレイヤーネームのみ。知りもしない赤の他人のプレイヤーネームなど気にしない。いいや、気にする余裕がないといった方が正しい。

だからこそ誰も気付かなかった。

どこか奇妙なプレイヤーネームがある。正しく言えば“あった”。それはプレイヤーネームがあるわけでもなければ、プレイヤーネームに横線が刻まれている訳でもない。

空白。プレイヤーネームが確かにあったのだが、消されたかのように空白になっている。

そのプレイヤーネームは『POH』。

この意味を知るプレイヤーはいなかった――。

Vol. 4 ソードアート・オンライン
第1話 第五十層

2024年1月15日 PM13:50
第五十層 迷宮区最上階

———こんな筈ではなかった———。

それが彼の———コーバツツの心を占める感情だった。

ソートアート・オンラインに閉じ込められて一年二ヶ月が経過した。

最初は誰もが絶望し嘆き、いつデスゲームと化した世界から脱出できるかわからないと途方に暮れていた。

しかし今。一年が過ぎてようやく百層までの折り返しである五十層まで到達することが出来た。

ここまで到達するのに様々な経験をした。

他人を欺くなど日常茶飯事。時には裏切り、時には裏切られ。騙し、騙され。死にかけてたこともあった。

一般の日常生活を過ごしていれば到底味わえない経験をコーバツツは味わっていた。それに対して、別に悲観に考えたことはない。幼い頃から強くあれと育ってきた育ってきた彼としては、この程度の状況など苦でもなかった。

勿論、修羅場を潜ってきたのは彼だけではない。

自分が所属するギルド『聖龍連合』のメンバーも中々の面構え。自分ほどではないが、腕が立ち見所のあるプレイヤーが揃ってきたとコーバツツは思っていた。

だからこそその驕り、経験を積んでしまったからの慢心。脱出不可能と絶望してからの、第百層までの折り返し地点に到達出来たという希望による高揚感。そしてつまらない功名心。

それらがコーバツツの判断を曇らせた。

——この調子なら、我々だけでフロアボスを倒せるのではないか——？

最悪にも五十層の迷宮区のマップピングが完全に完了しており、あとはフロアボスを倒すだけであつた。

数日後には攻略組で会議を行い、攻略開始の日取りを決める予定だつた。

しかしコーバツツはこれを見無視。

精鋭三十人引き連れてフロアボスの攻略に乗り出したところ——

「た、隊長！ もう持ちません……ッ！」

「い、嫌だあ！ 死にたくない！」

「隊長指示を、指示を下さいッ!!」

呆然と立ち尽くすコーバツツの目の前に広がるのは地獄絵図だつた。

助けを乞う者、逃げ惑う者、絶望に膝を折る者、必死にコーバツツに手を伸ばし助けを乞うプレイヤーは——。

「隊長！ 助け、助けて——」

フロアボスに殴り飛ばされ、壁に激突したと同時に壁が破碎する。轟音が鳴り響くが、逃げ惑うプレイヤーの悲鳴に掻き消されていく。

見ればいつの間にか、三十人の精鋭部隊のHPバーが赤く点滅しており、これでは攻略など出来る訳がない。

——こんな筈ではなかつた——。

五十層はクォーター・ポイントであり、各層のフロアボスよりも攻

略難易度が跳ね上がっていることはコーバッツも理解していた。

二十五層で既に経験しているコーバッツにとってどれほどの物か理解している。しかし今回はその経験が命取りとなってしまう。一度経験してしまったのだから、どの程度の物か目安がついてしま

う。

今回の層も二十五層ほどのものなのだろうと高をくくっていた。

自分達が攻略し、手柄を立てる。

そうなった暁には、自分は英雄と持て囃されることだろう。そうすれば『はじまりの英雄』なんて眼ではない。それ以上の名声を手にし、誰も彼もが尊敬の眼差しを向けてくるに違いない。

そうだ。

誰も彼もが自分を尊敬する。

——そうだ全員だ。

——私を放り投げたあの小僧も。

——齒向かった加速^{アクセル}世界の小娘も。

——全員……ッツ！

数時間前に過ぎった夢物語。今となってはそんなものを見る余裕すらない。どうすればこの状況をくぐり抜け、無事に生還出来るか。もはやコーバッツに甘い夢を見る暇すらない。

しかし考えても考えても答えは出ない。

それどころか思考がまとまらない。呼吸は荒く、ガタガタと齒を震わせる。

自信の塊ともいえるコーバッツの自尊心は、明確な死の恐怖によって既に粉々に砕かれた。彼にとつて自信とは一番の武器であり、抛り所でもあった。それが壊されてしまったのだ、正常な判断が出来る訳がない。人はそこまで強くない。

そしてその気配は、いつの間にか目の前に。

「……………あ

小さく声を漏らす。

五十層のフロアボスは全長十メートル程ある。

全身金属で仏像のようなシルエット。その腕は丸太のように太く力強く、軽く見積もって五十本は生えている。

その手は全て徒手であり、人形の原型であるのにもかかわらず武器の類を一切持っていない。そう言う意味では今までのフロアボスとは異質とも言える。

一年前に第一層を騒がせていた『モンスターキラー』よりもその力は力強く、一撃で何もかもを削りとっていく。それこそ命の残価であるHPバーも、死の恐怖に打ち勝ってきた戦意も何もかも。

『チエンレジー・ザ・ゴッド』。それこそが五十層の、クォーター・ポイントのフロアボスの名である。

「あ……あ……い……い……」

コーバツツの自尊心を粉々に砕き、部下を殺していった怪物は何も語らずに見下ろしている。

剣を取り、立ち上がり、態勢を立て直さなければ殺される。

コーバツツにはわかっていた。
しかし。

「……………」

何も出来ない。

身動きすることも出来ずに、ただただチエンレジー・ザ・ゴッドを見上げる。

生への渴望はある。彼は諦めた訳ではないし、死にたいわけでもない。ただ感情が殺されていた。圧倒的暴力の前に、思考が追いつかず
に理性が殺されてしまっていた。

これこそが恐怖。

何も出来ずに、何をすることもなく、何でもなく殺される。
チェンレジー・ザ・ゴツドは数あるうちの一本だけ手を上げた。
そのまま叩き潰す。それこそ人が虫を潰すように、簡単にただ手を
振り下ろす。

ゴウつ、という風切り音。

それは正に隕石だ。人一人など容易く覆い隠してしまう隕石。避
けようとしたところで、逃げ場などない面積。

「……ヒイー！」

ギユツとコーバツツの両眼が閉じる。

迫りくる死に眼を向けられない。彼はそこまで強くないのだ。

だが次に聞こえたのは、地面を砕く音でもなければ、コーバツツの
アバターが砕けた音でも、ましてや彼の消滅音でもなかった。

ガギイイイン、と。

まるで金属と金属がぶつかりあったような音が、高く強くフロア全
体に響き渡る。

「……チツ、このポケッ！ 縮こまる暇があんなら立て！」

聞いたことがある声だった。

恐る恐る眼を開くと、コーバツツの視界の端に炎が揺らめく。その
色は「蒼」。透き通るような、蒼い炎が揺らめいていた。

コーバツツは生きていた。

正確に言うのなら、チェンレジー・ザ・ゴツドの一撃を間に入った
“少年”が両手剣を頭上に掲げて受け止めていた。

“蒼炎”は絶え間なく、少年の身体を覆っている。見知った背中、
見知った黄金の頭髪。

そして一際激しく燃や上げると同時に――。

「オラア！」

口元から聞こえた怒声と共に、少年は鋼鉄で出来た人六人分はある巨大な手の平を——弾き返す。

金髪の少年の足元をよく見れば深く陥没しており、どれほどの暴力だったのか想像が出来る。

それほどまでの一撃。必殺を確信した拳。

それを小さな人間に受け止められ、なおかつ弾き返されるという事実。

屈辱だったのか、恥辱だったのか、侮辱と捉えたのか、チエンレジー・ザ・ゴッドは声にもならない叫びを上げて数十本の手の拳を握り、少年に向ける。

「……安い野郎だ」

「!!!」

対する少年の顔に焦りはない。

鬱陶しいと言わんばかりに大きなため息を吐くと、背中を向けていたコーバツツの方へと振り返る

同時に——黒い影がチエンレジー・ザ・ゴッドへと疾走していった。

まるで金髪の少年が振り返ることを黒い影は知っており、黒い影が来ることを少年は知っていたかのよう。

二人の攻め手の切り替えに無駄がない。

黒い影も少年であった。全身黒づくめ、黒いコートを羽織り両手にそれぞれ一本ずつ握られた直剣——二刀を縦横無尽に振るう。

チエンレジー・ザ・ゴッドの背中、足、腕、胸、と休むことなく斬り捨てて行く。その速度は眼で追えるものではない。黒い線がチエンレジー・ザ・ゴッドの身体を這っていくように、何をしているのか正確に視界に収めることが出来ない。

しかしチエンレジー・ザ・ゴッドの身体に走るのは紅い斬り傷のようなエフェクトが深く刻まれている。それから推測するに、黒い影は

一人で、斬っている。ことがわかった。

それを証拠にチェンレジー・ザ・ゴッドは怯み、大きな十メートルはある身体が揺らぐ。

同時にコーバッツを助けた少年は、片手で彼を引きずりながら乱暴にすくみ上がっていた聖龍連合のプレイヤーに放り投げる。

別にコーバッツが軽いわけではない。

現に、聖龍連合のプレイヤーはコーバッツを受け止めることは出来たが、支えきれずに押しつぶされている。

それを視界に収めて、金髪の少年はチェンレジー・ザ・ゴッドへと再び身体を向けて。

「さっさとそのアホを連れて逃げろ。足止めくらいはしてやる——
——！」

乱暴にそう言い放つと、背中に蒼炎を集約させて噴出させる。

まるで弾道ミサイルのように、爆発的な推進力を生みながら駆けて行く。

しかし方向がズレている。

チェンレジー・ザ・ゴッドの胴体ではなく、足元へと金髪の少年は推進していく。

その方向には黒い少年が、今にもチェンレジー・ザ・ゴッドの拳が叩き込まれようとしているところだった。

このまま振り下ろされれば、黒い少年は潰されて最悪ゲームオーバーになるかもしれない。だが——。

「フンッ……い！」

「?!?!」

——そんなことはありえない。

振り下ろすよりも前に、金髪の少年が蒼炎を纏った一撃を加えて大きくずらすと同時に、黒い少年は地を蹴り上げて再びチェンレジー・

ザ・ゴツドの胴体を大きく斬り抉る。

本来であれば、複数の連携には『スイッチ』といった掛け声、もしくはハンドサインが必要不可欠だ。

前衛が攻撃を弾いてスイツチの掛け声で後ろに下がり、もう一人が前線に上がり仕留める。それがないとスムーズに攻守の切り替えが出来ない。掛け声や合図というのはそれだけ重要になってくる。

これらがスムーズに行えなければ、入れ替えにタイムロスが生じ連携の意味をなさない。

しかし二人の少年の連携は奇妙だった。

彼らは——合図の類を一切行っていないかった。

掛け声や合図といった行動をしないにも関わらず、二人の連携はスムーズである。スムーズすぎるといつても過言ではない。確かに掛け声などをしていないのだから、タイムロスなどある筈がない。

どれだけ息が合っていると、連携には合図が必要不可欠であるし、合図がなければ連携など出来る筈がない。

だが彼らにはそんなもの必要ないというかのよう。

まるでどのタイミングで攻撃を弾き、どのタイミングで前線に上がってくるか。

お互いがお互いのタイミング、攻め手の呼吸、攻守の切り替え時などをわかつているかのよう。

時に弾き、時に斬り。時に殴り飛ばし、時に蹴り飛ばす。

フロアには斬撃音、金属同士の衝突音、そしてチェンレジー・ザ・ゴツドの叫び声しか聴こえなかった。

それが数十分続いたところで、二人の少年は同時にチェンレジー・ザ・ゴツドから距離を取った。

黒い少年が二刀を持つ両手は構えることなくぶらつかせて、金髪の少年は両手剣を地面に突き刺して一呼吸を置く。

お互い構えも武器も違うものの、共通していると言えば肩で息をしており、頬からは汗が何度も伝っているということだ。

黒い少年は袖で汗を拭い、乾いた笑い声を上げて。

「それにしても、アルゴ凄いな」

「いきなりなんだオマエ？」

「だってさ、今回の聖龍連合アイツらの暴走をアイツだけが知ってたんだぜ？

どこから仕入れてくるんだろうな、こんな情報」

「知るかよ。んなことより、この後の展開が解せねえよ」

「あー、怒られるな俺達……。二人だけでフロアボス足止めしてるし、だいたい無茶苦茶してるし……」

「人助けしてキレられるとか、正直割に合わねえだろ実際」

「いやホント、まったくだ」

気軽な口調で、極めて緊張感がない調子で二人は会話を初めていた。

とてもクォーター・ポイントのフロアボスと対峙しているとは思えない。日常会話レベルの軽いやり取りのまま、二人は話を進める。

黒い少年は顎を軽く上げてフロアボスを促し、軽い口調のまま問いを投げた。

「俺達で倒せると思うかアレ？」

見ればHPバーは十分の一を削られていた。

アレだけ斬ってまだ十分の一。しかし相手も相手で、二人の少年に攻撃を与えられていない。

それを踏まえて、金髪の少年は息を整えて返す。

「やれねえことはねえが、分が悪い。それにオマエの片手剣の消耗もハンパないだろ」

「……最近お前変わったか？」

「……何が言いたいんだ？」

「いやだってさ。前なら『分が悪い上等。視界に入ったら皆殺し。経験値置いてけ』イノシシスタイルだったじゃん？」

「おうおう、ヘタレ剣士がよく言うじやねえかよ。あの木偶よりも先にオマエを斬ってやってもいいんだが？」
「イノシシ頭なのは本当のことだったろ」

対する金髪の少年はチツ、と短く舌打ちをすると地面に刺していた両手剣を引き抜きながら、様々な想いを織り交ぜながら呟いた。

「こんなところで分が悪いギャンブルしても仕方ねえだろ。オレの死に場所はここじゃねえ」

それだけ言うと、真っ直ぐにチェンレジー・ザ・ゴツドを見据える。黒い少年はコーバツツと三十人いた聖龍連合の撤退を確認すると、一度大きく頷く。金髪の少年はそれを視界の端で確認すると一呼吸置いて。

「逃げるぞ」

「うっす」

正に脱兎の如く。

今まで死闘を繰り広げていたとは思えない離脱。
フロアボスはポツンと立ち。

「!!!」

怒声ともとれる声にもならない叫び声を上げるしかなかった。

しかしそんな事など二人の少年は知ったことではない。

何せ目的が違う。フロアボスを攻略するつもりはなく、情報屋『鼠のアルゴ』から受け取った聖龍連合の凶行を止めに来ただけなのだ。結果的に全滅は免れ、被害を最小限に留めることが出来た。

蒼炎を纏っていた口が悪い金髪の少年——ユーキ。

二刀を操り切り込んでいた黒髪の少年——キリト。

—。二人はこの後の説教を考えて憂鬱になりながら帰路を駆ける—

第2話 男は船、女は港

2024年1月16日 PM14:35

第十八層 主街区『ユーカリ』

攻略組として生き残りたいのなら簡単だ、誰よりもレベルを上げればいい。その為に効率よくモンスターを狩り、なるべく多くの経験値を得て、レベルを上げる。

その為、攻略組として行動するプレイヤーはソロではなく、ギルドに所属している。情報とは大きな武器だ。一人よりも二人、二人よりも四人、四人よりも八人。それが数十人規模であれば膨大な情報となり、効率のいい経験値の稼ぎ場もわかってくるというもの。

だからこそ、攻略組にとって攻略中の層は最重要となってくる。上層になればなるほど、モンスターのレベルは上がる。となれば、手に入るアイテムやクエスト報酬もより良いものになっていくからだ。

故に、攻略組にとってモンスターの出現場所は競争場所であり、クエストの受注も奪い合いの場所となってくる。

そういった理由で、大抵の攻略組は上層へと拠点を移していく。

『最強』ギルドである『血盟騎士団』もそうであるし、『最大』ギルドである『聖竜連合』も勿論のこと。『風林火山』や『月夜の黒猫団』少数のギルドも同じである。

だがここで特殊な攻略ギルドが一組。

血盟騎士団と聖竜連合の攻略ギルドと肩を並べる一組のギルド。

その人数は四人。

三十人規模の血盟騎士団やそれ以上の規模を有する聖竜連合同等の戦力が備わっている。

異質も異質だ。数では大きく差があり、年齢も十代の少年少女しか存在しない。だがそれなのに、血盟騎士団と聖竜連合と肩を並べる異質なギルド。

拠点としている場所も異質。

攻略組が上層に拠点を作っているのにもかかわらず、彼らの拠点は第十八層の主街区『ユーカリ』。その郊外にある、周りに建造物がないどこにでもある二階建ての木造の家。その敷地内には大きな木が生えており、その木陰で昼寝も出来ることだろう。

それが彼らのギルドホーム。その外観はあまりにも普通であり、攻略組筆頭がそこを拠点としているのだから異常。

血盟騎士団からも、聖竜連合からも一目置かれる異質なギルド――

――『加速世界』アクセル・ワールド それこそが彼らのギルドの名前であった。

二階建ての木造建築から少しだけ離れた場所に、石造りの建物が存在した。

屋根には煙突があり、絶え間なく煙が空へ上がり消え帰っていく。

中には鉄を熱するための炉があったり、その燃料となる石炭は棚にある。壁には様々な種類のハンマーがあり、試作で作ったであろう剣や防具などが同じく壁に飾られていた。試作と言わずに、店頭で並べても遜色ないレベルであった。

金床や研磨機などがあることから、この場所が工房だということがわかる。

工房というのだから、その中にいるのは一際大男、もしくはファンタジー世界の住人であるドワーフのような風貌の男だと想像できるのだが――。

「うーん……」

頭を悩ませているのは少女であった。

桃色の頭髮に、純白のパスリーブの上着に、黒色のフレアスカート。胸元に緋色のリボン。その姿はどちらかといえばウエイトレスに近く、工房で作業するには不似合いな格好であった。

しかしその手にはハンマーが握られており、壁に飾られている剣や防具も彼女が精製したものなのは疑いようがない。となれば、鍛冶師としても一流であることが分かる。

難しい顔をして、彼女はギルド共有のアイテムウインドウを開いていた。

ときに頭を抱えて、ときに目頭を抑えて、そして再び頭を抱える。そんなことを繰り返していると――。

「ただいまー」

木造で作られた扉を開ける一人の少女が笑顔で現れる。

ただいま、と発言するからには彼女もまたこのギルドのメンバーであることが分かった。

桃色の頭髪の少女の様子がおかしいことに気付いた彼女は眼を丸くして。

「……どうしたのリス?」

「どうもこうもないわよ……」

桃色の頭髪の少女――リスベットは真剣な表情で向き合った。

思わず彼女――アスナはあまりにも真剣なリスベットを見て身構えてしまう。

リスベットは難しい顔のまま、重い口調で事実を告げた。

「財政難よ、リーダー」

「え、財政難?」

想像していなかった言葉を聞いて一瞬だけ言葉を心のなかで反復させて、アスナは身を乗り出してリスに詰め寄った。

「え、え、え? ど、どうして? わたし達、無駄な買い物とかしてないわよね?」

「してないわね。その辺りはユーキのヤツがシビアだから、無駄な買い物なんてしたことなかったけど」

まあ、アイツの場合はシビアというよりも貧乏性って感じだけど。と言葉を区切り大きくため息を吐いて続けた。

「原因は素材よ」

「え、素材？」

アスナは首を傾げる。

自分も細剣を強化、研磨を頼むことはあれどそこまで頼んだ記憶もない。財政難になるほど圧迫するほどではなかった筈だ。

となるともう一人。アスナの幼馴染の少年を思い浮かべるがそれもなかった。彼もアスナと同じくらいの頻度で強化を行っている。

となるともう一人。原因となる人物も見当がついてくるというもの。

リズが一際ため息を吐いて、その人物なのか答える。

「素材を湯水の如く使うバカがいるのよ」

「……もしかして」

「そうよ！ キリトのバカよ！」

うがーっ！ と大きな声を上げるリズに、心当たりがあるのか困った表情を浮かべて納得する。

アスナにも原因がわかった。常日頃のキリトの素行を思い出すも、それはリズベットによつて言葉にされる。

「まったくアイツはポンポン剣を折って帰って来て！ 修理するのもタダじゃないのよタダじゃ！」

「キリトくんレベル高いから、ステータスに見合った武器を作るってなったらそれなりの素材数持つて行かれちゃうもんねー……」

「そうなのよ……。中では市場でしか出回ってないものもあるしさー。エギルに格安で売ってもらってるけど、高いものは高いのよ……」

それは悲痛な声であった。

まるで貧乏一家の主婦のような悩みがリズベットに襲いかかる。

「食費、アイテムとかの消費費、ギルドの上納金。これで家賃とかあつたら最悪だったわ……」

「リズってなんか、お母さんみたい……」

「それじゃ、アンタがお父さんだからね」

「え、わたし!?!」

「当たり前でしょー、リーダーって大黒柱な感じだもん。……アナタからもあの子達に何とか言ってください」

「きよ、教育はお前に一任した筈だ……!」

「うわっ、絵に描いたようなダメ旦那ね」

ひどいっ!というアスナの嘆きを右から左に受け流し、リズベットは持っていたハンマーを置いて気を取り直して呟く。

「でも冗談じゃなくて、金策考えないとね」

「アイテム売るとかどうかな?」

「そうねー……」

リズベットは顎に片手を当てて少しだけ考えて。

「却下よ却下」

「やっぱり?」

「当たり前でしょー。これから何があるかわからないもの。……これが普通のMMOならその手もあつただけどね」

「そう、だよね……」

リズベットの言うとおおり、これが通常のMMORPGなら物資を売って凌ぐ手は使えるだろう。

しかし彼女達がやっているゲームはゲームであっても遊びではない。HPバーがなくなれば現実では死亡となるデスゲーム。この世界では、明日何が起こるが予想も出来ない。そんな不安定な世界で、物資を売るのは得策とは言えない。

それに、トリズベツトは言葉を区切り肩をすくめて。

「あのバカまた剣を折ってくるでしょ？ アイテムってその場しのぎじゃなくて、継続的にお金が入ってこないとまた財政難になるってわけよ」

「確かにそうね」

「まあ、あたしも、さ。アイツに頼られるのは嫌いじゃないし？ むしろ嬉しいというかなんというか……」

ボソボソと、次第に小声になっていく。リズベツトの頬は少し赤みが帯びており、恥ずかしそうでもある。

乙女となったリズベツトを見てアスナはどこか微笑ましそうに笑みを零す。

その視線に気付いたのか、リズベツトは慌てながら辺りを見渡す動作をしながら。

「そ、そう言えばあのバカはどこに行ったのよ？」

「釣りに出かけたよ。ユーキさんと一緒に」

「釣りい？」

怪訝そうな顔のまま、リズベツトは続けた。

「人の気も知らないで、いい度胸じゃない……」

「まあまあ。ユーキさんの言い出しっぺだったみたいだし、大目に見てあげようよ」

「え、ユーキの？」

今度は目を丸くする。まさかの提案者に、リズベットは素直に驚いていた。

リズベットが知る彼はそんなことなどしない。ましてや釣りなんて絶対にやらない。それこそがリズベットの中の彼である。しかしそういえば、と数日前の出来事を思い出しながら。

「そう言えばアイツ、表の木陰で昼寝したりしてたわね……」

「うん、気持ちよさそうにね」

嬉しそうに話すアスナを見ながら、リズベットは意外だった当時の光景を思い出していた。木陰で寝て、そのそばでアスナが本を読んでいた。

昼寝など彼らしくないが、傍らには愛用している両手剣がある辺り、実に彼らしい。

この前など、夜に屋根に登ってアスナと一緒に空をボーツと見上げていた事を思い出す。

丸くなった、余裕が出来てきた。

どちらとも取れる彼の変化に、リズベットはニヤニヤ悪戯を考えたかのような意地の悪い笑みを浮かべて。

「へえ、ちゃんと旦那の手綱握れてるみたいね？」

「え？ 旦那？ お父さんはわたしでしょ？」

「違うわよばか。さっきの続きじゃなくて、現実の方のよ。アンタの旦那」

「旦那……」

首を傾げてアスナは数秒考える。
それから。

「——ッ?!?!?」

ボンツと音をたてたかのように顔を赤く真っ赤に染めると手をブンブン振り回しながら。

「ゆ、ユーキくんは別に！ まだというか、そう言う関係じゃないし！」

「へえ、まだ、ねー？」

ニヤニヤと笑うリズベットに対して、アスナはあわあわと顔を赤くさせるばかり。

もはや反撃する余裕はアスナにはない。ずっとリズベットのターンであり、完全に彼女の術中にハマっていた。

「いいアスナ？ 幼馴染ってのはメリットであり、デメリットなのよ？」

「え？ ど、どういうことよ？」

「幼馴染って属性は確かに強い。それだけで個性があるし、誰よりも近い異性であるとも言えるわ。でもそこまでなの、それ以上の関係に進むことは案外難しい」

「え、ええー!? ホント!? リズ、それってホントなの!?!」

「ええい、狼狽えるな小娘ー！」

ガシツと、リズベットはアスナの両肩を力強く掴む。そのまま真っ直ぐに彼女の眼を見つめると。

「幼馴染は死亡フラグ、噛ませ犬、踏み台。でもね、この世界には一つの大きなシステムがあるのよ」

「そ、それは……?」

「この世界にはね——『結婚』ってシステムがあるのよ……」

「——」

アスナは息を呑んだ。

眼を丸くして、直ぐにその両眼が閉じる。そしてもう一度開いた時には――。

「――詳しく、聞かせてくれないかしら？」

攻略組のフロアボス攻略会議並の覇気――いいや、それ以上の剣気を纏った『紅閃』のアスナという攻略組がそこにいた――。

.....
.....
.....

2024年1月16日 PM16:35

第二十二層 大きな湖の畔

アインクラッド第二十二層。主街区の名はコラル。主街区と言っても、各層のように栄えている訳ではない。規模としては小さな村と同じ程度。もしかしたら第一層の郊外にある『ホルンカ』と同じ程度であった。

加えて、周囲には森林。どうやらこの層は、人の手が加えられていないという設定なのかもしれない。人口も少なく、開拓されている様子などがない。更に付け加えるのなら、モンスターなどが一切出現しないことから、攻略組は勿論のこと、中層を拠点としているプレイヤーも寄り付かない。

その為、人口が極めて少ない層と言えるだろう。
そんなプレイヤーが少ない――いいや、存在しない層に四人のプレイヤーの影があった。

四人は肩を並べて、釣り竿を持ち地面に座り込んでいる。金髪の少年、黒髪の少年、バンダナをしている野武士面の男性に色黒の男性と

いった順番に並んでいた。

「いやあ、まさかお前が釣りしたいと言い出すとはなー?」

ハツハハハハツ、と居丈高に笑うのは体格の良すぎる男性——
エギルである。

まったくだと頷く少年——キリトの横で不貞腐れるような声。
どうやらこの少年が釣りをすると最初に言い出したようである。

「何をしたいかなんて、オレの勝手だろうが……」

金髪碧眼の少年——ユーキは浮き沈みしないウキを真っ直ぐ
に見ながら続ける。

「つーかよお、そこのへたれ剣士の他に、ンでアンタらもついてきた訳
?」

へたれ剣士い!?!と立ち上がろうとしたキリトをまあまあと宥めな
がらバンダナの野武士面——クラインはユーキの質問に答えた。

「オレあキリトと遊ぼうって思ったからなー」

「遊ぶって……。クライン、お前子供みたいなこと言うなよ……」

「うるせえよ。大人にはな、偶にハシヤギたくなるときがあんの」

呆れ気味に言うキリトに対して、口を尖らせて反論するクラインを
横目に、今度はエギルが答えた。

「俺はお前らが釣りをするって言うからだよ。偶にはのんびりするの
もいいなあって思ってな。誰が言ったと思ったら——」

そこまで言うと、エギルは釣り竿のウキからユーキへと視線を移し

た。

どこか感慨深そうな口調で続ける。

「まさかお前発信とはなー……」

「エギルの気持ちもわかるよ。俺も驚いてる」

キリトはそう言うのと、視線をウキに向けたまま問いを投げた。

「理由とかあるのか？」

「別に」

対するユーキはつまらなそうな口調で答えた。

「ドリユーくんが言っただろう。偶にはこうして呑気に構えるのも悪くない、そう思っただけだ」

キリトとエギルはそんなユーキの言葉を聞いて、思わず空を見上げる。

それこそ思いつきり、何やら奇天烈な状況になると予感しながら、備えるために空を見上げた。

空は至って快晴。青空で雲ひとつない。

それでも満足できないのか、エギルは不安そうな声で。

「おいおい、雪でも振るんじゃねえか？」

「いやいや、雪ならまだ可愛いもんさ。槍だ。今に見てる？ 槍が振ってくるぞ」

「なんだなんだ、ユーキが釣りするのってそんなに珍しいんか？」

まだユーキと会話らしい会話するようになって日が浅いクラインにとって、彼が釣りをしたりのんびり過ごすという行動の意外性があり感じられなかったらしい。

それはそうだ。こうして息抜きをするのは珍しくない。人間であれば張り詰めた空気をほぐすために、リフレッシュの一つや二つはするだろう。

しかしそれが普通の人間ならばの話である。

キリトもエギルもその辺りよく分かっていた。

息抜きをする、といった人間がどれほど普通じゃないのか。今までと比べたらどれだけ異常であるのか。

キリトは声を潜めて、クラインの質問に答えた。

「珍しいってもんじゃないさ。アイツバーサーカーだよバーサーカー、フロアボス絶対に殺すマンだぞ？」

「え、危ないヤツじゃん」

「そう、危ない奴なんだよ。そんな奴が釣りするっていうんだぞ？ヤバイだろ」

「おい、喧嘩売ってんのかへタレ剣士。オマエも似たようなもんだろうが」

チツ、と小さく舌打ちをすると釣り竿のウキを見守る。浮き沈みはない。プカプカとウキが浮かび、小さな波の音が聞こえるばかりだ。しかし釣れてないのはユーキだけではない。四人が四人とも、もの見事に浮き沈みがない。

そこで痺れを切らしたのはクラインだった。

彼は釣り竿から手を話して、大の字に寝転びながら。

「あー、釣れねえなあー。なあなあ、本当に魚いるのかよ？」

「居るっほいぞ。なんでもデカイ主が」

「マジかよー」

エギルの言葉聞いて、寝たままの状態で見守る。

とても穏やかな水面。とても主なんてモノが存在するとは思えなかった。

もうやる気がまったくないのか、クラインは空を見上げながら不満を漏らす。

「でもよお。オレ達の誰もがヒットしねえっておかしいだろ。お前ら釣りスキルなんぼ？」

えーつと、とキリトは釣り竿を片手に持ち、もう片方の手でメインメニューウインドウを開き、ステータス画面を確認する。

「俺は600だな。エギルは？」

「俺もそれくらいだ」

それだけ言うと、エギルがユーキへと視線を向ける。

彼だけではない。クラインは寝ながら、キリトは横目で、それぞれユーキの発言を待っていた。

対するユーキはメインメニューウインドウを開かずに、ウキに目を向けて簡潔に答えた。

「ゼロ」

「オメエ、本当かよ？ ちょっとステータス見せてみ」

クラインはノロノロと立ちユーキの方へと近付いて行く。ユーキも無言でメインメニューウインドウを片手で操作してステータス画面を開いた。

スキルを見て、クラインは呆れた口調で一言。

「うわっ、バーサーカーだコイツ」

「どれどれ……うわっ、本当だバーサーカーだ」

エギルも見ると同じような反応。

それから自分のスキルと見比べて続けた。

「スキルだけ見たら、釣りをしたいなんて言った奴とは思えんな」

「だろー？ 戦闘用のスキルしか習得してねえでやんの」

「うるせえなあ、あっち行けよオマエら。魚が逃げんだろうが」

クラインとエギルが鬱陶しく感じたのか、ユーキは少しだけ不機嫌そうに呟く。

しかしそれでも釣れないことに苛立っている様子はない。むしろボーツと糸を眺めている事から、釣ることを目的としていないかのようでもある。

それはユーキだけの話。

釣ることを目的として来ているクラインにとって、この状況は退屈のようである。

彼は再び寝転がりながら。

「釣りとか狩りとか色々出来るけどよお、やっぱり帰りてえな現実世界に……」

「どうしたんだ、急に」

キリトの問に対して、どこか楽天的な調子でクラインは答える。

「いや、もう第五十層だろ？ もう少しでクリアなわけだし、プレイヤ^{オレ}達^達の中に茅場晶彦がいるなんて思えねえくらい順調じゃん」

もう五十層と喜ぶべきか、それともまだ五十層と嘆くべきか。どちらにしても、折り返し地点。

このまま百層まで進むべきか、それとも茅場晶彦が扮するプレイヤ^{オレ}を捉えるべきか。この辺りがターニングポイントと言えるだろう。

だがクラインにとって重要視するのはそこじゃないようだ。

彼は朗々とした明るい口調で問う。

「お前らはよ。現実世界に帰ったら何したい？」

「クライン、それってある種の死亡フラグだぞ？」

「大丈夫だって。フラグってのは建てて折るもんだろ」

「フラグ建てたこともないくせに？」

「うるせえな。それじゃキリト、まずお前から言え!!」

ええ、俺!?!と若干狼狽えると、少しだけ考えてキリトは一人で行動してたときのことを思い出す。

つまり第一層での自分、この世界に放り投げ出されたばかりの自分

—— ユーキとアスナと出会う前の自分。

「俺は……家族に会いたいな」

「うわっ、普通。キリト、それ普通」

「うるさいなあ!。そういうクラインはどうなんだよ?」

恥ずかしかったのか顔を赤くさせてキリトはクラインに問いを投げ
げる。

対するクラインはよくぞ聞いてくれました、と言わんばかりに立ち
上がると胸を張って堂々と言い放った。

「オレは美味しい飯を食う!」

「俺以上に普通じゃん。普通オブ普通」

「オメエの方が普通だよ!。家族だぞ家族!。普通だろ。……ところ
でよ、お前に姉か妹っている?」

「妹がいるけど?」

「紹介して」

「はっ倒すぞ野武士ツラ」

軽快な応酬に、静観していたエギルはまあまあと宥めながら。

「家族に会いたいも美味しい飯を食べるのも立派な理由だと思うがね。俺も嫁さんと娘に会いたいしな」

「エギルって結婚してるんか!？」

「なんだその反応?」

「いや、てつきりアンタもオレと同じモテない色者粹だと思つて……」

「ぶん殴るぞ?」

意外なものを見たと言わんばかりに驚くクラインに、エギルは青筋を立てる。

モテない同類と思われたことに不快に思ったのか、はたまた同じ色者粹だと思われたことに腹が立ったのか。

それはさておき、とエギルはため息を吐いて微動だにしないウキを見つめているユーキへ話を振る。

「ユーキは何がしたいんだ?」

「……あ?」

ユーキは少しだけ考える。

何分、家族はおらず、待つている人間も現実世界にはいない。そして、今までは今見える道を進むことに精一杯だった。視界の端に映るものはすべて彼方へと追いやり、前だけを見据えて進んできた。

だからこそ、その先。つまりデスゲームから帰還した後など考えもしたことがなかった。

それは今も変わらない。前だけを見て、後ろを振り向くことはしない。

現実世界に帰ったら何をする、なんて下らない。と今までの茅場優希であれば、鼻で笑つてこの話題はそれまでであつただろう。

しかし現在は違う。自分には仲間がいる、自分の為に泣いてくれる奴が居る、自分の為に頑張ると言つてくれた奴が居る、自分の為に――

――その身を犠牲にしてくれた奴が居る。

ならばこそ、ここで死ぬわけには行かなかつた。

生きてここを脱出し、現実世界に帰る。そこまでしないと、犠牲になつてくれた者に顔向けが出来ない。

「……そうだな」

そう呟くと、しみじみと感慨深げに彼は答える。

「オムライスが、食いたいな」

「オムライス……?」

エギルは何か引つかかるのを感じた。

それも一瞬のこと。直ぐにハツと何かを思い出したかのように意地の悪い笑みを浮かべてエギルは問う。

「それって俺のか?」

「……アンタのじゃねえよ」

「だよなあ! なんだお前、素直じゃないやつだなあ!」

居丈高に豪快に笑うエギルを見て、キリトとクラインは首を傾げる。

無理も無い。エギルが確信を得たのは、デスゲームが始まる前のユーキを知っているからだ。

オムライス。

自分が営む『ダイシーカフェ』であつた小さな問いかけ。

ユーキは鼻で笑って返したあのやり取り。取り留めのない、普通の日常だつた頃の話のエギルは思い出し機嫌が良さそうに言う。

「美味かつたなら美味いって言ってやれ。本人に食べたいって言わないと、伝わらねえぞ?」

「……ああ、わかってるよ」

わかっている。そんなこと、ユーキにはわかっていた。

言わないと伝わらないことも、その為に現実世界に帰らなければならぬことも、帰るために何をしなければならぬことも。ユーキは理解していた。

—— 帰るためには何をするか

—— 何をしなければならぬのか。

—— ンなもん、簡単な話しだ。

—— それは、茅場晶彦を斬る。

—— 斬らないと、現実世界に帰れない。

自然とギユツと竿を握る手に力が籠められる。

それが自分に出来るのか。両親が死に、面倒をかけた人間を斬ることが出来るのか。第一層で感じたときのように、怒りのまま彼を斬る事が出来るのか。

答えは—— でなかった——。

第3話 遠い思い出

——懐かしい、遠い夢を、見た——。

その世界はモノクロ。

白黒で色彩など不鮮明で、これでもかというくらい色褪せた世界だった。

どこにいるのかも“彼”にはわからない。だがどういうわけか、これは夢であることがわかっており、ここで出て来る登場人物も誰なのか分かっていない。

先ず出てくるのは少年——それは“彼”自身であった。

場所も不鮮明なもの。どこかの建物の一室で、周りにはパソコンがあり、四方の壁を埋める業務用冷蔵庫のような大きさの最新式の量子コンピューターが設置されている。どこぞの研究室、もしくは計算室と言うかのような場所に少年は居た。

少年は腰掛けているリクライニングチェアが大きすぎるのか、足が地についていない。その姿は幼い姿なのだから仕方ない。小学生のときの“彼”の姿なのだろう。

どこかぼんやりと、まるで他人事のような俯瞰的な目線で“彼”は結論付ける。

その姿は痛々しいモノであった。

腕には擦り傷、顔は打撲の痣があり誰がどう見ても腫れていることがわかる。

とてもではないが、転んで出来るような傷ではなかった。まるでそれは第三者に殴られ、蹴られでもしないと負わない傷だ。となるとつまり——。

『——これは酷くやられたようだね』

『……………』

——また新しい男性が現れる。

男性は白衣をこれでもかというくらい見事に着こなし、表情も声も感情が籠っていない。その片手には救急箱を持っていた。

少年の視線に合わせるように腰を落すと、男性は救急箱から傷薬を取り出しながら。

『手を出しなさい』

『……いらねえよ、ンなもん。唾を付けておけば治る』

『確かに唾液に含まれているリゾチーム、過酸化酵素、l g aといった成分で、バクテリアの増殖を抑制することは出来る』

しかし、と言葉を区切り有無を言わさない迫力で無表情で続けた。

『根本的な治療にはならない。手を出しなさい』

『……チツ、何言ってるかわかんねえよ』

男性の反応を見て、これ以上断つても引き下がらないことは少年も理解していたのか、渋々と言った調子で男性に向かって手を伸ばした。

それを見た男性は一度微かに頷くと、救急箱から取り出した傷薬から液体をジユボツ！と勢い良く出し、ガーゼに染み付けて少年の傷に当てた。

『痛え!!』

『……言い忘れていた。染みるからから気をつけなさい』

『忠告が遅いんだよ鉄仮面!』

『だから言い忘れたと言ったじゃないか』

『——!! もういい、自分でやる!』

何を言っても無駄だと瞬時に理解した少年は、力付くで男性から傷薬をふんだくると自分で治療し始めた。

こうして傷を負うことも珍しくないのか、少年の治療は的確です
ムズだ。

男性のように不器用の極みではない。傷薬の量も適量、腫れている
顔に湿布を張って、苛立っている口調で少年は嫌味の一つを漏らす。

『なんでも器用に出来る癖に、ンでこういうことは不器用なんだアン
タは』

『昔から不得意でね。私には向いてないようだ』

男性は近場に合ったコーヒーメーカーを起動させて、近場にあった
カップにコーヒーを注ぎ続ける。

『私はね、物を作るのは得意でも、人を治すのは不得意なんだ。――』

――兄さんと違ってね』

『……そうかい』

どこかお互いに含みのある会話だが、それ以上に二人とも踏み込む
様子はない。

男性はコーヒーの入ったカップを持ち、手頃の椅子に腰掛けて少年
に問いを投げる。

『その傷は？』

『……別に転んだだけだ』

『先日、学校から呼び出されたのだがね』

コーヒーを一口飲み間を開けて。

『喧嘩しているそうじゃないか』

『……わかってんなら聞くんじゃねえよ』

『イジメを受けているのかい？』

『……別に、オレは悪いことなんてしてないぞ』

どこか拗ねたような口調で言う少年に対して、わかっていると男性は頷くとカップをテーブルの上に置くと懐から手帳を取り出してパラパラとめくり始める。

そこである一定の場所でめくるのを止めて読み始めた。

『イジメられている後輩を助けたそうじゃないか』

『……待て、アンタ調べたのか？』

『君が素直に話す訳がないと思つてね』

『科学者よりも、探偵やつてた方がいいんじゃないの？』

呆れ半分真面目半分な調子で少年の軽口は、男性の調子を崩すまでには至らないらしい。

男性は首を横に振って口を開く。

『生憎だが、転職するつもりはないよ』

『……冗談だよ。真面目に捉えんなよ』

『わかっているさ』

『……ッ！』

何か言いたそうに口を開きかけるも、少年は直ぐに奥歯を噛み締めてグツとこらえた。

掴みどころがない男だと思つていたが、こうまで自分のペースを乱されるのが我慢できなかつたらしい。

これ以上話をしても埒が開かない。

むしろ自分だけが苛立って幼稚さを露呈するなんて屈辱を味わうことにある。そう感じた少年は、すぐにでもこの場を後にしようと苛立ちながら席を立つも。

『まだ話しは終わってないよ』

男性がそれを許さない。

数歩だけ進んだ少年の足が止まり、振り向かず背を向けたまま淡々とした口調でそれに少年が答える。

『これ以上話すことなんてねえよ』

『まだ質問に答えてないだろう』

『ああ!?!』

荒らげる声と共に少年は振り返る。

だがその次の言葉は出なかった。何故なら――。

『その傷は、どうしたんだ?』

』

有無を言わさない圧。

プレッシャーとも言えるそれを放ちながら、彼は少年に問いを投げる。男性は静かに、ただ静かに怒っていた。

無表情で無感情。それが少年から見た男性だった。

しかし今しつかりと感情を向けている。それも憤怒であり、向けられている矛先は少年ではない。

『なんでアンタがキレてんだ?』

『甥っ子を傷つけられて怒らない人間がいるとでも?』

『まるで保護者だな』

『私は君の身元保証人なんだがね?』

この男にも感情というものがあったのか、と驚く。

それと同時に、自分如きの為にここまで怒ってくれてるのか、と少年は嬉しく感じたのらしい。苛立っていた感情は静まり、ため息を付しながら調子を取り戻していく。

その調子のまま少年は、先程の男性の疑問に答えることにした。

少年が絶え間なく傷を負う理由。

『アンタも調べたんならわかるだろ。喧嘩してるだけだ』

後輩が虐められている。それを少年が知ったのは偶然だった。

偶然、同級生の会話が耳に入ったので、本当かどうか確認したらその後輩が虐められていた。人殺しと殴られ、疫病神と罵られ、理不尽な言いがかりを少年の後輩は受けていた。

それが気に入らなかった、その程度の理由に過ぎない。

寄って集って、しかも相手は女で、多数の相手が少数の者を捌っている。正直な話、少年はその光景を見て反吐が出そうだった。

だから喧嘩を売り、標的が後輩から自分になり現在に至る。

その程度の理由に過ぎなかった。

喧嘩といっても、実態はリンチに近い。

その証拠に今の少年の痛々しい姿である。何よりも多勢に無勢、少年が勝てる道理はない。

そんな甥っ子を見て、男性の機嫌が治る様子はない。

無表情であるものの雰囲気は剣呑であり、明らかに苛立っている事がわかる。

天才は何をしでかすかわからない。凡人が想像できないことをしでかすから天才なのだ、と結論付けて少年は先に伝えておくことにした。

『コレはオレの喧嘩だ。オレが喧嘩を売って、アイツらが買った。加勢はいらねえ』

きつぱりと告げる言葉。

それは暗に「恥をかかせるな」と語っている。

』

黙って男性はそれを見る。何も言えなかったと言った方が正しい。その視線に、見覚えがあったのか。

髪の色、眼の色は少年の母方のもの。顔もまったく似ていなかった。だがしかし、その意志力は瓜二つと言っても良い。

絶対に自分を曲げない、折れないように真っ直ぐ過ぎる強い意志。それは男性の兄に、少年の父方によく似ていた。

こうなってはここで動かないことを、男性は兄から学んでいる。戻らない過去から学び、懐かしみながら男性は少しだけ肩をすくめて呆れた口調で。

『本当に兄さんにそっくりだな君は』

『似てねえよ。父さんなら、こんな生き恥は晒さない』

少年の言葉の意味がどれほど重く、歪なものなのか男性は理解していた。

生き恥の意味は喧嘩でボロボロになってることではない。両親を残し自分だけが生き残ってしまった後悔、それでも生きなければならぬ苦痛、そして——少年から何もかも奪ったモノに対する憎悪。

それこそが少年の言う“生き恥”の意味だった。

少年は背を向けた。

その小さな背中にどれほどの絶望を背負っているのか、男性からは計り知れない。

自分がその場に居て、自分だけが助かってしまった苦痛など想像を絶する事だろう。それほどまでに少年は両親を愛していたし、尊敬もしていたのだから。

小さな背中、華奢な肩、フラフラなのは傷も癒えてないので真っ直ぐに歩くことも出来ないため。

それでも少年は前に進む。立ち止まる時間すら惜しいと言わんばかりに、そんな時間すら自分には許されないとでも言うかのように進み続ける。

2024年1月23日 AM8:35
第十八層 ギルドホーム リビング

——懐かしい、遠い夢を、見た——。

ぼんやりと、どこか心がざわつくような、懐かしい夢を見た。

その夢の内容を、金髪の少年——ユーキは思い出すことが出来ない。だがこれだけは言えた、もう二度と一緒にいられない人と会話するかのような、不思議な感覚であったと。

胸に穴が空いたような、寂寞に似た謎の感情が波となってユーキに押し寄せる。

少年自身ですら説明がつかない感覚があり、とても言葉に出来そうにない。そこで、八つ当たりするように頭をガシガシ掻きながら起きることにした。

見渡すと自分の部屋ではない。

リビングのソファから起き上がったところを見ると、自分の部屋ではなくリビングで寝ていたとことが分かる。

毛布がかけられており、ソファの傍らには愛剣の両手剣『アクセル・ワールド』が立てかけられている。

そこでユーキは思い出した。

夜に日課としている素振りを終えて、ギルドホームに帰ってきた後ソファに横になって寝てしまったことを。

しかしそれでも妙であった。そのまま寝てしまったのであれば、毛布など使っていないなかった筈。ならばこの毛布はどこから出てきたのか。

「あつ、起きた。おはようユーキくん！」

ぼんやりと疑問に浮かんでいたユーキに声をかけてくる声が聞こえたので、彼はそちらへと視線を向ける。

そこにいたのは笑顔の幼馴染——アスナだ。
ニコニコとご機嫌で、眩しいくらいの笑顔がユーキに向けられている。

簡易的な白いセーターに黒いロングスカート。その上からエプロンを着用していることから、どうやら朝食を作っていることがわかる。

対するユーキはテンションが低いまま「おはよ」と返し、目頭を抑えて問いを投げる。

「オマエだけか？」

「ううん。リズも一緒だよ」

「呼んだアスナー？」

キッチンからまた新しい少女の声が聴こえて、その声の主はリビングまでやってきた。

桃色の頭髮の少女——リズベットは起きたユーキを見て、呆れた口調で続けた。

「アンタねえ、寝るんなら自分の部屋で寝なさいよねー。それと、おはよう」

「……おはよ」

まったくもってその通りであり、ぐうの音も出ないのは正にこのことを言うらしい、とユーキはぼんやりと考えていた。

リズベットの言うことは正論である。以前であれば、こんな隙を見せることはなかった。ましてや、ソファアールで寝顔を晒すなどありえない。油断なく、神経を張り巡らせて、決して隙を見せることなど無い。それがユーキという人間であった筈だ。

しかしここに来て、ユーキは変わっていた。

余裕が出来たという方が正しいのかもしれない。それが良いことなのか悪いことなのか、本人でさえわかっていない明確な変化。

ユーキとある程度交流を深めれば変わったことが分かる変化だが、
どうやら少年の幼馴染となるのもっと深く変化に気付く。

そう。今のユーキの状態など、アスナは敏感に察知する。

「大丈夫……？」

「あ？」

目頭を押さえていたユーキはアスナへと視線を移す。

満面の笑みだった彼女はもういない。

どこか不安そうで窺うように、眉を八の字に変えて問いを続けた。

「何か悲しそうだから……」

「……………」

それは敏感な差異であった。

それはユーキ自身ですら気付いていなかったようで、思わず目を丸くする。

そうか、自分は悲しかったのか。

と、わかると同時に新たな疑問が生まれてくる。それは、何故？悲しいのはどうして？

先程見た謎の夢が原因なのだろうと想像は出来るものの、内容を覚えていないことには原因がわからない。

親しい人間と話をしていて、もう二度とそんなことは出来ない。そんな夢であったはずなのだ。それが誰なのか、ユーキは思い出せなかった。

だからこそ、アスナの間に答えられない。

覚えていない夢が原因だ、なんてこれほど間抜けな話はないだろう。

どう誤魔化すかユーキは考えていると、リズベットが首を傾げながらユーキを注意深く観察し始める。

「悲しそう？ あたしには寝起きで機嫌が悪いようにしか見えないけど？」

「えー、こんなに分かりやすいのにー？」

「分かんないわよ……」

それだけ言うと、リズベットは再びユーキの表情を観察し始める。その視線が流石に鬱陶しく感じたらしい。どこか不機嫌そうな声色で先程の話題を誤魔化す意味も込めて、ユーキはアスナに問う。

「あの野郎＋１はどうした？」

「まだ寝てるよ」

「アイツは？」

「宿屋にいるみたい」

「いやいや、待って待って」

軽快な幼馴染達のやり取りに、リズベットがストップをかける。

「どこの誰の話をしているのよ？」

「え、わかんなかった？ あの野郎がキリトくん＋１がユイちゃん、アイツがユウキのことを言っているんだけど……」

「わかんないわよ」

キツパリと返すと、リズベットはああ！と納得するようにパンと手の平を合わせた。

全て合点がいったと言わんばかりに、今までの疑問が解消されたとしても言うように、朗々とした口調で続ける。

「わかっていただけ、改めてわかった。アスナ、あんたって変態ね」

「えっ、なんで!？」

狼狽えるアスナを尻目に、うんうんとリズベットは満足気に頷きな

がら無視するように納得し始めた。

「何かおかしいと思ったのよねー。普通は気付かないことも気付くし、ただだけコイツのことを見てるのかって感じ?」

「普通気付くでしょ!?!」

「いやいや、気付かないわよ。やっぱり変態ね、異常であることを気付かないなんて」

「違うもん!」

そこまで嘆くとチラツ、と若干涙目になり始めたアスナはユーキに視線を泳がせた。まるで助けを乞うかのような縋るような視線を受ける。

ここで引いては男が廃る。男の本能が感じ取り、ユーキは全力で受け止めることにした。

「え、オマエ変態なの……?」

そう、受け止めた。

変態であると言う情報を、全力でユーキは受け止めた。いわゆるド引きである。

そうなつてはアスナが縋るのは自分自身。

彼女はヘタヘタ、と力無く床に座り込み、イジイジと「違うもん、変態じゃないもん」とうわ言のように呟き始めた。その間、床に指での字を書く事も忘れない。完璧なイジケスタイルをここに完成させる。

それを見たユーキは満足したのか、

ため息を吐きながら、リズベツトに苦言を漏らす。

「冗談はさておき、あまりやりすぎんなよ?　うちのリーダーは、イジケたら長いんだからな」

「完璧にアンタの一言がトドメだったと思うんだけどね。まあ、気を

付けるわ。アスナ可愛いからついついやりすぎちゃうのよね」

リズベットの言葉に答えることもなく、ユーキはチラリと時計へと目をやる。

朝の9時を回っていないなかった。早起きしすぎたのかもしれないと思うも、二度寝するつもりもなかったユーキは今日はどうするか聞くことにした。

「今日はどうするんだ？ 何でも、金欠だつて聞いたが」

「それは後々考えることにしましょう。あたしとキリトは今日別行動をとるから」

それはどうしてだ？ とユーキが尋ねる前に、イジケていたアスナが立ち上がりニッコリと満面の笑みを浮かべて。

「リズとキリトくん、デートするんだって！」

「デートお？」

思わずユーキの顔が怪訝な顔つきに変わる。

対するリズベットは顔を真赤にさせて、手をブンブン振り必死に否定し始める。

「ちちちち違うわよ！ アイツ、また剣を折ったから、素材集めに行くだけよ!!」

「違くないでしょ！ わたし知ってるんだからね？ 昨日リズが服なに着てくかプチファアツションショー開催していたこと！」

「なっ!?! だ、誰情報よ!?!」

「ユイちゃん!」

「あの娘の朝食はピーマンのピーマン閉じに決定ね……」

さっすきの仕返しよー!と言わんばかりにリズベットをいじり倒す

アスナを見て、再びユーキはため息を吐いた。

——楽しいことは結構だが、だいぶ浮ついていやがるな。

——まあ、あの野郎が一緒だっていうんだから問題はねえが。

——緊張感がまるで足りてねえなオイ。

だがそれを指摘するつもりは、ユーキにはなかったようだ。取り留めのない日常。それを壊すのはどうも気が引けたらしい。

こういうのも悪くない、と彼女達の呑気さに毒されていると自覚しながらソファアから立ち上がった。

片手には立てかけていた両手剣が握られている。

どうやら彼女達のやり取りが収まるまで、素振りでもするつもりらしい。

千回目安にするかなあ、とぼんやりと考えていると視界の端で通知アイコンが点滅し始めていた。

片手でメインメニューウィンドウを開き、通知を開く。どうやらメッセージのようであり、差出人は情報屋のアルゴからであった。

またどこぞのバカが五十層に突撃でもかましたのか、と考えていつでも動ける心構えでメッセージを開くと。

「な——に——？」

息を呑む。

眼を丸くさせて、暫く息をすることすら忘れて、手が震えだした。碧眼の双眸の瞳孔が開いていくのを自覚しながら、メッセージの本文を何度目を通す。

間違えようがない。間違えるはずがない。

本文は単刀直入だった。

——茅場晶彦の正体が掴めたかもしれない——。

第4話 鼠の刃

2024年1月23日 AM11:20

第五層 主街区『カルルイン』

石造りの街並。

第五層のテーマは『遺跡』。その名の通り、岩をくり抜いて出来た家や、巨大な石を積み上げられて出来た建物があちこちに建っている。

風化している為か、ところどころ石や岩が削られているが、倒壊する様子は微塵もなく、それがいいアクセントとなっているのか猥雑に街を賑わしていた。

その賑わいをBGMに、主街区中心とは少し離れた第五層の路地裏を——アスナとユーキは歩いていった。

彼らが歩く路地裏はまるで迷路のようである。

何重にも入り組んでおり、家々が密集しているような地形。しかし彼らの足は戸惑うことなく、足を進めていく。

こうして数分後。

迷路のような路地裏を踏破し、目的地に到達した。

石壁にはランタンがぶら下がっており、その手前には小さな看板が立っている。そしてその看板には『Tavern Inn BLINK & BRINK』という店の名前があった。

ユーキはその店舗に見え覚えがある。

かつて彼が『アインクラッドの恐怖』として活動していたときに、彼の義妹——ユウキに連れられて来た店だった。

アレから一年経ったのか、とぼんやり考えていると。

「ここって合ってるっ。」

「間違いねえよ」

アスナの問いに、ユーキがいつもの調子で答える。

しかし彼女はどうかやら違うようだ。どこか緊張しているようで、肩に力が入ってるとも言える。表情もどこか強張っており、いつも柔らかい雰囲気の人とはかけ離れたモノであった。

今からでも右足と右手が同時に動かさないと。そんなガチガチの様子に、見兼ねたユーキは「おい」と声をかけて軽くアスナの頭を小突く。

「まだ話も聞いてねえだろ。ンなに緊張すんなよ」

「だ、だつてえ〜……」

小突かれた頭を擦りながら、アスナは拗ねた表情に変わる。

しかしアスナの気持ちもわからないでもなかった。

彼らは『鼠』のアルゴにメッセージで呼び出され、ここまで足を運んできた。ただの世間話なら彼らも下層の、しかも誰も来ないように入り組んだ路地裏でしなくてもいい筈だ。

だが内容が内容だ。アスナが緊張してしまうのも無理も。それほど重大な内容をアルゴから聞こうとしていた。

ユーキがある一定の理解を示す一方で、自分だけ緊張して、ユーキだけが緊張してない。それが不満に思ったのか、口元を尖らせながらアスナは不満をぶつけることにした。

「ユーキくんはいつもどおりだね？」

「ん？ ……まあ、そうだな」

言われてそう言えば、とユーキは気付いた。驚くほどいつも通りだと、ユーキは言われて始めて気が付いた。

以前の自分ならば、アルゴから話しの内容を聞いた瞬間、自分一人だけ突っ走りアルゴに詳しい話を聞きに来た筈だ。

だが今は違う。

メッセージが届いたときは驚いたが、すぐに冷静になるとアスナにメッセージを伝えて、待ち合わせ場所を決めて、こうして足を運んできた。

あんなに斬りたかったのに、怒りにまみれていたのに、どういう訳か今では冷静だという事実を、ユーキは受け止めていた。

しかし戸惑っていないというのは嘘になる。

今までの自分との差に戸惑いつつ、少し前の自分とは対応がまったく違うことを自覚する。だがそれを悟らせまいと彼は軽口を叩いた。

「そんなに緊張すんなら、来なきゃよかったんだよ」

「だって、ユーキくんだけ行かせたくなかったんだもん……」

それはどう言う意味だ、と尋ねる前にアスナは口元に笑みを浮かべて、ユーキに微笑みながら続ける。

「それにわたし良いと思うよ。今のユーキくん」

「あ?」

「戸惑ってたでしょ、今の自分に」

「……別に」

見事に言い当ててくる幼馴染に対して、ユーキはプイとそっぽを向いた。照れ隠しであるのだろうか。隠していたものを言い当てられるほど、恥ずかしいものはない。

あまりにも子供のような態度に、アスナは微笑ましく映ったのかクスクス笑みを零す。

「さっ、入ろっか!」

「……チツ、少し前までガチガチだった女が何を仕切ってたんだか」

ユーキの軽口に、アスナは気にも留めていない。

店に続く扉を引いて入って行き、ユーキもその後が続く。

店内を見渡して思わずユーキは納得した。

店の中には人が一人もいなかった。いるとすればそれはNPCのみで、プレイヤーの姿はどこにもいない。

考えてみれば、ここは下層でしかも第五層のフロア。既に踏破された層であり、この場所に近づくプレイヤーは限られてくる。極めつけはこうした路地裏であり、穴場の中の穴場のような店。こんな真昼間にプレイヤーがここにいる方がおかしい、そう断言できるほど閑散としていた。

場所を指定したのはアルゴ本人である。これほど内密な話に適した場所もないだろう。

アスナもユーキと同じ気持なのか、感心するように頷いて。

「さすがアルゴさんね」

「伊達にアイツも名の知れた情報屋じゃねえんだ。この程度の穴場、知ってて当然だろ」

「もう、捻くれ発言禁止!」

アスナの言葉もどこに吹く風。ユーキは敢えて無視するかのよう
に、そもそも最初から耳に入っていないかのように辺りを見渡す。どう
やら自分達をここに呼び出した張本人を探しているようである。

だがその人物は直ぐに見つけることが出来た。

「よう、アーちゃん。それと——」

店の中にある席の一角。

そこで片手を軽く振って声をかけてくる女性が一人。女性の頭上
にグリーンのアイコンがあることから、彼女がプレイヤーの一人であ
ることが分かる。

金褐色の頭髮に、両頬に髭のような三本のペイントのような線が特
徴的とも言える彼女——アルゴはユーキの顔を見て笑顔だった

表情から、露骨にガツカリしたそれにと変わると。

「なんだお前かヨ。キー坊じゃないのか……」

キー坊とはつまるところのキリトのことを指していることは、ユーキも理解していた。何度か耳にしたこともある。

ガツカリされるのは構わないが、ここまで露骨であると癪に障るらしい。ユーキもニヤリと意地の悪い笑みを浮かべて、買い言葉で応戦する。

「残念だったなあ『鼠』。生憎だが、キリトくんはオマエなんぞに眼中にねえんだと。いやいや、同情するぜホント。ご愁傷様」

「いやいや、本当に残念だヨ。キー坊のような美少年が来て欲しかった。お前みたいな奴じゃ目の保養にならなねーナ」

「保養？ おいおい、視姦の間違いじゃねえのか？」

「へえ、これは驚いたナ。『アインクラッドの恐怖』って視姦って言葉の意味わかってるのか。意外に物を知ってるんだナ」

売り言葉に買い言葉。インフアイトの言葉の打ち合い。

しかしお互いに、嫌悪感はないようである。これが彼らの言葉のキャッチボールとでもいうかのような、当たり前のやり取りであった。

ユーキもアルゴも第二層からの付き合いだ。この程度の罵り合いなど、日常茶飯事なのだろう。

現にアスナも二人のやり取りを聞いて、咎めるような真似はしない。むしろいつも通りとでも言うかのように、動じない態度で聞いていた。

だがこのままでは話が進まないと思ったのか、困ったような笑みを口元に浮かべてアスナは話しの間に入ることにする。

「まあまあ、二人とも。そろそろ本題に入りましょうよ」

「……それもそうだな。こんなところで時間を無駄にする必要も——」
「——アルゴさんって、キリトくんのこと好きなの？」
「……いいや、そうじゃねえよ」

眼をキラツキラに輝かせて、アスナはアルゴに問いをぶん投げる。古今東西、どの世代においても女性というものは他人の恋バナが好きであるようだ。

思わずツツコミを入れるユーキに対して、不思議そうにアスナは首を傾げる。

「え？」

「え、じゃねえよ。話しが進まねえ」

アルゴの座っている一角のテーブルまで足をすすめると、彼女の真正面に座る。同時に「ほら、座れ」と椅子を引きアスナに着席するよう促した。

アスナも驚いた様子はない。むしろいつもやってもらっていると言わんばかりに驚く様子もなく「ありがとう」と笑みを浮かべてユーキに礼を言う。

二人のやり取りを見て、関心するように。そしてニヤニヤと冷やかにするような笑みを浮かべてアルゴは観察して口を開いた。

「へえ、『アインクラッドの恐怖』ってアーちゃんには紳士的なんだな？」

「うるせえよ。いちいち古いあだ名を引っ張り出してきてんじゃねえぞ」

「だったら『蒼炎』の方がいいカ？」

「話しが進まねえって言ってんだろ。さっさと本題に入れよ」

痺れを切らしたユーキは単刀直入にアルゴに問う。

真つ直ぐに、眼を逸らさずに、有無を言わずに。

「――茅場晶彦の正体が掴めたらしいな？」

「……おう」

それがアルゴが彼らを呼び出した理由。アスナが緊張していた理由でもあり、徹底的に人払いをして密談する理由でもあった。

2023年3月2日。

『カーディナル』からキリトとユーキは接触されて、茅場晶彦がプレイヤーとしてソードアート・オンラインにログインしていることを知った。本来であればありえない、と一蹴される内容であったが『カーディナル』からの情報であり、それを伝えるために彼女は散つていったのだ。信憑性はあるものであると結論付けて各々調査を始めた。

しかしここまで誰一人、茅場晶彦を特定した者はいなかった。だが――。

「聞かせてもらおうか。どこのどいつが、あのクソ野郎なんだ？」

感情を押し殺す声に、アルゴは一度頷くと。

「まずこのソードアート・オンラインはMMORPGだってことを頭に入れてほしい」

その言葉に、アスナは頷きユーキは無言で返す。

「だがこのゲームは普通のMMORPGじゃない。どこが普通じゃないと思う？」

「えーと、それは……」

アスナは少しだけ考えて。

「デスゲームだから？」

「そうダ。オイラ達はデスゲームをしてるんだヨ。そこが他のゲームと違うところダ」

HPゲージがなくなれば、現実の死を意味する。

そんなデスゲームと化したMMORPGに数万人いるプレイヤーたちは捕らえられていた。

その変わらない事実を再確認して、アルゴは話を続けた。

「クリア条件は至ってシンプル。第百層まで到達し、フロアボスを攻略すればいい。となるとダ——」

「——攻略組に紛れている可能性が高いつてことか」

ユーキの言葉に、アルゴは頷く。

ソードアト・オンラインの全ては攻略と言ってもいいだろう。

そうでもなければ、第百層のフロアボスを攻略したらプレイヤーたちの勝利となり、現実世界の帰還が約束される、なんてルールを作る筈もない。本当にデスゲームを行いたければ、それこそプレイヤーが一人になるまで殺し合わせるといったルールにする筈だ。

しかし茅場晶彦はそれを行わなかった。まるで「攻略させることに意味がある」とでもいうかのようなようでもあった。

攻略こそが全てのMMORPG。

その中に全ての元凶となった男がログインしている。となれば、茅場晶彦が攻略組でプレイヤーとして紛れているのは明らかだろう。

アルゴは片手でメインメニューウィンドウを開くと、アイテムストレージから羊皮紙を取り出し、二人の前に並べた。

「とまあ、ここまでがキー坊の推理ダ。オイラはそこからギルド内部の情報を洗つタ」

「うわあ、これ全部のギルド情報ですか？」

アスナが驚くのも無理はない。

その羊皮紙一枚一枚にギルドに所属しているプレイヤーの詳細が記載されていた。一枚ごとにギルドの詳細が記載されており、その数は十枚を遥かに超えている。

レベルから得意な武器、習得スキルから日々いかにして過ごしているか。これが世に出回ったら問題が起きると断言出来るほどの情報量である。

ここでアスナが気付いた。

「あれ、わたし達の情報はないみたいですね？」

「アーちゃん達は信用出来るからナ。除外してあるゾ」

それに対して、ハツとユーキは鼻で笑うと口元を意地の悪い笑みに変えて口を開いた。

「いいのかよ、そんなんで。オレ達が悪用するかしんねえぞ？」

「お前達なら、大丈夫だロ」

アルゴはキツパリと言い放つ。含みなどもない、彼女の本心。いつも一癖も二癖もある情報屋としての『鼠』としてではなく、素のアルゴという女性の感情を聞いてユーキは面倒くさそうに返す。

「一方的な信頼ほど、鬱陶しいものはねえな」

意地の悪く、捻くれた感想である。

しかしそれを言葉通りに受け取ればの話である。付き合いが長ければ長いほど、少年の複雑な内面がわかるようである。

それを証拠に、ニコニコとアスナは笑みを零してユーキの内面を訳す。

「ごめんね、アルゴさん。でもユーキくんかなり喜んでますから、気を悪くしないで下さいね?」

「……おい、勝手に誤訳してんじゃんねえぞポンコツ」

「えー? そんなこと言つて、顔に書いてるもん」

「……………」

「やめへえー…………! ふおふおをひっはるのやめへえ…………!」

無言で頬をつね始めるユーキと、それを抵抗もなく受け入れるアスナを見て、アルゴは呆れるような深い溜め息を吐く。

「お二人さん。イチヤイチャするのはいいけど、オネーサン話し進めてもいいかな?」

「イチヤイチャだなんて、そんな…………!」

「…………で、この中にあのクソ野郎がいるってわけか?」

顔をボン!と音を立てて赤く染めるアスナと、そんな彼女に何の反応を示さないユーキは話しの続きを促した。

お互いがお互い、深く触れない様子を見て、どうやら二人にとってこう言つたやり取りは、日常茶飯事と言えるのだろう、とアルゴは分析しながらユーキの問いに応答した。

「攻略ギルドは大規模から小規模まで数多い。その中でも、攻略を担っているのはコイツらだ」

そう言うと、数多くある羊皮紙から四枚の選んで二人の前に並べる。

そのギルドの名前は『月夜の黒猫団』『風林火山』『聖龍連合』そして『血盟騎士団』の四組。

そこからアルゴは手を伸ばし二枚の羊皮紙——『月夜の黒猫団』と『風林火山』の羊皮紙を注目させて、彼女は続ける。

『月夜の黒猫団』。平均レベルは50〜60。リーダーはケイタって奴だ。サチって女が後衛に移ってから力つけていったナ。お前達でいうところのリズベットみたいなポジションだナ」

「あつ、このギルド知ってます。前にキリトくんが手伝ってました」

ね、ユーキくん？ とアスナが話を振るとユーキは「ああ」と一度頷いた。それ以上のことは知らないようで、視線を『月夜の黒猫団』の羊皮紙から『風林火山』の詳細が書かれた羊皮紙に移す。

「コイツはキリトのダチが頭張ってるそこだろ？」

「そうダ。この二組は除外するゾ」

「なんでだよ？」

ユーキの問いに「あとで説明する」と言うたアルゴは一枚の羊皮紙を差し出して話しを続けた。

「となると残るのは二組。その中の一組である『聖竜連合』にも茅場晶彦はいない」

二人が疑問を口にする前に、アルゴは自分の集めた情報に基づいた結論を話す。

「『最大』の攻略ギルドなんて聴こえはいいが、実際の連中は烏合の衆だ。リーダーに指揮能力はなく、人を率いる器でもない。それを証拠に先日のコーバツツの独断行動だ」

ユーキにとってそれは記憶に新しい。

アルゴからメッセージを受け取って、キリトと共に救いに行ったことを思い出して、直ぐにどうでもいいと思書の外に弾き出した。

なによりも、とアルゴは言葉を区切り話を続ける。

「連中はこの世界を、一番楽しんでいるといってもいい」
「楽しんでいるですか？」

解せないと言う表情で問うアスナに、アルゴは頷いて答えた。

「攻略ギルドってというのは、この世界で注目を浴びる存在だ。だから連中は血盟騎士団やお前達に対抗意識を燃やしている。この前なんて血盟騎士団よりも上層に本部を移転したっただけで、パーティーを開いてたんだけだ。楽しんでない筈ないだろ？」

「あつたな……。アレにはわたしもちよつと引いた……」

ハハ、と呆れるような乾いた笑みをアスナは浮かべる。

ユーキは無言で腕を組みアルゴの話しを聞いているが、聖竜連合に茅場晶彦が紛れていないことを納得しているようだ。彼の性格を知っているからこそ、その結論に至ったのだろう。あの男に「楽しむ」という機能が備わっているとはユーキは到底思えなかつた。例えば演技だとしてもありえない。ユーキはそう断ずる。

何よりも――。

「もし仮にアイツが聖竜連合にいたとしたら、ゆにパツクだかコーバツツだかの勝手を許す筈がねえな」

「そういうことだ」

となると残りは一組。

アルゴは散乱していた羊皮紙を、一枚を除き全てアイテムストレージに収納する。

その残った一枚こそ。

「断言するゾ。茅場晶彦は『血盟騎士団』にいる」

「根拠は……？」

アスナの問いに、アルゴは答えた。

「情報の速度ダ」

それだけ言うと、アルゴは教鞭を振るう先生のようにアスナに問いを投げた。

「攻略するにあたって、情報って重要だロ？」

「う、うん。モンスターの出現場所、クエストの内容、経験値の効率から何をドロップするか知っているだけで大分安心する」

「情報ってのはそれだけ重要なんだ。特にデスゲームと化したこの世界ではナ」

どこぞのバカはこの重要性を理解してるか怪しいけどナ、とアルゴはユーキを見るが当の本人はどこに吹く風で受け止める。

自覚はある。情報なんて聞くこともなく、一人で突っ込み何度も叱られてきた。

だがそれよりも先の話しが気になるのか、ユーキは眼で「さっさと進めろ」とアルゴに訴え、彼女はその視線に応える。

「先ず情報っていうのは、『噂』を聞いて、何度も『検証』を重ねて、初めて生まれるものなんだ。例外はあるが、大筋はそんな感じ何だヨ」

だが、とアルゴは言葉を区切ると。

「血盟騎士団は『検証』をしない。最初から到達した階層に何があるか知っているように進めて行くんだ」

「え、アルゴさんの情報よりも早いですか？」

眼を丸くさせてアスナは驚き、アルゴは悔しそうに頷いた。

アルゴは『鼠』と称されるくらい情報屋としての腕は確かなプレイヤーだ。自分達の武器が“剣”であるのなら、アルゴの武器は“情報”。そうして彼女はこれまで生きてきたし、情報屋としてアルゴに並ぶプレイヤーはいないとアスナは思ってきた。アルゴもそれに関してはプライドを持つているらしく、頷いた彼女の表情は悔しそうである。

だがそれを上回る存在。

そうなつてくると――。

「開発者じゃねえとありえねえと？」

ユーキは結論だけ言う。

誰も知り得ない情報を知っている不可解。不可解を可能としているからこそその“最強”のギルド。それが血盟騎士団である。

なるほど、と。ユーキはようやくアルゴが『月夜の黒猫団』と『風林火山』を除外したことに納得した。

背もたれに寄りかかり、彼は口を開く。

「確かにその目線で考えるなら、『黒猫』と『風林』はハブかれんな」「うん。レベルが上がるのは早かったけど、レベルリングしていた場所もアルゴさんのオススメしていた場所だったもんね……」

そこまで言うと、アスナは「あつ！」と何かに気付いたような声を出して。

「茅場さんじゃなくて、関係者が血盟騎士団にいてその階層に何があるか知ってた可能性は？」

「ねえな。この世界は全部あのクソが一人で作ったもんだ。手伝いはいても、些細な手伝い。どこに何があるかなんて、アイツ以外誰も知らねえよ」

忌々しげに応えるユーキに、アスナは納得したようでそれ以上何も言わなかった。

誰も口を開かない。重たい空気が流れる。

無理もない。攻略組において、血盟騎士団とはそれだけの存在であった。紅い甲冑に身を包み、攻略組を牽引してきた最強の攻略ギルド。それこそが、血盟騎士団であった。

その中に問題の元凶が紛れいてる可能性が高いという事実。空気も重くなるというものだろう。

そうして口を開くのが。

「ごめんナ」

アルゴであった。

彼女は本当に申し訳なきそうに続ける。

「オイラじゃこれが精一杯だった。ギルドは特定出来ても、誰が茅場晶彦なのかわからなかった。これ以上はお前達に託すしかない……」

悔しそうに、歯がゆいとも言えるかのように、アルゴは両手を力いっぱい握りしめる。

プレイヤーを特定するとなると、血盟騎士団と同じ前線に立つしかない。しかし自分はそのままで強くない現実。となると、彼らに丸投げするしかない。その事実がアルゴにとって情けなく、悔しかったのだろう。

それは違う、とアスナは反射的に立ち上がる。

だがそれよりも早くユーキが口を開いた。

「これはオマエが、勝手にやったことだ」

「そうだな。お前の言うとおり、オイラが勝手にやって、勝手にお前達に託す。自分勝手にダ」

「ああ。オマエは勝手に動いた。誰に頼まれた訳でもなく、自分で考

えて動いた。その過程で何があるかも知ってた筈だ。もしかしたら、オマエはあのクソに殺されてる可能性すらあった」

だが、と言葉を区切り力強く断言する。

「オマエは諦めずに、自分の武器を最大限使って茅場晶彦と戦い、その刃は間違いなくあの野郎に届かせた。その過程を想像出来るほど、オレの想像力は豊かじゃねえ。だが恐かった筈だ、いつ殺されてもおかしくないと怯えていた筈だ」

その言葉には力があつた。

アルゴの背中を押す力強い言葉であつた。自分の行いを全肯定するのように、託すことは決して間違いではないかのような力強い肯定があつた。

「オマエはやり遂げた。誰に頼まれた訳でもなく、勝手に行動した結果、オレ達に道を示した。オレはそれが——凄いと思った」

ユーキは真つ直ぐに、アルゴを見つめる。

普段の捻くれた様子も、意地の悪い調子でもない。それはシンプルな、真つ直ぐな敬意を言葉に乗せていた。

アスナもそんなユーキを見て、笑みを零す。

彼なりにアルゴを励まそうとしていたことを、彼女は最初から理解していた。だからこそ邪魔をしないで見守ってきたわけだが、ここでアスナは口を開く。

「そうだよ。アルゴさんのおかげで、希望が湧いてきたもん！」

「アーちゃん……」

ユーキは立ち上がる。

アルゴに背を向けて、真つ直ぐ前へ、ただ前へ視線を向けて宣言す

る。

「ありきたりな言葉だがよ——あとは、任せろ」

.....
.....
.....

2024年1月23日 PM 17:20

第十八層 主街区『ユーカリ』

アレからアルゴと別れて、ユーキとアスナは帰路についていた。空は夕暮れ。赤く染まった夕焼けが、アインクラッドの十八層の空を染め上げていた。

すれ違うプレイヤーも帰路につく者達が大半で、これからクエストに臨むプレイヤーは数が少ない。

それが中層と上層の違いであろう。五十層に近ければ近いほど、夜でもクエストに向かうプレイヤーが増えるというもの。

その中を、二人は歩いていた。肩を並べて、お互いの歩調を合わせるかのように。

会話はなかった。それでも居心地が悪い雰囲気はない。まるで隣にいるのが当たり前前でも言うかのように、二人の間に心地よい空気が流れていく。

そこで。

「なあ」

ユーキが口を開いた。

こうして彼から話しを振るのは珍しいことであるが、アスナは特に驚いた様子もなく応じる。

「どうしたの?」

「オマエさ、茅場晶彦のことどう思っている?」

アスナは少しだけ考えて。

「わからないな」

「それはどう言う意味だ?」

「そのまんまの意味。ユーキくん達からプレイヤーとして聞いていることは聞いていたけど、いざ考えると、ね……?」

えへへ、と照れくさそうに笑みを零してアスナは問いを投げる。

「ユーキくんはどう思ってるの?」

「オレは……」

言葉に詰まった。

もちろん、彼を許したわけではない。

関係のない人間を巻き込んで、デスゲームなんて下らないことをやらせた彼が許すわけがなかった。ましてやアスナを巻き込んだ。それが一番許せなかった。

怒りはある、憤りもある、憎んでいたのかもしれない。

だがその感情も、最初の頃よりも薄れていていた。斬らなければならぬと思つた。あの男だけは、自分が斬らなければならぬと思つた。憎悪も嫌悪も憤怒も確かに残っている。にも関わらず、少年の中には別の『願望』が宿りつつあった。ありとあらゆる負の感情とは違う別の感情、異なる願望。

それがなんなのか、ユーキにはわからない。

茅場優希は、全ての元凶である茅場晶彦になにを思っているのか、わからないでいた。

だからこそ答えられない。

答えが見つからないのだから、言葉を紡ぐことが出来ない。

「ユーキくんはさ、自分が思っているよりも器用じゃないよ」

「あ？」

ユーキは隣を歩くアスナに顔を向けると、彼女は困ったように、しかし慈愛の笑みを浮かべて口を開く。

「君はわからないんじゃないよ、見えてないだけよ。晶彦さんをどう思っていて、何をしたいのかちゃんと答えは出ている筈」

それだけ言うと、アスナは足早にユーキの前に立つとニツコリと満面の笑みで。

「——大丈夫！ ユーキくんがどんな答えを出しても、わたしは君の味方！ だから君は、君のやりたいようにやっていいんだよ？」

「……オマエ、まさか」

オレとアイツの関係を知ってたのか？と尋ねる前にアスナが何かに気付いて視界をユーキから外す。

それからメインメニューウインドウを開く動作を始め、メッセージ画面を開いた。どうやら彼女にメッセージが届いたらしい。

内容を目で追い、アスナは問いを投げた。

「ユーキくんって明日時間ある？」

「……何かあったのか？」

うん、とアスナは言う。

「リズからのメッセージなんだけどキリトくと素材集めてたんだけど、途中で知り合ったモンスターテイマーの子の使い魔を蘇生するために明日クエストするんだって」

そうか、とユーキは応える。

少しだけ考えると「いいや」と首を横に振った。

問題のモンスターテイマーがどんな人物か知らないが、キリトが知っているのだ。自分が出張らなくても問題ないだろうと結論付けてユーキは答える。

「オレは別行動をとる」

「一応聞くけど、どこに行くの？」

アスナの表情からもうすでに何を言うのか知っているようでもある。

ユーキも当たり前のような口調で。

「オマエならわかんたら——」

ユーキは確かめに行くだけだ。いつも通り、今まで通り、少年は実直に前に進む。

自分が何を想っているのか、茅場晶彦をどうしたいのか。

「——血盟騎士団のここだよ」

第5話 虎穴に入らずんば虎児を得ず

2024年1月24日 AM10:35

第四十七層 ダンジョン『思い出の丘』

—— 辺りは一面花の畑だった。

主街区『フローリアン』を見た瞬間、思わず「わあ……！」という声を上げたのは記憶に新しい。何せ“少女”にとつて数分前の出来事だ。それは鮮明に覚えていた。

四十七層に転移して“少女”の眼に映ったのは無数の花畑である。四十七層のゲート広場はレンガで囲まれた花壇となっており、“少女”も知らない花が咲き誇っていた。

しかも無駄に咲き誇っていた訳ではない。

緻密に計算された、どこにどの花を置けば映えるか、この花はどの花と一緒にあればより美しく見えるか、計算に計算された配置で、見る者を魅了する作りとなっていた。

“少女”もその一人である。辺りに目を奪われて、精密に作られた花を愛で、この上層までやって来ていた。

しかしそれも、最初の話し。

これは簡単かもー、なんて思っていた彼女の心境は一辺することになる。

目的地のダンジョン『思い出の丘』に到着するや否や、“少女”の心境は見事に180度反転していた。

見える景色は変わらない。

『フローリアン』で見たように、一面は花畑。デスゲームと化した世界とは思えない穏やかな景色が広がっている。だが、ダンジョン内のモンスターは違う。

頭に花が咲き誇っている、まるで花に寄生されているような焦点が合っていない狼。

口元に血がついていて、大きな口のような器官が特徴的な食人植物。

ヌルヌルでテカテカした触手が頭から何本も生えている大型モンスター。

他にも見た目がグロテスクなモンスターが『思い出の丘』に蔓延っていた。

しかも追い打ちをかけるように、上層ということもあってかレベルも高い。『少女』はもともと中層を拠点としているプレイヤーである。上層、しかも四十七層を探索できるほどレベルもなければ、プレイヤースキルも高くない。

もはや自分の身を守るのに精一杯。だというのに、もう既に『少女』は『思い出の丘』の中枢まで進んでいた。

本来であればありえない。

自分の身を守るだけで精一杯のプレイヤーが、上層のダンジョン内を中枢まで進めることなんてありえないのだ。

ならばどうしてか。それは簡単な話だった。

少女はパーティーを組んでおり、そのパーティーが四十七層など簡単に踏破出来てしまうほどのプレイヤーであったからに過ぎない。

「——なるほど。それでアイツはいないのか」

黒髪の少年がモンスターの攻撃を弾いて、「スイッチ」と言う掛け声で後ろに下がる。

それに続いて頭髪が栗色の少女の細剣のソードスキル『リニア』がモンスターの頭部を突き刺し、消滅したのを確認して会話を続けた。

「うん。確かめに行くみたい」

「確かめに行くって何を？」

「うーん、自分の気持ち……かな？」

黒髪の少年はその言葉を聞いて、いまいち要領を得なかったのか首を傾げる。

二人が何を話していたのか、「少女」には幸いなことに聞こえていなかった。聞く余裕が無いと言った方が正しいのかもしれない。

なにせこの層は「少女」にとって未知の領域。装備を一新されて、中層を拠点としているプレイヤーにしてはありえないほど高性能で固められている。それでも緊張はするし、自分の身を守るのに精一杯だった。

そんな人間が、他人の会話に聞き耳を立てれるわけがない。だからこそ「少女」は質問をした。

自分の装備を一式作ってくれて、そして自分を守護してくれている桃色の髪の毛の彼女に、質問をした。

「リズさん、あの二人は何を言ってたんでしょうか？」

「えっ!? あー、大丈夫よ。シリカが気にすることじゃないから」

答えになってない返答聞くと「少女」——シリカは「んー?」と首を傾げる。真上には大量のクエスチョンマークが飛び交っていることだろう。それぐらい前を歩く二人の少年少女の会話が気になっていた。

それを「ははは……」と乾いた笑いを浮かべて誤魔化す桃色の頭髮の少女——リズベットは気が気でなかった。

何せ二人が話していたのは、この世界をデスゲームに変貌させた全ての元凶である茅場晶彦が攻略ギルドたる『血盟騎士団』にいる可能性がある、という会話であった。

ほとんどが誰も知らない真実。更に言えばシリカは中層プレイヤーということもあり、攻略組を雲の上のような存在の人達と捉えていた。そんな人間が二人の会話を聞いた日には卒倒することだろう。

リズベットの心境など知らずに、前衛を担当している二人は呑気に会話しながら高レベルモンスターを倒していく。

気楽な調子であるが、慢心もなければ油断もない。単純に余裕であるのだろう。

それがなおのこと質が悪い、とリズベットは溜息を吐くと。

「あの、ごめんなさい……」

シリカは眼を伏せて、申し訳なさそうに呟いた。迷惑をかけていると感じていたたまれない気持ちの現れか、ギユツと服の裾を握っている。

「どうやら今の自分の溜息で勘違いさせた、と理解するとリズベツトは慌てて否定する。」

「べ、別に今の溜息はアンタに向けたわけじゃないわよ」

「でも、あたしがへましちやっただから皆さんに手伝わせちゃって……」

シリカは『ビーストタイマー』であった。

ビーストタイマーといっても、ソードアート・オンラインにクラス名にもスキル名にも、そんな職業ジョブは存在しない。

エンカウトしたモンスターと戦闘せず、なおかつ友好的な興味をプレイヤーに示し、餌など与えてタイム出来て始めて使い魔としてモンスターと共に戦うことが出来る。故にプレイヤー達は、モンスターを使い魔と使役出来るプレイヤーを『ビースト・タイマー』と呼んでいた。

しかしこのビースト・タイマーだが、なる条件が難しいものであった。

ソードアート・オンラインのモンスターは、プレイヤーとエンカウトしたら襲ってくる仕様である。襲ってくるのだからプレイヤーも攻撃したり、逃げることだろう。デスゲームとなったこの世界において、モンスターは飼いならず存在でないし、ましてや直ぐに襲ってくるのだからタイムするという選択肢はない。

更に言えば、ビーストタイマーになる条件も、今のところ判明できていない。タイムしたいモンスターとエンカウトして、イベントが起きなければ使い魔として使役することは出来ない。イベントが起きないのだから、逃げてまたイベントが起きるまでそのモンスターと

エンカウントし続けなければならないのだ。仮にイベントが起きたとしても、必ず使い魔に出来る確証もないのだ。

そんな労力、途方もない労働をするくらいなら、自己を鍛えてレベルを上げたほうが効率的だろう。

モンスターを戦わせることが出来るという羨望、死ぬ確率が低いという妬み。嫉妬やつかみとなり、いつしかモンスターを使役できるプレイヤーは『ビーストテイマー』と呼ばれるようになっていた。

そして幸運にもビーストテイマーとなったシリカは良くも悪くも目立っていた。

珍しいビーストテイマーということも然ることながら、そもそもが絶対的に少ない女性プレイヤー。つけ加えるのなら、シリカという少女は可愛いと称される女性である。

いつしか注目され、人気も出て、ファンを持つようになる。シリカが『竜使いのシリカ』と呼ばれるようになるまでそう時間はかからなかった。

シリカの人気は凄まじく、中層プレイヤーにとってのアイドルとも言えるくらい有名となっていた。その人気といえば数ヶ月前までは『ウタちゃん』と呼ばれる歌エンチャンターと同じくらいのもの。

年端もない。ましてや十数歳の幼いシリカにとってアイドルのような扱いを受けるのは初めてである。彼女が舞い上がるのは仕方ないとも言えるだろう。

それが彼女の不幸といえる。

舞い上がっているシリカを誰も注意するプレイヤーは存在せず、むしろ良く思われたいが為に男性プレイヤーはシリカを守ろうとする。それこそがシリカにとっての不幸であった。

思えば人は人を不幸にするように、シリカもその流れに逆らうことはできなかった。

彼女は事故により、最愛の使い魔『ピナ』を殺してしまったのだ。

事故と言っても、避けられたモノであった。彼女の不注意によって、モンスターから奇襲を受けてしまい、主人を身を挺してモンス

タワーの攻撃から守り、ピナは消滅してしまった。

もつと自分が注意深くしていれば、身の程を弁えていれば、ピナは死なずに済んだのではないか？

命からがら、『ピナの心』というアイテムを回収して、途方に暮れていると「どうしたの？」と黒髪の少年に声をかけられて、現在に至るということだ。

今は使い魔を復活させることができる、『思い出の丘』へ向かい進んでいるのだが。

「本当にごめんなさい。あたしのせいで、皆さんには無駄な時間を……」

自分のせいでピナが死んで、今も自分のせいで関係のない人達が迷惑をしている。

その揺るぎない事実が、シリカにとって情けないものであり、自身に怒りすら覚える。

しかしリズベットはシリカの頭を優しく撫でて笑みを零す。

そんなことはない、とシリカの負の感情を拭い去るかのよう。

「アイツにとって人助けってのは、趣味みたいなものよ。だからアンタが気負う必要はないの」

「そう、なんですか……？」

恐る恐る尋ねるシリカに、リズベットは力強く頷くと。

「アイツ、というかアイツら？　うちの男連中はお人好しばかりなのよー」

もう一人の方は絶対に認めないけどね、と困ったように笑みを零す。だがその笑みはどこか誇らしげでもある。

視線を黒髪の少年に移す。

全プレイヤーを絶望の淵に叩き落としたモンスターキラーを討伐した英雄。

ベータテスターの風当りに立ち向かい、見事改善させることが出来た少年。

この世界で二人目のユニークスキル持ちの二刀流使い。

『はじまりの英雄』『二刀流』と呼ばれるプレイヤー——キリトの姿がそこにあった。

巧みに片手剣を使いこなし、モンスターを斬るキリトに鼓動が早くなり、頬もどこか紅潮していくのを自覚する。

シリカからしてみたら、攻略組を担うキリトはヒーローのような存在である。気取らずに、鼻にもかけずに、困った人を無償で助ける気高い精神性。それは正に英雄と言えるモノであった。

「はじまりの英雄さん、カッコイイですね……」

自然と出た言葉に、耳聴くりズベツトは反応した。

ニヤニヤと笑みを零し、意地の悪い笑みを浮かべる。

「なにになに？ アンタ、キリトに惚れたの？」

「べ、別に違いますよ！ ただなんというかその、攻略組で『はじまりの英雄』って呼ばれてて、カッコイイなあって……！」

そこまで言うと、ここにいるメンツが凄まじいことにシリカは改めて気付いた。

攻略組でも五本の指に入るほどの実力者である『はじまりの英雄』。それを従えているギルド『アクセル・ワールド加速世界』のリーダーである栗色の髪の少女——『紅閃のアスナ』。

そして隣には彼らを支えている『クリエイター』。もう一人である『魔獣』と呼ばれるプレイヤーの姿はいないが、攻略ギルド三強の一角を担う『アクセル・ワールド加速世界』のメンバーがこの場にいる。雲の上のような存在

達と会話をしているという事実には、自然とシリカの肩に力が入る。
今まで普通に会話していたのに、いきなり変貌を遂げているシリカにリズベツトは怪訝そうな顔で口を開いた。

「アンタ、どうしたの?」

「な、なんでもありませんっ!」

何でもない訳がなかった。

肩に力が入っているのはもちろんだが、表情は強張っており、眼が泳ぎ、極めつけは右足と右足が同時に出かねない。

誰がどう見ても緊張していることがわかる。

一体どうしたのか話しを聞こうとするが、前に視線を向けるとキリトが手を降ってシリカの名を呼んでいた。どうやら目的地に到着したようだ。

それにシリカは気付いていない。緊張しすぎて、周りが見えていないようだ。

リズベツトは苦笑いを浮かべて、シリカの背を後押しするように背中を叩きながら。

「ほら行った行った! アンタのヒーローが呼んでるわよ」

「え、あたしをですか?」

ほら、とリズベツトはキリトの方へと指差して視線を促した。

自分の名が呼ばれていることを気付いたシリカは、花が咲いたように笑みを浮かべてキリトの方へと足早に駆け寄っていく。

だが直ぐにリズベツトの方へと振り返って。

「あの、リズさん」

「ん?」

「ありがとうございます。おかげで元気が出ました!」

「別にいいわよー。あと忠告だけど、『はじまりの英雄』って呼ばれる

のアイツ苦手だから気をつけなさい」

「はい！……え、でもと言うことは名前呼び？ きゃー、どうしよう……！」

と、小声で両手を両頬に添えて足早にキリトの方へと向かう。

それと入れ替わるようにアスナがリズベットの方へ歩いて来るとニツコリ笑みを浮かべて口を開いた。

「お疲れ様リズ。ごめんね、シリカちゃんの護衛頼んじやつて」

「なんもいいのよ。アンタ達がモンスター倒してくれたから、こんな短時間でここまでこれたんだし、あたしにはこれしか出来ないから」

片手を振って気持ちの良い笑みを浮かべてリズベットは言う。自虐とも言える内容であるが、彼女の表情からはそんな気配は何えなし、彼女もそんなつもりで言ったわけではないのだろう。

アスナも理解しているのか、笑みを浮かべてやんわりと首を横に振る。

「そんなことないわよ。リズが後ろについてくれるから、わたしもキリトくんも安心して前衛に専念が出来たわけだし」

そう言うやいなや、アスナもリズベットと肩を並べて同じ方向へと顔を向ける。

その先にはキリトとシリカの姿があった。

キリトとシリカはくぼんだ岩の真ん中に視線を向けて、固唾に見守っていた。それから直ぐに白い花が咲くと、恐る恐るシリカが手に取る。

直ぐにキリトを見上げると、キリトは優しく微笑み、シリカは嬉しそうに頬を赤く染めて笑みを返していた。どうやら成功したようである。これでシリカの使い魔も蘇生させる事が出来る。

見守っていたアスナは安心したのかホッと胸を撫で下ろすと、意地

の悪い笑みを浮かべて。

「ライバル登場って感じ?」

「うるさい」

アスナが何を言わんとしているのかわかると、リズベットは間髪入れずにピシヤリと返す。

その反応が楽しかったのか、クスクス笑みを零しながらアスナは続ける。

「リズ、アルゴさん、サチさんにシリカちゃん。モテモテだねキリトくん」

「そういうアンタはどうなのよ?」

「大丈夫大丈夫。まったくモテないから」

アスナは油断しきっていた。

確かにアスナの想い人は粗暴で、口調も乱暴、眼つきも悪ければ、性格も捻くれている。

キリトと比べてモテる要素など一欠片もないのも事実であるが、何が起こるかわからない。それが人生というものだ。

いつしかアスナも焦るときが来るかもしれない、そんな未来を想像して思わずリズベットは溜息を吐く。

それから呆れた口調で問う。

「……それで? ユーキのヤツはどこで何やってるのよ?」

「あれ、言っただけ? ユーキくんはね——」

.....

2024年1月24日 AM 11:10

第三十九層 主街区『ノルフレット』

主街区と言つても、特に特徴がある街並みではなかった。

典型的なファンタジー世界の田舎町と言つた佇まい。木々や水辺が多く、素朴な木の家、大きな風車、そして牧場と素朴な街。それが第三十九層の主街区『ノルフレット』である。

とてもではないが、最強の攻略ギルド『血盟騎士団』が本拠地として構えているとは思えない。

だが現に、ここが血盟騎士団の本拠地である。

それを証拠に、無所属のプレイヤーの他にも、血盟騎士団に所属している紅い甲冑に身を包んだプレイヤーと数度すれ違っている。

すれ違った血盟騎士団のみんながみんな、振り返って怪訝そうな表情を浮かべている。無理も無い、そこまで「彼」は良い意味でも悪い意味でも有名人であるのだから。

彼はそんな視線すら気にせず、ぶっきらぼうな口調で質問を投げる。

「オマエはなんでそんなに嬉しそうにしている訳？」

質問というからには一人では成立しない。

一人であればそれは独り言で終わるが、生憎「彼」は今一人ではなかった。

「彼」の隣で歩く少女——ユウキは「ん？」と小さく可愛らしく首を傾げて。

「嬉しそうかな？」

「自分がニヤけてんの気付かねえのかよオマエ」

呆れた口調で言う「彼」とは対称的に、それはもう嬉しそうに満面の笑みを浮かべてユウキは答えた。

「だって久しぶりなんだもん、にーちゃんとかうしてどっか行くの！だからボク、凄く嬉しいんだ！」

純粹な好意。

裏などない純度100%の気持ちをぶつけられて、「彼」はどう返していいかわからず取り敢えず四文字で返した。

「そうかい」

「うん、そうだよ！」

「……緊張感が足りてねえな。オレ達が今から何しに行くかわかってんのか？」

「晶彦さんが血盟騎士団にいるかもしれないでしょわかってるよ」

それだけ言うと、ユウキはどこか不安そうな声色で。

「……ボクはにーちゃんといれて凄く嬉しいけど、にーちゃんはボクといれて嬉しくないの？」

打って変わって、ユウキは表情を曇らせる。どこか「彼」の機嫌を伺うようで、怒らせまいとしている様子であった。

見る人間からしてみたら、それは健気に映ることだろう。しかし「彼」はそんなユウキが気に入らなかった。

だがそれはユウキが気を使っているからであり、それが気に入らないと指摘して良いものかどうか。それが原因でユウキを傷つけてしまうのではないか。この世で残ったたった一人の義妹を泣かせてし

まうかもしれない。そんなことが許されるだろうか。兄としてどう言えば正解なのか。

「彼」は不器用に、自問自答を何度も器用に繰り返す。それから絞り出した答えが、これまた不器用極まりないものであった。

「嬉しくないわけじゃねえよ」

「そっか。それじゃ、嬉しいんだね！」

「あ？」

どう言う理屈でそうなったのか疑問を持ち、「彼」はユウキに視線を向ける。

ユウキはこれまた、先程の曇らせていた表情とは180度反転して、嬉しそうに笑みを零しながら。

「嬉しくないわけじゃないって言うことは、にーちゃんにとって嬉しいことだ、ってアスナが言ってたもん」

「……アイツ、また変なことを吹き込みやがって」

チツ、と小さく舌打ちをする。これが的外れであるのなら鼻で笑うのだが、正解であるのだから「彼」は何も言えなかった。だからこそ舌打ち。何も言えないのだから、どこかに小さな八つ当たりをするしかなかった。

だがここで新たな疑問が生まれる。

自分と一緒に行動するのが嬉しいと彼女は言った。ならば何故、ユウキは寝泊まりをギルドホームで行わないのか。

これを聞いて良いのか、彼女が困らないか。また新しい自問自答をしながら、「彼」は意を決して問う。

「どうしてギルドホームに来ねえんだ？」

「それはね——にーちゃん達の邪魔したくないからだよ？」

それはどう言う意味なのか。

“彼”が問う前に、ユウキは元気よくある場所を指差す。

そこにあるのは田舎屋敷のような木造の建築物。

これまた最強のギルドが拠点としている建物とは思えないのだが、大きな門の中の敷地内にある正面扉の上にかかけられているギルドフラッグが証拠となっていた。

血盟騎士団。ギルドの英語名『Knights of the Blood』の略称である『KOB』の三文字と十字剣の紋章が染め抜かれた真紅のギルドフラッグ。それは間違いなく血盟騎士団のものである。

門の前には番兵らしき団員がいた。

いかにもな門番。体躯が非常に優れており身長は2メートルはある。両手斧を片手に持ち、微動だにしない。

ユウキは少しだけ、困った笑みを浮かべて尋ねる。

「どうしよう、にーちゃん？」

「プランBだな」

「プランBの作戦って？」

「あ？　ねえよんなもん。正面突破だ」

それだけ言うと、“彼”は堂々とした歩調で歩き始める。言うとおりに、隠れる気など一切ない調子に、慌ててユウキも追いつがる。ユウキの表情に不安といった感情はない。むしろ楽しそうに笑みを浮かべて、とてもリラックスした調子である。“彼”と一緒に居るから大丈夫、とでも言うかのような雰囲気だった。

そして堂々と調子を崩さずに、兄妹は口を開く。

「ご苦労」

「ごくろー」

「あ、お疲れ様です」

「彼」は片手を上げて、ユウキは笑顔で彼に真似をするように。あまりにも堂々としており、一瞬だけ通しかけるも門番は「あれ？」と頭を捻り直ぐに二人の後を追いかけて前に立つ。

「ま、待て待て！　なんだ貴様らー！」

「ご苦労」

「ごくろー」

「待て、待て待て！　それはもう通じんぞ。……ちよつと、片手を上げて行こうとするな！」

避けて通ろうとする兄妹に、また前に立って道を塞いだ。

行けると思ったのに、と言いたげな不満そうな声で「彼」は文句の声を上げる。

「うるせえなあ、見学だよ見学。そこをどけよ門番A」

「なんという横暴な言い方だ。ダメだ、帰れ！」

わかったわかった、と言うとチラリと「彼」はユウキの方へと視線を向ける。ユウキも「任せてにーちゃん」と視線で答えると自信満々に頷いた。

それから二人は門番に向き直って。

「オレ達」

「ボク達は」

「血盟騎士団の職場見学しに来ました」

「違う違う！　言い方が悪いのではない。見学がダメだと言っている！　部外者は帰れ！」

「オレ達」

「ボク達は」

「繰り返してもダメなものはダメだ！」

ゼーゼー、と息を荒げる門番は「彼」を指差して大きな声で荒らげる。

「第一、貴様『魔獣』だな！ 貴様は加速世界アクセラ・ワールドの者だろう！ 何の用だ、スパイをしに来たのではないのか!？」

「もうスパイでもなんでもいいからよお、中に入れろよ」

「スパイはダメだ!」

「んじや、スパイじゃねえよ」

「スパイじゃなくてもダメだ!」

と、門番は断ずると今度は「彼」から隣りにいるユウキへと意識を向けた。

「む、貴様は『絶剣』だな。ソロで行動している貴様が何の用だ? 『魔獣』と共にいるということは、貴様も加速世界アクセラ・ワールドのメンバーになったのか?」

「違うよ、ボクは——」

どこか寂しそうな声色で、どこか悲しげな表情で、ユウキは口を開く。

しかしその先が続くことはない。「彼」がユウキの前に立つと、遮るようにしてキツパリと言う。

「そうだよ、コイツも加速世界アクセラ・ワールドのツレになった。よろしく」

その思いもよらなかつた言葉に「え?」とポカンとした表情になるユウキと、やつぱりそうか!と更に声を荒げる門番。

ますます膠着状態は続いた。入れろという「彼」に対して、ダメだと頑なに拒む門番。どちらも引かない押し問答に。

「これは、どう言う状況だ?」

「彼」達の後ろから声が聞こえた。

青い頭髮に、紅い甲冑。大きな盾をその背に背負い、腰には片手剣が鞘に収まっている。如何にも騎士ナイトという出で立ちのプレイヤー。

門番は騎士を見た瞬間、慌てて頭を下げて。

「副団長！」

騎士——副団長と呼ばれたプレイヤーは片手で応じる。

誰だ？と「彼」は怪訝そうな顔で振り返ると、副団長は「彼」の顔を見て眼を見開き驚いた表情に変えると。

「……この人は俺の客人だ。君は下がってくれ」

「え、いやしかし……」

門番は「彼」と副団長を交互に見て、なおも何か言いたげに視線を泳がせる。不審者を追い返すべきか、それとも副団長の指示通りに動くべきか。

選択は早かった。どうやら門番は不審者に対する疑問視よりも、副団長への忠誠心が勝ったようだ。門番は副団長に頭を下げると、元にした門の前に戻っていった。

それを確認して、副団長は一息つく。

「団員が失礼したね」

「いいや、それよりも……」

「彼」は怪訝そうな顔で副団長を見る。

警戒心を露わにするのも無理はない。何せ「彼」からしてみたら、面識がない人間が手を貸してきたのだ。ましてやここは茅場晶彦が紛れているギルドの本拠地。怪しむなというのが無理な話であるし、もしかしたらこの男が茅場晶彦の可能性すらある。

ユウキの前に、彼は庇うように立つと。

「アンタ、誰だ？」

「……フロアボスの攻略の際、何度か顔を合わせたことがあるんだけどな」

苦笑いを浮かべて、直ぐに人の良さそうな笑みになると。

「改めて、初めまして。『魔獣』それとも『蒼炎のユーキ』もしくは『アインクラッドの恐怖』と言った方がいいかな？」

『アインクラッドの恐怖』呼ばれなくなって久しい名であり、自分がそうであると知る人間も少なく、既に風化しつつある異名。

なんだコイツは、と彼——ユーキはますます警戒心を強める一方。副団長は親愛を籠めて己の名を告げた。

「俺の名前はディアベル。元アインクラッドナイトのリーダーであり、今は血盟騎士団の副団長をやらせてもらっている。君に命を救われた男だ」

第6話 『騎士長』ディアベル

2024年1月24日 AM 12:30

第十八層 主街区『ユーカリ』

アレから問題もなく、『ビーストティマー』シリカの使い魔ピナを蘇生しキリト達はギルドホームがある第十八層の主街区『ユーカリ』まで戻っていた。

何も問題なく、何も滞りもなく、全て予定通り。しかし、キリトからしてみたらず々拍子抜けでもあった。

使い魔に必要なアイテム『プネウマの花』はレアアイテムであり第四十七層のダンジョン『思い出の丘』にしか存在しないアイテムだ。

第五十層までしか到達していない現状で、四十七層は攻略組からしてみても高レベルのモンスターであるし、プネウマの花を一つ摘みに行くというだけでは非効率極まる。

この世界では数少ないビーストティマーの使い魔である蘇生用のアイテム。蘇生するためには三日以内という期限があるものの、使い魔を殺してしまったビーストティマー達にとって、これほど欲するアイテムは存在しないだろう。

だからこそ邪な事を考えるプレイヤーにとって、プネウマの花は欲しいアイテムの筈だ。

例えば、ビーストティマーをパーティーに誘い、わざと使い魔が死んでしまうような状況を作り、奇遇にも『プネウマの花』持っていると言ひ、それをビーストティマーに高値で売りつける。

しかし先程言ったように、いちいち高レベルモンスターがひしめくダンジョンに行ってもいられない。

となれば待ち伏せして、プネウマの花を入手したプレイヤーを襲い力強く奪えばいい。そんな考えをして、実行するプレイヤーがいると思っただけだ。

「——って考えていたんだ。ま、そんなことなかった訳だけど」

「……キリトくん、まるでユーキくんみたいな考え方するね？」

説明が終わり安堵とも取れる溜息をキリトが吐くと、隣で歩く女性プレイヤー——アスナが苦笑を混じえて感想を呟いた。

それに対して心外だ、と言わんばかりにキリトは面白くなさそうに苦い顔になりながら問いを投げる。

「……それは嫌だな。そんなに似てる？」

「うん。斜めに物事を捉えているというか、警戒心アリアリって感じ」
「……俺達からしてみたら、アスナ達が呑気すぎるんだけど」

そうかなあ、とアスナは首を傾げるのを見て、キリトは一度だけ力強く頷いた。

呑気と言うより、ポワポワしているといった方が正しい。キリトから見たアスナという少女はそういう少女であった。

だがこと攻略においては、その限りではない。的確な指揮、モンスターへの知識、そして類まれなる剣技。どれをとっても、アスナというプレイヤーは一流であった。

モンスターやフロアボスと対峙する際には冷静そのもので、攻略会議での発言する際にも凜とした佇まいで意見する。普段の「ポワポワ」しているアスナはその場には存在しない。その場に存在するのは『紅閃のアスナ』という攻略組である。

数多くのMMORPGを経験し、ソードアート・オンラインでのベータテストを体験したキリトからして見ても、アスナのプレイヤーとしての完成度には目を見張るモノがあった。

普段のポワポワしたアスナ、攻略組としての『紅閃のアスナ』。二つのギャップはそれは凄まじい。

要はONとOFFの違いである

更に言えば、ユーキと一緒に居るアスナはONとOFFどころの話ではない。そもそもスイッチという概念が存在しないというかのように、彼女は蕩けきっている。それを必然的にフォローするのが

ユーキの仕事なのだ。

そこまで考えて、キリトは思わず口に出してしまう。

「ユーキのヤツも大変だな……」

「キリトくん、それはどう言う意味かな？」

ハツ、と口を抑えるもはや手遅れ。

アスナはにっこり満面の笑みを浮かべて問いを投げる。非常に攻めるタイプの笑顔を向けられて、思わずキリトはしどろもどろになりながら話題を変える。

「そ、そう言えばさ！ 買い物はこれで終わりだよな!？」

「……誤魔化してない？」

「していないしてない、するわけがない」

必死にブンブンと勢い良く首を横に振るキリトを見て、アスナは納得言っていないものの渋々といった調子に片手でメインメニューウィンドウを開く。それから慣れた手つきでアイテムストレージを開き確認して、ようやくキリトは安堵のため息を吐いた。

「うん、これで全部だね」

「しかし、結構な数になったな……」

キリトも自分のアイテムストレージを開き確認しながら呟いて、アスナもその言葉に同意する。

「数が数だもん。仕方ないわよ」

「ほとんどがエギルから買ったモノだしな」

キリトの脳裏には居丈高に「H A H A H A H A H A H A H A H A H A！」とサムズアップしながら笑うエギルの姿があった。

彼がエギルにどんなイメージを抱いているのかつゆ知らずに、アスナは満足気に大きく頷いて。

「想定してたコルよりも安く買えたし、リズも大喜びだよ」

今もシリカとユイの相手をしているリズベツトはくしやみをしていることだろう、とキリトはぼんやりと思う。

アスナとキリトのアイテムストレージを見ても、食材を大分買い込んでおり、その量はまるでこれからパーティーをするかのようでもある。実質それは的を得ていた。現にこれから彼らは加速世界（アクセル・ワールド）のギルドホームにてパーティーをするのだから。

ことの発端は、数十分前の話し。

シリカの使い魔である小さなドラゴン、種族名は『フェザーリドラ』のピナを蘇生させて、ギルドホームでお茶を飲んでいたときの話しだ。

血盟騎士団のギルドホームに向かっていたユーキからアスナへメッセージが飛んできたのだ。内容はとても淡白なもの。

『妹がギルドに入ることになった。パーティーの準備をしてほしい。必要経費は全部オレが払う』

それを聞いたキリトとリズベツトは「やつとか」と笑みを零し、アスナとユイは「遂に!」と喜び、いまいち要領を得ていないシリカとピナは首を傾げていた。

当初は加速世界（アクセル・ワールド）メンバーだけで行う歓迎会だったのだが、アスナのテンションが上がりの上つて「知り合い全員呼んじやおう!」ということになり現在に至るとのことだ。

だから食費などの経費は全て割り勘となっているのだが、そのことをユーキはまだ知らない。

アイツが帰ってきたらまた一悶着あるな、とキリトはそんな未来を想像しつつふとある疑問が浮かびアスナに問いを投げる。

「そう言えばさ、あの二人って兄妹なんだよな?」

「そうだよ。どうかした?」

「いや、なんか、こう……。その割に、距離感が曖昧というか、チグハグというか……」

自分で言っておいて、説明になっっていなかった。

兄妹と言う割に近く、だがどことなく遠い存在とも言える。

どうして遠いと感じるのか。

どちらかと言えば、ユウキから甘えまくり、それをユーキも受け入れている。それが二人の兄妹の距離感とも言える。

ユーキがソファアに座れば、その隣をユウキが笑顔で座る。兄に甘えたい年頃とでも言うかのように、ユウキは兄に甘えまくっていた。それこそ喜びのあまり尻尾をブンブン振り回す子犬の如くである。

そこまで考えて、普段の二人のやり取りを思い出してキリトがハッと気付く。

「そうか。そういうことか……」

「え、なにになに?」

「距離感が近いのに遠いなあ、って思ってたんだ。その原因がわかってさ」

そこまで言うと、キリトは納得するように頷いて。

「アイツがユウキに気を使いすぎなんだ」

「あ、やっぱりそう見える?」

対するアスナは薄い反応を見せた。どうやら彼女は最初からわかっていたらしい。

反射的にキリトはアスナに疑問をぶつけた。

「知ってたのか?」

「うん。距離感が掴めないってユーキくん言ってたよ?」

「距離感、ねえ……」

キリトにとつてもその気持はわからないでもなかった。

家族関係に上手く行かずキリトは壁を作ってしまった。それに対してユーキは妹と上手く行き過ぎてはたしてこのまま兄貴面してもいいのだろうか、と疑問に感じているのだろう。

自分とは真逆の悩みだ、と思う一方で新たな疑問が生まれてくる。ユーキの悩みは普通の兄の悩みではない。それこそ突然、妹が出来てどう接していいかわからないといったものだ。生まれたときから妹がいるといった悩みではない。

その疑問はアスナに聞けばわかることだろうが――。

――いいや、やめておこう。

――アイツだって詮索されたくないこともあるだろうし。

――親しき仲にも礼儀あり、だ。

――……別に親しいつもりはないけど。

心中で意地を張るキリトだが、どうやら顔に感情が出てしまっていたらしい。

口元をへの字に曲げて仏頂面で腕を組むキリトに、アスナは覗き込むように伺ってきた。

「どうしたの、キリトくん？」

「べ、別にユーキのことなんて思っていないんだからな！」

「ふえっ？」

思わず口から出た言葉にポカンとするアスナを見て、話を変えられために慌てて「ゴホンッ！」と大きく咳き込んでキリトは口を開いた。

「……でも妹がいると、どう接していいかわからなくなるよな」

「っていうことは、キリトくんにも妹がいるの？」

「ああ、いるぞ。今は疎遠になってるけど……」

昔は可愛かった、シリカに似ていた。とキリトはしみじみ昔を思い出す。

衝撃な事実を知った、と言わばかりにアスナは驚くも、直ぐに調子を取り戻して。

「お兄ちゃんって複雑なんだねー。わたしもお兄ちゃんがいるけど、そんな素振り見せたことなかったなあ……」

「へえ、アスナって妹なのか……」

それだけ言うと、キリトは頭のとっぺんから足の爪先までアスナの姿を眼で追う。今更であるが、アスナは美少女の類と言えることにキリトは気が付いた。

どこか正体不明な気品のようなモノがあり、すれ違えば眼であとを折ってしまうような魅力がある。育ちが良いとも言える。

ジーっと見られるのが少々恥ずかしいのか、居心地悪そうに首を傾げてアスナは問う。

「どうしたの？」

「ご、ごめん！ アスナってお嬢様っぽいなーって思ってたさ」

思考をそのまま口するキリトに対して、アスナは困ったように笑みを零すと。

「ううん、そんなことない。わたしは普通だよ。お兄ちゃんがいて、許嫁がいたけど今はいなくて……お母さんとも上手くいつてないけど」
「……………」

はたして許嫁がいるのが普通と言ってもいいのだろうか。

価値観が違うというか、別の世界の住人のような気がしてならな

い。というか、許嫁って本当にいるんだ、とキリトは呑気なことを考えていると。

「おや」

と、背後から声が聞こえる。

聞き覚えがある声に、キリトとアスナは振り向いた。

そこには――。

「こんな所で会うとは、奇遇だね」

不思議な雰囲気身を纏う男が一人。

ソードアート・オンラインには存在しない魔道士と思わせるような男。

武器などは一切携帯しておらず、普段から身に纏っている赤い重装鎧などは装着しておらず、今は長いロープを身に纏っている。

攻略最強ギルド『血盟騎士団』の団長にして、『聖騎士』とも呼ばれるアインクラッドの最強の剣士。

『神聖剣』――ヒースクリフがその場に佇んでいた。

.....
.....
.....

2024年1月24日 PM 13:25

第三十九層 主街区『ノルフレット』『血盟騎士団』ギルドホーム

アレから二人の兄妹は『血盟騎士団』副団長ディアベルに案内されていた。

会議室から、血盟騎士団の団員が寝泊まりしている宿舎、食堂から資源在庫室などくまなく連れ回されていた。

そして今。

彼らは血盟騎士団のギルドホーム敷地内の外へ来ていた。

そこには学校のグラウンド程の面積が広がっており、それをグルッと周囲を牧柵で囲んでいた。

それだけを見るなら変哲もない風景とも言える。何せ、第三十九層の主街区『ノルフレット』は典型的なファンタジー世界の田舎町と言っても良い町である。木々や水辺が多く、素朴な木の家、大きな風車、そして牧場と素朴な街。それが第三十九層の主街区『ノルフレット』であるのだから。

しかしここに、目を疑うような光景が映り込む。

血盟騎士団のギルドホームはもちろん圏内にある。だというのに、牧柵で囲われた中には——モンスターが沸いて出ていた。

一目見て、ユーキは思わず妹の前に庇うように躍り出るも、ディアベルは大した驚く様子もなく「非常に硬いモンスターだけど攻撃力は低し、柵から出てくることはないから大丈夫さ」と兄妹に説明する。

しばらくユーキは観察していたのだが、ディアベルの言うとおりモンスターは柵から出てくることはなく、中には訓練している血盟騎士団の姿も存在していた。

モンスターからの攻撃を受けても恐れている団員がいないことから、ディアベルの言うとおり攻撃力はないに等しく、主に訓練用として扱っているのだろう。

出現するモンスターは主に、金属製のゴーレムのような二メートルほどのモンスター。

動きもそこまで早くなく、落ち着いて対応すれば敵ではないと言える。しかしさすがに訓練用なだけはあって体は硬く、質の高いプレイヤーが揃っている血盟騎士団でも一体のゴーレムにかなり時間をかけていた。

そんな中、一人の紫の影が踊るようにしてゴーレムの体を斬り結んでいる。

それはまるで舞踊だ。ときに飛び、時に空中で一回転したと思ったら、同時にゴーレムを斬りつけている。

躲すと同時に、攻撃する。そんな重力を感じさせない身のこなしで、ゴーレムを切り倒していく。もちろんゴーレムの攻撃など、一撃も喰らっていない。

一人だけ別次元とも呼べるプレイヤースキルを遺憾なく見せつけるユウキに対して、牧柵外から見ていたディアベルは素直な感想を感じしながら呟いた。

「凄いな、君の妹は」

「……フン、アイツならあの程度出来て当然だ」

同じく牧柵外から、ディアベルの隣に立って腕を組みながらユーキは言う。

表情も仏頂面で、言葉通りに受け取るなら冷たい兄として映るのだろう。しかしその声色は若干の高揚が入り混じっている。どうやら妹が褒められて、嬉しいのだろう。それを他人にわかるように振る舞えば誤解されることもないのだが、それが出来ないのがユーキという男である。

現に、ユーキとディアベルの会話を盗み聞きしていた数人の団員たちは眉を顰めている。

大方、なんて薄情な男なのか、と思っっているのだろう。だがディアベルはそうではないようだ。彼は人の良い笑みを浮かべて。

「ハッハハ、君は自分の妹を高く買っているみたいだね」

「……別に、事実を言ったただけだ」

そうか、と言葉を区切り壁を作るような言い方をされてもさして気

にすることなくディアベルは続けようとするも、それを遮るよう
にしてユーキは本題を切り出した。

「アンタ、一体何が狙いなんだ？」

「狙いつて？」

「とぼけんなよ。ンでここまでオレ達親切に接することが出来る？」

何か狙いがあるからに決まってるんだろ」

そう言うと同時に、ユーキの警戒心は強まっていく。

ユーキからしてみたら、ディアベルという男の行動に道理などな
かった。門番に下がらせて、特に条件をつけることもなく本拠地であ
るギルドホーム内部を案内する。中には機密となりえる情報すら
あった。

だからこそ、ユーキは断ずる。

オマエは信用出来ない、と警戒心を強めていく。

対するディアベルは、ユーキが警戒していることも勘付いていたか
らか、特に気にする素振りすら見せずに新たな問いを投げる。

「困っている人を放って置けなかったって選択肢は？」

「ンなもんねえよ。見返りもなく他人の為に動く人間なんざありえ
ねえ。いたとしても、そいつはよつぽどのバカ野郎さ」

その言葉を聞いたディアベルは笑みを零す。

クスクス笑う彼に対して、ユーキは眉を顰めて。

「……何が可笑しい？」

「よつぽどのバカ野郎って、君が言うのかと思ってね」

「ああ？」

解せないと言わんばかりに顔を顰めるユーキに対して、ディアベル
は「気を悪くさせてしまったのなら、すまない」と謝ると周りに聞こ

えない小声で事実だけを伝える。

「オレはね。かつて君に——『アインクラッドの恐怖』に救われたんだよ」

「な——に——？」

眼を丸くさせるユーキに、やはり気付いてなかったのかと苦笑を浮かべてディアベルは続けた。

「かつてオレは、アインクラッドナイトのギルドリーダーやっていてね。それも十八層のフロアボスにボコボコにされて壊滅されてんだ」
「……………」

アインクラッドナイトというギルドに、ユーキは聞き覚えがあった。

かつて一人で行動していた際に、何度か顔を合わせていたギルドである。何度か言葉を交わした覚えはあるが、当時のユーキは『アインクラッドの恐怖』と呼ばれていた。つまり余裕も何もなく、それ以上交流を深めようする気などなかった。

自分を付け狙っていた殺人鬼——P O Hに唆されて、何の情報もないままフロアボスに挑み敗北。死者は出てないものの、それが原因で解散してしまったとアルゴから話しは聞いていた。

当時を振り返るように、穏やかな口調と表情でディアベルは口を開く。

「昔のオレは未熟でね。人を率いる経験も覚悟もないのにリーダーなんてやっててさ。ギルドメンバーの暴走を止めることが出来なかった」

「……………」

「駆けつけたは良いものの足が竦んじまってさ、情けないったらなかったなあ」

自分の失敗を嘘偽りなく打ち明けるディアベルに、ユーキは耳を傾ける。

「そんなオレを、オレ達を君は守ってくれた。だからずっと言いたいことがあったんだ」

「……待ってくれ」

そこでユーキがようやく口を開いた。

黙っていた少年は口を開き、事実だけを淡々とした口調で告げる。

「オレはアンタ達を助ける気なんてなかった。結果として助けたただけだ」

「だけど――」

ディアベルはまだ何かいいかけるも、ユーキは横に首を振ってやりわりと遮って。

「メンバーが暴走したっていうのも、元はと言えばオレが勝手にやって焦らせちまったからだ。だったらオレに非があるし、アンタ達は巻き込まれただけだろう」

今度こそ、ディアベルは言葉を失った。

三十人以上をフロアボスから救っておいて、それを誇示するわけでもない。ましてや暴走したのは自分のせいだと本気で言い放つ少年の精神性。

少年の言葉は本気なのだろう。救われて恩を感じなくてもいい、むしろ自分の責任だから悪いと思っている、と少年は本気で言っている。

他人を助けて誇るでもなく、見返りすら求めない。

その姿に、ある種の神聖をディアベルは見出していった。その姿はまるで——ヒーローそのものであった。

だからこそディアベルは心がへし折れずにここまでやってこれた。自分よりも歳が下の少年に追いつくために、いつか彼の助けとなるために努力してきた。

その結果が、血盟騎士団の副団長だ。今では『騎士長』^{ナイトリーダー}と称されるほどであった。

だがそれでも、少年の前ではまだ足りない。

ここまで気高い精神性を見せつけられ、その背中はまだ遠いことを思い知らされる。その背中はまだ遠く、手を伸ばした所で地平線の彼方。

「ありがとう」

そう言うと、ディアベルはユーキに向かって頭を下げる。

それから頭を下げたまま彼は言う。

「君に非はない、悪いのはオレ達だ。そしてオレ達は君に救われた。その事実が変わらないし、例え君でも覆せない。——オレ達を救ってくれてありがとう」

真正面からの謝辞。

純粹な敬意に対して、ユーキはどう返せばいいかわからなかった。恨まれることはあった、怒りをぶつけられることはあった、中には憎しみをぶつけられることもあった。

礼を言われることも数は少ないものの経験したことがある。だがそれでも、こういったモノにはなれないものだ。自分の行動が間違っていないかつ肯定されるのは、いつまでも慣れそうにない。何せユーキ自身が自分を否定している人間だ。そんなもの慣れるわけがなかった。

故にユーキは自分らしく振る舞うしかなかった。

チツ、と小さく舌打ちをして嬉しさという感情を押し込めて、自分の本心を悟らせないように。

「恩を感じるかどうかはアンタの勝手だが、オレに憧れてるっていう黒歴史は捨てておいた方がいいぜ。恥ずかしくなるから」

「にーちゃんーん！」

ユーキは声のする方向へと顔を向けて、ディアベルもそちらへと頭を上げる。

そこには手をブンブン振っているユウキの姿があった。どうやらある程度満足したのか、満面の笑みでユーキの元へと駆けていく。

「にーちゃん？」「『蒼炎のユーキ』の妹？」「あの『魔獣』に妹!？」といった周囲がザワつき始めるがユーキは気にすることなく駆け寄ってきた妹に応じる。

「どうした？」

「にーちゃんもやってみてよ」

お願い！とユウキの指差す方向には金属製のゴーレムの姿。

メンドクサイと断るのか、勝手にやつてろと断るのか、それとも無視するのか。周囲はどうやって断るのか、固唾を呑んで見守っている。何せ『魔獣』と呼ばれ、最大のギルド『聖龍連合』にたった一人で喧嘩を売った男だ。気性が荒く、凶暴極まりない男に違いない。そんな男が妹の頼みなど聞くわけがない。

しかしその予想とは反して。

「オマエ、何発でアレ倒した？」

「んー十回くらい斬ったかな？」

そうか、と言葉を区切るとメインメニューウィンドウを開き、ユーキは自身の愛剣『アクセルワールド』を取り出して獰猛に笑みを零し。

「ならオレあ一太刀だ……！」

それだけ言うと、牧柵内へと足を進める。

頑張つてー！とエールを送るユウキに対して、周囲は益々ザワついた。

「ノリノリだ」「案外ノリノリだ」「良いところを見せたいんだ」「かなり張り切ってる」

その後、凄まじい暴れっぷりをユウキは見せる。

金属製のゴーレムを素手でぶん殴り、両手剣で一刀両断にし、両手剣をぶん投げて穿ち、ドロップキックでゴーレムの胴体を粉々にし、ゴーレムそのものを片手で持つて振り回す。

それはもうバーサーカーと言えるほどの暴れっぷり。

それを見ていたユウキは「にーちゃんかっこいい！」と黄色い声援を送り、ディアベルはポツリと言。

「見習おう。オレもアレくらい出来るように頑張らないと……！」

第7話 『聖騎士』 ヒースクリフ

2024年1月24日 PM13:10

第十八層 主街区『ユーカリ』

十八層の主街区『ユーカリ』は昼時ということもあり、大層な賑わいを見せていた。

ちょうど昼時、そして場所が中層ということもありプレイヤー達も行き来しやすい、加えてユーカリの街並みが一層の『はじまりの街』によく似ているということもあり、この階層を拠点とするプレイヤーは実のところ多かった。

だからだろうか。道端で商売をする“商人”も多い。もちろん、それはNPCではなくプレイヤーである。

彼らが十八層で商売をしようと目をつけるのは理にかなっているだろう。単純な話し、プレイヤー数が多いのだから、商売も人が多い場所で行ったほうが効率が良いというもの。

故に、路上では露店のようにアイテムを広げて商売をしているプレイヤーが数多く存在していた。

自身がダンジョンで潜った際に手に入れたアイテムを売るプレイヤーも居れば、鍛冶スキルを上げて武器の強化を請け負っているプレイヤーも居る、中には家事スキルを上げて料理を作り販売しているプレイヤーもいた。

とてもではないが、のんびり過ごせる状況ではない。

絶え間ない喧騒、頻繁な人の行き来、呼吸も歩調も合わない人の歩み。人が忙しなく動くには充分過ぎる材料が十八層には溢れかえっていた。

活気というものののだろうか。とてもではないが、デスクゲームに囚われているとは思えない。プレイヤーの眼が輝いており、生き生きしているのは誰が見ても明らかであった。

そんな中、大通りに面したオープンカフェに二人は丸いテーブルのある席に座っていた。

普通であれば、この二人を見れば忽ち辺りはザワつき、衆目を浴びることだろう。それだけ二人の顔は知れ渡っており、注目されるのも話題にされるのも仕方ないことである。

しかし今はそんな心配もない。周りのプレイヤー達も人の大波に乗ることで手一杯なのか、二人の存在に気がついていない人間はいなかった。

二人には会話がない。

一人はどこか興味深げに行き来するプレイヤーを観察しており、もう一人は黙ってその姿を見ていた。ただ見ているだけではない。警戒している、と言っても過言ではない眼でもう一人を見守っている。

警戒している彼——キリトは突然の来訪者の意図を測りかねていた。

キリトとアスナが買い物をしている所に、突然目の前にいる男が来訪してきた。いつもであれば、偶然ということでの出会いは処理される筈である。

だがタイミングがタイミングだ。鼠のアルゴから茅場晶彦は血盟騎士団に所属している可能性が高いという推理、ユーキが血盟騎士団のギルドホームに向かった現在。どう考えても、彼の来訪するタイミングがおかしい。

故に、キリトはアスナを先に帰らせることにした。そして自分はと言うと、眼の前の彼が妙なことをしないように見張っている。もっと詳しく言えば——。

「——まるで、見張られているようだな」

「——っ」

目の前の男——ヒースクリフは口元に不敵な笑みを張り付かせて自らが置かれている状況を言う。

ヒースクリフの的を得た指摘に対して、キリトは焦ることもなく注文していたカップに指を引っ掛けて飲む。

口内には苦いブラックコーヒーの味が広がり、思考がクリアになり

彼もまた笑みを口元に浮かべて返した。

「そう思うってことは、団長殿はやましいことでもしてるのかな？」
「さてそれはどうかね」

両肩をすくめて困った笑みを浮かべるヒースクリフを、カップをテーブルの上に置くとキリトは愛想笑いを浮かべた。まるでそれは「冗談だよ」と言うかのような友愛を示す笑みだ。

ヒースクリフが茅場晶彦という確証はない。

曰く『聖騎士』。

曰く『アインクラッド最強の剣士』。

この世界に三人しか存在していないユニークスキル『神聖剣』の一人目の発現者。

言ってしまうえば、この男は茅場晶彦と真逆に位置する人間だった。下層プレイヤー、中層プレイヤーはおろか、攻略組でさえ彼に希望を見出しており羨望している者も数多く存在する。

物事を常に俯瞰的に捉え、指示は的確であり、まるで「賢者」のような雰囲気身を纏っている。そのカリスマ性、器の広さ、そして未だにHPバーを1ドットすら削られていないプレイヤースキル。どれをとっても最高クラスであり万能だ。『アインクラッド最強の剣士』というものの肩書通りである。

誰もが茅場晶彦とヒースクリフが同一人物とは思わないだろう。顔も違うし、声帯も違う。何よりも彼は希望であり、絶望を与えた茅場晶彦と同一人物な訳がない。それが周囲の共通認識であるだろう。だがしかし、だからこそキリトは疑惑の眼を向けていた。

ヒースクリフは完璧だ。いいや、「完璧すぎた」。

人には欠点が存在する。それこそ誰にでもだ。キリトにも、アスナにも、リズベットにも、ユイにも、ユウキにも、エギルにも、アルゴにも、クラインにも、この場にはいない——彼にも存在する。

だがヒースクリフにはそれがなかった。ありえないほど彼は完璧

な存在であり、その姿はどこか役割を遵守する機械のようでもある。
断言するとキリトはヒースクリフが茅場晶彦であると思っている。
そしてこれは誰にも言っていない。彼の胸の内にはしまっている疑惑だ。

この疑惑を確信に変えたい。だからこそこうして一つの席に腰を
落ち着かせているのだが。

——隙がない。

——それもそうか、相手はヒースクリフ。

——アインクラッド最強の剣士だぞ。

——安々と尻尾を出す訳がない。

それでも諦める訳にはいかない。

「彼」だって血盟騎士団のギルドホームに向かっているのだ。自分だけ何もしない訳にはいかなかった。「彼」と対等であるためにも、自分も自分なりに戦わなければならない。キリトはそう思っていた。

これからどう揺さぶっていくか。それだけを考えていると。

「フフツ」

ヒースクリフから笑みが零れる声。

四苦八苦しているキリトを嘲笑っている——訳でもないようだ。彼は行き来する人の波を見て、笑みを向けていた。

「何か面白いことでも？」

「いいや、別に特別なものを見たわけではないさ」

ただ、と言葉を区切ると。

「この層は一際活気があるな、と思つてね」

「活気？」

「そうとも。見てみたまえ」

ヒースクリフに促されて、キリトも人混みへと視線を向けた。

それを見て、なるほどと納得して口を開いた。

「どこぞのバカが深夜にギルドホームから抜け出して、見回っているからさ。だから治安が良いんだろう」

「ほう？」

キリトが言うどこぞのバカが誰なのか、ヒースクリフは特定すると興味深そうにキリトに視線を向ける。

呆れた口調で、探るようにキリトは続けた。

「そのバカはアンタのギルドホームを襲撃してる訳だけど、こんなところで油売ってて大丈夫なのか？」

「そのようだ。立ち止まって考えるよりも、少しでも前に進む。実に彼らしい」

どこか懐かしむようにどこか遠い目で、まるで気にしないような口調でヒースクリフが言うが、キリトには違和感を覚えた。

まるでその口調は「彼」を良く知っているようである。だがキリトの記憶が正しければそんなことはない。ありえないと言っても良い。

「それは変だな」

「変、とは？」

「アンタの口調はアイツのことを知っているみたいだけど、アンタとアイツは今まで会ったことがない筈だ」

攻略会議でも、フロアボス攻略の際にも、「彼」とヒースクリフが

顔を合わせることはなかった。

「彼」がフロアボス攻略に出張るときはヒースクリフが不在で、ヒースクリフが攻略に先頭に立つときは「彼」は参加せずにいた。

偶然、ここまでくると運命と言っても過言ではない。「アインクラッドの恐怖」と『聖騎士』が顔を合わせることはなかった。

だというのに、ヒースクリフは「彼」という人間を知っているかのようで、長年から付き合いがある友人のような気軽さで「彼」を評している。

これほど違和感を覚えることはない。
しかし当のヒースクリフは当たり前のような口調で返す。

「三人目のユニークスキル『蒼炎剣』の発現者だ。どんなプレイヤーか調べるのは当然だろう」

出現条件もなく、さらに熟練度達成でも得ることが出来ないスキル。それが『ユニークスキル』である。

キリトの『二刀流』とは違い、「彼」の蒼炎は心インカーネイト意システムによるものだ。だがどういうわけか、いつの間にか「彼」が纏う蒼炎は『蒼炎剣』というユニークスキルを習得したからということになっており、「彼」もそれに応じることにしていた。

心インカーネイト意システムを公表すれば済むのではないか、と思うのだがそれこそ得体の知れないシステムだ。イメージによる具現などと信じる者はいないだろうし、何よりも信じて発現させ無茶をし最悪死ぬプレイヤーが現れるかもしれない。

現に「彼」は死にかけた。そんな危険なシステムは公表できる訳がなかった。

そんな事実を知らない筈のヒースクリフは「彼」三人目のユニークスキル発現者であると捉えて、「彼」の情報を集めたらしい。

しかしそれでも、キリトは納得が出来なかった。「彼」その口調、その態度、その信頼は情報を集めたから築ける代物ではないだろう。顔を合わせたことも出来ない人間に対して、一定以上の信頼を築ける

筈がないのだ。

そう思うと、自然とキリトは背にある黒い直剣『エリシユデータ』に手を伸ばす。

コイツは自分の、自分達の、いいや——『アイツ』の敵であるかもしれない。得体の知れない感覚、ヒースクリフという正体不明の脅威に理屈ではなく、本能で敏感に察知すると自然と手を伸ばしていた。

遂に右手にエリシユデータの柄の感覚を握りしめたと思いきや——
——世界がブレた。

「……………っ!？」

正確に言えば、時間が僅かに盗まれたと言った方が正しいのかもしれない。

キリトの視界がピタリと停止したと思いきや、スローモーションで動く周囲とは裏腹に、ヒースクリフはその何倍以上の速度で動いていた。その速度の落差は、消えたと認識させるほどのものであった。

そうして『はじまりの英雄』の目の前にいた『アインクラッド最強の剣士』は——。

「キリト君、見給え——」

後ろからポン、と。軽い衝撃で肩を叩いて、ヒースクリフは何事もなかったようにキリトに話しかけていた。

「……………どいをっ。」

疑問を口にする。

正体不明の現象を目の前にして冷や汗が流れる。なるべく平常心を保ち、ヒースクリフへ疑問を投げかけた。

顔を横に向けて肩口からヒースクリフへと視線を向けた。彼はキ

リトが剣を手にしたことを気にする様子はない。むしろその反応は予想通りと言わんばかりである。

ヒースクリフは人混みに視線を向けており、キリトもその視線を追う。

誰もがデスゲームに囚われているとは思えない顔つきをしている。いいや、囚われていると認識した上で、それを受け入れて懸命に生きている。そんな顔を全員が全員している。そんな印象をキリトは受ける。

「誰もが『絶望』して諦めるわけでもなく、押さえつけるでもない。受け入れた上で懸命に明日を目指して生きている」

キリトは人の波からヒースクリフへと視線を移す。

口元には笑みを張り付かせているが、その笑みは嘲笑うものではない。どこかわずかに慈愛の色が見え、まるで世界の創造主が「こんな世界を見たかった」というかのようなそんな笑みを浮かべていた。

「……まるで絶望^{デスゲーム}を肯定しているみたいな言い方だな」

「まさか。私もこの世界から一秒でも早く抜け出したいと考えているさ。しかし彼らにとっても、私達にとってもこの世界が今の現実^{リアル}だ」

変わりようがない事実。HPバーが削りきられれば死ぬ現実。出口は第百層のフロアボスを倒さない限り脱出が出来ない真実。

それをキリトは突きつけられる。その上でヒースクリフは元いた自分の席に座り直して、テーブルに両肘を付き手を組んで問いを投げける。

「キリト君から見て、この世界はどう映っている？」

「俺から、見て……？」

「現実と遜色のない仮想空間。ここに何一つ現実世界のものはない。仮初の肉体、テクスチャで貼られた景色、感覚だけで実感がない風。

そんな偽物ばかりの世界で、君はどうして必死に生きている？」

生きている理由。そんなもの考えたことがなかった。死にたくないから剣を取り、死にたくないからレベルを上げて、死にたくないからここまで歩いて来た。

そうして巻き込まれて直ぐに、彼は行動に移していた。死にたくないから、生きて家族に会いたかったから。父親に、母親に、義妹——直葉に会いたいから。キリトは死にたくなかった。

最初の生きている理由なんてそんなものだった。今でもそうだろうか。

「……いいや、そうじゃないな」

ポツリとキリトは自然と言葉が溢れた。

そうではない。最初は家族に会いたいというありきたりな理由だった。キリトの運命を決定付けたのは一つの出会いだった。

偶然出会ったプレイヤー『コペル』にMPKされかけて、心が折れかけていた自分に「彼」ぶっきらぼうに言った。

『オマエ、オレ達と組め——』と。

第一印象は最悪に尽きる。

第二印象も最低に尽きる。

キリトと「彼」の関係はその程度のもものだった。しかしいつしかキリトの中の「彼」に対する心境が変わっていた。

自己を犠牲にする精神、決して止まることのない強い意志、何事も偽悪的に解決しようとする思考回路。その全てが気に入らなくて、一人で前に進む彼の背を追うようになっていた。「彼」に負けたくないから、「彼」と対等でありたいから、「彼」を追いかけて肩を並べることが出来た。

それは紛れもない現実であり、仮想などではない。

「確かに、アンタの言うとおりで。この世界は偽物だ」

キリトは眼を閉じる。

笑みを浮かべるアスナがいた、世話を焼いてくれるリズベツトがいた。手を握ってくれたサチがいて、黒猫団の面々が満足気に頷いている。姉妹仲良く手を繋いでいるストレアとユイがいた。肩を組んでくるクラインもいれば、それを見て笑みを浮かべるエギルがいた。剣を向けて勝負をしようとせがむユウキがいて、悪戯するような笑みを浮かべるアルゴが居た。

そして――。

「――でも、俺がこの世界で出会った人達は、間違いなく本物だ」

――両腕を組み、背を向けている素直ではない彼がいた。

閉じた眼を開き、キリトの双眸がヒースクリフを捉える。

「レベルやデータじゃない、この世界にはそれ以上にたくさんの大事なモノが詰まっていた」

「君にとって大事なものは？」

「――絆だ」

臆面もなく、キリトは言い放った。

ヒースクリフはその言葉を眼を閉じて静かに受け止めている。自分の心に打ち込むかのようにキリトの言葉を受け止めていた。

「俺はアイツらと現実世界に帰る。その為なら何だってやってやるさ。それこそ、何でもだ」

「アイツらということとは、彼も入っているのかな？」

「そうだ」

間髪入れずに、キリトは返す。

ヒースクリフは解せないと言った調子で問いを投げた。

「それは妙だな、君と『彼』は仲が悪い筈だ」

「アンタの言うとおり、俺はアイツと喧嘩ばかりしてる」

今までの自分たちの言動を振り返る。

第一層から今まで、喧嘩ばかりしていた。ときには言い争い、ときには競争し、ときには決闘してここまでやってきた。

「この前だって喧嘩したばかりさ。アイツとの決着も付いてない。125回も争って、俺達はまったく進歩がない」

誰がどう見ても仲がいいとは言えない間柄だ。そんなこと、自分たちが一番良く理解している。だがそれでも――。

「だがそれがどうした？ 普段から仲良しだから良いってわけじゃないだろう」

それに、と言葉を区切りキリトは続けた。

「友達とか親友とか悪友とか簡単な言葉では収まりきらない。そんな甘っちょろいモンじゃないんだよ俺達は」

「……そうか。君は、君達はこの世界で生きてきたのだな」

それだけ言うと、ヒースクリフは席を立つ。

そして空を見上げた。その視界には本物の空はない。それでも彼は満足気に口元を緩めて。肩の荷が降りたような安心するかのような優しい口調で続けた。

「彼が変わった理由がわかった気がするよ」

それだけ言うと、ヒースクリフは慣れた手つきでメインメニュー・

ウインドウを開くと。

「これは、興味深い」

何が興味深いのかキリトが尋ねる前に、ヒースクリフが答えた。

「そちらの『彼』と、こちらの副団長が決闘するようだよ——」

第8話　そうして少年は幸福を受け入れる

2024年1月24日　PM13:30

第三十九層　主街区『ノルフレット』　血盟騎士団本部

人垣は円形となり、その中央には二人の剣士の姿があった。

一人は全身フルプレートの紅色の鎧を着込んでいる。片手には大きな盾に、もう片方には片手剣を装備していた。大層な鎧に、上半身の程の大きさの盾。本来であれば動けないほどの重量の筈であるが、それを感じさせないほど軽快な動き。剣を振るっても体の軸がブレることもなく、鎧のせいで動きづらいという様子もない。まるで羽毛で出来ているかのように、盾を自在に使いこなす。

それだけで彼が実力者であることがわかる。

もう一方の彼もまたラフな普段着ではなく、同じく武装している。

その手には、彼の――ユーキの愛剣でもある両手剣が握られていた。黒い長袖のインナーの上から胸部を覆う白色の鎧。手首には手甲が装備されており、堅実さよりも身軽さを追求したようでもある。黒色のズボン、その腰からは濃い蒼色の布が垂れている。そして、そのベルトには例の紅色の宝石の付いたペンダントがぶら下がっていた。

数十度の剣戟、数十度の火花。そして、その倍の歓声が二人を包み込む。

「ディアベル様！　そんなガキに負けないでー！」

全身鎧の彼――ディアベルが剣を振るう度に歓声が湧き、斬撃を盾で防いでも歓声が湧き上がる。

無理もない。この場所は血盟騎士団のギルドホームであり、ディアベルは副団長と言う立場だ。アウエー中のアウエー。敵地と真ん中であるのだから、ディアベルに歓声が集中するのも無理はない。無理はないのだが――。

「にーちゃんなら余裕だよ！ 行け行けー！」

そんな当たり前の現実が、彼女には気に入らなかったようだ。

血盟騎士団のメンバーと共に二人の剣戟を見守っていた彼女——
ユウキが声を張り上げてディアアベルではなもう一方を応援する。

その声は良くも悪くも、一番目立っていた。

何せ周りは副団長であるディアアベルへの歓声一色なのだ。その中に違う声があるのであれば、目立ってしまうのも仕方ないことだろう。

そしてその声に反応する団員が一人。

それは先程ディアアベルを応援していた女性であった。赤い髪に気の強そうな眼で「ああん？」とユウキを睨みつけると。

「ディアアベル様が『魔獣』なんかに負けるわけないじゃない」

その声はわざとらしいモノだった。

やれやれ、と肩をすくめて両手を軽く上げてジエスチャーまでしている。まるでユウキに聞こえるように、見せつけるように。

見せつける態度、見え見えな挑発。それはユウキも分かっていた。彼女は自分を怒らせるためにわざとやっているのだと。

理解した上で、ユウキは乗ることにした。挑発だとわかっているのだが、彼女の態度が気に入らなかったのだ。慕う兄が馬鹿にされた上に、「なんか」と表現された事がムカついた。

だからこそユウキはムツとした表情で、不快感を露わにして、睨めつけて応じることにした。

「君、失礼だと思ふな。にーちゃんのこと全然知らない癖に」

「君ですって？ アンタ、口の利き方には気をつけなさい。アタシの方が年上なのよ？」

「だったら、もう少し大人の振る舞いってヤツをしてほしいんだけど

なあ、オバサン」

「よっぽど泣かされたいみたいねえ、ガキンチヨ？」

「やってみてよ。悪いけど、ボクだって結構強いよ？」

バチバチ、と。赤い髪の女性とユウキの視線の間で火花を散らしていた。

このまま何もなければ、二人で決闘するような殺伐とした空気を漂わせる。だがそんなことは起こらなかった。

ワアツ、と周囲が再度沸いた。どうやら、ユウキとディアベルの戦況が変わったようだ。

そこで二人が我に返る。こんなヤツを相手にしている場合ではない、敬愛する人の応援をしなければならぬ。と二人の優先順位は直ぐに切り替わった。

「にーちゃん！ 頑張れー！」

「ディアベル様、けちよんけちよんにしてくださいそんな奴！」

ワーワーギャーギャー、と二人は再度声を張り上げた。

.....
.....
.....

地面に両手剣を突き刺して、ユウキは息を整えた。

義妹の声援に答える為ではない。元より、そんな余裕など少年にはなかった。

小休止。

何度も剣を交えて疲れたので、一呼吸置いているに過ぎない。

——結構やるなコイツ。

——片手剣のときのヘタレ剣士くらいか？

——伊達に血盟騎士団の副団長やってねえな……。

侮っていた訳ではない。

しかし、ディアベルの強さはユーキの想定以上のモノだった。

身体に染み付いた体術、練度の高いソードスキル、勝負強さ。彼の強さは、ソードアート・オンラインに囚われているプレイヤーのトップクラスと言える。少なくとも十指には確実に入る程の腕前だ。

だがそれよりも、ユーキはディアベルのある一点に注目していた。洞察力でもなければ、身体能力の高さでもない。最も注目すべき点といえば——。

「……やっぱり強いな」

そこで数十メートル程離れているディアベルがユーキへ声をかける。

その声に余裕などなく、彼の頬からは汗が一滴伝っていた。どうやら余裕が無いのはディアベルも同じようである。肩で息をし、だがしかし大盾と片手剣は手放していない。いつでもユーキの奇襲に対応できるように、彼は警戒していた。

強い、と称されたからにはそれは賞賛なのだろう。現にディアベルは嫌味もなく、純粹にユーキの強さを讃えているつもりだった。

だがユーキはチツ、と舌打ちをして応じてみせる。

「アンタの守りを崩せなかった野郎に向けられる言葉じゃねえよなそれ。嫌味か？」

「まさか。君の剣にオレはまったく反撃が出来なかった。ボコボコにされてたのはオレの方だと思っけどな」

自嘲するようにディアベルは肩をすくめる。

彼の言うとおりに守る側と攻める側、両者の立場は綺麗に別れていた。

片や手堅く相手の攻めを耐え抜き、隙を逃がさず攻めに転ずる重装のディアベル。片やそもそも相手の出方を見る必要はないと言わんばかりに、直感と自身の膂力のみを信頼するユーキの荒々しい剣術。

攻めるユーキ、守るディアベル。ユーキが最強の矛であるのに対して、ディアベルは最硬の盾。矛盾の再来と言っても過言ではない。

彼らが行っている決闘デュエルのルールは「初撃決着モード」。一撃でも当たれば勝敗を決するシンプルなルールだ。一番簡単であるが、剣が当たらなければ決着などありえない。

だからこそ、ユーキは攻撃の手を緩めなかった。ディアベルの大盾の上から力いっぱい振り下ろし、時には切り上げて、時には水平に叩きつける。その際、ディアベルの身体が宙を浮きふっ飛ばされようとも知ったことではなかった。

「ある理由」の為に、ディアベルには負ける訳にはいかなかった。本当に負けず嫌いにも程がある、とユーキは半ば自分に呆れるもふと新たな疑問が生まれた。

「一つ、質問いいか？」

「どうした？」

「いや、とユーキは少しだけ面倒くさそうに問いを投げた。

「アンタから決闘デュエルの誘いがあった、オレが乗った。そこまではいい。だが理由がわからねえ。アンタはどうしてオレと決闘デュエルしたかったんだ？」

ディアベルという男と剣を交えてわかったことがユーキにはあった。

それは彼は真つ直ぐだということだ。正統派な剣術、片手には大盾、もう片方には直剣。お手本のような剣術だった。辛抱強く相手の攻撃に耐えて、隙があれば攻撃を弾き返し攻めに転ずる。

とてもではないが、自分のような捻くれた戦い方ではない。剣で斬ると見せかけて殴りつけたり、蹴つ飛ばしたりなど絡めてなど使わない。いつだってディアベルは堂々と真正面から受け止めていた。

加えて、ディアベルは好戦的な性格ではなく、ユーキのように気に入らないモノに牙を向けるような人間でもない。

品行方正、正に騎士の鏡とも呼べる人間であった。そんな人間から決闘デュエルの誘いがあるとは思わないだろう。

対するディアベルは少しだけ照れたように言い辛いのか、淀みながらユーキの問いに答えていく。

「君はオレの憧れでもあり——目標でもあるんだ」

「目標、だど？」

怪訝そうな顔つきのユーキに、彼はしっかりと頷く。

「アインクラッドの恐怖である君に救われてから、君の背中を追って来た。団長に誘われてやって来れたのも、君という目標があつたからだ。オレがここまで辿り着けたのも、君のおかげだ」

「それは違うだろ。ンなもん、アンタの努力の結果だ。オレなんぞの背中を負わずとも、アンタならその強さを手に出来ていた」

「それこそ違う。君がいなければ、オレは十八層の時点でゲームオーバーナイトライダーになつていたし、オレが『騎士長』と呼ばれるようになったのも君が居てこそだよ」

その結果が今の自分であると、ディアベルは断言する。

片手に持っている大盾を構えて、グツと強く直剣を握り締めて彼は続けた。

「だけど目標だからこそ、オレは君を超えたかった……！」

そう言うと、ディアベルの言葉が強くなっていく。その言葉には意思が乗り、絶対に負けられないという強い思いが籠められていった。

「君が救ってくれたオレはここまで来たと、君を倒すくらい強くなる
ことが出来たと、アインクラッドの恐怖である君に、証明したい！」

それが自分がユーキに決闘^{デュエル}を挑んだ理由である、と暗に語る。

対象が歳下なのに憧れる、自分の方が歳上なのに目標にする。聞けば妙な話である、とディアベル本人ですら分かっていた。しかしそれでも、彼は『アインクラッドの恐怖』であるユーキという少年に羨望の感情を向ける。

自分にはない強さを持っている少年に、己のことなど二の次で相手に手を差し伸ばす少年に、ディアベルは憧れた。彼から見たユーキは物語のヒーローとも呼べる存在であり、自身の目標と定めていた。

故に、ディアベルは挑んだ。

自分がどれほど理想に近づくことが出来たか確かめるために、彼は勝負を挑んだのだ。

「いざ挑んでみたらコレだ、やっぱり君は強かった。このまま続けたら、間違いなくオレは負けるだろう」

「……その割に、まったく悔しがつてないみたいだが？」

「ああ。楽しいからね」

「楽しいだど？」

楽しむなどと、ユーキの人間性から程遠い感情であった。この決闘^{デュエル}が何を持ってディアベルの娯楽となっているのか理解できない。

しかし次のディアベルの言葉に、ユーキは納得することになる。

「目標が高ければ高いほど、超え甲斐がある。本気になれた悦びで、全

身が振るえる。男の子つてのは、そういうもんだらう?」

ユーキはその言葉を聞いて、眼を丸くさせた。

楽しむなんて、自分には程遠い感情であると思っていた。何せそんな人並みの幸せを感じるなど、勿体無いし、そんな資格などないと少年は本気で思っていた。

だがユーキは無意識に、己が気付かない所で、楽しんでいた。デイアベル言葉の内容に、ユーキは身に覚えがあった。

それは記憶に新しい——第十八層でのキリトとの決闘の最中の話。アインクラッドの恐怖としての仮面を被っていたときの話しだ。お互い死力を尽くした攻防、キリトは二刀流に覚醒し、ユーキは使用していた石斧剣を砕かれた。

——ああ、そうだな。

——あのときは、本当に、楽しかった。

振り返ると、楽しかったのはその時だけではない。

アスナと何気ない会話していたときも楽しかったし、リズベットに小言を言われているときも悪くはなかった。キリトと喧嘩をしているときも何だかんだで楽しかった。放っておけないユウキの世話を焼くのも楽しかった。エギルに面倒を見られるのも嬉しかった。クラインの馬鹿話に付き合うのも吝かではなかった。アルゴとの腹の探り合いは疲れるがアレもいい思い出だ。ユイに叫ばれなくなったのも嬉しかった。それに——ストレアと会話するのも楽しかった。

現実世界も振り返れば捨てたものではない。レベッカとのお茶会だつて少しは楽しみであったし、朝田との連絡の取り合いも心が安らぐモノであった。

振り返れば、様々な愉樂が、何気ない日常で幸福が満ちていた。

最初はそんなものはなかった。あるのは何も出来なかった自分へ

の、理不尽で不平等な世界への純粋な『怒り』。墨よりも黒く、闇よりも黒い拭いきれない憎悪があった。だからこそ、ユーキは今まで自分の身体を酷使してきた。より厳しい方向へ、より辛い状況へ自分を追い込んできた。

だがそれは許さないという者がいた、そんなものは辛いだけだと諫める者がいた、自分を許してあげて欲しいと嘆く者がいた、そして——自分を犠牲に助けてくれた者がいた。

——本当に、お人好しな連中共だ。

——オレのようなクソ野郎なんて、放っておけばいいのによ……。

そうして少年は変わった。少年が言うお人好し共のおかげで、心境が変化して今まで見えていた景色が一変する。

認めるしかない現実には、ユーキは天を仰ぎ見た。幸せなんて手にする資格などない、と黒い声が聴こえる一方。あなたはもう自分を許しても良い、という聴き慣れた女の声——己を犠牲にして救ってくれた彼女の声が聴こえる。

どちらも正しく、どちらも間違っているのだろう。何が正しいのかは、ユーキにすらわからない。

——皮肉なもんだ。

——偽物の世界で、本物アイツらに出会えた……。

——この世界に囚われてから、オレの常識ってやつは崩れっぱなしだ。

——認めるしかねえな……。

怒りで誤魔化してきた、憎悪で目を覆ってきた。

だが認めるしかない。アスナの言うとおり、わからないのではなく見えてないだけだったようだ。

何故なら、ユーキが言うアイツらの中にはクソツタレと称してきた茅場晶彦の姿もあった。彼をどうしたいのかわからないのではなく、

見ようとしていなかったただけだった。

——簡単なことだった。

——オレはアイツを、茅場晶彦を。

——……止めたかったんだ。

もちろん、彼の凶行は許される筈がない。

この中でゲームオーバーになったプレイヤーは現実世界で死ぬ運命にある。直接的に手を下していないにしろ、この状況を作ったのは彼だ。ならば間接的に彼に責任があるといえる。

その現実は変わらない。

ユーキも許すつもりもなかった。仮に許されてしまえば、この世界で死んでしまった者の憤りはどうなる。後悔は、憎悪は、憤怒はどうなってしまうというのか。忘れてはならない、犠牲になった者達を忘れてはならない。決して、許されてはならない。

仮に、世界が仮に彼を許したとしても、自分だけは許してはならない。それがユーキの結論だった。

だがそれでも。

——アイツは、オレの身内だ。

——償わせなきやならねえ……。

——ただ斬ればいいって訳じゃない。

——オマエは悪いことをしました、だから殺しますなんて筋が通らねえにも程がある。

——わかってる。

——あの野郎の罪は償いきれるもんじゃねえ。

——それでも、それでもだ。

——それを一緒に背負ってやる。

——今まで世話になったんだ、無視することなんて出来ない。

——何よりもそれが、家族つてもんじゃねえのか？

グツと拳を握り締める。

どうして拳を握ったのか、ユーキにもわからなかった。決意を新たに力が籠っているのか、憎悪の発露によって握り締めているのか。恐らく、どちらも当てはまるのだろう。

だがどちらにしても、ユーキの方針が定まった。

「ありがとう、アンタのおかげでようやく見えた」

目の前に対峙している騎士に、ユーキは礼の言葉を送った。

こうして彼と決闘していなければ、彼の言葉がなければ自分が何をしたいのかわからなかった。それに、大事なことを気付かせてくれた。茅場優希は思いのほかこの世界に愛着があり、今まで出会ってきた者達を大事にしているということ、彼は気付かせてくれた。

目の前にいる人物はどうしても自分と戦いたいということは、先刻に重々承知している。故に――。

――轟、と。

ユーキの周囲に衝撃が走り、空間が揺れる。そして少年の身体から、蒼い炎が勢いよく噴出していく。

右眼は蒼色、左眼を紅色に染め、『蒼炎のユーキ』は文字通り超然とその場に君臨した。

「――出し惜しみはなしだ。オレの全力で、アンタを叩き潰す

……！」

「――！」

それは宣言であった。

蒼色紅色に染まった眼は、照準のように真つ直ぐと油断なくディアベルへと注がれている。

ただ視線を向ける。たったそれだけで、ディアベルの肌が粟立った。これがユーキの全力であるのだと、彼は改めて再認識した。

手加減されていたとは思えない。

先程までの攻防だって、恐らくユーキは本気だったのだろう。それを証拠に、数十合と打ち合つてユーキに余裕などなかった。

簡単な話だ。本気だったユーキが、全力を出しただけに過ぎなかった。

絶望はない。

ディアベルの口元には笑みが浮かんでいる。

楽観的に考えていたわけではない。軽く見積もっても、ユーキに勝てる確率はかなり低い。それはディアベル本人がよく理解していた。潜つてきた修羅場の数が違う、筋力の差は大きく、実戦での経験も段違いだ。

何よりも、フロアボスを十八層まで単騎で攻略していた規格外だ。目の前で対峙している少年が化物であることは、ディアベルが一番理解している。

だがそれでも――。

「嬉しいよ、ユーキ君。君はオレを、障害として認めてくれたんだな」

片手に持つ盾を持ち直し、もう片方に持つ片手剣を握り締める。

同時に、その身体に熱が帯び始めた。それはジリジリと、焦がすように圧く暑く更に熱い。いいや、熱すぎるといっても過言ではなくなってきた。

「これ、は……!?!」

ここでディアベルが違和感の正体に気付いた。

この「熱さ」は自分の気分が高揚して熱くなっている精神的なものではない。もつと物理的に、原始的な破壊の意味を持つ熱さ。

鉄で出来た盾が熱がこもり始めて火傷、とまでは行かないものか。なりの熱量が籠っていた。

普段であれば、疑問に思わなかった。

例えばロールプレイングゲームがあるとす。炎の魔法を使用す

る際に、キャラによって発火場所は異なる。ときには手の平から、口の中から、全身が発火するケースがある。それを見て、あのキャラは炎を纏っているが火傷しないのだろうかなど考える人間は極少数だろう。

何故ならそれは、あくまでゲームの世界だからだ。原理などわかるわけがない。現実世界とは違い、ゲーム世界とは物理法則も異なり魔法だってあるとんでも世界だ。現実の常識で考えたらキリがない。しかし、ここでは違う。

仮想世界ではるものの、現実世界と非常に似ている。

疲れもするし、汗もでる。睡眠は必要だし、食事だつてしなければならぬ。

ならばこの熱気は。この熱量はどこから突然来たのか。

言うまでもない、それは『蒼炎のユーキ』が蒼炎を纏ってからに他ならない。であるのならば――。

「その炎を纏って、君は――」

――熱くないのか。

そう簡単な疑問を口にする前に、ユーキによって遮られた。

つまらないことを聞くな、それがどうした、と言わんばかりに地面に突き刺していた両手剣を思いつき片手で引き抜くと、剣先をディアベルに向けて。

「アンタのその眼、アイツ」によく似ている。諦めを知らねえ、強い野郎が持つ眼だ」

だからこそ、アンタを強者だと認めている。と、ユーキは暗にそう語りながら続ける。

「そう言う目をした野郎は手強い。そんなヤツにどうやって勝つか、ンなもん決まってる。こつちも身を削るしかねえのさ。アンタのよ

うな野郎にリスク無しで勝とうなんざ、甘いにも程があんだろ」

それが答えだった。

ユーキが身に纏う蒼炎は爆発的に攻撃力が上昇する。その反面、その熱は自分に返ってくる。言わば諸刃の剣と言えるだろう。ハイリスク・ハイリターンとも呼べるものだ。

だからこそその切り札。だからこそその奥の手。おいそれと手札からは切ることの出来ない戦闘の鬼札^{ジョーカー}。正に身を焦がす程の炎を、彼は今現在纏っている。

故に、全力。

目標としている人物にここまで評価してくれたのが嬉しいのか、ディアベルは頬を緩ませながら呆れた口調で問う。

「もしここで、オレが君の自滅を誘うために逃げに徹していたらどうしてたんだい？」

「あ？ それはそれで、アリに決まってんじやん」

炎を纏っているとは思えない、平然な顔のままユーキは不思議そうに首を傾げる。

「逃げられるにしろ、仕留めきれなかったオレに落ち度があるだろ。勝ちてえのなら、努力するべきだし実行するべきだ。要は喧嘩と同じだよ、最後に勝ちやいいのさ」

「――」
今度こそ、ディアベルは言葉を失った。

正々堂々とは程遠い戦法をとられたところで、それはそれでアリであると言える精神性。不敵に笑みを浮かべるユーキ、それを目の当たりにしたディアベルは口元に浮かべた笑みをますます深めていく。

「君を目標にして、本当に良かったよ」

それだけ言うと、ディアベルは剣を捨てた。

「なんの——」

つもりだ、と尋ねる前にユーキはディアベルが何をしたいのか理解した。

「重心を低くして盾を構える。

手に持つ、というよりも衝撃に備えるといった方が正しい。腰を低く構えて、左足を引き前方から来る衝撃に耐えるだけを想定した構え。次の攻撃など考えていない、必ず守る為の構えだ。

逃げも隠れもしない。ユーキの攻めを真正面から受け止める構え。

馬鹿なやつ、と笑みを浮かべて。

お互い様さ、と応じる。

「手強い眼だよ、本当に——！」

嬉しそうに言うと、ユーキは駆けた。

ディアベルの本当の強さはその心であると再認識する。

一度折れて立ち上がったってきた強い者の眼、自分がよく知る一番強い男の眼——キリトが宿している強い眼。

「ああ、そんな眼で見られたらよお——何が何でも、勝ちたくなるだろうが！」

.....
.....
.....

「――疲れた」

アレからディアベルとの決闘を勝利したユーキは、帰路につく――
――というわけにはいかなかった。

ディアベルと言う男は副団長という立場であり、人望も高かったようである。その仇を討たんと、ギルドホームに残っていた血盟騎士団が次から次へとユーキに決闘を申し込んできた。

ここで逃げるという選択肢がアレばよかったのだが、生憎ユーキという男にそんなものはなかった。そもそも逃げるという考えがあるのなら、ここまでユーキは生き辛くしていないことだろう。

売られた喧嘩は買うし、火の粉は払う。右の頬を殴られたのなら左の頬を差し出すような聖人君子ではないことは、本人が一番自覚している。

「かかってこい、って煽ったのが不味かったか……?」

「あはは、でもにーちゃん楽しそうだったよ?」

疲労困憊と言わんばかりに、ユーキはげんなりとした調子で肩を落とす姿を見て、ユウキがニコニコと満面の笑みで言う。

悪びれもなく事実を口にする妹を見ながら、兄は軽くその頭を小突いて。

「楽しそうなのはオマエだろ。途中からアイツらの相手をしてたのオマエじゃん」

「うん、そうだよ? だって、にーちゃんの敵はボクの敵だからね!」

ムフーつと得意げに慎ましい胸を張る。

ユーキは呆れたように溜息を吐いて。

「そう言えば、オマエあの赤毛の女を楽しそうにボコボコにしてたよな？」

「ああ、ロザリアのこと？ あの人失礼なんだ。にーちゃんを悪く言うしきー！」

口を尖らせてプンスカ怒るユウキに、面倒くさそうな口調で言う。

「いちいち気にしてんじゃねえよ。オレなんぞの為に怒るエネルギー有り余ってるなら、違うことに発散させろ」

「ヤダー！ ボクだって怒るときは怒るんだよ？」

「へえ、オマエでも怒るのか。例えば？」

「にーちゃんがバカにされたとき！」

「……それはさつき聞いた。その他には？」

「以上！」

「……………」

花が咲いたような朗々とした笑みを向けられて、ユーキは片手で目頭を押さえた。感動して目頭が熱くなったわけではない、呆れて頭が痛いという意味だ。

どう言えばわかるのか、どう言えば理解するのか言葉を選んで伝えようとする前にユウキが嬉しそうに口を開いた。

「あの人達との決闘^{デュエル}、楽しかったなあ！」

「へえ、ボコボコにするのがそんなに楽しかったのかヨ？」

違うよ、と慌てて首を横に振って否定する。

「ボクさ、強さ比べするの好きだからね。にーちゃんは嫌い？」

「いいや、嫌いじゃねえよ」

「それじゃ、好きってことだね！」
「……………」

あのポンコツも余計なことを教えてくれたもんだ、とユーキはここにはいない幼馴染へ悪態を付いた。

嬉しいわけじゃないとか、嫌いじゃないとハッキリしないように返すときは、ユーキは嬉しいと思っっているし、好きだと思っっていることだ。と幼馴染はユウキに教え込んでいた。

本当に良い迷惑だ、と思っっているものの本気で怒れない辺り、自分はアスナに甘いのかもかもしれないと自覚しているのか曖昧な事を考えながらユーキは面白くなさそうに忠告する。

「良い機会だ、オマエに言っしておくことがある」
「なになに？」

「オレ達のギルドに入るわけだが、絶対に今後アスナの言うことを信用するな。絶対だぞ？」

「うん……………」

ユウキがそう返すと立ち止まる。

自分の服の裾を掴み、顔を伏せてその場に立ち止まってしまった。

ユーキも思わず立ち止まり問いを投げた。

「どうした？」

「あのね、にーちゃん」

言う言うまいかユウキは迷い、一拍置いて意を決して口を開いた。

「ボクがにーちゃん達の仲間に入っっているのかな？」

「あ？」

ユーキの顔が訝しげに歪む。彼女が何を言わんとしようとしてい

るのか、本気でわからなかった。仲間に入るのに、そこまで戸惑う理由がわからない。かと言って、入りたくないとしている様子もない。むしろ、悪いと感じていると言った方が正しい。

「ボクみたいな部外者が、四人の仲間に入っているのかな、って……」
「何がいたいんだオマエ？」

「だって、にーちゃんはあの三人の為に、三人はにーちゃんの為に進んできたんでしょ？ ボクみたいな途中参加が仲間に入っちゃいけない気がして……にーちゃんが、迷惑に思うと思って……」

「だから、邪魔したくないって言ったのか？」

うん、とユウキは力無く頷いた。

遠慮してないように見えて、彼女はまだユウキに遠慮していたようだ。距離感を掴めていなかった、と言っても過言ではない。

正にユウキと同じだ。

少年もまた義妹との距離感を掴めていなかった。だからこそ、どうすればいいのかわからなかったし、どう接してやればいいのかわからなかった。

今でも、現在進行形でどう接すればいいのか見えない。考えても考えても、それは見えそうにない。だから――。

「やめだ」

「え？」

「やめだやめだ、もうメンドクセエー！」

「え、え、え？」

「何がメンドクセエって？ もう既に面倒くせえよ。面倒くせえよ、本当に面倒くせえよ……！」

「え、に、にーちゃん!？」

頭をガシガシと乱暴に搔く。余計なことを頭の外に追いやるように、余計な思考を消しゴムで消すように。

それから大股で義妹に近付いてく。

思わず半歩下がり、ユウキは両眼をギュツと閉じた。殴られる——
——と思った訳ではない。無意識に両眼を瞑ってしまったのだ。
だからこそ、咄嗟に反応が出来なかった。

「え……う？」

頭に温もりを感じた。

ユウキは両眼を恐る恐る開けると、自身の頭にユーキの片手が乗っている。その手はまるで壊れ物を扱うように、繊細に撫でていく。

ポカポカと胸の奥で暖かいものが広がると同時に、頬が少しだけ赤く染まるのをユウキ自身感じとる。

「もうやめだ。オレもオマエに気い使ってたけどよ、ガラじゃねえわ。いいかよく聞けよ」

「う、うん」

「これからオマエには兄貴として接していく。急に兄貴面したら、オマエも迷惑するだろとか考えてたがやめだやめ。ウゼエってくらい兄貴面してくから覚悟しろよ」

ポカン、と口を開くユウキを無視して、兄の主張は続く。

「ボクが仲間に入っつていいだあ？ 入っつていいに決まっつてんだろ、ンなもん。なに妹^{オマエ}が兄^{オレ}に気を使っつてんだ？ 叩き潰すぞバーカ！」

「え？… え？…」

「ガキがソロで行動してやがっつて！ 変態野郎に襲われたらどうすんだオマエ！ オマエは可愛いんだから自覚しろよアホ！」

撫でるのをやめたユーキは、ビシビシ、とユウキの額に人差し指を突き刺していく。

あうあう、と可愛らしい悲鳴が上がるが知ったことではないと言わ

んばかりに追撃してく。

「そもそも、オレらは仲良しって訳でもねえよ」

「でも、チームワーク凄いいよ……？」

「ンなもんねえよ。アイツらもオレも、全然他人の話しを聞こうともしねえ。現にオレはアイツらの言い分なんて無視して攻略してたし、アイツらもオレの意見なんて無視して付いて来た馬鹿野郎共だぞ？」

「そ、それは説得力あるね……」

「だろ？ だから今更、オマエ一人が入った所で問題はねえよ。一人一人が自分にできることを死ぬ気でやる、本当のチームワークってのはそうして生まれるもんだろ。助け合って庇い合って、仲が良いから出来るもんじゃねえ」

「それじゃ、ボクも入っていいの？」

「二度も言わせんじゃねえよ。これ以上、心配させんな」

ぶつきらぼうにそう言うと、ユーキは前を向いて歩き始める。

何てことはなかった。

今まで自制してきた。本当は兄の傍にもっと居たかったし、もっと構ってほしかった。出来ることなら、彼と同じギルドに入りたかった。だがそれはダメだ、と自制してきた。迷惑になるから、嫌われたくないから、ユウキは遠慮してきた。

だがそれを見事に、眼の前にいる兄は破壊してみせた。知ったことではない、と言わんばかりにユウキの自制の檻を粉々に破壊して、彼女の手を引いてみせた。

恐る恐る、確かめるようにユウキは自分の頭に手を置いた。

温もりは、まだ確かにあった。彼の言動もそうだが、仕草もそうだった。壊れ物を扱うように繊細に、頭を撫でてくれた。それはつまり、ユウキを大事にしていたという証拠でもある。

「……！」

思わず、ユウキは堪えるように口元をキュツと閉じた。
泣きそうなるのを必死に堪える。悲しいのではない、嬉しいからこそ涙が溢れそうになった。

「なにしてんだ、置いていくぞ——ユウキ」
「あ……！」

初めて名前を呼んでもらえた。

だがギュツと堪える。泣いてしまつては、また彼が心配する。ならば彼女は泣いている場合ではない。最も彼に向けなければならぬモノは——。

「待つてよ、にーちゃん！」

笑顔なのだろう——。

こうして二人は本当の意味で、兄妹となったのだつた——

第9話 妹のワガママ

2024年1月24日 PM16:45

第十八層 主街区『ユーカリ』ギルドホーム

そわそわ、と。

紫を強調とした服装の少女——ユウキは落ち着きなく辺りをキョロキョロと見渡した。

彼女がこうして気恥ずかしそうにしているのは珍しい。

いつも天真爛漫、無邪気で元気がいい。それがユウキという少女であつた。嬉しいことがあるれば楽しく笑い、悲しいことがあるれば一番泣く。正に喜怒哀楽がハッキリしていると見える。

そんなユウキは今や借りてきた猫のように。肩身を狭くし、縮こまるかのようにソファアに座っていた。小さい身体の彼女が、更に小さく見えるほどである。

「ね、ねえリズー。ボクも何か手伝おうか……？」

居てもたつてもいられない、と言うかのようにユウキは台所にいるリズベットに声をかけた。

声をかけられたリズベットはひよっこりと顔だけ出すと。

「アンタは今日の主役なんだから、そのままゆっくりしてなさいよ」

「あう……」

ユウキがますます小さくなるのを見て、リズベットは満足したのかにしし、と悪戯を成功させた子供のような笑みを浮かべて台所に戻っていく。

血盟騎士団のギルドホームから戻ってきた二人の兄妹は、そのまま

寄り道することなく『アクセル・ワールド加速世界』のギルドホームへと戻ってきた。

そこで待っていたのは熱烈な歓迎の嵐。リズベツトはわしやわしやとユウキの頭を撫でて、アスナは嬉しそうに抱きつき、ユイは両手を広げて歓迎してくれていた。キリトもその様子を見て微笑ましそうに口元を緩ませ、キリト達にクエストを手伝ってもらっていたシリカはどこか羨ましそうにその様子を見守っていた。

オマエ一人入った所で問題ない、と兄に言われたものの、正直に言うとうとユウキは不安だった。

第一層から彼らの関係は出来上がっていたのだ。そこへ途中から入ってくる自分がはたして受け入れてもらえるだろうか。拒絶されたらどうしよう、と普段は前向きなユウキであるが今回だけは不安いっぱいであった。

だが蓋を開けてみればその真逆。全員が全員、ユウキを手放しに歓迎し、むしろ待ってたと言わんばかりである。

そして、始まる歓迎会の準備。

当初はギルドメンバーだけで行う筈だったのだが、今はアクセル・ワールド加速世界
に
関係するプレイヤーを巻き込んだ宴となっていた。

言ってしまうと、ユウキのアクセル・ワールド加速世界の加入を祝いに来るとい
うこと。今のユウキの心境と
言えば、嬉しさ半分、照れ半分と言
えるだろう。

歓迎されるのは嬉しいが、ここまで規模が大きくなると誰が思うだろうか。

手伝おうにも、リズベツトが許してくれない。ただただ、ユウキは準備が完了するまで待っているばかりである。

台所からは今も声が聞こえる。

手伝っている「リズさん、食器つてどこですかー？」といったシリカの声が聴こえ、嬉しそうで誇らしげな「リズお姉さん、盛り付け終わりましたっ！」とユイの声が聴こえる。

姉御肌のリズベツトとしても、二人との相性がすこぶる良いようだ。指示を言い渡し、出来れば褒めて伸ばす。そんなやり取りを、ユウキの耳に入っていた。

そんなこんなで、全員が全員。
各々の仕事をキツチリこなしている——と思いきや。

「……………」

ユウキ以上に、異常なまでに落ち着きのない少女が一人。

栗色の髪の毛の少女——アスナはその場を行ったり来たり、食器をテーブルに並べては片付けて、再び並べる。上の空のせいもあってか歩けば壁に激突して涙目になりながらぶつけた額を抑えるも、再び歩き出して転ぶ。

落ち着きがない、といったレベルではない。

ユウキはそんなアスナを見て、思わずポツリと呟いた。

「アスナ、どうしたんだろ……?」

「あー、いいわよ気にしなくて」

それに答えたのは本人ではなく、リズベツトだった。

ある程度の準備が終わったのか、彼女はエプロンを外しながら呆れた調子で続ける。

「身から出た錆っていうか、思いがけないライバルが登場して慌てるのよ。のんびりしてたツケってやつね」

あたしとしては、朝田つて後輩が対抗馬だったんだけどね、とリズベツトは肩をすくめるてやれやれと首を横に振る。

対するユウキはライバル?と不思議そうに首を傾げるも直ぐに誰のことを指しているのかわかった。

思い当たる節はある。

アスナの様子がおかしくなったのは、兄とのやり取りを話していた後のことだった。

メンバーになったはいいものの、部屋がないので兄の部屋に泊まる

ことになった。そして、一緒に寝ることになった。ユウキが満面の笑みでそう説明すると、アスナはニコニコと聞いていたのだがそのままピシッと音を立てて固まってしまった。

それから直ぐに、アスナが今の妙な状態になってしまったのだ。

「ちよつと、アスナ。いい加減に戻ってきなさいよ」

「……ハッ！ な、なにリズ？ サメの話しでもする？ みそスープって男の子よね？」

「……これはダメね。しばらく使い物にならないわ」

「あばばば……」

「ホント、アンタってアイツ絡むとポンコツになるわね」

ほらまだ終わってないんだから手伝いなさいよ、とりズベツトに引っ張られるアスナを見て、ユウキは笑みを浮かべた。

——リズが言っていたライバルって、ボクのことなんだと思う。

——アスナの「好き」と、ボクの「好き」。

——同じものなのか、まだボクにはわからない。

それも当然だと言える。

茅場優希という人間に対して、アスナは幼い頃から想いを積み重ねてきた。その感情は揺るぎないものであり、彼女はその好意を恋愛感情のものであると断言するだろう。

対して、ユウキは違う。茅場優希は面識がないものの、その存在を知っていたし会いたいと思っていた。家族となる筈だった彼に会って、彼の両親が死んだ原因は自分にあると本気で思い込み謝りたいと思っていた。

——でも、にーちゃんは言ってくれた。

——オマエに罪はないって、言ってくれた。

——流石、あの人達の娘だって、褒めてくれた。

その言葉が、何よりも嬉しかった。
家族として認めてもらい、何よりも罪はないと断言した。その言葉が、ユウキにとって救いとなった。

——ボクは、にーちゃんが好き。

——でもアスナも好きなんだ。

——アスナは、姉ちゃんみたいな人だから……。

ならば、やることは一つだった。

ユウキはメイン・メニューウインドウを開き、メッセージ作成画面を開く。

その送り先は——。

.....
.....
.....

PM 20:57

第十八層 丘の上

鍛錬とは、苦痛を伴うものだ。

身体が悲鳴を上げて、それを無視して自らを追い込んでいく儀式。それが鍛錬であり、努力というものだろう。

言わば、鍛錬とは努力とはそういうものだ。自らの身体を痛め続け、限界まで追い込み、身体と心を鍛え上げていく。

そう言う意味では、少年——ユウキは向いていた。

殺したいほど自分を嫌い、憎々しいまでに自分という人間を憎悪す

る。そんな人間が自分を鍛え上げるといふ苦痛を怠る訳がない。

「……っ！」

一振り。たった一振り。

だがそれだけで、ユーキを中心から衝撃が空気を叩く。少年の愛剣である『アクセルワールド』が振るわれる。その勢いは、音を置き去りにするかのように勢い良く振るわれる。

今ので数えて1068本目。第十八層のギルドホームに帰ってきたから、少年はここに訪れて素振りを続けていた。

すでに身体は悲鳴を上げている。

頬を伝う大量の汗を拭うことなどしない。その両腕は苦痛を訴えて、両手剣を握る両手からは震えという警報が鳴り響く。その全てを、少年は塵殺していく。

苦痛には歯を食いしばり、震えには無視して再度握りしめる。尽くを無視し、尽くを向き合い捻じ伏せていく。

そして再度もう一振り。

「——ッ!!」

上段に両手剣を構えて、勢い良く振り下ろす。

途方もなく、地道なものである。とてもユーキが『蒼炎』や『魔獣』と呼ばれている者とは思えない鍛錬方法だ。

だがそれでよかった、ユーキにはそれしかなかった。

この仮想世界では、連撃が多ければ多いほど上位なものとなる傾向がある。

ならばより多くのソードスキルを会得し、状況によって使い分けるのが正解といえるのだろうが、それは一般的に考えたらの場合である。ユーキは使い分けれるほど器用ではない。何よりも誰よりも不器用な人間だ。

百の技を会得するよりも、一つの技を極限まで磨き上げる。

それがユーキの出した結論だった。殺せば死ぬのだから、殺せる技術を磨き上げた方が効率が良いと判断したのだろう。

故に、地道に剣を振るう。上段から思いつき振り下ろす。小手先など考えもしない、一撃で何もかもを勝敗を決することを前提とし、ユーキは剣を振るい続ける。

ユーキは素振りをやめることはないだろう。

それこそ、意思とは無関係に肉体が果てるまで、両手剣を振り続けるだろう。苛烈なまでに自分を追い込み、極限まで嫌悪する自分を痛め続ける。それこそが少年の鍛錬なのだから。

だがどういうわけか、ここで上段に構えた両手剣をピタリと止めて、間を置いて振り下ろす。

「何しに来やがった」

振り向かず、振り下ろした体制のまま背後に声をかけた。

声をかけられたのは男だ。少年と歳が近い印象で、どこか幼さが残っている。

彼——キリトは大した驚きもせず、どこか感心するような声を上げる。

「ストイックな奴だな。それ、第一層からやってるんだろ？」

「……………」

軽口に対して、無言で応じる。

一呼吸置いて、息を大きく吸うと——。

「——ッ！」

——思いつき振り下ろし、ここで初めて重く息を吐き出した。

脳内では俯瞰的な視点で、先程の一振りを再現する。何がダメなの

か、何が余計だったのか。自分に甘えることなく分析していく。

完璧なイメージには、程遠いものだった。

この程度の一撃では、敵を一撃で倒すことも出来はしない。

完璧ではなく、完成でもない。ただただ、己に苛立ちを隠せずにユーキは舌打ちをしながら、小さく小声で分析していく。

「まだまだ、踏み込みが浅い。腰も入ってねえ。腕力じゃねえ、身体全体で振れ……」

それを見ていたキリトは、ただゴクリと息を呑んだ。

汗すら拭わずに、キリトすら意識を向けずに、ただただ前を向いて鍛錬するユーキに目を見張る。

—— 凄いや、なんてもんじゃない。

—— アイツが振るっているソードスキルは『カスケード』。

—— 両手剣の最初級のソードスキルの筈だろ……。

ただ単純な、上段斬り。そこから派生するソードスキルもなく、一番最初に習得できる両手剣のソードスキル。それが『カスケード』であつた。

最初級であるのだから、その威力は低い—— 筈なのだが。

—— アイツの『カスケード』は、必殺の域に達している。

—— 最上級ソードスキルよりも、威力は上だろう。

—— それに、ソードスキルっていうのは発動したあとは体が勝手に動いて攻撃動作を行ってくる。

—— でもアイツのは、違う。

—— アイツはソードスキルを発動しても、システムに身体を預けずに剣を振るっている……！

それを証拠に、上段に剣を構え振るわれるまで、剣筋がまったく見れなかった。

幾千、幾万、幾億と剣を振るってきた結果なのだろう。ユーキの振るうカスケードは、既にシステムを凌駕し己の力のみで発動出来る域まで達していた。

——一朝一夕で身につくレベルじゃない。

——恐らく、常日頃欠かさずに素振りしていた結果なんだろう。

——アイツは、妥協を知らない。

キリトは再認識した。

眼の前に居る男の一番の武器が何か。

他の追隨を許さない膂力でも、野性味溢れる第六感でも、身を削る戦闘により培われた経験でもない。

本当の意味で、真の武器とするは強靱な意思。決して妥協をしない強い意志であるのだと。

現に、ユーキは納得していなかった。再び両手剣を上段に構える。そのままの状態で、振り返らずにキリトに問いを投げる。

「三度目はねえ。何をしに来たんだオマエ？」

「……お前には言っておこうと思っただけ」

何を、とユーキが尋ねる前にキリトが本題に入る。

「ヒースクリフに会った」

「」

簡潔に言うと、上段に構えていた両手剣を下ろす。

聞く気になったとキリトは判断すると、そのまま続けた。

「単刀直入に言う。俺はヒースクリフが茅場晶彦だと思っ」

「根拠は、何だ？」

「アイツの身体が、ブレたんだ」

「あ？ どう言う意味だ？」

ここでユーキはキリトの方へと身体を振り返った。

言っている意味がわからない、と怪訝そうな顔をしているユーキに
対して、キリトは一度頷いて。

「超反応と言っても良い。俺がエリシユデータに手をかけた瞬間、いつの間にか俺の後ろにアイツが立っていた」

「……オレらのように、『心意』を使っただって可能性は？」

「ない。『心意』を使うには、その前に何かしらの動作がある。俺の場合は白色のエフェクトが発生するし、お前の場合は炎だ」

だが、とキリトは言葉を区切り結論だけ告げる。

「アイツにはそういう類が一切なかった。多分、アイツはシステム管理者ウインドウか何かを使って、限界以上にプレイヤーの速度を上げたんだと思う」

「……オマエに一つ、面白え情報がある」

「なんだよ？」

「血盟騎士団が最強と呼ばれる理由の一つに、情報の速さだつて鼠が言ってたよな？」

「ああ」

「その情報が誰が仕入れていると思う？」

「……まさか」

眼を丸くするキリトに、ユーキは忌々しげに口に出した。

「団長ヒースクリフらしいぜ。本当にナメてやがる」

「確かなのか？」

「間違いねえよ。殴り込んだとき、副団長やってる奴から聞いたからな」

だが妙な話しだった。ユーキとしては、肩透かしにも程がある。

これではいずれ、奇妙に思うプレイヤーも現れる筈だ。何せ、到達したばかりの階層の情報を既に入手しているのだ。確かに一目置かれるかもしれないが、それも最初だけだ。いずれ疑問に変わり、奇妙に映ることだろう。

本当に正体を明かしたくないのなら、本当に隠し通したいのなら、他のプレイヤー達に万事を委ねて見守っている筈だ。だとするのなら、茅場晶彦がヒースクリフというなら、今取っている手段は失敗といえるだろう。

あの男が、あの天才が、あの茅場晶彦がそんなミスをするだろうか。否、否である。茅場優希の知っている茅場晶彦ならば、もっと上手くやる筈なのだ。

故に、ユーキは忌々しげに舌打ちをする。

どんな目的があるのかは定かではないが、自分たちを侮っているし、か思えない茅場晶彦の行動に苛立ちを隠しきれない。

「あの野郎、本当にナメやがって……クソが……っ!!」

「わざと、かもしれないな」

「ああ!？」

「だっておかしいだろ。考えれば考えるほど、アイツの行動は穴だらけだ。とても合理的じゃない」

「知るかよんなこと。天才サマの考えることなんて、オレには昔からわからなかった。どっちにしてもあの野郎を叩き潰せば済むハナシだ」

「……それと、気になることがあるんだ」

「ンだよ?」

キリトは真正面から、ユーキを見つめていた。

思わずユーキも身構える。しかしキリトは少しだけ考えて、いや、と首を横に振って。

「何でもないよ」

「ハッキリしねえ野郎だ。ンだよ、言えよ」

煮え切らないキリトに、ユーキは苛立ちを募らせる。

それでもキリトは口を開こうとしなかった。

簡単な疑問だったはずだ。それでも、問いを投げる事が出来ない。

『ユーキは茅場晶彦と知り合いなのか』とても簡単で、難しくない疑問の筈だ。

だが聞けない。聞けば恐らく、ユーキは答えてくれるだろう。

——アイツが隠しているのは、多分理由があるはずだ。

——それに俺の予想通りなら、アイツはとんでもなく重いモノを背負っている。

——誰よりも現実世界に帰りたくない筈だ。

だというのに、ユーキという男は誰よりも前を向き、現実世界に帰還しようと足掻き続けている。

クリアしたところで、彼に待っているのは賞賛ではない。待っているのは怨嗟、憎悪、憤怒の類だろう。このゲームがクリアされれば、茅場晶彦は手が届かない存在となるだろう。そうなれば、民衆の標的は手頃の位置にいる存在。つまり一般人であるユーキと的を絞っている。そんなものはユーキが一番良く理解している筈だ。

それでも、ユーキは歩みを止めなかった。待っているのが地獄だとしても、[〃]ここ[〃]では満足できないと進み続ける。

——そんなこと、俺に出来るのか？

——世界中の人間を敵に回すことなんて、俺に出来るのか？

考えただけでも、キリトの背筋が凍りつく。

現実世界に帰れば、敵意を向けた家族がいる。父も母も、妹でさえ怯えた眼で自分を見てくる。戦友だと思っていた人間達が、殺意むき出して睨んでくる。

進んだ所で地獄、されど立ち止まっても地獄。ユーキは呆れるほど、詰んでいる状態だった。

——同じ立場になったら、どうするかなんてわからない。
——わからない、けど。

自分だけは、ユーキの味方であろうとキリトは思う。

世界中がユーキに敵意を向けても、自分だけはユーキを守ろうと思う。

キリトにとってユーキは友達でもない。親友でもなければ、宿敵という訳でもない。ライバルとして、競い合う者として、肩を並べるためにキリトはユーキの味方であろうと決意した。

「何を見てやがる。用がもうないなら帰れよオマエ」

面白くなさそうに吐き捨てると、ユーキは再びキリトに背を向けた。

鍛錬を続けるつもりでいるのだろう。しかしそう簡単にはいかないうようだ。キリトはニヤニヤ笑みを浮かべながら。

「リズからの伝言だ。『アンタ早く帰ってきなさいよね』だつてさ」

「オレの都合だろうが。ンでオマエに指図されなきゃ——」

「ユウキも待つてるぞ」

「……チッ！」

大きく舌打ちをすると、渋々と言った調子で歩を進めた。

本当にユウキに甘くなつたもんだ、とキリトは笑みを深めてユーキの後を追う。

もちろん、その笑みは微笑ましげに見守るモノではない。もつと黒いナニカであり——からかう要素を見つけたといわんばかりの意地の悪い笑みだった。

.....
.....
.....

PM21:15

第十八層 主街区『ユーカリ』 ギルドホーム

「んだ、こりゃ……」

片眉を上げて、ピクピクと口元を痙攣させてユーキはぼんやりと呟いた。それも引き気味に、理解が追いつかないといった調子で。

キリトと肩を並んで——というのが気に入らなかったのか、キリトよりも数歩前をユーキは歩いて、キリトはその後を追うように帰路についていた。

それは別に良い。第十八層の主街区『ユーカリ』。その郊外にある場所にあるのが彼らのギルドホームだ。ならばそこに帰宅するのになんら問題もない。問題はその後。帰宅してギルドホームで行われている騒ぎに対してユーキはリアクションを取っていた。

ドンチャン騒ぎ、なんてものじゃない。もはや宴状態と言える。

今の中心では何故か、アームレスリング大会なんでものが繰り広げられているし、部屋の隅ではキバオウがキリトの魅力を永遠と語っている。

——何かこう、違うだろ

——歓迎会つてのは、歓迎されるヤツが主役だろ。

——アイツが主役で、アイツの好きのモンが出されて、アイツを楽しませる。

——それが歓迎会つてもんじやないのか？

——まあ、オレ歓迎会とかされたことも、したこともないけど。

と、そこでユーキは自分の足に何か当たる。

足元を見ると、それは瓶だった。それも一升瓶であり、如何にもという趣をしている。

まさかな、と思いつつユーキは拾い上げた。

ラベルを見るとそれはもう物騒な銘が刻まれている。その名も『現実殺し』。物騒極まりない名前であり、如何にもという容器にこれまた予想通りのものであった。中身は空ではあるが、恐らくアルコールが入っていたのだろう。

ソードアート・オンラインは現実には親しい作りになっている仮想空間だ。

食べ物を食べれば満腹感が得られるし、味覚だつてある。当然、眠気だつてあるので睡眠も必要になってくる。しかし、ことアルコールに於いては話しが別だった。未成年もいるということもあってか、酒はゲーム内で売買されていてアルコールは入っていない。当然そうなれば、酔うということもないのだが。

——間違いねえな。

——こいつら全員、場酔いしてやがる。

酒を飲んだであろう者は、気分が高揚しているのか顔を少しだけ赤らめている。おまけにこのドンチャン騒ぎ。明らかに大半の人間が場に酔っていた。

思わず溜息を吐く。

飲んでも呑まれるな、とはよく言ったものだと思いつつユーキは呆れた口調で。

「おい、ヘタレ剣士。これは何だ、どう言う状況だ？」

返答はなかった。

いつもなら、ヘタレ剣士って言うな！と返ってくる筈だがなににもなかった。

ユーキは隣を見るとキリトの姿はない。どこにいったのか、首を傾げるよりも早くキリトを見つけることが出来た。

「……………」

「……………」

というよりも、眼が合った。

いつの間にかキリトはモンスター達に絡まれており、身柄を拘束されている。

モンスター達というのはつまりリズベット、サチ、アルゴ、そしてユイの四名。それもガツチリと拘束。両脇にリズベット、サチ。正面からはアルゴ。背後にはユイ。それぞれがそれぞれ抱き着くような形で、キリトの身体を拘束していた。

普段はそんなことしない彼女達だったが、今回は普段通りの状態ではない。顔は赤らめており、視線もどこか焦点が定まっていない。意識もハッキリしない様子を見て、彼女達も場に酔っていることがわかる。

ユーキから見たらその光景は、さながらパニック映画に出てくる序盤で逃げ遅れた市民のようである。ゾンビ物とかによく出てくるアレ。扉を開けたらギツシリ最後までゾンビが敷き詰められており、逃げようとしてもそのままゾンビに捕まり食われるよくあるアレだ。

となれば、キリトの後の結末は変わらない。ゾンビ映画よろしく食われて終るように、彼もまたこのまま食われて終るのだろう。

なんて哀れ、なんて可哀想なことか。

ユーキは彼のこの後の結末を想像して目頭を押さえる。

「(キリト、オマエの姿は忘れねえ。残念だが、オマエはここまでみただ)」

「(いやいや、待て待て！ 助けてくれ！)」

「(残念だが、無理だ。オレも助けてやりてえが、そうならもう……)」

「(……本音は?)」

目頭を押さえていた手を口元に持つていき、満面の笑みでニツと笑みを零して親指を立てる。

こらえきれない、と言わんばかりに痙攣しながら。

「(ザマア、モテ男……！ 精々頑張れ、応援してんゾツ☆)」

覚えてろオオオオ！といった絶叫にも似た悲鳴を聞いて、ユーキの笑ひはますます深まっていく。

他人の不幸は蜜の味とはよく言ったものだが、ここまで甘いものは思ってもいかなかったようだ。入った瞬間、素振りに戻るか考えたが来てよかったと再認識する。

さて、どうするか。

ユーキは周囲を見渡していると。

「ゆ、ユーキくん」

聞き覚えのある声。

ユーキは「おお」と気の抜けた声で応じながら、声の主へと振り返る。

そこに立っていたのはアスナである。

彼女は大きな皿を持って、笑みを浮かべていた。

「……オマエさ、何かあった?」

笑みを浮かべている。

ニツコリと他人が見たらそれは満面の笑みと言えるだろう。しかし付き合いの長いユーキから見たら、その笑みはどこかぎこちないものである。満面ではなく、六割の笑み。作り笑いとも言える、そんな笑みを彼女は浮かべていた。

アスナも心当たりがあるのか、どこか慌てながら問う。

「え？ ど、どうしてわかったの？」

「長い付き合いだ。この程度わかるに決まってんだろ」

「そうだよ、長い付き合いだもんね……」

そう言うと、アスナは顔を伏せた。

どんよりと、影を背負うような。今度は誰がどう見ても、彼女が落ち込んでいると分かる状態のまま続ける。

「わかってたんだよ。ユーキくんが優しいってことくらい。カツコイイってわかっていた。それなのに自分だけしか気付いてないって思い込んで……油断して、焦っちゃって……」

「小声でブツブツなに言ってるのオマエ。つか聞こえねえんだけど？」

「自己嫌悪してますう……」

どんよりと影を背負ったまま、アスナは「どうぞ」とユーキに持っていた皿を差し出した。

ユーキも不思議そうな面持ちのまま、それを受け取った。盛り付けられているのはハンバーグ、フライドポテト、そして焼きそば。どれもこれも、ユーキの好物のモノだった。

「……オムライスはねえの？」

「あつ、ごめん。作ってない……。食べたかった？」

「……いいや、今はいいや」

ユーキは再度、周囲を見渡して手頃な場所を確保し椅子に座る。アスナもその隣に座ったのを確認すると、ユーキは訪ねた。

「アイツはどこいった？」

「ユウキならあそこにいるよっ。」

アスナはその場所を指差した。その指した先へと視線を向けると。

「れでいーす、あんど、じえんとるめーん！ 始まりました、腕相撲大会決勝！ 司会はボク、『蒼炎のユーキ』の妹！ そう、ボクだよ！」

歓声に包まれていたユウキを発見した。

両手を上げて、ニツコリ満面の笑み。まるで太陽のような暖かい何かを感じさせる笑顔で歓声に応えていく。

大人気となっている妹を見て、兄は純粋な疑問を口にする。

「何してんのアイツ？ つか、何で腕相撲大会？」

「んー、なんかね。ユウキがやりたいんだって」

「腕相撲大会を？」

「腕相撲大会を」

ふーん、と興味をなくしたのかフォークを持ち、フライドポテトを突き刺して口に頬ばっていく。

そんなユーキとは裏腹に、腕相撲大会は盛り上がりのピークへと達していた。何せ決勝戦だ、盛り上がらない筈がないだろう。

「決勝のカードはこの二人！ 斧使いエギルに、風林火山リーダーのクラインだあ！」

二人の男が、対面している。

一人はクライン。片手を上げて、凜々しい顔つきのまま歓声に応えていた。

一方、もう一人。エギルは腕を組み、両眼を瞑り黙々と集中力を高めていく。

対照的な二人。

そんな二人に琴線が振れたのか、ユウキは喜々としてクラインの方へと近付いて行く。

「それでは、意気込みを聞きましょう！ クライン、何か一言ある？」
「潰すよ、今日はオラ！よく見とけ、オラ！」

クラインの言葉にますます会場はヒートアップしていく。
うんうん、とユウキは満足気に頷くと今度はエギルの方へと近付いて。

「さあ、エギルはどう応える!？」

「時は来た。それだけだ」

「プロレスかよ」

もはや腕相撲大会に目もくれない。

ユーキは十代特有の冷めたコメントを乱暴に送りつけながら、ハンバーグを一口食べる。

対するアスナは「あはは……」と困ったように笑みを浮かべながら。

「でも、ユウキ楽しそうだよ」

「……………」

楽しそうなのはユーキもわかっていた。

本当に楽しそうに、ユウキは笑っていた。全力でバカをやって、全力で楽しんでいた。この世界を全力で、楽しんでいた。

もうユウキは出会ったときのような、罪悪感に駆られていた彼女ではない。

積もり積もった罪の意識から開放され、歳相応の笑みを取り戻していた。

——まあ、なんだ。

——アイツが楽しければ、それでいい。

そう思うと、自然に口元が緩んでいく。

ユーキは軽く笑みを浮かべながら、もう一口ハンバーグを頬張ろうと口を開けるも。

一際大きな歓声が、ユーキの背中を叩いていた。思わず振り返ると。

「瞬ツ殺！・ クライン、開始と同時に負けたよ——ツ!？」

興奮気味に言うユウキのおかげで、状況を掴めた。

どうやら開始と同時に、エギルがクラインに勝利したようだ。

現に、クラインは悔しそうに「ちくしようツ！」と地面を殴り、エギルは開始直前と変わらずに腕を組み眼を瞑っている。

それを見たユウキは、首を傾げて覗き込むようにエギルに問いを投げける。

「あれ、エギル勝ったのに嬉しそうじゃないね？」

「ああ。実を言うとな、俺には心残りがあるんだ」

「というと？」

「確かに、この中では俺が最強なのかもしれない。俺が優勝したのだから、それは間違いないだろう」

だがっ！と言葉を区切り大きく両手を広げる。どこか大げさな調子で、演技染みた調子でエギルは続けた。

「俺にはどうしても、勝ちたい男がいるのさ！ コイツに勝たずして、最強と名乗れるだろうか!？」

「その男って!？」

「それは——!」

そう言うと、エギルは勢い良く指差した。その人物のいる方向へと、エギルは指差した。

「——お前だ、ユーキ！」

「あ?」

モニュモニュ、とハンバーグを頬張ったまま噛み砕きながら応じる。まるでその頬はリスのように、大きく膨れ上がっていた。

それを見たエギルはますます笑みを深めていく。好戦的な笑みを浮かべたまま、続けて言う。

「お前の腕力は、攻略組トップクラス。いや、もしかしたら腕力だけで言えば最強といえるのかもしれない！」

「確かに！ にーちゃんは力持ちだもんね！」

「そんな男に勝たずして、何が最強か！ なにが腕相撲優勝者か！ 上を目指さないやつは、それは男じゃねえ！」

ユーキはエギルが何を言いたいのか、理解していた。

だからこそ、噛み砕いたハンバーグを飲み込む。持っていたフォークを置いて「ご馳走様。美味かった」とアスナに小声で伝えると立ち上がった。

エギルが言う前に、ユーキはその挑戦に応じることにした。

口を引き裂くような獰猛な笑みを浮かべて、エギルに向かって片手で制止させる。皆までいうな、と。わかっている、と言わんばかりに口を開く。

が声を上げた。

思いがけない罰ゲームに立ち上がり、顔を赤く染めて口を大きく開ける。

理解が追いつかないとは正に彼女の今の状態。

どうしてエギルがそんな提案するのか、そもそもどうしてエギルがあの兄妹が添い寝することを知っているのか。疑問が疑問を生み出して、思考が堂々巡りを始める。

そこでアスナは気付いた。

ユーキの視界から見えない場所で、死角の位置でアスナに向かってピースサインを送っているユウキの姿を。アスナは見つけることが出来た。

そう。

この腕相撲大会こそ、ユウキの狙いだった。

事の経緯を、歓迎会が始まる前にエギルにメッセージで相談したところ、この腕相撲大会を提案された。

エギル曰く、ユーキは降りかかる火の粉は全力で払う性格だ。喧嘩を売ってしまったえば全力で買ってくれる。それに変に律儀なところがあるからこそ、負けても罰ゲームに応じてくれる。

そういうわけで、こうして腕相撲大会というユウキの作戦が開始された訳だ。

そんな妹の思惑とは裏腹に、兄は溜息を吐く。

「ンなもん、オレの罰ゲームってより、アスナに対する罰ゲームじゃねえか」

「えっ？」

「……ンだよ、エギル君？」

「あ、いや。続けて？」

思わず「まだ気付いてないのか？」といった疑問を口にしようになるも、寸前の所で飲み込んだ。

ユーキはどこか怪訝そうな顔のまま、気にすることなく続ける。

「いつその事やめてやろうか、って考えた。だがまあ、考えてみればオレが負けなければいいだけのハナシだ」

「……なあ、一つ疑問なんだが」

「ンだよ？」

「どうしてユウキはよくて、アスナは添い寝ダメなんだ？」

「そいつは家族だ、別にいいだろ」

だが、と言葉を区切りエギルの問いに答える。

「アスナは違う、アイツは女だろ。好きでもねえ野郎と一緒に添い寝なんざ、苦痛にも程がある。可哀想だろうが」

「お前、戦闘での勘は鋭いけど、こういうときは鈍いのな。いや、こういうときだからこそ鈍くて、戦闘では勘が鋭いのか？」

何を言っているのかわからない、とユーキが首を傾げる一方で。

エギルはいいや、と頭を横に降ってテーブルの上に肘を置いた。それは合図だ、これから始まる決戦への合図。

ユーキは獰猛に笑みを浮かべると、それに応じた。

少年もテーブルの上に肘を置いて、自身よりも数倍大きな黒い手――

――エギルの手を握りしめる。

「ところで、罰ゲームは何を考えているんだ？」

「教えねえよ。震えて待つてろ」

そう言うと、ユーキは両眼を閉じて意識を集中させる。

瞬間的に力を爆発させるために、深く深く、更に深く。意識を深く沈めていく。

研ぎ澄まされていく。肩に力を入れずに、リラックスした状態でユーキは待機していた。

そして。

「れでいーぐー!」

ユウキの楽しそうな開始の合図。

それが耳に入った瞬間、眼を開けてユーキは全力で右腕に集中させる。

だが。

「——ッ!?!」

「——…:…:…ッ!」

ビクともしなかった。

レベルも筋力も自身の方が上だと言うのに、ビクともしない。むしろ少しでも腕の力を抜けば、そのまま速攻で持っていかれる。そんな確信がユーキにはあった。

——う、そだろ…:…:?!

——なんでビクともしねえんだ…:…:!!

——筋力に全振りしてんのに…:…:…ッ!

苦しそうにユーキは歯を食いしばる。

それ以上の衝撃がエギルを襲っていた。

腕相撲——アームレスリングとはその名前とは裏腹に、手首の力が必要不可欠となってくる競技だ。

もちろん、手首だけ強ければいいというものでもない。身体全体を使い、そして手首の力を最大限生かして、初めてアームレスリングが成り立つ。

更にもう一つ、テクニクが存在する。それは相手の親指を自分の親指で包み込む様に握る事である。経験者ならばまだしも、素人は

案外このテクニクを知らない。証拠にユーキはそんなテクニク知らないでいた。

——自信はあった。

——アームレスリングなら、俺に分がある。

——そう思っていたから、腕相撲大会を開いた。

——なのに、コイツ……！ やっぱリデタラメか……！

——身体全体の俺に対して、コイツは腕力だけで拮抗している……ッ！

それどころか。

「憤ッ怒ッ!!」

「ッッ!」

徐々に徐々に、ユーキが押しで行った。

それこそ腕力だけで、手首や身体全体でどうのといった小細工など使わずに。腕の力だけでユーキは押していた。

もはや、エギルの頭の中には罰ゲームなど消えていた。

自分はすっかりアームレスリングをしているのに対して、ユーキは腕だけを使った規格外。条件もエギルに分があるにも関わらず負けることなど出来はしない。

エギルは歯を食いしばり、

「ヌウああアア!!」

「なに……!?!」

エギルが押して。

「腕ごと、へし折ってやるあ……!」

「ンヌウウウ!」

ユーキが押して。

「諦めるものかあ……！」

「この、野郎があ……ッ!!」

拮抗状態になった。

お互い引かない。

どちらかが押しても、かならずどちらかが盛り返す。その繰り返しであり、その様子はもはや意地と意地のドツジボール。先に心が折れたほうが負けるチキンレース。

ワツ、と会場のボルテージもますますヒートアップしていく。

間近に見ていたユウキはすごい！と興奮し、見守っていたアスナはどちらを応援したものか右往左往していた。

五分の勝負。されど五分の勝負。力が拮抗しているのなら、決着などあり得ない。

勝敗の天秤は。

「クケケ……ッ!!」

ユーキへと傾いていた。エギルもユーキも汗を流し、同じような状態であるが表情は真逆であった。

勝利を確信したユーキは悪魔のような笑みを浮かべ、エギルは苦悶の表情を浮かべている。

「これは、オレの勝ちだなあ……ドリユーくんよお……っ！」

「馬、鹿野郎！俺はエギルう！斧使いのエギルウウ……っ！」

ニヤリ、とユーキは笑みを浮かべる。

勝利を確信するも、その様子は油断も慢心もない。丁寧、丁寧に。丁寧を重ねて、細心の注意を払ってエギルを潰していく。

もう少しでユーキの勝利となる。

カカカッ！と魔物のような笑い声を発し、エギルは唇を噛みしめて残りの力を振り絞る。

どっちが悪で、どっちが正義かわかったもんじやない。少なくとも、ユーキは妙な罰ゲームにアスナを巻き込むまいと戦っているのだから、まともな理由と言えるだろう。だがその顔は悪党のそれである。とてもではないが、まともな理由があるとは思えない顔だ。

——もうちよつとで、オレの勝ちだ……！

——当然だ、オレは負けねえ……！

——結婚もしてねえ若い女が、男と添い寝なんて……っ！

——ダメに、決まってんだろっ……！

カッ！とユーキの両眼が見開いた。

大きく息を吸い込み、ラストスパートをかける。これで悪は叩き潰され、アスナは守られる。

「これで——」

終わりだ、とユーキが言う前に。

「ドリユーさん、頑張って——！！」

エギルを応援する声が聴こえた。

ユーキはそちらに無意識に意識を向けてしまう。聞き覚えのある声、何よりもどうして自分ではなくエギルを応援するのか意味がわからない。

応援する声——アスナに思わず必死な声で。

「オ、マエ……！ 何を——」

一瞬の隙。

直ぐにハツと意識をアスナからエギルに戻すも遅かった。
エギルは大きく息を吸い込むと――。

「レベッカ――！　ダデイに力を――　ツツ!!」

「ま――」

待て、と言おうとしたのだろう。

だが最後までその言葉は紡がれずに、一瞬の内に決着した。

ユーキの右手は抗う時間も術もなく、打ち倒される。

ドガンツ！と一際大きな音を立てた。それが決着の合図であり、どちらが勝利したのか知らせる鐘でもあった。

勝者――　エギルは両腕を高々に天へ掲げて、己の存在を知らしめていく。そしてそれに呼応するように、周囲が沸いた。怒声にも似た歓声。その全てがエギルを讃えている。

辺りからは絶え間ないエギルコール。勝者に最大限の賛辞、最大限の名誉を声高々に謳っていた。

そして敗者は馬鹿な、と呆然と呟いた――。

「マジか……」

幕間 幼馴染と妹と寝てるんだけど質問ある？

2024年1月25日 AM1:25

第十八層 主街区『ユーカリ』 ギルドホーム

騒がしくも楽しかった歓迎会も終わって、数時間が経とうとしていた。

現在において、『アクセセル・ワールド加速世界』のギルドホームにいるプレイヤーはギルドメンバーのみとなっている。

リズベットとユイは歓迎会の途中で寝てしまいリズベットの部屋で寝ているし、キリトはフラフラになりながら居間のソファアに倒れ込み就寝。

何も変わらない夜が訪れ、だいぶ変化した睡眠が始まっていた。

場所はユーキの部屋。必要最低限のモノしか置いておらず、インテリアの購入など考えたこともないのだろう。本棚もないのだから書物もなければ、机もないのだから椅子もなかった。目を引くものがあるとするれば、何もない部屋だからこそ異様に存在感を醸し出しているベッド。あとは床に乱雑に転がっているダンベル程度だろう。鉄作りのものもアレば、石を削った作りのモノも存在しており、無駄にこだわりの強いことが感じられる。

そんな殺風景の部屋の主——ユーキはベッドで仰向けで横になっていた。

しんと静まり返る夜の部屋。先刻どんちゃん騒ぎをしていた家とは思えないくらい、静かな夜だった。

そんな静まり返った夜に、ゴソゴソと音が聞こえる。衣擦れの音と言ってもいい。まるで自分の寝やすい位置に身体のポジションをずらしているかのような音。それもユーキの両耳から聞こえている。

二重に聞こえる衣擦れの音、そして二重の人の体温を両腕に感じながら、ユーキは深く深くそれはもう深いため息を吐いて一言。

「狭い」

言葉に出した瞬間、それはそうだろうとユーキは一人で納得した。何せこのベッドは一人で寝る分には余裕はある。二人で寝るとなると丁度良い。しかし今は三人同じベッドに身を預けている。もちろん狭くなるなど決まっているし、それはわかりきったモノだった。それでも自身と一緒に寝たいという物好き二人に、ユーキは提案する。

「やっぱりよお、オレ居間のソファァーに——」

寝るわと言う前に、遮るように二人同時に声を出した。

「ダメだよー！」

「わたしはこのままで良いと思うな……」

元氣よく満面の笑みでユーキの右腕にギュツと寄り添っているユウキ。それとは対象的に消え入りそうな声で、ユーキの左側の服の裾を軽く握るアスナ。

言動も対象的であるのなら、行動もどこか逆と言える二人。人懐っこいユウキに対して、アスナは遠慮がちで恥ずかしいのか耳まで真っ赤になっていた。しかし幸か不幸か、部屋も暗くユーキには現在のアスナの分かりやすい変化は見えていなかった。

あまつさえ。

——まあ、無理もねえ。

——付き合いが長いとは言え、好きでも何でもないヤツと寝るんだ。

——テンションが下がるのも無理はないだろう。

——ドリユークんのヤツ、どういうつもりだ？

見当違いも甚だしい解釈をする。

それどころか、オレの罰ゲームに付き合うなんて、人付き合いの良いヤツだ、と見直している節すらあった。

少年がもう少しだけ自分のことを好きであるのなら、アスナの好意に気付いたのかもしれない。だが生憎とユーキは自分自身のことを世界で一番嫌悪しているような人間だ。そんな人間が、自分の良いところを何一つ理解していない人間が、他人からの好意に気付く筈もない。

気付かないまま、少年は最もな意見を口にする。

「寝返りもうてねえんだけど……」

「それじゃ、寝返りをうつときはアスナから順番にやらなきやダメだね」

「何の解決にもなつてねえよ……」

フフン、と得意気と言うユウキに、呆れた口調で返す。

そのまま気怠げな口調で、ユーキは続けた。

「それに暑苦しい」

「酷いよにーちゃん、女の子に失礼だと思っようよ！」

「女の子を自称するなら、もう少し慎みつてのを覚えろ」

ユーキは再び、深いため息を吐いて。

「結婚前の女がよお、好きでもないクソ野郎と一緒に寝ようとしてんじゃねえよ」

「ボクはにーちゃんが好きだよ？」

「……オマエはいいき。百歩譲つて、オレの妹なんだからな」

「だけだよ、と言葉を区切り左にいるアスナを横目で見てから、再度天井へと視線を向けて。」

「アスナを見てみる。コイツに至っては、思いっきり巻き込まれただけじゃねえか」

「そうかなー？ アスナも喜んでると思うけど」

ユウキは呑気に首を傾げて「ね、アスナ？」と黙っていた彼女に話を振った。未だに真っ赤に顔を染め、耳まで赤く染めているアスナは力無く「うん」と答える。

その小さい声が耳に入り、ユウキはニツコリと笑みを浮かべて。

「ね？」

「ね、じゃねえよ……」

「いいからいいから。それにほら、二人だと楽しいけど、三人だともつと楽しいと思うよ？」

「なにその、美味しいモノと美味しいモノ足したら、もっと美味しいモノが出来上がる理論。頭悪いにも程があんだろ」

「——ユウキくんは」

と、ここで黙っていたアスナが声を上げた。

左へと視線を向ければ、アスナがユウキへ目を向けている。どこか纏るように、自信無さ気でビクビクと怖れるような不安といった口調で問う。

「ユウキくんは、わたしがここで寝ちや、いや……？」

「……………」

ユウキとしては「いや」というよりも「困る」といったニュアンスのほうが正しい。そう困る、困るのだ。アスナが隣で寝られちや、ユウキとしてもだいたい困る。

だからこそ、ユウキは正直な気持ちをアスナにぶつける。自身の正直な思い、嘘偽りのない言葉をアスナにぶつけた。

「まあ、いやじゃねえよ……」

うん、甘い。

やはり自分は幼馴染に対して、甘いということが再確認出来た。

——自分の部屋に帰れ。

——簡単な言葉なのに、言えなかった。

——泣きそうな声だったし。

——断ったら泣かれる。

——泣かれたらもつと困る。

自己嫌悪とはいかないものの、ハッキリと口にしない自分自身もつと嫌になった。

そんな兄の気持ちをつゆ知らず、妹はウンウンと満足気に頷くと満面の笑みで。

「よかったよー。にーちゃんが嫌だっていったらどうしよう、って心配しちゃった」

「……オマエさ、何か隠してない？」

「えっ!? な、何かかって? どうしてそんなこと思ったの?」
「勘」

一言、たった一言、されど一言。どういうわけか、説得力が溢れる一言だった。

しかし勘なんて証拠にもならないものであり、あくまで個人的な感覚のものだ。こんなもの直ぐに反論出来るし、容易く論破出来るだろう。

だが相手が悪かった。

第六感、虫の知らせ、野生の勘と言う意味ではユーキという男はスペシャリストであり、ユウキも弁論に秀でたタイプではない。むしろ、考えるよりも先に体が動くタイプ。考えるのではなく感じる側の

人間だ。

そんな人間が反論できるわけがなく、嘘をつける訳もない。ユウキはあわあわ、とテンパリながらもそれでも反論する。出た言葉と言えは――。

「さ、サメの話しをしようよー！」

「可哀想なくらい誤魔化すの下手だなオマエ」

「……ユウキ、寝ちやつた？」

アレから暫く三人で談笑していた。

アスナも慣れてきたのか、ようやくまともにユーキと会話することが出来るようになり、彼女は寝息を立て始めたユウキの今の状態を問いかける。

チラツ、とユーキは右側に視線を向ける。

規則正しい呼吸音、可愛らしい口が小さく開けてユウキは眼を瞑っていた。時折モニュモニュと口を動かし、ユーキの右腕をギュツと握り身体を預けている。

「……みたいだな」

「懐かれてるね」

「オレには出来すぎた妹だよ」

照れ隠しなのか忌々しげに言うユーキに対して、微笑ましく見えたのかクスクス笑みを浮かべて。

「それ、本人にいったら喜ぶと思うよ？」

「言うわけがないだろう」

「だよね」

それから暫く、会話がなくなった。

部屋に響くのは、ユウキの呼吸音のみ。静かで、静かすぎるくらい穏やかな時間が過ぎていく。

だがその沈黙も、心地良ものであった。落ち着く、と言っても問題はない。

それを証拠に、アスナの次の言葉は穏やかなもの。

話題がなくなつて焦つたような口調ではなく、極めて落ち着いた声で問う。

「覚えてる？」

「何をだ？」

「昔もこうして寝たことあつたよね」

「あー……」

それはいつの頃だったか。

数年前だったか、数十年前だったか。確かにアスナの言うとおり、こうして一つのベッドに寝たことがユウキの記憶にあつた。

アスナの家で、それもアスナの部屋での出来事であつたことを覚えている。

「ガキの頃の話しだろ」

「うん。遅くまで話ししてて」

「京子さんにキレられたんだつたか」

「そうそう！」

寝ているユウキを起こさないように声を押し殺しながら、アスナは楽しげに笑みを零す

それから困ったような口調に変わりながら続けて言った。

「あのお母さん恐かったねえ」

「まあ、ガキ二人が深夜に騒いでたんだから無理もねえだろ。つか、あの時の原因オマエな」

「え、そうだった？」

「昔やってたアニメのキャラの真似をしてたんだだろうが。ンで、オレが怪人役やらされてボッコボコにされてた、と」

「……えへへ、覚えてないや」

気恥ずかし気に笑って誤魔化すアスナに、ユーキは呆れた口調で言う。

「昔のオマエってそういうところあるよな。内弁慶というか、オレと浩一郎兄にはガツガツ言うくせに、外に出ると遠慮するというか」

「確かに、ね。近所の子に意地悪されてたもん。あの大きな男の子の……誰だった？」

「ジャンボな」

「そう、ジャンボくん！」

それからアスナはどこか嬉しそうな口調で続けて言う。

「あのときから、わたしって君に守られてたんだよね」

「別に守ってねえよ」

「ウソ。わたしが意地悪されてたら、必ず来てくれたでしょ？ ヒーローみたいな」

「余計なお節介ってヤツだろ。オレがヒーローなんてありえねえよ」

「でも、お節介はヒーローの証だ、って本で見たことあるよ」

「燃やしちまえんな本」

吐き捨てるように言うも、アスナは続けて呟いた。

「子供の頃から無茶してるもんねユーキくんは」

「無茶なんてしてねえよ」

「ううん、してるよ。考えるよりも先に身体が動いて、困っている人を助けちゃう。子供の頃から無茶してるもん」

そこまで言うと、アスナはどこか不安そうにユーキに問いを投げた。

「小学校の頃は無茶、してないよね……？」

一瞬、一瞬だけ後輩である『朝田』の顔が過ぎった。

小さい頃から一緒だったものの、小学校だけ通う学校が違うからアスナは小学生の頃のユーキを知らない。

そこでも、ユーキは傍から見たら無茶、といよりも狂人のような振る舞いをしていた。イジメられている後輩がいたから助け、全校生徒を敵に回しリンチのような喧嘩を日々行っていた。

とはいっても、ユーキは助けたといった認識はない。多人数で一人を痛めつけていたのが気に入らなかった。だから首を突っ込んだ程度の認識だ。これも少年の言葉を借りるのなら、余計なお節介の一つに入るのだろう。

故に、助けたという認識も、無茶をしているという自覚もない。

ボロボロにされた以上に最後にはやり返していたし、最終的にはユーキと朝田に喧嘩を売る人間はいなくなっていた。過程はどうあれ、結果よければ全て良し。そう捉えているユーキは、当然といった口調で。

「してねえよ」

「ホントに？」

「ホントに」

「う、そだあ……」

ぼんやりとした口調でアスナは否定する。

それから眠たそう「ふああ……」と小さくあくびをすると、ウトウトとユーキの左腕に頭を擦り付けてきた。

「眠いのか？」

「だいじょうぶ……」

言葉では言ったものの、口調はまったく頼りないものだ。

それも仕方ないといえるのかもしれない。朝からシリカのクエストを手伝い、帰ってきたら歓迎会の買い物をして、夜にはこうして自身が好いている男性と同じベッドに寝ている。

心も身体も休まる時間がなかったのだ。加えて、今の現状が若干慣れたということは、緊張の糸が切れたということ。つまり張り詰めた感覚がほぐれて、一気に疲れが押し寄せてきたようなものだ。

睡魔に負けそうなのも無理はない。

「いいから寝ろよ」

「おねがい、きいて？」

「ンだよ」

「うでまくら、して？」

「……何だよ？」

「ごどものころ、してくれたから……」

今は子供じゃないだろう、と心のなかでツツコミを入れてユーキは腕を伸ばして。

「ほら、これでいいのか？」

「うん。ありがとう、ゆうきくん」

そう言うと、ノロノロと自身の頭をユーキの腕に預けて、今度こそ

アスナの瞼は落ち、寝息を立て始める。

右腕はユウキに拘束されて、左腕はアスナの枕となっている。それから一際大きな溜息を吐いて。

「眠れるわけがねえだろクソツタレが……」

実のところ、一番緊張していたのはユーキであった。

それもその筈だ。捻くれており、物事を斜めに構えているとは言えど、ユーキも年相応の男である。

可愛い妹と可愛い幼馴染が両隣で寝ているとなっては、意識するもの当然だ。加えて、出る所が出ているアスナの身体と、幼さはあるものの出てなさそうであるユウキの身体を押し付けられている現状。

緊張しない筈もなく、意識しない筈もない。

これがアスナに添い寝されたら困る理由だ。嫌ではないが困る理由。ぶつちやけ、ユウキ一人でも困っていた。

心臓はバツクバク。思考もまとまらない。

究極のやせ我慢。それが今のユーキの姿であった。

よく受け答え出来ていたな、と珍しく自分に感心する。

「女には優しくしろ、って父さんに言われたが……」

その言葉は絶対の意思が宿っていた。

必ずやりとげる強い意志を声色に乗せて、一人ここに宣言する。

「——もう二度と、添い寝はしない」

第10話 鐘の音

2024年1月31日 AM9:55

第十八層 主街区『ユーカリ』ギルドホーム

ユーキは苛立ちを募らせていた。誰がどう見ても、ユーキは機嫌が悪かった。

眉間にしわを寄せて、これでもかというくらい不機嫌なオーラを出している。この状態で表通りを歩いたものなら、誰もが道を開ける。そこまでいい切れるくらい今のユーキは機嫌が悪かった。

ユーキは捻くれているし性根もねじ曲がっているとは言え、気まぐれで機嫌が変わるほど気難しい性格ではない。

少年が不機嫌になっている理由。それは――。

――あの野郎、どうして姿を見せねえ……。

――逃げてる……ってわけじゃねえな。

――あの野郎の性格上んな選択肢はない。

――何を考えてんだ……。

歓迎会が始まる前に、キリトはユーキに言った。ヒースクリフは茅場晶彦である可能性がある。

だからこそ確かめに、血盟騎士団のギルドホームへと足を運んでいた。結論から言ってしまうと、ユーキはヒースクリフ本人に会えずにいた。

足を運んでも丁度タイミング悪く外出しており、日にちを改めても同じ状況。ならば時間帯を変えればどうかと試しても結果は変わらない。それが数日間続き、ユーキのストレスは加速していく。加えて、何度も何度もヒースクリフに会おうとするものだから、血盟騎士団からは不審がられて難癖つけられる始末。

そうして、フラストレーションが溜まりに溜まっていた。

どこにぶつけていいか、というよりもぶつける先が雲隠れしている

状況なので、満身に発散させることが出来ない。

めんどくさいから、一日中張り付いてやろうか。などとイライラしながら考え、身支度を整えて自分の部屋から出て一階に降りる。だがここで、新たな疑問が一つ生まれた。

——…おかしい。

——妙に静かだ。

——いつもはこれでもかかってくらい、やかましいのに……。

——どういうわけか、少しだけ考えて一階に降りることにした。

考えた所で答えなど出てこない。どのみち、自分の目で確かめたほうが早いと思っただろう。

そうして一階に降りると。

「あ……？」

思わず声が出た。

一階の居間、つまりはリビングルームには一人の少女がいた。

少女の名前はユイ。白いワンピースを着て、どこかソワソワした様子でソファアに腰掛けている。

ユーキの見て取れる程の苛立ちが消える。頭をポリポリと搔いて、どうするか考えた。

正直なところ、ユーキはユイを苦手としていた。別にユイが腹黒いからとか、性格が悪いからといった理由ではない。むしろ優しい少女であるし、アクセル・ワールド加速世界のマスコットともなっている。

だが初対面が初対面だ、ユーキが苦手意識を持つのも無理はない。ユーキを見るや否や、悲鳴を上げながらガン泣き。今では何とか会話が出来るものの、どこかユーキの顔を伺うように、ビクビクしながら辛うじて受け答えが出来るまでには改善されていた。

だからこそ、ユーキはなるべくユイに話しかけないで過ごしていた。

また泣かれたらどうしたらわからないし、どう接していいかもわからない。それに——ストレアの件もある。

——どうするか……。

——連中がどこにいったのかは、メッセージを飛ばせば問題ない。

——ただ、話しかけねえってのはどうなんだ？

——感じ悪すぎだろ。

——また泣かれるかもしれねえ……。

とりあえず、声をかけることにした。

ユーキは、あー、っと気怠げに呟いて。

「……おはよう」

「お、おはよう、いざいませ……」

声をかけられたユイはビクツと一際肩を大きく震わせて、恐る恐ると言った調子で返す。

いつもならここで、二人のやり取りは終了する。

とても会話とは呼べないやり取り。朝の挨拶を済ませて終了する、

淡泊な関係がユーキとユイの今の関係であった。

必要最低限のやり取りで、なるべく傷つけないように接する。ユーキからはこれ以上深追いするつもりもなかった。

これから身支度を整えて、いつもどおり血盟騎士団のギルドホームへと向かう。そうして少年の一日が始まる——。

「あ、あのー」

——かと、思われた。

意を決するような声、それは誰からなのか。考えるまでもない。ユーキではないのなら、それはユイのモノとなる。

意外そうなモノをみたような眼で、ユーキは声の主を見る。

眼を丸くして普段からは想像もつかない珍しい表情になっている
ユーキに対して、ユイはギョツと両手を握り続けて。

「お話、しませんか——!?!」

.....
.....
.....

AM10:05

第五十層 主街区『アルゲート』

現在、開放されてる階層にて最上部に位置するのが、この第五十層
である。

とてもではないが、お世辞にも綺麗な街並みとは言えない。路面は
舗装されておらず、街並みも塗装が剥がれており錆びついている。路
地裏を入れれば、もう二度と表通りには戻つてこれないと思えるくらい
重層な作りとなっている。

まるで中国の下町のような風景。気が小さい人間から見たら、訪れ
ることすら躊躇してしまうようなアウトローな威圧感を放っていた。
兎にも角にも、良い印象を与えない主街区であるものの、それとは
真逆に人通りの数は多かった。

その理由としては、まだ攻略されてない階層であることが考えられ
る。迷宮区に足を運んでは、マッピングを進めてどんなダンジョンの
作りなのか、そしてどのようなモンスターが存在するのか。そういつ
た攻略の為の情報を集めて、高く売って儲ける。そんな理由で、レベ
ルの高いプレイヤーは第五十層に集まっていた。

人通りが多いということもあってか、大通りの脇道には無数の小さ

な店が点在していた。

それこそ隙間がないぐらいみっちり、ひしめき合っているくらいガツチリと。それも無理もないだろう。第五十層には今や多くの腕に覚えのあるプレイヤーが訪れている。商人として生活しているプレイヤーからしてみたら、これほど美味しい階層はないだろう。

ある者は朝から呼び込みを行っていたり、ある者は道端に刀剣や鎧を並べて露店を始めている者もいる。他にも酒場などがあるが、時間が時間なのか人っ気はなかったが、夜の『アルゲート』は朝とは違う雰囲気になることが予想出来た。

攻略に勤しむプレイヤーとしても、商人として生計を立てるプレイヤーとしても、今の『アルゲート』は住みやすい環境であった。

それは彼も例外ではない。

「フツ、フツ……！」

ガチャガチャ、と金属同士が合わさったような音。

黒い肌からは、滝のように流れる汗。カウンター席の内側に座っているのだから、彼がこの店の店主ということがわかる。

店の名前は『ダイシーショップ』。買い取りはもちろんだが、店内にはモンスターの素材や、回復薬の各種。武器や防具と節操がなく売られていた。

「フ……っ！ ツツア……！」

だがどういうわけか、店主は苦悶に顔を歪めている。とてもではないが、商人という顔ではない。商人というよりも戦士、前線で活躍する兵士の訓練風景を見ているようだった。

現に、彼は右手にダンベルを持ち、一定のリズムで肘を支点に上げ下げを繰り返している。簡単に言えば、筋トレである。長時間やっていることは、その汗の量でわかる。言うなれば滝、汗が休むことなく流れている。彼が忘れていた青春を味わっている最中である。

とそこに。

「エギル、何してんの……？」

若干引き気味に、声をかける女性プレイヤーが一人。

彼——エギルは「おお」と応じると筋トレをやめて、タオルで顔を拭きながらニカツと人の良い笑みを浮かべて。

「リズか。珍しいな、お前がここに来るなんて」

「うん。……いやいや、それよりも何してたのよ？」

「見てわかるだろ、筋トレだ」

そう言つて立ち上がると、エギルはポージングを取り始める。

片方の手首をつかみ、上から力を加え前腕、上腕、三角筋、大胸筋に力を込め、サイドチェストというポージングを取った後に。

「筋トレはいいぞ」

流れるように後ろを向くと、両腕を上げて身体を反らし上腕二頭筋、前腕、大腿四頭筋、腹筋、広背筋に力を込める。これが俗にいうバック・ダブル・バイセツプスである。

男子ならばそこで興奮するだろう。興奮するだけの見事な筋肉を、エギルは有している。

だが悲しいかな、それを見せているリズベットは女性。そういうフェチであれば生唾モノであるが、特にそういった性癖はないリズベットからしてみたらただドン引きするばかり。

筋肉とはときに凶器となり得てしまうのだ。

「あたしはどうして筋トレしてるのか聞いてるんだけど……」

「男の子にはな、負けられない戦いがあるのさ」

「詳しく」

「ユーキに腕相撲負けそうになったのがめっちゃ悔しい」
「なるほどねえ」

エギルが言っている腕相撲というのは、歓迎会での事を言っているのだろう。

途中からの記憶がないものの、大いに盛り上がったことをリズベツトはアスナから聞いている。だからだろうか、過程を見ていないリズベツトは結論から言った。

「でも勝ったんだからいいでしょ？」

「勝ったさ。でもアレは、アスナが俺を応援してユーキに隙ができたからだ。とてもじゃないが、実力で勝ったとは思えない……」

「え、そんなに強いのアイツ？」

中肉中背のユーキでは太刀打ちできないほどの筋肉ぶきをエギルは有していた。

エギルがショットガンに例えるなら、ユーキは竹槍。殺傷能力もリーチもまったく違う。争えばまったく話しにならずに、勝敗が決する。傍から見たらそこまでの戦力差が二人の間にはあった。

そこまで考えて、リズベツトはハツと思いたる。

その戦力差は現実世界での物差しである。この世界は仮想世界。鍛錬すればするほど、経験値として還元されて強くなっていくシステムだ。

そう考えれば考えるほど、先程のエギルの鍛錬も領ける。地道に鍛え、己を強くしているのだろう。

理にかなっているといえば、理にかなっている。

だがそれでもリズベツトはどこか申し訳無さそうな顔で、とても言いつらそうに現実を突きつけた。

「多分だけど、地道にやってるようじゃアイツには追いつけないと思うわよ？」

「何でだ？」

「アイツの鍛錬方法なんだけどね、もうギャグの領域なのよ」

「……参考までに聞かせてくれ」

えーつと、と思い出すようにリズベットは言う。

「アスナとユウキを背に乗せて腕立て。両腕を広げてその上に岩を乗つけて座禅。200キロ以上ある大剣を片手で素振り。あとは――」

「もういい、わかった」

一つ一つ数えるように言うリズベットに、頭を押さえてエギルは制止させた。

それから直ぐにニッコリと満面の笑みで、思考を放棄するように晴れ晴れとした笑顔で言った。

「さてはアイツ、凄まじいバカだな？」

「あら、知らなかったの？ 果てしないバカよ？」

「いやでも実際どうなんだ？ 鍛錬と言うか、拷問だろ。本当にそんなことやってるのか？」

「やってるわよ。キリトも張り合ったけど、ものの五分でギブアップよ」

リズベットはケラケラと楽しそうに笑みを零す。対してエギルと言えは当然だと納得するように頷いて。

「キリトでも無理だったか」

「まあ、あたしから言わせてみればキリトも化物よ。何もやってるわけでもないのに、ユーキと互角にやり合ってるし……」

「化物は化物でも、ベクトルの違う化物ってことだろ、あの二人は」

普段はいがみ合っているくせに、こと戦闘となると抜群コンビネー

シヨンを發揮する奇妙な二人。

十代ならではの若さだな、とエギルは一人納得すると何かに気付きリズベットに質問をぶつけた。

「そういえば、その二人はどうしたんだ？」

「キリトなら外にいるわよ？」

「ん？　なんで入ってこないんだ？」

「……まあ、見ればわかるわよ」

肩をすくめて呆れたような口調で言うリズベットに、エギルは不思議そうに首をかしげた。

リズベットの態度と言えば、口にするのもバカバカしいというかのようでもある。呆れて物が言えないとは、今の彼女の事を言うのだろう。

何があったのか数通りの予想を立てて、エギルはカウンターの内側から外側へと出て店の前へと足を進める。

そしてギョツと固まり、眼を丸くして。

「……どうしたんだ、キリト？」

数通りの考えなど、吹っ飛んでいた。自分の想像力の貧困具合をまざまざと見せつけられ、エギルは問いを投げる。

『はじまりの英雄』と呼ばれていた姿とは思えない。

情けなく、小さく、綺麗に纏まっていた。どんよりと影を背負い、この世のすべての悲しみを受け止めるかのように悲観な態度。

明日世界が終わります、と告げられた人間はこんな状態になってしまうのか。そう思わせるくらいの絶望を、キリトは背負っていた。

つまるところ、体育座りである。

それはもう綺麗なもの。体育座り選手権などが開催されたものなら、ぶつちぎりで優勝できるくらいの綺麗な体育座りを見せつける。

見せつけたまま、キリトはボソボソと語り始めた。

「ユイが、反抗期なんだ……」

「反抗期だあ?」

怪訝そうな声を出して、エギルはユイという少女を思い浮かべる。

自身の娘——レベツカと同じくらい、いやレベツカの方が良い子だ。そこだけは親としては譲れないらしい。レベツカより劣るものの、ユイも良い子であるとエギルは勝手に納得する。

キリトをパパ、と呼び慕うAI。ピーマンが嫌いで、キリトと同じく辛い物が好みという幼い身としては変わった少女。アスナもリズベツトも可愛がり、ユウキとも友達となっていた。ただユーキとはすこぶる相性が悪い。

自身の娘よりも劣るものの、可憐と呼ぶに相応しい。それがエギルから見たユイという少女であった。

それを踏まえて、エギルは再び問いを投げる。

「ユイがどうしたんだよ?」

「ユイがさ、ユーキと話しをしたいっていうんだ。それなら俺も一緒にいようって言ったたら、言ったたら……!」

「言ったら?」

「パパはいいですっていうんだよ! なんだ、パパはいいDEATH Hって! 死ねってことか!」

「いや、その『です』は『DEATH』ってことじゃないと思うぞ」「そうだろうか、いやそうじゃない! 娘ってのは、父親が臭くなったら殺したくなるって前にクライインから聞いたんだ! 俺ってそんなに臭いかな!? 加齢臭ってるかな俺!」

普段の冷静な態度はどこへやら。いつもは冷静沈着、作戦の発案を率先して行っていたキリトからは考えられない取り乱しようだ。

ユイのやつ、もしかしてユーキのことが好きなのかなあ!? と項垂れる始末である。

頭を抱えて蹲るキリトを見て、エギルも少しだけ考える。とても他
人事には思えないのだ。よくよく考えてみれば、レベツカもユーキに
懐いている。口は悪くぶつきらぼうであるものの、面倒見が良いのか
直ぐに仲良くなっていた。

デスゲームが始まる前には、レベツカの我儘をユーキは文句を言い
ながら叶えていたことを思い出す。

そう他人事ではない。

今のキリトの有様を、エギルは我が事のように見つめて固く誓っ
た。

——身体はよく洗おう——と。

「おーい、そのまるでダメな男達。そもそもな話し、ユイは反抗期で
はないし、論点がズレてるの気付いてる?」

.....
.....
.....
.....

AM11:56

第十八層 主街区『ユーカリ』ギルドホーム

——さて、どうしたものか。

ユーキはぼんやりと、天を仰ぎ見て考えていた。考えているのは今
の現状。

チラツ、と横目で隣に座っている幼女^{ユイ}を見て、再び天井へと視線を
向ける。染みなどなく、木造建築特有の木の繋ぎ目が広がっていた。
話をしたい言われ、同じソファアに座ったは良いものの、有に二時
間弱経過していた。

その間二人は無言。ユイは焦りながら言葉を選んでいる様子であ

るし、ユーキはブーツと天井を見上げる状況。

時折ユウキのおやつ用に確保していたお菓子を「ビスケット、食う？」と言う言葉と共に、ユイに渡していたが三十分前にすべて渡してしまっていた。いよいよ渡すものがなくなってしまう、ユーキは途方に暮れ現在に至る。

——そもそも、ンでコイツはオレなんかと話しがしたいんだ？

——嫌われてなかったっけオレ……。

そもそも、ユイはユーキを恐れていた筈だ。

先代カーデインナルからユイはストレアとは違い『ユーキというプレイヤーは恐ろしい人間だ』と教え込まれてきた。本気の悲鳴を上げられたのも今では昔の話だ。

それからというもの、ユーキも特にユイと距離を詰める努力をするとなどなかった。だからユイから見たユーキという人間は第一印象のまま。怖い人止まりである筈なのだ。

だがどういうわけか、ユイの方から距離を詰めて来ている。

この世で一番怖い生物であるユーキに向かって、お話ししようと歩み寄って来ていた。

それを無下にすることはユーキには出来ない。それに——ストレアの件もある。自分を救ってくれた彼女の姉とも呼べるユイに、少なからず負い目をユーキは感じていた。

だからこうして拒否をすることもなく、いつもの口の悪さもなりを潜めユイの希望を叶えているわけであるが。

「……………」

「……………」

会話がない。

どうしてオレと話しがしたいんだ？ と疑問をぶつけてもいい。だがどうにもユーキはその方法は気が引けた。焦らせているようで、

今も必死に言葉を選んでるユイに申し訳なく感じるのだ。かと言つて、このまま時間だけが過ぎるのも退屈である。さて、どうしたものか。

と、思考を一巡させて三度天を仰ぎ見ていると。

「あの……」

申し訳なさそうに、ユイが口を開いた。

少女はそのままギョツと両手を握り締め、振り絞るように続ける。

「時間をとらせてしまつてごめんなさい、今日は貴方に聞きたいことがあつて……」

「構わねえよ。なんだ、聞きたいことつて？」

努めて優しい声を出す。

普段からは考えられないほどのユーキの優しい声色に、ユイはホツと胸をなでおろすと幾分か緊張が解けたのか声が若干朗々としたものに変える。

「どうして貴方は、現実世界に戻りたいんですか？」

「随分と急だな」

ユーキの言い分ももつともだ、と。

ユイは納得し、ポツリポツリとゆっくりと口を開く。

「カーディナルからパパに預けられてから、わたし色々な人間を見てきました。悲しければ泣き、楽しければ笑い、怒れば感情を荒立てる。それが人間なんだと学びました」

そう言うと、ユイはユーキを見上げる。

怯えながらも観察するように、恐れながらも好奇的な眼でユーキと

いう深淵を覗き込んだ。

「みんなここから抜け出して、現実世界に帰ることを望んでいます。現実世界にはモンスターもいないし、PKされる心配もない。安全な暮らしが保証されているから」

でも、と言葉を区切り続けて言う。

「貴方は違う。ここから出た所で、貴方には平穏が訪れない。何故なら貴方は、茅場優希さんは茅場晶彦の親族だから……」

量子物理学者、天才的ゲームデザイナー。

地球の科学という分野を何世代も先に進めた男。それが茅場晶彦という人物であった。人は彼を『天才』持て囃していたが、今となっては忌名と化している。

ソードアート・オンラインの正式サービス開始と同時にクリアしなければログアウト不可能・ゲーム中の死が現実での死に直結するというデスゲームを開始させた張本人。未曾有のサイバーテロを引き起こした元凶。

それが世間から見た茅場晶彦であった。

既にマスコミは彼の血縁を調べ尽くしているだろう。

その中にはもちろん、茅場優希の名もある筈であるし、少年がソードアート・オンラインに囚われていることも知られている筈だ。

もしかしたら同情されるかもしれない。

しかし人間の考えは千差万別。全ての人間が同情するとは限らない、中にはソードアート・オンラインの中で犠牲になった親族、もしくは関係者が茅場晶彦の血縁であるユーキに恨みを持つことだってあるだろう。

そうなってしまうえば、ユーキの現状は変わらない。現実世界でも平穏はやってこない。

だが。

「まあ、そうだろうな」

悲観することなく、ただ当然として受け入れる。

楽観的に考えている様子もない。ただただ事実として、受け止めるユーキをユイは理解が出来なかった。この反応は、ユイが思い描く人間の定義から大いに外れるモノであるから。

「どうして貴方は、そんな平然としているんですか……?」

「だって、それは当然のことだろ?」

「当然、って……」

眼を丸くし信じられないモノを見るような眼でユーキを見る。

対する少年の様子は変わらない。平然とした調子で続ける。

「ここから抜け出したらアイツは捕まる。そうなれば、手頃の位置にいる人間を攻撃するのは当然だろ」

「貴方は、理不尽って、思わないの……?」

「思うさ。どうしてアイツがこんなバカな真似したかは知らねえが、オレだって被害者だ。オレにはオレの言い分がある」

そこまで言うと、ユーキは真っ直ぐとユイを見つめた。

その瞳の奥には怒り、憎しみ、そして微かに悲しみが見え隠れしている。

「アイツがやらかした罪は消えることはない。誰もが忘れねえ、一生背負わなければならないもんだ。そこまでのことを、やらかしたからな」

「……………」

ユイにはその言葉の意味がわかっていった。

デスゲームと化した世界で、プレイヤーを襲った絶望は痛いほど理解していた。誰もが絶望し、誰もが悲観し、誰もが憎悪する。現実世界でも同じであり、対象も同じく茅場晶彦だ。

それこそが彼が背負うべき業というものののだろう。

そして、その対象の中に加わることを良しとする少年は続ける。

「身内がやらかしました、オレは関係がありません。ってのは、どうも違う気がする。アイツには味方がいねえ、オレも許しているわけじゃない。それでも一緒に罪を背負ってやるのが、家族つてもんじやないのかって思うわけよ」

「貴方も被害者なのに、ですか？」

「……人間ってのはな、目に見えない癖に絆とか信じちまうもんなんだよ。認めたくねえが、オレとアイツは家族だからな。それに世話になった恩もある。一緒になってアイツに石を投げるのが楽な生き方なのかもしれないが、どうにもオレには出来そうにない」

忌々しげに言うユーキ対して、ユイはようやく理解することが出来た。

どうして自分が、少年に恐怖を抱いていたのか。

単純な話し、茅場優希を理解できなかったからこそ、ユイは恐怖していたのだ。

何せ、思考回路が合理的ではない。理屈に合わずに、その行動に道理もない。正に『非合理の怪物』と言える。ただ自分を殺し、苦難な方へと進んで行く少年がユイには理解出来なかった。だからこそ恐怖していた。

お人好し、なんて言葉では済ませてはいけない何かを、茅場優希は孕んでいる。

キリトやアスナ達のように人が好いというわけではなく、自分という存在を勘定に入れていない極めて歪んだ存在。眼を離したら死んでいるような、危なっかしい人間。それが茅場優希なのだ、とユイはようやく理解することが出来た。

——わかった気がします。

——どうしてパパやリズお姉さん達がこの人を放っておかないのか。

——危ういんだ。

——眼を離したら死んじやう。

——そんな危うさを持っているから、みんなこの人を放っておけないんだ……。

——それに誰もが知っている。

——この人が、優しいってことが。

——誰もが願っている。

——この人が本当の意味で、自分の為に笑ってほしいって。

「もつと、自分を大事にしてください」

「……それはどう言う意味だ？」

「そのままの意味です。貴方はもつと幸せになって、もつと自分を大事にしている筈なんです！ 罪を背負うなんてカッコつけないでください！ じゃないと——ストレアが悲しみます！」

「……オマエ」

思わず、呆気にとられた。

自分を恐れていたユイが、ここまで声を荒げるとは思っていなかったのだ。

言葉を失うと言っても良い。

必死に悲しそうに、涙を両眼に溜めながら訴えるユイを見てユーキは口を開く。しかしそこから言葉が続けられることはなかった。

——突如鐘の音が響き渡った——。

リンゴーン、リンゴーンという音が第十八層に響き渡った。

「変、ですね。この階層には鐘なんてない筈なのに……」

ユイは不安そうに、ソファアから立ち上がり疑問を口にした。
しかしユーキは座ったまま、静かに鐘の音に耳を傾けていた。聞き
覚えがあった、騒々しい鐘の音。まるで終わりを告げるような音色
に、ユーキは聞き覚えがあった。
それが何なのか考えて。

「!?!」

ユーキは急に立ち上がり、左手でユイを抱き寄せる。
突然のことだったので、ユイは小さく「キヤツ」と悲鳴を上げるも
ユーキは構っている余裕などなかった。

「悪いが、我慢しろ。絶対にオレから離れんじやねえぞ!」
「えっ、は、はい!」

尋常じやない有無を言わせないユーキの様子に、ユイは言われた通
りギョツとユーキの左手を握りしめる。

メインメニュー・ウインドウを素早く開き、装備画面から両手剣を
取り出して、右手に愛剣『アクセルワールド』を持ち構えた。

忘れるわけがない、忘れるはずがない。この鐘の音は――。

――これは、あの時の鐘の音。

――デスゲームが始まったときの鐘の音だ……!

ユーキとユイの身体を鮮やかな青色の光の柱が包み込んでいく。

『^{レポート}転移』である。それも強制に、デスゲームが始まる前のように意
思とは関係なく。

かつて、デスゲームを告げた鐘の音は鳴り響く。

平穏を終わらせ、地獄を作り上げた晩鐘は変わることはなく、例外
はない。

この鐘の音が地獄を作るといふのなら——再び地獄を、創り上げる事だろう。

第1話 はじまり

2024年1月31日 時刻未明

第一層 『はじまりの街』

「ユーキさん……」

「……心配すんな」

不安そうな声を出すユイに、ユーキは右手に持つ剣を持ち直す。

そして左手でユイを抱き寄せて、周囲を注意深く見渡した。その場に居るのは彼らだけではない。周囲には人影がひしめいていた。

数千という膨大な数のプレイヤー達の姿。

重装な鎧に見を包んでいる男性も居れば、軽装で明らかにフィールドに出る装備ではない少女も居る。麦わら帽子を被り釣り竿を持つ年配の男性も居れば、年端もいかない布製の衣類に身に纏った少年もその場に立ち尽くしていた。

恐らく、彼らもユーキ達と同じく強制的にこの場に転移させられたのだろう。

全員が全員、事態が掴めないのか、数秒間ポカンと押し黙り辺りをキョロキョロと見渡すと、空を見上げて表情が凍りつく。

——それは、あの時の再現だった。

広大な石畳。中性ヨーロッパを思わせる石造りの建造物。その正面には他者を威圧するようにそびえ立つ、黒光りする宮殿『黒鉄宮』の存在。

そして空は真紅に染められていた。時刻からして、まだ昼前後。日が落ちるには早いし、何よりもその色は夕暮れ特有の橙色のそれではない。言ってしまうえば血の色のような、見るものを不安にさせるおどろおどろしいナニかだ。

そんなおぞましい色の空に、文字が交互に点滅を始める。その単語

は『Warning』と『System Announcement』の二文字。

忘れる事が出来ない、忘れる筈がない。

今の状況、眼に映る光景、そして突拍子もない強制転移。

そう、これは——デスゲームの始まりを告げた運命の日を再現しているかのようだった。

周りがザワつき始める。

初日の悪夢が蘇り必死に顔を横に振り否定する人間も居れば、ただ状況が読めず思考を放棄する人間も居る。だが大半は、苛立ちを覚える者が多いのか怒声のような喚き声が上がりに始めた。

それは爆弾のようなものだ。一発どこかで爆発したのなら、二発目が直ぐに暴発する。三発目、四発目と続き叫びは直ぐに数千を超えていた。だがどれもこれも純粹な怒りの声ではない。確かに声を荒げてはいる、しかし全てが不安から生じる叫びである。

一抹の不安を紛らわせようとする、健気な延命行為。

ギョツと、ユーキの左手をユイは強く握り始める。微かにその身体は、震えていた。

彼女はAI。メンタルヘルス・カウンセリングプログラムだ。この手の感情は彼女の特性上、容易く読み取ることが出来てしまう。不安、恐怖、絶望、それらが一気に数千という数となって観測する事が出来てしまうのだ。

ユイが怯えるのも無理はない。

かと言って、彼らの気持ちもわからないでもない。

ソードアート・オンラインのユーザーにとつても、今の状況は悪夢といっても差し支えない。言ってしまうえばトラウマのようなものだ。もう二度と見たくなかった光景を見せつけられて、冷静でいられるほど人間は強く設計されていない。

そんな中、ユーキは舌打ちを小さくした。

どうすることも出来ない歯がゆさ。この混乱を押さええつける発言力も、ユイを安心させるほどの説得力もユーキにはない。ただ時が解決してくれるのを待つしか出来ない己の情けなさに、ひたすら苛立ち

を募らせていた。

——アイツらはどうした？

——ここに居る連中が生き残っているプレイヤー共だとしたら、アイツらもここにいる筈だろ。

——無事なのか？

——クソっ、何も状況がわからねえぞ……！

考えた所で、何も好転はしなかった。

混乱の渦に叩き落されて、何も状況は掴めない。顔馴染み達は無事なのか、今から何が始まるのか。まったく予想が出来ずに、混乱だけが加速していく。

そこに。

「ユーキくん！」

「にーちゃん！」

安堵の表情で、ユーキ達に駆け寄る女性プレイヤーの姿——アスナとユウキの姿があった。

アスナは不安だったのか双眸には涙が溜めており、ユウキもいつもの天真爛漫な様子はなくどこか不安そうに落ち着きなく辺りを見渡した。

何の変わらないユーキの姿に、ホッと胸をなでおろすのや否や、直ぐに膝を折ってユイと同じ目線に合わせると切羽詰まった様子で確認する。

「ユイちゃんは無事？」

「は、はい。わたしは大丈夫です……」

「オマエらだけか？」

ユーキの問いに、ユウキは「うん」と一度頷いて。

「キリトとリズは確か、エギルのお店に行くって言ってたよ」
「なら問題はねえな。あの野郎が一緒にいるんだ、下手なことにはならねえだろう」

いつの間にかギルドメンバーが死んでいた、という最悪な状況がひとまず回避されると、ユーキは左手にしがみついていたユイを努めて優しくアスナの方へとやった。

ポカン、と眼を丸くしているユイとアスナを見て、ユーキは簡潔に伝えた。

「ソイツは任せる」

慌てながらユイを抱き寄せたアスナは、切羽詰まった声で問いを投げた。

「えっ、ちょよ、ちょっと待ってよ！ ユーキくんはどこに行くの!？」

「別行動だよ。嫌な予感がする」

「……それってなに？」

ユウキも薄々勘付いているのか慌てる様子はなく、敢えてユーキに問いかけた。

「状況はあの時の再現だがよ、一つ足りないモノがあんだろ。オレ達はいったい誰に、デスゲームの開始を宣言されたよ。ソイツが現れてねえだろ」

ユーキは空を指差して事実だけを話す。

「茅場晶彦だ。あの野郎は確実に——この中にいる」

もはや周囲は混乱を極まっていた。

空に向かって叫んだ所で応答はない。叫びは空に飛び、また新しい叫びによって掻き消されていく。

ある物は絶望を訴え、ある者は不安を嘆き、ある者は悲観に明け暮れる。阿鼻叫喚、正に地獄絵図。このまま放置したものなら、たちまち暴動へと繋がることだろう。そうなつては保たれていた秩序は崩壊し、混沌へと変貌を遂げるに違いない。

冷静でいるプレイヤーなど限られており、ほとんどの者が呆然と事態を飲み込めていなかった。

それはアインクラッド最強ギルド『血盟騎士団』も例外ではなかった。団員はわけもわからず辺りを見渡し、立ち尽くすのみであった。わけがわからなかった。

先程まで、自分たちはギルドホームにいたはずだ。数日後には第五十層のフロアボス攻略会議を開き、他の攻略組と連携し攻略する。そういう手筈だったはずだ。

だがこれは、団員たちの目に映る地獄はいったいなんなのか。悪夢の再現がその眼に広がっていた。『血盟騎士団』というだけで一目置いていたプレイヤー達は誰もこちらを見ない。誰もが好き勝手叫んでいる。この状況から逃避するかのようには、想いの丈を叫んでいた。

ここで団員たちは理解した。

この場において、自分たちは平等であるのだ、と。攻略組も中層プレイヤーも、初心者も。大人も子供も、関係がない。誰もが平等に、誰もが等しく混乱していた。

その瞬間、血盟騎士団の纏っていた矜持という名の檻が壊れかけた。彼らも一人の人間なのだ。この状況は怖いし、恐ろしい。攻略組最強ギルドだと持て囃されても、所詮は同じ人間。不安なもののは不安

であるし、恐ろしいものは恐ろしいのだ。

それを紛らわせるのが叫びだというのなら、自分たちが同じ行動しても問題はない。

ならばいつそのこと、この狂気に身を任せた方が楽だというのなら

——同じく叫ぼう。

団員たちは口を開きかけるも。

「落ち着け！」

凜とした大きな声。

呆然と立ち尽くしていた団員ひとりひとりに、その男は声をかけていた。

周囲の叫声に負けない力強い声で彼——ディアベルは続ける。

「オレ達が混乱してどうする！ オレ達は血盟騎士団、最強のギルドと呼ばれてきたんだぞ！ ここでオレ達がみんなを安心させずしてどうする！」

そこまで言うと、チラツと今だに静観している「団長」を見て、直ぐに団員たちに指示を出した。

「他のプレイヤー達に声をかけろ。虚勢でもいい、大丈夫だと励まし続ける！」

血盟騎士団で一人、ディアベルだけ冷静だった。

周囲を見て、冷静に分析し、己が何をすべきなのか理解し行動に移す。『血盟騎士団』というブランドを最大限利用し、ことの事態の收拾に移る。人間とは肩書に弱いモノだ、攻略組最強のギルド『血盟騎士団』が大丈夫だというのだから、それだけで説得力はある。

団員たちはディアベルの鶴の一声に散ると手当たり次第に声をかけ始めた。

団員の中には、ぎこちなく笑う者もいれば、怯えた顔のまま声をかける者もいる。

だが少しづつ少しづつであるが、事態は収まっていた。怒声かなりを潜み始めて、喚声は穏やかになりつつある。

だが事態が好転することはない。空は真紅に染まったままだし、『Warning』と『System Announcement』の二文字が点滅を続けている。

これではまた同じことの繰り返しになる。

最悪、押さえつけた反動で悪化して暴動が起きるかもしれない。

その前に、この状況をなんとかしなければならぬ。ディアベルはそう考えていると――。

「――君も『彼』と同じく、随分と強くなったものだな」

今まで静観していた団長――ヒースクリフが静かな口調で、感慨深いといった調子でディアベルに話しかけてきた。

「私が声をかけた時から比べると見違えるようだ。あの時の君は何も出来ずにいたのに、今はまるで違う。自分が何をすべきなのか考え、行動に移せる力を身に着けた」

「団長……何を……？」

ディアベルの目に映るヒースクリフは変わらない。

彼はいつだって冷静で、的確な指示を団員たちに与えてきた。ときに意味不明で理解が出来ない指示も、最終的にこれ以上はないという采配であった。その指示は未来予知でもしているのではないというくらい、先を見据えてのモノであった。

そう、いつだってヒースクリフは冷静だ。

それは変わらずに、今の状況でも彼は『冷静だった』。

思わず、ディアベルは一步後ずさる。

この状況で静かな眼をするヒースクリフに、純粋な得体の知れない

感情がディアベルから湧き上がってきた。

遠くを見据えていたヒースクリフの眼が、今度はディアベルに注がれている。

「頃合い、か……」

ヒースクリフは左手を振り、出現したウィンドウを素早く操作する。

瞬間――。

「なっ……！！？」

ディアベルの身体が膝から崩れ落ちた。

彼だけではない。血盟騎士団の数十名、団員でもないプレイヤーや攻略ギルドである『聖竜連合』『風林火山』『月夜の黒猫団』の数名も同じように、不自然な格好で倒れていた。

何がどうなっているのか頭の中で混乱するディアベルの視界の隅に、HPバーが目に残る。

色はグリーン。HPも全開のままであるが、一つ違う普段とは違う点があった。HPバーがグリーンのまま、点滅している。麻痺状態である。

周りからはうめき声が聞こえる。

歯を食いしばりもがこうとも、立ち上がることは誰もが出来ない。

「すまない。現在、生き残っているプレイヤーのレベルが高い者達から百名のみ動けなくさせてもらった」

まるで創造主の御業のような口ぶり。そんなことが出来るのはゲームマスターくらいのものだ。

発現者をディアベルは力無く継るように見上げる。ありえない、そんなことありえないといった継るような眼。向けられているヒース

クリフは無視するように、静かに朗々とした口調で続けた。

「諸君は不思議に思わなかっただろうか。この事件の元凶、茅場晶彦はどうやって自分たちを観測しているのか、と」

しん、と辺りが静まり返る。

何もかもが凍りつき、生命の息吹すら感じさせない状況になっても、ヒースクリフの様子は変わることはない。

「気付いた者もいるようだが、諸君らには改めて宣言するでしょう――

――私が茅場晶彦だ」

それでも周囲は静かなものだった。

血盟騎士団の団長ヒースクリフに騙されたという怒りよりも、考えが追い付かずに判断が出来かねているのだろう。

「予定では第九十五層に到達した直後にでも明かすつもりだったのだが、予想外のこと連続で起きてね。幾分か前倒しをさせてもらった」

やれやれ、と言うかのように肩をすくめる。

無機質で、無感情。彼らがテレビや雑誌などで見たことがある茅場晶彦とはまったく違う顔。だがその雰囲気は、この場に君臨したロボのアバターそのものであった。

観測者にして創造主。この世界に自分たちを囚えた看守長であり、このデスゲームのすべての元凶。

信じていた者からの裏切り。

ディアベルは「嘘だ！」と叫びかけるも。

「アンタは、私達を騙したのか!?!」

凍りついたように動きを止めていたプレイヤーの中の一人が絶叫する。

赤い頭髪の女性——ロザリアはその両手に十文字槍持ち、その刃先をヒースクリフに向けていた。

何故彼女が動けるのか、少しだけぼんやりと考えて百名以下であることを納得してヒースクリフは変わらずに静かに問いを投げる。

「君は……ロザリア君だったかな？ 私が茅場ということ隠していたというのなら、君の言うとおりに騙していたということになるな」「ふぎ、けるな……！」

ギリツ、とロザリアは歯を食いしばる。

その槍の剣先は震えるも、真っ直ぐにヒースクリフに向けられていた。

その震えは何なのか。恐怖なのか怒りなのか、悲しみであるのか失望であるのか。恐らく全ての感情が内訌しているのだろう。

「私はアンタを信じてきた！ アンタを信じてここまでやってきたんだ！」

「ああ。君達、血盟騎士団には世話になったよ。よく今まで私に付き従ってくれた」

札を言う、と軽く顎を引いて頭を下げた。

その態度がロザリアの琴線に振れたのか、悔しそうに唇を震わせながら涙を流す。

「私だけじゃない！ アンタの指示で犠牲になった仲間もいる、デイアベル様だってアンタを信じていた！ それをアンタは何も思わないのかっ!？」

「だから最初に言ったじゃないか——」

無感情に、冷たい声で言う。

「――すまない、と」

「あ……、アアアアアアっ!!!」

その言葉が引き金となり、ロザリアはヒースクリフに駆ける。

何の変哲もない刺突。ソードスキルを使用していなければ、緩急もなく、ただ単純な感情任せの刺突。そんなもの、アインクラッド最強の剣士として君臨していたヒースクリフに通用するはずもなかった。彼は直剣を左手に装備して、ロザリアの刺突を受け流す。それから直ぐに返す剣で彼女の首元へと横薙ぎに振るう。

それで彼女は絶命する。それだけで彼女の首が飛び、また新しい悲劇がアインクラッド内に生まれる――。

「――オイ」

――筈だった。

ヒースクリフとロザリアの間に入るのは金色の影。

横薙ぎに振るわれたヒースクリフの直剣を両手剣で受け止めた金色――ユーキは敵意むき出しの声で言う。

「――何やってんだテメエ、相手は、女だぞ……っ!」

「――見ればわかる」

ヒースクリフの背に、もう一人の黒い影。

ユーキが割って入ると同時に、その影も駆け出していた。まるでユーキがロザリアを庇うのを知っていたかのように、黒い影はヒースクリフの背後取る。

派手なソードスキルはいらない。

最速最短距離で、ヒースクリフに黒い直剣『エリシユデータ』を叩き込もうと振り被る。

「斬った」。黒い影——キリトは確信する。だがしかし。

「遅いな」

一言呟くと、ヒースクリフは自由になっている右手でユーキの片手を掴み、強引にキリトの方へと放り投げた。

いつもの彼ならば、その程度の拘束振りほどこことだろう。いや、いつもの彼ならばヒースクリフの直剣を受けたのと同時に弾き、キリトと共に斬りかかっていたに違いない。

だがどういうわけか、ユーキはされるがまま。ヒースクリフに放り投げられてキリトに激突する。

それから二人は何か体勢を立て直し、地面に転がりながら直ぐに立つも、

「く、そつ……い！」

キリトは片膝をついて。

「……っ！」

ユーキは何とかその場に立っていた。

様子がやはりおかしい。ヒースクリフは少しでも考えて分析する。

「君達の意志の力は、システムすら凌駕したということか。だがその様子だと、立つのもやっつとだろう」

「わかったような、口を、聞いてんじゃねえぞ……い！」

「わかったようなものにも、事実だろう。『アインクラッドの恐怖』だった君ならまだしも、今の君では立つことは出来ても、それ以上のことなど出来はしない」

それだけ言うと、ヒースクリフは背を向けた。

言いたいことは言った、この場には用はないと。ヒースクリフはユーキ達に興味を失った。

そして宣言する。

「2月1日0時まで待つ。この世界から帰還したくば、第一層の迷宮区、最上階まで来たまえ！ 私を倒すことが出来れば君達の勝利、ゲームクリアだ。特典として、現実世界に返そう。もしタイムリミットまで間に合わなければ、第百層まで攻略してもらおうことになる。どちらでも構わない、君達の判断に委ねよう！」

一方的な勧告であった。

今だに状況をつかめない周囲を置き去りに、ヒースクリフは歩を進めていく。

何を言っても届かない、ヒースクリフは氷のように冷たく凍りついていた。

それでも、ユーキは問う。立っているのがやつとの状態でも、そこそが精一杯の反抗であるとも言えるかのよう。

「なんでだ……。何でアンタは、こんなことをしたんだ。関係ない連中まで巻き込んで、アンタは——！」

「なんで、か……」

こんなことというのが何のことなのか、ヒースクリフは理解していた。

つまるところ、デスゲームのことを言っているのだろう。どうしてヒースクリフがデスゲームを始めたのか問っているのだろう。

それを踏まえてヒースクリフは行動する。

一方的に宣言したときのよう、真紅のフード付きローブを身に纏う。その姿は『アインクラッドの最強の剣士』としての姿ではなく、『デスゲームの全ての元凶』の姿であった。

目深くフードを被り、表情を読み取れなければ、感情すら聞き取れ

ない声で言う。

「キミは知っていた筈だ。キミだけは、分かっていた筈だ——」

そう言うと、彼の身体は青い柱に包まれる。

転移だ。向かった先へ宣言通り、第一層の迷宮区の最上階。かつて『イルファング・ザ・コボルドロード』が君臨していた玉座、そして——『アインクラッドの恐怖』の始まりの地だ。

残されたプレイヤー達は、呆然と立ち尽くすしか、なかった。

第12話 茅場優希

茅場晶彦が去って、数時間が経つ。

一方的な証明、一方的な宣言を残し、残った爪痕は深かった。

裏切られたと憤る者、最強の剣士の正体にただ立ち尽くす者、今だに事態を掴めない者。

様々な者が、千差万別の反応を示す。

その中で、少年は希有な存在といえるだろう。ただ静かに、あるがまま受け止めて残れされた言葉を心の中で反復する。

——キミは知っていた筈だ。キミだけは、分かっていた筈だ——

何度も何度も、少年は頭の中で、その言葉だけを繰り返していた。

「そう、だな……」

己の手をじっと見つめる。

アレから数時間が経つ。もう身体の痺れもなく、今ならば十全の力を発揮できるだろう。

試しに、何度か手を握り、手を開く。自分の調子を確かめるように、身体の一部が故障していないか動作を確認する。

問題はなかった。

このまま一人で、殴り込みをかける事も出来る。

たった一人で最終決戦へ。無謀とも呼べる行動、勇敢とは呼べない愚策、正気を疑う狂気。そんな常識外れな行動力こそ少年の強みでもあり、弱みでもあった。自分が傷つこうが気にせず、目的地へ邁進し続ける。それこそ最短距離で、少年は走り続ける。迷いはない、それこそ自分が成すべきことであると信じて疑わなかった。

その証拠が『アイコンクラッドの恐怖』である。

たった一人でフロアボスを捻じ伏せて、最短時間で上の階層のフロ

アボスを叩き潰す。そんな無茶を十七度繰り返して来た。かつて出来たのだ。もう一度行えない道理などない。たった一人だ。たった一人を止めることが出来れば、この囚われた世界から解放することが出来る。

「アンタなら、そうする。そうだ、オレだけはわかっていた……」

だが今ではなかった。

それよりも先に、少年にはやるべきことがある。

「——行くか、ケジメを付けに。この辺りが、潮時つてヤツだ……」

.....
.....
.....

2024年1月31日 PM 13:15

第一層 『はじまりの街』

いつものアインクラッド。

青い空が上空に広がり、雲一つない快晴な空が広がっていた。しかし何もかもがいつも通りという訳にはいかない。

辺りは混沌と化していた。

暴動は幸いなことに起きていないものの、小競り合いが連続で起きていた。

無理もないだろう。

攻略組とは、ソードアート・オンラインに閉じ込められた全プレイヤーから見ても精神的支柱だった。

中層以下のプレイヤーは、上の階層が開放されたとなると希望が生まれていたし、攻略組もそんな希望の眼差しを浴びて精神を高揚させてきた。だがその中で、攻略組の中でも最強と呼ばれるギルドの中にすべての元凶である茅場晶彦が存在していた。しかも『アインクラッドの最強の剣士』ヒースクリフとして、今まで攻略組を牽引して来た。その事実は、攻略組のみならず、中層以下のプレイヤー達への精神的ダメージとなっていた。

例えるのなら、ソードアート・オンラインは暗闇だ。

暗闇の中に放り出された数千名の者達。自分たちは何をすれば良いのか、どうしたら良いのかわからないで右往左往している。

その中に現れた強烈な光がヒースクリフである。ヒースクリフという存在に、人々は己の道筋を見出し何とか足を進めてきたのだ。だがそれが急に消えてしまう。プレイヤー達が再び混乱するのも、その時間はかからなかった。

そんなはじまりの街の中にある宿屋。

どうやら宿屋の中に酒場があり、そこにはプレイヤー達が点々と席に着席しており、NPCである店員は忙しなく動き注文を取っていた。

活気などまるでない。生気すら微かなもので、NPCなのかプレイヤーなのか見分けがつかない。幸いなことに、プレイヤーの上に光るアイコンで何とか判別できるような状態だった。

悄然とした宿屋、機能していない酒場の中で、エギルは席に座っていた。

どっしりと腕を組み、眼を瞑り考え込んでいる。

「うーす……」

話しかけるのは男性。

赤色のバンダナ、戦国武将のような鎧を身に纏っている男性――
―クラインが片手を上げて気安く話しかけた。

表情はどこか疲れてそれで、ドカツと音を立ててエギルの対面に着席した。

よう、と応じる。

エギルは目を開けて、重苦しい口調で問いを投げた。

「外はどんな様子だ？」

「どうもこうもねえよ、あつちでこつちで小さな喧嘩。止める身にもなれってんだ」

ぶつくさ文句を言いながら続ける。

「20分後に広場に集合だっけか？」

「ああ。今後の対策の会議だ」

「大丈夫かねえ、こんな調子で。まったく纏まりないぜ？」

直に見てきたクラインだからこそ、今後の対策など話し合えない、と彼は早い段階で結論付けた。

最大のギルドである『聖竜連合』は己の矜持を守る為に必死になのか、一方的に『血盟騎士団』に責任をなすりつける。もちろん『血盟騎士団』も黙ってはいなかった。なんせ彼らも被害者なのだ、彼らにも彼らの言い分があるのだ。

そうして火種は大きくなり、あちらこちらで小規模な爆発を繰り返す。

様子を見るついでに、下らない喧嘩をクラインは数十回仲裁してきた。その言い分も身勝手なものであり、誰一人協力しようという意思はない。

このまま続けば、この世界に未来はない。

クラインは暗にそう語り、エギルも否定はしなかった。彼も同じ意

見であるのだから。

そう言えば、とクラインは声を上げてエギルに問いを投げる。

「この会議の発案者って誰だっけ？」

「ディアベルだ。血盟騎士団の副団長の」

「ああ、アイツか……」

両手を頭の後ろに組み天井を見上げてクラインは続けた。

「アイツも大丈夫かねえ？ だいぶまいってたろ……」

「まあな。何せ自分とこのギルドで、しかもトツプが茅場晶彦だったんだ。動揺しないやつは人間じゃねえよ」

数時間前の光景をエギルは思い出す。

一方的に宣告され、地に転がる自分達。誰も抗うことなく、不自然な体勢で倒れていた。

抗う人間はいないと思ったそのとき、二人の少年が手に剣を取り創造主に抗っていた。一人は『はじまりの英雄』——キリト。

もう一人は——。

「そう言えば……」

そこでふ、と。エギルは思い出したように口を開く。

「アイツの様子、おかしかったな……」

「アイツって？」

「ユーキだよ」

どこか切羽詰ったような、焦っているかのような。普段のユーキからは想像が出来ないような様子。

エギルはその様子を、曖昧な表現として口にする。

「なんか、年相応というか……」

「気のせいじゃねえの？」

そう言うと、クラインは窓の外を見た。

人通りが多くなっていく。どうやら全員、広場に集合するようだ。

「そろそろ行こうぜ」

「そう、だな……」

そうして、エギルとクラインは噴水広場に足を運んでいた。

統制など取れていない、周囲はザワザワと好き勝手に口を開き、小さな口論を始める。

エギルは視界の端で、そのやり取りを見て呆れながらため息を吐いた。予想していなかったことでもない、全ては想定していた光景。

何も言わずにクラインを見ると、彼もエギルと同じだったのか一度領いた。そして取り敢えず、二人は仲裁に入ろうとするも、エギルは妙なモノが眼に映った。

——おいおい……。

——何してんだ、アイツは……？

彼が知る“少年”は、そのような性格ではない。人々の前に立ち、引っ張って行くようなリーダーシップは持ち合わせていない筈だ。

やるのなら裏方。人々の賞賛など一切興味がなく、ひたすら目立たないように“少年”は行動してきた。それが証拠の『はじまりの英雄』だ。共に戦った筈なのに“少年”だけが讃えられずに、『はじまりの英雄』だけが一目置かれるようになっていた。

エギルの中の“少年”はそういった人間だった。

だがそれとは裏腹に、“少年”は前に。

この会議の発案者であるディアベルと肩を並んで、前に立っていた。

どういふことだ、と考える前にエギルは一つの集団を見つけた。

その集団の名は、『アクセル・ワールド加速世界』。

“少年”が所属するギルドである。彼らならば知っているのではないか、とエギルの希望とは裏腹に彼らも同じような反応だった。

リズベットとユウキは眼を丸くして前方にいる“少年”を見つめており、ユイは“少年”の姿を確認するほど余裕が無いのか不安そうに辺りをキョロキョロと警戒心を露わにしている。

ただ、反応が違う者が二名。

キリトは腕を組み静かに事の成り行きを見守り、アスナは祈るように両手を握り締めてギュツと両眼を瞑っている。

——アイツらも知らないのか……？

そうすると“少年”は全プレイヤーが集まったことを確認すると、ディアベルに一声をかけて壇上上がった。

壇上と言っても簡易的なモノだ。木箱が下に二段、上に一段重なって出来た簡単な作りにすぎない。その上に“少年”は立つと、恐ろしく静かな声で発する。

「——まず、アンタ達に謝らなければならないことがある」

ザワ付いていた周囲がピタリと止み、“少年”の声に耳を傾けた。

しかし直ぐに、“少年”の姿を確認すると「アインクラッドの恐怖だ……」「本物だ……」「實在、したのか……」といった声が小さくポツリポツリと上がり始める。恐らく、先刻の茅場晶彦と“少年”やり取りを聞いていた者がいて、その者が広めたのだろう。

“少年”こそが、『蒼炎』と称されていた“少年”こそが、『アインクラッドの恐怖』であったのだと。

半ば、『アインクラッドの恐怖』は都市伝説と化していた。

単騎でフロアボスを殲滅していた怪物、そんな規格外が存在するとは思えない。普通の思考回路ならば、そう考えることだろう。

だが事実、『アインクラッドの恐怖』は実在する。

それこそが“少年”である。

しかし当の本人は気にすることなく続ける。

「アンタ達をここに閉じ込めた茅場晶彦は人間だ。血が通った人間だ。となるともちろん、家族が存在する」

そこで“少年”が何をいいたいのか、エギルは何となく理解した。眼を見開き、唇が震える。まさか、と。ドクンと心臓が一度大きく高鳴った。

どうやら予想が出来たのはエギルだけではなかったようだ。

ゴクリ、と唾を飲み込む者。口元を両手で隠し動揺する者、様々な反応を見せる中、少年は——ユーキは意を決して言葉を紡いでいく。

「それがオレだ、オレの名前は茅場優希。アイツの、茅場晶彦の——
——家族だ——」

第13話 優希の本心

数多くの人の命を救った父と母、そして今となっては数多くの命を奪う原因となった叔父。

二つの意味を持つオレの姓は、この世で最も有名だろう。

医者であった父親、母親は数多くの命を救ってきた。ときには日本国内で、ときには国外で、あるときは紛争地域まで足を運んでいたことを、オレは幼い頃からよく知っている。

名医、と呼ばれる部類なのだろう。救われた者は父と母に礼を言い、父は照れくさそうにして、母はそんな父を見て微笑ましく笑みを零していた。子供ながらオレはそんな二人に——憧れていた。

オレも将来二人のような、立派な大人になりたいと本気で思っていた。

そんな父には弟がいた。弟であった人はオレの叔父にあたり、その人は何でも出来た。天才というヤツなのだろう。

いつも何を考えているかわからない顔で、物心がつく頃からオレは叔父のことが苦手であった。

無表情で無感情。一を聞いたら十は理解してしまう怪物の類。その見識はあまりにも広く、叔父が本当の意味で世界と向き合っていないことを、オレは何となく分かっていった。生物というよりも機械。世界を俯瞰的に見ているかのようで、浮世離れしていた。

そんな叔父でも、父と会話するときだけは人間の顔をする。気持ちよく父が笑いながら叔父の肩を叩くと、叔父は困ったように薄い笑みを零し、取り留めのない兄弟の会話を始める。

オレはそんな叔父が——好きだった。

数多くの人の命を救った父と母、そして今となっては数多くの命を奪う原因となった叔父。

二つの意味を持つオレの姓は、この世で最も有名だろう。

壇上に立ち、ふと考える。どうしてオレは今まで、自分の正体をアイツらに告げなかったのか。とどのつまり自分の本名。

オレが立つ壇上からは、このデスゲームに生き残ったであろう全プ

レイヤー達の顔が一望出来た。

悲観に沈む者、絶望に打ちひしがれる者、そもそも自分がどうすればいいのか途方に暮れる者。千差万別、プレイヤー達は一同に違う反応を見せている。

オレの言葉はプレイヤー達の意識を一変させることだろう。

憤怒に、憎悪に、嫌悪に、顔を一瞬で歪めて意識を向けることに成功することだろう。

今から言うモノは、ある種の起爆剤だ。下を向いている者達を、無理矢理にでも上に向かせる代物。オレの言葉に全員が意識を向き、耳を傾けることだろう。

その後の展開も、わかっている。

これまでの状況を考えても、オレはまともな扱いを受けることはない。それだけのことを、叔父はコイツらにしてきたのだから。その事実を関係ない、とオレは耳を塞ぐことは出来ない。彼らにはオレを非難するだけの権利があるし、理由もあるのだから。

——ああ、だからか。

そこまで考えて、オレはぼんやりと納得した。

怒号、罵倒、拒絶。何もかもグチャグチャに混ぜ込んだ負の感情がオレを叩く。そんなモノ予想してたし、仕方がないと理解も出来る。何せオレはあの男の身内なのだから。

それは「アイツら」も同じだろう。ありとあらゆる負の感情をオレに向けることだろう。当然だ、今まで何も言わなかった。機会はいくらでもあったのに、オレは何もしなかった。何も言わなかった。

考えただけで、心臓の音が大きくなる。心が締め付けられるような、例えようのない「痛み」が走る。

——まいった。

——痛みには耐性があった。

——これは、結構……。

——いいや、だいぶ痛い。

オレは恐れていたのかもしれない。『アイツら』がオレから離れるのが。無意識に恐れていたのかもしれない。

大切なモノというのは直ぐに壊れるし、人というのは呆気なく死ぬ生き物だ。オレはソレをよく知っている。何せオレは、二度も人の命を糧に生き残ってしまった畜生だ。命を摘むのは容易い、もっとも難しいのは命を守ることだ。

大事なモノなんて作りたくなかった。これ以上、オレの世界には何もいらなかった。

幼馴染がいて、後輩がいて、叔父がいる。それだけでオレの世界は完結していた。これ以上広がる兆しなど見せなかった。

大切なモノを作った所でどうせいなくなるのなら、それは最小限の数でいい。あんな痛みなどもう味わいたくない、もう二度と大切なモノを失うなんてゴメンだ。

そう思っていた。

なのに『アイツら』はズカズカとオレの世界に上がり込んでくる。勝手に干渉して、勝手に上がり込んで、勝手に住み着き始めている。

オレの言い分など聞きもしない。どいつもこいつも、オレが全速力で走ろうが、その後を必死に追いかけてくる。

いつしか、オレの世界は広がっていた。

黙っていることも出来た。

この世界に囚われている時間だけ、隠すことも出来た。

だがそれは逃げていることに変わりない。一步も前に進んじやない。

背など向けられない。『アイツら』と本当の意味で向き合うには、オレも本音をぶつけるしかない。そして沈んでいたプレイヤー達の意識を、叔父に——茅場晶彦に向けることが出来る。

その結果が、この世界のプレイヤー達がオレの敵になろうと構わない。『アイツら』がオレから離れようとも仕方がない。

敵だらけになったとしても、この世界から『アイツら』を解放する

事が出来るのなら、オレは何でもしてやる。
オレは口を開く。

「――まず、アンタ達に謝らなければならないことがある」

.....
.....
.....

2024年1月31日 PM 13:30

第一層 『はじまりの街』

しん、と広場に集められたプレイヤー達は静まり返っていた。

空いた口が塞がらない、と表現するように誰もが口をポカンと開けて、ただ発言主であるアインクラッドの恐怖へ――ユーキへと視線を向けていた。

それはユーキが所属しているギルドメンバーも例外ではない。

リズベツトも眼を丸くしているし、事情がわかっているユウキやユイもこのタイミングで言う少年に対して驚いている。付き合いの長いエギルもユーキの発言を上手く飲み込めていなければ、クラインも例外ではなかった。

反応が違うプレイヤーがいるとすれば二人。

その一人であるキリトは腕を組み、眼を瞑りユーキの言葉に耳を傾けている。

もう一人のアスナは両手を組み、何事も起きないように祈るように成り行きを固唾に見守っていた。

この二人以外、似たような反応を見せている。

それは、ディアベルも例外ではなかった。
戸惑うように、壇上に上がっているユーキを見上げる。

「アンタ達はアイツにこの世界に囚えられた。ある日突然、たかがゲームだと思っていた世界が、死と隣り合わせのモノになった」

その声は不思議と広場に響き渡っていた。その声は、直に声を向けた人々に訴えるような、必死とも取れる声。

今の現状を告げるユーキは、止まることなく斬り進んで行く。

「ムカついた人間もいると思う。オレもそうだった。関係のない連中を巻き込んだアイツが許せなかった。どうやってアイツを斬るか、ずっと考えていた」

茅場晶彦を許さない。

その点だけ言えば、ここに集まっているプレイヤーの意思は一致していた。

この世界に閉じ込めた茅場晶彦を、自分達を騙していたヒースクリフを許さない。プレイヤー達には共通の認識があった。

「自分の為に行動する。そういう点で言えば、オレと茅場は似ている。最短距離で、最短時間でオレは走り続けてきた。譲れないモノがあって、我慢が出来ないから、オレはひたすら突っ走ってきた」

その結果が『アインクラッドの恐怖』だった。

当時、殺人鬼に目を付けられ全員を守る事が出来ないと勝手に悟り、ユーキはいち早くこの地獄から抜け出そうと一人で攻略を始める。

様々な主張、あらゆる言い分がユーキにはあった。だが根底にあるのは——幼馴染が剣を取るのが我慢が出来なかった。そんな勝手なモノだった。

自分が傷つくことを是としたが、幼馴染が傷つくことは否と唱える。

なんて自分勝手なことだろうか、独りよがりにも程がある。何せ幼馴染がそんな事を望んでいないのだ、少年にも自分の行動理由は我儘なモノだと理解していた。

だが走り出してしまえば止まらない。

勝手な主張のまま、ユーキはひたすら走り続けた。勝手に走り出した自分だ、そのまま勝手に死ぬことになるうが文句を言う人間はいないだろう。少年は本気でそう思っていた。

「だがそれはダメだと、オレを止めるヤツらがいた」

ユーキは眼を閉じる。

つまらない言い争いをするキリト、それを窺めるリズベット、どちらが勝つか賭けを始めるエギルとクライン、元気よくユーキに全財産を賭けるユウキとストレアに、おずおずとキリトに賭けるユイ。

取り留めのない風景だ。この世界に囚えられ、『アインクラッドの恐怖』をやめてから繰り返してきた下らないやり取り。

ふと視線を外すと、幼馴染が——アスナが笑みを浮かべていた。

「人が良すぎる連中だ。オレなんぞ放っておけばいいのに、アイツらはオレに構い続けて放つてはおかなかった」

そう言うと、ユーキは目を開けた。

蒼い双眸は真っ直ぐに、プレイヤー達の顔を見つめる。

「オレと決着を付けたかったヤツがいた、オレの面倒を見てくれるヤツがいた、オレを兄と慕ってくれるヤツがいた、オレに怯えても歩み寄ってきてくれたヤツがいた、オレを見守ってきてくれたヤツがいた、オレの命を救ってくれたヤツがいた、オレが一人突っ走っても見

捨ててくれなかったヤツがいた。オレがこうして生きてこれたのも、アイツらのおかげだ」

ユーキは両手を見つめる。

年相応の手だ。逞しくもない、まだ頼りにならない両手。父とは比べものにならない手。

それを力いっぱい悔しそうに握りしめる。

「オレは、この世界からアイツらを現実世界に帰したい。そのためなら何だってする、どんなことでもする——」

だから、と言葉を区切りユーキは頭を下げる。

その行動に周囲がザワつき始めるが、ユーキは下げたまま続けた。

「——みんなの力を貸してくれ。オレだけで何でも出来る、なんて思い上がるつもりもない。茅場晶彦を倒すには今しかない。その為には、みんなの力が必要なんだ！」

言葉を失うとはこのことを言うのだろう。

ユーキという人間の言葉をの意味を、少年をよく知らない人間はわかりかねていることだろう。

いつだって無茶をして、いつだって誰かに一人でやってきた少年が、ここに来て他人を頼るといふ意味を。そしていつだって自分の為に剣を握ってきたと主張していた少年が、他人のために戦いたいという意味を。

顔を上げて、ユーキは両手を広げる。

自分の気持ちに露わにするように、必死の声は続く。

「茅場の家族であるオレに手を貸したくなくても、一時的でもいい。この世界から抜け出した後、この生命をアンタ達に差し出してもいい！ だが今は、今だけはみんなの力を貸してほしい！ この世界から

抜け出す為に！」

そこまで言うと、ユーキは再び頭を下げる。

頼む、と。少年にそこまでさせるくらい、*「アイツら」*と称されていた者達は大きな存在なのだろう。

ユーキは今まで、見ず知らずのプレイヤー達に手を差し伸ばしてきた。

それは罪悪感からの行動だったのだろうか。いいや、違う。少年は我慢が出来なかったただけだ。眼の前で泣かれて、不幸になる人間を、ひたすらに我慢が出来なかったただけだ。

見てみぬフリをすればいいのに、それが出来ない。誰よりも不器用で、誰よりも素直じゃないユーキが、こうして頭を下げるという事実。

周囲はどう対応すればいいのか迷っていた。

ザワつき始め、少し前に起きていた小競り合いなどなくなっている。

もう答えは出ている。

ただ、代表となる人間がいない。だから全員、どうすればいいか迷っていた。

そんな中、壇上の下にいたディアベルが口を開く。

「みんな、オレは彼に命を救われたことがある——」

ユーキはその声を聞いて、思わず顔を上げる。

そして下にいたディアベルを見下ろした。ここで話すことではないと困惑する。

対するディアベルはユーキを見上げて、ニッコリと微笑むと続ける。

「この中にはオレと同じく、彼に救われた人もいると思うんだ。違うか！」

ディアベルが言うと、ポツリポツリと声を上げ始める。それは小さな声、だが徐々に声が大きくなっていった。

「そうだ、俺はアイツに助けられた！」

それは第一層のホルンカで途方に暮れていた、ユーキにアニールブレードを譲渡した青年の男性プレイヤーだった。

「わ、私も！ PKに襲われている時に、『アインクラッドの恐怖』に助けてもらったぞ！」

それは第五層の枯木の森で5人のPKに襲われていた中年の男性プレイヤーだった。

「俺達も助けてもらったよな？」

「うん『アインクラッドの恐怖』にね」

「サチのヤツ、怖がってたよな……」

「こ、怖がってないよ！」

それはギルド『月夜の黒猫団』のメンバーだった。

「それを言うなら、俺達もプレイヤーキラーからアイツとキリトに助けてもらったよな」

な？ とクライインがメンバーに話を振ると、風林火山のギルドメンバーが力強い頷きで応じる。

「……私も、救われた」

どこか納得していなように、渋々と言った調子で『聖竜連合』のコーバッツが同意し。

「私も。というか、ほんの数十分前……」

恥ずかしそうに顔を赤く染めて片手を上げるロザリアの姿もある。それからも多く、プレイヤー達が口を開く。

私も、と遠慮がちに言う者のいれば、両手を上げて「俺も！」と元氣よく言う男性の姿もあった。俺も私も僕も、とありとあらゆるプレイヤー達が声を上げる。

ポカンと口を開けてその様子を、ユーキは見ていた。

非難や罵言といった負の言葉を言われるのならまだしも、こんな反応をユーキは想定していなかった。

今向けられている感情は負の感情ではない、むしろ――。

「彼はこんなにも、オレ達を助けてくれた。確かに茅場晶彦の血縁者かもしれないが、オレ達には関係ない！ 彼は彼だ。そうだろ、みんな！」

その一言が引き金となった。

広場にいるプレイヤー達は声を上げる。高らかに、勝鬨のように、その場に存在することを証明するように、大きく声を上げた。

ディアベルはその声に応えるかのように続ける。

両手を広げて歓迎するように、その声は広場に響き渡った。

「行くこう、みんな！ この世界から抜け出して、明日を掴み取ろう！ この世界では――――みんなが同士だ！」

一際大きな歓声。

大人も子供も、男性も女性も関係がない。一同が拳を振り上げて、天に突き出している。

その声をユーキは一身に浴びた。

身体全身に伝わるプレイヤー達の熱。それは灼熱のような熱さ。

ユーキの本心が火種となり、ディアベルの言葉が起爆剤となり爆発した。

「頼りにしてるぜ、アインクラッドの恐怖!」「茅場が関係あるかつ!」「気にするな坊主! 俺達がついてるぞ!」

といった様々な声がユーキに贈っていた。

その中には恨みつらみを口にする者はいない。誰もがユーキというプレイヤーを、茅場優希という人間を認めていた。

意識がある場所に集中する。

笑顔で両手を振る妹の姿があった、やる気満々のはじまりの英雄の姿があった、無事に終わってほっとしたのか号泣している幼馴染の姿があった、それを慰める桃色の鍛冶職とAIの姿があった。商人と野武士面は周囲の連中と一緒に雄叫びを上げている。

誰も彼もが、ユーキの正体に気になっている人間はいない。

その事実にも、少年は一瞬だけ戸惑い――。

「――つたく、しょうがねえお人好し共が……」

粗暴な物言い。

ディアベルは見上げるも、直ぐに笑みをこぼす。

微笑ましくユーキを見上げていた。何せ視線の先には年相応に笑みを零す少年の姿があった。

不敵なものでもなければ、好戦的な笑みでもない。

まるでそれは――子供のような、邪気のない笑みであった――。

.....
.....
.....

同時刻

はじまりの街 黒鉄宮 監獄エリア

ビリビリ、と建物が振動を始める。

石造りの牢獄は揺れて、地面に出来た水たまりの水面も微かに波を起こる。極めつけはその振動のせいで天井から埃が落ちてくる状況だ。

彼——ジョニー・ブラックは苛つきながら大きく独り言を呟いた。

「うるせえなあ。何だよ……！」

それに答えるプレイヤーはいない。

今、この監獄エリアには数多くの元オレンジのプレイヤー達が収容されていた。

そのほとんどが、レッドギルド『笑う棺桶（ラフィンコフィン）』のギルドメンバー達。となれば、殆どがジョニーと顔見知りということにもなるのだが、不思議と彼らの間には会話というものがなかった。牢獄に入っているプレイヤーの大半は、無気力に石造りの床に寝転がっている。ほとんどが無気力と化していた。脱獄の出来ない環境、最低限の食事、そして彼らに殺された親しいプレイヤー達の昼夜問わずに浴びせられる罵声。それらが彼らの精神をすり減らし、モノを言わない囚人と変貌させていた。

この環境において、正気を保っているプレイヤーはまともではない。

罪悪感もなければ、人の心を持たぬ獣。間違いなくそう断言できる。

そういう点で言えば、ジョニー・ブラックという男は常識を逸脱し

た存在といえるだろう。

そしてもう一人――。

「なあ、ザザは外なにか起きてるか気にならないのかー？」

返答はない。

隣の独房には赤目のザザ。

返答がないことから、彼も精神的に壊れたのかと思いきやそうではなかった。

ブツブツ、と。ザザはその場に座り込み目を瞑っている。その言葉には「はじまりの英雄、殺す」「必ず、殺す」「絶対に、殺す」と憎悪が込められた呪詛を唱えていた。

イメージトレイニングと言うものだろう。彼は報復心を糧に狂気を育み、来る『はじまりの英雄』との再戦の時に備えている。

無論、そんなことは決してない。

だがザザは望みを捨てていなかった。それほどまでに、彼にとって『はじまりの英雄』は何が何でも殺したい存在なのだろう。

「根暗なヤツだねー」

ヘラヘラと小馬鹿にするような笑みを浮かべるも、ジョニーもその気持はわからなくもなかった。

彼は両手を頭の後ろに組み、仰向けに寝っ転がり天井を見つめる。背中にはゴツゴツとした石の感触がある。そして思い浮かべるのは一人のプレイヤーの顔だ。

そのプレイヤーは少女。

第一層のときも、第十八層のときも、自分の邪魔をした少女。紫色の髪の毛で、小柄な体型。『はじまりの英雄』と同程度の反応をする少女。

その名前は――。

「ユウキ——！」

呟いて、奥歯を噛み締める。ガリガリ、と音を立てるも知ったことではない。

気に入らない少女だ。いつも邪魔ばかりをする。横槍をいれて、生意気な口を叩き、自分の剣がまったく通じない。

憎んでいる、という訳でもない。嫌悪する、ということでもない。不思議な感情が、ジョニーを支配する。

彼女が泣き叫ぶ顔が見たい、自分の足元にすがりつく姿が見たい、汚物に塗れた汚れた姿が見たい。

歪んだ感情だった。犯しても犯しても足りない、何度も何度も組み伏せて、嫌がる彼女を墮落させてやりたい。

考えただけでジョニーの高揚感が増して言った。ニヤア、と口元引き裂くような他人を不快にさせるような笑みを浮かべる。

——ユウキ、ユウキ。

——嗚呼、あの女を殺したい。

——いいや、違うな。

——アイツの何もかもを奪って、何もかもを汚したい。

——考えただけで、堪らねえ……！

この感情が何なのか、ジョニー自身にも説明が出来ない。もう一度彼女に、ユウキに会えばわかるだろうか。

そんなことを考えていると

「……………ん？」

ジョニーは上半身を起こす。

視線の先には鉄で出来た扉があった。そこから漂う人の気配。

看守が食事でも持ってきたのかと一瞬だけ考えるも、それはないと否定する。昼食は先程取った。ならば誰なのか。

少しだけ考えるも、直ぐにその扉は開かれた。

ギイイ、と重苦しい音が聞こえる。

それから何かがその人物から投げられた。それはボンと転がり
ジョニーの監獄の前で止まる。

それはプレイヤーの——生首だった。

気付いた監獄の入っているプレイヤーは「ひい!？」と情けない声を
上げる。しかしジョニーは違う反応を見せた。

ポリゴンとなり粉々に消えていった生首など興味はない。ジョ
ニーは扉の方へ、こちらに生首を放り投げた者が誰なのか確認する。

その者は薄く笑みを浮かべている。

膝上まで包む、艶消しの黒ポンチョを羽織って、目深くフードを
被っている男。その右手にはジョニーが見慣れた魔剣『友切包丁』メイト・チョッパが
握られている。

その雰囲気はどこか不気味で、他のプレイヤーとは一線を画する存
在。

ジョニーは眼を見開く。

その者をジョニーは、良く知っていた。

男はノイズ混じりに、楽しそうにそれは楽しそうに謳う。

その言葉もやはり、ジョニーはよく知っているモノだった。

「v h a o a イッツ b a t a h o a ショウ・タイ g a o u a
ム——」

第14話 決戦前々大人の意地

2024年1月31日 PM15:32

第一層 『はじまりの街』

街は活気に包まれていた。

まるでそれは、ソードアート・オンライン稼働日初日のように。いや、それ以上の活気と熱気のはじまりの街を包み込んでいた。

鍛冶スキル持ちのプレイヤーは代金を取らずに、武器のメンテナンス及び武器制作に関わっている。素材が足りなければ商人としてロールプレイしていたプレイヤーが無償で素材を提供し、足りなければ腕に覚えのあるプレイヤー達が急ぎ足でフィールドに出て素材集めに勤しむ。

酒場や食堂には、料理スキルが高いプレイヤーが先導するように台所に立ち料理を振る舞っていた。戦えない者、子供も見ているだけではない。何か自分で出来ることを見つけては率先して動き、手を貸していた。

一致団結。

ありとあらゆるプレイヤーが、自分の長所で他所の短所を補っている。

「おい、素材が足りねえ!」

「何が足りないんだ?」

「ゴーレムの心臓、海人の鱗、剛龍の甲殻、あとは——」

「いや、もういい。リストをメッセで送ってくれ。持ってないか周りに聞いてくる」

「頼んだ!」

「次! 武器のメンテして欲しい人いない!」

「いいや、大丈夫だ。すまねえが、西区に向かってくれないか? 人手が足りねえ!」

「ガッテン！」

忙しなく動き回るプレイヤー。

それは統率が取れておらず、司令塔も存在しない。だがプレイヤー達に迷いはなかった。

茅場晶彦を倒し、仮想世界から現実世界に帰還を果たす。その一点が共通の目的となっている以上、全員に迷いはない。

「みんな、自分ができることを精一杯やってるなあ……」

ぼんやりと、蚊帳の外から見ていたクラインが石造りの路面に座りながら呟いていた。

それに反応するのは彼の隣で立っているエギルだ。彼は気の抜けた発言をしたクラインに呆れながら言う。

「何を他人事のように言ってるんだ？ これからって時に、のんびりしやがってよお……」

「そういうエギルだって、俺と似たようなもんじゃねえか」

不満そうに口を尖らせているクラインに対して、エギルはどこか自信満々に胸を張って堂々と告げる。

「フフフツ、聞いて驚け。俺は素寒貧だ」

「えっ、ってことはなにか。お前さん、蓄えてた素材全部ねえの？」

「応とも。貧乏まっしぐら、いつもニコニコのエギルさんのダイシーショップは閉店となりましたとさ」

「随分と思いつたなあ？」

「これで終わりだからな、出し惜しみは無しだ」

エギルに残されたのは、獲物の斧。身を護る鎧に、最低限の回復アイテムくらいだろう。

それでもエギルは笑っていた。むしろこの日のために蓄えていたモノをバラ撒けて清々しいと言わんばかりに、彼は居丈高に笑みを零す。

そんな彼を見て、クラインは空を見上げる。

清々しい青い空。もちろん、その空は本物ではない。限りなく本物に設計された、仮想世界での空であった。

その空の上にはまだ階層が連なっている。こことは違う空をあと99回も見なければいけない。そう考えると、クラインは息苦しさすら感じていた。

「そうだよなあ。茅場を倒せば、もう終るんだよなあ……」

だが今は違った。

現実世界に戻りたいと言う気持ちもある。だがそれと同時に、この仮想世界も悪くないと思ってしまうのだ。

悲しいこともあった。恐怖に身体が震えることもあったし、不安で眠れない夜を過ごしたこともあった。だがその中に、確かな悦びもあったのだ。その事実が仮想ではなく、現実のものである。

「お前さんの言いたいこともわかるけどな

」

エギルもクライント同じ気持ちなのだ。

だがそれでも、帰らねばならない。エギルを今も待っている者がいる。この先の人生を共に歩んでいきたい者がいる、この先の人生を見守っていききたい者がいるのだから。

エギルは苦笑混じりに言う。

「いざここから抜け出すって考えたら、ちょっとは名残惜しいかもな。でも俺達の生きる場所はここじゃない。そうだろう？」

「わかってるさ。あーあ、この世界から純粋なVRMMOだったらよかったのになー！」

「……」応聞くが、お前の言うところが純粋なVRMMOって奴なら何してたんだ？」

つまらねえことを聞くなよ、とクラインは言う。満面の笑みで親指を立ててサムズアップ。満面の笑みの晴れ晴れとしたグッドスマイルになりながら続ける。

「そりゃオメエ、もの凄いイケメンにして英雄プレイ。ンでモテモテ生活エンジョイだぜ！」

「ああ、お前らしいよ……」

欲望に忠実、もしくはは自分に正直。

この誰もが浮足立っている現状においてもブレないクラインに、どこか安心感をエギルは見出してしまふ。こう言う男が場の空気を和ませるムードメーカーとなり得るのだろうか、と確信する。

そうすると、クラインは笑顔を消し、どこか物思いに耽るよう思案しながら呟いた。

「真面目な話、俺だって現実世界に帰りたんだけどよ。……それってアイツも同じだと思っただろうか？」

「アイツ、か……」

クラインが言う「アイツ」とはいったい誰のことを指しているのか、エギルは察知すると同時に苦い顔に変わる。

仮想世界では「少年」は受け入れられた。それが現実世界でもそうかと言ってしまうと、恐らくそうではないだろう。どこかで、必ず迫害を受けるに違いない。世紀の犯罪者と関係者なのだ、民衆はそういったスキヤンダルに飛びつくし、民意によって「少年」は指差されることだろう。

「アイツの——ユーキの気持ちなんてわからんさ」

でも、と言葉を区切りエギルは事実だけを口にした。

「——それでもアイツは、俺達の為に全員に頭を下げた」

そんな真似、自分に出来るだろうかとかとエギルは思考する。

デスゲームに巻き込まれ、しかもその犯人は自分の身内。この事実が露呈してしまえば、プレイヤーの大半は敵になるかもしれない状況。そんな状況で、あの場面で頭を下げると事が出来るだろうか。

答えは否だろう。恐らく、そんなこと出来る訳がない。

「そういえばよお、エギルってユーキとリアルで知り合いなんだろう？」

クラインの問いに対して、ぼんやりと考えていたエギルは「おお」と答えて意識をクラインに向ける。

「知り合いでもあるし、常連だ。店出してるからな俺」

「えっ、マジかよ。初耳だ」

「言ってなかったからな。……んで、知り合いだがどうしたんだ？」

「ユーキって、あんな前に出るタイプなんか？」

クラインは比較的、ユーキと知り合ってから日が浅い。

第一層から顔馴染みであったが、直ぐにユーキは『アインクラッドの恐怖』として活動してしまっている。実際のところ、会話をするようになったのは去年の7月から。つまり数ヶ月前からのユーキしか知らない。

だからこそ、クラインは疑問に思った。

ユーキという人間はここまで周りを優先にする人間なのか、と。

その問いに、エギルは答える。

「いいや、違うな。どちらかと言うと、アイツは影で色々動くタイプ

だ」

「そうなのか？」

「ああ。それに、自分の本心を他人に伝えるタイプでもない」

思い出すのは、初めて出会った光景。

迷子になったレベツカを探し回り汗だくになっている自分と妻と、レベツカを保護した人の良い笑顔を浮かべるアスナと無愛想なユーキの姿。

そう言えば、俺には猫被ってなかったなアイツ。と小さく笑みを浮かべてエギルは続ける。

「本来のアイツなら、もっと上手く立ち回っただろうさ」

「根拠でもあんのか？」

「クラインは知らないだろうが、猫被るからなアイツ」

「それってつまり、演技するってことか？」

「おう。詐欺のレベルだぞアレは」

いまいち想像ができないのか首をかしげるクライン。

無理もない。粗暴で乱暴、口は悪く眼つきも悪い。そんなユーキが猫を被る姿が想像できないのだろう。

困っている人間を見れば乱暴に話しかけ、泣いている人間が居ればぶっきらぼうに手を差し伸ばす。

その辺りは変わっていないが、それでも本音を口にする事はなかったし、見ず知らずの他人に頭を下げるなんて選択もしなかった。

「それが今となっては猫を被らずに、全員の前で本音を曝け出して頭を下げると来たもんだ。変わったよ、ユーキは」

感慨を顔に滲ませながら呟くエギルに、クラインは首を縦に振って同意する。

「ユーキだけじゃねえ、キリトのヤツも変わったよ」

「そういえば、お前とキリトってパーティーを組んでたんだっけか？」

その問いに、クラインは苦笑混じりの表情で応じた。

「パーティーつつつても、俺が一方的にレクチャー受けてただけだけどな？ 始めの頃はアイツも結構テンパってたのによ、今じゃ『はじまりの英雄』とか呼ばれてんだぜ？」

「子供の成長は早いってことだろ」

彼らだけではない。

アスナだつて、リズベットだつて、ユウキだつて強くなった。レベルやステータスの話しではない、もっと見えない何か。数値で見れるものでもなく、自分では実感が出来ないモノ。それこそが——心だ。

自分達よりも歳が若いくせに、誰よりも希望を持って前を見ている少年少女。人格がある程度完成されてしまった自分達には持っていない可能性を、彼らは持つておりそれを育み成長してきた。

「クライン」

「ん？」

エギルは座っているクラインに拳を突き出す。

クラインはポカンと見るだけだが、エギルはニヤリと口元を不敵に歪ませて言う。

「俺達も負けてられないぞ？」

「……そうだな」

エギルが何を言わんとしているか理解すると、彼は立ち上がりエギルに向かって拳を突き出して——

「大人の意地ってやつを見せてやろうぜ」

——両者の拳を合わせた。

いつだってそうだ。

昔からも、そしてこの先も変わらない。

子供を守るのはいつだって——大人の役割なのだから。

第15話 決戦前く自覚した恋く

2024年1月31日 PM16:00

『第一層』迷宮区

「やけに静かだな……」

迷宮区に辿り着き、ある程度歩いたところで誰かに向けた言葉でもない調子で小太りのプレイヤーが呟いた。

本来であれば、エネミーモンスターである『ルインコボルド・トルーパー』が現れる筈なのに、今だにその気配はない。それどころか静か過ぎるくらいである。

ゴクリ、と唾を呑む音が聴こえたがそれは誰から発せられた音だったか。先程呟いた小太りの男からか、それともその他数人のプレイヤーからか。

誰かもわからないまま、プレイヤー達は進んでいく。

バラバラにならずに、固まって。

足早にならずに、慎重になって。

周囲を探索しながら、神経を過敏にし、数人のプレイヤー達は行動を始めた。

彼らが行っているのは、マッピングである。

ダンジョン内を散策し、その中に一体何があるのかマップに記すといった単純作業。とは言っても、その作業は攻略するにしても重要といえるだろう。

どこに、どのようなモンスターが現れるのか。そしてそのモンスターの弱点はどこにあるのか、攻撃方法は如何な手段を用いるのか。ダンジョン内にはどのような罠が存在するのか。それらをハッキリしない限り、攻略など出来るはずもない。

情報とは武器だ。剣や斧といったモノと何一つ変わらない。

ただそれが目に見えるものか、そうじゃないかの差でしかない。

彼ら数人のプレイヤーは情報屋であった。

高い『隠蔽』スキル、そして『感知』スキルを屈指しダンジョン内の情報をかき集めていくスペシャリストであった。

だがその集団は奇妙な顔ぶれだ。

情報とは武器であると同時に、鮮度も重要となってくる。

鮮度を高める第一条件としては、誰も知らないという前提が大事なのだ。こうして他の情報屋と一緒に行動するのは非効率的であり、道理に合わないと言える。

何よりも彼らが行動している場所だ。第一層の迷宮区など、もはや誰も見向きもしないダンジョンだろう。新調した武器の試し斬りに赴くくらいの利用価値でしかない。

だというのに、怯えるようにして足を進めていく。

奇妙であり、不思議な光景と言えるだろう。

生きた心地がしなかった。

いつ現れるかわからないモンスターや罠に怯えながら、彼らは進んでいく。

純粋な恐怖。平気なプレイヤーはおらず、それは彼女——アルゴも例外ではない。

「それにしても……」

口髭を蓄えた男性プレイヤーが口を開く。

紛らわせる為か、その声色は震えており、その調子のまま彼は続ける。

「どうして茅場晶彦はこんな場所を選んだんだろうな……」

こんな場所、つまりは第一層の迷宮区に他ならない。

ヒースクリフの正体が茅場晶彦だったという真実、そして茅場晶彦

を倒せば現実世界へ帰還できるという事実を突きつけられ、はや数時間を経過していた。

はじまりの街やツールバーナでは、数多くのプレイヤー達が準備に追われていることだろう。攻略組だけではない、その中には中層プレイヤーも存在しており、攻略を放棄したプレイヤーすら力になろうと行動している。

正に、アインクラッド内に存在するプレイヤー達は団結していた。全ての元凶を倒しこの世界から抜け出すために、各々が出来る最大限も努力を行使している。

それは情報屋として生きてきた彼らも例外ではない。

有志を集めて、決戦となる第一層の迷宮区を探索する。マッピングが完了しているとはいえ、相手はゲームマスターである茅場晶彦だ。何か仕掛けでもあるかもしれないし、その仕掛けはもしかしたら攻略組が全滅してしまうほどの代物かもしれない。

故に、彼らは何が起きるか分からない現状に怯えていた。何も起こらないからこそ、最悪の光景を想像してしまう。

『『鼠』はどう思う？』』

誰からも応答がなかったからか、比較的平常心を保っているように見えたアルゴに口髭のプレイヤーは話しかけてきた。

どう思うもないだろう、とアルゴは肩を竦めて事実だけを口髭のプレイヤーに告げる。

「わからないサ。オイラは茅場晶彦じゃないんだ」

「それもそうだが……」

身も蓋もない言葉に、スゴスゴと口髭のプレイヤーは引き下がった。

そうして会話もないまま、彼女らは二階へと続く階段へ到達してしまった。文字通り何も起こらずに、特別なアクシデントも起こらず

に。

モンスターすら湧かない異常事態。罨があることもなく、順調過ぎるほど順調に。

思わずに、小太りの男性が周囲に眼を配り。

「……どうする?」

「戻ろう」

間髪入れずに答えるのはアルゴだった。

小太りの男性の眼がアルゴに向く。彼だけではない。数名の情報屋が一斉に、アルゴへと意識を集中されていた。

「それはどうしてだ、『鼠』」

「決まってるだ口。これ以上先へ進んでも無駄だからサ」

ため息を吐き、つまらなそうな口調でアルゴは続ける。

「モンスターが湧かないのは、茅場がこの辺りの設定をイジったからだろうナ」

「湧かないなら先に進んでも問題はないだろう?」

「だから無駄なんだって。茅場はオイラ達を殺そうと思えば殺せタ。でもそれをしなかったのは、茅場にとってオイラ達は敵じゃないからだ。アンタも蟻とか見ても積極的に潰そうと思わないだ口?」

それと同じだよ、と肩を竦めて言うアルゴに口髭のプレイヤーは苛立ちを隠せない状態で口を開く。

だがそれよりも早く、アルゴが遮った。これ以上この場においても時間の無駄であるのなら、もっと他にやることがあるだろうと言わんばかりに。

「これも立派な情報ダ、アイツらに伝えようぜ」

「あとは任せろって、ユーキも言ってたしナ」

.....
.....
.....

2024年1月31日 PM16:11

第十八層 主街区『ユーカリ』ギルドホーム

二階建ての木造建築——加速世界（アクセル・ワールド）のギルドホームから少しだけ離れた場所に、石造りの建物が存在した。

屋根には煙突があり、絶え間なく煙が空へ上がり消え帰っていく。中には鉄を熱するための炉があったり、その燃料となる石炭は棚にある。壁には様々な種類のハンマーがあり、試作で作ったであろう剣や防具などが同じく壁に飾られていた。試作と言わずに、店頭で並べても遜色ないレベルであった。

金床や研磨機などがあることから、この場所が工房だということがわかる。

そんな工房にて、カン、カン、カン、と一定のリズムで金属音が辺りに鳴り響いていた。

赤く光るインゴットを火ばさみで掴み、もう片方の手にハンマーを持ち一定のリズムで叩いていく。ある程度叩いたら、インゴットを水に浸す。同時に水が沸騰していく。

そして再び火ばさみで掴んでいたインゴットを金床の上に持っていくと、再度ハンマーで叩いていく。それを何度も繰り返したところ
で。

「——それで、キリトくんはどうして剥れてるわけ？」

溢れる汗を拭うこともなく、ハンマーを振り落しながらリズベツトは壁際に座っている少年に問いを投げた。

少年——キリトはムスツと顔を変えながら一言だけ応じる。

「別に……」

「ふーん、別に、ねえ……？」

「……なんだよ？」

拗ねた調子で言うキリトに、ニヤニヤと悪戯を成功した子供のよう
な笑みでリズベツトが言った。

「当ててあげよつか？」

「……当てなくていいよ」

カーン、と一際大きな音を立てて、リズベツトはハンマーを振り下
ろしながら構うことなく口を開く。

「ユーキがあたし達じゃなくて、プレイヤー全員を頼ったのが気に入
らないんでしょ？」

一瞬だけ、キリトは動きを止めて明後日の方向へ視線を泳がせて、
拗ねた表情に戻り一言。

「別に……」

「誤魔化すの下手かあんた」

間髪入れずに、リズベットのツツコミが入った。

それから呆れた調子でため息を吐き、首を横に振りながらリズベツトは言う。

「長い付き合いになるけど、あんた達って仲が良いのか悪いのかわからなくなる時あるわ……」

「悪いぞ！ 凄く悪い！ 良いわけないだろ!？」

「はいはい、そうですねー」

ガタツ、と立ち上がりながら必死に否定するキリトを横目に、軽口を叩きつつハンマーを振り下ろしていく。

金属と金属が衝突する際に発生する高い音、そして生じる火花。それらを生み出している 鍛冶職人^{リズベツト}は一息ついてキリトの憤りを肯定した。

「まあ、あんたの気持ちもわかるけどね。水臭いっていうか、そういう感じでしょう?」

「そう、そうなんだよ！ 別に頭下げなくても俺達なら協力したし、俺達の為に頭を下げる必要もなかったろ!?! なのにアイツはまた勝手に考えて、俺達に相談もなしに！ 茅場の家族だからって俺達の態度が変わると思ってたのかアイツは—— あっ」

「はい、^ぐ馳走さまでした」

ニツコリ満面の笑みのリズベツトを見て、初めてキリトは気付いた。

——自分はハメられたのだと——。

「……汚いぞ、リズ」

「ごめんごめん。でも素直じゃないあんたが悪いのよ?」

口を尖らせて文句を言うキリトが可愛かったのか、リズベツトはクスと笑みを零す。

その笑みは先程浮かべていた悪戯を成功した子供のような笑みではない。どこか慈愛に満ちた、聖母のような笑みだった。

——普段は冷静というか、大人びた態度のくせに。

——ユーキが絡むと子供みたいになるんだから……。

初対面するときからそうだった。

しつこい男からリズベツトを颯爽と守り、すぐに仲間の少年と子供のような喧嘩を始める。そんな二人を微笑ましそうに少女が見守っていた。その光景は何物よりも温かく、リズベツトからは輝いて見えた。

デスゲームが始まって数日。人の暖かさというものに飢えていなかったかといえは嘘になる。大人びているといっても、リズベツトも十代の少女だ。途方もない状況に放り出されれば、他人に飢えてしまうのも無理はない。

だが誰でも良かったというわけでもなかった。

三人の輪に入ることが出来ればどれだけ嬉しいか、どれだけ救われるか。

リズベツトにとって、三人こそ希望の象徴と言える存在であった。分け隔てない優しさを持つアスナ、ぶっきらぼうな温かさを見せるユーキ、そして——。

——うん、白状しよう。

——あたしは、キリトが好きだ。

寂しかった、他人の温もりが欲しかった、誰かに必要とされたかった。

そんな感情が、恋心になっているのではないか、とリズベツトは常々疑っていた。何者でもなく、自分の感情をこれまで疑ってきた。

この世界は仮想世界。ここにいる自分達の身体は本物ではない。であるのなら、この感情も偽物なのではないかと。キリトへ向かつている好意は果たして本物なのかと、寂しさを紛らわせる偽物の感情ではないかと全てを疑ってきた。

だが彼女の恋は偽物ではない。

キリトのことを考えただけで動機が激しくなる、キリトのことを考えただけで頬が紅潮する、キリトの考えただけで冷静ではいられない自分がいる。

その感情を「恋」と言わずに何というのか。

——キリトが好き。

——子供みたいなキリトが好き。

——大人ぶっているキリトが好き。

——はしゃいでいるキリトが好き。

——強がっているキリトが好き。

——あたしは、キリトが、大好き……！

自分の想いを込めてハンマーを打ち込んでいく。一つ一つ丁寧に、一つ一つ確実に、自分の気持と向き合っていく。

何度打ち込んだか数えていない。

恐らく数百は超えており、数千といった膨大な数に届いているのかもしれない。

槌音が響いた直後に、一際眩い白光を放った——。

「……」

真剣な表情で視線を動かすことなく、キリトその光を見守る。

紅く熱されていたインゴットは徐々に変化を遂げ、輝きながら姿を変えていく。刃ができ、柄ができ、そうして数十秒かけて剣として形をなしていった。

そうして遂に——。

「出来た……」

—— 剣となる。

リズベットのは一息ついて、その剣をギュツと握りしめる。そのまま片手で持とうとするも。

「わっわわ……！」

「おっと」

リズベットの筋力値では持つことが出来ないのか、そのままフラつくも直ぐにキリトが支える。

手と手を振れている。少し背伸びすれば、キスが出来るような距離。鼓動が早まっていくのを、リズベット自身理解している。このまま本当にキリトの唇を奪ってしまうのも可能だろう。

しかし——。

「ありがとう」

と、リズベットのは口元をキュツと締めて、精製された片手剣をキリトに預けて問いかけた。

「どんな感じよ？」

「うん、重くて。綺麗な剣だ……」

その剣は白銀であった。

刃にあたる部分は眩い白銀、柄の辺りも白銀で、何もかもが白く光り輝いている。ただ柄頭の部分が金色の宝石がはめ込まれており、シンプルな造形となっている。

漆黒の『エリシユデータ』と遂になる片手剣の名前は——。

「名前は……『ウエイトウザトゥルー』？ 意味は『真実の道』って、かなりカッコつけてるわねえ」

「そうか？ 俺はいいと思うけど」

それだけ言うと、キリトはリズベットから数歩離れて、左手に『ウエイトウザトゥルー』持ち数度振った。

リズベットでも持てなかった白銀の剣を難なく片手で振って、満足したのか口元に笑みを浮かべてキリトは言った。

「いいな、最高だよ。この剣」

「……ねえ、キリト」

この場で自身の気持ちを爆発させれば楽なのかもしれない、途方もない好意をキリトにぶつければリズベットは満足するだろう。

自身がどんな想いでその剣を創り上げたか、どのような感情をキリトにもっているのか、リズベットは伝えたかった。

しかし――。

「ううん、なんでもないわ」

――この場においては、その感情に蓋をした。

何せ今のキリトは前を見据えている。前とはつまり、これからのこと。仮想世界ではない現実世界への明日を見据えていた。

だからこそ、リズベットも彼の想いを汲んで自身が精製しうる最高の剣を創り出した。

これ以上、キリトの邪魔は出来ないし、したくない。何よりも――。

「さあ、行きますか！ さっさと現実世界に帰るわよ――！」

――勝負を仕掛けるときは、ここではないのだから――。

第16話 決戦前く幼馴染く

2024年1月31日 PM17:00

第十八層 丘の上

空が紅く染まり、太陽が沈み始める。

まるでその空は血の色のような悍ましくも、不思議と人を惹き付ける色彩を放っていた。その空を、鳥が気持ちよく飛んでいる。地上では何が起きているかも知りもしないことであるし、彼らの知ったことでもないだろう。

第十八層の主街区『ユーカリ』の街明かりが灯り始めていた。

だがどうも活気がない。無理もないだろう、何せプレイヤーの数は片手で数える程度しかユーカリに存在していない。ほとんどのプレイヤーは第一層のはじまりの街、もしくはツールバーナで来るべき決戦に向けて準備を進めている。

そう言う意味では、少年は浮いていた。

準備するわけもなく、ぼんやりと丘から見えるユーカリを眺めている。

だが隙はない。黒い長袖のインナーの上から胸部を覆う白色の鎧。手首には手甲が装備されており、堅実さよりも身軽さを追求したようでもある。黒色のズボン、その腰からは濃い蒼色の布が垂れている。そして、そのベルトには例の紅色の宝石の付いたペンダントがぶら下がっていた。

腰には鍛え抜かれた両手剣『アクセル・ワールド』が装備されている。

奇襲をかけられても、万全の動きが出来ることだろう。

身体も軸もぶれずに、体幹も乱れることなく、少年はその場に立っていた。

その蒼い双眸から見えた景色とはいかなるものなのか。少年は時折、感慨深そうに眼下に広がる景色を眺めて、懐かしむような名残惜

しむような複雑な眼で見つめていた。

——最終攻略まで一時間か……。
——ここまで、色んなことがあったな……。

デスゲームに巻き込まれ、色々な連中に出会ったことを少年は思い出す。

いけ好かなくも尊敬できる男とモンスターキラーを討伐した。いつも面倒を見てくれていた鍛冶職の少女が仲間になり、第一層で殺人鬼とつまらない因縁が始まった。『アインクラッドの恐怖』として一人でフロアボスを倒すことにした。その後を健気に自分の後を追って来てくれる妹、命の恩人であるAIの三人で行動するようになった。この第十八層で憧れと決闘し、敗北することになった。カーディナルと初めて会話したし、余命が幾許もないことも分かっていた。殺人ギルド『笑う棺桶』^{ラフィンコフィン}を潰して、殺人鬼との因縁を清算した。その代償は大きく、自分を好きだ言ってくれたAIに命を救ってもらいこうして少年は立っている。『聖竜連合』の無謀な攻略に、尻拭いをすることもあった。男四人でのんびりと釣りをすることもあった。血盟騎士団副団長と決闘したり、妹と本当の意味で家族になれた。歓迎会で我ながらはしゃいだことは記憶に新しい。罰ゲームで添い寝をしたが、もう二度としないと固く誓った。

そして今。

短いようで、長いような。濃密な一年と少しだったと思う。

ここまで到達した出来事は、決して楽しいことばかりではなかった。何度も剣を振るい、何度も殴り、何度も蹴り飛ばす。その都度、痛みとなって返ってくる。そんな繰り返しだった。

辛く、悲しく、苦痛なことたくさんあった。だがそれだけではなかった。

自分一人では、耐えれなかったと思う。

その前に自分は壊れてしまい、何者かもわからずに攻略していた。過程はどうあれ、結果だけ言えば自分という人間は間違いなく破綻

していた断言出来る。
それもこれも。

「やっぱり、ここにいたんだね……」

——オマエがずっと、オレの隣に居てくれてから、だな……。

少年は振り返らない。

背後には間違いなく少女が居て、その言葉は自分に向けられた言葉であると分かっているものの、少年は振り返らずに意地の悪い言葉で応じた。

「もういいのかよ、泣き虫」

「えっ、見てたの!?!」

「一人だけビービー泣いてんだ。嫌でも目立つだろ」

少女——アスナは羞恥心で顔を真っ赤に染めながら慌てて取り繕った。

「ち、違うもん！ アレは泣いてたと言うか、ホツとしたと言うか……

！ もう、全部ユーキくんのせいだよ！」

「……待て待て、どういう理屈だそりゃ？」

「君が泣いたりしないから、わたしが代わりに泣いてるんだよっ！」

意味がわからん、と少年——ユーキは首を横に振って、意地の悪いものではなく神妙そうな声色で、申し訳ない口調で言う。

「……悪かったな、黙ってて」

「ううん、大丈夫だよ」

ユーキが何に対して悪いと思っているのか、アスナは熟知していた。それは茅場晶彦と少年の関係性についてだろう。

しかしアスナは別に気する様子もない。茅場晶彦と繋がりがあろうが、ユーキはユーキだ。その程度で自身の信頼が揺らぐ訳もない。何よりも――。

「わたしよりも――君の方が辛いでしょ……?」

言葉を失った。

辛くなかつと言えば嘘になる。茅場はユーキという身内がログインしていたのは彼も知っていた筈だ。なのにこうしてデスゲームを開始し、関係のない者達と一緒にユーキを巻き込んだ。これを裏切りと言わずして、なんと言うだろうか。

「君の気持ちに気付かないで、わたしはずっと守られてきた」

ほんの僅かに、アスナは黙った。

これ以上、少年に甘えてばかりはいられない。自分の気持ちを偽って、無理矢理進み続けてきた少年を、これ以上騙し続ける訳にはいかなかった。

ユーキに頼られるように、ユーキに守られ続けているのではなく今度は自分がユーキを守りたい。その一心で、アスナはここまでやって来た。アスナが守りたいと思っているのはユーキの身体、そして強すぎる心でもある。

故に、アスナは言う。

これ以上、ユーキが自分自身を偽らないように、純粋な心をこれ以上傷つけさせないように。

「教えて。ユーキくんは茅場さんをどうしたいの?」

「……ンなもん、決まってるだろ」

ギョツと拳を握り、強い口調でユーキは告げた。

「——アイツを斬る。そしてオマエらを現実世界に帰す。オレの目的なんざそんなもんだ。全員の前で言った筈だろ」
「違うよ」

ユーキの服の袖を、ギュツと握りしめる。

これ以上、見ていられなかった。このまま自分を偽り続ける少年を見ていられなかった。強い口調とは裏腹に、その言葉の裏にある悲痛な決意をアスナは敏感に察知していた。

彼女が守るのは心。このままユーキは偽り続けるだろう。本当にやりたいことを我慢して、その結果待っているのは後悔でしかない。

「君が本当にやりたいことを教えて？ 大丈夫、ここにはわたししかないから」

だから、言葉にさせる。

明確に、己の本当にやりたいことを、アスナは口にさせようとしていた。言葉とは道標だ。何をやりたいのか、本心を曝け出せる唯一の手段。

「オレ、は……」

ここで初めて、ユーキはアスナの方へ視線を向けた。

ほんの僅かに躊躇い、顔を俯かせる。それから直ぐに、少年は自分の意思で顔を上げた。

「アスナ、オレは……」

「うん」

「オレは、アイツを。茅場晶彦を、止めたいと思ってる……」

斬るのではなく止める。

その意味をアスナがわからない筈がなかった。殺すのではなく生かす。止めるとはそういう意味だ。

この状況で、その願望がどれほど難しく、どれほど困難なのか。そんなものユーキが一番理解している。

それでも叶うことなら、ユーキはそんな夢物語を紡いでいった。

「オレとアイツは似た者同士なんだと思う。同じ視点で世界を見ていた。オレ達の大事な人達を奪っていった世界ってやつが、憎くて堪らなかった。滅んじまえばいいって考えていた時期もある」

でも、と言葉を区切りアスナを真っ直ぐに見つめて。

「オレとアイツは違った。アイツは暴走して、オレは踏みとどまった。それもこれも、オレの側にはオマエみたいなヤツが居て、キリト達のようなお人好し共がいてくれたからだ」

もし一人だったなら、もし自分の周りに茅場だけであつたなら、自分と茅場は共犯者になっていただろう。

それほどまでに、自分と茅場は同じ見解を示していた。だからだろうか。茅場の言葉が酷く納得できた。オマエならそうするだろう、と静かに受け止めることが出来てしまっていた。

「アイツはオレも、オマエも、ユウキすら巻き込んだ。もうアイツは敵でしかない。なのにオレは、アイツを助けたいと思ってる……！」

ギリツ、と奥歯を噛み締めて。

ギユツ、と拳を赤くなるまで握りしめる。

そのまま忌々しげに、吐き捨てるように続けた。

「本当に自分の甘さに反吐が出る……！ アイツは殺されても仕方ねえ筈なのに、オレにはそれが出来そうにない。腰抜けにも程がある

……！」

「でも、それがユーキくんでしょう？」

遮るようにアスナの声が聞こえた。

ユーキの視線の先にいる彼女は——微笑んでいた。

「誰にでも手を差し伸ばす。君の甘さ、優しさが——」

——愛おしく思う。

そんな言葉を吐き出すのをギョツと我慢して、アスナは諭すように続けた。

「君はわたしの知る優希くんだよ。優しく困っている人を放っておけない。わたしの捻くれた幼馴染。それが優希くんだもん」

「……違う。優しくなんかねえよ、オレは——」

「ううん、優しいよ」

キツパリと否定して、極めて優しい口調でアスナは続けて言う。

「君が茅場さんを助ける、って言って願うなら、わたしも、わたし達も一緒にやるよ。もう君を一人では行かせない」

「わたし達……？」

「そう、わたし達」

アスナは言うその後ろを振り向いた。ユーキもその視線の先を追う。

そこには「にーちやーん！」と元気よく手を振るユウキと、黒い直剣と新調した白い直剣を背負ったキリト、その後ろをリズベツトとユイが歩いてくるのを見た。

斬っても斬れない絆がそこにはあった。誰にも負けない、どの集団にも負けない。見えない何かで繋がった仲間達の存在。ユーキが茅場と血縁者であろうと構わない。むしろ関係がないと言わんばかり。

思わずユーキは呆れた口調で呟いてしまった。

「お人好しな連中だ……」

「君もその中に入ってるんだけど？」

「頭が痛くなるなそりゃ」

拒否をしなかったということは、つまりはそういうことだろう。

あの輪にいることをユーキは受け入れていた。素直ではないのが少年らしい、とアスナは微笑ましく見て。

「ねえ、ユーキくん」

「あ？」

「月が、綺麗だね」

「月？」

空を見上げて、直ぐにアスナへと視線を戻し怪訝そうな口調で言う。

「月なんて出てねえぞ？」

「ううん、なんでもないよ」

通じないのなら、それはそれでいいから。と言うとアスナは明るい口調で。

「帰ったらさ、星を見に行こうよ！」

「星？」

「うん。星だけじゃない、遊びにも行こうよ！　きっと、違う景色が見えると思うよ」

「そうだな……」

デスゲームに巻き込まれる前の自分と、今の自分。

価値観などまるで違う。世界に憎悪を向けて、怒りを自分自身に向けていた頃とはまた違う景色が見えることだろう。

「それも、悪くないかもな……」

「うん！」

行こう、とアスナが駆け出して、ユーキは「ああ」と応じると振り向いた。

その視線の先にはユーカリの街並み。郊外には加速世界アクセルワールドのギルドホーム。果てには迷宮区ミヤウキウの存在を確認する。

もうこの景色は見ることはないだろう、とユーキは眼を瞑り目に焼き付ける。

二度と忘れないように、この光景を胸に焼き付けて。眼を開けて口を開く。

「行ってくる。また必ず会おう——ストレア」

——うん、行こうよアナタ！——

そんな声が聴こえたような気がしたが、空耳だろうと判断するとユーキはアスナの後を追いかける。

そうして、アインクラッド最後の攻略が始まった——。

第17話 最強と最大の矜持

ソードアート・オンライン。

それは世界初のVRMMORPG、通称『SAO』の正式の名称である。

天才、茅場晶彦が生み出した仮想世界はまたたく間に世界を熱狂の渦に巻き込み、誰もがその世界に夢中になっていた。正式サービスが始まるまでの期間は想像と妄想の連続だっただろう。どのような世界なのか、RPGだというのに魔法の類がないとはゲームとして成り立つのか、どれほど精巧な作りなのか。

憶測が憶測を生み、希望と不安が複雑に入り混じっていく。

そうしてβテストを開けて、ソードアート・オンラインの正式サービスが始まった。

約一万人という膨大な数のプレイヤーがログインを始め、特に問題はなく幸先の良いスタートを切ることになる。

ある者はサービス開始と同時に、ある者は会社帰りに、ある者は有給を取って、多種多様な期待を胸に仮想世界へと降り立っていった。誰もが仮想世界に希望を見出し、夢を抱いていた。

だが現実は違った。

世界初のVRMMORPGは突如として、HPバーがなくなったプレイヤーは現実世界でも死亡する、史上最悪のデスゲームと変貌を遂げる。

それからのインクラッドの空気と雰囲気は全くの別物と化していた。現実世界に最も近い仮想世界は、仮想世界のような現実世界に。希望から絶望に、夢から現実へ。それぞれのプレイヤーはそれぞれの形で、現状を受け止められなかった。嘆いても始まらず、悲観したところで好転しない。各々が考えて行動しないと生き残ることが出来ない、過酷な世界へと変貌を遂げていた。

現実世界へ帰還するには、インクラッド第百層のフロアボスを倒すしかない。

途方もなく、目眩を覚えるほどの条件だった。何せ問題のフロアボスの脅威が尋常ではない。フロアボスは複数で挑むことが出来る。その数は四十八人と決まっているものの、数を揃えたから攻略できるというわけでもなかった。

優れた連携、鍛え抜かれた練度、事前の知識、そして何よりも物怖じしない度胸。それらが揃って初めて撃破出来る強敵。それがアインクラッドの各層で巣食っているフロアボスである。

先の見えないゴール、終わりがわからない道を、アインクラッドに囚われた者達は進んできた。

ある者はあと五十層と希望を見出し、ある者はこの世界の住人になるかもしれないと恐怖に震え、ある者は今を生きることだけに精一杯だった。

そして、今。

なんの気まぐれか、全ての元凶である茅場晶彦が正体を晒し、自分を倒せば現実世界の帰還を約束する。

茅場晶彦に囚われた数千人の虜囚が前を向き、剣を取り決着を迎えようとしていた。

競い合っていたギルドは手を組み、腕に覚えがある者達は『魔王』茅場晶彦の根城となっている第一層の迷宮区最上階へと目指す。

全てのはじまりを告げた第一層で、最後の攻略が今、はじまる――。

.....

2024年1月31日 PM 18:05

第一層迷宮区 一階

不気味な静寂が、攻略組を包み込んでいた。

ガチャガチャと金属特有の音だけが、辺りに木霊する。誰一人口を開く者はいなく、全員が全員周囲を警戒しながら歩を進めていた。

攻略に集まったプレイヤーの数は100名に近かった。

最強のギルド『血盟騎士団』、そして最大のギルド『聖竜連合』を筆頭に、『風林火山』『月夜の黒猫団』と続く。ソロで活動している数名のプレイヤーも攻略に加わり、かつてない規模のプレイヤーが攻略に臨んでいた。その中にはもちろん、『加速世界』^{アクセルワールド}の姿もあった。

多勢過ぎるほど多勢。

だが彼らには満身や油断といった楽観的感情は存在しなかった。

見慣れた第一層迷宮区、今では相手にもならないレベルの低いモンスター^{スター}の姿は見られない。数時間前にこの場所に情報を集めに赴いていた情報屋集団の言うとおり、モンスターが湧く気配は見られない。

情報通りといえば情報通り。このまま素通りで、最上階まで到達出来るのではないか、といった考えはない。

彼らは第五十層まで攻略してきた先鋭達だ。

強敵との戦闘経験は豊富であり、突然のアクセシブメントにも対応出来る実力もある。

だからだろうか。それほどまでの経験を積むと、迷宮区の難易度が肌で感じ取ることが出来るプレイヤーも現れてくる。

彼らが黙っているということは、つまりはそう言うことだった。

このダンジョンは一筋縄ではいかない。防具が擦れ合う足音だけが聴こえ、不気味なまでに静寂に包まれた戦場。何よりも無視できない死の気配が、彼らの表情を硬くしていく。

「変、だね……」

その中で、コソコソと小声でアスナが呟いた。耳元で極めて小さい声だったのか、目立つものではなかった。

ああ、と声を向けられた少年——ユーキは小さく頷いて小さい

声で応じる。

「静かすぎんな……」

「……どのタイミングだと思う？」

アスナの言葉の意味、それは奇襲である。

このまま静寂が約束されることはなく、何かしらの変化がある筈。それがアスナの見解であった。初回で何もないのなら、次には必ず脅威が迫りくるものだ。

ユーキは少しだけ考えて。

「二階に上がる階段辺りになにかあるな」

「……根拠は？」

「勘だよ。根拠なんざないに決まってるんだろ」

そうして広場に出た。

見慣れた景色、見慣れた石造りで出来たドーム状の広場。視線の先には、二階に上がる階段がある。

不気味なほど何も問題なく、不思議なほど脅威となる存在には出会さなかった。それを見た瞬間、ホツと胸を撫で下ろしたプレイヤーも存在していた。緊張の糸が途切れたのだろうか、硬かった表情も柔らかいモノに変わっていった。

それは伝染していく。

一人、また一人と警戒を解いて行ってしまう。

ある者は一息をついて、ある者は装備を確認するためにメニューウインドウを開く。

仕方ないのかもしれない。人間だって感情がある。ずっと緊張しているわけもなく、集中出来るわけでもない。順応できるプレイヤーは、この極限の緊張感に早々に慣れてしまう者もいる。

だが茅場晶彦は、そんな人間の欠陥を巧みに突いてくる――。

「——え？」

間の抜けた声。それは誰の声だったのか、判別する時間すらない。地を揺るがす衝撃が合った。上から下へと、何かが着地する轟音と衝撃だった。何かが地を蹴り、そして重力に逆らうことなく降り、砕かれた石造りの床は重量に逆らえずに砕かれる。

攻略組の目の前に振ってきたモノ。

全長二メートルほどある体格に、肌は赤色で、筋骨隆々とした姿で、地に足をつけている。片手に持っているのは、岩で出来た大雑把過ぎる両手剣。顔面はどこか人間のようなであるが、生気がまったく感じられない。

見覚えがある、見覚えがある。この化物を、彼らは知っていた。

ただそこにいるだけで『恐怖』し身動きが取れなくなり、『恐怖』が圧縮され人の形となったような暴威を、彼らはよく知っている。

その怪物の名は——。

「も、モンスターキラーだあああ!!」

何者かの絶叫が響き渡り、漸く彼らは事態を認識した。だが誰一人、身動きとれなかった。

絶叫は連鎖し、恐怖は彼らの身体を縛っていく。我に返ったところで、行動に移せない。

アレはそういつた化物だ。

『恐怖』を人間に叩き込み、萎縮させる途方もない怪物。第一層で猛威を振るつた怪物が蘇る。今生きるプレイヤー達にとって、モンスターキラーの姿はトラウマといっても過言ではない。

カタカタと身体を震わせ、武器を満足に構えることも出来ない。思考も纏まらずに、ただモンスターキラーを見ることしか出来ない。

モンスターキラーは意に返さずに、岩で創り上げられた両手剣——
——石斧剣を振り上げる。

「あ——」

目に見える暴力の気配に、何も出来ない。悲鳴すら上がることはなく、ただ呆然と迫りくる獲物を見つめていた。

死刑台にて死を待つ囚人のようでもある。このまま振り下ろされれば、攻略組は大打撃を与えられることだろう。何も出来ないまま蹂躪され、何もなせないまま果ててしまうことだろう。

だがそれも、何も出来ないままであればの話だ。

「——チッ！」

何者かの舌打ちが聞こえる。同時に躍り出たのは——黒色の影と、金色の影。

振り下ろされた石斧剣を金色の影は両手剣で受け止めて、そのまま力だけで石斧剣を弾き返す。

モンスターキラーの巨体が大きくズレた。その隙を黒色の影が見逃すこともなく、背中に背負う漆黒と白銀の二刀でモンスターキラーを連続で斬りつけていく。

連続の16連撃。ソードスキル——『スターバースト・ストリーム』が容赦なくモンスターキラーを薄切りしていく。怒涛の剣技が中断されることはない。モンスターキラーも傷に構うことなく反撃しようとするも、その都度で金色の影が黒色の影の邪魔をさせないように割って入ってしまう。

もちろん、両者に掛け声や合図といったモノは一切存在しない。二人が二人とも、お互いに好き勝手行動しているにも関わらず、その結果で類を見ない連携となっていた。

ソードスキルが終る。それは、モンスターキラーの命も終ることを意味していた。

豪腕を切り落とし、膝から崩れ落ちる巨体、無数の結晶となり絶命したのを確認すると、退屈そうな口調で金色の影——ユーキが口

を開いた。

「今回は震えなかったみたいだな、ビビリ君？」

「お前こそ、腕を斬り落とされなかったみたいでよかったじゃないか」

軽い口調で黒色の影——キリトが応じる。

売り言葉に買い言葉。震えて動けなかったプレイヤー達を他所に、『はじまりの英雄』と『アインクラッドの恐怖』は些細な口喧嘩を始めていた。

だがその口調とは裏腹に、彼らの表情は硬かった。その手に持つ獲物が鞘に収まることなく抜いたままであり、油断なく警戒心を張り巡らせる。

チツ、とユーキは再び舌打ちをするとめんどくさそうに言う。

「来るぞ」

「わかってる」

短いやり取りだった。極めて短く、無駄のない会話。

その時だった。

先程のように、地を揺るがす轟音が鳴り響く。石造りの地面を粉々に砕きながら、“それ”は上から下へと降り立つ。

その音は一つだけではない。二度、三度、と連続して轟音と衝撃が攻略組の身体と耳に襲いかかってくる。

「あ、あ、あ………」

ブルブルと身体を震わせながら、一人の攻略組が数ある一体を指差した。

その指の先、その視線の先には、わかりやすいほどの“絶望”が超然と君臨していた。

それは——。

「も、モンスターキラー……」

驚愕と絶望が入り混じった表情で、今にも泣きそうな小さい声で呟いていた。

ありえない、と。まるで信じられない者を見るかのような眼、死者にでも会ったかのように頭の中で否定しながら一歩後ずさる。

事実ありえなかった。

モンスターキラーは第一層で『はじまりの英雄』に討伐され、つい先程だつて斬られた筈だ。無数の結晶になり、空中分解したのだから見届けた

だというのに。

「な、なんでこんなにいるんだよっ!？」

二体三体どころではなかった。もはや数えることすら馬鹿らしくなるほどの数。恐らくその数は百をとうの昔に超えているだろう。

そして一斉に、モンスターキラーは叫んだ。

「!!!」

耳を塞ぎたくなるような爆音、目を閉じたくなるような現実。

威嚇するように、これから蹂躞を始める合図のように、モンスターキラーは各々好き勝手行動し始める。

それは獣だ。統率が取られていない、己の暴力を十全に振るうだけの理性のない獣のような動きだ。モンスターキラーには感情などない。同情することなく、不憫に感じることもなく、温情をかけることもなく、プレイヤー達を処理していくことだろう。

この場所にプレイヤーが存在するから狩る、そんな簡単なアルゴリズムで組まれているのだから。

攻略組の全員が声を失う。

その中には歴戦のプレイヤーの姿もあった。最強のギルド『血盟騎士団』も、最大のギルド『聖竜連合』も例外ではない。

ディアベルは表情を強張り冷や汗を流す。『聖竜連合』遊撃部隊リーダーであるコーバツツと言えは。

——なんだこれは……。

一歩二歩、後ずさる。

目の前の地獄のような光景を否定しようにも、モンスターキラーの叫びで否が応でも見せつけさせられる。これが現実であると、これが現状であると思ひ知らされてしまう。

誰かに頼ろうと周囲に目を向けたところで、自分と同じような状態だった。目を見開いている者も居れば、膝から崩れ落ちている者もいる。共通しているといえば、誰もが武器を構えていないことだろう。全員が全員。

最大のトラウマを目の前に、どうすることも出来ない。

——どうすれば、よいのだ……。

——こんなの、理不尽すぎるだろ……。

——こんなの……！

あと数十秒もしないうちに、モンスターキラーに蹂躪されることだろう。

もう既にコーバツツも、ディアベルも、攻略組にも抵抗の意志はない。死を拒否しながらも、今の状況を諦めている。

誰も打破出来る人間はいない。

当たり前だろう。諦めている人間に何が出来るといえるのか、投げ出している人間に何を掴めるというのか。

何かを成すことが出来る者は何時だって——。

「——固まってる！」

——諦めない人間なのだから。

その声は凜として、この地獄に透き通るものだった。暗雲に射し込む光のように、諦めていた心が照らされていく。

継る想いで、コーバツツはその声の主の方へと見る。

それは少女。

栗色の、紅色を強調とした軽装の細剣使い——『紅閃』のアスナだった。

彼女は再び、毅然とした態度と声で指示を飛ばす。

「近場の人達と固まって！ 単独で行動しないで下さい！」

その指示に従い、アスナの近くにユウキ、リズベット、ユイが集まる。

遅れて飛び出していたユーキとキリトが合流するのを確認すると、アスナは再び口を開いた。

「みんな、諦めるのは早いわ！ 剣を取って、前を向いて！」

その声には力があつた、熱が合つた。

力は屈していた膝を立たせ背を押し、熱は徐々に心が灯り始め伝播していく。

「わたし達の死に場所はここじゃない、そうでしょう!？」

一人、また一人。

剣を取り、槍を構え、それぞれの獲物を握り締めていく。

恐怖に負けている人間は、もういなくなった。誰もが前を向き、モンスターキラーと真正面から対峙する。

「こんな場所じゃ死ねない。生きて必ず———現実世界に帰ります」

しよう！」

「「「おおおおおおお!!」」」

呼応するように攻略組から、声が上がっていく。

高揚しているとも取れるし、恐怖心に負けない為の誤魔化しとも取れるものだ。だがその音量、熱意はモンスターキラーなどに負けてはない。アスナの言葉が燃料となり、火が灯ったプレイヤー達を熱く燃え上がらせていく。

「——それで、何か策でもあるのかよ?」

口元を緩めながら、意地の悪い声でユーキが問いかける。

アスナはキツパリとした口調で答えた。

「そんなものは、これから考えます!」

「……立派になったんだか、抜けたままなのか。まあ、その前のめり姿勢は嫌いじゃねえが」

そう言うと、ユーキは一步前に出ると両手剣を右手に持つ。

まさか、と口元を引く付かせて念の為、リズベツトは問いを投げる。

「……あんた、何をしようとしてんのよ?」

「決まってるんだろ、突っ込んで気をそらして来るんだよ。そうすりゃ攻略組の連中もなんぼか楽になんדר」

「お前、また勝手に……!」

ユーキが行くのなら、自分も行く。とキリトも一步踏み出そうとするもユウキに片手で制される。

ニツコリと満面の笑みで、ユウキは口を開いた。

「大丈夫だよ、今度は僕がにーちゃんのフォローする。キリトは作戦

を考えて」

ね、いいでしょにーちゃん？とユウキの問いに、少年は少しだけ考えて。

「……勝手にしろ。足手まといになったら、叩き潰すぞ」

「任せてよねっ！」

同時に、兄妹は駆け出した。

目標はモンスターキラーの群衆。自分達の何倍もある体軀にこれから突っ込むというのに、二人からは緊張感はない。

むしろ普段通りに、ユーキは面倒くさそうな口調で言った。

「おい」

「なに、にーちゃん？」

「風穴を開ける。オマエはそのまま突っ込め」

どうやって、とユウキが問いかける前に、少年は行動に移していた。

身体に“蒼炎”を纏い、左目を碧眼から紅色に変色させる。そこまですらば、いつもどおり。絶対的な意思の顕現、心意を使用しているただの『蒼炎』のユーキとして姿だろう。

しかしここで纏っている“蒼炎”を、身体から両手剣へ。莫大で膨大で、途方もない炎熱が一本の剣へと収束されていく。

その熱を右手で感じ取りながら、苦痛に表情を変えることなくユーキは順手から逆手に両手剣を構え直して――。

「っ――！」

一気に駆け出した。

向かう先はモンスターキラーの群れ。

その行為は無謀極まるものだ。一人で、百を超える大群を相手にで

きるわけがない。

モンスターキラーが叫ぶ。

嘲笑うように、貶すように、點すように、ユーキの無謀とも呼べる行動に嘲るように。

だが。

「バカはテメエらだ」

モンスターキラーとの距離はおおよそ50メートル程。とても剣の間合いとは呼べないところで、ユーキは行動を変えた。

疾駆していた足を大きく地面を蹴り、あろうことかそのまま大きく真上へ跳躍した。

「――！」

モンスターキラーの群れが一斉にユーキを見るが、何もかもが遅かった。

弾丸は既に装填されている。あとは引き金を引くのみ。

宙に舞う身体。

順手に持つ両手剣。 “蒼炎” が収束されている剣先はモンスターキラーの先頭集団。

『アインクラッドの恐怖』は弓を引き絞るように上体を反らし、嗜虐的な笑みを口元に浮かべて。

「消し飛べ――！」

――炎剣投擲。

“蒼炎” を纏った両手剣が、モンスターキラーの軍勢に投擲される――。

「アイツ、いつの間にあんな技を……」

まるでミサイルだな、とキリトはぼんやりと呟く。

しかしそれは言葉通りだった。ユーキの放った剣が着弾するや否や、爆炎となつて絨毯爆撃のようにモンスターキラーを複数巻き込んでいく。

宣言通り、隙間もなかった群衆に風穴が空き、ユウキは畳み掛けるように突撃し、遅れて突き刺されていた両手剣を引き抜きユーキも駆ける。

そこから始まるのは兄妹の独壇場だった。兄が攻撃を弾き体制を崩す、そして妹が舞うように剣を振るいトドメを刺していく。

抜群の連携。元より、二人はアスナ達と合流するまで共に行動していたのだから、当然といえば当然なのかもしれない。

アッセルワールド加速世界の面々も特に心配している様子もない。

それも確かな信頼と信用があつて、初めてなせるモノなのだろう。とは言つても、危険なことはしてほしくないようで。

アスナはどこか切羽詰まった口調で、キリトに意見を求めた。

「キリトくん、何か策はある?」

「そうだな……つとその前に、迷宮区の分析は終わったかユイ?」

「はい、終わってますよ。パパ!」

リズベットに守られていたユイが、元気よく答えて簡潔に答えた。

「十九階——いいえ、十八階まで設定がイジられていました。二階から十八階までは、四十九層までのフロアボスがポップするようになってきているみたいです」

「ってことは、フロアボスが通常モンスターとしてっているってこと!?!」

リズベットの問いに、ユイが沈んだ表情で申し訳なさそうに頷い

た。

これまで苦勞して倒してきたフロアボスが通常モンスターとして存在していると言う事実。耳を疑いたくなる言葉に、リズベツトは呆然とする。

しかしキリトは違うようだ。

ある程度その可能性を懸念していたようで、特に驚く様子もなく言う。

「つてことは、際限なくポップするつて考えたほうがいいな」

「根拠は？」

アスナの問いに、キリトは視線をモンスターキラーの群衆へと目を向けた。

そこでは丁度、ユウキがユーキの肩を足場に駆け上がりモンスターキラーの首を斬り落としていた。無数の結晶になり散る怪物に目を向けず、新しい怪物が宙を舞っているユウキを叩き落とさんと石斧剣を振り被る。当然、そんな真似ユーキが許すわけがなかった。少年は愛剣を両手に持ち直すと振りかぶっていた怪物めがけて力一杯剣を振り下ろし、文字通り斬り飛ばしていた。

モンスターキラーは他の群れを巻き込みながら薙ぎ倒され、無数の結晶となり消える。鮮やかなモノだ、この短時間で二体は屠っている。

その事実を踏まえて、キリトは結論だけ言う。

「今の二体、最初のユーキの爆撃。これらで結構数を減らしたと筈だけど、まったく減っていない。一階でこんな有様なんだ、他の階層だって似たようなものだろう」

「そんなのアリなの……？」

「茅場はこの世界の創造主、いわゆるゲームマスターつてやつだ。この程度の設定をいじるのなんて、造作も無いんだろ」

嘆くりズベツトに結論だけ言うと、キリトはある疑問が浮かんだ。そう、なんでもありだ。

ゲームマスターと言えば何でもありの存在。この世界を法則すら作り変えることが出来る存在。神とも呼ばれる存在だろう。

だと言うのに――。

――どうして茅場はこんな設定にしたんだ？

――アイツなら、何でも出来る。

――モンスターキラーを不死にしてしまえば、それで俺達は詰んでいた。

――なのにどうして、ギリギリで攻略できる難易度に落としているんだ……？

考えてみれば、広場での茅場の行動もおかしかった。

あの場所で、プレイヤーを皆殺しに出来た筈だ。なのに彼はそれせず、あろうことか自らの絶対悪として、倒さねばならない敵として宣言し、第一層の迷宮区最上階で君臨している。

茅場はあの場で「自分の正体に気付いた者が現れた。だから正体を明かした」と言っていた。

――それは多分、俺達のことなんだろう。

――それでもだ。

――正体がバレたくないのなら、俺達を消せば良いだけの話だ。

――何でだ、どうして茅場はこんな行動に出た。

――これじゃまるで……。

そこまで考えて、キリトは首を横に振る。

今考えることはそんなことではない、と。このどうしようもない状況を打破するために、先天的に持つ洞察力を遺憾なく発揮していく。

「解決にはならないけど、打開する方法は二つだ」

一つ目、と右手の人差し指を伸ばしてキリトは続ける。

「全員でモンスターキラーを無視して、二階へ続く階段を駆け上がる。倒してもキリがないからな」

「だけど、と言葉を区切りキリトは言う。

「問題が一つ、アイツらも俺達を追いかけてくるだろう。そうになると、二階のフロアボスとアイツら挟み撃ちにされる」

「キリトくん、それだと」

「ああ、正直しんどい。かと言って相手にもしてられない。0時までには茅場を倒さないと、俺達は残りの五十層を攻略しなければならぬ」

アスナの言葉にキリトは同意しながら言う。

そこで、と右手の中指を伸ばし二つ目の提案を言う。

「二つ目の方法だ。ここで二手に別れる。先に進むメンバーと——」

「——残って殿役、だよな」

重苦しいアスナの言葉に、キリトは無言で頷いた。

それもこの階だけではない。ユイが分析した結果で言えば、二階から十八階までフロアボスが通常モンスターとして設定されている。となると最低でも十八回の殿役が必要となってくる。

一階だけで無限に湧き続ける化物を相手にしなければならず、二階から十八回は複数のフロアボスと対峙しなければならない。それも茅場をどうにかするまでの間という絶望的状况だ。確かに倒すよりも、防御に徹していたほうが安全だ。それでも危険が付きまとう。そんな死ぬほうが確率が高い役目など誰がするだろうか。

完全に手詰まり。

ギョツと、アスナは悔しそうに両手を握りしめる。これでは茅場に到達すら出来そうにない。となると幼馴染のささやかな願いも叶えることも出来ない。

そこへ――。

「――その役目、我々が引き受けよう」

その口調は横柄なものだった。

アスナは声の主へと身体を向ける。

かなりの長身で筋肉質。見た目は三十代前半くらいで、ごく短い髪に角ばった顔立ち。太い眉の下の眼は少女を見下すような眼で睨みつけている。

男性――コーバッツは人を不快にさせる口調のまま続ける。

「貴様達は先へ進み、茅場を倒せ」

「貴様達、つて……」

「決まっている――アクセルワールド加速世界だ」

アスナの問いに、コーバッツは簡潔に言う。

それから淡白な口調で、視線をモンスターキラーの群れに向けたまま続ける。

「貴様もそれでいいな、血盟騎士団副団長ディアベル」

「ああ。オレもそう考えていたけど、まさか君の口から聞くとは思わなかったな」

「うるさい。さっさと部下たちに指示を出せ」

自分からの提案であるが表情は不服のまま、その言葉も不承といった調子でコーバッツは行動に移す。だというのに、自ら捨て石になると提案する矛盾。

思わずアスナは問いを投げた。理解が出来ないのだ。彼女が知るコーバツツという人間はもつと自分勝手な人間の筈だ。初対面のときから、横暴なまでに聖竜連合の参加に入れと言われてから、その印象は変わらない。

「どうして、ですか？」

「何がだ」

「どうして貴方が、囿役なんて……」

「決まっている。この場において、貴様達が一番強いからだ」

簡単に、振り返らないまま、コーバツツは続けた。

「私は貴様達が気に入らない。誰一人思い通りにならない貴様達、アクセルワールド加速世界が気に入らない」

だが、と言葉を区切り無然とした態度で言う。

「この場で、貴様達は誰よりも強い。『アインクラッドの恐怖』と『はじまりの英雄』は我々を救い、貴様に至っては臆することなく絶望していた我々に指示を出していた」

それだけ言うと、コーバツツはようやくアスナへ身体を振り向かせた。

見下ろしたまま、敵愾心をその瞳に宿しながら重々しく口を開く。

「我々は一度心が折れていた。聖竜連合も血盟騎士団も全員だ。なのに貴様達は、アクセルワールド加速世界は希望を捨てなかった。これを強いと称さずして何という？」

「コーバツツさん……」

フン、と面白くなさそうに鼻を鳴らすとコーバツツは大声で聖竜連

合に指示を飛ばした。

その声はアスナとは違い、凜とした言葉ではない。もつと荒々しく、力強い身体の芯に訴える言葉であった。

「聞け、聖竜連合よ！ これより我々は、一時的に加速世界アクセルワールドの傘下に加わり、彼らの援護を行う！ 加速世界アクセルワールドの血となり肉となれ！ 彼らを

必ず五体満足で、茅場のもとにたどり着かせることを考えよ！」

「聞いたな、血盟騎士団！ オレ達もこれよりは、加速世界アクセルワールドの幕下に加わる！ これから先は、オレ達が彼らの剣となろう！ 彼らの敵を切り裂き、道を作れ！ 彼らこそ、オレ達の。アインクラッドにいる全プレイヤーの希望だ！」

コーバツとディアベルの二人が拳を振り上げる。

続くは攻略組による鬨。士気を高めるように、力一杯発生される声は迷宮区一階を揺らし、空気を灼熱の熱気に変えて、大地を揺らしていく。

モンスターキラーの威嚇の比ではない。それ以上の声が、感情が、何よりも絶対的な意思が宿っていた。

「——おい、どうなっている？」

ザザザザ、と音を立てて砂塵を巻き起こしながら跳躍し着地しながら事情を知らないユーキは問いを投げた。

右手には愛剣、左手にはユウキを抱えている。どうやら突然の鬨の声にモンスターキラーが怯み、その隙について後退してきたようだ。

「説明は途中でするよ。今はとにかく二階へ！」

「あ？ それはどう言う——」

『『アインクラッドの恐怖』！』

切羽詰まった調子で言うアスナに、怪訝そうな顔でユーキは妹を下

ろしながら問いを投げる。

そこへコーバツツが遮るように割って入った。

そのままコーバツツは視線をモンスターキラーの群れに向けたまま。

「我々、攻略組はアインクラッドに生き残っている全プレイヤーの希望だ。我々に戦えない者達は望みを託し、現実世界に帰還できる日を待ち望んでいる」

「……ああ。だがそれは間違えじゃねえだろ。戦えないのなら仕方ない、人には向き不向きがあるんだからな」

「無論だ、間違えではない。だからこそ、忘れるな。我々は戦えない者達にとつての希望であるのだ」

それは暗に語っていた。

貴様がケジメをつけろ、と。フロアボスを単騎で打倒することが出来る、出来てしまうということを実を成し遂げてしまった貴様がケジメをつけろと。中途半端に希望を抱かせたのだから、貴様が後始末しろ。と、コーバツツは暗に語る。

異論はない。

自分勝手に突っ走った結果、戦えないプレイヤー達は希望を持ってしまった。『アインクラッドの恐怖』という正体不明の怪物に、フロアボスを単独で撃破出来てしまう化物に幻想を抱いてしまっていた。そのケジメは取らなければならない。

幻想は現実に変えなければならない。何よりも茅場晶彦の身内として、この仮想世界から全員を現実世界に帰さなければならない。身内の後始末は身内でつけるのが道理である。

異論など、なかった。

これから血盟騎士団と聖竜連合が何をするのか、説明はない。だが何となく、ユーキは理解するとぶっきらぼうに一言。

「――必ず生き残れ。テメエに借りを作つたまま返せないのは癪

だ」

「当然だ。私もこのような場所死ぬつもりはない」

お互いに相手を気遣うモノではない。

だがそれでいい。二人にとつてそれで充分だった。馴れ合うつもりもない、仲を深めるつもりもない。自分に今できる最善のことを、やるだけだ。

ユーキとコーバツツ。二人は駆け出す。

お互い、振り返らないまま――。

第18話 希望の背を守る者達

2024年1月31日 PM 21:05

第一層迷宮区 十八階

攻略開始から三時間は経過していた。

物事は作戦通りに進んでいる。各階に殿を配置し、上の階層にフロアボス達を進ませないようにする。あまりにも無謀な作戦だ。正に捨て石といって過言ではない。何せ相手はフロアボスだ。数十人で攻略するのがやっとな化物が何体も各階層に配置され、足止めをしなければならぬ。それを無謀と言わずしてなんとさえいえるのだろうか。

だが早々に破綻しかねない作戦が順調通り進んでいるのは、一重に命をかけて、文字通り身を削っているからだ。

聖竜連合も血盟騎士団も自分達が出来る最大限の力を用いて、団結して自分達の希望を——アクセルワールド加速世界守ろうと必死に足掻く。

今にして思えば、彼らのが真に団結して攻略したのは初めてなのかもしれない。これまでフロアボスを討伐する際には協力してきた。だがそれだけだ。フロアボス攻略するまでの過程で、助け合ったことなど一切ない。血盟騎士団は血盟騎士団で、聖竜連合は聖竜連合で戦力を整えてフロアボスという本番に臨んできた。

まるで二つのギルドは国だ。

反目し合ったまま、最低限戦争しないために暗黙で不可侵条約を結んでいるだけの関係に過ぎなかった。連携などとれるわけがなく、横のつながりなど存在するわけがない。二つのギルドは平行線のまま、攻略するのだろうかと思っていた。

それが今。

最大と最強は手を組み、自分達以外のギルドの後押しをする。

アクセルワールド矜持があつた筈だ、自負があつた筈だ。それらを投げ捨ててまで、加速世界に希望を託す。

—— 凄い、本当に凄い。

—— 誰もが、この世界中が君たちに希望を託している……！！

月夜の黒猫団リーダーであるケイタは素直に感銘を受けていた。

アクセルワールド 加速世界、風林火山、月夜の黒猫団、そして斧使いのエギルは十八階を走破していく。

彼らの間に会話などない。無駄口を叩く暇があるのなら、早々に上の階層に向かうという意志が感じられる。

その先頭にはキリトとユークィが並走している。

振り向くことなく、彼らもまた自分に出来る最善を行おうとしている。

その二人の背中を捉えて、ケイタは思い出していた。

—— 二人に助けられてから随分と経つ。

—— 『恐怖』に救われて、『英雄』に見守られてきた。

以前に、キリトに言った言葉を思い出す。

アクセルワールド 加速世界に自分は憧れている、と。アインクラッドに囚われているプレイヤールの希望である彼らに、ケイタは憧れていた。

キリトは真っ先に否定したが、ケイタの中での憧憬は少しも陰ることはなかった。

誰よりも前を向いて、誰よりも希望に溢れている。それがケイタから見たアクセルワールド 加速世界というギルドであるのだから。

だからこそ、ケイタは努力をした。

自分も、月夜の黒猫団も彼らのようなギルドになりたいと、彼と気持ちと同じ仲間達は努力を怠らず、研鑽を積んできた。

その結果、月夜の黒猫団は見事に攻略組になった。サチにアイテム管理などの裏方を任せて、ケイタとテツオがタンクに、ササマルがダメージデーター、ダツカーがトドメをさす。連携だけで言えば、他のギルドにも負けないという自信があった。それだけの努力を積ん

できたのだから、その自信も当然のものだ。

だと言うのに、ケイタの心は晴れない。

望み通り、希望通り、攻略組になったというのに気持ちにしこりが残っていた。

——満足、つていうのかな。

——何か違ったんだ。

——でもそれも、今日ようやくわかった。

——僕が本当に、やりたかったこと。

それが何なのか自覚すると、自然と両手を握り締めていた。すると。

「見えたぞ、上の続く階段だ！」

エギルが言うや否や、彼らの背後に衝撃が走る。

地響きがなり、石造りの床が粉々に砕けて、遅れて獣ような雄叫びが木霊した。

一同は振り返る。

そこに君臨していたのは『イルフアング・ザ・コボルドロード』『ザ・ダイアータスク』の二体だった。いいや、それだけではない。その背後に遅れて数体のフロアボスの姿も確認出来る。

絶体絶命。

ここで引くことも出来ない、ただ進むのみだ。

だというのに彼らは立ち止まり、振り向き化け物達に向かって一歩前に進み出る。それこそが月夜の黒猫団であり、風林火山であり、エギルでもあった。

焦燥する様子もなく、ケイタは目の前の勝ち目のない光景を見て、平静を保ったまま口を開く。

「正直言うとな、僕はキリトに憧れてたんだ」

「ケイタ……?」

バツの悪そうにするキリトへ振り返り、ケイタは笑顔で己の信条を吐露し始める。

「君はモンスターキラーを倒して、全てのプレイヤー達に希望を与えた。僕もその中の一人だ。僕も君みたいになれたらな、って思っていた」

「……俺はそんな大層な人間じゃない。どこにでもいる、ただの人間だ。希望を与えられるような、立派な人間じゃない」

「それでもだよ。僕の中では『はじまりの英雄』も『アインクラッドの恐怖』もヒーローなんだ」

でも、と言葉を区切り、自分の獲物である長棍を実体化させる。両腕に持ち、化物達に穂先を向けて堂々とケイタは告げた。

「今日で、一方的な憧れはおしまい！ 君達の背中は僕が守るよ」

そこで初めて、ケイタは振り返った。

人の良い笑顔で、されどその笑みの中では確固たる意思を宿して続ける。

「だからねキリト、そんな顔しないで。僕はね、嬉しいんだ。君達力になれて、凄く嬉しいんだ。これが本当の意味で、僕がやりたかったことだから」

「そうそう、そんな顔すんなよキリト」

「クライン……」

ヘラヘラと笑いながら気安い口調で言うクラインに、キリトは晴れることのない表情で顔を向けて直ぐに顔を俯かせた。

謝らなければならぬことがある、ずっと後悔していたことがあ

る。言葉にしようとするのと胸が締め付けられて、声に出そうとする
喉が詰まりそうになる。

だがここでしかない、とキリトは意を決して震える声を抑えること
なく言った。

「クライン、ごめん。俺あの時、お前を置いていつて——」

「——おう、許さねえぞ」

「……そう、だよな」

ギョツと唇を噛みしめ、双眸が涙で潤んでいく。

当たり前だ。それだけのことを、自分はクラインにした。拒絶され
るのも無理はない、とキリトは理解していた。顔を俯かせて、必死に
泣くまいと我慢する。

だが。

「えっ？」

ズシツ、と。

肩に何かが乗りかかる衝撃が走り、顔を横に向いた。

そこには笑顔のクラインがいた。気持ちの良い笑顔を浮かべる彼
は、そのままキリトに極めて明るい口調で言う。

「許さねえからよ、生き残ったらキリの字の妹を紹介しろい」

その言葉に眼を丸くさせて。

「く、ふふ、ははははっ！」

キリトは笑みを零す。

この男はいつもそうだった。道化のように振る舞い、周りの雰囲気
を和らげていく。

クラインの反応から察するに、特に気にしてないのだろう。だが彼は、敢えてこれからの未来の話をする。それはエールだった、絶対生き残ってここから抜け出そうという彼なりのエールだった。

悪友はいつもの調子で振る舞うのなら、自分もいつもの調子で振るわねばならない。

キリトはニツコリ満面の笑みで。

「絶対に嫌だ」

「……地味に笑顔で拒否るとか酷くね？」

なあ？ とクラインはキリトから離れて、ケイタに同意を求めるも困ったような乾いた笑みで返されるのみ。

これから決死の足止めをするとは思えない空気だ。その空気を壊さないように、キリトは二人に拳を突き出して――。

「二人とも、絶対に生き残るぞ」

「おう！」

「もちろんだよ！」

――三人は、拳を合わせた。

「そういう訳だ。お前達は先に行け」

横目で三人のやり取りを見ていたエギルは、斧を実体化させて気楽な口調で振り向かずに告げた。

肩に大きな斧を担ぐ後ろ姿はある意味絵になっていた。頼り甲斐があるといっても過言ではない大きな背中を眼にしても、ユーキの表情は晴れない。

「ドリユーくん、オレは……」

「何度も言ってるんだろ」

そう言うと、エギルは振り向いてビシツと親指を自分の方へ指して力強く言う。

「今の俺はエギル。もう一人の自分、素敵な自分、俺は斧使いのエギル！」

「……変わらねえな、アンタは」

この局面で悲壮感を出さないエギルにユーキは苦笑を持って応じて、満面の笑みエギルは言う。

「そんな顔をするな。ほら、一度でもいいから笑顔を見せろよ」

「ふざけんなよ。絶対にやだ」

「おつ、いいぞ。調子が出てきたな」

満足気に数回頷いて、再び後方へと身体を向けて。

「俺のことは心配するな。こんなところで死ぬつもりはないからな」

口調は明るいものであるが、言葉の節々には確固たる意思が感じられていた。

「俺は絶対に日常に戻るんだ、何気なくも暖かい日常に戻る。その中にはかみさん、レベツカ、そしてお前とアスナもいる。だからユーキ、お前も必ず生き残れ」

含みのある言い方だった。

まるでこれからユーキのすることを見透かしたような、ユーキの願

いを熟知しているかのような言い方。

隠していたわけではない。だがエギルの言葉は虚をつくものだったようで、ユーキは目を丸くさせて思わず問いを投げる。

「知ってたのか……？」

「ばーか。長い付き合いだ、お前さんの考えなんて何となくわかる」

ハハツ、と居丈高が笑みを零して、ユーキに言い聞かせるように続ける。

「いいか、自分を犠牲にしようなんて考えるなよ。お前さんはそういう傾向が強い。自己犠牲も立派かもしれんが限度がある。俺も他の連中も、お前を犠牲にして現実世界に戻るなら、ここにいた方がマシだからな」

「……ああ、わかってるよ」

「わかってんならいい。その辺りはアスナがすっかり教育してそうだしな」

ユーキは「うるせえよ」と静かにそう言うと、エギルから背を向ける。

視線の先には上へと続く階段。十九階へと続き、最上階には全ての元凶が待っている。

だが足取りは重い。一步簡単な一步されど一步、どう言うわけかその一步が踏み出せない。見知った人間を残していいものなのか、ユーキの中で葛藤が起ころうとしていた。

「行って来い——！」

バチン、と背中を思いつきりエギルが叩く。

力強いものだった。とても常人では出ない威力に、ユーキの身体がはじき出される。

心配するな、と鼓舞するかのようだ。現にそのつもりだったのだろ。エギルはニカつと気持ちの良い笑みを浮かべて、ユーキ本人も彼の気持ちを受け止めて口元を緩めていた。

力強く送り出され、そのままユーキは駆け出す。

余計なことを、と悪態ついたまま粗暴な調子でいつもどおり――

「ああ、行って来るぜクソ店主――！」

第19話 炎を絶やすことなく

2024年1月31日 PM 21:45

第一層迷宮区 十九階

ユイの情報通り、十九階にフロアボスは存在しなかった。

不気味なほど静寂で、不思議なほど閑散としており、そして——
——違和感を覚えるほど何もなかった。

先頭を駆けているユーキは周囲に対する警戒を怠らない。慢心なく油断せずに、いつ奇襲されても対応できるくらいには神経を過敏に張り巡らせる。

疑っているわけではない。ユイが十九階には何もないというのであれば、その通りなのだろう。だが念には念を入れておいて損はない筈だ。何よりも相手が茅場晶彦だ。人の見識では見通せない視点をもち、誰にも追いつけない知識を有している怪物だ。それが誰よりもわかっているユーキだからこそ、警戒を怠らない。あの男ならば、人間の頭脳を上回るAIですら出し抜ける筈、という確信がある。

「静かだな」

ユーキの隣から声が聞こえた。

その声の主はユーキの方を見ずに、前だけを向いて駆けている。ならばユーキも同じように前方だけに視線を向けて、肩を並べている黒い少年——キリトに向かって不機嫌な調子で応じた。

「ああ、鬱陶しいくらいにな。あの野郎、これ見よがしに静寂を保つてやがる……」

「……何かあると思うか？」

その「何か」という意味は様々な意味が込められていた。

奇襲、分断、罨、強襲。ありとあらゆる可能性を模索し、ありとあらゆる可能性を考えて何か、とキリトは曖昧に称す。

キリトの声色に不安といったモノはない。

恐らく彼もユーキと同じ考えに至っているのだろう。故に、ユーキは敢えて口にした。キツパリと斬り捨てるように、希望など持たせないように断ずる。

「あるに決まってる」

「やつぱりか？」

「決まってる、野郎は茅場晶彦だ。オレ達には考えもつかないことを、野郎はやる、必ずやる、絶対にやる。やれるほどの知識と技術もある」
「……よく、わかってるんだな。茅場のこと」

だけど、とキリトは言葉を区切り事実だけ述べた。

「お前はヒースクリフのことを、まったく知らない」

妙な口ぶりだった。

茅場晶彦とヒースクリフ、両名は同一人物である。それは疑いようがなく、正真正銘同一人物と断言できる。何せ本人が語ったのだ、疑いようがないだろう。

だがキリトの口調は妙なもの。まるで、ヒースクリフというプレイヤーと茅場晶彦という人間は異なる存在とでも言うかのようなだ。

ユーキの表情が訝しむそれに変わり問おうと口を開きかけるが、その前にキリトは続けて言った。

「お前はアイツと一緒に戦ったことがないからピンと来ないかもしれないけど、ヒースクリフってやつは別次元の強さを持っている。洞察力、判断力、精神力、そして剣術。この世界のプレイヤーから頭が一つも二つも抜き出ている」

「……オレやオマエよりもか？」

「ああ、強い。一対一じゃ分が悪いだろうな」

第一層から、ユーキは鍛錬と研鑽を重ねてきた。

ときにモンスターを相手に経験値を稼ぎ、ときに自己を鍛えるために何万回と剣を振るってきた。

怠ることなく、休むことなく、鍛え上げてきたつもりだ。剣術では一歩遅れは取るものの、こと何でもありの戦闘においては負けるつもりはない。それだけ言い切れるほどの努力を重ねてきたつもりだった。

キリトも同じだ。

ユーキが知る中で、彼よりも強いプレイヤーは存在しない。

一つも見逃さない洞察力、相手の動きに後出して追いつける神速の反応速度、非凡なる剣術から二刀の怒涛の攻め。戦闘のセンスだけで言えば、キリトというプレイヤーは飛び抜けた存在だ。

そんな自分達が戦っても分が悪いという。

冗談ではなく、それが真実というのであれば充分脅威と呼べるだろう。

「アイツは硬い、何よりも硬い。フロアボス攻略のときだって、ヒースクリフのHPバーがレッドはおろかイエローになることすらなかった。毎回ズタボロになるお前とは真逆だな」

「それは嫌味と捉えていいんだよなあ？」

事実だろ、と軽い口調で答えるキリトに、ユーキは小さく舌打ちで応じた。

確かにそう言う意味では真逆なのだろう。

何せユーキが戦い、終る頃には必ずと言ってもいいほどボロボロになっている。何度のアスナに叱られ、ユウキに泣かれていた。

改める気などなかった。生きるという意思は、以前よりも備わっている。こんなところでは死ねないと、自分のような人間を助けてくれた三人に合わせる顔がない、その為にも生きなければならぬという

意思がある。だが生憎と、ユーキはこのような戦い方しか知らない。自信の命すら投げ捨て、文字通り身を削るような戦闘手段。それしかユーキは知らず、命を賭け身を削り死にかけて漸くキリトやアスナといった攻略組と肩を並べることが出来る。

剣術のセンスだけで言えば凡夫のソレだ。いや、それ以下と言つても過言ではない。

対してヒースクリフは何もかもを持っている。

常に余裕を保てる実力があり、人を率いるカリスマ性、何もかもを見通す洞察力も備わっている。足りないものだらけのユーキとは違い、彼には足りないものなどない。

そんなことは、ユーキ本人が一番理解している。

十数年彼の怪物ぶりを間近に見てきた。別次元の強さと言われても、今更驚きなどしなかった。

それよりもユーキは注目すべき点があった。

「ンで今そんなことを話す？」

「そんなことって？」

「あの野郎のことだ。アイツが強いつてことはよく知ってる。だがどうして今なんだ？」

確認するように、改めて告げるキリトにユーキは違和感を覚えていた。

目と鼻の先に最上階へと続く階段がある。だというのにも関わらずキリトの口ぶりにはまるで「自分が行けない」とでも言うかのような、己を勘定に入れていない忠告であった。

ユーキの問いに対して、重苦しい口調でキリトは口を開いた。

「——嫌な予感がするんだよ」

「なに……？」

それはどういう類のものだ、と尋ねる前に最上階へと続く広場へと

躍り出た。

広場は今までの階層と何ら変わりない。ドーム状の石造り。壁には松明が立て掛けられており、それが証明代わりとなっている。一階から十八階まで、変わらないデザイン。だが奇妙なオブジェが存在する。

それは中央。ユーキ達の視線の先にそれは確かにあった。

全長数十メートル程ある球体。

鉄作りの表面には斬り傷や欠損といった生々しい傷跡が存在する。

それに見覚えがある、対峙したことがあり、相對したことがある。球体はオブジェなどではなかった。それは第五十層で見た怪物――

――『チエンレジー・ザ・ゴッド』の生首――。

「な、なによ……あれ……」

凄惨な光景を目の辺りにして、ユーキとキリトの背後でリズベットが声を震わせながらポツリと呟いた。

無理もない。『チエンレジー・ザ・ゴッド』は巨大とは言え人型のフロアボスだ。人ではないとはいはいえ、存在しない筈のフロアボスの頭部がその場に転がっているのはショッキングなものだろう。

衝撃を受けているのはリズベットだけではない。アスナは両手で口元を抑えて声を失っており、ユウキは眼を丸くして思考が追いついていない。

その中で――。

「ユイ」

「は、はいですー!」

キリトは極めて冷静な口調で、ユイに問いを投げる。

「この階層には何も無い筈なんだよな?」

「そ、その筈です。少なくとも、私がサーチした時には何もありません

でした。だけど……」

そこまで言うと、ユイが言い淀んだ。

攻略組が一階でモンスターキラーの大群から奇襲を受けた時には、『チェンレジー・ザ・ゴッド』の存在は迷宮区から消えていたことになる。

それはつまり——。

「ハッ、簡単なことじゃねえか」

ユーキの口元を不敵な笑みに歪み、腰に刺さっている鞘から両手剣を勢いよく抜き去り事実だけを続ける。

「攻略組は18時まで迷宮区に入らなかった。情報屋連中も一階で引き返した。つーことはよオ————攻略組以外の人間が、この迷宮区に入り込んでたつてことだろ？」

告げながら勢いよく、未だにこの世界に留まり続けている『チェンレジー・ザ・ゴッド』の生首に片手で持っている両手剣の剣先を向けた。

本来ならば存在しないフロアボスの亡骸と化した頭部の影から、ぽつり、ぽつりと、人影が現れ始めた。

まるで際限なく増える病原菌のように、数が増えるに従って徐々に増えていく。その様子は正に倍々ゲーム。一人増えれば二人に増え、二人に増えれば四人に増えていく。最終的に————五十人程にまで膨れ上がっていた。

その異様な光景を前にして、退屈そうな口調でユーキは口を開く。

「塵も積もれば何とやら。あの時叩き潰してやったのに、懲りねえクソ虫共だな」

「ユーキくん、あの人達……」

「ああ。本当に下らねえ連中だ」

アスナが警戒心を露わに現れた人影達に指差し、彼女が何を言わんとしているのか理解しながらユーキは肯定する。

彼らは様々な種類の人間で構成されていた。

サラリーマンのような風貌の中年から、裏路地で見かけるようなチンピラ。不健康そうな痩せ細った女子高校生から、肥満体型な青年といったようにかなり幅広い人種だ。

だが共通点は存在する。

全員が全員、身体に掘られているタトゥー。それは防具であつたり、武器であつたり、身体に直接刻まれていたりと多様だ。

しかしエンブレム自体は同じもの。漆黒の棺桶、その蓋には小馬鹿にするような笑みを浮かべる両眼と口、ズレた棺桶からは白い手が伸びている、誰が見ても不気味に見えるタトゥー。そして極めつけは――

――全員の頭上のカーソルがオレンジ。

もはや疑う余地などない。

彼らは――ラフイン・コフイン 笑う棺桶。

かつてアインクラッドの恐怖に壊滅された最凶最悪の殺人ギルドが、堂々と加速世界と真正面から相對していた。

「俺達に協力しに来た、ってわけでもものなさそうだな……」

いつでも動けるように神経を研ぎ澄ませて、キリトは呟いた。

ラフイン・コフイン 笑う棺桶がこの場において、『チエンレジー・ザ・ゴッド』の亡骸が存在することを考えて、屠つたのは笑う棺桶であることは想像が出来る。

だが目的が読めない。何のために彼らはここまで訪れて、茅場晶彦の元へ向かわずにここに留まっていたのか。その疑問も、直ぐに晴れることとなる。

「――待って、いたぞ。はじまりの英雄……」

その声は暗いものだった。

憤怒、憎悪、羨望、嫉妬、呪詛。ありとあらゆる負の感情をぐちゃ混ぜにしたかのような声色。

声の主は片手にエストックを持ち、赤い眼の眼光がキリトを映し出していた。むしろ彼は、キリトしか視界に映していないのだろう。それ以外は不要なものとして視界の隅に追いやり、はじまりの英雄のみに執着する。

彼——赤眼のザザは殺意と殺気を言葉と視線に乗せながら続ける。

「お前は、必ず殺す。オレが、殺す。絶対に、殺す……」

「おいおい、なんだそりや。つまらねえ三流かと思いきや、面白い冗談をぶつ込むじゃねえか。ツボるところだったわ」

両手剣を片手担ぎ直して、ユーキが口を開いていた。

確かに笑みを浮かべている。しかしその笑みは微笑むといったものではなく、非常に攻撃的なものだ。肉食生物が獲物を見つけたように、己の牙を剥くようにユーキは笑みを浮かべる。

獲物達はその笑顔に対して、僅かに一歩後ろに下がる。

ラフィン・コフィン

笑う棺桶にとって、アインクラッドの恐怖はトラウマと言っても良い。理不尽な暴力を叩きつけられて、手も足も出なかった怪物。

なんてことはない、一度叩き潰した連中だ。ユーキは油断することなく、侮蔑と蔑みを言葉に混じらせながら続ける。

「テメエらのような塵屑はオレ一人で充分だ」

「どうするつもりだ？」

キリトの問いに、ユーキは視線を笑う棺桶ラフィン・コフィンに向けたまま、軽い調子で答える。

「決まってるんだろ。一度叩き潰したんだ、もう一度オレが叩き潰す。オマエらは先に行ってる」

「いいや、お前がする相手はこいつらじゃない」

それだけ言うと、キリトは背から二対の直剣を勢いよく抜き去る。そしてユーキの一步先へ進み。

「お前が相手をするのはヒースクリフだ。こいつらの相手は俺がやるよ」

「……おい、何を勝手言ってるやがる」

「勝手じゃないさ。指名されたのは俺だ」

「わかってんのか、オマエ。連中はフロアボスじゃねえ、人間だ」

「見ればわかるさ」

即答するキリトに、思わずユーキの顔が僅かに顰め声を荒げた。

「わかってねえだろ！ いいか？ あの連中は、オレ達が手こずったフロアボス一体を殺ったんだ。レベル差なんてあつてないようなもんだ。もしかしたら、返り討ちにされるかもしれないぞ！」

自分達では倒しきれなかった『チェンレジー・ザ・ゴッド』を屠つた笑う棺桶と対峙するということはそういうことだった。

一階から十八階を跋扈するフロアボスを相手に時間を稼ぎする状況とはわけが違う。フロアボスと違って、彼らは学習する人間だ。こちらの意図など読み取り、それなりの戦法を取るのだらう。そうなるってしまえば多勢に無勢、最悪ゲームオーバーとなり命を散らせる可能性すらありえる。

キリトも分かっているはずだ。

だがそれでも、彼の視線は笑う棺桶ラフイン・コフインに向けられたまま揺らぐことなく。

「ああ、わかつてるさ」

「オマエ、いい加減に——！」

ユーキの腕が伸びる。キリトの肩を掴みかかろうと、伸ばすもすんでのところで停止した。

少年が目を見開くのも無理はない。キリトだけではないのだ。
ライン・コライン
笑う棺桶と対峙するように一歩踏み出している者は、キリトだけではない——
アクセルワールド
加速世界全員がキリトと肩を並べて立ち塞がっていた。

「オマエらは、何をしてる……？？」

「ここは俺達が引き受けた。正直な話、俺も剣士としてヒースクリフと戦ってみたかったけどさ、今回の主役は誰でもないお前だ。ヒースクリフもそれを望んでいる」

拗ねた調子で呟き、キリトは明るい口調で続けて。

「まあ、ヒースクリフを倒したお前を倒せば、プラマイゼロになるしな」

「……どこをどう計算したら、プラマイゼロになってるのよ」

謎理論を展開するキリトに、呆れながらリズベットは首を横に振って。

「そういうことだから。アンタはさっさと上に行つて、叔父さんをボコつて止めて来なさいよ。あたし達はあのアンポンタン達をボコつてるから」

「私も、サポートします！」

メイス右手に持ちながら肩を軽く回すリズベットに対して、ユイはやる気満々に声を張り上げた。

緊張感が足りてない、わけではないのだろう。これまで殿を務めてきた攻略組のように、弱音を飲み込み、何もかもを決意して、こうして立ち塞がっているのだろう。

全ては自分達の希望のために、クリアして現実世界に帰還するために、捨て石になる覚悟を固める。

「うん、にーちゃんは先に行つて。晶彦さんを止めて。にーちゃんにしたら、それが出来るよ」

「……オレがいなくても、やれるのか？」

「正直言うとね、不安なんだ……」

ハハハツ、と力なく笑みを零すユウキは振り返り兄に近づく。そして、見上げながら。

「だからね、にーちゃんの力別けて欲しいんだ」

「何をすればいいんだ？」

「頭、撫でてほしいな……」

ダメ？と不安そうに首を傾げる妹を、拒否する理由などなかった。

ユーキは無言で、本当に心配そうな眼で妹を撫でる。壊れ物を扱うように、極めて優しく、宝物を扱うように撫でる。

ユウキは目を細めて、気持ちよさそうにその好意を甘んじて受け入れていた。

出来ることならずつとされていたい、こうして兄に触れていて欲しい。だがそれは叶わない望み。これ以上、兄を心配かけまいと自分から離れて、再び笑う棺桶ラフィン・コフィンに目を向けて。

「——ありがとう、にーちゃん。もう、大丈夫だよ。ここはボク達が引き受ける」

もはや何を言っても無駄だろう。

アクセルワールド
何せ彼ら加速世界は己の主張を曲げない。誰一人妥協することなく、ここまでやって来た。一人で突き進むユーキに追いついてきた連中だ。意地でも動かないことだろう。

そんなこと、ユーキ本人が一番よく理解している。

彼らが諦めず、見捨てることをせずに、追いついてきたからこそ、今のユーキが存在するのだから。

一人が振り返る。

誰よりもユーキの近くにおいて、誰よりもユーキを理解し、誰よりも強くなった幼馴染が口を開いた。

「——優希くん」

「——明日奈」

両者が見つめ合ったのは数秒。僅かな沈黙だった。交わした言葉はない。ユーキは真っ直ぐにアスナを見つめて、アスナも視線を逸らすことなくユーキを見つめる。

「——いってらっしゃい」

「——ああ、行ってくる」

言葉など不要だった。そんなもの、必要などなかった。

一度の視線で事が足りる。幾千幾万のやり取りよりも、唯の一度の視線で、今回は事が足りた。

ユーキは駆け出す。

何もかもを終わらせるために。何もかもを始めるために。

少年は、真っ直ぐに、駆け出した——。

第20話 茅場の望み

——人とは、好奇心の塊である。

どの分野においても、好奇心は共通していた。

例えばスポーツ。この技を身に着けたらどんな事が出来るだろうか。

例えば戦争。この武器を手に入ればどんな戦略が取れるだろうか。

例えばゲーム。このアイテムを使えばどんな光景がみれるだろうか。

何かが出来るのであれば、それを試さずにはいられない。それが良いことだろうが、悪しきことだろうが変わらない。人は試さずにはいられない生き物だ。

故に、好奇心とは時に恐ろしい怪物になる。

好奇心とはありとあらゆる分野において共通した感情であり、どんな悪魔にもなれる怪物といえるだろう。

それは人の歴史が語っている。

原始では石や岩で創造した斧、槍で主に狩りを行っていた。

それがどうだ。もつとより良い生活を求めて“火”を使い始め、いつしか人は精錬を覚え始める。

それから石ではなく鉄へ。石で造るのではなく、鉄で武器を作り始める。いつしか獣から人間へと向ける相手を変化していった。

武器も変化する。

剣から間合いが広い槍へ。槍から簡単に殺せる銃へ。その銃すらも現代では改良され続けている。

それもこれも、人の好奇心によるものだろう。

今よりもより良いモノを作り、どれだけ便利になったのか試さずにはいられない。

そうやって人間は今日まで発展し続けていた。古代では魔法と呼ばれていた超常現象も、今となっては立派な科学となってしまうてい

る現代を顧みても、人間の好奇心には目を見張るモノがある。

目の前の課題を達成して、次の課題を見つける。そして新しい課題を達成し、また新しい課題を見つける。その連続の繰り返しだ。そう言う意味では、人間とは際限がない生き物といえる。

何かを求めているものの、決して埋まることのない好奇心の塊にして、致命的な欠陥を抱えている生体。それが、人間だ。

そう言う意味では、私は人間らしいと言えるだろう。

誰よりも愚かで、誰よりも愚者であると、私は自覚していた。それは子供の頃から変わらなかった。

物心がつく頃から夢想していた光景を実現するために、私は一歩一歩動に移っていた。ここではないどこかへ、空に浮かぶ鉄の城を行くためにどうすればいいのか。その考えだけに取り憑かれていた。

もちろん、現実でそんな城などないことなど理解している。ないのであれば、創るしかないだろう。偽物ではない、まるで本物のような世界を創り、私自身が夢見た世界を創造するしかない。

普通に考えれば、そんなこと出来る筈がない。常人であれば諦め、また違う目的を見つけるのだろう。しかし私は、愚かという点においても常人の遥か上を行っていた。

諦めず、唯一の欲求を満たそうと私は努力を続けた。VRを思いっこのたのはこの頃だ。

仮想を現実にするために、私の探求は続く。より良いリアルな感触を求め、ときに大怪我をして痛覚とはどんなものか確かめることもあった。

周囲はもちろん心配する。

だがそれも、私自身の為ではない。私の才能を心配してのものだ。周囲よりも賢すぎた私はいつしか天才と呼ばれるようになり、私の周りには取り巻きの出来ていた。

私自身を慕うのではなく、私に恩を売り将来見返りを要求するための物乞いに等しい好意。それは子供から大人まで、実の肉親すら変わらない。父親と母親も蝶よ花よと私を育て、将来の為に私に恩を売り

つける。

だが、「彼」だけは違った。

一番最初に、私が大怪我したとき、「彼」だけの反応は違ったものだった。

周囲は右往左往と慌てる中、「彼」だけは私を叱りつけていた。その時だけではない。私が何か人として間違ったことをしたのなら、「彼」だけは私を殴りつける。周囲は仕方ないで済みます状況でも、「彼」だけは決してそれだけでは済まさない。

「彼」は落ちこぼれだった。

出来損ないの「彼」と、優秀な私。肉親からは不名誉な扱いを受けていた。肉親は私と「彼」を遠ざけて、交流の薄い関係にする。恐らく私が「彼」の影響を受けないようにするための策なのだろう。故に、私達の関係は浅く、「彼」は私を恨んでいると思っていた。一度だけ問うた事がある。

——何故、貴方はそこまで一生懸命に私を叱るのか、と。

彼は言った。

軽く私の頭を小突き、呆れた口調で。

「馬鹿かオマエ、一生懸命になるのは当たり前だろ。弟が間違った方向に進んでんなら、それをぶん殴ってでも止める。それが兄貴ってやつだろオが——」

.....

2024年1月31日 PM 21:55

第一層迷宮区 最上階

巨大な石造りの大扉をこじ開けて、ユーキは足を踏み出していた。すでに大広間に設置されている松明に火が灯っており、最奥の玉座まで見渡すことが出来ていた。

もう一度ここに来るとは、ユーキ自身も想像していなかった。

あの時のように独りで、あの時のようにこの扉を開けることになろうとは、誰が想像できるだろうか。

「――」

眼に見える景色は、何一つ変わらなかった。

大きく抉られた斬り傷、何本もある石柱も砕けている。かつて『イルファング・ザ・コボルドロード』と殺し合った光景と、何一つ変わらないモノだった。

「遅かったな、優希君」

何一つ変わらない光景、何一つ変わらない戦場跡地。だがここに一つ、変化するモノが存在する。

声は玉座から。

空虚であり、威圧するかのような声は、玉座から聴こえてきた。

かつて『イルファング・ザ・コボルドロード』が君臨していた玉座には、新しい主が腰を下ろしている。

フード付きの真紅のローブを纏った人物。

それこそが全ての元凶、茅場晶彦に他ならない。

ユーキから見た茅場の表情は読み取れない。何せフードを目深く被っており、口元しかユーキからは確認が取れなかった。

対してユーキの感情に変化はない。

静かに茅場を見つめて、不気味なほど静寂を保ちながら少年は口を

開く。

「……ここまで来る間に、引つかかっていたことがある」

「何かな？」

「広場で言っていた、アンタの言葉だ」

一方的に自身の正体を明かした数時間前の話。生き残っているプレイヤー全員を衝撃の渦に叩き起こした宣言。

あの場で茅場はユーキに言った。——キミは知っていた筈だ。キミだけは、分かっていた筈だ——と。それがどう言う意味なのか、本人達にしかわからない。

「アレは、『そういう』意味か？」

「ああ。もちろんだ、『アレ』が私の全てだよ」

事実だけ述べる茅場に、ただユーキは静かに「そうか」と呟いて腰に収めていた鞘から両手剣を引き抜いた。

その視線は真っ直ぐに、まるで一本の剣のように真っ直ぐに、そして鋭く茅場を射抜いていた。

「オレもアンタも、同じモノを見てきた。そうだな？」

「そうだ。君も私も、同じモノに対して絶望していた。だからこそ、不可解だ」

玉座から立ち上がると、ユーキに歩み寄りながら茅場は平坦な口調で続ける。

「私達は同じ結末を望んでいた筈だ。だが今は違う、今の君は私とは違うモノを、そんなものよりも先を見据えている。参考までに聞かせてくれないか、何が君を変えたのか」

対するユーキも茅場と同じように歩み寄る。

威圧することなく、平然とした調子で、コンビニに出かけるように軽い足取りで歩み、自嘲するように口元を歪めて言う。

「オレは今まで、見ないようにはしていた。『それ』が見えちまうと、前に進めなくなると思ったから。物事には始まりがあるように、終わりは必ず起きるもんだろ？ だったら最初から、抱え込まないほうが良い。オレは本気でそう思っていた」

だがそれは違う、と。

ユーキはやんわりと横に首を振り続ける。

「『それ』はな、オレの気持ちなんぞお構いなしだ。オレが止まれっ
て言っただけなのに止まらない、オレが拒否しても平気で人の心にズカズカと踏み込んでくる。本当にはた迷惑な連中だよ」

そこまで言うと、両者の足が止まった。

その距離は五十メートルほど。一呼吸置き駆ければ互いの間合いに入る、そんな距離だ。

「オレは独りじやなかった。周囲に反吐が出るお人好し共に囲まれて、そんな状況を受け入れていた。連中に囲まれていつの間にか、オレは自分の最後すら選ぶことが出来なくなっていた」

「それは何故だ？」

「アイツらはオレが傷つくと、自分が傷を負ったわけでもないのに泣きやがるし、本気でキレる。泣かれるのはゴメンだ、見てると『ここが痛む』」

ユーキは己の胸部を指差し。

「『ここ』とはつまり心。ありとあらゆる痛みなら耐えうる少年でも、それだけは耐えられない。何せ対抗手段がない。痛みなど歯を食

いしばり、我慢すれば収まることをユーキは学んでいる。
しかし心に対する痛みだけは、対抗が出来ない

「オレが変わったのだとしたら、余計なしがらみさ。アンタが抱えることがなかった余計なモノ。オレはその為に、初めて他人の為に戦う。オレはもう二度と無くさない、しがみついても守り抜く」

「……なるほど。絆、か。確かに私が手にすることがなかったモノだ」

そこまで言うと、茅場は手慣れた手付きでそして手慣れた手つきで、メインメニュー・ウィンドウを開き、更にとある画面を開きその手に自身の武器を取り出していた。

純白の巨大な十字盾、その裏側には直剣が装備されている。茅場は左手に盾、右手に直剣を握り締める。

話しは終わりである、と暗に彼は語る。

あとは剣を交えるのみ。己の目的のため、望む結末を得るために、彼は甥と戦うことを選んだ。

ユーキも応じる。

その両手に愛剣握りしめて。

「アンタの願いもわかっている、アンタが望んでいることも理解している。何せ、それはオレも望んでいたモンだ。だけどよお、ンなもん知ったことじゃない。オレはアンタを——止める」

その意味がなんなのか理解し、茅場はフードの奥で眼を丸くする。
そして直ぐに調子を取り戻し、口元を否定の意味を込めた笑みで歪めて一言。

「やってみたまえ——」

第21話 決戦 〔序〕

2024年1月31日 PM 22:45

第一層迷宮区 最上階

何合打ち合ったことか。十か、百か、それとも千か。

異なる剣、異なる剣術、異なる剣戟げ交差し辺りに響き渡った。

火花が散り、一瞬だけ目を覆いたくなるほどの閃光に周囲を包み、直ぐにその光は消えまた新しい火花が散る。

「……っ！」

「……っ！」

方や左手に大盾を、右手に直剣を。方やその両の手に剣を。

方や冷やややかな視線で猛撃を受け止めて、方や歯を食いしばりながら奮う。

まったく異なる獲物を持ち、異なる剣術の両者は、異なる表情と感情のまま剣を振るっていた。

身体の損傷も異なる。

剣術、思考、戦法、何から何まで違うのだから平等などありえない。両者は衝突を重ねる度に、戦意が削がれ、心が削られ、身体は深手を負っていく。

そして。

「……っ！」

また新しい傷痕が刻まれた。

たまらず後退した所で、脇腹に出来た傷痕を抑えて少年——
ユーキは目の前の敵を睨みつけて片膝をついてしまった。

脇腹だけではない。

その身体には大なり小なり、身体の到るところが抉られ、あらゆる

箇所には深手を負っていた。

——クソ……！！

心の中で悪態を付くも、その程度では事態は好転などしない。

刃が挟まれる寸前のところで無理やり身を捻ってやっと致命傷。何も反応出来なければ、そのまま上半身と下半身が断たれたれ、そこで自分は終わっていただろう。

わかつていた、覚悟もしていた。目の前の男——茅場晶彦は情け容赦なく、自分に刃を向けてくることくらいわかつていた。別にその点に関して、何も言うことはない。何せ相手は、そのためだけに生きてきたような者だ。今更、彼の剣が鈍ることなどありえないだろう。

ユーキが何よりも理解出来ないのは、彼の戦力に他ならない。

止めた筈の剣はすり抜けて斬られ、止められる筈のない自分の剣を容易く受け止められ、レベル差で圧倒できる筈が逆に圧倒される。

——どう言う、理屈だ……？

——レベルも、ステータスも、オレの方が上の筈だろ。

——何故オレはアイツに、手も足も出ない……？

傷だらけの己、無傷である茅場。

二人のあり方はまるで、天と地であるかのように何もかもが違うものだった。

普段であれば、直感、虫の知らせ、野生の本能、予知めいた感覚が働く。第六感とも言った説明がつかない、ユーキのみが掴める五感を超える何か働いていた。

それは先天的なものではなく後天的なもの。何度も死にかけていたからか、はたまた無茶が過ぎる鍛錬のおかげか、その感覚は研ぎ澄まされていき、いつしかユーキの直感ほんの少し未来を予測出来る程にまで鍛え上げられていた。

だがどういいうわけか、今ではその直感が湧かない。
紙一重、皮一枚で防いでこれた少年の心意以外のもう一つの武器が、まったく機能していなかった。

——オレの感覚を含めて、野郎は「読んで」やがるのか……。

——オレの動きを、剣を、呼吸を、何もかもを「読んで」丁寧に潰してやがるってことか……！

——なんてデタラメ。

と、心の中で愚痴る前に、茅場は動き出した。

無言で、冷静に、非常に、盾を構えながらユーキに向かって推進する。

当たり前だ。何せ彼とユーキでは心構えが違う。

そこに気合など必要がない、身を引き裂くような断腸の思いも必要がない。かと言って殺されるかもしれない、という恐怖すらない。もはや茅場に勝ち負けなど判りきっている、だからこそ緊張も疲労もないのだ。

そして両者、間合いに入るや否や、茅場は右手に持つ直剣を下から上へ振り上げた。

「このっ……！」

ユーキは奥歯を噛み締める。

舐められたと思った。相手は片手剣、相手は両手剣。ステータスも自分の方が上。だというのに、正面から向かって来られたのだ。この

程度で充分である、そう語るように真正面から。

苦痛を訴える身体に無理やり熱を込めて立ち上がり、両手で剣を握り締めて。

「ナメてんじゃねえぞ、ボケがア——！」

上段から下段へと、茅場の剣に合わせて振り下ろした。

その一撃はどのような相手でも屠ってきた。フロアボスから、PKを楽しむ殺人鬼も、大岩を砕き散らし、堅牢な守りに対しても突破してきた。

それにしか出来ないからこそ、それだけを極めた。それこそが、ユーキのソードスキル『カスケード』。眼にも止まらぬ速度で、振り下ろされる絶対破壊の一撃必殺。

だが相手は、常人のそれではない。

茅場は顔色を変えることなく、あまつさえ口元を小さい笑みに変えて。

「なっ……!?!」

ユーキの両手剣と茅場の直剣がかち合う直前に、茅場は自身の剣を僅かに引いた。

火花が散る。

しかしその火花は、剣と剣が衝突して生じるソレではなかった。ユーキの両手剣は茅場の直剣を伝いながら勢いを殺されながら、見事に受け流されてしまった。

そこで漸く、ユーキは理解した。

先程の行動は、本気でユーキを仕留める為のモノではなく、本気でユーキと真正面から斬り合う為のモノでもない。

全ては布石。最小限の動きで、最大限の戦果を得るための布石の他ならない。

この後の行動など目に見えている。

態勢を崩したのなら、立て直す前に打ち込むに決まっている。となれば狙うべきは――首。人間の急所であり、叩き落とせば必ず絶命する箇所。

「――っ！」

悪態を付く暇もなかった。

ユーキは無理矢理、振り下ろしていた剣を無理矢理止めて、一足で間合いを開けようと後退しようとする。

だがそれでも遅い。遥かに遅かった。

「いっ……!?!」

衝撃。

身体の右脇腹に衝撃が走り、一瞬だけ呼吸が止まる。

茅場の狙いは、首ではなかった。

彼は剣を振るわなかった。振るったのは左手に持つ大盾。それを思いっきり、ユーキに向かって殴りつける。

思っても見なかった一撃、考えても見なかった手段。ユーキは為す術なく、殴り飛ばされた。

交通事故に遭ったように、数メートルは跳ね飛ばされる。

身体は地面から離れ、地面を転がり、壁に激突してようやく停止した。

大したダメージではない。

しかし茅場の一撃は、深くユーキの心に傷をつけた。暗に彼は語ったのだ、その気になれば君は簡単に殺せる、と。茅場晶彦は暗に語ったのだ。

詰将棋のように、ユーキの攻め手を読み尽くし、緩やかに首を絞めていく。

「……」

無言でユーキは立ち上がる。

脇腹、肩口、両腕、両足。

傷口からは血ではなく、血液のような鮮紅色の光点が流れて行く。肩で息をしたまま、冷や汗を乱暴に拭う。

全身が傷だらけになることなど、ユーキにとって珍しいことではない。むしろ無傷で戦闘が終わることの方が、珍しいとも言える。

いつだって、負傷していた。死にかけることだって数え切れないほどだ。フロアボスと相對しても、殺人鬼と殺し合っても、キリトと決闘しても、ユーキが無傷で終ることなどなかった。

勝つために、負けないために、今まで剣を振るってきた。

だが今回は、今回ばかりは。

ピシリ、と確かに感じる罅。それは自分の心が欠ける音だった。

今まで感じたことのない感情。勝てるビジョンが、イメージがまったく湧かない。

分が悪いながらも勝機があった。肉を切らせて骨を断たせて、漸く勝利を掴んだ戦いなど数えきれない。ユーキの心が折れなかったのは、諦めなかったからだ。百に一つ、千に一つ、万に一つ、勝ち目が僅かでもあったから、少年はいつだって前を向き剣を握ってきた。

今回は違う。相手にはまだ余力があり、余裕もある。本気でもなければ全力を出していない。だと言うのに、こちらは本気を出しているにもかかわらず手も足も出ない。

——オレは、勝てるのか……？

——コイツにオレは、勝てるのか……？

得体の知れない感覚がユーキを揺るがし、冷や汗となってユーキの頬を伝っていく。

数手先を読み取り、着実に攻撃の手を潰していく茅場の剣は確実に、ユーキを追い詰めていった。

「やれやれ、やっと揺らいだか」

今まで無言を穿いていた茅場が口を開く。
緊張も疲労も感じ取れない口調のまま口を開いた。

「ありとあらゆる手を使い、君を追い詰めた。心理を掌握し、行動を制限し、君を追い詰めた。だが漸く揺らいだ。まったく君の諦めの悪さには呆れるな。本来であるのなら、何合か打ち合っつてわかる筈だろう」

だが、と言葉を区切り茅場は冷淡な口調で続ける。

「——これでわかっただろう」

「……っ！」

ユーキの表情は屈辱に塗れ、不甲斐ない自分を許せないというように肩を震わせる。

ソレを見ても、茅場の態度は変わらない。呆れるように、失望を含んだ声で。

「君は私には勝てない」

「……随分と調子に乗ってるじゃねえか。誰が誰に勝てないって？」

「事実だ。今の君では私には勝てない。以前の君であれば話は違おうだろう、今の君ではなく『アインクラッドの恐怖』であった君であれば」

その言葉は、確実にユーキの心臓を掴み取るモノだった。

ドクン、と一際大きな脈音が聞こえる。何も言い返せないのは、ユーキも気付いているからだ。気付いているからこそ何も言えず、凶星であるのだから否定が出来ない。

見つめることしか、出来ない。

「以前の君であれば、有無を言わずに私に斬りかかっていた。対話などすることなく、言葉など交えることなく、一切合切の躊躇もなく私を斬り捨てていた」

それは何故か？と出来の悪い生徒に問いを投げる教師のように。無論、ユーキは答えない。答えなど既に自分の中に出ているからこそ、敢えてユーキは口にしなかった。

「決まっている、私は君の敵であるからだ。自身の敵に、『アインクラッドの恐怖』は容赦しなかつただろう。だが今の君はどうだ？ 余計なしがらみのせいで、君に欠けていたモノが埋まりつつある」
「……悪いってのか？」

「とんでもない、良いことだとも。だからこそ、君は弱くなった」

ユーキを肯定しておきながら否定する。
そのまま訂正することなく、茅場は続ける。

「この戦いは最も単純だ。生存競争などといった、曖昧で善も悪もないモノではない。私が悪で、君が善だ。この立場が揺らぐことはない。決して、絶対に、不変なものだ」

事実だけ述べると、茅場は両手を広げた。

まるで歓迎するかのように、抱きしめるかのように、隙だらけの態度で茅場はユーキを迎える。

「君の敵は私なのだ。いいや君だけではない、君達の敵は私なのだ。ならば戦え、容赦などするな。拳を握りしめ、剣を握り締め、怨敵である私を殺し尽くしてみたまえ」

「やっぱりか。やっぱり、アンタの目的は……」

「そうだ。私は君達に——殺されるためにここまでやって来た」

やっぱりか、と舌打ちをするユーキに対して、茅場は薄く笑みを零す。

「システムをも超越する意思の力を観測したい、この現実のような世界を創造したい。それも理由の一つになるのだろう。しかし根底にあるのはこんなモノだ。私はただ死ぬために、この世界を創造した。死にたい理由は……君ならばわかるだろう」

「……………」

無言は肯定だった。

茅場優希と茅場晶彦の二人は、かつては同じ見解を示しており、同じ結末を望んでいた。

誰よりも得難い両親を、世界は平等に奪っていく。不平等なまでに、世界は平等に奪っていく。理不尽なまでに両親の命を奪い、理不尽なまでに自分を不幸にした世界を、理不尽なまでに呪う。

「故に、私は血盟騎士団を創設し、ありとあらゆるモノを見逃した。キリトくんの心意の発現も見逃し、君の無茶な攻略も見逃した。殺人ギルドの設立も見逃した。将来、万に一つ彼らの凶刃が私に届くとも限らないからね」

歌うように、謳うように、茅場は言葉を並べる。

呪いのように紡がれる言葉には、絶望の色が濃く見えていた。

それだけ、彼の中での優希の両親————いいや、優希の父親の存在が、茅場昭彦の兄の存在は大きかったのだろう。

一つの死で彼が絶望を抱いてしまうのほどの大きな存在だったのだろう。

気持ちには痛いほど理解できた。茅場のように独りであれば、優希も彼のように堕ちていたかもしれない。

優希が堕ちなかったのは、性根が腐っても根性がねじ曲がっても、

見捨ててくれなかった存在がいてくれたからに他ならない。幼馴染
というかけがえのない存在がいてくれたからに他ならない。

だから――。

「知ったことか」

ポツリと呟くその声は、明らかな否定。

殺せ、という願いを蹴り飛ばし、自分の主張で相手を叩き潰すよう
な強い口調で言う。

「アンタの苦労話なんて、知らねえよボケが。オレはオレのやりたい
ようにやる。いつまでも、これからも――！」

「……あくまで、君は私を殺すのではなく、止めるというのか」

明らかな失望の声。

しかし、優希の足は止まらなかった。

表情は苦痛に歪み、身体中には激痛が走り、揺らぐことがなかった
心にも罅が入っている。

それでも、それでも、止まることなど出来ない。この場で茅場を止
めるのは優希しか居らず、茅場を止めるのは身内である優希しか務ま
らないのだから――。

「本当に君は甘い。敵には苛烈である癖に、こと身内となると君は手
を緩める。だが安心すると良い――」

聞く耳など持たない。

優希は魔王めがけて飛び出した。極限まで絞られた弓から放たれ
る矢のように疾く鋭く。獣染みた速度は、一気に加速し最高速でひた
走る。

茅場は構えない。

余裕の表れなのか、これも策の一つなのか。だとしても、後退など

思考の隅にさえ存在しない。

誰よりも速く、何よりも疾く、知覚されることもなく、一撃を叩き込んで目を覚ましてやるだけだ。

その前に、茅場は発音する。

「——もう私は、君の身内などと言ったつまらないものではないのだから」

その言葉を耳に入って一瞬だけ、優希の身体が硬直した。

硬直と言っても、それは一秒にも満たない。本当に僅かなモノで、誤差の範囲と言えるだろう。

だがそれが、優希にとって致命的なモノとなる。

「あ———?」

胸部にトン、と軽い衝撃が走る。

衝撃は灼熱と変わり、灼熱は激痛へと変貌を遂げる。

ゆっくり、と。優希は視線を下方へと向ける。その胸には——
直剣が刺さっていた。

「———」

その剣は、茅場のモノ。一瞬の隙を突き、直剣を投擲したのだろう。

優希の意識が暗転する。

いかに並外れた第六感を持っていようと、狂気染みた意志力を有していようと、少年は人間だ。人間は弱く脆い。致命傷を受けて平気でいられるほど、人間は強靱に設計されていない。

膝から崩れ落ちる。

今度こそ、茅場優希の意識は、ここで途切れるのであった——

第22話 決戦 破

2024年1月31日 PM 23:10

第一層迷宮区 十九階

光があるのなら、伴うように闇も存在する——。

善を良しとする者がいるのなら、悪を是と唱える者が現れる。

物事には必ず、相反する存在が現れる。この世界において、それが
両陣営なのだろう。

希望という光を照らす——アクセルワールド 加速世界

絶望の闇へと叩き落す——ライオン・コフィン 笑う棺桶

両陣営の方針は正に、真逆と言えるものだ。

かたや見ず知らずの他人を助け尽力を尽くし、方や己の快樂のみを
優先に動く。

方向性も、信念も全く違う。両陣営が衝突するのは、宿命であつた
のかもしれない。

ライオン・コフィン 笑う棺桶の戦力は五十人程の規模。

人間として常識が欠落している殺人集団は構うことなく、アクセルワールド 加速世界
を呑み込んでいく。

いかに攻略組のトッププレイヤーが集っていると云えど、数の暴力
に勝てる道理などない——。

「——ああ、もう！ ウザったいわねえ!!」

——こともなかった。

自身めがけて襲いかかってきた凶刃をバックラーで防ぎ、リズベツ
トは悪態をついた。その表情は切羽詰まったモノではなく、どちらか
というと夏場で蚊を払うような仕草。飛び回られて鬱陶しい程度の
モノだ。

攻撃は防いだ、今度はこちらの番。そう言うかのように、もう片方

の手でメイスを持ちリズベットは振るい、一人の笑う棺桶ラフィン・コフィンの殴り飛ばす。

元々、リズベットは裏方の人間だ。仲間の武器を強化し、メンテナンスし、精製まで請け負っている。

このような戦闘はもちろん、対人戦闘など慣れていなかった。出来る限り手加減をして、そして自分もゲームオーバーにならずに立ち回る。それは戦闘に不慣れなリズベットにとって、難しいモノだった。

「リズお姉さん、後ろです！」

だからこそその奇襲。

思わず一息入れたリズベットに、背後から新しい笑う棺桶ラフィン・コフィンが襲いかかる。

ユイが慌てながら発声するも遅かった。うそつ、とリズベットは直ぐに振り返るも遅かった。何人もの笑う棺桶ラフィン・コフィンの姿がそこにあった。徒党を組んで、槍を前に全員が突撃してくる。功を競うかのように、喜々として殺しにかかる様は狂気すら感じられる。

凶刃は容赦なく、リズベットの身体を深々と傷をつけることになるだろう。——そう、彼女が一人であったのなら。

「——っ！」

ユイの声に反応し、一人の少女の髪が流れる。

最速で、最短で、最強で。リズベットの前に身体を晒し、そのまま止まることなく狂気の集団へと突貫していった。

リズベットは叫ぶ。少女の名を叫ぶも止まらなかった。数人程度なら問題はなかった。リズベットも停止を求めはしなかっただろう。一人や二人であるのなら、少女の実力を持ってすれば容易く笑う棺桶ラフィン・コフィンを叩き潰していたことだろう。

だが相手は集団。十人は超える人間が密集し、槍を突き出し突撃してきている。それは何よりも脅威となり得る光景だ。何よりもリ

チが違い、密集度が違う。このまま少女は、隙間などない槍衾に突き刺されることになる。

無謀で、あまりにも無策。

笑う棺桶達の眼にはそう映ったらしく、勝利を確信する下卑た笑みを浮かべる。

「舐め、ないで……!」

少女は不快感を露わに呟くと停止することなく、まさかの敢えて加速する。

一度地面を蹴り、二度地面を蹴り碎き、最後は勢いよく前方に向かって飛翔していた。銃弾のように、砲弾のように、彗星のように、物理法則を超越しながら加速していく。

もはや少女を視認出来る人間は、笑う棺桶には存在しなかった。見ることが出来るとしたら光。ソードスキルが発生する前段階で確認できるエフエクトのみである。

持つ剣は細剣。

純白の光が幾筋もの迸り、細剣が突き出される。

狙い所は槍の穂先。少女は細剣のソードスキルでも基本技とされている『リニア』を笑う棺桶の構えている槍の穂先へと突き出して纏めて吹き飛ばした。

その光景はさながら交通事故である。ダンプカーに轢かれたかのように、笑う棺桶は空高く弾き飛ばされ、重力に従って地面に落下していく。

人間の雨。

現実世界では直面出来ないモノを見ながらも構うことなく少女はリズベットに振り返り。

「リズ、無事!？」

「アスナあ!!」

「無事ね、よかった。油断しちや駄目よ、ユーキくんが茅場さんを倒すまでの辛抱——」

「無事ね、じゃなーい!!」

「ふえ!」

ビクツ、と。少女——アスナはリズベットの大声を予想していなかったのか、肩を大きくビクつかせた。

「な、なんでリズ怒ってるの?」

「怒るわよそりゃ! 結構な人数相手に突っ込むとか、ユーキみたいなことをアンタがするんじゃないわよ、危ないでしょ! あと助けてくれてありがとう!」

「えー、ユーキくんに似てる? そっくり? ペアルック? えへへ、そうかなあ?」

「いや、そこまで言ってないし。なんでアンタは、アイツのことになるとポンコツになるのよ……」

「あの娘達、緊張感足りてないよね?」

横目で二人のやり取りを見て、キリトは襲いかかる笑う棺桶ラフィン・コフィンを二刀流で防ぎながら蹴り飛ばした。

その言葉は誰に向けたわけでもなく、咄嗟に出してしまった言葉だ。呆れるように、ため息を吐きながら、油断することなく神経を張り巡らせる。

対峙する笑う棺桶ラフィン・コフィンは二十人はいるかもしれない。対するはキリト一人のみ、多勢に無勢とはこのことを言うのだろう。普通に考えれば勝てるわけがなかった。個人の武力など、数の暴力には無力に等しい。押し潰され粉碎され、最終的に蹂躪されるのが常識である。

だがそれでも——。

「気持ちにはわかるな―ボク」

キリトの背後から、軽い口調で独り言に応答する人間がいた。

紫色を強調した装備の少女――ユウキは背中合わせとなるようにして前方の敵を見据える。対するキリトはユウキを諭すような口ぶりで言う。

「分かっちゃ駄目だろ。多勢に無勢なんだぜ？ 俺達かなりピンチなの、わかる？」

「わかってるけどさあ。この人達、凄く弱いんだもん。にーちゃんも負けないし、あとは時間が解決してくれるって考えちゃうと、ねえ？」

それにしてもジョニーって人、何か嫌だなあ。とユウキはボヤきながらキリトから離れ、再び笑う棺桶ラフイン・コフインの輪に推進していった。

キリトは何か引っかけかりを覚えた。何か致命的な見落としをしてる気がした。

笑う棺桶ラフイン・コフインが弱い、とユウキは言った。当たり前だ、彼らがユーキに独房に入れられたのは第三十層の攻略最中のことだ。十八層で月夜の黒猫団メンバーのサチと一緒に居たところを襲われて、ユーキが加勢に訪れ連中を残さずに叩き潰した。

その辺りで彼らのレベルは止まり、キリト達は止まらなかつた。そう考えると、ステータス差は大きな開きがあるに違いない。

――俺は何を引つかかっている。

――俺は何を見落としている？

――俺は、何を……？

彼らがここにいるということは、独房エリアから抜け出したからに他ならない。

もちろん、脱走など出来る筈もない。どのようなユニークスキルを持つていようが、システム外スキルを屈ししようとも、ユーキのよう

に心インカーネイト意システムを使おうとも不可能だろう。

となるともう一人。彼らを手引きした人間が最低でも一人は存在するということだ。

そこでふと、視界の隅に入った。

未だに消えない『チェンレジー・ザ・ゴッド』の生首。自分達が来て、既に事がきれていたフロアボスを思い出す。

あの無残な姿があるということは、『チェンレジー・ザ・ゴッド』を倒したということになるのだろう。誰の仕業なのかなどと考えるまでもない。この場に居たのは笑う棺桶ラフィン・コフィンであるのなら、彼らの仕業に間違いない。

だがそこで――。

――あ。

――待て。

――おかしいだろ。

ゾワリ、とキリトに鳥肌が立った。

そんなこと、ありえない。何故なら彼らはキリト達にすら歯が立たないプレイヤー達だ。対人戦闘は目を見張るモノがあるものの、筋力も速度も経験も何もかもがキリト達に劣っている。

そんな人間が、どうしても、フロアボスを――倒せるというのか。

――見落として、いた……。

――笑う棺桶が倒したのだと思ってた……。

――違う、コイツらじゃない。

――コイツら以外の、誰かだ……！

そう。

誰かが、この場に居たのだ。笑う棺桶ラフィン・コフィンとは違う人間が、ここにいたのだ。

それが一人なのか、数人なのか、数十人なのか、予想がつかない。

「漸く、気付いたか」

小馬鹿にしたような口調で、赤い眼のプレイヤーがキリトに声をかける。

片手にエストックを持つプレイヤーの名は——ザザ。
彼はエストックを持って遊びながら笑みを零しながら続けた。

「アレを、倒したのは、オレ達じゃあない。あの人だ」

「あの人、だと……？」

キリトは怪訝そうな顔でその言葉に応じる。

あの人ということは、複数形ではない。となればそれは一人。たったの一人で、『チェンレジー・ザ・ゴッド』を屠ったということになる。何をバカな、とキリトは否定する気はなかった。

そんな非常識を十七回も繰り返した人間をよく知っていた。否定する気はない、デタラメと言うしかない。ならばその非常識は、一体どこに消えたというのか。

「まさか……」

「その、まさかだ」

ザザは笑みを益々深めて、赤色の双眸を愉悦に染めて続けた。

「あの方は、最上階に、いる」

「——ユーキー！」

答えなどわかりきっていた。

キリトから余裕の表情は消え、直ぐにでも最上階へと続く階段を登ろうと足を踏み出す。

そこへ——。

同時刻

その場所に光などなかった。

暗く何よりも暗く。底は深く何よりも深く。

周囲二八何モナイ。視界二八何モ映ラナイ。

光もな帰れば音もなく、自分が立っていることすら確認できないまま茅場優希は意識を覚醒させた。

これで二度目だ。

右を見ても左を見ても、上を見ても下を見ても、光などない闇の世界。

思わずため息を吐く。これで何度目だ、とほとんど自身に呆れていた。何度自分は――。

――オレは何度、死にかければ気が済むんだ？

この場所は死後の世界、もしくは自分の内面。そのどちらかのなのだろう、と優希はぼんやりと考えていた。

一度目は殺人鬼との戦いで、経験しているのだ。二度目となると慣れてくる。

ここに落ちてしまったのだから、何となく察してはいる。

大方、先の戦闘においての茅場の直剣による投擲が致命傷となってしまうのだろう。そして自分は気絶をしまい、現在に至り今もなお死にかけている。

――手も足も出なかった。

――ありや完璧に、オレの負けだ。

思いの外素直に、優希は自身の敗北を認めていた。

ありとあらゆる手を使い、ありとあらゆる手段で塵殺された。最早ぐうの音も出ないとはこのことだろう。

「——そうだね。アナタ、ボコボコだったもんね？」

その声は透き通るものだった。

この闇しかない空間には似合わなすぎて、そして好き通り過ぎていく声。その声は楽しそうに、歌うように続ける。

「やっぱり強かった？」

——ありや、化物だ。

——めっちゃ強いわ。

突然の声に対して、優希は動じることにはなかった。

むしろ声が聴こえて当然と言わんばかりに、その声の主の存在を認める。

「アタシからしてみたら、アナタも化物だよ」

——そりや、どう言う意味だ？

「そのままの意味だよ。どうしてペインアブソーバを切るかなあ？」

アタシがオンにしても、必ずオフってくるしさあ。と声はボヤク。

対して優希はそんなことか、とつまらなそうな口調で答えた。

——そりや、アレないほうが感覚がビンビンくるからな。

——戦闘の邪魔になるんなら、切るに決まってるんだろ。

「脳筋過ぎると思う……」

やれやれ、と声の主は呆れるも、直ぐに神妙そうな声に変わり続ける。

「まだ、諦めないの？」

——……まあ、そうだな。

死にかけても、手も足も出なくても、ここに落とされても、茅場優希は諦めていなかった。諦めを踏破し、不屈に顔を上げて、迫り来る死に全力で抗う。

そうして優希は空を睨みつけていたのだ。まだだ、と。違う、と。絶望的状况になっても、優希は諦めていなかった。

「どうして、アナタは諦めないの？」

——……。

「勝ち目なんてないんでしょ？　なのにどうして、アナタはまだ戦おうとするの？」

聞く人間によつては、それは悪魔の囁きに聞こえるかもしれない。抗うだけ無駄であるのなら、眼を閉じて身を任せて闇に消えていった方が良い。二人の関係性がわからない人間にとっては、そう聞こえるのかもしれない。

だが当事者達は違った。

声の主は、優希が諦めないことを知っているから、純粋な興味本位で問い。

優希は、声の主の問いに対する意味を理解している。だからこそ、優希は少しだけ考えて、答えた。

——オレはアイツの家族だ。

——身内が間違っているのなら、殴ってでも止める。

——それが家族つてもんだ。

「身内じゃないって言われたのに？」

——それでもだ。

——それでも、アイツはどこまで言っても家族だ。

——戦う理由なんざ、それだけで充分過ぎる。

優希の言葉には迷いが無い。唯ひたすらに前だけを見定めて、折れ

ることがなく先を見据えていた。

深い溜め息が聞こえる。優希からではないそれは、謎の声の主からだった。

「本当におバカさんだよねアナタは」

——自覚はある。

——自分でも呆れてるくらいだ。

「それで、勝機はあるの？」

——ねえよ、ンなもん。

——本気じゃ勝てないのなら、全力でやるだけだ。

その言葉の意味を、声の主は理解していた。

似ているようで、優希にとっては全く違う意味となっている二つの言葉。

優希のいう“全力”とはつまるところの。

——剣術では手も足も出なかった。

——アイツの土俵で勝てないのなら、こっちの土俵に上げるしかねえな。

——剣術なんて程遠い、クソのような泥試合だ。

暗に優希は語っていた。

命を賭ける、と。いつもどおり、これまでどおり、身を削り肉を切らせて骨を断つと。

「知らないよ？、いっぱい斬られて痛い思いしても」

——元から血の気が多いんだ。

——斬られて血が抜けて丁度良くなんだろ。

「血なんて出ないでしょ。仮想世界なんだから……」

呆れた口調から、直ぐに真剣な声で言う。

「気をつけてね」

——ああ。

——オマエには迷惑をかける。

——折角、助けてもらったのに。

「いいよ、気にしないで。アタシはそんなアナタだから恋をして、そんなアナタだから助けたかったんだもん。きっと大丈夫だから、アナタはアナタの思い通りに行動して？」

——悪いな。

「あつ、でも無茶はしないでね？　心配だから」

どっちだよ、と優希は自身の半身に苦笑を浮かべた。

そして、手を伸ばした。何かに触れるために、必死に手を伸ばす。

それは目の前に居た。顔の輪郭を優しく撫でるように、壊れ物を扱うように頭を撫でる。

——行ってくる。

——ストレア。

「行ってらっしゃい、ユーキ」

第23話 決戦 く急く

—— “彼” を私が見たのは、兄さん達の墓前するときだったか。
“彼” の周囲には、幾人も人の輪が出来上がっていた。誰もが悲しそうに、死者に追悼しているように見える。だがそれは大きな間違いだった。最初は確かに兄さんたちの死に嘆いている様に見えて、二言目には残された遺産の話しへとすり替わっていた。

馬鹿な連中だ。この場だけでも行儀良く出来ないものなのだろうか。だが不思議と、私はその光景に憤りを感じていなかった。むしろ、当たり前だと安心している節すらある。

これが人間なのだ、この程度の存在が人間なのだ。
所詮、自分達のことしか考えていない。不完全であるが故、強欲に何もかもを求める。それこそが、人間という存在なのだから。

その点だけで言えば、兄さん達は人間らしくなかった。自分よりも他人を優先に、自分達など二の次で世話を焼く。私が今まで見てきた人間を超越したお人好し。この世には悪人と善人と別けられている。その中でも彼らこそが本当の善人と呼べる存在なのだろう。

類は友を呼ぶ、とことわざが存在するが全く見当違いも甚だしい。思いの外、当て嵌らないものだ。

本当の意味でそのことわざが正しいのなら、私の目の前で繰り広げられているやり取りは何だというのか。どの連中も兄さん達の遺産が目当てのハイエナしか存在しない。善人の周りには善人が集まるのが正しい光景なのではないか？

何よりも、そのハイエナの中に実の両親までいるとなると、人間とは間違った存在なのだと言感させられる。

呆れはするが、失望もしていなければ絶望もしていなかった。

私は兄さんと違い、人として致命的な欠陥があるようだ。幼い頃から、私は人間を諦めている。自分達の将来の為に、実の息子に期待を寄せる両親。自分達の都合のために私を利用しようとする周囲の人間。

その中でも兄さんだけだろう。私という個人を認め、本気で叱り、ときに本気で褒めてくれていた物好きな人間は。

もうこの世界には未練などなかった。

あとはどのようなにして死のうか、私はそれだけを考えていた。

幼い頃に夢想していた、今もなおこの世のどこかにあると信じて疑わないあの島を。空に浮かぶ鉄の城を創造し、その世界で朽ちるというのも悪くないかもしれない。

空を見上げた所で、そんな島など存在しない。あるとすれば、憎たらしいほど蒼く、雲などない晴天の青空であった。

そこでふと、視線を「彼」へと戻す。

今もなお、人間らしい人間達は「彼」を中心に輪を形成し、何とか抱き込めないか無駄に知恵を絞っている最中だった。

「彼」は幼い。少しでも甘い言葉があるのなら、それに食いつくだろうと私は予想していた。何せ「彼」は子供なのだ。言葉の裏まで読むなどといった思考など出来ていないだろう。ただ純粹に、自分から見えている景色は美しいものであると信じて疑っていない筈だ。醜悪な人間など、この世に存在しない。生きとし生ける者は全て、善人であると思っているに違いない。

しかし予想に反して、「彼」はどの言葉にも食いついていなかった。

確かに周囲の言葉に応じてはいる。だが誰にもなつかずに、誰とも視線を合わせようもしない。

「彼」の視線の先にあるのは、兄さん達の墓石。ただ真つ直ぐに、余分なモノなど眼中に入れずに、真つ直ぐに見つめていた。

純粹な興味だった。

彼はどんな眼をして兄さん達を見ているのか。興味本位で、その瞳を遠くから私は観察した。

瞬間——背筋が凍りつく。

背筋が凍りつき、鳥肌が立った。

彼は何も、見てなかった。

瞳には確かに兄さん達の墓が映っている。義姉さん譲りの金髪で

碧眼の彼の眼には、しっかりと兄さん達の墓石が映っていた。

だというのに、その眼には何も「映っていないかった」のだ。

自身の内面を観察するように、その視線は自分に向けられている。周囲でもなければ、自身の両親でもない。ただひたすらに、憎悪を、憤怒を、絶望を、失望を、呪詛を、己に向けていた。その眼には闇が、明らかに不穏な色が宿っていた。

何も出来なかった自分への、理不尽で不平等な世界への純粋な『怒り』。それこそが今の「彼」を形成しており、今直ぐにでも己を焼き殺さんと憎しみの炎が彼の内に灯っていた。

私は、面白いと思った。

「彼」も同じであると確信した。どうやって朽ちるか、どうやって死ぬか、どうやって自分を殺すか、それだけしか考えていない。

「彼」ならば私を殺してくれるだろうという確信がある。その怒りの炎を容赦なく私に向けてくれるだろう、と。

最初に私が声を「彼」に声をかけたのはその程度の原因だった。

その理由はあまりにも自分のことしか考えていない。あまりにも

人間らしい理由だった——。

.....

2024年1月31日 PM 23:25

第一層迷宮区 最上階

——何もかもが終焉を迎えた。

茅場は呆然と、空を仰ぎ見る。

その胸には謎の消失感があった。胸にポツカリと空いたようで、どこか焦燥感に駆られている自分の存在を観測する。

——考えてみたら、これが初めてだったか。

——人間を、刺したのは……。

ぼんやりと、その程度の認識だった。

些細なことだ、と茅場は割り切ろうとするが、明らかに彼は動揺していた。

それが何故なのか、彼自身にも説明がつかない。いくら俯瞰的視点で観察しようとも、今までの経験に基づき分析しようとも、答えなど出てこなかった。

彼自身気付いていないのだ。自身に身内などいないと本気で言葉にした後悔、そして唯一の家族であった“少年”を刺してしまった悔恨。その感情が波となり、茅場の心を確実に呑み込んでいる状態に、彼は本気で気付いていなかった。

それだけ、“少年”は茅場にとって大きな存在であり、かけがえのない存在だったのだろう。そうでもなければ、茅場が動揺するなどありえないのだ。

しかし皮肉なことに、茅場本人が気付いていない。

気付くことが出来ていれば、茅場晶彦という人間が自分をもう少し顧みる存在であれば、このようなデスゲームなど起こしていなかっただろう。

今までも、そしてこれからも。茅場は気付くことはない。神をも超越しうる頭脳を持った彼は、人して大事な何か欠落していた。

「……」

足元には、倒れている甥の姿があった。HPバーも減少し、赤色に染まっていた。

その胸には深々と、茅場が投擲したであろう直剣が突き刺さってい

る。無残な姿を見る度に、茅場には説明が付けられない感情が襲いかかる。外傷がないというのに胸が痛む。何も身体に異常がないというのに内側にナニカが突き刺さる感覚に襲われる。

「……………」

膝を折り、「少年」の頭に手を伸ばしかけるも、寸前の所で手を止めた。

今更何をしようとしていたのか、自分のことながら虫唾が走るものだった。既に甥に触れる価値など、自分にはなかった。既にこの身は汚れきっている。関係のない人間を巻き込んだ汚物、それこそが今の自分の姿であると茅場は自覚していた。

そんな人間が、今更「少年」に触れようと考えただけでも万死に値する。

茅場は手を伸ばす。

行先は「少年」の頭部ではなく、胸に突き刺さっていた直剣。それを掴むと引き抜き、茅場は立ち上がった。

既に勝敗は決していた。

見下ろしている茅場、地に倒れている「少年」。誰がどう見ても、覆らない決定的な光景。

勝者は茅場で、敗者は「少年」である。

「……………」

これ以上語ることはない。

そう言わんばかりに、茅場は「少年」から背を向けた。自身の罪から逃げるように、自分の行動の結果から眼を背けるように、茅場は足を進める。

これで終わりだ、何もかもが終わった。茅場を人間として留めていたモノが、壊れていく。何もなければこのまま、茅場は人間ではなくなっていくことだろう。血も涙も感情もない、自身の目的を優先に動

く機械と化すことだろう。

そう。このまま何もなければの話しだ――。

「――な、に？」

気配がした。

何者かが立ち上がるような、漠然とした気配を茅場は感じた。

「どう、して……？」

呆然と呟く茅場は、ゆらりと立ち上がる存在を認めた。

まるで蜃気楼のように、身体の芯を失ったように少年は――茅場優希は立ち上がった。

身体中の到るところに深々と傷口となつて抉られている。勝ち目など方に一つもない、ありとあらゆる手を封殺したにもかかわらず、茅場優希は立ち上がって来た。

だがそれも辛うじてである。

両手に持つ剣は震えており、両足も立つことがやつとなのか全く力が入っていない。

そんな身体で、一体何が出来るというのか。茅場が問いを投げる前に、優希が口を開いていた。

「わけがわからない、って面アしてやがるな？」

声も震えていた。

意識を保つのもやつと云つたところだろう。それでも優希は立ち塞がっていた。これ以上茅場が落ちるのを止めるように、これ以上先に行かせないように、優希は彼の前で立ち塞がっていた。

「決まってるんだろ――アンタを、止めるためだ――！」

——それは、ありえない一撃だった。

「なっ……!?!」

斬りかかってきた身体は満身創痍。

手足は裂かれ、急所にも致命傷を負い、呼吸も酷く荒いものだ。踏み込む速度も疾いとは言えずに、一撃も鍛錬に鍛錬を重ねていた先程の一撃とは違い、力任せに振るわれる我武者羅な一撃だ。

だというのに、盾の上から打ち込まれた一撃に、茅場の身体がズレる。

一撃でよろめくなど、いつぶりだろうか？いいや、もしかしたらこれが初めてなのかもしれない。

態勢を立て直そうと前方を見ると、既に優希は間合いを詰めてもう一撃を打ち込もうと、自身の両手剣を振り上げていた。

「ぐっ……っ！」

何と凡庸な一撃だろうか。

才能がない故に、少年は鍛え上げていた。自分は多くの技を使いこなせるほど器用ではない。理解しているからこそ、少年は一つの技を極め、鍛錬と修練を重ねて絶対破壊の一撃必殺にまで昇華させた。

だと言うのに、今の少年はそんなモノなど関係なく、出鱈目に振られる。

一撃、二撃、三撃。

力任せに茅場の大盾の上に、一撃一撃が重ねられていく。

自ら今まで積み重ねてきた努力を壊し、振るわれていく剣は無様にも程がある。だが茅場にとつて何よりもその剣は————重たかった。

チツ、と一つ舌打ちをして茅場は受け止める。

そして優希の顔を見て、茅場は困惑から驚愕へと変わった。

優希の左目。

碧眼から赤眼へ。それは優希の心意を使う際の前兆である。だと
言うのに、優希から「蒼炎」が噴出される兆しはない。それもその筈
だ。優希の心意は負の感情を糧とするもの。

己の怒りを燃料に、自身すら焼き尽くす間違った力。それは強力で
あるものの、心の均衡が崩れれば使うことが出来ない諸刃の剣だ。今
となつては怒り以外の感情も内包する優希に使いこなせる道理など
ない。

茅場が目にするのはそんなことではなかった。

もつと深く、優希の内面に、茅場は注目していた。

優希の瞳には茅場の姿が捉えている。真つ直ぐに、ただ真つ直ぐ
に、茅場だけをその瞳に捉えていた。

以前は怒りしか存在しなかった瞳に——もつと別の何かが存
在する。

茅場を見ているその瞳は——彼の兄を彷彿とさせるモノだっ
た。

「……っっ！」

連続で振るわれる一撃は常識を外れていた。

茅場の予想を遥かに超える速度で振るわれ、茅場の想像を超越する
一撃で振るわれ、大盾を軋ませた。

——何処にこれだけの力があるのか——。

目の前で対峙する少年は既に死に体。打ち込む一撃は茅場ではな
く、自分に返ってくる。現に打ち込む度に、傷に響くのか少年は苦悶
の声を小さく上げる。一撃を放つ度に息が上がり、倒れかけながら、
踏みとどまり次の一撃を打ち込む。

よく見れば、左腕すでに千切れかけている。地獄の苦しみの筈
だ。風前の灯、数合打ち込めば少年は自滅する。ならば防御に徹して
いればいい、茅場は大盾を構えるも。

「……っっ！」

その自滅は一体いつになるのか。
速度、威力、回数が増える度に増していく。
その度に、茅場の身体の軸はぶれ、大盾は頼りなく軋みを上げていく。

既に、剣士として優希は茅場を凌駕していた。まともに斬り合えば、茅場は負ける。そこまでに優希は剣士として、完成されていく。茅場はもう受けになど、回れる立場ではなくなっていた。

「だが、それは、ありえない……っ！」

ありえない、ありえないのだ。

死にかけて強くなるなどありえない。理屈に合わない、いくら心意といってもそこまで万能ではない。

ゾーンという状態が存在する。

それは極限の集中状態。自分以外の体感速度が遅かったり、視覚聴覚が非常に鋭くなる状態。

本来であれば、何も訓練されていない人間が入れない領域。それを優希は死にかけることよって無理矢理モノにしてみせた。火事場の馬鹿力、死にかけている癖に強くなるなど、冗談にも程がある。

現実には小説よりも奇なり。

ありえないことが、目の前で起こっている。茅場は認識し受け入れ、軽んじられる状況ではないと判断し、守ることを止めて己が剣を走らせた。

あまりにも鋭い四連撃。

上下左右。剣が煌き、優希へと斬り込んでいく。為す術などなかった、以前であれば切り込まれた四度の連撃を――。

「――」

尽くを防ぐ。

あまつさえ防いだ上で、優希の剣は容易く反撃をしてくる。

「くっ——！」

茅場は咄嗟に直剣で防ぎ、一息に後退する。

だが優希は逃しはしない。直ぐに距離を詰めて、一撃を大盾の上へと打ち込んだ。

何度も何度も何度も何度も、停止することなく打ち込んでいった。

何度、この一撃で終わりだと確信しただろうか。

その度に、茅場優希は予想に反して、新しい一撃を打ち込んでいく。終わりだと確信した、これ以上立ち上がるなどありえない。

だと言うのに少年は立ち上がってくる。諦めることなく、屈することなく、前だけをただひたすらに睨みつけて、少年は必ず立ち上がってくる。心が折れているわけではないから戦える、まだ手足が動くのだから立ち上がれる。

茅場優希は実直なまでに、諦めを踏破し尽くす。

故に、ついた異名が——アインクラッドの恐怖。死ぬはずの致命傷を受けても立ち上がってくるその様子に誰もが恐怖し——
畏怖する。

防いでも少年は止まらない。ならば引けばいい。

自滅するまで逃げの一手を打てばいいだけのことだ。しかしどう言うわけか、茅場にはそれが出来なかった。

「オレが——める——！」

声が聞こえた。

剣戟の音で、鉄と鉄がかち合う音にすら負ける程度の声。

だがそれでも、その声は確実に、茅場の心が揺さぶられるモノだっ

た。

聞いてはならない。聞いたが最後、今まで積み重ねてきた自分が崩れることになる。

茅場は確信し、直剣を振り上げる。反応が出来なかった剣、防がれてこなかった一刀を優希に見舞う。

斬、という音ではない。

斬、という音が木霊した。

必殺の筈の茅場の剣は、容易く弾かれていた。

今までただの一度も防いでこれなかった筈の少年は、当然のように弾き返した。

今度こそ、その声は聴こえた――。

「オレが、アンタを、止める――！ 今日、ここで――！」

どうしてか、などと問うまでもないだろう。

家族だから、身内だから、その程度の理由で優希は命を賭けている。死ぬほどの苦痛に耐えて、無様な姿を晒そうとも、優希は剣を握り締めて茅場に立ち塞がる。

その姿はまるで遠い日の――兄のようで。

「うっ、うおおおおお!!」

振り払うように茅場は叫ぶ。

感情のまま、否定するように、拒否するように、無我夢中で直剣を刺突する。本来であればその一撃は弾かれたことだろう。

だが優希はその一撃を、千切れかけた腕で受け止める。

直ぐに苦悶の声上がるも、口元に笑みを浮かべて。

「やっと、捕まえたっ……」

剣を引き抜こうとするも遅かった。

轟、と優希と茅場を囲むように巨大な蒼色の炎柱が取り囲む。逃げ場などない。

「この炎が、最後だ……」

グツ、と茅場のロープに右手で掴みかかる。

「万力のように力を緩めずに、振りほどけない力のまま優希は口元に笑みを浮かべて。」

「アンタの主張なんざどうでもいい。オレはアンタを止める。殴っても、蹴っても、その手足をへし折っても、必ず止める——」

「——吹き飛ばせ！」

茅場が口を開きかける。

だがその刹那、蒼い炎の柱は爆発した。

蒼炎発破。

途方もない熱を伴った大爆発。煙から二人の人影が吹き飛んでいった。

一つは壁に叩きつけられ、もう一つは玉座を粉碎してようやく停止する。立ち上がるのは——。

第24話 茅場優希と茅場晶彦

2024年1月31日 PM 23:40

第一層迷宮区 最上階

辺りはしんと静まり返っていた。

先程聞こえていた、剣戟の音も、火花が散る輝きも、裂帛の気合いも何もない。

まるで最初から誰も居なかったように、誰も存在しなかったように、この場に何もなかったような静寂。とてもではないが、先程まで壮絶な殺し合いをしていたとは思えない。

いいや、今となつては先の鬪争だつて殺し合いと言えるものかどうかも怪しいものだ。

片や殺されるために君臨し、片や彼の者の蛮行を止めるために叛逆した。両者の温度差、思考の差異は相当なものだつただろう。

だが先の一戦だけは、そんな下らない理由は頭の中にはなかった。打ち合わせた剣の火花、押し合う裂帛の気合、己の内に秘めた叫び。数十合にも渡る攻防に、もはや駆け引きなど存在しなく、とても剣舞や剣術と言つた呼べるものではない。不器用で、無作法で、何よりも我武者羅。引けば勝てた状況だつた、冷静に考え選択を誤らなければこんな結末にはならなかつた。

それが出来なかつたのは、単純な話。

——引けないと思つた。

——彼からは逃げてはならないと思つた。

——ああ、本当に……。

私らしくもない、と彼は——茅場晶彦は天を仰いだ。粉々に破壊された玉座の残骸に、彼は背中を預けていた。不思議と立つ気力が湧かなかつたのは、自分の心が折れているからだろうとぼんやりと理解した。

目的があつた、望んだ結末があつた。だということにも関わらず、身体が動かない。心の内側から、全く力が湧いてこなかった。

裏表もない剣で、本音を曝け出した一撃。

そのせいなのだろうか。少年の「熱」が茅場の凍てついた心を溶かしていた。

何もかもを諦めたのに、何もかもを手放したのに、何もかもを犠牲にしたのに、あつてはならない感情が芽生える。かつて存在したモノ、兄に叱られる度に抱いていたモノ、それこそが——後悔だった。

どこで踏み間違えたのだろう、どこで選択を誤つたのだろう、そんな自分勝手な疑問が頭をよぎる。

それはあつてはならないモノだ。

他人を巻き込んだ最低な人種が抱いてはならない感情である。それは茅場晶彦本人もわかつていた。

人間らしい感情は捨ててきたつもりだった。感傷に浸る資格などないことはわかつている。だが蘇ってしまった、少年の一撃で、茅場の人としての感情が蘇ってしまったのだ。

「よう」

いつの間にか、自分に一撃を入れた張本人が茅場の目の前に立っていた。

痛々しい、なんてものじゃない。左腕は千切れており、身体の半分以上は炭と化している。無事な箇所など存在しない。火傷は酷く、身体は激しく損傷している。

だと言うのに、少年は立っていた。愛剣『アクセル・ワールド』を右手に持ち杖代わりにして、辛うじて立っていた。少しでもバランスを崩せば倒れてしまう、そう断言できるほど少年は危うい状態だった。仮に倒れてしまっても、また必ず立ち上がってくる。

そんな弱々しい姿のくせに、どこか逞しさすら感じられる状態で、少年は——茅場優希は続けた。

「やつと会えたな、 血盟騎士団団長『神聖剣』 ヒースクリフ」

「そう言う君はアインクラッドの恐怖か」

そう言えばこの顔で彼に合うのは初めてだったか、と茅場は笑みを零した。

粉々になった玉座に背を預けながら、何とか立とうとするもやはり力が入らなかった。

自分よりもズタボロになっている甥が立っているというのに、満足に立つことも出来ない。情けなくて、自嘲するように笑みを零して簡潔に茅場は言った。

「さあ、私を殺してくれ」

「……それがアンタの本当の望みなのか？」

「そうだとも。私はこの為に、ありとあらゆる人間を犠牲にしてきた。死にたくないと言った男が居た、助けてくれと言った女が居た、巻き込まれただけの子ども、現実世界に帰りを待つ親もこの眼にしてきた。

その尽くを、余すことなく、茅場晶彦は犠牲にしてきた。己の欲望のために、何もかもを犠牲にし、屍を積み重ね、その頂に君臨した。討滅される魔王となるために、憎悪を向けられるための存在となるために生きてきた。

それは何の為に？この時の為に。全ては死ぬ為に。

「私は死ぬべき人間だ。死んで哀しむ人間など居てはならない、むしろ死した後でも民衆に晒されなければならない人間だ」

それだけのことをしてきた、と茅場は眼で語り一拍置いて続けた。

「もう、殺してくれ。私はありとあらゆる人間の願いを踏み躪ってきた」

た。ならば殺されなければならぬ、討たれなければならぬ。これが好き勝手してきた、人間の末路。責任を果たすということはこういうことだ」

「……そうか」

優希は忌々しげに、吐き捨てるように、苛立ちを隠さずに、一言だけ言った。

「わかった」

その一言を聞いて、茅場は眼を閉じる。

これで終われるのだと表情は静かなものだった。だが、それなのに、どう言うわけか。

その胸には——未だに後悔の念が晴れることはなかった。薄暗く、闇色で、光明など差し込まないような心持ちだった。待ち望んだ結末の筈なのに、生まれてくる筈の達成感が湧いてこない。

しかしそれももう終わる。理由など考える間もなく、茅場の意識は暗黒に染まることだろう。

だと言うのに——来るであろう刃の感触が来なかった。

思わず茅場は眼を開ける。

そこに居たのは、優希の姿。本来であれば剣を振りかぶり満身の力を込めて振り下ろされる筈だ。罪悪感が生まれないように、ここまで振る舞ってきたつもりだ。容赦がなければウソである。

だが茅場の目に映る優希は振りかぶった姿ではない。剣を杖代わりにふらつきながら立ち、足を上げていた。

疑問を口にする前に、優希は行動に移していた。

剣での斬撃ではない。何と少年は——茅場の顔面を踏みつけていた。

「なっ!? え……?」

茅場は状況を飲み込めずに、彼らしくもない情けない声を上げていた。

無理もないだろう。こんなことをされるとは思わなかった。想定していた行動は二択。この身が斬られるか、もしくは説得されるかの二択だと思っていたのだ。

現実が違う。そんなモノ、オレには関係がないと言わんばかりに、優希は「空気を読まず」に何度も何度も茅場の顔面を踏みつけた。

「ちよ、ちよつと。待ちなさい……っ！」

踏まれながらも、少しだけ慌てながら静止の声を上げるも優希は聞く耳を持たない。

何度も何度も何度も、空気を読まずに踏み続けた。

何度踏んだか優希本人にもわからないだろう。

「ふう……」

終わった頃には、優希の深い溜息が聞こえた。

傷口に響いたのか、その吐息は深いモノ。呆れているのではなく、痛みを我慢するような呼吸だった。

対して茅場に苦痛はなかった。それもその筈、本来であればペインアブソーバが働きありとあらゆる苦痛は、違和感として処理されるのだから。

思わず茅場は問う。

呆然と眼を丸くして、自分には理解できなかつたから問いを投げると言った軽い気持ちで訪ねた。

「君は、一体何を……?」

「ああ? 何をもって、オレとの喧嘩に負けたくせにグダグダ言うから黙らせたんだけど?」

「喧嘩……だと……?」

先の殺し合いを、少年は喧嘩と軽く処理していた。

アレほどの苦痛を伴った斬り合いを、どうして喧嘩と称することが出来るのか茅場には理解が出来なかった。現に優希の左腕は千切れており、全身は火傷と炭と化している。剣を杖代わりにしなければ立つこともままならないというのに。

呆然とする茅場に、優希は忌々しげに舌打ちをすると事実だけ述べた。

「喧嘩だろあんなモン。だってアンタはオレを殺そうとしてこなかったしな」

「そんなことは君の勘違いだ。私は君を家族ではないと拒絶し、君の身体を剣で間違いなく貫いた。それでも君は殺意がなかったと言うのか？」

「……頭いいくせに、馬鹿だなアンタ」

呆れる口調でため息を吐くと、今度は優希が問いを投げた。

「逆に聞くがよ？　ンで殺意があるくせに、気絶してる時にトドメを刺さなかったんだ？」

「それは——」

言葉が、出なかった。

考えてみれば、どうして自分があの場面で、彼に剣を突き立てなかったのだろうか。身内ではないと拒否しておきながら、どうして赤の他人である筈の少年の息の根を止めなかったのか。

簡単な筈だった。デスゲームが始まって犠牲になった人間の数は千を超えている。それだけの屍の山を積み重ねてきたのだから、今更他人に気遣うなんて道理に合わないだろう。

だというのに、どうして。

「……やっぱり、馬鹿野郎だよアンタは」
「なに？」

物思いに耽る茅場を見兼ねて、少年は苛立ちを隠せずに口を開いた。

「答えは簡単なんだよ。アンタはオレをまだ家族だと思っていたし、何よりも望んでいた結末は死だけじゃなかったんだ」

「私の願いが、死だけじゃないと……？」

そんな筈ない、と茅場は弱々しく首を横に振る。

死だけではないというのなら、他の願いもある筈だ。だがそれは茅場の行動を覆すモノのようで、無意識に聴くことを拒否している。

それでも優希は突きつけた。これが他人を顧みなかったアンタの罰だと言うように、容赦なくその言葉は刃となり茅場に突き立てた。

「簡単な話しだ——」

「待て、」

「アンタは——」

「待ってくれ、優希君……！」

「——誰かに自分の行動を、否定されたかったんだろ」

それこそが茅場晶彦のもう一つの願い。死を望むと同時に、茅場の結論の否定であった。

誰よりも人間は汚い生き物で、誰よりも欲深く、誰よりも自分勝手な生き物であるという、茅場の回答の否定だった。

「アンタはオレを殺さなかった。死にたいのなら、気絶してた段階でオレを殺せばよかったんだ。オレが殺せば、下にいる連中は間違いないくアンタを恨み憎み、大きな力を生むだろうさ。怒り憎しみ恨みつてのは、ある種の増強剤だ。誰でも手軽に強くなれるからな」

だというのに、茅場はその選択をしなかった。

冷静に考えれば、打算的に考えて選択肢に入れていたのかもしれない。だがあの場面で、あの状況下で、茅場晶彦という人間は間違いなく冷静ではなかった。

「オレも、アンタと同じ望みだと思っていた。だけどアンタとオレは、何かが違った。オレと同じように、ただ死ぬことを考えていたわけじゃない。だから違和感に気付いた」

結局の所、茅場晶彦は人間に絶望すると同時に、人間に希望を見出していた。

自分のような人間を否定する存在が現れることを、彼は待ち望んでいたのだ。人間は確かに自分のことしか考えていないかもしれない。だがそれでも、助け合い、共に育み、絆を育てる事が出来るのだと、彼は証明したかったのだろう。

だからこそそのデスゲーム。身勝手な人間らしい自分を否定するための舞台を、茅場は創造した。システムを、真理すら超越する存在が現れることを、彼は望んでいた。

茅場は口元に薄い笑みを浮かべる。

微笑むモノではなく、自嘲するように笑みを浮かべて。

「……それで見事に否定した君は、私を殺さないというのか？」

「ああ。元々オレはアンタを殺すつもりなんざねえよ」

「それは何のためだ？ 家族だからとでもいうのか？」

「それもある。アンタからは恩もある義理もあるからな。でもまあ、それだけじゃねえよ」

「それでは、何のために私を許した？」

その言葉を聞いて、優希の顔が不快に感じるモノに変わった。

蒼い双眸には、若干の怒りを混じらせながら口を開く。

「許すわけねえだろ。アンタはそれだけのことをしでかしたんだ。許されることなんて、ありえねえだろ」

「だとしたら、何のために私を生かす?」

「アンタに、ケジメを付けさせる為だ」

未だに優希の言葉の意図を読みかねている茅場に対して、少年は杖代わりにしている剣をカチンと打ち鳴らして続けた。

「責任を果たすから死ぬ、ってアンタは言った。だがンなもん、オレからしてみたら逃げにしか見えねえ。自分のやらかした現実から目を背けて楽になりたがっているとしたか思えねえよ」

「ならば、どうすればいいと君は思うんだ?」

「決まってるんだろ」

それだけ言うと、優希は真っ直ぐに茅場を見る。

その瞳には憎悪も、憤怒も、呪詛も、恩讐もない。真っ直ぐに茅場晶彦という人間を一心に見つめていた。

「生き続けろ。そして自分がしでかした現実を目を閉じるな。現状に目を背けず、罵倒する声に耳を傾けて、どうすればいいのか思考し続けて、誰よりも前に一歩でも多く進め。それは辛いことだ、わかってる。それでもアンタは生き続けなければならぬ。それが責任を負うってことなんだとオレは思うぜ」

「死ぬことも許されない、ということか……」

再び天を仰ぎ見て、優希へと視線を戻す。

言葉とは裏腹に、茅場優希という少年は見捨ててはいなかった。

何度も傷つけてきた。

何度も甥を危険な目に晒して。

何度もその身を削ってきた。

先の戦闘もそうだ。茅場は優希を圧倒し続けてきた。己の欲望を叶えるためだけに、行動してきた。

だというのにも関わらず、茅場優希は手を差し伸ばし、これからの道を茅場晶彦に示す。

いつだって少年はそうだった。

困っている人間が居れば悪態をつきながら問いを投げ、泣いている人間がいればぶつきらぼうに共に寄り添う。黙っている自分が我慢ができないから、その程度の理由に過ぎない。一見自分本位のような行動原理だとしても、その内には他人を思いやる心があった。兄のように、そして少年のような精神性。それこそが茅場にとって何よりも得難いものであり、何よりも汚し難いモノであった。

過去に兄に殴られ、現在に少年に諭され、茅場は二度も救われていた。

言うまでもなく、これから先の茅場は苦難の連続だろう。

何せそれだけのことをしたのだ。世界を混乱に陥れ、直接的ではないにしろ、間接的に百人以上の人間を殺めた大罪人だ。現実世界に帰還したプレイヤー達は英雄として崇められて、茅場は全ての元凶として扱われる。

だとしても、苦難があらうと、安易な道でないにしても、茅場晶彦は進まなければならぬ。

何故ならその道は、自分を救ってくれた甥が示した道、命をかけて伝えてくれた少年の言葉であるのだから。

進まなくてはならない。一步でも多く、少しでも先へ進む。それこそが責任のとり方なのだから。

折れていた心が再燃し、歩くための力が茅場に宿る。

よろめきながら立ち上がろうと、両の足に力を入れようとするも。その時だった――。

「な――？？」

それは誰の声だっただろうか。

確認する間もなく、茅場の肩口が斬、という音を立てて切断される。見事な切り口。気配もなく、予兆もなく、それは確かに背後から茅場に斬りつけた。容赦なく斬りつけた存在の声、茅場の背後から聞こえてきた。

それは楽しそうに、愉快に、愉悦に染まっている声だった。

低い声で、その男は高揚とし、謳いながら、その男は確かにその場に居た。居てはならない男、あつてはならない存在、黒ポンチヨの殺人鬼、その男の名は――。

「――勝手に v h a o a 終るなよ。これからだろ、面白く g a o u a なるのはよオ？」

――
笑う棺桶 P O H。

ラフィン・コフィン

第25話 心ガ欠ケル音

2024年1月31日 PM 23:53

第一層迷宮区 最上階

その戦いは、最初から勝ち目がなかった。

少年の身は文字通り、既に満身創痍。全身傷だらけ、なんてモノではない。立っていることすらやっと、いいや息をしていることすら奇跡の状態だった。そんな状態で、己の武器を振るうことなど不可能だろう。

それでも立ち上がり、片手で剣を握り、黒ポンチョの殺人鬼と数合打ち合えたのは少年の常人ならざる精神力によるもの。勝ち目があれば抗う。立ち上がり、震える両足に激を促し、心に炎を灯し、諦めを踏破する。百に一つ、千に一人、万に一つ、どれだけ勝ち目が薄かろうと少年は立ち上がり、勝利を無理矢理もぎ取ってきた。

全ては少年の意志の力。無様に転がろうと、勝ち方など少年にとってそれしか知らなかった。

少年が敗北するとするのなら、確実に息の根を止めるか。

もしくは——強靱過ぎる心をへし折るしかないだろう。

「さて、やっと諦めたか」

ノイズ混じりの言葉と共に、パンパンとホコリを払いながら黒ポンチョの殺人鬼——POHはつい先程まで剣を交えていた者に視線を向ける。それは少年、床にうつ伏せに転がっている少年をただ見下ろした。

剣を交えた。

言葉にするとまともに打ち合ったように見えるが、それは一方的な攻撃だった。

POHが声を掛けると同時に、少年は獣の様に弾け斬りかかる。だが少年が攻めに回ったのはそこまで、あとは一方的な防戦。殺人鬼が

繰り出す殺人に特化した剣に、少年は抗うすべなどない。徐々に、身体を刻まれ、致命傷を避けるのがやっとであった。

そうして殺人鬼は少年を徹底的に痛めつける。

楽しむように、紙一重で防がれる速度で剣を振るい、皮一枚で拮抗できる程度の力を込めて。

殺人鬼の表情には笑みが溢れていた。その笑みは、自身を打ち破つた者に対する復讐による感情ではない。もっと歪んでいて、愛する者が喜んでいる姿を見るかのような恍惚とした笑み。

対象は倒れたまま、指一つ動かす気配もなければ、うめき声の一つも上げない。

もっと眺めていたい欲求を抑えるように、名残惜しそうにPOHは少年から、デスゲームの全ての元凶たる茅場晶彦に視線を向ける。

「さて、貴様が茅場晶彦だな？」

砕かれた玉座に背を預けている隻腕の茅場に、朗々とした口調で問いを投げた。

その右手には、茅場の片手を斬り落とし、少年を切り刻んだ凶器『友切包丁』メイト・チョップが握られていた。

少しでも妙な事を口走れば、容易く茅場の首を跳ねられる。そう断言できるほどの狂気を、殺人鬼は孕んでいる。それを踏まえて、茅場は感情を押し殺した声で吐き出すように。

「そう言う君は、ラフィン・コフィン笑う棺桶のギルドマスターPOHかな？」

「良く知ってるな。さすがはゲームマスターと言ったところか」

クツクツと楽しそうに喉を鳴らしながら笑みを零す。

対称的に茅場は無表情を貫いていた。一瞬だけ倒れている少年に視線を向けて、直ぐにPOHが握っている短剣へと目を向ける。

「一つ聞いてもいいかな？」

「冥土の土産ってヤツだ。答えてやろう」

「その短剣は、なんだ？」

茅場の視線の先にあるのは、P O Hの愛剣である。プレイヤーをキルすればキルするほど、強化されていく魔剣。それは茅場もよく理解している。何せこの世界のデザインしたのは彼本人なのだ。文字通り全てを創造し、余すことなく記憶している。

だからこそ、茅場は『なんだ』と問いを投げた。自分がデザインしたモノとはかけ離れている短剣。刀身は赤黒く、柄がどこかP O Hの右手に一体しているような、見ていると吐気を催すような気味が悪い剣。

何よりもその短剣は、あの時の戦いで、少年との戦闘の果に折られた筈だ。剣が破損したものなら、消滅するのがこの世界の理である。だと言うのに未だに殺人鬼の手元に残っている不可解。

「ああ、これか」

訝しむ茅場の問いに、P O Hは何気ない口調で自身の手にある魔剣を一度、二度振り、これまた軽い口調で答えた。

「ゴイツは友切包丁だ。と言いたいところだが、色々マイト・チョッパーと弄らせた」

「弄った、だど？」

茅場が眉を顰めるのも無理はない。

弄ったというのだから、武器のテクスチャを改ざんしたのだろうか、と考えるも直ぐにその疑問は否定されることとなった。外見だけの問題ではないのだ。アレは外面のみを取り繕った優しいものではない。

もっと内面の話。武器の性能というよりも、もっと根深く武器のそのものが変質を遂げている。となると、この世界そのもののプログラ

ムに何かしらの細工をしたのだろうと、茅場は予測を立てる。

しかしそんなことを見逃すほど、茅場晶彦という人間は間抜けではない。外部からハッキングをされたのなら必ず気付くし、それは内部からであろうと同じことであった。現に、カーディナルが二人の少年に接触したことだつて気付き、メンタルヘルスカウンセリングプログラム試作一号と二号が同じ少年達のもとに身を置いていた事もわかっていた。

大きな事件であろうと、小さいいざこざであろうと、茅場の手の内から溢れることなどなかった。

だというのに、この男は茅場の眼を盗んで、メイト・チョッパー友切包丁を自分で弄つたと、不可能を口にしていた。

「そんなことは不可能だ、つて面アしているなあ？」

ニヤニヤと笑みを浮かべる殺人鬼に凶星を突かれようとも、茅場に動揺はなかった。本当の意味で茅場が気にかけているのは別にある。

「そうか、貴様。どうやって、俺を殺そうか考えているな」

「ほう、わかるのかね？」

極めて冷静な口調で茅場は応じるが、その心はマグマの如き熱量で煮えたぎっていた。

P O Hへと向けている視線は敵意むき出しに、むしろ殺意を抱いているといえる。何故自分が、ここまで目の前の殺人鬼に殺意を抱いているのか考えなかった。

茅場はその理由を理解している。理解しているからこそ、その身に迸る憤怒を受け入れていた。

対してP O Hは平然と受け止める。

殺意を圧縮し、凝縮し、集約し、見つめただけで殺せるような視線を受けても尚、P O Hは平然——というよりも、それすら愉しいと言わんばかりにフランクに茅場に言葉を送った。

「おいおい、仲良くやろうや。俺はこれでも貴様に感謝してるんだぜ？」

「君が私に？ 覚えがないな」

吐き捨てるように、吐き出された言葉を聞いて、己の愛剣を掲げて剣に意識を向けた殺人鬼は。

「この世界は、本当に面白え」

ニヤリと笑みを浮かべて、両手を広げて言葉を紡いで言った。

愛する者を迎え入れるように、自分という存在をこの世界に注目させる舞台役者のように。

「自分がイメージした通りに何でも動きやがる。現実世界にはねえ、本当に、偽りなく、思った通りに動くこの世界が、俺あ堪らなく愛おしい！」

茅場の片眉がピクリと動いた。

引つかかったのはある単語。イメージという抽象的なモノだった。何度も観察したことがある、何度も——その奇跡を眼に示してきた。

超人的な意志の力によって、システムすらも超越し、己のイメージオーバーライドに上書きする幻想のような現象。最初は机上の空論であった、こんなことはあり得る筈がないと科学者としての思考が結論を出した筈だった。

その名も——インカーネイト心意システム。

今も倒れている少年と、はじまりの英雄と称される少年にのみ発現した絶技。

だがここに、ここにもう一人。使いこなす規格外の存在。二人の少年よりも使いこなしている怪物——P O Hは己の力を誇示する

ように続ける。

「俺の力は奪うモノ。ガキの頃から他人から奪う生き方だったからな、イメージがしやすかった。それにこの剣コイツとも相性がよかったしな」

「奪うとは、つまり……」

「そう、俺の力は——強奪だ。他人の力を奪い取り、拿捕し尽くし、使いこなす。生きているのなら、何でも奪い尽くしてやる」

それこそがP O Hの心意、他人の命を奪ってきた彼だからこそ到達することが出来た一つの到達地点。

一人の少年が自分すら燃やす事によって心意を「炎」として使っていたのなら、P O Hは他人から奪うことによってその心意を十二分に発揮する。

「私が動けないのも、その力によるものか」

「応とも。貴様の行動を『奪って』やったのさ」

指先一つ動かない現象に、茅場は納得した。

妙であった。眼の前で少年が殺人鬼と打ち合っていたというのに、どう言う訳か力が入らなかった。少年が刻まれる度に怒りが灯り、少年が苦悶な表情に変わる度に拳を握りしめた。だというのに、立ち上がる事が出来ない不可解に漸く回答を得ることが出来た。

自身にはない力、心意を想いのままに使いこなす怪物。だと言うのに、茅場の心は萎えることなく今もお沸騰していた。頭の中ではどうやって殺すか、これしか考えられない。

「おいおい、そんな眼をするなよ。貴様には本当に感謝してるんだぜ俺あ」

その思考は視線としても現れており、射殺すかのような眼を向けら

れていたP O Hは肩を竦めて続ける。

「貴様はこの世界と、この力を俺に与えてくれた。そしてコイツとも

——— “俺の恐怖” とも出会わせてくれた」

「俺の恐怖、だど？」

平静な声色だった茅場のそれが、若干の苛立ちを込められたモノに変わる。それは僅かな、ほんの僅かな差異であり、気付ける者は誰一人としていない。

それはP O Hも例外ではなかった。倒れている少年に、ゆつくりとした足取りで近付く。

殺人鬼は喜々とした表情で片膝をついて、愛しい存在に近付くように慎重に、壊れ物を扱うように、倒れている少年の頭を撫でた。その頭髪は金色、輝かしい金色の髪の毛だった。

「コイツの出会いには運命と言っても良い。俺がクソツツタレな現実世界を生きてきたのは、コイツとここで出会える為だ」

浮かべる笑みは、下卑た笑みではなく他人を慈しむような慈愛に満ちた笑み。自分本位で行動する人間が出来る表情ではない。自分よりも他人を優先にするような人間のような、存在感を今のP O Hから放たれていた。

だからこそそれはより、明確に狂っている。殺人鬼が浮かべていい表情ではないのだから。

「コイツの怒り、憎しみ、全てが心地よいモノだった。闇には闇の理解者が必要であるように、俺にはコイツが、コイツには俺が必要だった。だというのに、コイツの牙は折れちまっている。心にあつた闇がいつの間にか消えかけている」

だから、と言葉を区切り変質した友切包丁^{メイト・チョッパー}の剣先を茅場に突きつ

ける。

引き裂くように、言葉に善意を込めて、殺人鬼は要求する。

「——ゲームマスターの権利を俺によこせ。デスゲームは終わらせない。もう一度地獄を創り出して、コイツの牙を取り戻す」

ゲームマスターとしての権利。

それは文字通り、この世界を思いのままに支配できる代物だ。

だからといってHPバーがなくなれば、ゲームオーバーとなり現実の死が待っているという絶対のルールだけは覆せない。だが言ってしまうえば、それ以外は変革できるという事実直結する。

自身を無敵にすることも出来るし、撃破不可能のモンスターを生み出すことも可能。一日一人プレイヤーをキルしなければ、自動的にゲームオーバーになるという世界に改変することも可能である。

思わず茅場から笑みが溢れる。

小馬鹿にするように、口元を小さく歪めて、侮蔑しきった声色で口を開いた。

「馬鹿か君は。私が素直に渡すとも？」

「俺としては別にどうでもいいんだがな。〃力〃を使って強奪しちまえばいい。アンタに選択肢を与えたのは、せめてもの礼だ。この世界を造り、〃俺の恐怖〃と引き合わせてくれたせめてもの礼さ」

人を恋のキューピットのように称す彼が、虫唾が走った。

茅場は奥歯を噛み締める。ふざけるな、と。不快に、不愉快に、忌々しげに、苛立ちを隠すことなく茅場は目の前の殺人鬼を睨みつける。

その程度の理由で、そんな浅い考えで、自分の甥を傷つけられて怒りを露わにしていた。

茅場はその胸に負の感情を抱いていたのは、そんな理由だった。自身の世界を滅茶苦茶にされかけているよりも、自身の腕を斬り落とさ

れたことよりも、目の前で今も倒れている少年のために、茅場は感情を露わにしていた。

「……ヘイヘイ、まさか貴様キレてんのか？」

その問いに茅場は無言で貫き、穿つような視線で応じる。

対するPOHは――。

「プ――」

堪えきれないと言わんばかりに――。

「ギャハハハハ――っ！」

爆笑を、その口から弾かれていた。

もう堪えきれないと、苦しそうに背をくの字に曲げて、腹を抱えて笑う。

「オイオイ、マジかよ貴様。少し前まで、俺も貴様も似たような者だった。血も涙もない、大量殺人犯だった。なのに何だ貴様は。今更情でも湧いたのか？」

そう言いながら、POHは引き裂くように口元に笑みを浮かべて、茅場に近付く。

そして座り込んでいる茅場に視線を合わせるように、両膝を折り事実だけを告げる。茅場が自分の罪から逃げないように、自分という罰から目を逸らさせないように。

「貴様も俺も、一生闇の中なんだよ。アイツを一人救った所で、今までの人生がチャラになるわけがねえだろ。貴様は何者も救えないし、貴様は絶対に救われない」

そんなこと、茅場が一番理解していた。

本当に今更だ。今まで少年を含めて、ありとあらゆる存在を利用してきた。踏み躪り、屍の山を築き上げ、その頂点に君臨してきた。地獄があるのなら、特等席は自分が座ることになるだろうという覚悟もある。

だが、だからといって——家族が傷つけられて黙っていいという理由にはならないだろう。

少年は茅場にすら手を差し伸ばしていた。

殺すのではなく、止めると剣を振るい、その先の道すらも示してくれていた。

そんな人間を、過ちを気付かせてくれた家族を傷つけて黙認できるほど、茅場は少年との絆を断ち切れてはいない。

「……なるほど。その様子から見るに素直に俺に権利を譲渡するつもりはねえ、と？」

口も開かない。反応もなく、頑なに視線のみで茅場は応じる。

ヤレヤレ、とP O Hは大げさに肩を落とすし首を横に振る。それから立ち上がり、メイト・チョッパー友切包丁を握りしめて。

「それじゃ死ぬよ半端者。安心しな、貴様の後釜はこの俺が座ってやるからよ」

振り上げる刃に、茅場は目を背けない。

彼は最後までその凶器を目に焼き付ける。死ぬ間際まで、自身の脳天に刃が抉り込むまで、茅場晶彦は目の前の殺人鬼を睨めつける。

だとしてもそれだけの反抗で、殺人鬼の刃が鈍る筈がない。予定通り、従来通り、予想通り、茅場は為す術なく凶刃の刃に抵抗できずに

——斬り抉られる。

「あ？」

—— 答だった。

殺人鬼は掲げた刃を振り下ろすこともなく、間の抜けた声を上げて振り返る。同時に——。

「」

—— 斬り飛ばされていた。

文字通り、いつの間にか背後に立っていた存在に、横一線に振り抜かれてP O Hは反応できることもなく吹き飛び壁に激突する。

ダメージよりも衝撃が勝ったのか、吹き飛ばされたP O Hの顔面は信じられないモノを見るような、衝撃的なそれだ。

茅場も同じようなもの。

その存在は斬り飛ばした後、よろめきながら茅場を守るように殺人鬼と対峙していた。

茅場から見た背はまだ小さい物。とてもではないが、青年とは程遠くまだ少年のそれだ。だがどう言うわけか、その背は何よりも逞しく、何よりも気高いモノであった。

ズン、という重い音が聞こえた。

それは剣を地面に突き刺す音。満足に立つことも出来ないのか、全身の身を預けている。

鼓動が聞こえる。何度も味わった躓り寄る死の気配を、感じ取る。拭いきれない、何度味わっても慣れることのない怖気に震える。

だがどうした。たかがその程度、所詮はその程度。自分は生きている。ここで終わりではない。ならば立ち上がれる——。

「――勝、手に話を進、めるな」

その存在、少年――茅場優希は何度も立ち上がる――。

「不死身か、貴様は……」

余裕の態度だった殺人鬼はそのメツキが剥がれ、明らかに動揺していた。

少年がどれほど重症だったのか、それは斬り合ったのだから熟知している。もはや立ち上がることにすら奇跡であったはずだ、剣を振るえる事自体があり得なかった筈だ。なのに、少年は、再び、立ち上がっている。

あまつさえ、先程はなつた一撃は、何よりも重たいモノだった。それこそ、決してありえない、ありえてはならない。

今も優希からは、ミシミシと身体が軋むような嫌な音が聞こえる。更にその身体からは、血液のような鮮紅色の光点を噴出させ、怯えることなく蒼い双眸は真っ直ぐにPOHだけを見つめていた。

だからこそ、殺人鬼は首を横に振る。

ありえない姿を、幻視してしまった。

何度も立ち上がる、唯の人間が、何の力も持たない何一つ才能を持たない少年に、ありえないものを重ねてしまった。

歯を食いしばり、苦難を物ともせず、諦めを踏破し尽くし、何者かの為に、何度も立ち上がるその姿に――“ヒーロー”なんてありえない姿を連想してしまった。

「まさかと思うが、俺を倒し、茅場を救う気か？」

動揺を悟らせないように、*“余裕”*を演出するようにしてPOHはゆつくりと立ち上がる。

少年は自分と同じ、闇の存在だ。世界を呪い、どうしようもない怒

りを自身の中に内包した、もう一人の自分とも呼べる存在である。そうでなくてはならない、と自身に言い聞かせながら殺人鬼は続ける。

「ソイツは俺と同じクソ野郎だろ。なのに貴様は、救うというのか？」

「関係ねえんだよ」

「正気か？ その男は俺と同じ殺人鬼だ。助けて貴様に何のメリットがある？」

P O H のもつともな言葉に、優希は迷わなかった。

当然のような口調で、不自然な内容を口にする。

「誰であろうと、オレの手が届くのなら助ける。命に大も小もねえんだ、例えかつこ悪くても無様でも、しがみついても、オレは助けたい」

言葉を失った。

眼の前に立っている少年の異常とも言える潔白過ぎる精神に、今度こそ言葉を失う。

「あとな、ぶっちゃけメリットだとか特別な理由はねえんだよ。コイツがたまたま、オレの手の届く範囲にいたからついでに助けただけさ」

「ついで、だと……？」

訝しむような眼で P O H は少年を見ると、何てことはない極めて軽い口調で優希は応じる。

「テメエという存在が気に入らない。テメエのような汚物が企んでいゝる何もかもをひっくり返してやらなきや、オレの気がすまねえ」

オレが立っているのはその程度の理由だ、と優希は暗に語る。だがP○Hはそれこそありえない、と否定するように首を横に振った。

明らかに優希が立ち上がったのは、一度程度で倒れて諦めずに立ち上がったのは、明らかに——茅場晶彦を守るためだ。

今だって優希はフラつきながら、呼吸も肩で息をしており、片腕だって千切れたままだ。勝ち目などない、勝ち筋など途切れている、勝機など見えない。そんな状況下で立ち上がったのは、守る存在がいたからこそだろう。

叫びたい衝動に駆られながらも、P○Hは耐える。

「なるほど」

それだけ言うと、P○Hはゆっくりと歩く。

顔を伏せて極めて静かに、不気味なほど静寂を保ちながら、反復するようにこの現状を飲み込む。

「なるほど、わかった、そういうことか」

そして顔を上げると同時に——優希の視界から消えて。

「もういい」

ガギン、と金属同士がかち合う轟音が鳴り響き、辺りに火花が散る。横一闪。

優希の首を狙った殺人鬼の凶刃は、寸前の所で防がれる。

防げたのは奇跡に近い。優希の第六感が警報を鳴らし、首を愛剣で辛うじて守っただけだ。決してP○Hの速度に追いつけている訳ではない。

現に咄嗟に反応したせいで、優希は充分な態勢で受け止められずに一撃で吹き飛ばされて床に転がる。

何とか踏み止まり、顔を上げた頃には何もかもが遅かった。

「貴様がそこまで堕ちたというなら仕方ない」

「……っ!!」

「俺がもう一度、思い出させてやる。貴様がどんな人間なのか、貴様が何故“恐怖”と恐れられていたのか」

優希の眼には、魔剣を振りかぶったP o Hが映っていた。

絶体絶命、かつてない身の危険。為す術などありはしない、このまま抵抗する間もなく振り下ろされることだろう。

だがそれでも、優希は諦めることなくP o Hを睨みつけていた。

絶望に朽ちることなく、希望を捨てることなく、命を投げ出さない。その態度が不快に映ったのか、P o Hは顔を顰めて感情なく言い捨てる。

「達磨にしてやるよ。貴様なら両手両足斬り落としたところで、その程度”じゃ死なねえだろ?”」

戸惑いなどありはしない。

容赦なく、一片の慈悲などなく、殺人鬼の刃は振り下ろされる。そして———斬、という音が辺りに鳴り響く。

静寂。

P o Hの刃は、身体に食い込んだ。

それは文字通り、他人の命を吸い強化されていた魔剣は、今回も同じように他人の身体を傷つけて、その生命を燃料とし自己を熱していく。

だというのに、P o Hの表情は奇妙なものだった。

達成感も、不快感も、ましてや悲壮感もない。あるとすれば———
疑問。眼を見開き、自分が傷つけたありえない存在に、呆然と問い

を投げた。

「貴様が、どうして……」

それは優希も同じだった。

自身に食い込む筈の刃は、その者の身体に。

両手を広げて優希を守るように、肩口に深くP O Hの魔剣が抉っていた。

見覚えがない背中、されど見覚えがある気配。何度も眼にしてきた、何度も感じてきた。幼い頃から見守られてきた者の名を、優希は思わず口にした。

「晶、彦くん……？」

間に入るように、その者——ヒースクリフ、いいや茅場晶彦は立っていた。

その両の手は無手。最強の剣士の象徴とされる剣も、神聖剣の証ともされる十字盾もその手にはない。ただ自身の甥を守る為に立ち上がった、茅場晶彦というただの人間がそこにいた。

P O Hは身体を後ろに引く。

動けない筈なのだ。P O Hの心意による強奪は絶対、行動を奪ったのだからもう二度と動けない筈だ。

なのに、どうして、どうやって、何が。

疑問が疑問を生み出し、答えが出ないまま新たな疑問が浮かぶ。

「何をした……？」

未だに実感を抱けないまま、P O Hは呟いた。

答えなどでない。出ないが、このままこの場においては危険である、とP O Hの経験が告げているのか。殺人鬼は後ろに下がろうとするも、茅場がそれを許しななかった。

グツ、と。

片手で友切包丁メイト・チョップバーを掴み、POHをその場に留まらせる。

舌打ちは聞こえた。

忌々しげにPOHは顔を顰めると、全力で刃を引き抜こうとする。だがそれでも――。

「貴様……っ！」

ピクともしなかった。

どれだけ力を入れようとも、ピクリとも動かない。

ならば、とPOHは押し込めた。離脱が無理ならば、邪魔な茅場から先に消してゲームマスターの力を「強奪」してしまえばいいだけのことだ。

「彼のような男に、奪わせはしない」

「ああ？」

口を開かなかった茅場が、漸く口を開く。

POHにとってそれは意味がわからない言葉だった、茅場は一体何を言いたいのか理解が出来ない。何故なら――。

「私は告げた。私を倒せば、生き残っている全プレイヤーを現実世界に戻すと」

何故なら――。

「ならばその先はありえない。私が君に倒された時点で、その先はありえてはならない」

何故なら――その言葉は、殺人鬼に向けられた言葉ではないのだから。

「これまで私も君達も、彼の掌の上だったのだろう。ここで私が倒れるのも計算し、彼は行動していた。ゲームマスターの力を得るために」

そして今度こそ、その言葉はP O Hに向けられる。

「だがその先は白紙だ。ここで彼を倒せば、何もかもがご破産になる」「なんだ、まさか貴様が俺を殺すというのか？ 何も武器を持たない、貴様が？」

「何を馬鹿な。もう一人、いるじゃないか。剣をその手にしている人間が」

それが誰なのか、この場にいる全員が理解した。

P O Hはその者に視線を向けて、その者も自身の手にある愛剣に視線を向けた。

それから直ぐに、P O Hは皮肉気に口元を歪める。

小馬鹿にしたように笑みを零して、そんなことは出来ないと断じる。

「出来ねえよ。以前ならばそれも出来ただろう。だが今は、牙の抜けたソイツには絶対に出来ねえ——！」

「彼は私達とは違う」

しかしP O Hの予想を覆す否定があった。

茅場は一秒も間も置かずに、静かに否定する。

「彼は選択から逃げない。痛々しく真っ直ぐで、誰よりも先へ進む彼は、決して逃げない。君如きが彼を語るんじゃない」

それに、と言葉を区切り茅場は続けた。

「彼にも、どうすればいいのか、何が最善なのか、わかっている筈だ」
そう、わかっていた。

何をすべきなのか、どうすればいいのか、*“彼”*は理解していた。
すでに選択肢などない、最初からそれしかなかった。

このまま茅場が殺され、POHがゲームマスターとなってしまう
それこそ終わりだ。真のデスゲームの始まり、現実世界へ帰還するこ
となど不可能となるだろう。

ならばこの場で、この状況で、POHを倒すしかない。
わかっていた、わかっている。

それでも心が、理解を示すことを拒否している。
時間がない。五秒もかからずに、茅場は殺されてその力を篡奪され
ることだろう。

最短で倒すにはどうすればいいのか、立つこともままらないこの身
で何が出来るのか、剣を振るう余力もない。
ならばどうすればいいのか、何が出来るのか――。

「あ――？」

何かを口を開いたPOHが間の抜けた声を上げた。

トン、と衝撃が胸部を貫いていた。ゆつくりと、視線を下げると――
――刃が突き立てられていた。

それは茅場を貫いて、自分をも貫いている。
それが誰の仕業なのか、理解すると思わず笑みを零した。

嬉しそうに、楽しそうに、待ち望んでいた光景。自身を殺す少年の
姿に、高揚とした口調で言う。

「やれば出来るんじゃないかよ――俺の恐怖」

刃が震えた。

怒りからか、悲しみからか、失望からか。その刃は震えていた。その震えは両手から、両肩から伝い刃へと流れて行く。守りたい者があつた、止めたい者があつた、捨てたくない者があつた。

だがどうしようもなかった。何かを守るのなら、何かを斬り捨てなければならぬ。

小を救えば大は救えない、大を救えば小を救えない、救うことを拒否すれば何もかもを救えない。袋小路、どうしようもない状況で

“——茅場優希は結論を出した。

大を救う為に、小を斬り捨てる覚悟を、心が欠けそうになりながら、悲痛にも優希は結論を出した。

慟哭は口の中で、耐えるように歯を食いしばる。

カタカタ、と震える。

後悔、憤怒、絶望、失望、ありとあらゆる負の感情が刃を震わせ、貫かれている茅場の身体に伝わる。

「すまない、優希君。君には苦勞をかけたっぱなしだな——」

そこまで言うとう肩口から視線を優希へと落す。そしてハッと眼を見開き、茅場は眼を閉じる。

目に映ったのは一滴。優希から流れた物を確かに見た。

——君は兄さん達が亡くなっても泣かなかつた。

——君の涙、初めて見るな……。

辺りに木霊する。

世界に鳴り響く無機質はアナウンスは告げる。

た

——ゲームはクリアされました

最終話 ソードアート・オンライン

2024年2月1日 時刻未明

第一層迷宮区 一階

——ゲームはクリアされま
した——

無機質で無感情な機械的アナウンスが迷宮区に流れていた。いや、それは第一層の迷宮区だけではない。その無機質な声は、アインクラッドの各階層に響き渡っていた。

その声はシステム特有の事務的なモノだ。だがそれでも、その声を聞いて、様々なプレイヤーが反応を示していた。

両手を上げて悦びを表現している者、祈るように手を組んで両膝を付き涙する者、近場のプレイヤーと肩を組んで悦びを分かち合う者、感極まって声を上げて泣く者。

中には異性同士でキスする者まで存在する。反応は様々だ。数多のプレイヤーが存在するのだから、その反応は千差万別で違う。

しかし根底にあるのは——歓喜である。

誰もが悦びに心を高揚とさせていた。ようやく地獄のような日々が終る、理不尽に巻き込まれたデスゲームの終焉。いつ現実世界に帰還出来るのか見当もついていなかった現実が、やっと覆される。

いつまで続くかわからないデスゲーム、クリアすることによって仮想世界からログアウト出来る。そう言う意味では途方もなかった。フロアボスは階層に上がるに連れて強化されていき、あと何ヶ月、何年、何十年とクリアするまで時が経つのか。もしかしたらクリア出来ずに、現実世界の肉体が死を迎えることになるかもしれない。

アインクラッドに囚われていた虜囚達は、常に死と戦っていた。歯を食いしばり、恐怖と向き合い、増える手で剣を取る。そうして彼らはこれまで生きてきた。

そして今、その健気とも言える努力が報われる時が来た。
感動、歓喜、開放、これらは格別と言えるだろう。

彼もその中の一人。

深く息を吸い込み、深く吐き出して、ガクツと両膝の力が抜けて座り込んでしまった。

緊張の糸が途切れたのか、彫りの深かった険しい表情も幾分か穏やかなモノに変わり眩く。

「アクセルワールド加速世界め、手間取りすぎだ……」

「そう言うなよ」

言葉とは裏腹に穏やかに呟く言葉に、反応するものが一人。

赤と白の甲冑に身を包み、挑戦的な笑みを浮かべる青髪の青年――

――ディアベルは手を伸ばす。

フン、と鼻を鳴らし彼――コーバツツは応じるようにその手を掴み立ち上がると、辺りを見渡した。

途切れることなく無機質な声が辺りに響き渡り、悦びに打ちひしがれるプレイヤー達。もはや聖竜連合だろうが、血盟騎士団だろうが関係がなかった。垣根なく、共に悦びを分かち合っている姿を見て、自然とコーバツツの口元が緩んでいった。

いつからだろうか――攻略という共通の目的があったのに。

いつからだろうか――いがみ合い、嫉妬し、虚栄心に駆られるようになり。

いつからだろうか――協力と言う名の競争を強いてきたのは。

血盟騎士団に負けなくなかった、アクセルワールド加速世界を見返したかった、アイ
ンクラッドの恐怖に――。

いつの日か、コーバツツの心を渦巻いていたのは負の感情。最初は些細な棘だった。それが次第に深く深く抉り、大きく大きくなっていった。

見たかったのはこんな光景だったのに、全員が力を合わせて巨悪に

立ち向かう、勸善懲惡だったのに、どこで踏み間違えたというのか――

「終わりよければすべてよし、ってやつさ」

朗々とした口調で、コーバツツの思考をディアベルが割り込んだ。そのままの口ぶりでディアベルは続ける。

「オレ達も君達も、確かにいがみ合っていた。でもあの場面では、この時だけはお互いの背中を守ってきただろ？ それで充分さ」

「……貴様、まさか私を励ましているつもりなのか？」

「そのつもりだったけど？ 何か落ち込んでいるみたいだったし」

「何をバカな。私は変わらん、いつもどおりだ」

口をへの字に曲げて腕を組んで面白くないと言わんばかりのコーバツツに、ディアベルは思わず苦笑いを浮かべた。

「はいはい、そう言うことしておくよ」

「……私は貴様のそう言うところが気に入らない」

「奇遇だな。オレも君のそう言うところが大嫌いだよ」

売り言葉に買い言葉。

だと言うのに、二人の間には剣呑な雰囲気はない。

むしろ軽快に悪態をつけるような悪友特有の空気、戦友とも呼べる独特な雰囲気の流れていた。

すると、一人また一人と足元が白く光り輝き包まれ消えていく。

ディアベルから見たそれは懐かしい光景。βテスト時に何度も見たプレイヤーがログアウトするエフェクトである。

βテストの際に見たログアウトするプレイヤーは、それは名残惜しそうにしたものだ。現実世界と変わらないVR世界に、純粋に楽しんでいた証拠とも言える。

だが今は違う。全員が笑顔でその光を受け入れている。ディアベルも含めて、命なんて重く考えていなかった。だが今となつてはこんなのに重く、かけがえの無いモノであると漸く理解していた。

どこか寂しくも、切ない妙な感覚。

不謹慎であるが、それは祭りの後によく似ていた。騒がしくも、非現実的であつた光景が終わる、瑩然たる感覚。

「あー、もう終わるのかー」

「何だ、別に貴様は留まってもいいんだぞ?」

思わず呟いてしまった言葉を、コーバッツは耳聴く拾う。その表情は意地の悪い笑みそのものであつた。

冗談と、ディアベルは肩を竦めて言葉を返す。

「現実世界で溜ま^{あっ}っている事があるからね、主に仕事とか」

「私も父上と母上に何て言おうか……」

どこか表情を暗く呟くコーバッツに違和感を覚える。

普通であれば、仕事などを優先に考えるはずだ。なのにどう言うわけか、コーバッツは両親を優先に考えている。

だがディアベルは深く追求しなかった。

そう言う考えもあるだろうと、自身を納得させて問いを投げる。

「そうだ、今度オフ会でもしないか? 良いバーを知ってるんだ」

「遠慮する」

どうしてだ、と疑問をぶつける前にコーバッツは口を開いた。

その言葉は先程の疑念を解消させるにこれでもかという回答。それと同時に、かつてない衝撃がディアベルを襲う。どれほどのものかと言うと、団長が茅場晶彦とであつたというくらい、いいやそれ以上の衝撃的な発言。

「私は未成年だ。 “十代の学生” がバーなど行けるわけがないだろう」

——え、マジで？——

.....
.....
.....

2024年2月1日 時刻未明
第一層迷宮区 十八階

——ゲームはクリアされました——

「うおおおおお！ さすがキリトだぜ！ アイツがやってくれたに違いないねえ!!」

そうやって雄叫びを天高く吠えているのはクラインだ。

片手にカタナを持ち、戦国武将らしい甲冑に身を包んだ彼は、誇らしく声を上げる。

彼だけではない。

クラインが率いる『風林火山』の面々は同調するように、クラインに負けじと好きに叫ぶ。

キリトを称える者、キリトに感謝する者、キリトに愛の言葉を吐く者、と様々な風林火山のメンバーがそこにあった。

そんな中——。

「ちよつと待ったー!」

意を唱える者達が現れる。

その者達の名は、テツオ、ササマル、ダツカーである。月夜の黒猫団のインクラッドの恐怖派でもある三人は「それは違う」と言わんばかりにクラインの言葉を否定し始めた。

テツオが率先して発言している辺り、三人のリーダー格的な立ち位置なのだろう。

「キリトじゃなくて、きつとインクラッドの恐怖だ。彼が茅場を倒してくれたに違いないっ！」

「なあにい？」

聞き捨てならない、と言わんばかりにクラインはテツオ達に詰め寄り最もな疑問を投げる。

「証拠でもあんのかよ、証拠でもよお？」

「ないけどきつとそうだよ！」

「ぐぬぬ、なんて感情論……！」

「そういうクラインさんも、キリトがやってくれたって証拠がないじゃないか！」

「クツ、やるじゃねえかよ黒猫達。反論の余地もないぜっ」

グラリとクラインは悔しそうに身体を揺らして、直ぐに立ち上がり居丈高に告げる。

「でもキリトはやれば出来る子だからなっ！ アイツに違いないぜっ！」

「強固な信頼感関係を感じる……。いいなあ、俺達なんてインクラッドの恐怖と会話らしい会話したことないし。緊張して」

「はっはっはっ！ オレとキリトはなあ、大親友の間柄なんだぜ？ 積み重ねてきたモノが違うのさっ！」

「いや、何の勝負してんだアイツら……」

それまで静観してきたエギルは呆れるような口調で呟き、月夜の黒猫団のギルドマスターであるケイタは「ははは……」と乾いた笑みを浮かべていた。

いつの間にか始まった競い合いはいつの間にかコール合戦に変わり、アインクラッドの恐怖と叫ぶ月夜の黒猫団の三人と、はじまりの英雄と声を上げる風林火山の声が木霊していた。

加えて無機質な『ゲームはクリアされました』というアナウンス。ここだけ見れば、カオス極まりない光景がそこに広がっていた。

実のところ、エギルには止める気などない。

こんなバカな光景もこれで最後だと思うと、どうにも止める気にはなれなかった。それに彼らも同じ気持ちなのだろう、悔いがないように最後のバカ騒ぎを興じている。

それを止められるほど、エギルも野暮な性格ではなかった。

最後であるのなら、最後らしい騒ぎ方というものがあるのだから。

「凄いなあ」

「……ん？」

ポツリ、と天を見上げて呟くケイタに、エギルは反応した。

まさか聞かれていたと思わなかったのか、ケイタはどこか少しだけ慌てながら続けた。

「本当に、本当に茅場晶彦を倒したんですよね、彼らは……」

「このアナウンスが流れてるってことは、そうなんだろうな。まさかお前さんはアイツらが倒せると思ってなかったのか？」

我ながら意地の悪い問いだとエギルは思う。

向けられた問いに対してエギルの予想通り、ケイタはブンブンと勢

いよく首と手を横に振って否定するように口を開く。

「いえいえっ！ そんなこと思ってますせんよ！ ただ最悪な事を考えてしまつて……」

「まあ普通はそうだろうな」

そう。

普通はケイタのように最悪な結末を想定するものだ。

この場での最悪な結末こそが、アクセルワールド「加速世界の完全敗北」である。攻略組は彼らを上階へと優先に向かわせた。それはつまり、攻略組にとって彼らは希望と呼べるものだ。

それが簡単に、手間取らずに砕かれたとなると精神的ダメージは相応なものだろう。

ケイタだけではない。

恐らく大半のプレイヤーが、いいやエギルを除くプレイヤー達はそんな最悪な結末を想定していたのかもしれない。

だがどう言うわけか――。

「エギルさんは……」

「ん、何だ？」

「エギルさんは、考えたりしたんですか？」

少しだけ考える。だがそれは本当に一瞬だけであつた。

直ぐにエギルは「いいや」と首を横に振って否定する。

「考えなかつたな」

「それはどうして……？」

「俺もアイツらと随分な付き合いになるからな。根拠なく連中なら何とかしてくれんだろ、って思っただけさ」

ポカンと口を開くケイタに、気持ちの良い笑みでエギルは返す。

そして両手を上げて背筋を伸ばした。肩の荷が降りたと言うかのように、晴れ晴れとした声で言う。

「——さて、これから忙しくなるな」

「これからですか？」

「応とも。俺達はデスゲームをクリアしたんだ。ってことは、オフ会をしなくちゃならないだろ？」

「あつ、ちなみに俺さ御徒町でダイシーカフェって喫茶店やってんだ。オフ会のおときは誘うからヨロシクな」

.....

2024年2月1日 時刻未明

第一層迷宮区 十九階

——ゲームはクリアされま

した——

十九階には数人の人影があつた。

五十人規模を誇っていた最悪の殺人集団——ラフィン・コフィン笑う棺桶の姿は

既になかった。全員が全員ともログアウトされて退去している。赤眼のプレイヤーが「このままで終わると思うな」と吐き捨てていたが、そんな戯言彼らの耳には入っていないかつた。

この十九階だけ、異様な光景であつた。

他の階層は歓喜に包まれて、嬉し泣きままでしている中、この階層だけは静寂を保っていた。

彼らは嬉しくないのか。

否、彼らとてこの地獄を抜け出せたのだから、その心境は喜々としたモノも存在する。

だがそれ以上に、デスゲームから抜け出して現実世界に帰還が出来

る以上に、身を引き裂くような避けては通れない別離があった。

彼ら——アクセルワールド加速世界の彼らは生身の存在だ。

身体は仮想世界で作られた仮初めのモノ。斬られれば違和感を覚えて、血液が流れることもない。何せ彼らの本体は現実世界にある。今もナーヴギアを装着しながら寝ているか、もしくはは病院のベッドの上だ。

だが少女は、この仮想世界で出会った少女はどのようなのだろうか——
？

「……ユイ」

静かに、怯えさせないように静かに、キリトはこの世界で出会ったAI——ユイに話しかけた。

背を向けていた少女はビクツと一度だけ大きく肩を震わせる。小さな肩は——震えていた。

当たり前だ。
彼女はソードアート・オンラインの中で存在が許されるAIである。

クリアされたのならば、アインクラッドと共に消滅するのが道理と言える。少女が怖れるのも無理はないだろう。

しかし何処か様子がおかしい。

別離に耐えられず泣いているのか——違う。

己が消えることに怯えているのか——違う。

少女は——。

「——パパッ！」

——笑っていた。

振り向いた少女は満面の笑みで、キリトに向ける。恐怖を押し殺し、溢れる涙を我慢して、健気に最後は笑みで終わらせようとしていた。

アスナに、リズベットに、ユウキに、そして見上げてこの場にいない「もう一人」に笑顔を向けて、キリトに笑みを零しながら続けた。

「ゲームクリア、おめでとうございますっ！ 最後までカツコよかったですよ」

「……ああ、ありがとうなユイ」

ハイッ、と元気よく応じるとキリトから今度はアスナに向けてユイは言う。

「アスナさん、美味しいお料理いつもありがとうございました」

「こちらこそだよ、ユイちゃん。いつも手伝ってくれて、ありがとう、ね……っ！」

「リズお姉さん、いつもわたしと遊んでくれてありがとうございました。凄く凄く、楽しかったですっ！」

「ば、バカねえ。そんなこと改めて言うんじゃ、ないわよ……！」

「ユウキ、わたしと友達になってくれて、ストレアと友達になってくれてありがとう」

「ユイい、ユイい……！ どうにかならないの？ ボク嫌だよ……！」

泣きながら笑みを返すアスナがいた。

我慢するも堪えきれずに涙を流すリズベットがいた。

どうしようもないとわかっていながらも、素直に別れを拒絶するユウキがいた。

それだけで、満足だった。自分は人間ではないことをユイが一番良く理解している。だというのに、彼らは自分を人間のように接してくれて、AIというモノである筈なのに一人の人間として接してくれた。

最初はカーディナルに命じられて、彼らに付いただけだった。

確かに『はじまりの英雄』という個人に興味を示していたものの、そ

れだけであつた。

だがいつの間にか、アクセセルワールド加速世界の存在がユイにとっての居場所となつていた。

実の娘のように扱ってくれるキリトの存在が心地よかつた。

面倒を見てくれるリズベットと一緒にいることが楽しかつた。

アスナには「彼」のことで何度も相談に乗ってもらつたりしていた。

人間ではない自分を「友達」だ言ってくれたユウキには感謝してもしきれない。

そしてもう一人――。

――

この場にいない人物。

怖くて、恐ろしくて、恐怖を抱いていた。

一人で何もかもを抱え込み、他人を傷つけることが何よりも嫌っている癖に、自分を傷つくことを是としている心優しい「彼」。

後悔があるとすれば「彼」だ。もう少し勇気を出していれば、「彼」と話しが出来たであろうとユイは思う。心残りがあるとすれば、その一点だけである。もう少しだけ、「彼」とお話をしたかつたと思いつながら。

「――わたしを、わたし達を、一人の人間として接してくれてありがとうございます」

それが誰に向けられた言葉なのか、問うまでもなかつた。

まるでその言葉は最後であるかのように、もう会えない存在に向けられた言葉のようでもあつた。

静かに近付くと、キリトは穏やかな笑みを浮かべて両膝をついて。

――ユイ――

優しく抱きしめた。

少女の存在を確かめるように、この場に存在することを認めるように、優しく抱擁しながらキリトは続ける。

「これで最後じゃないさ」

「え？」

その言葉の意図を掴めないまま聞き返す。

そしてキリトは力強い言葉で応じた。

「俺達は生きてる。生きてるんだから、ユイとだってまた会えるさ」

「でもわたしは……」

「忘れたのか？ 俺は『アイツ』と一緒に出鱈目な奴なんだぞ。ユイとだって再会してみせる」

根拠などない。

いくらキリトが『彼』と同じ心意の片鱗を扱えるからといって、消去されつつあるAIを復元できる理由にはならないだろう。

だがどう言うわけか、キリトの言葉には信頼に値する力が存在していた。力強い根拠のない意思を言葉に込めて、キリトは続ける。

「ユイが会いに来てくれたように、今度は俺が会いに行くよ。必ず会いに行くよ。だからこれが最後だと思わないでくれ。また話しをしよう、また冒険をしよう、今度は『アイツ』とも一杯——」

「——はい」

ユイは目を瞑る。

自身の身体が光消えかけているのを感じ取っていた。

だが恐れはない。キリトが、ユイが信じたヒーローがまた会いに来てくれると言ったのだ。ならば自分はその言葉を信じるだけだ。

そうなるかと別れ方はなど決まっている。泣くのではない、怖れるのでもない。ユイは満面の笑みを零しながら朗々とした口調で。

「待っていますね、パパ——」

そうして今度こそ、ユイは消える。

これが最後ではない。少しばかりの小休止、ならば恐怖などなく、再会することを夢見る——。

「……大丈夫、キリト？」

おずおず、と心配するリズベットにキリトは立ち上がったて応じた。

ああ、と返しながら握りこぶしを作る。自身を奮い立たせるように、どんな状況でも諦めなかつた「彼」のように己を鼓舞しながら前を向く。

「大丈夫だ。心配かけて悪かつたなりズ」

「うん……」

それでもまだリズベットは心配であるのか、何うようにキリトを観察していた。

対してキリトは苦笑を浮かべながら。

「絶対に探し出してみせるさ。俺は生きてるんだ、必ず再会してみせる」

「ボク達もね！」

元氣よく発言したのはユウキであった。

先程まで泣いていたせいもあってか、両眼を少しばかり充血させて

いる。ユイが笑っていたのだから、悲しんでいるのはユイに失礼であると判断したのだろう、ユウキは元気よく続けた。

「ねえねえ、現実でも会おうよ」

「それいい考えだよユウキ」

ユウキの提案に、アスナは同意する。

そして二人は仲良くイエーイと両手を合わせていた。

仲の良い姉妹のようであると思いつつ、キリトは意地の悪い笑みを浮かべて応じた。

「それは難しいんじゃないか？」

「えー、何でさ!」

「問題は、お前の兄貴だよ」

「え、にーちゃん?」

どうして、と首を傾げるユウキに対して、キリトはこれでもかと思つきを悪くさせて億劫そうな口調に変えて。

『『メンドクセえからやだ』いいそうじゃないか』

「何よそれ、アイツのマネ? 結構似てるじゃない」

感心するようにもものまねの完成度をリズベツトは褒めると、ユウキは居丈高に胸を張り自信満々に力強い言葉を述べる。

「大丈夫だよ。ボクとアスナが何とかするからさっ! ね、アスナ?」

「うん。わたし達に任せて」

「まあ、あんた達に任せておけば大丈夫でしょ。アイツ二人には甘いから」

ふんすふんす、と拳を握りやる気に溢れるアスナとユウキに後のこ

とを任せて、リズベットはキリトに話を振る。

「というわけで、あんたの本名教えなさいよ」

「な、何でだよ!？」

「当たり前でしょー。もしかしてリアルでもキリトって名前なの？」

本名がわからないと会いようがない、と暗にリズベットは語っていた。

それは最もな意見であった。だがやはり、MMOをプレイしていたキリトとしては本名を口にするのは抵抗があった。

デスクゲームに巻き込まれて長らく口にしていなかった本名を口にするのは、どこか抵抗がある。遠い世界のように、とても身近にあった世界での名前。それをキリトは戸惑いながらも口にした。

「和人。……桐ヶ谷、和人。歳は多分15歳。今年16歳になる……」
「えっ、なにあんた歳下だったの!？」

眼を丸くして言うリズベットの他に、アスナも同じような反応を見せる。

そのことからどうやら二人共キリト——和人よりも歳上ということがわかる。

「それにしても、きりがやかずと。だからキリトってわけね。安直というか何というか」

「うるさいなあ。それじゃリズの本名は何なんだよ。教えてくれよ、リズベット“さん?”」

名前を強調して呼ばれて、リズベットは言葉に詰まる

どうするか少しだけ考えて、観念したように深呼吸をして意を決して小さく呟いた。

「篠崎、里香……」

「うわっ、バリバリ日本じゃん」

「そうよ、バカにしてごめんなさいねっ！ 歳は16、今年で17！
はこれでいい!？」

顔を羞恥で紅く染めているリズベット——里香をまあまあと諭しながら、アスナは言う。

「わたしは明日奈、結城明日奈。歳はリズと同じく16歳で、今年17歳です。それで——」

「ボクは紺野木綿季だよっ！ 歳は13歳、ヨロシクね!」

はいはい、と片手を上げて朗々とした口調で言うユウキ——木綿季に和人と里香は口を開けていた。

いいや視線を向けていたのは木綿季にだけではない、明日奈にも向けられている。

信じられないというように口元を引きつらせて、二人に問いを投げる。

「まさか、本名だったの……」

「うん」

「ちなみにだけど、ユーキくんもそうだよ」

MMOは初心者であったことはわかっていた。

加えて、明日奈と『彼』に至っては専門用語である『スイッチ』すら知らなかった。だとしても、ここまでとは思っていなかった、というのが和人の素直な感想である。

MMOを行うにあたって、本名をプレイヤーネームにするのはある種のタブーと言えるだろう。リアルがバレる可能性すらある。だからこそ、和人はキリトであったし、里香はリズベットであったのだ。

これは講義しなければならぬ、と和人も里香も使命感に駆られて

いると。

「あつ……」

明日奈が声を上げる。

その視線の先は、和人の足元。彼もそちらに視線を落すと、足元が白く光り輝いていた。

何度も見たことがあり、テスト時に何度も体験した光——ログアウトの際に生じるエフェクトである。

「俺からか……」

どこか名残惜しそうに呟くと。

「それじゃみんな、先に行ってるから」

「軽いわねえあんた……」

しようがないだろ、と言う前に和人の身体が光りに包まれて飲み込まれていく。

視界が光の粒子となり、意識が遠くへと引つ張られていく。もはや視界に何も映っていないかった。意識のみが存在し、和人は無空の彼方へとはじき出されたような感覚に陥る。

そんな中、思い出しように、存在が消えた口元を動かした。

思い出すことはいくらでもあった。なのにそれだけが、鮮明に色褪せなく強烈に意識させる。

何度も競い合い、何度も争い、何度も剣を交えた存在。

親友とも違う、悪友とも違う。宿敵でもなければ、ライバルなんて一口では言い表せない存在。

最後まで決して折れることがなかった、
「彼」は思いのままその道を歩き、遂には踏破してみせた。目指すべく背中、自分にはなかった強さをもった存在に、和人は思いを馳せて。

———。そういえば、「アイツ」と、決着つけられなかったな———。

.....
.....
.....

一体どれほどの時間が流れたのだろう。

そんな疑問をもたないまま、ぼんやりと瞼を開けた。

光が眩しく、視界が定まらない。長い長い、夢を見ていたかのよう
で。遠い遠い、世界で生きていたかのようでもある。

そんな謎の感覚を持ったまま、少年は覚醒した。

ゆっくり、と首を動かした所で、一人の少女が驚いている声が少年
の耳に入った。

「お兄、ちゃん……？」

聞きたかった声、会いたかった顔。

少女は覗き込むように、心配するように、瞼に涙を溜めて、静かに
歓喜していた。

その場にいるのは少女だけではない。優しそうな女性がいて、厳格
そうな顔つきの男性もいる。

性別も顔も、思想に至るまで別々といえるだろう。だが共通してい
るとすれば、少年が覚醒するにあたって、三人が三人共、喜びに満ち
あふれていた。

女性は泣いて、男性は少年の頬を撫でる。少年を兄と呼んだ少女は
両手で口元を隠して涙していた。

そこで漸く、少年は理解する。

頭に装着されたナーヴギアの存在、病院特有の匂い、そして腕に刺された管を通して流れる点滴。

ここはインクラッドではなく——病院なのであると。

ここは仮想世界ではなく——現実世界なのであると。

今となつては懐かしい、両親と妹の存在。

壁を感じていたにもかかわらず、三人は自分の為に泣いてくれている。自分の無事に喜んでくれている。

——何が、壁だ。

——壁なんて、なかったじゃないか……。

そう。

一方的に壁を作つて、殻に閉じこもっていたのは自分であつた。

「ぐっ、うう……」

何とか立ち上がろうと少年は身体を起こす。

だが言うことを聞かなかつた。ずっと寝たきりだったせいもあつてか、髪の毛は伸び放題で、腕も病的なまでに細く貧弱である。先程まで両手に剣を握っていたとは思えない。

手伝おうと慌てる両親を片手で制す。

今だけは、この場面だけは、自分の力で起きなければならなかつた。それがケジメであるというかのように、少年はゆっくりと身体を起こして、三人の顔を見る。

会いたかつた。

デスゲームに巻き込まれてから、ずっと会いたかつた。

心が折れそうになつた第一層からあつたのは三人の顔だ。母親と父親と妹の顔。もう一度会いたいと思つていた。

「……た……あ……」

声を出そうとするも、上手く舌が動かない。
長く、更に長く、時間をかけてようやくその声を、その言葉言う
ことが出来た。

「ただ、いま……」

殆どうめき声にしか聞こえない言葉。
それでも何度も何度も、少年は紡ぐ。

「ただいま、ただいま……ただいま……！」

それでも三人は答えてくれた。
たった四人しかない家族。父は少年の背中を擦り、母は少年の頬
を撫でる。

そして妹は両手で少年のか細い手を取る。手を強く握り、ハツキリ
と泣きながら嬉しそうに告げた。

「おかえり、お兄ちゃん……」

その一言が引き金となった。

少年の両眼からはボロボロと涙が流れる。第一層で心が折れかけ
ても、モンスターキラーと対峙して心が恐怖に負けそうになりながら
も、仲間に追いつくために死に物狂いで努力を重ねようとも、殺人集
団に囲まれようとも、最後においても泣かなかった少年の目から大粒
の涙が溢れた。

はじまりの英雄、二刀流、大層なモノではなくキリトは——
桐ヶ谷和人は本当の意味で、現実世界に帰還を果たす——。

それはありえたかもしれない結末

——— どれほど剣を振るってきたのか。
一体の怪物がいた。

全身を甲冑に身を包み、その者は前へ前へと、一步一步確実に歩みを重ねていた。

兜で頭部を覆い、表情すら見えなくなった者を何故「怪物」と呼称出来るのか。それは簡単なことだった。

「

怪物は「辛うじて」人としての形を保っている。そう、辛うじてだ。

全身を甲冑に身を包んでいるとはいったものの、その鎧は到るところが破損していた。

左腕はとうの昔に欠損しており、右腕に至っては本来であれば第一関節としてあたる部分には「黒炎」が関節の代わりとしているのか、上腕と前腕を無理矢理に接着させている。

恐らく、甲冑の中は「空っぽ」なのだろう。肉体の到るところが抜け落ちて、何とか「黒炎」で補っているような状態。何よりも頼りないものでありながら、その姿は悍ましく何よりも恐ろしい。

進む度に、ナニかが欠けて。

進む度に、ナニかで埋める。

結果など見えている。どうあっても怪物は自滅し、息絶えることだろう。

だがそれでも———。

「

怪物は歩みを止めなかった。

世界に存在するための肉体を、内部から崩壊させようとも、満足に

石斧剣を握れずに引きずろうとも、両足の感覚がなくなろうとも、戸惑わずに歩みを進めていた。

関係がないのだ。感覚がなくなろうが、痛覚が身体中を走ろうが、怪物には関係がなかった。まだ進めるのなら、足を動かすという機能が壊れていなければ、怪物は進み続ける。動けるのなら、誰よりも進み、何よりも先へ。

そうやって怪物は進んできた。

その過程でありとあらゆるモノを手に掛けた。

この世界に跋扈するモンスター、行く手を遮る各階層のフロアボス、そして——理解者と名乗る男とその配下達。

人間性を捨てて、剣を振るい屍の山を積み重ねてきた。前に進むために、手を汚してでも、この身が汚物にまみれようとも、成さねばならない事があった。

だがそれは、何だったか。

どうして己は、剣を振るわなければならないのだったか——。

「

そうして怪物は辿り着いた。

目的地、空を飛ぶ鉄の島の最上部——未踏の第百層へ怪物は足を踏み入れる。

どうしてそこが最上部だとわかったのか、簡単な理由だった。上を見ると辛うじて見える、色彩が朧げで既に視力も満足に機能していないものの、微かに見える光。本物の空が、上空に広がっていた。

空は夕闇に染まり、それ以上太陽が沈まることはなく停滞している。地面には舗装された白い石造りの道。その先には小さなアーチ状の石橋が向こう岸にかけられており、その橋の下には弱く水流が流れている。

そして、石造りの道の両脇には花壇。様々な色合いの花が植えられて、計算し尽くされたような色彩。相反する華やかさと厳格さが、見事に融合されている。

どこかの王宮の庭園を彷彿とさせる見事な花壇。

しかし関係がないと、怪物は足を踏み出す。一步踏み出す度に整った石道を砕き、一步踏み出す度に「黒炎」が撒き散り花々を燃え上がらせる。

天国のような光景から、地獄のような有様へ。

怪物が進む度に、その光景は塗り替えられていく。

行為に戸惑いなどない。倫理観も人間性も、怪物には必要がないモノなのだから。

怪物は前を見据える。

更に奥に。アーチ状に作られた石橋の先。更に奥へと、見つめる。

来る者を威圧するかのような紅い建物。いや、建物というよりもアレは城と分類したほうが正しいのかもしれない。あの城に入ることも難しければ、出ることも容易ではない。そんな印象を叩き込むには、充分過ぎる程の紅い城。

見事な建築物とも言えるだろう。現実世界においても、彼に映っている景色は存在せず、空想の物語でも見れるかどうか、と言うほど絶佳な景色が広がっていた。

それこそが——紅玉宮。

この世界で生きる人間にとって、もう一つの到達地点。

怪物はその前に立つと、感慨もなく引きずっていた石斧剣をその門へ叩きつけた。

粉々に砕け散る石造りの大扉。差し込む光を背に受けて、怪物は紅玉宮へと足を踏み入れる。

それは存在した。

怪物が見上げるほどの巨体、女性的と呼べるシルエットであるものの、感情などは全く感じさせない巨人。純白な上半身には紅玉が埋め込まれており、その両手には大剣と大矛が握られている。

「コイツ f a v a か」

ノイズ混じりの声。

それは怪物から発せられたものであり、呼応するように巨人——
—アン・インカーネイト・オブ・ザ・ラディウスの眼に光が宿った。
これこそ、目の前にいる存在こそ、怪物が倒すべき敵。斬り捨てる
べき壁、壊さなければならぬ障害物。

ならば斬る、ならば壊す、何もかもを粉碎する。それこそが怪物の
目的、思い出すことも出来ない譲れないモノの為に、怪物は最後の力
を振り絞り剣を握る。

「退けよ。テメエ g a x a がいると a l p a a j アイツが
f a j a j 笑えない」

全く畏怖しない怪物の発言を、挑発と捉えたのかアン・インカーネ
イト・オブ・ザ・ラディウスは行動に移していた。

単純に己の力を誇示するように、片手に持つ大剣を振りかぶり、振
り下ろす。それだけで終わる、小生意気な侵入者をそれだけで圧殺出
来る。巨人にとって、この戦いはその程度のモノだ。己の住まう居住
地に侵入した虫けらを踏み潰すだけの作業。

戦いと称したが、巨人にとって闘争でもなかった。ただ目障りだか
ら踏み潰す、ただそれだけのモノ。

だが——。

「つ!!!」

目の前の怪物は、虫けらではなかった。

何合か打ち合っても拮抗する膂力を持ち、恐怖心すら存在しないか
のように巨人を肉薄していく。

数十合、数百合、数千合。

正確にどれほど打ち合ったのかわからないものの、巨人は漸く気が
付いた。

目の前の手負いの狂人は、本気で自分を殺す気でのいるのだと——

！。

「——ツッ！」

何をバカな、と否定するように巨人は雄叫びを上げて大剣を大戟を何度も振り下ろす。

時に紙一重で防ぎ、時に皮一枚で避けて、時に真正面から打ち合う。それでも怪物は——臆することなどなかった。

巨人に恐怖などない。

むしろしぶとい虫けらに嫌気が差し、苛立ちを募らせる。元よりこの戦いは無意味だ。たったの一人で挑み勝利するなど出来る筈がない程の溝と、圧倒的な戦力差が二体の間にはある。まともに戦った所で、巨人には——アン・インカーネイト・オブ・ザ・ラディウスには勝てない。勝ち目が無いのにどうして抗うのか、巨人には理解も共感もできなかった。

だからこそだろうか。

早急に決着を付けるために、巨人は行動に移していた。

雄叫びを上げると同時に、身体に埋め込まれていた紅玉が発光し、光が収束し怪物へと殺到した。

ありとあらゆる方向から、角度から、包囲するするように、収束した力は流星となり襲いかかる。

爆音、衝撃波は紅玉宮はおろか、アインクラッドそのものを揺るがした。それほどの大きな力を、虫けらと称した怪物に叩き込まれた。

これで終わった、それだけで終わった。

撒き散らされた戦塵に怪物は背を向ける。生きている筈がない、それだけの力を行使したのだ。これで生きているのなら——。

「——オイ」

その者は——

「何を g a g a 勝鬨を w a g a 上げて g a g a やがる——」

——人間ではない。

アン・インカーネイト・オブ・ザ・ラディウスが振り向いた頃には何もかもが遅かった。

戦塵から突き破って推進する怪物は、黒炎を撒き散らしながら目の前の敵へと襲いかかった。その際、強固とも言える障壁が存在したのだが紙くずのように容易く突破されて、怪物は巨人の右腕に石斧剣を突き立てた。

そしてノイズ混じりに一言。

「デメエに d e a g a 恨みはねえ——だから b a o u a 死ね」

ゾクリ、と巨人のナニかが寒気を感じ取った。

このままでは本当に、本当に殺されるという純粋な恐怖が巨人に生まれた。

そんなことありえない感情だ。ただの一人の人間に、小粒にも満たない小さな存在に、恐怖するなどありえない感情なのだ。

だが感じてしまった。

更に煽るように、怪物は巨人の片腕をなんと引き千切り、ありえない恐怖を加速させる。

巨人は無我夢中で怪物を振り払う。

怪物は壁に激突し、態勢を立て直そうとするも、そんな隙など与えなかった。

ありとあらゆる力、己の用いる全ての暴力を総動員させて、正体不明の怪物を鏖殺する。

残っている手に持つ大矛を乱雑に振るい、再び光を収束させて怪物に砲撃させて、砕かれた瓦礫を使い押しつぶす。

その際、衝撃が辺りを叩き、紅玉宮は大きく揺れ、支えていた石柱は折られていく。

しかし――

「――ッ……」

それでも、それでも――怪物は倒れなかった。

面を埋め尽くす光の収束を受けても、その身に大矛が突き刺さろうとも、怪物は倒れなかった。

倒れることを拒否するように、着実に前へ前へと、欠けた身体を“黒炎”で補いながらも確かな足取りで前へと進み続ける。

ゾツと。

アン・インカーネイト・オブ・ザ・ラデイウスは悍ましいモノを見るように、恐怖に駆られて後ろに身を引く。

それが怪物と巨人の明暗を分けることになった――。

怪物の視界が明滅し始める。

身体は思いの外軽い。身体の大部分が消し飛んでいるからだ、と怪物はぼんやりと分析していた。幸いといえるのだろうか、痛覚などは既に機能していなかった。

そのおかげなのだろうか、身体が軽くなった分、歩みが早まり――。

「――」

――アン・インカーネイト・オブ・ザ・ラデイウスを殺すことが出来た。

横たわる巨人を眼にしても、怪物は感慨もなくただ視線を移していた。達成感も虚無感も、徒労感もない。ただ何の感情もなく、見つめ

るのみである。

欠片でもあつた感情は、アン・インカーネイト・オブ・ザ・ラディウスを殺すために何もかもを犠牲にされていた――。

「君」

ふと、何者かの声が怪物の耳に入った。

誰かの名前なのだろうが、怪物には全く聞き覚えがないモノだ。それその声は、「聞いたことがない」声である。

故に怪物は反応しなかった。自分ではないと思つたから、聞き流していた。だが――。

「君」

何度かその名前が呼ばれる。

視線を送ると、何者かがそこに立っていた。ぼんやりと見えるその人物は男なのだろうか。

ただ見覚えがあつた。フード付きの真紅のローブを纏つた謎の人物に、怪物は見覚えがあつた。

それはいつの記憶だつただろうか。

見覚えがない広場に集められて、何かを告げられて、そして自分を殺せばこの世界から抜け出せる。そんな事を告げたモノと、それはよく似ていた。

ならば――。

「――」

――殺す。

怪物は一息に詰めると、文字通りその身体に石斧剣を突き立てた。躊躇もなければ、戸惑いも一切ない。迷いなく一息に刺突し、絶命させてみせた。

かろうじて見えたローブの男の口元は悲痛に歪んだ形跡はない。
だが一言だけ告げていた。――すまない、と。
その瞬間――。

――ゲームはクリアされました――

そんなアナウンスが鳴り響いた。

怪物はそれにさえ反応を示さない。己の獲物であった『石斧剣』
にすらも、死闘を繰り広げたアン・インカーネイト・オブ・ザ・ラディ
ウスにも、既に消えたローブの男にさえも意識を向けていなかった。
もう一歩も動けない。

一心不乱に前に進んでいた両足は何処にも動かなかった。

既に目的は済ませた、進むべき場所へ到達した。ならばもう、歩み
を進めることもない。

だが思い出せない。譲れないものがあつた筈だ、我慢が出来なかつ
たナニかがあつた筈だ、なのにどうして、自分は何のために、こんな
姿になつてでも、どうして自分は――剣を振るってきたのか。

「くんッ！」

声が聞こえた。

それは入り口から、少女の声。ローブの男と同じ名を呼ぶ声が聞こ
えた。

ふと、そちらへ視線を向ける。

三人の人影が会った。

見たことがない一人は黒髪の少年、一人も見たことがない桃色の頭
髪の少女、もう一人は――見たことがある栗色の頭髪の少女。

途端に、ギチギチと音を立てて第一関節の役割を補っていた黒炎が
消失し、前腕が地に落ちる。

それを皮切りに、ツギハギだらけの身体が、だましましで動かし
ていた身体が、頭になっていく。兜は砕け散って、怪物の素顔が始め

て世界に露出した。

眼を役割をしていない眼球は濁っている、顔の半分は黒く削られて、辛うじて無事である半分の顔と金色の頭髮で、怪物が誰なのか判別できた。

「うそ……」

ぺたん、と膝から栗色の少女は崩れ落ちた。

眼を見開き信じられないモノを見るように、口元を震わせて、怪物を見ている。その眼に色濃くあるのは——絶望。眼からは大粒の涙を流し、うわ言のように「うそ」と繰り返していた。

「いやよ、いやだよ、どうして　くん。わたし、わたし」

「アスナツ……!」

桃色の頭髮の少女が、抱きしめるも少女は怪物を真っ直ぐに見つめるしか出来なかった。

「そんなことをして、こんなことをして、俺達が……、喜ぶとツ……
思ったのかよお前!　答えろ、答えろよ　ツ!」

黒髪の少年の涙を流していた。

ただその眼には悲しみだけではない、怒りも覗かせている。怪物の振る舞いが許せないのだろう。

この三人が誰なのか、自分と関わり合いがあるのか、怪物には思い出すことが出来なかった。

だがどういうわけか、彼女達にはそんな顔で、泣いていてほしくなかった。そんな顔を見るためじゃない、彼女達にはもっと笑っていてほしかった、なのにどうしてこうなってしまったのか。

自分が剣を握ったのはそんな顔をさせるためじゃないのに、どうして——。

——ああ、そうか。

そこで、漸く。

自分の目的を、怪物は思い出す。

戦ってほしくなかった、無茶をしてほしくなかった、傷ついてほしくなかった。それだけの願いだったのに、何を間違えてしまったのか。

恐らく、最初からなのだろう。

自分が彼女達が——名前も思い出せない栗色の頭髮の少女に剣を握ってほしくなかったから、ここまでやって来た。それが間違いだっただろう。

話し合うことを拒否し、自分だけが傷つくことを良しとし楽な方へと逃げた、最初から選択肢を誤ってしまった。

その結果がこれだ。

また彼女を泣かせてしまった。

彼女の身体が光の粒子に包まれる。

それこそが現実世界へと帰還するための合図。仮想世界から抜け出す為の光である。

「いやだ……い！」

彼女は駆け出した。

帰還することを拒否するように、怪物へと駆け寄る。

涙を流しながら、震える声で、必死に仮想世界から消えることを抵抗しながら——。

「いやだよ、こんなのいや！ わたしは——」

「——明日奈」

ポツリ、と怪物は呟いた。

良かった、思い出すことが出来た。と怪物はただ安堵した。己の名前は最後まで思い出すことが出来なかったが、彼女の名前だけは思い出すことが出来た。

彼女にはいつも世話になっていた。

結城明日奈、それが怪物の光の象徴の名前——。

「オレの我儘に、またオマエを泣かせた」

「そんなこといいよ、謝らないでよ。いやだよ、一緒に居てよ。これからも……」

「そう、だな」

伸ばした手に応じないまま。

怪物は口元に笑みを浮かべた。これから彼女が罪悪感に負けないように、これらかは笑って生き抜くことを願って怪物は、少年の笑みを浮かべて。

「悪いな明日奈。泣かすのは——これで最後だ」

彼女が叫ぶ。

怪物の名を呼んで叫ぶ前に、世界は光に包まれた。

世界中を震撼させたソードアート・オンラインはこれにて幕を閉じる。

最終的な死亡者数は514名。その中には創造主たる茅場晶彦の名が連なり、一人の少年の名前も刻まれていた。

前代未聞の犯罪者、茅場晶彦の甥である少年の名は——茅場優希。

第1話 それから

—— 辺りに、劍戟が鳴り響く。

緑の草原、街並みを見下ろせる丘で、俺達はぶつかり合っていた。打ち合わせた剣の火花、真剣同士で相対する特有の雰囲気、押し合う裂帛の気合。

何十合、何千合、数えるのすら忘れた攻防。もしかしたら気付いていないだけで、万は到達しているのかもしれない。

俺の両手には二振りの剣—— 漆黒の直剣『エリユシデータ』と純白の直剣『ウエイトウザトウル』が握られている。

対する「アイツ」は両手剣—— 『アクセルワールド』を油断なく構えていた。

戦法は対照的。

手数で押す俺に対して、「アイツ」は一撃に重きを置いている。

多撃必倒の俺に対して、「アイツ」は一撃必殺。相手の仕掛けを見てから合わせる後の先である俺に対して、相手よりも先に仕掛ける先の先である「アイツ」。

何もかもが正反対で、喧嘩ばかりしていた俺達であるが、剣の打ち合いにかけては気があっているようだ。

「アイツ」は俺が動くよりも先に動き、それに俺が合わせてカウンターを入れようと剣を振るう。

しかし、仕留めたという確証は俺にはなかった。俺が皮一枚で避けた所で、紙一重で「アイツ」は防いでくる。

俺の予想通り。

「」

時に両手剣で、時に出鱈目な動きで、時に俺の剣を殴りつけて、

アイツ”は尽くを防いでみせた。

まったく全てが例外過ぎる。思わず苦笑を浮かべる俺は健全であると思う。

一度、聞いたことがある。

どうやってお前は、攻撃を防いだり避けたり出来るのか、と。

先読みをしているわけではない。ましてや攻撃パターンを読んでいるわけでもない。だからこそ気になった純粹な興味。

だが”アイツ”は何気なく言った。

——勘——と。

ありえない返答であった。

命と命のやり取りをしている状況において、自分の感覚を頼る剣士は少ない。

ましてやヒットポイントがなくなれば死に直結する現状において、そんな命知らずは存在しないだろう。

みんな死ぬのが嫌に決まっている。嫌だからこそ危険がないように行動し、行動しているからこそ第六感といった説明のつかない感覚には絶対に頼らない。

だが”アイツ”は頼った。

己の感覚を頼りに、今まで剣を振るってきた。その結果で何度も何度も死にかけるも、”アイツ”の感覚は研ぎ澄まされていった。

極限での命のやり取り、何度も死に追い込む死滅願望、あつてはならないほどの自己犠牲の精神。常人では真似できない戦闘経験を積んだが故に、”アイツ”の直感はある種の『技術』^{スキル}と呼べるほどまでに完成していた。

現に、俺の剣を何度も防ぐ。見えていない筈なのに、俺の剣を殴りつけて無理矢理軌道を逸らすという無茶苦茶もやってのけている。

必殺を確信した攻撃が、”アイツ”には造作もなく皮一枚で防がれ避けられる。

それを何度も繰り返した。

少しでも気が抜けば斬られ、僅かでも”アイツ”が一息入れたものなら斬る。

そんな極限の勝負を俺達は行っていた。
飽きたことなど一度足りともない。

むしろ、俺は楽しかった。今まで鍛錬し、経験を積み、己の剣術を磨いてきた。それをぶつける相手が目の前にいる。それはとても幸福なことだろう。

ありとあらゆる手を使い、手練手管を屈指して、目の前の相手に勝ちたい。

もしかしたら、俺はこのために、己を高めてきたのかもしれない。

“アイツ”に勝つために、“アイツ”を超えるために、“アイツ”と並び立つために、俺は自分の腕を磨いてきたに違いない。

そうだ、デスゲームなど状況でしかなかった。“はじめりの英雄”などと持て囃されたところで、俺は何も変わらない子供のままだ。この世界から脱出するためにレベルを上げていたのも理由の一つだろう。だが根底にあるのはその程度の理由だ。簡単で、シンプルで、この状況下では不純であるもの。

全ては、目の前にいる男と、戦う為にあつた――。

『？――！』

それは“アイツ”も同じ気持ちなのだろう。

何せ“アイツ”は――笑っていた。普段は面倒くさそうに、仏頂面で、目付きが悪い“アイツ”が今では楽しそうに、獰猛に笑みを零している。

愉しいのだ。

俺と同じく、強さを比べることに心が踊り、気分が高揚しているのだ。きつと俺も、“アイツ”と同じ顔をしているのだろう。

“アイツ”と剣を打ち合うことが、強さを比べることが、ギリギリの勝負が、堪らなく楽しかった。

先程の“アイツ”の言葉は、残念ながら俺の耳には入ってこない。

そこまでの余裕が俺にはなかった。聴くくらいならそれ以上に剣で返し、神経を聴覚に回さずに他の器官へと集中していく。

「アイツ」の言葉は聴こえない。

長い付き合いだ、何度も喧嘩をしてきた仲だ、不本意であるが何となく言いたいことがわかる。

俺を挑発しているのだろう。

その程度か、と。

そんなものか、と。

「アイツ」は俺に発破をかけているのだろう。

この程度の筈がない、まだまだ俺はやれる。

何度目かの攻防で、幾度も繰り返してきた打ち合いに、漸く俺達は距離を開けた。

「アイツ」は構える。

両手に『アクセルワールド』を持ち、剣先を天に向かって、柄を顔の横に構える。

何度も眼にしてきた「アイツ」本来の型。一撃で何もかもを一切合切粉碎する必殺の構え。

「――」

背筋が凍りつく。

冷や汗が流れるのを感じ取り、俺は素直に己の感情を認めた。

恐怖しているのだ。「アイツ」が構えるのと同時に、足が竦みあがり、両手に握っていた二振りを落とすようになる。

それでも、逃げるわけにはいかない。

真正面から「アイツ」に勝たないと意味なんてない。俺は自分を奮い立たせるために笑みを零す。

一泊の間が流れ、一陣の風が俺達の間を流れた。

――合図はいらなかった――。

同時に駆け出す。

最速で走破する俺。

最短で推進する「アイツ」。

自分の方が速い——アイツは確信する。
俺の勝ちだ——俺は理解する。
斬、という音が辺りを木霊する。
結果は——。

そこで、ふと目が覚めた。

目に入ったのは見慣れた天井。耳に入るのは聴き慣れた妹の自分を呼ぶ声。

ここは緑の草原でも、街並みを見下ろせる丘でもない。ましてや両手には剣なんてものは存在しない。

身体を起こして、寝ぼけながらぼんやりと辺りをを見渡す。

ここは現実世界における俺の家であり、この一室は俺の部屋だ。

六畳の部屋、床は天然木のフローリング、机にはパソコンとシンブル過ぎる家具に我ながら苦笑を浮かべる。

周囲を視線を這わせて、とある場所に眼が止まった。

立て掛け式のウォールラックの中段、古ぼけた濃紺のヘッドギア。数ヶ月前まで自身の頭に装着されていた悪魔の装置。それこそが——

『ナーヴギア』であった。

その存在が、教えてくれる。

この世界は現実であると。自分は現実世界へ帰還したことを、自分が『キリト』ではなく『桐ヶ谷和人』であると教えてくれた。そのおかげか、寝ぼけていた思考も徐々に鮮明になっていく。

先程見ていた自身の光景を夢であると片付けて、悔しそうに思わず呟いた。

「またアイツに、勝てなかったな……」

.....

起きた俺は、家の敷地内にある道場へ足を運んだ。

母屋の離れにある小さな道場。無駄に広い我が家の敷地の中に、ポツンと存在する道場は謎の存在感を醸し出していた。近所を見ても、道場がある家はうちだけだろうと自負している。

俺はただ道場へ足を運んだだけではない。動きやすいようにジャージに着替えて、右手には竹刀が握っていた。現実世界に帰還してからというもの、俺はこうして竹刀を握り昔にやっていた剣道をするようになっていた。

とはいっても、純粋な剣道ではない。むしろ真剣に剣道をやっている人間からしてみたら、俺のそれはあまりにもふざけているように見えることだろう。

何せ、本来の剣道の型は中段に構えるのが常識だ。

だが俺の構えは違う。右足を前に半身に構え、腰を落とし右手に持っている竹刀の剣先を床板に向ける。

審判がいれば叱られるであろう構え。正々堂々行う武道などとは程多い、実践を想定したモノ。あの世界にいたときのように——真剣を手に行っている気持ちで俺は竹刀を振るっていた。

それから何度も振るう。

本来であれば、竹刀を右手と左手に持ちたかつたのだが、今の俺ではまだその領域には達していなかった。つまるところ、短時間でバテてしまいとてもではないが鍛錬にならない。

だからこそ一本で、何度も竹刀を振るう。

何度も眼にした“アイツ”のように、黙々と剣を素振りしていた“アイツ”のように、俺も竹刀を振るい続けた。

だが俺の素振りは“アイツ”とは違う。何が違うのかと言うのなら、心構えが違うのだ。

純粋に鍛錬を目的とする“アイツ”とは違い、俺は不純なものだ。

確かに鍛錬としての目的もあるが、根本として俺は誤魔化しているのだ。今ある現実から、どうしようもない状況から、俺は逃げているだけに過ぎない。

だからこそ、夢の中で「アイツ」に負け続けるのだろう。

邪念なく空っぽにしないと、とてもではないが勝てる相手ではない。なのにもかかわらず、俺の心は邪念ばかり。

「ハア、ハア、ハア……ッ！」

そして俺は竹刀を振るう。

振り払うために、心に這い寄る不安感を斬るために、全力で俺は竹刀を振るい続けた。

流れる汗を拭うこともなく、ボタボタと汗が流れて床に落ちていく。

「よし、もう十本行くか」

なんてことはない。

これよりも多く、剣を振るうバカを見てきたのだ。あのバカに出来て俺に出来る筈がない。

再度俺は竹刀を構える。右腕に乳酸が貯まり、発火したように熱いが構うことはない——。

「やりすぎだよ……」

道場の入り口から、呆れたような声が聞こえた。

見覚えがある顔だった。いいや、見覚えがあるなんてモノじゃない。一つ屋根の下で暮らしている、俺の妹であるスグ——桐ヶ谷直葉が道場の入り口に立っていた。

身にまとっている白い道着と黒袴を見るに、これから稽古を始めることがわかる。

スグはやれやれ、と言った調子で首を横に振る。
その際に肩口で切りそろえた黒い髪が揺れ、太い眉をハの字にして
困ったように笑みを零して言った。

「お兄ちゃん、どれくらいやってたの？」

「どれくらいって……」

壁に立てかけてある時計に目をやると、朝の八時を回っていた。
確か六時くらいに道場に籠っていたから――。

「えーっと、二時間位？」

「それまでずっと竹刀振ってたの？」

うん、と俺は無言で頷いた。

それを見たスグは、ハアと深く深く、それはもう深いため息を吐い
た。

「また剣道を始めてくれたのは嬉しいけどさー、お兄ちゃん頑張り過
ぎだと思っうな」

「そうか？ って、ちよ――！？」

そう言うと、スグは俺に向かって水が入ったペットボトルとタオル
を同時に投げて寄越した。

俺が慌てるのも無理はないだろう。

順番に投げるならまだしも、同時とはいかなるものだろうか。正直
な話し、試されているとしか思えないとお兄ちゃんは思うわけだが。

しかし反応できてしまう。

右手に持つ竹刀を落すことなく、左手でペットボトルを掴み、小指
でタオルを引っ掛ける。

「コラ、同時に投げるヤツがいるか」

「ごめんごめん。でもさ、お兄ちゃんなら反応すると思つて」

悪びれる様子もない妹に、ジト目で睨みつける俺は悪くないと思う。

とはいっても、目くじらを立てるモノでもない。これはスキンシップなものであり、俺達兄妹の悪巫山戯のようなものだ。

だからこそ、俺も反撃することにする。

「頑張りすぎて言うのなら、スグもだろ?」

「え?」

「遅くまでVRMMOやってた癖にさ。アルフヘイムのリーファだっけ?」

「ちよ、ちよつとお兄ちゃん!?!」

慌てるスグを見て、俺は笑みが溢れる。我が妹ながら、本当にいじりがあるというものだ。ここまで求めていたリアクションをしてくれるとは思わなかった。

そう。

スグはVRMMOに現在どっぷりハマっている。

俺の記憶では、そういうことには全く興味がなかった筈なのだが、どういうわけかスグは夢中になっていた。理由を聞いても教えてくれない辺り、それほど重大な理由なのだろう。

少しだけ恥ずかしそうに口を尖らせて、スグは小さく抗議する。

「リアルで名前出さないでよ。何か恥ずかしい……」

「ハハッ、悪い悪い」

そう言う俺は投げられたタオルで汗を拭くと、竹刀を壁に立てかけて、素直な感想をスグに呟く。

「でもさ、リーファってプレイヤーネームも可愛いし、別に恥ずかしが

ることじゃないと思うけどな」

「もう、お兄ちゃん！」

むーっと膨れっ面になるスグを見て、俺は思わず苦笑を浮かべる。これ以上は拗ねる、俺の今までの経験が告げていた。

今ではこうして、VRMMOの話題を気軽に言い合えるが、最初はそうではなかった。

スグとしても、俺に気を使っていたのだろう。何せ自分の兄はそのVRMMOに囚われたのだ。そんな自分が今では夢中になっており、それを話題にするのは無神経過ぎると考えていたのだろう。

ホント、優しい奴だと思う。

確かに辛いことも、苦しいことも、投げ出したいこともあった。

それでもあの世界はそれだけではなかった。だが等しく楽しいこともあったし、何よりもかけがえのない仲間達にも出会えることが出来た。

あの世界を経験し、今の俺がある。それを『嫌な思い出』と一言で片付けたくないし、したくもない。

そこまで考えて、俺は膨れっ面で剥れている妹に近付いて、頭を撫でる。

んっ、と目を細めるスグ。本当にコイツは頭を撫でられるのが好きだな、と思いつつ何気なく俺は言う。

「しかし、アルフ Heim オンラインだっけ？ 面白いのか？」

「アル ヴ ヴ Heim・オンラインだよ」

「それぞれ。それで面白いの？」

「んー、面白いと思うよ？ 飛んだり出来るし」

「飛ぶ？」

イマイチ要領を得ない俺は、思わず首を傾げた。

飛ぶとはどういうことだろう。そのまんまの意味なのか、何かしら

の比喩なのか。

ゲーマーとして気になるし、興味が無いと言えば嘘になる。だがソフトを買って、俺も始めようとは思えなかった。

原因は、わかってる。

スグは顔を笑顔に変えて俺に向ける。

言いたいことは何となく分かっていた。

「ねえ、お兄ちゃんもやってみない？」

「――」

別にVRMMOを恐れているというわけでもない。

現在『ナーヴギア』の後継機として販売されている『アミユスファイア』を使えば、簡単に手軽にプレイ出来ることだろう。

仮想世界に閉じ込められる心配もない。安全面を改修し、強化したのが『アミユスファイア』だ。これまでに『ナーヴギア』のように脳が焼けきり死亡したというニュースはない。

恐怖と隣り合わせだった状況とは違い、それはもう楽しく俺が本来味わいたかったVRMMOを気兼ねなく楽しめることだろう。

だが――。

「――いいや、俺はいいかな」

「あつ」

やんわりと首を横に振った俺を見て、スグは何かを察したように両手を口に当てる。

まいった。そんなつもりはなかったのだが、気を使わせてしまった。

案の定、スグは気不味そうに慌てて。

「ご、ごめんお兄ちゃん。あたし……」

「いいんだ、スグは悪くない。誰も、悪くないんだ……」

.....

あれから俺は、スグと軽く試合をして、シャワーを浴びて自転車を漕いでいた。

気分転換に興味であるサイクリングを楽しんでいる、と言うわけではない。目的があり、その場所を向かうために、俺は自転車に乗っている。

目的地まで、片道十五キロ。

往復をすることを考えても、結構な距離である。

最初は酷いものだった。片道だけでへばってしまい、帰り道を走る頃には毎度疲れ果ててしまい、夜にはグツスリと眠りに落ちる。文面だけで言えば、かなり健康的な生活を送っている。だが数ヶ月前までは寝たきりの生活を送っていた身としては、かなり無茶をしているし、その自覚はある。

今となっては軽快なものだ。

リハビリがてら新調したマウンテンバイクのペダルを苦もなく回す。もしかしたら、寝たきりになる前よりも筋力がついているのかもしれない。ネットゲーム三昧だった頃に比べると、だいぶ体力も上がっている。

それでも。

「暑いな……」

ぼんやりと呟いて、ジリジリと照らされる日を睨みつける。

筋力もついた、体力も上がっている、健康的な生活を送っているつ

もりだ。それでも、暑さには勝てそうにない。

これでもかと降り注ぐ日光に対して、俺は為す術なくその身を晒していた。

どうやら今日は猛暑日というやつらしい。

すれ違う人を見ても、全員うんざりするように歩いている。全員が薄着で、なるべく日陰の中を歩こうと努力している人もいる。

俺が出来ることと言えば、なるべく早めに目的地に到着できるように必死にペダルを回すのみである。

悪態をついたところで変わらない、太陽を睨みつけた所で気温が下がるわけでもない。だったら足掻くしかない、この状況をなんとかしようと努力するしかないのだ。

そうして、俺は辿り着いた。

目的となる場所は広大だ。都内と比較しても、いいやもしかしたら日本中を探しても、ここまで広い敷地を有する機関はないかもしれない。

そう思わせる駐車場の片隅に、俺は自転車を止めてその建物へ向かう。

目指していた場所は何か。俺の目的地、巨大な建物、埼玉県所沢市の郊外にある高度医療機関、つまるところの——病院である。

通院しているわけではない。

身体には何も異常はないし、病気を患わっているわけでもなかった。それでも俺はこの病院に用があった。

一階にロビーに向かう。

受付で通行パスを発行しても並ばなければならぬのだが、どうもまだ慣れそうにない。まるで高級ホテルのような受付、言ってしまう俺は気後れしまっている。圧倒されていると言っても良い。

それも仕方ないだろう。ブルジョア出身ならまだしも、俺は何処にでもいる小市民だ。そんなどこにでもいる男に、慣れるというのが酷な話ではなからうか？

受付で通行パスを発行してもらった俺は、エレベーターに乗る。

そして数秒で、最上階である十八階に到達した。あの世界でも拠点していたのは第十八階層だった、そして今回も十八階。もしかしたら何かジंकウスでもあるのだろうか、と俺は下らないことを考えながら扉の前に立つ。

病室の主たるネームプレートを見やる。

それは二人の名前も文字が刻まれていた。

口元をギョツと閉じて、俺は何かを期待していた。

もしかしたら起きているかもしれない、もしかしたら二人は談笑し合っているかもしれない。取り留めのない会話をして、入ってきた俺に気付き、一人は笑顔で出迎えてくれて、一人は悪態をつきながら応じてくれるかもしれない。

そんな淡い期待を懐きながら、俺はドアをスライドした。

そんな期待は――。

――

見事に打ち砕かれることになる。

誰もいない病室、今も起きそうな顔で寝ている二人の存在、二台のベッドにそれぞれに身を預けている二人。

どうしようもない現実を、俺は受け止めるしかなかった。

奇跡など訪れない。願った所で叶うはずもなく、二人が起きるはずがないのだ。

不甲斐ない。何も出来ない現実を認めたくなくて、誤魔化すように俺は辺りを見渡して。

「今日は俺が一番乗りか」

かなりの頻度で見かける「アイツ」の後輩の姿がないことを確認すると、虚しく独り言を呟いた。

「嘘つきめ、何がオレには帰りを待っている人間はいないだ。いるじゃないか、お前にも待っている人達が」

今も寝ている金髪の男に、向けて吐き出されたことだった。

それが幼馴染の家族であり。

それが朝田という彼の後輩であり。

それが行きつけの店長の家族であり。

それが「アイツ」の義妹であり。

確かに「アイツ」を待っている人達は存在した。きつと「アイツ」は何も見えていなかったのだろう。何も見えていなくせに、自分の命を投げ出して無茶をし続けたのだろう。

前しか見てないから、他のことには眼がいかないんだ。

「こんなバカが幼馴染で苦労するな？」

今度は「アイツ」の隣のベットで寝ている女の子へと話を振る。

あの世界でこんな事を言えば、彼女は困ったように笑みを零し、「アイツ」は俺に喧嘩を吹っかけてきていただろう。

だが今はそんなことはなかった。俺の独り言は虚しく、誰も反応すらしない。

「また来たよ、アスナ」

寝ている一人の少女——結城明日奈に話しかけて。

「お前は帰れっていうかもしれないけどな」

寝ている一人の男——茅場優希に話しかける。

邪念があったのも、スグの誘いを断ったのもこれが理由だ。

まだ終わってない。俺達の戦いは、まだ終わってないのだ。

俺達のソードアート・オンラインは——まだ、終わっていない

かつた――。

2024年8月15日 AM 11:51

埼玉県所沢市 病院 アスナとユークの病室

第2話 須郷伸之

——俺が思っているよりも有名人であることを自覚したのは、この世界から帰還してから直ぐのことだった。

茅場晶彦によりデスゲームと化したVRMMO——ソードアート・オンライン。ゲームでの死は、現実世界での死に直結する非常な状況で、俺達は必死にクリアを目指し剣を握りあらがって来た。しかし何とかしようとしていたのは何も俺達だけではなかった。もちろん、外の世界。つまりは現実世界でも同じように、とある団体が結成されて何とかしようと動いていた。

そのとある団体こそが『総務省SAO事件対策本部』である。大層な名前であり、何をするのか明確になっており実にわかりやすい。

彼らはSAO事件勃発後、直ぐに結成された。事件発生後の対応は早かつたらしい。ソードアート・オンラインに囚われている一万人近くのユーザーを最寄りも病院へ搬送し、それから万全の状態で受け入れ、健康状態を観察する。

だがそこまでだった。

俺達が必死に生きてきた一年と数ヶ月、外部からアクションが何もなかったということはつまりはそういうことだろう。

有り体で言えば、手も足も出なかったようだ。

それも仕方ないのかもしれない。何せ相手は天才茅場晶彦だ。その程度のことは計算に入れているだろうし、下手にサーバーに手を出したものなら何が起るかわかったものじゃない。

最悪、囚われているユーザーの脳を全て焼き切る結果になるかもしれないのだ。彼らも迂闊に手が出せなかったのだろう。

彼らに出来ることと言えば、俺達の健康管理、そして——限られたプレイヤーのデータを追うことくらいしか出来なかった。

限られたといっても、選別は実にシンプル。それはレベルが高いプレイヤーである。そう言うわけか、俺が攻略組であることが彼らには筒抜けであったようだ。

俺としても何て言えばいいのかわからない。

クリアして現実世界に還ることも考えていた。だがそれよりも、勝手に突っ走るバカを止めるために剣を振るい、いつの間にかレベルが高くなっていった程度の認識しか俺にはなかったのだから。

それがどう言うわけか、俺達『加速世界』アクセル・ワールドが攻略組の希望だったとか、アインクラッドに欠かしてはならないギルドであった、と言われてもピンと来なかった。

俺達は誰よりも自分勝手だ。好きに行動して、失敗し、ぶつかり合っている、その結果がいつの間にかそんな立ち位置になっていた。良い迷惑——とまではいかないものの、素直に受け入れ難いモノがある。

そんな俺の心境を知らずに、突然意識を取り戻した役人達は、色々俺に問いを投げてきた。

どうして意識を取り戻したのか、一体何があったのか、茅場はどうしたのか。

俺も全て答えられるわけがなかったし、何よりも茅場がどうなったか、ついで最後までわからなかった。

「アイツ」が、どのようにして決着を付けて、あの場面で何があったのか、俺も知りたかった。

しかしそれは明かされなかった。

突如として意識を取り戻したSAOユーザー達の中に——「アイツ」の姿はなかったのだから。

「アイツ」だけではない。その幼馴染、アスナも意識を取り戻していないようだった。最初は俺も楽観していた。タイムラグか何かだろうと考えているが——「アイツ」とアスナは目を開けることはなかった。

二人だけではない。

301人のSAOユーザーが目を覚ましていないのだ。

世間では行方不明の茅場晶彦の陰謀であるとか、目を覚ましていないユーザーは今もソードアート・オンラインをプレイしているだとか、説得力がない論争を繰り返している。

原因は未だに不明。いつ301人が意識を取り戻すかもわからない

い。

だがこれだけは言える。俺達のソードアート・オンラインは終わって
ていのだ、と――。

死亡者――612人

未帰還者――301人。

.....

2024年8月15日 PM12:51

埼玉県所沢市 病院 アスナとユーキの病室

ぼんやりと、外から景色を眺めていた。

空は晴天で、雲ひとつ見られない青空が広がっている。病室は冷房
が効いているからか、丁度良い温度が保たれていた。

ここで日向ぼっこをすれば、だいぶ気持ちよく昼寝できるだろう
な、とぼんやりと考えて通路側にあるベッドに視線を向けて俺はぼや
いた。

「そんなことしたら、お前に怒られるか」

苦笑混じりに呟いた言葉に、通路側のベッドで寝ている金髪の少年

――ユーキは何一つ反応を見せなかった。

当たり前だ。アイツは意識を失っている。規則正しい寝息を立て
て、普段の目付きの悪さをどこへやったのか、極めて穏やかに眠っ
ている。

俺の悪態に目を覚ますかもしれない、何て思ったことはない。

期待をしていなかったと言えば嘘になる。いつだって規格外だった男だ。もしかしたら、「うるせえよ、ヘタレ剣士」と不機嫌そうに悪態について目を覚ますかもしれない。

だがそんなことはなかった。現実は何も変わらない、アスナもユキも意識を失ったまま目を閉じていた。

「まいった……」

自然と言葉が出る。

ふらりと俺は外が見える窓際に背を預けて、拳を握りしめてうつむいた。

現実から目を背けるように、俺は情けない声を漏らす。

「俺、だいぶキてるな……」

頭に渦巻くのは、最悪な光景。

このまま一年が過ぎて、二年過ぎて、五年過ぎて、十年過ぎても二人が目覚めない最悪な光景。

いいや、目覚めないだけならまだいい。ある日突然、ナーヴギアが作動し二人の脳を焼き切る、そんなあつてはならない光景が頭を過る。

「なにが、はじまりの英雄だ。なにが、攻略組の希望だ」

瞳から涙が溢れそうになるも必死に堪える。何も出来ない自分が嫌になる。

俺は何も出来ない。どれだけレベルが高かろうが、名の知れた剣士だろうが、それはあの世界での話だ。今は何も出来ない子供、取るに足らない人間に過ぎない。

第一層の『ホルンカ』で、一人押し潰されそうだった俺に二人は声

をかけてくれた。

もしかしたらあのまま、心が折れていたかも知れない。そんな俺に手を差し伸ばしてくれた二人に、俺は何も出来ない。

俺には——何も、救えない——。

顔を伏せていると、耳にドアの開く音が聴こえた。

時間は昼過ぎ。この時間帯から来る人間は限られている。ユーキの後輩である朝田って女の子か、エギルの娘であるレベツカ。もしくは——

「桐ヶ谷君、今日も来てくれたのか」

顔を上げた俺に眼に映ったのは、仕立てのいいブラウンのスリッピーを着る恰幅の良い初老の男性であった。

この人と会うのはこれが初めてではない。何度もこの病室で顔を合わせて、何度か会話もした。この人物はアスナの父親——結城彰三である。

アスナが良いところのお嬢様であることは、あつちの世界で話している聞いていた。だが、まさか総合電子機器メーカー『レクト』のCEOの娘であるとは予想もしていなかった。

そんな立場も感じさせない彰三さんは顔をほころばせて「よく来てくれたね」と気安い口調で言い、俺は頭を下げた。

「お邪魔してます、結城さん」

「邪魔なんてとんでもない。明日奈と優希の友人だ、いつでも来てくれたまえ」

彰三さんはアスナの枕元の近付くと、彼女の頬を撫でて、隣に寝ているユーキへと視線を向ける。その表情はどこか悲痛な面持ちであった。きつと俺も、あんな顔をしているのだろうか。

だが俺と彰三さんは違う。

彼は直ぐに表情を柔和な笑みに変えて、来訪者である俺を気遣っ

た。彼も余裕が無いはずだ、娘が未だに目覚めず胸が張り裂けそうな心境の筈なのに、俺に向ける表情はそれを一切感じさせない。

これが大人の態度なのだろう。アスナの優しさは、彰三さん譲りのようだった。

「君は友達思いのようだね」

「友達、ですか……」

「ん、違うのかね？」

彰三さんは不思議そうに首を傾げた。

無理もない。結構な頻度で俺は二人の様子を見に来ている。俺の仮想世界での立ち位置も、彰三さんはわかっている。攻略ギルド『アクセル・ワールド加速世界』のギルドメンバー、つまるところのアスナとユーキの間。となれば、文字通り苦楽を共にした友人のように見えることだろう。

今もなお目覚めない仲間の安否を気遣っているように見える筈だ。もちろん、その気持はある。だが――。

「友達と言っているのか、俺にはわかりません」

「そうなのかい？」

「はい。アスナさんとは良い友人関係だったと思います。でも――」

そこまで言うと、チラツと俺はユーキを見た。

友達、と二文字で表すには俺達は歪だ。目を合わせれば喧嘩をして、言い争いをして、最終的に剣で決着をつける。そんな友達など何処にもいない。友達の定義に、俺達は当て嵌まらないだろう。

「ユーキ、君とは……正直わかりません。俺達は喧嘩ばかりしてきました。傍から見たら俺達は友達のように見えなかった……と思います」

「喧嘩、か……」

意外そうに呟いた彰三さんの口元には笑みがあつた。ふふつ、と面白そうに笑みをこぼした彼は口を開く。

「私はね、桐ヶ谷君。優希が自ら進んで争う姿を見たことがなかったよ」

「そう、なんですか？」

「ああ。優希が喧嘩をするのは……そうだね。明日奈が絡んでいた時くらいのものだったな」

懐かしむような口調で、彰三さんは続けた。

「明日奈達が小さかった頃の話しだ。二人は何処に行くのも一緒にね。優希が歩くと、その後ろを明日奈が追いかける。明日奈が近所の子供に意地悪されたと聞くと、優希は倍にしてやり返したころもあった」

「それは、目に浮かびますね……」

俺は素直に感想を漏らすと、彰三さんはそうだろうと笑みを浮かべる。

「少なくとも私の記憶では、優希からは喧嘩の火種を持ち込んだことなかったよ。それが君相手にムキになっていたとはね」

「意外、ですか？」

「余程、君に負けたくなかった見える」

クスクスと、笑みを浮かべて彰三さんは諭すような口調で言う。

「友人か、そうでないか。それは慌てて答えを出すモノでもないだろう。君達の物語はまだ続く、優希を敵と見るか、競争相手と見るか、そ

れとも友人と見るか。今はわからないままでもいい。ゆっくり答えを見つけないさい」

「……………」

大人の意見である、と俺は思う。

わからなくてもいい、急ぐ必要はない。これで最後、というわけではないのだ。これでユーキが目覚めないまま終わる、なんてことをこの人は考えていない。

どんな状況でもいつだって希望を胸に、いつの日か二人が目覚める日をこの人は望んでいる。

強い人だ。

家族とその親しい人間が今も目覚めないのに、これで終わりではないと前向きに言える。

希望的観測、楽観主義、何て言うつもりはない。結城彰三という人物は現実を認識し理解した上で、まだ終わりではないと言うことが出来る。

この人もまた、俺にはない強さを持っていた。

ユーキとはまた違う、前を向く強さを。

「そう、ですね」

沈んでいた心が、冷めていた心が、再燃するのを感じる。

どうかしていた。

今にも自分の顔をぶん殴りたいが必死で堪える。帰ったら何発もぶん殴るとしよう。

俺が信じないでどうする。アスナが、ユーキが目覚めるのを、俺が信じてやれないでどうする。

そんな当たり前のことを教えてくれた彰三さんに、俺は深々と頭を下げた。

きつと、彼にはわからないだろう。でも礼を言いたかった。だからこそ俺は頭を下げる。

「ありがとうございます」

「ん？ いいや、構わないよ。私としては優希と良い友人関係でいてほしいけどね」

俺は頭を上げる。

視界に入ったのは、彰三さんがユーキの手を握る光景だ。

彰三さんの大きな手が、痩せ細っているユーキの包み込む。

それは極めて優しく、丁重に扱うように、まるで慈しむような仕草だ。

しかしどこか違和感がある。昔から知っているとは言え、彼の今の仕草は他人にするものではない。まるでアスナに触れるように、家族にでも接するように。

そう。あの表情と仕草はまるで——父親のそれであった。気になることがる。

アスナの両親、兄には会ったことがあった。だが不思議とユーキの両親に会ったことはない。

影も形もないように、最初から存在しないように、不自然なほど空白だった。

だからこそ、俺は問いを投げた。

「結城さん」

「何かな？」

「ユーキ、君の両親は、どこに……？」

ピタリ、と彰三さんの動きが止まる。

それから言うべきか、言うまいか迷うように、彰三さんは一泊考えて。

「優希が小さい頃に事故でね……」

それだけで充分だった。何もかもを理解した。

ユーキの両親の姿が見えないのも、彰三さんの態度にも、この病室の配置も理解した。

思わずバツが悪そうにする俺を、彰三さんは意外に思わずに問いを投げた。

「知らなかったのかね？」

「……はい」

「全くだらしいと言えはらしい。優希は自分の話をしなかつただろ？」

そこまで言うと、彰三さんはユーキの頬を撫でて笑みを浮かべて。

「優希の両親と私も家内も付き合いがあつてね。困っている人間を放っておけないような、善良な人達だったよ」

父親の方は口が悪かつたけどね、とボヤきながら言う彰三さんの口元には、確かな笑みを浮かべていた。懐かしむような、もう見る事が出来ない光景を思い出しながら、彼は笑みを浮かべていた。

困っている人間を放っておけない、考えるより先に身体が動く、そんな人間を俺も良く知っている。とても他人事とは思えない。

「考えてみれば、優希は彼によく似ている。無鉄砲さも、雰囲気も、よく似てる。何も彼にそこまで似なくても良かったろうに。まったく

——困った息子だ」

言うと同時に、また新しくドアを開ける音が聴こえた。

俺も彰三さんも、そちらに視線を向ける。

入ってきたのは男だ。

人の良さそうな顔つきで、ダークグレーのスーツを見事に着こなす長身。フレームレスの眼鏡のレンズの奥で、彰三さんと俺に向かって目を細めて笑みを浮かべる男は口を開いた。

「社長」

社長と呼ばれたのは確認するまでもなく、彰三さんに向けられた言葉だった。

となると、彼は『レクト』の社員であることが予想できる。彼は誰なのか考えている俺に、彰三さんは気を使ったのか紹介する。

「彼は須郷君だ。うちの研究所で主任を任せている」

そう言うのと彼——須郷さんは柔和な笑みを浮かべて俺に近付いて右手を出す。

「須郷、須郷伸之です。よろしく」

「桐ヶ谷、和人です」

差し出されてしまったのだから、応じない訳にはいかない。

俺は須郷さんの右手を握る。普通ならばそこで手を離す。だが須郷さんは「おお！」とどこか大げさにわざとらしく驚いて、朗々とした口調で言った。

「君が明日奈さんの所属していたギルドの……！　ありがとう、明日奈さんを守ってくれて！」

「……いいえ。俺もアスナさんには助けられました。守られてたのは俺の方です」

素直に受け取るのならば、須郷さんのそれは謝意に属するのだろう。

だがどう言うわけか、俺にはそうは見えなかった。どこか打算的に、純粹にアスナを想っていないような、そんな穿った見方をしているまじ。

ユーキでもあるまいし、俺は何を考えているのか。

「社長、例の件ですが」

「……ああ、それか」

そんな俺の心境を他所に、須郷さんは俺の手を離すと彰三さんに向き直った。

対して彰三さんはバツの悪そうな顔で応じると口を開いた。

「答えはもう少し待ってくれないか？」

「——と、言いますと？」

「君とは確かに家族ぐるみの付き合いだ、信頼もしている。だがねそれとこれとは別のところにあると私は思っている。家内は賛成しているが、私はどうも気が乗らなくてね」

「いいえ！ 社長のご気持ちもご尤もだと思えます。僕はいつでも待っていますので」

「すまないね、君には本当に悪いと思っている。私も明日奈には幸せになってもらいたいのだが、本人を蚊帳の外に話を進めるのは筋が通っていないだろう？」

話の流れが読めず俺はただ沈黙していた。

だが何となく察しがついた。アスナに幸せになってもらいたい、本人を蚊帳に話を進める、限られた単語を読み取り会話の内容を組み立てていく。

そして見えてくるモノが一つ。

「おっと、もうこんな時間か。そろそろ戻らねば。桐ヶ谷君、これからも二人と仲良くしてやってくれよ？」

俺は「はい」と二つ返事で応じると、その返事に満足したのか彰三さんは一度深く頷くと病室から出ていった。

残されたのは俺と須郷さんの二人。

会話などない。元々俺は社交的な性格ではない。だがそれよりも、何か嫌な予感がした。

それは須郷さんから。

どう言うわけか、自分でも説明がつかない不思議な感情。

そうこれは——不感だ。

「桐ヶ谷君、君ってさ『はじまりの英雄』って呼ばれてたんだって？」

「……はい」

彰三さんを前にしていた態度とは打って変わって、須郷さんは口を開く。

こちらを下に見ているような、上から物を言うように、彼は続ける。

「明日奈とも一緒だったんだろ？」

「……何が言いたいんですか？」

「どんな気持ちなのかなって思ってたさ」

言うと同時に、須郷さんはクスクス不快に笑みを浮かべて、ゆっくりとした足取りで窓際のベッドに近付いて行く。

そこで寝ているのはアスナだ。だがどう言う理屈だ。ただ歩いている、ただ笑みを浮かべている、それだけの筈だ。なのにどう言うわけか、初対面なのに、この男の仕草の何もかもが、癩に障る——。

「さっきの話はね、僕と明日奈が結婚をするっていう話さ」

「……………」

驚きはなかった。何となく、察しがついていたからだ。

須郷さん——いいや、須郷の笑ひはますます深まるばかり。ま

るでトロフィーを掲げるように、誇らしげとも取れる態度で口を開く。

「だから聴きたくてね。同じ仲間が結婚すると聞かされて、どんな気持ちなのかさ」

「……どんな気持ちも何も、結城さんに断られてるだろ」

不遜な物言いだと自覚している。

とても初対面に言う口調としてはキツすぎる物言いであると理解している。

だがどうしてか、我慢が出来なかった。感じていた不信感はいつしか——不快感に変わっていたのだ。どうしようもなく、説明が出来ないほど、俺は須郷を嫌悪している。

当人の須郷は対して気にしてないように、自信満々に告げる。

「それも時間の問題さ。明日奈は既に僕の手の中にある」

舌を舐めずり、下卑た笑みを浮かべて明日奈の髪に触れようと手を伸ばす。

それを——。

「やめとけよ」

俺は須郷の腕を掴んで制止させる。

そして信頼と信用を込めて、善意のつもりで俺は言った。

「そんなことしたら、ユーキに叩き潰されるぞアンタ」

「ああ、彼か」

チツ、と舌打ちをすると忌々しげな口調で須郷は吐いた。

その瞳には純粹過ぎるほどの嫌悪、憎悪、様々な負の感情が渦巻い

ている。

「彼は本当にズルい。何も苦もなく、何も努力もせず、好意を受け取っている。そうは思わないか？」

「思わない。何も知らないアンタが、ユーキを語るな」

「君こそ彼の何がわかるというんだい？」

なに、と訝しむ俺に須郷は腕を振り払いながら口を開いた。

「生い立ちも、彼が何を考えているのか、彼の根底にある狂気すら分かっている君が、何をわかると言うんだい？」

「……アンタ、何を言っている？」

その口調は奇妙なものだった。

まるでユーキの何もかもを知っているように、目の前の男は話している。知り合いだというのか、それにしてもユーキという人間を知らなすぎる。知っているのであれば、明日奈が手の中にあるなんて物のような表現はしない。言ったら最後、ユーキがキレるに決まっているからだ。

なのにどう言うわけだ、この男は何を知っているのか？

「おっと、喋りすぎたか。君は気にしなくても良い。どうせ何も出来ないのだからね」

「……何も出来ない、だと？」

「怒ったのかい？ だが事実だろ」

愉快でたまらないというように、須郷はニヤニヤ笑みを浮かべて続ける。

「仲間が昏睡状態にあるのに、君は何も出来ずにいる」

「……ッ！」

その言葉は深く深く、俺の心を抉るものだった。
言葉は剣のように、槍のように、斧のように、深々と突き刺してくる。

「対して僕は違う。もう少しだ、もう少しで何もかも手に入る。名声も、地位も——明日奈も」

それだけ言うと、須郷は俺に背を向けてドアへと足を進める。
立ち止まる俺とは違い、自分は進み続ける、とむぎむぎと見せつけるように肩越しに俺に視線を送ると呟いた。

「塗りつぶしてやるさ。明日奈の気持ちなんて簡単に、僕色に塗りつぶしてやるさ。優希君の、いいや茅場の入り込む余地などないくらいにね」

両足が鉄で出来ているくらい重かった。

一步も動けない。二人を侮辱したあの男を殴りたいほど、拳を握りしめているのに一步も進めない。

そんな俺の姿が滑稽だったのか、須郷は軽い足取りでそのまま病室を出ていった。

「くそ……」

俺は奥歯を噛みしめる。

ギリギリと歯と歯が噛み合わせている不快な音を出しながら、拳を握りしめた。

その行先など何処にもない。何処にもないのなら、向ける先は自分にしかないだろう。

「くそっ……!」

容赦なく、躊躇もなく、俺は自分の拳を自分の頬に叩き込もうと振り上げる。

だが――。

「なん、だ……う？」

何度も何度も、ズボンのポケットにある携帯がヴァイブレーションとなり振動する。

一度ではない。何度も何度も、電話の着信でも入っているのかと思っただが、その振動パターンはメールのものだ。

無視すればよかった。

だが俺は携帯を手取る。無視しては一生後悔するような、正体不明の確信があった。

「なんだ、これ……う？」

慣れた手付きで俺は携帯からメールを開く。

アドレスはどうにもバグっていた。

辛うじて読めるのは『Alfheim』という単語のみ。

件名もバグっている。意味がわからない『えはもうに1ナ、ららるる』という文字の羅列。

本文には『Welcome to Alfheim Online!! It's Show Time!!』という英語。

それと添付されている画像があった。

「スパムか？」

呟いて、興味本位で画像を開いて――。

「なっ――!？」

声を失った。

携帯を落としそうになる。

その画像には——鳥かごのような檻の中で閉じ込められているアスナらしき姿。

そして——両腕を鎖で縛られ天井から吊るされている痛々しいユーキの姿があった——。

第3話 心ガ壊レル音

時刻未明 場所不明

少年はうめき声をあげて目を覚ました。

目を凝らさねばならないほどの暗い部屋、視界には鉄格子があった。こちら側とあちら側を隔たるように断絶されている。

鼻につくのは謎の異臭。何やら肉が腐ったような、不快感を加速させる刺激臭。肉が腐ったような、ではない。文字通りそれは腐敗していた。壁に、床に、到るところにへばりついており、虫が集るように飛んでいる。

極めつけは少年の腕を縛り上げている鎖だ。

それは銀色のモノではない。もつと粗末な外見で、所々が錆びびついている。

絶対に破壊することが出来ない縛鎖。両腕に巻き付いたそれは天井から伸びており、少年の足は床とギリギリ届かない高さで調整されていた。

少年が身に纏っているのは拘束衣だ。

最初は白色であった筈が、今となっては黒く淀んだ色に変色しており、到るところが破れており素肌が露出していた。

誰が見ても痛々しい姿。

身に纏っている衣類、少年がいる環境、不快感しかない状況。

何よりも痛々しいのは少年の表情であった。焦点が合っていない濁った蒼い眼で、ただ虚空を見つめている。表情からは感情も、意思も読み取ることが出来ない。少年はただその場所に「ある」だけだ。ただそこにいるだけの存在と化していた。

身動き一つ取らない。

もしかしたら死んでいるのではないか、と思えるほど少年の存在感は希薄なモノであった。

光源などない。

窓も扉も、電球すらない暗黒の空間に、少年はただ拘束されていた。

そこが少年のあるべき場所、少年のいるべき部屋であるというかのよう
に、部屋主である少年は中央で拘束されていた。

そんな人間がいるべきではない場所へ、一人の男が現れた。

突然現れた男は、独房に入るや否や、顔を不快感に歪ませたて、侮
蔑しきった声で口を開く。

「相も変わらさずここは、君に相応しい部屋だね？」

そうは思わないかい？と言う長身の男に、少年はただ無反応を貫い
ていた。

意図的に反応していないわけではない。ただ単純な話し、少年には
“余裕”が無いのだ。

情報を最低限遮断していなければ、心が壊れてしまうから。生きる
ための最大限の防衛本能の結果、少年は無意識に感情を希薄なものに
していた。

それが自分に対する反抗であると認識したのか。

長身の男は自分の波打つ金髪を苛立ちながらかき分けると、わざと
踵を鳴らすように少年に接近して。

「妖精王である僕がわざわざ出向いてるんだ。その反応は失礼じゃな
い、かな!？」

その頬を思いつきり殴りつけた。

苦悶の声すら上がらない。ギシギシと鉄と鉄が擦り合わさるよう
な音が、少年の捕縛している鎖から響く。

血の味はしなかった。

何せこの場所は——仮想空間であることを少年は知っている。

こうして痛めつけられたことなど数知れず。両足を切り落とされ
ることもあった、肉を順に削ぎ落とされることもあった、全身を串刺
しにされて放置されたことも合った。

それでも死なないのは、仮想世界であるからだと少年は結論付け

る。

ここで初めて、少年は『妖精王』と自称する男の存在を認めた。波打つ金髪が豊かに流れ、その額には白銀の王冠。身体を包むのは濃緑のゆつたりとした長衣。何よりも注目するべきなのは、その背に生えている羽だろう。人間にはない器官、それは蝶のような美しい四枚の羽。

なるほど、妖精の王を自称するだけあってその外見は優雅なものであった。

だが表情が何もかもを台無しにしている。

下卑染みた笑みを浮かべて、満足するように頷いて妖精王は言った。

「おつ、いいいいいよ。死んでないみたいだね？」

「……ああ、お陰様でな？」

皮肉げに口元を歪めて、少年は笑みを浮かべた。

小馬鹿にするように、妖精王の存在を今気づいたと言うかのよう
に、少年は気軽な口調で言う。

「最近、結構な頻度で来るよな teme エ。まさか暇なのか？」

「いやいや、わざわざ君のような男の顔なんて見に来るほど暇じゃないよ。それもこれも、科学の発展の為。仕方ないことだ」

「ハッ、笑わせんじやねえよアパー野郎。コイツは teme エの趣味みたいなものだろ」

どれほど痛めつけても、少年の減らず口は収まらない。

妖精王は不快気に顔を歪めると、直ぐに笑顔に変えて楽しそうな口調で少年に言った。

「そう言えばね、今日初めてキリト君にあったよ」

「」

妖精王の言葉が少年にどれほどの意味を与えたのか。

目に見えていた嘲笑がピタリと止まると、少年は表情を殺して応じる。

「おい、あのヘタレ剣士には何も出来ねえよ。そっとしておいてやれ」

その反応が気に入ったのか、妖精王は笑みをますます深めていく。

ヒツ、ヒツ、と甲高い声を笑い声を漏らしながら、妖精王は軽い足取りで少年の周りを歩き始めた。

「それは難しいな。何せそれは、僕と君との約束に含まれていない」

「……………」

ギリツ、と奥歯を噛みしめる。

このまま歯を砕くような勢いで、苦虫を粉々に噛みしめるかの如く、少年は極めて低い声で唸った。

「もう一度言うぜ。アイツに、何も、するな」

「…………君は何もわかっていないなあ?」

呆れた口調で呟きながら、妖精王は少年の視線の前で動きを止める。

それから再び顔面を殴りつけて、少年の金色の髪の毛を乱暴に掴んで、ゆっくりと丁寧な口調で言った。

「何もしないで下さい、だろ? 僕に命令できる立場なのか茅場あ?」

その言葉は人間の尊厳を踏み躪るモノであった。

丁寧に足蹴にし、丁寧に踏み潰し、手厚く叩き潰す。それは折り紙のようでもあった。一折、一折、折り紙を折るかのように、妖精王は

少年の尊厳、心を折っていく。

自分には何も出来ない事を少年は痛いほど理解していた。
だからこそ少年に出来ることと言えば――。

「――お願いします」

「ん、何だつて？」

「……お願いします、妖精王オベイロン様。オレと貴方の約束にはありませんが、キリトにだけは手を出さないで下さい。これはアイツには関係がないことです」

――自身のつまらないプライドを捨てることくらいしか出来ない。
吊るされた状態で、少年は頭を下げる。

怒りに任せて八つ裂きに出来る状態ではなく、少年の燃え盛る程の感情で神経細胞が焼き切れようとも、関係がなかった。
自身を守る為の誇りなどどうでもいい。

誇りを投げ売って、仲間を守るのなら、いくらでも誇りなど捨ててやる。そんな誇り^{つまらないもの}、犬にでも食わせてしまえばいい。

そんな少年が妖精王は気に入ったようだ。

内面ではない、その姿に機嫌が目に見えて良くなっていく。自分に頭を垂れる少年が―― “茅場” に悦を見出していた。

そしてその愉悦は最高潮に達し、堪えきれないと言わんばかりに腹を抑えて身体をくの字に曲げて哄笑し始めた。

「ヒヤハハハハッ!! そうさ、それでいい! 君は僕に逆らうことは出来ない。だってそうだろう? 君はただそうやって捕まっているだけ、対して僕には300の駒があるんだからねえ!」

「……」

そこまで言うと、妖精王は手元に青色のシステムメニューウィンドウを開くと、ある映像を映し出した。

そこには見覚えがある顔があった。

何よりも守りたかった者、傷つかないでいてほしかった者、いつだって自分の傍にあつた光が、そこに確かに居た。

鳥かごのような牢獄で、俯いて表情すら読めないその者の名は――

「君には何も出来ない。テイターニアを――明日奈を守ることもね」

「……………」

少年の表情に怒りはない。

ただまっすぐに明日奈を見つめている。表情を殺して、握りこぶしすら作らずに、ただ不気味なほど静かに見つめていた。

それに妖精王は気付いていない。

少年の変化に気付かないまま、背を向けて誇らしげな口調で続ける。

「君が悪いんだ。明日奈は僕の物なのに、君のような低能が彼女に近付くからこうなるんだ。もう少し賢く、分を弁えていたらこうはならなかった――」

「――オイ」

ビクツ、と肩を大きく震わせた。

恐る恐る妖精王は振り向くと、少年の蒼い双眸はまっすぐに妖精王を見つめている。

その眼にあるのは。

「――テメエこそ、弁えてんだらうなア？」

怒り、純粹な怒り。殺意で人を殺せるほどの視線を、まっすぐに妖精王に向けている。

思わず妖精王は一步後ずさる。何も出来ない癖に、捕縛から逃れる術すらないくせに、どう言うわけかまるで——剣先を向けられているような。説明がつかない感覚を妖精王を襲った。

このまま不用意に発言すれば殺されるかもしれない。そう言い切れるほどの殺気を言葉に乗せながら少年は言う。

「人質をひけらかすのも結構だ、ソイツを盾にするのもいいだろう。だがな、それは最後の引き金だ」

「な、何を言って……」

「人質ってのはな、居てこそ意味があるんだよ。約束が違えたら、一人でも手を出したもものなら、オレはオレを押さえきれる自信がねえぞ？」

そこで漸く、妖精王は気が付いた。

目の前の不遜な輩は、自分を脅しているのだと。盾にしている30人、一人でも何かあったものなら八つ裂きにする、と暗に少年は語っていた。

おかしな話だ。

今にも死にそうな虫けらが何を言っているのか、妖精王は冷や汗を掻きながらも薄く笑みを貼り付けて、震える声で問う。

「な、何も出来ない癖に——」

「言葉には気をつけろよ色男。オレは我慢弱いからな、直ぐにブチギれる。伊達にアインクラッドの恐怖って呼ばれた訳じゃねえんだ」

そう言うと、少年は嗤う。ただ嗤う。

口元を左右に引き裂くような嗜虐的笑みを浮かべて。

「テメエ程度の雑魚——叩き潰すのなんざわけがねえんだ」

「じ、実験を始めろ！」

悲鳴を上げながら言うと、妖精王は白い光に包まれながら部屋から出ていった。

残されたのは少年のみ。ポツンと一人取り残されて、ぼんやりと考える。

——これで、野郎が明日奈に手を出すことはねえだろ。

——暫くの間、って期間限定だけだな。

彼と少年が交わした約束は唯一つ。

自分以外の300人を見逃すこと。その代りに自分を好きにしたいというモノだった。

いわゆる交換条件と言うやつだ。

少年を含めて301人を拉致した理由——人体実験を行うためであると妖精王から説明された瞬間、少年の選択肢は決まったようなものだった。どういう実験なのか、少年にはそこまでわからなかった。

だがそれでよかった。300人ほどのSAOユーザーに何も無いのなら、明日奈に危害が向かわないなら、何も文句はなかった。

実験と称し痛めつけられたのは数知れず。

斬り裂かれたこともあった、意識がありながら焼かれることもあった、全ての指を千切られたこともあった、腕の肉を丁寧に剥がされることがあった、そのまま腕に彫刻を入れられることもあった、中世の変態染みた延命方法すら試されることもあった。ありとあらゆる方法で、痛めつけられた。

死なないのは、簡単な理由だ。ここが現実世界でないからに他ならない。痛みによるショック死はありえるものの、血が出ないのだから失血死はありえない

そうして少年はあらゆる苦痛、あらゆる屈辱にまみれてきた。

妖精王とやらは「茅場」に執着しているようで、妄執の粹にまで達している。執拗に少年を痛めつけて、自分と茅場の力の差に悦に浸っている。

それでも心が折れずに、意識を保っているのは――。

――何も、何も心配はない。

――明日奈はオレが、守るから……。

――彼女の存在があるからだろう

かけがえのなかった日常の象徴、何にも変えられない存在、いつだって優しかった光。

そのためだけに、少年は辛うじて保っていた。

もはや助かるすべなどない。苦痛も千を超えた辺りで数えるのを止めた。

どれだけの時が経ったのかわからないが、途方もない時間が過ぎた。なのにもかかわらず、未だに外部からの接触などはない。

――今の状況は、限りなく、詰んでいると言っても良い――

救出される目処は立たない。自分の心が擦り切れるのが先か、実験が終了するのが先か、妖精王がモルモットに飽きるのが先か。

そのどちらでしかないだろう。どちらにしても、少年が助かる可能性はない。それは誰よりも少年自身が理解していた。

助けられた人達の分まで生きる。
何気ない願いでさえ、世界は少年を許してくれないように――

「それでもいい」

キッパリと一人呟いた。

言霊のように世界に告げて、何度も心の中で負けないように言い聞かせる。

あの世界で、アインクラッドで手を汚してきた。

ストレアを犠牲に、止めたかった叔父を犠牲にしてきた――
両親すらも犠牲に生きてきた。

この辺りが潮時なのだろう。

犠牲にしてきた人間達の方まで生きるのを世界が許さないというのなら、この辺りが自分の終着なのだろう、と少年は受け入れる。だとしても――。

「アイツだけは、明日奈だけは守る。オレがどんなことになっても、アイツだけは――」

ビリっ、と。

身体が痺れるのをのを感じた。

思わず顔をひきつらせる。

今から来る苦痛を想像し、顔を強張らせて少年は言う。

「今回は『電流』か。ホントに興味が――」

悪い。

そう言う前に少年の身体がビクツと大きく跳ねた。

視界で電流が走り、どこか肉の焦げた嫌な匂いが充満する。眼球はがグルンと上に向き、口角からあぶくを吐きながら少年は。

「ガ、アアアああアアアアアアあ?!?!?」

叫んだ。力一杯叫んだ。

だがそれは虚しく、響き渡る。

少年を助けるヒーローは訪れない。手を伸ばす者はいない。

今日も、仮想世界の何処かで、少年は。

――茅場優希は苦痛に塗れることになる。

第4話 『リンク・スタート』

2024年8月15日 AM11:32

埼玉県所沢市 病院 アスナとユークの病室

謎のメールを受け取ってから次の日、俺はまた二人の病室に来ていた。

今日も二人の様子は変わらない。本当にただ寝ているかのよう
に眼を瞑り、今にも起きそうな姿でベッドに身体を預けている。

俺の右手には携帯、そしてメール画面を穴が開くように、俺は凝視
していた。

送られてきた謎のメール。

心当たりなどない。むしろアドレスが文字化けしており、どこの誰
が送ってきたのか。そもそも機種はなんなのか、携帯からなのかパソ
コンからなのか、それすらもわからない。

そうなるかと差出人など不明。辛うじて分かる単語と言えば――
――

『ALfheim』……』

アドレスが文字化けしている中、何とか解読できる単語をポツリ、
と呟いた。

ALfheim。アルフ Heim、ではなくアルヴ Heim と読むのだ
ろう。

それは恐らく、スグが夢中になっているアルヴ Heim・オンライン
のことを指しているに違いない。

そう思えるだけの確信がある。

本文に英単語で記されている『Welcome to ALfheim
Online!! It's Show Time!!』という文
字の羅列。

『ALfheim Online』というのは、例のアルヴ Heim

ム・オンラインに違いない。そして添付されている一枚の画像。

大樹のような枝に吊るされている鳥籠のような檻の中で憂いた顔で囚われている少女——アスナ。

薄暗く窓一つすらない牢獄に両腕に鎖を巻かれて吊るされている顔を付している少年——ユーキ。

現実世界に帰還していない両名の姿が映された画像。一見カラージユにも見えるそれを、俺は本人であると断じる。長い付き合いだ、二人のことを見間違ふことなどありえない。

二人が何処にいるのか、考えるまでもなかった。

メールのアドレス、本文を考えてアルヴ Heim・オンラインが関係しているのは一目瞭然だ。

だからこそ俺は調べた。

昨日から帰ってずっと、雑誌、携帯、ときに人伝で情報を集めていた。

幸運なことに、その道の情報通に頼れる友人がいる。

『鼠』と称された情報収集力は健在らしい。

報酬として、デザートの食べ歩きを要求されたが安い買い物である。

アルヴ Heim・オンライン。通称ALOと呼ばれるVRMMOの呼称である。

ナーヴギアの次世代機アミュスファイアと呼ばれるハードを使ってプレイできるらしい。

ログインをして、最初にプレイヤーがしなければならないのが、種族を選ぶこと。アルヴ Heimの名の通り、種族とは妖精のことである。

選べるのは9種類。サラマンダー火妖精族、ウンディーネ水妖精族、シルフ風妖精族、ノーム土妖精族、インプ闇妖精族、スプリガン影妖精族、ケットシー猫妖精族、レブラコーン工匠妖精族、ブリーカ音楽妖精族の中から選ぶ。

ソードアート・オンラインと違う点といえば、レベルの概念がなく全てプレイヤースキルを重視していること。魔法という手段があり、

本来では考えられない“飛行”が出来ること。そして何よりも——
——PK推奨であることだろう。

「……………」

キルされても死ぬわけではない。ヒットポイントがなくなっても、リスポーンされるだけ。

それは分かっている。わかっているものはいるものの、あの世界で生きていた身としては、少しばかり戸惑ってしまうのは仕方ないだろう。

ソードアート・オンラインではクリア前提の内容だった。

PKは“出来る”程度のものであり、推奨されるほど必然であるものではない。

ならばどうして、アルヴ Heim・オンラインはPKを推奨としているのか。

それはアルヴ Heim・オンラインの最終到着地とされる場所と、設定に問題があった。

「世界樹、か……………」

反復するように先日『鼠』に教えてもらったアルヴ Heim・オンラインの設定を思い出す。

どうしてアルヴ Heim・オンラインではPKを推奨としているのか。

それは簡単な話だ。9つの種族は争っているのだ。世界樹と呼ばれる大樹の頂点にあるはずである空中都市を目指し、彼らは今も熾烈な種族間の抗争を行っている。

争わずに協力し合い、世界樹を目指せば良いのではないか、と考えるもそれは不可能と言えるだろう。

何も彼らは目指しているだけではない。

空中都市に到達できた種族が光妖精^{アルフレッド}へ転生できる権利を持つことが出来る。1種族のみだ、決して到達できた種族全員ではない。

だからこそプレイヤー達は争う。出し抜かれるのを恐れ、協力して到達できたとしても1種族であるのだから、待っているのは闘争のみだ。だからこそPKを推奨しているのだろう。

結果から考えて、クリアするのは無理である。

それが俺と『鼠』の出した結論だった。ゲーマーがゲーマーである以上、誰しもが達成感を求めている生き物だ。自分の努力が実を結び、自分の力で難関な関所を突破し、自分しか持ちえない個性を手に入れる。どう言葉を繕ったところで、ゲーマーはそれを欲している。

そしてこれこそが、ゲーマーの、人間の本能を付いたトラップと言える。種族間で協力しない限りクリアできない無理難題、しかし協力しては1種族しか光妖精族とやらには転生できない。

そのことから、俺達は断じた。不可能であると。自己犠牲の精神でもない限りクリアするのは不可能である。

だがそれでも、俺は空中都市とやらに到達しなければならぬ。

もう一度、携帯の画像を凝視した。それはアスナの画像。注目するのは彼女ではなく、彼女が囚われている場所だ。

空がある、日がある、そして大樹に吊るされた鳥籠のような檻。その事から踏まえて、彼女がいるであろう場所は――。

「世界樹、だよな……」

しかもただの世界樹ではない。

恐らくその頂点、誰もが到達することが出来なかった場所に、アスナは囚われていると考えても良い。

もちろん、確証はない。

そこに必ずアスナがいるというわけでもない。

可能性があるのなら藁にでも縋る思いであるし、なによりも問題なのがアルヴヘイム・オンラインを運営しているのはレクトの子会社『レクト・プログレス』だ。

そこに深く関わる人物を、俺は知っている。

「須郷、伸之……！」

ミシリ、と音を立てる。持っている携帯を力一杯握りしめていた。もはや嫌悪感しかない。

アスナを物扱いして、ユーキに強い敵愾心を持っている男。

彼が関わっているのなら、辻褄が合うのだ。アスナを鳥籠のような檻に閉じ込めていることだって、ユーキが痛々しい姿で吊るされている姿だって、あの男が関わっていると考えれば辻褄があってしまふ。

証拠もなにもない。

これは俺の憶測であるし、自分でも自覚していることがわかるくらい感情で『須郷は黒』であると決めつけている。

そんなものは子供の言い分だ。誰も取り合ってはくれないだろう。ならば自分で動いて、決定的な証拠を見つけるしかない。

となれば、俺は再び、あの世界に、いかなければならない――。

「……ッ！」

恐ろしくはない、といえば嘘になる。

やっとの思いで、俺は現実世界に戻ることが出来た。必死に生きて、必死に剣を振るい、必死に技を磨いて、ここまで生きてきた。そうでもしないと、死んでしまうから。

だがまた仮想世界に戻ればどうなるか。またログアウト出来ないかもしれないし、何よりも今度こそ俺は一人だ。

誰もいない。

皆を引っ張ってくれていたギルドリーダーも、いつも装備や俺のことを面倒見てくれていた鍛冶師も、父親のように慕ってくれたAIの少女も、ムードメーカーでいてくれた少女剣士も誰もいない。

ましてや、いつも競争相手であった少年もいない。本当の意味で、自分は一人で、事を進めなければならない。

――だが、それでも――。

「あら」

声が聞こえた。

その人物はいつの間にか病室に入ってきて、眉を顰めて俺の方を見ている。

半袖のコットンシャツに、スリムジーンズとかなりラフな格好をしていたメガネを掛けた少女は言う。

「貴方、また来たの？」

暇なのね、と呟くと彼女はユーキ側のベッドの側にある椅子に座る。

その動きはスムーズすぎるもので、何度もここに来ているかのような動きだった。

実質、彼女は何度もここに訪れている。

俺が目覚める前から、彼女はこうして先輩と呼ばれる者の——
ユーキの見舞いに来ている。

かなりの頻度であると思う。何せ俺は週に2回、多くて3回。対して彼女は俺が行くと、必ずいるくらいだ。もしかしたら毎日来ている可能性すらある。

自身のトートバックから本を取り、読もうとした辺りで彼女は俺の方へと眼を向けた。

俺も少し彼女を見すぎていたようだ。それから居心地が悪かったのか、彼女はバツが悪そうに言う。

「何？」

「いいや、随分な言い草だなーって思ってたよ」

俺は睨みつけるとまではいかないものの、ジト目で彼女を見て続けて言った。

「朝田だって、結構来てるじゃないか」

「私はいいのよ」

「なんでさ?」

「先輩の後輩だから」

そう言うのと先輩の後輩——朝田詩乃は手に持っていた本を開きそちらに意識を向けた。

何とも素っ気ないもので、俺への反応が雑な感じがする彼女だが、当初はここまで会話する仲ではなかった。

むしろ会話が成立しない程。お互いに会釈する程度の関係であり、朝田に至っては俺を思いつきり警戒しているくらいだった。

まるで猫のように、ご主人に近付く輩を探るように、朝田は警戒心を露わにしていた。

こうして会話できるようになったのは、つい数週間前である。

それまでお互いに無言。俺も人当たりの良い性格でもないし、彼女も同じなのだろう。無言で俺を注意深く観察し、ユーキとはどう言う関係だったのか無言で勘繰っていた。

だが今となっては——。

「ねえ、何を見てたの?」

朝田から話しかける程度の関係を築くことが出来た。

とはいっても、俺の方を向くわけでもない。本を読んで、時折チラッとユーキを見て、再び本へと視線を戻す。

優先順位としては、ユーキ、本、最後に俺といった図式が成り立っている。

別に俺は気にしない。

携帯をポケットにしまって、肩を竦めて何気ない口調で答えた。

「……別に、なんでもないよ」

「そう……」

それから朝田は興味が失ったのか、追求することはなかった。まあ、追求されても答えられないのだが。

内容が内容だ。

こんな画像、誰にも見せることは出来ないだろう。それはギルドメンバーであったリズやユウキにも同じことを言える。ユーキとアスナが何処にいるのかも、今のところ確証はない。無駄に不安を煽るのは得策ではないだろう。

ましてや朝田にだけは見せてはならない。

短い付き合いであるものの、彼女の性格は何となく察することが出来る。

こんな画像を見せたものなら、ユーキの姿を見せたものなら、何をするかわかったものではない。

極めて冷静に、そして慌てず沈着に、レクトへ大胆にも殴り込む可能性がある。いいや、こちらの予想を遥かに超える行動に出るに違いない。

「桐ヶ谷君、聞いてもいいかしら?」

「なに?」

そうして朝田は本から俺の方へと見た。

よく見てみたら、本が最初に開いたところから一頁も進んでなかった。どうやら朝田は緊張しているようだ。

常にクールであった朝田には珍しいと思う。言うか言うまいか、彼女はどこか視線を泳がせて、覚悟を決めたよう得意を決するよう問いを投げた。

「……貴方、先輩と一緒にだったのよね?」

「まあ、常についてわけじゃないけどな」

「……先輩は、どんな感じだった? 無理してなかった?」

「……………」

その問の答えは簡単なものだ。

ユーキは、確実に無理を、していたのだろう。

第十七層まで一人でフロアボスを相手にし打ち勝ってきた。

その後も一人で笑う棺桶ライオン・コフィンを壊滅させた。

どれだけ自分が傷つこうとも引かずに、言葉にはしないものの仲間が傷つくまいと努力してきた。

不器用にも程があると思う。言葉にした方が誤解されなかったことなど数えきれない。でもアイツは言葉にしない、いつだって行動で示してきた。

口が悪く、不器用で、目付きが悪い捻くれ者。

無茶をしては叱り、それでも無茶をし続けるバカ野郎。それがユーキなのだ。

その辺り、朝田も良く知っている筈だ。だからこそ、彼女は敢えて問いを投げたのだろう。

無茶をしてなかったのか、無駄であるとわかっていても、聞かずにはいられなかった。

残された者として、心配する身として、帰りを待つ後輩として、俺の知っているユーキを知りたかったのだ。

だから俺は。

「無茶していただき。当然だろ、だってユーキだぞ？」

包み隠さずに答えた。

溜まった不満をぶちまけるように、自分が今まで何をしてきたのか、これから何を成すべきなのか確認するように続ける。

「アイツが無茶をやらかす度に、その度に俺とかアスナがフォローするんだ。リズが叱っても意味がないし、俺の娘をビビらせる。ユウキは笑ってるし、アイツと一緒に居るのは大変だった」

「また先輩、無茶してたのね……」

「ああ。無茶して、他人を助けて、なのに助けてないって言い張るんだ。捻くれ者にもほどがあるけど、俺もアイツには助けられた」

そう、助けられた。

心が折れそうになっているときに、アイツは声をかけた来た。

第一層『ホルンカ』で、一人で食堂にいた所を、アイツはぶつきらぼうで愛想を一つすら見せずに言った。

——オマエ、オレ達と組め——と。

その言葉が俺にとって、これからどう進むのかの分岐点になったんだと思う。

目を合わせれば睨み合い、口で文句を言い合って、剣を交えてきた。友達などではない、対敵というわけでもない、親友はおろか、宿敵という間柄でもない。それでも俺達は一緒に居た。見ようによつては歪な関係だったことだろう。

それでも、俺はアイツと一緒に居た。

羨ましかつた、憧れていた、目標としていた。

アイツのあり方に、諦めない姿勢に、何があっても折れなかった心に、俺は——。

「こんな事を言うのもアレだけどき、アイツは俺の目標だったんだ」

追い付くために、努力を重ねてきた。

その背に少しでも近付くために、鍛錬を重ねてきた。

肩を並べたかったから、負けたくないと思った。

「何度も助けられた、だったら今度は——」

——俺が、助ける番だろ。

.....

ベッドに座り、俺はナーヴギアを手にしていた。

アルヴヘイム・オンラインのソフトは既を買ってある。アミュスフィアは手元のないものの、事前に『鼠』にナーヴギアでも動くことは聞いている。

既に準備は完了している。あとはコレを頭に被り、ベッドに寝て、あの言葉を紡ぐのみだ。

両手が震える。

当たり前だ。手に持っているモノは今まで共に戦ってきた戦友でもあり、俺の命を握っていた枷でもある。

少しでも何かが悪作動したのなら、俺の脳は破壊されて今度こそ現実世界に帰ってくることは出来ない。またスグを、泣かせることになる。

だとしても、せり上がってくる恐怖を感じながらも、俺は戸惑いなく装着した。

別に恐怖に打ち勝った、何て大層なことを言うつもりはない。恐怖よりも、二人を助けたいという欲求が勝っただけに過ぎない。

今度こそ、俺は二人を助ける。

ホルンカでそうだったように、二人が俺に手を差し伸ばしてくれたように、今度は俺が二人を助ける。

恐怖を誤魔化すつもりも、否定するつもりもない。

俺は受け入れた上で、眼を閉じて。

「『リンク・スタート！』」

再び、あの世界へ――。

第5話 スプリガン

2024年8月15日 PM19:40

場所不明

アルヴヘイム・オンラインをプレイするにあたって、俺はナーヴギアを装着した。それは良い。

音声マニュアルに従って種族を選んだ。それは良い。

男は黒に染まれて偉い人が言っていた気がするし、黒色好きだし影妖精族スプリガンを選んだ。それは良い。

名前も『K i r i t o』と入力した。それも良い。問題があるとすればその後だろう。

ランダムで自分の分身であるアバターを生成したら、本来であれば各種族のホームタウンからゲームがスタートされるものだ。

そう、本来であればの話――。

「ハッハッハ、参ったなこりゃ」

我ながらのんびりで、呑気な感想であると思う。

だが仕方ないだろう。どういうわけか、俺の視界では全てのフリーズが停止し、ところどころポリゴンが欠けた状態で、ノイズが這い回っている。

慌てて然るべき状況であるのだが、どう言うわけか俺の心は落ち着いていた。

数年間のデスゲームが俺の神経を凶太くさせたのか、はたまた近くにどうしようもないほど滅茶苦茶で非常識なヤツが居た影響なのか、どうやら俺はちよつとやそつとのアクシデントでは動じないほどの強さを持つてしまったらしい。

だがこの現状はダメだ。

どうにかしないとならないし、このままではゲームが進まない。

手足を動かそうにもビクともしないし、かと言ってログアウトも出来ない。さてどうするか、と考えていると――。

「おっ?」

ぶつん、と視界から見えていた世界が消えたと思いきや、謎の浮遊感に襲われた。

何か落下しているような、視界の下に空があり、上に地面がある。そんなありえない光景を見て、少しだけ不思議に思って首を傾げて。

「あつ、なるほど」

俺、落ちているのか。それも頭から、逆さまに。

納得、と俺は左手の掌の上に、右手で作ったグーをポンと軽く振り下ろした。

なるほどなるほど、俺は落ちているのか――。

「――ヤバイだろこれ」

自分でもわかるほど、直ぐに顔の血の気が失っていく。

なるほど、とか言っている場合じゃない。呑気に笑っている場合じゃない。

どうにかしようとしても、どうしようもない。手足をバタつかせたところで、落下速度が緩まる訳でもない。

「ヤバすぎるだろこれええええ
!!!????」

一つ訂正しなければならぬことがある。

俺の心が強くなった、凶太くなった、動じなくなったと言ったが、アレはウソであったようだ。

ちよつとやそつとじゃ驚かないと自負していた自尊心がガラガラ

と崩れ去っていく。いいや、この状況はちよつとやそつとのレベルではないだろう。慌てないやつが居たら、ソイツは人間じゃない。俺の反応は当然のものだ。

まあ、なんだ。

「……首から落ちてても、即死扱いでゲームオーバーには、ならないよな……?」

結果だけ言えば、俺は生きていた。

幸か不幸か、俺が落下したのは鬱蒼とする森林地帯であつたらしく、大中小様々な木々が天を貫いている。

どうやら、大樹から生えていた枝が落下速度を緩めてくれたようだ。

俺はぼんやりと、地面に背を預けて空を見つめていた。

周りには俺が落下した際に折ってしまった木々の枝が散乱している。

ログインして何もしてないのに、どういうわけかボロボロだ。

黒を強調している影妖精族スプリガンの初期装備はホコリまみれ、顔には葉っぱが付着しているし、死闘を終えた後のように気怠げな調子で手足を大きく広げている。

実際、死にそうな目に合つたのだ。

放心状態の一つや二つ、なつてもバチは当たらないだろう。

何はともあれ、俺は無事にアルヴ Heim・オンラインへとログインすることが出来た。

「……」

息を吸い、思いつきり吐く。

久しぶりの仮想世界、半年訪れなかったVRMMOの空気というやつを、俺は味わっていた。

頬を撫でる風はまるで本物のようで、見える星屑が散りばめられたような星空、その空に大きく主張する満月、耳に入る野鳥の声、まるで現実世界のような感覚を俺は味わっていた。

この感覚は半年前まで味わったモノに良く似ていた。

空を飛ぶ鉄の島——アインクラッドの空気に良く似ていた。

似ている、何てモノじゃない。まるで遜色もなく、景色も、気配も、五感に伝わる感覚まで瓜二つと言ってもいいだろう。

違う点があるとすれば——。

「そうだった……！」

俺は飛び起きて、手慣れた動作で左指を上から下に振って、メイン・メニューウィンドウを開く。

デザインまでソードアート・オンラインと一緒にあるのなら、一番下の欄にあるべきモノがある筈だ。直ぐに視線を這わせて、そのあるモノを探して——。

「あった……」

思わず安堵して、ホッと胸を撫で下ろした。

そこに存在すべき英単語。それこそがソードアート・オンラインとアルヴヘイム・オンラインの決定的な差異。現実世界と仮想世界を行き来するための最低限の手段。

それこそが——『Log Out』の有無だ。

これでその表記すらなかったら、笑い話にもならない。ミイラ取りがミイラになるというやつだ。

「冗談を言っていていられる状況でもないな……」

眩いて、辺りを見渡した。

本来であれば、俺は影妖精族スプリガンのホームタウンからスタートするものだ。

なのにここは森、見渡す限りの森、誰がどう見ても森。ホームもなければタウンもない。仮にここが影妖精族スプリガンのホームタウンであるのなら、運営はどれだけ影妖精族スプリガンを嫌っているのだろうか。

「とりあえず、武器でも装備するか……」

丸腰なのはどうにも落ち着かない。

空気がソードアート・オンラインと瓜二つであるのなら尚更だ。あの世界で、フィールドと真ん中、丸腰でいるなどありえない。

だが同時に疑問に思う。

少なくとも種族を決める際には、俺の背には片手剣が装備されていた筈だ。

しかし今は丸腰。件の片手剣は何処にいったというのか。落下する際、落としたのだろうか？

そこまで考えて、装備画面を開くと——ありえない物を見た。

「はっ？」

おかしい、明らかにおかしい。

思わず眼を擦り、もう一度見る。

目頭を抑えて、再びそれを見る。

装備画面にあるのは、ずつと手にしていた愛剣。コレを手にしたのは、『アインクラッドの恐怖』としてのアイツとの決闘中だ。アイツに勝ちたいという願望と共に現れた、まるで俺の心がソレを手繰り寄せたように、それは突然現れた。

漆黒の直剣、その名は——。

『『エリユシデータ』……？』

呆然と呟いて、俺はかつての愛剣を装備し——手にとった。ズツシリ、と。懐かしい重みが、俺の片手に収まる。何度も振るってきた、何度も手にしてきた、疑う必要がない。エリユシデータに間違いはない。

「でも、なんで……?」

途方に暮れる俺は、もう一度メイン・メニューウィンドウを開いて、今の自分の状態を確かめた。

ヒットポイント、そしてソードアート・オンラインでは見慣れないマナポイントというものがある。マナポイントは恐らく魔力を表す数値、言ってしまうえばMPのようなモノなのだろう。

だが注目するのはそこじゃない。習得しているスキル値、それは明らかに見覚えがあるもので——ソードアート・オンラインで俺が習得していたスキルそのものだった。

「引き継ぎ? いいや、そんな筈は……」

アルヴヘイム・オンラインに前作があるわけでもない。

となれば、引き継ぎという概念は存在しないだろう。何せアルヴヘイム・オンラインはこれが一作目のゲームだ。そんなゲームに何を引き継げばいいのだろうか。

しかし現実を見ると、俺のステータスは明らかにおかしかった。プレイ時間数分の素人とは思えないほどのスキル値、まるで数年その世界で暮らしていたかのような、本来ではありえない状態に仕上がっていた。

見た目は初心者、中身は歴戦の剣士と来た。これは詐欺と言われても文句は言えないに違いない。

とは言っても、考えても仕方ない。今はそんなことを考えるよりも——やらなければならぬことがある。

そこまで考えると。

「……」

俺は彼方上空を見つめる。

その先には木々が生えていない山岳地帯、そしてその先にある天を貫く大きな大樹に目を向ける。

大樹、なんてレベルじゃない。

この辺りの木々なんて比較にならないほど強大で、雄々しい過ぎるほどと言っても良い。

それはアルヴヘイムの中央に堂々と陣取っており、その根は恐らく地中深くまで根付いているに違いない。

アレこそが、俺の目的地。微かな希望の象徴とも呼べるモノ——
—世界樹。

その頂点は見通す事が出来ないほど高く、雲海を突き抜けてまだ伸びている。その上には設定通り、空中都市なるものがあるのだろうか。それとも——アイツらが居るのか。

「……ッ」

グツ、と自然と愛剣を握る手が強まる。

どうしてエリユシデータが存在するのか、今だにわからない。だがここにコイツが合つてよかった。今まで握ってきた、これまで頼ってきた、自分の分身とも呼べる存在。

これほど信頼出来る武器は——リズベットの精製した『ウエイトウザトウル』くらいなものだ。

だが今は白銀の直剣はなく漆黒の直剣のみ。

スキル欄には二刀流はなく、エリユシデータしか『はじまりの英雄』を示すモノはない。

だがそれでも、だとしても——。

「——行くか」

前に進む。

目指す場所は見えている、目的もハッキリしている、何をすれば良いのか鮮明に見えている。

ならば進む。あの時のように、あの世界で生きてきたように、アイツのように。真っ直ぐに最短距離で走り抜けるのみだ。

力強い一歩を俺は踏み出す——。

「……え？」

「……ん？」

ガサツ、と草木をかき分ける音が聞こえると声が聞こえた。俺もそちらに意識を向けた。

「……」

「……」

男だった。華奢であるものの、骨格から考えて男であることがわかる。

背の低い華奢な姿、黄緑色のおかつぱ頭、そしてファンタジー物によくでてくるエルフを彷彿とさせる長い耳。全体的に見てもどこか頼りない印象を感じる。

男性というよりも、少年と言った方が当てはまる彼は、ジツと俺の方を見つめていた。

沈黙は数秒か、数十秒か、それとも数分か。とにかく長いようで、短い沈黙が流れる。

NPC——というわけでないようだ。

システムも、スキルも、グラフィックもソードアート・オンラインに似通っているのなら、プレイヤーを表す頭上のカーソルもそのまま。彼がプレイヤーであることを、頭上にある緑色のカーソルが証明

していた。

このまま黙りというのもよろしくない。

精神的にも、何よりも沈黙が苦痛でしかない。

だから俺は片手を上げた。極自然に、エリユシデータを持つていない方の手を軽く上げて声をかけようとする。

「あ、あの――」

それがイケなかつたようだ――。

「ひ」

「ひっ」

「――ひぎゃああああああ!？」

その速度は脱兎の如く。

身体全体をビクつかせたとはいきや、一目散に俺に背を向けて走り去る。

アレは逃走だろう。

何もあそこまで逃げなくても良い筈であるが、今の俺の姿を見ると納得できる。

「……あー、これは不味いよな?」

アルヴ Heim・オンラインはPK推奨のVRMMO。

加えて今は世界樹攻略のため出し抜かれないように種族間で半ば冷戦状態。

更に言えば今、この場所は薄暗い鬱蒼とした森林地帯。

最後に俺は今は抜刀状態。

うん、これはもう逃げるだろう。今の俺は明らかに通り魔のそれである。アインクラッドであれば、剣を抜かれて逆に襲われかねない。悪いことをした。

二度と同じ過ちは繰り返さないためにも、俺は背負っている鞆にエリュシデータを収めようとするも。

「居たぞ！」

「レコンが言ってたやつか！」

「影妖精族の鉄砲玉だ！」

「俺達の領地が近いのに、舐めた野郎だ……！」

「でも影妖精族って、世界樹攻略に興味ない筈じゃ……？」

「知るかよそんなこと！ シグルドに連絡しろ！」

——遅かったようだ。

きつと逃げていた彼が援軍を呼んだのだろう。ガサガサ、と草木を掻き分けて包囲されている。

数は、5人ほどといったところか。

「……とりあえず、逃げるか」

表立って争うつもりもない。

今は何よりも世界樹を登ることが最優先だ。他のプレイヤー達と争っている場合じゃないだろう。

うん、と一度頷いて俺は駆け出した。

しばらく潜めて、騒動が収まったら行動に移そうと考えていた。

だがそれは悪手。

俺が駆け出したのは彼らの領地がある方向——シルフ領であつた。

それを知らずに俺は駆け出して——考えもしなかった事態に陥ることになる。

第6話 100人斬り

それは何てことはない『狩り』だった筈だった——

目の前の光景を見て、風妖精族^フが誇る最強の二枚看板であるシグルドは呆然と思い出した。

そう、何てことはない。自身が所属している風妖精族^フの領土に、単身無謀にも踏み込んできた影妖精族^{スプリガン}を排除する、そんな簡単なモノであつた筈だ。

本来であれば、シグルドと言う男は自ら些事然とした物事を解決しようとする性格ではない。

むしろ他人を手駒とし、自分は安全圏から指示を出す。良く言えば指揮官、悪く言えばお山の大将、そんなやり方を好む人種だ。それでも、彼が剣を振るえば風妖精族^フの中でも指折り、いいや五指には入るほどの腕前なのは一重に彼の才能によるものと言えるだろう。

そう言う事もあつて、彼は不自由を味わつたことも、挫折を経験したこともない。常に望んだある程度の戦果を手に入れて、勝者として勝利の美酒を味わつてきた。

そんな彼が自ら先頭に立ち、影妖精族^{スプリガン}狩りを興じるのは唯の気まぐれだった。

やることなくなつたから、本日の目標を達成したから、暇だったから、そんな程度に過ぎない。彼が剣を取るのは気まぐれであり——
——ちよつとした景気付けというのもあつた。

景気付けというのは、彼のこれからの未来。

これからシグルドと言う男は、風妖精族^フの領主を裏切るつもりでいた。

簡単に言つてしまえば、内通者である。その為に、アルヴヘイム・オンライン黎明期から積極的に風妖精族^フの為に活動してきた。種族間のパワーゲームがゲームの醍醐味となつているアルヴヘイム・オンラインで、彼は風妖精族^フに貢献してきた。

全ては信用させるために、他の風妖精族シトルフから『シグルドならば絶対裏切らない』と信用させるために、彼は行動してきた。

領主に立候補し、その全てが落選してきたが、彼にとっては領主の座は視野に入れていなかった。

そのまま領主になればそれでよし、領主になればその補佐をすると忠誠心を見せることも出来る。

その甲斐もあつてか、今のシグルドは風妖精族シトルフ中枢の一角の座に座るほどの権力と人望を手に入れた。そしてそれは、シグルドにとってまたとない展開でも合つた。

全ては、計画通り。

裏切る筈のない彼が、火妖精族サラマンダーの内通者となり、来るべき転生システムで自身は火妖精族サラマンダーに転生し、風妖精族シトルフの領主を売り渡し確固たる地位を手に入れる。

それが彼の本性であり、今まで尽くしていた理由でもあつた。

権力思考の権化。

何度も何度も風妖精族シトルフは火妖精族サラマンダーに苦渋を舐めさせられてきた。ならば自分も火妖精族サラマンダーとなり、強者の位置に君臨しようとする浅はかな考え。

火妖精族サラマンダーとの密約の日取りも決まつた。

自身の立ち位置も明確にした。

取引もシグルド側に益があるものであり。

あとは実行に移すのみ。

そんなところに、影妖精族スプリガンの身の程知らず一匹が、単騎で攻めてきた耳に入る。

もうニヤけ面が収まらなかった。

この何でも無い羽虫を狩って、更なる地位を手に入れよう。その程度の理由でしかなかった。

シグルドの計画は完璧だった。

現に、誰もが彼の胸中を見透かしているプレイヤーはいない。

誤算があるとすれば――。

——なんだ、アレは……？

例の——スプリガン影妖精族だろう。

これは狩りであった筈だ、多勢に無勢である蹂躪であった筈だ。だと言うのに——。

——何故オレ達は、アイツに、追いつけない……!?

飛行して討ち取ろうとしても追いつけない。

スプリガン影妖精族は飛んでいない。シグルドと他数名と違って、『羽』を出さずにただ駆け抜けるのみである。

だというのに、何故か追いつけなかった。

一定の距離を保つのもやつと、と言った所。

引き剥がされまいと歯を食いしばり、加速しても更にスプリガン影妖精族は速度を上げる。

その速さは完成されていると言っても良い。

力強く、それでいて身体全体のバネを使い、しなやかに走る。

例えるのなら、黒い豹である。獲物を仕留めることに特化したような、速さを追求するかのよう、何人たりともスプリガン影妖精族には追いつけない。

このままでは引き剥がされる。

チツ、と大きく舌打ちをするも、直ぐにシグルドの表情は笑みに変わる。

彼の眼に映ったのは一つの大きな首都。華奢な尖塔群が、空中回路で複雑に繋がりに構成されている街並み。それこそがシルフ領の首都『スイルベーン』である。

このまま、スプリガン影妖精族はスイルベーンに侵入するようだ。

思わずシグルドから笑みが溢れた。何をバカな、と小馬鹿にするような薄ら笑みを浮かべる。

そのまま首都に入ってしまったえば、スプリガン影妖精族文字通り何も出来ない。

シルフ領でPK出来るのは、ホームタウンである風妖精族だけである。どう足掻いても、影妖精族がシルフ領内で風妖精族を傷つけることは出来ない。

それを知らずに首都に侵入するや否や、影妖精族の足が止まった。一息を入れて、何か言おうと口を開きかえる。

しかしそれに耳を貸すシグルド達ではなかった。

問答無用。

影妖精族の周りに数十人ほどの風妖精族達が集い始める。

円形の人垣が形成されて、その中心に一つの黒い点。もはや勢力差は絶望的であった。恐らく影妖精族は首都に入れば、戦闘は終了すると思っていたのだろう。だが剣呑な雰囲気は収まることなく、ますます鋭くなるばかり。

狩りは終わらない。むしろこれから——狩りの始まりである。

「ここまで殺伐としてるのか、この世界は？」

苦笑交じりに、影妖精族はボヤいた。

呑気なモノであるが、次の瞬間その雰囲気は劇的に変化した。

彼が剣を握った瞬間、背の鞘から漆黒の直剣を抜き放ち、その眼は鋭いモノに変わる。

ゾワっ、と囲んでいた風妖精族の肌が栗立つ。

眼の前に居るのは何者なのか。逃げてばかりの兎であった筈なのに、腹ペコの肉食動物を目の前にしたかのような感覚。

コレではまるで——。

「——いいよ、相手になってやる」

狩られる側ではないか——。

それを払拭するように、影妖精族に一斉に殺到した。

攻撃が通るのであれば、プレイヤーであればヒットポイントがなく

なれば、相手が人間であれば絶対に勝てる。
なのに。

「なんだ、アイツは……？」

ポツリと呟いたシグルドに、誰も答えない。

常識外れの動き、常人を凌駕した反応速度、後ろに眼があるかのよ
うな視野の広さ。漆黒の直剣を自分の手足のように振るう影妖精族
に、シグルドは背筋が凍りついた。

数人がかりで、数十人がかりで、影妖精族に剣を向けた。ときに槍
のような長物で、ときに魔法で遠方から、ときに攪乱するように陣形
を組んで。

それでも影妖精族には届かなかった。

剣で挑んだ——容易く弾く。

槍で刺突する——軽々と躲す。

陣形を組んだ——容易く突破してくる。

魔法を打ち込んだ——簡単に斬り捨てる。

飛行して高さの利点を突いた——それでも意味がなかった。

軽々と、軽業師のように、地を蹴り、宙を飛び、縦横無尽に影妖精族
は駆け回る。

それから影妖精族は大きく後方を蹴って、一息について何やら軽蔑
するような眼で風妖精族達を睨みつけて。

「まさかお前達、チーターか？」

「なに、を……？」

チートは貴様だろ、とシグルドは叫びたかった。

だが絞り出した言葉がそれだった。眼の前に居る怪物が何を言っ
ているのか、本気で理解が出来ない。

「結構斬ったのに、誰一人ヒットポイントが削られてないじゃないか」

「まさか貴様、初心者か……?」

信じられない、と眼を丸くするシグルドと風妖精族達に対して、影妖精族はただどう言うことかと眉を顰める。

鬪争の空気ではなくなった。

周囲がザワ付き始める。まさかこれほどの剣士が、自分達が手も足も出なかった人物が初心者だとは思っていなかったようだ。

そして問題の影妖精族は意味がわからない、と問いを投げようとしたところに――。

「君、凄いね」

パチパチ、と軽く拍手をしながら影妖精族が称賛する風妖精族が一人。

囲んでいた人垣が左右に別れていき、その中央から一人の風妖精族が姿を表した。

混乱する周囲を置いてきぼりに、風妖精族の少女は覗き込むように、首を傾げて口を開いた。

「ねえねえ、本当に初めての人なの?」

.....

2024年8月15日 PM 19:50

シルフ領 首都『スイルベーン』

正直に言おう。

俺はこの状況に混乱している。

突然襲われて、街に着いたのに攻撃されるし、プレイヤーを攻撃してもヒットポイントが削られない、もしかして全員がチーターかと思いきや、また新手が現れる。

どれから対応したら良いのかわからない。ぶつちやけテンパっているのが、今の俺の状態だ。

「初心者、って割に動きが良すぎるし、でもその割に……」

対して彼女。

先程俺を囲んでいた包囲の中から一人だけ進み出て、気安い口調で話しかけてきた。

上から下へ、下から上へ、と俺の全身を翠色の両目で注意深く観察する。その視線は正直、こそばゆいモノだった。だが敵意はなく、武器も携帯していない。丸腰である。

長い金髪の髪を白いリボンで一本に縛り、ファンタジー世界観に合っている容姿。

言ってしまうえばシルフらしいシルフといえるだろう。黄緑色の装備、金髪、翠色の眼。これでもかというくらいシルフ要素が詰まっている。

俺に警戒を緩めるつもりはない。

PKが推奨されているVRMMOとはいえ、多勢で一人を襲いかかる連中だ。何をされるかわかったものじゃない。

「あつ、ごめんね。全員で襲いかかる真似なんてしちゃって……」

俺の気持ちを察したのか、シルフの彼女は本当に申し訳なさそうに深々と頭を下げると、人垣に向かって――。

「レコン!!!」

—— 大声を張り上げた。

その声量に思わず、大きく肩を揺らした。

ビックリしたのは俺だけではないようだ。周りを囲っているシルフ達も大小様々に驚きを隠せない。眼を丸くさせていたり、途端に拳動不審になったり、急いで抜いていた獲物を収めたりと、様々な反応を見せる。

何よりも驚いているのは、呼ばれた本人。レコンという人物だろう。

おずおずと自信なさげな少年が人垣から姿を現す。見覚えが合った。彼は確か、俺の顔を見て悲鳴を上げた男だ。

「アンタねえ、襲撃されたとか皆に嘘ついてんじやないわよ！」

「だ、だって、あんなどころに一人いたら……」

「確かめたの？」

「確かめてないよ。こ、怖かったし……」

「ほら見なさい！ アンタが勝手にこの人にビビっただけじゃない！

このヘタレ！」

怒髪天を衝くとはこの事を言うのだろうか。

今からでも拳骨を叩き込むかのような勢いで、レコンと呼ばれた少年が責め立てられていく。

俺も無茶苦茶やってリズやサチと多くの人に怒られてきたし、例のバカもアスナやユウキに怒られてきを見てきた。

だがこれはその比ではない。人とはここまで本気で怒れるものなのか、と思わず舌を巻いてしまう。とは言っても、本人からしてみたら溜まったものじやないのだろう。

レコンは肩身狭い筈だ。

小さい身体がますます小さくなっているような、そんな錯覚を覚えるほど彼は縮こまっている。

「大体ねえ、この人が襲撃者とかスパイならここには来ないし、何より

「もあんな戦い方しないでしょ！」
「えっ、あんな戦い方って……?」

「気付いてなかったの、と彼女は呆れたように首を横に振って答えた。」

「必要最小限で、なるべくヒットポイントが削られない箇所を斬られてたでしょ皆」

「えっ!?」とレコンが声を上げると同時に、周囲がザワつき始めた。
各言う俺も、意外そうな眼で彼女を見る。まさか気付いているとは思わなかった。

「……気付いてたのか?」

「あ、うん。胴体、首、急所は狙わないで手足ばかり斬ってたよね?」
「まあ、そうだけど……」

「そこまで観察して、どうしてももっと早くに仲裁してくれなかったのか。」

その疑問は直ぐに彼女の口から説明されることになる。

「ごめんね、もっと早く皆を止めるべきだと思ったんだけど。その、貴方の剣があまりに綺麗で見惚れちゃった。大切な人に似てるもんだから……」

「あ、うん。その、ありがとう?」

「ど、どういたしまして……」

顔を真っ赤に染めて両手の人差し指をツンツンと突き合わせる彼女を見て、毒気が抜かれてしまった。

それに俺も恥ずかしいし照れる。そこまで素直の賞賛を受けるとは思わなかった。俺は照れ隠しに頭を掻きながら、右手に持っている

エリユシンデータを背中中の鞆に収めた。

顔が熱い。

きつと俺も顔を紅くなっていることだろう。

我ながら単純だと思ふし、あのバカにこんなところ見られた何を言われるかわからない。

俺は気を取り直して、頭を振って雑念を振り払いながら。

「聴きたいことがあるんだ」

「え、なに？」

可愛らしく首を傾げるシルフの彼女に、俺は小声で周りに聴こえないくらいの声で問いを投げた。

「どうして全員のヒットポイント削れないんだ？」

「あ、そっか。うん、そこからだよね」

うんうん、と彼女は頷くと辺りを見渡して、バツの悪そうな顔に変わる。

周囲には観察するように視線を向けてくるシルフ達の姿があった。正直、見世物にされているように居心地が悪い。それは彼女の同じようであり、申し訳無さそうな顔で。

「ごめん、場所変えても良い？」

「別に良いけど」

その提案は願ってもないものだ。

俺は同意すると彼女は満面の笑みに変わると背を向けて。

「それじゃ行こっか。ちょっとレコン、アンタこの人に一杯くらい奢りなさいよっ」

「えー!? ど、どうしてやっ?」

「当たり前でしょー？ アンタの早とちりでややこしいことになったんだから！」

そう言うとき彼女は歩き始めた。

言い渡されたレコン、そして俺はお互いに顔を見合わせた。気不味い。

レコンはどこか居心地の悪そうな顔で俺を見るし、俺も元々社交的な性格ではない。気の利いたジョークの一つや二つ言えれば良かったのだが、俺にはそんな難易度の高いトーク力はない。

よって俺もレコンも、無言で彼女の後を追いかける。

「どうしてヒットポイントが削られなかったか何だけどね？」

「あ、ああ。教えてくれ」

それは簡単、と言う調子で彼女は背を向けたまま言った。

「ここがシルフ領だからだよ」

「それは——」

どう言う意味なのか、と問いを投げる前に隣で歩くレコンがおずおずと言った調子で申し訳なさそうに言った。

「し、シルフ領ではですね。シルフ以外の種族はPK出来ないようになってるんです」

「え、そうなのか？」

「もっと詳しく言うかね」

今度は前を歩く彼女は立ち止まり、俺達の方へと振り返り説明を付け加えた。

「各種族にホームタウンがあるのは知ってるよね？」

「ああ。最初にそんな説明を受けたけど」

「ホームタウンってのは、文字通り種族のホームなんだ。その場所に入ってしまったら、シルフ領ならシルフしかPK出来ないし、サラマンダー領ならサラマンダーしかPK出来ないの」

「なるほど、だから攻撃してもヒットポイントが削られなかったのか……」

少し調べればわかることだった。

道理でシルフ領にはシルフ以外の種族が居ないわけだ。

ここでPKされても文句は言えない。何せここには自身の種族の法律など通用しない、言ってしまうえば他国にいるのだ。己の所属している種族の常識など通用するわけがない。ましてやアルヴ Heim・オンライン自体がPKを推奨しているのならば尚更である。

そして俺はここで、漸く気が付いた。

「……ってことは、主街区——つとここだと首都か。首都に居てもPKは発生されるってことだよな？」

「うん、そうだね」

「それで俺は、シルフ領に凸つたと……」

「そういうことになるね」

「……相当頭ヤバイやつだな俺……」

「まあ、ぶっちゃけちゃえばね？」

あはは、と彼女は乾いた笑みを零すと「そうだ」と俺に問いを投げる。

「君、どれくらい斬ったか覚えてる？」

「んー、そうだなー。50人くらいから数えてなかった」

「ひえー……!」

ドン引きするように、レコンが一步後退る。

まるでその眼は化物を見るようで、大変他人に向けてよろしい眼ではない。

「レコンの気持ちもわかるけどね。アレだけ斬っておいて、ノーダメとか君非常識にも程があるよ?」

「そうか? 俺が知ってるバカもこれくらいのこと出来ると思うけど……」

実感が沸かない。

とは言っても、アイツはダメージを全く受けないことはないだろう。

致命傷をバカバカしい感度の高い直感で避けて、傷だらけになりながらも怯まずにゴリ押しで乗り切るに違いない。

魔法攻撃も、あのバカなら何とかなる筈だ。斬れないにしても、避けるくらいは出来るだろう。俺よりも非常識であると思うのだが、その辺りどうだろうか。

「そう言えばさ、君の名前聞いてないよね?」

「確かにそうだな。俺はキリト、君は?」

「あたしはねリーファ。よろしくねキリト——」

キリト、と言う前に彼女——リーファの言葉が詰まった。

それは何故か。問うまでもない、俺が止めたから。それは物理的に、リーファの両手を掴んで、接近させて、身体を思いつきり密着させる。

途端、リーファの顔が真っ赤に染まった。

ボンッ、と小さな爆発音が鳴ったと錯覚出来るほど、彼女の顔は激しく紅く染まる。

「き、君! なななな何を——」

「リーファ! お前さ、リーファって言った!?!」

「言ったわよ！ 言ったけど、だから何——？」

「アルフヘイムオンラインのリーファだよな!？」

「アルフヘイム？ アルヴヘイムでしょ——」

そこまで言うのと、リーファは「あれ？」と眉を顰めて考える。

何処かで聞いたことがある、と。何処で聞いたのだったか、と彼女は思い出していく。

それは数日前に、それは早朝に、それは道場で。

何処の誰が言っていたのか、リーファは思い出そうとしているのだろう。

「え、待って。待ってよ……？」

紅く染まった顔は、青色に変わり、それから白い色に変わっていく。そして翠色の双眸に涙を浮かべて、ワナワナと身体全体を震わせて、声も震わせて恐る恐る。

「キ、キリト君ってさ、もしかしてだけど妹いない？」

「いるぞ」

「その娘ってさ、剣道やってる？」

「やってるぞ」

「結構強い？」

「全中ベスト8って言ってじゃないか」

それからリーファは大きく口を開ける。

すると危険を察知したのか、レコンは直ぐに自分の耳を塞ぎ始める。

あつ、これは不味い。非常に不味い。

だが気付いた頃には何もかも遅かった。リーファは——いいや、俺の妹であるスグは羞恥心が混じった声で大きく口を開き——

「お、お兄ちゃんー!?!?」

第7話 共犯者

——初めて見たとき、胸が高鳴った事をリーファは思い出した。

風妖精族数十人と囲まれた影妖精族。

一見、迷ってここまで来てしまったと考えられるがそれはありえなかつた。

影妖精族を見れば初期装備。何の恩恵もない影妖精族特有の黒色の布製の服。防具などといった守るための機能は一切ない、ただ着るだけの初期装備を影妖精族の少年は身に纏っていた。

ならば、彼は初心者であることはリーファでも安易に想像がついた。

最初にアルヴ Heim・オンラインにログインしたならば、ホームタウンに自動的に転移される事になっている。

まずそこで初心者は、最初はその周囲を散策する筈だろう。そこで安全に、PKなど気にすることなくアルヴ Heim・オンラインをプレイするにあたって目当ての一つである“飛行”を練習する筈だ。

そして、今彼女がいる風妖精族の首都であるスイルベーンは影妖精族のホームタウンとは真逆の位置にあった。しかも唯の真逆ではない。二つの領の間には山岳地帯がそびえ立っており、その中心には世界樹央都『アルン』がある。

両種族の首都は離れている。一日で行き来出来る距離でもないし、ましてや間違つて来れる距離でもない。

ならば影妖精族の少年が、迷ってここまで来てしまったことは考えられないのだ。

何よりも影妖精族の少年が初心者であることを裏付ける証拠がある。

影妖精族は“飛ぶ”のではなく、“走って”いた。だが影妖精族の少年は、走って風妖精族の首都『スイルベーン』まで駆け込んできたのだ。

飛行でもなく走破して、敵地であるスイルベーンまで走る。それが何の意味を表しているのか、一年近くアルヴ Heim・オンラインをプレイしているリーファにとって手に取るようにわかる。

そう。

スプリガン
影妖精族の少年は飛べない。

恐らく少年は、コントローラーで飛べる簡易飛行の存在も知らないであろうし、羽の出し方すらわからないだろう。

となると、自身の所属する種族のプレイヤー達は、何も知らない初心者でPKしようとしているように見えるし、正にその通りなのだろう。

気に入らない。

率直に言ってしまうえば、リーファは苛立ちを覚え、失望していた。

彼女が、リーファが——桐ヶ谷直葉がVRMMOに手を出したのはこんなモノを見るためじゃない。

兄の愛した仮想世界を見たくて、兄が夢中になったVRMMOとはどのようなものなのか体験したくて、アルヴ Heim・オンラインに手を出した。

憤りがなかったと言えば嘘になる。

何せ愛する兄を奪ったのは、兄が愛したVRMMOなのだ。プレイするにあたって抵抗も有ったし、嫌悪感も有った。だがそれでも、直葉は知りたかった。兄は何を想って、何に夢中になったのか、直葉は知りたかった。

そうして直葉は夢中になっていった。

「飛ぶ」事がどれだけ素晴らしいか、どれだけ高揚するモノなのか、そして——兄はこんな現実では出来ない世界に憧れていたことを、直葉は漸く理解することが出来た。

現実世界で空を見上げることが出来ても、重力という枷が邪魔をして飛ぶことは出来ない。

だがこの世界では、仮想世界では違う。現実世界では出来ないことを可能にし、自分を高めへと飛ばせてくれる。

ココではない遙かへ。もつと高みへ、更なる空へ、リーファは直葉を連れて行つてくれた。

彼女はただ飛びたかった。

兄から見える景色を、仮想世界を体験したかった、それだけなのに

いつからだろうか——目的と手段が入れ替わったのは。

いつからだろうか——“飛ぶ”よりも“攻略”に夢中になったのは。

いつからだろうか——他種族を見て、剣を構えるようになってしまったのは。

ただ彼女は飛び続けたかった。

そうなる滞空制限が邪魔だ。一定時間を飛行すると、数十分羽を休めなければならぬ。

その為にグランドクレスト、アルヴヘイム・オンラインでプレイするプレイヤーの終着点、世界樹の頂点にあるとされる空中都市にたどり着き、妖精王オベイロンに謁見し光妖精族アルフに転生する必要がある。

最初は夢中になっていた。クリアしようと、躍起になっていた。無制限に飛べる自由を掴もうと、リーファは必死になっていた。

だが時が経つにつれて、その情熱は消え始める。他種族を出し抜かなければならず、世界樹を守るガーディアンも強力、運営も対立を煽るばかり。

楽しかった筈だ、夢中になっていた筈なのに、時折冷めたような感覚に陥ってしまう。

極めつけは、目の前の光景だった。

多数で、一人を取り囲む。内通者かもしれない、というだけで刃を向ける状況。

確かにアルヴヘイム・オンラインはPK推奨しているVRMMOである。それでも、これはやり過ぎではないだろうか、とリーファの頭にはそんな疑念が過った。

だからこそリーファは止めようとした。

ここでこの争いを止められたからと言って、アルヴヘイムが変わる

ことはない。とてつもなく広大な水面に一つの小石を投じて、波紋を広げたからと言ってそれが全体に広がる訳がないのだから。

リーファは飛ぶために、羽を広げる。

憂さ晴らしの意味も込めて、影妖精族の少年に当たらぬよう上空から魔法を撒き散らし、力技で止めようとした。

しかし――。

――え………？

ピタツ、とリーファは動きを止めた。

視線の先には相変わらず、影妖精族を包囲している。数秒前と違うと言えば、例の影妖精族の少年が背から黒い直剣を抜き放ったくらいだろう。

その構えは出鱈目の一言。

右足を前に半身に構え、腰を落とし右手に持っている直剣の剣先を舗装された石造りの石道に向ける。

一見隙だらけのものであるものの、リーファからはどう言うわけか堂に入ったモノに見えた。

加えて、雰囲気がるで違う。一步でも安易に踏み込めば斬られる事が想像できるほどの、剣気を影妖精族の少年は放っていた。

そして風妖精族が殺到したところで、その剣気が衰えることはなかった。

時に弾き、時に受け止めて、時に流して、時に斬る。その剣は美しく、何よりも流麗とは――言い難いものだった。剣術など習っていないのだろう、型というモノが存在せず我流剣術に等しい。

だと言うのに、無駄が何一つ見られない。

恐らく、彼は何度も何度も、それこそ万を超える回数を振るってきたのだろう。

一朝一夕で身に付く完成度ではない。きっと数ヶ月、いいや数年間振るってきた。そう言い切れるほどの剣であると、リーファは断言できる。

しかしリーファは動きを止めたのはそれだけではなかった。
出鱈目な構え、完成されていると言つても過言ではない剣、どれもこれも副産物に過ぎない。

本当の意味で、リーファが目を奪われ、夢中になってしまった理由は――。

――似ている……。

――お兄ちゃんの、剣に……。

――よく、似ている……。

そう、似ているのだ。

リーファのよく知る人物、桐ヶ谷直葉がよく知る人物の剣に、影妖精族スプリガンの少年は似ている――似すぎている。

瓜二つと言つても良い。

早朝に稽古していた兄の姿に、影妖精族スプリガンの少年の姿が重なって見えてしまう。

思わず見惚れてしまいがちながらも、いや、とリーファは頭を振る。

ありえない、と。兄がアルヴ Heim・オンラインをプレイしているのなんてありえない、とリーファは改めて否定した。

それからの彼女の行動は早かった。

飛ばうとしていた羽を収めて、慌てて包囲に駆け寄る。

数十分後、そのありえないことが現実になるとも知らずに――

.....

2024年8月15日 PM 20:10

シルフ領 首都『スイルベーン』

出来ることなら直ぐにでもログアウトしたい。

それが今のリーファの心境であった。

顔を紅く染めて、耳まで染め上げて、彼女はズンズンと力強く歩を進める。

その後ろには気不味そうに歩くレコンと——苦笑を口元に浮かべるキリトの姿があった。

後ろを振り向こうにも、どんな顔してキリトを見ればいいかわからない。

何せ先程、リーファ本人からしてみたらとんでもないことを口にしてたのだ。本人の目の前で、最上の賞賛を、恋する乙女のような反応で、口走ってしまった。

——貴方の剣があまりに綺麗で見惚れちゃった。——

——大切な人に似てるもんだから……——
似てるなんてもんじゃない。

それはそうだ、何せ本人なのだから。兄に似ていると思えば見惚れてたら、その人物が兄本人だった。

リーファからしてみたらそれは笑い話にもならない。

ほのかに赤らめていた頬も、今となつては火が出る勢いで、赤く燃え上がらせている。

——なんで、なんで!?

——何でお兄ちゃんがここに居るの!?

——あたし、とんでもないことを口にした……!?

——アレじゃまるで、お兄ちゃんのこと……。

そこまで考えて、リーファは思いつきり首を横に振る。

その際に、一本に纏めていた金色の髪の毛も一緒に左右に大きく激しく揺れる。

突然の行動に、レコンは「リーファちゃん!？」と狼狽えた。

彼とリーファは付き合いが長い。それこそアルヴヘイム・オンライン

ンをプレイし始めるのだった。一緒だったし、何よりもリアルでも中学生の間柄である。

そんな彼が見ても、今のリーファは見たことがない反応を見せていた。いつも堂々と、うだつの上からないレコンを引つ張っていくのがリーファだったのだ。だが今の彼女からは普段から想像がつかないほど右往左往しており、好いている異性に急に会ったかのような可愛らしい反応を見せている。今の状態を見せて、リーファの普段は姉御肌であると言っても誰が信用するだろうか。

レコンからしてみたら、複雑な心境だ。何せ彼は異性として、リーファを好いている。自分以外の人間に対する反応がこれでは、居心地が悪いつてもものではないだろう。

対してキリトは特に声をかけることもなく、苦笑交じりに見守っていた。

リーファの気持ちの整理が付くまで待っているようであり、何よりも妹がここまでテンパるのを見るのは初めてではないのだろう。

余裕と経験の差。

レコンとキリトの二人の違いはソレであった。

モテる男とモテない男、決定的な差をここで見せつけていく。

三人の複雑な関係はそのまま、無言のまま目的地に到着した。

それは小さな酒場兼宿屋のようだ。キリトがふとドアの横にある壁に立て掛けてある看板を見る。そこには『すずらん邸』という文字が、木造りの看板に掘られていた。

スグが鼻根にしている店なのか、とキリトがぼんやりと考えているとリーファはドアを開けて店の中に入っていく。

内装はまるで違うが、店の雰囲気は良く似ていた。

似ていた、キリト達が第一層にいた頃に、拠点としていた酒場に雰囲気が良い似ていた。

落ち着くような、穏やかな、若干の差異はあるものの、すずらん亭と例の酒場の雰囲気は良く似ていた。

“アイツ”と言い争い、リズベツトが二人を止めて、アスナが笑み

を浮かべて見守って、クラインとエギルがどちらが勝つか賭け事をす
る。そうして騒いで一日を終える、そんな非日常にあった日常をキリ
トは思い出していた。

懐かしい、とキリトは無意識に目を細めて遠くを見ていると。

「あれ？」

首を傾げて、リーファは声を上げた。

腑に落ちない、と言いたげな声にレコンが問いかける。

「リーファちゃん、どうしたの？」

「……ねえ、この時間帯は混み合ってる筈よね？」

「そういえばそうだ。誰も、いないね……」

日が沈み、夜も深まってきた時間帯だ。

本来であれば今の時間帯は混み合っている筈である。クエストも
終わって、冒険も目処が付き、一杯やろうと訪れるプレイヤーでござ
った返す筈だった。

だが不思議と、リーファ達の眼には誰一人席に付いている人物はい
なかった。先程の騒ぎの影響か、とリーファは考えていると。

「それはね、私が人払いしたからさ」

部屋の隅で誰かがいた。

その人物が姿を見せる。

胸元を大きく開けた、翠色の和服のような衣服を身に纏っている女
性。前髪を真ん中分けにし、長い髪の毛は腰のあたりまで伸びてい
る。彼女もリーファと負けずに、ファンタジー物で出てくるシルフ然
とした姿、容姿をしていた。ただ可憐であるリーファとは違い、彼女
は凜然としており聡明な雰囲気を漂わせている。

やあ、と気さくに片手を上げて挨拶をする彼女に対して。

「ぎ、サクヤ!？」

リーファは以外な人物に会ったかのような声を上げた。それから詰め寄りながら、サクヤと呼ばれた風妖精族シムルに問いを投げた。

「な、何でここにいろの?！」

「いや、リーファがスプリガンと愛の逃避行をすると聞きつけてな。先回りさせてもらった」

「あ、愛!？」

レコンも「そうなの、リーファちゃん!？」と慌てて彼女に尋ねるが、リーファからの応答はない。

ポーツと遠くを見つめて、リーファは顔を紅く染める。普段の彼女であれば「そんなわけないでしょ!」と叱責の一つや二つする所だが、それが出来ないまで余裕がないようだ。

そうさせた張本人であるサクヤは、珍しいモノを見たときクスクス笑みを浮かべて今度はキリトの方へと近付いて。

「それで君が問題のスプリガンかな?！」

「……そのスプリガンだと思うけど、そこまで問題起こしたかな?！」

「大問題だとも。我がシルフ領が誇る腕利きの剣士達を相手に大立ち回りのだからね。シルフ100人斬りを達成したスプリガン。今、AL0の掲示板ではその話題で持ちきりだ」

やれやれ、とサクヤは首を横に困ったように振った。

対してキリトは、思わず半歩後ろに後退る。

それはソードアート・オンラインで染み込んだモノだった。危険から逃れるための本能、敵になるかも知れないという経験則から来る無意識の行動。

サクヤは否定する。

気を悪くさせたのならすまない、と謝意を述べると。

「君に危害を向けるつもりはない。悪いのは、早とちりしたこちら側だ」

「……それじゃどうして、ここに来たの？」

何とか回復したリーファは、キリトを庇うように間に入った。兄を守るように、もう二度と置いてかれないように。

サクヤは少しだけ考えて、言葉を選びながら提案する。

「……とりあえず、座ろうか」

リーファは肩口からキリトの方へと視線を向け、どうするか意見を無言で求めた。

キリトもその提案を無下にするつもりもないようで、微かに頷く。

四人が腰掛けるのは窓際の席だ。

正方形のテーブルに腰掛けて、キリトとリーファに向き合うように、レコンとサクヤで着席する。

それからサクヤは神妙そうな顔つきで口を開いた。

「私はサクヤと言う。これでもシルフの領主をやっている」

「領主、っていうとシルフのリーダーってことか？」

「簡単に言ってしまうね。とはいっても名ばかりのモノさ」

そうは思わせない為政者は続けて口を開いた。

「単刀直入に聞こう。君は何者かな？」

「何を言っているのサクヤ。彼はあたしのお兄ちゃん——！」

立ち上がる勢いで答えるリーファに、サクヤはやんわりと首を横に

振る。

そう言う意味ではない、と否定してサクヤは続ける。

「君の兄であることはわかっている。友人の言葉だ、信用していないわけではない。それでも私は、君の兄を何者か問わずにはいられない」

一息をついて、サクヤは鋭い目でキリトを見る。いいや、観察するといった方が正しいのかも知れない。

キリトの一手一足を見逃さないように、僅かな動揺すら拾い上げるために、意識をキリトに集中させていく。

「先程の彼の戦いは私も見ていた。明らかに初心者、飛行すらままならないプレイヤーなのに、君は——強すぎた」

サクヤは個人ではなく、シルフを率いる長として、その場に存在していた。

ありえない強さを誇る影妖精族スプリガンは魔法すら斬り捨てて、超反応で動きを見切り、剣を振るうありえない存在。もしかしたら風妖精族フレンドの最大の敵となり得る可能性すらある。その脅威を見定めるために、彼女はここにいる。

この場でキリトをどうにかするつもりはない。

それでも、今後のために、風妖精族フレンドの頂点に立つ者として、対象が敵であるか否か見極めなければならなかった。

問いを続ける。視線はキリトに向けたまま。

「不躰な質問で申し訳ないが答えて欲しい。——君は、何者だ？」

レコンは視線を泳がせるばかりで、リーファは兄を心配するように顔を伺っている。

濁すつもりはない。

キリトはサクヤの視線を正面から受け止めて、堂々とした様子で答えた。

「俺はVRMMOをプレイするのは初めてじゃないんだ」

「というと、以前もアルヴ Heim・オンラインを？」

「いや、と首を横に振って明確に否定すると。

「俺がプレイしたことがあるのは——ソードアート・オンライン」
「えっ!？」

思わずレコンは立ち上がる。サクヤも面を食らったように眼を丸くさせた。

ソードアート・オンライン。

それは誰もが知るVRMMOの名である。一年以上も仮想空間に閉じ込められて、デスクゲームを強要されていたプレイヤー達。電子の牢獄に囚われていた虜囚。

アルヴ Heim・オンラインをプレイする彼らにとって、ソードアート・オンラインは他人事ではない事件の一つだ。自分達では想像のつかない地獄を経験し見てきたキリトに、改めてサクヤは問いを投げる。

「尚更わからないな。どうして君は、再びこの世界に？ 君が経験し見てきたものは、私達の想像を絶するモノだった筈だ」
「……………」

否定はしない。

サクヤの言うとおりだ。今までキリトは地獄を見てきた。囚われていた先の世界は、何も楽しいことばかりではなかった。街で見かけたプレイヤーがいつの間にかゲームオーバーになっていることもあったし、交流のあった者も次の日見なくなっただけもある。助けら

れなかった命も数えきれないほどあった。

確かにアルヴ Heim・オンラインは安全なのかもしれない。

ログアウトは出来るし、PKしたからと言って現実世界で死ぬわけではない。

それでも、再び仮想世界に訪れることは抵抗があるだろう。実際キリトも怖くなかったと言えば嘘になる。

だがそれでも、だとしても、キリトには再びこの世界に来なければならぬ理由がある――。

「ごめん、お兄ちゃん。それはあたしも知りたいことなんだ」

「スグ……」

「どうして急にお兄ちゃんはALOをプレイしようと思ったの？」

「……………」

キリトは無言で、メイン・メニューウィンドウを開いてアイテム欄からあるモノを取り出した。

事前に携帯から画像をインポートしたものを、羊皮紙に描かれた絵として取り出すと、それをテーブルの上に広げる。

それは二枚の絵であった。

一人は鳥籠のような檻に閉じ込められて。

もう一人は天井から伸びる鎖に両手を縛られて吊るされている。

二枚ともベクトルは違えど、痛々しいものに変わりない。それを見せながら、キリトは重苦しい口調で言う。

「仲間を、探してるんだ」

「……………この二人は？」

「未帰還者さ。スグも知ってるだろ、ソードアート・オンラインはクリアされた。なのに現実で意識を取り戻さない人間が301人もいる。その中に、この二人もいる」

「思い出すのは病室。」

今にも起きそうな姿で寝ているアスナとユーキ、そしてその二人を下卑た笑みで見下ろしている——須郷伸之。

自然とキリトの両手が握りこぶしに変わっていく。苦々しい光景を思い出しながら、キリトは口を開く。

「この絵は携帯に送られて来た画像を、この世界にインポートしたモノだ。アドレスも文字化けしているけど、読み取れるのは『Alfheim』って英単語のみだった」

それだけ言うと、一枚の絵を指差す。

それは鳥籠のような檻に閉じ込められている少女の絵。

「多分だけど、この大樹って世界樹なんだと思う。ってことは——」
「——彼女がいるのは、世界樹の頂点である可能性がある、と？」

サクヤの問いに、キリトは頷いた。

単純に考えればその通りなのだろう。

何せ、檻の中に閉じ込められている少女の絵は、遙か上空の大樹から吊るされているモノだ。

大樹の色合い、空の高度、そして『Alfheim』という英単語から考えても、世界樹が関係していることは明白である。

となれば、彼は確かめるために、この世界に訪れたのだろう。

再び仮想世界へ、地獄を経験したSAO帰還者の影妖精族スプリガンは、仲間を救う為にここまでやって来たのだろう。

だがそれは同時に——。

「君はわかっているのか。それはアルヴヘイム・オンラインをプレイする者達にとっての終着点、天空都市の到達を意味している」

サクヤの言葉は重かった。

VRMMOをプレイしている人間には様々な理由がある。遊び目

的で至極軽い気持ちでプレイしている者も居れば、アルヴヘイム・オンラインが生活の一部にまでなっている者、中にはこの世界でしか生きていけない者も存在する。

そして全員が全員、世界樹の頂点にあるとされる天空都市へ到達し、光妖^{アラ}精族^{ルブ}に転生するために今まで戦ってきた。それこそ、睡眠時間を削って、リアルを犠牲にして、身を削って目指してきたプレイヤーもいることだろう。

「その二人がいるかもしれないし、いないかもしれない。そんな曖昧な理由で君は——」

——この世界の全員を、敵に回すのか？
とサクヤが問いを投げる前に、キリトは遮った。

「——構わない」

臆面もなく、戸惑いも躊躇もせずに、キリトは言い放つ。

その眼は真っ直ぐ過ぎるほど真っ直ぐなもので、まるで一本の剣でもあった。

「俺もゲーマーだ。この世界で生きるプレイヤーがどんな想いで、世界樹を目指しているのかわかる。それでも俺は、世界樹を攻略する」
「……そうなれば、他の種族が黙っていない。君ほどのプレイヤーが攻略するとなれば、全種族が邪魔をするだろう。スプリガンも助けてくれない、むしろ一緒になつて潰されるかもしれない」

「それでも構わない。身勝手だし、勝手な理由だと思う。それでも、俺は世界よりも二人を取る。世界がどうなるうが、知ったことじゃない」

どう言っても折れない意思、絶対に成し遂げる強い言葉でキリトは言う、サクヤは静かに「そうか」と呟いて瞼を閉じた。

劍呑、とはいかないものの、緊迫した雰囲気は辺りを包み込む。一触即発と言つても良い。少しでも動きを見せれば、何か起きる。確信させる空気が、すずらん亭に充満し始めた。

だがそれは直ぐに胡散されることになる。

口火を切つたのは――。

「――面白い」

――サクヤだった。

ポカンと拍子抜けしているキリト達を尻目に、ニヤリと口元に笑みを浮かべて。

「私も君に協力しよう」

「……いいのか？ アンタにも立場が……」

「シルフの長としてではなく、サクヤというプレイヤー個人が協力する分には問題ないだろ？」

そう言うと、サクヤは立ち上がってすずらん亭の窓から見える景色を見つめた。

数多くのプレイヤーが存在している。だが相も変わらず、他種族の姿は見られない。サクヤから見えるプレイヤーは全て、風妖精^{シルフ}族のみであった。

「強い武器を手に入れる、レア度の高い防具を身につける、見たことのないアイテムを売り買いする。きっとそれもMMOの楽しみなんだと思う。だがそれだけじゃないだろう、MMOの楽しみはそれだけじゃない筈だ」

静かに、されど悲しそうに呟くサクヤの気持ちが変わるのか、リーファは顔を伏せる。

レコンはいまいち意味がわからないのか首を傾げて、日が浅いなが

らも何となくキリトは意味がわかるのか静かにサクヤの言葉に耳を傾ける。

「もつと高く飛びたかったただけなのに、自由に歩きたかったただけなのに、柵だらけで邪魔ばかりだ」

サクヤはキリトに向き直り、問いを投げた。

「君からシルフ領はどう見える?」

「……閉鎖的、だと思う」

率直な感想をぶつけた。

短い時間しか、この世界にいなかったキリトでさえ、何やらこの世界は息が詰まりそうな感覚になっていた。

他種族を見れば警戒し、内通者であるかも知れないと疑う。PK推奨とは言え、これはやり過ぎであると思うし、何よりもこれがアルヴヘイム・オンラインを統括する運営の意思なのだろう。

サクヤは頷く。

キリトの言葉に同意するように頷いて。

「私は一泡を吹かせてやりたい。私達をつまらない檻に閉じ込めているゲームマスターに一泡を吹かせてやりたい。私達を舐めたツケをここで精算させてやる」

「……その為に、俺に協力してくれるのか?」

「ああ。どちらかというと、手を組むと言ったほうが正しいのかも知れないな」

そこまで言うときサクヤはキリトに手を伸ばす。

その手を取ることにどういった意味があるのか、キリトは理解しながらも戸惑うことなく立ち上がり手を握る。

「俺は仲間のために」

「私は運営に吠え面をかかせるために」

お互い最終目的を口にして、力強く手を握った。

ここに人知れず、影妖精族スプリガン一人と風妖精族シルフ一人が同盟を組んだ――

第8話 鳥籠の中の女王

時刻不明

世界樹 頂上付近

その場所から見える景色は、空であった――。

彼女と憂鬱な心境とは裏腹に、雲一つなく青空が広がっている。

本物の空、というわけではない。精巧に作られた空。これよりもっと空高くには星の外へ、つまるところの宇宙に広がっているというわけではないことを彼女は理解していた。

きつとこれより高度には飛べずに、活動限界という定まれた法則に従い、外側へは飛ぶことが出来ない筈だ、と彼女は想像していた。

そう考えれば、今の自分の身と、この世界を謳歌する妖精族は同じだろう。

明確な牢獄に囚われ世界樹から吊るされている、さもトロフィーのように見世物にされている自分。

見えないゲームマスターに、仮想世界で掌の上で嘲られている妖精族。
彼女と妖精族、両者の間に違いなどない。

――どこまで、人をバカにすれば……！

――わたし達は、あの人の玩具なんかじゃないのに……！

ギリツ、と彼女は奥歯を噛み締めて、金色に煌めく格子を両手で握りしめた。

一見、彼女が閉じ込められている籠の中は絢爛な作りに見える。床は磨き抜かれた白い大理石、丸テーブルと椅子は中世に作られたアンティークのような趣がある造形、純白の天蓋付きのベッドは何やら貴族の寝室で見たことがあるようなモノだ。

鳥籠のような檻の中にあるのは、現実世界でも簡単に見ることが出

来ない家具が設置されている。

高級ホテルのような内装であっても、彼女は満足はしないだろう。何せ檻というのはそういうものだ。閉じ込める対象に自由を与えない為のモノ。少しでも手を伸ばせば届くのに格子が阻む、ほんの少しすらも許さない檻の中に、彼女は閉じ込められている。

見せつけるように、彼女の心を踏みにじるように、格子と格子の間に大きな幅があった。

だがその間からは抜け出すことが出来ない。何度も何度も彼女は試したが、システムの設定というどうすることも出来ない壁が阻んでいた。

ここまで無力だっただろうか、ここまで自分は何も出来ない女だっただろうか。

幾度も試した。格子を殴りつけたがビクともしない。ならば何かをぶつけようとしたものの、設置されたテーブルは持ち上がらず、椅子すらも満足に持ち上げることも出来ない。

自身の両の腕に、彼女は目を向けた。

細く、白く、凹凸の少ない、女性らしい腕が見えた。

この手で、何度も今まで剣を振るってきたというのに、何度も愛剣を振るい、自分なりに加速世界アクセル・ワールドを引っ張ってきたというのに、この世界では何もかもが取り上げられてしまった。

剣は元から存在せずに、自信もズタズタに引きちぎられてしまっている、既に『紅閃』と呼ばれていたことなどとうの昔。

彼女は剣士ではなくなっていた。

デスクゲームを生きてきた、幼馴染に置いてかれまいと前を向いていた彼女——アスナという剣士はここにはいない。

弱かった、一人では何も出来なかった、いつも守られてきた結城明日奈が、その檻の中にいた。

「……ッ！」

長く、途方もない時間を、彼女は檻の中で過ごしていた。

それでも明日奈に感情があるのは、無気力にならずに辛うじて前を向けているのは、一人の少年の影響があつた。

彼ならば諦めない、彼ならば足掻く、彼ならばどんな状況でも前を向いている。ならばここで、自分だけが諦めるわけにはいかない。その背に追いついて、隣を歩くと決めたのだから、こんなところで折れている場合ではない。

明日奈が諦めないのはその程度の理由だつた。

特別な約束も、崇高なる信念でもない。大切な人の隣で歩きたいから、その程度の理由で、ソードアート・オンラインがクリアしてから半年間も一人で耐え抜いていた。

健気、とも捉えることが出来る想い。

それすらも許さないと云わんばかりに――。

「いけないな、ティーターニア」

――この男は踏みにじる。

檻に入ってきたのは長身の男だつた。波打つ金髪が豊かに流れ、その額には黄金の王冠。身体を包むのは濃緑のゆつたりとした長衣。

ニヤついた笑みを隠すことなく顔に張り付かせたまま、いけないと称した癖に朗々と楽しそうに口を開いた。

「苛ついている顔は、君には似合わない。君はもっと、笑っていて欲しいな」

「だったら、ここから出してくれませんか？」

明日奈は男の方へ視線を向けない。

格子を片手で握りしめながら、感情を悟らせないように冷静な口調で言った。

対する彼は、大げさに両肩をすくめると、残念と芝居ががった口ぶりで答える。

「それは出来ないよ。実を言うとね、君は笑っているときよりも、泣いている顔のほうが一番美しいと思うんだ」

「……」

クスクス笑みを零す彼に、やはり明日奈は目も向けない。

既に彼女にとって、檻の中に入ってきた彼をあたかも存在しない者のように、自分の意識からはじき出した。

こうして彼と会話をするのは初めてではない。

自慢話に始まり、自分の生い立ちを延々と繰り返して説明し、どれだけ彼が明日奈を愛しているか口説き、そして再び自慢話で終わる。

自分本位かつ自分よがりな興味のない話を並べて、満足すると帰っていく。その繰り返しだ。今回も同じことの繰り返しなのだろう、と明日奈は眼を閉じて考えていると。

「——無視はよくないな、ティターニア」

ゾクツ、と明日奈の肌が栗立った。

いつの間にか彼は明日奈の背後に立っていると、徐に彼女の髪の毛を束で掬い鼻先を埋めている。

思わず、明日奈は一步後ろに下がり、汚物を見るような眼で睨みつけて。

「止めて下さい、須郷さん」

「違う、違うだろ。僕は妖精王オベイロン、君は僕の妻であり女王のティターニアだ」

「いいえ。わたしは結城明日奈、貴方は須郷伸之。赤の他人よ、今まで、これからもね」

明日奈の瞳には嫌悪、言葉には拒絶、態度には拒否が明確に込められている。

なのにも関わらず。

「クククッ」

妖精王オベイロン——須郷はニヤケ面を深めていった。

小馬鹿するように、愉悦するように、他人の心は自分が踏みにするために疑わないといった表情で明日奈に笑みを向けていた。

尋常ではない様子に、明日奈はもう半歩後ろに下がる。

「……何が、可笑しいの？」

「いや、君が僕にそんな態度をとっていいのかな、って思ってたね？」

「……なんですって？」

眉を顰める明日奈が面白いと言わんばかりに、須郷は「おっと」とわざと大きなリアクションを取って続ける。

「まだ君に話すことではないか。最近、僕の思い通りに事が進んでね、ついつい口が軽くなってしまうようになる」

こんな戯言に、本来であれば明日奈は耳を貸さない。

だがどういうわけか、今回は嫌な予感がした。何か奇妙な第六感が、決して明日奈が無視できない何かを須郷が進めている気がしてならなかった。

須郷がアルヴ Heim・オンライン、つまりこの世界の運営責任者でありゲームマスターだと言うことは、何度も本人の口から聞かされていた。

ここまでご機嫌であるということは、経営のほうが上手く言っているのかと、考えられるが直ぐに明日奈は否定した。違うのだ、彼女が感じた予感はその些細なモノじゃなかった。かといって説明がつかない感覚、しかし無視もできない。

どうするか、明日奈は考えていると。

「———そういえば、数日前にキリト君に会ったよ」

「———え？」

そこで漸く、戯言であると断じていた須郷の方へ、本当の意味で意識を向けた。

ニヤついた顔のまま彼は告げる。

「何度も君達の病室に通っているみたいだね、まったく健気じゃないか。感動すら覚えるよ」

言葉とは裏腹に、顔に笑みを張り付かせて須郷は言う。

キリトが病室に来ていた、それは良い。どこかで昏睡状態で目覚めない明日奈の現状を聞きつけて、見舞いに来てくれていたということ。は明日奈も直ぐに理解できた。

問題はそこではない。

「君達」という複数形である。

君達ということであれば、それはキリトも良く知る人物なのだろう。自分と他の人間もその病室にいて、キリトは見舞いに来ているということになる。

明日奈と相部屋、つまりは明日奈をよく知る人物であり、結城家とも関わりがある人物なのだろう。

キリトが知っていて、自分と相部屋になれて、結城家とも関わりがある人物。

心当たりがあった。

しかしそれは、そんなことがっては、辛うじて平静を保っていて明日奈の心が、今度こそ折れてしまう自体にもなり得てしまう———

「待って、君達って……」

顔を青くさせて、震える唇で、かすれながらも声を紡がれる。

須郷は大きく左右に手を広げて、朗々と楽しそうに言った。

「その時にねえ！ 君の身体に触れようとしたけど、キリト君に邪魔されたんだよ。彼、何て言ったと思う？」

「まさか、貴方……」

「ユーキに叩き潰されるぞアンタ、だとさあ！ 出来るわけがないのにね」

喜々とした表情で「何故なら」と言うと、彼はシステム管理者の青いメニユーウィンドウを開くと、ある映像を映し出した。

明日奈は口元を両手で覆う。

そこには見覚えがある姿があつた。

いつも守つてくれていた彼、泣いていたらいつも一緒にいてくれた彼、口が悪くても心優しくかった彼が、そこにいた。

光すらそんざいしない、窓の一つもない、本当の意味での監獄に、彼は囚われていた。その彼の、少年の名前は――。

「――彼は、茅場優希は君と同じように、この世界にいるのだから……ッ！」

その言葉がトドメだった。

両膝から明日奈は崩れ落ちる。身体を震わせて、されど眼を離すことなく須郷が出した映像を凝視する。

自分だけだと思っていた。

須郷に囚われているのは、自分だけであると思っていた。

だが現実はずう。囚われている、なんて大げさな表現だった。本当の意味で、彼に囚われているのは――。

「どうして……」

「ん？」

やっと絞り出した声で、積み重ねてきた憤りを噴出させる。

耐えてきた、小動物のように飼われてきた、それを明日奈はずっと耐えてきた。少しでも反応をすれば、須郷を喜ばせるだけである、必死に堪えてきた。辛いこともあったが、それと等しく楽しいことも会ったソードアート・オンラインとは違い、ここでの生活は辛いことだけであった。泣きたくなる夜もあったが、歯を食いしばり乗り越えてきた。全ては須郷を喜ばせないために。

だが限界だった。

大切な幼馴染が、己が愛する者の現状が引き金となり、明日奈の感情が爆発する。

睨みつけて、大粒の涙を双眸から流れながら、彼女は叫んだ。

「どうして、こんな事をするの!?! 優希くんが貴方に何をしたっていうのよ!!」

「したさ。これは僕に与えられた、当然の権利だ」

ここで初めて、須郷の顔が歪んだ。

劣等感、嫌悪感、ありとあらゆる負の感情を混ぜたながら、口元を引き裂くような凶笑を浮かべて。

「天才茅場晶彦はね、僕から何もかも奪ったんだ。名声、地位、富、女すらも彼は僕から奪っていった。いずれ僕になる筈だった何もかもを奪っていった」

それだけ言うと、視線を明日奈から、映像にある優希へと移す。

「茅場先輩から受けた屈辱を僕は彼に返しているだけさ。叔父の負債を、甥に請求するのは当然だろ?」

「何よそれ、優希くんは関係ないじゃない!」

「関係あるさ。現に、君は知らないが世間では彼を『世紀の大犯罪者の家族』なんて声もある。中には罰しろという意見もある」

「……なによ、それッ！」

確かに、茅場優希と茅場晶彦は血の繋がりがあある。

それは優希本人も認めていることであり、茅場晶彦の家族と見られても仕方ないことである、と優希も受け入れている節もあった。

だがそれは優希の話した。

明日奈自身は何一つ納得していないし、理解を示すことなど一生訪れないだろう。

ふざけるな、と。

声を大きくして言いたかった。茅場晶彦の成してしまったことに、優希を巻き込むなど埒外の言い分にも程がある。

彼がどんな想いで、何を背負い、取り零してしまった者すら知らずに、好き放題言うな、と明日奈は叫びたかった。

しかし声を張り上げる前に。

「だから僕は世間の声の代弁者でもある。全員がやれないことを、僕が率先してやって上げてるんだ」

「ふざけないで。貴方がやってることは、ただの八つ当たりじゃない

！ 優希くんは何一つ関係がない——」

「——それが関係があるのさ」

くつくつと喉を鳴らしながら笑みをこぼし、須郷は続けた。

「茅場先輩だけじゃない、彼も僕から奪っている。僕の物になる筈の君を、僕から奪おうとしている。全く、茅場というのは盗人かなにかなのかな？」

「この、いい加減に……ッ！」

もう我慢が出来なかった。

須郷から感じる不快感や嫌悪感よりも、何も知らないくせに優希を貶す須郷に、明日奈は我慢が出来なかった。

今すぐに、その気色の悪いニヤけ面を引っ叩いてやらなければ気が済まない。その為に彼女は足早に近づいて、片手を振りかぶる。

対して須郷は嫌ってほど冷静であった。

不気味なほど、これから訪れる暴力に対して、何の抵抗も見せない。彼は自尊心の塊のような男だ。このまま明日奈の怒りを受け入れる筈がなかった。

「——いいのかな？」

静かに呟く声は。

「僕に何かあれば、彼がどうなることか——」

明日奈の心に、深く尚深く、深すぎるほど突き刺さった。

ピタッと明日奈の動きが止まり、ぶつけるべき手を静かに下ろしていく。

怒りに燃えていた眼も、今となつては見る影もない。ゆらゆらと揺れて、自身の身体に触れられたとき以上に、彼女は怯えきっていた。ありきたりな脅しである。

それだけで充分だった。

目の前の男は、脅しではなく本気で行動する。やりようによっては、優希を「事故」と称して殺せることも出来るのだ。それだけの地位を行使出来るほどのポジションに須郷は就いている。

怯えきった眼で、縋るように、明日奈は懇願した。

「やめて、下さい。彼には手を出さないで……」

「さて、それは君次第だね」

須郷の眼が変わった。

愉悅に満ちた笑みももちろん張り付いている。だがそれ以上に、物色するような、何から何まで観察するような眼で、明日奈を見やった。

足から這うように、胸を見て気味の悪い笑みをこぼして、最後には唇を見て、官能的笑みを浮かべる。まるで丸裸にするような眼で、明日奈を見ながら須郷は口を開いた。

「無理矢理は性に合わなかったんだが、気が変わったよ」

「……ッ！」

鳥肌が立った。

生理的な意味で、この場から離れなければならぬと身体中が警告を鳴らす。

それでも、動けない。

下手な真似をすれば、優希が何をされるかわからない。

ギョツと眼を瞑り、“行為”が終わるまで待つしかないのだ。両手を握りしめる、指が赤くなるまで、出血しかねないほど握りしめて、嫌悪感に耐える。

ここは、仮想世界だ。

怪我されたからと言つて、現実世界でも同じということではない。尊厳を踏みにじられようとも、何度汚されようとも、須郷の悍ましいはけ口になろうとも構わない。

全ては——。

「ここで、君の純潔を一度散らしてしまうのも、悪くないかもしれない……」

全ては彼のために、優希が無事であるために、ありとあらゆる屈辱に耐えてみせる。

そして明日奈の身体に、須郷の手が——。

「う、あ……？」

—— 触れない。

須郷は怯えた様子で、世界樹の方へと身体を向けて、身体を震わせて一歩後退る。

青白い顔で、ありえない、と。顔を激しく左右に震わせて、否定して見せていた。

「あ、あの死にぞこない！ 意識がない癖に、僕の邪魔をする気か!」

先程の余裕はどこへ行ったのか、痲癩を起こしながら悪態をつく。それからメイン・メニューウィンドウを開いて、ログアウトをした。もはや明日奈に眼もくれない。いつもは牢の唯一の出入り口から、明日奈に見せつけるように出ていくのだが今回は違った。余裕が無いように、一目散に逃走するように、脱兎の如くこの世界から須郷は姿を消す。

須郷の身に何が起きたのか、明日奈はわからない。しかし何となく、察することが出来た。

—— 優希くん、守ってくれたんだね……？

—— 諦めるな、って言うてくれたんだよね？

先程までであった、恐怖はなくなっていた。震えも止まり、再び心“炎”が再燃する。

暖かく、それでいて満ち足りるような、不思議な感覚が明日奈に満ちた。

眼を閉じて心の中で、ごめん、と。

一度謝罪して、再び眼を開けて、鳥籠のような檻から見える空に目を向けた。

雲一つなく青空が広がっている。

——もう、負けないよ。

——助けてばかりじゃない。

——今度は、今度こそ、私が君を助ける番だから……！

絶対に方法はある。

ここから抜け出す方法は、必ず存在する。

諦めはしない、挫けたりはしない、もう二度と心が折れてなるものか。

抜け出して、優希を——。

「明日奈さん！ 明日奈さん！」

「……えっ？」

声が聞こえた。

小さくも、か細いモノであるが、確かにそれは自分を呼ぶ声だった。

だがどこから聴こえてくるのか。明日奈は耳を澄まし、辺りに意識を向けて集中した。

「団長さん!!」

ハッキリと聴こえた。

それは上空から、まるでシステムの外から、電子の宇宙側から降ってくるように、少女は降りてきた。

降りてくる速度は高速。

眼にも止まらぬ速さで落下し、激突すると思いきや重力を感じさせないように、静かに世界樹の長大な枝の上に降り立った。

ふわり、とまるで羽のように静かに少女が降り立つ。

可憐な少女。額に揃えた前髪で、黒髪の長髪。純白のワンピースが似合う少女は、嬉しそうに涙でその眼に潤ませながら。

「良かった、間に合いました……！」
「ユ、」

メンタルヘルスカウンセリングプログラム一号、と以前に少女は呼ばれていた。

しかし誰よりも人間らしく、怖いものに怯えて、嬉しいことに笑みをこぼし、悲しいことに涙を流す。AIといった存在ではなく、人間らしい少女。

かつてキリトを父と慕い、アインクラッド鉄の島で別れた、その少女の名前は。

「団長さん、助けに来ました！」

「ユ、イちゃん……!?!」

第9話 囚われの君

時刻不明

世界樹 頂上付近

彼女——結城明日奈が本当の意味で仮想世界へ足を踏み出したのは、何もこれが初めてではない。

一年と数ヶ月。現在も含めてしまえば、あと六ヶ月経過すれば丁度二年、彼女は仮想世界で生きてきた。しかもただ生きてきただけではない。少しでも気を緩めたら、死ぬような過酷な状況に、彼女は常に身を置いてきた。

現実世界ではまず持ち得ることのない剣を握り、身を護る防具を装備し、生きるために戦ってきた。

巨大なイノシシとも戦った、火を吐く翼竜とも戦った、三メートルを超える巨人とも戦ったことがあるし、ワーム状の気持ち悪いモンスターとも戦った。

戦えたのは頼りになる仲間たちの存在があったから、何よりも剣を握っていたからに他ならない。今となって考えれば、アインクラッドでの彼女と剣は一心同体。むしろ身体の一部というほど、深い関わりを持っていた。

しかし、今となってはそれがない。

防具も装備していなければ、腕力も現実世界の自分と同等と言えるほどに劣化している。加えて、『紅閃』を称されるほどの速度は見る影もないに違いない。

力では一般人にも簡単に負けるだろうし、走ったところで以前のような「眼に止まらぬ速さ」では動けない。

身に纏っているのはただの趣味の悪い露出されたドレス、そして、機能しない両翼のみが明日奈の背に接続されていた。

こんな身で、こんな体たらくで、アクセル・ワールド加速世界のギルド団長とは笑わせ、と明日奈は思わず口元を自嘲するように歪めた。

構わない。

どんな見窄らしい身なりになろうとも、恥辱に塗れようとも、情けなくともどうでも良かった。

全ては彼を——茅場優希を救うためなら、どんなことでもやってみせる。

「……ッ」

鳥籠から踏み出し、巨大な世界樹の枝に降り立つ。

裸足の裏からは、確かな感触。そして一陣の風が、容赦なく明日奈の身体へ叩いてく。突風とはいかないものの、明日奈の身体の軸を崩すには充分な風力。

思わず身体が揺れて、踏み止まり彼女は一息をついた。

ここは高度数百、いいや数千、もしかしたら数万は行くかも知れないほどの高さだ。こんなところから落ちてしまったら、優希を救うところか、明日奈の身すらどうなるかわからない。

「大丈夫ですか、団長さん？」

「うん。ありがとう、ユイちゃん」

明日奈を鳥籠から出して、心配そうに覗き込む少女——ユイに、明日奈はなるべく自然な笑みを作る。

檻から出してもらった上に、不安そうな顔をなどしてはいられない。

ふう、と一息吐き出して、明日奈は前を向き確かな足取りで歩き、改めてユイに礼を送る。

「本当にありがとうね、ユイちゃん。貴女がいなかったら、わたしずっと閉じ込められていたかも……」

「いいえ！ わたしこそ、遅れてごめんなさい」

「ううん、謝ることなんてないよ。本当にありがとうね？」

それは心からの謝意であった。

ユイが現れなければ、今も明日奈は鳥籠に閉じ込められていたに違いない。何も出来ずに、ただ空から地上を眺めて、いずれ来る妖精王からの恥辱を待つばかりであった。

だが今は違う。

鳥籠から抜け出し、自身の両足は確実に仮想世界の地に踏みしめて、今度こそ囚われの幼馴染を救うことが出来る。

それもこれも、ユイが明日奈を助け出したからに他ならない。

しかしユイの表情は晴れない。

暗い顔で、まるで後ろめたい気持ちでもあるかのように顔を俯かせて、ギョツと白いワンピースを握りしめて、恐る恐るといった口調で口を開いた。

「違うんです、団長さん。わたしは、ずっと見ていたんです……」

「それは——」

どう言う意味、と問いを投げる前にユイが続ける。

「わたしは、わたし達は、ずっと観測していました。団長さんの現状を、ユーキさんの状態を、ずっとずっと『システムの外側』から……」

「システムの、外……?」

「アルヴ Heim・オンラインはソードアート・オンラインのサーバーをコピーして精製した物でした。プログラム、グラフィック、カーディナル・システムから何もかもです」

とは言っても、カーディナル・システムの方は古いバージョンを使っていますが、と付け加えてユイは口を開く。

「わたしはソードアート・オンラインがクリアされた時、確かにデータを初期化され消滅しました」

「……うん、わたし達もユイちゃんが消えるのを見たよ」

最上階で茅場晶彦と戦っていたユーキ以外のアクセセル・ワールド加速世界の全員が見届けた。

涙をながすことはあれど、満面の笑みで消えたユイを、確かに明日奈達は見届けた。

「消える瞬間、”あの人”は何やら細工されていると気付いたのでしよう。事の異変を、S A Oプレイヤー達が拉致された異変を解決しようとして、”あの人”は消滅したわたしのデータを集め、復元されました」

でも、と言葉を区切りユイは悔しそうに声を震わせる。

「わたし達にとっての不幸は、アルヴヘイム・オンラインがソードアト・オンラインのデータを流用していることでした。外部からのハッキングは完全にシャットアウト、ファイヤーウォールにも穴がなく、手も足も出ません……」

「……わたし達を囚えていた人は、それを狙っていたと思う？」

「いいえ、偶然だと思えます。ただそれが、管理者にとっての幸運だったと思います」

「一応聞かせて？ 首謀者が誰なのか、ユイちゃんわかる？」

「団長さんを拉致した実行犯は——須郷伸之。この世界では妖精王オベイロンとして、君臨しています」

衝撃はなかった。

何度か、須郷から聞いたことがあるから。自慢するように朗々と、誇らしげに己の地位がどれほど高いものなのか、聞きもしないことを語っていたから。その際に何度も言われた、明日奈を殺すも生かすも僕次第である、と。

その男が、自分と優希を拉致した関係者ではな筈がない。一枚噛ん

でいる、もしくは首謀者であることを想像していた。

蓋を開けてみれば正にその通り。予想通りで何も面白味のない展開である。

これでハッキリした。

自分達がどうすれば、現実世界に帰還出来るのか。これでハッキリした。

やはり元を断たねばならない。今回の主犯、全ての元凶をどうにかしなければ、何も解決などしない。

しかしここで、新たな疑問が生まれる。

「ユイちゃんはどうやって、わたしの所まで来れたの？」

ユイの言葉を借りるのなら、彼女がアルヴ Heim・オンラインへ侵入するのは難しかった筈だ。

外部から接触できないように設計されているソードアート・オンラインのシステムを流用しているのだ。これでどうにか出来てしまえば、それこそ一年近くもSAOプレイヤーがデスゲームを強いられる事もなく、現実世界へ帰還できた筈なのだ。

不思議そうに首を傾げる明日奈に、ユイは自分の結論を出した。

「恐らくですが、誰かがナーヴギアでアルヴ Heim・オンラインにログインしたんだと思います」

「ナーヴギアで？」

「はい。ソードアート・オンラインとアルヴ Heim・オンラインのシステムの基幹は同じです。ログインした際に、ナーヴギアにあったソードアート・オンラインのデータが引き継がれてしまい、ありもしないデータを引き継ぎシステム内に不具合が生じてしまった結果――」

「ユイちゃんが侵入出来たって訳ね……」

ユイは「確証はありませんが」と頷く。

何処の誰かは明日奈にはわからない。だがその人物が、ナーヴギアでログインしなければ、ユイはアルヴヘイム・オンラインへ侵入できなかったし、明日奈も鳥籠の中に囚われていただろう。

ユイ以外にも感謝する人物がいることを、明日奈は再認識する。

明日奈にとつての恩人は、今も増えるばかりだ。

その恩人の一人——ユイの表情は晴れない。何処か影を背負っており、今にも泣きそうな顔で伺うように明日奈に頭を下げた。

「ごめんなさい、団長さん……」

「どうして、謝るの……?」

「だって、だって! わたしがもっと早く突破出来ていれば——」

小さな身体、華奢過ぎる細い肩が震える。

顔を伏せており明日奈から表情は見えないものの、その顔は今も泣きそうになっていることだろう。

自分のせいである、自分がもう少し有能であれば、自分がもう少し優秀であれば、苦しまなかったに違いないという、"もしも(もしも)"の後悔がユイに襲いかかる。

その気持は明日奈にとつて痛いほど理解が出来るものだった。何度思ったかわからない、自分がもう少しだけ強ければ"彼"への負担が減ったのではないかと常に考えていた。

だからこそ、明日奈は努力を積んできた。もう二度と、足手まといにならないために、少しでも"彼"の力になるために、必死にその背を追いかけてきた。

きつと、ユイも同じなのだろう。仲間が悲観に打ち拉がれているのが嫌でずっと抗い、そして漸くその努力が実を結んだのだろう。それでも自分が遅かったからと言ってしまうのは、少女の人柄なのかも知れない。

だからこそ、

「ううん——」

「明日奈は優しく否定した。」

取扱に気をつけるように、触れれば溶けてしまう雪を触るように、大事に優しくユイを抱きしめる。

「ユイちゃんは頑張った、頑張ったよ。それを証拠に、わたしはここに
いるんだもん」

「団長さん……」

今度こそ、ユイは顔を上げる。

やはりその眼には涙を溜めていた。必死に流すまいと堪えて、続けるように明日奈を見る。

思わず笑みが溢れた。

明日奈はあやすように、力付けるように——自分を鼓舞するよ
うに。

「——今度は、わたしが頑張る番だよ」

この世界がアルヴヘイム・オンラインというVRMMOの中という
ことは、須郷からの口から、そしてユイからも簡単に説明されている。
プレイヤーは9種類の種族に別れ、世界樹の頂上にあるとされる空
中市を目指し、妖精王オベIRONがプレイヤーを光妖精族へと転生
させる。それがアルヴヘイム・オンラインの全てのプレイヤーが目指

す『グランドクエスト』の内容である。

そうなれば、世界樹の内部すらも幻想的なものであると想像が出来る。

行く手を阻むレベルの高いモンスター、数々の罠が張り張り巡らされ、最終ダンジョンらしい難易度に仕上がっている筈だ。

元々ゲームの経験が少ない明日奈から見ても、それくらいのことは想像が出来るものだ。

だが――。

「なに、これ……」

茫然と明日奈は、目の前の光景が信じられないような口調で呟いた。

内部へと続く明らかな人工的なタッチパネルを模したプレートが外部と内部を隔たっている。木製のドアでもなければ、ドアノブすらもない。ファンタジーの世界観には似つかない入り口に触れると、音もなく左右にスライドした。

世界樹の内部に侵入しても、違和感が払拭されることはない。内部は自然的な要素などなかった。

外壁は白く、床も白い。通路は薄暗く、所々で足元からオレンジ色の光が発光されているのみである。もちろん自然光などではなく、明らかに電力の力を使ったような光であり、現実世界で良く見かける電光がこれでもかというくらい主張していた。

運営の施設なのか、と予想したが、直ぐにその考えを否定する。

そもそもな話、そういったモノは外部で運営されるはずだ。ゲーム内部に設営するのは、ありえない話だろう。

ならばこの施設はどういった意味を為しているのか。

ゲームの世界であるはずなのに、まるで明日奈から見える光景。それは現実世界での大企業でよく見る小奇麗にされているオフィスのようにも見える。

「ユイちゃん、ここってゲームの世界なんだよね……？」

「……そうです。間違いありません」

恐る恐ると言った調子で、ユイは明日奈の後ろから伺うように辺りを見渡した。

それからユイも明日奈の考えと同じような意見を口にする。

「アルヴヘイム・オンラインは魔法や剣が主だったゲームです。こんな人工物はありえません」

「だよね。わたしもそう思う……」

「世界観をぶち壊しています。恐らく、ここはプレイヤーが入れない施設なのでしょう」

そうなれば、ある程度納得がいく。

ゲームの攻略とは関係がないのなら、人工物をふんだんに使用した建造物を建てても問題はないのかもしれない。もしかしたら製作者側の遊び心という可能性もある。

だがそれは、製作者側がどんな人間なのか知らない人間の考えだ。生憎、明日奈は製作者側の人間を、思い出すのも嫌気がさす人間を一人知っている。

それは傲慢な人間であり、全てのモノを手に入れなければ気が済まない、とうの昔に破綻している人間である。

彼が——須郷伸之が遊び心など許す筈がない。常に余裕がない彼に、ここまでの施設を作らせる人としての度量はないことを、明日奈が一番良く知っている。

ならばこの施設は、何のためにあるのか——。

「一体何の為に、こんなのを作ったの……？」

答えられる人間がないのを分かっているが、思わず問わずにはいられなかった。

「それは……」

「もしかして、知ってるの?」

問いを投げると、ユイは「はい」と力なく答えた。

ならばこの施設はどんな目的で作られたのか、と問いかけようとするも明日奈は言い淀む。

様子がおかしかった。

どこか気不味そうな、口にするのも引けるといったような、後味の悪い雰囲気と表情でユイは口にするか明らかに迷っている。

それだけ変な施設なのか、と考えていると。

「あの人が言うにはここは——」

意を決してユイは、言葉を選びながら口にしようとするも。

「ソードアート・オンラインのプレイヤーに——」

「——っ!? 待って、ユイちゃん……」

しっ、と明日奈は人差し指を口元に置き静かにするよう促すジェスチャーを取った。

すると同時に、壁が左右にスライドする。

明日奈は瞬時にユイを抱きかかえると、物陰に隠れて様子を伺った。

そこから現れたのは二体の物体である。

ナメクジのような姿で、その背には何十本も触手が生えており、生理的に受け付けない姿をしていた。

もしかして、モンスターなのだろうか、と明日奈は疑念に思った。

しかしそれは妙なモノだ。ここはプレイヤーと関係がない施設なのであれば、どうしてモンスターが現れるのだろうか。仮にモンスターであるのなら、今の状態は不味い。今の自分は現実世界のような

非力な存在であり、武器も携帯していないのだ。自分よりも小さいユイもいる今、満身に戦えない。

どうするか、と切迫しながらも様子を伺っていると。

「まったく、須郷ちゃんも人使い荒いよなあ?」

「まったくだ」

——えっ、喋った!?

思わず両手で口元を抑えた。驚きのあまり声が出そうになる。

よく見ればユイも驚いているのか、目を見開きながら明日奈と同じように口元を両手で抑えていた。

二人は視線を合わせると、コクリと頷いた。

とりあえず様子を見る。何よりも明日奈にとって無視できない単語が一体のナメクジらしき物体から口に出た故に。

「今朝黴ったばかりだろうによお」

「いきなりだもんな。意識があるか調べろなんて」

「毎度トばせる癖にな? 何をあんなにビビってんだか」

どうやら二体は須郷の命令で、何かを確かめに行ったようであった。意識があるか調べろということは、それが生き物であることが察することが出来る。

二体の愚痴は続く。

「それにしてもあのガキ、よく生きてるよな?」

「ああ、正直気味が悪い。常識的に考えてさ、廃人になってるだろ」

「まあ、なんでも約束らしいぜ?」

「約束って?」

「自分が死ぬまで、実験体達と須郷ちゃんのお気に入りに出すな、って須郷ちゃんが約束したんだってさ」

「はあ!? バカだねえ、ボスがそんな約束守るわけねえじゃん!」

ゲラゲラ、と下卑た笑い声が二体から発声された。

聞いていていて、不快に思わせるモノである。だがそれ以上に、明日奈にとって聞き捨てならない単語が出てきた。

「あのガキ、何て言ったっけ？」

「確かボスは——茅場って言ってたな」

——え？

頭が真っ白になった。

茅場、ガキ、颯る、とてもではないが嫌な予感しかしない。

それに須郷がどれだけ、茅場晶彦を憎んでいるか明日奈は理解したばかりだ。その矛先は本人にも向けられており、関係がない「彼」にも向けられている。常人では選択しない八つ当たり、須郷は疑問にも思わずに狂気を向けている。

唇が震えて、明日奈の顔が青白く変わる。

動機が激しくなり、両足が震えた。彼女は今——最悪な状況を想定している。

それは——。

「それよりも、須郷ちゃんのお気に入り見に行こうぜ」

「怒られるだろ。俺は嫌だよ」

「いいじゃん、あの気味の悪いガキを見た後だ。少しくらいご褒美があってもいいだろ？」

「……しようがない奴だな」

二体の会話が入ってこない。

取り乱していると言っても良い。二体に詰め寄らなかつたのは、ひとえにユイが必死に止めていたからだ。もしユイがいなければ、考えなしに明日奈は二体に詰め寄っていただろう。

そんなことなど露知らずに、二体は明日奈達の進行方向へと消えて

いく。

同時に、明日奈は振り切つて件の二体が出てきた壁の前に立つた。よく見ればそれは先程のタッチパネルを模したプレートであり、ドアの役割を果たしていることがわかる。

ふと、横に視線を送ると、明日奈は息を呑んだ。

「……………」

壁には部屋の名前が刻まれていた。

わかりやすく、今の状況で嫌つてほどわかりやすいほど、何の意味を成す為の部屋なのかわかる。

二体のナメクジが出てきた部屋、それはどのような部屋なのか。仮眠室でもなければ、予備仮眠室でもない。それは——特別実験体格納室。

実験体。

それは嫌な響きである。

もしかしたら、もしかしたら、もしかしたら。

嫌な予感が、最悪な光景が、止まらない。

自分は鳥籠に閉じ込められているだけ。そう、*「だけ」*であつた。もしかしたら、それよりも劣悪な事を、*「彼」*がされていたら。

耐えるだけの自分とは違い、何かをされていたら、明日奈はそんな考えが纏まらないまま、意を決してプレートのドアに触れる。

静かに左右に開き、明日奈はその部屋に足を踏み入れた。

薄暗く、人工光も自然光もない。

窓はなく、太陽の光すら入らない、人がいていい場所ではない。だがそれは、確かに居た。

黒く淀んだ色の拘束衣に身を包み、両腕に巻き付いたそれは天井から伸びており、足は床とギリギリ届かない高さで調整されている。

力なく頭を垂れる黄金の頭髪。鉄格子越しに見えるソレを明日奈は呼びかける。

格子をギョツと握りしめる。

痛々しいほど握る。血が出るのではないかと思わせるほど力強く握りしめて、「彼」の名を呆然と呼んだ。

「優、希くん……？」

第10話 わたしのヒーロー

——その姿が、オレが小さい頃のモノだった。

夢にした鮮明で、見渡すような俯瞰的な視点ではない。

走馬灯と呼ばれる現象がある。死に際で見ることが出来る、己の人生の様々な情景を見ては過ぎ去っていくと言われるアレだ。

正にオレは、それを体験している。

現在進行系で、見に覚えのある光景が、オレの眼に焼き付いていた。近場の公園。

昔、住んでいた家からさほど遠くない。世田谷区内にある、大きな公園のベンチにオレは腰掛けていた。

大きな公園と言っても、その規模はかなりのものだ。景色に溶け込ませている円形の噴水、数百台近く止められそうな駐車場もあり、数多く多種類の遊具が敷地内に設置されていた。広場もあり人工芝が敷き詰められており、そこでシートを広げて遠足にきたような気分も味わえることだろう。

眼に映るのは、遊具で遊ぶ子供。そしてソレを見守る、親らしき存在だった。

特に珍しくもない光景だ。かなりの規模の公園だ、親子連れで遊びに来るなどさほど珍しくもない。

だがそれは、オレにとって——。

「……ッ！」

——地獄のような光景だった。

幼い頃のオレは、今よりも精神面でもガキだったようだ。

今でもガキということは自覚があるが、昔のオレは更に酷い。クソはクソでも、クソガキの部類と言える。

何せ、眼に映る何もかもが憎たらしかった。

道理も知らずに笑う子供も、子供と遊んで笑顔で応じる父親も、それを見守るかのように笑みを零す母親も、何もかもが気に入らなかつた。

どうしてあんな奴らが生きていて、父さんと母さんが死んで、オレがこんな目に合わなければならぬだ、と本気で思っていた。

この感情が、オレが宿している憤怒、憎悪が八つ当たりであることは理解している。第三者である彼らには何一つ関係ないことだ。当事者というわけでもないし、オレや父さん達のことを知らない、本当に関係のない第三者で何一つ関わり合いのない人達だ。

八つ当たりだ。昔のオレが抱いている感情は、八つ当たり以外の何物でもない。だというのに、昔のオレは。本気で目の前で幸せを謳歌している連中を、叩き潰してやりたいと考えていた。

今となつては、子供の頃のオレを殴つてやりたい。不貞腐れて、性根も腐りかけているオレを、力いっぱい殴つてやりたい衝動に駆られている。

だが生憎、口惜しいことに昔のオレは精神が幼すぎた。

何もかもが憎かつた。自分を取り巻く環境も、理不尽にオレからあの人達を奪つた世界も、目の前で広がる吐き気がするような幸福も、生き残ってしまった自分すら、憎しみの対象となっていた。

信じられる人間もいない。

父さん達の葬儀が終わつて、一言二言オレを労る言葉を吐いた思つたら、遺産の話をしてくる。

誰もがそうだった。あの人達に関わりのあつた連中、昔の友達であつたという友人達、親族すらも同じセリフが出てきた。

身寄りがなければオレを預かりたい、と。

文字にすれば、博愛で友愛に満ちた言葉だ。だがその本質は違う、誰も彼もがオレを見ていない。全員が全員とも、オレではなくあの人達の遺した財産に目を向けていた。

汚い、本当に汚い。何でこんな屑が生きて、オレの親が死ななければならなかつたのか。道理が違うだろう。汚物は他人を救わずに、自分ばかり。対して、あの人達は他人を数え切れないほど救つてきた。

世界は本当に不平等に平等だ。
誰であろうと平等であり、不平等に奪っていく。

『……チツ』

大きく舌打ちをする。
数日もすれば住んでいた家は売り払われて、オレは天涯孤独となる。

こんな地獄のような場所にいるのは、家にいればあの人達との思い出が蘇ってしまうからだ。

今となつては裏目に出してしまったわけであるが、家にいるよりかはマシだった。

誰もが信用できない。

とは言つても、全ての人間が遺産目当てという訳ではない。

オレの身元保証人であった叔父、そして家族で付き合いのある結城の人達だけは、財産関係なくオレの面倒を見てくれていた。

幸運なのはオレは恵まれていたということ。

不運なのは昔のオレはそれに気付いていなかったということだ。

何一つ、見ようとしなかった。両目を瞑り何も見よとせず、両耳を塞ぎ何も聞こうともせず、両足を抱えて立ち上がりうともしなかった。

そんな腐りかけている人間に何を言っても無駄だ。

だと言うのに――。

『ゆーき、くん……』

――コイツだけは違った。

いつの間に立っていたのか、オレの目の前にはアイツが立っていた。

フリルの付いたスカート、ブランド品なのか上品な衣類を身に纏い、新品同然のクマのぬいぐるみを抱えて、オレを伺うような視線を

送っている。

育ちが良い、と誰もが見てもそう言うだろう。

振る舞いと言うか、上品な雰囲気というのか、子供の頃からアイツは身に付けていた。

走ってオレを探しに来たのか、履いている靴には泥が付着している。

息も上がっており、頬も僅かに紅潮しており、汗が滲み出ている。

『……テメエ、何をしに来やがった？』

対するオレはそんなアイツの状態など、何も気付いていない。

アイツをオレは睨みつけている。冷たすぎる声に、肩をビクつかせてアイツはただどしく言葉を紡いでいく。

『ゆ、ゆーきくんをさがしに、きたんだよ……』

『何の為だ、笑いにでも来たのか？』

そんなわけがない。アイツはいつだって優しかった。

探しに来たのだから、オレを心配してのことだろう。なのに昔のオレは、それにすら気付けない。

『そ、そんなことしないよっ……！』

『ハッ、どうだか』

鼻で笑い、鬱陶しいモノを追い払うような口調で。

『失せろよ。何をしに来たのか知らねえが、オマエの顔なんぞ見たくもねえ』

『ゆーきくん……』

『邪魔だ。叩き潰されてえのか？』

『……………っ！』

それだけ言うと、アイツは泣きながらオレの前から走り去っていった。

当然だ。折角の善意を足蹴にするようなクソガキに付き合う道理もない。

オレも追うような真似はしなかった。

清々した、その程度の認識しかない。本気で邪魔だと思っていた対象が消えたのだ、追うわけがなかった。

だがオレの心は晴れない。

アイツを泣かせてしまった罪悪感などではなかった。状況は何も変わらない。気持ちが悪い光景は依然そのままであるし、オレを取り巻く環境も変化もしない。

先のことなど考えたくもなかった。このまま生きていても地獄であることは変わらない。

—— どうして、オレは生きているんだ。

—— こんなことなら、あの二人が生きてオレが死ねばよかった。

—— ンでオレなんかを助けたんだよ……。

—— 父さん、母さん。

—— なんて、オレなんぞを……ッ！

歯を食いしばり、両手の拳を握りしめる。

他人を幸せなど見るのも吐気がするのなら、そのまま閉じてしまえばいいと眼を閉じた。

生きているのも苦痛だった。息をするのも、世界にオレが存在すると考えただけで、嫌気がさす。

考えるのは生き残ってしまった罪悪感、そしてどうやって死ぬか、それだけだった。

このまま目を開きたくもない。永遠に閉じたまま、消え去れてしまえばどれだけ楽だろうか。

だが——。

『……あ?』

それは許してくれなかった。

ベンチに座るオレの隣に、誰かが座る。

鬱陶しい、とオレは再び眼を開けて座った人物を見る。

それは——アイツだった。泣きながら走り去っていたアイツは、クマのぬいぐるみをかかえたまま、どこで買ってきたのか大量の菓子が入った袋を片手に持っている。

『消えろ、って言ったつもりだが?』

『……』

アイツは答えない。

泣いたせいもあって、眼を真っ赤に充血させている。いや、今もその双眸からは涙が溢れ流れていた。

それがどうやら癩に障ったのか、オレは睨みつけてもう一度口を開けた。

『テメエ、本当に叩き潰され——!』

『わ、わたしここに居るからっ……!』

泣きながら、それでいて怯えながら、オレと視線を合わせることが出来ないまま、アイツは言った。

声を震わせながらも続ける。

『もういちど、ゆーきくとあそびたいから! わたし、うごかないから!』

『それがウゼエって言ってんだッ! 恵まれてるバカが、さっさと消えろよ!』

『やだもん!』

そこで漸く、アイツはオレを見る。

大粒の涙を流して、嗚咽を漏らしながら、必死に言葉を紡いでいく。

『このままだと、ゆーきくんもおいとところにいつちやうもん！ そんなのやだよ、やだ！ ぜったいに、いや、だもん！』

『……ッ』

今、思えば。

ここでオレはアイツに救われたのかもしれない。アイツが素直に消えていれば、アイツがオレを見捨てていれば、オレは勝手に死んでいたと思うから。

見捨てられても良い存在だった。

誰彼構わずに嫌い、誰彼構わず憎悪している迷惑な存在だった。

なのにアイツは、オレを見捨てなかった。どれだけ汚い言葉を並べられても、自分が傷つけられてもアイツはオレに手を伸ばし続ける。

感謝してもしきれない。

腐らずに、今のオレがあるのは、アイツのおかげでもある。

だから助けようと思った。オレがどんなことになるうとも、アイツだけは必ず助けたいと思った。

もう二度と、泣かせたくないと思った。

なのに、オレは何度もアイツを泣かせてしまう。もう二度と見たくなかったのに、アイツが泣いている顔なんて見たくないと思ったのに。

「優希くん……ッ！」

目を開けると、またアイツは泣いていた。

久しぶりに横になった。

鎖で繋がれている両手は、自由となっており。

地についていなかった身体は、人肌のような温もりに包まれている。

どうやらオレは、アイツに抱きかかえられているらしい。

繋がれていたオレを床におろして、抱きながら、必死にオレの名を呼んでいる。

小さい頃と同じように、涙を流して、膝枕をしながらオレの顔を覗き込むようにして呼びかけている。

あの時のように必死に、涙を流して、オレが眼を開けると泣き顔は酷くなるばかり。

ああ、オレは、またオマエを——。

「あ……あ……す、な……？」

——泣かせてしまったのか。

.....
.....
.....

時刻不明

世界樹の内部 特別実験体格納室

外傷はない。血も出ていないし、骨が折れているというわけでもなかった。

当たり前だ。

ここは現実世界ではなく、仮想世界である。

ならばここにある身体は全て作り物。データとテクスチャで作られている紛い物である。身体には血液が流れているわけでもないし、肉体があるわけでもない。

それなのに、だというのに――。

「優、希くん……」

その身体は冷たかった。

繋がれていた鎖をユイに断ち切ってもらい、力なく頭を垂れている彼――優希の身体を抱えて地面におろした。

外傷はない。

だというのに、優希は明らかに衰弱しきっていた。身体は冷たすぎるほどで、生気が宿っている印象が湧かない。

抜け殻、そんな表現が正しいのかもしれない。そんな曖昧で、不確かな存在と、変わり果てていた。

「優希くん……ッー」

その叫び声は絶叫に近い。

心から、魂の限り、精神をすり減らして、明日奈は叫んだ。

だがそれでも、優希は眼を開けなかった。呼吸はか細いモノで、それが生きている証拠になりえないほど弱々しい。

途端、明日奈の背筋が凍りつく。

今にも消え入りそうな優希を見て、いつも自分の前を歩いていた彼が消えるような、初めて見る優希の姿に明日奈は恐怖する。

もう二度と、自分が追いつけない場所に優希が行ってしまうような、もう二度と名前を呼んでくれないような、もう二度と自分を見てくれないような、圧倒的な消失感。

「優希くん、起きてよっー」

それを払拭させることは出来ない。

彼女に出来るとすれば、必死に優希の名前を呼んで抱きかかえるのが精一杯だった。

そこで。

「あ……あ……す、な……？」

漸く優希は眼を開けて、ゆっくり眼球だけを明日奈へと向ける。

「オマエ、なんで……？」

無傷であるものの、どう見ても喋ってもいい状態ではない。

現に今も蒼い双眸には生気が宿っておらず、焦点も定まっていない。ぼんやり、と明日奈の存在を確認するだけだ。

だが、それでも。優希は緩やかに上体を起こす。

もしかしたら、その行為は無意識だったのかもしれない。泣いている明日奈を心配かけまいと、起き上がる程度には元気であると証明するための行動だったのかもしれない。

「グソツ、どうなってる……？　ンでオマエがここにいった？」

「お、起きちや、ダメだよー！」

静止を促されようとも、優希は従わなかった。フラつき身体の軸がぶれながらも、両足に力を込めて立ち上がる。

今にも倒れそうになりながらも、辺りを見渡して様子を伺っていたユイに視線を止めた。

「……オマエ、ユイか？」

「はい。お久しぶりです、ユーキさん……」

「久しぶり、か。オレ達が捕まってから何日経ってる？」

「……六ヶ月、です」

それはソードアート・オンラインがクリアされてから数えてなのだろう、と優希は理解した。

それと同時に、そこまで経っているとは思わなかったのか若干眼を丸くさせるや否や忌々しげに舌打ちをすると。

「オベイロンだったか、あのホスト崩れはなんだ？」

「……須郷、伸之」

ポツリ、と今度は明日奈が答える。

口にするだけでも嫌なのか、彼女らしくもない苦い顔で淡々とした冷たい声色で説明する。

「わたし達がいるのは、アルヴヘイム・オンラインっていうゲームの中なの。須郷は運営する側の人間、その中でもゲームマスターでもある」

「……ゲームマスターねえ。あの野郎、須郷って言うのか」

軽口を叩きながら、妖精王オベイロン——須郷伸之がいかなる立場にいるのか優希は分析する。

ゲームマスターと明日奈は言ったが、それは数あるうちの立場の中の一つでしかないのだろう。

何せたかがゲームマスターにしては、彼の行動は逸脱している。

S A Oのプレイヤーを301人拉致し実験材料をしようとし、明日奈を檻の中に監禁し、優希自身を拷問まがいな実験を繰り返すような男だ。

どう考えても、いちゲームマスターの出来る行動ではない。

となれば、もっと上の立場。

ソードアート・オンラインのプレイヤーを拉致できるくらいの役職に、須郷伸之は就いているということになる。

それこそ彼の気持ち次第で————拉致されたプレイヤーの命を断つ程度の事が出来るくらい容易い筈だ。

「……なるほど」

言葉だけを聞けば、静かなものだった。静かに、冷静に、今の現状を受け止めるような言葉だった。

だがこの場にいる、明日奈とユイは気付いた。

幼い頃から彼の人となりを知っている明日奈はもちろん、付き合いが浅い部類であるユイですら、優希の言葉の裏側にある感情を感じ取った。

それは————怒り。

果てしなく単純で、どこまで純粋で無垢な感情。

極限にまで圧縮された憤怒が人の形を為した姿が、今の茅場優希であると断言できる。

それでも。

「優希くん」

明日奈は臆さずに、声をかけた。

対する優希は振り返らない。ユイによって破られた鉄格子を睨みつけたまま明日奈の声に応じた。

「何だ？」

「……須郷に何もされなかった？」

「何もされてねえよ」

「嘘」

間髪入れずに明日奈は否定すると。

「嘘、絶対に嘘。どうして、嘘つくの？」

「嘘じゃねえ」

「嘘だよっ！ わたしわかるもん、優希くんが嘘言ってるってわかるもんー！」

「仮に嘘だとしても、オマエに関係があるのかよ？」

「……え？」

ここで初めて、優希が振り返った。

その表情は拒否、その言葉は拒絶、その眼は明確な敵意を宿していた。

いつも呆れながら、ぶつきらぼうな優しきを見せていた彼の表情ではない。昔、幼い頃に向けられたことがある怒り。それが今になって、明日奈を真っ直ぐに射抜く。

「前々から言おうとおもってたんだけどよお、何でテメエは、オレの何もかもをわかってているような面をしてやがんだ？」

「ゆ、うき、くん……？」

呆然と、明日奈は見る。キョトンと目を瞬かせた。

彼が何を言っているのか、瞬時に理解が出来なかった
そして遅れて理解する。

いつもの『オマエ』ではなく『テメエ』と言われた意味を、残酷なまでに明日奈は理解すると、信じられないモノを見るように優希を見た。

「ガキの頃から思ってた、鬱陶しいんだよテメエは。何をするにしても、オレの後を着いてきやがって」

「え……？」

明日奈は、自分の心臓を鷲掴みにされたような錯覚を覚えた。

鼓動は激しくなり、胸が苦しい。一步も動いていないのに、呼吸を

速めながら明日奈は震える声で問う。

「ど、どうしてそんなことを——」

言うの、と続く言葉は最後まで続かない。

それよりも早く、単純な答えを冷酷で冷たい声色で示す。

「ウゼエし、ムカつくんだよテメエは。人が我慢してりや、調子に乗りやがって。何様だよ？」

その答えに、明日奈は今度こそ全身を強張らせた。

今まで感じたことのない、優希の殺意にも似た威圧が寒気となり、その背中を走り抜ける。

「ハッキリと言葉に出さねえとわからねえか——」

「待つて……!」

「オレはな、テメエのことが——」

「ゆう、き、くん……!」

「——ッ嫌いだよ」

——同時に、石造りの壁が変貌を遂げる。

白い壁、白い床、鉄格子から除く景色も壁に覆われ、瞬く間に四方を取り囲まれてしまった。

優希はチツ、と大きく忌々しげに舌打ちをすると。

「思ったよりも対応が速いじゃねえか……! ユイ、破れねえのか!」

「は、はいです!」

急に話を振られたユイは、両手で白い壁に触れた。

プログラムを書き換えて、無理矢理入り口を作る。こうして明日奈が閉じ込められていた鳥籠も、優希が囚われていた檻も、鎖の縛鎖すら

も破ってきた。

だが――。

「だめ、です……。高位のIDによるファイヤーウォール、破れません……！」

それから何度か試すも反応はない。

数分もしないうちに、ここに優希達を閉じ込めた連中が押し寄せてくるだろう。

そうなつては詰みだ。

折角、ユイのおかげで明日奈が脱出する事が出来たというのに、また逆戻りとなってしまう。

いいや、もしかしたらもつと酷い待遇が待っているかも知れない。

――考えろ、何か突破口がある筈だ。

――無駄にアイツを傷つけただけじゃねえか……！

――その為に、クソのような言葉を並べたわけじゃねえんだぞ……！

――何だったら、この壁を“力”使つて叩き壊して……！

そこまで優希が考えていると、途端にユイの動きが止まった。

必死に破ろうとしていた表情が眼を丸くさせて、自身の背後へと振り返る。

「パパです……！」

そして、ポツリと。

「この下に、パパがいます！」

「キリト、だと？ 間違いないのか？」

「はい、間違いありません！ パパです、パパがいます！」

「……そうか」

文句がない、といえは嘘になる。

優希としても、プライドを捨てて須郷に頭を下げたのだ。関係がないから手を出さないでくれ、と恥も外聞も捨ててみつともなく懇願したのだ。

だというのに、どうして首を突っ込んでくるのか。

キリトがこの世界にどうしているのかわからない。気分転換に遊んでいるのか、それとも別の目的があるのか、それを判断するには材料が少なすぎる。

だが今、この場においては――。

「――好都合だ」

ニヤリ、と不敵に笑みを零す。

キリトがいるならば問題は無い、と優希は残された力を、意思による絶対的な力を開放する。

“蒼炎”が身体を奔る。そして余すことなく、全てを右手に収束されていく。

恐らく、これが最後の力の解放である。今の茅場優希に全盛期の力はない。『アインクラッドの恐怖』として力を振るっていた頃よりも、“黒炎”を見に纏っていたあの頃よりも、数段も力が劣っていることは自覚している。

所詮、今の優希は灰だ。

燃焼したあとに残る、ただの残滓に過ぎず、無理矢理に“蒼炎”を発現させているだけに過ぎない。

それでも、だとしても、守れる者が、大切な者を守れるのなら――。

既に右手は握られていた。

ここで最後になろうとも、二度と“蒼炎”を行使出来ずとも構わな

い。
固く握りしめられた拳は、壮絶な速度と共に放たれた。

けたたましい轟音が鳴り響く。

同時に、直径三メートルほどの大きな穴となり白い壁を貫いた。そこから見える景色からは青い空。雲ひとつない空が広がっていた。

茫然自失。

明日奈は虚空を見つめたまま、何の反応も見せなかった。

痛ましい姿。思わず優希は口を開きかけるが、直ぐに閉じる。こうさせたのは自分だ、今更になって言葉をかける資格はない。

そう言わんばかりに、乱暴に明日奈の襟首を片手で掴むと。

「……オマエは、一般人に戻れ」

開けた大穴から外へと放り投げた。

だが優希はその後に続かない。重力に従い落下していく明日奈を見送ると、背後に残っているユイに言葉を投げた。

「オマエも行け。須郷が来るぜ」

「……教えて下さい。どうして団長さんにあんなこと言ったんですか？」

ユイにあるのは怒りでも、悲しみでもない。ただ混乱していた。

明日奈が優希を、優希も明日奈を大切にしていることはわかっていることだ。優希がソードアート・オンラインに君臨するフロアボスを単騎で攻略していた根底に合ったのは、明日奈に傷ついてほしくない、剣を握ってほしくないという願いだった筈だ。

ただそれだけの為に、彼は自分自身を文字通り削りながらも、前進し続けて来た。

だからこそ、理解が出来ない。

優希の言葉の意図が、理解が出来なかった。何故あそこまで、明日

奈を拒絶したのか、ユイには理解が出来ない。

「……オマエ達がここまで来たのは、オレを助けるためだろ？」

「はい。団長さんも、わたしも、望んでました……」

やっぱりか、と穏やかな口調で言うと、優希は首を横に振って。

「それじゃ駄目だ。オレとアイツが脱出して、それで終わりじゃねえんだ。その意味、オマエならわかんדרろ？」

「それは……」

確かに優希の言うとおり、ここに囚われているプレイヤーが優希と明日奈の二名だけなら問題はなかったかもしれない。

直ぐにでも牢屋から抜け出して、システム・コンソールでステータスを弄り、ログアウトでもすればよかった。だがそれは、二人だけであればの話だ。

「オレ達がこの世界から抜け出せたとして、残りの299人はどうなる？　ンなもん、火を見るより明らかだ。逆上した須郷は必ず、残りの人間を殺すに決まってる」

「ユーキさんは、それを防ぐために、残るんですか……？」

「まあ、簡単に言っちゃえばな。昔から、嫌われるのは慣れてる。得意分野ってもんだ」

子供の頃は親族全員を敵に回し、小学校の頃は後輩から注意を逸らすために全校生徒の必要悪にもなった、ちよつと前ではアインクラットの恐怖としてプレイヤーからもPKからも恐れられていた。

ならば今回も造作もない。

対象が須郷という個人に変わるだけだ。むしろ楽になったと言えるモノである。

「だとしても、尚の事、団長さんにどうしてあんなことを言ったんですか!？」

「……ああでも言わなきゃ、アイツはまたオレを助けようとするだろう」

叫ぶように声を荒げるユイに対して、優希の静かな態度は変わらない。い。

困ったような苦笑を浮かべて、優希は続ける。

「アイツはオレの為に、またここに来ちまうことだろうさ。今のアイツは戦えないのに、非力な癖にアイツは必ず無理をする。オレは——」

——それが我慢ならない。

と、優希はここで感情を露わにした。悔しそうに、悲しそうに、奥歯を噛み締めた。

言い分はわかる。

明日奈に傷ついたほしくないから、敢えて優希は突き放し、嫌われようとする。

このまま逃したただけでは、戦える身でもないのに、明日奈は必ず無理をする判断したのだろう。いくらゲームの世界とはいえ、今の明日奈は普通のプレイヤーではない。一応ヒットポイントはあるようであるが、ゲームオーバーとなればアルヴヘイム・オンラインの仕様の通り復活できるとも限らないのだ。

だったら、戦わないという選択をした方が良いに決まっている。

「それに、だ。今回はあの野郎がいる。問題はねえだろ」

「それだけ、パパを信頼しているんですか?」

「……業腹だけどな」

忌々しげに吐いた言葉には、確かな信頼が宿っていた。

キリトであれば任せられる、キリトがここにいるのなら明日奈を託

せる、そんな全幅の信頼を置いた感情が確かに存在していた。

「行け。明日奈を頼む」

「……………わかり、ました……………ッ！」

納得などしていない。

だがここに残っても、やれることは何もなかった。

自分に出来ることといえばキリトのサポートに回り、ここまで導き優希と囚われている299人のプレイヤーを開放させる手助けしか出来なかった。

ユイは走り大穴に飛び込みながら。

「必ず、必ずパパともう一度来ます！ 団長さんに、絶対に謝ってもらいますからねっ！」

「……………」

優希は答えない。

ユイが落下したのを確認すると、ガクツと崩れ落ちて膝を地に付けた。もう、立っているのも限界だった。肩で息をしながら、何とか意識を保つ。

視界はぼんやり徐々に狭まり、少しでも気を抜けば意識が手放されることになる。

それは出来ない。

何せもう一仕事、残っているのだから。

それから数秒もかからなかった。

長身の男が音もなく、白い壁に閉じ込められた牢獄に侵入する。

足早にその男は優希の前に立つと、何も言わずに優希の顎を蹴り上げる。衝撃は、脳へ信号が走り、いつしか痛覚へと変わる。

悶える優希に、男は容赦しない。

何度も何度も、優希の顔面を踏みつけてやっと満足したのか、息を荒げながら問いを投げた。

「テイターニアは、どこだ？」

「それ、誰だよ？」

小馬鹿にするように笑みを浮かべる。

舐められた、と認識したのか男は再び優希を思いつき蹴りつけると、怒りのあまり声を震わせて問いを投げた。

「僕のテイターニアを——明日奈をどこへやった!？」

「落ち着けよ。余裕がない男はみつともないぜ、須郷伸之クン？」

「貴様——……ッ!？」

ここでやつと男——須郷は気付いた。

牢獄を取り囲んだはずだ。最高位ID権限を行使して、何者も脱出できないファイヤーウォールを生成したはずだ。

絶対破られない障壁、なのにどうして、それが容易く、やぶられて
いるのか——。

「な、何をした!？」

「言っただろうが。オレは『アインクラッドの恐怖』って呼ばれてた怪物だ——」

ゆつくりと、恐怖を煽りながら、優希は立ち上がる。

その蒼い双眸は不気味なほど爛々と輝いており、口元には薄く引き裂くような笑みを浮かべて、殺意を言葉に乗せて。

「——この程度の壁、叩き潰すなんざ造作もねえんだよ」

「ぼ、僕に手を出せば残りの実験体を——」

「殺すって言いてえんだろ？ わかってるよ、だからこうして生かしてやってんじやねえか」

そこまで言うとは、優希は確かな足取りで須郷に近付く。

対して須郷は身動きが取れない。蛇に睨まれたカエルのように、石にでもなったかのように優希から視線を動かすことなく向いている。

「だが、そうだなあ。女一匹逃げたくらいで騒がれるのも迷惑だ。今度騒いだら――」

ポン、と軽い調子で。

須郷の肩を叩くと、引き裂く笑みのまま親愛と憎悪を込めて告げる。

「――叩き潰すぞ、伸之クン？」

「う、うわああああ!!」

言葉に乗せられた殺意が引き金になったのか、須郷は片手で振り払うと叫び声を上げながら告げた。

「じ、実験を開始しろ！ 今すぐだ！ こいつを痛めつけろお!!」

須郷はメイン・メニューウィンドウを開いて、ログアウトをした。もはや優希に眼もくれない。一目散に逃走するように、脱兎の如くこの世界から須郷は姿を消す。

そこまでだ。

そこまでで、優希は限界だった。

身体が倒れ、意識を失う。暗転に包まれる中、口元には笑みを浮かべていた。

――よかった、今度こそ、守ることが出来た。

――オレは何度も助けられてきた。

――何度も死にたいって思った。

――あの人達を見殺しにして、本当に辛くて罪悪感に押し潰されそ

うになった。

——でもオマエがいたから、オレはギリギリ踏みとどまった。

——ずっと一緒にいてくれたから、頑張って生きてこれた。

——明日奈、オマエのおかげなんだ、今までずっとずっと、オレはオマエに助けられてきた。

——守れるのなら、オレは何でもやってやる。

——恨まれようとも構わねえ。

——オマエを守れるのなら、オレは……。

「——なんでも、やってやる」

第11話 舞台転換

2024年8月17日 PM14:10

世界樹 央都アルン

——アルヴヘイム・オンラインとは良くも悪くも種族間の交流に重きを置くVRMMOだ。

他のVRMMO、もしくはMMOでは自身の所属する種族などそこまで重要視されることはないだろう。

注目されることがあるといえば、最初のチュートリアルくらいなもの。それ以降、自由に動けるようになれば友人とゲームを楽しむか、世界観を楽しむためにブラブラとフィールドに繰り出すか、ひたすらゲームをやりこむか位のものだ。

しかし、アルヴヘイム・オンラインは違う。

他のMMOとは違い、種族間での交流に重きを置いている。それは、PKを推奨しているものの自身の所属しているホームではPKされることのない設定、そしてグランド・クエスト存在が物語っている。

アルヴヘイム・オンラインをプレイする者にとっての最終地点である世界樹。その頂点にあるとされる、天空都市で君臨する『妖精王』に謁見し、到達した一種族はアルフ^{光妖精族}として転生することが出来る。『到達した者達』ではない、『到達した者の中的一种族』のみが転生する権利を得ることが出来る。

一つの種族ではなく、様々な種族が集った混合パーティーが世界樹を攻略できたでしょう。

それでもその中の一種族のみが転生できるのだ。断じて、その場にはいた全員ではない。

そう言う事情もあってか、アルヴヘイム・オンラインでは混合パーティーは珍しいものであった。

良い意味で種族間の絆が強い、悪い意味で閉鎖的。それこそがアルヴヘイム・オンラインである。

そう言う意味では、彼女——リーファから見た景色は稀有な光景と言えるだろう。

世界樹の麓にある央都『アルン』の街中。

古代遺跡めいた石造りの建造物が建ち並んでいる。活気はシルフの首都『スイルベーン』など比ではない。行き交うプレイヤーの姿は大小様々なもので、露頭では自ら商売を始めているプレイヤーも存在する。その喧騒は世界最大の都市と称されている事に何一つ偽りは無い。

しかしリーファが注目するのは街並みではない。

彼女にとつての問題はその景色。眼に映る景色に他ならなかった。笑みを零して歩く男女、空ではふぎけ合う数名の男性の姿があり、買い物を楽しむ女性の姿があった。

普通であれば、何も珍しくもない。

問題なのは彼らの種族である。統一性のない集まりだった。風妖精族シルフ単一というわけではなく、中にはサ火ラ妖マン精ダーや音ブ妖族精族の姿もある。

通常のMMOであれば何も珍しくもないのだ。しかし彼女がプレイしているアルヴ Heim・オンライン。グランド・クエストが全てでもある現状において、他種族による混合パーティーは特殊なものである。

彼らは種族の領地を抜けて、自由にアルヴ Heim・オンラインを楽しんでいる。

それは表情から察することが出来る。アルンに存在するプレイヤー達の大半のその殆どが笑みを浮かべている。それだけで本当の意味で、彼らが純粋な意味でゲームを楽しんでいるということがわかった。

対するリーファといえば。

「……ハア」

億劫そうな表情で、世界樹を一望できるオープンテラスにて、大通

りをブーツと眺めていた。

どうにも気持ちの整理がつかない。

最初は嬉しかった。あれだけはぐらかしていた兄が、どういう心境の変化か同じゲームをプレイしていると言う事実。それがリーファにとって何よりも嬉しいものであった。これから一緒に冒険し、共に空を駆けて、見たことがないアイテムを手に入れたり、と喜びを共有出来と考えて、リーファの心が弾んでいた。

だが現実はずう。

兄は彼女が思っているよりも、誰よりも真剣にこの世界に降り立っていた。

今も目覚めない仲間たちがこの世界にいる。確証もなく、何とも証拠もない情報である。それでも兄は再び足を踏み入れた。折角、デスゲームを生き残り現実世界に帰還したにもかかわらず、またもや仮想世界へと訪れることになる。

リーファには兄がどれほどの経験を積み、どれほどの修羅場を潜ってきたのかわからない。説明されても当事者ではない自分には、とても理解など出来ないだろうと断言できる。

それでも、今の兄のように。仲間の為に、再び戦場に戻ってくるこ
とが出来るだろうか。

「……………」

答えは、出なかった。

思い浮かぶのは、レコンやサクヤ。そしてシルフ風妖精族のフレンドの面々の顔だ。

はたして自分は、彼らのために命を張ることが出来るだろうか。彼らのために自分を犠牲にして、デスゲームで経験した恐怖と向き合うことが出来るだろうか。

答えなど、出る筈が、なかった。

再びリーファは、ため息を漏らす。

対して答えを出した兄は、今も世界樹へと挑戦していることだろ

う。

シルフ領で購入した上下のロングコートを翻し、天を睨みつけて駆け上げている頃だろう。

それこそ、視界の隅に入るモノなど眼もくれずに、一心不乱に抗い続けている。

「リーファ、何をしている?」

声をかけられて、リーファは振り向いた。

その男はシルフ^{風妖精族}だった。それにしても凶抜けた恵まれた体躯に、やや厚めの銀のプレートに身を包んでいる。腰には大層なブロードソードを挿している。

彼が何故こんな場所にいるのか、何て考えもしなかった。

何故なら彼もまた、リーファと同じく兄の案内役を買って出たに他ならない。

リーファは彼の——シグルドの問いに、気の抜けた表情と声で答える。

「ボーツとしてるんだけど?」

「……キリト殿はどうした?」

シグルドもリーファに意見があるのを堪えて、呆れた調子で問いを続ける。

「恐らくここで問答をしても話が進まないと思ったようだ。」

「お兄ちゃんなら、一人でグラント・クエストしてるけど?」

「そうか」

それだけ言うと、シグルドはジツと世界樹を見つめていた。その視線を追うように、リーファもまた世界樹へと視線を向ける。

シルフ領を飛び出して、もう二日になる。

更に詳しく言えば、央都アルンに到着したのがつい先日。それからずっと、リーファの兄——キリトは一人で世界樹へと挑んでいた。

キリトは強い。それはリーファから見ても、誰が見ても断言できる。恐らく、彼に太刀打ちできるのはサラマンダー^{火妖精族}のAL0最強と名高い「ユージーン將軍」くらいなものだろう。

だとしても、一人ではどうにも出来ないことがある。それがグランド・クエストであった。

夥しい数の守護騎士が、徒党を組んで外敵を阻む。

彼らからしてみたら、世界樹へと飛翔するプレイヤーなど羽虫、害虫に過ぎないのだ。だから刈り取る。一切の感情もなく、機械的に侵入した羽虫を刈り取っていく。

そして、守護騎士の驚異は数だけではない。連携を組んで、練度も高く、ありとあらゆる手練手管を行使し、羽虫を駆除していく。

対してキリトはたった一人。

一個の武が、多勢な兵に、通じることなどありえないのが戦争である。ならば結果など見えている——キリトは物理的にゲームオーバーとなっていた。

それでも一度だけだ。命からがらリーファが助け出して蘇生すると、キリトは単身で二度挑む。

それ以降は、キリトはゲームオーバーにはならなかった。

死ぬギリギリで戦場を離脱すると、回復して再び挑戦する。それを何度も何度も繰り返す。

鬼気迫る表情、焦燥に駆られる感情、キリトは明らかに焦っていた。リーファも止めようとした、だが止まらない。キリトは妹の静止を振り切り、戦場へと戻っていく。

——多分、今もお兄ちゃんは挑み続けている。

——ゲームオーバーにならないギリギリで。

——アタシが止めても、聞かないで……。

この辺りからだろう。

リーファはキリトとの温度差を感じていた。

事件に巻き込まれる前、兄はお世辞にも対人関係に優れているという人間ではなかった。むしろ壁を作り、本音で他人と話せる人間ではない。それは家族に対しても同じことだった。

その兄がここまで一生懸命になれる人間が存在する。

もちろん、兄の手助けをしたい。

それもあるが、リーファがキリトに着いてきたのは興味本位もあったからだ。

何度かキリトから聞いたことが合った二人がどんな人間なのか、兄を変えた二人がどのような人物なのか見たかった、ただそれだけの純粹な興味。

対してキリトは命をかける覚悟で、二人の元へと向かおうとしていた。

二人がいるかどうかともわからないまま、確信も確証もなく己の精神をすり減らしながら、世界樹へと意識を集中させている。

そんな二人だ。

温度差を感じないわけがない。

——アタシは、バカだ……。

——考えなしで、浅はかだった。

——お兄ちゃんの気持ちも考えずに……。

リーファが自身の両手を握りしめるのも無理はなかった。

彼女の抱くやり場のない気持ちをぶつけるのは、彼女自身にしかなかったのだから。

そこでふと疑問が一つ。

「……ねえ、シングルド」

「なんだ？」

「どうして貴方は、お兄ちゃんに協力しようと思ったの？」

リーファとシグルドは付き合いが長いというわけでもなければ、そこまで深い仲でもない。

同じシルフ風妖精族であり、パーティーメンバーのリーダーである。ただそれだけの繋がりではない。レコンのように、リアルで繋がっているわけでもなかった。顔を合わせれば挨拶する程度の、浅い仲でしかない。

それでも、リーファは彼がどのような人間なのか理解していた。

独善的で自己的に物事を考える。束縛や自由を是としているリーファが水とするのであれば、シグルドは油。決して交わることのない人物であると断言できる。

それが今。

どういうつもりなのか、シグルドは見ず知らずのキリトに協力している。

他人のために時間を削るような性格ではない男が、こうして他人の為に時間を費やしている事実には、どうにもリーファは納得出来なかった。あまりにも怪しく、このままでは兄に危害が及ぶかもしれない。

だからこそ、問うた。

しかしシグルドは肩を大げさにすくめた。

まるで演技をする役者のように、芝居がかった口調と態度で言う。

「サクヤからは許可を得たが？」

「……別にサクヤの采配に不満はないわ。必要だと思ったから、貴方を着かせたわけだしね」

でも、とリーファは言葉を区切り席を立ち上がりシグルドに向き合った。

「貴方は他人のために動くような殊勝な人間じゃないでしょ？ どういう言葉でサクヤを言いくるめたの？」

「随分と敵意剥き出しじゃないか」

「当たり前でしょ。どう言うつもりか知らないけど、お兄ちゃんを危ない目に合わせようとしているのなら、こっちも容赦しないわ」

リーファの翠色の眼が、真っ直ぐにシグルドを射抜く。

欺瞞は許さず、言い訳も聞き逃さない。そう言わんばかりに、彼女の眼にはシグルドが納められていた。

キリトを利用するため、冗談でも軽はずみ言ったものなら彼女は腰に挿している片刃剣を抜いてくるだろう。同族殺しなど関係なく、人の目も関係がない。それだけ彼女の中では、キリトという人物は大きな割合を占めている。

彼女の様子から察し、はぐらかすのは難しい、と判断したのかシグルドは口を開けた。

役者染みた演技などない。

彼はリーファから、キリトが今も挑んでいるであろう世界樹へと視線を向けて、遠い目でポツポツと語り始める。

「オレは、興味があるだけだ」

「興味？ お兄ちゃんが探している二人が？」

自分と同じ理由だったのか、とリーファは訝しむ眼を向ける。

だがシグルドはやんわりと首を横に振った。それは違う、と態度で否定して事実を口にする。

「オレが興味があるのはキリト殿だ」

「えっ、お兄ちゃん？」

ああ、とシグルドは応じると。

「突如現れた出鱈目な影妖精族^{スプリガン}、シルフ100人斬り、オレの想像など及ばない異分子」

吐き出すように言葉が紡がれていく。
そしてシグルドの眼に宿している感情は――。

「この世界を何も知らない彼が、何者にも縛られない剣士が、見たことがない眼をしている男がどこまで飛べるのか――」

――オレはそれが見てみたい。

そう語るシグルドの眼に明らかな憧憬の色が濃く見えていた。何に対して、キリトの何処を見て、シグルドはそんな眼を向けることが出来るようになったかなど、本人にしかわからない。

更に言えば、リーファからしてみたら、シグルドがキリトに憧れているなど察する事が出来ていない。付き合いが短く浅いのだから、仕方ないことである。

故に、リーファは口を開きかける。

どれはどう言う意味なのか、口を開きかけるも――。

「――えっ?」

「――なっ!?!」

リーファの、視界が、ズレた。

いいや、ズレたという表現もおかしい。崩れたとも言えるし、瞬き程度ではあるが何やらノイズが奔った。

自分だけが起きた不具合なのか、と一瞬だけ思うがシグルドも似たような反応。つまりは困惑していることから、それは違うと断言できる。

見渡してみれば、周囲がザワ付き始めた。

世界に罅が入ったような、軸が揺らいだような謎の現象を感じたのは、リーファだけではない。

遅れて世界樹の上層で。

アルヴヘイム・オンラインで設けられた飛行時間を考えても、とてもではないが個人の力ではたどり着けない世界樹の上層で、蒼色の爆

発が起こり――

「きゃっ!？」

遅れて衝撃と音が、周囲を叩く。

仮想の肌や設置されたオブジェクトが衝撃がビリビリと震えて、身体の芯に叩き込まれる音はズシツと鈍く響いた。

どう言う状況なのか把握する前に、リーファは空を駆けていた。

背後からはシグルドの静止の声が聞こえるが関係がない。世界樹の上層で爆発が起きたのだ。そしてその下方には、兄が今も空を睨みつけて戦っているのだから。

――お兄ちゃん……ッ!

彼女の見た者は――。

.....
.....
.....

同時刻

とあるマンション一室

都内にある某高級マンションに彼は居た。

都内有数。いいや、日本に比肩しうる物がないタワーマンション。誰がどう見ても、そこに住んでいる人間は富裕層であることがわかるほど。決して見栄だけでは住めない、本当の意味での“勝ち組”だけ

が住むことが出来る天上の城に、その男は住んでいた。

傍から見た男は人当たりの良い好青年に見えることだろう。現に、男は慈善活動も行っているし、博愛主義を謳い、理想に燃える青年であった。だがそれは建前。本質的な彼は、現実主義であり、執着と傲慢に満ちた人間でもある。

彼が住まう部屋も、彼の人となりを表現したかのようなモノだった。

無駄に高級な絵画、使用用途などない工芸品。何個もある宝石が散りばめられた腕時計、機能性など度外した家具等。彼の見えが形となつたような部屋である。

しかしそれも見る影もない。

ガラスのテーブルは割れて、絵画は引き裂かれ、工芸品など見るも無残な姿に割られている。

もちろん、彼が住まうタワーマンションはオートロックである。外部の人間が来たものなら、監視カメラに記録されセキュリティは万全だ。泥棒など入るものなら外部からよじ登つて侵入するしかないのだが、生憎彼が住む部屋は地上から数えて五十五階の最上階に存在する。

このことから考慮するに、彼の部屋を荒らした人間は外部の犯行ではない。

ならば誰なのか。

そんなこと、考えるまでもないだろう――。

「フウ、フウ、フウ……！」

肩で息をし、興奮しているせいもあつてか顔を真っ赤に染めて、整えられたヘアースタイルは乱れている。そう、彼の部屋を荒らしたのは彼本人だった。

ひとしきり暴れた後なのか、それとももう壊す物がないからその場に立っているのか、判断に困るものの彼は幾分か冷静さを取り戻していようだ。

住民からは騒音による苦情はない。

何せ最上階に住んでいるの彼しかおらず、下の住人には響かない防音仕様である。それを考えて彼が暴れた訳ではないものの、それが結果的に幸を為し彼の世間体は守られている。

「くそっ、くそっ、くそっ！ 何だアイツはっ!? 何様なんだ、あの野郎はっ！」

彼はヒステリックに叫ぶと、その場で地団駄を踏む。

肩で息をしながら、無事であったソファアに深く腰を鎮めると、ガリガリと音を立てて親指の爪を噛みながら。

「叩き潰すだと、叩き潰すっていったのか、あの虫けらは！ 僕に向かって、神である僕に向かってっ……！」

何も出来ない虫けらの癖に、と座ったまま再びダンツと大きな音を立てて床を踏みつける。

一瞬、〃虫けら〃なる人物を殺す事を選択肢に考えるも、忌々しそうに、口惜しそうに。

「いいや、ダメだ。そんなことをしたら、僕の立場がなくなる……」

彼は『レクト』フルダイブ技術研究部門の主任であり、ALO運営会社『レクト・プログレス』のスタッフでもあった。

つまり、SAO未帰還者の命綱は彼が握っていることになる。囚われた301人の意識は彼が思うがまま、維持に飽きたのなら容易く摘み取ることも出来る立場にあった。

それは彼の〃計画〃にはまたとないポジションであると同時に、彼のアキレス腱でもあった。SAO未帰還者である301人のうちの1人でも異常をきたしたのなら、彼の今まで積み重ねてきたモノは崩れ落ちることだろう。

それは彼が言う「虫けら」に対して同じこと。一時の感情に身を任せ、「虫けら」を殺したのなら何もかもが消え去ってしまう。ならば痛めつける。

致死量でもしぶとく生きている「虫けら」を痛めつけて、このやり場のない感情を発散させるしかない。

「いいや、意味がない。どんなに痛めつけても泣きもしない、僕に懇願もしない。それじゃ、意味がない……ッ！」

気色が悪い、と苛立ちを募らせて親指の爪を噛む。

痛めつけても意味がないのなら、第三者を陵辱してしまえばいい。

だがその第三者も消えた。探そうとしたものなら、「虫けら」は文字通り暴走することだろう。滅茶苦茶に破壊し、人質など何の意味もなくなることだろう。

弱っていても、関係がない。先刻、その力の片鱗を垣間見たばかりだ。破ることの出来ない壁を、どう言う方法で破壊したのか彼にはわからない。だが事実、破壊して彼の大事な物を逃してしまった。

出鱈目な異常性。

だからこそ——アインクラッドの恐怖。

「……ッ!？」

背筋が凍りつく。

何者かに睨まれているような、得体の知れない感覚が彼を襲うも、頭をブンブンと横に振り否定しながら。

「ふざけるな、ふざけるなッ！ 僕が虫けらに、茅場に恐れている筈がない！ そうさ、僕は神だ。神だから何でも——」

そこまで言って、彼の動きがピタリと止まった。

それから肩を震わせて——。

「——ハハッ、そうだ。そうだよ！ 僕は神なんだ！」

哄笑。

苛立ちに歪んでいた顔が、破顔に変わると懐から携帯電話を取り出し、操作し通話ボタンを押して耳に当てる。

先程まで暴れ、痲癩を起こしていた人間と同一人物とは思えない。極めてご機嫌な調子で、電話をかける様子はどこか狂氣的とすら見える。

「僕だ。茅場の様子はどうか？」

『意識を失ってますよ。いつでも実験は開始できますが、どうします？』

まだそんな発想しているのか、と自身の事を棚に上げて楽しそうにクツクツと喉を鳴らしながら彼は笑みを零す。

そのままの口調で、彼は歌うように軽やかな口調で。

「古い、古いよ柳井くん。痛めつけるのはもうやめだ」

『と、言いますと？』

「——最終実験だ」

それが何の意味が込められているのか電話口の男——柳井は一瞬だけ言葉に詰まる。

だが直ぐに調子を取り戻したのか『了解しました』と端的に言う電話を切った。

思い通りに事が進んでいる。

確信すると彼は堪えきれないと言うかのように、口角を薄く釣り上げながら。

「痛めつけても音を上げないのなら仕方ない。そうなったら内面を攻

めるしかないよねえ」

彼が言う内面とは、身体の内側を指している言葉ではない。もっと抽象的で、曖昧なもの。つまりそれは——精神面の話し。

「アイツにもう一度地獄を再現させてやる。最大のトラウマ、今の彼の原点オリジンを見せてやる」

普通であれば不可能である。

しかし彼にとってそんなモノ、容易いモノである。彼が執着する人間を除いた、SAO未帰還者300人をつかった実験。それは他人の感情や思考を、意のままに制御する為のモノであった。

記憶や思考を読み取る事が出来るのなら、それを再現することなど仮想世界では容易い。

「楽しみだよ。あの地獄を再現したら、今度こそ泣いて叫んでくれるかな——なあ、茅場優希くん」

それだけ言うと、彼——須郷伸之の顔はますます笑みを深めていった——。

第12話 集結する者達

2024年8月17日 PM14:30

世界樹 央都『アルン』 路地裏

謎の爆発を見て、兄であるキリトの身を案じ飛び出したリーファが合流できたのは直ぐのことだった。

特にトラブルもなく、兄と合流する事が出来た彼女達は、人目を避けて央都『アルン』の路地裏に足を運ぶこととなる。

今では大通りはその話題で持ちきりだ。

原因不明の爆発、その直前に意識がズレたような感覚、今現在のALLOで何が起きているのか数えきれない考察が飛び交っている状態にある。

やれ、外部からのハッカーの仕業だの。やれ、近々実装されるクエストの試運転だの。やれ、ただの事故だの。その何もかもが信憑性のない情報だ。

真実を知るのは極一部の人間。

それこそALLO運営スタッフであり――。

「えーっと……」

――彼女達なのだろう。

リーファは頭を抱えていた。

合流するまでは何もトラブルなどなかった。そう、それはトラブルするまではという前提の話し。問題はその後、キリトと合流してから話しになる。

目を抑えて「幻覚かも知れない」と何度か心の中で繰り返して、空を仰いでいた空からキリトへと視線を戻す。

「パパあ、パパあ、パパあ……ッ！」

キリトの胸元に飛び込み抱きついている小さな少女——ユイの姿。

そして優しく抱きとめる兄の姿。

どうやら夢でもなければ、幻覚でもないことを、リーファは再認識させられることとなる。

年端もない少女に自身を「パパ」と呼ばせている現実を、妹としてどう受け止めていいのかわからないものの、どういう関係なのかハッキリさせないとならない。

だからこそリーファは、家族として桐ヶ谷直葉は、現実を真っ直ぐに見つめて口を開いた。

「お兄ちゃん……」

「どうした、スグ？」

「お兄ちゃんって……ペド？」

「ペツ!？」

ロリでもないペド発言が、思いの外キリトの心に傷を与えたように、彼は動揺を隠せずにいた。

ユイを下ろすこともなく、器用に抱きかかえながら立ち上がる。

その姿がますます、つばいと感じさせたようでリーファは一步引いてしまった。

必死になるところも、動揺するところも、ますます怪しいと言わんばかりに引くリーファにキリトは思いつきり首を横に振りながら。

「いやいや、待て待てくれ！俺はノーマルだ！」

「でもその娘、お兄ちゃんのことパパって……」

「前に話したろ!?! SAOで何があったか、スグに何度か話したところあるだろ?！」

うーん、とリーファは考えるも、それは直ぐに思い出すことが出来

た。

確かに兄は嬉しそうに悲しそうに語っていた。自分を父と慕って
くれていたAI人間がいたと。

しかし、それでも妙だ。

リーファが聞いていた少女の顛末がその通りなら、ここにいるのは
おかしいことだ。

何故なら――。

「でも、その娘がお兄ちゃんが言っていたユイちゃんであつても……」

「……ああ」

キリトも同じ疑問だったのか、先に続く言葉を聞かずに同意するよ
うに頷いた。

ここにユイがいるのはおかしい話だ。

何故なら彼女は消滅したのだから。加速世界（アクセルワールド）
の仲間達の目の前で、再会を楽しみにするかのような笑みを浮かべ
て、間違いなくユイは消えていった。

だが少女は存在する。

SAOで共に過ごした姿のまま、見間違える筈もない。

そして――建物と建物と間に見える世界樹をみる、呆然と立ち
尽くす――アスナの姿もあつた。

抱きかかえていたユイを壊れ物を扱うようにおろした。

膝を折り、視線をユイに合わせたキリトは、極めて優しい口調で尋
ねる。

「ユイ、話してくれないか？ 何があつたのか、爆発は何だったのか、

アスナに何があつたのか――ユーキはどうしたのか」

ポツリ、と。

ユイは語った。自身に何が起きたのか、ユイを再生させた人物を隠したままであるものの、話せない事情があると察したキリトは深く追求はしなかった。

今までのことを。世界樹の頂上付近で何が起きたのか、自分たちが何を見てきたのか、アスナに何があったのか。

「だからアスナはあんなことになってるのか」

「はい。団長さんにはまだ説明出来てませんが……」

視界の端にアスナを収めて、キリトは深くため息を吐きながら立ち上がる。

その行動には、とりあえずユーキが居たことへの安堵。そして、また勝手に行動したことへの呆れが混じっているものであった。

「あのお……」

今まで静聴していたリーファが恐る恐る手を挙げる。蚊帳の外だと思っっているのか、遠慮しているようにも見て取れる。

思わずキリトは苦笑を浮かべた。あまり見たことがない妹の姿が、思いの外面白かったと言うかのように立ち上がった。

「いいよ手なんて挙げなくても。どうしたんだ？」

「お兄ちゃんが探してる人達が世界樹にいるってわかったけどさ、警察に通報したほうがいいんじゃない……？」

確かに、リーファの言い分にも一理ある。

最早これは、誘拐事件の類だ。もしかしたら、ユーキとアスナを除いた299人も囚われている可能性すらある。しかしそれは、一体何

のためなのか。

そもそも、これは可能性というだけの話だ。二人は確かに居た。だが残りの未帰還者も囚われている確証はない。なによりも――

「スグの言う通りだ」

「なら――！」

「でもな、証拠がないんだ」

遮るように、キリトは口惜しいといった調子で結論だけ告げた。

限りなく黒であることは、キリトもわかっている。

囚われていたが二人だけであるはずがない。必ず、残りの未帰還者も囚われていることは間違いない。だが証拠がないのだ。このまま警察に通報しても動きはしない。仮に動いたとしても、証拠がない以上シラを切ればいいだけの話だ。

それを踏まえて、キリトは首を横に振った。

苛立ちを隠さずに、声を静かに荒げながら口を開く。

「このまま通報しても、ALO運営は。いや、須郷は必ず逃げ切る」

「……それじゃどうするの？ このまま何もしないの？」

「まさか。証拠がないなら、作ってしまえばいいだろう」

「どういうこと？」

「証拠がないのは、未帰還者がログアウトしてないからだ。一人でもログアウトすることができれば、どこにインしてたのか警察も情報を追えるだろう？」

それだけ言うと、リーファからユイに視線を向けて、キリトは問いを投げた。

「ユイ、今からアスナをログアウト出来るか？」

「それが……」

言い辛いのかユイは視線を伏しながら続けた。

「団長さんのステータスは複雑なコードによって拘束されています。解除するにはシステム・コンソールを使用しないと……」

「それはどこにあるんだ？」

「世界樹、内部です……」

雲ひとつない空を見上げる。

どちらにしても、世界樹へ登らないとならないらしい。どっちにしても、キリトにとっては好都合だった。アスナを助けるために残った「バカ」を助けるつもりであったし、物事を明確にされたほうが迷いもなくなる。

目的地は決まった。

あとはその場所までどう行くかだ。

「……ごめんなさい、パパ」

「ん？」

空から視線を落とすと、ユイはワンピースの裾をギュツと握りしめていた。

皺になるほど強く、まるで自分の力の無さを呪うように悔しそうに恨めしそうに言う。

「もっとわたしに力があれば、団長さんをログアウトすることもでき
たし、ユーキさんだって——」

「……ユイ、人間ってのはさ弱い生き物なんだ」

「弱い、ですか……？」

うん、とキリトは頷くと腰を落として視線をユイに合わせる。

「目的がないと迷う、これで合ってるのか途端に不安になって、決意は簡単に揺れるもんなんだ。そうになると、剣も鈍る。戦力も半減以下になる」

「……そう、なんですか？」

「ああ。でもさ、ユイのおかげで目的がハッキリしただろ？ 世界樹を目指す、未帰還者達は必ずそこにいるんだ」

キリトは口元に笑みを浮かべて、ユイの頭に手を乗せた。

優しい手付きで撫でる。頑張った子供を精一杯褒める親のように、微笑みを浮かべながら温かい言葉を送った。

「ありがとうな、ユイ。良く教えてくれた」

「パパ……！」

落ち込んでいたユイの調子が明るいそれに変わると、キリトは眉を顰めて苦言を漏らす。

「それにユーキのことは気にするな、アイツがいつもみたい勝手に勝手やっただけだろ？ アイツもそう言うと思うしさ」

「そう、ですね。ユーキさんならそう言うと思います」

「そして俺達がアイツの後始末だ。面倒にも程がある」

そう言うと、キリトは大きく肩を竦める。

演技するように大げさに、口ではそう言っているものの、言葉と表情はまったくも真逆。

それはどこか――。

「パパ、なんだか嬉しそうですよ？」

「こんなに嫌そうにしているのか？」

「はい！ とっても嬉しそうです！」

キリトも喜々としているつもりもなかった。

どうやら無意識だったようで、ユイの言葉を苦笑いで応じてみせた。これが少女以外であるのなら強く否定する所だが、相手はユイだ。強く否定出来ないのだろう。

兎にも角にも、目的地は決まった。

後は行動に移すだけである。

「パパ、団長さんは大丈夫でしょうか？」

「大丈夫さ」

「どうして、言い切れるんですか？ ユーキさんは団長さんに酷いことを言っていました。とてもではないですが、直ぐに立ち直れる筈が――」

「――それが人間のややこしいところなんだよ」

キリトは軽い調子でアスナへと近付く。

足取りも重たいものではなく極めて軽やかなモノで、片手を上げて朗々とした調子で声をかけた。

「よっ、アスナ」

「キリトくん、久しぶりだね……」

「ああ」

軽く挨拶を終えて、キリトはアスナと肩を並べる。

視線の先には世界樹の姿があった。キリトにとっては今まで登ろうと挑戦し続け、アスナにとっては今まで囚われていた場所。

そして――今も囚われている仲間がいる牢獄でもある。

「キリトくん」

「ん？」

「今まで登ろうとしてたんだよね」

アスナの口調は、静かなものだった。不自然な明るさもなければ、極端に暗い調子でもない。

普段どおりの声で、静かな面持ちで、世界樹へと意識を向けている。キリトは答えた。

聞かれたことに端的に、事実だけを述べる。

「登ろうとしたけど、ダメだったよ。質も量も半端ない。アレは少人数で攻略できる代物じゃない」

「それじゃ、数を揃えないとダメだね」

「……やっぱり、諦めてないんだな」

「当たり前よ」

何に対して、キリトは言っているのか理解しているのか、間髪入れずに答える。

静かなものだった声色は、少しばかり感情が荒々しいものとなっていった。それは憤り、怒りとまではいかないものの明確な憤りを言葉に乗せてアスナは続ける。

「ユーキくんは多分、敢えてわたしを突き放したのよ。無茶させないように、ユーキくんのことなんて放っておかせるために」

「……怒ってる?」

「当たり前です! ユーキくんのお気持ちは嬉しいよ? でもね、また勝手に決めて勝手に行動して! ええ、わたしは怒ってるわ!」

プンスカ、と地団駄を踏みかねないアスナに対して、キリトはただ静観していた。

同意することも、否定することもなく、アスナの言葉に耳を傾ける。そうだ。

キリトは彼女がユーキに何を言われたのかわからない。当事者ではないキリトには、アスナがユーキから酷いことを言われていた、ユ

イの情報しか知らない。

もしかしたら、言われたのがアスナではなく関係のない他人であれば、ユーキの言葉を額面通りに受け取っていたことだろう。

だが相手が悪かった。

アスナにとつて、それは悪手だ。

茅場優希という人間を一番理解している者に行う手ではない。

案外、アイツも詰めが甘い、とキリトは小馬鹿にする笑みを浮かべながら。

「つてことは、初めてか？ アイツと喧嘩するの」

「うん、本当の喧嘩は初めてになるわね。もう絶対に、絶対に許さないだから！」

「でもさ、どうするんだ？ ちょっとやさつとじゃ、攻略できないぞアレ」

「キリトくん、何か策はある？」

「まあ、あるにはあるな。策つてほどでもないけど」

考えはある。

後は実行に移して、どれだけの人間が食い付いてくるかだ。しかし不安はない。彼らならば、最後に共に手を取り合って、SAOのラストダンジョンで共に背中を預けあった彼らならば、協力してくれる筈だ。

「それじゃキリトくんはそつちをお願いします」

「そつち？ つてことは、アスナも何か考えがあるのか？」

「うん。わたしは——」

「——これから^{サラマンダー}火妖精族領に行ってきます」

.....

——意識を失ってどれぐらい経ったのか——。

茅場優希がまず先に考えたのはその程度のことだった。

ぼんやりと周囲を見渡しても、暗闇が広がるばかり。視界からは何一つ情報を得ることが出来ない。ならば触覚はどうだろうか。

「……」

反応は、ある。手がある、足がある。五体満足だ。

常日頃、もはや日常とかしている『実験』であるのなら、優希の意識があるうがなかるうが何かしらのアクションがある筈なのだが、今の所不思議とそんなものはなかった。電流が流されることもなければ、凍死寸前まで追い込まれることもなく、炎で焼かれることもない。ましてや、手足を切り落とされていいる形跡もなかった。

真の意味での五体満足。今までの優希は妖精王オベイロン——
——須郷伸之に囚えられ、かなりの時間が経っていた。だがこんなことは初めてだった。鎖に繋がれておらず、苦痛も屈辱もない現状。
自分は今どのような状況なのか。

通常の思考回路ならば、不安一色の筈だ。しかし優希は通常の人間のそれとは違う。何か欠けて、今まで歪みながら生きてきた。そんな人間が、まともな精神性である筈もなく——。

——明日奈は、問題ねえだろ。

——野郎がいるんだ。

——心配することは何一つない。

——何度も迷惑をかけんのは癪だが、手段選べる立場でもない。

考えるのは他人のこと。幼馴染である結城明日奈の安否だけであった。

無事なのか、キリトと合流できたのか、須郷は見逃したのか。考えても考えても答えが出ないことは、優希本人が一番理解している。情報が満足に与えられずに、周囲は暗闇の現状において明確な回答が与えられずことはありえない。

だがそれでも、だとしても——。

「……勝手なもんだな」

ポツリ、と自嘲するように口元を歪ませて、自身に言い聞かせるように口を開いた。

その感情は明らかな侮蔑。憎たらしげな想いのまま、紡がれた言葉の矛先は自分自身に向けられており、容赦なく突き刺していく。

「自己満足でアイツを傷つけて、今度はアイツの心配かよ。なんて無様で厚顔無恥な野郎だ」

その声に呼応して、周囲の景色が一変した。

漆黒で、光など差し込まなかった景色が破壊されて、また新しい造形に変貌していく。

何も存在しなかった場所からは生えるように草木が息吹き。何も浮かんでいなかった空には曇天が覆い尽くされていく。

一体何が始まるのか。

訝しげに、注意深く観察していた優希。

腰を軽く落とし、来るかも知れない衝撃にいつでも反応が出来るよ

うに、五感のすべてを過敏にしていく。今の優希には奇襲など無意味である。不意打ちなど関係がなく、少年の優れた「直感」が反応することだろう。

先の先。何かを仕掛けられる前に、優希は行動して叩き潰していく。

だがこれは、奇襲が狙いだったとした時の話しだ。

まだ見ぬ敵の目的が違うものであれば――。

「……おい」

優希の観察など――。

「待てよ。なん、で……」

――無意味に終わることになる。

そもそもな話し、警戒など無意味であった。

襲うなどとんでもない、戦うことすら選択肢に入っていない、優希を直接手を下そうとする考えもない。

自身が立っているのは谷底。

空を見上げれば曇天に覆われた空、そして突き破られたガードレール。

眼球はグラグラと揺れて、心臓が締め付けられてるかのように激痛が走り、呼吸も満足に出来ない。

軽く腰を落としていたが、今となっては呆然とその場に立ち尽くしているのみであった。だが本人からしてみたら、自分が立っているのか不明瞭なものだろう。そこまで言い切れるほど、今の優希は希薄なモノとなっていた。

まさか、と優希はゆっくりと再び周囲を見渡した。

横転している車、焼け焦げた草木、今も燃え盛っている炎、そして

——真つ赤に染まった地面。

その光景は、何度も、見たことがあった。

——ここは両親を犠牲にして、自分が生き残ってしまった場所であるのだから——。

忘れもしない、忘却することなど出来ない、優希の心に深く深く突き刺さった罪悪感の棘、そして——茅場優希の最大の罪罰。

幼い頃、その横転している車。それは少年と両親が乗っていた。歪に転がっている車、フロントガラスは粉々に砕け散り、バンパーは千切り離れて転がっており、タイヤホイールもドアも何もかもが歪んでいる。

それは優希から見たら棺桶のようにも見えるものであった。

「や、めろ……」

無意識に出た言葉と共に、一步後退る。

言葉に尽くしがたい吐き気を我慢しながらも、過去の惨劇に目を逸らせずにいた。

それこそが自分の罪であり、自分に与えられた罰であると言うかのように、一步また一步後退りながらも目を背けに受け止めていた。

「あ……っ……い！」

胸が痛い。

動機が収まることなく、秒で刻むに連れて段々と早くなっていく。為す術などないのは、当たり前だ。痛むのは外傷でなく、その身体の中側の更に内側にあるのだから。

精神がすり減っていくのを、優希は自覚した。

この光景が、記憶がある限り、痛みは更に深まっていき、膨れ上がり、癒えることなど決してない。

故に、吐き気が収まることはない。手足は痺れ始め、頭は沸騰しそうなほど熱く、眼球は焼き切れるようだ。

それでも、だとしても、優希は眼を背けるわけにはいかなかった。これこそが自分の罪であるとするのなら、逃げるわけには――

「――優希くん」

背後から、声が聞こえた。

聞き慣れた声、その声は無感情なもので、かつては彼を鉄仮面と面白半分に評していた男の声。

声の主が誰なのか理解しながらも、優希は振り返ると。

「――優希くん」

口の端から血反吐を垂らしている白衣を着た男――茅場晶彦の姿が合った。

見てみればその腹部には見覚えがある両手剣――アクセルワールドが深々と刺さっている。忘れもしない、これは再現だ。ソードアート・オンラインで茅場晶彦を犠牲にした。

茅場の後ろ、その背後には数十人の見覚えがある顔があった。

かつて主街区で見かけて何度か話しをしたことがある『吟唱スキル』を持っていた少女の顔、アインクラッドの恐怖として活動した頃に見た男の顔、子供の手を繋いでいる母親の顔があった、恋人同士ののだろうか距離感が近い男女の顔があった。

かつて、茅場優希は走り続けてきた。

前だけを見て、かつての仲間すら置いて、勝手なまま最短距離で走った。

一人で走った。『アインクラッドの恐怖』は脇目も振らずに、走り

続けた。その間、どうしても何もなかったと、悲劇がなかったと言えるのか――。

茅場の後ろに立っている者達は真っ直ぐに優希を見ていた。

無感情で無表情で、その瞳は優希だけを捉えていた。無感動で、それこそカメラレンズのように優希だけを見る。

手を差し伸ばし、万人を救えた訳ではない。中には何もかもが遅かった者、間に合わなかった者が存在する。それこそが彼らの姿であった。万人ではない優希が救えなかった者達、その罪悪感が形となつて優希を責めていた。

言い訳などしない。

救えなかったのは自分が力がなかったから、しょうがなかったなどと言うつもりもない。

そこで「おい」と、そこに「ねえ」と。

背後から二つの声が聞こえた。

優希の肩が大きく揺らぐ。

聞き覚えのある声に、上手く発声出来なかった。

かつて、その声を聞いて育ってきた。優希の大人としての見本であり、その大きな背中を見て、いつか自分もそうなりたいと目標とした人がいた。

かつて、その声に何度も安らぎを得た。優希をいつも暖かく見守り、ときに本気で叱ってくれた、いつか今度は自分が彼女を守りたいとした人がいた。

振り返る。

頭から血を流し、片腕が明後日の方向へ捻子曲がっている男性がいた。

内出血している腕は痛々しく、眼が虚ろになり優希を見ている女性
がいた。

怪我をしている箇所はそれぞれ違う。度合いも違う二人が共通していることといえば。

「答えろよ。ンでテメエが生きて、オレ達が死ななきやならエんだ？」
「答えて下さい。何故、私は死ななければならなかったのですか？」

敵意だ。

蒼い双眸の女性は真っ直ぐ優希を射抜く。

筋肉質の男性は殺気を込めた眼で優希を貫いている。

一歩二歩、三歩四歩、優希は後退る。

首を横に振り、逃げるように、二人からは徐々トラウマに距離を開ける。
わかつていた。

二人が自分を恨んでいることは分かっていた。覚悟もしていた。殺されても文句はないと本気で思っていた。それでも、人の心とは厄介なものだ。わかつていたとしても、身構えていたとしても、二人の言葉は採掘機のように優希の心を容赦なく削り抉っていく。

二人を——両親を犠牲にして生きてきた茅場優希への罰であると言うかのように。

二つの表情は悪鬼羅刹のそれに変わり、二つの言葉は怨霊怪異と
なって優希の心を侵食していく。

「テメエのせいだ」

「貴方のせいです」

ああ——。

「テメエなんぞがいるから」

「貴方のような者が存在するから」

本当に——。

「オレ達は」

「私達は」

——ここは確かに——。

——死んだんだ——。

地獄だ——。

幕間 妹が出来ること

2024年8月17日 PM15:05

SAO未帰還者、総勢301人あまり收容されている病院に向かうのは、そこまで難しいことでもない。

車や他の交通手段を持っている人間にとっては簡単なことであり、徒歩しか方法がない人間にとっても苦ではないことであった。一日に何台ものバスが行き交っており、一便乗り遅れたとしても数十分後には病院行きのバスが到着する事になっている。

とは言っても、ここまで交通に不便がない病院というのも奇妙なものである。

確かに問題の病院は、日本有数の高度医療機関ではある。利用者が多い事が予想されるからこそ、交通の便を強化するのは当たり前なのかも知れない。

だとしても、これは異常だろう。一便乗り遅れたとしても数十分後にはバスが到着し、病院行き専用のシャトルバスやタクシーまで存在する。あまりにも妙な状況であるが、收容されている患者のことを考えれば納得も出来るというもの。

約二年前にデスクゲームに巻き込まれたSAOユーザーの存在。

HPゲージがなくなりゲームオーバーとなれば、現実での死を意味する最悪の環境に彼らは身を置いていた。

被害者の家族並びに関係者はそれしか知らない。ソードアート・オンライン内で何が起きていたのか、どんな状況だったのか、知り得る情報がなければ、その手段すらない。ただわかつていることとさえ、被害者がゲームオーバーになつていないということ。ゲームオーバーになつていないからこそ、現実でも死んでいないのだから。

そうなれば、被害者の見舞いに来る。

いつ死んでしまうかもわからないこの状況で、被害者の家族と関係

者が足を運ぶのは自明の理と言えるのかも知れない。自分達には何も出来ない、けれども傍にいたい。そういった健気であり献身的な感情で、今日も関係者達は足を運ぶ。

未帰還者301名の意識が回復する見込みは今の所ない。それでも、だからこそ、彼らは足を運ぶのだ。ソードアート・オンラインはクリアされた。帰還するプレイヤーも確かに存在する。だが未帰還者にとっても、関係者にとっても、帰還したプレイヤーにとっても、まだ終わっていない。ソードアート・オンラインは、まだ終わっていない。

「んー… 今日暑いなね……」

病院直通のシャトルバスから降りて、一人の少女が眩しそうに真上を見上げた一言呟いた。

白く清潔感のあるヘアバンドを頭に身に着けて、パープルブラツクのTシャツにショートパンツを着こなし、彼女が活発な少女であることがわかる。

長い間バスに揺られて窮屈していたのか、少女はんー、と大きくその場で上体を伸ばす。それから直ぐに「よし！」と気合を入れるかのように病院へと向かった。

中に入ると、高級ホテルを彷彿とさせるメインロビーに入る。

これが病院であるというのだから、おかしな話であると思ったのか少女はその口元に苦笑を張り付かせた。

少女自身、病院には通い慣れているし、独特の雰囲気にも苦としていない。

だがこればかりは慣れなかった。自分が抱いている病院という概念が、根本的に崩されかねない絢爛としたロビーには、過去にも今にも慣れない。恐らく今後も慣れることはないだろう、とぼんやりと考えながら少女は受付に足を運び。

「こんにちはー」

周囲に迷惑をかけない程度の朗々とした口調で、書類整理をしていた女性に声をかけた。

女性は「はい」と事務的な声で応対すると、少女の存在を捉えると好意的な笑みを浮かべる。初対面や愛想笑いではない、プライベートルドで浮かべる笑顔を少女に向けて女性は口を開く。

「こんにちは、木綿季ちゃん。お疲れ様、暑かったでしょ？」

「うん、夏って感じがするよー」

困ったような笑みを浮かべた少女——紺野木綿季は手で仰ぐようなジェスチャーをした。

対する女性も億劫そうに大きく肩を竦めて言う。

「ホント嫌よねー夏。化粧崩れたりしたら最悪なもの」

「そうなの？ お化粧しているようには見えないけど……」

「そこはテクよテク、長年培ってきたモノってヤツ。素肌なんて晒せないわよ」

「はえー。園崎さんみたいな綺麗な人でもそうなんだ？」

受付の女性——園崎は「ありがとう」と笑顔で礼を言うと直ぐに意地の悪い笑みへと変わり真実だけを口にした。

「でもスツピンの私は凄いわよ。木綿季ちゃんも今のうちに肌の手入れしないとダメよ？」

「でもでも、ボクどうすればいいかわからないよー」

「わからないで済ませちゃダメ。しっかり自分をメンテナンスしないと、好きな人にも愛想尽かされるんだから」

「好きな人かあ……」

眩くと木綿季は少しだけ想像する。

この先のこと、女性としての問題をすべて投げ出し生活し続け、いつか目が覚めるであろう兄のことを想像した。

髪の毛は痛み、肌も荒れ放題、清潔感などない自分を相対した時の兄は果たしてどんな顔でこちらを見るだろうか。

想像してみても――

「うわぁ……」

これでもかというくらい、顔を引きつらせた。

想像しなければよかった、と木綿季は後悔する。同時に想像してよかった、と思う。

矛盾が孕んでいるものの、想像とは言え兄の“あんな顔”で自分を見てほしくなかったし、想像したからこそ最悪の状況を回避できる。そう言う意味では木綿季が抱いた感情は、間違ったものではなかった。

「園崎さん、ボク頑張るよ。頑張って凄く頑張って、女になる」

「……言い方に問題あるけど、わかってくれたみたいね」

「うん、見えて。ボク、にーちゃんの女になるから！」

「言い方あー!?!」

.....
.....
.....

それから受付の園崎と一言二言会話をし、木綿季はエレベーターに乗り込んだ。

階段で登っても良かったのだが、冷房が効いている室内とは言え十階までとなると汗も出るかもしれない。先の想像を顧みて、階段で登るという選択肢は木綿季の中からはなくなっていた。

汗臭くなるのはダメなのだ。乙女的に考えても、思春期的に考慮しても、それだけはよろしくない。

故に、木綿季はエレベーターに乗り込む。

不思議なことに、各階に止まることなく、目指していた最上階である十八階に問題なく到着した。

人影はあつた。

元より、十八階は長期入院を余儀なくされた入院患者が収容されている。となれば、この階にSAO未帰還者の大半が存在している。

「……」

今だに誰一人、目覚めない。

未帰還者301人、余すことなく全てのプレイヤーが意識を取り戻すことなく、眠っているかのように意識を失っていた。

それは木綿季の「兄」、そして姉のように慕っていた「彼女」も同じような状態だった。

目を開けることなく、声を発する訳もなく、握った手を握り返すこともない。規則正しい呼吸音、それだけが二人が行き来している証明となっている。

そうしていると、木綿季は一つの病室前に立ち止まった。

大きく息を吸い、そして大きく息を吐く。二人がいつ目覚めるかわからない、もしかしたらこのまま寝たきりという可能性すらありえる。

「……ダメだよ、そんなこと考えたら」

沈んだ表情、後ろ向きになった思考を、泣きそうになるのを我慢して、無理やり気持ちを前向きにさせた。

自分は元気で、いつもどおり明るく振る舞わねば。そうしなければ

「にーちゃんが心配する。だから――」

木綿季は、明るく元気に、いつも通り、あり続けねばならないのだ。よし、と一呼吸置いた。

顔を伏せて、そして上げる。そこには「いつも通り」の紺野木綿季が居た。

ドアをスライドする、同時に明るい口調でひと声かけた。

「こんにちはわー」

現在、二人の病室に誰がいるのか受付の園崎に聞いていた。

兄を先輩と慕う後輩でもなく、二人に懐いているエギルの娘でもなく、共に戦っていたリズベットでもなければ、「彼女」の父である結城彰三でもない。

病室に居たのは女性だ。

椅子に腰を下ろし、経済学の本に眼を落としていた。

女性では長身であり、痩せているものの華奢という印象は見受けられない。ダークブラウンの髪の毛は左右に等しく分かれ、肩のあたりで切りそろえられている。

木綿季から見た彼女は大人の女性。世で言うキャリアウーマンとは彼女のことを言うのだろうと思った。俗にいうと「カッコいい」女性とは彼女のことであると、木綿季は考えている。そうしていると。

「あら」

木綿季から見た「カッコいい」女性と呼んでいた分厚い原書をパタンと閉じると、視線が入ってきた来訪者に向ける。

初めて見るような目つきではない。何度もこの病室で顔を合わせているからこそ出来るような、親しみを持った顔で木綿季へ彼女は声をかけた。

「いらっしやい。今日も来てくれたのね、木綿季さん」

「うん。京子さんこそ、今日も来てくれたんだね？」

結城京子。それが彼女の名前であった。

大学の現役教授であり、多忙の身でありながら彼女はこうして頻繁にこの病室へと通っている。

目的など知れたこと。今も目を覚まさない娘——結城明日奈の見舞いのためであり、同じく意識不明である——茅場優希の様子を見るためなのだろう。

「……まだ二人とも、寝たままなんだね」

「……そうね」

他意はない。

思わず木綿季から口に出た言葉に、京子は反応した。

あまりにも短い相づち。

顔を伏せることなく、眼を話すこともなく、現実を直視するように、京子は眠る明日奈の顔を見ている。彼女がどんな感情を抱いているのか、木綿季に知る術はない。

だが邪なモノではない筈だ。現に、何度も京子はここに足を運んでいる。それは彼女が明日奈の様子を見に来ているからに他ならない。もし仮に、明日奈が京子にとってどうでも良い人間であれば、見舞いに来るという選択肢すらない筈なのだから。

そう考えると、木綿季は自分のことのように嬉しくなった。

母親と上手く言っていないことは、明日奈の口から聞いたことがある。だがそれでも、京子は本当の意味で明日奈を心配していた。その事実が何よりも、木綿季にとって朗報と言えるだろう。

だからこそだろうか。

「珍しいなあ」

木綿季は極めて明るい口調で呟いた。

対して京子は不思議そうな声で、木綿季に問いを投げる。

「何が珍しいのかしら?」

「えーとね、ボクとアスナ、あとストレアと三人でいつもにーちゃんを起こしに言ってたんだ。だから明日奈がお寝坊さんなのは、珍しいなあーって」

「起こしに? それはソードアート・オンラインの中でつてこと?」

「そうそう。『朝起きたらオマエらの顔がある。せめて声をかけろよ、ホラーかよ。病んでんのオマエら?』って、にーちゃんにいつも文句言われたなあ」

「……まさかと思うけど貴女達、優希を起こさないでずっと寝顔見たの?」

「そうだよ?」

「……あのね、木綿季さん。それは起こしに行っただって言わないわ」

はあーっと深いため息を吐いたのは仕方ないのかも知れない。

他人の木綿季ならいざしらず、自分が育ててきた娘がそんな奇行に走っていたとは京子も思いもしなかっただろう。

「でも楽しかったよ? アスナも笑ってたし!」

「明日奈が?」

少しだけ驚きながら、意外そうに京子は木綿季を見た。

うん、と木綿季は自信満々に頷くと。

「笑って怒って、泣いてまた笑って。いつもボク達を引っ張ってくれ

てたよ?」

「……本当、なの?」

「うん。ボク達のギルドの団長だったんだよアスナ」

「……そう」

低く、感慨深く呟いた言葉は、たった二文字。

それから京子は沈黙した。聞きたいことは数多い。娘はどんな状態だった、身体を壊していなかったか、無茶をしていなかったか、虐められていなかったか、友達はたくさんいたのか。汲めども汲めども、その問いは溢れ出てくる。

だが問いは投げられなかった。

先程、木綿季は言った。明日奈は笑い泣き怒りまた笑っていたと。それを何度も見てきのだと。

だが自分はどうだろうか。親である自分は、木綿季よりも長い時間共に過ごした自分は、明日奈のそんな一面を見たことがあるだろうか。

答えはどちらでもない。見たことがあるもの——思い出せなかった。

親として当たり前の光景、たったそれだけなのにも関わらず、京子は思い出せない。

S A O事件が起こる前、進学校に通い始めてから、小学校通い始めてから。どれほど遡っても同じだった。記憶にある明日奈は、常に京子の顔色を伺っていた。硬い表情で、笑顔すら見せない。会話と言っても和気あいあいとしたモノではない。固く冷たく、距離感のあるモノだ。

親のはずなのに、子供の笑顔が思い出せない。

自分は一体、あの娘に何をしてきたというのか——?

「——でも、安心したよ」

「——え?」

意識を内側から外側へ。

視線を木綿季に向けると、彼女は笑っていた。

本当に嬉しそうに、ニコニコと笑みを浮かべている。沈んだ表情である京子とは対象的。聡明な京子から見ても、木綿季が何に對して安心しているのか理解が出来ない。

子供の笑顔すら思いつけない母親に、何を見出しているのか理解が出来ないまま、木綿季は口を開く。

「アスナは京子さんと上手くいってないって言ってたけどさ、京子さんはアスナのこと大好きだもん」

「……どうして、そう言い切れるの?」

「え? いやだって、本当にアスナのことどうでもよく考えてたら、こんなお見舞いに来ないでしょ? それってアスナが大好きだから、お見舞いに何度も来てるってことじゃないの?」

「それは……」

事実、木綿季の言う通りであった。

明日奈がソードアート・オンラインの虜囚となってから1年と9ヶ月11日、満足に寝た事がない。

化粧で誤魔化しているものの、目元には隈が色濃く出来ており、食も細くなっていた。寝たところで、見るものと言えば悪夢。京子の眼の前で、無残に死んでいく明日奈の姿。

そんなモノを見てしまい、精神をすり減らしているのは、偏に娘が心配だからに他ならない。

だが京子はそれを口に出来なかった。恥ずかしくて、何よりも大切なのに、たったそれだけなのに言葉に出来ない。

故に、彼女は行動に移す。

明日奈の学歴の高い学校に行かせようとするのも全ては明日奈のためであった。どう言葉を繕うとも、今の日本は学歴社会だ。優秀な人間であればあるほど、大企業にも就職ができ、将来の選択の幅も広がる。その為に、勉学を幼い頃から強いてきた。

許嫁を決めたのもそうだ。将来、自分に何が起きても大丈夫なよう

に手を打ってきた。人間の命など脆い、簡単に摘み取られてしまうことを京子は知っている。いつも笑い、他人に慕われ、まるで太陽であった「幼馴染」すらも、死には逆らえなかった。

全ては明日奈のため、自身の愛する娘のため、自身の持てる全てを注いできた。

生まれや育ちなど関係がないように、自分のようなつまらないコンプレックスを持たぬように、育ててきたつもりだ。

「かけがえのない宝物、それこそが京子にとっての明日奈であるのだから。」

「京子さん、ボクね？ あの世界で学んだことが一つあるんだ」

「……学んだ、こと？」

うん、と木綿季は頷く。

それから続く彼女の言葉には、自身が満ち溢れていた。

「にーちゃんもね、京子さんみたいに不器用な人なんだ。いつも仏頂面で、いつも何かに怒ってて、何を考えてるのかわからないときがある」

でもね、と言葉を区切り木綿季は笑みを浮かべた。

当時の状況を思い出すようにゆっくりと、されど好意的な声ではにかみながら歌うように軽やかに。

「でもね、一度本心を言ってくれたんだ。ボクが嫌われるのを覚悟で、今までボクが思っていたことを、ボクが今までやってきたことを言っただ。そしてボクを許すって、良く頑張ったって、家族になろうって、言ってくれたんだ」

それは抽象的であまりにも断片的なものだ。

だがそれでも、木綿季にとってはかけがえのないモノなのだろう。

色褪せることなく、鮮明に、当時の状況を木綿季は思い出すことが出来る。

「それでね、わかったんだ。行動も大事だよ、でも言葉にすることも大事なんだって。京子さん、本心を言うのは怖いよ、凄く怖い。でも言わないと伝わらないよ。ぶつからないと、伝わらないことってあると思う」

「……………そう、ね。木綿季さん言う通りだわ」

本心を語るのは誰以来だろうか。

もしかしたら、夫である結城彰三にも漏らしたことがないかも知れない。

いつ以来のものか。そう、アレは幼馴染以来——優希の父親以来だろう。

だが今更、何を言えはいいのだろうか。

本心を語ったところで、それが明日奈が求めているモノとは限らない。明日奈が自分と対話することを望んでいない可能性すらありえる。

そうになると、思考の袋小路だ。

ありとあらゆる後ろ向きの可能性が生み出されて、また新しい可能性が誕生していく。尽きることのない問題が、京子の頭を絶え間なく過っていく。

「大丈夫だよ、京子さん！」

回答を出したのは木綿季だった。

彼女は胸を張り、力強い言葉で京子の背中を押す。

「アスナも京子さんと話しがしたいと思ってるよ！それにさ、ボクやにーちゃんと違って京子さん達はまだやり直せるから」

「……………ええ、貴女の言う通りね。ありがとう、木綿季さん。貴女の言葉

は人を勇気付ける力があるわね」

「えへへ、何だか照れるなあ」

「本当のことよ。それに、貴女の笑顔を見てると落ち着くわ」

「え、ホント？ 嬉しいなあ。ある人に、言われたんだ。『この世は笑ってるヤツが一番強いから、オマエも笑え』って」

「ああ、そのバカなら私も知ってるわ。そう言えば、いつもバカみたいに笑ってたわねアイツ……」

木綿季が言う「ある人」、京子が言う「アイツ」それが誰なのかお互いわかっていた。

そして一泊間をおいて、思わず二人は笑みを零す。懐かしい人間を、この世にはいない何者かを、思い出していると。

「ん？」

ポケットにいれていた携帯が揺れる。

病院内ということもあり、バイブレーションにしていたそれを木綿季は取り出して、操作し始めた。

それは電話ではなくメール。

差出人は兄と何度も喧嘩をしていた少年——桐ヶ谷和人からだった。

本文は簡潔なモノ。知りたかった結論、待ち望んでいた事実。

本文に記載されていたそれを見て、木綿季は目を見開いた。

そこに記載されていた文章は——。

第13話 最強との会合

2024年8月17日 PM15:32

サラマンダー領 首都『ガタン』

世界樹から見て南の砂漠地帯に、サラマンダー火妖精族の首都『ガタン』は存在していた。

その大地は、端的に言ってしまうえば不毛の大地だ。シルフ領のように緑豊かな木々に囲まれているわけでもなく、ウンディーネ領のように水源に囲まれているわけでもない。ましてやレツプラコーン領のように採掘が優れている場所というわけでもない。

正にサラマンダー領は不毛であり、不変の大地と言える。砂地を掘ったところで水が湧き出ることもなく、種を植えたところで草木が生えるわけもない。

住居も遺跡となった廃墟をそのまま使っている、という設定のためか手入れや修繕が行き届いておらず、ところどころ建物の壁には罅が走っている。

環境は劣悪、景観も目移りする物がない。資源の収集すらままならない地形。そう言う意味では、プレイヤーが最初に選ぶ種族としては、あまりオススメ出来ない種族と言えるのかも知れない。

だがどういいうわけか、VRMMO経験者にしろ初心者にしろ、サラマンダー火妖精族は大変人気がある種族であった。

それもその筈。9つある妖精族の中で、火妖精族はその中でも戦闘が有利である種族だ。筋力は初期の段階で比較的高い部類であり、なおかつHPも高く設定されている。PKが推奨されているアルヴヘイム・オンラインにおいて、対人戦は一番重要視されている。何よりもグランドクエストの難易度を考えても、サラマンダー火妖精族が一番人気というのも頷ける。

その人気ぶりは凄まじいの一言。

恐らくであるが、現在プレイしている人間の中で、サラマンダー火妖精族を選ん

でいるプレイヤーは半分近くいると言っても過言ではない。

大半のプレイヤーは火妖精族^{サラマンダー}、そして問題となっているアルヴハイム・オンラインはPKが推奨とされている世界観。

ともなれば、そんな中で——火妖精族の首都に赴くというのは自殺行為と言えるだろう。

「……」

キヨロキヨロ、と。

リーファは挙動不審に眼を泳がせていた。

彼女がいるのは、敵地と言っても語弊がない火妖精族の首都『ガタ
ン』の一際大きな建物の前。

石造りの建物が並び、道は石を乱雑に敷き詰められたかのような、荒く整地すらされていない道となっている。リーファもサラマンダー領に訪れるのは初めてである。とは言っても、別種族同士の交流など皆無だ。だからといって、物珍しげに辺りを見渡しているのかと言えれば決してそうではない。

ここは火妖精族の領地。つまりは彼らのホームということになる。そうなると、リーファの圧倒的不利。ここではリーファが彼らに傷つけることは出来ず、彼らはリーファを一方的に勝ることが出来る。

故に、圧倒的不利。

戦闘となれば勝ち目などなく、リーファが挙動不審なまでに周囲を警戒するのも無理はないだろう。

少しでも妙な動きがあれば離脱。今、自分に出来る選択肢といえは逃走くらいしかない。

「あの一……」

「ひゃー？」

不意に、背後から声をかけられたリーファは身体全体をビクつかせる。過敏に辺りを観察していたからか、妙な声も出てしまっていた。自然と顔が赤くなるのを、リーファ自身気付いていた。だがどうすることも出来ない。オーバリアクションで変な声も出てしまったのだ、彼女が抱いている羞恥心は途方もないほど強大なのだろう。

リーファは振り返る。

そこにいたのは女性。当初より着ていた薄手の白いドレスの上から、赤を強調とし胸を覆う鉄製のアーマーを装備しており、素足だった足にはワインレッドのブーツを履いていた。

そしてその腰には、一番軽量の細剣が差している。

「大丈夫、リーファちゃん？」

「……はい」

心配そうに見つめる彼女——アスナは問いを投げて、リーファは居心地悪そうに顔を紅く染めて小さく応答した。

リーファが周囲を警戒しているのは、自分自身を守るためではない。アスナを守るためでもあった。

今のアスナは、傍からどの種族にも属さない正体不明のプレイヤーだ。彼女が妖精王オベロンの妃である『テイターニア』という設定の妖精族であると説明しても、事情を知らないプレイヤーから見れば信じてくれないだろう。最悪、NPCだと勘違いされてしまい、アスナが襲われる可能性すらある。加えて、今のアスナは戦える状態ではない。最低限のステータスしか与えられておらず、飛行することも、ましてや戦うことすらも難しいと言える。

だからこそ、リーファは辺りを警戒していた。

戦う術も持っていない、アスナを守る為に、彼女の無謀な提案の護衛役として買って出たのだ。

だが不満はある。

「アスナさんは、大丈夫ですか？」

「うん。ごめんね、移動もリーファちゃんに抱えてもらっちゃって、重くなかった？」

「大丈夫ですよ！ あたし、結構力持ちですし」

「ふふつ、ありがとう。リーファちゃんは頼もしいね？」

軽く笑みを零すアスナを見て、リーファも自然と笑みが溢れた。

不満はある。

しかし、それはアスナに対してではない。この場にはいない、自身の兄であるキリトに対してであった。

キリトが和人であると知らなかった最初の頃に、現在のアルヴハイム・オンラインがどのような状況なのか簡潔ではあるがリーファは説明していた。

この世界では自身の種族ごとにホームタウンが設定されている。つまるところのホームタウンとは領地である。シルフ領ならばシルフの、サラマンダー領であればサラマンダーの領地が決められており、そこに侵入した他種族はホームタウンに設定されており種族をPKする事が出来ない仕様となっていた。これだけで単身でサラマンダー領に乗り込もうとしていたアスナが、どれだけ命知らずな行動なのかわかるというものだ。

だと言うのに、キリトはアスナの無謀とも言える提案に二つ返事で承諾すると

—— わかった、そっちはアスナに任せるよ ——。

と、自身はやることがあると、さっさとログアウトしてしまったのだ。

思い出すだけで腸が煮えたぎるとは、今のことを言うのだろうか。段々とリーファの怒りのボルテージが上がっていく。

兄は彼女が心配ではないのか、戦うすべも持たずに、ログアウトも出来ないアスナが、再びソードアート・オンラインの再来を迎えているのにも理解しているくせに、何も思わなかったのか。

「り、リーファちゃん？　もしかして、怒ってる？」

「別につ、怒ってつ、ませんよっ！　お兄ちゃ——キリト君が薄情な奴だなんて、これっぽっちも思ってませんからっ！」

「キリトくんが薄情？」

今ひとつ要領が得なかったのかアスナは、どの辺りが？　と不思議そうに首を傾げた。

「キリトくんは優しい人だよ？　一人で世界樹を調査するって、ユイちゃんが言い出したときはかなり心配してたし……」

「それ、それですよっ！　どうしてあの娘のことは心配して、アスナさんには心配しないんですかねお兄ちゃんは！　意味がわかりませんよ、アスナさん達にあんなに会いたいからALO始めたのに、あの反応なんでもんっ！」

「それは仕方ないよ。ユイちゃんはキリトくんの守る対象なんだから」

「守る、対象ですか？」

うん、とアスナは頷くと続ける。

「何がなんでも守りたい人というか、多分キリトくんは何があってもユイちゃんは守ろうと思う。……自分がどんなことになっても、必ず」

「……詳しいですね」

「……わたしも、ユイちゃんと同じみたいだからね。何となくだけど、わかるの」

何処か遠い目で、思い出すように呟いたアスナの顔は、嬉しいようで、どこか悲しげなモノだった。

それは相反する感情だ。『嬉しい』のに『悲しい』とは矛盾している。守られるのは嬉しいが、守られたいわけではなかった、そう言

うかのようにアスナは夢げに笑みを浮かべて。

「ワガママなのはわかってる。守られて嬉しいのに、ただ守られるだけなのがイヤなんて、ワガママにも程がある。でもわたしは自分が立つ、守られているだけのわたしが許せない。だからこそわたしはここにいます」

「アスナさん、一つ教えて下さい」

「いいよ、何でも聞いて」

「どうして、サラマンダー領に行こうとしてたんですか？」

アスナの言い分はわかった。

守られるだけが嫌だからこそ彼女はここにいると言った。ならば、ここに来た訳は？ 今や火妖精族はALO最大戦力といっても過言ではなく、例のグランドクエスト制覇に一番近いと言われている。

世界樹の頂上を目指しているキリトやアスナにとって、火妖精族は競争相手。説き伏せることの出来ない大きな壁であるのだ。

だからこそわからない、リーファにはわざわざアスナが赴いた訳がわからなかった。

「——それはオレも知りたいな」

首都『ガタン』で一際大きな建物から出てきた男——シングルがそう言いながらアスナ達に近付いてきた。

初めからリーファとアスナでサラマンダー領に訪れていたわけではない。

アスナの護衛にリーファ、火妖精族と交渉したいというアスナの願いを聞き届けたシグルドが話を通すために同行していた。

計三名。少数で彼女達は行動していた。

「……纏まったぞ。貴女の話しを聞くそうさ」

「ありがとう、シグルドさん」

——以上が、わたしが置かれていた状況です。

会議室、それも火妖精族サラマンダーの重役たちが議論する際に使われる専用の会議室に、彼女達がいた。この部屋だけは比較的ではあるが、部屋としての役割を果たしていた。

とは言っても、長机と椅子が配置されているだけに過ぎず、窓があるものの石造りの壁が圧迫感を与えており、とてもではないが長居はしたくないような部屋の作りとなっている。

アスナの説明に、重苦しい沈黙が流れる。

アスナ以外の面々、つまりは幹部の火妖精族サラマンダー五名、さらにリーフアやシグルドが愕然とした表情で事実を受け止めていた。

しかしその沈黙は直ぐに崩れることとなる。

「拉致監禁、S A O未帰還者が囚えられている可能性がある、ねえ……」

火妖精族サラマンダーの幹部が一人、これまた小馬鹿にするように鼻で笑う。

その反応はも仕方ないことなのかも知れない。アスナの言い分は当事者ではない彼らからしてみれば、荒唐無稽のものでしかない。

確かに、アルヴヘイム・オンラインを運営しているレクト・プログレスの親会社であるレクトがS A O未帰還者の生命維持を努めている。だがそれとこれとは話しが別だろう。どうしてS A O未帰還者を捉える必要があるのか、その目的は何なのか、理由すらもハッキリしない。

故に、幹部の一人は鼻で笑ったのだろう。

囚われていたと言うアスナの切り出した話の内容があまりにも馬鹿馬鹿しいもので、あまりにも突拍子もなく、そして——現実味がない話であるのだから。

「……貴女はS A O未帰還者は囚われているかもしれない言いましたね？」

新しい幹部の一人が口を開く。

その声は極めて冷静なものであり、先程の小馬鹿にしていた幹部とは異なる声だった。公正で冷静な判断で物事を進めようとする意思が感じられる。

「はい」

「見たのですか？ 囚われていた彼らを」

その問いに対して、アスナは口惜しげに沈痛な面持ちで首を横に振る。

「いいえ、見てません……」

「見てない？ 囚われているかもしれないという憶測だけで、我々にグランドクエストを協力しろというのか？」

小馬鹿にしていた幹部がニヤニヤと笑い、アスナに問いを投げる。

それは明らかに侮蔑。その笑みは人を不愉快にさせるのは十分なものであり、憤慨させるものである。辺りを見渡してみれば、冷静な幹部、リーファやシグルド以外の人間は似たような顔で、アスナを見ていた。

思わずリーファは立ち上がりかけるも、その前にアスナは彼らの顔から目を背けずに、毅然とした態度で頷いて。

「そうです。わたし達に力を貸してくれませんか？」

「やれやれ、厚顔無恥とはこの事を言うのか」

大きさに肩を竦めた幹部はアスナへ鋭い目で睨みつけて。

「ふざけるな。グランドクエスト完全制覇は我々の目標であり、最大の成就。どこぞの種族かも知れぬ貴様に、力を貸すわけがないだろう

！」

「ちよつと、そんな言い方ないでしょ?」

今度こそリーファが立ち上がって叫んだ。

リーファは生憎なことに、当事者ではない。世界樹の頂上で何が起きたのか、実際に見てきたわけでもなければ、アスナの口から簡単に説明されただけに過ぎない。

だが他人事では黙っていらなかった。彼女は知っている、憔悴しきったアスナの姿を、意識不明である仲間を救おうと足掻いていた兄の姿を、リーファは目に焼き付けている。だから黙ってはいられなかった。何も知らない癖に、必死になっている人間を笑うな、と彼女は本気で憤る。

それを冷静であつた幹部は制止した。

その口調は未だに冷静を保たれている。

「こちらの言い方が悪かったのは申し訳ない。しかし、彼らの言い分も理解して頂きたい」

「グランドクエストの完全制覇、ですか?」

「はい、そのただけに我々は団結してきました。中には現実リアルすらも犠牲にして、打ち込んできたプレイヤーもいます。たかがゲームですが、されどゲーム。我々は我々だけで、グランドクエストを制覇したい。理解は出来なと思いますかね」

「……いいえ、わかります」

そう理解、出来ていた。

アスナも半年前までは同じような状況であつた。生死をかけていないとは言え、彼らと同じようにゲームクリア、つまるところのソードアート・オンラインをクリアし、現実世界へ帰還を果たそうと必死になっていたのだ。

彼らとは立場が違う。アスナはクリアしなければいずれ死んでいたかも知れず、彼らはクリア出来なくとも死ぬことはない。それでも

彼らの今までの努力を否定することなど、アスナには出来なかった。

「いいや、わかる筈がないだろう！」

「コイツ、もしかしたらシルフ達を送り込んできた間者かもしれんぞ
!?!」

「そもそも、種族すらも不明などと怪しいものだ」

「コイツら、幽閉させたほうがいいだろう！」

今まで蓄積されていた幹部達の不平不満がここに来て爆発した。

その言葉は怒号のように、会議室を覆い尽くし、己の感情のまま勝手に主張を口にする。

思わずリーファは腰に差してあった片刃の片手剣に手をかけて、アスナも口を開きける。

しかし、その前に――。

「――やめておけ」

その声は会議室に響き渡った。

決して大きくない声なのにもかかわらず、声は確かに会議室にいる人間たちの耳に明瞭に響き渡った。

しん、と静まり返った会議室。

その眼は一人に――シルルドへと集まっていた。

「……何故ですか、シルルド」

幹部達を代表する形となつて、冷静であつた幹部が問いを投げる。

シルルドは態度を崩さない。腕を組み、取り乱すことなく事実だけを口にした。

「今、我々に手を出せば全面戦争は避けられんぞ」

「戦争とはシルフとのか？ たかがシルフ程度など、返り討ちにして

やるわ！」

「そうだな。シルフだけであれば、お前達の勝ち揺るがない。我々は蹂躪されるだけだ」

ここで初めて、冷静である幹部以外のサラマンダー達の顔が訝しむそれに変わる。

蹂躪されるとシグルドは確かに認めた。なのにも関わらず、余裕の態度を崩さない。慌てふためくか、目論見が外れたと口惜しげに顔を歪めてもいい筈だ。なのにシグルドに変化はない、それがどう言うわけなのか――。

「お前達は世界樹以外何も見えていない、それが最大最強勢力を誇るお前達の驕りだ」

「同盟、ですか……」

冷静であつた幹部の眩きを、シグルドは頷いて肯定すると。

「先日、ケットシーとシルフは同盟を組んだ。流石にサラマンダーといえど、二種族を同時に相手をするのは骨が折れるだろう？」

「えっ？ そんな話し、知らないわよ!？」

「……サクヤの命令で、レコンが動いていた。気付いてなかったのか？」

「……あー、確かに最近見てなかったなーレコンの姿」

あはは、と乾いた笑みを零しながらポリポリ頬を掻くりーファに対して、シグルドは呆れたようにため息を吐いた。

そんなシグルドの態度が癪に障ったのか、サラマンダーの幹部が立ち上がると、シグルドを指さして力いっぱい叫んだ。

「この裏切り者がっ！ 話しが違うではないか！ シグルド、貴様はサクヤを我々に差し出す筈だろ！ 我々を謀ったのか!？」

「…………え？」

リーファは眼を丸くして、シグルドを見た。

確かに彼は怪しかった。シルフ領から世界樹、そして円滑に会談の場を設けた彼の手腕は良すぎるモノだった。スパイである可能性があつたものの、領主であるサクヤを犠牲にするまでとは思つてもいなかった。

幹部からは怒声、リーファからは失望の眼を向けられ、それでもシグルドの態度は崩れなかった。

「この件が終われば、オレは追放され脱^{レネゲイド}領者に堕ちるだろう」

「ならば何故!？」

「権力にしがみつくなのが馬鹿らしくなってな。そちらに着けば楽なんだろう。だがそれよりも、キリト殿が“強さ”だけでどこまで飛べるのか見てみたくなった。その程度の理由だけに過ぎんよ」

そこまで言うと、シグルドは席を立ち上がった。

その眼は幹部達を睨みつけて。

「どうする？ オレ達に手を出せば全面戦争は避けられん。とはいつても、サラマンダー達が相手では勝ち目は薄い。それでもお前達の戦力くらいは削ぐことが出来るぞ？」

「そうなれば、グランドクエスト制覇は……」

「そう、遠退く。そうなれば出し抜かれるかもしれんな？ それがウンディーネなのか、ノームなのか、はたまたインプなのか知らんが、サラマンダーの戦力は大きく激減されることに変わりない」

「貴様の言い分はつまり……っ!」

「みなまで言わせるな、彼女に協力しろ。そうすれば戦争など——

「——待って下さい」

サラマンダー
火妖精族の幹部連中、そしてリーファやシグルドの視線が一斉に発
言者に向けられる。

それは今まで静観していた少女——アスナであった。
アスナはシグルドに向き直り、軽く頭を下げて、そして顔を上げた。

「ありがとう、シグルドさん。でも大丈夫です、そこまでしてもらおう必
要はありません」

そこでアスナは言葉を区切ると幹部達に視線を向けて、堂々とした
口調で続けた。

「貴方達の主張も最もです。わたしに協力出来ない理由もわかりまし
た。ただ一つだけ、約束して下さい」

「約束とは？」

「わたし達はこれから数日で、世界樹を制覇します」

その発言は突拍子もないものであった。

何一つ根拠もない自信であり、手段すらない筈だ。それを証拠に
リーファも、シグルドですら眼を丸くしてアスナを見ている。それは
明らかな驚愕、アスナが何を言っているのか理解が出来ない顔だ。

幹部の連中も口を開きかける。

何をバカな、と身を乗り出して否定しようとするも、冷静であった
幹部が片手で制するとアスナに問いを投げた。

「……どうやって、クリアすると？ 貴女は囚われていたと言いまし
た。それが事実なら、グランドクエストの難易度を知らない」
「わかりません」

アスナは即答する。

そしてそれから続く言葉には、迷いも疑問もなかった。

「でも、わたしの仲間は言いました。考えがあると、確かに言いました。わたしはそれを、信じるだけ」

「……っ！」

そこで漸く、リーファは理解した。

兄が、キリトがここまでアスナの護衛をしなかった理由を、リーファは理解した。

それは単純な話だった。キリトは信頼していたのだ、アスナのことを。自分が付いていかずとも、彼女であれば大丈夫であると信頼していた。故に、キリトはついていかなかった。

別にアスナがどうしてもよかったわけではない。大丈夫であると確信しているからこそ、キリトは自分が出ることをするために、自分達に離れたのだ。

信用ではなく信頼。お互いがお互いを尊重し、背中を預ける。

こんなもの、一朝一夕で身につくものではない。長い年月を重ねて、同じ戦場に出ていなければ育まらない絆がそこにあった。

これこそが、キリトの見つけたもの。

過酷なデスゲーム、闇の中で守ってきた唯一無二の光。

思わず、リーファは目を細める。

眩しい物を見るかのようにアスナを見た。アスナだけではないのだろう、少なくとも一人、あと一人救わねばならない絆が二人にはあるのだろう。だから二人は必死になっているのだから。

と、そこへ。

「面白〜」

一言だけ呟いて、一人の火妖精族サラマンダーが会議室へ足を踏み込ませた。それは大柄な男だった。

炎のような短髪を逆立たせて、重厚なる紅い鎧に身を包み、その背には大きな大剣が背負われている。

その男は猛禽類を彷彿とさせる眼で、リーファとシグルド、そして

アスナを睨みつけた。

リーファ達の背にはぞくり、と寒気が奔る。

正面から対峙したわけでもないのに、ただ睨みつけられただけなのに、歴戦の戦士が放つ威圧がリーファ達にのしかかっている。

平然としているのは幹部達と――。

「ほう?」

――アスナだけであつた。

彼女だけは真正面から、大柄の男と対峙しているのにも関わらず顔色を変えずに受け止めて、なおかつそのまま睨み返している。

珍しいモノを見た、と大柄の男の感心が一心にアスナに向けられた。

「俺を睨み返すとは、中々骨があるな」

「……貴方は?」

「俺はユージーンと言う。先程、邪魔はするな、と言ったな?」

言うやいなや大柄の男――ユージーンは背に手を回すと、巨大な両刃直剣を抜き放った。

その剣先はすでにアスナに向けられている。一押しでもすれば、アスナの身体は貫かれる。そんな距離であっても、彼女の眼はユージーンから逸れることはない。

毅然とした態度に、ユージーン的笑みはますます深まっていく。

その笑みは弱者をいたぶる嗜虐的な笑みではない。強き者を見つけた戦士特有の獰猛な笑みだ。

「俺達はサラマンダー、最強の種族だ。言うことを聞かせたくば、力を示せ。俺に勝てば、サラマンダーは一切の邪魔はしない」

「……わかりました、戦いましょう」

「ちよ、ちよつとアスナさん!」

ユージョンから放たれていた威圧が一瞬だけ緩まったのか、リーファはアスナに駆け寄った。

彼女は知っているのだ。ユージョンというプレイヤーがどれほど強いのか理解していた。

曰く、魔剣の担い手、曰く、ALO最強。恐らく、アルヴヘイム・オンラインで頂点に君臨していると言っても過言ではないプレイヤーがユージョンなのだ。

そんな怪物と戦ったら無事ではすまないだろう。何よりも、今のアスナは通常のプレイヤーのそれではない。ログアウトすらも出来ずに、体力ゲージが完全に削られて蘇生されるなど言い切れない。最悪、ナーヴギアに脳が焼かれて死ぬ可能性すらある。

だと言うのに。

「大丈夫よ、リーファちゃん」

駆け寄るリーファに笑みを零して。

「わたしは負けない、負けちゃいけない。今度こそ、〃彼〃の隣に立つ為にも立ち止まってはられないの」

その言葉には折れぬ意思が、絶対的な決意が滲ませられていた。

「無茶かもしれない、無謀かもしれない、超えられない壁かもしれない。でも〃彼〃は諦めなかった。いつも無茶なことをして、無謀なことをして、超えられない壁を壊してきた。だったらわたしも壁を超えろ。そして今度こそ——彼を守る強さを、手に入れる……！」

第14話 紅閃のアスナ

2024年8月17日 PM16:20

サラマンダー領 首都『ガタン』 中央広場

中央広場に配置された、とうの昔に朽ち果てた噴水跡地にて、その人垣は出来ていた。

円形に“ナニ”かを囲むように、事の成り行きをそれぞれの感情を持って見守っている。

ただ純粹な興味本位の者もいれば、今から始まる蹂躪に心を躍らせる者も存在する。ましてや、悲痛な面持ちで見守っているのは極少数と言いつけるだろう。

そう、大半の連中は期待している。圧倒的な暴力を、手も足も出ずに無残に斬られる光景を、最強の火妖精族とは誰なのか、その証明を求めている。

ここはサラマンダー領。

ならば彼らが求めている勝利が誰に向けられたものなのか一目瞭然である。

曰く『將軍』。曰く『魔剣の担い手』。曰く『ALO最強の男』。彼には様々な異名があり、恐れられていた。

その実力も決してハツタリなどではない。猛禽類を彷彿とさせる鋭い眼光、屈強なる体躯を持つ鍛え抜かれた身体、更に言えば何者も威圧させる強者たりえる素質。

最強といえども大したことがない。彼と対峙したことがない者は最初はそう言う。どいつもこいつも威勢は良く、いざ彼と対峙したもののなら震え上がるばかりだ。

彼と打ち合えば五合と持つ者はいなかった。

そして誰もが認める。なるほど、彼が最強である、と。口を揃えて断言するのだ。

火妖精族のユージーン、彼の者こそが最強であると、誰もが口を揃えて言う。

ユージーンは妥協しなかった。

それこそが彼の強さにもなったのだろう。プレイヤースキルを鍛えるのは当たり前として、装備にも彼は全力を注いだ。防具、アクセサリー、消費アイテムから何もかもだ。

極めつけは彼の武器、獲物である愛剣『グラム』である。

その剣は両手剣に属される。

しかしその剣脊、剣刃、剣身は両手剣のそれではない。言ってしまうえば両手剣ではなく、それは大剣と呼ぶに相応しいほどの巨大で、強大な剣であった。自在に操るには、並外れた膂力を持つていなければ振り回すことは勿論、装備すら出来ないだろうと思わせる。

それだけではない。ユージーンが持つグラムは魔剣と称されており、中でも伝説級武器レジェンダリーウェポンの枠組みに入る数少ない武器だ。振るえば何もかもを通り抜けて、対象を傷つける。対人戦にはこれほど脅威な武器は存在しないだろう。

魔剣と言われるだけあってか、彼がグラムを手にしてからというものの一時期は狙われるようになった。

何せ手に入れて装備すれば単純な戦力アップに繋がり、売買するものなら高値で売り払える。狙われるのも無理はないだろう。

だがそれも一時期なものだ。

手に入れているプレイヤーがユージーンであるとかわかるや否や、彼を狙う輩は徐々にいなくなっていった。彼に歯向かうのは数少ない命知らずばかりだが、最近になってまた数が減り、今となってはユージーンを狙う者は存在しない。

既にユージーンの名はアルヴ Heim・オンラインでは広まっており、彼と戦う者は存在しないだろう。モンスターを狩り、クエストをこなし、またモンスターを狩る。特に何かがあるわけもない毎日を、ユージーンは過ごしていた。

単純な話、彼は退屈していたのだ。

彼の兄であり領主でもあるモーターティマーはグランドクエスト制覇を最終目標としている。だがユージーンには正直な話、そんなもの興味がなかった。

ユージーンの目標は己の存在の証明、強者との血湧き肉躍る闘争だ。自分に挑む敵を斬り、誰も彼もを粉碎し、己の力を刻み込む。だからこそ、彼はPKが推奨されているアルヴ Heim・オンラインに足を踏み込んだ。

なのにも関わらず、最近では己に挑む輩は現れない。

むしろ自分が誰なのかもわからない者は火妖精族サラマンダーだからという理由だけで、戦いを避ける始末。

ユージーンが求めていたのはこんなことではなかった。仲間達は攻略しやすくなった、とほくそ笑んでいたがユージーンは違った。冗談ではない、と。自分が求めていたモノはこんな虚しいものではなかった。もつと、もつと、瀬戸際の闘争を、一瞬の油断が命取りになる戦いを、望んでいた。それだけなのに、どうして——。そんな時だった。

『でも、わたしの仲間は言いました。考えがあると、確かに言いました。わたしはそれを、信じるだけ』

会議室で声が聞こえた。

聞こえによつては他力本願。とてもではないが、闘争を求めるユージーンとは相容れない声が聞こえた。

しかし心が惹かれるものを感じ、一度だけ顔を見ておこうと立ち寄った。

それが中々どうして。

——何だ、ヤツは。

——貧相な装備だ。

——俺に挑んだ誰よりも弱者であるはずなのに。

——誰よりもヤツは……強いッ！

始めた感じた感覚だった。

弱い筈なのに強い、弱者である筈なのに強者。相反するモノが、発

言した者に内包している。

故に、ユージーンは人知れずに言葉を漏らした。

それは彼自信が意図せずに、勝手に無意識に呟いたものだった。

——面白い、と彼は笑みを零す。奴と戦ったら、他の連中とは違う何かを持つている者と戦えば、退屈な日々を抜け出せるかもしれない。そんな期待を胸に、ユージーンはヤツと詳した彼女に刃を向けた。

そうして、彼女とユージーンは刃を交わった。

サラマンダー火妖精族の領地でも傷をつけられるシステム——デュエル決闘を用いて、ユージーンたちは雌雄を決する事にする。

ルールは『完全決着モード』。それは文字通り、HPゲージを全損させるか、もしくは相手が降参するまで決着がつかないモード。一撃入れば決着するなど生ぬるい、半減削れば勝敗が決するなど味気ない。だからこそその完全決着であった。

しかしユージーンの様子は晴れない。

グラムのエクストラ効果を切り、様子見で一合剣を交わった。所詮は様子見、ユージーンは半分程度の力で剣を真横に薙ぎ払っただけに過ぎない。なのにも関わらず、彼女はユージーンの剣を受けると身体の軸が大きく揺れてたたらを踏みギリギリで立つ。

まさか、と二合目は振り下ろし。やはりと確信を得るために三合目は振り上げる。全力ではなく、一合目と同じく半分程度の力でだ。それだけで確信した。

——この女は、やはり弱い、と。

プレイヤースキルなどの問題ではない。根本的な問題、シンプルに弱いのだ。

身体能力、この世界ではステータスと呼ばれる数値が、彼女は低い。低すぎるほど低く、最弱と言える部類だろう。

現に、彼女は一合目の薙いだ剣を受け止めるのやっつとで、二合目の振り下ろしに片膝を折れ、振り上げた三合目で足が宙を浮き地面に転

がる。瞬間、上がる歓声がユージーンを讃えた。

やはり将軍は最強だ、火妖精族随一の戦士、ALO最強の男、好き勝手に見物に集まった火妖精族のプレイヤー達は騒ぐ。

何をバカな、と思わずユージーンは苛立ち気に舌打ちをする。

こんなもの、彼の中ではただの弱者を甚振るだけの行為に過ぎない。女子供を罵って歓声を上げるなど、戯言にも程が有るものだった。

——もういいだろう。

——俺が勝手に期待した

——その結果、ヤツを道化にしてしまった、俺の落ち度だ。

——ならば一思いに、斬るとしよう。

ユージーンの様子は影に落ちていた。

目に浮かぶのは失望ではなく落胆。そして弱者を無駄に傷つけてしまった、自身に対する自己嫌悪が見え隠れしていた。

図らずとも、彼女を道化扱いにしてしまった。

自分の過ちは自分で片を付ける。そうして、ユージーンはエクストラ効果を発動させる。受けようとしても物体を非実体化させ、対象を必ず切り捨てる魔剣グラムのエクストラ効果『エセリアルシフト』を、ユージーンは発動させた。

これで終わる。

ユージーンは目にも止まらぬ速度で彼女に近付き、両手剣を真横に薙いだ。

それで終わりだ。細剣で受けようものなら、彼女の上半身と下半身は真っ二つに分かれ、この公開処刑は幕を閉じる。終わる筈——

「なっ——!?」

——だった。

なんと彼女は剣で受けることをせずに、右足を思いつきり振り上げる。ユージーンの片手に持つグラムの刃ではなく柄を蹴り上げ、強引に軌道をずらした。

彼女の行動はそれでは終わらない。その反動で、後方へとバク転しながら下がる。

あまりの身のこなし。

軽業師のような身体捌きに、ユージーンを応援していた^{サラマンダー}火妖精族すらも感嘆の声を漏らしていた。

それはユージーンも同様である。

まさかこんな方法で、強引とも呼べるやり方で、剣すらも使わずに防がれるとは思わなかった。彼自身、必殺を確信した一撃を、彼女は容易く防いでみせた。

いいや、よく見れば容易くではない。

「……ツ……フウ……ツ！」

油断なく、警戒心を顕にしながら、細剣を構える。

汗が頬を伝い、肩で息をする彼女を見て、どうして容易くと言えるだろうか。勝ち目がないからこそ可能性を必死に模索し、負けたくないからこそ最大限の努力を重ねる。容易くなんてとんでもない、道化なんてとんでもない、彼女は必死なのだ。必死でユージーンと対峙している。

それからのユージーンの行動は速かった。

再び、彼女に向かって勢いよく推進すると、両手剣を自在に操り右に左に、上へ下へ、と刃を容赦なく彼女に向ける。

だがそれを、紙一重で皮一枚で、彼女は回避した。転がるように、蹴り上げて、細剣でユージーンの手を突き強引に軌道をずらして、必死に致命傷を避ける。

それでも、彼女の身体は傷ついていった。徐々に、HPゲージが削られていく。対して、ユージーンは無傷に近い。力量はともかく、装備、何よりもステータスが大きさが差がある。

ア리가ライオンに挑んでいるものだ。何匹も徒党を組んで群がったところで、寧猛な肉食獣には勝てるわけがない。そんな無謀で無茶な戦いを、彼女は行っている。

「……大した腕だ」

「……えっ？」

距離を開けて、ユージーンが剣を下ろし思わず称賛する。

肩で息をする彼女は聞き返すも、その眼は過敏にユージーンの一足に注目していた。

「何故俺の剣を、グラムを受けなかった？」

「……何か嫌な感じがしたので」

「嫌な感じ、つまりは勘ということか。なるほど、貴様の戦闘経験は遥かに俺を凌駕しているらしい」

しかし、と言葉を区切り両手剣の剣先を彼女に向ける。

「貴様に勝ち目はない。これまでの一撃で、わかっただろう。貴様の攻撃では、俺に致命打を与えることはできんぞ」

「……つまり貴方は何を言いたいのか？」

彼は躊躇いなどしない。

少しの希望を念入りに摘み取り、ただの少しの期待すらも否定するように、厳格な声で事実だけを口にした。

「諦めろ。テイターニアと言ったか？ 貴様では、俺に敵うわけがな

い」

「……………」

その言葉は重く、そして何よりも心に訴えるものであった。

充分やった、戦えない身でありながら奮戦した。現実世界で策を講じている仲間も、非難することはないだろう。むしろ良く頑張ったと、労ってくれるはずだ。

何よりもいま行っているモノは、完全決着モード。つまりは降参しない限り、HPゲージが全損しなければ決着がつかない。普通のプレイヤーであれば、全損したあとは蘇生が待っているのだろう。

しかし彼女は蘇生されるとは限らない。ナーヴギアを頭に装着した彼女にとって、HPゲージの全損は何が何でも避けねばならないことだ。どうなるかわからず、最悪——死ぬかもしれない。

ならばここで降参するのは仕方ないことだ。誰も彼女を責めはしない、むしろそうしなければならぬ。

だが彼女は顔を伏したまま——。

「……教えて下さい」

「何だ？」

「どうして、わたしをテイターニアと呼んだんですか？」

「決闘する際に、プレイヤーの名前を見たからだ。貴様の名はテイターニアじゃないのか？」

彼女の心は決まっていた。むしろ問答の余地などどこにもない。最初から、彼女はこうするか、何をするかなど決まっている。心が命じたことは止められない、彼女は自身に何を命じたのかなど——

「二人の男の子を見てきました。その子は、誰よりも無茶をして、自分の命すらも投げ出して、戦いに身を投じてきました」

「……それは、つまり」

「ええ、わたしは諦めない。その子なら、彼なら、あの人なら、絶対に諦めない。剣を握って前を向いて、敵を睨みつけている筈だから——

——！」

顔を上げて、再びユージーンを視界に収めた。

腰を落とし臨戦態勢に、彼女は入った。敗北するつもりもない、彼女は本気で——勝つつもりだ。

「——」

彼女に向けていた剣先を下ろし、ユージーンは両手で構え直す。

ユージーンは無言だった。応じないのではなく、応じる必要がない。彼女の心は決まっているのだから、これ以上の問答など不必要である。これ以上の無駄口は彼女の礼に反するというもの、

だからこそ、ユージーンも無言で応じた。彼女の決意は揺るがずに、ユージーンも心意気を買う。その結果、お互いに口を開かない。ただそれだけのことであった。

魔剣グラムの剣先が揺れた。

今まで発動していたエクストラ効果を解除したのだ。眼の前にいる彼女はエクストラ効果に過敏に反応する、それをユージーンは逆手に取る。

そうして——。

「しまっ——っ！」

一瞬の隙が出来る——。

それは文字通り、瞬く程度のモノであった。その程度の気の緩み、だが相手はALLO最強の男。たかが一瞬が、致命的な結果へと繋がる。

低い姿勢から滑るように、最強は彼女へと襲いかかる。

迎撃な不可能、回避するにしても遅すぎる。ならば彼女の行動といえば——。

「……っ！」

——後退であった。

なるべく衝撃を分散するように、致命傷を避けるためだけの延命処置。

同時に——。

「ハアアアア!!」

裂帛な気合とともに、ユージョンから振り下ろされる一撃。

それは何よりも、今までで一番、苛烈な一撃を、彼女へ叩き込んだ。

「……ッ！」

「待て」

吹き飛ばされた彼女を見て、今まで辛うじて見守ってきた風妖精族のリーファの片手を掴み、同種族のシグルドが止めた。

本当にいつでも飛び出しかねない様子であった。現に、リーファは身体を震わせている。今まで黙ってみていた自分に怒り、最悪を危惧しながら、これ以上我慢が出来ないと言わんばかりに、リーファは身を乗り出していた。

思わずリーファは掴まれていた片手を振り払う。

それは乱暴なもので、力任せで、シグルドの片手の拘束などいとも容易く振り払うなど充分なモノだったが、再びシグルドはリーファの腕を強引に掴んだ。

「離して！ これ以上、見ていられないでしょ!？」

「だが彼女はお前に大丈夫だと言った筈だ。それを無視するのか？」

「モノには限度があるでしょ!？ これ以上やると——つ！」

もはや問答する時間すら惜しいと言わんばかりに、リーファは飛び出そうとする。

リーファは風妖精族の中でも腕が立つ部類である。むしろ種族の間だけで考えれば、三本の指に入るほどの力量である。そんな彼女はここまで、狼狽えるのだ。先程の一撃は、そこまでのものであることがわかる。

致命傷。後ろに下がり、衝撃を逃したところで関係がない一撃を、彼女はまともに受けてしまった。

HPゲージは大きく削られ、最悪もう全損している可能性すらある。

戦いにすらならないことなど、最初からわかっていたのに止められなかった。そんな自分に、リーファは嫌気が差す。

止められたはずだ、必死に、もっと必死になっていれば、無謀な戦いに赴く彼女を止めた筈だ。なのに——。

「自己嫌悪になるのはお前の自由だ。だが待て、戦いは終わっていない」

「何を言っているのよあんだ！ 終わりよ、あんだも見たでしょ!？」

「ああ、見ていた。そして、今もな」

「何を——」

振り向いてシグルドはリーファではなく、前方へと向いていた。その視線を、追うと、そこには——。

「そうか、これがキリト殿の信じた彼女か。なるほどこれは……」

シグルドの感嘆とした声に答えられない。
リーファが見たモノ。それは――。

視界がぼやける。

いいや、視界だけではない。今は既に朽ちた噴水に激突した衝撃で、満足に舗装されていない道が砕け、噴水だったものは崩れ、辺りに戦塵が舞っていた。

痛みは、ない。

ぼんやりと、意識が遠退くのを、必死に彼女は繋ぎ止める。

ここで目を閉じてしまえば今度こそ、敗北が決定される。これ以上何が出来るものではないことは、彼女自身が理解している。だがそれでも、何もしないで負けることは許されない。

「う……」

何はともあれ、自分はまだ負けたわけではない。

五体は満足であるし、ぼやけている視界がその証拠だ。HPゲージも危険域、つまりはレッドゾーンとなり赤色に変色している。

ならばまだ戦える。

両の足で立ち上がれ、その手に剣を握れ、その双眸に敵対者を納めろ。

そうでもしなければ、自分は負けるのだ。負けないために、今一度「彼」の隣に立つために、今度こそ「彼」という存在を守る為に――

——頑張るのは結構だが、もういいだろう——
「えっ……っ？」

声のした方へ、前方へと彼女は見やる。そこには、見慣れた背中があった。

黒い長袖のインナーの上から胸部を覆う白色の鎧。手首には手甲が装備されており、堅実さよりも身軽さを追求したようでもある。黒色のズボン、その腰からは濃い蒼色の布が垂れている。そして腰のベルトには——紅色の宝石の付いたペンダントがぶら下がっていた。

面倒臭そうに、苛立ちを募らせるように、乱暴に両手剣——ア
クセル・ワールドをその肩で担いでいる。

いつだって「彼」はその背を彼女に見せてきた。

泣きそうになっているときに、近所の子供から守るときも、デスゲームに巻き込まれた時でさえ、その背を彼女に見せていた。

まるでそれは、守るように。彼女へと刃が向けられないように、いつだって、どんなときだって、彼自身が傷つこうとも引くことなどしなかった。いつも守られてきた背中が——彼女の前に立ちふさがっていた。

——オマエは十分やったろうが。もういいよ、下がってろ——

——あとはオレが、何とかしてやる——

——敵を指差せ、オレがそれを斬る——

——指示を寄越せ、オレが実行する——

——オマエが剣を握る必要なんざないんだ——

ぶつきら棒でありながら、どこかその言葉には温かい。「彼」は変わらなかい。自分は二の次で、常に物事を考えている。

ここで領けば、楽になれるのだろう。ここで「彼」に甘えてしまえ

ば、今までどおり、彼は守ってくれるのだろう。ここで、微睡みに、身を任せて、しまえば――。

「ありがとう」

――…頑固なヤツだ――

「きみには負けるわよ」

クスクス、と笑みを零して震える足で立ち上がる。

領けない、ここで領いてしまえば、それこそ致命的な負けだ。彼女としての大事なモノが、譲れない信念が、今度こそ粉々に負けて決定的な敗北へと繋がるのだから。

彼は呆れる口調で言った。

振り向かず、事実だけを口にする。

――負けるぜ、オマエ――

「わかってます」

――勝ち目なんざねえ――

「わかってる」

――それでも諦めねえのかよ？――

「当たり前でしょ」

そこまで言うと、彼女は歩みを進めた。

彼の背中を追い抜き、彼よりも前に立ち、振り向かず、彼は背中を語る。

「わたしは、きみの幼馴染よ？ 諦めが悪いに決まってるじゃない」

――ハッ、そうかよ――

鼻で彼は笑う。

遠退く彼女の背中を見ながら、後押しするように言葉を投げる。

—— 思い出せ、オマエの全盛期の姿を——

「うん」

—— オマエは誰だ？ ティーターニアって囚われるだけの女か？——

「違う」

—— オレの幼馴染ってだけの女か？——

「そうだけど、違う」

—— それじゃ、オマエは誰だ？ 何者で、今まで何をしてきたヤツだ？——

—— それを思い出せ。戦いなんざ気合が最後に物を言う——

—— 気張れよ団長。オレもあのクソには負けねえ。だからオマエも——

「負けんな、明日奈——」

「—— はいっ！」

戦塵が晴れる。

ユージンとしては、どちらでも構わなかった。倒れて気絶しているのが、先程の一撃でHPゲージが全損しているのが、はたまたまだ心が折れずに向かってこようが、どちらでもよかった。

やることは変わらない。

立ち上がってくるのなら全力で、今度こそ切り捨てるのみであるのだ——。

「な、に——？」

しかし予想外なことが起きた。

ユージンだけではない。周囲に集っていた火妖精族サラマンダーも、リーファやシングルドも、戸惑いが隠せなかった。

現れたのは彼女、今までユージョンと戦ってきた彼女に他なら
ない。

しかし――。

「わたしは、囚テイわれるだけターの存在ニでも、守明られるだけ日の存在奈でもない――

――」

姿が違う。

先程の装備、姿から何もかもが違う。

紅色のレザー・チェニックの上から、軽量の鋼のブレストプレート
を装備している。その下半身はワインレッドのスカートを身に着け
て、膝までのブーツを履いていた。そしてフード付きのケープを羽
織っており、その首からは蒼色の宝石がついたペンダントがぶら下
がっていた。

極めつけはその背中だ。アルヴヘイム・オンラインのプレイヤーが
あるはずの翅が存在していない。幻想的な妖精とは違う、まるで今の
彼女は――人間そのものだ。

そして彼女は、腰に挿してある細剣を抜き放つ。

先程の振るっていたモノとは違う、かつて手にしていた白色のレイ
ピア――ランベントライトを手にし、その剣先をユージョンに向
ける

「わたしは、アスナ。アインクラッド攻略組最高ギルドアクセルワールド加速世界団長、
『紅閃』のアスナよ――！」

ここに、ここにきて、『紅閃』が復活を果たす――。

第15話 その紅閃は彗星の如く

——あれは、どれぐらい前のことだったか。

わたし達と「彼」が合流してから、一週間は経った頃だったと思う。

「彼」が無茶をしないように、一人で勝手に進ませないように、わたしやユウキ、それにストレアとローテーションしながら「彼」を起こしていた。「彼」にとっては迷惑だったのかもしれない。何せ笑顔ではなく、うんざりした顔で「またか」と言いたげに億劫そうに、「彼」は起床するのだから。わたしだけでなく、ユウキやストレアに対してもそうだというのだから、本当に嫌なのだろう。

でもそれだけわたし達は必死だった。目を離せば「彼」は必ず無茶をする。誰にも真意を伝えることもなく、ただ真っ直ぐに、それこそ最短距離で進み続ける。自分が傷つこうとも止まることなく、息を吸うように足を一步一步着実で確実に踏み出していく。

キリトくんはそれをアホだと言う、リズはそれをバカねと呆れ、ドリューさんはそう言うやつだと諦めていた。

確かに三人の言うとおりなのかもしれない。人によっては、「彼」の行動がいたく愚かしい行為だと見えるのかもしれない。

でもわたしは違った。

それが「彼」であり、アレが「彼」であるのだと、自然と受け入れていた。

それでもしなければ、「彼」は生きていけないのだと思った。少しでも、誰よりも、何よりも、自分に罰しないと生きてはいけない。

自分が傷つくのは構わない、でも他人が傷つくのを黙っては見ていられない。我慢が出来ない。だからこそ彼は考えるよりも先に動いてしまう。その結果が自分を傷つけてしまうものだったとしても、構わずに行動してしまう。

「彼」は以前に言ったことがある。

自分は他人の為に動いているわけではない、自分の為に動き剣を振るっているだけに過ぎないのだ、と。

それは本当なのだろう。

他人の為に動くという行為は、立派な理由だ。でも「彼」にとってそれは、他人を理由に使い、重荷を背負わせているだけと考えを帰結させるモノであった。

だからこそ「彼」は他人を理由に使わない。いつだって「彼」は言っていた。自分がそうしたかった、だから自分の為に心の命ずるままに動いた、それだけに過ぎないのだと。

言葉にしないが、「彼」はそんな自分を捻くれ者であると認識しているのかもしれない。

でも、わたしには違って見える。わたしはそれが「彼」の強さであると、見えてしまう。

きっと「彼」は味方などいらすとも、一人であろうとも何かを達成してしまう。そんな強さを持っている。この世で味方一人いなくとも、この世すべてを敵に回そうとも、「彼」は進み続ける。

そんなことが出来る人は、限られている。少なくとも、わたしには出来そうにない。しかし、近づかなければならない。少しでも「彼」の強さに近づかなければならない。守られるだけの存在ではなく、対等な存在となるためにも、わたしは「彼」に――。

『――オマエさ、ナニを見てやがんだ？』

『へ――？』

そしてわたしはジツと見ていた。

夜天の空のもと、星が瞬き、太陽が沈んだ、第十八層を一望できる丘で、一心不乱に素振りをしている彼の背中を、わたしはただ何をするでもなく見ていた。

傍から見たら不審者極まりない。

「彼」の一手一足を微動だにせずに、わたしは観察していたのだ。それが今になって、恥ずかしくなった。

頬の温度が急速に高まっていくのを感じる。きっと今のわたしは

頬を赤色に染めていることだろう。

“彼”も不快に思っているのか、素振りを一旦止めて、訝しむ視線でわたしを見つめていた。

“君に少しでも近付きたかった”。

そう言えたらどれだけ楽だろうか。長年、“彼”と付き合いがあるというものの、面と向かって言うのは少しだけ恥ずかしい。これがユウキやストレアならば、臆面もなく言えるのだろうが、わたしには無理だ。長年の付き合いがあっても、いいや逆に長年付の付き合いだからこそ、言えないことがある。自然と型にハマっているわたし達では出来ない事がある。

それが今。

少しでも近付きたい、なんて改めて言うのと恥ずかしいものがある。だからわたしは笑って誤魔化して。

『——そう言えばさ、君って強いよね!』

——話題を変えることにした。

『……急に何を言ってるのオマエ?』

『……ふと、思いました』

『冗談も休み休み言え。オレのどこが強いってんだ』

肩を大きく竦めて、呆れるようにため息を吐いた。

どうやら“彼”は本気でそう言っているようだ。同時に生まれる疑問がある。どうして“彼”は謙遜でもなく、本気で言っているのか。

『強いでしょう? 一人でフロアボス攻略してたんだから。そう一人で、君一人で……ッ!』

『……一人で無茶して悪かった。だから自分で言って、自分でキレるのはやめろよ』

『別に、怒って、ないわよ?』
『笑顔、引きつってただけど?』

この話題はわたしにとっても、
“彼”にとっても鬼門であるよう
だ。

“彼”は話を戻すぞ、と静かに言う
と苦々しい表情で、悔しそうに
告げた。

『オレは強くななかねえぞ。ガチで戦えばキリトには負けるし、ユウ
キにも負ける、ストレアはわからん、ムカつくけどオマエにも負ける』

裏方のリズベットには勝てるけどな、
と言う “彼” がますます不思議に思う。

“彼”は強い。近くで見えてきたこそ断言できるし、何よりも結果がそれを証明している。フロアボスを単騎で幾度も攻略してきた実績が、それを物語っている。

『わたしは君には勝てないと思うけど……?』

『何を言ってるやがる。オマエの突きの速度に勝てるヤツなんざいねえ
だろ。対してオレの剣の腕は二流。二流が一流に勝てる道理なんざ
あるわけねえだろ』

『わ、わたしの剣って、そんなに速い?』

『強みを自覚しろよ。オマエの一番の武器は斬ることじゃねえ、突きの速度だ。型にハマっちゃまえば、ユウキは無理でも、キリトに勝てる
くらいの代物だぞ?』

『……』

嬉しかった。

“彼”の言葉が何よりも、嬉しかった。認めてくれる言葉が、わたしを認めてくれる評価が、何よりも嬉しいものだった。

だがそれでも――。

『ありがとう。でもわたし、思うんだ。自分はまだまだ弱い奴だつて』
『……もう一度言うけどよ、オマエは自覚しろ』
『え?』

それはどう言う意味なのか。

聞こうとする前に、
「彼」はわたしに近付いて軽く頭を小突いた。
出来の悪い生徒に教える先生のように、口元を緩めて呆れた表情で続けて言った。

『前にも言ったが、オレは何度もオマエに助けられてる。オレが汚い言葉を吐こうとも、オマエは諦めずにオレの傍に居てくれたんだ。オレは「間違つた力」、オマエは「正しい力」を確かに持っている』
『正しい、力……?』

『ああ。光、って言ってもいい。オマエには、オレにはない力を持っている。それを自覚しろ。辛い時、挫けそうになった時、オレの言葉を思い出せ』

そう言うと「彼」——
優希くんは口元を僅かに緩めて笑みを零した。

いつも苛立っている優希くんには珍しい、他人が見てもそれが「笑顔」であることがわからないほどの希薄な笑み。

『オマエは弱くない。オマエは——
——強い』

.....
.....
.....

2024年8月17日 PM16:30

サラマンダー領 首都『ガタン』 中央広場

疾、という突きが空を裂く音が聞こえて。
遅、という悔しそうな舌打ちが聞こえた。

その速度は明らかに己を凌駕していることを、ユージーンは自覚する。

先程まで脆弱だった女が、自分の猛撃を辛うじて防いでいた弱かった女が、今や自分を圧倒していると言う事実を、ユージーンは認識した。

舐めてなどいられない、侮ることなど愚の骨頂、下に見るなどありえない。

最早、彼女の実力は、自分と――。

「やあアアアッ！」

――遜色などないのだから。

裂帛の籠もった気合と放たれる突きは、正に神速の域にまで達している。

ユージーンと対峙している彼女――紅閃のアスナと名乗った彼女の攻め方は単純なものだった。

真正面から、搦め手など使わずに、堂々と正面からユージーンと斬り合っている。単純であるのだから対処の仕様もある、と高を括っていた。しかしそれは大きな間違いである。単純だからこそ、彼女の攻め手の型は完成しているのだ。

眼にも止まらぬ突き。

幾千、幾万、と繰り返した突きに迷いなどない。避けることなど出
来ず、防ぐだけで精一杯。

鋭く、深く、必殺の速度で以て、ユージーンの身体を抉っていく。

「舐め、るなアアア!!」

それでも反撃するのは、最強としての意地か。

被弾覚悟で両手剣を横に薙いだユージーンの一撃に、アスナは紙一重で避ける。

後ろに大きく身体を反らし、そのままの勢いで二転三転とバク転をしながら後退する様は、軽業師のようで軽やかなモノだった。

余裕、というわけではない。

アスナも今の一撃は想定外だったのか、冷ややかに汗を流していた。

それでも物怖じせず、真っ直ぐに視線を逸らさずに、意識をユージーンに向ける。

——なんだ、コイツは……?」

——どうしてここまで、食い下がってくる……?」

プレイヤースキルは互角、恐らく身体能力も互角なのだろう。

しかし体力だけは違う。ユージーンはまだまだ余力があるのに対して、アスナのHPゲージは危険域に達している。一撃でも与えられれば、ゲームオーバーとなる。それは紛れもない敗北に繋がっているのだ。

だと言うのに、彼女は恐れない。ユージーンよりも疾く、何よりも速く攻める。守っても勝ち目はないのなら、攻めなければ勝てないというのなら攻める。まるでそれはいつも見てきた「彼」のようでもあった。

しかしユージーンは知らない。

どんな想いで、どんな真意で、彼女が手にとっているのかユージーンは知らない。

だからこそ困惑する。鬼気迫る様子に、生きるか死ぬか余裕のないアスナの様子に、ユージーンは飲まれつつあった。

それこそが、致命的となる。

プレイヤースキル、身体能力、両者の実力が拮抗しているのなら、決め手となる要素は一つしかない。

それこそが絶対に負けないという意地。心の強さ、と言っても過言ではない。長く争っていけば浮き彫りになってくる第三の要素。

困惑するユーザーンに対して、アスナには迷いなどなかった。

技の精度はますます研ぎ澄まされていき、鉄の島——アインクラッドに居た頃よりもその練度は増していく。

アスナは加速する。

守りに入ったユーザーンから行動することはない。ならば全て、アスナのタイミングで攻防が始まる。

「シツ——！」

神速を伴った速度で放たれる突きを、辛うじてユーザーンは魔剣グラムの剣脊で受け止めた。

しかし一撃では終わらない。その上から四撃——ソードスキル『カドラプル・ペイン』を横した連撃を加えた。

真正面から受け止めた連撃に、衝撃を受け流せるわけもなく。たたらを踏んでユーザーンが後退したところに、彼女の斬り上げが迫る。

重厚な鎧に守られていた胸部が裂け、紅色の斬傷となり血液のような斑点が流れた。

斬られた、という不快感がユーザーンを襲う。後退しなければならい、という生存本能が語りかけるも、それを戦士として本能を用いて押さえつける。ここで下がってはならない、下がれば最後決定的な敗北に繋がることをユーザーンは理解していた。

故に上段で構えたグラムを——。

「ドリャアアア！」

——全力で振り下ろす。

しかし予期していたのか、アスナは全力のそれを皮一枚で避けて、踏み込んできたところを顔面掛けて蹴り上げた。

頭を、顔を、首を、蹴り上げられたユージーンの巨大な体躯が仰け反った。

一瞬、何をされたのかわからなかった。しかし直ぐに、蹴られたことを自覚すると、仰け反っていた身体を急停止させて、体勢を立て直し、地面を強く蹴って大きく後退する。

肩で息をする。

それは相手も同じであった。対峙している女も、息も絶え絶えであり、余力もない。一撃でもまともに喰らえば負ける、という現状が後押ししているせいもあってか顔色も優れていない。

だと言うのに、攻めきれない。守るだけで精一杯と言う事実。たった一撃、それだけのことなのに、勝てないという状況。

翅を使い、空から攻めると言う選択肢は既になく、魔法を用いることも頭に入れていなかった。

真正面から来るのであれば真正面から、搦め手を使わないのなら己も使わない。それこそが最強としての矜持、『將軍』と呼ばれた彼の誇りでもあるのだ。

「何故だ」

「……」

思わず言葉に出た疑問。

対峙しているアスナが応じないのは、そんな余裕もない故だ。だからこそ疑問が加速する。

「何故だ。何故、俺は貴様を倒しきれない。何故、俺は貴様に圧倒される……！」

答えなど返ってこない。

わかりきっていたことであるが、ユージーンは口にせずにはいられ

なかった。

だが――。

「――ええ、貴方は確かに強いわ」

答えは、返ってきた。

口にした本人であるユージーンは目を見開く。応じてくるとは思わなかった。

だが彼女は応じた。余裕が無いくせに、肩で息をして、ギリギリの状態のくせに、律儀にユージーンの言葉に返す。

「でも負けられない、負けてなんていられない。わたしは知っている、自分よりも強い相手に対して諦めなかった“彼”を。絶対に引かなかった“彼”の姿を。敵に背を向けなかった彼の背をわたしはずっと見ていた――！」

そう言うと、アスナは身を低く構える。

低く、更に低く、尚低く。片手を地面に付いて、片手を細剣を持つ。その姿はまるで、クラウチングスタートのようでもある。引くことを拒否するかのような、攻撃的な構え。

何をする気なのか、と知覚される前に、アスナはその状態のまま地を思いつき蹴り上げる。右手に持つ細剣を腰溜めに構えて、全力でユージーンと開いていた距離約50メートルを走破する。

不味い、とユージーンはグラムを構えて剣脊受け止めようとするも、それは遅かった。

充分に速度が乗ったアスナは二度地面を蹴って、更に速度を上げていく。

「――負けない」

更に速度を上げる。

もつと、もつと、もつと——。

勝て、と己の内側にいる「彼」が叫ぶ。

勝つ、と己自身が吠え立てる。

不利であろうが関係ない、勝ち目など知ったことか。勝つと決めて、並び立つと告げ、今度は自分が守ると定めたのなら何が何でも勝て。

「——絶対に負けない」

絶対的な加速するアスナに、反応できる人間はいない。

前傾姿勢で細剣を突き出し、ユージーンの身体に細剣が突き刺さり、そのままの勢いで推進していく。

「——貴方を倒して、わたしは「彼」に追いつく。守られるだけの女じゃない、今度こそ「彼」を守る女になる。だから——！」

それは紅色の閃光を伴った彗星だ。

紅色の光の尾を引きながら、驚異的な速度と殺人的な速度を以て、敵対者に向かって突進する。

それこそが細剣最上位剣技、ソードスキル『フラッシング・ペネトレイター』。突きこそがオマエの強みだ、と「彼」は言った。だから彼女は自覚した、自覚したが故の決着でもあった——。

辺りが静まり返る。

無理もない。今まで圧倒していたにもかかわらず、姿形を変えたと

思いきや、最強に打ち勝ってしまったのだから。

そして、次第に周囲がザワつき始める。

既に限界なのか、両手両膝を地面に付き、呼吸が荒いアスナに^{サラマンダー}火妖精族の意識が集中していく。

もしかしたら、暴動が起きるかもしれない。

何せ、今のアスナの姿は人間のそれだ。とてもアルヴヘイム・オンラインのプレイヤーとは思えない外見をしており、何よりもその背には妖精族特有の翅がない。

となれば、おかしな話だ。正規のAvatarではない彼女が何者なのか、安易に連想出来てしまうというもの。それこそが、大半のゲーマーが嫌うチート行為をしている人間——チーターと称される存在。

もちろん、アスナがチート行為などしたことがない。

この姿も全盛期の姿を強く思った結果であり、心意による力のものである。しかし大半のプレイヤーは、その力の正体を知るわけがない。見ようによつては、チート行為であると思われるでも仕方ない。

見守っていたリーファ、シグルドは思わず駆け寄ろうとする。

最悪、この場を離脱する。それだけを考えて、行動に移そうとするも——。

「——見事だ」

それはアスナの進行方向から。

五体満足とはいかないものの、ボロボロの状態でユーザーが決闘場となっていた輪の中に再び入ってきた。

見れば、まだHPゲージが削りきれていない。

そう。彼とアスナの決闘は、まだ終わっていないのだ。だというのに、どういうわけかユーザーからは敵意はない。むしろスッキリしたような、清々しい面持ちでアスナを見つめている。

深く息を吸い込み、深く息を吐く。

すると彼は、思いもよらないことを口にした。

「降参だ。この決闘^{デュエル}、俺の負けだ」

同時に、アスナとユージーンの眼の前に紫色のウィンドウが表示され、勝者の名前が表示される。

勝者の名前は————テイターニア。姿形はアインクラッドで生きてきた『紅閃』の姿であるが、どうやらプレイヤーネームだけは変わらなかったらしい。

ふう、と息を深く吐いて、アスナは立ち上がる。

そして愛剣を腰に差している鞘に収めて、ユージーンに向き直り問いを投げた。

「わたしの勝ちでいいんですか？ このまま続けていれば、貴方の勝ちだったのに」

「構わんさ、俺は満足した。条件も飲もう」

「いいんですか？ 世界樹攻略はサラマンダーの悲願だったのに……」

「これから始まる貴様達の世界樹攻略に、俺達サラマンダーは一切の妨害をせぬ。貴様の条件に、俺が飲んだ。そして負けた、それだけの話しだ。約束を違える道理もない」

「ありがとう、ユージーン將軍」

「攻略できるかは貴様次第だ。負けることなど許さんぞ、テイターニア」

「……アスナです」

そうだったな、とユージーンは笑みを零す。

悪気はないのだろう。アスナはため息を吐くと、意識と視線を世界樹へと向ける。その視線は頂上へ、自分がいたであろう場所へと向けられていた。

それは雲海を抜けて、空へと高く伸びている。どれほどの高さにあるのかなんて、皆目見当もつかない。それでも自分達は世界樹の頂上

へと登らなければならない。

「アスナきーん！」

ふと、名前が呼ばれてアスナは振り返った。駆け寄ってきたのはリーファだ。彼女は慌てた様子で口を開く。

「お兄ちゃんからメッセージが来たんだけど、直ぐに——」
「団長さん——！」

今度は幼い声。

そちらに視線を向けると、幼い少女の姿が——ユイの姿があった。

ユイはなんと、空を駆けながらアスナの元へと降り立つ。翅がないにもかかわらず飛行できるのは、プレイヤーデータを使用していないからこそだろうか。

慌てているリーファとは対称的に、ユイはニコニコ笑みを零しながらアスナに抱きつきながら嬉しそうに口を開く。

「パパが言っていました。みんなが待ってますよ！」

「そうそう、お兄ちゃんが言っていたんだけどね。攻略部隊が整えただって。だからアスナさんも早くって！」

「……みんな？ ……ああ、そっか。さすがキリトくん。考えがあるって、そういうことだったんだね」

うん、とアスナは二人の言葉に頷いた。

ギョツと首からぶら下がっていた蒼色の宝石がついているペンダントをギョツと握りしめる。

視線は世界樹へ、意識は「彼」へ、それは自然と言葉が紡がれ。

「——待っていて、優希くん。今、行くからね」

第16話 攻略開始

時刻不明

世界樹内部 謁見の間

その造りは、正に謁見という名に相応しい造形であった。

地面に敷かれている紅色の艶やかな絨毯、そして多段な広く厳格な階段。その上には絢爛と言い切れるほどの綺羅びやかな玉座が設置されている。

他人を見下ろす。その一点の目的だけで言うならば、これほど見事な造形はない。

厳格、そして見栄が交差する謁見の間。

その虚栄たる玉座にて、男は一人機嫌が良さそうにグラスを片手に紅い液体を一口飲んだ。

それはワインのようである。だが、この仮想世界においてアルコールなどは一切摂取できない。堪能できるとしたら味、風味、匂いくらいでしかない。それでも彼がご機嫌に飲酒しているのは、それ相応の出来事があったからだろう。

決して酔うことが出来ない。それすらも忘れてしまうほど、彼は有頂天を極めていた。そう、強いてあげるのであれば彼は自分に酔っている。偽りの王としての身分を信じて疑わない、瓦礫で創り上げた玉座にて、彼は己に酔いしれていた。

「フフツ……」

しかし、当の本人はそれに気付いていない。

むしろ当然の代価であり、当たり前前の報酬であることを、彼は信じて疑っていなかった。

テイステイングするかのようには、彼はワイングラスを細かく揺らし弄んでいた。

見つめる先は、ワイングラスではない。彼はあるモノを見聞している。それは投影されている映像だ。まるで映画館にあるスクリーンに映し出されているかのように、愉悦色に染まった眼で、その映像を観察している。

映し出されているのは金色の頭髮の人影。

背格好からして、少年と称することが出来る体躯である。表情は読めないのは、少年の頭が項垂れているからだろう。

力なく顔を伏し、それでも両足で立っているのは少年の残された矜持によるものだろう。決して屈しないという意思、絶対に折れないという信念を、弱り切っている少年から感じ取れる。

「ハハッ、バカだなあ」

そんな少年を、彼は嘲った。

侮蔑しきった笑みで、少年をこれでもかと蔑んだ声で、汚物を見るかのように彼は少年をただ見下す。

戦況は変わらない、自分の有利は崩されない、絶対的な自信を持つて彼は断言する。

下らない、と少年の痛々しいまでの決意すら吐き捨てた。

下らないのだ。

いくら少年が抗おうとも時間の問題だ。何も変わらない、何に変更がない、何一つ己の有利は崩されない。

ありとあらゆる技術を、彼は少年に叩き込んだ。それは文字通り、もてる全てという意味。少年の記憶からトラウマたる出来事を抽出し、記憶を再現させて、思考を絶望に塗り替える。

それこそが自分に与えられた力。少年を加えた300人による実験によって掴み取った能力。人の魂を直接制御する、神の御業とも呼べるモノだ。

それらの全てを、少年に叩き込んだ。

確かに少年はしぶとかった。いくら痛めつけても音を一つも上げずに、あまつさえ減らず口を叩き、仲間のためであれば頭すらも下げ

る。

並外れた精神力の強さではない。終わりのない苦痛を与えられておきながら、それでも自我を保ってきたのがその証拠であった。

それも終わりだ。

人には誰にでも、触れられたくない記憶というものが存在する。思い出さないように、心に鍵をかけて、記憶が呼び出されないように生活をしている。

その中でも少年のソレは極めつけだ。彼の人となりを創り上げた光景、忘れてはならないトラウマ、何度も見てきた悪夢を、何度も再現してきた。

もはや少年の心が壊れるのも、秒読みと言えるだろう。

だがそれでは終わらない。彼の本当の狙いは、その先に存在する。

「もうすぐだ、もうすぐで、君は僕だけの人形となる」

壊れた先で、新たな人格を植え付ける。それこそが彼の本当の狙いであった。

物を言わぬ人形、彼の言うことだけを忠実に守る番犬。それは彼の虚栄心を満たす行為でもある。今まで少年は、彼に逆らい続けてきた。それこそ、この世界の王を自称する彼にとって、許しがたい蛮行でもある。叛逆者にはそれ相応の報いを与えねば気が済まない、その程度のプライドで彼は少年の人格すらも壊そうとしている。

加えて、更にもう一つ。

少年は彼にとつては無視できない存在への人質でもあった。

「どうせ来るんだろう、彼を救うために、君は来るんだろう」

その言葉は誰に向けられたモノなのか。

恍惚とした表情で、その笑ひはますます深まっていく。クツクツと喉を鳴らし、下卑た笑い声で歌うように軽やかに弾みながら続けた。

「それでもいいさ。でも君はどんな顔をするかな？ 彼が変わり果てた姿を見て、君はどんな顔で僕を見るだろうか。——いいや、考えるまでもない。君は懇願するだろう。許してほしいと、わたしを好きにしてもいいから彼を助けてほしい、そうして僕の足元へ縋る筈さ！」

そうして両手を広げる。

何かを抱きしめるように、広く広く、彼は両の手を広げていた。

「つまるどころ、君はただの餌に過ぎない。彼女が僕の物になるための、餌に過ぎないのさ。ああ、悪いようにはしないよ。僕は寛大だ。彼女を屈服させ飽きるまで、君は生かしておいてやるよ」

「本当に、本当に楽しみだよ——テイターニア」

.....

2024年8月17日 PM 16:55

世界樹 央都『アルン』

その場所には、ありとあらゆる妖精族が集結していた——。
偉丈夫と呼ばえる男の火妖精族サラマンダーがいた。見た目麗しい水妖精族ウンディーネの女がいた。背丈が小さな少年のような風妖精族シルフがいた。仲の良さそ

うな土妖精族の少女と闇妖精族の男がいる。精悍な面構えの影妖精族もいれば、猫妖精族や工匠妖精族の恋人達もいた。音楽妖精族らしくない歴戦の勇士も中には存在する。

趣味趣向、外見から考え方まで、まるで何もかもが違う者達がある場面に集結していた。

それは圧巻である。

恐らく、アルヴヘイム・オンラインが稼働してから、ここまで多くの種族が集ったことなどなかったであろう。

その数は百を有に超えており、未だに数を増やし続けている。思わずリーファは呟いた、凄いと。

この光景を見たユイはまだなれないのか、まだ圧倒されている。

そしてアスナは――。

「さすが、キリトくんだね」

妙に落ち着いた様子で、集った妖精族を見ていた。

これこそが、キリトの言っていた「考えていた策」というモノなのだろう。

集った者達は何もかもが違う。

しかし共通しているものが、一つだけあった。

「まあ、オレっちも頑張ったんだけどナ」

そう言いながら、気安く声をかけてくる猫妖精族が一人。

猫耳を生やし、腰の下あたりから猫のような尾がたれている。体軀は華奢なもので、アスナよりも頭一つ以上も小さい。その頬には動物のヒゲを模した三本のペイントが書き込まれていた。

猫妖精族は、よっ、と片手をブラブラと振りアスナに向かってニツコリと笑みを浮かべて。

「元氣そうだな、アーちゃん」

「アルゴさんも、元気そうだね」

アスナは心底安堵するように微笑んだ。彼女はこれまで、世界樹で六ヶ月近くも囚えられていた。勿論、その間にSAO帰還者の情報など知り得ることも出来なかった。加速世界アクセル・ワールドのメンバーの無事は確認している。しかしそれ以外のプレイヤーの所在は何もわかっていなかった。故に、アスナは安堵した。一人、関わりのあるプレイヤーが無事であったことがわかるとホッと胸を撫で下ろす。

にしし、とアルゴは笑みを零して。

「キー坊に無茶振りされたけど、まあまあ元気だよ」

「無茶振りって……？」

「それは見ての通りサ」

それだけというと、アルゴの視線が集まり続けている人垣に向けられていた。

中には再会を祝う者や、意外そうな眼でお互いを見つめている人プレイヤーがいる。

「——俺達のSAOは終わっていない」。はじまりの英雄も、随分とカッコつけた文章で招集するよな？」

「——キリの字らしいいや、らしいけどよオ」

二人の声が聞こえた。それは両者とも男性特有の低さを伴った声。一人は肌の黒い体躯が優れている土妖精族ドム、もう一人は痩せ型でいかにも武士然とした格好をした火妖精族《サラマンダー》。

「ドリユーさん、クラインさんも！」

「元気そうだな、アスナ。それとオレはエギル、斧使いのエギルだ」

「オメエも拘るなア？ まあいいさ、オレだけじゃねエゼ？ 攻略ギルド『風林火山』も揃い踏みだ！ 大船になった気持ちで、居てくれ

や！」

ガハハ、と居丈高に笑みを零すクラインを見て、エギルは呆れるようにため息を大きく吐いた。

変わらない二人にアスナは嬉しそうに笑みを零す。クスクスと小さく笑うも、直ぐに心配するような顔で、エギルに向かって問いを投げた。

「でも大丈夫なんですか、エギルさん？ レヴィちゃんもいるのに、またVRやって……」

「ん、まあ大丈夫だろ。ユーキのヤツを助けるためだって言えば、許してくれるさ。許してくれなかったら、ユーキにも説得してもらおうな」

「はい、わたしも手伝いますっ！ ありがとうございます！」

思わずアスナは勢いよく頭を下げるも、対するエギルは礼を言われる程でもない、と助けることが当たり前のような口調で返す。

そうすると、アスナ達は談笑を始めた。

その一時は、戦友と久しぶりに会ったように、今までの苦労を分かち合った同士のように、緊迫していたアスナの緊張を緩やかに解いていく。

アスナの表情は穏やかなモノだ。

数時間前までは憔悴しきった表情であったし、先程までに至っては死闘を繰り広げてきたばかり。なのにも関わらず、彼女は穏やかにかつて同じ地獄を生き抜いてきた戦友たちと言葉を交えていた。

お互いの近況、今まで何があったのか、簡単に説明をして。

「あの、アスナさん……」

おずおず、と。

リーファが小さな声で、アスナに耳打ちをした。

邪魔をしないように気を使っているのだろう。それはアスナも理解しているようで、自身の配慮の無さを謝罪してから問いを投げた。

「ごめんね、リーファちゃん。どうしたの？」

「この人達というか、今の状況ってお兄ちゃんが関係しているんですか？」

そうだね、とリーファの問いを肯定すると、アスナは何気ない口調で言った。

リーファを混乱させないように、極めて軽く。萎縮させないようにさりげなく、事実を伝える。

「この人達はね、キリトくんが集めたSAOプレイヤーだよ」

「えっ!?! ぜ、全員ですか!?!」

リーファは眼を丸くさせて、辺りを見渡した。

既にそれは百を超えている。空を見れば、なれない随意飛行を行っているのか、真っ直ぐに飛行していないプレイヤーも存在する。誰も彼もが初心者ニュービギナーなのだろう、大半のプレイヤーが初期装備で参陣していた。

「補足するト、キー坊が掲示板で募集をかけたテ、おねーさんが思いつくSAOプレイヤーに声をかけまくったんだけどナ? いやあ、さすがはじまりの英雄”。想像していたよりモ、かなり集まってるなこりゃ」

「多分、本人が一番ビツクリしてると思う……」

乾いた笑みを浮かべて呟いていたアルゴに対して、アスナは苦笑交じりに呟く。

それ以上の衝撃を、リーファは受けていた。

彼らが再びVRMMOにログインするという意味を、リーファは理

解している。それはつまり、再び死の恐怖と向き合うということに他ならない。ナーヴギアの後継機である、アミユスファイアを装着していれば死ぬ可能性はない。それでも、当時味わった恐怖は拭いきれるモノではないだろう。

ログアウト出来ない当時の状況、HPゲージがゼロになれば現実世界でも死を意味する過酷な世界、後の世に語られるデスゲーム、それは決して癒える傷ではない。

だというのに、彼らは再び仮想世界に降り立った。

眼の前で談笑している彼らは勿論、今も集まっているプレイヤー全員が、恐怖に負けずにこの世界に集う。

兄の言う『俺達のSAOはまだ終わっていない』という言葉はそれほどまでに、彼らに影響を与える言葉だったのだろう。何よりも兄の発言力に、リーファは衝撃を受けていた。囚われている以前にはなかった、他者との繋がりを兄はいつの間にか有している。

ちくり、と胸を痛むのはきつと嫉妬しているのだろう。

リーファの、桐ヶ谷直葉の知らない兄の姿を、キリトの姿を彼らは良く知っている。羨ましいと思うのは無理もない。

しかしそれ以上に――。

「凄……」

リーファは誇らしかった。

兄がこの世界に降り立ってから、必死であったのはリーファが一番知っている。

シルフ100人斬りを達成し、何度もゲームオーバーになろうと一人で世界樹頂上を目指していた。アスナともう一人を救おうと、キリトは一人抗っていた。

そして、今。

その努力が報われようとしている。

兄は数多の人達に慕われ、その力になろうと集う。その事実は何よ

りも、リーファにとって誇らしい事実であった。
目を輝かせるリーファを、微笑ましそうにアスナは笑みを浮かべる。

と、そこへ――。

「アスナああああ!!」

「うわーん、アスナ――!!」

一人は大声で叫びながら、もう一人は泣きながら両手を伸ばして、駆けてきた。

二人が誰なのか確認すると、アスナは一際眩い笑みを浮かべて、両手を広げ応じた。

「リズ、ユウキ!」

名前を呼ばれたパープルブラックの長い髪を揺らして闇妖精族の少女――ユウキが一目散にアスナの胸へと飛び込んだ。

対する桃色の頭髮の工匠妖精族の女性――リズベツトは呆れたように首を横に振る。

「わあ!! アスナだ、アスナがいるー!」

「ちよつとユウキ、あんた泣きすぎよ!」

「だって、だってえリズう! アスナもにーちゃんも起きないんだもんー! 久しぶりなんだもんー!」

「カツコよく登場するんだ、って張り切ってた癖に」

「むいーりいー! むうりいー……!」

そう言うと、ユウキはアスナに抱きついて離さない

それだけ心配していたのだろう。気持ちかわかるリズベツトはそれ以上言わなかった。気を取り直してアスナに視線を向けると、一度頷くと。

「お疲れ様、よく頑張ったわね？」

「……うん、ごめんねりズ」

「バカね、何で謝るのよ」

「うん、うん……！」

ポンポン、と。軽くリズベットはアスナの頭を撫でて、アスナはギョツとユウキを抱きしめる力を強めていく。

会いたかった仲間達、もう一度眼にし触れたかった人達に再会することが出来た。でもまだだ、これだけではない。もう一人、救わねばならない仲間がいる。

「みんな、揃ってるみたいだな？」

それだけ言うと、降り立った一人の黒ずくめの影妖精族^{スプリガン}。その背には黒い直剣——エリユシデータを背負っている。

彼は今のアスナの状態を見て、何があつたか察した。アインクラツドにいた頃の姿、ということはつまるところ、自身や「彼」と同じ力を使ったことに他ならない。それに追求している時間もなく、ときは一刻も争っている。

故に、簡潔に伝える。戦況を、事の発端である張本人、はじまりの英雄——キリトは口を開いた。

「先鋒を『聖竜連合』、後詰めで『血盟騎士団』と『月夜の黒猫団』、最後に俺達がなだれ込む事になっている。準備はいいか、アスナ？」

言葉に対してアスナは無言で頷いて、辺りを見つめる。

泣いていたユウキは乱暴に涙を拭うと力強い頷きで応じる。リズベットは片手にバツクラも片方の手にメイスを持つとアスナを見つめ返した。エギルやクラインもそれぞれの獲物を取り出し、アルゴは戦況を分析している。ユイも両手に握りこぶしを作り、リーファ

も頷いて応じた。

目を閉じる。

囚われている幼馴染の姿を想像して、再び目を開ける。

時は、来た。

「行こう、みんな！ 優希くんを助けに！」

第17話 世界の悪意

その男の目には何が映っていたのか――。

男は見守っていた。いいや、厳密に言えば見送っていた。

主義主張、性別から思考、自身の所属する種族から、何もかもが違う人間達が、今や一致団結し未だかつてなし得なかった遺業を果さんと上へ上へと意識を向けている。

戦場はもはや地上ではない。

世界樹と呼ばれる内部、重苦しく厳格な石造りの巨大な扉を開き、空へと翅を広げて駆けていく。

各々の意思、各々の再会、そして各々の戦う理由を胸に懐き、この日の内に何もかもが終わることだろう。

これまで、長い月日を費やしてきた。

全てはこの世界で生きるプレイヤーの悲願、グランドクエスト攻略の為。その為に、その為だけに、男は消費し続けてきた。現実世界での時間、更には出費。その両手を汚した行為、例えば――同種族に対する裏切りも行ってきた。

それもこれも全てはグランドクエスト攻略の為、己の小さな欲を満たす為の行為でもあった。

それが今となって、何もかもが崩れる。

数えきれないほど集った妖精族達は、一気呵成に世界樹内部へと続く。

男は耳にしていた。集った彼らが、仮想世界の虜囚であったことを。それはつまるところ、一年と半年間ソードアート・オンラインに囚われていたプレイヤー達である。『飛行』という点と『魔法』という点において、彼らは初心者と言える。しかし、こと戦闘において彼らほど修羅場を潜って来たプレイヤーはこのアルヴ Heim・オンラインを見通して右に出る者はいないと断言できる。

剣を取り、ダンジョンに入り、命を落とす危険が付きまとう地獄を彼らは生き抜いてきた。ゲームオーバーになれば蘇生できるアルヴ

ヘイム・オンラインとはわけが違う。戦闘に対する心構えなど、比較にすらならない。

そんな連中が、百人を有に超え、この世界に集い、世界樹の頂上へと目指している事実。

もはや、グランドクエストの攻略など時間の問題だろう。

グランドクエストの難易度は計り知れないほど難解であり、一つの種族が団結し、装備を最上位のもので固めても攻略不可能であった。

しかし彼らは違う。不可能を可能にすることなど簡単なもの。何せ、デスゲームを生き残り、現実世界に帰還を果たした者達だ。文字通り、彼らは不可能を可能にしたという実績がある。

「……」

だというのにも関わらず、男はただ静かに、事の成り行きを見守っていた。

焦燥するでもなく、遺憾に震えることもなく、激怒するでもない。ただ男は黙って、上へ上へと進撃する彼らを見守っていた。

そして、口にすべき言葉も、思うべき感慨もないように、雄々しく誰もが目指していた世界の中心に根を張る樹木へと見上げる。

男の胸中はいかなるものか。

それを推し量れる人間は、男本人でしかありえないだろう。

だが男は語らない。口を固く閉ざし、一文字に閉口するのみ。そうなってしまうえば、男の真意を凶れる人間は存在しないだろう。

いいや、一人だけ存在する。

「何をしている、シグルド」

それは女性の声であった。

遅れて男の隣で——シグルドの隣で何かが降り立つような風圧と空気を叩く羽音が聞こえた。

横に視線を向けると、巨大な生き物。二足の足が地面に付いてい

る。頭から尾の先まで、前長だけで言えばプレイヤーの数倍はある。野生——というわけもないようだ。それを証拠に、銀色の輝かしい鱗の上からアーマーが装着されており、手綱に当たる部分が鎖で出来ている。

あまりにも巨大、あまりにも現実離れしている。翼が生え、噛み千切るための鋭利な歯、喉を鳴らし自分以外の生物を威嚇する、堂々とした佇まい。その生き物の名は——。

「飛竜……」

ファンタジー世界に生息する、現実世界では到底目にかけることが出来ない伝説の生き物。それこそが飛竜、通称“ドラゴン”と呼ばれる存在であった。

別にドラゴンの存在は珍しくもない。アルヴヘイム・オンラインはファンタジー要素の強いVRMMOである。シグルドも何度か眼にし、戦ったこともあった。

しかし、腑に落ちない。

飛竜を乗り物にするなど、聞いたこともなければ、見たこともない。故に、質問を質問で返した。

騎乗していた飛竜から降り立った、自身に声をかけた女性に素直な疑問を口にする。

「サクヤ、これは何だ？ シルフが飛竜をタイムしているなど、聞いたことがないぞ」

「これはルーのところのだよ。アイツ、密かに竜騎士ドラグーンなる部隊を結成していたようだ」

サクヤと呼ばれた女性は、口元を緩めて涼しげに答えた。

それにはシグルドも納得する。どこの種族にも切り札の一つや二つ、隠し持っているものだ。それが猫妖精族ケットトニーにとっての竜騎士部隊ドラグーンであつたに過ぎない。

そしてサクヤとシグルド、両名は肩を並べた。

視線の先にはグラウンドクエストに臨んでいるプレイヤー達の姿。ヒットポイントが危険域まで達し、回復を受けるプレイヤーが居る。回復を受けて再度臨むプレイヤーが居る。諦めずに挫けずに心が折れないプレイヤーが居る。

「私は答えた。まだ君に向けた問の答えを、受け取っていないぞ？」

「……フン、オレは脱領者だ。シルフ領の領主であるお前が気安く話しかけていい輩ではあるまい？」

「妙なことを言うな」

クスクス、と軽やかに笑みを零しサクヤは続けた。

「君が脱領者になることを、私は承諾していないが？」

「……何を馬鹿な。オレは裏切り者だ、お前をサラマンダー達に売ろうとしたんだぞ？」

「だがまだ売られてない。単純な話だよ、シグルド。君の能力が惜しい。軍務を取り仕切っている君を脱領者レネゲイドに出来るほど、我々シルフは人材が豊富というわけでもない」

それに、と言葉を区切りサクヤは笑みを浮かべた。

その笑みは意地の悪い笑み。ニヤリ、と他人の羞恥する感情を垣間見て喜ぶ意地の悪い笑みだった。

「君は変わった。良ければ教えてくれないか？　君が変わった理由を」

「……死んでも口にするか」

「おや？　君は私に借りがある筈だ」

「クソつ、脱領を免除する変わりに、というやつか……」

「みなまで言うな。君も中々サデイスティックな奴だな？」

「お前にだけは言われたくない」

チツ、と舌打ちを大きく、サクヤに聞こえるように打つ。だが本人は気にすることもなく、笑みをますます深めていく。

それが更に癩に障る。しかし借りがあるのも事実であると、シグルドは認識し渋々と言った調子でサクヤの問いに答えた。

「……キリト殿だ」

「キリト君、彼が原因というわけか？」

「そうだ。かつてのオレは権力こそが絶対的な力を有するモノだと思っていた。だからサラマンダーに取り入り、お前を売ろうと考えていた」

「面と向かって言われるものアレだが、君は本当に最悪な人間だな」

「……自覚している。悪かったと思ってるよ。しかし彼を見てから、オレの価値観は崩れた。単騎で敵地に趣き、オレを含むシルフを100人近くも斬った。剣の腕だけではない、彼にはオレにはなかった何かを持っていた」

「……だから、キリト君に協力したと？」

サクヤの問いに、シグルドは迷うことなく頷いて肯定する。

「そうだ。彼がどこまで行けるのか——彼らがどこまで飛べるのか、オレは見たくなくなった」

「満足したのか？」

「ああ。もうオレの出る幕はない、と思っていたのだが——」

「——そうだな。それは大きな間違いさ」

涼しげに言うサクヤは片手の指で、人差し指と親指で輪を作り口まですりすり指を吹いた。

すると真新しい飛竜が空を駆け、一目散にシグルドの前へと着陸する。その飛竜にもアーマーが施されており、野生でないことが証明された。

サクヤは飛竜へ一息に跨る。背に装着された蔵に腰を落とすし、鎖で繋がれた手綱を握りしめ、世界樹内部へと続く石造りの扉へ視線を向けシグルドに促した。

「——乗れ、シグルド。君の役目はまだ終わっていないだろうか？」

「……そうだな」

一言、呟く。

それから直ぐに続けて。

「キリト殿を世界樹の頂上へ送り届ける。オレのグランドクエストは、まだ終わっていない——」

.....

2024年8月17日 PM 17:25

世界樹内部 『グランドクエスト』

——その光景は、戦争と呼ぶに相応しかった——。

空を舞う妖精族、それを撃退せんと大樹の幹のような巨大な手を振り回し、全身鎧の無機質な騎士が妖精族に殺到する。

妖精族は己が手にした獲物を振るう。ときに魔法を用いて、ときに

武器に頼らずに我武者羅に手足を振り回し、なんとかその場を切り抜けていた。

しかし、それも徒労に終わってしまう。

何故なら、彼らが相手に行っている巨人、そして騎士は際限がなく繁殖する。一匹見つけたら何とやら。一体倒しても数は減らずに、一体倒せば二体、二体倒せば四体、四体倒せば十六対と倍々ゲームのようにその数を増やしていった。

増える理由に特別な理由などないのだろう。単純な話し、最初からグラウンドクエストを攻略させる気がないのだ。だからこそ、敵は際限なく出現する。それはある種の病原菌のように、一ついれば際限なく増えていく。

死ぬために生み出され、殺すために生み出される。世界樹内部に巣食う巨人も、騎士も、“不可能”を体現するために生み出された人工物。

一方、妖精族は違う。

彼らにも数の限りがある。HPゲージは有限であり、ゲームオーバーとなってしまうえば蘇生魔法でも駆けない限り、しばらくは蘇生されることはない。

何よりも彼らには感情がある。このどうしようもない戦地、決して自体が好転することがない負け戦。そんなものを眼の前にして、心が折れない人間はいないだろう。人間とは何かしらで諦めて生きていく生物だ。それは何にでも同じこと。家族であったり、仕事であったり、学校であったり、友人関係であったり、人は必ず諦めて情性に生きていく。なるべく楽な方へ、自身が傷つかないように彼らは生きていく。

別にそれは悪いことではない。ある種の防衛本能。生物として生きていく中で、備わっていないといけない機関。人間はそれに忠実に従っているだけに過ぎない。

ならばこそ、ここで彼らが諦めてしまうのも無理はない。

筈だった――。

「防御陣形！ タンクは前に出て、初撃に備えろ！」

号令一下。

将らしき水妖精族のプレイヤーが指示を飛ばすと、タンク役である兵達は疑問を思わずに従う。

陣形に隙間などない。盾を構え、密集するさまはフランクスという重装歩兵による密集陣形によく似ている。

騎士は引かずに、真正面から突っ込むもビクともしない。幾千と彼らは繰り返してきたのだろう。練度が高い防衛陣形は誰一人うめき声を上げることもなく、何十騎もの騎士を跳ね返した。

間髪入れずに、防衛陣形を取っていたタンク達に巨人の大きな腕が振り下ろされた。

騎士が数騎巻き添えになるも構うことなく、無感情である敵エネミーは躊躇もせずに振り下ろす。

「散開！」

指示が早ければ、行動も速い。

タンク達は行動を迅速に、慣れないはずの随意飛行で蜘蛛の子を散らすように散開した。

負傷者はゼロ。誰一人傷つくこともなく今の攻防を制するも、水妖精族の将は一息吐くこともなく、次の指示を飛ばした。

「血盟騎士団！ 敵を中央へ近付けな！ 彼らの道だ、誰一人邪魔をさせるな！」

「……フン、無茶を言う」

異を唱える——程ではないものの、水妖精族の将の指示を承諾しかねるような不服そうな声をあげる火妖精族の男が声を上げた。

対する水妖精族の将兵は不快に思うことなく、苦笑を混じりにその言葉に対して返す。

「その無茶を、君もやろうとしているんだろう、コーバッツ?」
「貴様と一緒にするなディアベル。私は無茶ではない、出来るからやるだけだ」

水妖精族ウンデイナーの将兵——ディアベルはその言葉に対して、呆れるように肩を竦めた。

眼にするのは彼の——コーバッツの装備。ソードアート・オンラインで装備していた両手剣、ではない。彼はなんと片手に盾を装備し、もう片方の手にも盾を装備している。つまりは二盾流。攻撃特化ではなく、生存特化といえる装備を自身へ施している。

「確かに、二盾それなら出来そうだが、君らしくないな?」

「俺達のSAOは終わってない」

「それは——」

「はじまりの英雄が言った言葉だ。この世界に、未帰還者301名が囚えられるのだろうか? あの『アインクラッドの恐怖』もいるのだろうか? なるほど、確かに終わっていない。私達のソードアート・オンラインはまだ終わっていない」

ならば、とコーバッツは言葉を区切る。

真新しい特攻してきた騎士を二盾を用いて弾き、ディアベルが片手剣を脳天に振り下ろし仕留めたのを確認すると続けて。

「私達の、攻略組の戦いは終わっていない。攻略組として、戦えない中層プレイヤーの希望となり、使命を全うするのみだ」

「……そうだな」

ニヤリ、と不敵な笑みを浮かべてディアベルは同意した。

そうだ、何も終わってない、と。現実世界へ帰還し、心が晴れなかったの原因。それこそが未帰還者の存在だった。現実世界へ帰還する

ために、帰還させるために戦ったというのに、301名もの人間が今も囚えられているという現実。

それこそがディアベルの心が晴れなかった原因。それはコーバツツも同じことなのだろう。いいやもしかしたら、ここに集った全員が同じ気持ちなのかもしれない。今も囚えられている301名の存在が、ソードアート・オンラインをクリアしたという現実味を感じさせない。

となればこの戦いも最後のダンジョンの続き。第一層迷宮区 // 2
1階”と呼べるだろう。

ディアベルの四肢に力が入る。

倒しても敵が減らない？ 何度も敵が湧いて出てくる？

その程度の修羅場、ディアベル自身も、攻略組も既に経験している。最終ダンジョン、50階層までのフロアボス無限湧きに比べれば、些細な地獄だ。

「裏ダンジョンにしては物足りないけど、サクツと攻略して大団円と行こうか」

「張り切るのは結構だが、此度の攻略は私達ではない」

「わかってる、最後は彼らに任せたんだ。これが続きというのなら、彼らに任せるのが筋というものだろうか？」

瞬間、何かが下方から飛んてくる。

打ち上げロケットのように、加速し、更に加速する。

咆哮と共に駆け上がるのは飛竜。鎖で繋がれた手綱を『紅閃』が握りしめ、その背に乗るのは攻略組の最高の矛——加速世界（アクセル・ワールド）の面々である。

まさかドラゴンで来るとは思っていなかったのか、ディアベルは眼を丸くさせて、コーバツツは開いた口が塞がらない。

対する『紅閃』——アスナは二人に気付くも、止まることなくそのまま翔け、すれ違いざまに。

「ディアベルさん、コーバツツさん。ありがとうございます！ お礼は後でしま
す！」

そうしてそのまま飛び去っていった。

ポカン、と見送る両名。その中でも早く回復したディアベルは苦笑
いを浮かべて。

「ドラゴンか、あれ？ 彼らの協力者はまた凄いものを持っている
なあ……」

「……私も乗りたい」

ポツリ、と。

コーバツツが十代で年相応な感想を呟いた。

.....
.....
.....

「アスナ、流石に飛ばしすぎたんじゃない？」

「うん。シグルドさんにもらった飛竜、ここまで速いとは思わなかつ
た……」

リズベツトが冷や汗をかきながらぼやき、アスナが目の前
の光景を見て頷く。

まず世界樹へ侵入し、風林火山を率いるクラインとエギル、そして
リーファの活躍によって露払いは済んだ——ここまで
はいい。

次に飛ぶ手段がないアスナの為に、シグルドが飛竜を貸し与え加速

世界（アクセル・ワールド）の面々はこれに搭乗した——ここまではいい。

問題はその後。

思いの外速度が出てしまい、最後の後詰めで加速世界（アクセル・ワールド）が駆け上がる手筈だったのだが、何をどうして間違えたのか最前線に彼らは出てきてしまった。

彼らの俄然には、空を覆い尽くす騎士たちの群れ。

これより先は存在しない、騎士たちは暗にそう語る。際限なく繁殖し、天を覆い尽くしていく。

即ち彼らが境界線^{ボーダーライン}。世界樹内部へ侵入した不屈き者を殺すためだけに造られた物達、彼らこそが世界樹の頂点へと続く空を阻む壁。

質で言えば彼らの右に出る者はない。

量で言えば騎士達は他の追隨を許さない。

相反する者達が対峙する。となれば、激突は必然と言えるだろう。

騎士達の繁殖は終わらない。

次々と、際限なく増え続けてく。もはや数えることすらもバカバカしいと思えるほどになり、ユウキは片手剣を引き抜いてキリトに指示を仰ぐ。

「どうしよつか、キリト」

「決まってるだろ。ここまで来たら、正面突破だ」

「大丈夫なんですか、パパ？」

おずおずと、尋ねるユイに笑みを向けて、キリトは勢いよく背中に挿していたエリユシデータを引き抜いた。

「大丈夫だ。ユイは下がっててくれ」

「……大丈夫って、これは無理よ。あんた、頭に血が上りすぎじゃない？」

呆れながらリズベットは言う。

確かに彼女の言う通りだ。

眼の前には活路など閉ざされている騎士達の壁。もはやその有様は、システムの悪意と言っても過言ではない。

彼らがここまで安易にやってこれたのも、百名以上の攻略組の力、猫妖^{ケットシー}精族と風妖^{シルフ}精族の援軍、それらによるものだ。一種族の軍勢では、ここまで来れるのは不可能であるし、途中で朽ち果てることだろう。そう断言が出来るほど、グランドクエストは公平とは言えない難易度であった。

クリアさせないという絶対の意思。奮戦するプレイヤー達を嘲るように、世界樹の内部は殺意に満ちていた。

そして、今。

あと一步、されど一步。その一步が何よりも遠い。

天を覆う騎士達の群れ。リズベットが無理と称するのも無理はない。い。

しかし、キリトは首を横に振った。

無理、と言う言葉を否定し、頭に血が登っているという事実を肯定する。

「確かにリズの言う通りだ。俺は頭に血が登っている。状況把握なんて出来そうにない。でもさ、仕方ないだろう。この先にアイツが、ユーキがいるんだ」

それだけ言うと、キリトは翅を広げ宙に舞った。

エリユシデータを強く握りしめ、目の前に広がる騎士の大群を睨めつける。

視線は語る。邪魔だ、と。俺達の決着にお前たちはただ邪魔だ、とキリトの視線が暗に語る。

「立ち止まってなんかいられない、引き返す道もない、譲る道理もない。俺はアイツの下へ飛ぶ」

「キリト、付き合うよ。ボクもにーちゃんに会いたい」

「わたしも！ 精一杯皆さんのサポートをします！」

ユウキもキリトと同じように翅を広げ、俄然の騎士達に意識を集中させた。

やる気を見せるユイを見て、リズベツトは首を横に振った。やれやれ、とこういう無茶をさせないのが自分の役割であった筈だが、今は一緒に無茶をしようとしている。そんな自分に呆れながら、リズベツトも翅を広げ飛竜の背から飛び立つ。

「あとほんの少しだしね、やってやろうじゃないの。加速世界（アクセル・ワールド）を舐めんなんての！」

彼らに絶望はない。恐怖に震えることもなければ、大軍を前に萎縮することもない。

この状況を踏破することを信じて疑っていなかった。少数精鋭でありながら跋扈する騎士達を蹴散らし、全員でユーキの下へ馳せ参じる。それこそが彼らの共通認識である。

初めから不利であることなど承知している。ならばこの先は、力の限り戦うのみであるのだから。

「みんな、ありがとう……」

ポツリと、アスナが呟く。

他の攻略組の大半は301名の未帰還者の救出だろう。しかし彼らが立ち上がった理由は違う。それは仲間を助けるため、未だに囚われの身となっているユーキという仲間と取り戻す為だけに再び集結した。

それがアスナにとって、何よりも嬉しかった。誰よりも自分自身を嫌い自分自身を憎んでいた幼馴染の周りには、こんなにも彼を想ってくれている人達がいる。それだけで、自分もユーキも報われる。

故に、アスナは礼を呟いた。

ありがとう、と。小さな声で、誰にも聞こえない声で呟く。きつと届いてしまえば、彼らは当たり前前だ、と言ってくれるから。

瞬間、低い声にも似つかない音が鳴り響く。

まるで呪詛のように、無機質で、辛うじて声と聞こえる音は騎士達から発声されている。

それは魔法の詠唱だ。片手を突き出して、詠唱し始める。

チツ、という舌打ちはキリトから。

何度も一人でグランドクエストに挑戦していた彼だけが、繰り出される魔法の正体を知っている。

「飛び道具が来るぞ！ 射抜かれたら最後、数秒間は動けなくなる！」

「スタン、ってわけ？ 随分と嫌らしい攻め方してくるじゃない

……ッ！」

悔しそうに歯を噛み締めながら、リズベツトは吐き捨てるように言う。

この中で、盾を装備しているのは彼女だけだ。だがその盾は小さなバックラー。とてもではないが、他の仲間はおろか自分すらも守りきれぬかわからない。

「あと七秒で発射されます！」

ユイの切羽詰まった声が響き渡った。

もう考えている時間はない。

適材適所。戦闘には不向きである自分が、彼らの盾になるべきだとリズベツトは結論に至った。

ユイにはそんなことさせられない、ユウキ、キリトは大事な戦力。

アスナに至っては、ゲームオーバーになれば何が起こるかわからない。となれば――。

「あたしが盾になる！ みんなはあたしの後ろに——！」

我ながら馬鹿な選択であると、リズベットは自嘲した。

全弾命中してしまえば、ゲームオーバーは避けられないだろう。この世界はHPゲージが削られても死ぬことはない。わかっているものの、どうしてもゲームオーバーに対する恐怖は簡単に拭いきれるものではない。

背筋が凍りつく。しかしその程度で立ち止まってはいられない。魔弾は込められている、あとは撃鉄が落ちるのを待つのみ。指を加えて迎えるつもりもない。ユーキを助けるためにも、ここで犠牲にならねば前に進めない——。

一同の前にリズベットは躍り出る。

後退などない。あと数メートル前進するだけで、盾としての役割を演じることが——。

「——見事。さすがシルフ100人斬りの仲間だな——！」

それは涼しげな声だった。

余裕を感じさせる大人のような雅な声。それにキリトは聞き覚えがある。

それは——。

「サクヤ——！」

風妖精族の領主————サクヤがシグルドを含む三十名の風妖精族を率いて。

「ドラグーン隊！ ブレス攻撃用ー意！ つてええー！」

飛竜の強力無慈悲なブレスが、騎士に向かって薙ぎ払われていく。猫妖精族の領主——アリシャ・ルーを先頭に、十騎の竜騎士部

隊に蹴散らされていく。

実に強力な一撃だ。だがそれでも取り零しが存在する。

騎士の狙いは風妖精族シフルでも、猫妖精族ケットシでもない。加速世界（アクセル・ワールド）に絞られる。

「——ほう、俺を無視するとはいい度胸だ」

その影は誰よりも疾かった。

紅い影。重厚な真紅の鎧に身を包んだ三十名ほどの火妖精族サラムンダーは、大柄な両手剣使いを先頭に取りこぼされた騎士に殺到する。

それは完璧な奇襲。いるはずのない妖精族、戦線に加わるはずのない部隊。騎士は為す術などない。

一刀両断。脳天に振り下ろされた両手剣は、抵抗もなく両断している。

アスナには見覚えがあった。

大柄な男。炎のような短髪を逆立たせて、重厚なる紅い鎧に身を包み、分厚い手には大きな大剣——魔剣グラムが握られている。

曰くALO最強、曰く將軍、曰く魔剣の担い手。その男は——。

「將、軍……?」

火妖精族將軍サラムンダー——ユージンであった。

彼はグラムを肩で担ぎアスナに視線を向けると、満足気に一度頷いて。

「無事か、紅閃」

「ど、どうして……?」

「たまたまだ。たまたま通りかかって、たまたま世界樹の内部に入っ
てしまい、たまたまここまでやって来た」

「それは厳しいと思うナー」

ニヤニヤ、と。

笑みを零すのはアリシャ・ルーだ。彼女はアスナに振り返り、

「彼ねここまで来るまで、鬼気迫る感じだったヨ？ 君、愛されてるネー」

「おっとー！ 手が滑ったー!?!」
「にやー!?!」

ブオン、と音を立てて水平に薙ぐグラムを、間一髪でアリシャが避ける。

もちろん、それはわざとである。ユージーンはチツ、と舌打ちする。聞こえているアリシャは「何をするのサー!?!」と食って掛かり始めた。見ようによつては、大柄な男と小さな少女がじゃれ合っているようにも見えるが、本人たちは至つて真剣。殺し合い一歩手前の状態である。

サクヤは仲裁するつもりもないのか、無視するように加速世界（アクセル・ワールド）の面々に向かつて。

「ここは我々が引き受けよう。君たちは先へ進め」
「……いいのか」

キリトの問いに対して、サクヤは頷いた。
直ぐに不敵な笑みを浮かべて。

「構わないさ、埋め合わせは今度してもらおうよ。はじまりの英雄殿?」
「ハハッ、お手柔らかに……」

困ったように肩を竦めるキリトを見て、アスナは笑みを零す。
ともあれ活路は開いた。
ならば後は進むのみ――。

——興ざめだなあ——。

声が聞こえた。

それは世界樹の内部へ響き渡る。軽薄そうで、威厳など感じさせられない。芝居がかった声。

——僕に拝謁出来るのは、テイターニアだけだ——。

アスナに悪寒が走り、キリトの第六感が警告する。

これから何かが起きる。どうしようもない予感を二人は敏感に感じ取る。

——あとは価値もない、ゴミのようなモノだ——。

アスナ、とキリトは叫ぶように声を荒げる。

瞬間、アスナの身体は光りに包まれ、世界樹内部から消失した——。

「ハハハ……？」

光りに包まれたアスナが眼にしたのは謁見するような広場だった。どうやら強制的に転移テレポートさせられたらしい。

地面に敷かれている紅色の艶やかな絨毯、そして多段な広く厳格な階段。その上には絢爛と言い切れるほどの綺羅びやかな玉座が設置されている。

他人を見下ろす。その一点の目的だけで言うならば、これほど見事な造形はない。

厳格、そして見栄が交差する謁見の間。

その玉座から。

「——待っていたよ、ティターニア」

「……っ！……え？」

聞き覚えがある声。怖気が奔る身体。生理的に受け付けられない男の声。

しかしアスナはそれ以上に、注目すべき人影が居た。

それは何段もある階段前に控えていた。

全身白銀の鎧に身を包み。頭部の兜は羊を思わせる角の生えたモノで、頭部を完全に覆っているので表情など読み取ることが出来ない。

その片手には黒色に染まった画桿の方天戟が握られている。

何度も見た、昔から見てきた、少年をいつも眼で追ってきた。

見間違える筈もない、少年の名は——。

「優希、くん……？」

第18話 もう一人の仲間

眼前で起きた現象に、リズベツト達は頭の中で処理しきれなかった。

突然、アスナの身体が光に包まれたと思いきや、飛竜の背に乗っていた筈の彼女が消えている。

一体何が起きたのか、一体何が始まったのか。

リズベツト達は分析ができないまま、新たに増殖し始める騎士達の対応に追われる。

シルフ・ケツトシー連合軍、そしてユージーン將軍の個人的支援が応戦するも、数が数である。質では圧倒的に彼らに分があるとはいえ、数では圧倒的に負けている。斬り捨てても減らず、魔法で殲滅しても同じこと。世界樹内部に侵入した不屈き者を殲滅せんと、騎士達は殺意を増して妖精族に襲いかかる。

戦争とはつまるところの数の優劣によって勝敗が決する。一人の武が突出していようと、津波のような波濤する数を持って封じられてしまう。

現に、シルフ・ケツトシー連合軍、ユージーン將軍の部隊は徐々に押されつつあった。

それは加速世界も同じこと。突然起きた不可解な状況に困惑しながらも、武器を手に取り戦わなければならない。

そうなってしまうえば、目の前の敵に集中できる筈もない。苦悶に満ちた顔で、苦しいな声を上げて、リズベツトとユウキは守りを固めることだけに徹していた。

「ど、どういうことよッ!? アスナどこに行つたの……ッ!」

「わからないよっ! 突然光って、消えた!」

アクセル・ワールド
加速世界を飲み込む騎士達の群れ。

いかに彼らが、ソードアート・オンライン攻略組の一角を担ってい

た者達とはいえ、単騎で打ち払いきれぬ数ではなくなっていた。

それは波だ、絶え間なく続く波。一度は耐えきれぬかもしれない。しかし騎士達の波は、何度も何度も押し寄せる大海戦術の権化。その点で言えば、効率的と言えるのかもしれない。敵は一度で防がれたのであれば、直ぐに数を増強して再度押し寄せてくる。それを何度も何度も繰り返す。単純ではあるものの、一人を殺すためにこれほど効率の良い手段はない。何せ敵は——無限なのだから。

倒しても途絶えることもなく、敵の数に上限などない。

犠牲の上に成り立つ戦術、感情がない騎士達にこれほど相性が良いモノはないだろう。

対する加速^{アクセル・ワールド}世界の面々、並びにシルフ・ケットシー連合軍、ユー・ジーン將軍の部隊は人間だ。

あまりにも勝ち目がない戦争、そして正体不明の発光に包まれ消失したアスナの存在。疲労、そして困惑が一気に彼らの精神を蝕んでいく。

「アレは、^{テレポルト}転移です……」

ユイのポツリと呟いた言葉に反応して、ユウキのパープルブラックの長髪が流れる。

同時に、ボトリ、とユイの背後を襲いかかってきた一騎の騎士の首が弾け飛んでいた。

そして、仲間の仇討ちであると言わんばかりに、騎士達が徒党を組んで功を競い合うかのように、ユウキへと襲いかかった。

ユウキの反応速度であれば、騎士達の装備している剣、槍の一つや二つ容易く弾くことだろう。だが密集しているのなら話は別だ。それは槍袞となり、一つを弾いたところで直ぐに新手の獲物がユウキへと襲いかかってくる。

「ユウキッ！」

リズベツトはそれを事前に察知する。

彼女は片手に装備していたメイスを振りかぶり、近場にいる騎士の一騎を強引に叩き飛ばした。

意識外からの一撃。そうなってしまうえば、騎士に防ぐ術などない。脳天を叩き、そして吹き飛ばされた騎士が向かうのはユウキに突撃しようとしていた一団へ。

構えていた武器にリズベツトが弾き飛ばした騎士は突き刺さり、そのまま衝撃を殺すことなくユウキを狙っていた一団に打ち込まれ、何もかもを巻き込んで吹き飛ばされていた。

「ありがとう、リズ！」

「無問題、気にしないで！ それより、今ユイちゃんが気になることを言った！」

「そうだった！ ねえ、ユイ。それってどういうこと!？」

ユイへと推進してくる騎士を弾き返し、ユウキは切羽詰まった声で問いを投げる。

「あの光のエフェクトは転移テレポートです！ ソードアート・オンラインと同じモノでした！」

「転移テレポートって……。じゃあ、アスナはどこに移動されたのよ!？」

その問いに答えられる者はこの中にはいないだろう。

リズベツトとユウキはもちろん、ユイにだってそれはわからなかった。世界樹内部に声が聞こえるや否や、アスナの身体が光に包まれて消失していた。

誰もが反応できなかった。プレイヤーとは一線を画するAIであるユイにだって、感知することは出来なかった。

否、一人だけいた。

正体不明の声が聞こえ、アスナを呼んだ者が一人だけ存在する。

ソレは――。

「須郷だ……」

ギリツ、と奥歯を噛みしめる黒ずくめの影妖精族^{スプリガン}——キリトが吐き捨てるように忌々しげに呟いた。

それは誰なのか尋ねる前に、キリトは感情を押し殺した調子でユイに向かって口を開いた。

「ユイ、アスナの今の現在位置はわかるか？」

「いいえ、ごめんなさい。団長さんの情報は全て遮断されてます。こんなことが出来るのは——」

「ああ。この世界の支配者、高位IDを持つ者——ゲームマスターだけだ……ッ！」

キリトは片手に持っていたエリユシデータを握りしめ、上空を睨みつける。

それからアスナの搭乗していた飛竜に跨ると、鎖で繋がれた手綱を握りしめた。

「ちよ、ちよっと待ちなさいキリト！」

それを止めたのはリズベットだ。

今のキリトは明らかに冷静ではない。それを今までずっと見てきたリズベットは知っている。

いつもの彼であれば、冷静に分析し、効果的な一手を考え、それを全員に伝えている。そうして加速^{アクセラ}世界は生き残ってきた。ありとあらゆる危機を、キリトの策のおかげで生き残ることが出来た。

しかし今のキリトは冷静さを欠いている。

無策で無謀。気持ちはわかる。キリトの様子からすると、世界樹の頂上にユーキだけではなく、アスナもいるのだろう。助け出す筈の間が、助けた筈の間が、世界樹の頂上へ囚われているのだ。彼が感

情的になるのも無理はない。

だからこそ――。

「落ち着きなさいよ！　今、行ってもやられるだけじゃない！」

――キリトは冷静でなければならない。

冷静でいられないのなら、無理矢理にでも止める。少しでも感情的に行動してしまえば、この戦争は敗北してしまう。

俯瞰的な視点で考えて、リズベットはそう結論付けた。

「どけよリズ！　アイツが、アイツらがこの先にいるんだ！」

「だから落ち着きなさいって言ってるのよ！」

「俺は冷静だ！」

「何処が？　一人で突っ込むのが冷静だって言うの!?　馬鹿じゃないのアンタ！」

「それしかないだろう！　俺が突っ込んで活路を開くから、二人は行けよ！」

「ほんと馬鹿じゃないの!?　アンタが無謀なことやると、勝てる戦いも勝てなくなるの！　いい加減にしないと殴るわよッ！」

「二人ともヤバイよ、凄いで来てる！　ケンカしてる場合じゃないって――！」

ユウキの悲鳴が聞こえ、漸く二人は周囲へと意識を向ける。

いつの間にか、シルフ・ケットシー連合軍、ユージーン將軍の部隊から分断され、孤立していた。

見渡しても、誰がどう見ても、アクセル・ワールド加速世界は取り囲まれていた。

もはや一点を突破して、この危機敵状況を打破出来そうにない。何十にも、何層にもなって、騎士達は彼らを取り囲んでいる。一点を突破したところで、直ぐに包囲され殲滅されるのは明らかだ。

どうやら騎士達はこのままでは攻めきれない、彼らを脅威であると判断したようだ。確実に着実に、首を徐々に締めるように、その包囲

は狭まっていく。

キリトは飛竜を囿に使い、この難を逃れることを考えるが直ぐに改める。

無意味なのだ。例え強力な飛竜を使ったところで、状況を打破できるわけではない。直ぐに撃ち落とされる。

ならばどうする、どうすればいい、何をすれば。

諦めない。

例え絶望な状況でも、数秒後には蹂躪される運命だったとしても、キリトは諦めない。

何故なら、「彼」ならば諦めない。決着がつけられなかった、いつも争っていた「彼」ならば、諦めなかった。最後まで抗い続ける、最後の一瞬まで前を睨みつけて、獲物を振るい続けるに違いない。

ならば諦めない。「彼」が諦めないのなら、自分は諦めてなんていられない。きつと今でも、「彼」は、戦い続けているのだから――

―― 大丈夫 ――

声が、聞こえた。

それは先程世界樹に響いていた男の声とは違う。語りかけるような女性の声。聞いたことがある、女性の声だった。

どう言う現象なのか、声は加速世界アクセル・ワールドにしか聞こえない。それを証拠に、取り囲んでいる騎士達の包囲を崩そうと、シルフ・ケットシー連合軍、ユージーン將軍の部隊が騎士達へ突撃している。

誰もが、加速世界アクセル・ワールドを救うことだけを考えている。とてもではないが、女性の声など聞こえている様子もない。

声は続ける。

―― アスナとあの人のところに、アタシが連れて行くから ――

―― だってみんなが揃ってないと、加速世界アクセル・ワールドじゃないでしょ？

時刻不明

世界樹内部 謁見の間

「待っていたよ、ティターニア」

アスナを玉座から見下ろす男——須郷伸之の声が周囲に木霊した。

声が辺りに響いたのは、何も彼の声に覇気があつたから、というわけではない。辺りが死んでいるのだ。誰も音を発しない、生きている痕跡すらない。須郷——いいや、妖精王オベイロンは確かにこの世界の王なのかもしれない。彼の望み通りに世界を改変させて、絶対に落とされない虚像の城に彼は君臨している。

そう言う意味では、彼は間違いなく王であり、支配者である。

例えばそれが偽りの姿であろうと、王権を行使するのであれば、彼は間違いなく王なのだ。

そして王は、玉座でアスナを見下ろす。

足を組み替えて、下卑た笑みを浮かべて、余裕を伴った声で続けた。

「やつと僕の元へ帰って来たんだね？ いいさ、何もかも許そう。何故なら君は、僕の物なのだから」

そう言うと、須郷は立ち上がり、両手を広げた。

まるでこの場所を誇示するように、身体に纏った毒々しい緑の長衣の音を立てて。

「見てくれよ、君のために作ったんだ。謁見の間さ。下々を見下ろし、隣には君が立っている。王たる僕に素晴らしい場所だ！」

そう思わないかい、と得意気に口元を歪める。

それは他人が見れば微笑みの部類に入るのかもしれない。偽物と

は言え、今の須郷は妖精王オベイロンのものだ。容姿端麗、眉目秀麗の青年である。波打つ金髪が豊かに流れ、その額には金色の王冠。身体を包むのは濃緑のゆったりとした長衣。

妖精の王を自称するだけあって、その外見には気品と格調が備わっている。

「それにしても、その姿は何だい？　まるで現実世界の君じゃないか。いけないな、妖精王の妃となる者がそんな姿では」

妖精王は一人眩き、クスクスと笑みを零す。

その仕草はあくまで優雅なもの。愛してやまない玩具を見つめる、酷く歪んだ視線でアスナを見つめている。

しかし、アスナにはこれまでの須郷の言葉は耳に入ってきていなかった。

彼女が呆然と見つめるのは須郷ではない。

全貌に佇む白銀の鎧。頭部は兜に収められており、表情が読むことが出来ない。

だがアスナは知っている。彼が誰なのか、アスナは知っている。持っている獲物も両手剣ではなく、方天画戟と呼ばれる長物であるが、間違いなく佇む姿は彼のものであった。

対する白銀の戦士は何も発しない。呼吸しているのかすら定かではないほど、静かなものだった。

それは、ありえない。もし仮に彼が、*彼* あるのなら自分を前にして黙っているのはありえない。いつだって守られてきた、いつだってその背を見て来た。なのに彼は、アスナを前にして何も言わない。

心が軋む、眼球が揺れる、動機が激しくなる。アスナはある結論に行き着き、激しく動揺していた。彼が何も言わないということは、つまり――。

「……………」

「彼」が——何カ サレタ——。

「……彼が気になるのかい？」

——どくん、と。

——鼓動が一際激しく、響いた気がした。

漸く、須郷の言葉がアスナの耳に入る。

呆然とアスナは須郷を見上げると、彼はその視線に機嫌が良さそうに満面の笑みを浮かべて続けた。

「いいだろう、その姿。やっぱり王に騎士はつきもの。最高の王には、最強の戦士が付いていなければならない」

「……黙って」

「アインクラッドの恐怖なんて無粋さ。ツギハギの装備なんて、優雅さに欠ける。石造りの両手剣なんて目に余る。王の近衛兵であるのなら、鎧も小奇麗なもの、武器も最強のもでなければ」

「黙りなさい——！」

遮るように、アスナの悲鳴にも似た怒声が辺りに響き渡った。

対する妖精王は肩を竦めるのみ。極めて涼しげに、その怒りを受け止めている。彼にとってアスナは自分の物であり所有物に過ぎない。いくら吠えたところで驚異になることなく、叛逆者にも映らない。

故に、妖精王の余裕は崩れない。

それでも、アスナは気丈にも鋭い声のまま叫んだ。

「彼に、優希くんは何をしたの!？」

「何をした……?」

そこまで言うと、須郷は笑いを堪えるように、片手で口元を抑えていた。

ように、ではない。彼は本当に笑いを堪えている。楽しくて楽しく

てたまらない、そう言うかのように肩を大きく揺らして必死に声が漏れるのを堪える。

その調子のまま須郷は答えた。

アスナの問いに、耳障りな笑い声とともに彼は――。

「――それは、どこまでのことを言うのかな？」

「……何ですって？」

「フフツ、いいさ。最初から教えてあげるよ」

下卑た笑みを浮かべながら、再び須郷は玉座に座する。

そして須郷は誇るように、自賛するように、称賛するように、今まで何をしたのか歌うように言葉を紡ぎ始めた。

「君は知らないかもしれないけど現実世界ではね、君と彼を含めた301人が目覚めていないのさ」

「それは知ってるわ、全て貴方が元凶だということもねツ！」

「ほう、それなら話しが早い。僕がどうしてこんなことをしていると
思う？」

「知らないわよ、貴方の考えることなんて！」

肩を竦め困ったように笑みを浮かべて、須郷は意に介さずに続けた。

「彼らを集めたのはね、実験する為さ。記憶の改竄、人間の感情や思考を意のままに操る為の――人の魂を直接制御するためのね――

――！」

「……………ツ!？」

ぐらり、とアスナの視界が揺れる。

吐き気がする。笑みを浮かべる須郷もそうであるが、何よりも生物の領域を超えた、倫理に反する研究を行っている、須郷の人間性に吐

き気を催す。戸惑いなど彼にはない。それを証拠に、須郷は破顔している。喜々として己を神であると定め、今も玉座に座している。

普通であれば、ありえないと切り捨てるモノだ。人を思い通りに操るなど、そんな馬鹿げたこと出来るわけがない。

出来るわけがない。だからこそその実験体なのだ。不可能を可能にするために、彼は実験体を欲した。それがアスナやユーキであり、他のSAOプレイヤー299名なのだろう。

「二つ誤算があるとすれば、それが優希君さ。彼と僕は契約したんだ。自分が実験を請け負う代わりに、残りの300人には手を出さなつてね」

「それじゃ……優希くんは……、囚えられていただけじゃなくて……」
「ああ、君にも見せてやりたかったなあ！　どんだけ痛めつけてもさあ、泣き言一つ言わないんだぜコイツ！　本当に笑えたよ、愚かにも程があると思わないかい？」

身体をくの字に曲げて、玉座の上で爆笑を始める。

その言葉は毒だ。アスナの身体の内側から侵食するような、負の感情とも呼べる闇が心を覆っていくような、殺意にも似た隅よりも黒く、闇よりも黒い感情が生まれ始める。

だがそれだけでは終わらない――。

「本当に馬鹿だよね――」

須郷から放たれる言葉は、猛毒となって――。

「――僕が、実験体を目の前にして、コイツとの約束なんて守るわけないんだから」

――アスナを侵食する。

彼女は呆然と問いを投げる。眼には光など宿しておらず暗い闇を

その内に秘めて口を開く。

「……貴方は、彼の気持ちを踏みにじって……」

「おかしなことを言うね、テイターニア。僕が茅場の言うとおりにするわけがないだろう？ 実験はしたし、茅場を痛めつけたよ。ああそ
うだ、病室で桐ヶ谷くんに会ったことを言ったら頭まで下げてきたっ
け？ 全く必死過ぎて引くくらいだよ」

「黙りなさい。もう、口を開かないで」

もはや表情は消えている。

抜き身の獲物——ランベントライトを片手で構える。

一刻も速く、何よりも疾く、玉座にいる男を黙らせないと、気がす
まなかった。煮えたぎる黒い感情は彼女の力となり、覚醒しようとし
ている。

瞬間——。

「……違う」

頭を横に振った。

そうではない、須郷などどうでもいい。自分がここに立っている理
由を、彼女は思い出した。

まず前提からして、間違っていた。

須郷を倒すためではない、痛めつけることでもない。彼女の目的は
——茅場優希の救出に他ならない。

それに彼は、アスナに言っていた。——オマエは弱くない。オ
マエは——強い、と。間違った力に支配されるな、とアスナの中
の彼が鼓舞する。

ならば負けてはならない。怒りに我を忘れてはならない。深く息
を吐きだし、思考を鮮明にしていく。

「そんな口を聞いて良いのかな？ 僕の戦士であると同時に、彼は君

への人質でもある。僕の気分次第で記憶を作り変えることも――
――
「甘く見ないで」

遮られ妖精王の顔が曇る。

見る見るうちに不機嫌なモノに変わり訝しむ眼でアスナを見るも、
彼女は気にすることは無い。

凜とした口調で、堂々と須郷の言葉を切って捨てた。

「優希くんは負けない、貴方程度の男に負けない。彼を、甘く見ないで

――

「……チツ、調子に乗りやがって」

苛立ちげに呟かれると同時に、小気味よく指を鳴らした。

同時にアスナの背後で、何かが這い出てきた。その気配は一つでは
ない。数十体、何百体の規模となって、這い出てくる。

振り返る。

世界樹内部に存在した騎士――ではない。

もつとグロテスクな、奇形で異様な二足歩行の生物であった。

皮膚と言ったモノはなく、強靱な筋肉の繊維むき出しとなつてお
り、その右手には巨大で大きな爪を有していた。

何よりも注目するのはその頭部だ。眼球はなく、鋭利な歯が口元か
ら覗いている。肥大化した脳が露出しており、ソードアート・オンラ
インでも見たことがないほどの気味が悪い生物。

あまりにも異様なデザインに、数歩引くことだろう。

しかし須郷は違うようだ。

彼は得意気に異様な怪物達を見て、誇らしげに告げる。

「――ベルセルク。それら彼らの名であり、その長であるのが彼
や」

同時に、今まで静観していた「彼」が——ユーキが動いた。その手には、例の長物。それは槍のような刃の片側に三日月状の大きな刃が付いている。西洋で言うところの、ハルバードにも似たような形状で、青龍戟または方天画戟——それがその武器の名称。黒色に染まった画桿の方天戟。穂先を床に向け、ガシヤと音を立ててアスナに歩み寄る。

「前門の虎、後門の狼ってやつかな？ さて、どうするテイターニア？」

「……」

アスナは答えない。

無言で須郷に向ける。それはつまり——ユーキにも背を向けるということ。

その姿に須郷は呆れるようにため気を吐いた。やれやれ、と軽く首を横に振って。

「……強情だな。まあいいさ、遊んでやるんだベルセルク。傷はつけるなよ？」

「……」

ユーキは無言で応じた。

一步、一步、着実に歩を進める。

アスナはそれでも振り向かない。

あくまで今の彼女の敵は目の前の異様な怪物。決してユーキではないと、無言で断じていた。

しかし、白銀の戦士——ベルセルクと呼ばれた彼は意に返さない。い。

方天画戟を片手で持ち、水平に構える。そして——。

「」

——横に一闪、斬りつけた——。

第19話 いつか覚める夢

けたたましい音が、部屋中に鳴り響く。

それはケータイのアラーム。朝であることを知らせるモノだった。

「んー……」

苦しいのか気持ちいのか、どちらともとれる声を漏らし部屋の主は寝返りを打つ。

それは少年であった。シーツに包まって、ベッドに体を預け眠っている。

カーテンから照らされる日差し。8月中旬であるためか、比較的その陽射は強いものであった。照らすというよりも、刺すと言った表現が正しいのかもしれない日差しを少年は受けている。しかし、不思議と居心地の悪くもなく、少年の表情も苦悶に満ちたモノではない。どちらかという穏やかなモノ。

その為なのだろうか。

少年は直ぐに起きることなく、両手を縦横無尽に伸ばしまさぐる。どうやらケータイのアラームを止めようとして、ケータイを探しているようだった。

だが一向にケータイのアラームは鳴り止まない。

今の少年はうつ伏せで寝ている。それが原因となっているのか、ケータイがどこに有るかまったく分かっていない状況。

既に、アラームが鳴ってから30秒は経過しているものの、未だにケータイのアラームを停止することが出来ずに居た。

「……………」

そこでようやく少年は顔を上げた。

その髪の毛は黄金。そして、眠たそうにしている双眸の瞳は碧眼。

高校生なりたてのような、幼さを残した顔つき。

何はともあれ、少年は寝ぼけ眼を擦りながら、ケータイのアラームを消して今の時刻を見る。

今の時刻は7時30分。そろそろ学校へ行く用意をしなければ間に合いそうにない時間だ。

だが少年は慌てることなく、ケータイの電源を切り身体を伸ばす。何かを忘れている気がする。それは漠然としたモノで、何を忘れたのか思い出そうにも、自分は一体何を忘れたのかすら思い出せない。大事なものであったはずだ、忘れてはならないものであった筈だ。それなのに、どう言うわけか思い出せずに居た。

辺りを見渡す。

就寝前と何一つ変わらない自身の部屋。

物は最小限のもので、ベッドと机がある程度。十代の若者の部屋にしては何もなさすぎており、伽藍堂のような室内とも言える。

少年も流石にどうか、と思っているようで、その有様を苦笑を浮かべて見渡した。どうしようもない。もちろん、少年にも物欲がある。だが今の現状が落ち着くのだ。必要最小限の部屋の中で、ぽつんと設置されている机とベッドが落ち着く。若者らしくないことは少年が一番良く理解しているものの、こればかりは仕方ないと言える。

「起きるか。そろそろだしね……」

ポツリと呟いた瞬間、少年の部屋と廊下を隔てる扉が開かれる。ノックがないのは、少年を驚かせようとするイタズラ心故なのだろう。

入ってきたのは少女だ。

白色のヘアバンドをつけて、中学生のような幼い顔つきの少女。学校指定の制服を着用しており、その姿はいつでも学校に行けるというスタイル。

笑顔で入ってくると同時に、面白くなさそうな顔つきに少女は変わる。

ブーブー、と少女は唇を尖らせて文句を言いたげな顔で。

「なんだあ、兄ちゃん起きてたんだ……」

「勝手に入ってきてきて何だよ。兄ちゃんは悲しいよ?」

困ったように少年は笑みを浮かべて、少女の苦言を受け止めた。

どうやら二人の間柄は兄妹のようだ。お互いがお互いとも、悪い意味ではなく良い意味で、気を使っている様子はなかった。兄妹特有の慣れ親しんだ雰囲気、それは二人から醸し出されている。

兄の余裕に満ちた表情と態度が面白くなかったのか、少女は、むう、と頬を膨らませる。

「僕だって兄ちゃんを起こしたいもん! だから……ね? もう一回寝て?」

「無茶言ってくれるなあ……」

「だってえ、兄ちゃんを起こされてるの明日奈だけじゃん。僕や詩乃起こす時は、絶対に起きてるのにさあ。不公平だーっ! ふーこーへーいーだー!」

「そうかな?」

「そうなの!」

ワガママな妹の言い分に、ため息をつく。

別にイヤというわけではない。幼い頃から、父親に兄とは妹を守る存在である、と教育されてきておりこれが少年にとっては当たり前となっっている。何よりも少年にとっては、少女は可愛い妹。ワガママの一つや二つに目くじらを立てるわけがなかった。

「わかったよ。今日、木綿季の好きなアイス買ってやるから、機嫌直してくれよ。な?」

「……雪見だいふく、食べたいな」

「はいよお」

少年はベッドから起き上がって、妹——木綿季に近付いた。ニツコリと満面の笑みを浮かべて頭を撫でる。

木綿季は眼を細めて、気持ちよそうに顔を綻ばせて。

「うん、許してあげるね！」

太陽のような温かい笑みを、兄に向けるのだった——。

「おっ、起きたか寝坊助」

あれから学校指定のブレザー式の制服に着替えた少年は、二階にある自室から降りて一階のリビングに向かった。

そのソファーには一人の男性が上に腰を掛けて、新聞紙をテーブルの上に広げている。男性は少年がリビングに入ってくると、ニカツ、と気持ちのいい笑みを向けて声をかけた。

タンクトップに短パン。比較的その姿はラフであり、肌を露出したモノだ。それ故に、男の筋肉質な身体が映えて見える。

医者なのに、相変わらず凄い身体だ。

と、ぼんやりと少年は思いながらキョロキョロとリビングを見渡す。

身嗜みは整えている。シャワーも浴びて、顔も洗い、歯も磨いた。あとは学校に向かうのみで、何かを探すこともない。しかし少年は見渡す。妹がいる、父親である男性がいる。残りと言えば——。

「父さん、母さんは何処に行つたの？」

そう、母親であつた。

いつも笑みを浮かべて、包容力の塊であるかのような女性の姿が、妹が大変懐いていた母親の姿が見当たらない。

寝坊、という可能性はないだろう。母が寝坊しているのなら、いつも起こされている父はこうして呑気に新聞を広げている筈もない。何よりも少年が記憶している限り、母が寝坊している姿など見たことがない。生真面目、といつても過言ではない。いつも何をするにしても、少年の母は10分前行動を心がけている。そんな人間が寝坊するなど考えられない。

父は訝しむ視線を、少年に送る。

そして呆れるような口調で。

「何いつてんだオマエ？ アイツなら昨日から、学会に行つてただろ」「あれ、そうだっけ？」

「昨日、オレが作った飯を木綿季と一緒に不味い不味い馬鹿にしてただろうがよ……」

そういえばそうだった、と。少年は先日の夜の状況を思い出す。

不味い、なんてレベルでもなければ代物ではない。例えようなない料理。父の出した自信作は、少年と妹の胃にクリティカルダメージを与えてとんでもない負価値を叩き出していた。

命名するのなら『物体X』。卵料理だということはわかつたものの、テラテラ光り、ヌルヌル蠢いていたアレは何だったのか。今だに何なのか少年は聞き出せずにいる。むしろ聞き出しはならない。正体不明の第六感が、少年に告げていた。

「オマエも木綿季も、よくもまあ人の料理を不味いつて言えたもんだよなア？」

「だって不味かつたじゃんか。父さんも食つて、固まつてたろ？」

「……全部食ったぞ?」

「それはオレ達もだよ。出された物を残したら、母さんが泣いちゃうじゃん」

「……まあな」

父と子。二人揃って遠い目で、彼方を見つめる。

居てわかるありがたみ、居なくなつてわかるありがたみ。二人は勝手に味わっていた。

そして何よりも、またあのおぞましい料理を食わないとならない憂鬱。死刑宣告にも似ている状況が、少年の眼を更に殺していくことになる。

まるで生気を感じさせない眼で明後日の方向を見つめて、ポツリ、と一言だけ呟いた。

「明日奈に、作ってもらおうかな……」

「あつ、テメツ卑怯だぞ!」

「え、なんでさ?」

「明日奈ちゃんはダメだ、料理が美味すぎる。オレの料理が霞む。何よりも、京子に何言われるか分んねエだろ!」

「いや、父さんの料理は料理じゃないし。むしろ兵器に近い何かで、晶彦くんの方が作った物のほうがなんぼかましだし。京子さんも何も言わないと思うよ?」

「わかった、じゃあこうしようぜ。晶彦の作った料理とオレの料理、どっちが美味いか対決だ」

「地獄だよそれ……」

ため息を深々と、これでもかというくらい少年は吐き出した。

兄さんは治すのは上手だが、何かを作り出すのは下手だ、というのは叔父である茅場晶彦の言葉。確かに晶彦の言い分は的を得ていた。それは少年を含め妹である木綿季も経験している。

そして学習している。父には金輪際、台所には立たせまいと。料理

対決などさせてはならない。今日の食事当番は自分が担当しよう
と決める。

となれば問題になるのはメニューだ。

作る物によっては、学校帰りにでも買い物に行かなければなら
なくなってくる。

それは妹に手伝ってもらおう、とぼんやりと考えて木綿季に声を
かけようとするが、彼女の姿が見当たらない。

「ねえ、父さん」

「何だよ息子」

「木綿季はどこにいったの？」

「アイツなら外で明日奈ちゃんと話してるぞ？」

「えっ、もういるの？」

「おう。さっさと行ってやれ」

新聞紙から眼を離さずに、片手を振る。

いるならいると言ってほしい。文句はあるが時間が惜しかった少
年は、慌ててカバンを持ちリビングを出ようとドアノブに手をかけ
る。

同時に。

「そうだ——」

背中から声がかげられた。

その言葉は何気なく、誰しもが耳にしたモノ。それが少年の父の口
から放たれた。

「行って来い——優希」

ありえた未来、経験したかった物語、手放してしまった光景。それを一人の「彼」が呆然と観測していた。

それは少年——優希と呼ばれた少年に瓜二つの顔。髪の毛は黄金で、双眸は碧眼。高校生になりたてといった幼が残る顔つき。ただ差異があるとすれば、その顔つきだろう。先程優希と呼ばれた少年の顔つきは穏やかなもの。対して観測している「彼」の顔は険しく、鋭い眼で優希少年とは比べくもない厳しい顔をしている。

観測と表現をしたのは、何も比喩としてではない。

様子を見て、成り行きを推し測ること。そう言う意味では正しいと言える。「彼」には優希少年に干渉出来ない。触れることもなく、あちらから認識されることなく、ただ黙認し優希少年を「彼」が観測している。

何度も見てきた。ありふれた幸福、それを享受する優希少年を、「彼」は何度も見てきた。義務としてではなく、そうあるべき未来として。「彼」は自身が観測している光景を、深々と記憶と脳内に刻みつけていく。

「——これでわかっただろ？」

声が聞こえた。

いつの間にかソレは、「彼」の隣に立っている。肩を並べて、視線の高さは違えど同じ光景をソレと共に見ていた。

ソレは片手を掲げて、優雅に小気味よく指を鳴らす。風景が変わった。

今度は優希少年と仲良く登校する三人の少女の姿があった。

それは妹の木綿季であり、後輩である朝田詩乃であり、そして——

——幼馴染である明日奈でもあった。

仲睦まじく、四人は登校する。

ときに冗談を言い、ときに勉強のことで相談し合いながら、最後にはやはり冗談を言い合っている。

途中から黒髪の少年——キリト、茶色の頭髪の少女——リズベットも合流し、比較的大人数で学校へ登校を始める。

仲の良い集団だ。

それを証明するように、誰もが笑みを零す。楽しそうに、愉快であるかのように、心の底から笑みを浮かべていた。

まるで見せつけるようだ。

自分には記憶にない光景。きつとこれは、「彼」と肩を並べている者が作り出したものだろう。

ソレは下卑た笑みを顔に張り付かせていた。

妖精王オベイロンの姿をかたどったものではなく、長身でメガネを掛けたソレは現実世界でのモノ。

ソレの名は——須郷伸之。件のSAOプレイヤー301名拉致の主犯格でもあり、全ての元凶の姿がそこにあった。

「アレはね、僕が作り出した君だ。両親を犠牲にすることなく、共に生還した君の姿」

趣味が悪い、と「彼」は表情を変えずに優希少年を——自身では出来なかったことを偉業を達成した自身の上位互換とも言える存在に目を向けた。

しかし悪態を付く様子はない。須郷が何を言いたいのか理解しているし、何が狙いなのかもわかっている。それでも「彼」は否定しなかった。間違っていると、口を開けなかった。否定も拒絶もしないのは単純な理由だ。

「君が君でなければ、あんな悲劇は生まれなかった。そう思ってき、彼を作ったけど根本的に間違っていたよ」

そもそもな話し、と須郷は言葉を区切ると再び指を鳴らす。

「彼」の瞬き一つで世界は、風景は、舞台は切り替わる。そこには

「君という存在がいなければ、今までの悲劇は起こらなかったんじゃないか？」

——茅場優希という人間が、存在しない世界が、創造されていた。

それは須郷の言うとおり、「彼」という存在が消失したモノだった。

木綿季は「彼」の両親が引き取っており、幸せそうに暮らしている。

茅場晶彦はその世界ではVRMMOの更なる発展と遂げさせ、悠々自適に暮らしていた。

リズベツト、ユイ、そしてストレアは楽しそうにVRMMOで遊んでいる。

それは後輩の朝田も同じであった。どういう経緯で知り合ったのか、その輪に彼女も存在している。

何よりも——仲睦まじく、明日奈とキリトラしき少年が共に歩いている。

自分という異分子がない世界、自分という汚点が存在しない物語。

誰もが笑っていた。誰もが幸せそうだった。泣かしてばかりだった、幼馴染でさえいつも笑みを零していた。

「彼」が否定しないのはそう言うことだ。

須郷は語る——君の存在など不要であると。

須郷は殺す——茅場優希の心を。

須郷は見せつける——その結果を。

故に、否定しなかった。

それが正しい、と思ったから。間違いではない、と常に感じていたから。

「君がいなければ、君の両親は自身を犠牲することはなかった――」

――間違いではない――。

「君がいなければ、君の妹さんも新しい両親と共に幸せを噛み締めていた」

――間違いではない――。

「君がいなければ、朝田さんの母親のカウセリングも上手く行っていただろう。君の両親のおかげでね」

――間違いではない――。

「そうなれば、茅場先輩は狂うこともなかった。兄がまだ健在なのだから」

――間違いではない――。

「ソードアート・オンラインもデスゲームとなることもなく――」

――間違いではない――。

「――明日奈は今も笑っていたことだろう」

――何も、一つも、一片も、間違いではない――。

目を閉じることなく、心も閉ざすことなく、膝を折ることもなく、無言で須郷の言い分を肯定する。

須郷は口角を釣り上げるように薄く笑みを零し、下劣さを深めていく。事が思い通りに進んでいることを信じて疑わない表情で、甘く、彼の心を掌握せんと毒のように浸透させていく。

「でもね、僕は君の未だに折れない心の強さというやつを評価してるんだ。君は見失っているだけさ、進むべき道というやつを。でもさ、もう休んでも良いんじゃないかな？」

「……休む？」

今まで無反応であった、彼が自身の言葉に反応する。

墜ちた、と確信したのだろう。須郷の笑みはますます深まっていった。気分が高揚し、抑えが効かんとするかのように両手を広げて一度力強く領いた。

「そうさ！ もう君は休んでも良いんだ。だって君はこれまで頑張ってきたじゃないか！ 意識を沈ませて、心を溶かし、もう休みなさい。もう君は頑張る必要なんて、ないのだから」

そこまで言うと、須郷は明後日の方向を見る。

そして直ぐに顔を喜色満面に変えて、彼に背を向けて歩き出した。直ぐに振り返り、下卑た笑みを浮かべて彼に告げる。

「安心しなさい。君は僕が上手く——使ってあげるから」

それだけ言うと、須郷は消えた。

文字通り、この空間から、塵も残さずに消える。

何処に消えたのか、使うとはどう言う意味なのか、理解出来ずに、彼は精気を失った眼で見送る。

須郷の言うことは何もかもが正しかった。

自分というバグがいなければ、この世界はもっと円滑に回っていたに違いない。もっと上手く物語が紡がれていたに違いない。

常に考えていた。自身が生き残ってから、「彼」は考えていた。自分が生き残ってしまったのは間違いであると、常に、考えていた。

実際に間違いだらけだった。

一人ひた走り、誰かを泣かせる。他人が傷つくのが我慢出来ないから行動していると、誰かを悲しませる。手を伸ばしても救えなかった命なんて、両手の指だけでは足りない。

そもそもな話し、自身ではなく両親が生き残っていれば、叔父は狂気に走ることもなかったはずだ。そうなれば、ソードアート・オンラインがデスゲームとなることもなく、健全なVRMMOとして愛されていた筈だった。

そうなれば木綿季は無理して自身に付いてくることもなく、ストレアは自らを犠牲にし自身を救うこともなく、何よりも明日奈はもつと笑っていたはずなのだ。

何もかもが間違いだった。

前提からして破綻していた。

——自分という人間は、生き残るべきではなかった——。

ならば眼を瞑ろう。

歩みを止め、心を溶かし、存在を闇に帰そう。

そうすれば終わる。カーテンコールなど起こることもなく、「彼」という間違った存在は葬られる筈だ。

そう、それだけで終わるのだ。たったそれだけで、終わるのだ。それなのに、どうして——。

「……」

「彼」という存在はまだそこにあった。

認めたはずだ。間違いであると、肯定したはずなのに、「彼」は眼を閉ざすことなく自身がいない世界の幸福を焼き付けていた。

心など折れたはずだ。もう限界だったのに、闇に溶けてしまえば楽であるとわかっているのに、「彼」は未だに留まっていた。

「——楽だけじゃ嫌なんだろう？」

背後から声が聞こえた。

ビクツ、と“彼”の肩が大きく揺れる。

聞き覚えのある声、懐かしい声、何度も“彼”のうちにあった力強い声が聞こえた。

歓喜と悪寒。どちらともつかぬ入り混じった複雑な感情が“彼”を駆け巡る。あまりにも恐ろしく、あまりにも懐かしい声、そちらに“彼”は振り向いた。

「心が折れた？ 冗談。もう限界？ 馬鹿言うな。まだオマエがいる、それが物語ってるじゃねえか」

筋肉質の男性が、呆れた口調で首を横に振って。

「そうですね。私達の子供は、本当に諦めを知らない。実に誇らしいことですよ」

柔らかな笑みを浮かべて、金髪碧眼の女性が傲慢気に断言する。

夢か幻か、二人は——“彼”の両親は変わることなく肩を並べて立っていた。

数刻前に見た二人とは違う。表情は悪鬼羅刹のそれではなく、言葉は怨霊怪異の如く呪詛を含んだものではない。

生前と変わらない調子で、両親は“彼”を見守っている。

「何で、だ……」

ポツリ、と。

「彼」は意図もせずにはいていた。それは無意識なものだ。決して考えて紡がれた言葉ではない。

しかし感情は濁流のように。一度吐き出してしまったモノは、収まることなく「彼」の口からとめどなく流れ始める。

「何でアンタ達は、オレを助けた……」

「……」

「……ッ」

父は目を閉じて受け止め、母は申し訳なそうに顔を付す。

もはや止まらない。「彼」の言葉は次々と溢れ出す。

「オレは、助けられるべきじゃなかった。なのに何故、オレを助けた……っ！ 何故、アンタ達は自分を犠牲にした。何故、オレを見捨てなかった。アンタ達なら、自分達だけでも治療出来た筈だろ。死にたくなかった筈なのに、アンタ達なら知らねえ連中を助けられた筈なのに、何万人以上も救えた筈なのに……。何で、何でえ……ッ！」

それは後悔であった、懺悔であった、遺恨であった。

吐き出せなかった「彼」の淀み。恐らく長い付き合いである幼馴染ですら知り得なかった「彼」の闇が、ここに来て一気に放出されていく。

ぶつける対象がいなかった故に、それはずっと溜め込んできた。吐き出されることもなく、自身に向けた憤怒、そして憎悪によって辛うじて抑え込んできた。

しかし限界であった。

夢か幻か、はたまた須郷の罨か知らないが、両親が生前と変わらずに目の前に現れた。

それが引き金となる。爆発した感情は決壊したダムのごとく、際限なく溢れ始めている。

奥歯を噛み締めて、両手に握りこぶしを作り、**彼**は感情のまま叫んだ。

悲鳴にも似た声で、両親に向かって思いつきり叫んだ。

「何で、何で……ッ、オレなんぞを選んだんだ、アンタ達はッ！」

「バカ野郎がよオ」

対して父の声は静かなものだった。

腕を組み眼を瞑った状態で清聴していたが、今は眼を開けて真っ直ぐに**彼**を見つめる。

そして――。

「――てめえ自分の子供ガキを救わねエ親が何処にいんだ？ 親ならよオ、何が何でも生き残れって言うもんだろうが」

「そうですよ。私達は間違いではない。貴方を助けたことは決して、間違いではありませんよ」

そもそもよオ、と父は大股で**彼**に近付いて、その頭を小突いた。それから今も繰り返らされている、**彼**が存在しない世界を親指で乱暴に指さし、聞き分けの悪い子供を叱るように、父は呆れた口調で言う。

「こんな幻に、何をマジで見てやがんのオマエ？ ンなもん、ただの妄想だろ。シコシコ虚しく夢想してるだけだろ」

「……間違っつてはいないだろ。アンタ達が生きていれば、こうなつた筈だ」

「ならねエよ。オレ達は神サマジやねエんだ。こんな上手く行かねエし、オレ達にも救えないものはある」

そこまで言うのと、父は頭をガシガシと面倒くさそうに掻いた。それから直ぐに、**彼**に向かって勢いよく指差すと。

「まさか、オマエ。オレ達の願いを忘れたわけじゃねエだろうな」

「願い……?」

「いいや、忘れたわけじゃないか。単純に、聞こえないフリをしていただけか」

呆れたように、父は深くため息を吐いた。呆れているのは母も同じよう、彼女も困った笑みを浮かべている。

チツ、と舌打ちをする父は、*「彼」*に再び向き直った。真正面から、堂々と、目を逸らさずに、心に訴えるように、願う。

ソレは――。

『生きる。オマエはオレ達の生きた証だ』

「あ――」

ピシリ、と音を立てて罅が入った。

それは比喻ではなく、今まで繰り広げられていた *「彼」* という存在が消失した世界が軋む音だった。

父の言葉。それは *「彼」* が救われる前、意識を失う前に聞こえた言葉であった。耳に入ってこなかったと思っていた。だがソレは違った。*「彼」* は自身を否定している、だからこそ聞こえなかったフリをしていたのだ。

生き残るべきではない、*「彼」* の出した結論の根底が揺るがされる言葉であるからこそ、*「彼」* は敢えて耳を塞いでいた。

呆然と立ち尽くす子を、母は思いつきり抱きしめた。

碧眼の双眸には涙を浮かべて、漸く抱きしめることが出来た我が子の存在を感じながら、声を震わせて紡いでいく。

「貴方は立派に頑張りましたよ? 本当に、今までずっと見てきました。直ぐにでも貴方の下へ行きたかった、貴方を抱きしめてあげたかった……!」

「オレは、立派なんかじゃ……」

「いいえ、立派でした。私達なんかよりもずっと。それにずっと苦しんでいた。もう大丈夫です、もう自分を攻めなくてもいいんですよ」
「……ッ！」

「——貴方はもう、自分を許してあげても、いいんです」

「そうだな、よくやったよオマエ。——さすが、オレ達の子供だ」
ガキ

褒めてもらいたかったわけではない、認めてもらいたかったわけではない。
はない。

だというのに、母の言葉は、父の言葉は、
「彼」
という心の闇を晴らすには、充分なきっかけとなった。

もはや「彼」が消失した世界は粉々に砕け散っている。

しかし、新たな光景が視界に入り、「彼」は困惑気味に呟いた。

「なんだ、これは……？」

恐らく世界樹内部の映像なのだろう。

翅を広げている者達が上層へと登っていく。大きく屈強な巨人に何十人かかりで挑んでいる者がいれば、天をも覆い尽くす騎士達に歯を食いしばりながら拮抗している者達までいる。

何よりもその光景だ。とても現実味がない光景、まるでゲームの世界であるかのようなファンタジー要素の高い状況。

そこで「彼」は目を見開いた。

見覚えがある姿を見て、その者達に「彼」は注目する。

それは黒ずくめの男であった、それは桃色の頭髪の少女であった、それは紫色を強調とした少女であった、それは幼い長い黒髪の幼女であった。何よりも——。

「明日、奈……」

それは——『紅閃』と呼ばれた彼女そのものであった。

抱きしめていた身体を離し、そつと母は「彼」の肩に手を乗せた。

「貴方の仲間ですね」

「ああ、どうしてアイツら……」

「みんな、貴方の為に戦っているんですよ。」

「……ッ!？」

何を馬鹿な、と「彼」は困惑していた。

「彼」の仲間は先陣を切つて上層へと駆けている。となると、他の者達も仲間達によつて担ぎ出された可能性が高い。

「オマエはオマエが思っている以上に、大事にされてたつてわけだ」

「そう、みたいだな……」

「わかつたら、さつさと親離れしやがれ。死んでる奴らに悔いてる暇あつたら、今を楽しめつてんだよ。笑つてるやつは大抵強いもんだ、オレから言わせてみればオマエは笑顔が足りねエ」

だから、と背後から。

ですね、と後ろから。

「——行つて来い、息子!」

「——助けられてきなさい!」

力強い張り手。

後押しする手。

同時に「彼」の背中に叩き込まれた。

思わず「彼」は前へと足が進む。

振り向きたかつた、最後に顔を見たかつた。これで多分、両親と会話できるのは最後になると思うから。

だがそれは出来ない。親離れしろ、と父は言った。自分をもう許して上げなさい、と母は言った。きつとこれが、振り向かずに行くのが、

親元から離れるということだと思ふから――。

「……………」

未だに“彼”のうちからは炎が灯っている。

収まることなく、弱まることなく、自身をこれからも焦がしていくことだろう。

今は無理でも、それでも。いつかは、きつと。母の言うように、自身を許せるようになるまで、付き合っていくしかない。後悔もある、未練もある、自身を許すことなど直ぐには出来そうにない。

母は仕方ない子と笑うだろう、父は一旦受け止めてそれでも精一杯生きてみろ、と後押しすることだろう。

“彼”は笑みを零す。

道標は得た。

心は最後まで折れることなく、膝を屈することもなく、目を閉ざすこともなく、闇が晴れたわけでもない。

それでも、前を見る。道標を見つけて、答えも得た。あとは進むのみ。

「――父さん、母さん。行って来るよ」

いつてらっしやい。

そんな声が聞こえた――。

——横に一閃、斬りつけた——。

黒色に染まった方天画戟は一片の狂いもなく、標的の上半身と下半身を両断する。そして傷口から、炎が、蒼き焰——蒼焰が発火し始める。

その火力は明らかに上がっている。何もかもを焼き尽くす焰、自身すらも焦がす蒼焰は、猛々しいまま、何よりも神々しく輝いていた。それを玉座から見守っていた妖精王オベイロンは立ち上がる。

歡喜してではない。目を見開き、ありえないものを見るかのように、自身がベルセルクと名付けた白銀の騎士を見つめていた。

いやいや、と首を横に振る。現実には起きた現状を受け入れられないように、白銀の騎士を指差して——。

「ぎ、きき、貴様あ！……どうして、どうして——！」

「チツ、ンだこれ暑苦しい」

白銀の騎士は答えない。

悪態をつきながら頭部を守っていた兜に手をかけて、強引に脱ぎ捨てる。そして自身の戦果を見やった。

斬り伏せたのは異型の二足歩行の怪物、その数五体。

紅閃の少女の身体は——無傷。

白銀の騎士は君臨する。

蒼焰の上に、斬り伏せた怪物を足蹴に、片手で方天画戟を持ち穂先を怪物たちに向ける。

「悪い、手間取った」

「ううん、信じてたから」

背中合わせに。

紅閃は剣先を玉座に君臨する妖精王に向ける。

それから万感の想いで彼女は言った。

「おかえり——優希くん」

アクセラ・ワールド
加速世界のメンバーが一人。アインクラッドの恐怖が、ここに復活を果たす——。

第20話 終局焰武・絢爛炎帝

時刻不明

世界樹内部 謁見の間

「答えろ！ な、何故、ききき貴様は——！」

その声は、絶叫に良く似ていた。

ありえない現象を眼にして理解を拒むかのように、自分の想像を遥かに超える状況を否定するように、男は目の前に起きた現実を受け入れられない。

男はその辺り、大きく致命的に、欠けている。科学とは想像力と発想力の最たる分野だ。いくら勉強に励もうと、机上の空論を並べようと、最後には想像と発想が決まってしまう。その点で言えば、男は致命的に欠けていると言えるだろう。適正がないにも関わらず、科学という神域の領域に手を伸ばし、そして届かなかった者。それこそが男——須郷伸之の正体であった。

もはや彼の仮面は崩れ、何重にも塗り固められたメツキはとうの昔に剥がれている。

須郷は歯をむき出しに、大きく開けた口からは唾が激しく飛ぶも気にしていない。それよりも注目する者が、無視できない者がここに一人、確かに存在する。

心を砕いたはずだ、存在を否定した筈だ、幾重にも重なる苦痛を与え、恥辱と屈辱に塗れさせ、人としての尊厳を取り上げてきた。だといふのに、彼は再び立ち上げってくる。絶望の底へ叩き落としてやつたに、彼は再び這い上がり、須郷の眼の前に立ち塞がって来た。

ふいに、待て、と。

須郷の背筋が凍りついた。何かに気付いたと言ってもいい。須郷は捲し立てていた口を、ポカン、と開けて呆然と彼を見やる。

いつからだ。いつから、自分は彼の心を折ったと錯覚していたの

か。もしかすれば最初から、心など折れていなかったとしたら、自分は最初から眼中に入っていなかったとしたら——？

そこまで考えて、須郷は首を横に振った。

ありえない、と。今までの自分の行動を無駄に終わらせない防衛本能が、須郷の中で働いている。それはささやかなプライドを守るため、極小さい矜持を守るための必死な行動であった。

「何を無視している茅場ア！ 僕の質問に答えろ！ 僕は神だ、この世界を掌握し支配する選ばれた存在だ！ 貴様程度、僕の思い通りに動かせない筈がないんだ！ 何かをしたに決まってる……。そうさ、貴様は何かしたんだろオ！」

「——ああ？ 居たの、オマエ？」

グルン、と。

彼は須郷の玉座へと振り返り、視線を向けた。

ここで初めて須郷の存在を認めて、意識を彼に集中させる。その視線はまるでレーザーサイトだ。標的へ照準を合わせるための装置であるように、明確な敵意と威圧を須郷へと向けている。

そして揺らめくは焰。

蒼くも黒い焰、神々しい「蒼」に禍々しい「黒」が複雑に絡み合い内紛している焰——黒蒼焰を彼自身と漆黒の方天画戟へ纏わせていた。

強靱的な意志の強さを見せる眼光を真正面から受けて、須郷は一步二歩、よろめくように後ろへ後退する。危険から逃れるように、身を守るために下がるが、彼は決して逃しはしない。

ジツと須郷だけを見つめる。標的から眼を逸らさずに、須郷だけを見つめて彼は言った。

「別にオレがどうこうしたわけじゃねえ。オレは周りに恵まれていてな、そいつらがオレをここに導いてくれた」

「恵まれているだど？ 笑わせるなよ、貴様の存在は間違いだど何度

も言っているだろう。何故それがわからない」
「……ッ！ 貴方、いい加減に——っ」

彼の隣りにいた少女——明日奈が須郷へと食って掛かる。

その剣幕は凄まじいものであり、これ以上須郷が妙なことを言うものなら殺到する。そう断言できかねない程の勢いと迫力を有していた。

だが彼はそれを制する。方天画戟を持っていない左手で、明日奈へ手のひらを向けて制すると。

「確かにな」

一度頷いて肯定した。

思わず明日奈は彼の方へと向いて、須郷は口元へ笑みを張り付かせる。

そんなことない、という視線。見たことか、とせせら笑う視線。両方を受け止めて彼は続けた。

「オマエの言うことは間違いじゃねえ。オレがここにいるのは間違っている。オレよりも出来が良い人間がいれば悲劇は回避することは出来たし、何よりもオレがいなければ世界は上手く回っていたかもしれねえ」

だがよお、と言葉を区切り彼——茅場優希は真正面から斬って捨ててみせる。

「——ンなもん、知ったこつちやねえんだわ」
「な、に……っ？」

呆気にとられている須郷を置いていくように、優希は己の主張をぶつけた。

「考えてみればよお、オマエの話は全て仮定だ。『I F』って曖昧なモンを、オマエは延々と講釈を垂れていたってわけだ。オレも随分と弱っていたらしい、忌々しいが認めてやるよ。オレはあの時点だけで言えば、オマエに負けていた」

「貴様……ッ！」

「オマエなんぞにいちいち見せられなくても、こちとら理解してんだよ。これまで十数年、伊達や酔狂で自分自身憎んでねえんだ」

「貴様、開き直るつもりか！」

そこで優希は、ニヤリ、と笑みを浮かべた。

口元を裂くように薄く、不敵とも呼べる笑みを張り付かせて、優希は臆面もなく言い放つ。

「応とも。オレの存在は間違いだ、わかってるさ。でもよお、だからと言つて、オマエなんぞにオレの体を好きにさせる道理なんざあるわけねえだろ?」

「道理がない、だと? あるさ、あるに決まってる! 誰に口を聞いてるんだ、僕は神だ。この世界の支配者、魂を改竄させ、他人を好きに動かえる存在だ。それを貴様——!」

「笑わせんなよ三流野郎。オレのようなスクラップの歩みすら満足に止めることが出来ねえ指し手が、支配者を語るなんざ出来の悪い冗談にも程がある」

そこまで言うと、ゆっくりと。優希は右手に持つ方天画戟の穂先を須郷へと向けた。

到底片手だけでは支えきることができない重量を誇る獲物を、優希は苦もなく片手で持つ。あまりにも規格外な膂力に、須郷の足がまたも後ろへと下がる。

「よくもまあ、オレを……いいや、オレ達を舐めてくれたよなあオマエ

？　そこで待つてろ、きつちりケジメは取ってもらおう」

「ケジメ、だと……？」

「ああ。まあ、具体的に言うのだ——」

轟、と焰が奔る。

異型の怪物達を牽制していた黒蒼焰が更に温度を上げ、猛りを増していく。それはまるで優希の心を表しているようでもあった。己を激しく憎悪する禍々しい黒炎、そんな自分を受け入れて生きようとすする神々しい蒼炎、二種類の焰が複雑に混じり合った焰を激しく猛り奔り、そして眩しいほど輝いている。

そのまま、優希は口を開いた。

「——オマエに朝日は拝ませねえ。覚悟しろよイケメン。今からその涼しい顔を、これでもかかってくらい歪めてやる」

「——ッ!?!」

その視線には敵意があった、その言葉には威圧があった、その姿勢には——逃れられない敗北があった。

ゾクリ、と須郷の背筋が凍りつく。いいや、凍るなんて表現は優しすぎる。まるで頭から氷柱を突き刺されたかのように、須郷の身体は動けなくなっていた。それは万国共通、生物である以上存在する純粋な感情。誰もが抱くモノを、須郷は感じている。それこそが——

“恐怖”であった。

金髪碧眼の怪物は、ただ見つめる、ただ声を発する、ただ獲物を向ける。それだけで、須郷の精神を掌握していた。

今の須郷は神などではなく、ましてや支配者や王などではない。彼は被食者だ。ただ食われるのを待つているだけの存在。それは蛇に睨まれた蛙のように、何もしなければこのまま捕食される運命しかないことを、彼は悟ってしまった。

だとすれば、須郷の取る行動は一つしかない。

「――困め！」

逃走という選択を取れば、彼はまだ生き残れただろう。しかし、それは出来ない。己の中にある矮小な矜持が、ただ逃げることを拒否している。自身が見下していた存在に、茅場に背を向けることを、彼は許さなかった。

ともすれば、一つしかなかった。現存する戦力で、目の前の怪物を葬り去る。これしか、須郷に残された選択肢は存在しなかった。

命じられた怪物達は、グロテスクな外見とは裏腹に統率の取れた動きで、瞬く間に優希と明日奈の両名を包囲する。

警戒を怠らずに、過敏に観察しながら、緊張感がない口調で優希は呟いた。

「見た目とは裏腹に、命令には忠実なんか」

「……多分だけど、彼にはゲームマスター権限があつて、それで操つてるんだと思う」

「なるほど、晶彦くんとはまた違う使い方しやがる。種がわかっちゃまえば、んな権限どうにでもなるが」

「……それよりも、さ」

「ああ？」

「――変わったね、優希くん」

「そうか？」

「うん、余裕が出たと言うか、今の状況を少しだけ楽しんでるしょ？」

まあな、と言葉を区切り優希は続ける。

「……懐かしい夢を見たんだ」

ポツリと呟いた言葉には、どこか哀愁が漂っている。

懐かしむように、悲しむように、されど嬉しそうに、先程見たいつ

か覚める夢を思い出すように、優希は言った。

「久しぶりに叱られて、何か心が軽くなった。あの人風に言うと、親離れしたって言うのかな？ まあ、わかんねえと思うけどそんなことだ」

「そっか」

それだけ言うと、明日奈は眼を閉じた。

幾分かであるが、優希の声は穏やかなものであった。自分へ向けた苛立ち、自己犠牲の狂気、歪んでいる前進思考、それらはなくなることはないものの、確かに優希の声は穏やかなものであった。

恐らく、彼は答えを得たのだろう。憎悪する対象である自分すらも受け入れて、前進する糧としている。そこに明確な生きようとする意思が感じ取れていた。

良かったと思う反面、悔しいという感情もある。

自分には出来なかった。何者かが優希を変えたのだ。それこそは、明日奈自身を変えてあげたいと思っていたことに等しいモノであった。

彼を想う幼馴染として、何よりも彼に恋する一人の女として、破滅に突き進む彼を止めたかった。

だが彼は変わった。

明日奈ではない何者かのおかげで、多少であるが良い方向へ茅場優希は変わった。

それは勿論、嬉しいに決まっている。それでも少しだけ悔しいと思ってしまうのは、彼女が人間であり、彼に恋をしているが故なのだろう。

そこまで考えて、明日奈は眼を開けてポツリと語り出す。

「良かったし、嬉しいよ。でも結局、わたしは君の役に立たなかったね

……」

「……なに言ってんだよ？」

「だって……」

「あのクソにも言ったけどよ、オレはどうにも周りに恵まれているらしい。オレが変わったのは、周りの連中がいたからだ」

「それは、わたしも含まれてるの……？」

「当たり前だろ。オレがいくら突き放しても、汚い言葉を並べても、オマエは見捨てなかった。オレが変われたのも、これまで生きてこれたのも、前に歩いてこれたのも、間違いなくオマエのおかげでもあるんだよ」

視線を周囲に向けて、されど意識を明日奈に向けて、優希は静かに告げる。

万感の想いを言葉に乗せて、いつもの彼らしくない、素直で純粋な謝意と感謝を言葉に乗せた。

「悪い。それから、ありがとうな、明日奈。オレはオマエに、何度も助けられている」

言葉が出なかった。

強くなろうとした、今度は自分が優希を守るために、彼女は強くあろうとしていた。

しかし前提からしてそれは違ったのだ。強くあろうとしたのは別に間違いではない。彼女は自分を低く評価していたのだ。優希は言った、何度も助けられている、と。それはつまり——彼を守っていたことに他ならない。

感涙極まって涙が溢れそうになるのを堪える。

今は泣いている場合ではなく、眼を曇らせている場合でもない。今の状況は窮地だ。何百体もの異型の怪物達に囲まれている現状、打破する手段は力のまま抗うしかない選択肢は存在しない。

争いとは数が物を言う。

多ければ多いほど有利であり、少数側を蹂躪する摂理だ。

ともすれば、優希と明日奈は手も足も出ずに終わることだろう。多少拮抗出来るかもしれないものの、疲労が蓄積され、精神は疲弊し、やがては蹂躪される。

加えて、五体満足であるのは明日奈のみ。幾重にも拷問に近い実験を繰り返された優希は今にも倒れかねないほど弱り切っている。

戦力差は覆らない。

それこそ、奇跡でも起きない限り、彼らの五体は引き裂かれることだろう。

だがここに。

「な——」

例外が存在する——。

それは眩い光であった。

目を覆うほどの眩い光。それは優希と明日奈の目の前で光り輝く。予期もせぬ現象に、思わず須郷は声を漏らした。何が起きるかなど、ゲームマスターである彼ですらも予想もつかないイレギュラーが起こっている。

光が収まっていく。

それは徐々に人形に形成されていき、光が収まる頃には——。

「みんな……！」

呆然と眩いた明日奈の目の前には、一人の少年と、二人の少女、そして二名の幼女が現れていた。

誰もが優希と明日奈に背を向けて、この世の支配者を自称する須郷を睨みつけている。これまで自分達の仲間を傷つけてきた元凶に、混じり気のない純粹な敵意を向けていた。

それも長くは続かない。

パープルブラックの長髪の少女が勢いよく振り返る。

その眼からは大粒の涙が流れ、一目散に優希へと走り寄って抱き着いた。

「うわああん！ にーちやーん!!」

「うおっ!?!」

よろめきながら、何とか受け止める事が出来た。

長いこと見ていなかった姿を、ソードアート・オンラインにて家族になることが出来た妹——ユウキの存在を受け止めた。

「やっと、やっと会えたよお！ 僕う、僕う……!」

「……心配かけて悪かったな。その、泣くなよ」

「うう、むうりいー……!」

嗚咽を漏らすユウキを宥めるように、彼女の頭を優しく撫でる。

効果はあるようで、安心するのかユウキは徐々に落ち着きを取り戻していた。

再び、視線を前方に向ける。

見たことがある背中であった。そこにはリズベットがいて、ユイがいて、そして——キリトがいる。更にもう一人の姿もあった。

「オマエら、どうして……」

「あんたを助けるために決まってるでしょ」

バカね、とリズベットは大きく肩を竦めた。

あまりにも当たり前のことを優希が尋ねるからか、その口調は呆れ混じりのものとなっている。

「……悪い。手間あかけたな?」

「いつものことよ。あんたが無茶して、あたし達がフォローする。そうやって……までやって来たじゃない」

「……それも、そうだな。でもどうやってここまで？」

「それは――」

そこまで言うのと、リズベットは視線をもう一人へ向けた。

見覚えがなかった背中、ユイと同じくらいの背丈で華奢な姿。ただ違うとすれば、ユイとは違い白いワンピースではなく、黒いワンピースを着ている。

もう一人が振り向く。

薄紫色の髪の毛に赤い瞳。最後に見た姿とは大きく異なる姿、かつて優希の命を救い、その身を犠牲にした少女。

少女の名は――。

「スト、レア……」

「……久しぶり、アナタ」

おずおずと、どこか気まずそうに小さな右手を優希に振る。

対する優希は呆然と問いを投げる。礼を言わなければならぬと思つた、謝罪しなければならぬと思つた。しかしそれよりも、疑問が彼の中で勝る。

「何でオマエがここに……？」

「……実はね、アタシ死んでなかったんだ。ユーキにアタシのPCデータを取り込ませてから、ユーキの中でアタシは生きてんだ。何度か呼びかけたことがあったんだけど、聞こえてなかった？」

「……」

覚えはあつた。

何度か彼女の声が聞こえたことがある。それはソードアート・オンラインの中で、殺人鬼との戦いの中で、それが終わった頃に、そして最後の戦いに赴く瞬間に、幾度も彼女の声が聞こえていた。

優希は彼女は自分のせいで死んだ、と考えていた。それは今も同じ

である。だがそれでも、彼女は眠ることなく、優希に絶えずに声をかけてくれていた。

「そうか。オマエはずっと、オレを見守ってくれてたのか」

「……んー、まあそういうことになるね。ちよつと照れくさいけど」

「悪かったな。でも、何で今になって姿を表したんだ？」

「大丈夫だと思ったから、かな？ アタシがアナタの中にいなくても、もう自分を傷つけないと思ったから。だからみんなを呼んだんだ」

「……まったく、オマエには世話になりっぱなしだな」

「ううん、気にしないで。アタシも好きでやってることだから」

首を横に振って満面の笑みで答えるストレアに、顎を引いて頭を下げた。

彼女はずっと見守ってくれていた。

優希が罪悪感に押しつぶされないように、自身を焼き尽くすほどの炎で焦がれないように、彼女はずっと彼の内側で守ってくれていた。

彼からしてみれば、気にするなどというのが無理な話だ。自分ほどれだけ、仲間達に借りを作ればいいのかわかったものではない。もはや返しきれない恩がある。であれば、一生をかけて返していくしかないだろう。

そんなことを考えていると、気を使うようにユウキが訪ねてきた。

「ねえ、にーちゃん。アイツに何もされなかった？」

アイツとは須郷のことを言っているのだろう。

須郷がどんな人間なのか、粗方であるものの明日奈から話しは聞いている。自分の邪魔をする人間には苛烈に危害を加える、それがユウキが須郷の印象でもあった。

明日奈を逃がすために、優希が残った。

ともすれば、須郷に何かされたと思うのは当然の思考の帰結と言えるし、ユウキが兄を心配するのも無理はない。

結論から言えば、何もかもされた。

ユウキが想像しているよりも遥かに人道から反する非道を、その身に経験してきた。苦痛に顔が歪まなかったことなどなく、その心は屈辱と恥辱に塗れていた。

しかし――。

「心配すんな。――なにも、なかった」

彼は嘘をつく。なにもなかった、と妹の頭を撫でて、兄は嘘をつく。しかしキリトは、それを見逃さない。

真相を知る明日奈、外側から見してきたユイ、そして彼の中にいたストレア以外の人間で、彼だけは何となく察していた。具体的にはわからないものの、須郷になにかされたのだ、と。キリトだけは理解していた。

何度も剣を交えてきたからこそ、何度も優希と争ってきたからこそ、キリトは気付いた。

だが敢えてそれを指摘がしない。優希が誰にも言わないと決めたのなら、キリトは何も言わずにそれに応じるのみである。

ともすれば、キリトのやることは変わらない。

背中に挿しているエリユシデータを勢いよく引き抜いて、周囲を囲む異型の怪物達に意識を向ける。

「絶体絶命って奴か？ この数、切り抜けることが出来ると思うか？」

言葉とは裏腹に、その口調は気軽なものであった。

挑戦的な軽口といっても過言ではない声に、優希は口元に笑みを浮かべる。ユウキから離れると、片手で持つ黒色に染まる画桿の方天戟。その穂先を床に向けて応じる。

「さあな。これ以上増えたらヤベエかもな？」

「安心しろよ。その時は、俺がお前よりも多く斬ってやるさ」

「面白いギャグぶっこむじゃねえの。もしかして、オマエも戦うのかよ?」

ソードアート・オンラインをクリアしてから半年。

久しぶりに会ったにも関わらず、そのやり取りは半年前から何も変わらなかった。売り言葉に買い言葉、ノーガードの殴り合いの応酬に、リズベットのため息は深くなる。まったく変わらない男達に苦言の一つを漏らそうと口を開きかけるが。

「——ゲームマスター権限執行、設定変更、ペインアブソバレベル0オオオ!」

叫び声。

青色の管理者専用とされるシステムウィンドウを開き、須郷は涎を撒き散らしながら大きく口を開けて叫ぶ。

その瞳は愉悦に染まっていた。ペインアブソバとは、10段階に分かれている。それがレベル0ともなれば、受けた痛みは脳へ直接伝わるようになってくる。つまり、斬られれば斬られた痛みとして、焼かれれば焼かれた痛みとして、現実世界の身体へと伝わるようになってくる。

それが須郷の狙いでもある。

彼は確信していた。次に来る彼らの恐怖を、仮想世界で受けた痛みが現実世界に伝わる怖気を、そして顔を歪める自身に齒向かう彼らの無様な醜態が晒されることを、須郷は確信していた。

ともなれば、彼は上機嫌となり、口も軽くなるというものだろう。

「これは困ったねえ。ずっと仲良しごっこしてきた君達に、この痛みは絶えきれるかなあ? だってペインアブソバをレベル0にしたんだよ? 普通なら——」

「団長さん! 分析、終わりましたよ! この人達、大きな爪と噛み付くことしか、攻撃手段がありません!」

遮るように、ユイの声が謁見の間に響き渡った。

彼は失念していた。というよりも、考えもしなかっただろう。

科学者として、彼は致命的に想像力が欠けている。全て自分の本意でしか、物事を考えることが出来ない。

そう。

ペインアブソーバのレベルが最低になろうとも、彼らはひるまない。彼らは妖精王の想像を遥かに超えていく。

この程度の修羅場に慌てるほど、元攻略組最高ギルド『加速世界（アクセル・ワールド）』は軟な集団ではない——！

「魔法攻撃もない。些末なアルゴリズムで組まれているから動きも単調。みんなには相手にもならないよー！」

「それじゃ、アタシはいつもどおり、ユイと戦えないストレア守るから、あんた達頑張りなさい！」

ストレアが結論を伝え、リズベットが二人に寄り添いながら片手に持つメイスを振り上げて鼓舞した。

受けた四人は、一歩前に進み出る。

細剣を引いて明日奈は構え、キリトはエリユシデータを片手で握り直し、ユウキは黒色の直剣を腰に挿していた鞘から抜き放ち、優希は無手であった左手を首元まで持っていきコキリと骨を鳴らした。

臨戦態勢。少しでも敵が動いたものなら、それを上回る最速で以て四人は動く。

戦うつもりである。それ以上に、勝つつもりである。

明日奈は目を閉じて、そして開ける。同時に凜とした声が、戦場に響き渡った。

「聞こえたね、みんな！ 相手は大したことがない。ちやちやっと片付けて、現実世界に帰りましょう！」

殺せ、と悲痛ともとれる宣言が命じられ、妖精王への叛逆が始まった――。

――そうして、グランドクエスト。いや、ソードアート・オンライン最後の戦いが始まった。

開幕を告げるのは異型の怪物達の声にもならない咆哮。全てが天を仰ぎ、鋭利な歯を剥き出しに、加速世界（アクセル・ワールド）の四人へと殺到する。

外見は奇形、その有り様は異様、ソードアート・オンラインでも見たことがない気味が悪い生物が、数を誇って四人へと押し寄せる。

それは波濤する大波の如く。世界樹の内部にいた騎士達のような統率のとれた陣形ではなく、各々が好きに行動し引き裂かんとしている。だからこそ、統率の取れていないからこそ、何よりもその姿は悍ましい。

それでも四人は引かない。

むしろ――。

「ハハッ――！」

一人の人影が、四人から飛び出して先鋒へと推進していく。

獰猛に笑みを浮かべるソレは、正に肉食獣を連想させるほどの猛々しい笑みである。彼――優希はそのまま、勢いを殺すことなく右

手に持つ方天画戟を横に薙ぐ。

瞬間、引き裂かれる異型の怪物達の体躯。

たった一撃、されど一撃。それだけで、数十体もの怪物達は斬り飛ばされ、その斬圧は後方に存在する怪物達にも届いた。

そして二撃目——突き。三撃目——払い。そして四撃目で斬り捨てる。複数の用法を用いることが方天画戟の強みというのなら、優希は自身の持つ獲物を荒削りであるものの使いこなしていると言えよう。

的確に、かつ迅速に、なおかつ力強く斬り裂いていく。相手が異型の怪物の群れであるというのなら、立ちはだかるはアインクラッドの恐怖の強さは鬼神の具現と言える。

生まれて何も知らぬ怪物を、死を以て恐怖をそのむき出しの脳髓へ叩き込んでいく。

一撃の重さは並ぶことのない怪力。

比類なき臂力から放たれた一撃は、容易く怪物の首を撥ね飛ばした。

だが甘い。怪物はそれでも止まらない。首を飛ばしても、凶爪を振り上げ、優希の白銀の鎧へ刻もうとするも。

「——ッ！」

一息に叩き込むは四突。

銃弾の如き速度による速度を伴った突きは、怪物の四肢を軽く消し飛ばした。

その姿は紅閃、その輝きは星のように、あるべき場所である優希と背中合わせ立つようにして明日奈は口を開いた。

「——大丈夫？」

「助かった。また疾くなったな、オマエ？」

戦場であるにも関わらず、そのやり取りは軽い。

しかし技の冴えに淀みはなかった。優希の一撃が雷であるのなら、明日奈の一突は風のように軽やかなもの。一息に幾重にも突かれる一撃は鋭く疾く、何よりも正確である。

その刺突は舞い。荒々しい優希とは違い、確実に一片も狂いもなく怪物の体躯へと打ち込んで行く。

黒い直剣——エリユシデータの剣が怪物を裂いていく。

その数は四。ソードスキル『バーチカル・スクエア』によく似た斬撃が、怪物の四肢を削いでいった。

「これは首を狙うよりも、手足を斬った方がいいな……。つてことで、どうだろうアスナー！」

「はいっ、キリトくんの案を採用します！」

「ハハハッ、直ぐ決めるねえ！」

笑みを浮かべながらユウキが言うも、キリトの案に不満はないようである。

襲いかかる凶爪を、類まれなる反応速度で以て避けると、すれ違い様に眼にも止まらぬ斬撃にて怪物の四肢を切り落としていく。

対して不満な輩が一人。

優希は、チツ、と舌打ちをすると面白くなさそうに呟いた。

「んなことしなくてもよお、一撃で叩き潰しまえばいいじゃねえか」

「それが出来ないから言ってるんだよ、このゴリラ！」

売り言葉に買い言葉。

兩名にスイツチといった、連携の言葉は必要としていない。数えきれないほど争ってきたからこそ、次に相手がどう動くか、キリトと優希はお互いに理解している。だからこそ、合図は必要としていなかった。

ときに交差し、ときに巻き込みながら、敵を圧倒していく剣と戟。悪態を突き合うはじまりの英雄とアインクラッドの恐怖は目ぐるま

しく戦場を駆けながら、異型の怪物達を圧倒していく。

「でも随分と、やる気満々じゃないか。楽しそうに戦ってるお前を見るの、始めてたぞ?」

「うるせえよ、ヘタレ剣士。他人を詮索してる暇があるなら、さっさと斬れや!」

「あつ、それはね。みんなとまた戦えて、嬉しんだと思うよ?」

横から説明する明日奈の声に、キリトの剣がわずかに緩む。

はじまりの英雄は不意を突かれたように顔を凍らせて、

「ハハハッ、そうかそうか! いやあ、お前にも可愛いところがあるんだな。なあ、アインクラッドの恐怖?」

「……言うじゃねえのよ、はじまりの英雄。オマエから先に、叩き潰してやってもいいんだ、ゼツ!」

一撃は感情を乗せて、一段と力強く振るわれた方天画戟は怪物の身体を抉り、多段の上にある玉座へと斬り飛ばしていく。

ヒイ、と須郷には当たらなかったものの、短い悲鳴を上げた。

チツ、と忌々しげに舌打ちをする優希に向かって、妹は満面の笑みを浮かべて。

「大丈夫だよ、にーちゃん! 僕も同じ気持ちだから!」

「……何を持って大丈夫って言い切るのか、オマエの感性がわからねえよ」

億劫そうに呟いて、また新しい怪物を斬り捨てる。

それから優希は周囲を見渡すも、一向に数が減る兆しはなかった。むしろ――。

「アスナー! 新手よー!」

リズベットの声を聞いて、優希は思わずため息が出る。

病原菌の如く、その繁殖力は目を見張る物がある。斬っても難いでも突いても、怪物達は減ることがない。ともすれば、際限なく増殖するように設定されているのだろう。

このままではジリ貧。今は余裕でも、これからずっと戦っていられる保証もない。

黒く蒼い焰を奔らせ、ある程度であるが異型の怪物達を一掃し、優希は明日奈へ指示を仰いだ。

「どうするよ？　このままじゃ飽きてくるぞ」

「うん、大本を潰しに行こう」

決断は早かった。

しかし明日奈の表情は晴れない。彼女には一つの懸念があった。

「でも、須郷は多分ゲームマスター権限を持つてる。自分がゲームオーバーにならないために、不死属性を付与していると思うの」

「それなら心配ねえよ。オレが何とかしてやる」

ホント？　という質問を、優希は「ああ」と頷いて。

「ただし、チャンスは一度つきりだ。それ以降、オレは動けなくなる。だから一撃でキメろ」

「それじゃ、俺とユウキはここに残って踏み止まるよ」

「うん。リズ達を置いていけないしね」

ギョツと、明日奈は自身の愛剣であるランベントライトを握りしめ、首からぶら下がっている蒼色の宝石がついたペンダントをもう片方の手で握りしめる。

不安なのだろう。何せチャンスは一度きり。それを逃せば、全ては

終わってしまう。自身は閉じ込められ、キリト達も囚えられるかもしれない。それよりも、須郷の逆鱗に触れている優希は殺されるかもしれない。

動悸が早くなっているのは気の所為ではない。呼吸は落ち着かず、意識を集中できない。

自分よりもキリトやユウキの方が適任ではないのか、そんな考えが明日奈に過る。失敗してしまえばこれまでの努力が無になり、未帰還者301名は一生現実世界に戻ることはないだろう。

やれるだろうか、と。明日奈は自問自答を繰り返し、答えが出ない思考の袋小路に閉じ込められてしまう。

だが、

「——え？」

いつの間にか、握っていたペンダントの上から手が包み込まれている。

顔を上げると、真っ直ぐに明日奈を見つめる優希の顔があった。思いつめる彼女に対して、優希の表情は涼し気なそれである。何も気負うこともなく、力強い言葉を明日奈へ送る。

「オレが前に言った言葉、覚えてるか？」

「——あ」

「挫けそうになったとき」

「辛い時、思い出せ……」

「オマエは弱くない。オマエは強い」

その言葉には熱が宿してあった。

忙しなく動いていた心臓は落ち着きを取り戻し、意識は須郷へと集中していき、思考も澄み渡っていく。

大切な幼馴染、彼女が恋した少年が、ここまで自分を評価してくれているのだ。その期待に答えずして、どこで答えるというのだろうか

か。

ランベントライトを握り直す、ペンダントをギュツと握りしめる。既に、優希が包み込まれていた手は離されている。あとは一人で明日奈が歩き出すのみ。

覚悟は、決まった――。

「――行こう、優希くん」

「ああ」

短いやり取り。それだけで事が足りる。

片手に細剣を持ち、方天画戟を片手で担ぐ。

その足取りは確かなもので、軽くもなく重くもない、気負っている様子はどこにもない。

自分ができることをやる。ただそれだけだ。

「へえ、わざわざ僕に殺されに来たのかい？」

対する妖精王は軽薄な笑みを浮かべて、二人の挑戦に応じていた。

油断しきっているとはこのことだろう。帯刀すらしておらず、無手で彼は両手を広げて迎えている。

一步、一步。また一步。着実に、妖精の王との距離を詰めていく。

それでも妖精王の余裕は剥がれなかった。当然だ、彼の身体は今や不死となっている。ゲームマスター権限によって、HPゲージが削られることのない絶対死のない身体となっているのだ。

だからこの余裕。絶対に死なないのだから、逃走に対する緊張感すらもない。彼と明日奈達では、戦いの心構えが違いすぎた。

そして、二人の歩みは止まった。

明日奈は身を低く構える。

低く、更に低く、尚低く。片手を地面に付いて、片手を細剣を持つ。

その姿はまるで、クラウチングスタートのようでもある。引くことを拒否するかのような、攻撃的な構え。

そして優希は――。

「一つ、オマエに言うことがある」

方天画戟を天に掲げて、須郷に向かって言い放った。
ニヤニヤと、軽薄な笑みを浮かべて須郷は応じる。

「何だい？ 命乞いなら聞いてやるよ。もちろん、聞くだけだけどねえ！」

「ああ、そうだな。――吠え面、かきやがれ」

刹那、轟、と音を立てて黒焰と蒼焰が方天画戟に殺到する。神々しくも、禍々しい、心意によつて作り出された優希の己すらも燃やし尽くす焰。

炎熱によつてか、纏っていた白銀の鎧はたちまち融解を始め、ところどころ素肌が露出していく。重度の火傷によつて、優希の表情には苦痛が垣間見ることが出来る。

だがそれよりも、眼を見張るのは、彼の方天画戟に集った焰。焰は形となり、形は一つの武器となる。それはあまりに巨大で、あまりにも大きすぎる、大雑把すぎる大矛。刃幅は100cm程あり、その刀身は170cm以上はある。

それこそが、優希の最奥に眠っていた焰が形となったもの、己すらも焼き尽くし滅する焰の具現、己殺しの大矛であった。

優希の周囲で、焰が無数の蛇のようにとぐろを巻巻きながら唸っている。

もはやこれ以上、出すものがない。即ち、これこそ真正正銘、優希の捨て身の力。己の身体や生命すら省みない、必中一撃なる一撃必殺。

呆然と立ち尽くす妖精王は、一步後ろに下がる。

それでもあの焰から逃れられないだろうと、彼の本能が悲鳴をあげる。何をするのかわからない、検討もつかない。なのにも関わらず、

妖精王は畏れる。

大嵐を思わせるほど膨大で、凝縮されたエネルギーはありえない威力を放つ。

震える手で、青色のシステムウインドウを開き、一本の剣を取り出そうと試みる。

それこそは片手剣、最強のレジエンダリーウエポン『エクスキャリバー』に他ならない。あの剣であれば、目の前に存在する暴力に、途方もない恐怖に対抗できるかもしれない。そんな淡い期待を懐き、呼び寄せようとするも――。

「あ――」

遅かった。

ゆっくりと、掲げていた大矛の剣先は、妖精王へと照準を合わせる。

照準は合わせた、弾も込めた、あとは引き金を引くのみ。

待て、と妖精王は呼びかける。

しかしそれよりも速く――。

「――権限なんざ灰に変えてやる」

終局焰武・絢爛炎帝。

凝縮された焰は、収束された砲撃となって妖精王へと真っ直ぐに撃ち抜いていく。

己すらも焦がしていた焰。優希の心意は何もかもを焼き尽くす焰へと昇華されていた。それは膨張もなく、何もかもを灰に変える。物体から固形であるものから、概念のような曖昧なものまで。

それは、もちろん。

「――行け」

「――はい！」

——ゲームマスターの権利すらも、灰に変える究極の焰。
膝から崩れ落ちる優希を尻目に、明日奈は駆けた。

止まることはない。彼が行けと言ったのだ、ならば駆けねばならない。最速で最短で、誰よりも疾く、この身は疾走しなければならぬ。

視界の隅は矢の如く。

それでも意識は妖精王をしっかりと捉えている。乱れことなくただ真っ直ぐに、明日奈は偽りの王を目指す。

見えた。

何が起きたのか、妖精王はわかっていない。

膨大な熱量の炎熱による砲撃をまともに食らったのに、無傷である自分が理解が出来ないのだろう。彼は呑気に、自分の身体へ見えていた。

「須郷、伸之——！」

「なっ——！？」

ここで漸く、明日奈の存在を認識する。

一歩二歩、無様に後退するもそれでは遅い。音速を超え、神速で駆ける彼女に対して、何もかもが遅かった。

そして——。

「——ッ！」

「やめっ……！」

明日奈の刺突は、何の狂いもなく、一片の淀みなく、須郷の胴体へと、突き刺さる。

「ぎゃ、ぎゃああああ!? 痛い、痛い!? 僕が、どうして!?!?」
「……………」

無言で見つめると、明日奈は妖精王——「いや、ただの須郷と
なった彼の身体から細剣を抜き放った。

ふと、須郷のHPゲージを見れば、4分の1しか削られていない。
この戦いは、須郷を倒せずに終われない。自分達が倒されるか、須郷
が倒されるか、そのどちらかでありえない戦いであった。

須郷はみつともなくのたうち回る。

これ以上の苦痛を、優希に与えたにも関わらず、彼は恥も外聞もな
く己の苦痛を訴えていた。

明日奈はそれを冷ややかに見つめて、優希へと視線を向けた。膝を
付き、妹に抱き寄せられて、それでも明日奈から視線を逸らさない。

視線は語る。

オマエに任せる、と。

ならば明日奈の取る行動は。

「消えて」

「き、貴様あ！ 僕に向かって——」

「これ以上口を開けば、わたしは今度こそ理性を抑えることが出来ま
せん。もう一度言うわ——消えなさい、須郷伸之」

「——ッ!!」

言いたいことはあったのだろう、明日奈を殺意を伴った視線で睨み
つけて、一言も発することなく彼は走り去って行った。

思わず、深々とため息を吐く。

剣を下ろし、肩の力を下りている明日成に対して、優希は皮肉げに
口元を歪めて。

「甘いヤツだ」

「彼には戦う力はなかった。それでも剣を向けたら、彼と同じになる。
それに、優希くんも同じこととしてたでしょ？」

「……フン」

優希は目を閉じる。

視界が暗転し、視界が狭まっていく。

遠退く意識のまま、彼は一言――。

「流石に、疲れた――」

「クソっ、クソっ、クソっ！　なんだよ、なんなんだよ！　どうして僕に管理者権限がなくなっている!？」

妖精王と自称していた男は、無様に走っていた。

向かう先は専用のシステムコンソールがある部屋。そこに行けば、とりあえずログアウト出来る。その後は――。

「必ず報復してやるぞ。絶対に許さない、僕をこけにしやがって！　どいつもこいつも、殺してやるとも。皆殺しだ！」

須郷は目に浮かぶ未来へ思い馳せて、笑みを零していた。

下卑た笑みを浮かべて、自身に命乞いをする憎き加速世界（アクセスル・ワールド）の者達。そして最たる者は、やはり茅場優希であり、自身の所有物でもあった癖に逆らった結城明日成でもある。

刺された腹部は激痛が走る。

管理者権限が焼失されたことにより、あの場にいたプレイヤーに設定したペインアブソーバの数値が彼にも反映しているようだ。

それがますます苛立ちを募らせる燃料となっていく。負う必要のなかった傷を刻まれ、感じる必要がなかった痛みが奔っている。選ばれた存在であるのに、自分は王であり、支配者でもあるのに、どうしてこうも無様に逃走していなければならないのか。

須郷は走る。

息を切らし、追ってくることのない標的に怯え、須郷はシステムコンソールがある部屋を目指す。

そしてたどり着いた。

見ると、まだ加速世界（アクセル・ワールド）の連中は到着していないようでもある。

須郷の笑みは深まっていく。

これならば先手を打てる。先に脱出し、ナーヴギアに繋がれている明日奈と優希の脳を焼いてしまえばいい。

「勝った。……ハハッ、勝った！ やっぱり僕は選ばれた存在なんだ！」

しかしそこで、数体の人影が、須郷の背後から気配がした。

思わず、彼の肩が大きく揺れる。恐る恐る確認すると、直ぐに安堵した表情へと変わった。

それはベルセルク。

自身が作り上げた異型の怪物達であった。

数は既に3体にまで減っている。どれもこれもが、手足のどれかが欠損していた。

むき出しの脳髓もさることながら、今となつては五体満足でないことが痛々しく見えてくる。

須郷が近付いて無反応——というわけでもなかった。

喉を鳴らし、大きく開いている口。そこからは鋭利な歯、そして大

量の涎が流れている。

思わず須郷は首をかしげる。

ゲームマスターである自分には何の反応を見せなかった。自身に忠実で、命じれば必ず遂行する。それこそが自分の作り上げた異型の怪物達である。

疑念はある。だがそれよりも、須郷は優先すべき目的があり、特に考えることもなく三体のベルセルク達に背を向けた。

だが失念していた。

今の須郷は――。

「――え？」

ゲームマスターの権利を、焼失されていたことを――。

衝撃があつた。次に浮遊があつた。衝撃は熱となり、すぐに痛みへと転換していく。

須郷は恐る恐る、自分の腹部へと視線を向ける。そこから生えているのは鋭利な凶爪。それは自分がデザインした――異型の怪物『ベルセルク』のものであつた。

足が地面に着いていないのは単純な話し、須郷は突き刺されたまま持ち上げられているからに過ぎない。

そして、彼はそのまま、放り投げられる。

「がアアアア!？」

腹部を抑えて、須郷はのたうち回った。

明日奈の刺突など、眼ではない激痛が、須郷の全身を駆け巡る。

その無様な姿を見て。

「――?!」
「――?!」
「――?!」

第21話 現状報告

——最初に彼が目にしたのは、涙で濡らした顔であった。

だがそれは、幼馴染のものではない。ならば付き合いの長い後輩であるのかと言われればそうではなく、今となっては唯一の家族である義妹のそれとは違う。

それは力強く、彼という存在を世界に留めるようにしっかりと、茅場優希を抱きしめていた。

その眼からは大量の涙。

恰幅の良い初老の男性——結城彰三は、年甲斐もなく恥も外聞もないまま、感情のままわんわんと泣きながら茅場優希を抱きしめる。

とはいっても、優希も一年と半年は寝たきりであった身だ。

デスクゲームに巻き込まれる以前、お世辞でも体格の良い少年とは言えない。むしろ平均よりも痩せていたとも言える。そんな華奢であった男が、一年と半年も寝たきりだったのだ。華奢であった身体はより一層、頼りないモノになっているに決まっている。それを遠慮なく、力いっぱい抱きしめる。息苦しくもあり、苦痛でもあったことだろう。

故に、優希は口を開きかける。

痛いものは痛く、苦しいものは苦しい。自分をそんな状況に追い込んでいる彰三に文句の一つや二つ、むしろ怒鳴りつけてやろうと鋭い目で睨もうとする。

だが、

——ああ、そうか。

——そういう、ことか……。

苦しげに見渡し、抗議を上げようとする口を固く閉ざしてしまった。

優希が見たのは数人の表情だ。

ホッと胸をなで下ろし安堵したのか涙を流す明日奈、優希に向かって微笑み夫を非難するように声を上げる京子、満面の笑み浩一郎は優希と肩を組み始める。そして妻からの叱りを受けて優希へと何度も頭を下げる彰三の姿があった。

何度も世話になった、結城家の姿がそこにあった。

見てみれば、優希の隣に明日奈の寝ていたであろう病院のベッドがある。

恐らく、明日奈が眼を覚ましたと連絡があった結城家は何もかもを放り出して、この病室まで駆けつけたのだろう。

言い切れる理由は簡単なことだった。彰三のスーツと髪型は乱れており、いつも生真面目な京子はスーツの上着を着ていない。浩一郎に至っては、履いている両方の靴がそれぞれ別である始末。

それだけ、彼らにとって明日奈という存在は大切であったことがわかる。もちろん、それは優希も同じであるのだろう。そうでもなければ、愛娘と同室の病室にするわけがない。目に届く範囲で見守りたいからこそ、明日奈と同じ病室にしているのだ。

何よりも、優希が大切でなければそれぞれが、涙を流したり、安堵したり、自分のことのように喜ぶ筈がない。

『攻略はオレなんぞのような、誰も帰りが待っていない人間がするべきだ。オレのような、生き汚いクソのような人間がやるべきだ』

少年はかつて、そう言った。

それを否定するつもりはない。誰がなんと言っても、茅場優希という人間はクソのような人間であることには変わりなく、生き汚くこれまで朽ちることもなく存在していた。

間違いがあるとするならば、そこではない。帰りを待っている人間がない、父も母も自分を犠牲にすることによって優希を生かし、親戚も既に縁を切っている。だからこそ、優希は必死に戦ってきた。フロアボスを単騎で攻略するという無茶もしたし、実験体として痛めつけられても音を上げることはなかった。適任だと思っていたから、現

実世界に帰還を待ち望んでいる家族や友人がいないからこそ、ありとあらゆる無茶も出来た。

しかしそれこそが、間違いであった。

——ああ、クソ。

——オレは何も見ようとしていなかった。

——こんなオレでも、泣いてくれる人がいた。

——喜んでくれる人がいた。

——今も昔も、オレは間違つてばかりだ……。

固く目を閉ぎすのは、ただ今の光景が見たくなかったわけではない。
い。

その行為は否定ではない。父や母に対する罪悪感が消えることはない。これは一生、茅場優希が負うべき罪であり、背負うべき業であると優希本人が承知している感情だ。しかしそれ以上に、中に渦巻くのは晴朗なモノ。言葉に出来ない心地よい幸福感に包まれながら、優希は今の光景を目に焼き付けようとしていた。忘れないように、もう二度と間違えないように、優希は脳髓に焼き付ける。

目を開ける。固く閉ざしていた口が開いた。

浮かべるのは笑み。それは獰猛なそれではなく、不敵な笑みというわけでもない。

年相応の笑顔。少年が少年らしく笑う——涼風のような微笑みを浮かべて、優希は声に出した。

——みんな、ただいま——。

——そして、ありがとう——

.....

.....

2024年10月24日 PM14:45
埼玉県所沢市 病院 優希の病室

「——つて、確かにオレは言ったけどよお……」

部屋の主——優希が不満気に呟いた。

眉間を片手で揉みながら、ため息をこれでもかと深く長く吐く。彼が居るのは病室のベッドの上。

上半身だけ起こしながら来訪者へと視線を向けて。

「ンで、オマエがオレの病室に居るわけ？」

「きみが心配だからに決まってるでしょ？」

「決まってるねえよ。オレにだって一人の時間が欲しいんだけど、そこから辺どうお考えなのよ実際」

「まあまあ」

「さてはオマエ、最初から聞く気ねえな？」

ジト目で睨まれる来訪者——明日奈はプイッとそっぽを向いて答えた。その態度の通り、最初から彼女は聞く耳などなかったようである。

思わず、優希は再びため息を吐く。もちろん、それは呆れてるが故だ。

——アレから、SAO未帰還者が現実世界に帰還して、二ヶ月が経過していた。

世間ではやはりと言うべきか、特集や特番が生まれ、大々的に日本

中——いいや、世界中が報道を行っていた。

その渦中に、自分も巻き込まれると優希も予想していた。何せ、戸籍上で言えば全ての元凶である茅場晶彦は優希の叔父にあたる人物である。デスゲームに巻き込まれ、攻略組に属しており、なおかつSAO未帰還者の一人でもある優希は無視される訳がない。むしろ世論は進んで、残された甥の話しを聞きに来ることだろう。

それが不思議と、誰一人として茅場優希の下へ訪れる第三者は現れなかった。来るとすれば見舞いに来る知人。それが優希の後輩であったり、家族の義妹であったり、結城家であったり、桐ヶ谷兄妹であったり、リズベット改め篠崎里香であったり、エギルやその家族であったり、クラインであったりする。

これは優希の予想でしかないが、恐らく茅場晶彦は事件を起こす前、自身の身辺を全て抹消していたのかもしれない。

警察やジャーナリスト、好奇心旺盛な民間人が調査したところで、誰一人何一つ茅場優希という存在にたどり着けないように、細工を施していたのかもしれない。そうでもなければ、優希の周囲が静寂を保っているわけがないのだ。

先も言ったが、これは優希の予想でしかない。

確かめようにも、本人は行方不明。死んでいるのか生きているのか、調べることが出来ない状態である。

調べることが出来ない状態というのは——。

「だってしょうがないでしょ？　優希くん、まだリハビリが出来る状態じゃないんだから」

その分、わたしがしつかりお世話しないとね！　と、どこかやる気満々で、両手に握り拳を作る明日奈を見る。

そう。

優希の身体は、他のSAO未帰還者と違い、回復が遅れている状況だった。

とは言っても、障害が残るといった状態でもない。飲食は出来る

し、睡眠もしつかり取れている、精神状態も良好そのもの。それなのにどう言うわけか、身体の筋力の回復が遅かった。

心当たりはある。恐らく、先の過度な実験による影響によるものだろう。レベル3まで落とすだけでも、現実世界で障害が残る可能性があるものにも関わらず、優希はその身にレベル0相当の痛覚を味わってきた。それこそ寝る間もなく、半年間休むことなく、その身体を痛めつけられてきた。

だと言うのに、五体満足でいる。

加えて、いずれは回復し、問題なく歩けるのだ。これを奇跡と言わずして、なんと言うだろうか。

「んなことしなくてもいいって、何度言えばわかんたオマエ？ 自分のことは自分で出来るつーの」

「そうは言っても、心配なんだもん。せっかく同じ病室だったのに、今じゃ部屋変えられちゃったし……」

「当たり前だろうが。若い男女がひとつ屋根の下とか、モラルもクソもねえだろ」

「……今更だけど、優希くんってその辺りしつかりしてるよね？ S AOのときだって、わたし達が一緒の部屋ってなかったし」

「母さんの教育が行き届いてるってことだろ。つか、マジでこんなの当たり前だろ」

とは言っても、明日奈の様子は不満だらけと言ったところだろうか。理解しても納得はしていない。そんな様子である。

対する優希はそんな明日奈の態度に疑問を呈していた。聞き分けのない、危機感がない少女であったのなら、別に不思議に思うことはなかった。しかし、優希が知っている明日奈は違う。常識があり、危機感があり、恋人でもない男と一つ屋根の下で寝処を共にする少女でもない。

だからこそ、優希は首をかしげる。

様子がおかしい。というよりも、どこか意固地になっているという

べきか、優希という人間が気になって仕方がないというべきか。

普段とは違う態度をとる幼馴染に、優希は腕を組みながら問いを投げた。

「……オマエさ」

「なあに？　今、りんご切ってあげるね」

「それはありがたいけどよ、何かあったか？」

へっ？　と、素っ頓狂な声を上げて明日奈は片手でりんごを持ち、もう片方の手で果物ナイフを持ち、これまた器用にりんごを剥きながら首を傾げて続けた。

「何かあって？」

「いや、なんつーか、雰囲気が違うつーか。オマエがやたらオレの世話を焼きたがるのはいつものことだが、今回はそれが度が過ぎてるかな」

「それは……」

どうして、世話を焼きたがるのか。

その疑問に答えるのは簡単なことだ。彼女は知っている、今まで優希が何をされてきたか、どんな苦痛を味わってきたか、どれほど屈辱と恥辱に塗れてきたか、明日奈はよく知っていた。

知っている、と言ったがそれは正確なものではない。須郷伸之、かつて妖精王と自称していた男から聞かされた。ありとあらゆる手を尽くして、苦痛を与えてきた朗々とした口調でと明日奈は説明された。きつとそれは、明日奈からは想像が出来ないモノなのだろう。囚われるだけの自分とは違い、優希は外すら見えない檻の中で身体と精神を常に痛めつけられてきた。

故に、心配なのだ。

以前と変わらず、むしろ若干であるもののどこか精神的に丸くなった彼が、偏に心配していた。

かと言って、それを伝えることも出来ない。

優希は語らない。自分が何をされたのか何も語らない。むしろ彼は「なにも、なかった」と嘘までついていた。

それは優希の覚悟であり矜持でもある。心配かけまいとする、彼なりの気遣いでもあるのだろう。心配されるために耐えていたわけではない、褒められる為でもなければ、礼を言われる為でもない。ただ自分がそうしたかったから、音を上げなかっただけにすぎないという、彼らしい捻くれた理由なのだろう。

明日奈にとって、優希の覚悟と矜持は眩しいモノであり、彼以外の口から告げるのは彼の矜持を傷つけるに等しい行為。明日奈にはそんなこと、出来るわけがなかった。

だからこそ。

「きよ、今日はいい天気だねー……」

誤魔化すしかない。

りんごの皮を剥きながら、窓から見える景色に目を向ける。

だが相手は優希だ。長い付き合いの幼馴染をジーンと凝視しながら、彼は口を開く。

「めつつちや曇ってんだが？」

「……外でお昼寝すると、気持ちよさそうだよね？」

「もう11月なんだけど」

そして、沈黙。

シヤリシヤリ、とりんごの皮を剥く音だけが病室に響く。

互いに無言を貫く。

視線と意識を明日奈に向ける優希と、そもそも視線すら合わせずに眼を泳がせる明日奈。

二者二様、二人が二人とも異なる反応を見せる中、その沈黙を破つたのは——優希であった。

彼は深々とため息を吐くと、諦めた口調で呟く。

「わかった、もういい。オマエにも事情があんだろ。これ以上は詮索しねえよ」

「……いいの？」

「聞くなよ、ばか。絶対に話さないって面してる癖によお？」

「うん。ごめんね」

「……フン、謝る暇あるならりんご寄越せりんご」

不貞腐れるように、視線を明日奈から窓の外へ移しながら、優希は片手を差し出した。

どんよりと、厚い雲が空を覆っている。雪——が降るにはまだ早い時期だ。かと言って、雨が降る気配すらない。

中途半端な天気だ、とぼんやりと眺めているものの、一向に片手に向いていたりんご一切れが乗る気配がない。

何をしているのか、優希は窓の外から明日奈へと視線を戻すと。

「あ、あーん」

りんごの一切れをフォークで刺し、それを恥ずかしそうに差し出している明日奈の姿があった。

見る人間によっては、ご褒美とも言える光景なのかもしれない。

S A Oでも明日奈の美貌は、数少ない女性プレイヤーでも五指に入るほどレベルが高い。クライン辺りからすれば、直ぐにでも食いつく光景。

だが生憎、相手は茅場優希である。

自分を否定し続けた男が、他人からの好意に気付ける筈もなく、これでもかと顔を顰めて問いを投げつける。

「何しとんだ、オマエ？」

「な、何って食べさせてあげようと……」

恋する乙女はときに部類の強さを発揮するが、惚れている人間の前では基本弱い存在だ。言い淀みながら、言葉が小さい声になっていく明日奈。

優希は呆れた口調で。

「嫌ならやらなければいいだろ」

「い、嫌じゃないわよ！ ただ恥ずかしいだけ！」

「同じようなもんじゃねえか？」

「全然違うし！ カリフラワーとブロッコリーくらい違うし！」

「例え下手かよ」

肩を大きく竦めて、優希は続けた。

「つたく、オマエといい朝田といい、ンでこうも食べさせたがるんだかよ。もしかしてそう言うの流行ってるのか？」

「……え？ 朝田くんって来てるの？」

「おお。オマエがリハビリに精を出してる間にな。そう言えば、オマエらって顔合わせたことなかったっけ？」

「うん、ないわね。わたし、朝田くんに会ってみたいな」

「アイツも会いたがってたな。何でも挨拶しておきたいらしいぜ？」

そこまで言って、ふと思いつく後輩の表情。

どこか鬼気迫る面持ちで、気迫染みた声には得体の知れない力強さがあった。それはまるでこれから戦いに赴く兵士のように、標的を狙い澄ます狙撃手でもあるかのように鋭い。

殺気——とまではいかなないものの、威圧と表現が出来る雰囲気の後輩——朝田詩乃は身に纏っていた。

どうしたのか、と優希が訪ねても「……これは私達の問題。先輩は絶対に首を挟まないで頂戴」とピシヤリと言い放たれる始末。

普段から物静かな朝田がここまで言うのだから、何か理由があるの

だろう。それに朝田ならば、明日奈に危害を加えることもない。優希はそう判断していた。

——確執があるのなら、本人達で決着を着けたほうがいいだろう。

——関係のない第三者が首を突っ込むのも野暮ってもんだ。

——……まあ、会ったこともないのに確執があるってのも、妙な話だが。

ぼんやりと、優希はそんなことを考えていると。

「……あ、あのお」

「あ？」

思考の海へ沈んでいた意識を、現実へと引き上げる。

視線の先には未だに、りんごの一切れをフォークに刺し、それを差し出している明日奈の姿があった。

プルプルと身体が震えているのは、疲労によるものではない。羞恥心によるものなのか、頬を若干紅潮させて明日奈は弱々しく問いを投げる。

「食べて、くれないの？」

「——」

ここで食べない選択肢はもちろんあった。

自分は子供ではない。大人————と言い切るにはまだ早いものの、食べさせてもらうほど子供ではない。

素直に口を開けばいいのだが、それが優希には出来そうにない。他人が見ればなんとつまらないプライドなのか。素直に口を開けば、自体は滞ることなく進むというのに。

だが男とはそういうもの。少なくとも、茅場優希の行動原理は突き詰めれば、つまらないプライドが原動力となっている。つまらないプ

レイド、小さな矜持があるからこそ、優希は戦える。
だが。

「……………あーん」

「ッ！ はい、あーん！」

優希は折れた。

昔も今も、そしてこれからも。茅場優希は結城明日奈に勝てそうにない。幼馴染に対して甘すぎる。そんなもの、当の本人がわかっていることであるものの、それはこれからも治りそうにない悪癖でもあった。

対する明日奈は弱々しいモノから、満面の笑みへ変貌を遂げる。

今まで蕾で咲くにはまだまだであつたにも関わらず、瞬きした瞬間で花咲いたように、劇的な変化を彼女は遂げていた。

ローテンションから、ハイテンションへ。高低差の激しい感情のまま、明日奈は笑みを絶やすことなく、優希へ問いを投げる。

「美味しい!？」

「……………まあな」

「まだまだあるよ。大丈夫、わたしが食べさせてあげるから！」

「まったく、だいじよばないんだが？」

軽い抗議。

まるでそよ風であるものの、それは確かな抗議であつた。

しかし、明日奈は聞く気はないようだ。むしろ聞いた上で敢えて無視するように、彼女は満面の笑みで残っているりんごの一切れを差し出して。

「あーん！」

「……………あー」

シヤリシヤリ、と。

新鮮なりんごを噛み砕く音が、優希の口内に響き渡った。甘く、そして甘く。果汁が染み渡り、とても添加物では表現が出来ない甘さが口の中に広がっている。

癪ではあるが、確かな美味みを優希は感じている。

と、そこへ。

「お邪魔しまーす」

声と同時に、スライド式のドアが開いた。

優希と明日奈、二人は同時にそちらへと視線を向ける。ノックがなかったのは、入ってきた人物が非常識であるからというわけではない。勝手知ったる間だからこそ、優希と新しい来訪者にはそんなもの必要がなかった。

黒コートに黒ズボン。全身を黒でコーディネートされた少年の姿。

来訪者——桐ヶ谷和人は、おつ、と声を上げると明日奈に向かって片手を上げて挨拶をする。

「やっぱり明日奈もいたのか」

「うん。いらっしやい、キリトくん」

明日奈は笑顔で応じる。

しかし気にならないのは部屋の主たる優希だ。彼は、チツ、と舌打ちをすると不満気に言葉を漏らす。

「どいつもこいつも、オレの病室を溜まり場にしやがって。集会場じゃねえんだぞ?」

「……言われてみれば、ユーキのところに集まってるよな?」

「集まりやすいからかな?」

「プライバシーもクソもないっつーの……」

口ではそう言っても、その言葉には棘がない辺り、本気で迷惑をしているというわけではないのだろう。

その辺りは和人も明日奈も理解しているのか、優希の悪態を受け止めることもなく、むしろ受け流すように和人はベッドの横に丸イスを持っていき。

「調子はどうだ？」

「ぼちぼち、つてところか。11月にはリハビリ始めるらしいぜ？」

「そうか。それなら4月からの臨時学校には間に合いそうだな」

和人の言う臨時学校。

都立高の統廃合で開いた校舎を利用した学び舎である。学び舎というからには、それは学校であり、それ故の臨時学校である。

主に通う学生は、SAO帰還者サバイバーの中高生である。入試も必要なく、卒業すれば大学受験資格も与えられる。約二年の年月を仮想世界で暮らしていた和人達にとつて、帰還者学校はありがたいものである。そう、彼らからしてみたら、帰還者学校の設立は悪い話ではない。悪い話ではないのだが、優希にとつては気に入らない話でもある。帰還者学校の存在ではない、もつと小さなもの。まるで自分が通うことが決まっているような和人の言い草に、彼は気に入らない何かを感じていた。

「……オレはまだ通うとは言っていないんだが？」

「通わないのか？」

「……誰が教えるか」

「大丈夫だよ、キリトくん」

明日奈は断言すると、これまた自信満々に、堂々と胸を張って、居丈高に和人に告げる。

「間違いなく優希くんは通うから！ だって学費免除だもの！」

「……………」

悪気はないのだろう。

だからこそ、明日奈は笑顔で後ろめたい様子もなく、捻くれ者の小さなプライドを消し飛ばす。

それが癩に触ったのか、優希は無言で明日奈を手招いた。首を傾げながらも、子犬のように素直に従う明日奈の頬に片手をあてがうと。

「……………」

「いひゃーい！ いひゃいよー!? なんへ、なんへ、ひっはるのー!」

軽くつねる。

後にならない程度に、されど痛みを多少を与える程度に、優希は柔らかな明日奈の頬をつねった。

長時間ではなく短時間で、一回り二回りこねくり回して手放して、悪びれもなく優希は簡単に言った。

「ムカついたから」

「むかつつ!? えっ、なんで!」

「……君達、本当に仲良いな?」

苦笑を浮かべて見守っていた和人は、明日奈に話を振る。

「明日奈はどうなんだ?」

「わたしも通うよ? お母さんが面白くないみたいだったけど……」

「あの人ならそういう反応するだろ。彰三さんはどうなんだ?」

「お父さんは好きにして良いって。須郷さんの件で責任感じてるみたい」

「……あの人のせいでもないのに。律儀と言うか、何というかよお」

彰三の人となりがある程度理解している優希はどこか面白くなさ

そうに呟いた。

優希の中では彰三は同じ被害者の立場。罰するべきは全て、須郷に他ならない。全ては須郷の暴走、そして独断での行動が原因だ。決して、彰三が指示したわけでもないのだから。

その辺りは明日奈や和人も同じ意見なのか、否定する様子も声も上がらない。むしろ同意するように、頷いて和人は切り出した。

「そういえば、須郷なんだけど……」

「あのクソがどうした——」

そこまで言うと、どこか和人の様子がおかしいことに気付いた。

どこか言い辛そうに、言葉を選んでいるようでもある。それはつまり、明日奈の耳に入れることは好ましくないということだろう。

「——明日奈」

「えっ？ ……ああ、うん。飲み物、買ってくるね」

「悪いな」

「ううん、気にしないで」

対して明日奈は和人の様子に気付いた様子はない。

彼女が気を利かせて席を立ったのは、優希の様子を見て判断したからだ。

阿吽の呼吸と言うやつなのだろう。優希が何を言わんとしているのか理解し、明日奈は迅速に行動に移す。

不快に思わずに、むしろ人の良い笑みを浮かべて明日奈は和人に「ゆっくりしてたってね」と言うと、切りそろえたりんごを並べた器をテーブルに置いて、静かに病室を後にした。

「ごめん。気を使わせたみたいだな……」

本当に申し訳なさそうに顔を少しだけ伏せて言う和人に、優希は意

地悪く笑みを浮かべて鼻で笑うと。

「ハッ、バカを言うな。オレが勝手に気い回して、明日奈を出て行かせただけだろ。オマエに非があるわけじゃねえ。むしろオレに非があるだろうがよ」

それだけ言うと、優希は明日奈が置いた切りそろえたりんごを並べた器の中からりんごを無造作につまむと乱暴に口に運ぶ。

暗に語る。悪いのはオレだ、だから気にするな。と、優希は和人に語る。思わず和人から苦笑が溢れるのも仕方ないことであった。それを言葉に出来れば、誤解されることもなかった筈なのに、目の前の捻くれ者は多くを語らない。

言葉足らずとは、恐らくコイツのことを言うのだろう。

和人はそう思いながら、先程の話を続けた。

「須郷のことなんだけどさ、お前はどこまで聞いてる?」

「……どこまでって、逮捕されたんじゃねえのか?」

訝しむように優希は問いを問いで返す形で応答する。

妙な質問であった。逮捕されているものの、どこか全てが真実でないかのような言い草でもある。

和人は頷く。

優希の言葉を肯定し、彼は淡々とした口調で続けた。

「逮捕されたさ。明日奈のお父さんは責任を取るようにCEOを辞職、レクトプログレスは解散、VRMMO自体も大きな打撃を受けている」

「……それが全てじゃねえのか?」

ああ、と和人は頷き。

「須郷は確かに逮捕された。でも、様子がおかしいんだ」

「どういうことだ？」

「何でも、何かに怯えてるといふか、精神が食われたような、重度な統合失調症になっていふらしい。一日黙っているときもあれば、火がついたように暴れることもあるって」

「……何があつた？」

その問いに、和人の首が横に振るわれる。

「わからない。俺達から逃げるとき、アイツは確かに正気だつた。未帰還者達をログアウトさせるときも、アイツの姿を見ていない。つまり——」

逃げてから何かがあつた、と和人は語る。

優希は不快気に目を細める。須郷に同情したわけではない。あの場で、世界樹の頂点にいたのは、須郷や自分達だ。それはつまり、須郷に何かあつたことが自分達にも起こっていた可能性があつたということ。

得体の知れない、何かもわからないモノに、自分達が巻き込まれていた可能性すらある。

「気味の悪い話しだ」

「……それに関係しているのか知らないけどさ」

そう言うと、和人は懐から三枚に折られたA4の用紙2枚を取り出し、優希に差し出した。

疑うことはないものの、訝しむような表情を和人に向けて、優希はそれを受け取る。

「ンだこれ？」

「開けてみれくれ」

いまいち要領を得ない。

疑問を口にするのは、用紙を開けてからでも遅くないだろう。そう判断した優希は、とりあえず一枚の用紙を開いていく。

そこに映っていたのは――。

「ああ?」

――鳥かごのような檻の中で閉じ込められているアスナの姿。

それは鮮明で、疑う余地もなく彼女のものである。もう一方の用紙を開いて、訝しんでいた優希の表情は変わる。

疑問から驚愕へ。目を見開いてもう一方の用紙を見る。そこに映っていたのは――両腕を鎖で縛られ天井から吊るされている自分の姿。

「おい。コイツはどこで――」

「わからない。メールと一緒に送られてきたんだ」

それがこれだ、と和人は自身のスマートフォンを取り出し、優希へとそのメール画面を見せた。

アドレスはどうにもバグっていた。

辛うじて読めるのは『Alfheim』という単語のみ。

件名もバグっている。意味がわからない『えはもうに1ナ、ららりるろ』という文字の羅列。

本文には『Welcome to Alfheim Online !! It's Show Time!!』という英単語。

それと添付されている先程の画像。

『Welcome to Alfheim Online!! It's Show Time?』ショーの始まりだ、てか。随分と調子に乗っているみてえだな……?」

「……最初は、ユイがこれを送ってきたんだと思った」

「その口ぶりだと違ってたってか」

「ああ。ユイでもなければ、ユイを復元させたヤツでもなかった」

「復元させたヤツって……」

「お前の思ってる通りの人間さ」

「茅場、晶彦か……」

チツ、と忌々しげに舌打ちをすると確かにな、と納得した。

『It's Show Time』などと、洒落の効いた台詞を、あの叔父が呟くわけがない。それだけは断言が出来る。

「確かにありえねえな。天然ではあるが、アイツは遊び心のない野郎だ。もっと淡々とオマエに伝えてただろうさ」

「となると、あの場には4つの勢力がいたことになる」

一つ目、と和人は人差し指を立てる。

「俺達、アクセル・ワールド加速世界。二つ目、須郷。三つ目、目的はわからないがユイを復元したヒースクリフ。そして——」

「何者かも目的もわからねえ四つ目、ってことか」

人差し指、中指、薬指、そして四つめの勢力たる小指を立てて、和人は頷いた。

「俺の携帯にお前達の画像を添付させて、救出させるように仕向けた第四の勢力。多分、そいつ、もしくはそいつらが、須郷に何かしたんだと思う」

「つまり、こう言いてえのか」

面倒くさそうに、忌々しげに優希は呟いた。

その言葉は重く、何よりも深い。そんな声色で、事実を再確認する

ように。

「——ソードアート・オンラインは、まだ終わってねえ」

「……多分な。何かが、俺達を視ている。それは間違いないと思う」

チツ、と舌打ちをすると、優希は和人に問いを投げる。

「コイツは、オレとオマエ以外に誰が知ってる？」

「誰も知らない。須郷のことを教えてくれたのは菊岡って役人だけ
ど、画像が送られてきたことは誰にも話してない」

「なら都合が良い。これ以上誰にも言うな。特に明日奈には言うな」

「一応聞くけど、どうしてだ？」

「……須郷の件で、アイツは充分キツイ目にあっただろうが。これ以
上、首を突っ込ませたくねえ」

「わかったよ。あとさ——」

まだ何かあるのか、とうんざりした表情で和人を見た。

しかし、次に聞く言葉にその表情は変わることとなる。それは聞いた覚えのある名であった。遠い昔、という程ではないが彼の口から聞いたことがある名。

その名前は——。

「お前さ、神代凜子って人知ってるか——？」

最終話 カーテンコール

白衣の男が見つめるのは虚空の空間。

建造物など何もなく、ただ真っ白で漂白されたかのような空間。ただの一人の生命すらも許さない、神から見放された空間に白衣の男は立っていた。いいや、立っているという表現も曖昧なものだ。確かに白衣の男は空間に存在している、だが自分が地に足を付いている証拠とはなりえないと白衣の男は断ずる。

そもそも白衣の男にとって、足を向けているのが地であり、自身の頭上为天であるのかすら曖昧なものだ。

音もなく、物もなく、塵一つすらない。眼の前に広がるのは、漂白された地平線のみ。進むことも、戻ることも出来ない。不確かで曖昧な空間に、白衣の男は存在していた。

白衣の男は何するでもなく、無言で虚空を見つめる。

不確かで曖昧な空間なれど、白衣の男はわかっていた。

自身の見つめる先にこそ“それ”が居ることを、確信している。

甥に——茅場優希に胸を穿たれて、確かに白衣の男は死亡した。HPゲージが消滅しゲームオーバーになれば死亡するデスゲーム、その理は誰にも崩すことが出来ない。例え対象が、創造主たる彼であろうとも逃れることが出来ない。文字通り一切の例外なく、白衣の男が装着したナーヴギアは容赦なく彼の脳を焼き切った事だろう。

だがどう言うわけか、白衣の男は生きていた。

いいや、彼には理由がはわかっていた。生身の身体は既に朽ちおり、今の自分は精神体に近い存在。生も死も超越してしまった人間もどきと言える存在なのだろう。

ならば話しは簡単であった。このまま自身を証明することなく、不確かなままの存在として、虚数へ分解させてしまえばいい。そうなれば、自身の望みも叶う。死滅願望に沿って、白衣の男は今度こそ生命を終わらせることが出来る。

だが、それは出来なかった。

出来ない、出来ないのだ。

胸に響くのは甥の「ケジメをとれ」という鋭い言葉。

そして――。

――アンタも薄情な男だよなあ？

「それ」は、男の声だった――。

白衣の男が無言で見つめる先から、愉悦に満ち、侮蔑に塗れ、そして――墮落した声。

それこそが白衣の男が消えない理由。自身が生み出した世界で、覚醒してしまった怪物。白衣の男のように姿形はないものの、それは確かに存在している。

視線の先、黒い霧のような霧の中で、白衣の男を嘲っている。

白と黒、対極に位置する二人は無言で視線を交じ合わせる。「黒」は呆れた口調で、気安い言葉を白衣の男に投げかけた。

――アイツがアレだけ痛めつけられたってのに、どうして傍観しているかねえ？

「……彼があ程度の輩に負けるわけがない」

その言葉には確かな信頼があった。

負けるわけがない、それはそのままの通りの意味なのだろう。戸惑うことなく、躊躇することもなく、白衣の男は断言する。

対して黒の霧は、ヒュー、と口笛を吹きながら感心する口調で。

――そいつは信頼、って奴か？　これは驚きだ。まだアンタにも人間らしい感情があったのか？

「それはこちらの台詞だ」

――あ？

「……須郷君に、あの怪物――ベルセルク達を誘導したのは君だろうか？」

白衣の男の言葉には確たる証拠はない。ただの勝手な言い分、しらばっくれることも容易いもの。

しかし黒い霧は、クツクツ、と喉を鳴らし笑みを零す。身体があれば、肩を震わせるくらい楽しげな声で、肯定してみせた。

——応とも。あのクズが目障りだったからな。俺の恐怖を好きに弄った罰つてやつを与えたまでさ。

「……」

——アンタも野郎が気に入らなかつたんだろ？ だから俺を止めずに、傍観していた、と。

「……」

——やはり俺達は似ているのかもなあ？

「……」一緒にするな、と言いたいところだが的を得ている。君も私も、殺人者であるのだから」

——立場だけの話でもねえさ。考え方も、案外似ている。

なるほど、と。

白衣の男は合点がいった。

どうして自分が目の前の存在に、敵意を向けているのか漸く納得がいった。

わかるのだ。目の前の存在の考えが、白衣の男には何となくだが理解が出来る。他人が見れば意味不明な行動も納得がいく。点と点で追うのではなく、線と線で結べば、目の前の存在が何をしようとしているのか、これから何を為そうとしているのか読むことが出来る。

簡単な話しだ。

目の前の存在が固執している存在、そして自身が気にかけている存在。それは共通している存在である。

ならば自身が取る行動、目の前の存在が取る選択など、読めてくるというもの。

「私は君を」

——俺は貴様を。

「抑止している」

——牽制している。

くくつ、と笑みがあつた。

チツ、と忌々しげな舌打ちが聞こえた。

白衣の男にとって、目の前の存在は怨敵だ。分かり合える筈もなく、殺し合うだけの存在。それは黒い靄も同じだろう。彼にとって白衣の男も目障りな障害物でしかない。

似た者同士、確かに的を得ているのかもしれない。だと言うのに、殺し合う敵同士。何という皮肉だろうか、思わず白衣の男は口元に笑みを浮かべる。

「よくわかつてるじゃないか」

——まったくだ。そんなにアイツを守りたいかねえ？

「その言葉を返そう。何故、彼にそこまで執着する？」

——決まつてる。アイツは俺だからさ。

ニヤツ、と笑みを浮かべた声。

表情は読めないものの、黒い靄は間違いなく笑みを浮かべている。

白衣の男に笑みはない。

むしろ、最大の侮辱を受けたと言わんばかりに表情を不快に曇らせて。

「違う。たかが殺人鬼風情でしかない君と、彼と一緒にするな」

——同じさ。俺もアイツも「闇」を抱えている。他人に癒やしよ
うがない、計り知れない「闇」をな。

確かに、黒い靄の言葉に心当たりはあつた。

彼の、白衣の男の甥が抱く闇。それは途方もなく膨大で、底が見えなかつた闇だ。身近で何度も顔を合わせていた白衣の男ですら、見通

せなかつた深い深い淀み。

他人にも。いいや、下手すれば本人すらもどれほどのモノなのかわかつていないだろう。

人が抱えるには破綻している闇を、彼は抱えている。両親が犠牲になり、自分だけが生き残ってしまったという罪悪感が、彼に押し寄せた結果なのだろう。

彼の闇は深い。地を見れば底がなく、空を見上げれば何重にも重なった曇天の如く、見渡したものなら先すらも見えない荒野。それこそが甥の抱く心の闇だった――。

晴れることなど、出来はしない。

何せ甥本人が望んでいなかったのだ。

甥はこのまま、闇に溶け、人生を終えてもいい。本気でそう思っていた。

だが――。

「一緒にするなど言っている。現に彼は変わった」

――そう、変わった。

直に甥と言葉を交わしていないものの、一目見ただけで彼が変わったことがわかった。

眼差しは先の先を見つめ、言葉には幾分かの優しさがあり、纏う雰囲気は剣呑のそれとは違う。

きつと彼に何か起きたのだろう。

自己を変革するほどの何かがあったのだろう。それこそ、自身を許そうと思えるほどの何かがある。

以前の甥には考えられない変化だ。本当に許そうとしているのかは別として、“許す”という選択肢すら以前の甥にはなかった。自己を犠牲にし、破滅を所望する破綻者。それこそが、白衣の男が知りえる甥の本質であった。

それは黒い靄にも映っていた事だろう。

だと言うのに、その様子からは焦燥に駆られる様子はない。むしろ

ろ、黒い靄は。

——そう見えるだけさ。なに、いずれ貴様にも見せてやるさ。アイツの「闇」を。

余裕を見せ、あろうことは笑みまで浮かべていた。

根拠もない自信。

見ようによっては不気味に映る。何よりも黒い靄の言葉は確信を得ているモノ。決して負け惜しみの類から発せられる苦し紛れの自信ではない。

力があり、確たる自信があり、そうあるべきとした狂気染みた信念が感じられる。

対する白衣の男は口元に笑みをこぼした。

黒い靄の言葉は戯言であると、切つて捨てた態度に流石の黒い靄もどこか訝しむ。

「それは不可能だ」

——ほう、何故そう言い切れる？

「我々は既にこの世の者ではない。現実世界に接触する機会は失われ、VRMMOというジャンルも先の不祥事がトドメとなることだろう」

肉体は当の昔に死滅し、もはや精神だけの存在。最早あとは消えるのみ。

白衣の男は暗に語る。故に、不可能である、と。我々が彼に手を出すことなど不可能であると、白衣の男は断じた。

ソードアート・オンライン、そしてアルヴヘイム・オンライン。

二つのゲーム、二つの世界が巻き起こした事件はそれほど大きなものであった。

これから数十年間、いいや、数百年間。もしかしたら未来永劫、VRMMOというジャンルに手を出す者はいなくなるだろう。個人の

話してはない、世論が民意が、VRMMOを抹消するのだ。

そうなれば、白衣の男も黒い霧の存在も、甥に手を出すことなど出来なくなる。

だと言うのに。

——はたしてそう言い切れるかな？

黒い霧の態度が崩れることはない。

むしろ笑みは更に深まるばかり、その態度は答えを間違えた人間を馬鹿にするかのように侮蔑に満ちていた。

白衣の男が訝しむのも無理はない。

眉を顰めて、不快に顔を歪めて口を開く。

「なに……？」

——ときに貴様は本当に天才だな？ いや、神域にまで達していると言ってもいい。

要領の得ない言葉だった。

話をはぐらかす様子もなく、黒い霧は本当の意味で、演じている素振りすらなく、邪魔な障害たる白衣の男を称賛している。

何を言いたいのか理解が出来ない。

白衣の男は再度、問いを投げた。

「何を言っている……？」

——世界の種子、『ザ・シード』って言えば貴様にはわかるだろう？

そこで初めての表情を白衣の男は浮かべた。

背筋が凍りつくように、息を止める、声が上手く発声できない程の衝撃。

ザ・シード。

世界の種子を冠するそれは、白衣の男が開発したフルダイブ・システムによる全感覚VR環境を動かすためのプログラム・パッケージである。

簡単に説明するのならば、VRMMORPG作成・制御用のフリーソフト。これを使えば誰でも、どのような世界観でも自由に、VRMOを想像する事が出来る。

だが白衣の男が注目したのはそれではない。

発明したのはいいものの、ザ・シード自体は白衣の男の手元にはなかった。

最も信頼できる女性に、人間として終わっている己を愛してくれていた恋人に、預けていた。

白衣の男がザ・シードを世間に公表した記憶もない。秘密裏に開発し、誰にも知られることもなく削除される運命だった代物だ。

預けた女性だってそうだ。ザ・シードを売って金儲けなど欲深い人間ではないことを、白衣の男が一番良く知っている。

しかしどう言う事象か、視界に収まっている黒い靄は知っていた。

それがどれほどのモノなのかも理解し、剩え白衣の男の反応を楽しんでいる。

既に、白衣の男に余裕などなかった。黒い靄は殺人鬼、自身の目的のためであれば、平気で自身の手を汚す。ならば最悪の状況を想定するのは仕方ないということ、彼女は既に――。

「どこでそれを……?」

――貴様の女のPCから篡奪したのさ。俺の心意は“強奪”、忘れちまったのか?

「……」

――そう睨むなよ、貴様の女には手を出していない。五体満足、指一本すら触れちゃいないぜ?

「『ザ・シード』をどうするつもりだ?」

――決まってる、世界中にばら撒くのさ。これでアイツは無視できなくなる。必ず首を突っ込んでくる筈だ。

2025年5月3日 PM 11:15

ゴールドデンウィーク。

世間で言うところの黄金週間であり、学生や社会人にとっては待ちに待った行事の一つでもある。社会人の中には連休を大型連休にするために有給を取る人間も居るかもしれない。

過ごし方も様々だ。

ただひたすら、自身の住まう居住地で惰眠を貪るか、連休に合わせて出された課題をこなしているか、それとも旅行に費やすか、はたまた自身の趣味のために使い切るか。

千人いれば千通りの過ごし方があるように、連休の使い方は人それぞれだろう。その中でも、彼のようなゴールドデンウィークの過ごし方は珍しい部類なのかもしれない。

金髪碧眼の彼。幼さが残る容姿、髪は男性としては長い髪を後ろで縛り纏めている。彼の目の前にあるのは墓石。つまりは墓の前に、彼は立っていた。

線香立には火が付いて間もない、線香が供えられている。そのことから察するに、彼がここに訪れて間もない事だろう。

墓参り。それもゴールドデンウィーク期間中。

一般的に墓参りは、お盆やお彼岸、年末年始や故人の命日などに合わせて訪れるもの。よっぽどの事情がない限り、ゴールドデンウィークのような連休に訪れはしないだろう。

だが彼は訪れていた。目の前に立っている墓石を穏やかな表情で見つめて、口元には微かな笑みを浮かべ、極めて穏やかな口調で。

「よう、久しぶり……で、いいんだよね？」

彼らしくない言葉であった。

眩くような口調は、いつもの鋭く口の悪い言葉使いではない。

「遅くなつて悪かった。ちよつとドタバタしててよ、時間が作れなかつた」

少し前まで杖使つてたんだ、勘弁してくれ。と軽く悪びれた調子のまま軽い口調で続ける。

「一つ、報告があるんだ。木綿季だけど、一緒に暮らすことになった。兄妹なのに、別々に暮らすつても何か違うと思つてな。まあ、情けねえ兄貴だが受け入れてくれたよ」

器が広いにも程があるだろ？ と彼は自嘲する。

当時の光景を思い出しのか、彼の口元には笑みを浮かべていた。

アレは酷かつた、と。わんわんと嬉し涙を流す妹を思い出し、苦笑を浮かべて直ぐに表情を変えた。

どこか悲しそうに。

先程の表情とはうって変わった切なさを感じさせながら口を開く。

「……あと晶彦君だけだな、死んだつてさ」

言葉とは裏腹に、その表情は確かな悲哀に満ちたモノだった。

「オレも人聞きだけだよ、アイツの恋人が言つてたらしいぜ。神代凜子だつてな？ オレも会つたことないんだが、まず晶彦君に恋人がマジで居たつてことに衝撃を隠せねえよ。思えば、アイツとはその辺り全然話したことなかつたよ」

ぼんやりと思ひ出す叔父——茅場晶彦との会話。

とりとめもないことばかり、叔父と話していた。学校はどうだ、友達はいるか、成績は大丈夫か、将来の夢はあるのか。顔を合わせればそんなことばかり、まるで親のように、親よりもうるさく自身に尋ね

ていたことを思い出す。

「……オレはいぎ知らず、関係のない連中も巻き込んだんだ。もうアイツには愛想が尽きたって思っていたんだけどさ、どうもオレは割り切れるほど器用な人間じゃないらしい」

自嘲するように苦笑を浮かべて、彼は続けた。

「アイツがやったことは許されないことだつてわかつてんだ。それでも、死んでほしくはなかった。……ホント、自分の甘さには反吐が出るよ」

大きく忌々しげに、チツ、と舌打ちをする。

自身の甘さに耐えるかのように、自身の手を強く握りしめる。

「SAOサバイバー帰還者を集めた臨時学校つてのが設立されてよ、オレも木綿季も、ついでに明日奈もそこに通ってる。そこで色々な連中に会った。大半の連中がオレに同情する、中にはオレを恨んでいる奴も居る」

「だけだよお、と言葉を区切り迷いなく、憤りすらもない調子で。」

「当然だよな。何せ、怒りの矛先を向ける野郎が死んでんだ。そうなるオレに向かうのは必然だろうさ。つっても、オレは聖人じゃねえんだ。理不尽だって思うときもある。でもこれは覚悟していたことだ」

覚悟していた。

例えば自身が生き残り、現実世界に眼を覚ましたところで全員が全員、彼の味方であるという保証はない。

むしろ、いつでも止められるべき立場に居た彼を責めることだろ

う、と彼は覚悟していた。何せその言い分は間違えではない。全ての元凶たる茅場晶彦の最も近くに居たのは彼だ。もつと茅場晶彦に意識を向けば、気付いていたかもしれない。止めることが出来たかもしれない、1万人のユーザー達は電腦の虜囚とならなかつたかもしれない。

だが彼は気付けなかつた。余裕がなく、自分自身に手一杯であつたがために、気付くことが出来なかつた。

故に、彼は結論付ける。

自身に怒りの矛先を向けても、これは仕方のないことであると。

「多分だけど、これからも晶彦君絡みで、オレは色々な連中と向き合わなければならねえんだと思う」

逃れることの出来ない事実を、彼は改めて口にした。

「これは確定事項だ。アイツの身内は、今となつてはオレだけだ。怒りの矛先が見つからないのなら、オレが受けるしかねえだろ」

そこまで言い切ると、彼は目を閉じて、再び瞼を開ける。

先程よりも力強く、絶対に折れない意思を携えて、彼は眼で訴えながら。

「だからオレは——アイツが関わってきたことに関わりぬく事にするよ。耳を塞いで眼を閉じたところで、アイツのやらかした罪からは逃れられることは出来ねえ。だったら何もかもを受け入れちまつて、そこから考えようと思う」

それは彼が背負うべき業ではないのかもしれない。

彼自身も被害者なのだから、それを声たかだかに主張しても良いことだろう。そうすれば、次第に彼を責める声はなくなる。

茅場晶彦は世間を蝕み、失意のどん底に追いやつた怪物であると周

団に同調すればいい。実際、彼自身も被害者だったのだ。それを主張したところで問題はない。

周りの意見に身を任せ、周囲と同調し、端的に言っしまえば空気を読めばいいだけのことだ。それだけで、彼は救われる。誰もが彼に同情し、否定的な意見など出ないことだろう。

しかしそれは彼には——難しい生き方に他ならなかった。

「今日来たのは、宣言するためだ。改めて他人に告げることでもねえし、報告がてら父さんや母さんには聞いてほしかった」

それだけ言うと、墓石から背を向ける。

これから彼が歩むのは修羅の道だろう。妥協もせず、茅場晶彦が起こした不始末に関わるというのだ。

苦難に満ちた道だ。

茅場が不幸にした人間は数万人は下らない。もつといるのかもしれない。

だと言うのに、彼の調子は変わらない。口元には不敵な笑みを浮かべて、空を見上げる。

——晴れ晴れとした青空に、何重にも重なった曇天。

まるでそれは、光と闇が背中合わせで存在するかのようであり、彼の内面を表しているかのようでもある。

と、そこへ。

「

一陣の風。

冷たくなく、温かいそれは彼を包み、そして背中から押すように吹いた。

頑張れ、と言われたような気がして彼——茅場優希は振り向くこともなく。

「それじゃ、また来るよ。——ああ、今度は妹も一緒にな」

.....

やることがある、と。

茅場優希——ユーキは再びアルヴ Heim・オンラインの世界に訪れていた。

メインメニュー・ウィンドウを開くと、既に16:00を回っている。かねてより計画されていたオフ会が開催されている事だろう。

妹であり、一緒に住み始めた木綿季が拗ねていたのは記憶に新しい。恐らくであるが、兄に甘えている彼女のことだ。一緒に行きたかったのだろう。とは言っても、肝心の兄はどうして拗ねているのか、と首を傾げるばかり。

とは言っても、不満なのは木綿季だけではなかった。

ユーキの装備を新調するために先程までログインしていた篠崎里香ことリズベツトからは小言を言われ、エギルからは「レベツカが悲しむだろうが！」と理不尽な怒りをぶつけられ、クラインからは協調性がないことを非難されたばかり。

対応が変わらないといえ、幼馴染である明日奈くらいのもんだ。彼女が今からユーキが何をするのか敏感に察すると、笑顔で送り出していた。

そう言うわけで、ユーキは様々な非難轟々を背中に受けて、歩いていた。

ホームグラウンドであるノーム領を抜け、雪原地帯を踏破し、溪谷を

抜けて、央都『アルン』へと進行する。

効率を重視した色合い、種類すらも度外視したツギハギのような鎧、頭部にはこれまた他人を威嚇するようなモノ。羊を思わせる角の生えた造形で、頭部を完全に覆っている。表情など読み取ることが出来ない。

その片手には長柄の武具を手にしていた。それは槍のような刃の片側に三日月状の大きな刃が付いている。ハルバードにも似たような形状。青龍戟または方天画戟——それがその武器の名称である。柄には刃に向かって登る龍の装飾が施されている。先に手にして黒い方天画戟とは違う、別の方天画戟。リズベツトが刀工したモノである。

傍から見たら、不恰好な戦士。剣士とは言えない彼の傍から、これもまた振り合いな可憐な人影が口を開く。

「アナタも変わってるよねー？」

発したのは小さな人影。

姿からして七歳程度、ユーキの腰よりも下のあたりに頭がある。ユーキの記憶にある彼女はもう少しばかり大きかった筈である。それなのに今となつては見る影もない。

愛嬌が良かった表情は、小さくなったことでより破壊力を増し、人々をキュン死にさせるほど。彼女の姉であるユイとは対称的な、黒いワンピースを身に纏った、薄紫色の髪の毛に赤い瞳の少女——ストレアはニコニコと笑みを浮かべていた。

思わずユーキは深くため息を吐く。

「オマエにそれを言われたらお終いだな」

「むー、何ですよ？」

「折角、自由に動き回れる身体を手に入れたつてのに、未だにオレから離れようともしねえ。変わってんだろ？」

「別にいいもーん。アナタが傍に来てくれれば、何でもいいんだもー

ん」

「……ホント、変わったヤツだよオマエは」

ルンルンと、鼻歌交じりにスキップするストレアは楽しげにユーキを先行した。

その背を見て、呆れた眼を見るのと同時に、一つの疑問が生じた。どうしてストレアは、自分と一緒にいたいのか。

小さな背だ。

華奢も華奢であり、戦う術もない。

ソードアートのオンラインで豪快に振り回していた両手剣は装備することも出来ず、リソースの節約という理由で小さな体で我慢している現状だ。

そうまでして、ストレアは自分に付き纏っている。その真意が、ユーキには未だに理解できなかった。まだ心配されているのか、と見当はずれな疑問を浮かべていると、ストレアは振り返り。

「それを言うならアナタもでしょ？」

「どう言う意味だ？」

「復活を遂げた『浮遊城』アインクラッドで話題は持ちきりだって言うのに、アナタは見向きもしないんだもん」

ああ、とユーキは空を見上げた。

アルヴヘイム・オンラインの空は既に黒く染まっており、空には月が輝き、星々が瞬いている。そこへ不釣り合いな物体が浮かんでいた。

幾つもの薄い層が積み重ねて作られている造形物。それは全長数百キロメートルあるかもしれないほどの巨大なもの。船ようであり、家のようにあり、島である。その名こそが『アインクラッド』。かつてユーキ達が囚えられていた世界がアルヴヘイムの空に顕現していた。

復活といっても、ALOを新しく運営する企業がレクト本社から買い取ったサーバーの中に、アインクラッドのデータが揃っている事を

見つけ、それを新マップとして実装したものである。

ユーキは何食わぬ口調で空からストレアに視線を移すと。

「それがどうした？」

「どうしたって……気になるの？ アイんクラッドだよ？」

「別に。第一、オレ翔ぶの得意じゃねえし」

なるほど、とストレアは合点がいったと納得して。

「あ、やっぱりそうなんだ。だから移動手段が徒歩なんだね？」

「徒歩で何が悪い。まあ、翔ぶ方法なんざいくらでもある」

「例えば？」

可愛らしくストレアは首をかしげるが、表情はニヤついたそれである。

どうせ碌でもない方法で、型破りなモノなのだろうと予想するも、やはり彼女の思った通りの方法であった。

「手頃な飛竜を鹵獲し、下僕にして背に乗って翔ぶ」

「……わあー、野蛮人。随意飛行の練習はしないんだ？」

「やっても無駄だ。人には向き不向きってのがあんだろ？」

「いい考えがあるよ？」

「……聞いただけ聞いてやる。言ってみろよ」

「アタシがもう一度アナタの中に入って、飛行をアタシが担当する――」

自信満々に胸を張りながら宣言するストレアに、ユーキは間髪入れずに答える。

「却下だ」

「ええ、何でよー？」

「……オマエはいい加減、自分の為に行動しろよ。オレなんぞにもう構うな」

「……えへへ」

「ンだよ？」

「やーだよ。アタシはこれから、アナタについていくんだからねっ！」

「……目障りにも程があるなそりゃ」

「言い方!？」

そこまで言うと、二人は央都『アルン』にたどり着いた。

やはり、というべきか。確かにプレイヤーは存在するものの、活気はグランドクエスト攻略以前よりも落ち着いたモノになっている。恐らく、グランドクエストに集中していた意識が、今はインクラッドに向けられているのだろう。

尚更、ストレアはわからなかった。

ユーキは何故ここに赴いたのか。そもそもの話、今はオフ会を開催している事だろう。だと言うのに、ユーキはそちらには向かわずに、この世界に降り立ち歩を進めている。

それはつまり、現実世界よりも優先すべきことが、この世界にあるということだ。

「ねえ、アナタ。どうしてここに来たの？」

「……直ぐにわかる」

それだけ言うと、ユーキは歩を進めて、慌ててその後をストレアが追う。

ユーキとストレアがやって来た場所とは、『アルン』の中央広場。中央広場、と言ってもそこには何もなく、商業施設とは離れているためか他のプレイヤーの姿が見当たらない。否、訂正が一つ。

「あ……」

ストレアが声を漏らす。

ユーキやストレア以外にも、人影は二人存在していた。

黒を強調とした影妖精族^{スプリガン}、そしてストレアと同じ背格好の白いワンピースを着た少女。

影妖精族^{スプリガン}の姿は少年だ。

全身黒ずくめとも呼べる装備。黒いロングコートを羽織り、防具らしい防具は胸当て程度の軽装。黒いレザーパンツに、手には黒のグローブ。

黒よりも黒く、墨よりも黒い。そんな少年が、ユーキの目の前に立っていた。

その姿には見覚えがある。

背に背負うエリクシデータ——ではなく、二対の黒い直剣。リズベットが刀工した、剣を背負っている。

曰く、はじまりの英雄。曰く、ベータテスターの希望。何度も顔を合わせ、何度も争い、何度も競い合った。ユーキが決して無視できない相手が、目の前に立っている。

まるで示し合わせたかのように、まるでユーキがここに来ることがわかっていたかのように、黒ずくめの少年は大して驚かずにユーキの存在を認める。

そして手慣れた手つきで、メインメニュー・ウィンドウを開くと。

「ハッ——」

薄く笑みを浮かべるユーキの視界に、半透明のシステムメッセージが出現した。誰からの内容か、などと考えるまでもない。ユーキは考える素振りすら見せず、文面も読まずに『YES』ボタンに触れた。そしてカウントされる60秒。

白いワンピースの少女——ユイは視線ストレアに訴え、彼女もそれに応じるかのように頷く。

二人の邪魔をしてはならない、と。ユイとストレアは広場を後にした。

最早、ユーキと彼はお互いしか見えていなかった。

黒ずくめの少年——キリトは不敵に笑みを浮かべて背中から二対の片手剣を勢い良く抜き去り。

ツギハギ防具の少年——ユーキは兜の奥でキリトを睨めつけて、方天画戟を片手で構えた。

奇しくも、それは再現であった。

第十八層での決闘の再来、巻き戻したかのように、両者は対峙している。

しかし、心境は全く違うもの。

キリトは心が踊り、ユーキは高揚する感情を抑えきれない。

二人に抑圧もなく、心を縛る理由もない。ただ思うがまま、あるがままに、己の剣を、己の武を、研鑽してきた技術を、ここで相手にぶつけるのみ。

両者がこうしてぶつかり合うのは必然であったように、両者がこうして向き合うのは運命だったように、今までの出来事は状況でしかなかった。

ユーキにとって、キリトにとって、今までの出来事は。

全ては今、目の前にいる男と戦うためだけにあったのだと——

御託はいらねえぞ、とかつてアインクラッドの恐怖と畏怖された存在は眼で訴え。

だろうな、とかつてはじまりの英雄と謳われた者は笑みを浮かべて応じてみせる。

60秒のカウントダウンがゼロになる。同時に『DUEL』といった文字が二人の間に弾かれた。

言葉もいらなければ、合図もいらぬ。剣を握り締め、戟を携えて、同時に飛び出す。

二人の間は数十メートル。一息に詰めることの出来る距離。

観客は誰もいない、中央広場にいるのは少年二人のみ。

『はじまりの英雄』と称される少年。

『アインクラッドの恐怖』と畏怖される少年。

ただのカーテンコールでは終わらない。彼らの本当の戦いは、これから始まるのだから――。

Vol. 6 リメンバー日常

第1話 機械は敵だ

2025年5月25日 PM12:40

SAO帰還者学校 中庭

ソードアート・オンラインがクリアされてから、一年と三ヶ月が経過されていた。

囚われていたプレイヤーは全て現実世界に帰還を果たし、各々の日常へと戻っている。須郷伸之のエゴに巻き込まれていたプレイヤー達も例外ではない。彼らからしてみたら、実験体として囚われていたと事実はあるものの、何をされたかまでは記憶になかった。それでも五体に後遺症などもなく、今となっては現実世界へ帰還を果たしていた。

虜囚となっていたプレイヤーは様々な人種が居た。

男性から女性。大人から子供まで、様々な人間が二年近く仮想世界を生きていたということになる。

そう、二年近くもだ。

殺伐とした仮想世界、HPバーがなくなりゲームオーバーになったが最後、それは現実世界での死も意味しているデスゲーム。過酷とも言える世界を、SAO帰還者達は二年近くも生き抜いてきた。

精神が完成されている者達はまだいい。

問題は、精神的に未熟である未成年の少年少女たちである。思春期と呼ばれる多感な時期に、少年少女達は仮想世界で過ごして来た。心理面で考えても、彼らの人格にどれほどの影響を与えたのか検討もつかない。

良い方向に進んだ少年もいれば、悪い方向に捻子曲がってしまった少女も確かに存在する。

そうした理由もあってか、未成年な少年少女達の為に政府は受け皿

を作った。それこそが—— S A O 帰還者学校である。

表向きは勉学を疎かにされていた状況を鑑みて、裏向きは不安定である未成年のプレイヤー達を監視するため。

様々な思惑があり、一筋縄では行かずに、ただの善意ではないとは言え、その設備は最新鋭の技術が取り入れられていた。

学年といった概念はなく、全て単位制。卒業するまでの単位を習得すれば、かねて卒業といったシステムである。

そして、その外観も綺麗なもの。統廃合によって開いた廃校を再利用したとは思えない作り。

何よりも、勉学の姿勢が他の学校とは違うものであった。とは言っても、その『他校とは違う姿勢』が、彼にとっては問題であるのだが

「……………」

「あはは……………」

円形に小さな庭園にあるのは二人の人影。

不機嫌そうに白いベンチに腰掛ける金髪碧眼の少年。彼は力なく青い青い空を見上げており、後ろに縛っている長い一房の金髪が力なくユラユラと重力に従い揺れていた。

対する栗色の長髪の少女は乾いた笑みを浮かべて少年の隣に腰掛けていた。

同じような濃い緑を基調とした制服。

彼らは同じ帰還者学校の生徒であることがわかる。そして、時刻は既に昼休み中盤と言ったところ。学食にも行かず、かと言って弁当も広げていないことから、既に昼食は済んでいることがわかる。

更に言うと、二人の距離感。

自身のパーソナルスペースへの侵入をお互いに許しているのを見るに、二人は勝手知ったる仲であることが推測出来る。

「随分と、キテるね？」

「あ？ 何がだ？」

明らかな不機嫌である金髪の少年に向かって、栗色の長髪の少女は気軽な口調で問いを投げる。

当の本人である少年も、見上げていた顔を少女にグルリと視線と意識を向けて応じてみせた。

「優希くん、今ものすごい機嫌悪いでしょ？」

金髪の少年——茅場優希はバツが悪そうに、顔を顰めて。

「別に……」

「まあまあ、いいから。話してみてよ」

「……そんなに顔に出てたか？」

「うん。今からとんでもない悪さをするぜー、げへへへー。って顔してたよ？」

声は努めてゲスく、しかし表情は若干ハミカミながら。

栗色の長髪の少女——結城明日奈は何とも中途半端なモノマネを披露した。誰のモノマネなのか、言うまでもなく優希のモノマネなのだろう。

まず似ていない。

誰もが否定するであろうモノマネをとりあえず受け止めて、優希は冷めた声で言った。

「うわあ、何その悪い顔。引くわー」

「優希くんのマネをしただけなんですけど!?!」

「……クオリティが低くね？ アレだわ、切ないくらい可哀想」

「……あれ、おかしいよね。どうして、わたしそんな眼で見られてるの……?」

ブツブツ、と。

納得がいかないとしても言うかのような口調で小さい声で苦言を漏らすも。

「それで？」

「ん？」

「どうして機嫌が悪かったの？」

直ぐに明るい調子を取り戻し、明日奈は再び優希へと問いを投げた。

ただの興味本位だけではない。純粹に明日奈は心配しているのだろう。それは正に真つ直ぐな善意、裏も存在し得ず、駆け引きなども存在しない問いかけ。

故に優希は素直に応じることにした。

言葉をなるべく選び、口を尖らせて不満気に。

「……まあ、アレだ。ここの学校ってよ、電気で動いてんだろ？」

「電気?? ……ああ、なるほどね」

何とも不明瞭な言葉だろうか。電気で動いているという、第三者が聞いても首を傾げる言葉。

しかし明日奈は理解した。優希が苦手としているもの、そして今までの経験から、その答えを導き出し納得する。

「凄いよね。黒板だったものは、大型のパネルモニタだし。教科書やノートは一切使わず、生徒達にタブレット型PCが支給されるし。何よりもアミューズファイア無料配布よ。やりすぎよね？」

「まあな。中学ンときは、オレ達もそこそこな進学校に通ってたけどよ、ここまで設備が整ってる学校じゃなかったよな」

「本当だよね。……優希くんにとっては、それが問題なんですよ？」

「……わかってんなら、話しが早え」

苦虫を噛み潰したかのように、優希の顔はこれでもかというくらい顰める。両肩はブルブルと震わせて、苛立ちが募って仕方ないと言わんばかり。

彼らが通うことになった帰還者学校。

文字通りの最新鋭の設備、最先端の技術による授業内容、食堂は完備であり、おまけに小奇麗な立派な校舎。更に言えば、教育熱心な一癖二癖もある教諭達の存在。

学び舎としても、学生としても、これほど恵まれている環境はないだろう。下手な進学校や有名校よりも、勉強はもちろん、学校行事まで帰還者学校は力を入れているのだから。

だがしかし、優希にとってはそれが問題であった。

彼が問題視というよりも、気に入らない点の一つのみ。『最先端の技術による授業内容』これに尽きる。

元より、ゲームの類を全て「ピコピコ」と称していた男だ。機械系が得意なわけがなく、むしろ機械音痴であるのは言うまでもない。

「ソで全部電気なんだよ。良いじゃねえか紙で、古き良き姿で勉強に勤しんでもいいじゃねえか」

「電気ってより、機械なんだけどね」

「全部同じだろ！ こっちとらよお、機械の電源を入れるだけで手一杯だつてのに、機械が参考書とノート代わりだあ!? 紙でいいんだよ紙で！ 手書きで良いんだよ、手書きで！」

「昔から機械系弱かったもんね……」

困った笑みを浮かべて言う明日奈の言葉に対して、優希は力強い頷きと共に苛立ちを込めて吐き出す。

「課題ファイルをフォルダに転送しておくようにつて何だっ!? まずフォルダってなんだ！ テニスか!？」

「それ、フォルトだよ」

分かりづらい優希の例えに、明日奈は間髪入れずにツツコミを入れる。

捲し立てるように不満をぶちまけるも、優希の憤りが収まることはない。むしろヒートアップするばかりであり、ガルル、と獣のごとく唸り声を鳴らし始める。

帰還者学校に通うようになったのが4月、授業を経て、交流会と称し全校生徒で行った宿泊研修、そして現在。

余程苦痛だったのか、優希は積み重ねていった不満を爆発させていた。

元より器用ではないことは、長年の付き合いである明日奈が一番良く理解している。

彼のこんな姿を見るのは恐らく、自分だけだろう。そんな僅かな優越感に浸りながら、なるべく困った演技を心がけて。

「もう、ちょっと待ってね」

「おっ？」

表情とは裏腹に、嬉しそうな声で持っていたカバンからタブレットPCを取り出す。

お世話が出来て嬉しい、そう言わんばかりの明るい口調で呆れた表情で明日奈は言った。

「教えてあげるよ」

「……悪いな」

「いいよ、気にしないで。というか、キリトくんに教われればよかったのに」

「ふざけんなやだ。桐ヶ谷の野郎、絶対オレをバカにしてきやがるからな」

「バカになんて……する、かもね……」

二人のクラスが違うことは知っている。

しかし、事ある毎に彼らは競い合っていることも熟知している。それは小テストの答案、体育の授業中、果ては学食の早食いから、何から何まで子供のように彼らは競い合っていた。

反目している、とまでは行かないものの、お互いを意識し合っている彼らだ。

普段は穏やかである和人はきつと優希を挑発することだろう。そして、そこから始めるのはいつもの喧嘩である。そうなれば、タブレットPCはいつまで経っても使いこなせない。

「そういうわけだ、教えてくれよ明日奈大先生」

「変なあだ名禁止です。そうね、まずは——」

そこまで言うと、ピシリ、と音を立てて明日奈の動きが止まる。

比喩などではなく石のように、何も言わない岩のように、自身のタブレットPCを太腿の上に置いて、明日奈は固まってしまった。

「——っ!？」

「どうした、大先生」

「え、あ、い、いや。その、あのお……ひい……!」

ドクン、と一際大きく明日奈は自身の心臓が高鳴ることを感じ取った。

顔は紅く染まり、視線は右往左往と泳ぎ始める、体温は上昇するばかり。眼の前には優希の横顔。

単純な話し、明日奈は緊張していたのだ。

想い人である幼馴染が目の前に、それも少しだけ自身が顔を近づかせれば、その頬にキスする事が出来てしまう現実。

今まで意識しなかった、といえは嘘になるがここまで緊張することはなかった。睫毛が長い、ボディースプレー特有の良い匂いがする、伸ばしている髪の毛が綺麗。様々な感想と思考が明日奈の頭を掠めては消えていく。

もはや明日奈の緊張は留まることを知らない。
体温は上がりっぱなし、肩を強張らせて、考えすらも纏まらない。
それでも彼女は何とか誤魔化そうと。

「そ、そういえば!!!」

「な、何だ!?!」

大きな声を上げる。

それが思いの外大きすぎたようで、優希はビクツと身体を引いて元の座っていた位置まで戻ってしまった。

それが明日奈を冷静にさせたのか、いつもの調子に戻った彼女は申し訳なさそうに口を開く。

「ご、ごめん」

「別に良いよ。ンで、何だ?」

「あ、えつとね……木綿季と暮らすようになって、上手く言ってるかなーって」

「ああ、そのことか」

対する優希は何でもない口調で。

「二日前にしつかり喧嘩した」

「そっか、良かった。……えつ!?!」

聞き間違えなのかもしれない。

明日奈はタブレットPCから視線を優希へと向ける。

優希は訂正するつもりもないのか、明日奈の視線を真っ直ぐに見つめて受け止めていた。

どうやら聞き間違えではないらしい。

そう判断すると、明日奈は思わず慌てた口調で優希へと詰め寄った。

「け、喧嘩ってどういうことよっ!？」

「オレもアイツも、譲れないものがあつたってことだ」

「譲れないものって?」

優希と木綿季。

彼らが家族となった経緯を明日奈は知っていた。そして、お互いがお互いを大事に思っていることも、見てきた真実である。

口は悪くも妹を大事に思っている優希。そして、気持ちを行動に示し隠すことなく兄を慕う木綿季。その二人のやり取りは仲睦まじく、仲の良い兄妹そのもの。喧嘩と言った行為など、縁遠いモノであると明日奈はそう思っていた。

故に、明日奈は問いを投げた。

二人に何があつたのか、把握するために。

「20日の土曜日の夕方のことだ。オレとアイツは近所のスーパーに買い物に出かけてたんだ」

「うん」

「いきなり炒飯食いたいって始まってな。別に手間かける物でもねえ、かと言って冷蔵庫にあつたのはきゅうりと蜂蜜のみ」

「ん、ちよつと待って?」

聞き逃がせない単語があり、明日奈は手のひらを優希に向けて待ったをかける。

対する優希は何故止められたのか理解できないのか、軽く首を傾げて。

「どうした?」

「冷蔵庫にきゅうりと蜂蜜?」

「きゅうりと蜂蜜」

「極限過ぎない?」

口元を引きつらせて言う明日奈に、堂々とした口調で優希は反論する。

「ごちとらいつだって極限だつーの。長期無断欠勤したせいで、バイトはクビになるしな」

ぶつくさ文句を言う優希に、なるほど、とある一定の理解を示した。確かに優希は言っていた。

掛け持ちしていたバイトがSAO、そしてALOに囚われていた影響で全てクビになり、今や新しいバイト先を探している毎日である、と。

確かに大変だろう。明日奈としても協力は惜しまない。しかし今の問題はそこではなかった。

「……まさかと思うけど、きゅうりと蜂蜜で何をしようとしたの？」

「メロンを——」

「——ちなみに言っておくけど、きゅうりに蜂蜜をかけて食べても、メロンにはならないわよ?」

居丈高に口を開く幼馴染の言葉を、ピシヤリと間髪入れずにシャツトアウトする。

きゅうりと蜂蜜というチョイスで、何となく理解していたからこそ出来る芸当。苦学生であり、どこか貧乏性な茅場優希であるからこそその思考回路。長年、伊達に優希と幼馴染をやってきたわけではない経験が、ここで証明される。

そして、どうやら使用目的が凶星だったのか。

優希は反論することなく、静かな口調で。

「……話しを戻すぞ」

「……聞きましょう」

この話題はここまで。
そう言うかのように、優希は話しを戻す。

「一通り買った方がいいが、お菓子が食いたいわって言い始めてな。別に高い物でもねえ、家にあるのはきゆうりと蜂蜜のみ」

「うん、それはもう良いから」

「何でも買ってやるって言ったらよお、アイツ何を持ってきたと思う？」

「……何を、持ってきたの？」

「たけのこの里だぞ!? たけのこ里！ 普通よお、きのこの山だろ！」

「……もしかしてだけど、それが理由？」

「ん？ ああ、当たり前だろ。もうそこで、火蓋は切つて落とされたな」

明日奈は天を仰ぎ見て、そして深く深呼吸。

そして大きく息を吸って。

「仲良しさん!!」

「あ？」

「理由が、平和過ぎない!？」

「バカ、オマエ。晩飯食うまでは会話なかったんだぜ？ 平和なわけ

ねえだろ、かなり殺伐としてたわ」

「しかもその日の内に仲直りしてる……」

「まあな。最終的に、すぎのこ村は何処に行ったのかって話して盛り上がった」

「……心配して損した」

「おいおい、肩の力を抜けよ」

「誰のせいよ、もう！」

可愛らしく剥れる明日奈は、チラリ、と横目で優希を見た。

彼は——笑っていた。少年のように、悪戯を成功させた子供のよう、年相応に彼は笑みを零す。

これこそが、明日奈の見たかった彼の——茅場優希の笑顔。
SAOに巻き込まれる以前には、ついぞ見せることがなかった感情の一つ。とは言っても、自分に向けられている憎悪や憤怒は消えていくようなには、明日奈からは見えない。それらが払拭されるには、長い月日が必要になってくるだろう。

しかし、それでも。

彼自身が自分を嫌っているとしても、未だにその気持が消えていなかったとしても、確かに見る事が出来た笑顔モウロがそこにあった。

「ふふっ」

思わず笑みが溢れる。

そして明日奈は理解した。胸がポカポカと温かい感情、温もりを懐き、いつまでも続けばいいのにといつの間にか願っている。

ああ、これこそが——幸せなのだ、と。

「急に笑いやがって、気持ち悪い」

「わたしに意地悪しているの?」

「ンだよ、随分と強気——」

「端末の使い方、教えて上げないよ?」

「——悪かったよ」

「ふふふっ、よろしい」

口を尖らせて気に入らないと言わんばかりに謝罪する優希を見て、明日奈はクスクスと笑みを零す。

「そうだ。放課後なんだけどね、スイーツ食べにショッピングモールに出かけるんだけど行く?」

「……メンツは誰だよ?」

「いつものメンバーと、シリカちゃんだね」

「シリカ? 誰だそれ」

首を傾げる優希に対して、もう、と呆れた口調で明日奈はボヤいた。

「ALLOで何度かパーティー組んだことあるし、SAOのときだってギルドホームに遊びに来たことあったでしょう?」

「……ああ、あのちっこい奴か」

「名前くらい覚えてあげてよ。木綿季とも友達なんだから……」
「……わかったよ」

そこまで言うと、バツが悪そうに優希は言った。

「どっちにしても、オレは行けねえわ」

「何か用事でもあった?」

「先約だ」

「朝田のヤツに呼び出されてんだよ」

第2話 私の先輩

2025年5月25日 PM16:10

某都内高校 校門前

——正直に言おう、どうやら私は浮かれていたようだ。

朝起きてから。いいや、昨日の夜から。それも違う、一週間前から私はこの日を心待ちにしていた。

朝起きても気分が高まり、学校に言っても上の空。買い物しても何かしら買い忘れ、夜にテレビを見ても頭に入っていない。そしてそのまま、気分が高揚したまま就寝。そんな生活を、繰り返して来た。

出来ることなら直ぐにでも声を聴きたい。

私から連絡をすれば、きつと“あの人は声を聴かせてくれることだろう。面倒くさそうな声で、気怠げに、それでも言葉とは裏腹に優しい声色で「どうした？」と言ってくれることだろう。

そんな身勝手な衝動を我慢して、グツと欲望を抑える。

私の欲望はあまりにも自分勝手なものだ。

“あの人の”の声が聴きたいから連絡をする、それは簡単なことだ。“あの人は優しい、私のワガママもため息を吐きながら付き合ってくれることだろう。

その程度のワガママで、“あの人が私を嫌うことはない。でも万が一と言う場合もある。もし“あの人が”が機嫌が悪かったら、もし“あの人は”に何かあって私に構っていられなくなっていたら、

考えてもキリがない、不明瞭な『IF』^{もしも}が頭を過り、連絡するのを躊躇してしまう。

何と弱いことか。“あの人が”に嫌われる、考えただけで動機が激しくなる。考えたくもない、そんな最悪なこと想像したくもない。何も無い私は“あの人は”しかいないし、“あの人は”さえいれば私は何もいない。

自覚もしているし、理解もしている。

私の心の大半を、＼あの人＼が占めている。もはや＼あの人＼か、それ以外かと別けてしまっても問題はない程度に、私は＼あの人＼に溺れている。

そうだ。もう私には——＼あの人＼しかいない。後はもう、どうでもいい。

「……」

足取りは軽い。

授業を終えて、HRも終わり、あとは＼あの人＼へ会いに行くだけだ。

この日をどれほど心待ちにしたことか。寝ても覚めても、ずっと考えていた。どんな店に行こうか、どんな会話をしようか、浮ついた気持ちは際限なく高まっていく。

鞆を持ち、教室を出て、階段を二段飛ばしに、下駄箱前まで到着する。靴を履き替えて、いつもよりも軽い足取りで校門前まで歩く。

そこまでだった。フワフワとした浮ついた私を、現実と言う名の重力を以て引きずり下ろしてくる。

校門前。

私の顔を見るや否や、それらは軽薄そうな笑みを浮かべて手を降ってくる。

数は三人。

それぞれが制服を着崩しており、スカートの丈も短い。とてもではないが、素行が良い生徒とは言えない。私と同じ制服だということに、どうしてこうもだらしなく制服を着れるのか不思議でならなかった。

顔もやはりと言うべきか。薄い化粧ではなく、黒々としたアイラインを入れ、口紅も濃く明らかな校則違反。

「待ってたよお、朝田あ」

ニヤついた笑みを浮かべて、話しかけてきたのはリーダー格の女。

名前は——何だったか。

正直な話し、彼女の名前も顔も覚えるつもりもなかった。ゲスく笑みを浮かべて、馴れ馴れしくすり寄ってくる彼女には嫌悪感しか湧いてこない。

それに黒い噂もある。何でも、身体を売っていたり、他校の札付きの不良と仲が良かったり、と真偽は別にして聞いていて気持ちのいい話しではないことは確かだ。

本当、嫌になる。

折角、気持ちよかった気分も台無しだ。苛立ちも覚えてくるというもの。

「……何か用？」

「冷たいじゃん。あたしら友達つしよ？」

微笑んでいるつもりなのか。

大粒のラメが光る唇を歪めるように汚い笑みを浮かべながら、リーダー格の女は気安く言った。

思わず私は、自分でもわかるほど不思議そうな声で問う。

「友達？ 私と、貴女達が？」

友達、彼女は確かに友達と言った。

なるほど。入学直後、彼女たちは確かに私に声をかけた。一緒に昼食を誘われ、その帰り道にファーストフードに寄ったりすることもあった。

行動だけ見れば、確かに友達のそれだ。彼女達が勘違いするのも無理はないかもしれない。しかし残念なことに、私は今まで彼女たちが友達であると思ったことは、一度たりともない。

いつだって無理矢理に私を連れ回し、自分達の話しかせず、長い時間拘束される。

私に声をかけた理由も、察することが出来る。大方、一人暮らしし

ている私の家を溜まり場にしようとしているのだろう。

仮に私が独りでいるのなら、彼女達の思う通りになつていたかもしれない。『あの事件』から逃れるために、独り暮らしている私であれば、彼女達の思い通りの人形になつていたかもしれない。

だが生憎、私は独りではない。

彼女達など必要ないくらい、私の心は“あの人”が占めているのだから。

それに気に入らないのだ。彼女達の眼が、気に入らない。

小学生の頃に見たことがある眼。自身よりも弱い人間を甚振るところを是としている人種の、下らない眼つきによく似ている。

「え、なに？ 文句でもあんの？」

そしてニヤつく。本当に目に余る声と顔だ。

絶対強者であることをリーダー格の彼女はもちろん、その取り巻きである二人も信じて疑っていない。

この世で最も強いのは自分であると、無謀にも思い上がっている愚者の眼。となれば、今の構図は簡単なものだ。強者である彼女達と、弱者である私。それを遠巻きに見ている通行人と学生達。

自然とため息を吐いてしまった。

「文句あるに決まってるじゃない。むしろ迷惑よ」

「……は？」

キツパリと有無を言わせない私へ、眼を丸くさせている。

反論なんて想定していなかったのだろう。

それもその筈。彼女達は弱者を見つけることに関してだけ言えば、類まれなる観察眼を有しているのは確かだ。何せ間違つた強者、つまりは他者を蔑むことよって生きてきた者はそういう連中だ。

誰が弱いのか狙いをつけて、にじり寄り、そして攻撃する。そうして彼女達は社会的地位を守り、それを繰り返してきたことよって自

分達は強者であると勘違いしてしまった。

言ってみれば、生き残るための処世術のようなモノだろう。

今までの経験則に従って、弱者である私に眼をつけて、利用してやろうと画策していた。

しかし、ここで想定外。

私が反論したことによって、何もかもがご破産となってしまう。

見物客も多い。いつの間にか、私達を注目する取り巻きは数を増していた。

弱者からの反論など、彼女達からして見たら、あつてはならないことだ。苛立ちなのか、それとも動揺しているのか、リーダー格の女は片眉を引くつかせて私に再度問いを投げる。

「朝田、いいの？ あたしにそんな口を叩いて」

「いいと思うけど？ あと、ごめんなさい」

軽く顎を引いて、私は頭を下げる。

それだけで気分を良くしたのか、リーダー格の女は機嫌が良さそうに口を開きかけるも、遮るようにして。

「ああ、そうじゃないの。今までの言動を謝ってるわけじゃなくて――

――私、貴女の名前を知らないの。

それが、その言葉が、引き金となったのか。

リーダー格の女子生徒は一步踏み出すも、慌てた調子で取り巻きの二人がそれを止めた。

「ちよ、ちよっと！ ここじゃ不味いつて遠藤！」

「そうそう。先公が来たらどうするのさ!？」

二人の説得も効果がなく、鼻息荒く私を睨みつけてくる。

なるほど、彼女の名前は遠藤というのか。ぼんやりと考えて、私は彼女達から背を向けた。とは言っても、最初に名乗られていた気がするし、どうせまた私は忘れてしまうのだろう。

何せどうでもいい人間だ。記憶に留めておく必要もなければ、義理もないのだから。

「ちよつと待てよ、朝田あ！」

「…………なに？ 大声で呼ばないでほしいのだけど」

呆れた口調で言いながら、私はもう一度だけ振り返る。

断固とした拒絶、毅然とした態度。弱者である私の対応に、遠藤のつまらないプライドは幾重にも汚されてしまい、彼女は面子を保つのに必死なのだろう。

右の目元を引くつかせ、ドスの効いた低い声で、遠藤は口を開いた。

「テメエ、ナメてんじやねえぞ…………！」

「まだ何かあるの？ 申し訳ないけど、急いでいるのよ私」

そう、急いでいる。

これ以上足止めを食っている余裕もなく、時間もない。

チラリ、と右手の腕時計に目を向ける。既に約束の時間を過ぎていた。一刻の猶予もない。このまま「あの人」を待たせるわけにはいかなかった。

そして遠藤に目を向けると。

「ふーん、急いでんだあ？」

下卑た笑みを浮かべて、私を見ている。

冷静になった、というわけでもない。苛立ちは尚も収まっていないのか、口元には笑みを張り付かせているものの、彼女の眼は決して笑っていないかった。

アレは笑いなどではない。もつと下衆な、私を辱めることを思っていたかのような、ひたすらに人を不安にさせるようなモノだ。

いつの間にか、抑えていた取り巻きの二人は遠藤から離れている。嫌な予感がする。自然と私は一歩後ろに下がってしまい、それを見た遠藤の笑みはますます深まっていく。

「そう言えば思い出したよ」

「……何を？」

「朝田、アンタさあ——」

——小学生の頃、何があつた？

遠藤の声は明らかに楽しんだ人間のそれだった。

ニヤついた笑みを隠すことなく、表情も自身が優位であることを理解しているかのように、弱者を見下しているそれ。

何があつた、などと白々しい。

彼女はわかつている。私が、朝田詩乃が、小学生の頃に、何て呼ばれていたか——。

どうして知っているのか、そんなことは問題ではなかった。問題は、どこまで知っているのか。

自然に、ギユツ、と。私は両手を強く握りしめていた。

半歩、徐々に。少しずつ、後ろへ下がる。自分でも情けないことは理解している。それでも、だとしても、今の遠藤は厭な眼をしていた。

「おいおい、怯えるなよ朝田あ。ちよつと前の威勢はどこにいったのさ？」

「……貴女、何が言いたいの？」

「えっ、言っつていいのおっ？」

我慢が出来ないというかのように、遠藤は腹を抱えて大きく口を開けて哄笑をあげる。

何ともわざとらしい問いかけだろうか。しかしここで理解した。
——この女は、何もかもを知っていると。

「あたしって顔が広いんだわ。んで、たまたまあんと同じ小学校
だった奴が居てさ」

——やめて。

「いやあ、びっくりしたよ。あんたが“あんなこと”したなんてねえ
？」

——お願い。

「見ろよ、朝田」

これ見よがしに、遠藤は右手をこちらにかざし、そのまま後ろへと
右手だけ持つていった。

ニヤついた笑みは深まるばかりだ。ゆつくりと、少しずつ、私に見
せつけるように、後ろに回していた右手を出していく。

右手首が見えた——嫌な予感がした。

伸びる親指が見えた——動悸が激しくなる。

伸びる人差し指が見えた——確信に変わる。

遠藤の右手はいつしか、人差し指と親指の伸びたそれになってい
た。それはまるで——拳銃。子供が拳銃をもしたジェスチャー
によく似ている。

それだけで、それだけの動作で、私は完全に冷静さを失っていた。

悪夢のように、二度と見たくない光景が、脳裏に蘇ってくる。

動けない。後ろに下がることも、眼を閉じることも出来ない。メガ
ネのレンズ越し見える遠藤は悪魔のようにも見えた。それはあのと
きの再現かのように、私の足は地に根付いたように、何一つ動くこと
が出来ない。

人差し指が向けられる。

ただそれだけであるのだが、私にはまるで、それが——銃口のように見える。

そして、遠藤は、そのまま、嘲る笑みを向けたまま、口を——。

「——ストップ」

——開かなかった。

私と遠藤の間に入る一人の男の人。

この辺りには見たことがない、濃い緑を基調としたブレザータイプの制服。頭髪は黄金で、長い髪の毛は後ろで纏められている。

誰なのか、などと問うまでもなく、考えずともわかっている。何度もその背中を見てきたし、何度もその背中に助けられてきた。

意地っ張りで、強情で、何よりも捻くれている。そのくせに誰よりも優しい。

彼の、“その人”は——。

「せ、ん、ばい……?」

「やあ、朝田」

柔らかな笑みを張り付かせて、彼——茅場優希先輩は私の方へと見た。

他人が見たら、その笑みは人を安心させるモノだ。現に私は先輩の登場で、安心しきっている。しかし残念ながら、彼の笑顔に安心したわけではない。私は知っている、今の先輩の対応は余所行きのモノ。つまるところ、猫を被っているに過ぎない。

キョロキョロと辺りを見渡し、先輩は首をかしげてマイペースな口調でボヤいた。

「待ち合わせ場所に来ないから、様子を見に来たけど凄いことになってるね」

そして、苦笑。

態度は演技が入っているものの、対応は何も変わらない。今も昔も、先輩はこうして私を守ってくれる。弱い私を、それでもいいと受け入れて、彼は庇護し続けてくれる。

強張っていた身体が、いつの間にかほぐれていくのを、私は自分のことながら感じていた。先輩がいるだけで、こうも安心してしまう。本当に彼に溺れていると思うし、頼りきってしまっている。

「あの、すみません。朝田が何かしました？」

「……あんた何、そいつの知り合いなんか？」

「知り合いというか、先輩って感じですかね小学生のときの」

あくまで敬語を崩さずに、あくまで柔和な表情を曇らせずに、先輩は遠藤の問いに対応する。

対する遠藤は、へえ、と新しい獲物を見つけたような笑みを浮かべて、先輩を見つめている。瞬間、ゾクリ、と私の背筋が凍りつく。遠藤が今から何を言わんとしているのか、理解してしまった。

「あんた、名前は？」

「茅場優希って言います」

「茅場さあ、こいつが小坊のときさあ、何て言われてたか知ってる？」

やはり、そう来たか。

コイツは徹底的に、私を追い詰める気のような。私の唯一無二の味方らしき人を遠藤側へと引き込み、私を孤立させるつもりらしい。

その手は有効極まりない。

何せ先輩は知らない。私がどうして、小学生のときイジメられていた訳を、原因となった事件を、先輩は知らない筈だ。

そして今の私に、遠藤の言葉を遮らせる手段がない。

次の言葉が最後。

先輩が知らない私の真実を暴露され、それで最後。ただ一つの居場所が崩壊し、朝田詩乃は本当の意味で独りとなってしまふ。

それは嫌だ。考えただけでも嫌で、それが現実となるのならもつと嫌なことだ。

何も考えずに、いつの間にか私は口を開きかけていた。先輩、と手を伸ばしかけるも。

「あー、悪いけどさ」

先輩は演技したまま、それでも声は幾分か苛立たせた調子で続ける。

「……オレは朝田が何をしたのかなんて興味ないんだよね。コイツは朝田で、オレの後輩であるわけで、それは変わらないことだし」

「……は？」

「こうして首を突っ込んだのは朝田の為じゃない。オレはアンタが気に入らないだけなんだ。寄ってたかって、一人に対して複数で、自分が強いつて自惚れている。そんなアンタが、気に入らないだけなんだ」

言葉を紡ぎ、一步、また一步、遠藤へと近付いていく。

得体の知れない雰囲気。同じ人間であるはずなのに、どこか違う生き物のようで、先輩は有無を言わせない威圧を遠藤に向けている。

見たことがない。

あんな先輩、今まで見たことがない。

常に苛立ち、鋭利な言動で、厳格な表情。私を守って何度も喧嘩していたときは、声を何度も荒立てていた。

しかし、今の先輩はそれとは違う。怒っているわけでもなく、感情を発散させているわけでもなかった。威圧するかのようには、人の感情に訴えるように、先輩は容易く遠藤と取り巻き二人を圧倒していた。

先輩の背中を見ている私でも感じ取れる。人が得体の知れない何

者かに抱く原初の感情。それこそが——恐怖である。

それを、遠藤達は真正面から受け止めている。

余裕ぶっていた仮面はいつしか剥ぎ取られ、ガチガチと身体を震わせ、双眸からは涙が溢れかけている。

「アンタは強くない。むしろ一人でも立ち向かった、朝田の方が強い」
「や、やめ……!」

「本当に面倒だ。——」
「テメエみたいな勘違いしたヤツは本当に面倒だ。ただのクソが、オレの後輩をイジメてんじゃねえよ。なあ?」

いつの間にか先輩は演技をやめていた。

気怠げに、苛立ちを隠そうともせず、遠藤達にただ敵意を向ける。対して、遠藤達は震えるばかり。先程まで自分達が強者であると信じていた彼女達はどこにもいない。ただ食われるだけの草食動物のように、絶対捕食者を前にした動物のように、一手一足先輩の挙動に敏感に注目するばかり。

そうして先輩は、ポン、と。

気安く、遠藤の肩に右手を置いた。強くもない、むしろ弱く。遠藤の身体を労るように優しく。

「朝田にはもう手を出すなよ? 今度はオレが相手をしてやつからさ。いいか、オレは忠告はした。それでもコイツに構いたってえなら勝手にしろ。その時は——」

それだけ言うと、先輩は遠藤の顔の横まで近付いて、何かを呟いていた。

私は何も聞こえない。きつと、取り巻き二人にも聞こえていない。その言葉が何なのか、発言主である先輩と、直接吹き込まれた遠藤にしかわからないことだろう。

そして、当の本人である遠藤は——。

「ひい……っ!?!」

まるでその顔は怯えきっており、化物を見るかようだ。

捨て台詞を吐く余裕もないのか、振り返ることもせず遠藤は一目散に逃げ出した。そうなるのと、取り巻きも一緒に逃走するしかない。いつの間にか出来ていた人垣をかき分けて、必死な様子で先輩から逃げる。

それを見ていた先輩は、チツ、と誇るでもなく、むしろ自身に嫌気がさすとも言おうかのような調子で。

「女相手にイキるなんざ、ダセエにも程があんだろ……」

先輩は振り返る。

先程までいた、得体の知れない雰囲気を纏った先輩はいない。いつもの眼つきが悪く、素直ではない調子の、私が知っている優しい先輩がそこにいた。

呆然と立ち尽くす私を心配してくれたのか、先輩はぶつきら棒に言い放つ。

「大丈夫かよ?」

また、助けられてしまった。

しかし嫌悪感はない。むしろ嬉しくもあり、柄でもないが先輩が王子様のようにも見えてしまう辺り、私は重症なのかもしれない。

それほどまでに、私は彼に溺れている。嫌われたら自殺してしまうほど、彼に頼り切ってしまったている。

「ええ、ありがとう。また助けられちゃったわね」

「別に助けたわけじゃねえよ。連中が気に入らないから、首を突っ込んだだけだ」

嗚呼、本当に。
私の先輩は捻くれ者――。

.....
.....
.....

2025年5月25日 PM17:10
アーケード街

それから私と先輩は、足早に学校を後にしていた。

どうやら思いの外、注目を集めていたようだ。私達と遠藤達とのやりとりを見物していた人垣が周囲に出来上がっており、好奇的な眼で誰も彼もが私と先輩を観察している。

目立つのは嫌いだ。

でも、先輩と一緒に話しは別であるし、むしろ臨むところでもある。

問題なのはそこではない。人垣が出来上がるほどの見物人がいたにも関わらず、誰もが傍観者を気取っている。だと言うのに、翌日にもなればまるで当事者であるかのように噂が流れていくことだろう。

面白半分で語り、まるで自分は関係がないと言わんばかりに、好き勝手に憶測を並べて話しが広がっていく。まるでそれは、あの時の再現だ。私がイジメられることになった再現。関係がない連中が吹聴し、私を贄として晒す。

もちろん、関係がない連中に首を突っ込んでほしくない。

煩わしいだけであるし、先輩と私の仲を邪魔するのはやめてほし

い。そう考えれば、言うことはないのだが。

私達がやってきたのは、私が済んでいるアパートの近くのアーケード街だ。

いつも慣れ親しんだ光景。中央は歩行者が進むための通路があり、その両側には店が並んでいる。

時間も時間なせいもあってか、タイムセールを狙った主婦層とかかなりの頻度ですれ違い、仕事帰りのサラリーマンも行き交っていた。

中でも、私達のような学生の姿は少なかった。むしろ、私達以外存在しないと云っても過言ではない。

そこで、ふと、目についた。

仲良く手を繋ぎ歩いているカップルの姿。和気あいあいと言葉を紡ぎ合い、そして幸せそうに笑みを零す。

何と微笑ましいことか。

……もしかしたら、私と先輩も、そう見られているのかも、しれない。

「——オマエさ」

「……………っ!？」

そんなことを考えていると、突然先輩から話を振られた。

いつもどおり、億劫そうに、気怠げに。私の心のうちなど察している様子もない。

ならば私が取る行動もいつもどおり。

極めて冷静に、沈着に、眼鏡のブリッジにあたる部分を人差し指と中指で上げて。

「……………なにっ？」

「いや、また面倒な連中に絡まれてんだな？」

「ああ」

何だそんなことか、と。

私は先輩が言わんとしていることを汲み取り、どうでもよいと言わんばかりの口調で切って捨てた。

「気にしないで。ああ言う連中は構うと、つけあがるだけなんだから」
「まあな」

「その辺り、私達が一番詳しいかもね」

「……笑えねえ冗談だなそりゃ」

ため息を吐く先輩に対して、私は思わず笑みを零してしまった。

でも確かに、それは先輩の言うとおりだった。小学生の頃、全校生徒に嫌われていた私達。私達と言っても、問題になったのは私だ。小学生では、いいや、人間からしてみたなら許容出来ないことを、私は犯してしまった。それは文字通り罪であり、人間が人間として生きていく上で決して行ってはならない罪の一つ。

なのに先輩は私の味方になってくれた。見て見ぬふりが出来たにも関わらず、私を守ってくれて、汚れた私の手を握ってくれた。オマエはそのままでもいい、と弱い私すらも受け入れてくれた。

小学生の思い出は辛いものだ。

でもそれ以上に、先輩と出会えた掛け替えのない思い出でもある。

「そういうえば、気になることがあるのよ」

「ンだよ？」

「小学生の頃ね、先輩が卒業してからイジメられなくなったんだけど」
「そうか」

「先輩、何かしたでしょ？」

当時、私に味方をする者は先輩だけだった。

教師ですら私に対するイジメを暗黙し、腫れ物を見るかのように接してくることはなかった。

となれば、邪魔者なのは先輩のみ。先輩がいなければ、朝田詩乃を

陥れる障害はなくなる。教師は黙認しているし、免罪符を得たと勘違いし、喜々として私を陥れることだろう。

しかし、それはなかった。先輩が卒業してから、ピタリと私に対するイジメは止まり、まるで最初からいかなかったように、何も問題なく平穩に小学生生活を終えることとなる。

私はもちろん、何もしていない。

となれば誰が、一体何をしたのだろうか。

それこそ、自明の理と言えるだろう。学校からいなくなっても問題ないように、先輩が裏から手を回していたに違いない。

だが――。

「……知らねえよ」

キツパリと、自分には関係がないと断じるかのように、先輩は言い切った。

先輩という人間を深く知らない第三者が聞けばその通りに受け取る言葉だが、私は真逆に受け取った。先輩は何かを知っているし、きつと何かをしたのだろう。

彼のことだ。

内容は死ぬまで言わないだろうし、口が裂けても私に告げないことだろう。先輩は恩を売る様な真似はしない。誰かの為ではなく、あくまで自分の為。だがその根底にあるのは、やはり何者かも知らない誰かの為に彼は動いている。

本人は違うと反論するものの、少なくとも私からはやはりそう見えてしまう。

口が悪く、眼つきも悪い。そのくせ、度が過ぎるほどお人好し。

それが私の先輩、茅場優希なのだ。

言動と行動が正反対、矛盾つぷりに自然と笑みを浮かべてしまう。

「そういうことにしてあげます」

「……それよりも」

「ん？」

私は先輩を見る。

こちらに目を向けずに、先輩は前を向いたまま。

「ねえとは思うが、オマエに絡んでいた女が何かしてきたら連絡しろ」

「……もしかして、心配してくれているの？」

「違えよ。首を突っ込んだのはオレだ、なら最後まで面倒を見るのが筋つてもんだろ」

……思わず悶えそうになる。

本当に素直じゃないと思う。どこか拗ねるように、意地を張る言い方が何よりも卑怯。先輩はどれほど私の心臓を高鳴らせれば気が済むのか。

ニヤつきそうな口元を、キュツ、と閉じ。

だらしなく崩れかけた表情を改めて引き締めて、

悟られないように大きい動作で、わざとらしく肩を竦める。

「はいはい、わかったわよ」

「万が一ってことがある。いつでもオレに連絡できるようにしとけ」

「……いつでも？ それは文字通りの意味？」

「当たり前だろ。他に何がある」

言質をとった。

先輩の見えない角度で、グツ、と小さくガッツポーズを取る。

出来ることなら、今直ぐに飛び跳ねたいが堪える。いつでもとは、そういうことだ。これで好きな時間、好きなときに先輩に連絡を取れる事が出来る。

「まあ、オレじゃなくてもいい。他に頼りになるヤツがいれば——」

「いないわよ。先輩以外、そんな人」
「お、おう」

食い気味に言うのと、先輩が微かに動揺する。
反応が早すぎたようだが、事実だから仕方がない。先輩以上に頼りになる人間なんて、この世にいるのだろうか。

「そう言えばよお、オマエ何の用なんだ？」

「え——？」

「え、じゃねえよ。用があるから、オレを呼び出したんじゃないのか？」

そう言われると言葉に詰まる。

特に理由はない。先輩の顔が見たくて、先輩の声が聴きたくて、先輩と一緒にいたいから、呼び出してしまっただけに過ぎない。

素直にそう言ってしまうえば、どれほど楽なことか。そして、それは私の性格上不可能だ。つまり——。

「別に、特に理由はないけど？」

自分の気持を悟らせないように腕を組み、思ってもないことを口にしてしまう。

これでは先輩のことを言えない。どうやら私も、素直ではないようだ。

私の本心を知らない先輩は立ち止まり、呆れた眼で私を見つめて。

「……少しは考えとけよ。オレあ、オマエの暇つぶし道具じゃねえぞ」
「もしかして、何か予定でもあった？」

「いいや、別に。予定がねえなら、ちよっと付き合えよ」

「別にいいけど、何かあるの？」

ああ、と先輩は答えて。

「この辺りにCDショップってねえか？」

先輩らしくない単語が出てきた。

いいや、普通の学生なら何一つ違和感がない単語だ。CDショップとはそのとおりの意味。CDを売買している店舗のことを言っているのだろう。

だが問題なのが当の本人、娯楽とは無縁の位置に属していた先輩から発せられた言葉だ。流行りのブランドから、人気の番組、更に言えばアイドルすらも知らない。年相応とは言えない感性を持っている先輩からCDショップ何て単語、聞くとは思わなかった。

固まる私を見て、訝しむ視線を送り先輩は口を開く。

「おい、何を固まってやがる」

「だって、先輩がCDショップって……」

「別にオレが聴くわけじゃねえぞ」

「あつ、そうなの」

驚いて損した。

しかし新たな疑問が浮上する。先輩が聴かないのなら、はたして誰が聴くというのだろうか。

もしかして、それは先輩の幼馴染の――。

「……誰が聴くの？」

「妹だよ」

その言葉に、緊迫していた緊張がほぐれていった。

自然と、安心した声で、私は応じる。

「妹ちゃん何を聴いてるの？」

「何だっけ、確か神埼エルザだったか」

「流行ってるものね。新曲出せば、毎回オリコンチャート1位よ」
「ふーん」

どうやら先輩は本当に興味がないらしい。

特に気にすることなく、制服のポケットから携帯を取り出して操作し始める。

メールが来たのか、慣れた手付きで操作し始めて。

「あ」

些細な変化。

先輩の人となりを理解し、ある程度長い時間一緒にいなければわからない程度の変化。

それこそが——笑顔だ。

口元を薄く、他人が見ればわからない変化であるが、何よりも眼が違う。

いつもの攻撃的な、何かに苛立っているような眼ではなく、愛おしそうで慈愛に満ちた、“例の事件”に巻き込まれる先輩からは想像もつかない表情を浮かべていた。

そこで、ふと。

先輩は呆然と見ていた私の表情に気付いたのだろう。

悪い、と一言謝る。

恐らく、私と話しているのに途中で携帯を見たことに気を悪くした、と勘違いしているのだろう。

「……どうした？」

そして、心配するように。

いきなり立ち止まり、先輩を凝視する私を伺うように先輩は問いを

かけた。

心臓が高鳴る。

見つめられて照れている、といった理由ではない。

もつと人間の負の感情、悪性を凝縮したような感情が、今の私を駆け巡っていた。

こんな醜い気持ちを、先輩に悟られるわけにはいかない。それほどうしてか、簡単なことだ。単純な話し、先輩に嫌われたくないから。だからこそ、私は普段どおりに振る舞っている演技をする。

静かな口調で、いいえ、と首を横に降って。

「誰から?」

それは誰よりも聞きたくない名前。先輩の口から聞きたくない名前。

でも私の願いも虚しく、その名前は無情にもその口から紡がれてしまう。

「明日奈だ」

——ああ、やっぱり。

先輩がそんな表情を浮かべる対象は、この世に一人しか存在しないだろう。

憧憬、情愛、恩義、忠義、それと親愛。それらが複雑に混ざり合い、言葉では説明出来ない感情を向けられている女性。恐らく、先輩がこの世で最も大切にしている人。その人物こそが——結城明日奈。先輩の幼馴染であり、先輩の光と言っても過言ではない人だ。

私の意思と関係なく、自然と身体が強張り、いつの間にか両手に拳が作り上げられていく。

自覚しているし、承知している。私は彼女に——嫉妬しているのだ。会話したことも、会ったことも、存在しか知らない彼女相手に、私は嫉妬している。更に言えば、羨んでもいる。本当にどうかしてい

ると、我ながら自覚している。でも制御が効かないのだ。いくら私が自制しようとも、理性は反して暴れ回る。手懐ける術もなく、見ず知らずの彼女に醜い感情を向けている。

「オマエも見るか?」

「……何を?」

「ほら」

そう言うと、先輩は自身の携帯を投げて渡す。

そこに映っていたのは、数人が映っている自撮り写真であった。

両手にピースを作り満面の笑みで映る先輩の妹ちゃんがいた。気の強そうな女の人が、両側の髪の毛を赤いリボンで縛った女の子と肩を組んでいる。その中で唯一人の男性である桐ヶ谷君は居心地悪そうに苦笑を浮かべていた。

そして何よりも、遠慮がちにピースサインを作り、ハニカミながら笑みを浮かべている女性に目を奪われた。彼女こそが、明日奈さんなのだろう。先輩の見舞いに行くときに、何度か彼女の寝顔を見たことがあるので、間違えはしない。

グッ、と携帯を握る手が強まっていく。

ああ、本当に私は醜い。

先輩の変化はとても喜ばしいことだ。丸くなったと言うべきか、以前まで纏っていた剣呑な雰囲気と比べて、纏う雰囲気は明らかに柔らかいものに変わっている。

良いことだ、良い事のはずなのに。私は素直に喜べない。

彼を変えたのはこの人達であり、明日奈さんなのだろう。

それが私はくやしい。何もせずに、ただ待っていた私とは違う。画面に映っている人達は、共に先輩と戦い、喜びも悲しみも、何もかもを共有しているのだろう。私が知らない先輩を、この人達は知っているのだろう。

ああ、本当に。

「どうした？」

「——ううん、何でもないわ」

私は、醜い——。

第3話 住めば都（ガチ）

2025年5月26日 AM6:10

カーテンの隙間から漏れる日差しを顔に受けて、金髪の少年が目覚めました。

不快であるように顔を顰めて、目を細めて憎らしげに光の先にある太陽を睨みつける。同時に疑問に思うことが一つ。何故、自分は陽の光で目覚めなければならなかったのかということ。だがその疑問はすぐに解消されることになる。

よく見れば、微妙にカーテンは開いていた。

どうやらそこから光が漏れているようでもある。そこを踏まえて、なるほど、と少年は納得した。

ならば自分が悪い。カーテンを閉めたのは自分なのだから。

言ってしまうは己の不注意。完全にカーテンを閉じていれば、中途半端に起床することもなく目覚ましが鳴るまで眠っていた筈なのだ。

そう、それもこれも全て自分の落ち度である。

「……って考えることが出来りや、オレはもうちよつとマシな人間だったんだろうけどな」

生憎、そこまで人間は出来てねえ、と欠伸を噛み殺しながら少年――

――茅場優希はぶつくさボヤき始めた。

そして布団から上半身だけを起こし、両手を上げ、身体をこれでもかと言うくらい伸ばす。

更に前をボーツと見て数分、漸く彼の意識が覚醒を始めた。壁にかけてある時計を見ると、針は6時10分を指している。目覚ましをかけたのは6時30分。何だかんだで良い時間なのが更に腹が立ったようで、誰に向けるでもなく理不尽に舌打ちを一つ。

今日も学生らしく勉強に勤しまないとならねえのか、とため息を吐いてダラダラと布団から出て畳み、そして辺りを見渡して――。

「いつまで経っても、馴れたもんじゃねえな」

以前まで住んでいたオンボロアパート——ではない。

彼から見える景色は白を強調とした壁紙、磨き上げられたフローリング、そして机と椅子と最低限の家具が設置された部屋。

伽藍堂のように何もなく、歳相応という割には質素すぎる部屋。まるでそう——新築のとある一室のような光景である。

優希がここへ住居を変更してから、一ヶ月と少しが経過しようとしていた。

現在、優希と彼の義妹である木綿季が住んでいるのは帰還者学校の学生寮だ。外観はシンプルな純白で綺麗そのもので、同じ外観のマンションが数棟に別れている。何でも地方の帰還者を受け入れるために建てたらしい。

綺麗である、といっても都内にある高級タワーマンションと比べると数段劣るものの、そこらにあるマンションよりかは何倍も綺麗なものであった。

部屋の内装もシンプルなもの。

2LDKで一通り家電が揃っている。何よりも優希が移住を決めたのが家賃の安さにある。

都内にありながら家賃が安く、水道光熱費も学校側が負担してくれるというありえないくらいの待遇の良さ。

元々、木綿季と暮らすと考えていた彼にとつて、帰還者学校の学生寮はうってつけの物件でもあった。何よりも安く、それでいて安く、更に付け加えれば安い。現在バイトをしていない彼にとっては楽園のような寮でもある。

「二つ返事で住んじまったが……」

んー、と腕を組み彼は考え始めてしまう。

あまりにも出来すぎていないのか、と冷静に自分の現在の状況を踏まえて懸念が生まれ始めた。

確かに助かっている。

掛け持ちしていたバイトを全てクビになつてしまった彼にとっては願つたり叶つたりでもある条件だ。だとしても上手すぎる話でもあつた。

学生寮に住んでいるのは、もちろんだが茅場兄妹だけではない。それこそ何百人、何千人といった学生が住んでいる。マンションが何棟あるのか正確に数えたこともないが、かなりの数であると優希は認識していた。

だというのに、例外がなく。全員が全員とも安値で学生寮で生活している。この行為が経営観念から分析するに黒字か赤字かなど考えるまでもないだろう。赤も赤、大赤字なのは間違いない。むしろどうやって成り立っているのか考えつけないほどだ。

「……負債を覆すほどの『利益』があるのか、それともそれをこれから生み出すのか」

そこまで考えて。

「オレには関係ねえか」

と、いとも簡単に優希は己の思考を放棄した。

そんなことよりも目先のことだ。義妹が起きてくる前に、朝食の準備をしなければならぬ。

「アイツは……、まだ寝てるか。昨日遅くまでアルヴ Heim やつてたからな」

勉強は大丈夫なのかねえ、と母親のようなことを愚痴りながら優希は寝間着の姿で部屋を出る。

下は赤のスウェット、そして上は青色のTシャツととても締まりがない格好。所謂——現実世界で良く見かけるラフな姿であった。

.....
.....
.....

2025年5月26日 AM7:50

学生寮 玄関ロビー

「ねみっ……」

あれからいつまで経っても起きてこない木綿季を叩き起こして、慌てて朝食をとる彼女を尻目に優希は部屋を出た。

いつもなら木綿季の準備が終わるまで待っているものの、今日の彼女は先約があるとのことで、今日は兄とは登校しないようであった。

このまま兄離れしてくれりや助かるんだが、とぼんやりと思いがから気怠気に猫背でだらしなく歩いていた。

ここは学生寮。歩いているのは彼だけではない。小走りでも歩くもの、彼のようにのんびりとした歩幅で歩く者、立ち止まってスマートフォンを弄る者も存在する。

十人十色。全員が全員とも行動に一貫性がないが、とあるモノが共通していた。それは全て、男性であるということ。

それも当たり前と言えよう。

先程言ったが、ここは学生寮である。その名の通り、学生が住まう

寮。帰還者学校に通う者であれば、ここに住まうのは当然と言えよう。

しかし、男女一緒とまではいかない。勿論だが、女子寮はあるし、優希が住んでいるのは男子寮である。本来であれば、男しか住めないのだが例外が一つ。それこそが木綿季という存在である。彼女のみが男子寮、加えて優希と同じ部屋に住んでいる。

簡単にはいかなかった。兄妹とはいえ、血の繋がっていない男女が一つ屋根の下。常識的に考えられない現状、一筋縄ではいかない例外。何をどうして許可が降りたのか、何があつたかを語るのは濃厚すぎる。強いて言えば、何もかもがあつた。それこそ茅場優希が持ち得るありえないくらい猫かぶり、狡猾とも言える根回し、そして卓越した煽動スキル使い勝ち取つたれ以外である。

何があつたのかは割愛する。

兎にも角にも、茅場兄妹だけは例外を認められたということだ。

とは言つても、周囲は思春期真っ只中の学生達。

木綿季に何が起きるかわからない——というわけでもなかった。周囲の男子学生は驚くほど紳士的に木綿季に接しており、とても手を出そうとする気配すらない。

なにせ彼女の兄があつた茅場優希。ソードアート・オンラインで「アインクラッドの恐怖」として名を轟かせていた男だ。今でこそ若干角が取れ、幾分か親しみやすくなったというものの、周りの評価は変わらず。簡単に言うところ——放っておけばなんの危険もない危険物、という扱いに落ち着いている。つまるところ、こちらから手を出さない限り噛みつかれることはないし、いきなり斬られることもないということだ。

そういう認識であるからか、誰もが木綿季に手を出そうと考える輩はいない。手を出したあと、何をされるかわかつたものではない。それこそが周りの男子学生の共通認識でもある。

そんないつの間にか、再び恐怖の対象として君臨してしまっている男は、自分の立場も理解しないままマイペースに玄関ロビーへと向かつていた。

のらりくらいと歩いていると。

「あ？」

見覚えがある二人の姿。

一人はここの寮母を務めている女性だ。年齢は二十代後半。黒真珠を思わせる、艶やかな黒髪の長髪。首にはチョーカーが巻かれている。第一印象は大和撫子然としている。しかし服装はTシャツにダメージジーンズとともラフな格好であり、彼女の容姿では似合わないと考えられる。だがどういうわけか、妙にそのラフな格好が、キマって"いた。

もう一人はそれこそ馴染み深い人物であった。

優希と同じ深緑色のブレザータイプの制服を着ており、帰還者学校の生徒であることがわかる。栗色の綺麗な長い髪。白いストッキングを履いて上品に笑みを零す女子生徒の姿。

方や口元を片手で隠しながら笑みを零す大和撫子。

方や満面の笑みで応じている育ちの良い雰囲気。

むさ苦しい男子寮には似つかない光景が広がっていた。そして遠巻きに二人の女声を観察している男達。枯れ果てた砂漠の中に存在するオアシスのように、枯れ果てた大地に咲き誇る花畑を幻視するかのように、男達の目にはありえない光景が広がっている。まるで忘れないように、刻みつけるように、じつくりと男達は観察をする。彼女達の輪に入れなくてもいい、その変わり今の光景を忘却の彼方へ追いやることのないように、脳内にしっかりと刻み込んでいた。

しかしここに、例外は存在する。

男達の理想郷はいとも簡単に崩れ去ることになった。

一人の空気の読めない男のてによって、脆くも儚くも朽ちていく。

「なにしてんのオマエ？」

異物が一人——優希は周囲の男達の感情など蹴り飛ばすかの如く。気軽になおかつ億劫であると言いたげに女子生徒に話しかけた。

笑みを絶やさなかった女子生徒の彼女。

それがますます笑みを深めて、パーツと輝かんばかりの笑みを優希に向けて嬉しそうに——結城明日奈は口を開く。

「あつ、おはよう優希くん！」

「……ん、おはようさん」

片手を上げて応じて、いやいや、とすぐに首を横に振り優希は再度疑問を口にした。

「違う、そうじゃねえ。オレはなにしてんのかって聞いたんだけど？」

「優希くんを待ってたんだよ？」

「……わかった、質問を変えるわ。朝っぱらからなんで毎度毎度こんなところにいるんだオマエ？」

「え、優希くんと学校に行くために決まってるじゃない？」

なにを言ってるの？　と言わんばかりに明日奈は首をかしげる。

見る者によっては可愛い見える仕草である。現に遠巻きに見ていた男子生徒達の数人は顔を赤らめている。

しかし優希の反応は違った。

呆れるように、されど諦めるように、明日奈を見つめる。

彼女の住んでいる家がどこにあるかは知っている。帰還者学校学生寮から離れているのも知っている。こうして優希の登校する時間に合わせるとなると、早起きしなければならぬことも理解している。

だからこそ、優希は呆れる。そこまでしてオレに合わせる謂われも

ないだろう、と素直に口にしようとしたところ。

「ふふっ、モテモテですね優希君」

上品に笑みを浮かべる寮母の姿がある。

だがその笑みは、どこか優希の癩に障る微笑みであった。まるで人をイジって楽しむのを生き甲斐にしているような、玩具を見つけたような嗜虐的な笑み。

現に目が笑っていない。小馬鹿にするように、猫をかぶっているそれはどこかで見覚えがある。

わ、わたしは別に優希くんのことなんて何も思ってませんよ!? と慌てて否定する明日奈を無視を決め込んで、優希は寮母に向かってニツコリと満面の笑みを浮かべて恭しく頭を下げると。

「いやいや、寮母さんには負けますよ。この前だって男の人とデートしてたじゃないですか」

「……ええ、お食事をさせてもらいましたよ」

「あれ、デートじゃない……? ああ、だから帰ってくるのが早かったんですね! そうですかそうですか。てつきり僕はデートだと思ってましたよ。そうですね、よく考えてみたらおかしいですもんね」

「……何が言いたいんですか?」

「いやなに。デートにしては帰ってくるのが早かったから————てつきりフラれたものだ。がつつき過ぎて」

そこまで言い切るとピシリ、と空気が凍りついた。

え、え、えっ……? と異変に漸く気づいた明日奈は右往左往するように、優希と寮母の顔を交互に伺う。

二人共笑みを絶やさない。口元には薄い笑みを浮かべて、目を細めてお互いに視線を向けている。両者の取り巻く雰囲気は肉食獣のそれだ。下手な素振りをしたものなら、食われて終わるのみ。一挙手一投足、些細な動きすらも見逃すことは出来ない。

遠巻きに観察していた男子生徒達も二人の沈黙には冷や汗を流すばかり。

数秒か、数分か、それとも数十分か。永遠ともとれる沈黙を破ったのは。

「フッフ」

「ハハハ」

両者であつた。

乾いた笑み、表情は笑みを浮かべたまま、腹の探り合い始める。そして――。

「ナメた口言うじゃないの、シヤバ僧」

口調は刺々しく、目つきは鋭い。

上品な態度から鋭利な刃物へと寮母は変貌を遂げる。

その変化に驚く様子もなく、優希は口元の笑みをますます深めていき。

「駄目ですよ、演じるならしつかりやらないと。本性出したら負けなんですから」

売り言葉に買い言葉。

空間を歪めるほどの口撃の応酬。

笑うという行為は本来攻撃的なものであり獣が牙をむく行為が原点である、とても言うかのように二人は笑い合う。

これが彼らの日常。

アインクラッドの恐怖、そして帰還者学校学生寮の寮母。

この二人が現在、男子寮の抑止力となしているのは言うまでもない。

2025年5月26日 AM8:00

「もうっ、ダメでしょ！ 喧嘩しちやー！」

明日奈は涙目になりながらも、優希にメツと人差し指を突き出して叱りつける。

他人の目を憚ることなく大きな声で、凜とした無駄に通る声で、涙目になりながら。よっほど二人のやり取りが恐ろしかったのか、その表情は今でも泣きそうである。

対する優希はどこに吹く風。

大して気にしない様子で、いつもどおり口悪くそれに応じた。

「喧嘩じゃねえよ。あの人がおレと話すときは毎回あんな感じだろ。つか、オマエも何度も見てんじゃん」

それは比喻などではなくそのとおりであった。

寮母と優希のやり取りは毎回あんな感じ。腹に一物を抱えた者同士、同族嫌悪——とまではならないものの、二人の会話は毎回あのような有様となっている。ときに寮母から吹っかけて、ときに優希から口火を切る。

毎度周囲を凍らせては、お互い笑い合うとそこで終了する。正に、周りなど気にしない勝手気ままなやり取りであることか。

明日奈も二人のやり取りは何度か見たことがある。

こうして優希を迎えに行ったことなど数知れず。優希と二人で登校することもあれば、木綿季も交えて三人という状況もある。

寮母と優希、周囲を凍らせるやりとりはそれこそ何十回と見てきた。だがそれでも、馴れないものは馴れないのだ。

「み、見てきてるけど！ そうだけど！ 良くないの、気持ち的に！」
「我慢してやれよ。あの人もストレス溜まってんだ。ああでもない
と発散出来そうみたいだしな」

「えっ、あれで発散できてるの？」

「応とも。この前なんて肉じゃが作ってもらったぜ」

「思いの外仲良しさんだった!？」

「昔の武勇伝とか聞かせてもらったりもしたな。木綿季のやつ、メ
チャクチャ興奮しまくってたっけか」

「ぶ、武勇伝……?」

「あとは色々と教えてもらった。知ってるか？ 一般人ってあの人達
の業界じゃパンピーって呼ぶらしいぜ?」

ハードラック ダンス
「不運と踊っちゃいそうだね、その知識……」

ハハハツ、と乾いた笑みを浮かべて「あれ？」と声を上げて明日奈
は優希に問いを投げた。

「木綿季はいないの？」

「ああ、友達と学校行きたいんだと。アイツ、なんて言ったか。シリ
カって言ったか？」

「うん、シリカちゃんね」

最近、付き合いのある見知っている少女の名前を聞いて明日奈は納
得するように頷いた。

シリカ——綾野珪子。かつてソードアート・オンラインで知り
合ったビーストテイマーの少女である。竜使いのシリカとまで言わ
れていたプレイヤーで、その可愛らしい容姿から他のプレイヤーから
はアイドルのように扱われていた。

「……アイツ、いつの間に友達なんて作ったんだ？」
「不満？」

クスクスとからかうような口調で問いを投げる明日奈に、バカを言え、と否定しながら優希はぶつきらぼうに言い放つ。

「このまま彼氏でも作って、オレ離れしてくれりや万々歳だ」

「……それは当然無理だと思ふなあ」

「それもそうか。アイツ、昨日なんて遅くまでアルヴヘイムにインしてたみたいだしな。当分男なんてありえねえか」

ゲームに夢中なのだろう、と優希は一人納得しているがそういう意味で明日奈は言ったわけではない。

木綿季という少女は、周りにわかるくらい兄を慕っている。

ブラコン、なんて簡単に片付けて良いレベルではなく、彼女が優希の姿を見たものなら一目散に駆け寄るくらい、他の男など見る様子もない。その姿はまるで子犬だ。それもブレーキが壊れた子犬。彼女に尻尾が生えているものなら、ブンブンと引き千切れんばかりに尻尾を振りながら優希の周りをグルグル駆け回っていることだろう。

故に、好感度など既に振り切っており、他の男など眼にも映らない。好みのタイプがあるとすれば、にーちゃんみたいな人と！ と彼女は即答することだろう。

だと言うのに、幼馴染は気付いていない。つまるところ、明日奈が抱いている淡い想いにも気付いていないことだろう。

それが幸運なのか、不運なのか。明日奈は考えないことにした。つまり話題を変える。

「木綿季、張り切ってるみたいだね」

「ご苦労なこったよホント」

木綿季だけではない。

周囲を見れば、そこには帰還者学校に通う生徒達の姿。

誰も彼もがどこか高揚と、そして殺気立っている。とはいっても剣

呑のそれではなく、興奮覚めぬといったところだ。

それもそのはず。

近いうち、アルヴヘイム・オンラインではプレイヤー達の手によってとある大会が開かれる。

その名も【統一デュエル・トーナメント】。グラウンド・クエストが攻略される前までは、種族間だけの閉鎖的な状況でデュエル大会が開かれていた。

それを今度は種族の垣根なしに、なんの柵もなく、全種族で誰が一番強いのか競おうというのだ。その熱狂は爆弾のように、一つ爆発すればもう二つ爆発され、熱狂は波となり、興奮していたプレイヤーたちを包み込んでいく。

今や、アルヴヘイム・オンラインはおろか、ネットは統一デュエル・トーナメントで話題が持ちきり。

連日連夜、誰が勝つのか論争が収まらず、有志によってwikiまで作られる始末である。

これは木綿季が興奮するのも無理はない、と優希は一人納得している。

「きみは出るの？」

「大会か？」

「それ以外に何があるのよ」

どこか抜けている幼馴染の問いに明日奈は笑みをこぼした。

優希はそのまま、抜けた調子で少しだけ考えて。

「わかんねえや」

「そっか。……うん、そっか！」

「なに笑ってんの？」

「別にー。ただね、うん。何だか嬉しい、かな？」

だって、と言葉を区切り。

明日奈は満面の笑みで。

「無理しなくても良い。戦わないって選択肢がある」

「それってもう優希くんが【アインクラッドの恐怖】にならなくていいってことでしょっ。」

第4話 やはり機械は敵だ

2025年5月26日 PM12:15

帰還者学校 食堂

午前中の授業も終了し、生徒達は待ちに待った昼食を楽しんでいた。

帰還者学校は給食制ではない。

各々各自、生徒達は自身の昼飯を持ち込んで食べている。中には自分で調理した弁当、もしくは実家から通う生徒は親に作ってもらい、またはコンビニで買ってきている生徒も存在した。だが中には、コンビニで買って来なければ、弁当すらも持参してこない生徒達がいる。それらの生徒の大半は、食堂に集まってきていた。

帰還者学校の食堂は、昼食時になると大変賑わい始める。

それもそのはずと言ったところか、値段も学生に対してかなり安く、舌が肥えている人物が食べても美味しいと感じ、更に言えば料理が出てくるのも速い。

安い、美味しい、そして速い。この三拍子が揃っているというのだ。生徒達が食堂で昼食をとるのも無理はない。連日、食券を購入するための自販機には長蛇の列。最後尾、なんてプラカードを持つ生徒がいる始末。

待たされずに美味しい物を食べる。

それだけで人は幸せになれる。現に、大半の生徒は楽しそうに、嬉しそうに食べ物を口へと運んでいる。

中には談笑しながら、中には黙々と黙って一人で。しかし誰もが「笑顔」という共通の感情を抱いている。だが大半、されど大半。どこにも、どこにでも例外は存在するというもの。

項垂れるように、顰めっ面で、不味そうに。

スプーンで炒飯を掬い、面倒くさそうに口へと運ぶ男子生徒が一名。

長い金髪は後ろで縛り、光のない碧眼は炒飯をひたすら見つめている。周囲の生徒達が纏うオーラといえば光そのものに対して、彼が纏うそれは闇そのもの。どんよりとした、とても元氣と捉えがたい雰囲気と表情で彼は食事している。

「お前、なんて顔でご飯食べてんだよ……」

「ああ?」

誰も声をかけない彼に、初めて外部からのアクションがあった。

誰なのか考えるまでもなく、彼は声をかけられた真正面へ顔を見上げた。

それは彼と同じく、帰還者学校に通う男子生徒であった。黒髪に黒い瞳で、中性的な幼さの残る顔立ち。出来たてなのか、持っているトレイの上には器に入ったラーメンから湯気が出ている。

声をかけられた彼は笑顔では応じない。

むしろ迷惑と言わんばかりな表情を向けて、吐き捨てるように言葉を漏らした。

「うるせえよ、桐ヶ谷。オレがどんな顔で飯を食おうがオマエに関係ねえだろ」

散れ散れ、と片手で追い払うような動作をするが、彼に声をかけた男子生徒——桐ヶ谷和人はどこに吹く風。気にすることなく、むしろいつも通りの反応と言わんばかりに彼の座っている真正面の席に座り始める。

そして向い合せとなり。

「そんな顔見ながらご飯食べると、美味しいものも不味く感じるだろ」
「だったらオレの正面に座ってんじゃねえよ。なに自然な形で同席してるわけ?」

「しょうがないだろう、ここしか開いてなかったんだから」

和人に言われて、初めて周囲を見渡した。

確かに、この辺り一帯しか席が開いていない。彼から半径3メートル以内に座っている生徒達の姿はなかった。食券を購入する自販機前には長蛇の列、そして配膳口には料理を待っている大量の生徒達の姿がある。中には座りたくても座れない料理をトレイに乗せた生徒達が立って待っている始末。

彼の周りの席に人影はいない。食堂が混雑しているのならば、座ってしかるべきだろう。

どんよりとしたオーラが不快だった、というわけではなく、原因は彼自身に存在する。

彼は以前、ソードアート・オンラインで「アインクラッドの恐怖」と呼ばれていた怪物だ。フロアボスを単騎攻略という偉業。それも一度二度ではなく、十数回を無謀に続けてきた化物だ。

そんな化物と誰が一緒に食事するというのか。何をされるかわからず、何をしてくるかもわからない。理解出来ない怪物の近くで、落ち着いて食事も取れない。有り体に言えば、彼は帰還者学校にかよう生徒達から恐れられている存在だった。

今の生徒達のイメージから言えば、彼は狂犬である。誰にでも噛みつき、情け容赦のないイカれた狂犬だ。もちろんそんなことが彼がする筈もないし、しようとも思ってもいない。それが他人に伝わっていないのは、彼が言葉にしないからであり、行動に移そうともしないからだ。

こうして、彼は恐怖の代名詞となってしまった。

気安く話しかけるとすれば、彼と同じ元加速世界アクセルワールドのようなギルドメンバー、そして【聖龍連合】遊撃部隊リーダーのコーバツこと古場剛くらいのものだ。

「優希、胡椒取って」

「……ほらよ。かけすぎて咽び苦しめ」

どういう状況だよ、と和人は苦笑しながら彼——茅場優希から受け取った胡椒を二振りしながら辺りを見渡して。

「それにしても、お前って本当にみんなから怖がられてるよな」

「周りの評価なんざ知ったことかよ」

「猫被りもいつの間にかやめてるし」

「別に、もう必要ねえだろ」

何を言うわけでもない、特別なことを言う様子もなく、いつものぶつきら棒な調子で。

「今更、取り繕ったところで遅え。晶彦くんの家族ってぶつちやけたあの時点で、もう手遅れってヤツだ」

「まあ、それもそうか」

「それに連中に距離開けられたところで、痛くも痒くもねえよ」

連中とはつまり、こちらの様子を遠巻きに伺っている生徒達、そして優希から距離を開けている生徒達のことを言っているのだろう。

人とは案外そういう評価を気にするものだ。自分がどう思われているか、自分は周りからどのような立ち位置にいるのか、面識があまりない存在に対しても気にする人間は気にする。

しかし優希は断じた。どうでもいいと、気にしないと、関係がないと。

それは恐らく、彼らは優希から見たら身内ではないからだろう。どうでもいい、とはではないかないものの「線の外側」に位置する存在であるから、彼は気にしないのだろう。

気にしないというのに、彼はどういうわけか関係がない連中に命をかける。本当にお人好しにも程がある。

口悪く、他人などどうでもいい。その癖、困っている者を見れば悪態を付きながら手を差し伸ばす。

本当に——。

「バカだよな、お前って」

「喧嘩売ってんのか？」

「いいや別に。褒めてんだよ」

「このクソが。トーナメントであたったら恥イかせてやつからな」

優希が言うトーナメントとは、統一デュエルトーナメントのことを言っていることを和人は瞬時に理解した。

だからこそ多少驚いてしまった。何度聞いても考え中と返していた男が、ここに来て参戦すると言うのだ。

啜っていたラーメンを頬張り飲み込み、和人は静かに驚いた様子でつぶやく。

「結局、お前も出るのか」

「まあな。妹が出る出ろうるせえ。オマエのところはどうなんだ？」

「スグか？ まあ、張り切ってはいるけど……」

お兄ちゃんも出るの？ と聞かれただけで優希のように出てとまでは言われていなかった。

アレは寧ろライバルが出るかの事前調査に近かったことを和人は思い出す。

何はともあれ。

「お前が出るなら、俺も本気で出ようかな」

「本気って、二刀流かよ？」

「おう。決着もついてないしな」

「……オレとオマエ、優劣なんざもうハッキリしただろうが」

「いいや、まだだ。だってお前、全力出してなかっただろ！」

ビシツ、と片手持っていた割り箸を優希に向かって向けて和人が言い放つ。

和人は決着がついていないと言うものの、優希の中では既にキマっていることだった。自分たちの勝敗など、先の決闘で済んでいることだ。誰がどう言っても変わることもなく、白星と黒星がその証拠。どちらが勝利し、どちらが敗北したのかなど、議論の余地もなく明らかだ。だと言うのに、和人は言う。決まっていないと、俺達の戦いはまだ終わっていないと。

「チツ、暑苦しい野郎だ。出したくても出ねえンだろ」

舌打ちを一つ。

否定的な言葉であるものの、表情はそれとは真逆。

どこまでも好戦的で、明らかな挑戦的で、比喻なく獰猛に笑みを浮かべて。

「叩き潰してやる」

「おお。叩き斬ってやる」

和人も不敵な笑みを浮かべて、その言葉に応じた――。

「それにしても、なんで不味そうにご飯食べてたんだ？」

「あ？」

食事も終わり、食器も返却口に返して、優希と和人は中庭に向かっていた。

理由は簡単。和人はリズベットこと篠崎里香から、優希は明日奈から連絡を受け、中庭に来るよう指示されたからである。特に急ぎなど

理由はない。連絡の内容、そして今までの傾向から察するに、ただの談笑が目的なのだろう。

当然、優希は無視しようとしていたが、寸前のところで和人に止められる。別に優希と一緒にいたいわけではない。そうしないと里香に怒られるから、といった自己保身に走ったからである。

そして中庭へ向かう途中。

和人は何気なく疑問を口にした。和人から見ても、他人から見ても、アレだけ美味しい食事を不味そうに食べる優希が理解が出来ない故に。

しかし優希からの返答は驚愕のそれである。

「別に不味くねえよ。むしろ美味しいだろ」

「美味いけど、お前が食べてる様子じゃ美味しくなさそうだったぞ」

「マジかよ」

「マジだよ」

余程、自覚がなかったのか。

優希は一瞬だけ考えて、すぐに答えを導き出した。

当時、自分は何を思っていたのか。感じたことをそのまま口にする。

「今までの授業、これからの授業を考えて鬱ってた」

「そんな理由であんな不味く食べられるのか……」

和人から見た当時の優希は本当に不味そうに、土でも入っているのではないかと勘繰ってしまうくらい不快そうに、そもそも人体に悪い影響があるのではないかと考えてしまうくらい凄惨な顔で炒飯を頬張っていた。

纏う雰囲気は暗黒。どんよりと粘っこい空気を纏う優希が食べるモノはさぞかし不味いに違いない。そう思わせるくらい、当時の優希

は「酷い」有様であった。

それが授業でこうも変貌を遂げるとは、和人も想像がつかない。そもそも和人も知っているが、優希は勉強は出来る方だ。頭の良さ悪しは別としても、今まで優希は明日奈と共に有名進学校に通えるくらいに学力がある。

だと言うのに、授業が嫌で憂鬱になる現状。授業内容に苦手なものがあるのか、それとも理解が出来ないのか。新たな疑問が生まれるも、それは直ぐに解消されることとなる。

「ンで、授業すんのに機械が必要なんだよ……」

「機械？」

「お前も持ってんだろ。アレだ。授業に絶対使うやつ」

「もしかして、タブレットPCのことか？」

授業に使う機械など、タブレット型PCしかありえない。

なるほど。確かにそれは機械であり、優希が最も苦手としている。というよりも、電子機器全般が優希は苦手だ。和人も何度か明日奈にレクチャーを受けている姿を目にしたことがある。その度に優希は頭を抱えて、明日奈は教えようと張り切っていたことを覚えてている。

ゲームを以前までは「ピコピコ」と称していた男だ。

一般的な教室で黒板にあたるものは大型パネルモニタ、教科書やノートなどは使わずに支給されたタブレット型PCで授業を進める。

機械全般に弱い優希にとって、誰もが憧れる最新鋭の設備が整っている帰還者学校の授業は苦痛以外の何物でもないだろう。それでも成績は落とさず上位をキープしている辺り、彼の根性がなせるものだというのか。

「そもそも、気前が良すぎる。生徒全員に機械とナーヴギア的な奴を無料配布って可笑しいだろ」

「確かにそうだよな……」

今まで深くは考えてこなかったが、確かに優希の言う通りだと和人は同意を示した。

帰還者学校に通う生徒だけでも千人は超えている。

その全員が全員に、タブレット型PCを配布し、授業はおろか全く関係がないアミユスフィアまでもが無料で生徒達全員に配られていた。

どう考えても割に合わないだろう。元々帰還者学校は勉学を疎かになってしまった中高生の受け皿として設立したのが表向きで、裏では殺伐としたデスゲームに巻き込まれた不安定である未成年の監視だった筈だ。

ならばそこまでする必要もなければ、ナーヴギアの後継機ともいえるアミユスフィアを生徒達に行き渡るようにするのはおかしな話だ。

「この現状、オマエはどう見る?」

「妙な話しだと思う。でも今は気にしなくてもいいんじゃないか?」

「根拠は?」

なにかあるかもしれない。

警戒を怠らない優希とは対照的。どこか前向きで気楽な答えに訝しむように彼は和人に問いを投げた。

「俺も最初は変に思ってたさ。タブレットとアミユスフィアを調べたんだ」

「調べたってアレか。こう……内部、的なの?」

「そうそう。細工されてるかなって」

「オマエ、プロかよ」

何のだよ、と疑問を口にしかけるも和人は無視するように続けた。ツッコんだら話しがそれると思ったからだ。

「調べたら何もなかったよ。一般的に売られてる物と変わらない。もちろん、ナーヴギアのと きみみたいな惨劇も起こらない」

「気味が悪いな。須郷の野郎をヤツたヤツといい、何もかもがスツキリしねえことだらけだ」

「まあ、な。ところでこれは誰かに相談したりしたのか?」

「するわけねえだろ。無駄に不安を煽ってどうすんだ」

「俺ならいいのかよ」

「オマエなら何とかなんだろ」

無責任に近い発言である。

しかしそれだけ、同じくらい信頼されているとも言える発言でもあった。

あの身勝手に振る舞い、何をするにしても無茶がすぎる、かつては同じく肩を並べたいと思っていた男に信頼という事実。どこか嬉しくもあり、恥ずかしくもある。それを誤魔化すようにして、和人は自分の頭を乱暴にワシヤワシヤと搔いていると。

「ん?」

どこからか音が聞こえた。

それは優希のポケットの中から。それはスマートフォン。

優希は手慣れた操作で画面を開き、メールを開くと。

「後輩からだ」

「後輩って、朝田?」

「それ以外誰がいんだよ」

「むしろ朝田以外に後輩いないのかよ……」

「いねえな。オレを先輩って呼ぶのはアイツくらいなもんだ」

和人が思うかべるのはメガネを掛けた朝田の姿。

意識が戻らない優希と明日奈を見舞う際に、何度か会話したことが

ある彼女。自身のことを桐ヶ谷君と呼び、笑顔は見せるものの知人以上の関係に踏み込んでこようとしなかった。

最初は人見知りなのだと思うていたが、話しているうちに違うと理解した。必要がないのだ。朝田という少女には、知人以上の人物など必要がないのだ。必要がないのだから踏み込む必要がない。

彼女の世界は——朝田という少女の内側は自分と、もう一人だけで完成していた。そのもう一人というのが——。

「……朝田、なんて言ってるんだ？」

「休みの日、遊びに行こうだよ」

——この先輩なのだろう。

二人の間に何があったのか、和人には推し量れることなど出来ない。

優希に聞けば何があったのか教えてくれるだろうが、きっとそれは朝田は望まないだろうと和人は理解する。それに二人の思い出は二人だけのものだ。第三者が野次馬に介入していいものではない。

明日奈、朝田。そして、優希。

この三人を取り巻く環境は複雑そのものであり、爆弾のようなものだろう。一回でも対処を間違えれば爆発し何もかもが破滅するとさえ感じる。

当の当事者である優希は気付いておらず、朝田とメールでやり取りしていた。

思わず和人からため息が出る。

それを耳聴く察知するのが、優希という男でもあった。

「んだ、そのため息は？」

「別に。呑気だなんて思ってたさ」

「どういう意味だ？」

「俺もお前も、答えを出さないとな」

「変わらない関係なんて、この世界にないんだからさ——」

第5話 ユウキ無双

——それは金属同士がぶつかり合っている、特有の音だった。自身がここにいることを証明するように音を奏で、散りゆく生命のように火花が散る。

その数は二つ。一人は片手剣、もう一人は長槍を獲物としている。間合い、それだけで言ってしまうえば長槍を持つ者に分があることは間違いない。

何せリーチの差が段違いだ。片手剣を持つ者——それは少女——はまず近付いてから動作を起こさなければならぬ。だが槍は違う。剣など届かない位置から、間合いの外側から、それこそ一方的に刺突することが出来る。

ならば間合いそのものを無くす。つまりは距離を詰めればいいだけのことであるのだが、それこそ自殺行為とも言える。長大な間合いを用いて敵を制し、戦闘行為そのものを支配するのが槍使いの戦いである。

だが逆に、広く間合いを持つということは一度の刺突を終え、槍を戻すという作業を行わなければならない。

必殺の間合い。その隙きが初めて生まれるほんの僅かなタイムロス。

それを少女は見逃さなかった。

一回の刺突。それを少女の類まれなる反応速度が上回っていく。

後の先。なんとも信じ難い事に、少女は刺突を“見てから”反応していた。決して見切ったわけでも、ましてや槍使いの打突が遅いわけではない。単純な話、少女の反応が疾すぎただけのこと。

少女は既に、眉間に迫る穂先を弾いている。

そして、自身に向けられた槍よりも速く、少女は踏み込んでいた――

なめていたわけでもない、侮っていたわけでもない。

何せ片手剣の少女は、あのSAOサブイパー帰還者でもあり、その中でも攻略組と呼ばれるトッププレイヤーで、更に「絶剣」とまで呼ばれていた者であることは知っていた。

だからこそその必殺。自身が用いる最高の一刺。確実に急所を貫く突きは幾多ものプレイヤーたちを沈めてきた。見切られたことも、躲されたことも、ましてや防がれたこともない自慢の一撃。

それを目の前の少女——【絶剣】は難なく真横へ受け流し、自身の一刺よりも速く踏み込んでくる——！

槍使いがたたらを踏んで後退するのも無理はない。

今の状況こそ、彼にとつては未知の領域。必殺を防がれ、自身との間合いを詰められるなど経験したことがないことだろう。

どうするかなど選択肢が浮かばない。頭は真っ白になっているものの、それでも後退したのは無意識のことだ。兎にも角にも槍の間合いに再び立ち、どうするか考える。

だが——。

「——逃さないよ！」

【絶剣】の少女は許しはしない。

片手剣を突き立てる。

文字通り、少女自身が一本の槍のように、神速を伴った突撃槍のように、槍使いの腹部へと片手剣を突き立てる——。

決着が着いた。

傍から見ると呆気なく。

されど槍使いの想定を軽く上回る、【絶剣】なる少女の力量を見せつけて——。

.....

2025年5月26日 PM19:30

アルヴヘイム・オンライン 央都アレン付近

「アイツ、また上手くなってるな……」

そう呟いたのは茅場優希ことユーキである。

全身をくすんだ白色の鎧に身を包み、山羊を連想させる角をこしらえた頭部を完全に覆われた兜の奥で、思わずユーキは声を漏らしていた。

その声は驚愕、感嘆、そしてほんの少しの歓喜が入り混じっている。アイツとは決闘を行っていた少女に向けて、その視線は少女に向けられて、その感想も少女に向けられているもの。

辺りでは歓声が沸き立っていた。その中心は勝者に対する賛辞と歓声。ギヤラリーの輪にいるのは少女と、倒れている火妖精族サラマンダーの槍使い。

見たところ、少女達は決闘デュエルを行っており、一撃を与えて終了のファンファーレが鳴ったところを察するに、ルールは「初撃決着モード」だったようだ。

そして片や獲物は片手剣。片や長槍。

つまりは、少女は圧倒的不利の中で一瞬で、それこそ瞬く間に勝利したということになる。

文字通り瞬殺。しかも少女は元々戦闘に長けている種族でもない闇妖精族インプであり、極めつけは不利からの勝利。それは周囲も大歓声を上げるといふもの。

拍手は万雷の如く、歓声は大嵐の如く、周囲の表情は華の如く。惜

しみない賞賛を持って、少女を全員が全員で讃えていた。

その中でも真逆の表情。

悔しそうに唇を噛み締めて、恨めしそうに少女を睨みつける火妖精族サラマンダーの槍使いとその取り巻き数名。勝てる筈であると高をくくった結果がぐうの音も出ないほどの完敗だったのだ。それはさぞかしプライドが傷つけられたことだろう。

気にならない、といえば嘘になる。

あの手の負の感情を全面に押し出している連中は緑な人間がいな
いことを、ユーキは重々承知していた。

だからこそ油断なく、思考の片隅に追いやることもなく、一挙手一
投足見逃さずに観察する。ここはソードアート・オンラインではな
い。仮に少女が闇討ちをされ、HPバーが尽きてゲームオーバーにな
ろうとも死ぬことはない。だが念には念を入れる。警戒しすぎて損
をするということもないのだから。

そんなユーキに。

「あつ、ユーキくんもインしたんだね」

「ん？」

隣から声が聞こえた。

誰かはわかっている。何度も聞いてきた声だ。声だけでその日の
調子がある程度わかる程度には聞いてきた声だ。

どうやら声の主の機嫌はかなり良いようである。横目で見ると、白
のチュニックとミニスカートの青い髪の毛が特徴的な水妖精族ウンデイナーの女
性プレイヤーが立っていた。

やはりというべきか。機嫌が良いとユーキが思ったとおり、彼女の
笑みはユーキに向けられている。作り笑いなどではなく、本当に楽し
んでいるかのような満面の笑み。

「オマエもいたのか」

オマエと呼ばれた彼女——アスナはユーキの妙な反応と今までの経験から分析し何かあったのだと察したらしい。

笑みを潜めて心配するようにおずおずと尋ねる。

「う、ん？ ……何かあったの？」

「……まあ、いや」

歯切れが悪いとは自分でもわかっている。

何せ理由が理由だ。負けた連中の様子がおかしいから警戒している、なんて過保護にも程がある。

それに口にするにしても、何となく恥ずかしさすらある。これでは自分が妹である少女が好きすぎる兄の構図、簡単に言ってしまうえばシスコンのように見えてしまうだろう。それに朝にアスナに兄離れしてほしいと言ったばかりだ。これでは自分が妹離れしていないようにも感じるというもの。

故に、ユーキは悟られないように話題を変える。

誤魔化すと言ってもいい。乱暴すぎるほどの話題転換で何とかその場を乗り切ることにした。

「それよりも、オマエなんでインしてんだ？ 飯時だろ今」

「えへへ、今ね？ お母さん学会で出かけてるんだ。だからこう、やりたい放題というか」

「なるほど、そういうことか。なら後で京子さんにチクツとくわ」
「うわっ、言わなければよかった!？」

本気で焦っているアスナが面白かったのか、ユーキは小さく笑みを零し、冗談だ、と言うと続けて。

「アイツ、ずっと決闘してんのか？」

「うん。わたしがインして様子を見てからあんな感じだよ？」

「ちなみにオマエは何時からよ？」

「えーと、18時半くらい、かな？」

「軽く見積もっても一時間ぶっ通しかよ……」

よくも集中力が続くもんだ、と心の中で感想を漏らした。そして同時に、それだけ少女は本気なのだということを再認識することが出来た。

クエストも冒険もせずに、少女がずっとデュエルを行っている理由。恐らくそれは、一週間後に行われる統一デュエルトーナメントの特訓なのだろう。

現に少女だけではなく、今のアルヴヘイム・オンラインでクエストを行っているプレイヤーは少数であり、大半のプレイヤーはデュエルを行っている。

普段はクエストを進める者が大半でデュエルで対戦するプレイヤーは思いの外少ない。だが今となってはそれは逆転しており、それだけ全員が本気であるということ。

「ンで、アイツの負け星はいくつだ？」

「んー、わたしが見てる中ではゼロ、かな？」

「ゼロ？ マジか？」

「マジだよ。凄い強くなってるよね」

わたし敵わないかも、と困ったように笑みを浮かべるアスナに対して、ユーキは軽く首を横に振って。

「それはやってみなきゃわからねえよ」

「……そうかな？」

「ああ。オレから見たらオマエも相当なモンだよ。だからまあ、自信持てや」

「――」

思わず明日奈は言葉を失った。

ユーキの言葉は何の偽りのない賛辞。アスナを喜ばそうと狙っている言葉ではなく、彼は本当にそう思っているのだろう。純粹なまでの気持ちで、自分が感じた心のままに。喜ばそうとしているわけでもないのに、彼は容易く戦意を喪失しかけていたアスナに自信を持たせる。

アスナを手放しで褒めるその様は――。

「……ズルい」

言葉では卑怯だと呟く。されどアスナの様子はその真逆。

隣に立っている彼に悟らせないように顔を俯かせ、ニヤついた表情を必死に隠す。

彼女をよく知る人物が見れば隠しきれしておらず、今にも喜びで悶える彼女を見て何となく察することだろう。

だが生憎、ユーキは違う。

もう少し人の好意を敏感に察知することに長けていれば察することも出来たかもしれない。だがこの男は、人の悪意には敏感であるものの、人の好意には酷く疎い。長年自己の否定を続けてきたツケがここに来て足を引つ張り始めていた。

となれば、彼の反応はまともだと言えるのかもしれない。どこか心配するような声色で、初めてここでアスナに目を向ける。槍使い達を警戒することを一先ず置いて、様子がおかしい幼馴染を心配し始めた。

「おい、どうした？」

「ズルい」

「はっ」

要領が得ないとユーキは聞き返すも、アスナには最早関係がなかった。

ズルいと言ったらズルい。特に悪いわけでもないが、自身の行き場のない感情をぶつけないと気がすまないと言った調子で、ワーツと両手を上げて抗議し始める。その様子は正に、レッサーパンダの威嚇の如く。

「もう！　ズルいわよ本当に！」

「何がだよ？」

「何もかもよ！　もう、本当に、もうっ！」

「いつもにも増して、今回は本当に意味がわからねえなオマエ」

プイっ、と可愛らしく。そしてわかりやすく拗ねるアスナを見て、ため息を軽く吐きながら感想を漏らした。

アスナが拗ねた原因は何なのか、と少しだけ考え直ぐに思考を放棄する。

きっかけもわからず、本人も話す様子はなし。となれば手詰まりに他ない。これからどうしたものか、と考えていると。

「にーちゃーん！」

大きく手を降って駆け寄る少女が一人。

彼女こそが、この場の主役となっていた中心人物。【絶剣】の異名を持つ紺野木綿季ことユウキであった。

駆け寄る、なんて速度ではない。

輪の外でユウキの姿を見かけると、応えていた賛辞を全て放棄し、地面を蹴って翅を使い一目散にユウキに駆け飛んできていた。

線が遅れるように見えて、残像すらも置いて来る少女の速度は限界を超えている。驚くべきことに、槍使いを瞬殺した疾さ以上のスピードをユウキはいともたやすく叩き出す。

ユウキは無意識に腰を下げて、重心を安定させた。

避けることも出来た。むしろ自分の身を護るという点に関して言えば、避けた方が安全なのかもしれない。何せ華奢であるとはいえ少

女の体軀が砲弾以上の速度で飛んでくるのだ。危険でないわけがない。

それでも避ける選択肢は存在せず、敢えて受け止めるつもりでいるのは、兄の矜持であるが故なのだろうか。

生意気な、と口元を不敵に歪め、ユーキは両手を広げて。

「——よっしゃ、来いっ！」

瞬間、辺りに大きく、更に大きく、極めつけは鈍い音が響き渡った。

ユーキは難なく妹を受け止めたまま、後方へと数十メートルはふっ飛ばされた。もちろん、足が地面から浮くということではなく。並外れた膂力を無駄に動員させて、持ち前の不撓不屈の根性を持って、全力全開の義妹を受け止めた。

元の位置から更に数十メートル後方。

そこでやつと静止することが出来て、胸に埋めていた顔を上げて、妹は兄に向かって満面の笑みで嬉しそうに。

「にーちゃんも来てたんだね」

「まあ、暇だったしな」

「ねえねえ！ ボクのデュエル見てくれてた？」

「ああ、見てたぞ。オマエまた上手くなったな」

「もちろんだよ。だってボクはにーちゃんの妹だからね！ まだまだ上手くなるから見てくれないとやだよ？」

「それは結構だがよ、兄貴より強い妹ってどうなんだ？ 兄貴の威厳なくね？」

「大丈夫。そのときはボクがにーちゃんを守るから！」

「全くもって大丈夫じゃねえんだけどソレ」

そして何事もなく仲良く会話を始める兄妹に対して、周囲はポカんと口を開ける。誰がどう見ても凄まじい激突音だったにも関わらず、二人は何を言う様子もない。

そんな中、誰より先に回復したアスナが、ハッ、とした様子で二人に駆け寄り。

「ゆ、ユウキ！ 危ないでしょ!? 怪我したらどうするの!」

「危なくないよー。だってゲームだよ？ 怪我なんてしないよー」

ね、にーちゃん？ と抱きついたまま話を振り、ユウキはああ、と一度頷いて。

「リアルでも飛びかかってくるしなコイツ。慣れた」

「余計危ないでしょー!?!」

もーう！ とアスナは抗議の声を上げる。

だがユウキはどこに吹く風で効果がない。むしろ嬉しそうに、どこか勝ち誇った表情で、自慢する子供のような声で。

「アスナー、良いでしょー?」

「い、良いって何がよ?」

「あれれ、羨ましくないの?」

「別に羨ましくありません!」

ふーん、とユウキは言うのと直ぐに何かを思いついたような表情を浮かべて、アスナに提案を始めた。

「……そうだ！ ねえねえ、アスナ。ボクとデュエルしようよ」

「なっ……ええ……?」

あまりにも突発的なユウキの提案。

アスナは何が何やらわからず、間抜けな声を上げることしか出来なかった。

しかし次のユウキの言葉で、その間抜けた声も消え失せることにな

る。

「勝った人はにーちゃんへ抱きつく権利が与えられます!」

「——ユーキくん、抱き……?」

目を見開いて、頭をフル回転させる。

抱くとはつまり文字通りの意味なのだろう。自分もユウキのように、彼に思いつきり抱きつく事が出来る。それも合法でだ。何故ならしょうがない。勝者の権利なのだからそれは仕方のないこと。そう、仕方のないことなのだ。

眼は真剣そのもの。

ほんわかした雰囲気などもはやない。あるのは元SAO攻略組ギルドアクセルワールド加速世界団長【紅閃のアスナ】として顔であった。

もはや問答の余地などなく、言葉を交わす道理もない。

腰にある細剣を勢いよく抜いてアスナは一言。

「——やるわ」

「……そうこなくっちゃ」

対するユウキは嬉しそうに笑う。天真爛漫、されど心境は強者の相手をする悦びに震える。

ここで抗議の声を上げるのはユーキだ。何せ蚊帳の外で、勝手に話しを進められている。文句の一つや二つ、口にしなければ気が済まないというもの。

「おい、勝手に——」

「——ユーキくん」

「あ?」

アスナは振り向かない。

無駄に凜々しく、無駄に男らしく、無駄に気迫の籠もった声で。

「見てて。わたし、勝ってくるから」

このときこそ、無駄に付き合いが長いことを恨めしく思ったことはなかった。ユーキの長年の経験が告げる。これ以上、アスナに何を言っても無駄である、と。

何よりも周りが騒ぎ始めている。片や【絶剣】、片や【紅閃】【紅の女王】とまで言われたプレイヤー達のデュエルだ。周囲のプレイヤーから見たら、これほどのビツクカードはない。興奮のあまり指笛を鳴らすものや、高揚のまま拍手喝采するもの、中にはどちらが勝つか賭け始める者まで存在する。

アスナとユウキ。

二人を中心に再び大きな輪が出来始め、今か今かとデュエルが始まるのを心待ちにするギャラリー達。

もはや一人の力ではこの大波を止めることも出来ず、抗議の声を上げ続けるのはそれこそ空気が読めないことだろう。

ユーキはため息を吐いた。

そして、まあいいか、と感想を呟くと。

「ギリギリまで見て、終わったら逃げればいいだけのハナシか」

何よりも、何だかんだ言って楽しそうに向かい合う二人を止めるのは、どこか気が引けた。

楽しいのであれば楽しめばいい。それこそ大いに、バカ騒ぎすればいい。今日という一日は今日しかありえないのだから。

「にしても、本当に強くなったな……」

こちらの顔を伺っていた初めの頃とは違う。

自身の妹は喜怒哀楽を身体いっぱい表現していた。罪悪感に苛

まれていた少女はいない。もちろん、それは良いことであるし、ユーキも彼の両親も望んだことだ。少女には笑顔が似合い、もつと笑ってほしいと願っていた。

故に、今の現状は喜ばしいことでしかない。

だがユーキは複雑な表情を浮かべている。

「それに、明日奈も——」

強くなった、と呟く。

そう。

その表情は彼女達ではなく、自分自身に向けられていた。

庇護の対象であった。それこそ命をかけて、守るべき存在であった。だが今はどうだろうか。いつも自身の後ろに付いてきた幼馴染は、逆に彼を引つ張るほどの強さを手に入れた。いつも彼の顔を伺っていた義妹は、彼を驚愕させるほどの強さを身に着けた。

彼女達だけではない。

キリトも、リズベットも、ストレアも、彼に怯えていたユイですら今となつては普通に会話出来るようになった。

仲間達の全員が全員、変わったのだ。良い方向に、成長を遂げている。

ならば自分は、茅場優希は如何様に成長したというのか。

そんなこと、自身が一番良く知っている。

「オレは——」

慣れた手付きで、アイテムストレージを開き、良く手に馴染んだ獲物を装備する。

その手には長物。それは槍のような刃の片側に三日月状の大きな刃が付いている。西洋で言うところの、ハルバードにも似たような形状。黒色に染まった画桿の方天戟。ユーキの身長を大きく上回るそれは、とても人が扱う武器とは思えないほど大きい。

現に、その重さはプレイヤー数名でやっと持てる重量を有している。

そんな獲物を片手で持つと、ユーキは横薙ぎに振るう。

悍ましい風切り音。一度受ければ吹き飛ばされることを安易に想像が出来る暴力の権化。だが——それだけだった。それ以上は何もない、何も起きる訳がない。

だがユーキの表情は違う。

何故、という疑問。

やはり、という諦め。

そして、己に対する失望があった。

ユーキの武器。

ソードアートのオンラインでずっと使用してきた己の内に宿る炎。それは何もかもを、己すらも焼き尽くす、神々しい蒼と禍々しい焔。それこそが彼の武器——心意であった。

だが今となってはご覧の有様。己に向けていた憎悪は燃えカスのように、何一つ反応することがない。

敵対する何もかもを焼き尽くし粉碎していた【アインクラッドの恐怖】は存在せず、今いるのは二流プレイヤーであるユーキのみ。

受け入れるしかない現実。自分だけが何も変わらず、むしろ退化している現状。

改めてユーキは口にした。あるがまま、受け入れるように、自身に突きつけるように、その事実だけを言葉にする。

「オレは、弱くなったな——」

第6話 罪悪感

2025年5月31日 AM9:00

学生寮 茅場兄妹の部屋

木綿季が起きたのは午前中のことだった。

昨日は統一デュエルトーナメントのために、夜遅くまでアルヴハイムへログインしていた彼女。

本来であればこのような時間帯に起きては遅刻である。

だが生憎、今日は土曜日である。つまるところの休みの日。そのためもあつてか、部屋の外は多少であるものの騒がしい。とはいえ、学生寮の部屋はすべて完全防音となっており、そんな騒がしさすらも聞こえないのだが。

ベットから状態を起こすこと数分。

次第に意識を覚醒させること数分後。

今日もログインしようとアミュスフィアに手を伸ばそうと躊躇ったこと一瞬。

顔も飯も食わないで、ゲームとはいいい身分だな？ と、以前兄に叱られたことを木綿季は思い出す。

ニツコリと満面の笑みで、されど背後には暗黒のオーラ。叱れるなんて経験をあまりしてこなかった木綿季にとってそれは、もう二度と味わいたくないものだった。

故に、彼女は起きる。

もう叱られたくないから、怒られたくないから、そんな子供のような感情で寝衣から簡素な部屋着に着替え、部屋から出た。

「おはようー」

部屋を出ると直ぐにリビングに繋がる。

きっと兄はとうの昔に起きていて、コーヒーを飲みながらテレビで

も見ているのだと想像していたが。

「……あれ？」

返事はない。

この部屋の主である金髪碧眼の兄はどこにもいなかった。
ならばどこだろうか、と。

キッチンにもいなければ、部屋の外にもおらず、風呂場にもいなかった。

となると最後は――。

「にーちゃん？」

兄の部屋しかない。

そう確信した木綿季は、リビングから繋がっている兄の部屋の引き戸を開ける。

だがそこにも兄はいなかった。

思わず、んー、と木綿季は首を捻りながら兄の部屋をウロウロと歩き回った。

自分を置いて、何処に行ったのか。買い物、というわけではないだろう。時間にしてそれは早すぎる。ならば何処へ行ったというのだろうか。

そこまで考えて――。

「……あ」

思い出した。

曇っていた表情はたちまち晴れたモノに。

謎が解けたと言わんばかりに、木綿季は首を縦に振るい。

「そうだ、そうだったよ。昨日言ってた……！」

探すこともなかった。

そう言わんばかりな足取りで、木綿季は軽やかにリビングに戻る。

昨日の夜。

夕食のときに兄は言っていた。朝から出掛けることを、自分に告げていたのだ。

兄は今――。

「――詩乃とお出かけしてるんだっただよ」

.....

2025年5月31日 AM10:20

都内 中央公園通り前

そのメールを貰ったのは26日だった。

彼から言わせてみれば、『不本意』ながら桐ヶ谷和人と一緒に食事をし、そして中庭に向かっている最中のこと。

携帯から通知音が鳴る。その発信源は自分のポケット中から。ということは、自分の携帯が鳴っていることに他ならず、それを確認するのは当たり前前の行為と言える。

発信源は彼の後輩から。

内容は至ってシンプルなもの。

『土曜日遊びに行くわよ』これだけだった。

まるで決定事項であるかのように告げる後輩に、特に不満もなく彼は了承し、現在に至る。

時は土曜日。

学生の中では休日。そういう事もあってか、すれ違う者達は比較的若い年齢層であった。

これから遊びに向かう友達同士、無数に存在するどこかのデートスポットに向かうであろうカップル達。新しい服を買いに出掛ける女性から、小腹が空いたのかだらしない格好でコンビニに入る男性。

様々な目的を持った者達が行き交い、足を止めることもなくすれ違っ行く。

そんな人物から見ても、自分はどう映っているのか。

下らない事を考える。と金髪碧眼の彼——茅場優希はクツクツと自身を嘲笑う笑みを浮かべた。

このありふれたモノに満ちた光景も、下らない戯言を考えている自分も、こうして存在するということはそれだけ平和である言うことなのだろう。

一年前まで、死と隣り合わせであったとは思えない。道を歩いたところでモンスターと出くわすこともなければ、危険なオレンジプレイヤーがいるわけでもない。

誰もが装備を整えてから外に出ることもない、ありふれた日常が目の前に広がっていた。

「それが良いことなのか、悪いことなのか」

考えるまでもない。

のんびりと過ごす日常、デスゲームを強いられてしまった非日常。どちらが良いかなんて明白である。

だが違和感なく溶け込んでいる、といえは嘘になる。

今まで、それこそ、文字通り、優希は身を削りながら我武者羅に前進してきた。ソードアート・オンラインでは常に最前線で剣を振る

い、アルヴヘイム・オンラインでは身代わりとなって囚われていた。別に感謝など望んでないし、誰にも認知されなくても構わなかった。それもこれも自分が望んでやったことだ。他の誰かが傷つくのが我慢出来なかった程度の、自分勝手な理由で彼は戦ってきた。そうすることしか思いつかず、そうすることでしか両親に報いれないと思っていたから。

今となつてはそんな無茶をしなくても良い。

それは良いことだ。良いことの筈だ。自分を許す努力をしよう、と答えも得た。両親からの後押しももらった。

だとしても、どうしても、違和感を覚え——心には良くないモノが炙り出されて行く。

自分などがこんなありふれた日常を送つても良いのだろうか——

——良い筈だ。

自分が死に、両親が生き残れば救える命があつたのに？——憶測でしかない。

アインクラッドで救えなかつた命があるのに？——自分にはどうしようも出来なかつた。

あの糞虫も言っていただろう。憎悪こそオマエの本質であると。それすらもなくなつたオマエは何者だ？ だから弱くなつた。焰すらも操れなくなるほどに、オマエは弱くなつた。

——オマエが、許されると、本気で思っているのか——？

「——ッ」

途端、世界が揺れた。

クラツ、と視界が暗くなつていくのを感じて、目頭を片手で抑える。身体は芯から冷えて、しかし頬からは冷や汗が伝う。

「つたく、ポンコツにも程がある……」

乱れた呼吸を整える。

高鳴った鼓動を押さえつけるように胸を抑えて、弱々しくなつてしまつた自分に苛立ちながら辺りを見渡すと、いつの間にか目的地に付いていたようだ。

そこは大きな公園。

噴水があり、花壇があり色鮮やかにハイビスカスやカーネーションやキキョウといった夏に咲く花が植えられている。

ただ公園と言う割に遊具がほとんどない。子供のための安全な公園作り、とかいう一環で遊具は全て撤去されているようだ。そのせいもあつてか、ほとんどが家族連れ。子供単体で遊んでいる様子はない。かつた。

そんな中に、彼女はいた。

ソワソワと、落ち着くがなく、手首に巻いている腕時計を何度も確認する。

いつもどおりメガネを掛けて、その肩には流行していたバッグが。黒ニットセーターを着て、グレンチェックショートパンツを穿き、グレーのロングブーツを履いている。

——マジか。

——待ち合わせよりも30分も早いんだぞ。

——もう待ってんのかアイツ。

休んでいる暇はない、と優希は判断したようだ。

彼は足早に軽く走り、後輩の元へとたどり着いて。

「悪い。待ったか？」

彼女——朝田詩乃は優希の顔を見た瞬間パーツと明るい表情になるものの、どこか観察するような眼で優希を見ながら。

「いま来たところ、なんだけど……」

「それじゃ行くか」

「ちよつと待って。待ちなさいよ先輩」

若干、慌てた様子で詩乃は制止させて。

「大丈夫なの？」

「何がだよ？」

「だって顔色が真つ青と言うか……」

「別に気にすんなよ。それよりもアレだな」

「メガネ、滅茶苦茶似合ってるじゃん。ナイスメガネ」

第7話 後輩とのデート 激闘編

2025年5月31日 AM11:00

都内 ファミレスにて

そこは至って普通の、シンプルで、何処にでもあるファミレスであつた。

レジがあり、そこには菓子の類が販売されている。ファミレス特有な対面式の座席があり、席の上にはメニュー表が置かれている。店内の中心部にはジュースやコーヒーなどを汲むことが出来るディスプレイ。温度管理が十分に整っているレタスや人参などのあるサラダバー。

誰がどう見ても、どこにでもあるファミレスの風景である。

その客層もファミレス特有なバラバラのもの。

子供連れの家族もいれば、恋人同士が睦まじく談笑、スーツを着た男性がテーブルにパソコンを置いて仕事、もちろん彼女達のような友達同士で席についている者も存在する。

二人の少女。

その中の一人である篠崎里香は辺りを見渡した。何気なく、その行為に理由はない。強いてあげるのであれば、相席している友人がメニュー表とにらめっこを始めて暇だったから程度の理由だ。

昼時に近い、ということもあつてか店内は程々に混み始めていた。数分経ち新しい客が、また数分も経たぬうちに新しい客が。不規則であるものの、客足が衰えることがない。

現実ではない仮想世界、しかも取り扱う物が違うとはいえ、彼女も店舗を構え経営している立場の人間だ。店の立地、昼時に近い時間帯、そして土曜日という情報さえあれば簡単な結論であつた。

里香は結論を出した。

間違いなく、このファミレス内は混み合うだろう、と。

ならばさっさと食事を終えて、さっさと出るのが吉だ。元々彼女達

は遊びに行く前に軽食と考えて立ち寄った。腰を落ち着かせて長々と居るつもりもない。

その、筈だった——。

「ちよつと、アスナー。まだかかるわけー?」

思わず頬杖をつき、不満そうに講義する里香。

かれこれ待つこと数十分は経過している。彼女も我慢の限界、とまではないかないものの不満になるのも無理はないかもしれない。

抗議が届いたのか。

メニユー表とを持つ手、両肩がビクツと縦に揺れると恐る恐るメニユー表を下げて両目部分だけ覗かせて彼女——結城明日奈は申し訳なさそうに声を漏らした。

「うー、ごめんー……」

何と情けない声なことか。

里香は吹き出すのも無理はない。そして深い溜息。なるほど、これが毒気を抜かれるということなのか、と一つ勉強になりながら里香は呆れた口調で口を開く。

「あたし達の中じゃ【紅閃】だの【紅の女王】だの呼ばれてるのに、どうして剣を持ってないとポンコツになるかなー?」

「ポンコツじゃないわよ! 迷うのも仕方ないことなんです。だって久しぶりなんだもん!」

「はいはい、そういうことしておくわよ。あんたの彼も良く我慢してるわね?」

優希くんは彼なんかじゃ……! 的な声が耳に入るも、里香は軽く受け流していた。無論、里香は「彼」と言っただけで、優希の名前が出てしまっているのは完璧に明日奈の落ち度である。

しかし里香の言葉は冗談半分、本気半分だった。

優柔不断な明日奈をずっと待っている忍耐力は並外れたものではないだろう。現にソードアート・オンラインで何度か見てきたやり取りが物語っている。

明日奈が悩んでいたら、話しを聞いて結論を急がせない。聞き上手、というのだろうか。本人は全力で否定するのは目に見えているが、第三者から見たら明日奈のフォローを全力で優希は行っていた。自分と明日奈達とは長い付き合いとはいえ、数年の間柄だ。

となれば、彼女達は物心がつく頃から今の関係であるのだとは安易に想像が出来る。

まるで忠犬。

いいや、犬と評するには彼は凶暴過ぎる気がするし、ならば狼であるのかといえればそれはそれで過大評価過ぎる気がしないでもない。だったらやはり、犬ということになるのだが。

「犬、犬かあ……」

想像が出来ない。

誰かに尻尾を振って喜ぶ優希の姿が想像出来ない。

発想が貧困なものも困りものだ。もう少し想像力豊かであれば、かなり愉快的絵面が想像できたものを。なんて事を考えて、里香は一人で落胆していると。

「犬がどうしたの？」

いつの間にか持っていたメニュー表をテーブルに広げて見ていた明日奈に対して、里香は何でもないと首を横に振って。

「決まったの？」

「それがね、見てこれ」

「なによ？」

明日奈が指差した先。

それはデザート。イチゴとストロベリーシロップ垂らされているパフェ。一般的に言うのであれば、ストリベリーパフェの写真だった。

それがどうしたというのか。

里香は首を傾げて問いを投げる。

「それにするの？」

「ううん。これね、前に優希くんと食べたパフェなんだよね」

「アスナ」

「え？」

「早く決めなさい？」

ニツコリと満面の笑み。

柔和な笑みであるものの、どこかその表情には迫力があり、膨大な威圧感を感じさせる。

笑顔を浮かべながら威嚇。何やら矛盾らしきものを感じさせるが、それは気の所為ではないようだ。それを証拠に、どこか楽しそうに語っていた明日奈は顔を青ざめると「はい！」と元気よく返事をして再びメニュー表とにらめっこを始める。

本当に同一人物とは思えない。

かつて自分も所属していたギルドの団長としてのアスナ、そして現実世界の抜けているお嬢様として結城明日奈。恐らくスイッチをオンにしているか、オフにしているかの違いなのだろう。

だとしても、落差がありすぎると思ってしまうのは里香だけだろうか。

でもぶっちゃけ、そのギャップが可愛いんだけどね。

そう心の中で呟き、小さく笑みを零す。里香も本気で呆れているわけでも、怒っているわけでもないようだ。

質の悪いことに、からかっているだけ。明日奈の反応が面白かった

から、興が乗ってしまった、ということなのだろう。明日奈からして見たらたまったものじゃないが。

「そう言えば優希の奴は何やってんのよ？」

ふと、疑問に思ったことを口にする。何度も話題になった茅場優希の話し。

考えれば、里香の中での優希は謎であった。自分達のようにアルヴ Heim・オンラインに頻繁にログインしているわけでも、放課後など共にするわけでもない。かと言って付き合いが悪いといえればそういうわけでもない。

だからこそその謎。私生活など、優希は何をやっているのだろうか。今回だつてそうだ。和人や木綿季のように統一デュエルトーナメントの練習も兼ねてインしているわけではないだろう。何せやる気がないのだから当然とも言える。参加するのだから、妹にせがまれたから程度の理由でしかないことは里香も知っている。

ならばアルヴ Heim・オンラインへログインしている、というわけでもないだろう。

「優希くんなら今日後輩と遊びに行くって言ってたけど」

そして、明日奈も考える素振りすら見せずには答える。

普通は疑問に思うことである。何故彼女が、優希の行動を把握しているのか。

しかし里香は疑問にすら思えなかった。むしろ何度も見てきた光景故に、慣れてしまったようでもある。

「えっ、アイツに後輩なんているの？」

「うん。朝田くんって言っただけだね？」

「朝田、くん……」

はて、どこかで聞いたことがある。

里香は少しだけ考えて、該当する人物の顔を思い浮かべた。だがそれはおかしい。何故なら里香が思い浮かんでいる朝田なる人物は。

「は？ 朝田くん?？」

女の子なのだから。

メガネを掛けた、都内にある高校の制服を着て、本がとても似合いそうな文学少女。それが里香の中にある朝田なる人物だ。

何せ、入院中だった優希の口から紹介してもらった。後輩の朝田であると。そして本人の口からも、朝田です、と確かに聞いた。

思わず頭を抱える。

里香は、まさか、と疑い、ありえない、と結論付ける反面。ポンコツ状態のアスナなら仕方ないと投げやりを受け入れながら。

「アスナさあ。もしかしてだけど、朝田と会ったことがある?」

「……ない、かな。そういえば」

「優希の口から、朝田って男の後輩って聞いた?」

「ううん」

ふるふる、と不思議そうな顔で明日奈は首を横に振った。

やはりだ。やっぱりだった。そう言うわけだった。

余裕があるわけではない。明日奈はむしろ知らないのだ。朝田なる人物が女性であることも、優希を慕っていることも、彼女は知らない。

いいや、知ろうとすれば知ることが出来ることだろう。

朝田が誰なのか聞けば、優希も隠すことなく話す。何せ隠すことでもない。聞かれたら答えることだろう。

だが明日奈はしなかった。それが何故なのか――。

「……あんたどうするのよ。朝田が女の子なら」

「朝田くんが、女の子？」

ポカンと口を開くと、明日奈は直ぐに笑みを浮かべて。

「ないない。だって優希くんって腹黒いし、目つき悪いし、口が悪いもん。女の子なんて寄って来ないわよー」

茅場優希という人物を良く知るからこそその余裕なのか。

確かに彼女の言う通り、優希は女受けする性格でもなければ、見た目でもない。彼を良く知らない人物が相對すれば、口の悪さを額面に受け取り、その先にある「甘さ」を察することが出来ないだろう。

言動が辛辣のくせに、行動が伴っていない。それが茅場優希の一つの本質とも言える。

だからこそその油断、だからこそその墓穴。

そう。結城明日奈は完璧に油断している。彼に好意を向けている物好きは自分だけであると、完全に断言していた。

里香はため息を吐く。

自分が指摘すればいいだけなのかもしれない。

だがそれでいいのだろうか。いいや、良いわけがない。明日奈の油断、それは自分が気付かなければ意味がないことだ。

ならば友達として何が出来るだろうか。荒療治であるが吞気過ぎるその心を矯正させること他ない。

具体的に言えば。

「ライバルが多いあたしから見ても、今のあんたに足りないものがあるわ」

「足りないもの？」

「危機感よ」

ヒントだけは与えた。

気付くかどうかは明日奈次第。

最も、そのヒントがきつかけになったのかは、別の話しであるが――

.....
.....
.....

2025年5月31日 AM 11:00

都内 繁華街

「ぶえつくしよんツツ!!」

それはもう盛大に、あまりにも壮大で、絶大なくしやみ。

思わずくの字に身体を曲げるほどのくしやみをする、ズズツと鼻をすすする。

風邪か？ と思わず首をかしげるも、それありえなかった。

何せ寒気もなければ、熱も出ていない。ましてや気怠さすらもない。至って健康そのものである筈だ。となれば、誰かに噂されているのか？なんて的を得た結論に至り。

「先輩」

「ん？」

先輩と呼ばれた彼――優希は隣へと視線を移す。

そこにはバックから取り出したポケットティッシュを差し出して
いる後輩――朝田詩乃の姿があった。

眼は真っ直ぐに優希を居抜き、心配するようにティッシュ差し出す姿
はどこか甲斐甲斐しい。

ともあれ好意で差し出されたものをそのまま無碍にも出来ない、と

思ったのか優希は片手でそれに応じると。

「悪いな」

「別にいいわよ。それよりも本当に大丈夫なの？」

「風邪え引いてるわけじゃねえよ。自然に出た感じ。……でいいの？」

「私に聞かないでちょうだい。……そういうことでなくて」

首を横に振りながら、どこか慌てた様子で詩乃は続けて。

「私と遊んでて大丈夫なの？ 顔も青かったし」

「……まあアレは気にすんな」

「本当に？」

「本当に」

そこまで言うことやっと納得したのか、詩乃はホッと胸をなでおろす。

せつかくこうして遊べる時間が出来たのだ。優希が不本意、または不調子で無理しているのであればそれこそ彼女の中ではあつてはならないことである。

詩乃としても優希には会いたかった。会いたくて会いたくて、仕方がなかった。しかしそれは自分だけの感情。優希本人にまで押し付ける道理などないのだから。

心配していたものから、高揚するものへと変わっていく。

そして思い出すのは先程の言葉。優希が出会い頭に褒めてくれたあの言葉。

『メガネ、滅茶苦茶似合ってるじゃん。ナイスメガネ』

反復する言葉で、身が振れそうになる。

ニヤつきそうな顔は必死に鉄仮面を被り、体温が上昇してしまうのは仕方がないというもの。

服装も気を使った。バックや腕時計といったものにさえ念には念をいれて。流行りのブーツも履いて抜かりはない。だがそれでもメガネを褒めたという事実。

それはつまるところ――。

――これは先輩の好みの女つてことでいいのではないかしら？

――いいえ、そうに決まってるわ。

――来てる。熱い何かを感じる。

――すごい一体感を感じる。

――今までにない何か熱い一体感を。

――風……なんだろう吹いてきてる確実に、着実に、私のほうに

……！

優希の好みのタイプになっている、と詩乃は脳内で自動変換していた。

今の詩乃は無敵に違いない。何を言われても前向きに捉えて、何もかもをポジティブシンキングすることだろう。恋する乙女はかくも強くあるべきなのだろうか。

とはいえ、彼女も正常な判断が出来ていないのは確かだ。

今まで練っていたプランは吹っ飛んでいた。原因は言うまでもなく、優希のナイスメガネ。好いている人間に褒められる。しかもそれがメガネ好きからの評価であるのだから破壊力は増すというもの。それはもう舞い上がるし、テンパるといふもの。

だが流石といふべきか、彼女は表面上であるものの冷静を装っている。いつものクールな朝田詩乃。好きな人に奇行は見せられないという乙女の複雑な事情であるが故。

「それで、どうするんだ？」

「えっ、子供何人作るですって？」

「おい、オマエこそ大丈夫か？」

ピシツ、と音を立てて固まる後輩。

それから数秒も経たずに、んんっ、と大きく咳払いをして。

「どうするってどういうことよ？」

「何処に行きたいんだ、聞いてんだけどよ。オマエ行きたいところあんの？」

言葉では他人任せそのものであるが、その様子からはどこかそうではないことが伝わってくる。

何やら使命感染みたモノが。言葉の節々にそういった強いなにかを感じさせられる。

いまいち要領がつかめない。

詩乃はそんな顔をしているようで、優希は補足として説明する。

「いや、まあ、アレだ。週末遊びに約束してたがそれを破っちまっただろ？ そのケジメってヤツだ」

「えっ、先輩覚えてたの？」

意外そうに思わず言葉にしてしまった。

しまった、と口を閉じるも遅い。紡がれた言葉は確実に優希の耳に入ってしまう。

対して優希はどこかバツが悪そうに、なおかつ言いづらそうに。

「覚えてるよ。悪かったな。約束、破っちまって」

プイツ、と拗ねるように呟く優希に思わず笑みが溢れる。同時に心が暖かくなるのを詩乃は感じていた。

週末遊びに行く。そんな何気ない約束を、自分と交わしたどこにもある約束を、彼は覚えていた。詩乃が忘れたこともないモノを、彼が覚えていたという事実。ぶっきらぼうに言い放ち、子供のようにど

こか拗ねる調子で言う彼に、抱きつきたくなる衝動に駆られるも詩乃は必死に抑え込んだ。

今は充分だ。彼と共にいる。それだけで充分だ。それ以上望むというのは、贅沢が過ぎるといふもの。

—— 本当に、本当に、嗚呼、本当に——。

「先輩」

「あ？」

「貴方って律儀よね？」

—— 私は先輩を愛している——。

第8話 後輩とのデート く白熱編く

2025年5月31日 PM12:05

都内 繁華街

「そう言えば先輩、大丈夫なの？」

昼食も軽く済ませて、とりあえず一通り見て回ろうという詩乃の提案を受け歩いている中でそんな事を言ってきた。

優希は思わず首を傾げる。

何せ主語がない。後輩が何に対して大丈夫なのか聞いているのか、皆目検討がつかなかった。

それも考えること一瞬。

彼女が心配していることを何となく察する。きっと恐らく、先程の優希の状態を心配しているのだろう。

心配してくれるのはありがたい嬉しい。

だとしても、心配させてしまったということには変わりがなく、優希はどこか居心地悪そうにバツの悪い顔で応える。

「あー……、問題ねえよ。さっきのはアレだ、気にするな。風邪でもねえしよ」

「あつ、ごめんなさい。それとは違うの。いいえ、それもそうだけど、違うのよ」

直ぐに訂正してくる後輩の言い分に、ますますわからなくなる。

気分を悪そうにしている優希も心配なのだが、詩乃の言い方だと心配しているのは他にもあるようだ。

優希は思わず首を傾げて。

「何を心配してるんだオマエ？」

「最近、先輩が遊んでるゲームあるじゃない」

「ALOか。それがどうしたよ?」

「大きな大会あるんでしょ? 日にちは確か——」

「明日だな」

何気なく、極めて軽い口調で「明日」と優希は他人事のように呟いた。

詩乃の言う大きな大会、というのは「統一デュエルトーナメント」に他ならない。

明日、つまりは6月1日。曜日でいうところの日曜日。時間は10時から——であると優希は記憶している。

予選を経て、本戦トーナメントを勝ち残り、優勝を賭けて争う。

とは言っても、優希も曖昧なモノだった。

時刻、日にち、試合形式。その程度の情報で、更に言えばそれすらも把握しているかどうか怪しいものである。

もちろん、彼も他人事ではない。

括りで言うのなら参加者だ。優勝を争う側であり、「アインクラツドの恐怖」という知名度だけで言えば、優勝候補の一角として数えられている。

であるのならば、遊んでいる場合ではない筈だろう。というのが詩乃の結論だった。だが——。

「それとこれと、関係でもあんのか?」

それがどうした、と言わんばかりの口調で言う優希に、詩乃は呆気に取られてしまった。

誘ったは良いものの、詩乃が統一デュエルトーナメントなるモノを知ったのは翌日のこと。

慌ててメールで遊ぶ日にちをずらすことを提案するが「オレは問題なねえ」と言われ空回りに終わってしまふ。

だからだろうか、詩乃は今日まで精神的に落ち着かなかった。

自分のせいで先輩が負けてしまう可能性がある、自分のせいで練習不足となり、自分のせいで先輩が楽しみにしていた大会の成績が残念なことになり——自分が嫌われてしまう。

そんなこと、考えただけでもゾツとするというもの。それだけは何としても避けなければならぬ結果だ。

そのためか、今日という日が楽しみである反面、凄惨な思いも半分といったところであった。

しかしどういいうわけか、詩乃が想像していたリアクションと薄い。何とかなるだろう、と曖昧に濁すものではない。優希の反応、それはまるで参加しないような口調で、あまりにも俯瞰的な視点での言い方である。

大会があること、更にその結果どうなるのか、詩乃が改めて言葉にするのも無理はないだろう。

「関係あるでしょう。私なんかと遊んでたら、先輩負けちゃうわよ?」
「オマエ、ンなこと気にしてたのか」

だと言うのに、優希の反応は変わらない。

ため息を吐くように、優希らしからぬ諦めたような、静観するように第三者であるかのような口調で続ける。

「別に、気にすんなマジで。結果なんざ変わらねえよ」

「それは、どういうこと?」

「オレ以外の奴が優勝して、それで大会は終了って意味だよ」

「先輩でも勝ち残れないの……?」

どこか唾然とした口調で呟く後輩に対して、呆れ混じりの苦笑いで応じながら。

「オマエの中のオレは、どんだけ強い男なんだよ」

「だって——ッ！」

そこまで言うと、詩乃は言い淀んだ。これ以上口にするのは恥ずかしく、自分が好意を抱いているのがバレてしまうと思ったからこそその緊急回避。

だが事実、詩乃は優希ほどの「強い人間」を知らなかった。

周りが敵だらけになろうと自分の主張を押し通し、弱き者に手を伸ばしてしまう正義の味方。自分よりも強かろうが、数が多かろうが関係がない。愚直とまでとれる彼の行動に、どれだけの人間が救われたことか詩乃にはわからない。きっと多くの人間を救ったことだろう。現に彼女自身も救われた人間なのだから。

そんな彼を「強い人間」と言わずに何とこののか、詩乃には思いつかない。他人が無視し救わないモノを無視せずに救い、大半の連中が虐げる者に味方する中で敢えて弱き者に味方し叛逆する。それこそが、朝田詩乃からみた茅場優希であった。

そんな強者が負けると断言する事実。

詩乃には理解が出来ない。いいや、理解しようとしなさいと言った方が正しいのかもしれない。

傷ついてでも自分を守ってくれた先輩が負ける筈がない。無意識の中で優希に依存している彼女は、これまた無意識で理解を拒んでいった。

故に、彼女は食い下らない。

むしろどこかムキになっている様子で、優希の言葉を否定するよう

に。

「先輩が負けるわけないわよ」

「本人よりも自信満々ってどういうことよ。つか、断言する根拠あんのかオマエ？」

「だって、その……。有名な人なんですよ、先輩って」

「有名、ねえ。それ誰から聞いた？」

「妹ちゃん」

妹ちゃん。それはつまるところの、優希の義妹に他ならない。

事実、優希が意識不明の際は詩乃は木綿季から、自分の兄がどれほど凄かったのか聞かされている。それはもう、根掘り葉掘りである。

本来であれば、数十人がかりで挑むべきフロアボスを単騎で攻略。しかもそれを何回も何十回も繰り返してきた規格外。思考すら存在しないモンスターすらも恐怖し道を開ける怪物。畏怖を抱きながらいつしか彼は——アインクラッドの恐怖と呼ばれるほどになっていた。

彼の行動は正に奇蹟。人の領分を超えた偉業であることは確かである。

それだというのに、優希はそれを誇らない。むしろどこかバツの悪そうに、居心地悪そうに。

「まあ、有名と言えば有名だろうな。それは悪い意味でだが」

「どういうこと?」

「簡単なハナシだ。今もオレは阿呆だが、あの頃のオレはもつと阿呆だった」

自嘲するように口元を歪めて、遠い目をしながら優希は語る。

「二人で我武者羅に、独り善がりの理由で剣を取って、前に進んでいるつもりだった。だが違った。オレは進んでいたわけじゃない、周りを見ずに剣を振り回している、ただのガキだった」

「暴れ回ったってこと?」

「まあ、似たようなモンさ。いつの間にかアインクラッドの恐怖とか呼ばれてたがよ、ンなもんオレからしてみたら迷惑なもんだ。何せソレは、オレが間違った行動していたから呼ばれるようになったモノだからな」

口調はあくまで小馬鹿にするそれだった。

自分自身を貶す、じぶんという存在に価値を見出だせない、いつも通りといえども通りの茅場優希の口調。

だが――。

「だけだよ、ロクでなしのオレだけだよ、仲間だつて言ってくれる奴ら
がいた。独りで突つ走るオレを追いかけて、追い付いて、それは間
違つてゐるつてぶん殴つて、説教してくれる奴らがいた」

――その表情は、詩乃には見たことがない表情だつた。

何か眩しいものを見るように、尊い者を見るような、極めて暖かい、
慈愛に満ちたそれ。

いつも険しく、剣呑な、神経を研ぎ澄ませていた優希とは違う。憑
き物が落ちたと言うべきか、歳相応で皮肉など一切存在しない笑みを
口元に浮かべて続ける。

「強いつて言うのならソイツらさ。ソイツらの強さに比べたら、オレ
なんざ小物も良い所だ」

「……そう」

小さく、極めて静かに、詩乃は呟いて。

「やっぱり先輩、変わったわね」

「変わらねえよ。オレは馬鹿のままだ」

「ううん、変わったわよ」

何せ、以前の茅場優希ならば、今のような穏やかな表情はしなかつ
た。

どこか危なかく、自分という存在を度外視にし行動する。それが
僅かではあるが、自分という存在が確かに彼の中には存在している。

恐らく。いいや、絶対。

彼を変えたのは、彼の言う「ソイツら」なのだろう。

そして「ソイツら」の中に、彼の幼馴染もいるのだろう。

詩乃では出来なかった。

彼の後ろ姿を目で追うのが精一杯だったことを「ソイツら」なる人物は——結城明日奈はやり遂げてしまった。

もちろん、優希の変化は喜ばしいことだ。

それは本心であるし、偽りのない詩乃の感情である。

だが同時に負の感情が。自分では出来なかった事を、明日奈が成し遂げた事に対する感情が——嫉妬がふつふつと湧き上がるのも嘘ではなかった。

思えばこの時からかもしれない。

詩乃が茅場優希を変えた世界——仮想世界に興味を持ち始めたのは——。

第9話 後輩とのデート く灼熱編く

2025年5月31日 PM13:12

都内 大型雑貨店

そうして茅場優希と朝田詩乃は仲睦まじく雑談をしながら、繁華街を練り歩いていった。

何を練っていたのかといえば簡単に言ってしまうえば、どこに目的地を定めるかと言ったところである。特に目的もなく、何をするでもなく、二人はブラブラと辺りを雑談混じりに散策していた。

詩乃としてはそれでも良かった。

想いを寄せている相手と共に歩く。そんな取り留めもない、当たり前のことでも、彼女としては満足であった。

しかしそれは、彼女だけの話しだ。もしかしたら優希に不満があるのかもしれない。ただブラブラと、惰性に事を進めるのは、彼にとつては苦痛であるかもしれない。彼が自分と同じ気持ちであるとは限らないのだ。

故に、詩乃は目的地を探していた。

先輩を飽きさせないように、どこか健気とも取れる行動に、優希は全く気付いていない。むしろ慌ててどうしたのだろうか？程度の疑問しか浮かんでいなかった。

だが詩乃に焦った様子はない。

何せこの日に備えて、この辺り近辺の情報は既に入手済み。学校帰りに立ち寄り予習復習は完璧という準備も怠っていない。

もはやどこに何があるかなど、眼を瞑っても辿り着けると断言できるほど自負しているほどだ。

だからだろうか。

詩乃の足取りに迷いはない。

休日ということもあつてか、平日よりも目に見えて多い人波をスルスルとかき分けて、目的地に辿り着いた。

そこは五階建ての雑居ビルに店舗を構える雑貨屋だった。

入り口には乱雑に商品が積み重ねられており、どういった店なのかわかりかねる。

何せ、シヨウケースには高級そうな時計、その隣には某銀河帝国の悪役が被ってそうなマスク、その隣には木箱に入ったオルゴールとなんとも忙しない物の数々。とてもではないが、店の前だけでここが何屋なのか判断に難しい。

中に入っても同じであった。右を見れば本があり、左を見れば音楽関係。正面を見れば家電といったように、業種の異なる商材を並べて陳列されている。

「何とまあ、手広いことやってんな」

「面白いでしょ？ 最近出来たのよ」

店内を散策しながら興味深そうに辺りを見渡す優希に対して、詩乃はどこか自信満々に言い放つ。

だが否定はしなかった。

優希から見た店内は新鮮なもの。洗練された商品を陳列している、といったわけでもない。寧ろどこかダラシない様子で、通路も物が多すぎて狭く、商品だつてどこかマニアックなものばかりで、ゾンビ映画などに出てきそうな大口を開けている貯金箱や、人体模型を模した抱き枕など、誰が買うのかもわからない。ある意味で気持ち悪いモノが多すぎるくらいだ。

それでも、何となくワクワクしている自分も確かに感じていた。

商品は珍しいものばかり。

いいや、珍しいものばかりであるからだろうか。

オールディーズなどの音楽を店内で流したり、昔の懐かしいカートゥーンアニメを上映を上映していたり、雑誌などではカーグラフィックのバックナンバーを並べいたり、と見たことがないものばかり。

どこか、そう。店の中には秘密基地感がある。ここにしかないものが存在し、陳列も乱雑であるがまたそれが良い。

まるで童心に帰ったようだ。

表情や態度には見せないが、得体の知れない探検欲が優希の内から湧き上がってくる。

斜めに構え、捻くれた物の見方を良くしている優希であるが、彼もまた男の子だということだ。

ほうほう、と店の真ん中に設置されている等身大のロボットのなメカメカしいモノに眼を奪われている中。

「先輩、アレを見てよ」

「あ？」

肩をチョンチョン、と。

人差し指で突かれ、詩乃の方へと顔を向ける。彼女は優希を見ていなかった。どこかを指差し、それを見るように促している。

「……………メガネ」

キョロキョロと、物珍しく見ていたとは思えないほどに一点を見つめて。

フラフラと、どこにでも興味を示していたとは者と同一人物とは思えないくらい真っ直ぐに。

木材で作られたテーブルの上に、それはたしかに合った。紅い分厚い牽かれた布の上に、それは確かにあった。

それは眼鏡。視力を矯正したり、眼を保護したり、あるいは着飾ったりするための、目の周辺に装着する器具である。それ以上でもそれ以下でもない、ただの道具の一つであった。だが優希にとってはそれ以上を意味しているようだ。

何せ一般人と反応が違う。普通で眼鏡があることを確認し、一目見て終わるところだろう。

だが優希は違う。眼鏡を見つけて立ち止まり、そしてガン見している。まるで観察するように、鑑定するように、眼を輝かせて、ひたすら眼鏡を見つめていた。

彼はそこで何分見つめていたのだろうか。しばらく動かずに、ジッと見つめてひと息ついて。

「……………なるほど」

「満足したの？」

「ああ。たまにはこういう生真面目なメガネ以外のメガネもいいもんだな」

「生真面目メガネ……………」

「生真面目メガネ」

首をかしげる詩乃に、満足したと言う割にメガネから眼を話そうとしない優希は応える。

正直な話し、この雑貨屋にメガネが設置されていることは知っていた。

男心を撥り、飽きさせることなく、更に先輩の好きそうなものがある店。そういう条件を念頭に入れて、ここいらの繁華街を下見していたのだ。どこに何があるか、そして優希が好みそうな店など頭の中にインプットしている。

だとしても、今の彼の反応、彼の言動、更に言えば彼の行動には予想外ばかりだったようだ。

理解しようと努力しているものの、何一つ理解が出来ない。

故に詩乃が質問してしまうのも無理はない話だ。

「生真面目メガネとは？」

「しっかりしていないメガネだよ」

「しっかりしていないメガネ」

「しっかりしていないメガネ」

おかしい。

同じ日本語なのに何故こうもわからないものなのか。

えーっと、とメガネをずらし目頭を抑えて考え込むも、詩乃にはてんでわからなかった。

「しつかりしてないメガネとは？」

「語っても？」

「何分かかりそう？」

「二時間くらいか？」

「巻いてちょうだい」

「そうだなあ……」

んー、と少しだけ考えて優希は口を開く。

「伊達メガネだな」

「秒で終わるじゃないの」

「バツカ、オマエ。断腸の思いで一言に纏めたんだよ！」

「相変わらずメガネフェチなのね、先輩」

果たしてフェチなんて言葉で簡単に片付けていいのかどうかかわかりかねるが、詩乃は微笑ましく笑みを浮かべていた。

そこでそう言えば、と詩乃は何かをひらめき提案することにした。

「そう言う割に、先輩ってメガネを掛けないわよね」

「当たり前だろう。オマエみたいな可愛い顔した奴ならいいが、オレのような野郎がメガネをかけるとか、メガネさんに失礼だろうが」

「自然にメガネにさん付けしたわね——んん？」

何か、聞き逃してはならないことを言わなかったか？

詩乃は笑みを浮かべたまま固まると、先程の優希の言葉を繰り返して反復し、恐る恐るいった調子で。

「ねえ、先輩。さっきの言葉、もう一度言ってくれない？」

「メガネさんに失礼だろうか？」

「もつと前。むしろ冒頭から！」

「当たり前だろ？」

「ああ、イキすぎ！ もう少し後から！」

「?? オマエみたいな可愛い顔した奴なら良い？」

「」

瞬間、目にも留まらぬ速さで180度回れ右をし、優希に背を向けた状態になった。

あまりにも急だったもので優希も「なんだ!?!」と少しだけ狼狽えるも、詩乃には反応できるほどの余裕はない。

彼女は肩を小さく揺らす。

口元を抑えて、顔を真っ赤にさせて。別に気持ち悪いというわけではなく、ましてや熱があるわけでもなく、寒気を感じているわけでもない。

彼女は——歓喜に身を震わせていた。

口元を抑えているのはだらしなく浮かべる笑みを隠すため、背を向けたのは真っ赤になってしまった自分の顔を見せないたため。

それでも何とかいつも通りの、冷静である自分を思い出し、唇を一文字に閉ざすように力の限り努めるも、何もかもが徒労に終わる。

キュツ、と結んだ口は直ぐ。

にへら、とだらしなく笑ってしまう。

——ダメ、ダメよ……っ！

——ときめかないで、私！

——揺れないで、私の心！

——萌えは覚悟を鈍らせる！

それでも自らを自制させようとする辺り、詩乃はまだ理性をギリギリ

り保っていると言えよう。

だがそれも決壊寸前。もう一言彼女を褒める、あるいは彼女に軽くでも触れるなどした場合、彼女の理性は崩壊することだろう。もっと細かく言えば、理性を失くした獣と成り果て、愛に生きるビーストがアドベントすることになるだろう。

正に瀬戸際。一つでも些細な事をしたものなら、物語は決着することになる際の際で。

「へえ、珍しいものが置いてんな」

優希は悠長な口調で口を開いていた。

しかしどうやら、それのおかげで詩乃は冷静を取り戻したようだ。一度深く深呼吸。吸って、吐いて、をこれでもかというくらいゆっくり、そして深淵よりも深く行つて。

「何が珍しいの？」

何とか取り繕うことが出来たようだ。

ズレたメガネをあげながら言うその姿は、どこか「出来る女」と思わせるには充分過ぎるほどの仕草。

そんな見えない葛藤に打ち勝った後輩に気付かず、先輩は「ほら」と視線を珍しいと称したそちらに送りながら近付いていく。

詩乃もその後を追い、直ぐにそれが何なのか理解することが出来た。

そこにあつたのはCD。

それも陳列は綺麗なもので、器用に置かれているCDの中心部にはミュージックビデオが映し出されている。

海をバックに、ギターを肩に掛け、弾き語りしながら歌う一人の女性の姿。

どこか楽しそうに、幼さが残る黒髪は清楚と断言出来るほどの整った顔立ちをしている。

神埼エルザ。

最近ブレイクしている歌手である、と詩乃は記憶している。
サブカルチャーに疎い優希が知っていることに少しだけ疑問に思
うも、直ぐにどうしてか思い出して。

「妹ちゃんが好きなんだっけ？」

「まあな」

ジツ、と。優希はテレビに映し出されているミュージックビデオを
見つめる。

先程のメガネを見つめるときの眼差しとは違い、どこか値踏みする
ような。見惚れるとも違う、一挙手一投足見逃さない。その様子は何
かに警戒したそれである。

詩乃は優希の態度に違和感を覚えるも、大した気にすることなく何
気ない口ぶりで。

「そう言えば知ってる？」

「何をだよ」

「神埼エルザってSAOの元ベータテスターって噂があるんだけど」

「知らねえな。証拠でもあんのか？」

「さあ？ 私もネットで眼にした程度だし。先輩は何か感じる？」

「エスパーかよオレは」

呆れたように呟き、警戒するような態度を崩さずに優希は続けた。

「まあ、ムカつきそうだな見てて」

「何よそれ。嫌いななの？」

「わからねえよ。でも何だか気に入らねえ……」

それだけ言うと、優希は神埼エルザのミュージックビデオから眼を
離さなかった。睨みつけるように、この感覚がどういうもので、どこ

で感じたものなのか思い出しながら観察する。

詩乃は思わず首をかしげる。

彼女に何を感じているのか、聞こうと口を開きかけるも。

——あら？

何かが眼に入り、フラフラとその何かに近付いた。

それはアクセサリー。耳につけるタイプのもので、刺すピアスとも違う。世間一般的に、イヤリングに該当するモノだ。

何の変哲もないシルバーアクセサリー。飾りっ気がなく、三日月の形を模したモノだった。だがどういうわけか、どういうわけか、それに何となく詩乃は心を惹かれる。

無意識で手を伸ばしかけるが。

「どうした？」

後ろから声をかけられる。

驚きながら振り向くと、優希が不思議そうな視線を向けて詩乃を見つめていた。

対して彼女はフルフル首を横に振るって、どこか誤魔化すように。

「私、先輩のメガネをかけた姿が見たいのだけど」

「ああ？ やだよ。メガネさんに失礼だろうが」

「いいでしょ。見たいのよどうしても」

第10話 後輩とのデート 〔終焰編〕

2025年5月31日 PM17:20

アーケード街

茅場優希と朝田詩乃は見慣れたアーケード街を歩いていてた。

右を見れば子供連れの主婦の姿、左を見れば仕事帰りのサラリーマン、そして空を見上げれば赤く染まった空——夕焼けが目の前に広がっている。

見慣れた、というのは比喩などではなく事実である。

何せここは詩乃のアパート近くにあるアーケード街。詩乃はもちろんであるが、優希もこうして何度か彼女と共に訪れており、どこに何の店があるかまで把握している。

やはり休日ということもあってか人通りが多く、いつもよりも子供が目立っている。恐らく、友達同士で遊んでおり、その帰りなのだろう。

友達同士で遊び、帰宅するには良い時間になったので、肩を並べて帰路につく。

そう考えれば、優希達も似たようなものと言える。

「……悪いな」

言葉の通り、優希は本当に申し訳無さそうな表情を浮かべながら謝罪した。

その対象とはもちろん詩乃に対してだろう。当の本人である彼女は、何故謝られたのかわかっていないようだ。現に首を傾げて、不思議そうな顔で応対する。

「どうして先輩が謝るのよ?」

「なんつーか、オレのワガママで早めに切り上げちゃってよ」

確かに年頃の彼らとしては、早めの帰路と言えるのかもしれない。何せ彼らは学生、まだまだ遊び盛りの男女である。それが日も暮れていないうちに帰宅するために歩を進めるのは、これまた不思議なものだった。

原因としては、本人が言ったとおりに受け取るのであれば優希にあるのだろう。

対する詩乃は特に気にすることなく、片手を軽く振る。気にしないでと言わんばかりに、謝罪自体を拒否するように少しだけ慌てながら。

「仕方ないわよ。妹ちゃんのご飯作らないとならないのでしょ？」

妹ちゃん。

それは優希の義妹を指す言葉であり、対象は紺野木綿季という少女に向けられていた。

詩乃も何度も顔を合わせたことがある少女。

それはSAOがクリアされたにも関わらず、優希が目覚めないときの話だ。兄が意識不明だというのに明るく振る舞い、健気に毎日欠かさず見舞いに訪れていた。

自分は目覚めて兄は目覚めない。詩乃には感じることもなかった、違う意味での不安もあったことだろう。しかしそれを感じさせない、いいや、感じさせないように爛漫に振る舞う木綿季に詩乃は少なからず好印象を感じていた。

話してみれば、やはりと言うべきか。

人当たりが良く、話していて楽しければ、同性から見ても木綿季は可愛く見えた。

容姿もさることながら、真に木綿季が可愛らしいのは外面だけが理由ではない。こちらの話に、良い意味でいちいち反応し、喜怒哀楽がハッキリしている。それが木綿季を可愛らしく見せているのだろう。

そう考えたら、詩乃と木綿季は正反対なのかもしれない。別け隔てなく優しい木綿季に対して、詩乃は基本茅場優希にしか興味を抱かな

い。ありとあらゆるモノに興味を尽きず、自分の周りに色々なモノで世界を形成させている木綿季に対し、詩乃の世界は自分と茅場優希のみで形成されている。

それでも、詩乃と木綿季は衝突しなかった。

寧ろどこか木綿季に対して、心を開いている節すらあるあたり、木綿季のコミュニケーション能力の凄まじさがわかるというもの。

詩乃が、仕方ない、と言うのもそれが理由だ。

優希を困らせたくないのと同じくらい、木綿季に辛い思いをしてほしくない、という気持ちがあったからこそ。

「それにしても、先輩って料理出来たのね」

「ンだよ、意外だっていうのか？」

「あら自覚はあるのね？」

唇を尖らせて拗ねた口調で言う優希が微笑ましかったのか、クスクスと楽しそうに笑みを浮かべて詩乃は続けて。

「でも先輩って、寮生活でしょ？ 寮でご飯とか出ないの？」

「出るには出るぞ。それもかなりのモンだ」

「それなのに先輩が作ってるの？」

「妹が作れ作れってうるせえからな。仕方なくだよ仕方なく」

気怠そうな口ぶりであるものの、その声色に毒気もなければ悪気もない。

もしかしたらではあるが、誰かに料理を振る舞うという行為自体、優希は悪い気はしないのかもしれない。かと言って、それを聞けば「ンなわけねえだろ、面倒くせえ」と光速で否定してくるだろう。

だからこそ、詩乃は妄想することにした。

長机を目の前に座っている自分。

執事服を着た先輩に料理を振る舞われて、優雅に紅茶を淹れて、ニツコリ微笑む。

そこまで考えて。

「悪くない。むしろイイ……」

「何がだよ？」

容赦のないツツコミを受けて、詩乃は正気を取り戻したようだ。ブンブン、と勢いよく妄想を弾き飛ばして、悟らせない為にも話題を戻すことにする。

「そ、それなら直ぐに帰ってあげた方が妹ちゃん喜ぶんじゃない？」

「バカ、オマエ。そう言うわけにはいかねえだろ」

それは何故か、と詩乃は首をかしげる。

木綿季は彼の作るご飯を待っているし、兄のことが大好きなのは誰が見ても明らかだ。ならば一分一秒速く帰宅したほうが喜ぶに決まっている。少なくとも自分が木綿季の立場なら喜ぶどころの話ではないだろう、と詩乃は結論付ける。

まるで敬愛する彼によく似た考え。自分という存在を度外視した思考。

それを知ってか知らずか、優希は深くため息を吐くと。

「最近、何かと物騒だろうが。年頃の娘を一人で帰すとかどうかしてんだろ」

それに、と言葉を区切り。

「オマエなら尚更だ」

「そ、それはどういう意味？」

トクン、と心臓が一際大きく高鳴るのを詩乃は感じる。

オマエなら尚更。それは、朝田詩乃であれば余計一人で帰すわけに

はいかないという意味に他ならない。つまるところの——特別視。優希の中の優先順位が、詩乃がいま正にトップに君臨しているということだ。

それはもしかしたら、もしかしするかもしれない。

どこでそうなったかわからないが、もしかしするかもしれない。

先輩は自分に——。

と、そこまで考えて。

「オマエ最近、妙なヤツに絡まれてたろ」

「」

現実はそのままで甘くないことを思い知らされた。

優希は詩乃のことが好きであるから特別視していたわけではない。

実害が——遠藤という女子生徒に絡まれていたところを見ていたからこそ、心配しこうやって送っているのだった。

とは言っても、心配してくれるのは詩乃から考えたら嬉しい。

嬉しいのだが、どこか期待していたのもあつてか、気分が消沈するのもまた事実である。

「また絡まれるとも限らねえ……どうした？」

「いいえ、何でも。なんでもないわ……」

「??」

ガツクリと、大きく肩を下げる後輩にいまち理解出来ない先輩が一人。

どの辺りでそんなリアクションを取られる理由があるのか少しだけ考えるが、本人が大丈夫と言っただから反省は一先ず置いておくことにした。

「まあ、何でもいいけどよ。アレからどうなんだ？」

「どうって……」

「絡まれたりしてんのオマエ？」

どこかぶつきらぼうに問いを投げられ、立ち直った詩乃は言うか言うまいか一瞬だけ考えて。

「さあ？」

「何だ、さあ、って……」

「だって彼女達、最近学校に来てないもの」

「そうなのか？」

ええ、とどうでもよさそうに、本当に興味がない様子で詩乃は頷いて続ける。

「プライド傷つけられて、学校に居づらくなったかもしれないわね」

「そんなもんかねえ？ オレとオマエでちよつとタテついただけじゃねえか」

「結構、学校じゃ幅利かせてたみたいだから。先輩はともかく、私に齒向かわれて恥ずかしくなったんじゃないの？」

おかげで学校じゃ私は腫れ物扱いよ、と肩を竦めてボヤいて。

「静かになって好都合だけどね。どうでもいい人達は寄ってこないし」

「……そうか」

「ええ、そうよ」

優希も思うところはある。

彼女が言う好都合というのは、本心なのだろう。他人に気を使わないで済む、些細なことに心を乱さずに、ある意味で平穏な生活を謳歌していると言えるのかもしれない。

だがそこまでだ。傷つかないことを選択した代償は停滞でしかあ

りえず、それ以上の成長など望まれるわけがない。

必要最低限の繋がり、他者との繋がりを得ようとしないうる詩乃を見て、優希は苦言を漏らそうと考えた。

だが、いくら言ったところで、本人の意志が変わらない限り意味がないと判断する。意識とはそういうものだ。心から欲しない限り、何も生まれないし何も生み出さない。

何かきっかけがあれば簡単なんだけども、とどうしたものか考えながら。

「まあ、何だ。何かあったら言えよな？」

「ええ、ありがとう、と……」

そこまで言うとうる詩乃は立ち止まった。

いや、詩乃だけではない。優希も同じタイミングで、とあるアパートの前でバラバラだった歩幅が一斉に立ち止まることとなった。

ここは詩乃の住んでいるアパート。

そして、その場所に着いたということ——別れを意味していた。

これで最後というわけではない。

優希の空いている時間を確認して、誘えばいいだけのことだ。だがそれでも、別れ際るときは、正にいまこの状況は、詩乃にとって寂しいものには変わらない。

彼女の表情に影が落ちる。

もつと一緒にいたいと言えば、彼は悩んでくれることだろう。困った顔で、一生懸命考えてくれることだろう。

それは嬉しいことだ。だがそれ以上に、想い人を困らせるようなことはしたくない。だから身を引く。木綿季も待っていることだし、これ以上自分に時間を使うのは彼に悪いという考えから。

だが。

「……ほら」

「……え？」

優希は何かを、詩乃に手渡した。

それは小さい箱。水色の小さい箱に、小さいリボンがラッピングされ、綺麗に梱包されていた。

これは何なのか。そう尋ねる前に、優希はプイッとそっぽ向いて口を開く。

「すっぽかしてた詫びだ。いらなくても受け取れや」

「先輩が、買ってくれたの……？」

呆然、と。

眼を丸くさせて詩乃は言う。

優希は既に歩みを進めていた。

その場にいるのが耐えられないように、どこか気恥ずかしそうに、少しだけ照れくさそうな口調で。

「……おう。多分、オマエが欲しがってたもん、だと思う……」

小さい声でそう呟くと、優希は立ち止まることなく進む。

詩乃も思考が追いつかない。

きつと歓喜極まって、脳内がオーバーヒートしているのだろう。眼をパチクリさせて、未だに事の状態を把握並びに処理しきれていなかった。

それでも、たととしても、伝えねばならない言葉ある。

「せ、先輩！」

「あっ？」

優希は立ち止まる。

同時に詩乃はギュツと大事そうに渡された水色の小さな箱を胸に

抱き、満面の笑みで。

「——ありがとう！」

それを聞いて、若干、ピクリと優希の肩が揺れた。
振り向きかけるも、すぐに再び歩みを始めて——。

「——おう」

片手を軽く上げて、ヒラヒラと手を降って、応じるのであった——。

そんな素直ではない先輩の背中を見送って、詩乃は呆然とした様子で自分の部屋に戻る。

どこか地に足が着いていない様子なのは気の所為ではないだろう。まるで現実味がなく、夢の中にいるような錯覚に彼女は陥っていた。自分では気付いていないようだが、朝田詩乃は舞いに舞い上がっていた。フワフワと、ポーツとしながら、先程の光景を脳内に焼き付けていく。それでも両手に大事そうに、優希から渡された小包を抱き抱えている辺り、流石と言うべきなのかもしれない。

無意識に履いていたロングブーツを脱ぎ、部屋の中に入ると同時にバックを床に落とす。中身は少し散らかってしまいが、そんなものに

意識は向いていなかった。

フラフラと吸い込まれるように、リビングに設置されているベッドに腰掛けて、か細い声で事実だけを口にする。

「先輩が、私に、プレゼント……」

そこまで言うと、新たな疑問が浮かんでくる。彼は一体何を自分にくれたのかということ。

むしろ遅いくらいだろう。それほどまでに、彼女は満足していたのだ。先輩が自分に何かをプレゼントしてくれたという、揺るぎない真実であり事実には、詩乃は幸せを噛み締めていた。むしろ今までかろうじて取り繕い、ギリギリの理性で優希に礼を言っていた状態だったのは称賛に値する。

詩乃は歓喜に震える手で、丁寧に梱包を開け始める。

本来そんなもの関係なしに、ビリビリ破くところではある。それを鑑みるに、このプレゼントは詩乃にとってウェイトを占めているということがわかる。

そうして時間を掛けて、丁寧に梱包を開け始める。慎重すぎるほど慎重に開封し、漸く中身のものを取り出した。

「これ、って……!」

それはアクセサリー。耳につけるタイプのもの、刺すピアスとも違う。世間一般的に、イヤリングに該当するモノだ。

何の変哲もないシルバーアクセサリー。飾りっ気がなく、三日月の形を模したモノだった。

そして詩乃は、これに見覚えがある。

どういうわけか心惹かれた。それも件の大型雑貨店で眼にしたものであった。

思い出すのは先程言っていた優希の言葉。

……おう。多分、オマエが欲しがってたもん、だと思おう

……。

それはつまり、そういうことなのだろう。

この変哲もないシルバーの三日月を模したイヤリングが梱包されていたという事は――。

「先輩、私のこと見てくれていたんだ……」

でなければ、これが詩乃の手元にある筈がない。

詩乃が何に注目し、何を欲し、何に手を伸ばしかけていたのか理解した上で、優希は彼女にプレゼントしたのだろう。

「――っ！」

口をギョツと閉ざし、ベッドに身体を預ける。うつ伏せに寝っ転がり、バタバタと両足をバタつかせる。その間すっかりとイヤリングは手放さず、両手で握りしめる。

今、彼女だ抱いている気持ち。それを言葉にするのは難しいだろう。胸が暖かくなり、気持ちが高ぶり、胸の鼓動が忙しく鼓動する。それでも何とか詩乃は言語化しようと試みた。

どうにかして言葉にしないと、最低限のガス抜きをしないと、自分が幸せ過ぎて爆発してしまうと思ったから。

ベッドに顔を埋めて、放たれた声はか細い。

震える声は頼りなく、それでもせいっぱいの感情を健気に、そして情けない声色で紡がれた――。

「もう、好き……」

第11話 かつて恐怖と呼ばれた彼

——統一デュエル・トーナメント。

それは読んで字のごとく、アルヴ Heim・オンラインのシステムの一つであるデュエルを用いた大会である。

今までもプレイヤー間でデュエルは行ってきたし、大会も開催されていた。だが統一という意味では、種族の垣根なしではじめての試みといえるだろう。

今までは「グランドクエスト」の存在もあり、悪い意味で閉鎖的な雰囲気^フがアルヴ Heim・オンライン内では蔓延していた。

世界樹の頂上へ、空中都市に到達し、光妖精族^フへ転生できる種族は一種族のみ。多種族でパーティーを組み、グランドクエストをクリアしたパーティーが全員転生出来るという意味ではない。そのまま文字通り、一種族のみが転生する権利を得るというもの。条件が条件だ。

種族同士で交流を深めるのは当たり前になり、閉鎖的になつてしまふのも仕方ないことだろう。

だが今はそんな縛りはない。

グランドクエストはなくなり、空には浮遊城アインクラッド。各層のフロアボスを攻略するため、アルヴ Heim・オンラインのプレイヤー達は自由にパーティーを組み、日夜攻略に励んでいる。

グランドクエストが全てであったゲームが、皮肉にもその存在意義を失った結果、以前よりもアルヴ Heim・オンラインはますます活気付いていた。

そんな中、統一デュエルトーナメントは一人のプレイヤーの戯言から始まった。

酒場で何気なく、一人のプレイヤーは呟いた。今、アルヴ Heim・オンラインのプレイヤーで、一番強いのは誰なのか、と。

そこで議論が勃発。論争は瞬く間に広がり、熱は他人に伝播していくのも時間はかからなかった。

そうして開催されたのが統一デュエルトーナメント。誰が一番強いのか決めるために開催された催しであり、当然ルールはもちろん『完全決着モード』。

最初はプレイヤー同士の小規模な大会であったのだが、時が経つにつれて参加人数が増大。その数1万人は超えていた。

予選でのバトルロイヤルを勝ち残り、上位16名によるトーナメントを行い、最終的に優勝者、準優勝者を決めるというもの。

大会中、様々なドラマがあった。

圧倒があった、激闘があった、感動があった、策謀を張り巡らせる者がいた。

様々なプレイヤーが、様々なやり方で、己が最強であると証明するために、己が持つ最高の武を振るい続けた。

それは正に祭典であった。

参加者はもちろんであるが、見ている人間も大いに熱狂し、次は自分もあの舞台に立ちたいと憧憬の火が灯る。

白熱する統一デュエルトーナメント。

しかし始まりがあれば、終りがあるように、それにも終りがある。

それは、優勝者が決まるということ。永遠に見たかった夢の祭典、誰が一番強いのか決めるための大会、真に強いプレイヤーは誰なのか。

栄えある優勝者の名は――。

.....

2025年6月2日 AM7:55

統一デュエルトーナメントが終わり翌日のこと。

夢見は悪く、目覚めは最悪。いつも通りの朝であったと茅場優希は認識している。いつも通り悪態をつきながら起きて、いつも通り妹を起こし、これまたいつも通り朝食の支度をして、いつも通りに妹を見送って、いつも通り自分も部屋を出る。

ここまで、イレギュラーなどはなかった筈だ。

特別、定めていないがいつも通りの流れで支度をして部屋を出る。その後もいつも通りといえども通り。

寮母と幼馴染——結城明日奈が仲良く談笑しているのを見てため息を吐いて、特に待ち合わせをしているわけでもないが明日奈と合流し帰還者学校へと向かう。

問題があるとすればこの後だろう。

いつも通りというのであれば、優希と明日奈。こうして二人で登校していた筈なのだ。

しかしどういいうわけか、人影がもう一人。

それは男性。かなり恵まれた体躯であった。

かなりの長身で筋肉質。歳は三十代前半くらいで、ごく短い髪に角ばった顔立ち。太い眉の下の眼は、鋭く優希を睨みつけている。

だがどういいうわけか、妙なことに彼は優希と同じ制服。つまり、帰還者学校の男子生徒の格好をしていた。ということ——彼も優希、そして明日奈と同じ帰還者学校に通う学生であることがわかる。

いつ頃から彼はいるのだろうか。

優希達が寮から出る段階で、彼は寮の門の前に仁王立ちで堂々と立っていた。

奇妙そうに、物珍しそうに、奇異な眼で、他の生徒達に見られていたが関係がないようで、まったく気にすることなく腕を組み彼は立っていた。

嫌な予感がしていた。

彼を一目見て、優希は嫌な予感はしていた。

どうするか少しだけ考えるもつかの間。彼は優希を確認するや否や、一目散に足早に優希に近付き現在に至る。

正に電光石火であり猪突猛進。

あまりの急な出来事に、明日奈は狼狽えながら優希と彼の顔を交互に見つめることしか出来ない。

そんな幼馴染を庇うように一歩足を踏み入れ、背には幼馴染、前にいる彼を見上げて挑戦的な笑みを浮かべて優希は口を開いた。

「——ンで、何の用なんだよコーバツツくん？」

「古場剛である。今の私の名は古場剛だ。間違えるなよインクラツドの恐怖」

対して彼、コーバツツ——古場剛は物怖じすることなく今にも蹴立ような態度で、優希の言葉に応じていた。

奇妙な光景だ。

三十代半ばの外見している男性が、高校生にカツアゲしている。そのように見れる光景であるが、お互い同じ制服を着ているからか、一方的に絡んでいるとは見ることは出来ない。

どちらにしても、古場の外見もあってコスパレ感が否めないが、彼の実年齢は十代。むしろ優希よりも年下であるのだから、人は見た目ではないのかもしれない。

人は見た目ではない。

そうは言っても、古場は怒っているように見えて実は怒っていないのではなく、今の彼は憤怒に身を任せている状態。

両手に握りこぶしを作り、優希を睨みつけるその姿は金剛力士像を彷彿とさせる。

しかし、優希も伊達に修羅場を潜ってきているわけではなく。

むしろため息を吐いて、人を喰うような口調でもって、優希は対応していた。

「テメエも間違えてんじやねえよ。オレは茅場優希。アインクラッドの恐怖なんて名前じゃねえよ。あと敬語使えよ小僧。オレよりも年下だろテメエ」

「今はそんなことどうでもいい！ 貴様、先日あの体たらくは何だ！」

優希はわずかに眉をひそめた。

何のことなのか少しだけ考えて、直ぐに放棄することにする。

こんな奴のために時間を割いてやるのも勿体無い。そう判断した優希は古場を睨みながら問いを投げた。

「何のハナシだ？」

「昨日の統一デュエルトーナメントだっ！」

怒声混じりの声。何人かの生徒は何事かと見て、触らぬ神に祟りなしと言わんばかりに、直ぐに見て見ぬふりをする。

対する優希は本当に意味がわからなかった。

そもそも、自分と古場は予選でのバトルロイヤルも、本戦でのバトルロイヤルもかち合わなかった。

理不尽に怒りの矛先を向けられる謂れなどないはずだ。それが優希の主張である。

「ますますワケわかんねえよ。テメエ何が言いたいわけ？」

「何故本気を出さなかった！ 貴様が一回戦で負けるわけがないだろう！」

そこまで言われて、優希は漸く納得することが出来た。

統一デュエルトーナメント。

誰が一番強いのか決めるための大会。先日まで連日連夜話題の中心となっていた祭典に、優希も参加していた。

結果だけ言えば、予選は通過したものの、そのあとの本戦で優希は

一回戦で敗退していた。見る人間が手を抜いている戦いであった、というわけではないだろう。優希も本気だったし、相手を侮るような真似をしている暇すらなかった。

勝つために最大限の努力をし、今ある力を存分に奮った。その結果が一回戦で敗北というだけだ。

特別、理由があるわけでもない。

単純に、優希が相手よりも弱かったから負けた。それだけの話しだ。

「何を見てたんだ。オレは本気だった。相手がオレよりも強かった、だから負けた。それだけのハナシだろうが」

「そんなわけがない。貴様は『アインクラッドの恐怖』だ。貴様が何者かに負けるなど、ありえんだろう！」

「うるせなあ、何だテメエ。結果は結果だ。どうしようもねえモンにまで、ケチつけにくるんじゃねえよ——」

そこまで言い切り、優希は古場の表情を見た。

妙なモノだった。確かに彼は激怒していることには変わりない。だがどこか悔しそうに、認められないと言わんばかりの幼子のような表情だった。

考えてみれば、最初から彼の言い分は奇妙の一言に尽きる。

古場の性格は、優希も何となく知っている。傲慢で自分本位で、自己中心的にモノを捉える人物であった筈だ。

だが彼の言い分は自分が負けたという結果に憤っているわけではなく、優希が一回戦で敗退したことに怒りの焦点を合わせている。おかしな反応だ。古場剛という人間は、『聖竜連合』遊撃部隊リーダーコーバツツというプレイヤーは、他人の勝ち負けに口を出すような性格ではない筈。

腑に落ちない。

だから優希は口を開く。どういふつもりなのか問いを投げようとするも。

「私は認めんぞ」

「あ?」

「貴様が、アインクラッドの恐怖が弱いなど、私は認めん。貴様の情けない姿など、見たくもない」

「――」

そう断言すると、古場は優希達に背を向けて一人堂々と歩き始めた。

引き止める人間はいない。

むしろ彼は招かざる客だ。求めてもいないのに急に現れて、思いの丈を気ままに優希にぶつけて、去って行っただけにすぎない。

しかし、それでも。そんな自分勝手な者からの言葉でも、優希にとって無視できない単語があった。

弱いアインクラッドの恐怖。

優希の情けない姿。

自覚はあった。

過去を美化するつもりも毛頭なく、あの頃のほうが良かったなどと言うつもりもない。だが言われてみれば、考えてみれば、古場の言うことは確かにその通りだった。

アインクラッドの恐怖としての茅場優希であれば、少なくとも一回戦で負けるということはなかった筈だ。本能のまま石斧剣を振るい、自分を傷つける痛みすら物ともせず、システム外の力である心意――
――己すら焼き尽くす黒炎を噴出し敵を屠っていく。

「勝手なこと言いやがって……」

優希は舌打ちをした。

答えは得た。常に自己に向けていた怒りや憎悪、許せなかった自分を、少しでも許そうと努力することを決めた筈だった。

だがそれは、本当に正しいのか?

自分が弱くなり、あの頃のように強くない事を、受け入れて良いものなのかどうか。

この先何が起ころとも限らない。またデスゲームと似たようなことが起きれば、優希は再び剣を取る事だろう。そんな窮地に陥ったところで、今の自分に何が出来るというのか。

自分の中に未だに燻っている、自身に向けられている憤怒や憎悪。これを失くしてしまつて本当に良いのか。それは本当に正しいことなのか。

——本当に、自分を、許してしまつても、良いものなのか——。

「——良いに決まつてるじゃない」
「……………え？」

振り向く。

そこには——微笑んでいる明日奈の姿があつた。

古場のように激怒し思いの丈を叫んでいるのではなく、弱くなった優希をそれでも良いと肯定するように受け入れたまま続ける。

「今、弱くなつたままでもいいのかな——つて思つてたでしょ」
「別に……………」

咄嗟に何とか取り繕うと否定から入るも、優希はうまく言葉を紡げない。

そんな彼がわかっているのか、明日奈はクスクスと笑みを零しながら口を開く。

「確かにあの頃の優希くんは一番強かつたと思うよ？ でもね、一番弱かつたとも思うの」

「ンだよそりや、矛盾してねえか？」

一番強くもあり、一番弱い。

眉をひそめて指摘するも、明日奈は揺るがず、首を横に緩やかに振って笑みを向けたまま。

「ううん、矛盾してないよ。あの頃の優希くんは凄い強かった。誰よりも先に進んで、誰よりも先に敵を斬って、前に進んで行く。それこそ一人で第百層まで行ったと思うの」

「買い被りだ。オレはそこまで滅茶苦茶じゃねえよ」

「滅茶苦茶よ充分。でもだから弱くもあつた」

「どういう意味だ？」

「きみは私達が追いつかずとも第百層に到達して、フロアボスを倒したと思う。でもねそれで終わり。優希くんは絶対に満足して、燃え尽きていた」

「……………」

否定は出来なかった。

優希がインクラッドの恐怖と呼ばれるようになったのも、根本的な理由は我慢ができなかったから。

キリトが無理をするのを見ているのが我慢が出来なかったから、リズベットが怯えているのが我慢できなかったから、エギルを速く家族の元へ帰したかったから、そして——アスナが剣を握るのが我慢が出来なかったから。

だから彼は剣を取った。自分が傷つこうが、記憶を失おうが、余命幾ばくもなくなるのが関係がない。黙って見ている自分が許せず、思うがままの獣になろうが、攻略するためだけの機械と成り果てようが構うことはなかった。

その結果、どうなるのが、優希は躊躇しないことだろう。

無理を続けた代償がどうなるのが問題なく、自分が燃え尽きる結末になろうが、最後には目的を果たし満足して、消えていく。

そう考えれば、明日奈は間違っていない。

最終的に独りで百層まで到達しうる常識破りで滅茶苦茶な、強さ

“を備えているが。”

目的を達成することが出来れば消えることも是とする “弱い” 危うさも秘めている。

「一人で登り詰めるかはわかんねえが、そんなに危なかったかオレ？」
「うん。だからわたし達も必死だったのよ？」

ウツ、と言葉に詰まると優希は視線をそらす。

気不味そうに、申し訳なさそうに、小さい言葉で一言。

「……悪い、迷惑かけたな」

「間に合ってホント良かったわよ。正直言うとな、アインクラッドの恐怖って嫌なんだ」

「危ないからか？」

首を横に振って、明日奈は否定すると。

「“アインクラッドの恐怖” はきみの全力の象徴だから。全力を出して無茶をする優希くんなんて、もう見たくないよ……」

「明日奈……」

自身が全力を出す、そうになると必ず無茶をするだろう。戦力として他者に劣っているのならば、それはもうその身を賭して、命を賭けるしかない。そうでもしなければ覆りはしないのだから。

今まではそれを迷わず実行してきた。自分が生き残ったところで待っている人間など、もうこの世にはいないと思っていたから。

だが今は違う。

悲しんでくれる幼馴染がいる。恐らくだが、いつも自分と張り合っている “彼” も怒り、他の仲間達も叱ってくれようことだろう。

余計なものである。余計な繋がりを得て、満足に動けなくなってしまう。だがそんな余計なものこそが、茅場優希にとって必要不可欠

なモノだった。

思えば、両親を見殺しにしてから、自分は人間ではなかったのだろう。機械であるように、自罰的に、生を怠惰に過ごしてきた。それももう一度人間に戻ることが出来たのは、仲間達のおかげであり何よりも——目の前の幼馴染のおかげでもある。

弱くなった——認めよう。

受け入れるのか——応とも。

救えなかった命はどうする？——これから考える。

憎悪や憤怒はどうするのだ？——心に常にある。

それでも、闇を抱えたまま生きるのか——当たり前だ。

「明日奈」

「え？」

明日奈は俯かせていた顔をあげる。

そこには笑みを浮かべた優希の姿が。以前よりも良く笑い、表情も柔らかくなった。だがそれ以上に、明日奈すらも数えるくらいしか見たことがない優しい笑みを優希は浮かべて。

「悪い、またオマエに助けられた。——ありがとうな、明日奈」

第12話 英雄と恐怖の奇妙な関係

2025年6月2日 AM8:34

帰還者学校 教室

「昨日はどういうつもりだったのよ？」

黒髪の彼——桐ヶ谷和人が帰還者学校に登校し席に座ると同時に、篠崎里香が近づきそんな問いを投げかけてきた。彼女は和人の空いている椅子に腰掛ける。どうやら腰を落ち着かせて、じつくりと話す気満々のようだ。

「……何が？」

和人も里香の言いたいことは何となく検討がついている。彼女が言う昨日。特別に何かがあったとすれば、仮想でも現実でも騒がせていた出来事——統一デュエルトーナメントしかなかった。

そしてその大会に、和人は「キリト」として参加している。となれば彼女の問いは、統一デュエルトーナメント内で起きたことを指しているに他ならない。

しらばくれる、とも取れてしまう和人の反応を見て、里香はニヤリと「ふーん」と口元に笑みをちらつかせて楽しそうに。

「とぼけるんだ？」

「何のことだか、サッパリ……」

「そう言う割には、眼が泳いでるんですけど？」

最早言い逃れが出来ないと見た和人は、チラツ、ととある場所へと視線を送る。

そこは窓際の席。その場所に座るはずの「金髪碧眼の目付きの悪い男子生徒」の席。だが今は無人で誰も座っていない。どうやらまだ登校していなのだろうか。それを証拠に、机の中は空っぽであり、登校してきた形跡すらもない。

和人はため息をつく。

そして小声で里香に再び視線を送ると。

「誰にも言わない?」

「誰にも言わない」

力強い里香の頷きを見て、和人はポツリポツリと渋々と言った調子で言葉を絞り出していく。

「アレだろ。リズが言いたいののは、一回戦目の俺だろ?」

「当たり前じゃない。何なのあれ? やる気がないにも程があるでしょあんた」

自覚はあった。

動きは繊細さを欠いた散漫なもので、相対するプレイヤーの動きに注視せず、余計なことを考えながら剣を振るっていたことを、和人は覚えていいる。

余計なこと。

それは彼が負けた理由に他ならない。試合に集中せず、相手の動きすらも分析しないで、言ってしまうば考えながら剣を振るっている状態。そんな状況下で勝利することは出来ない。例え彼が「はじまりの英雄」と呼ばれていようと変わらない。

本来であればそんな愚行を起こす人間ではない。桐ヶ谷和人は――キリトは、「はじまりの英雄」は常に冷静で、相手の動きを分析し、類まれなる洞察力で動きを読み、例えイレギュラーが起きようとも非凡な持ち前の反応速度で以て対応していく。

だからこそその「はじまりの英雄」。SAOでも一人しかいなかった

た二刀使い、ユニークスキル『二刀流』の担い手なのだから。

だが先のトーナメントでは見る影もなかった。

一般プレイヤー以下のプレイヤースキル。むしろどうして本戦にまで勝ち残れたのか疑問に思うほど、世辞でも強いとは思えないモノ。とても「はじまりの英雄」と称されたプレイヤーとは思えない。キリトというプレイヤーを良く知らない人間であれば、それは調子が悪かったただけだろう、と簡単に片付けてしまおうだろう。

だが里香は違う。彼女は常にキリトの背を見守ってきた。命をかけて攻略する際でも、ギルド仲間と喧嘩をするような取り留めのない日常でも変わらない。変わらず、里香はリズベツトとして、キリトを見守ってきた。

故に、気付いた。だから、違和感を覚えた。

和人は全力でもなければ、本気も出していないのだと。

そして疑問に思ってしまった。そんな興味本位でしかなかった。

二人の間に沈黙が流れる。とは言っても、気不味いそれではない。和人は言葉を選びながら、里香はそんな和人の言葉を待っているだけだ。しかし傍から見たら、奇妙な光景に映ることだろう。何せ腕を組み首を捻る和人を、ジツと里香が見ているだけだ。その間二人の間に会話という会話がないのだから、奇妙に見えることだろう。

それも永遠と続かない。

数秒の沈黙。それを破ったのは和人であった。彼はポツリポツリと力無く口を開いていく。

「その、俺が負けたのは……」

「負けたのは？」

「アイツが先に負けたからだ」

「……………は？」

ポカン、と口を開く里香。

アイツという曖昧な三人称。心当たりがない———訳ではな

かった。和人がアイツなる人物に心当たりはある。

だがそれとこれと、どう関係するのか皆目検討がつかない。

里香が眉を抑えて、考えるのも無理はない。

肩を落とし、理解が出来ないことを何とか理解しようと努力したまま、里香は再度問いを投げる。

「えーっと、どうしてあんたが負けた理由と、アイツが負けたことが関係あんのよ?」

「ぶつちちやけるとさ。俺、別にデュエルトーナメントとか興味なかったんだよ」

「どうして出たのよ?」

「アイツが出るって言うから。決着つけるなら今かなーって」

「決着って……。もう着いたんじゃないの?」

少なくとも里香はそう聞いている。

ゴールデンウィーク、5月3日で行われたオフ会の最中に、和人と「アイツ」なる人物はアルヴ Heim・オンラインヘログインをして、人知れず争い決着したと。

聞き間違いでも、デマでもない。何故ならそれは、「アイツ」本人から里香は聞いたのだから。どちらが勝利し、どちらが敗北したのか、里香は耳にしている。

しかし、和人は納得していないようだ。

間髪入れずに彼は首を横に振って、「アイツ」なる人物が言った決着を拒否していた。

「何一つ着いてない、何も終わってない。アイツが勝手に言っているだけさ」

「……あんたも拘るわねえ?」

仲良くすればいいのに、と里香が思ってしまうのは間違いではない筈である。

誰だって争うのは疲れるものだ。物事に勝利するということは、必ず何者かが敗北していなければならない。そして誰だって敗者でいるのは嫌なものであるし、勝者でいたいと思うのは世の常であろう。だが妙なことに、和人の反応は違う。

「アイツ」に勝利して嬉しい、というより、「アイツ」が敗北して悔しい、に近い。勝利を誇るのではなく、敗北して遺憾に覚えているように。

まるでそれは、「アイツ」が自分に負ける姿など、見たくもないというかのよう。複雑で奇妙なものに見える。

「つまりはなに？ アイツが負けたから、あんたもやる気がなくなっただってこと？」

「まあ、そんな感じ、かな？」

「……呆れた」

はあ、とため息を吐く。

言葉の通り、里香は呆れながら席を立つことにした。心配して損したとはこのことだ。何か特別な理由で調子が悪いというわけではない。ただ単純に、和人のやる気がなかったから負けた。その程度の理由でしかなかった。

「あつ、アイツには言うなよ！」

「言わないわよ。本当にあんた達は仲が良いんだか、悪いんだか——」

そこまで言う。「ん？」と何かを思いつき、里香は立ち止まって考える。

そして一瞬で、瞬きする程度の数秒で、ある結論に至った。

そう。

自身の数多のライバル達。

それは『月夜の黒猫団』のサチであったり、彼の血の繋がっていない

い妹である桐ヶ谷直葉であったり、〃アイツ〃の妹と友達であるシリカこと綾野珪子であったり、神出鬼没の情報屋こと鼠のアルゴであったり、ダークホースのAIユイであったり。とにかく数が多かった。しかし警戒すべきは彼女達ではなかった。条約をむすべき相手、注目すべき相手は他にいた。

〃アイツ〃に負けたくないという男の子特有の負けたくない相手、だが負けた姿も見たくないという〃アイツ〃に向けられた複雑な心境。

「あたしの本当のライバルはアイツだった——？」

違う、そうじゃない。

根本的な部分で、間違っているのは、気の所為ではない——。

.....

2025年6月2日 PM16:45

某都内高校 校門前

どうやら私は、自分が思っているよりも、有名人になってしまったようだ。

どうしてこうなったのか、何故そうなったのか。自分でもわからない

い。

いいや、実のところわかつてはいる。

私が有名人になってしまった事件を、私は何となく理解していた。出来事は数週間前に遡り、場所はここ校門前。

私は妙な集団に絡まれた。確か名前は遠——何と言ったか。とにかく同性の私が見ても化粧が濃く、世間では彼女やその取り巻きのことを不良と称するのだろう。

そう、不良。

彼女達の人間は本当に目立つ人種だ。良くも悪くも、いいや、悪く目立つ。周りの生徒達からは腫れ物を扱うように、彼女達の奇行にも見て見ぬふりをする。それは教師だって同じだ。無視する教師もいれば、笑顔で接しているモノ好きな教師もいる。だが根本的な部分は同じだ。面倒事を起こされたくない、という本音が見え隠れしている。

しかし彼女達は騙される。彼女達に笑顔で接している教師は『話のわかるヤツ』だと勝手にフィルターを掛けているが、本質はどの教師たちも一緒。面倒事を起こしてほしくない、それに尽きるものだ。ただやり方が違うだけ。そもそもいないものと無視してやり過ぎるか、少しでも印象良くしていざという時言うことを聞いてもらおう、くらいではない。

なんとも滑稽なことに、彼女達を本当に思っ接している教師や生徒など、この学校には存在しなかった。

それが、いけなかった。

言ってしまうれば彼女達は異分子。むしろ、いないほうが良いくらいの存在でしかなかった。

それ故に、彼女達は目立つ。だからこそ、目立ってしまう。

規律を守る人間もいれば、破る輩も存在する。

どちらが目立つと言えば、完全に後者なのだろう。

学校を遅刻してくるなど日常茶飯事、他校の不良とも繋がりがあり、援交しているとも噂すら有る。

そんな人間に、私は齒向かった。

真正面から堂々と、関係がないと言わんばかりに空気を読めずに。正直な話し、歯向かったのは私だけではない。あの人も、というよりもあの人が——先輩が完膚なきまでに撃退していた。

それからというもの、遠なんちゃらの姿は見えていない。

彼女だけではなく、彼女の取り巻き連中すら見ていない。それほどまでに先輩の言葉が刺さったのだろう。残念なことに私は何一つ聞き取れなかったが。

流石、先輩である。言葉だけで追い払うなど、先輩にしか出来ない芸当だろう。

そう、先輩が追い払ったのだ。私はただ見ていただけ、絡まれている私を守り、誰も傷つけることなく事を収めたのは先輩だ。

しかし第三者からはそうは見えなかったらしい。学校でも有名な不良グループを追い払ったのは謎の金髪碧眼の男子高校生と「私」という事になっているようだ。

迷惑——というわけではない。

むしろ嬉しくもある。何せ先輩と私で撃退したことになっている。それはつまるところの共同作業に他ならない。二人で行った、初めての、共同作業。そう考えたら気分も高揚するというもの。

真実はそうではない。全て先輩の功績であり名誉。何もしていない私が一緒になって一目置かれるのは絶対に間違っている。

だが第三者はその事実を知らない——。

「ねえ、今日こそお礼をさせてよ朝田さん！」

彼もその一人だ。

私服であれば中学生とも見える、痩せ型の小柄な男子高校生。しかし私と同じ学校の男子制服であるのだから、彼も高校生であることがわかる。

お礼とは大げさなことだ。

私は特別なことをしていない。校舎裏で他の男子生徒に絡まれていたところを、何をしているのか？と見ていただけだ。声を掛ける

かどうか迷っていた。先輩ならば声をかけていただろう。だが私は先輩ではなく、先輩のような勇敢でもない。そう私は、先輩のように、強くないのだ。

それが良かったのか、悪かったのか。

件から私は素行の悪い生徒達からも一目置かれるようになってしまった。

そんな私がジツと何も言わずに、ただ見ていたのだ。不気味に思ったことであるし、彼に絡む男子生徒も逃げるといふもの。そうして勘違いは加速していく。彼は私が助けてくれたのだと、物事は進んでいってしまう。

「えっと、新川くん、だったっけ？」

「そうだよ。覚えてくれたんだね！」

それは毎日、お礼をさせて言われればね。

という軽口を飲み込んで、私は努めて冷静に、表情も変えずに説明することにした。

「何度も言うけど、アレは勘違いなの」

「勘違い？」

「そう。私は貴方を助けるつもりはなかった。だからお礼を言われることも、される謂れもないわ」

きっぱり、と。

さっぱり、と。

ばつさり、と。

これでもかというくらい、私は断言してみせた。
しかしそれも無駄に終わる。

新川くんは少しばかり眼を丸くさせるが、直ぐに笑顔になり、なおかつ距離を一步詰めて。

「でも僕を助けたという事実は変わらないでしょ？」

「だから助けたわけじゃ——」

「追い払ってくれたでしょ？」

「……まあ、結果だけ見てみたら、そうだけど……っ！」

ハッ、と口を抑えるも遅かった。

認めてしまった。私は追い払ったという事実を、認めたことを口に
してしまった。

瞬間、新川くんの笑みは深まっていく。

ニツコリと、私の言葉を待っていたかのように、満面の笑みで。

「だから、ね？ お礼をさせてほしいんだ」

「……貴方、凶つたでしょ？」

「何のことかわからないよ。僕はお礼をしたいだけさ。そうでもしな
いと僕の気が収まらないからね」

気が収まらないとは比喻ではなく、そのとおりなのだろう。

彼は私に「お礼」するために、これからもこうして会いに来てくれ
るのだろう。

正直、心苦しい。

これは勘違い。彼が恩を感じる必要もないというのに。
だからこそ——。

「お礼って何をしてくれるの？」

速く終わらせようと思った。

これ以上先延ばしにしないためにも、早急に終わらせて貰おうと。
新川くんは少しだけ考えて。

「近くの喫茶店で何か奢る、というのはどうかな？ 静かなところを
知ってるんだ」

「喫茶店ね、了解」

それだけ聞くと、私はカバンから携帯電話を取り出し、通話履歴の一番上のとある人物に電話をかけた。

携帯を耳に当てると直ぐに、コール音が鳴る。良かった。電源は切っていないようだ。

「誰に、電話かけているの？」

恐る恐る、といった調子で新川くんが尋ねてきた。

「喫茶店好きな人がいるから、その人にも来てもらおうと思って。大丈夫、その人の分は私が出すから」

嘘である。

彼には悪いが、正直な話し彼を信用している訳ではない。友達でもない人がこうして誘うなど、何か狙いがあるに決まっている。

伊達に長年ボツチをやってないのだ。侮らないでほしい。だからこそ――。

『ンだよ?』

繋がった。

私は安心したのか、無意識に胸を撫で下ろした。

だがやはり緊張しているようだ。浮ついた声を隠すことも出来ず、心臓は高鳴ったまま。

「もしもし、暇? 暇よね?!」

『……トラブってんのか?』

「似たような感じ、かな?」

『……仕方ねえな。どこにいった?』

「喫茶店、なんだけど……」
『はあ?』

——我、救援を、願う——。

幕間 その頃の優勝者

2025年6月2日 PM16:50

帰還者学校 教室

朝から大変な目にあつた。

紺野木綿季の率直な感想でいえばそのとおりなのだろう。

なにせ彼女は、先日まで騒がれていた『統一デュエルトーナメント』の初代優勝者だ。

小柄ながら自身よりも体躯が良いプレイヤーたちを切り伏せる。型はなく無手勝流な剣であるものの、無様に我武者羅に剣を振り回しているわけではない。その姿はまるで踊るようであり、片手剣を振るう姿は舞踊。素人から見ても彼女の剣は完成の域に達していた。

様々な優勝候補を打ち倒した。

“はじまりの英雄” “紅閃” “ALO最強の將軍” そして“アインクラッドの恐怖”。

それらの並み居る強豪の頂点に君臨することになった女剣士。それこそが“絶剣”と呼ばれる彼女——ユウキというプレイヤーであつた。

もちろん、彼女もSAOでは攻略組であり、最強の剣士の一角として名を馳せていた。

しかしここに来て、彼女の知名度は大爆発。VRMMOをやっている人間はもちろん、プレイしていない人間ですら耳にしたことが有るほどの知名度となつていた。

そんな事もあつて、木綿季は朝から大忙し。

帰還者学校に登校したと思ったら、見ず知らずの生徒には握手を求められ、見ず知らずの生徒に写真は撮られ、見ず知らずの生徒に連絡先を聞かれる始末。

このまま大混乱になりかけたところに、彼女の兄が現れ周囲を黙らせたのは記憶に新しい。

それ以降、声をかけられることはなくなつたものの、木綿季は居心地が悪かつた。

常に誰かに見られているような感覚が彼女に付き纏う。自意識過剰で済ませることは簡単であるが、実際問題そのとおりなのだから的を得ている。

今の木綿季はその辺りのアイドルよりも注目されており、下手な行動をしたものならSNSに書き込まれかねない。それほどまでに、木綿季は今や注目の的となっていた。

そして漸く放課後。

息の詰まりそうな状況をやっと脱し、力無く彼女は机に顔を伏していた。

「あー」

力のない声。

全ての気力を使い果たしたかのように、木綿季はただひたすらに脱力していた。

「木綿季、大丈夫？」

そこへ声を掛ける一人の女子生徒が一人。

彼女もまた小柄であり、両サイドで止められた髪型は、幼さの残る彼女にとっても似合っつてとても可愛らしい。

木綿季はだらけたまま、顔だけ女子生徒の方へ向けて力無く笑みを浮かべて応じた。

「あつ、シリカー。お疲れ様ー」

「木綿季の方が疲れてると思うなーって……」

あはは、と乾いた笑みを浮かべるシリカと呼ばれた少女——綾野珪子に、木綿季は口をとがらせて。

「本当に参ったよー。優勝しただけなのに騒ぎ過ぎじゃない？」

「その優勝したのが凄いから、みんな騒いでるんだと思うなーあたし」

そうかなー、と小さく首を傾げ未だに自覚のない友人に向けて、瑛子はクスクスと小さい笑みを浮かべて。

「木綿季は凄いや？ だってALLOで一番強い女の子なんだから。憧れちゃうよー」

「一番強い、かなー……？」

「……何かあったの？」

どうも歯切れ悪い。

統一デュエルトーナメントで優勝したのだから一番強い筈であり、それは胸を張って自慢していい称号であるし、もっと堂々としても良いだろう。

少なくとも瑛子から見れば偉業と言える。それを同年代の友達が達成したのだから、誇らしくもあり、尊敬するというものだ。

だが木綿季の反応は違う。

どこか後ろめたそうに、不服そうに、何よりも彼女自身が納得していない様子だ。

決して優勝者の顔に出るものではない表情を、木綿季は現在も浮かべている。そのまま、彼女は口を開く。

「ボクよりも強い人、いっぱいいるからさー」

「木綿季よりも強い人？」

そうそう、と頷く友人を見て瑛子はそんな人いるのか、と疑問を浮かべる。

鼻目なしで見ても、紺野木綿季が操るユウキは常識を逸脱しているほどの強さを持っている。いや、強いというよりも上手いと言った方が正しいのかもしれない。プレイヤースキルはもちろん、身体運びから、反応する速度も桁外れ、勝負に対する嗅覚の天性のもの。正

に剣士として完成の域に達している。しかしそれでいて、未だに彼女は成長している。

鋭く疾く、感覚は研ぎ澄まされていく。誰よりも完成されている癖に、誰よりも伸び代があるというのだから、未恐ろしいというもの。

そんな彼女よりも強いプレイヤーなどいるのか。

少しだけ考えて—— 思い浮かんだ。

珪子が思い浮かんだのは二人の少年。

一人はS A Oでも一人しか存在しなかったユニークスキル『二刀流』を巧みに使いこなし正に英雄と呼ぶべき存在。

そしてもう一人は—— 単純に恐ろしい存在であった。

「シリカ、ボクね？ キリトと戦いたかったんだ」

その言葉に珪子は納得する。

やはり、と。木綿季と互角に戦えるのはキリトこと桐ヶ谷和人と “もう一人” くらいしかないだろうと納得した。

だが同時に疑問が浮かんでくる。

どうして彼女はキリトと戦いたかったのだろうかということだ。

「どうして和人さんと戦いたかったの？」

「そんなの決まってるよー。キリトが強いからさっ！」

「もうっ、戦ってばかりじゃダメだよ木綿季。女の子なんだから、もっとお淑やかにしないと」

「ダメかなー？ 楽しいのに……」

ブーツ、と小さなブーイングを発する木綿季に対して、珪子は苦笑いを浮かべながら口を開いた。

「楽しいの？」

「うん、楽しいよ！ シリカはデュエルしても楽しくないの？」

「あたしは……どちらかというと、怖い、かな？」

そう、怖い。

デュエルとは一人では行えない。相対する者がいて、両者の了解を経て、始めて行えるシステムである。

ということはつまり、何者かに剣を振るい、何者かを傷つけて、勝敗を決することに帰結する。攻略組に属してはいないとは言え、珪子もデスゲームを生き抜いたプレイヤーだ。モンスター相手ならば何の問題もなく短剣と相棒である小竜ピナと一緒に戦う。

だが対人戦となれば話は別だ。未だに少女の心にはデスゲームが根付いている。ゲームオーバーになれば現実でも死を意味するデスゲーム。その恐怖が、今も彼女を縛り付けていた。

対して木綿季はそうではないようで、そういう意見もあるのかと改めて受け止め、一度頷いて。

「シリカは怖いんだ。でもどうして怖いのか？」

「人と戦うって慣れてないから、かな？ SAOでもデュエルなんてしたことなかったし……」

「そうなの？」

「うん。木綿季はデュエル、SAOでもやってたの？」

「やってたよおー。圏内で初撃決着」

満面の笑顔で、ブイツ、と右手の人差し指と中指を立てたピースのサイン作る。

だが直ぐに、でも、という言葉に続けて。

「キリトやにーちゃんとはやったことなかったなあ。だから今回戦えると思っただけど……」

「和人さんとお兄さん、一回戦で負けちゃったもんね……」

先日の統一デュエルトーナメントは波乱の連続であったことは、珪子の記憶に新しい。

木綿季が優勝したのは意外性ではなかった。むしろ彼女ならば上位に残っているだろうし、何よりも優勝するかもしれないと思っただから。

問題は優勝する以前の話であり、一回戦目にまで遡る。

何せ瑠子から見た強者とも呼べるプレイヤーが、二人揃って一回戦目で敗退したのだ。番狂わせも良いところである。しかも優勝候補に負けたのではなく、無名のプレイヤーに負けたのだから二重の衝撃だ。

だからだろうか。瑠子は先日から違和感を覚えている。

負ける筈がない、というのは言い過ぎにしてもあつさりしすぎているのだ。それは負けた二人共同じ。悔しがる素振りもせず、自身の敗北を大して気にしてないようでもある。

瑠子は違和感を口にする。

昨日から思っていた疑問を、木綿季にぶつけてみた。

「でも和人さんどうしたんだろう？ 調子でも悪かったのかな？」

「わかんない。わかんないけど」

「けど？」

「キリト、アレ手加減してたよ」

「手加減って、本気じゃなかったってこと？」

瑠子の純粹な問いに、木綿季は一度頷いて。

「キリトの本気は、もつと鋭くて、疾いもん。アレでいちちゃんに勝つたなんて思えない」

「……そう言えば、どうして和人さんと戦いたいの？」

何となく察することは出来ていた。

それでも聞いたのは念の為。瑠子自身の疑問をここで決着つけるためだ。

「キリトがにーちゃんに勝ったから。ボクから見た一番強い人に勝った人だもん、戦ってみたいって思うよね？」

「そ、そうかなあ……？」

可愛い笑顔で、どこことなく血気盛んで、なおかつ好戦的な友人に乾いた笑みを浮かべる。

そこで珪子はふと思った。

木綿季という少女は、強い人と戦いたい気質があるのは知っていた。

だがどうして、彼女は、自身の兄に当たる人物と、戦わないのか——と。

第13話 喫茶店で馬に蹴られたハナシ

2025年6月2日 PM17:10

都内 喫茶店

私と新川くんがやってきたのは喫茶店だった。

静かな喫茶店を知っている。

彼は私にそう言ったけれどその言葉に間違いはなく、そこは物静かな雰囲気醸し出していた。

とは言っても、人がいないわけではない。

席に空きはあれど客は確かに存在する。それこそ年配の男性から、若い女性の大学生と言ったように年齢層はバラバラであるが、客足がなくなるといふことはなかった。

暗黙の了解、というヤツなのだろう。会話することはあれど、必要以上に騒がず、バカ騒ぎなんでもつてのほか。明確なルールは存在しないものの、どこかそんな取り決めがあるようにも感じられる店内である。

きっとそれは厳格なマスターのせいでもあるのだろう、と私はカウンター越しから見えるキッチンの中にいるであろう店の主を見てそう思った。

とは言っても、それは私にとっては好ましい。

落ち着いた店内、野蛮ではなく常識ある客層、コーヒー特有の芳醇な香り、そして店内に流れるクラシック曲。

ここに来て初めてであるが、私自身驚くほど落ち着いている。何だったらここに何度も通いたいと思うほどだ。

「気に入った？」

物珍しく店内へ視線を向けていた私に、新川くんがテーブル越しに問う。

私達が座るのはカウンター席——ではない。

四人がけ用のテーブル席だ。木造の四角いテーブルが落ち着いた店内に良く溶け込んでいる。

「ええ、とても。新川くんはよくここに来るの？」

「実は僕も初めてなんだ」

「そうなの？」

「うん。たまたま見つけることが出来てさ。でも一人で入る勇気がなくて——」

「それで私をダシに使ったのね？」

なるほど、それならば納得がいった。

恐らく彼が必要以上に私にお礼をしたいといったのはその為なのだろう。

というか私としてもそちらの方がありがたい。

勘違いで助けたと思っっている私にお礼をしたいという彼には申し訳なさしかない。その上で更に私を連れて行くために、下調べに赴いていたとなると、私はどのような顔でいればいいのかわからなくなるというもの。

当の本人は小さく笑みを零し、どこか照れくさそうにしながら。

「でも朝田さんと来たいって思っていたよ？」

「あら、嬉しいこと言ってくれるね。そんな事言われても何も出ないけど？」

「いいや、いいんだ。僕はお礼をするだけ、あと朝田さんの話を聞かせてくださいば」

何か、違和感を覚える。

お礼をしたいというのは何度も言うが彼の勘違いだ。だがそれに付け加えて、私の話を聞きたいというのはどういことだろうか。自分でも言うのはおかしい事かもしれないが、つまらない人間であると

言い切れる自信がある。何よりも、彼と私に共通の話題はないはず。それで私の話を聞きたいとは、どういうことなのだろうか。いいや、私の考えすぎなのかもしれない。

彼が私にお礼をしたいというのは間違いなく善意である筈だ。私には後ろめたいもので、申し訳ないのは間違いなことであるが。対して新川くんはどこか楽しそうな口調で、メニュー表を手に持ち。

「それで何を頼むの？」

「新川くんは先に頼んで。私は後で頼むから」

「別にいいけど、何かあった？」

「私が呼んだ人が来るから、その人と一緒に頼もうと思って」

それから数十分、私と新川くんは軽い会話を始めていた。

正直な話し、新鮮な気持ちではある。何せ小学、中学、高校と私は同い年の子と話す機会などなかった。誰にでも壁を作って、当たり障りのない対応してこなかったからであると自覚している。

別に知らない何者かと仲良くなる必要も、必要以上に言葉を交わす必要性がない。それに友達を増やしたところで、自分の可愛さによって裏切るに決まっている。そういうことは、小学の頃に体験済みであるし、もう懲りている。

別に信条を変えたつもりもない。

こうして新川くんと話しているのは、彼の問いに答えているだけだ。決して彼に心を許した訳ではない。

他人なんて必要ない。

私の世界は完成されている。私と「彼」がいる。それだけで充分であるし、それ以外の存在など不必要であり余分なものだ。

そう、そうだ。他人などいらぬ。私には「彼」だけいれば、何もいらぬ。

カラン、カラン。

そんな金属同士が鳴る音が、入口のドアから聞こえる。客が来ることを教えるベルが鳴るといふことは、新しい来店者が現れたことを意味している。

それは——「彼」である。

この付近では見れないブレザー型の学生服。

接客にきた店員に愛想笑いを浮かべて、一言二言言葉を交わしてこちらにやって来た。

足取りはまっすぐ私達の方へ。

初対面の新川くんもいるからか、いつもの目付きの悪さは鳴りを潜めている。言ってしまうえば笑みを絶やさぬ好青年のそれ。

どこか憑き物が落ちたようにも感じていたが、どうやら演技だけは磨きがかかっているようだ。

「彼」が私達の元へとやって来る。

テーブルの前に立つと、笑みを浮かべたまま、普段からは想像がつかぬほど柔らかい声で。

「朝田、これはどういふことかな？」

「えーっと、トラブル？」

「どこが？ オレ、馬に蹴られて死にたくないんだけど」

「それは大丈夫。私と彼はそこまで深い仲じゃないから。それよりも先輩」

「彼」——先輩は「ん？」と言葉を区切り私が口を開くのを待っている。

うん、余計なことだったかもしれない。余計なことだったかもしれないが『新川くんがこれから来る人物がどんな人なのか』と聞いてきたから私は答えただけ。

「新川くんは先輩がどんな人か知っているから、もう演技する必要はないわよ?」

答えた、答えてしまった。

それはもう根掘り葉掘り。聞かれたから答えた。

先輩がどんな人物か、どのような人か、どれほど頼りになる存在なのか。聞かれたので全力で答えた。

ピシリ、と音を立てて先輩は止まる。

笑顔で固まったまま、何とか柔らかい口調のまま、先輩は口を開く。

「ンでそんなことしてんの」

「聞かれたから」

ねえ? と新川くんに同意を求めると、彼は何度も首を縦に振って応じる。

冷静に考えれば答えすぎたかもしれない。

本気も本気、全力も全力。幾分だが早口になっていたかもしれない。だがそんなことは些末なことだろう。ものの数十分で先輩を語ろうとするのがどうかしている。それこそ一時間はほしいというものだ。

深く息を吸い、深くため息を吐く。

一連の動作をどこか重々しく、呆れながら行って、漸く先輩は口を開いた。

「えーっと、新川君——でいいんだよな?」

「あつ、はい」

「何か悪いいな。邪魔じゃねえかな、オレ」

「えっ、どうして先輩が邪魔なのよ?」

申し訳なさそうに少しだけ頭を下げる先輩に問いを投げる。

私には本当にわからない。どうして先輩が新川くんに頭を下げなければならぬのか。実際、私は新川くんに奢ってもらおうとも思っていないし、先輩の分は呼び出した私が払うつもりでいる。

ましてや先輩に、マジかよ、と見られる謂れもない筈なのに――

「マジかよ。オレの後輩鈍すぎ……」

言葉にされた。しかも余計な一言を付け加えられて。

本当に意味がわからない。

「……まあいいや。もう注文してんのか？」

「私はまだ。それよりも座ったら？」

ポンポン、と私は空いている隣の椅子を軽く叩いた。先輩も軽く頷いて応じ席に座る。

それから注文しようとメニュー表を見ながら先輩は口を開いた。

「それで、これはどういう状況なんだ？」

「どういうこと？」

「オマエが誰かの誘いに乗るって珍しいからな。聞いていた話しと違いうみたいだし？」

そこまで言うと、先輩は新川くんに視線を送る。

聞いていた話しとは、私の口にした単語のことを言っているのだろう。それは『トラブル』という単語。それを直接口にしないで、聞いていた話しと言葉を濁したのは、きっと新川くんに気を使つてのことだろう。

そこまで言う途端に申し訳なくなってくる。

もちろん、先輩に対してだ。突然の呼び出しだ、もしかしたら先輩だって用事があったかもしれないのに。それなのにも関わらず、こう

して来てくれた。

嬉しくもある反面、どうしても申し訳ない気持ちにもなる。

「……ごめんなさい。何か用事でもあった？」

「問題ねえよ。妹の祝勝会は夜だしな。丁度暇してたところだ」
「それは良かった」

ホツと思わず胸をなでおろす。

最悪、先輩に迷惑をかけたわけではないようだ。いや、私のワガママに付き合ってくれたのだから、結果として迷惑なのかもしれない。間違いなく迷惑だ。

だが先輩はそんな私の頭を軽く小突いて。

「別に迷惑じゃねえから、んな顔すんなアホ」

「……私、どんな顔してた？」

「泣きそうな情けねえ顔」

「……そんな顔してないわよ」

思わず私は明後日の方向へと顔を背けた。

照れたからではない。情けない顔を見せて、先輩に悟らせないためのその場しのぎの緊急回避だ。

「新川君はどうやって朝田を誘い出したんだ？」

「えっ、どういうことですか？」

「いや、コイツが他人とお茶するとか記憶にないもんだからさ」

人をコミュ障みたいに。

間違いではない。間違いではないが、考えてみれば私は他人とは話しは出来る。その時点で私はコミュ障とは違うはずだ。ただ他人が煩わしいだけ、それだけだ。

「朝田さんは僕を助けてくれたんです。そのお礼に……」
「助けた？」

意外そうに先輩が私を見る。
対して新川くんは一度頷いて。

「僕が絡まれているとき助けてくれたんです」
「だから誤解だつてば」

何度行つたかわからないやり取り。

新川くんも曲げるつもりもないのと同じように、私もそこは譲るつもりはない。

私が誰かを助けるなんて出来るわけがない。

助けるなんて選択肢は、強い人間が選択できる特権のようなもの。

私程度の人間が選ぶ権利すらない。そういうのは強い人、それこそ――

――先輩のような人間にだけ与えられるモノ。

そして先輩といえば。

「へえ。朝田が助けたのか……」

感慨深そうに、懐かしむように、どこか嬉しそうに、満足気に呟いていた。

だから、誤解だつてば――。

「茅場さん、でいいんですよね？」

それから私と先輩は注文して、少しばかり談笑していると、新川くんがそんな事を口にしていた。

先輩は少しだけ首をかしげる。

恐らく自分の苗字を知っていることに疑問を抱いているのだろう。しかし直ぐに納得していた。

“先輩のことを話した”

私の言葉を思い出したようだ。

「ああ、いいよ。どうしたんだ？」

「朝田さんの先輩ってことは、中学のとき一緒だったんですか？」

「いいや、中学校は別だよ。小学校からの付き合いだよな？」

話しを急に振られた私は頷くことしか出来なかった。

「小学生のときの朝田さんってどんな感じだったんですか？」

「あんま今と変わらないな。そう言えば、この頃からメガネかけるようになったよなオマエ」

「何よ、似合わないってどういうの?」

「バカこのオマエ。グツド、^{メガネ}オマエって本当に似合うよな」

真顔で、私の両肩に両手を置いて、先輩はそう言い切る。
自分でもわかる。

今の私は顔を真っ赤にさせていることだろう。

他人が聴いたらどうかかわからないが、先輩のこの言葉は最大の褒め言葉であることを私は知っている。

メガネが似合う。それはつまり、先輩の好みドンピシャということに他ならないのだ。普段からメガネをかけて身体に馴染ませる。所謂『眼鏡慣れ』してきた甲斐があったというもの。

「そう言えば、茅場さんの高校って……」

「あー、高校っつーか……」

どこかバツの悪そうに、先輩は言い淀む。

高校、それは通う学校。先輩の通う学校は、私達の通うような一般的な学校とは違う。とある世界に閉じ込められた者達だけが、通うことの出来る学校。私の想像することが出来ない“地獄”を経験した人たちが通っている学校。

それが先輩の通っている帰還者学校と呼ばれる学校だ。

「まあ、帰還者学校だな」

「やっぱり！ S A O 帰還者サブバイパーなんですねっ！」

「……そんな感じかな」

キラキラした眼で、尊敬するような眼差しで、新川くんは先輩を見つめる。

対して先輩といえは、やはり居心地悪そうに、正面から目を逸らさずに受け止めていた。

「僕の兄も S A O 帰還者サブバイパーなんですよ！」

「へえ、そうなのか。兄貴も帰還者学校にいんの？」

「いいえ、兄は通ってませんね。何か行きたくないみたいですよ」

「……人それぞれだしな。中には行かない奴も居るわな」

特に気する様子もなく、先輩は一度頷いて納得する。

「茅場さんは今も V R M M O やってるんですか？」

「……ん、嗜む程度には」

「嘘つき」

ボソツ、と思わず呟いてしまった。

直ぐに先輩は私に視線を向けて。

「どういう意味だ？」

「嗜む程度が、統一デュエルトーナメントベスト16なんてなれるわけないでしょ」

「オマエに言ったっけ？」

「聴いてないわよ。ネット中継を見ていただけ」

そう、先輩からは何も聴いてない。聴いてないが、見ていただけだ。先輩の家族である妹ちゃんから、先輩のプレイヤーネームを聞いて、ネットで行われていた中継を見ていただけ。

確かに先輩は負けた。

だが先輩は全力ではなかった、筈だ。

あの程度の人に先輩が負けるわけがない。先輩は誰よりも強い人でありヒーローなのだから。そんな人が有象無象に膝をつく訳がない。負けたのは全力ではなかった、もしくは調子が悪かったただけだ。だが先輩はそう思っていないようだ。

むしろ自分は負けて当たり前と言わんばかりの謙虚なのか弱気なのかわからない口調で。

「運が良かったただけだ。オレの実力にしては出来過ぎにも程がある」

「そうなの？ 私は先輩が一番強いって思ってるけど」

「……オマエさ、オレのこと買い被り過ぎてねえか？」

「いやいやいや、ベスト16ですよ？ 僕も見てましたけど、充分凄いですよー！」

両手を広げて興奮気味に新川くんが話す。

それはまるで、憧れの選手に出会ったかのような少年の反応だ。そういう反応するということは――。

「僕も茅場さんみたいに上手かったらなあ……」

「新川君もVRMMOやってんのか？」

「はい。下手ですけどね」

あはは、と乾いた笑みを浮かべる。
そんな新川くん先輩は何気ない口調で問いを投げた。

「どんなゲームやってんだ？」

「GGOってわかります？」

「知らないな。朝田は？」

「知らないわね」

というよりも、ゲーム全般興味がない。

とは言え、興味があるとすれば先輩がやっているゲームだろうか。

確かアルヴヘイム・オンラインという名前の筈。

剣と魔法のファンタジー的なジャンルで、可愛気のない私にはとても似合いそうにない分野であるが、先輩がプレイしているというだけで興味が尽きない。

今から少しだけ調べてみようか。なんて思いながら私は携帯を取り出そうとするも――。

「GGO。ガンゲイル・オンラインっていうんですけどね――」

次の瞬間、私の身体が強張った。

ある単語を聞いて、私は動きを――。

「――銃を使うんですよ」

――停止せざるを得なかった。

銃。銃火器。人を終わらせるために作られた道具。それは冷たく、重く、されど人の生命以上の重さがない凶器。

弾を込めて、照準を合わせて、引き金を引く。それだけで人の生命は簡単に終わらせることが出来る。

不味い。

そう思ったときには何もかもが遅かった。

脳内にある光景が思い浮かばれる。フラッシュバックのように、見たくないと思わず眼を瞑るが関係なく、その光景を何度も繰り返されていく。

小さな室内で、悲鳴が連続で起こり、怒声染みた男の声が木霊し、殺意にも似た感情を男に向けている自分が、銃を手にし発泡する。それを何度も思い出し、何度も繰り返し、何度も見せつけられる。

叫び声を上げる男は血の海に倒れ、恨めしそうな顔で私を見つめていた。それと私を見つめる母の怯えきった眼。

罵られる。親戚は化物を見るような眼で、通っていた小学校では迫害され、転校してもそれは変わらなかった。蹴られ、殴られ、背中を突き飛ばされ、誰もが私を痛みつける。正義の味方達が、人殺しの悪者を罰していく。

違う、そんなつもりじゃなかった。殺すつもりなんてなかった、守りたかっただけなのに、こんな筈じゃなかったのに――。

身体が震えて、呼吸も出来ず、胃が激しく収縮するのを感じる。

味方なんていない。

この世界で私だけが悪者で、罰する人たちは正義の味方なのだろう。

私はそれだけのことをした。人の生命を奪うということは、そういうことだ。味方であると思っていた人達は私を攻め、禁忌を犯した人間を絶対に許しはしない。

だがそれでも――。

「――おい」

「えっ」

顔を上げる。

気付けば、先輩は私の手を握りしめて、心配そうに私の顔を覗き込

んでいた。

そうだ。

それでも、私の周りは敵だらけでも、この人だけは味方であった。周りの人間が私を敵だ、化物だ、糾弾するばかりだったのに、この人だけは違った。世界中の人間が敵になっても、この人だけは味方してくれた。

自分が傷ついても、私へ手を伸ばし続けて、不器用だったけど優しく接してくれた。化物ではなく、人としてちゃんと向き合ってたしてくれた。

銃という単語だけで連想しこのザマ。情けないし、滑稽極まりない。

だけど大丈夫だ。私は先輩さえいてくれれば、何もいらぬし、何も必要としていない。彼という光があれば、私はこの世界を生きている。

「……ええ、大丈夫」

だから、隠し通さなければならない。

「ありがとう、先輩」

私殺人殺しであるということ。

それでもしなければ、先輩にバレてしまえば、きっと彼も、敵になつてしまうのだから――。

第14話 懐かしきダイシーカフエ

——この程度の修羅場、**彼**は幾多も体験している——

それこそ死にかけるのは日常茶飯事であつたし、無傷で事が終わることもなかった。身体の一部が欠損した回数など数え切れない。死んだほうが楽になれるような苦痛も何度となく味わつてきた。

幾多もの修羅場を経験し、それでも**彼**は生き残つてきた。

どうしてそこまで自分に苦痛を課すのか。それは単純な理由で、何よりも**彼**らしいものであつた。

簡単なことだ。

彼は誰よりも、何よりも、自分自身という存在を、反吐が出るほど嫌悪している。だからこそだろうか。**彼**の中では自分という存在を勘定にいれていない。自分の身を投げ出し、自体が好転するのなら平気で**彼**は迷わず己を差し出す。その結果が自らの決定的な破滅になるうが構うことはない。生きているといふ当たり前の行為だろうが、自分自身に向けられた憎悪の方が勝る。

自己否定の権化、燃え尽きる程の破滅願望を抱き、生という地獄の苦痛を味わう。それこそが**彼**という人間であつた。

そんな人間だ。

修羅場に身を置くなど当然のことだ。誰よりも憎んでいるからこそ、誰よりも辛い状況下に身を置く。

常人では理解が出来ない闇を、**彼**は抱えている。こんなもの溜め込んでいるのなら、いつそのこと周囲に撒き散らしたほうが楽になれるだろう。自分勝手に他人を傷つけて、勝手気ままに何もかもを奪い、本能のまま獣の如く振る舞つた方が、楽だというものだ。

しかし**彼**は是としなかつた。

それはありえない、と。自分が血迷つてもそれだけは許容出来ない**と彼の理性が、本能を叩き潰す。**

自分というしようもない人間は、大切な者達の犠牲の上で存在

している。ならば自分もその者達に報いなければならない。『彼』は本気でそう思っていた。

だからこそ、より辛い地獄に、身を置こうとする。

今では『彼』の周囲の影響のおかげか薄まっているものの、根本的な部分は未だに濃いままだ。果てしない自己嫌悪は心の内に、燻っているものの火種が出来れば簡単に燃え盛ってしまう危険な状態。

「……」

そんな『彼』がいるのは、とある部屋の一室。

背筋を伸ばし、堂々とした様子で、椅子に座り何かを待っていた。だが不思議と穏やかなもの。慌てる様子もなく、あるがままの状態を受け入れている。

この程度の修羅場は何度も経験している。

あとは余すことなく自分の能力を示すことだけ。簡単なことだ、『彼』にとって何度も行ってきた行為でしかない。

ここに至るまで情報に穴はなし。相手がどのようなモノを求めているか理解し、それに対する手札も揃えた。あとはカードの切り方を間違えなければ自ずと結果はついてくる。

それでも『彼』に油断や慢心、驕りすらも見えなかった。

表面上はあくまで謙虚で、腹黒さは悟られないよう幾重にも仮面を被る。

そうやって切り抜けてきた。

どんな状況下でも、それを一つの武器として上手く使いこなし、何事も勝ち取ってきた。

ならば今回も例外ではない。その両の手から溢れることなく、充分過ぎる戦果を上げるに違いないのだ。それだけの努力をしてきた。充分過ぎる努力は自信を生み、自身は成功へと繋がっていく。

だとしたら今回も成功は約束されている。後は――。

「次の方、どうぞ」

——呼ばれるだけ。

“彼”は「はいっ！」と朗々とした口調で立ち上がる。

その表情は静かな面持ちから、柔和な笑みへと作り変えて、歩を進める。

最早これより先は戦場だ。

勝つか、負けるか。全てを手に入れるか、それとも全てを失うか。

“彼”次第と言えるだろう。

面白い、と。不敵な笑みを一瞬だけ張り付かせ、直ぐに人の良い柔らかい表情へと変える。

ドアの前に立つ。

そこは外界を隔てる壁の前に立ち、ドアを軽く叩き——。

「——失礼します」

向こう側から声が聞こえる。

それが、闘争の開始の、合図であった——。

.....
.....
.....

2025年6月4日 PM 17:26
ダイショーカフェ

「あー……あー……」

その声、亡者の怨嗟の如く。

ダイシーカフェのカウンター席にて一人の亡者こと、茅場優希が顔を突っ伏して座っていた。

どこか彼らしくない行動。だらしなく、どこか情けない姿。他人には絶対に見せない姿を、ダイシーカフェにて遺憾無く晒していた。

見てみれば、店内には客として居るのは優希しかおらず、あとはダイシーカフェのマスターであるアンドリユー・ギルバート・ミルズしかいなかった。

アンドリユーがいるのは正に特等席。カウンター越しのキッチンから、優希の情けない姿を双眸にしっかりと収め、優希の醜態が面白いのか笑みすらも浮かべている。

これでもかと言うくらい気持ちのいい笑み。

アンドリユーはそのままの調子で問いを投げた。

「その様子だとダメだったのか？」

「見りゃわかんだろ。お察しの通りだよ……」

クソがつ、と顔を突っ伏したまま応える優希に、アンドリユーは気にすることなく続けた。

彼の口の悪さはよく知っている。何よりも最初に敬語を使っていたのをやめるように言ったのはアンドリユー本人だ。今更その程度の口の悪さなど気にすることもないのだろう。

「まあ、わかってて聞いたんだけどな」

「性格最悪野郎め。そんなにヒトの失敗が楽しいか」

「滅茶苦茶面白い。おっと、勘違いするなよ？ 他人の失敗は残念だなと思う。お前の失敗だから面白いんだ」

「この店、潰れねえかなあ……」

ボソツ、と暴言の呟きもアンドリユーにとってはどこに吹く風。全く気にすることなく彼はニヤリと笑みを浮かべて。

「残念。ここから込み出すんだなウチは。というか、客がない時間帯見計らって来たんだろ?」

「まあ、そうだけど……」

ここで優希は身体を起こし、辺りを見渡す。

木材で作られた内装で、店内の角にはジュークボックスが置かれており、いい意味で手作り感のある内装で纏められていた。とても落ち着いた着きがあり、ありとあらゆる客層に対応出来るような店内に、正直な話し優希は気に入っている。

それをアンドリユー自身に伝えればまだ可愛げはあるだろうが、生憎と茅場優希という人間は捻くれ者だ。そんなことアンドリユーはおろか、誰にも言わないことだろう。

彼の発する言葉も、彼らしい性根が曲がっているモノであった。

「こんなに寂れてんのかなあ」

「——って割に、頻繁に顔出すよなお前?」

間髪入れずにツツコミをアンドリユーはいれる。

長い付き合いだ。彼を良く知る人物には大きく劣るが、アンドリユーだって何となく優希の心境を理解できるというもの。芝居がかったような大げさな仕草で、大きく肩を竦めて「やれやれ」といった調子で続けた。

「本当に素直じゃない奴だよ。もう少し可愛げないもんかねえ?」

「おい、やめてくんない? その何でもお見通しって薄ら寒い眼えすんの」

「おっと、俺じゃ役者不足か。明日奈呼ぶか?」

「呼ばんでいい。それよりも、コーヒーくらい出せよ」

優希は、チツ、と忌々しげに舌打ちをしながら、吐き捨てるように言う。

これ以上茶化しては拗ね始める、と絶妙な距離感を保ちアンドリユーは一度領いて。

「ミルクと砂糖どうする?」

「いらねえよ。滅茶苦茶強いコーヒー淹れてくれ。今日は酔いたい気分だ」

「どんなコーヒーだよ……」

無茶振りとも言える注文に、アンドリユーは思わず苦笑を浮かべる。

それからは早かった。まるで優希が来店することをわかっていたように、下準備を終えている熱されたコーヒーがカップに淹れられる。

流れるような無駄のない作業、滞りのない手際の良さ。それだけでアンドリユーの料理の腕がどれほどのものかわかるというもの。レベルは間違いなく高い。さすが店舗を構えるだけはある。

そつと差し出し。

「どうぞ、コーヒーです」

「ん」

こういうときだけ店員になんのかよ。といった、抗議の声を飲み込み優希はカップに手を伸ばし、一口だけ含み味わい、そして飲み込んだ。

「悪くない」

「素直に美味いって言えよ」

「うるせえ。悪くないもんは悪くないんだよ」

フンっ、とどこか拗ねるような仕草でコーヒを飲む優希。

いつも眉間に皺が寄っている彼からは想像出来ない、どこか子供じみた行動だ。それだけ優希はアンドリユーに対して年下として接しているのだろう。

最初、敬語使ってた頃に比べたらだいぶ打ち解けて来たもんだ。と昔を思い出しながらアンドリユーは問いを投げた。

「それで、なんでダメだったんだ？」

「……なにが？」

「面接だよ面接。行ってきてダメだったんだろ？」

面接。

その単語を聞いて、優希の動きが一瞬だけぎこちないものに変わる。

そう、面接。

それこそが先程、優希が体験してきた修羅場であり、今日の戦場であつた。

学生のおいての面接は就職活動か、バイトくらいのものだ。そして優希が行ってきたのは後者。バイト面接に他ならない。

物事には絶対はない。どれだけ万全で臨もうが、準備を怠らず挑もうが、望み通りに行かないこともある。

今回も優希が面接に落ちたのも同じ理由であれば、何の疑問もない。たまたま、間が悪いことに、バイト先が茅場優希という人材を求めていなかったかもしれない。

だからこそアンドリユーは疑問に思う。

そんなこと優希も重々承知している筈だ。落ちる時は落ちる。完璧に外面を取り繕い、他人が見ても見破れない演技をし、口上手く立ち回っても落ちる時は落ちるし、失敗する時は失敗するものだ。SAOに巻き込まれる前もバイトを掛け持ちしていた男だ、その程度のこととは理解しているだろう。

だというのに、優希の反応は違った。

わざわざ客層が少ない時間帯に訪れ、彼の幼馴染や義妹にも見せない醜態を、年上であるアンドリユーだからこそ晒している現状。

きつと何かがあったのだろう。しようがない、仕方ない。そうやって割り切れない何かがあるに違いない。

そしてアンドリユーの推理どおり。

「……」

優希は何か失態を犯してしまったようだ。

現にハツキリと彼は断言しない。

言い淀み、どういったものか言葉を選び、はたしてそれをアンドリユーに言つて良いものかどうか考える。

結論だけ言えば――。

「別に、何でもねえよ」

隠すことを選ぶ。

プイツと子供のように、不貞腐れながらそっぽを向く。

アンドリユーは思わず苦笑を混じりに。

「何かやらかしたんだなお前」

「うるせえよ迷探偵。根拠もないのに決めつけんじゃねえ」

「根拠はあるさ。普段は無駄に潔いお前さんが、今回ばかりはうだうだしてる。長い付き合いだ、明日奈じゃなくてもそれくらいわかるっつーの」

ニカツと気持ちのいい笑みを浮かべるアンドリユーに対して、優希の表情は変わらない。

どこか面白くなさそうに、見透かされているのが気に入らないと言わんばかりに顔を歪めて一言。

「絶対に言わねえ」

否。

「言わない」のではなく、「言えない」。

似たような言葉であるが、その意味は全く違う。

何故、面接に落ちてしまったのか。

そんなもの、優希が一番理解していた。こうして彼が煮え切らない態度も、自分を落とした対象に向けられたものではなく、ただ自分に向けられた憤りである。つまるところの、いつも通りの自己嫌悪。数時間前の自分を、右ストレートでぶっ飛ばしたいほど、己に腸が煮えくり返っていた。

別に面接内容に問題はない。

完璧なまでに猫を被り、本心を隠し通し、好青年を演じてきた。これでもかというくらい上手く行っていたし、面接担当者からは明日から来てほしいとまで言われていた。

なのに落ちた。原因があるとすれば、面接担当者とのその後のやり取りだろう。

これから茅場優希という少年はバイトとなる。その事実が面接担当者の気が緩んだ原因なのだろう。

彼は言った。フランクな口調で、重ねて悪びれもなく、考えなしに口にしてしまった。それこそが――

―― S A Oとかいうゲームをやってたから、君が頭おかしい人間じゃないかって警戒していた――。

世間ではそういう認識もあることは、優希もわかっているつもりだ。

千差万別。共通の認識を持たず、ひとりひとりそれぞれの思考と思想があるのが人間だ。そうやって発展し、今日までに至ったのだから、彼のような認識を持っている人間も中にはいるだろう。

最初は優希も当たり障りない対応をしてきた。上司となる人間と構えてもしようがないと判断したからこそその振る舞いをしてきた。だが面接担当者の彼は気を良くしたのか止まることはない。

次々と、スラスラと、ストレスを発散するかの如く、関係のないS A O 帰還者^{サブイパー}さえも侮辱を始めた。

少年の幼馴染いわく、茅場優希は我慢ができない人間だ。おかしいと思えば見過ごすことなく指摘し、納得ができなければ否と唱える。となれば少年がブチギれるのも必然と言える。

S A O 帰還者^{サブイパー}の中には、口では言わないものの大切にしている仲間も存在する。まるでそれが、侮辱されたようで、馬鹿にされたようで、関係のない人間が口を出すなど声を荒げ、気付いた頃には何もかもが遅かった。二度と来るかこんな店、と吐き捨てて現在に至る。

聞こえようによつては美談になるのかもしれない。

仲間を侮辱され、我慢出来なかった。優希が苛立ったのは簡単に言ってしまうえばそんなところだ。捉える側によつては、仕方ないと慰められる対象となりえるのかもしれない。

だが優希は違った。

仕方ないと割り切ることも、次があると切り替える様子もない。

彼はひたすらに、自分自身の考えの浅さに苛立ちを募らせていた。

——言えるわけがねえ。

——こんなもん、責任を転換してるだけじゃねえか。

——オレがキレちまったのは、オレ一人の落ち度。

——そこにアイツらの入る余地なんざねえ。

——勝手にムカついて、勝手にイラついた。

——その程度の理由だ。

だからこそ、話さないのではなく、話せない。

あまりにも自分勝手に、身勝手に、人様に聞かせての良い失敗談ではないからこそ、優希は語らなかつた。

それから彼は、深くため息を吐く。

——アインクラッドの恐怖には戻らない。
——アインクラッドの恐怖にはなかった、茅場優希の強さを手に入る。

——上等な決意だ。

——だが結果が全く伴ってない。

——この程度の罵詈雑言すらも聞き流せねえなんざハナシにならねえ。

——全然成長してない、むしろ退化してるくらいだ。

——前のオレなら、聞き流してたってのに。

——強くなるどころじゃねえだろコレ。

——本当にぐだぐだ考えやがって……。

「ホント、最近のオレは悩んでばかりだ……」

その言葉は無意識のものだった。

もしかしたら呟いた本人ですら、呟いたことにすら気付いてないのかもしれない。

しかしアンドリユーはそんな無意識に、耳聴く反応して見せて不思議そうな顔で。

「悩むって悪いことなのか？」

「え……？」

目を丸くする優希に対して、アンドリユーは当然と言わんばかりの口調で。

「お前のような歳だと悩みなんて当たり前だ。むしろ悩まないで突き進んでた今までのお前がおかしいんだよ」

「そういう、ものか……？」

「そういうもんだよバカ」

断言されるもののまだ腑に落ちていないのか、いまいち納得してない優希に、アンドリユーは年長者としての意見を口にした。

「悩んで悩んで、間違っていないかおっかなびつくりの前に進めばいいのさ」

「仮にそれが、間違ってたらどうすんだよ」

「そりゃ止めてもらえばいいだけだろ。間違っても正してくれる連中が、優希の周りにはいるだろ？」

「……………」

思い浮かんだのは、いつの間にか心の中にいた面々。

ズカズカといくら拒否しても入り込んできて、いつの間にか“彼ら”は優希の中に居座っていた。失うのが辛いのなら、最初から持たなければいい。そう思っていたのに、しがらみだらけのコミュニティーが構築され、見渡してみれば優希は独りではなくなっていた。

自分のような底辺な人種に手を差し伸ばす、度し難いお人好し連中。それが“彼ら”であり、“彼女達”という存在であった。

「お前なことだ。頼るのは気が引けるって思ってたんだろ？」

「……………チツ」

凶星だったのか、小さく舌打ちを一度。

文字通り小さな抵抗をするも、アンドリユーには通じないようで続けて。

「良いんだよ頼って。頼るのも一つの強さだ。アイツらは喜んでお前を助けるし、もちろん俺やクラインも手を貸す」

「頼るのが強さなのか…………？」

「立派な強みさ。困ってるときに助けてくれる連中がいるとか、最強で無敵だろ？」

「でも助けられたばかりじゃいられねえだろ。成長もしねえし」
「そうかねえ？　少なくとも、お前は少しずつ成長していると思うがね」

「オレが成長してる……？」

ありえない、と優希は首を横に振る。

だがアンドリユーは力強く首を縦に振って、否定するように断じた。

「少なくとも、優希は今日の自分の振る舞いが良くないものだと思うたんだろ？」

「まあ、そうだけど」

「だったらそれを改めるだけだろ。そうやって失敗と反省を積み重ねて、ヒトつてのは成長していくもんだぜ？」

そう言つて、アンドリユーは笑みを浮かべた。

頼ることも強さ、そんなこと考えもしなかった。

何者かの負担になる。それは優希にとっては許し難いものだ。矜持、プライドといった話ではない。他人にそこまでしてもらおう資格、世話に値するほどの価値など自分にはないと思っていたから。

だが考えてみれば、優希のそんなつまらない自己否定ですら「彼ら」や「彼女達」にとって関係がなかった。助けたいから助け、放っておけないから手を伸ばす。その程度の理由で、「彼ら」や「彼女達」は優希に干渉し、追いつき、ついには優希の考えを改めさせるに至った。

そして次に優希が選択を誤ったものなら、再び止めるために立ち上がってくるだろう。

——オレもアイツらのように。

——何かを救う強さってヤツを。

——手に入れられるのか……？

答えなど、当然出ない。

当たり前だ。優希にとって何者かを守り救ったという認識はない。いつだって行動するのは自分のため。気に入らないという理由だけで拳を握り、剣を振るってきた。何かのために動いたことなど、優希にとっては一度たりともないのだから。

それが出来るのか。自分のような男が、何者かを救えるようになるのか。それはわからない。

だがやらねばならない。本当の意味で、茅場優希も胸を張って仲間だと言えるようになるには、「彼ら」や「彼女達」の領域にまで達しなければならぬ。

故にやるしかないのだ。自分だけ立ち止まっては行られない。置いてきぼりになるなどまっぴらごめんだ。停滞など一番自分に似つかわしくもない。目的地もわからない、だがそれでも歩を進める。それこそが茅場優希である筈なのだから。

「ドリュークン」

「ん？」

「勉強になった。ありがとう」

「気にすんな。子供を導くのが大人の役割つてもんだ。それに俺ならお前の悩みの一つを解消できるしな」

「それはどういう意味だ？」

簡単な話しき、とアンドリュウは呟き。

「優希。うちでバイトしないか？」

「はっ。」

.....

時刻 場所 不明

ムカつく。

一言で表せば、彼女の感情はそれであった。

自分にとって格下であった存在になめられ、屈辱を味わった。彼女にとってその程度の感情でしかない。格下なる存在がどのような思いを抱いていようが関係がない。自分本位で、自己中心的な感情、それが彼女を形成する人格である。

ならば次に彼女が起すのも短絡的思考そのもの。

自分が味わった屈辱を、どうやってやり返すか。これのみに尽きる。

愚かであり浅はか。

警告されたにもかかわらず、彼女はまったく気付いていなかった。

「もしもし」

愚かな選択。

虎の尾を踏むような真似をしていることに、彼女は気付いていない。

それは手段なのではない。ただの自殺行為。自分がどうなるのかまったく考えもついていない。

彼女は通話先の相手に、楽しげな口調で言った。

「あんたさあ。朝田詩乃ってヤツ知ってるよねえ？」

第15話　ダイシーカフェの店員　優希

2025年6月5日　PM17:10

ダイシーカフェ

「——そんなわけでみんな、仲良くしてあげてね！」

笑顔で朗々と言うと、ダイシーカフェの店主であるアンドリユー・ギルバート・ミルズはガハハと笑いながら一人の少年の背中を叩いた。

叩いたと言っても、アンドリユーは軽めに叩いたつもりだ。しかし力加減は共通したものではない。筋骨隆々な体躯であるアンドリユーは軽めで叩いたつもりでも、叩かれた少年が感じる衝撃は凄まじかったようで、三度ほど咳き込んで少年はやり返すことはなく恨めしそうに抗議の声を上げる。

「紹介してくれるのはありがたいんですけど、叩く必要があったんですかね？」

「おいおい、俺は軽く叩いたつもりだぜ？　鍛え方が足りないんじゃないか？」

「……みんながみんな、マスターみたいなマッスルってわけじゃないから、もうちよつと力加減考えてくれませんか？」

呆れた口調で言う少年に、アンドリユーはどこか怪訝な顔つきになる。

力加減を考えてほしい、そう言われたからではない。それはもつと簡単な理由で、少年自身に向けられた疑問であった。

「なあ、優希」

「はっ？」

「どうして敬語使ってた？」

「何でって……」

ダイシーカフェの店員なのか少年——茅場優希はウェイター、巻で言うところのギャルソンの格好に身を包んでいる。

そしていまいちアンドリュウの言葉の真意を推し量れていないのか、不思議そうに首を傾げて。

「俺の敬語、何か変でした？」

「いや変じゃない。変じゃないがそもそもが変というか。お前が敬語を使うのは想像できるが、俺にお前が敬語を使うのが妙というか」

「どういうことツスカね？」

「とりあえず、いったん敬語やめね？」

哀願にも似た提案に、優希は渋々と言った調子で頷いて、雰囲気ガラリと変える。

具体的に言うとう上司を立てる部下という立場から、長年見知っている茅場優希にある特有の刺々しい雰囲気が変わり。

「つーかよお、アンタに敬語を使うのは当たり前じゃん？」

「なんでさ」

「こっちは雇われてる方、そっちは雇ってる方。こっちは下で、そっちが上。立場つてもんがあんだろ」

「別に俺はいつもどおりでも構わないぞ？」

「こっちが構うわ。働かせてもらう以上、最低限のケジメをつけるのが筋つてもんだ。付き合いがあるんだから尚の事。その辺りはオレも妥協するつもりはねえぞ？」

普段と変わらない態度を是とするアンドリュウ、普段と変わらないことを否と唱える優希。

恐らく二人の主張は平行線を辿る一方だろう。とは言え、アンド

リユーとしても優希の言い分は理解出来ない訳ではない。性格は捻くれ、性根は歪み、目つきは悪いとはいえ、変なところで律儀なのが茅場優希という人間だ。敬語を使うのは立場という意味でもあるが、その裏では雇ってくれたアンドリユーの顔に泥を塗らない為のことでもあるのだろう。店員が店主にタメ口というのは、第三者から見ても店主が侮られているようにしか見えない。しかも相手は学生、本来であれば決して見る事が出来ない絵面になること間違いない。

加えて、飲食店は噂も大事な要素となってくる。店主が子供に侮られているという噂が広まっては、柄の悪い客がダイシーカフェを溜まり場にする可能性すらある。

それが優希には我慢できなかった。

自分の家、なんて厚かましく言うつもりはない。

しかしこの場所は、ダイシーカフェは、世話になった人物の大切な店だ。見知らぬ、預かり知らぬ連中に、踏み荒らされるなど、優希にとってそれだけは許容が出来ない。

優希は多くを語らない。彼の内にそんな考えがあるなど、今ダイシーカフェにいる人達にはわからないことだ。

その時。

「良い考えです」

パチパチ、と。

小さな手で拍手をする少女が一人。

小学生低学年ほどの幼い容姿で、背丈もその中でも小さな部類と言えるくらい的身長。フランス人形を連想させる整った容姿に、綺麗な腰辺りまで伸ばされた長い金髪、綺麗な翠色の双眸。

少女もまた、優希と同じようなギャルソンの小さなウエイター服に身を包んでいる。恐らくは特注品。少女の背丈に合わせ、特別に作られたオーダーメイドであることがわかる。

このダイシーカフェには優希やアンドリユーの他に少女が一人いた。

優希はまだわかる。

ギャルソンのウエイター服を着ているのだから、彼がここで働く従業員であることは安易に想像が出来るというもの。

だが少女はどうしているのか。

ウエイター服を着ているのだから少女も店員なのかもしれないが、それにしても絶望的なまでに幼い。労働基準法を敷いている日本としては、少女のような従業員の存在など許しはしないだろう。

しかし少女だけは特別である。

何故なら――。

「ダディは甘すぎると思います。私もゆーきに賛成です」

ジロリ、と可愛らしく見上げながら少女はアンドリユーを目線で非難した。

ダディ。つまりはお父さん、そしてパパの意味を持つ言葉。

その名の通り、少女はアンドリユーの娘――レベツカである。三年ほど前。

つまりSAO事件の前まではこんな性格ではなかった。少なくとも優希の中でのレベツカは、まだまだ甘えがかりの性格で、変に語彙力があり、明日奈に懐き、自分に喧嘩腰であった。敬語なんて使えなかったし、しっかりしている性格ではなかった、と優希は認識している。

少女が変わったのは、きつとSAO事件が原因なのだろう。

ずっと意識が戻らない父、それを受け止めながら店を切り盛りする母。それを見て、少女は意識の变革をもたらしたのだろう。

父は今も戦っている、母もそんな父を待ち続けている。ならば自分もしっかりしなければならぬ、と少女ながら決意をしたに違いない。

そうでもなければ、小学生低学年で年上を敬うことを覚え、大人じみた判断など出来るわけがない。

以前の少女ならば、アンドリユーに賛同し特に考えることなく

「ゆーきが悪いわ！ 謝って！ ダディに謝って！」と騒いでいたに違いないのだ。

今では少女もすっかりした大人。だがされど、子供であることは変わりないよう。

「でも待って下さい」

「……どうしました、センパイ？」

くるり、と踵を返して言うレベツカに、優希は嫌な予感がしながらも応じた。もちろんその際、敬語も忘れない。レベツカと優希、両者の歳の差は大きなモノである。本来であれば優希が上で、レベツカが下である。

だが優希は違った。歳下とは言え、まだ小学生とは言え、レベツカもお手伝いとしてダイシーカフェを切り盛りしていた中心人物の一人。となれば自分の先輩になるのだから、それは彼の基準を考えれば敬語を使う対象となる。

だがレベツカにそれは通じない。

少女はすねた調子で、自分の髪を片手で弄びながら。

「私に敬語は使わないで下さいです」

「……どうして？」

「何か、や、です。せっかくゆーきとまた遊べるようになったのに、他人行儀みたいになるから、やです……」

「仕事ただけでもか？」

「仕事ただけでもです。これは先輩命令です。ゆーきは私と話しているときは敬語禁止です」

レベツカは命令と言った。

その割にその表情はどこか自信なさげで、優希の表情を恐る恐るといった調子で見ている。

拒否することも簡単だ。

自分の信条に反すると、レベツカの提案を突っぱねるのは簡単なことだ。

「……わかったよ」

簡単なことであるが、優希にはそれが出来ないようだ。

幼い頃から父に「女、子供には絶対に優しくしろ」と叩き込まれてきた。それを破るということは、父の教えに背く行為でしかなく、優希にとつてはそれが出来そうにない。

ならば、敬語を使うなどというのならそれい従うしかなく、せめても
の抵抗ということもあつて口の悪さで持つて悪態をつくしかない。

「これでいいんだろ？ ホント融通の利かないガキになったよなオマエ」

「——っ！ ええ、ええ！ そんなことを言っていられるのも今のうちです。これから先輩風を吹かしてビシビシ行きますです！
先輩風がびゅーびゅーです。びゅーびゅー」

「吹かせていいもんじゃねえだろそれ。わかつてて使つてんの？」
「それじゃ俺にも敬語はなしつてことで——」

便乗しようとアンドリューは試みるも、それは許されなかったようだ。

優希は瞬時に反応し、いいや、と無情にも首を横に振つて。

「アンタは別。ドリユーくんには絶対に敬語を使うし、こればかりは譲らない。何度も言つたよなオレ？」

「でもなあ、レヴィは良くて俺は駄目つて！」

「別にいいだろ。何か不都合でもあんのかよ？」

「ある！ 壁を感じるだろ！」

「知らねえよ。悪いけどさ、諦めてくれや」

.....

2025年6月5日 PM 21:20
学生寮 茅場兄妹の一室

『——それで先輩はどうしたの?』

数時間の研修という名の体験従業員を終えて、優希は帰路につき、自分の住まう学生寮に戻ってきた。

そして夕飯を食べ、義妹と談笑し、彼女は風呂へ、自分は居間でテレビを見ていたところ後輩である朝田詩乃から連絡が来て現在に至る。

優希はテレビを見ながら、片手にスマートフォンを持ち耳に宛てがい、詩乃と通話していた。

彼女にはぎっくりであるものの、今日何が起こったか世間話程度の内容を話している。

それはもちろん、ミルズ親子が敬語を使うのを良しとしなかった、ということも含まれている。

詩乃の問いはそのことなのだろう。

ダイシーカフェに働くことになり、結局のところ敬語はやめたのかという問いを、彼女はどこか楽しげに聞いてきていた。

「敬語のことか?」

『そうそう。どうするの?』

「続行だよ。当たり前だろ」

『それは、ミルズさんが可哀想ね』

電話越しでクスクス笑みを零す詩乃に、優希はため息を深く吐き出して。

「ンなわけあるか。いい大人が寂しいって……」

『可愛いじゃない。レヴィも元氣そうね』

「なに、オマエらつて仲良いのか？」

『先輩のお見舞いに行つてた時、何度か顔を合わせてたから。言つてなかつた？』

「初耳」

なるほど、言われてみれば確かに、と優希は納得した。

レベツカがどこか冷静に大人ぶるようになり誰かに似ているように思えた。きつとレベツカの中での目指すべき成長対象が朝田詩乃であつたのだろう。

悪くない着眼点である。

傍から見たら、詩乃は大人しく、知的で、物事を俯瞰的に見て、本が似合う落ち着いた女性に見える。

憧れ、というのだろう。頻繁に顔を合わせて、甲斐甲斐しく優希の様子を見に来た詩乃に、レベツカは母と通じるものがあると認識し、憧れの対象としたのだろう。

しかし優希はそんな内情を知らない。

自身の後輩が頻繁に自分の様子を見に来ていたことを知らない彼は、軽い気持ちで受け流して。

「オマエはどうなんだ？」

『どうって？』

「新川くんとはアレから遊んでんのか？」

ああ、と詩乃は呟いて。

『遊んでないわね』

「そうか」

『ええ。学校には来てるみたいだけどね』

「話してもいいのよ……」

『別に話す必要もないしね』

「そっか……」

含みのない言い分に、優希も同情をする。

異性を誘う。それはつまり、少なからず想っているに違いないと優

希は分析する。

好き、もしくは気になる対象。

どちらかであることは確かであるし、漸く誘い出した場に男を呼び出した現実。それは新川に多大なダメージを与えたことだろう。

意図していなかったとは、人の恋路を邪魔した可能性がある事実に、優希が罪悪感を感じてしまうのも無理はない。とはいえ、詩乃に何かを言うつもりもない。どうして彼女がここまで用心深くなったのは優希もわかつているし、間違いではないことも理解している。

だからこそそのジレンマ。

罪悪感を感じ、しかし何も言えない自分にヤキモキする。

『あつ、そういえば』

「どうした？」

『新川くんと私、同じクラスだったみたいなの。知らなかったのよね』

「おい、朝田」

『なに？』

「それ、絶対に本人には言うなよ」

『どうして？』

そんなもの決まっている。意中の女性に、興味を持たれていなかった

た。だから詩乃は新川がどこのクラスに属していたか知らなかったし、興味もなかったのだろう。

それを本人の口から言われたとなると、新川への心境は想像を絶するということもの。

しかしそれを説明できない。

元来、優希は口が上手い人間ではない。寧ろ口下手で口も悪い。だからこそ行動で示し、今日まで生きてきた。そんな男が急に口上手く、悟らせれる訳がない。

さてどうしたものか、と考えていると。

「にーちゃん！ 風呂次良いよー！ でもその前にボクの髪乾かして〜！」

「ちよつと待ってろー！」

『……今の妹ちゃん？』

「ああ。悪い、ちよつとかけ直していいか？」

『ううん、大丈夫。今日はもういいから、妹ちゃんを見てあげて？』

『……あつそうだ、ちよつと聞いても良い？』

「どうした？」

『いつまで研修なの？』

「来週から従業員で働くことになる、と思う」

『それじゃ私もその辺りに遊びに行っても良い？』

優希は、そんなこと聞くまでもないと言わんばかりに答えた。

気怠そうに、忌々しそうに、だがどこか嬉しそうな口調で。

「んなこといちいち聞くな。——大歓迎だよ、ばか」

第16話 オレが長髪にしている理由

2025年6月9日 PM17:10

帰還者学校 中庭

「あー……！」

ベンチに腰掛けて、青空を恨めしそうに見上げて、帰還者学校に通う生徒——茅場優希は唸り声を上げた。

着ている服は夏服。初夏にさしかかり衣替えをしたのだろう。半袖の帰還者学校指定のシャツを着こなし、学校指定のネクタイは巻いておらず、ワイシャツの第一ボタンを開け、どこか緩めている印象すら感じさせる。

緩めているというのは、服装だけではない。どうやら気も緩んでいくようだ。

それを証拠に、いつもの剣呑とした雰囲気は鳴りを潜め、どこかうんざりしたような、煩わしそうな面持ちで優希はひたすらに青い空を見上げて、太陽を一心不乱に睨みつける。

彼自身、子供染みた振る舞いであることは自覚しているし、このような憤りを募らせても無意味であることは理解しているつもりだ。

それでも声に出してしまった。態度に現れてしまった。感情の制御が利かないのだから仕方ないというもの。

——。それもこれも、茅場優希が何に不満をいだいているのかというところ——。

「あつ、やっぱりここにいた」

誰もが近寄りがたい状態にある優希に、気安く声を掛ける女子生徒が一人。

彼女もまた、帰還者学校指定の半袖を着ており、優希とは違い学校

指定のネクタイをキツチリ締めている。

優希の顔を見下ろすように覗き込む。

彼女は太陽に背を向ける形で立っていた。そのためか優希の顔には日陰が差し込まれることとなる。太陽を睨みつけ、眩しく細めていた優希の眼が、幾分マシな目つきとなるのも必然と言えよう。幾分とは言っても、目つきが悪いのは変わることない。

どうしてここにいいのか、自分がいることを知っていたのか。

そんな疑問が頭の中を掠めていくが、彼女にとっては意味を為さないのだろうと優希は結論付ける。どういうわけか、自分の行動範囲が読まれている節がある。無論、一箇所に残まっていた記憶はない。ときに食堂、ときに屋上、教室から中庭へと、優希は転々としている。

だと言うのに、読まれている現状。付き合いが長いのも考えものである。後にも先にも、自分は彼女に行動を読まれ続けるのだろう。それが何となく優希は気に入らない。

付き合いが長い幼馴染が相手とは言え、何でもかんでも熟知していると思われるのは、何となく癪に障るのは、きっと彼の小さな器が原因なのは間違いない。

なのでこうして、

「何しに来たんだ？」

子供のような反応をしてしまうのもまた必然と言える。

それはつまり、ふてくされる態度。悪い目つきは細まり、ぶつくと拗ねるように、愛想がない物言いと問いを投げた。

対して彼女は別に気分を害する様子もない。

むしろ優希のそんな子供染みた仕返しを受け止め、それでいて彼を慈愛に満ちた微笑みで迎える。器が広い、というのは彼女のことを言うのだろう。

とても十代とは思えない器を見せつける少女————結城明日奈はクスクスと笑みを浮かべて問うた。

「用がないと来ちゃいけないの?」

彼女と優希の付き合いは長い。それこそ十数年の付き合いであり、世間一般的に言うところの幼馴染ということになる。

だからだろうか。先程の自分のした質問、その答えが何となくであるがわかってしまう。茅場優希は自他ともに認める捻くれ者であるのであるのなら――

「ああ。クソ迷惑だよ」

――捻くれているモノに決まっている。

他人が聞けば棘のある言葉だ。

だが明日奈はどうやら違った捉え方をしているようだ。それを証拠に、彼女は不快に顔を歪めることもなく、眉を顰めて優希を睨みつけるでもなく。

「それじゃ大丈夫だよ。隣座っても良い?」

むしろ想定通りというかのように、優希の調子確かめ上々であることを確認し満足するように、明日奈の笑みはますます深まってく。

そして気にすることなく、優希の座っているベンチの隣を指差して尋ねてくる始末。

優希がため息を深く吐くのも無理はない。

先程、自分は迷惑であると言った。もちろんそれは本心ではない。だが歯牙にもかけないとは、どういうことなのだろうか。少しは氣を使っても罰は当たらないと思うのは、仕方ないことだろう。

「いや、少しはめげろよ」

「大丈夫、しよげないから」

「泣き咽べばか」

吐き捨てるように言うと、優希は何だかんだ言っただけ横にズレた。

無論、それは少しでも明日奈が座りやすいようにスペースを確保するための行為。

文句を言いつつ、結局自らが折れる辺り、つくづく幼馴染に甘いようだ。

とは言っても、優希も自覚している。これは幼い頃から染み付いた悪癖、それを自覚しつつも対抗策も何も見出だせない辺り筋金入りである。

「……ンで、何しに来たわけ?」

もはや天敵となりつつある幼馴染を横目で捉えながら、優希は問いを投げた。

「えーっと、特に用はないんだけどね。ダルそうにしてたから気になっちゃって……」

「あー、それか」

自覚はあった。

ダルそう。それは比喻などではなく、本当にダルいのだ。別に風邪などではない。むしろ健康そのものであり、寒気など感じているわけでもない。

ならば何が理由か。それは単純であり、明快な話しであった。

「頭が熱い」

「頭? えっ、風邪?」

思わず、明日奈は目を見開く。

長年見知っている優希の様子から、風邪を引いている様子は見られ

ない。他人から見たら分かりづらい性格と在り方であるが、明日奈から見たら一目瞭然。その眼力と長年の経験が告げている。今の優希は健康体そのものであると。

だと言うのに、頭が熱いと彼が言った。自分の診断に間違いはない、そう断言出来るほど明日奈は優希を見てきた。ならば優希の頭が熱いとはどういうことなのだろうか。

優希は首を振る。

風邪ではない、と否定してもう一度繰り返す。

「頭が、熱い」

「あー……」

そこで何となく明日奈は察した。

現在、季節は初夏に差し掛かっている。となれば気温も徐々に上がってきているというもの。それだけであれば毎年のこと、馴れたもの——とまではいかないが何となく“こんなもんか”と身体も馴れてくる。

しかし、優希にとっては未知の領域。

去年の優希と現在の優希。まるで違う。それは髪の毛の長さである。

これまで優希は髪を伸ばしてきたことなどない。いつも長くなれば自分で切ってきた。床屋など行ったこともないし、美容室など切つてのほか。他人に髪を切ってもらって金を払うのなら、自分で切つてタダで済ませる。なんとも貧乏性の彼らしい理由である。

だが今は違う。

髪を切ることなく、金色の髪の毛は伸ばし、後ろで縛り一本結びにしている。それでも優希にとっては熱い。熱は籠もり、どこか長い髪が鬱陶しい。正に彼にとって、今の状況は未知の領域と言っても差し支えない。

かと言って、別に髪を切るのが面倒くさい。なんて理由ではない。それもこれも——。

「あー、鬱陶しい。切っちゃまうか。バツサリと」
「木綿季が泣いても知らないよ?」

うんざりした口調で言う優希に、苦笑を浮かべながら明日奈は言う。

それだけで効果てきめんであるようだ。

優希はピシリ、と固まる。それから腕を組み、うんうん、と唸り始める。

髪を伸ばしているのは優希の意志ではない。

それもこれも、彼の義妹——紺野木綿季が関係していた。

最初は何気ない一言であった。

——にーちゃんの髪の毛って綺麗だから、長くした姿が見てみたい——。

その程度の言葉だった。

綺麗、というのが引つかかるものの髪を伸ばして減るものでもなし。ならば伸ばしてみる。そんな軽い気持ちで、優希は髪の毛を伸ばし始める。

それがまさか、ここに来て足をひっぱてくるとは思っていなかった。

冬は暖かったのだが、夏場は本当に地獄。いや、まだ「夏」もなのにこの体たらく。思わず優希も億劫になるというもの。

切りたいのは山々、しかし義妹は今の優希を気に入っている。だがこれからが地獄。

様々な状況を想定する。

暑苦しい今の自分、流れる汗、熱い夏、熱帯夜、道路に立ち上る蜃気楼、コンクリートジャングル、そしてガツカリする義妹。

優希は苦しい声で、断腸の思いで、洩々。

「——切るの、やめるか」

「それが良いと思う」

明日奈も満足気に大きく頷いて。

「わたしも優希くんの髪、好きだしね」

「……悪趣味な奴め」

「綺麗なブロンドだと思うけど?」

「男で長髪とか気持ち悪いにも程があんだろ。ホント、ドリユーくんがそういうの気にしない人で良かったわ」

もみあげをクルクルと指先でいじりながら、優希は呟いた。

対して明日奈はどこかソワソワ、と落ち着かない様子で優希を見ながら。

「そ、そういうえば研修は終わったの?」

「あ? ……ああ、終わったぞ。いざというときのためにメモも取つてあるし、何が起きても問題ねえよ」

「それじゃわたし、遊びに行っても良い?」

「来てもいいが、ちゃんと注文しろよ?」

「あ、当たり前でしょ!」

「ならいい。……つーかよお」

「な、なに?」

「何でオマエ、落ち着きないわけ?」

その言葉が引き金になったのか。

明日奈は身体をビクツと一際大きく揺らした。そして続けて、眼は明後日の方向へと向けて、顔も優希には見えない方へと向ける。

もちろん、彼女にも自覚はある。自分がいつもよりも落ち着きがなくなっていたことを、明日奈も自覚している。だがその原因はそれもこれも――。

――言えない。

——言えるわけがない。

——優希くんの髪の毛が綺麗で柔らかそうだから。

——触らせてほしい、あわよくば頬ずりさせてほしいなんて。

——言えるわけがない……！

前者はともかくとして、特に後者の欲求は不味い。

彼女の抱く欲望はまるで獣のようで、後先考えない患者の願い。好いている人の髪の毛を頬ずりしたいなんて、乙女的にも、何よりも人として。

——それじゃまるで、わたしが変態みたいじゃない……！

自らの欲求として選択肢に上がり、何よりも自覚している辺り、どこもなく手遅れ感が否めないものの、どうやら明日奈にとってはまだギリギリ倫理的に大丈夫であるようだ。

幾年幾月、想い続けて幾星霜。拗らせてきたツケがここにきて爆発しようとしているのか、明日奈の性的な部分がここで爆発しかけている危機。明日奈も覚醒しないように努力はしている。それを証拠に、邪念を追い出そうと、勢いよくブンブン頭を揺らす。

それは一心不乱。

好いている人の髪の毛を頬ずりしたい。そんな願いを追い出すように、まるで今の自分の気持ちを否定するように、彼女は頭を勢いよく揺らしていた。

彼女も必死に戦っている。

ただ不幸なのは、その葛藤が誰にも伝わっていないことだ。傍から見たら落ち着きなく、顔を背けたと思っただら、急に頭を揺らし始める。その間、まったく言葉を発していないのだから怪しいにも程があり、それは奇行と捉えられても仕方のないこと。

優希も明日奈の奇行を目の当たりにして、一瞬だけ目を見開き身体が固まる。

しかしそれも一瞬。すぐにまた妙なことを考えていることを察す

ると、呆れながらため息を吐いて。

「邪魔して悪いけどよ、本当にそれだけか？」

「……えっ、それだけって？」

ピタリと動きを止めて、明日奈は恐る恐る優希の方へと顔と目を向けた。

「まさか本当に何の用もないのに、オレの調子が悪そうってだけで声かけたのか？」

「そうだけど？」

「……もうちよつと自分の時間の使い方考えろよ。オレなんぞに使ってる場合か」

「もう、またきみはそんな捻くれたことを——」

明日那が異議を唱えかけるのも無理はない。

昔よりもマシになったとは言え、未だに茅場優希という人間は自分という存在を軽く見ている。誰よりも醜く、誰よりも醜悪で、誰よりも勝手に生きる様はまるで獣のよう。自己嫌悪に次ぐ自己嫌悪。自己否定を積み重ね自己否定をし続ける。それが茅場優希という人間の本性だ。

現在では彼も己を許す努力をしているとは言え、その根に染み付いた習性というのはどうやらずっと根深いようだ。

だからこそ明日奈は放っておけない。

このままにすればいつの間にか死んでしまう。といった危うさは薄れているものの、未だに彼の在り方は歪であり、何よりも想い人が誰よりも苦しい生き方をしているなどといった処遇を彼女が見逃せるわけがなかった。

故に彼女は言いかける。そんな事を言うな、と。もっと自分を大事にしろ、と。明日奈は言いかける。

しかし——。

「ちよつと待て」

それだけ言って遮り、優希は制服のポケットからスマートフォンを取り出した。

断続的に震えている様子から、どうやらそれは電話がかかってきているということがわかる。

「新川くんからだ」

「……誰？」

「朝田の友達、……になるのか？」

「わたしに聞かないでよ……」

「ちよつと出るぞ」

「うん」

悪いな、と一言謝罪すると優希は通話ボタンを押し、スマートフォンを耳に当てた。

「どうした？ ……ああ、いたな。確か遠藤だっけ？ ……へえ、そうか。うん」

何気ない口調だった。単調で、取り留めのない、それこそ世間話するような。傍から見たらその程度の口調でしかなかった。彼という人間を知らない第三者が見ればそう捉えられるかもしれない。

しかし違う、何もかもが違う。明日奈から見た優希はそんなものを話しているとは思えなかった。

優希の横顔。

そこから得られる情報はあまりにも少なく、彼が何を思っているのか断じることが出来ない。だが明日奈は断言することが出来る。付き合いが長く、何よりもずっと見てきたからこそ、明日奈は自分の結論を疑わなかった。

そう。今の彼は――。

「――わかった」

怒っていた。

怒りという不特定な存在が、人の形を為した。それが今の茅場優希という人間の姿であるかのような。

それはまるで焰だ。極限にまで熱された怒りを圧縮し、地獄で燃え盛る業火であるかのように、未だに爆発しないことが不思議であるかのように、明日奈から見た優希は、何よりも激しく、その内に怒りを宿している。

電話口の者――新川くんに悟らせないように辛うじて優希は演技している。

単調でつまらない口調。それが一欠片でも残された優希の理性であるかのように彼は続けて――。

「後はオレが何とかやる。新川くんは朝田にバレないようにしておいてくれ。悪いな教えてもらって。礼は今度するよ。ああ、じゃあな」

そうして優希は耳からスマートフォンを離すと、電源ボタンを押して通話を切った。

間髪入れずに、明日奈は問いを投げる。

「ねえ、大丈夫？」

「何がだ？」

「危ないこと、しないよね？」

「……ああ、問題ねえよ。こんなもんは掃除さ」

「掃除？」

「そう、掃除」

「目障りなゴミを掃除するだけの、簡単なお仕事ってやつだ」

第17話 恐怖は人知れず行動する

——どうしてこうなったのか。

何てことはない、何てことはない。簡単な事であった、と「彼」は記憶している。

「彼」は世間一般的に言うところ、不良という枠に収まる部類の人間であった。学生の身分であるものの、学校には真面目に行っておらず、飲酒もするし喫煙もする。気に入らないという理由で喧嘩もするし、目障りという理不尽で一般人を殴ったことだってある。そうやって「彼」は自分が赴くまま、本能のまま、理性など働かせることなく、拳を振り回してきた。

そしていつの間にか、この辺りを縄張りとする不良グループの頂点に君臨していた。

今思えばそれも約束された結末だったのかもしれない。何せ「彼」は幼い頃から、小学生の頃からそうだった。

気に入らない女がいた。——人を殺したことがあるらしい、物静かな女がいた。人を殺した、その真偽など実のところ「彼」にとっては重要ではなかった。要は「彼」は気に入らない存在を貶める大義名分が欲しかったのだ。

「彼」にとって幸運だったのは、人を殺めた気に入らない女を悪に陥れて、それを討伐する自分が正義の味方という図式を簡単に描けたこと。不幸なことは——。

——どうして、昔の頃を思い出す……？

そうだ、似ているのだ。

昔、「彼」が見た景色と、今の惨状が、とても酷似している。何てことはなかった。

「彼」はこの辺りでは有名な部類の不良。となれば、付き合ってくる連中も人の道を踏み外している人間なのは必然だろう。

行動を共にする連中も、「彼」と負けず劣らずの性根がねじ曲がつ

ている者達。女性に乱暴した男がいた、酒が入ると暴れ回る男がいた、人のものを直ぐに盗む手癖の悪い男がいて、金のためなら誰とでも一夜を過ごす貞操観念が壊れている女がいた。

そんな連中を纏めるのは、腕つぶしだけで上り詰めた「彼」に他ならない。

「彼」の耳には様々な声が入ってくる。その中でも興味を引いたのが、遠藤という女からの電話であった。前置きはなく、彼女は単刀直入に問う。

——「あんたさあ。朝田詩乃ってヤツ知ってるよねえ？」——

知ってるも何も、その名前は自分が初めて、他人を陥れた者の名前と同姓同名のモノであり、遠藤の話しを聞いてみると明らかにそれはあの人殺しの名前であった。顔写真も見れば、昔の面影が有り——

「彼」好みの女性へと成長を遂げていた。
思わず野卑な笑みを浮かべて、舌舐めずりしてしまう。何せ昔、何度も陥れた女だ。歯向かうこともせず、ただ黙って罵詈雑言を受け入れ、不当な暴力にも立ち向かわなかった弱い女だ。

ならば此度も、今度こそ、邪魔は入らない。あの時とは違い、邪魔者はいない。本当の意味で、朝田詩乃は独りだ。ならば今度こそ屈服させればいい。自分という男の奴隷にして、好き放題蹂躪し、飽きたら捨てればいい。

「彼」はその程度の事しか考えていなかった。

遠藤は脅すだけでいいと言ったが、冗談ではない。組み伏せ、蹂躪し、鬨り尽くし、今度こそあの人殺しを好きにする。そんなことを、「彼」は考えていた。

そう、なんてことはなく、簡単なことだ。

何せ今回は、生意気に朝田詩乃を守っていた「アイツ」はいない。目障りな金髪で、それは真っ直ぐに「彼」という敵をにらみつける。どれだけ痛めつけても膝を屈さずに、袋叩きにしても、自分に屈服しなかった。何度も何度も邪魔をしてきた「アイツ」。自分に勝てもしないくせに、歯向かってきた。今はもういない。

だというのに――。

――何故、俺は“アイツ”を、思い出す……？

“彼”が不幸だったのは、昔と同じように、行く手を阻む――
敵が現れてしまったということ。

遠藤から聞き出したマンション、それはつまり朝田詩乃が住まう住居に他ならない。

そこに向かい、自分の手下と一緒に楽しむ。もちろん、自分が最初で手下にも味あわせてやるのは二回目からだ、と“彼”は勝手に今後の宴の構想を練っていた。

そして、今夜。それを実行するために近所にある廃工場へと“彼”と他五名は集った。後は朝田詩乃のマンションに向かうだけ、であったのだが。

「やあ、君が――くんかな？」

それは突然現れた。

それも正面から、堂々と、気負う様子もなく、“それ”は“彼”名を確かに呼んだ。

柔和な笑み。自分を含めて、周りには明らかにアウトローな出で立ちをしている中で、“それ”は明らかに浮いている存在と言えた。

長い金髪。後ろに縛り、蒼い瞳はまっすぐと“彼”を射抜いている。

口元には笑みを張り付かせている、だが眼はちつとも笑っていない。そしてどういいうわけか――“それ”を見ていると昔に齒向かってきた名前すら忘れてしまった“アイツ”を思い出す。

「テメエ、何の用だ!? ——さんに何の用だ!」

血気盛んで考えなしに、**彼**の取り巻きの一人が**それ**に近づいて行き、胸倉を掴み上げる。

普通ならば冷静ではいられない。入れ墨をし、体軀が恵まれている男に掴み上げられたのだ。普通ならば慌てふためく状況だ。だがどういうわけか——。

「つてことは、——くんで合ってるのか。情報通り、さすが寮母さん。蛇の道は蛇つて奴だな」

冷静そのもの。むしろ、至つてい平静である。

自身の胸倉を掴んでいる男も、それを見ているだけの**彼**と他四名も、一般人とは違う迫力を放っているというのに、臆することなど微塵もない。

むしろ——。

「つて、これはあの人に失礼か。テメエらみたいなクソと比べるのは」

剣呑な雰囲気を一瞬で纏い、意識を敵対者に向けるモノへと変貌していく。

彼が身体を強張らせるのも無理はない。今まで喧嘩してきた者たちに、**それ**のような人間はいなかった。まるで人間と対峙している気になれない。**彼**とて何度も修羅場を潜ってきた。その経験が告げている、何よりも**彼**という人間の本能が警報を鳴らす。アレはヒトではなく——化物の類であると。

「ここでテメエらが居るつてことはよお、これから朝田んちに行くつてことで合ってるよな?」

ここで**彼**を含めた六人から冷や汗を流す。

どうして知っているのか、などと言った簡単な問いすらも投げる事もできない。下手に返答したが最後、眼の前の化物がどのような行動するか全く読めないからだ。ある者は落ち着きなく、ある者は冷やせを流し、ある者は蛇に睨まれたカエルのように動けない。

しかし化物にはそれだけで充分。千差万別の反応、それだけで把握して口を開く。

「わかった、もういい」

一言。退屈そうに一言だけ呟いて、掴まれていた胸倉をいとも容易く振りほどく。万力で握りしめられていたそれを振りほどき、「彼」の子分の首元を右の片手で握りしめ、本当の意味で片手で持ち上げて。

「ゴミ掃除だ。ちよつとは根性見せろよ？」

人知を超えた膂力。

限界を超えた憤怒が火事場の馬鹿力を引き出したのか、右腕の筋肉が悲鳴を上げるのも聞かずに、胸倉をつかんでいた取り巻きの一人を野球ボールのように投げ放つ。

それから巻き上がるのは惨劇にも等しい。

「彼」と他四名も抵抗はした。必死に、拳を握り、中には恐怖で泣きながら、立ち向かう取り巻きもいた。だが全ては無駄。化物にはその抵抗も虚しく、一個の強大な力は何もかもを蹂躪し尽くす。

鉄パイプで殴られようと、角材を振り下ろされようと、化物は止まらない。必ず先手を譲り、正当防衛と言わんばかりに力任せにぶん殴り、蹴り飛ばし、捻り潰していく。実にシンプル、シンプル過ぎる。技などない。格闘ゲームでいうところの、ボタン一つで必殺技が放てる。小難しいコマンドは必要ないと言わんばかりに、化物は殴られては殴り返し、蹴られれば蹴り返していく。

化物から手を出すことはなかった。

必ず先手を譲り、その返しと殴り返していく。その様子は——
恐怖でしかない。

何をやっても無駄であるというかのようには、殴るのだから殴り返される覚悟はあるんだろうな、と言わんばかりに。化物は倒れることなく、一撃で殴り蹴り投げ飛ばしていく。

殴られて数十メートル吹き飛ばされた男がいた、蹴られて空高く宙を舞った男がいた、片手で地面に叩きつけられる男がいた。そしていつの間にか——立っているのは「彼」だけになっていた。

一歩後ろに下がる——化物は一歩距離を縮める。

悪い夢だと首を振っても——化物は数メートル先に居て。

立ち向かう気力さえ沸かずに——いつの間にか「彼」の目の前に化物が立っていた。

そして思い浮かべる。

——どうしてこうなったのか、と。

「おい」

「ヒイ……」

ここで、化物は口を開いた。

いつの間にか自身の目の前に立っていた。思わず「彼」は短く悲鳴を上げて、たたらを踏みながら後退するも地に尻餅を着いてしまふ。

先程まで辺りに響いていた鈍い打撃音は聞こえない。モノを投げられる際に聞こえる風切り音も聞こえない。決して弱くなかった連中だ。自分という喧嘩屋には劣るものの、腕っぶしの強さで言えば自分に次いで強いはずの五人だ、と「彼」は思う。

しかし、辺りを支配するのは無音。聞こえると言えば呻き声と、ガチガチと震えて歯を鳴らす「彼」くらしいもの。

結論だけ告げる。

彼らは余すことなく叩きのめされた。目の前で君臨している怪物に、容赦なく、徹底して、執拗なまでに、叩き潰された。

「彼」が悲鳴を上げるのも無理はない。

取り巻きが誰一人逃れることなく地面に転がっている。となると、次の標的など決まっている。この場で意識があり、最低限の戦力である、「彼」自身に他ならない。

戦意などとうの昔に消失している。

それでも意識を保ち、怯えながらも化物を見つめているのは、「彼」の絶対強者だった頃の矜持の名残り。

対して怪物はそれすらもどうでもいい、と。

極めて億劫そうな口調で、苛立ちを隠すことなく、絶対強者だった「彼」に命じた。

「おい、テメエがゴミクズ共の頭だろ？ 遠藤って女、知ってるよな？」

「し、知ってる」

「じゃ、呼べ。今すぐ、ここに。ブチ転がされたくなかったらな」

「彼」は迅速だった。

これ以上得体の知れない存在の標的になどなりたくもないし、この場にいるのも御免被る。

だが、何か引つかかる。

懐にしまった携帯電話に手をかけて、ピタリと止まってしまった。

そもそもこの化物の目的は何なのか。どこぞのチームの鉄砲玉というわけでもない。何よりもそんな存在を「彼」が知らない筈がない。ならば何が目的なのか。

——— とういえばコイツ、俺達に向かってなんて聞いてきた？

——— そう、そうだ。

——— 朝田、って確かに言ってた。

——— それは、つまり……。

化物は朝田詩乃の関係者であり、自分達の行為を止めに来たという

ことになる。

——なんだ、そりゃ。

——そんなつまらない事のために。

——あんな女のせいで。

——俺は存在が傷つけられたってことか……？

傷つけられたとは物理的な意味ではない。もっと抽象的で、曖昧なモノを指している。『彼』は腕つぶしだけで、この辺りの不良達を黙らせてきた。それは逆に言うと、腕つぶしがなければ誰も従えれなかったということに繋がり、一人に臆し、残らず叩きのめされた事實は拭い難い事実だ。

それが世間に露呈したのなら、『彼』は侮られ、今まで築き上げてきたものが瓦解に繋がる。

——ふぎけるな。

——ふぎけんな……！

——なんで俺が、俺が、朝田なんぞのせいで！

——俺がこんな目に合わなきやなんねえんだ……っ！

溢れ出した感情は怒りだ。

恐怖を感じていた心は憤怒で誤魔化され、憤怒が原動力へと繋がり、『彼』を奮い立たせるに至る。

「何だよ、テメエ……！」

「あ？」

ピタリと。

化物の蒼く光る双眸が『彼』を射抜いた。

それはまるで照準だ。的に銃口を合わせるように、ただ引き金を引いて終わるだけの状態。『彼』はその程度の戦力でしかない。それ

こそ、赤子の手を捻るかの如く、今の化物には造作もなく塵殺出来る。しかしその事実には、**彼**本人が気付いてない。

怒りに酔って、**彼**は絶望的な状況で奮い立った。それと同時に人として最低限持ち合わせている筈の危機感も怒りによって曇らせる。

「何でテメエはアイツを庇うんだ！ アイツは人殺しだぞ!？」

「だから？」

「人を殺したんだ、俺が痛めつけても文句はねえだろ！」

「だから？」

「お前は知ってんのかよ。アイツは生きてても仕方ねえことしたんだ。だったら俺が好きにしても——」

「ああ——」

一言だけそう言うと、退屈そうな口調で、感情も込めていない、あくまで平坦な声色で繰り返す。

「——だから？」

ここで漸く、**彼**の背筋に良くないものが流れた。

寒気にもいた悪寒。予知めいた予感。

彼の恐怖は怒りによって誤魔化されたものであるのなら、それ以上の憤怒をぶつけられて恐怖がぶり返すのは必然と言える。

現に**彼**は固まりながら、化物から眼を逸らさない。いや、逸らせないでいた。目を離れたが最後、喉笛を噛み千切られ、見るも無残な姿に変えられる。そんな決定的な連想を、**彼**の胸中にはあった。

化物の眼は明らかに異常だった。

辛うじて人間であることが分かっていた蒼い眼は今となっては、全ての闇を食らい尽くすかのような色に変貌し、目を合わせた者の魂を噛み千切るとも言うかのように。

先刻まで明らかに違う、化物が本性を表したように。

「確かに、アイツは人を殺した。どんな経緯があろうとどんな事情があろうと、人を殺したが最後、オレ達は碌な死に方をしねえだろう。穏やかに死ぬにしろ、無様に死に様を晒すにしろ、行き着く先は地獄に決まってる」

そして「彼」は大きな勘違いをしていた。

化物は『朝田を守るために立ち上がった偽善者』であると思っていた。事情も知らない、朝田詩乃という女に気があるだけの、甘い人間だどこの時まで本気で思っていた。

真実——。

「だが、それが何だ？ オマエと何の関係がある？ アイツがオマエに何をした？」

朝田詩乃は人殺し。

その事実は曲がらず、誤魔化すことなど出来るわけがない。人として醜悪とも言える罪の一つを犯したと認識した上で、化物は朝田詩乃を見限ることがなかった。

人を殺したのなら、必ず地獄に墮ちる。そう断言した上で、化物は更に続けて言う。

「オレがイラついてるのはそこだ。テメエ一人が憤ってんなら構わねえ。ンなもん個人の自由、オレがとやかく言う資格はない。だがなあ、徒党を組んで一人のアイツを扱き下ろすのはどういう見だ？」

目的が違う。

「彼」の目の前に君臨している化物は聖人君子ではない。女の子が痛い目に合いそうになっている、だから止める。なんて生易しいモ

ノではなかった。

そう。化物がここに君臨したのは、朝田詩乃を守るためでも、
“やその取り巻きを止めるためでもない。彼

「テメエみたいなクソが、どつちにもつかない薄い悪を気取っている
ゴミが——今を必死に生きているアイツの邪魔をしてんじや
ねえよ」

化物はただ、気に入らなかっただけだ。

自分の癩に障るゴミを叩き潰しに來ただけ。それだけに過ぎな
かった——。

.....
.....
.....
.....

2025年6月10日 PM 18:15
ダイシーカフェ

「ふあ、あつ……！」

開店準備前のダイシーカフェにて、ギャルソン姿の店員——茅
場優希は小さく欠伸を漏らした。

同時に眼から滲み出るのは涙だ。彼からしてみたら、それは不快な

生理現象。気怠そうにあ手のひらで乱暴に拭っていると、横からウエ
イター姿の幼女——レベツカが呆れた声で声をかけてくる。

「遅くまでゲームやってるからですよ」

どうやら少女は、優希の寝不足の原因はゲームであると判断したよ
うだ。

それも当然の連想と言えるのかもしれない。何せ数年間、茅場優希
という人間は仮想現実に関わっていた。にも関わらず、性懲りもなく
VRMMOに興じている現状。現実で待ち続けたレベツカにし
て見たら、それこそありえない。どうして死にそうな目に合っておき
ながら、未だにVRMMOをプレイできるというのか。少女には全
く、これっぽっちも、理解が出来なかった。

優希はゲームに夢中。少なくともレベツカからはそういう認識で
あり、今回の寝不足だってゲームが原因であると思ったのだろう。

対する優希は否定しない。いや、否定できないと言ったほうが正
しいのかもしれない。

夜にかけて深夜、深夜にかけて朝に至るまで、優希は「話し合い」
を行っていた。その内容はとてもではないが、小学校低学年であるレ
ベツカに聞かせていい代物ではない。

優希が不良グループを単身で壊滅させて一日も経っていないかった。

朝田詩乃が乱暴される可能性がある。それは聞けば耳を疑う報告
であるが、優希はさして驚くモノでもなかった。むしろやつぱりな、
と。確信染みたものを感じていた。

確かに、彼は数日前に詩乃に絡んでいた遠藤という女子生徒と数名
を脅した。これ以上、朝田に手を出すな、と直に恐怖を叩きつけた。

しかし、その程度で人間の悪意が挫けることがないことを、優希は
一番良く理解している。かつて、笑う棺桶ラフィン・コフィンというPK集団を壊滅さ
せ、今まで見たことがない殺人鬼と対峙しからこそ直感する。人間の
闇は簡単に晴れることはない。些細な感情で、うちに秘めていた闇は

ぶり返し、直ぐに悪意へと変貌を遂げるものだ。

だからこそ先手を打った。新川と連絡先を交換したのもそのためだ。いつでも動けるように、逐一情報が耳に入ってくるように、詩乃に危害が及ぶ前に行動出来るように、優希は態勢を整えていた。

そして今、案の定というべきか、遠藤は他の手駒を使い動こうとしていた。

そこからは簡単だ。他人を蹴落としのし上がってきた連中の行動を読み取るなど造作もない。それこそ殺人鬼の思考を読み取るよりも、簡単であった。

縄張りとしている地域を調べ、拠点としている場所を虱潰しに足を運び、いとも簡単に連中を補足することが出来た。

叩き潰し、意志を折り、力の差を見せつけた。あとは話し合うのみ。男連中は『朝田詩乃』という名を聞くだけで悲鳴を上げるように教育した。それこそ詩乃本人を見たら、気絶する程度にはなっている。遠藤には詩乃に完全服従を誓わせた。破ったら最後、どうなるのか。それは遠藤が一番良く理解しているだろう。

優希の欠伸は安堵といったニュアンスもある。

保留にしていた雑事がやっと片付いた、といった肩の荷が下りた心境から溢れ出したモノでもある。

——朝田が襲われそうだったから、オレが叩き潰してた。

——なんてコイツには言えないわな。

無論、誰にも言うつもりはなかった。

別に感謝されるためにやったわけでも、尊敬されるためにやったわけでもない。むしろその真逆、誰のためでもなく見ていて目障りだからという理由で優希は行動したに過ぎない。

——しかし、妙だ。

——やけに身体が軽かった。

——もつとボコボコにされると思ったのに、余裕で叩き潰す事が出来た。

——何度も経験がある。

——あの世界で、何度も経験した。

——オレがキレると、それが出来るようになる。

——それこそが、心意。

人間の限界を超えた意志が現実を塗り替えるように、不屈の意志が今度は優希という肉体を塗り替えていた。

火事場の馬鹿力。

人間は常に、自身の筋肉にセーブをかけ、本来よりも大幅に小さな力を『全力』と認識させている。しかし、火事などと言った危機的状況に陥ると、脳が肉体の制御を解除され、持てなかつた物を持ち上げたり、疲れ知らずの持久力を手に入れることが出来る。

しかしそれは偶発的なもので、危機に陥れば誰もが解除できる代物でもない。

そう、意識的に解除できるものではない。なのにも関わらず、茅場優希という途方もなく強大な意志は、それを無意識でいとも容易く肉体のリミッターを解除させてしまった。

強固な鉄の扉を無理やりこじ開けるように、意識的には絶対開くはずのない扉を、優希はありえない意志の力でこじ開ける。

その結果が、先の戦力差。

人一人を殴り飛ばし、蹴り飛ばし、投げ飛ばす。人知を超えた肉体を手に入れることができた——ということでもない。

常にリミッターを解除出来ることもなく、今では年相応の平均的な身体能力しか持ち合わせておらず、何よりも——。

——身体中が、めっちゃくちゃ痛い。

指先一つ動かすだけで激痛が走り、歩いただけで冷や汗が流れる。回路が焼き切れているかのような、質の悪い筋肉痛に悩まされてい

た。

——数分、暴れ回っただけでこのザマだ。

——アレ以上続けてたら、全身の骨が折れてたかもしんねえ。

——確かに、痛みには耐性がある。

——だがそれはそれ、これはこれ。

——我慢は出来るが、痛くないというわけでは……ないっ！

クワツ、と目を見開いて優希は心の中で断じる。

痛いものは痛いし、キツイものはキツイ。仮想世界でも現実世界でも、全力を出すのは考えものであるらしい。

「……どうかしました？」

怪訝そうな顔でレベツカは優希の顔色を伺いながら問いを投げる。

とはいえ、レベツカは知らない。人知れず、冷や汗をかきながら、黙って痛みと戦っている優希を不審に思うのも無理はないというものの。

筋肉痛が酷くて喋るのも辛い。

なんて些細な事実を優希は口にできなかった。

些細な矜持、小さなプライド。それがあんなら、どれだけ痛からうが耐えられると言うかのように優希は誤魔化しながら。

「……別に。ゲームで寝不足になんてならねえよ」

「そうですか？ ダデイは頻繁になってますけど」

「何となく想像つくわ。夢中になったらとことんって感じる。オレの妹も似たようなもんだ」

「木綿季ちゃん、ですか……」

どこか神妙そうな顔で、ポツリとレベツカは呟いた。

迂闊だった。レベツカと木綿季、そこまで仲が良くなかったことを

思い出しながら。

「あーっと。オマエら仲悪いんだっけ？」

「別に仲は普通です。木綿季ちゃんの良い子ですし、可愛いですし、私に意地悪する人じゃないです」

「そうなんか？ でもその割に、オマエら結構張り合ってるじゃん」

「私が一方的に競争意識を向けているだけです」

それだけ言うとムスツとレベツカはむくれた態度をとった。

実に子供のような態度。小学生とは思えない大人びた考え方をしているものの、実際レベツカはまだ小学校低学年だ。そう考えれば、年相応の反応と言える。

まるで今の少女は以前のように、SAO事件に巻き込まれる前に出会った頃のように、不思議と懐かしい感覚を優希は抱く。

同時に興味が湧いた。歳不相応であるが、レベツカは大人な考え方を出来るようになった。だがそれでも、木綿季と対峙すると、以前のレベツカに近い状態へと戻ってしまう事実。どうして木綿季にだけ特別なのか。

「何が気に食わない？」

「……」

言うべきか言わないべきか。

レベツカは少しだけ考えて口を開いた。

「ズルいです」

「ズル？」

「イマイチ要領を得ないのか優希は首を傾げ、レベツカは小さく頷くと。」

「木綿季ちゃんは、ズルいです」

「どういう意味だ？」

「だって、明日奈お姉さんと最初に仲良くなったのは私なのに。いきなりゆーきをお兄ちゃんって呼ぶとか、そんなのズルっ子です……」

むーっ、と頬を膨らませたと思いきや、直ぐにどこか優希の顔色を伺ってレベツカは尋ねた。

「ゆーきはやっぱり、私と木綿季ちゃんが喧嘩したら木綿季ちゃんの味方するんですか？」

「オレはどっちの味方にならねえよ。オマエらで勝手にしろ」

「妹なのに、ですか？」

「関係ねえよ。オマエにはオマエの言い分があるんだろ？　そこにオレが口を挟む道理はない。木綿季が気に入らねえのなら、とことんやり合うべきだ」

何も喧嘩して悪いことばかりではない、というのが優希の結論だった。

確かに辛いこともあるし、傷つくこともある。だが本気でぶつかりあった先に、必ず何かが生まれる筈なのだ。かつて、暴走した優希を止めるために、本気で向き合ってくれた明日奈達のように。レベツカにとっても、木綿季にとっても大きな財産となるに違いない。

人として成長する機会があるというのに、見す見す摘み取る理由もなければ、個人の主義主張を押し潰すのは筋が通らない。

だからこそ、優希は中立を保つ。それにレベツカにしろ、木綿季にしろ、自分以外の人間を尊重できる性格だ。最悪なことになどならないだろう、という口にしらないものさういった信頼もある。

優希は後押しするように、レベツカの頭をポンポンと軽く叩いて。

「顔色なんて伺うな。そんな高等技術、オマエには十三年と五ヶ月早い」

「十三年……。長くないですか？」

「ばか。それまでガキらしくワガママ言えつてことだよ。今日は明日奈達が遊びに来る。ワガママの練習でもしてろよ」

「明日奈お姉さんが来るってことは、里香お姉さんも来ますか？」

「来るんじゃないの？ よくわからねえけど」

「里香お姉さんのお話は為になるので好きです。特に恋愛とか」

「オマエ、そんな話し聞いてんのか？」

はい、とレベツカは力強く頷いて。

「意中の男の子を落とすには外堀から埋めるのが定石、つてお話を前に聞きました。将を射んと欲すれば先ず馬を射よ、つてやつです」
「随分と遠回りな手を使う。将を射んと欲するのなら纏めて馬ごと射っちまえば良くね？」

ズドン、と。

大砲を打ち出すようなジェスチャーをしている優希に、わざとらしくため息をついてレベツカは生暖かい目を向けて。

「ゆーき、そういうところですよ？」

「……んだその目は。めちゃくちゃムカつくんですけど」

生意気な先輩にどうやって報復してやろうか考えていると、ダイシーカフェの入り口が開いた。

堂々としたものではなく、どこか恐る恐ると言ったように。店内の状況を伺うように、一人の女性が扉を開ける。

メガネを装着し、学校帰りなのだろうか制服を身に纏い、学生鞆を持って現れたのは。

「いらっしやい。よく来たな」

第18話 先輩にとっての他人とは

ここに来るまで、幾百ものシミュレーションを行った。ありとあらゆる角度から物事を分析し、ありとあらゆる視点で想像し、ありとあらゆる観点から結論付ける。

何が起きても、今の私なら瞬時に反応し、冷静に対処することが出来るだろう。

だから緊張する筈もなく――。

「ふう」

気を紛らわせるように、私は息を深く吐き出した。訂正するでしょう。

私は酷いくらい、緊張している。

動機は激しくなるばかりで治まる気配がない。思考は乱れに乱れ、両足は本当に地面についているのか疑ってしまうほど不明瞭なものだ。

扉の前で数分、開けた先にはあの人が――先輩がいるというのに、私はドアノブへ手をかけられない状態にある。

何度も確認した服装をチェックし、ニキビがないかカバンから手鏡を取り出して確認する。寝癖もついてなければ、目ヤニもついているわけがない。外面でいえば、何も問題となっていない箇所はない。加えて、メガネも装着済みだ。

何も問題はない。何も問題がない筈なのに。

「すう……はあ……」

深呼吸。

心を落ち着かせるために行っているのにも関わらず、私の心臓は逆に激しくなるばかりだ。

先輩を前にすると気分が高揚することはいつものことだが、今回は

いつにも増しているのを自覚する。

遊びに行くとかプライベートとは訳が違う。私を取り巻く謎の緊張の正体。それは恐らく、ここが先輩の職場だからだろう。私と先輩の間柄は、先輩と後輩だ。だが今日はその他にも、店員と顧客という立場が付与されることになる。その立場は曖昧なものではなく明確な立場。客としての領分を超えた振る舞いをしたものなら、先輩に嫌われるのは必然。何よりも———普段の先輩とは違う彼が見れるかもしれないということ。

「……えへへ」

そう考えるだけで、自然と頬が緩んでしまう。

はたして先輩はどんな感じに私に接客してくれるのか。笑顔で応対するのか、それとも普段と変わらないのか。はたまた私の想像とは違う感じになるのか。

ぶつちやけ、どちらでも構わない。私と先輩、カウンターを隔てて対面する。それだけで新鮮味が増すし、何よりも働いている先輩を見てみたい。きつと普段にはない先輩が見られる、筈だ。

そう思えば、緊張の一つや二つするといふもの。いつも想っている人の別の側面を見れるか見れないかの瀬戸際が今なのだ。それはドキドキもするし、緊張もする。

見逃すなんて乙女的にNO。絶対にNO。断じてNO。ついぞに言うのと、カメラを持ってくればよかったと今更後悔。

「よしっ……いっ！」

お腹の内側から気合を入れる。

対ショック防御は完璧。どんなことが起きても、何を見ても私は慌てることはない。

心は凍らせて、まるで氷のように冷ややかに、俯瞰的に物事を観察する。

2025年6月10日 PM18:30

ダイシーカフェ

どうやら私は動転していたらしい。

ギャルソン姿の先輩を見た瞬間から、何やら記憶がない。ひと目見ただけで何かが弾けた。頭の中がスパークして、無意識に手を合わせて拝んでしまっていた。

しかし、しようがない、しようがないのだ。今の姿はこれでもかというくらい画になってるし似合っている。私の気が動転するのも無理はないというもの。決して常日頃、私はこんな訳のわからない女ではない。

正直な話し、まだ私は冷静ではない。

カウンター席に座り、カウンター越しに先輩がいるという現状。プレイヤーのときよりも確かに距離があるし、店員と客という立場を考えても離れていると言える。

だけど、だからこそ、落ち着かない。何を話したものが、どう言えればいいものか、私の頭の中は真っ白になっていた。

誤魔化すようにメニュー表を見るも、内容が頭に入ってこない。

食事を取ればいいのか。しかし、目の前で食事をするというのは、物を頬張るといふのはどうなんだろうか。乙女的にアリなのか、ナシなのか。正直に言う判断に困る。

「…………注文は、お嬢様？」

「それじゃ、先——」

反射的に「それじゃ先輩で」と答えそうになる勝手な口を理性で抑えることに成功する。

危なかった、非常に危ない状況だった。私は何を口走りそうになったのか、浮ついていっているにも程がある。対する先輩は怪訝そうな顔で。

「せん？　なんだって？」

「あ、いや。何でもないわ」

なんとかかして誤魔化さないと。
状況を把握する。

今ここにいるのは、私、先輩、それからレヴィのみ。人は数少なく、現状を打破するにはどうすればいいのか。私は自身の思考速度を加速させていく。「注文は先輩で」というあまりにもバカバカしいことを口走りそうになった尻拭いをするために。

そこでふと、いるべきはずの人物がいないことに気付き私は疑問に思ったことを口にした。

「店長さんは？」

「マスターなら——」

「ダディはマミーとお買い物です」

遮るように、私の隣にレヴィが座りながら言った。

彼女はまだ小さい。どうやらカウンターに設置されているカウンターチェアにレヴィのサイズは合っていないようだ。それを証拠に、なんとか座ることに成功しているものの、地と足が離れすぎている。

それも相まってか、私から見たレヴィは愛くるしく見える。

普段も可愛い彼女だが、今は白と黒の色合いの小さなウェイトレス服に身を包み、頭の上にはホワイトブリム。加えて落ち着かないのか、地につかない足をパタパタとさせている。非常に愛くるしい。店長さんが親バカになるのも無理はないというもの。

自然と笑みも溢れるのを抑えることなく、私は思ったことをつい口にしてしまう。

「可愛い。似合ってるわよ、レヴィ」

「ほ、本当ですか？」

「ええ。物凄く可愛い」

「詩乃さんに言われると、嬉しいですっ」

大人びているとは言えレヴィもまだ小さい子供だ。

何とか必死に、喜ぶのを我慢しているのは見て取れるが、嬉しそうにしている雰囲気だけは我慢できていない。むしろ溢れんばかりであり、そこも愛らしい要因ともなっている。

子供なのだから我慢することはない、と私も思ってはいるが、恐らくレヴィのプライドが許さないのだろう。意地を張り、冷静を装い、背伸びをしたがる年頃であるに違いない。そういうところも可愛い のだけだ。

「そうやって貰えて、私も嬉しいわ。お母さんとお父さんは買い物だっけ？」

「そうですね、そうじゃないと思います」

「と言うと？」

「お買い物というより、アレはデートだと思っています」

「あら、素敵じゃない。仲良しなんだ？」

「そうなんですけど……」

それだけ言うと、レヴィはどこか不満そうに唇を尖らせて続けて言う。

「もう少し、しっかりしてほしいです。店をほったらかしにして自分たちはデートするとか、ゆーきに示しがつかないです」

「まあまあ、そう言わずに。息抜きも必要じゃない？」

「確かに、詩乃さんの言うとおりですけど……」

渋々と言った調子で、レヴィは納得してくれたようだ。

私も彼女が微笑ましく見えて、口元に笑みを浮かべていると。

「へえ？」

どこか感慨深いような口調で、意外な物を見たかのような視線を送っている先輩に気付いた。

不快なものではない。むしろ何となく、私は居心地悪く思う。簡潔に纏めてしまうと、照れているのだ私は。先輩に観察されて、見つめられて、恥ずかしく思う。

悟らせないように、突き返す口調で私は応じることにした。

「……なにか？」

「朝田が誰かの『先輩』をやってんの初めて見るからな。ちよつと意外だった」

確かに先輩の言うとおりなのだろう。

私と先輩は付き合いが長い。それこそ小学校からの付き合いであるし、その時から私達の関係は『先輩と後輩』であった。今更、私達の関係は変わることなく、現状だけで言えば関係は続いたままだ。

となれば、先輩の感想も納得がいく。今まで私は先輩に接するときの後輩であったし、年上として先輩に接したことがない。しかし今はレヴィに接しているときの私は年上の対応。意外と称するのも領けるというもの。

しかしそれを言うのなら先輩もだろう。

「先輩に言われたくないわね」

「どういう意味だ？」

「貴方だって、人によっては対応が違うじゃない」

ざっくりで言ってしまうと、先輩の対応は三段階に別れている。

どうでもいい相手には基本丁寧にして、気を許しかけている輩には砕けた口調になり、完全に気を許している人には口悪く応対する。

その姿はまるで仮面を付け替えているようでもある。

特に丁寧に対しているときは目を疑うほどだ。目つきは悪く口も悪い先輩が、満面の笑みで綺麗な言葉使い接しているのだ。それは目

を疑うし、未だに馴れていない。

だからこそ私は嬉しかった。

先輩がぶつきらぼうで接しているということは、心を開いているということ。つまり演技しなくてもいい人間ということだ。何者かを演じる必要もなく、ありのまま茅場優希という彼を曝け出せるということ。

そしてその対象に、恐らく自分も選ばれている。まだ「後輩」という立場であるがいつか、いつの日か、先輩の特別に――。

頬が緩むのを我慢して、意地の悪い笑みを浮かべることで何とか誤魔化する。

「本当に先輩って人を見るわよね？」

「人間き悪い。空気を讀んでるって言えや」

「物は言い様。便利よねー日本語って」

「うるせえなー。さっさと注文しろよばかやろー」

フンツ、と少しだけ拗ねた調子で言う先輩が可愛く微笑ましく思う。

先輩を良く知らない人は、こんな彼の表情も見えないのだろう。そう考えると、少しだけ可哀想にも思えてくる。

「オススメって何かある？」

「そうだなあ」

店員専用のメニュー表なのか、私が持っている物とは違い、小さいノートのような物を取り出して先輩はページを捲ると。

「ケニア茶とルワンダ茶のブレンド。意外と美味しいと思うぜ？」

「え、紅茶？」

茶葉を発酵させて作る飲み物。それが紅茶だ。

言うのは簡単だが実際に淹れるとなると難しい。というのが、素人から見た私の感想だ。お茶と違って、素人には扱いが難しい。根拠はないが、難易度が高いという飲み物。そんな連想をさせる何か、紅茶にはある。

だからこそだろうか。

常日頃、妹ちゃんに食事を用意しているとは聞いているものの、先輩が料理上手とは思えない。

思わず、恐る恐るといった調子で私は口にしてしまう。

「先輩、淹れるの？」

「どういう意味だ？　って、言いたい所だが、まだマスターが淹れるような美味しいもんは作れねえ。人並み程度の腕前だ。で、どうする？」

「それじゃ、それで」

「かしこまりました。少々、お待ち下さい」

どこか芝居がかった仕草で、恭しく一礼すると先輩は作業に入っ

た。
人並み程度の腕前、と彼は言った。だがその作業は流れるようで、一片の迷いもなければ躊躇もない。まるで感覚を身体が知っているかのような、何度も反復練習したような、染み付いている動きだった。だが私が注目していたのはそこではない。私が本当の意味で見えていたのは――。

「大丈夫ですよ」

「え、何が？」

隣りにいるレヴィが自信満々に、先輩に聞こえない程度の声量で。

「木綿季ちゃんから聞いてます。ゆーき、夜中ここに出されるメニューを作って練習しているみたいですよ」

「そうなの？」

「はい、だから詩乃さんも安心してください」
「……ええ、ありがとう」

レヴィの頭を撫でると、彼女は目を細めてどこか嬉しそうに預けてくれた。

きっと彼女はじつと見つめている私を不安に思っている、と勘違いしてしまったのだろう。だが違う。レヴィには悪いが、それは違う。

ただ私は——見惚れていただけだ。

真剣にお湯の温度を図り、茶葉の分量を計算し、遊びのない先輩の眼差しに、私は見惚れていたただけだ。

先程まで軽口を叩いていたとは思えない。その後姿は男らしく、その横顔は凛々しい、その在り方に心が激しく揺れ動く。

ギャップ、というもののだろう。今まで見たことがない、プライベートでは絶対に出会うことが出来ない、仕事人としての先輩の顔。動機は激しくなり、思考も定まらず、おまけに顔が熱くなるのを感じる。今の私はきつと、恋する乙女のそれなのだろう。頬は紅潮し、ぼーっと熱い視線を送っていることだろう。しかし先輩は気付いていない。それほどまでに、彼は真剣に没頭している。

出来れば永遠に眺めていたい。

真剣に何かをする先輩を、ずっと眺めていたい。

しかしそれは叶うことがない。始まりがあるのなら終わりがあるように、この時間も永遠というわけではないのだから。

「お待たせしました——って、何だよ?」

「べ、別に……」

眺めていたとは言ったが、だからと言って気付いてほしいとは言っていない。

私の心情を見透かされないように慌てて言うが、先輩は「まあいい」というとポットに淹れている紅茶をカップに注ぎ。

「ほら、グイツとイケ。グイツと」

「……言い方つてもものがあるでしょう」

呆れながら言うのと、私はカップを受け取り口に運び、目を見開いた。
不味くてではない。むしろこれは――。

「美味しい……」

カップに注がれた紅茶は、かなりの濃い赤銅色。しかし完全に透き通っており、味にも色とは裏腹に染みが全くといってほどない。加えてほんのり甘く、これならミルクなどは寧ろ要らない。紅茶の粹を集めたような味だった。

良かった、とホツとする先輩――な訳がない。

あとは勝手に自分で淹れる、と持っていたポットを置いて、彼はぶつきらぼうに言い放つ。

「……そうかよ。さっさと飲んで、さっさと金置いて帰れ」

「何か言い方が癪に障るけど、本当に美味しいわよこれ。今日色々あったけど、これ飲んでると落ち着いちゃう」

「色々って？」

可愛らしく首を小さく傾げて問うレヴィに、苦笑を浮かべて私は答えた。

「学校でちよつとね」

「何かあったんですか？」

「うーん、仲良くなかった人から一方的に絡まれてるって感じかなー？」

いまいち要領を得ないのかレヴィは首をかしげるばかり。

だがこれ以上説明のしようがない。なにせ事実なのだから。

「ねえ、先輩。前に学校の校門前で絡んできた女子生徒覚えてる？」

「……あー、居たな」

「ソイツ、遠藤って言うんだけどね？ 今日学校に来たのよ」

「へえ。それで？」

「私を見て何て言ったと思う？」

「何て言ったんだ？」

「姐さんよ、姐さん。しかもいきなりで、私が何をするにしても着いて来ようとするし、パンとか雑誌買って来ようとするし……」

「あつ、知ってます。そういう人、舎弟っていうんですよね！」

初めて聞きました！ と眼を輝かせて言うレヴィに、違うと首を横に振ることが出来なかった。

本当にそのとおりだからだ。まるで今の遠藤の振る舞いは舎弟そのもの。高飛車で自分勝手であった筈の遠藤は消えて、何故か私の舎弟みたいなことになっている遠藤がそこに居た。

最初は罨なのではないか、何が狙いなのかと疑ったが、どうやら彼女にそんなつもりはないようで、不自然なまでに自然に私へ絶対服従を誓っている。不気味、あまりにも不気味。どうしてそうなったのかわからないからこそ、余計に不気味に見える。

「オマエは嫌なのか？」

「嫌というか、馴れてないというか……」

「だったら問題ねえだろ。いちいち気にすんな」

そこで私は違和感を覚える。

いいや、普通の言い回しだ。他人が聞けば、先輩の言い分に何一つ疑問を感じる箇所など存在しない。だがそれは、先輩という人となりを知らない人から見ればの話だ。

いつもの先輩なら、ここで「何かあつたら言え」とぶつきらぼうに言い放つことだろう。だがそれが無い。むしろ気にするなという言

う彼の言い分はまるで、何かを知っているようにも思える。

「先輩、もしかして——」

何かを知っている？ という疑問を口にしようとしたところで、ダイシーカフェの入口のドアが開いた。

「やつほー、遊びに来てやったわよー」

「サボってないだろうな？」

先輩に軽口を言うのは二人の男女だ。

聞いた覚えがある声。私は二人と仲が良い——という訳ではなく、顔見知り程度の間柄だ。男の子の方は桐ヶ谷君で、女の子は篠崎さん。どちらも先輩の仲間であり、かつてSAOで助け合ってきた間柄であると聞いている。

ここでふと、何となく、先輩の顔を見る。

そこには——。

「オマエら、金置いてさっさと帰れ」

「いや、せめて何か飲ませろよ！」

「店員の態度じゃないわよあんた！」

「うるせえなあ。んじゃ、塩と砂糖だしてやる。これでいいだろ？」

ほら、千円払えや」

「どこの国だよ!？」

「日本だよ馬鹿野郎」

あまりにも粗暴で、雑な言い分である。他人が聞けば、とても態度がでかく、口の悪い人間に聞こえることだろう。しかし違う、真実はそれとは真逆。口調とは裏腹に、その態度には確かな親愛が存在していた。

先程、先輩の態度には三段階あると私は言った。それは大きな間違

いだ。四段階目が、私の知らない先輩がここに存在している。気の所為やなどではない、確かに存在していた。

何よりも眼だ。

二人を見つめている先輩の眼が、剣呑なモノではなく、見たことがない優しい眼で二人を見つめている。恐らく、二人は気付いていない。私が気付けたのは、先輩をずっと見ていたから、先輩のことを想っているからだろう。

心臓が嫌に響く。

内側からは良くないものが這い出てきそうになり。

黒い感情が渦巻いているのを自覚する。

傲慢に嫉妬し、激情に駆られ、強欲に羨望する。自然と、私は拳を握りしめていた。

そう。私は二人を羨んでいる。その特別は私が欲していたモノであり、私だけに向けられたかったモノだから。

「……明日奈はどうした？」

「あの子なら遅れるって言ってたわよ？」

追い打ちをかけるように、先輩から無視できない言葉が口にされた。

明日奈。それは結城明日奈さんに他ならず、先輩の幼馴染であり――先輩の特別の一人でもある女性の名前だ。

きっと彼女も二人と同じような眼を、いいや、それ以上に優しい目を向けられるに違いない。

ズルい、と思う。

同時に、当たり前のだ、と納得している自分もいる。

彼女達は文字通り、今まで先輩と戦ってきた。私は詳しくは知らないが、ときに助け、ときに助けられ、共通の敵を見据えて、戦ってきたのだろう。楽しいことだらけではなく、そこには辛いことも悲しいこともあったに違いない。だが彼女達は戦った。一緒に戦い、こうして生き延びてきた。

ならば、先輩の対応も頷ける。先輩にとって、彼女達は自分以上の存在であり、そう簡単に壊れることのない絆が出来ている。だからその粗暴過ぎる口調であり、優しすぎる眼なのだろう。先輩に何かあれば彼女達は命をかけて助け、先輩も彼女達に何かあれば生命をかけて手を貸すことだろう。

だが私はどうだろうか？

もちろん、私も先輩に何かあれば命を賭ける。

しかし逆は？ 先輩は、私を、助けて、くれるだろうか――？

「……先輩」

「ん、どうした？」

「帰るわ」

それだけ言うと、私はお金を丁度払って、足早に店を出る。

背後から先輩の声が聞こえるが、今では嬉しくもなく、虚しいばかり。

酷く場違いだ。

明日奈さんと争っている気でした。出し抜くつもりで今まで行動していた。

しかし現実が違う。彼女と私には見たくもない大きな溝があり――
私は全くと言っていいほど、同じ土俵に上がって居なかった。

これ以上見たくない。

先輩と彼女が楽しげに会話する姿など見たくない。

そんな汚い感情に突き動かされて私は逃げた、ただ逃げるのだった。

幕間 とある毒鳥の欲情

私の家庭は至って普通。父も母も、善良な人間であった。私が物心着いた頃から、彼らは愛情を一心に注いでくれた。私が泣けば母が心配し、私が何か悪いことをすれば父は叱ってくれた。過度な愛も、行き過ぎた躰でもない。ありふれて、それでいて幸せな両親に、私は育てられてきた。

周囲の人間関係を見ても、異常性など感じられない。女友達と恋の話をしたり、男友達と偶にバカなことをやる。善良な人達に囲まれ、何不自由もなく、私は取り留めのない日々を、過ごしていた。

それはとても幸せなことなのだろうと思う。争うこともなく、人生を破滅に追いやる誘惑もなく、善良な人達に囲まれる。私は確かに幸福であるし、どのような視点から見ても不幸だと嘆く必要性も感じられない。

ただ問題があるとするとするのなら——私自身にあるに違いない。取り留めのない日常を過ごしても、私が満たされることはなかった。

どれだけ楽しく過ごそうが、感動して泣こうが、どれだけ心を動かされようとも、私は満たされなかった。

もちろん、楽しかったら楽しいし、悲しかったら悲しく、怒るときは本気で怒る。その時抱いた感情に嘘はなく、偽ることのない本当の気持ちだ。

だが、ただ単純に、満たされないのだ。何をしても、どんなに笑っても、後から生まれるのは心地良い余韻ではなく空虚な気持ち。

心に穴が開いたようで虚しく、何かが違うと引つかかるモノはこびり付いた泥のようで気持ちが悪い。

いつしか私の視点は違うものになっていた。私を見守ってくれる人達の外から、私は観察するように俯瞰的で、当事者ではなく文字通り蚊帳の外から見るようになっていた。

そして、私が長年抱いていた違和感を自覚することが出来たのはいつの頃だっただろうか。

覚えていないが、その時の感覚は鮮明に覚えている。気持ち良いほど不気味で、気持ち悪いほどすんなりと、自身の異常性を受け入れることが出来た。

——ああ、やっぱりか——と。

胸のつつかえが取れたように、長年引つかかっていた違和感が消え、私はもしかしたらこの時が初めて第三者から当事者へと視点を變えることが出来た。

それは——死への憧れ。

自分自身すらもふとした瞬間抑えきれない駆られる破壊衝動。そして、生命を賭して「何か」を成す行為。どうやら私はそんな他人から見た行為が、堪らなく大好きのようなうだ。

死とは暗闇だ。生命が終わった先には何も起こらず、何かが生まれることはない。始まりがあるのなら必ず終わりは訪れる。生命も同じだ。生きている限り、死は絶対に逃れられない宿命。その先にあるのは天国でも地獄でもない。この二つは未知の恐怖を和らげるために人間が勝手に作った、有りもしない概念。死の先に待っているのは完全なる闇。何もなかったあの虚無でしかない。

人間は本能的にわかっている。

天国なんてものは存在せずに、地獄ですら存在しない、と。だからこそ人は死にたくなくと足掻き、何とか延命しようと藻掻く。

当然、人は死にたくないと願う生き物だ。

ならば、極限の状態に置かれたら？ 生き残るために、何者かを犠牲に生き残れない環境になったら？

一瞬の油断が命取り、一寸先の闇であるかのように、何が起こるか読めない状況——言わば殺し合いのような日常になったら？

それこそ滾るといふものだ。ギリギリの命のやり取り、隣で笑い合っていた人が、明日になれば敵同士になるような、混沌とした世界。私はそんな理不尽な世界を、幼い頃から望んでいたのかもしれない。

最初から、狂っていれば楽だった。私という人間性が、生まれたと
きから欠如しているのなら、苦しまずに済んだのだろう。

しかし、神様は残酷だ。不平等を平等に与えてくる。私は狂ってい
ると同時に、人並の常識という装置が備わっていたようだ。殺し合い
が出来ればそれは楽しい。その反面、私は同時に抑止してしまうの
だ。それはイケないことである、と。本能が暴走を促し、理性が静止
を呼びかける。私のストレスは最高潮に達しようとしていた。

限界に達しようとしていた私にとって、ソードアート・オンライン
は福音といえる存在だった。

仮想世界で、限りなく現実に近い世界で、私は合法的に命のやり取
りが出来る。もちろん、プレイヤーをキルしても死ぬことはなくゲー
ムオーバーとなる。

運良くベータテスターに選ばれるものの、運悪く本稼働の際に私は
どうしても外せない用事が出来てしまいログインすることは叶わな
かった。だがその時の私は軽い気持ちで考えていた。別に今日が駄
目でも、明日改めてログインすればいいだけだ、と。

次の日、私の耳に入ったのは一報。

ソードアート・オンラインが本当の意味でのデスゲームになった。

ゲーム内で命を落とした者は、現実でも脳を頭に装着されたVR
ゲームハード『ナーヴギア』に焼かれて命を落とすことになる、正真
正銘のデスゲームへと変貌を遂げた。

そして私は“運良く”逃れることが出来てしまった。

ある人は運が良かったねと胸を撫で下ろす——違う。

ある人は心配したよと泣いてくれた——そうじゃない。

ある人は巻き込まれた人が心配だねと既に他人事になっていた——
——黙れ。

心配してくれるのは嬉しく、私のために泣いてくれるのも嬉しい、
他人事のような気持ちになるのも分かる。だがそれ以上に、私の胸に
宿ったのは“怒り”だった。

ゲーム内で人が死ねば現実でも死ぬ。結構なことだ。最低限の人間性を持つているものの、それでもイカれている私は『人生最高のゲームを遊ぶ機会を逃した』と本気でキレていた。

その後のことはあまり覚えていない。

物に当たり、ガラスを砕き、自傷行為をひたすら繰り返し、恋人の肉体すらも痛めつけた。

私が我に返ってころには何もかもが破壊しつくされた後。血だらけで骨が折れている衣服を纏っていない恋人と、散乱した家具、ビリビリに破かれた羽毛布団、辺りに散らばっている硝子の破片。それからは極力、ソードアート・オンラインのことを考えないようにしていた。再び怒り狂ってモノに当たる恐れでも、恋人に八つ当たりしてしまう後ろめたさによるものでもない。ただ私は怒り、残された理性を焼ききらないように、必死に自身の本能を押さえつけていただけだ。

そしある日、ソードアート・オンラインはクリアされ、生き残り現実世界へと帰還したものはSAO帰還者サブバイパーと呼ばれるようになった。

世間では彼らを同情の眼、奇異な眼で見つめる。私が抱いていたのは——羨望だ。

ただ純粹に羨ましかった。

閉ざされた仮想世界で、まるで蠱毒のように殺し合い、屍山血河を作るが如くプレイヤーは命を賭したのだろう。

それは通常では経験ができない体験。つまるところ、私が一番望んでいたモノだから。

羨ましい本当に羨ましい。SAO帰還者サブバイパーを見つめる私の眼は、さぞかし滑稽なものに違いない。負け犬が情けなく、お預けをくらったような未練がましい。彼らがSAO帰還者サブバイパーというのなら、参加できなかった私はさしずめ“SAO失敗者ルーザー”と言えるのかもしれない。

それから数ヶ月後。

VRMMOのガンゲイル・オンラインに没頭していた。ひたすらにやり尽くし、ひたすらに課金しまくる。休みの日はずっと遊んでいる毎日。私がハマっている理由は簡単、ガンゲイル・オンラインが一番

『死』に近いからだ。魔法や剣といったファンタジー要素は要らない。火薬と薬莖の銃の世界。それはまるで現実のようで、私はガンゲイル・オンラインをやればやるほどハマリしていった。

とはいえ、ソードアート・オンラインのようにガンゲイル・オンラインはデスゲームというわけでもない。しかしガス抜き程度にはなっているし、何よりも銃をぶっ放すのは楽しかった。

私の名もある程度は有名になってきた頃、耳を疑う情報が入ってきた。

ソードアート・オンラインで意図的にプレイヤーを殺すプレイヤーが存在していた。つまりPKを行う集団ギルドが存在していたということ。そこで話しが終わっていれば、私は再び暴走したかもしれない。

——SAOをやっていたら、そんな人殺しプレイヤーになれたのに！——。

——そいつら を正義の名の下にぶち殺すことができたのに！——。

再び、物に八つ当たりし、恋人を文字通りの意味で叩き潰していたかもしれない。

問題はこの後だ。意図的にPKを行う集団ギルドが確かに存在していた。そして最低である集団ギルドは、一人のプレイヤーに——壊滅させられていたという。

本来であれば破壊衝動のまま暴れていた私を止めたのは、そのプレイヤーの存在。

興味を惹かれて、自然と愛憎が入り混じっていくのに時間はかからなかった。

それもその筈だ。そのプレイヤーは——“彼”は私がやりたかったことを、人殺しプレイヤーを大義名分のままぶち殺すという行為を、一番楽しい行為を、横取りしたのだから。

羨ましくもあり、ズルいと拗ねて、“彼”と会ってみたいと思うようになっただけだった。もちろん、談笑して終わるつもりもない。ありと

あらゆる雑言をぶつけて、人の尊厳を踏みにじるような罵詈雑言を吐き出して、殴りつけてやらないと気が済まない。

恋人には「彼」の詳しい情報を調べ上げるように指示を出している。

家族構成、今までの過去、住居まで知るのにそう時間はかからないことだろう。ならば、あとは簡単だ。直接、私が赴いて、自分勝手に発散すればいい。

だがそれ以上に――。

――そうだ。

――良いことを思いついた。

――嘆いている場合じゃない。

――S A O失敗者なんて拗ねていることもない。

愉シイ事ヲ、思イツイテ、シマツタ。

どうして思いつかなかつたのだろう、どうして気付かなかつたのだろう。

ソードアート・オンラインをプレイ出来なくてもいいじゃないか。だって――。

――いるじゃないか、ここに。

――私がヤリたかつたことをやって人間が。

――血も涙もない、獣がここに。

一人でクソ集団を潰した、最高のクソ野郎。

きつと「彼」は私と同じように、イカれているに違いない。

だって、そうに決まっている。私のように、イカれていなければ、一人でも人殺し集団とやり合うわけがないのだ。

自分も死ぬかもしれないのに、たったの独りで、大人数を相手取るわけがない。私と同類。極限の命のやりとり興奮するようなサイコ野郎。そうでなければ道理が合わない、そうでなければ筋が通らな

い、そうでなければならぬ。

自然と笑みが溢れる。

きつと今の私は人の顔をしてないに違いない。肉食獣が獲物を見つけたように、新しいオモチャを見つけた子供のように、抑えきれない歓喜は獰猛なる笑みとなって私を破顔させていく。

“彼”ならば、私のどうしもない乾きを癒やしてくれるに違いない。

私がやりたかったことを掠め取った泥棒猫、私と同じようにイカれている“愛しの旦那様”。

それは恋に想いを馳せるように、愛を紡ぐように、日を追うことに私は“彼”だけを考えるようになっていった。

“彼”のことを考えると気分が高揚し、“彼”のことを思うと身体が熱くなり、その欲情を恋人にぶつけていく。

——君が私に会いたくなるような展開を作ってあげる。

——君が私と殺し合うような場を設けてあげる。

——もう逃さない。

——さあ、私と殺し合おう。

人殺し集団すら恐れ、感情のないプログラムであるモンスターすら道を開けて、強大な暴力を有しているフロアボスですら畏怖する規格外。正にバーサーカー、狂戦士、ベルセルク。

“彼”はこう呼ばれている——“アインクラッドの恐怖”——と。

第19話 強さの定義

2025年6月16日 PM17:10

某所 喫茶店

—— 生きた心地がしなかった。

学校帰りなのだろう。

一人の少年が学生服姿のまま、喫茶店の席に腰掛けている。その様子はどこか妙なもので、肩狭く居心地が悪そうである。

初めての訪れる場所だからかしまっている——といった調子ではない。むしろその真逆。現在、彼が訪れている場所は慣れ親しんだ喫茶店。時間に余裕があれば、一人でも訪れる事が出来る程度には常連となっていると言えよう。それこそ他人に紹介できるくらいには、この喫茶店を知り尽くしている。

現に、彼以外の二人と喫茶店へ訪れたことがある。

とある事情で気になっている同級生、そしてその先輩と、彼は来たことがあった。

となると、彼が何故ここまで肩身狭くしているのか。

慣れ親しんだ、それこそ彼のホームとなり得るフィールドがこの喫茶店。

だというのにオロオロと、どこか言葉を選ぶかのように、視線は右往左往している。まるで生きた心地がない、というのが彼の今の心境である。ならば原因は何か、どこにその理由があるのか。

“それ”は彼の近くにいた。というよりもそれは、彼の目の前の席に座っている。メニュー表を見ながら、どこか浮ついた調子で何を頼もうか迷っている。“それ”は様子を窺う調子の彼の視線を察したようだ。目付きの悪い眼は一寸のブレもなく彼を見つめて。

「どうした？」

「いや、あの……」

はたしてどう言えばいいのか。
聞きたいようで、あまり聞きたくない。聴いたら最後、本題に入る
ことになる。

正直に言うと、彼はかなり怯えていた。

それもその筈。眼の前に座っているのは、ここいら一帯を仕切つて
いた不良グループを壊滅させた男だ。しかも他のチームを率いて
争つた、つまりは抗争といった類のものではない。ただ気に入らない
からという理由だけで、たつた一人で喧嘩を売り、打ち勝つてしまつ
た程の戦力を一人が有しているという事実。

つまるところの、彼の前で座っている男は規格外の存在。人間の皮
をかぶつた獣と対峙しているかのようであり、そんな規格外から連絡
があり、喫茶店でこうして席を共にしている。

正直に言うと落ち着かない。

連絡があり、こうして直に会うとなると、何か話があるというこ
とだろう。

彼にとつて心当たりが有りすぎる。内容によっては、対応も変わつ
てくるというものだ。だとしても、このまま保留にしても話しが進ま
ない。

意を決して彼——新川恭二は自身を鼓舞するように声を張り
上げて。

「あ、あのっ！」

「お、おう？」

規格外の存在が怯んだ。

何事かと驚いた調子で恭二の方へと視線と意識を向ける。

ここで畳み掛けようと、恭二は身を乗り出す。

「聞きたいことがつ——」

「ちよ、ちよつと待て新川くん」

「はい？」

「周り。周りを見てみる」

「周り？」

言葉に従い、周囲へと視線を向ける。

この場にいるのは彼らだけではない。ちらほらと、カウンター席に数人、テーブル席にも数人、確かに客は存在しており、全員が奇異な眼で恭二を見つめていた。

声の張り上げる場所が、それ相応の場所ならば問題はなかった。しかしここは喫茶店であり、しかも物静かな雰囲気売りとしている場所。恭二のように声を張り上げるのは不釣り合いとも言えるだろう。

恭二もその辺りを理解しており、羞恥のせいもあつてか見る見るうちに顔を赤く染め、先程の肩身狭くしていた調子よりも更に小さくなつて着席する。

その様子を最初から見ていた規格外の存在——茅場優希は不謹慎であると自覚しているものの面白かったのか、口元に小さく笑みを浮かべて逆に問いを投げた。

「いきなりどうしたんだ？」

「すみません。優希さんが僕を呼び出した理由を知りたくて、気が動転して、テンパちゃって……」

「そんなことか」

恭二の聞きたいことがわかった、しかしどうしてそれで気が動転するのか理解が出来ないのか、優希は不思議そうに首を傾げて。

「つーかよ、呼び出した理由って前に言ってたヤツなんだけど」

「前に言ってたやつ……？」

皆目検討がつかない。

恭二と優希、この二人は確かにお互いの連絡先を知っているし、知っているからこそこうして二人で喫茶店に訪れる事も出来る。

だからと言って、頻繁連絡を取り合っているというわけでもない。それに自分から連絡することはどうにも恭二は気げ引けた。理由はわかつている。彼は恭二が憧れている人の――。

そこまで考えて、恭二は首を横に振った。

雑念を払うように、事実から目を背けるように、恭二は今ある問題に専念することにする。

「前に言ってたやつって、なんですか？」

「なんだ、忘れてたのかよ」

軽く肩を竦めて、優希は続ける。

「朝田にちよつかいかけている連中のこと教えてくれただろ」

「言いましたね……」

「ンで、今度礼をするって言ったべ」

「……あつ」

すつかり、忘れていた。

と言うよりも、社交辞令として受け取っており、恭二本人が本気で受け止めていなかった。何せ自分は情報を流しただけだ。実際に行動に移したのは優希なのだから、礼を言われる謂れもない筈。

そんな恭二の心境も知らずに、優希は退屈そうな口調で述べる。

「だからここではオレが奢らせてもらうぜ。ちなみにこのパンケーキはデラウマ」

「ぱ、パンケーキ？ 甘い物好きなんですか？」

「まあな。暇な時は一人で食べ歩いている」

「意外ですね……」

「あまり知られたくねえけどな。オレもそう思うよ」

「どうして僕に教えてくれたんですか？」

「あまり仲良くねえからじゃねえの？」

そこまで言うと、悪い、と直ぐに謝罪して優希はバツの悪そうな顔で言葉を選びながら続けて。

「悪い意味じゃねえんだ。オレもそうだが、新川くんもオレを良く知らねえだろ？ だから言いやすかった。別に新川くんがどうのこうのって意味じゃない」

「ああ、そういう意味だったんですね」

「悪いな。最近気がついたんだが、どうもオレは言葉が足りない節があるみたいだ」

人のイメージとは払拭し難いものだ。

人は外見、対応次第で枠に嵌めて考えようとする。外見が強面だがその実、可愛いもの好きなのがギャップを産むように。軟弱そうな外見なのに、アウトロー漫画を好む意外性が存在する。

それを人によっては、ギャップがあり好みが別れるだろう。しかし優希は仲間内に、彼が親しくしている人達にバレたくないようだ。だから自分が甘い物好きという事実を、恭二に伝えることが出来たのだろう。

恭二は考える。

優希が甘いもの好き。それは意外なものだ。

あまり付き合いがない恭二がそう感じているのだ、優希という人物を恭二以上に知っている者が聞くと強烈な事実として伝わるに違いない。

それにしても何と律儀なことだろうか、と恭二は思う。

何もしてないに等しい自分にまで礼として奢りに来るのだ。義理堅いにも程がある、と考えながら。

「優希さんの気持ちも嬉しいですけど、何も奢ってくれなくても大丈夫

夫ですよ」

「新川くんが大丈夫でも、オレが大丈夫じゃねえんだ。歳下は黙って歳上に奢られる」

「でも僕がやったことなんて些細なことだし、それに朝田さんなら何とかすると思うんですよ」

「それはどういう意味だ？」

訝しむ視線で優希は恭二に問う。

しかし恭二は自信満々な調子で彼は断言するように答える。

「だって、朝田さんって強いじゃないですか？」

「アイツが、強い……？」

「はいっ！」

疑うことなく力強い頷きを持って応じると。

「彼女はクールで、超然としてて、何事も動じなくて、絡まれている僕を助けてくれて——！」

——悪人を撃ち殺す事が出来る、強い人ですから。

そんな言葉が最後まで続くことはない。

恭二は熱が籠もりつつある弁論を控えた。控えざるを得なかった。

熱狂する彼の心を冷やすように、目の前に座っている人物は口元を片手で覆い何かを考えている。それが恭二には眼についた。自身の言葉に同意することも否定することもなく、そういう見方もあるのかと受け入れて、その上で茅場優希という先輩は後輩を考えている。

違和感があった。

自分と優希の間に無視できない程の温度差があることを、恭二はここに來て気付く。その原因がどこにあるのか、確認するように恭二は恐る恐るといった調子で尋ねる。

「……どうか、しました?」

「あ、いや。新川くんはそう考えているのか、って思ってたな」

その言葉は明らかに恭二とは違うモノを感じていた。

朝田詩乃という女性を強いとは思っていない、ということは弱いと思っているとしたか考えられない。それはつまり、自身の意見を否定されたということ。

とは言え、恭二の顔色に不快な表情は見られない。むしろ興味深かった。彼もまた強者側の人間と言える。強者が強者をどう評価するのか、恭二は純粹に興味を惹かれていた。

「優希さんはどう思っているんですか?」

「オレは、そうだな……」

オレなんぞが評価するのもアイツに申し訳ねえが、と言うと続けて。

「腹立った」

「腹……?」

強いでもなく、弱いでもない。腹が立つと評した優希の心理をいまいち推し量れない。

何を持って朝田詩乃見て癪に障ったのか、そう尋ねる前に優希は口を開いた。

「オレとアイツは結構長い付き合いだな。何となく把握しているつもりだ」

「朝田さんから聞きました。小学校からでしたっけ?」

「ああ。その時からアイツは妙なクソに絡まれててさ。結構エグいこともされてた」

「それで優希さんが助けた……」

その言葉に間髪入れずに、優希は否定する。

いいや、と。力強い否定があり、忌々しい舌打ちを以て、苦虫を噛み砕いたような苦い顔で、納得しない調子で。

「助けてねえよ。目障りだったから首を突っ込んだだけだ。朝田もアイツに絡んでたクソも」

「えっ、朝田さんも目障り!？」

意外そうに目を丸くする恭二を見て、おう、と首を縦に振って優希は続けて言う。

「どっちも目障りだつーの。どんな仕打ちされようが、どんな扱いを受けようが、朝田は泣き言一つ言わなかった」

「それがどうして目障りに……?」

「泣き言一つ言わなかったが、泣いてたからなアイツ」

「朝田さんが、泣いていた……?」

そんなに意外だったのか、呆然とした口調で恭二は呟いた。

「その癖、理不尽な仕打ちされても当たり前だって受け入れやがる。いつか壊れるに決まっているのに、悲鳴一つも上げない。見ようによつては強くも見えるし、実際アイツはそこまで弱くはねえよ」

でもな、と言葉を区切ると忌々しげに続けて。

「アイツは辛い目ばかりあつてきた。確かに自業自得かもしれない、アイツがやらかした事は手放しで褒められたモノでもないだろう。だがな、幸せになっちゃいけないなんてルールもない筈だ」

チツ、と苛立たしそうに舌打ちをして。

「アイツにも、アイツを害する連中にも、オレはムカついた。小学の頃のアイツは自分に降りかかる理不尽すら抵抗するつもりがなかった。違うだろ。辛い目にあつたんだ、その分幸せになってもいい筈だ。やめてって叫べばいいのに、アイツは何も言わなかった。だからオレは腹が立って首を突っ込んだ」

「だから優希さんは腹が立った、と」

「ガキみたいな理由だろ？ 当時のオレは、アイツが強い弱いなんて考えてなかったけどな。今は——」

「今は？」

「その、なんだ。朝田は凄い事やったと思うわ。オレには出来ないことをやった訳だしな」

どこか遠い目で、されど憎悪がり、その中には微かな悲壮が覗いていた。

何があつたのか、とは恭二には聞けなかった。きっと過去、彼も何かあつたのだろう。それこそ今でも後悔するような、悔いるような何かを経験しているのだろう。それがソードアート・オンラインでの出来事なのか、はたまたもつと過去の話なのか、それ以上踏み込めない恭二には何もわからない。

しかしこれだけは断言出来る。

自分は二人との間に、大きな開きがあると。何も経験を積んでいない、何も体験していない、ゲームが取り柄だけの自分。

兄とは違って、死線を潜ってきた訳でもない。新川恭二という人間はなんとも弱い人間で、何も出来ない存在なことか。

「二人共、凄いですね。比べて僕なんて大したことなくて……」

無意識に、そんなことを口にしてしまった。

次に起こるのは憂鬱だ。気が落ちて、何もかもが鬱陶しく、自分自身を卑下する。

だが――。

「何言ってるんだ？」

「え……？」

俯いていた顔を上げる。

そこには恭二から見た強者の一人である茅場優希が首を傾げて不思議そうに。

「新川くんだって凄いことしただろ」

「それって、優希さんに情報を流したことですか？」

「ああ」

頷いて断言する優希に、思わず恭二は小馬鹿にした態度で鼻で笑うと。

「実際に行動に移したのは優希さんでしょう。慰めならやめて下さいよ」

「バカ。情報があったから、オレは動けたんだろうが。新川くんから連絡がなければ朝田がどうなってたかわからねえよ」

「それは、そうですが……」

「それに、だ。アンタがオレに連絡をくれたってことは、クソ連中を止めることが自分には出来ないってわかってたからだろ？」

口にされると惨めさが加速する。

恭二は小さく頷いた。言葉にすると自分の惨めさが浮き彫りになると考えていたから。

だが優希は否定する。

恭二は惨めではないと、むしろ感心するような口調で。

「自分には出来ないことを、何者かに頼る。とある人の受け売りだが、

頼ることも一つの強さだと思っぜ」

「二つの、強さ？」

「出来ないことを認めるのも大したもんだ。何でもかんでも一人でやろうとして、大失敗したクソ野郎がいる。一人では成し遂げられないことがあるってわからないで、一人で突っ走って、周りに迷惑をかけたな。本当にクソ野郎だ、そいつはマジで死んだ方がいい野郎だとオレは思ってる。そのクソに比べたら、新川くんは大した奴さ」

「僕が、大したヤツ……？」

恭二にとって強さの定義は実にシンプルなものだ。

誰よりも強く、誰よりも疾く、誰よりも負けずに、絶対に勝つ。それが恭二のもつ強さの定義。それが全てであり、それを有していたからこそ、朝田詩乃に彼は憧れを抱いていた。

しかしここで、その定義が崩れつつある。

強者の一人である茅場優希は断言した。誰かを頼るのも強さであり、自分には出来ないことを認めることも強さでもあると。

あまつさえ彼は、新川恭二は大した人間だと。

まるでそれは——恭二という人間を見ているかのような言葉だった。

「少なくとも、アンタは凄いヤツだと思ってる。アンタがいたから、朝田は救われたんだ。だから、まあアレだ。アンタはもつと胸を張っていいと思っぜ？」

ここで言葉を失った。

優希は間違いなく言った。朝田を救ったのは恭二であり、自分ではないと。それこそありえない。確かに情報を流したのは恭二であるが、実際に遠藤とその仲間達を止めたのは優希だ。その事実は間違いなく、覆りようなない真実でもある。それが分かっている優希ではない。わかった上で断言しているのだ。朝田を救ったのは自分では

なく、恭二であるのだと。

聖人君子と謳うには歪。

悪逆非道と避難するには潔すぎる。

茅場優希という人間は、付き合いの浅い自分にはそれだけでは推し量れないナニかを内に秘めている。

だが、これだけは言える。

——ありがとうございます、優希さん。

——誰かに称賛されるなんて初めてだった。

——僕という存在を認められるなんて、初めてだった。

——両親にも、兄にも、認めてくれなかった僕を認めてくれた。

「そういうえば朝田って学校来てんのか？」

「来てるけど、どうかしました？」

「最近アイツと連絡取れてねえからさ」

「多分、朝田さんですけどね——」

——もう少し早く、貴方に会いたかつ

た——

——そうしたら僕も、変わったかもしれな

いのに——

幕間 妹同盟

二人の剣姫が相対していた。

一人は片手剣を構え、もう一人の獲物は長刀でそれを両手に持つ。剣を両手に構える。

獲物の剣先を相手の眼に向けて構え、右足を一步前にしている様は、どこか剣道の中段の構えに通じていた。正眼の構え、人の構え、水の構えとはよく言ったもの。この構えから、他の全ての構えにスムーズに移行することができ、どんな攻めに対しても、瞬時に対応することが出来る。突かれるものなら剣先で受け流し、振り下ろされるものなら剣背で受ける。正に基本の構え。

攻防共に隙が少なく、何よりも無駄がない。現代では剣道の基本として教えられる構え。それこそが「中段の構え」と呼ばれるモノであり、きつと彼女の最も得意とする構えだろう。

対する少女は、構えと言う構えをとっていない。いや、少女の今の姿が少女本来の構えと呼ばれるモノなのか。

片手に持つ剣先は地に向けて腰を落とす。中段の構えをとっている彼女とは対照的で、奔放な様子でもある。一見、侮っているようにも見えるが、実際はその真逆。口元には笑みを張り付かせ、どこか楽しそうでもあるが、少女は明らかに目の前の彼女を警戒していた。

一挙手一投足。

表情の変化、何一つ見逃さないと言わんばかりに、集中し観察している。

それを彼女もまた油断することなく、少女を見つめていた。

奇妙な光景だった。

彼女達がいるのは、アルヴ Heim・オンラインに浮かぶ浮遊城アインクラッド。その第一層であるはじまりの街。

誰もが第一層の攻略をせんと、一層目のフロアボスが居る迷宮区に足を運んでいる。なのに彼女達はそんなものには目を向けずに、ただ眼前に存在する者に意識を集中させていた。

周囲の人影は少なく、数少ない見物人達は固唾をのんで彼女達の動きに注目していた。

わかつているのだ。

初心者でも、上級者でも、腕に覚えるがあるプレイヤーでも。誰もが理解している。

達人達による勝負が一瞬で決まるように、彼女達の剣撃も一瞬で決着すると。ならば無駄話などしてられない、余所見などもつての外。そんなつまらないことをして見逃してしまうなど勿体無い。

誰かが生唾を飲み込み、一陣の風が吹いて、鳥が羽ばたいた。

それが合図となったのか二人は同時に疾走を始めていた――。

「あー、負けた負けたー！」

悔しそうに、されどどこか気持ちよさそうに、長刀を構えていた彼女――リーファは自身の敗北を言葉としていた。

彼女も自身の腕には覚えがある方だ。先程行っていた決闘するにあたって、リーファの実力相当なものだ。彼女が所属している風妖精族シルフの中でも指折りの実力者でもある。

それもあってか、決闘デュエルにおいてリーファはかなりの自信を持っていた。

そして、今正に自分は得意であった決闘デュエルで敗北したという事実。悔しいという気持ちはもちろんある。だがそれ以上に気持ち良かった。自分の持てる実力を発揮し負けたのだ。不完全燃焼ではなく完全燃焼。やれることをやって負けたのだから、悔いなどあるわけがなかった。

対する少女も笑顔。

今まで真剣に剣を振るい、相対していたとは思えないほど気持ちの良い笑顔を向けて片手剣の少女――ユウキはリーファを純粹な気持ちで讚えていた。

「いやあ、危なかつたよー。リーファ滅茶苦茶強いから、ボクずっと集中してて疲れたもん」

「本当？ 統一デュエルトーナメント優勝者にそう言ってもらえると、なんだか嬉しいな」

それは本心での言葉だった。

自分よりも一回り小さい目の前の少女は、かつて大々的に行われた統一デュエルトーナメントの優勝者である。リーファも出場していたからこそわかる。並大抵の実力者では勝ち残れない、文字通り熾烈を極まった大会だった。それこそ、運だけでは到底勝ち残ることなど不可能。真の意味での強者でなければ優勝など出来なかつただろう。

そして今現在、リーファは肌で感じていた。優勝者と相対して、彼女がどれほどの怪物なのか理解することが出来た。

ユウキは本物の天才だ。

今では笑顔で天真爛漫にしているが、いざ剣を持つと変貌を遂げる。性格が変わるといったことではない。純粹無垢で、何事も楽しそうにしている姿は変わらない。

雰囲気が違うのだ。透き通る紫色の双眸は真つ直ぐに自身に向けられて、些細な変化すら見逃さない。

その視線はまるで剣だ。一本の剣だ。真つ直ぐに剣先を向けるかのように、視線が動くことはない。

こと一対一において、ユウキに勝るプレイヤーなど存在しない。そこまで断言できるほど、リーファから見た少女は圧倒的だった。少しでも斬り結べていたのが奇跡であるかのよう。

しかし、だというのに、絶剣と呼ばれる少女は慌てながら否定するように手を横に降つて。

「やめてよー。ボクが優勝できたのは運が良かったからだもん」

「そんなことないってー。ユウキちゃん凄い強かった。実際戦ったあたしが言うんだもん、間違いないよ」

そう、誰よりも強かった。

今まで戦ってきたプレイヤーよりも。同じ風妖精族であるサクヤよりも、ALO最強の一角と呼ばれているユージョン將軍よりも、ユウキは強かった。

だがユウキは否定する。自分が優勝したのは運が良かっただけである、と。

謙遜、とは何やら違う。ユウキは本気でそう思っている。本気で自分が優勝できたのは幸運だったからと断言していた。

ユウキの言い分が変わることはない。

少女は何やら困ったような笑みを浮かべて。

「ありがとう、リーファ。でもボクより強い人達が調子悪かったから優勝しただけで、本当に運が良かっただけなんだ」

「ユウキちゃんよりも、強い人達……?」

思わずリーファは訝しみながら首を傾げる。

ユウキよりも強い、しかも「達」ということは複数形だ。はたしてそんなプレイヤーが存在するのか。リーファは皆目検討がつかない。一体全体それは誰のことを言っているのか。

対するユウキは、ほら、と促しながら続けて言う。

「二人はボクのにーちゃんでしょう?」

「ユウキちゃんのお兄さん?」

思い浮かべたのは、目付きが悪く口も悪く態度も粗暴で、兄という割にはユウキに全く似ていない金髪碧眼の男性。

どこか近寄りがたく、リーファも一言二言程度しか会話していないことを覚えている。正直に言うと、リーファはユウキの兄を苦手としていた。しかしユウキが懐いていることや、何だかんだ言ってるリーファの兄も一緒にいることから、悪い人間ではないことはわかる。

だが言われてみれば確かに、とリーファは頷いた。

彼女がユウキの兄を苦手としている理由の一つ。どこか彼には凄みがある。彼の纏う空気は、どこか現実離れたものがあり、常人では推し量れない何かを秘めているのをリーファは無意識に感じていた。

現実世界でも剣道を嗜んでいるリーファだからこそわかる。アレは武士に似たモノ、言うなれば戦士。厳密に言うと、戦う者の雰囲気であると。

であれば納得する。

ユウキの兄であれば、納得することも出来る。

しかし次に出てくる人物だけは、リーファの予想外のモノだった。

「もう一人はキリトだね」

「えっ、お兄ちゃん!？」

聞き間違いではないようだ。

目を丸くするリーファを他所に、ユウキはうんと自信満々に頷いて。

「キリトはにーちゃんに勝った人だしね」

「うそ……」

呆然と呟くりーファは想像が出来なかった。

剣呑な雰囲気や常に纏っている人物に、明らかに常人とはかけ離れた人物に、自身の兄が勝利したという現実。リーファにとって受け入れ難いモノだった。

何せリーファが知るキリト——桐ヶ谷和人は普通の少年だ。

家にいればだらしなく、それこそ休日なら昼過ぎに起きてくることなどしよっちゅう。家事全般など自分や母に任せっきりで、一人では料理すら出来ないと言言できる。確かに「はじまりの英雄」と呼ばれているのを何度も耳にしたしめにしたことがある。だがリーファ

にはまるで実感が湧かなかった。彼女の中ではあくまでだらしない兄であり、放っておけない初恋の男の子なのだ。

そんな兄が、絶剣と称されるユウキよりも、ユウキの兄である彼よりも、強いという事実。

「同姓同名の別の人じゃないの？」

出した結論が別人。

うーん、と考えてひねり出した答えがソレであった。

「キリトはキリトしかないよっ！ リーフアも見てたでしょ、シルフ百人斬り！」

「た、確かに見てたけど……」

ついでに見惚れてたけど、と心の中で付け加えてリーフアは少しだけ頬を紅潮させて続けた。

どうやら当時の状況を思い出してしまったようだ。

「想像ができないと言うか……」

「リーフアは頑固だなー」

「だ、だって……！」

「でも、うん。リーフアの気持ちも何となくわかるよ」

「ふえ？」

情けない声を上げるリーフアに、ユウキは笑顔で頷いて。

「キリト何も無いとき抜けてるもんね。SAOのときもそうだったよ」

「えっ、そうなの？」

「うん。何も無いときはボク達のギルドホームの木陰で寝ているか、ユイと遊んでるかしかしてなかったなー」

「……それは想像出来る」

目を細めて納得するリーファに、苦笑を浮かべて。

「でもね、凄いときは凄いんだよ。こう、なんだろう。ボクが考えもつかない事をやっちゃうんだ」

だからね、と言葉を区切りユウキは好戦的な笑みを浮かべて続ける。

「ボクはキリトに勝ちたい。仇討ちってわけじゃないけど、にーちゃんに勝ったキリトに、ボクはどうしても勝ちたいんだ」

何という向上心の塊だろうか。

自然とリーファは感心していた。同世代でも歳上でも、ましてや歳下でも彼女のように上を向いている人間は見たことがなかった。

今いる位置では満足できない。まだまだ、まだ自分は出来る筈だ、と上を見ている。それでいて、ユウキは楽しんでた。楽しんで、努力をして、更に楽しみ、自分の至らぬ部分を貪欲に吸収する。どうりで強い筈だ、どうりで上手い筈だ。天才が何よりも楽しんで努力しているのだ。強くない筈がなかった。

リーファから自然と笑みが溢れる。

本当に彼女は凄い、と心から尊敬できる。競技者として、何よりも武道を嗜む身として、ユウキは手本となるところばかりだった。

「それじゃ、あたしはユウキちゃんのお兄さんに勝とうかなー」

「えっ、どうして!?!」

「ユウキちゃんがお兄ちゃんと戦うんでしょ？ だったらあたしも頑張らないとなーって」

「ボクがキリトに勝って、リーファがにーちゃんに勝つ、かー。……うん、面白そうだね!」

「もしくはさ、あたし達対お兄ちゃん達っていうのも楽しそうじゃない？」

「わー、なにそれ！ 楽しそう！ やりたいやりたい、それやってみたいよボク！」

両手を上げて、身体いっぱい使って表現するユウキに、リーファは同じく笑う。

兄を持つ妹同士、気が合うようだ。

談笑し合い、自然流れて決闘を再び再開する二人。

トップクラスの二人のプレイヤーの決闘だ。人垣が出来上がるのは時間の問題であり、夜遅いこともあってかユウキを迎えに少女の兄が登場し一波乱が起きるのも、そう遠くない――。

第20話 銃の世界

——私にとって、世界とは単純な構造となっている——。
ここで言う世界とは、地球上での世界を表しているモノではない。
もっと抽象的な、漠然としている、言ってしまうえば私の中の世界。
言ってしまうえば精神的な意味を表している。

そこは心地良い場所だった。私を害する存在などいなくて、少数しかいないものの、私にとっては完成された空間だ。他人が見たら閉鎖的だと思うかもしれない。それもそうだろう、私自身がそう思っているのだから。

私にとって、世界とはシンプルなものだ。

私と先輩か、それ意外の連中に別けられている。私はそれで充分だった。先輩がいる、それだけで満ち足りていた。それ以上など要らない、それ以上など必要としない。私にとって必要なのは先輩だけ。彼さえいてくれれば何もいらぬし、世界を滅ぼして先輩を助ける、もしくは先輩を殺して世界を救う、そんな二択を迫られたら迷わず私は前者を選ぶ。先輩を殺さないと存続できない世界など、滅んでしまえばいい。

—— たった一人の人間を犠牲にしないと救えない世界なら、いさぎよく滅びるべきだ。

依存、というのだろう。

自覚している。私は先輩に依存しており、先輩がいないと私は命を投げ捨てる。そう言い切れてしまうほどに、彼に依存しているし、彼だけしか考えられない。

だが逆は、先輩はどう思っているのだろうか。

仲の良い後輩、だと思っている筈だ。現に世話を焼いてくれているし、心を開いた相手にしか見せない態度で先輩は私に接している。口悪く応じて、鋭い眼でこちらを見つめて、粗暴な態度で接する。それが先輩が心を開いた状態であり、それ以上の態度をとっている先輩を私は知らない。

だから以前までは言い切れていた。私——朝田詩乃は先輩にとっては中の良い後輩であると。

だがそれも、『以前』までの話しだ。

私は知ってしまった。私に接している態度以上に、心を許した者に向けられる表情があるのだと。

そしてそれが向けられる対象は私ではない。桐ヶ谷くんであったり、篠崎さんであったり、ミルズさんであったり、妹ちゃんであったり——明日奈さんであったりするのだろうか。

私の先輩は素直ではない。

本人達の前で決して、それこそ口が裂けても自身の本音を漏らすことはない。

しかし私は聞いている。先輩にとって彼らと彼女達はかけがえない存在であり、自分よりも強い連中で、手を伸ばし続けてくれた恩人であると。それは表情としても出ていた。眩しいものを見るような眼で、最大限の敬意を払った表情で、彼らと彼女達を先輩は見守っていた。

恐らく、彼女達や彼らは気付いていない。私だから気付けた、子供の頃の先輩を見てきたからこそ気付くことが出来た彼の僅かな差異。それにその見つめる眼は私が何よりも欲していた眼だから。

羨ましく、妬み、何よりも憎らしかった。

私だって先輩を想っているのに、私には先輩しかないのに、私には先輩しか必要としてないのに。彼らと彼女達は先輩を独占している。

相応のことを彼らと彼女達は成し遂げたのだろう。先輩のために命をかけて、手を伸ばし続けて、漸く先輩も受け入れたのだろう。先輩が自分の信条よりも先に彼らと彼女達の言い分を聞いたのだ、それは偉業といっても過言ではないことだ。凄い、なんてモノじゃない。尊敬に値する事を、成し遂げたのだろうか。

だけど私はそれを手放しで称賛できるほど、人間というものが出来ていないようだ。

我ながら醜いことだ、汚いことだ、嫌悪してもしきれない。ああ、わかつている。わかつているのだが、それでも私は抑えきれない。傲慢に嫉妬し、激情に駆られ、強欲に羨望する。

お門違いにも程がある。彼らや彼女達だって、先輩の特別になりたくて戦ってきたわけじゃないだろうに。きっと必死だったただけだ。先輩というわからず屋を追いつこうと、我武者羅だっただけに違いはない。

だとしても私は彼らや彼女達を、どうしても羨ましく思ってしまった。

同じ土俵にすら立っていない。

一歩も二歩も、私は後ろで先輩たちを見ているような感覚に陥る。こちらが懸命に走っても、追いつくことが、百歩進めたとしても、先輩たちの背は遠のくばかり。手を伸ばしても、先輩はこちらを見ようともしない。いくら呼んでも応えてくれない。最初から私が存在していなかのように、今度こそ先輩はこちらを一度たりとも見ないで、彼らや彼女達——明日奈さんと楽しげにしながら歩いていってしまう——。

「っ!？」

そこで私は目を覚まし、ベッドから跳ね起きた。

時計を見れば朝の10時頃。平日であれば余裕の遅刻コース。だが幸運なことに、今日は日曜日。学校はもちろん休校日となっている。

心臓の動機が激しい。

背筋には嫌な汗が滲み出る。

きっと今の顔色は真っ青になっているに違いない。

気の所為ではない吐き気に口元を抑える。

「こんなんじや、ダメ……!」

吐き出された言葉と同時に、脆弱な自分を引き千切る勢いで奥歯を噛みしめる。

まだだ、まだ足りない。

彼らや彼女達と同じ存在になるには、明日奈さんに負けないようにするには――先輩と肩を並べて歩くためには、今のままじゃ何もかもが足りない。

弱い自分を殺す。

何の変哲もない、人を殺すためだけに作られた道具に、過去に怯えているようでは、話しにならない。

そこまで考えて、私は無意識に枕の横に置いてあった、あるモノを手にしていった。

頭に装着するゴーグル上の装置『アミュスファイア』。

それはVRMMO、つまりはゲームをプレイするにあたって、重要な機械でもある。しかし私の中ではゲームを楽しむといった感情はない。

アミュスファイアを装着してプレイできるゲーム、それは私の過去の根源でもあり、弱さの象徴とも呼べる武器が多数存在する。同級生の新川くんに教えてもらったとおり、そのゲームは私が求める内容のものが揃っていた。

今の私は先輩の横に並べるほど強くない。むしろ守られる側になってしまっている。

以前ならばその立場も心地良いものだった。甘えて、依存し、墮落する。ぬるま湯のようで、決してそこから出たくないモノが確かにあった。

だが状況が変わった。

それでは先輩は振り向いてくれない。私も特別になるには、私自身が強くなるしかない。

耳につけたイヤリングへ触れる。

三日月の象られた、銀色のシルバーアクセサリー。かつて先輩が私

のために買ってくれたモノであり、ゲームをする際に毎回付けている
お守りでもある。

私と先輩を繋ぐ——大切な絆の象徴。

「今度は、私が、先輩を、守れるように、強くなる……」

誓うように、祈るように、告げるように。私は私自身に設けた誓約
を口にした。

私は弱い自分自身を、この手で撃ち殺す。
その為にも。

私は再び、自身のトラウマと、銃の世界へと。

「リンク・スタート」

.....
.....
.....

2025年6月22日 PM13:25

ALO 央都『アルン』 近隣草原地区

一振り、また一振り。

振る度に風切り音が鳴り、次に衝撃が小規模で “彼” 中心に発生す
る。

「彼」の手にするは、漆黑に染まっている画桿の方天戟。重量は相当のものであり、男性三人でやっと持てる規模の重さ。

それを軽々と、「彼」は奮っていた。時に斬り、時に突き、時に薙ぐ。あまりある膂力は、方天画戟の重さがなかったかのようにいとも容易く振るわれていく。

仮想世界とは言え、肉体は悲鳴をあげる。しかもかれこそ、「彼」は素振りを開始してから三時間は経過していた。現に、「彼」から止め処なく汗が流れ、息も僅かに上がっている。

鍛錬とは、苦痛を伴うものだ。身体が悲鳴を上げて、それを無視して自らを追い込んでいく儀式。それこそが鍛錬であり、努力というものだろう。

言わば、鍛錬とは努力とはそういうものだ。自らの身体を痛め続けて、限界まで追い込み、身体と心を鍛え上げていく。その行為こそが努力と呼ばれる儀式に他ならない。

とはいえ、「彼」の鍛錬方法は努力なんて生易しいモノではない。ある種の拷問と呼べる行為をしながら「彼」は思う。

——わからねえ。

——アイツは何を考えている……？

結論から言うと、「彼」の中では自分が鍛錬を行っているという認識はない。

ただ頭を空っぽにして考えたいから、方天画戟を素振りしている。そんな理由でしかなかった。とはいえ、「彼」が規格外なのは変わらない。考え事をしたいたいだけに、三時間規模の素振り。しかも相当の重量を有している方天画戟を全力で振るっているのだ。常人では考えられるものではなく、規格外と称しても差し支えないだろう。

更に規格外——ユーキは全力で方天画戟を振るっていく。

——何でわざわざ辛い目に合う？

——アイツの考えたことだ。

—— オレがとやかく言う筋合いはない。

—— ンなことはわかっている。

—— だが道理が合わねえ。

—— 銃ってのはアイツのトラウマの筈だ。

—— 考えたくもねえ過去の筈だ。

—— なのに、どうして？

ユーキの中でのアイツ。それは後輩である朝田詩乃に他ならない。何気なく連絡がつかないから、彼女の同級生である新川恭二に聞いたところ、彼はユーキが耳を疑う発言を口にしていた。

『朝田さんなら、前に言ってたGGOってV R M M Oやってるみたいですけど……』と。

後輩がV R M M Oやっていることに、ユーキは衝撃を受けたわけではない。彼女も年頃の女性だ、巷で流行っているV R M M Oというジャンルが気になってプレイすることもあるだろう。

問題はそのゲーム、つまりはV R M M Oの内容に他ならない。

それは銃の世界とも呼べるゲーム。ガンゲイル・オンライン、通称GGOと呼ばれるゲームだ。

銃、銃なのだ。詩乃の過去をある程度であるが把握しているからこそ、ユーキは目を見開いて驚いた。詩乃にとって銃とは禁忌とも呼べる人殺しの道具、最大のトラウマである筈だ。銃という単語を聞いただけで震えていた癖に、何故わざわざ銃を主体とするゲームをプレイするのか。ユーキには全く理解が出来なかった。

とは言え、ユーキも口を出すつもりもない。命がかかっているのならまだしも、所詮はゲーム。ゲームオーバーになったところで現実でも死ぬわけではなく、銃で撃たれたからといってどうとなるわけでもない。

だがそれでも疑問は湧いてくるというもの。

本人に問い質せば済む話しなのだが、どういうわけか詩乃とは連絡が取れない。

故にユーキはこうして素振りをしながら考えている。鬱憤を晴ら

すように、もどかしさを解消するように、自分自身の身体を痛めつけていく。

そこで、ピタリ、と。

振るわれていた方天画戟が振りかぶられたところで止まり、両手から片手に持ち替えて剣先を下ろす。

大きく吸い込み、深く吐き出して、振り返りことなく。

「オマエ、何の用だ？」

「あれれ、バレた？」

悪びれもせず、えへへ、と片手で頭を搔く女性AIが一人――
―ストレアがユーキの背後へと立っていた。

ユーキは振り返る。

黒いワンピース姿で、ユーキの腰辺りくらいまでしかない背格好。
正に幼女と言っても過言ではない出で立ちだ。

ストレアの姉であるユイが幼女とナビゲーション・ピクシーの姿になれるように、彼女も女性らしい身体つきの姿から、未発達な幼女姿のどれかになれる。

うんざりとした口調でユーキは呟く。

「今日はちっこいな」

「まあね。この姿も気に入ってるんだアタシ。アナタは大きい方が好み？」

「別にどっちでもいい」

「ダメだよ。そこは『どっちも可愛いと思うぜっ☆』くらい言ってくれないと」

ウィンクしながら可愛らしくサムズアップするストレアに、頭が痛くなる思いで目頭を抑えてユーキは忌々しげに言う。

「それは、オレのつもりか？」

「うん。初対面の人に対するアナタのモノマネー」

「叩き潰すぞポンコツAI」

苛立ちと共に深くため息が吐き出されて、ユーキは改めて問うた。

「ンで？」

「え？」

いまいち要領が得ていないのか、首を小さくかしげるストレア。

対するユーキはこれ以上時間を割いていられるか、と無理やり本題を切り出すことにした。

「何の用だって聞いたつもりなんだが？」

「アナタが悩んでるって聞いたから来ました」

「……誰に聞いた？」

「アスナだよっ！」

悪びれる様子もなく、笑顔でストレアは続けて。

「少し前までアスナもいたんだけどね、アナタの素振り見て言ってたんだー」

「……オレが悩んでるって？」

「うん。考え事してるみたいだから、ソツとしてあげようって」

アスナもいたとは気付かなかった。

どうやらユーキも思いの外、没頭していたらしい。

だがそれよりも無視できない発言があった。

ユーキは若干の苛立ちを込めて、ストレアに尋ねる。

「じゃあ何か。オマエはアスナが気を使っただっていうのに――」

「——はい、無視しました！」

はい、という声と共に片手を元気良く上げて、花の咲いた笑みをもって答える。

毒気が抜かれるとはこの事を言うのかもしれない。

肩の力が抜けるように、ユーキは両肩を思いつきり落とす。もちろん、ため息を忘れない。

まるで手にかかる子供を相手しているかのようにであり、本気で怒るのは大人げないものだ。天真爛漫であり、純粹無垢。それこそがストレアというAIの性格であるのだから。

そして問題のストレアは、気にすることなく。

「ねえねえ、何を考えてたの？」

「言わねえよ」

「えー！ どうしてー!?!」

「オマエに話したところで、解決するとは思えねえもん」

最早、素振りどころではないと思ったのか、ユーキは自身の持つていた方天画戟を装備画面から外す。

対するストレアは、どこか自信満々に胸を張り、居丈高に口を開く。

「解決するもん！」

「絶対に解決しない」

「忘れていたようだね。アタシはメンタルヘルスカウセリングプログラム試作二号だよ？ ヒトのお悩みなんてチヨチヨイのチヨイだよっ！」

「うん、全然わからない！」

「おい、メンタルヘルスカウセリングプログラム試作二号」

朝田詩乃という少女の過去に何あったのかを省き、銃を極度に恐れていると説明し意見を求めたところで、ストレアが自信満々に言った。

だがユーキもそこまであてにしていなくても事実だ。ストレアというAIは確かに優秀なのかもしれない。自分で考え、自分で行動し、自分の感情を有している。彼女やユイを作った従兄弟は間違いない。神域の天才と呼ぶに相応しいとユーキも認めている。

だがポンコツ、されどポンコツ。

優秀かもしれないが、それと同等に抜けているところもある。詰めが甘い、きつとそれがストレアという少女の性格なのだろう。

ユーキもその辺り理解している。

故に草原へ寝っ転がり空を見上げて。

「ま、期待はしてなかった」

「酷いー！」

ブーブー！ 口を尖らせて隣で座っているストレアが猛抗議するも、ユーキは華麗にそれを無視。視界に入る浮遊城『アインクラッド』を曖昧な表情で見つめながら抗議に応じた。

「オマエもオレも、所詮は赤の他人だ。朝田の考えを理解しようつてのが無理つてもんだ」

「アナタもわからないの？」

「わからねえから考えてんだろうが」

寝っ転がっている姿から、上半身だけ起こして続けて。

「本当にわからねえ。何でわざわざ辛い目にあいに行くんだ？ VR MMOなんていくらでもあるだろうに」

「そういうアナタはどうなの？」

「どういう意味だ？」

「そのまんまの意味だけだ」

どこか呆れるように、心配するように、ユーキを見上げながらストレアは言った。

「アナタは自分の行動を辛いと思ったことあるの？」

「決まってるんだろ———思ったことねえよ」

当然のように答える。

何の疑問もなく、何の躊躇もなく、何の迷いもなく。

今まで行ってきた自身の行動に、辛いと思ったことは一度もないと断言して見せた。まるでそれは当然と言えるものであり、息を吸って吐くようなあたり前のことであると思っていたから。

モンスターキラーに片手を斬り飛ばされようが、殺人鬼に付き纏われようが、一人でフロアボスを攻略していようが、余命幾ばくもない状態になろうが、最大の敵が身内にいようが、アルヴヘイムで拷問紛いの人体実験されようが、関係がなかった。

ユーキにとって、茅場優希にとって、それは至極———あたり前のことであつたのだから。

ストレアはため息を吐く。

呆れた調子で、億劫そうな声で。

「うん。アナタのそういうところ」

「何だよ？」

「———気持ち悪いって思うな！」

につこり、満面の笑みで。グツサリ、容赦なく。言葉は暴力となりユーキへと突き刺さっていく。

対するユーキも多少は面を食らったようで、彼には珍しい苦笑いを

浮かべて。

「オマエ、笑顔でさらつとエグいこと言うね？」

「だって事実なんだもん」

ブーつと頬を膨らませながらストレアは続けて言う。

「そもそもアナタは自分を大事にしてません！」

「ンだよ。いいだろ別に」

「良くなーい！」

興奮するあまり立ち上がってしまった。

とはいえ、今のストレアは幼女形態。威圧するように立っただけとも、所詮は子供の体躯だ。座っているユーキと目線が合うだけで、威圧の効果は得られていない。

その補強は身振り手振りで補いようで、勢いよくユーキを指差して。

「第一、アナタの在り方が痛々しい！」

「普通だつて」

「ほらー、そういうところだよ。普通じゃないの。普通の人は剣山を裸足で歩かないでしょ？」

「当たり前だろ。危ねえじゃん」

「……自覚なし。本当に困ったよ、アナタの中にいた頃」

「何だよ？」

「何度吐いたことか」

「オイ、人様の中で汚物を撒き散らすなや」

「だって気持ち悪かったんだもん！ カッコいいけど！」

「フオローになってねえよアホ」

自分のあり方はひとまず置いておくとして、問題は詩乃の考えであ

る。

先程の謂れのない罵倒に対する返答も込めて、ユーキはストレアの頭へ軽く手刀を叩き落として続ける。

「ンじゃ何か？ オレから見たら妙であるが、朝田からは普通のこと
で、何も問題はねえと？」

「そうじゃない？」

どうして事実を述べた自分がチョップされたのかわからない。そんな不思議そうに涙目になりながら、ストレアは頭を片手で擦る。

しかしここで、ハツ、と目を見開いた。軽い衝撃のおかげで、頭の中の回路が繋がったように、とある考えが浮かび上がる。根拠はない。だが何度かユーキから後輩の話を聞いたことがある。ユーキは遊びに行っただけと称しているが、誰がどう見てもデートであり、アスナの呑気っぷりを心配もした。

となれば薄っすらと見える事実がある。

急に黙ってしまったストレアに、訝しむ眼でユーキは見ながら。

「どうした？」

「もしかしてだけど」

「もしかして？」

「銃はまだ怖いし、本当はプレイするつもりもないけど、何かのために
GGOをやっている、とか？」

「何かの、ために……」

言われてみれば確かに、ただ好んでトラウマの象徴が存在するゲームをやる必要はない。

以前からVRMMOというジャンルに興味があるのなら、違うタイプのモノをプレイすればいいだけの話だ。だが詩乃は敢えて、銃の世界と呼ばれるMMO——ガンゲイル・オンラインを選びその世界へと足を踏み入れた。

そんなもの、傍から見たら苦行でしかない。銃という単語だけで、身体を震わせて、表情は強張り、満足に立つことも出来なかった少女が、何の理由もなしに銃を手にするとは思えない。

「何かが詩乃の意識を変えたのだ。」

「それが良いことなのか、悪いことなのか。ユーキには判断が出来ない。」

「詩乃も子供ではないのだ。自分で考えて、自分で選んだ。ただの外野であり、他人であるユーキが口を出す謂れもなければ、首を突っ込むつもりもない。」

「——だがそれは、命が関わっていないければの話しだ——。」

「……何してんのオマエ？」

「ジツ、と虚空を見つめるメンタルヘルスカウセリングプログラム試作二号が不気味に思ったようだ。」

「ユーキは訝しむ視線をストレアに向ける。対するストレアは明後日を見つめたまま、問いに答えた。」

「えーつとね、GGOを調べているんだよね。……あつ」

「何だよ？」

「コホン。……GGOノ データ、検索中、検索中」

「急にロボっぽくなるなや。雰囲気なんて出てねえぞ」

「投げやり気味に応じると、再びユーキは寝っ転がり視線を空へと向ける。」

「景色は変わらない。ファンタジー要素の強い世界観を有しているアルヴヘイム・オンラインの空の上で、不釣り合いな人工浮遊島が浮いていた。」

「アインクラッド。日夜、プレイヤーは各層を攻略しようと躍起になっっている舞台。かつてあそこで生活し、何度も視線を潜ってきた場所でもある。確か今は一層目を攻略しているんだったか、とぼんやり」

と考えていると。

「…………えっ?」

ストレアの驚いた声に、ユーキは何気なく反応する。

視線は浮遊城、されど意識はストレに向けて、気の抜けた声を上げて。

「どうした?」

「あの、えっと…………」

「何だ?」

「GGO関連の掲示板を調べてたんだけどね…………」

どこか言葉を選んでいいる調子で歯切れの悪い。

いつも思ったことをズケズケと言ってくるストレアらしくない物
言いだった。彼女は困惑し、事実だけ口にする。

「GGOで妙なプレイヤーがいるって…………」

「どんなヤツだよ」

「その…………、”アインクラッドの恐怖”って名乗ってるって…………」

「…………あ?」

Vol. 7 ファイアー・バレット

第1話 恐弾の射手

——その世界は、弱肉強食の世界だった。

今やVRMMOの総数は膨大な数に及んでいる。

ジャンルも様々なもの。妖精達となって冒険する幻想的なものから、魔法などが一切存在しない中世を舞台としたもの、更に言えば地球の外へと飛び出し宇宙を駆けるものまで存在する。

人がいるだけ考え方が違うように、VRMMOも多種多様となり、今も新しく生まれつつある。

その中でも注目されているのが、ガンゲイル・オンライン。通称GGOである。

世界観はある意味でありきたりなものだ。魔法など不確定現象は一切存在せず、鋼鉄が支配する荒廃した大地。近未来という設定もあつてか、実弾銃や光学銃が主な主要武器となっている。これだけ聞くと特筆すべき点は存在しない。銃を題材にしたVRMMOなど数え切れないほど存在し、荒廃した世界観というもの同じである。

だが問題はそこではない。

真にガンゲイル・オンラインが注目されているのは、世界観が特殊という部分ではなかった。

ガンゲイル・オンラインは日本では珍しい、リアルマネートレードやリアルマネー換金が認められているVRMMOとなっている。

実力次第では、GGOで生計を建てることも可能であり、日本人で唯一プロが存在するゲームでもあった。

となれば、日本で注目されるのは必然と言えるだろう。

ゲーマーとしては願ったり叶ったりでもあるのだ。好きなゲームをして富を手に入れて、地位も確立され、そうなれば名誉も約束されているようなものだ。

とは言っても、銃撃戦が好きで、世界観が気に入り、純粋に楽しんでGGOをプレイしているプレイヤー存在する。プロを目指して、楽に資金を稼ぎたく、GGOをプレイしているプレイヤーはそんなに多くはないと言えるだろう。

男が居た。

彼もまた、理由としては金を稼ぐ為にGGOへ足を踏み入れた人種だ。

富を得るには大会で結果を残す必要があり、結果を残すにはより良い武器を手に入れることが絶対条件であり、武器を手に入れるためにはやはり富が必要となってくる。

正に堂々巡り。最終的には一番欲しいものに帰結してしまう。

もちろん、男はそこでは止まらない。

資金とは自分にはないものだ。となればどこから手に入れば良いのか。決まっている、自分がないのなら——他者から搾取してしまえばいい。ある意味で合理的な考えであり、それ故に人として欠落しているものと言えるだろう。

男は止まらない。

GGOは対人戦が主となっている。モンスターも存在するが、それは素材集めに、もしくはクエストのクリア条件のために狩るといったのが目的だ。

大義名分は既に得ている。そう言わんばかりに、男は人狩りを始めるようになった。しかもただの人狩りではない。経験者を極力避けて、右も左もわからない初心者が男の狩りの対象となっていた。

ときに言葉巧みに初心者に近付き闇討ち、ときにフィールドの死角から奇襲、ときにギルドを作って部下と一緒に大人数で襲いかかることもあった。

男の名が知れ渡るのも時間の問題だった。

『ハイエナ』と蔑まれようが、男は別に気にすることはなかった。むしろ誇らしかったと言える。

誰でもない自分が注目され、ギルドの長となり、更に言えば『ハイ

エナ』と称されるまでになった。優越感はいっしか男を蝕んでいき、男の良識的な部分を腐らせるほどに至っていた。

今の自分は誰にも止めることが出来ない。

それこそ、GGGで賞金首としてPKトップランカーに君臨している生意気な正体不明のプレイヤー『アインクラッドの恐怖』なる存在にも負けない。

そう断言できるほど、男は自身の悪辣な実力に酔いしれてしまっていた。

無論、男にプレイヤーとしてのスキルはないに等しい。

ずっと初心者狩りに勤しみ、被弾することはあれど負けることはなく、一方的に撃つ快楽に酔いしれていた男だ。

負けて反省し、経験として活かし、プレイヤースキルを磨いてきた連中とは違う。負けることがなかった男は、安全圏からでしか銃を撃ったことがない男は、誰よりも弱い人種と言える。

「——っ——っ——！」

そして件の男は、頭を抱えて、朽ちたビルが並ぶ廃墟の一角に身を隠していた。

声を発していないが、命乞いをしているようでもあるその姿は、とてもではないが自身は強者であると驕っていた人物とは思えない。

吐き出される息は荒く、どこか震えているようでもあり、弱々しい姿をその場に晒していた。

思い出すのは一つの銃声だった。

いつもどおり、初心者狩ろうとギルドメンバーと共にフィールドに赴いていた。

此度の狩場は都市の廃墟。ビルが多く並び、奇襲をするにはうつつけの場所でもある。

簡単な作業の筈だった。経験者か初心者か見抜いて、数で勝っていることを確認し、そこで初めて襲いかかる。

資金を得るなどといった理由は最早消え失せ、効率など度外視した

行為。言ってしまうえば、男と仲間達が行っているのはストレス発散の
ようなものだ。現実世界で上手くいかないことが起きれば、こうして
他人を使って憂さを晴らす。そんな身勝手に理不尽な行為。

今回もそうして、気持ち良く初心者狩る——その筈だった

一つの銃声で何もかもが終焉を迎える。

それは的確に、男の頭蓋を撃ち抜いて、理解が追いつかないままも
う一人も頭へと叩き込まれる。

狙撃されていると気付いた頃にはもう遅い。叫ぶ前にまた一人頭
部を消し飛ばされていた。

男がこうして生き残っているのは、実力で銃撃を回避していたわけ
ではない。運が良かったただけだ。

現に、男の仲間は合計で十人いた。だが今となっては男しかおら
ず、すべてが狙撃手に撃ち抜かれたということになる。

男は自分勝手に自分本位な人間だ。

そんな人間がここまで自分が追い込まれているという事実。それ
は許し難い状況であり、屈辱に満ちたものである筈だ

しかし不思議と、男から激昂なる感情はなかった。むしろその真
逆、震えて、頭を抱えて、武装すらしていない、生き残ることのみを
考えている。

激情に駆られないのも簡単な理由だった。

男は単純に、恐れているのだ。

音もなく、銃声一つで、自分たちを壊滅たらしめた謎の存在に、男
は恐れていた。

今もこうして、狙撃手は自身に照準を合わせているに違いない。そ
の上で楽しんでいるのかも知れない。もしかしたら自分を見失った
のかもしれない。

全ては憶測だ。

冷静に状況を分析できていない男にとって、脳裏に過る考えは憶測
でしかなかった。

これからどうすればいいのか、なんて男には考えられない。何せこ

んな状況に陥ったのは初めてなのだから。今までずっと、自分よりも弱いプレイヤーを狩り、自分は安全圏から銃弾を打ち込み、危機的状況になることなどありえなかった。

ピンチになれば今までの経験が活かされ、危機の打破にも繋がるものだが、男にはその経験がなかった。

だからこそ次の一手が思いつかない。

足を止めて震えるだけの家畜。それだけのことでしかなかった。

そして愚者が取る行動など楽観的なもの。どうやら男は、自分を見失ったという“IF”を愚かにも選択したようだ。

そーっと立ち上がる。

遮蔽物となっていた敷居から、頭が飛び出した形となる。

同時に男が耳にしたのは、一つの銃声。

聞いたことがあった。

自分のような賞金首を相手に行っている賞金稼ぎ^{バンティハンター}。

GGOでは数少ない狙撃手であり、一対物狙撃銃《アンチマテリアルライフル・スナイパーライフル》を獲物としている人物。

狙ったプレイヤーを必ず仕留め、恐怖を与えることからついた異名が——“恐弾の射手”。

自身を狙っている人物が『恐弾の射手』であった。

それを知ったと同時に、男の頭は撃ち抜かれていた——。

——音を殺して

私の銃弾は世界

を駆ける——

第2話 恐弾の学生生活

2025年10月6日 PM12:30

都内進学校 教室

時刻は昼頃。

午前中の授業も終えて、生徒達はのびのびと過ごしていた。

肩の荷が下りた、といったところだろうか、と私こと——朝田詩乃は結論に至っていた。

私に通っている学校は、都内でも有名な部類の進学校でもある。

そうならば当然、勉強が出来る人間が通っていることは安易に想像が出来るし、世間一般的なイメージでは硬く、真面目な生徒達に通っていると思われていることだろう。

それは間違っていない。中には勉強一筋、それ以外のことなど二の次に考えている生徒も確かに存在する。ただそれだけではないということも事実だ。それこそ千差万別。公立だろうが私立だろうが、都立だろうがそこは変わらない。100人いれば、100通りの考えがあるように、一貫性は存在しない。

真面目な生徒も入れば、不真面目な生徒もいる。模範的な優等生も入れば、反社会的な不良も存在する。それは例え、進学校だろうが関係がなかった。

昼食時の過ごし方もそれぞれ。

待ってましたと弁当を取り出して口の中にかつ込む男子生徒もいれば、談笑の方を一生懸命にしまっている女子生徒もいる。中には、食事の時間すら惜しいと突っ伏して寝て過ごしている生徒も居た。

私と言えば、どちらでもない。

元々少食であるしそこまでお腹も減っていないければ、談笑するほどの友達が多いわけでもない。かと言って睡眠を優先にするほど寝不足というわけでもない。

適度に食事をとって、適度に次の授業に備えて予習復習をし、適度にボーッと時間を過ごす。それが私の昼休みの過ごし方だった。

—— 筈だった。

「てめえ、新川！ 姐さんに近づくなって言ったべや！」

「確かに言われたけど……」

「なら近づくなし。お前みたいなのヲヲした男が近付いたら姐さんも休めるもんも休めないだろうがよー！」

「でもさ、それ遠藤さんが決めることじゃない？」

無視したかった。

出来れば関わりたくない。

出来ることなら無視して過ごしたかった。

目を瞑り、耳を塞ぎ、私は関係ありませんって態度を取りたかった。

それが出来るほど、私は肝が座っているわけではないようだ。

周囲を軽く見ても、視線は全て私へと収束されている。騒いでいる二人の男子生徒と女子生徒には向けられておらず、私へと視線が向けられていた。

大変だね、といった同情から。速く止めてほしい、といった抗議に近い目。更に言うと、どうこの騒ぎを収めるのか嬉々として向けられている視線すら存在する。

私がため息を吐くのも、仕方がないだろう。

どうしてこうなってしまったのか、私にもわからない。慎ましくも、誰にも注目されずに、平々凡々とした学生生活だった筈なのに、どういうわけか今となっては私の取り巻く環境は変わっていた。

主に二人の喧嘩を止めるストッパー役として、一人は総合病院のオーナー院長の次男という立場もあってかで教師達は顔色を伺っており、もう一人は数ヶ月前まで教師すら手を焼いていた元問題児の女子生徒。ある意味で個性派な二人であり、それを止めるのが私しかないのも妙は話しだと思う。個性溢れる二人を止めるのが、無個性で地味な私なんて誰がどう見ても奇妙な光景でしかない。

でもやるしかない。

これ以上、騒ぎの中心にいたくもないし、私の平穏な学生生活を過ごすためにも、これは無視できない状況だ。

私は立ち上がり、問題となっている二人の生徒達の元へと足を運んで。

「なにしてるのよ、二人共……」

声をかけたただけなのに疲れ切っている私とは裏腹に、女子生徒――

――遠藤と呼ばれた彼女は私を見るなり「姐さん……！」と満面の笑みを向けて、もう一人の男子生徒――新川くんは申し訳なさそうに苦笑を浮かべている。

新川くんはまだ良心的と言える。

彼には私に迷惑をかけている自覚がある。しかし問題なのは遠藤の方。彼女にはそんな意識がまるでなく、私に気安く話しかける不屈き者に目を光らせている、つと言ったところ。ある種の舎弟のような気持ちなのだろう。

もちろん、私はそんなこと頼んでいない。

文字通り急だった。私のことを気に入らなかった筈なのに、遠藤の態度が突然変わっていた。

何をするにしても私の後をついて来て、少しでもため息を吐けば「大丈夫ですか!？」と気にかけて、少しでも私が他人と肩をぶつかったり接触すれば狂犬の如くイチャモンをつけて回る。

そんな状況で、平凡な学生生活など送れない。むしろ生徒達からも、教師達からも、私は一目置かれるようになってしまった。あの札付きの不良であった遠藤を、手足の如く使っている、と。いつの間にか私は、遠藤を裏から操る人物として、畏怖されるようになってしまっていた。

元々、遠藤にもそういう素質があったのかもしれない。

舎弟として立っている立場を苦痛に感じている様子もなく、むしろ喜んでいる節すらある。Mっ気が強いのだろう。ときたま私も辛辣な言葉を投げかけるも、どこか恍惚とした表情でその言葉を受け止めてい

る。

今も彼女は「お疲れ様です！」と両手を両膝に当てて、深々と私に頭を下げて。

「聞いて下さいよ、姐さん！」

「……色々と言いたいことはあるけど、姐さんはやめてもらいたいのだけど？」

「わかりました、姐さん！」

「……………」

全く分かってない。

わざとなのか、と疑いたくなるが遠藤は悪びれもなく応じている辺り、これは素なのだろう。

きつと細胞レベルで、遠藤の中では朝田詩乃Ⅱ姐さん、という図式が刷り込まれているに違いない。どこをどう調教すれば、そうなるのかある意味で興味が湧くが知的探究心を満たすのは今ではない。

ずれ落ちかけたメガネをかけ直して、私は再び遠藤に問いを投げた。

「……それで何をしていたの？」

「はい、コイツが不相応に姐さんに話しかけようとしていたので、気合いをいれてやろうかと、押忍っ!!」

「いいや、押忍じゃないから。あのね、遠藤。本当にそういうことしなくていいから。ぶっちゃけ困るのよ私が」

「困るんですか、姐さん？」

「うん、すごく」

力強く、バカでもわかるように、私は首を縦に振る。

きつと遠藤も分かってくれるはず。頭のネジをどこに締め忘れてしまったのか、急にポンコツになってしまった彼女でも分かってくれるはず。

そう思っていた、私の方がバカだったようで――。

「わかりました。新川には今度気合い入れますねっ！」

押忍っ！ とこれまた元気良く応えられてしまった。

開いた口が塞がらないとはこのことをいうのだろう。ガツクリと、私は肩を落として、今の自分の行動が徒労に終わり、虚無感に苛まれていった。

そして静観していた新川くんはポツリと一言。

「……大変だね、朝田さん」

そうして私達が移動してきたのは、校舎の中庭だった。

庭、といってもそれは質素な作り。花壇といった視覚で楽しむ物は一切存在せずに、木で作られたベンチが数箇所設置されているのみ。

10月ということもあつてか幾分肌寒く、中庭には私と新川くんくらいしかいなかった。

あのまま教室で談笑できるほど、私は神経が凶太い人間ではない。注目なんてされたくないし、目立つのも御免こうむる。

談笑するのなら、静かに、自分のペースで。そんな願いもあつて、中庭に足を運んだのだがこれまた大正解のようだ。人っ子一人もいない中庭を見て、思わず軽くガッツポーズ。

遠藤は置いてきた。残念だが、彼女には私達の会話について行けない。というよりも、話しが進まない。一方的に新川くんに噛みついて。

「それで、新川くんも何の用だったの？」

時間も限られている。

昼休みが終了するまで時間も少ない。新川くんと肩を並べてベンチに座ると、私は単刀直入に訪ねた。

彼もそれがわかつているからか、勿体ぶらずに自分の要件を口にする。

「用って程じゃないんだけど。昨日はお疲れ様、つて言いたくて」

「ああ、GGOの？」

私にも心当たりがある。

ガンゲイル・オンライン。通称GGOにて、私と新川くんは協力している仲だ。

標的を決めて、情報収集、及び攪乱を新川くんが行って、私がその標的を仕留めるといったもの。中々のチームワークである、という自負もある。特に新川くんのプレイヤーキャラクター『シユピーゲル』は恐ろしく速い。攪乱には適している敏捷力はもちろん、ゲーマーとしての知識も私よりも遥かに上だし、何度か彼には助けられている。

そして私には彼にない決定力——敵を一撃で屠る武器がある。昨日も私達の思惑通り、標的としていたプレイヤーとその取り巻きを壊滅させたばかりだ。

仕留めたのは私であるが、それもこれも新川くんの情報があつてこそだった。だからお疲れ様を言うのは私の方であるべきだ。

「私が活躍したのは最後だけよ。新川くんが色々と頑張ってくれたから、簡単に叩き潰すことが出来た。労われるのは新川くんの方」

「でも僕じゃ彼らを倒し切るのは無理だったよ。朝田さんがいたから、全員倒すことが出来た」

「……新川くんも頑固よね？」

「朝田さんには負けるよ」

ジト目で睨めつける私に対して、新川くんは苦笑で受け止める。何やら大人な対応をされて少しだけ悔しい。

「それじゃこうしよう。どっちもお疲れ様ってことで」

「……不承不承ながら了承します」

どうやらまだ不服であるということがバレてしまっているようだ。

新川くんは「そういえば」と話題を変えて私へ問いを投げる。

「朝田さんがあの手の連中を相手にしようとするの珍しいね？」

「そう？」

「うん。いつもの朝田さん——シノンなら自分よりも強い相手を狙う筈でしょ？」

シノン。

それが私のもう一人の自分。GGOでのプレイヤーキャラクター。

朝田詩乃ではない私。弱い私を撃ち殺す、強い私。それがGGOにて銃を手に行っている私だ。

新川くんの言い分も理解できる。

シノンは賞金首を狩る賞金稼ぎ。バウンティハンター 今まで小物なんて相手にしたことがない。そんな相手に構っている余裕はない。少しでも、誰よりも、私は強くならなければならない。そうでもしないと、私は「あの人」に追いつけないから。

私が賞金首ばかりを標的にするのもそんな理由だ。賞金とはある種の目安だ。対象の賞金が高ければ高いほど強者であるのは明らかであるし、彼らを撃ち負かし私は強くなっていく。

その点で言えば、先日の標的は明らかに弱者だった。

初心者を相手にする、小物の中の小物。あんな輩を相手にしたところで、私が強くなる筈もない。そう断言できるほど、つまらなく、どうしようもない。

シノンが狙う部類の強者ではない。

それなのに銃口を向けてしまったのは、簡単な理由だった。

「……あの人なら、放っておかないって思ったから」

あの人なら、無視しなかった。

賞金すら受け取らず、やられた奴が悪い、弱いオマエらが悪い、と口では言うものの、きつと「あの人」ならそれで終わらなかつた筈だ。

真正面から堂々と、件のつまらない男とその仲間達を叩き潰して、弱者から搾取した資金や素材、武装を返して回っていたに違いない。口悪く態度も悪く、鬱陶しそうに、強者を気取っていた連中を叩き潰して、弱者の味方をしていたに違いない。

私を救ったヒーローは、私が想う彼は、私が好いている——あの人なら、きつと誰にも感謝されることを望まずに、人知れずそんなことをしていた筈だ。

だから私も同じことをした。

賞金の支払いも拒否して、連中を叩き潰した。

だから今回、新川くんは本当の意味で骨折り損だったと思う。私も申し訳なくなつて、報酬分を支払おうとしたが、彼は受け取ってくれなかつた。

故に私も疑問を口にする。

「新川くんはどうして、私に協力してくれたの？」

「僕も同じだよ。先輩なら、きつと黙っていなかつたと思ったからさ」

につこり、と満面の笑みを零す彼を見て、私も自然と頬が緩む。

意見が一致した。私が想う「あの人」と彼が言う「先輩」は同一人物だ。であるのなら、私達の意見は一致するのは必然と言える。だが無視できない単語が一つ。

「どうして新川くんが先輩って呼んでいるの？」

「どうしてって、僕にとっても先輩だからさ」
「むー……」

それを言われたら何も言えない。

別に「あの人」は私だけの先輩というわけではない。新川くんにとっても先輩であるし、彼が「あの人」を先輩と呼びたいのなら私が止める謂れなどない。でも面白くないのも事実。わかっている、それもこれも私の強い独占欲が原因だ。新川くんも、ましてや「あの人」は何も悪くない。原因があるのなら、私だけだ。それでも納得出来ないのは、複雑な乙女心故だろう。狙撃手であるのなら、感情の一つや二つコントロールしないとならないのに、これではお話にならない。私もまだまだ、だ。

「……最近、あの人と会ってる？」

「うん。この前なんて、パンケ——」

「パンケ？ えっ、なに？」

「……何でもない。この前、二人で食べ歩きツアーに行ってきたよ」

言い淀むと、直ぐに言い直す新川くん。

正直言うとうズルい。言葉を選んで言うとうズルい。もう何もかもがズルい。

私も食べ歩きツアーに行きたかった。というか、いつの間にそんな仲良しになったのか。ズルいっただらズルい。

「ズルい」

言葉に出してしまった。

拗ねた調子で、子供のように、むくれながら呟いてしまった。

それを受け止めた新川くんは、これまた大人な対応をする。

肩を竦めて、最もなことを口にしていった。

「なら会えばいいのに。最近会ってないんでしょ?」

「うん……」

「なんで?」

「だってまだ、強くないから私」

そう。

私はまだ弱い。

GGOではそれなりに名が知られているという自覚はある。

でもまだ弱いのだ。とても「あの人」と肩を並べるほどでもなければ——恋敵たる彼女と同じ土俵に立っているとは思えない。

「あの人」の特別になるためにも、振り向いてもらうためにも、私だけが立ち止まってはいられない。

強くなる。そのために私はGGOで銃を手にして、弱い私を撃ち殺す。

対する新川くんは困ったように、笑みを零して。

「朝田さんはもう充分強いじゃないか。『恐弾の射手』なんて呼ばれているしや」

「ううん、まだ弱いよ。まだまだ、強くならないと。例の「偽物」を叩き潰して、私が、シノンが一番強いって、あの大会で証明しないと」

「あの大会ってまさか……」

「うん、今回は出るよ、私も。BOBに」

そっか、と新川くんが静かに相槌を打った。

それはただの相槌とは違う。何やら覚悟を決めたような、重大なことを決めたような、酷く短いものであったが、力強い何かを私は感じた。

私が新川くんに声を掛ける前に、彼は続けて言う。

「それじゃ、僕と朝田さんは敵同士になるね」

「ということとは、新川くんも?」

「出るよ、BOB」

予感はしていた。

先程の相槌と言い、きつと彼も何か譲れないものがあって、その為にBOBに出場するのだろう。私と同じく、何かのために、何かと決着を付けるために、何かを手に入れる為に。

ならば負けてなどいられない。私も同じく譲れないものの為に、銃を手に行っているのだから。

合図はなかった。

私達は口元に笑みを張り付かせて、不敵に笑みを向けて。

「負けないわよ」

「ごつちこそ。あとで泣いても謝らないからね」

恨みっこなしだ。

私も全力で臨むし、彼も本気で勝ちを狙う。今日の友は明日の敵。私達はそれぞれ何かのために戦わなければならない。

だがそこで、水を差すように新川くんは口を開いた。

「あ、そうだ」

「今更、命乞い？」

「違うよ。BOBで絶対相手にしちゃダメな奴がいるんだ」

「……誰、それ？」

「うん、あのね——」

「——死銃デス・ガンっていうんだけど——」

第3話 彼女の交友関係

2025年10月25日 PM21:40

ガンゲイル・オンライン SBCグロッケン とある酒場

彼女が席に座っているのは酒場の一角だ。

土曜日の夜、ということもあってか酒場内では大層な賑わいを見せている。筋骨隆々の男が破顔しながらジョッキに入った酒を飲み干したと思ったら、酒場の角では怪しげな取引をしているプレイヤー達もいる。各々好き勝手に騒いでは、楽しげに笑う。酒場内ではある種のコミュニティが形成されており、彼女の存在は明らかに浮いたものとなっていた。

ガンゲイル・オンラインでは数少ない女性アバター。性別も女性という事実が拍車をかけているが、彼女が突出した空気を出しているのはそれだけではない。

彼女の座るテーブルに立て掛けている物体。それこそが彼女が手にする獲物であり、この世界で最も信頼する相棒であり、彼女を象徴する武器でもあった。ソレを見たプレイヤーは声をかけると同時に、蜘蛛の子を散らすように距離を置き始める。

それこそが——PGM・ウルティマラティオ・ヘカートII

現実世界では、対物狙撃銃というカテゴリーに属し、対人狙撃は禁止されるほどの物騒な狙撃銃だ。ギリシャ神話の冥界を司る女神『ヘカート』を冠する武器。それを手にしているプレイヤーは二人と、ガンゲイル・オンラインには存在しない。

狙った獲物は逃さず、賞金首だけを狙う。彼女の放つ弾丸は、音を殺して世界を駆ける、とまで言われている賞金稼バウンティハンターぎ。

いつの間にか「恐弾の射手」とまで呼ばれるようになり、腕に覚えのない賞金首は逃げ惑い、腕に自信がある賞金首は撃ち碎かれる。

第三者から見たら物騒極まりない彼女は、何をしてもなくテーブルに敷き詰められたコピー用紙らしきモノに目を通していた。

これまた異常な光景。他のテーブルを見れば、銃をメンテナンスす

るための道具が広げられていたり、雑な見た目の料理などが置かれている。しかし彼女はそんなものよりも、大量の用紙を所狭しと広げていた。

それはプレイヤー達のデータだ。

それも優れたプレイヤー達の情報、もつと限定的に言えばバレット・オブ・バレッツに登場するであろうプレイヤー。

ゼクシード、ペイルライダーといったプレイヤー名から、薄塩たらこといった強いのか弱いのかよくわからない名前のプレイヤーの情報もあった。しかし数値は馬鹿にできない。薄塩たらこやゼクシードというプレイヤー達を比べても実力差に遜色がない数値であるし、彼女も名前でバカにすることなく用紙を手にとつて眺めていた。そして圧倒的で、彼女が集めた情報の中でも飛び抜けて高い数値を示しているサトラライザーというプレイヤーの用紙を手にとつて、考えていると。

「シーノン♪」

ふと彼女——シノンは自身の名前を呼ばれ反射的に顔を上げた。

シノンが座る席の前。そこに立っているのは男性。彼はニツコリを笑みを浮かべて、気安くシノンに話しかける。

馴れ馴れしい、といった不快感はシノンにはなかった。何せ彼とは文字通り顔見知り。何度か護衛という立場で彼の依頼でクエストに同行したこともあったし、用心棒として働いたこともある。相棒というには遥かに遠く、仲間というには親しい仲間でもない。故に顔見知り。シノンの中ではそれ以上でもそれ以下でもなかった。

だからだろうか。

シノンの反応も非常に淡白なもの。

彼の存在を認めたとしたら、素っ気ない態度で再び用紙へと視線を戻して口を開く。

「何の用、ダイン？」

「何の用って、随分と釣れないじゃねえのよ」

これ見よがしにガツクリと、大きく肩を落としてダインと呼ばれた彼はシノンの向かいの席に座る。

相席することを許した覚えはない。とシノンは小言を呟こうとするも止めた。そんな事を言ったところで目の前の男は「まあまあ」と席を立つことがないだろう。そう決めつけて、シノンは用紙に目を通しながら話しを進めることにする。

「それで本当に何の用なの？ また護衛依頼？」

「お生憎様、今日は違えよ。噂話を確かめに来ただけさ」

「噂話？」

ここでやつと、シノンは用紙からダインへと視線を移した。

彼はテーブルに広げられていた用紙を適当に手を取って眺めながら続ける。

「いやなに。あの『恐弾の射手』様が遂にBOB参戦する、って聞いたもんでな」

「本当よ」

「見たいだな。あーあ、嫌になるぜほんと。なんで今頃になって出場すんだよ？」

「あなたに関係ないでしょ」

「大有りですう！ 俺だって出るんだよ！」

「そう。だったら安心しなさいよ。予選であたったら容赦なく撃ち込んであげるから」

顔見知りだからと言って容赦などしない。

シノンは暗にそう語り、ダインも本気で言っていることを理解する。思わず彼はテーブルに立て掛けてあるヘカートIIを横目で見て、

背筋が薄ら寒くなるのを感じた。

ゲームとは言え、彼女の獲物は対物狙撃銃。現実世界では人間に対して向けることを禁止されている化物銃の一つである。

そんな物を自分に向ける、と一切の温情もなく断言されたのだ。それは背筋の一つや二つ凍りつくというもの。

かと言って、彼女の武器は狙撃だけではないことをダインは知っている。

狙撃など選択肢の一つであり、いざとなればシノンにはヘカートIIを手には鈍器として扱う。実際それを何度か、ダインは目撃していた。そうなれば彼女はある種のバーサーカー。相手が死ぬまで殴りつけるのをやめない狂戦士と化す。

思わずダインは頭を抱えてしまった。
シノンに対して、勝ち筋が見えない。

「な、なあ、シノン。俺と——」

「同盟なんて組まないわよ」

「……デスヨネー」

一瞬浮かんだ望みは、これまた一瞬で撃ち碎かれた。

狙撃手らしいといえばらしい手際に、ダインは再び頭を抱える。

対するシノンは冷ややかな目でその一連の状況を見て質問を投げる。

「ねえ。そんなに噂になってるの？」

「噂って？」

「私がBOBに出ることよ」

ああ、とダインは顔を上げて力強く頷いた。

「巷で有名になってるぜ。オッズがひっくり返るとか大騒ぎよ」

「……私で賭け事しないでほしいのだけど」

「しゃーない。有名人なら誰もが通る道さ」

「ちなみに誰が一番人気？」

「そりやお前だろ？ あとは例の『アインクラッドの恐怖』かな？」

「——っ」

ピクツ、とシノンの身体が反応し、テーブルの下で握りこぶしが作られていく。

アインクラッドの恐怖。

それは正体不明のPKを専門としているプレイヤー。

もちろんプレイヤーネームではなく、異名のようなものだ。しかしシノンのように、第三者が呼びそこから広まったものではなく、自発的に自身のことを『アインクラッドの恐怖』と名乗っているだけに過ぎない。

そのためか本当のプレイヤーネームも不明であり、顔はフルフェイスヘルメットのような仮面をかぶっているため見た人間はおらず、性別も、交友関係も、何もかもが謎に包まれている。ただ言えるのは恐らく性別は女性ということ。それもボディラインを強調としたボディスーツに身を包んでおり、何となく身体つきが女性らしいというだけの曖昧なものであり、実際『アインクラッドの恐怖』が女性である証拠などどこにもない。

実力も折り紙付きだ。

ありとあらゆる銃火器を器用に使いこなす。近接戦闘も得意であり、並大抵のプレイヤーでは付け入る隙がない。

実際、アインクラッドの恐怖がガンゲイル・オンライン内で暴れてPKをしたせいもあり、他のPK達が同調するように活性化。そのため、プレイヤー間で賞金首システムが流行するようになっていった。現在のガンゲイル・オンラインにおいて、間違いなく頂点に近いプレイヤーの一人でもある。

だがシノンにとっては関係がなかった。

誰だろうが、何者だろうが、『アインクラッドの恐怖』という名を

語る偽物。それだけで万死に値する。

その名は「彼」のものであり、関係のない者が名乗っていいモノではない。シノンには結論付けて、アインクラッドの恐怖の偽物として今でも標的としていた。

「しつつかし、よりもよってアインクラッドの恐怖かー」

肩を竦めて呟いたダインに、シノンは、はっ、とすると直ぐに調子を取り戻して問いを投げた。

「アインクラッドの恐怖がどうかしたの？」

「だって、アインクラッドの恐怖だぜ？　VRMMO界隈じゃ、ちよつとした伝説だろ」

知らねえのかよ、と尋ねられたシノンは素直に頷いてしまった。

言われてみれば確かに。実際、「彼」が何をしてそう呼ばれるようになったのか知らなかった。シノンが本人に聞いてもはぐらかされ、他に知る術など持っていなかった。

物を知らない、と捉えたのかダインは呆れた口調で答える。

「SAOでフロアボスを一人で何度も攻略したとか、睨んだだけでモンスターがビビったとか、PK集団を一人で壊滅させたとか、本当か嘘かわからねえもんだらけさ」

「ボスを一人で倒したって、普通じゃないの？」

「普通じゃねえよ！　いいか、SAOのフロアボスってのは元々レイド仕様なんだよ。つまり、一人で倒せるもんじゃねえの。多人数で挑むもんなんだよ」

「――」

何という滅茶苦茶なものか。

シノンが絶句するのも無理はない。無理はないが、「彼」を知って

いるシノンから見ても見たらその無茶苦茶っぷりも納得できる。

本来、複数相手取る敵を、一人で相対してしまう。

そんな無茶を何度もシノンは——朝田詩乃は何度も目にして、守られてきたのだから。

対するダインはアインクラッドの恐怖が何者か知らない。

だからこそ、第三者の目線で、その噂話を自信満々に断言した。

「まあ、嘘だわな。尾ひれが付いただけのハナシだろ。本当だったら、アインクラッドの恐怖は人間じゃねえよ」

「あなたはそう思うの？」

「おうよ。実際、アインクラッドの恐怖は人間の範疇の中で強いつてだけだしな」

アレだったら俺でも倒せる、と自信満々にダインは豪語するも、それはガンゲイル・オンラインでのアインクラッドの恐怖の偽物を見ての評価だろう。

何せ“本物”はガンゲイル・オンラインをプレイしている訳がなく、主な活動拠点はアルヴヘイム・オンラインだ。彼が“本物”の實力を押し量れる機会が訪れることはない。ダインがアルヴヘイム・オンラインのアカウントを持っているのなら話しは別だが、その可能性はありえないだろう。

とは言っても、ダインが本物のアインクラッドの恐怖と戦ったところで、敵わないことはシノンが一番良く知っている。

シノンの中で“彼”が一番強く、誰にも負けずに、弱き者を助け強気を挫く、言ってしまうえばヒーローのような存在。仮に負けても最後は必ず勝つ、そんな絶対強者のような存在だ。

だからこそこの話しはここで終わり。

シノンは話しは終わったと言わんばかりに、三度書類に目を通し始める。

だがここで、ふと。ダインは思い出したかのように口にする。

「そういえば、妙なヤツがいるみたいだぞ？」

「妙な奴って？」

シノン は 適 当 に 相 槌 を 打 つ。

しかし次にダインから発せられる言葉は、シノンが興味を引くに値する内容のものであった。

「例のアインクラッドの恐怖のことで、聞いて回っている金髪の女と黒髪の女がいるみたいなんだわ。しかもどっちもM9000番系」

第4話 恐怖を超える者

2025年11月14日 PM12:15

ダイシーカフェ

昼時のダイシーカフェ。

そこは魔境と言っても過言ではない忙しきだった。

店主は頭を抱える。どうしてこうなったのか、と。こうまで忙しいなら「アイツ」も出勤してもらえば良かった、と。

店主の娘は目が回る。父の手伝いのため、子供用のメイド服に袖を通すのは珍しくない。だがここまで忙しいのは経験がない。駆け回り、目を回し、どこか半泣きになりながら、父の手伝いを勤しむ。

席は満席。常連の顔ぶれはもちろんだが、新規の顧客も食事や雑談を楽しんでいる。かいつまんで言えば商売繁盛と言ったところだ。混んでいる、といっても長居する客もいない。店内の様子、そして店主とその娘の状態を察してか、食事を楽しみある程度雑談し、席を立ち会計を済ませ店を出る。よっぽど味に満足したのか、大抵の客は「また来ます」と一言述べることから、ダイシーカフェの料理は相当なものであることが分かる。

その一言は店主にとっても、娘にとっても、嬉しいものだった。

娘としては父の料理の腕を、店主としては自分と「アイツ」なる者が試行錯誤を重ね失敗を積み重ねた結果のメニューである。美味かった、また来る、という言葉は何物にもまして嬉しい言葉に違いない。

比喩ではなく多忙すぎて吐きそうになるも、その客からの何気ない一言で店主と娘は気力が湧いてくるというもの。

とは言え、店主も鬼ではない。

過酷とも呼べる、現在のダイシーカフェ現場環境。小学生には厳しくないわけではない。店主の妻は買い物に出ており、帰ってくるまでと考えていたが、あまりにも可哀想。

そう判断した店主は自身が苦しいにも関わらず敢えて笑顔で言う。

「もういいぞ、レベツカ。ありがとう。助かったから休んでくれ」
しかし娘は直ぐに首を横に振った。考える様子もなく、少女もまた
青い顔をしたまま満面の笑みで。

「私は大丈夫です。ダディはお料理を頑張ってくださいです」
苦しいはずだ、辛いはずだ、何よりも帰って遊びに行きたいはずだ。
なのにも関わらず、少女は親の気持ちを汲み取り、そちらを優先に
する。それが自分が一番したいことであると、少女は暗に語りなが
ら、魔境とも呼べる現状を笑みを浮かべて踏破していく。

店主が感激するのも無理はない。

自分の娘は、いつの間にか立派に育っていた。

自分の教育が正しいとは言わない。そこまで自分と妻は万能では
なく、間違いも侵すし、欠点だらけの人間と言える。それでも、たと
しても、娘は立派に育ってくれた。それが感動せずにはいられないら
うか。唇を噛み締めて、目に浮かぶ涙をながすまいと必死に堪える。

感動は伝播する。

少女の健気さに涙を浮かべる者、笑顔で微笑ましく見る者、何やら
息を荒く頬を紅潮させて少女を見つめる危ない奴。

様々な人間が、様々な感情を持って、一人の少女の成長を見守って
いた。

そんな中、彼もまたその一人。

黒縁メガネをかけてスーツを着た、これまた洒落つ気のない様子の
男性が少女をカウンター席に座りながら、生暖かい目で見つめてい
た。

きっと彼には他意はない。邪な事も考えてないし、純粋な気持ち
で、少女の頑張りを微笑ましく見つめていることだろう。しかしどう
いうわけか——胡散臭い。

何やら嘘っぽい笑み、嘘っぽい表情、これまた嘘っぽい雰囲気。本
当に微笑ましく見ているのか、と疑いたくなる何かを彼は纏ってい
た。

「言っておくけどさ、今のアンタ相当怪しいぞ?」

と、少なくとも少年にはそう見えたようだ――。いつの間にか少年は、彼が座っているカウンター席の後ろに立っていた。

店主も少年の登場にさして驚いた様子もない。むしろ来ることを知っていたように、顔見知りと言わんばかりの態度で、彼の座っているカウンター席の隣を視線を向ける。

まるでそこに座れと言わんばかりの態度に、少年は不快に思うこともなく素直に従うことにした。

方やスーツ姿の彼。

方や古ぼけたレザーブルゾンにダメージジーンズとラフな恰好な少年。

対象的な二人は肩を並べて席を共にする。

怪しいと称された彼は不快に思うことはない。

むしろ言われ慣れているのか、特に気にする様子もなく。

「僕は微笑ましく見ているつもりだったんだけどねー」

「傍から見たら怪しいって言ってんの。気をつけろよ菊岡さん、官僚が幼女を怪しくみつめて逮捕なんて笑えない」

スーツ姿の彼――菊岡誠二郎は気にすることなく笑みを浮かべたまま少年の軽口に付き合った。

「ハハハッ、それは確かに笑えないね」

「いやいや、滅茶苦茶笑ってるだけけど」

「思い出し笑いさ。先日も顔見知りか不純異性交遊で捕まったのを思い出してね」

「……まさか官僚とか言わないよな？」

「いや、違うよ」

思わず少年は、ほっ、と胸を撫で下ろす。

菊岡は国家公務員のキャリア組で、何者かが拡散した『ザ・シード』によって爆発的に広まり、今もなお拡張し続けているVRワールドを監視する国際エージェントでもある。

言うなれば高給取りの官僚。彼らの給料は、国民の血税によって徴収されたものといっても過言ではない。菊岡の顔見知りであるのなら、菊岡と同じく官僚であるのかもしれない。そんな人間が、不純異性交遊で捕まったなんて、本当に笑えない冗談にも程がある。

しかし菊岡は言う。

違う、と笑顔で断言する。

少年は思わず安心してしまったのだ。

良かったと。まだまだ、日本の中枢部は腐っていない――。

「確か教師、だったかな？」

――前言撤回。

日本は、腐りきっていた。

「菊岡さん、それ全然笑えない」

「本当だよ。教師が何を教えてるんだって話した。保健体育かな？」

「……アンタさ、実はモテないだろ？」

「えっ、どうしてわかったんだい？」

「ジョークが絶望的につまらないから」

隣に座る官僚を、半目で睨む少年。

さすがの菊岡もその眼光には居心地を悪くしたのか、乾いた笑みを浮かべて。

「あはは、安心してよキリトくん。不純異性交遊の下り、嘘だからさ」

「しかもしようもないところで嘘言うし」

キリトと呼ばれた少年——桐ヶ谷和人は深くため息を吐いた。そしてチラツ、と菊岡の前にある料理を見る。料理というよりもそれはデザート。和人にとってはあまりにも馴染みがないもので、それがパンケーキとなるものがわからないもの、デザートであることだけは理解が出来る。余程、菊岡の舌に合うらしい。現にもう既に完食寸前である。一口、あるかないかのような状態。

大の大人がデザート。見る人間にとってはギャップを産むのかも知れないが、生憎と和人の視線には触れなかった。

「このパンケーキだけどね、滅茶苦茶美味いよ？」

和人の視線がどこに向けられているのか、菊岡は読み取ると無邪気な笑みを浮かべて。

「一口食べるかい？」

「いいや、いい。俺は別なもの頼むから」

「それは残念。好きに注文していいよ？　ここは僕が奢るからさ」

「それもいい。アンタにこれ以上借り作ると何をさせられるかわかったもんじゃない」

「釣れないなあ。ひと夏を共に過ごした仲じゃないか」
「言い方」

淡白に言うと、和人は注文も見ないで店主にブラックコーヒーを注文した。

彼とてダイシーカフェには何度も通っている常連だ。何があるかなどメニューを見なくともわかっている。店主も和人が何を頼むのか最初から分かっていたようで、彼を見たときから作業を開始しており、注文と同時に一人の前にコーヒーが置かれた。

和人は思わず申し訳なさそうに「ありがとう」と呟くが無理はない。現在どれだけ忙しいか理解しているつもりだ。それなのに自分を優

先にしてくれた店主にはありがたいと思うし、その反面やはり申し訳なくなるというもの。

店主も和人の思いを汲み取っているのか、ウインクして応じ別の客への調理へ戻っていく。

菊岡からお茶をしないかと誘いを受けて、和人は応じた。

それはつい先日のことであり、和人も軽い気持ちでダイシーカフェを指定する。

しかしこれは予想外だ。ここまで忙しいと誰が読めるだろうか。このままずっとカウンター席を占領するのも、何だか気が引ける。そう考えた和人は、早々に切り上げるために話しを進めることにした。

「それで何の用だよ、菊岡さん？」

「用って程じゃないんだ。ただキリト君とお茶をしたくなってるね」

「……俺とアンタって、そこまで仲良かったっけ？」

「つれないなあ。僕と君の仲じゃないか」

どんな仲だよ、とツツコミかけるがグツとこらえる。

これ以上話しを脱線しかねず、マイペースに最後のパンケーキ一切を頬張る官僚相手にペースを握られかねない。

「うん、本当にパンケーキ美味しいな。おかわりしちやおうかな？」

「だったら本人がいるときに褒めてやりなよ」

「本人？」

はて、と菊岡は首を傾げた。

和人の言い方は奇妙なものだからだ。まるでこの場にいないような、別の人間が作ったかのような言い方に、菊岡は首を傾げて自身の問を素直に口にする。

「店主さんが作ったんじゃないのかい？」

「作ってるのはそうさ。でもレシピを考えたのは別の奴」

「へえ、凄いな。それって誰？」

「多分、菊岡さんも知ってるはずだと思うけど」

ふーん、と口直しに水の入っているコップを手に取り、口つけて水を流し込む。

菊岡が美味いと絶賛しているパンケーキのレシピを考えたのは誰なのか、和人は何気ない口調で呟いた。

「茅場優希」

「——っつ!？」

あまりにも予想しない名前が出てきて、うつ、と菊岡は吹き出しそうになりながらも必死に堪えた。

茅場優希なる人物の人間性を知ってスイーツのレシピを考案したという事実が面白かった、といった反応ではない。

そもそも茅場優希という人間の名が苦手で、突拍子もなくその名を聞いて驚いた、といったニュアンスが正しい。そんなリアクションを取りつつ、菊岡は激しく咳き込みながら問いを投げた。

「えっ、彼って、ここで、働いてるの?」

「知らなかったのか?」

「初耳だよ」

そこまで言うときヨロキヨロと落ち着きなく店内を見渡す。

やっと店内は落ち着きを取り戻し、空席も目立ち始めていた。どうやら昼頃のラッシュは終わった様子。店内には客の他にも、「頑張りますです!」と再度気合を入れる店主の娘、そして微笑ましく見ている店主の妻が接客をし、店主はそれを涙目で見守っている。

問題の人物はこの場にはいない。

そう確証を得られないのか、菊岡は小声で訪ねた。

「今日は彼はいないのかい？」

「多分、休みだと思うけど」

「そうか。良かった……」

ほっ、と緊張の糸が切れたと言わんばかりに菊岡は笑みを浮かべた。

とは言え、和人にはその反応は腑に落ちなかった。菊岡の反応は、茅場優希を苦手としているような反応でもある。和人にとって認めるのは癪だが、優希は外面は良い方だ。初対面の相手には何重にも猫を被り接し、誰もがそれが茅場優希の本当の顔であると信じて疑わない。

だがそれは違う。

本当の彼は、粗暴で口悪く、性根も気持ちの良い人間性ではない。直ぐに嘘をつくし、偽悪的な部分もある。

しかしそんな顔を見せるのは、限られた人間に対してだ。

そして菊岡がその「限られた人間」の中に入っているかと問われれば、和人は否と断ずることが出来る。

誰にでも心を開くほど、優希はお人好しではない。初対面には猫を被り、警戒心を緩めることもなく、些細な素振りすらも見逃すことはなく、他人からの悪意に過敏に反応する。

ともなれば、菊岡は猫を被っている優希を苦手としていることは明白。だがあの茅場優希が、猫を被った状態で苦手意識を持たれるなんてヘマをするとは思えない。

だからこそ、和人は腑に落ちなかった。

菊岡が何を持って、優希を苦手としているのかわからない。

だからこそその知的好奇心。丁度、店内も落ち着いた様子であるし、雑談がてら自身疑問をここで解消することにする。

「苦手なのか？」

「苦手というか……うん、そうだね。僕は彼が苦手だ」

思いの外素直に認めた菊岡は、かけているメガネを右手の中指で押し上げて続ける。

「夏休み、帰還者学校に君を呼び出してS A Oで起きた事を聞いたら？」

「ああ、そうだけど」

「実はね。別の日に彼も呼び出して、聞いたんだ」

「S A Oで何が起きたか？」

「そう。あとは噂の事実確認、かな？」

「噂って？」

「それは——茅場先生と家族だったのか、ってことさ」

ピクツ、と和人は反応する。

聞き捨てならない事実には、和人は感情を押し殺し、平静を装ってコーヒーを口にして。

「それで、返事は？」

「真実だったさ。呆気なく、素直すぎるくらい、考える間もないくらい、彼は認めたよ」

「だろうな、と心の何処かでその答えを予想していた自分がいることに、和人は気付いていた。」

彼ならそう答える。自分に不利になることだとしても、敢えてそうしているかのように、自分から苦難な道へと進んでいく。それが茅場優希という男の本質だ。常人では考えられない。いいや、常人だからこそ考えられない選択を、優希は常に選んでいく。良く明日奈は、あんなバカの手綱を握れるものだ、と何度感心したかわからない。

しかしこれは茅場優希の本質を何となくわかるからこそ、笑い話になるというもの。自分を嫌悪し追い込む狂気だけで構成されているわけではない。口では文句を言いつつも、何だかんだ言って他人のために行動することが出来る善良なる部分も確かに存在する。性根は

歪んでいるものの、在り方は真つ直ぐ。そんな複雑で、相反する価値観を持つている。それがわかれば、笑い話にもなる。

だが優希を良く知らない人間別だ。

優希を何も知らない人間からしてみたら――。

「僕は彼が、不気味に見えるよ」

――理解の外で存在する、化物に見えることだろう。

「どうして彼は、自分が不利になる事実を平気で認めることが出来る？ 茅場先生の家族なんて、誰よりも隠したい筈なのに」

「……………」

誰もが善良であるわけがない。

優希もSAO事件に巻き込まれた被害者だ。何度も死にかけてきたがあつたし、その都度歯を食いしばり、前だけを見て進み続けてきた。茅場の家族というだけで逆恨みされ、非人道的な実験の被験者になったこともあつた。もしかしたら、和人の知らないところで被害にあつている可能性すらある。

それでも優希は泣き言を言わなかった、己の置かれた理不尽な状況に嘆くこともなく、いつもどおりこれまでどおり捻くれ者は前だけを見つめていた。

なるほど、確かに。

優希を知らない人間からしてみたら、それは歪に見えるし、苦手とし、不気味に思えることだろう。

まともじゃない。その一点だけは和人も同意する事実だ。どんな人生を歩んだかなど定かではないが、優希の感性は常人のそれではない。合理的とは言わない選択をし続ける非合理の怪物。それが茅場優希の中には確かに存在する。

わかっている。優希が完全なる善人というわけではない。人間なのだから、何か欠けている部分もあることはわかっているつもり

だ。

だが、だとしても。

「それで、今日呼び出した要件は何だよ菊岡さん」

だとしても、理解は出来ても、納得が出来ない自分は、本当に子供なものだと和人は自分自身が嫌になる。

菊岡は間違っていない。感じることは人それぞれ違うものだし、共通した認識がないからこそ人は人たらしめる。そして感情が制御できず、抑えが効かないのも、人を人としてたらしめる要素の一つと言えよう。

友人と呼ぶには剣呑すぎる間柄であるし、宿敵と断じるまで決裂した仲というわけでもない。

和人と優希。二人の関係は、本人達が説明できないほど複雑なもので拗れている。だとしても、だからこそ、何も知らない人物が優希を悪く言うのは、どうにも納得ができない。

だからこそ和人は話しを切り出した。

これ以上、聞かないためにも。自身の感情が暴走しないための安全装置を自分自身で組み込んで。

対する菊岡も何となく、和人の剣呑な雰囲気を感じたのか、素直に和人の疑問に答えるためにあることを問う。

「そうだね、単刀直入に言おうか。キリト君はさ——GGOというゲームに興味はないかな？」

「キリトも妙なことに巻き込まれたな？」

ほら、コーヒーのおかわり、と今まで横耳で聞いていたのか店主――
――アンドリユー・ギルバート・ミルズは言った。

店内は落ち着きを取り戻していた。というのも、客としているのは和人くらいなもの。テーブル席に突っ伏しているアンドリユーの娘と、アンドリユーの妻はそんな娘の頭を優しく撫でている。

自分も忙しかったろうに。

家族の輪に入って休憩してもいいのにも関わらず、アンドリユーは和人を気にかけていた。

アンドリユーが妙なことというのは、先程の菊岡の話に他ならぬ。
い。

等の本人である菊岡の姿は既になく、あるとすれば彼が置いていった音楽プレーヤー。もちろん、それは音楽が録音されている一般的なプレーヤーではない。とある現場の喧騒が録音されている、これまた奇妙な音楽プレーヤーである。

ため息をつきたくなるのを押し殺して、和人は「ありがとう」と一言だけ述べると苦笑交じりにアンドリユーに言葉を返す。

「本当だよ。未成年の俺に依頼することか普通？」

「それだけお偉いさんも、お前の腕ってやつを買ってるんだらうさ」

「こればかりは迷惑って感じ」

「全くだ。……それで、本当に可能なのか？」

「何が？」

「ほら。ゲーム内で起こった銃撃で人を意識不明に出来るってヤツ」

神妙な顔つきで言うアンドリユーに、和人は自信を持って首を横に振って。

「不可能だ。アミユスフィアの安全面は完璧。間違ってもナーヴギアみたいなことにはならないよ」

菊岡の要件とはとある事件の話しだった。

ガンゲイル・オンライン、通称GGOと呼ばれるVRMMOで事件があった。事件と言っても、プレイヤー同士のいざこざなんて毎日起きていてことであり、そんなものをいちいち取り上げては、それこそキリがないというものであるのなら、VRワールドを監視する国際エージェントである菊岡誠二郎が動くとなれば、それだけ大きな事件というものだ。

問題の事件となっている被害者のプレイヤー名はゼクシード。本名、茂村保。

第二回バレット・オブ・バレットの優勝者でもある彼が意識不明の重体となっている。それだけ聞けばなんてことはないことだ。しかし問題はここから。ゼクシードは昨日、ネット放送局『MMOストリーム』の人気コーナーである『今週の勝ち組さん』の出演者だった。進行具合も順調そのもの。問題があるとすれば、ゼクシードの他プレイヤーへの挑発行為以外、何も問題はなかった。何かあつとすればここから。いきなりゼクシードは回線が切断されたのか消えてしまった。

そしてまもなく、彼は意識不明となって病院へと搬送されることになる。少しでも通報が遅れていれば、助からなかった命だ。何者かが救急車を手配していなければ、ゼクシードはこの世にいなかったと断言できる。

何が原因なのか診断しても不明、原因も不明、しかし何かがあったに違いない。

そして何かはあった。

その「何か」は菊岡が持ってきた音声プレイヤーの中に入っている。

それは宣言であり、勝鬨であり、開幕を告げる鐘でもあった。普段であれば、ただの偶然と一蹴されるものであるが、何もかもが不明瞭であることから、藁にもすがる思いで菊岡達もこの音声の主を調査しているのだろう。

「それで俺を宛にするかね普通？」

余程人材が不足しているのか、それとも桐ヶ谷和人の——キリトの腕前を買っているのか。どちらにしても和人にとつては迷惑な話だ。

菊岡の要件とはつまり——件の事件への調査。

ガンゲイル・オンラインへと趣、事件の容疑者なる人物と接触してほしいということだ。

アンドリユーは納得できない、と言わんばかりの口調で。

「キリトは受けるのか？」

「まあね。菊岡さんには借りがあるし」

「借り？」

「エギルには言っただけ。俺達のナーヴギア回収されたろ？」

「ああ」

「俺さALOにログインするとき使ったんだよナーヴギア」

「どうやってだよ？ 回収されたろ？」

「それを秘密裏に俺に渡してくれたのが、菊岡さんなんだよ」

ああ、そういうことか。とアンドリユーは納得して。

「何だっけ、その問題のヤツ」

「死銃？」
デス・ガン

「そうそれ。どうなんだ実際、GGOでも話題になってたりするのかわかる？」

「微妙だな。それよりも今は偽物の話題に持ち切りみたいだ」

和人の偽物という単語に、アンドリユーは何を指しているのかわかっているようだ。現に、アンドリユーは「ああ、なるほど」と納得し頷いた。

偽物。それは何かのまがい物に他ならない。

それこそは——アインクラッドの恐怖。

今、ガンゲイル・オンラインを騒がせている問題の一つであり、無関係とは言い切れない和人達にとって無視できない事柄でもある。

「それよりも妙だよな。どうして本物がいるのに、アインクラッドの恐怖を名乗ったりするかね？」

アンドリユーが疑問に思うのも仕方ないことだ。

本物がいるのならどうして自称するのか。それはバレる嘘だ。本物、もしくはその関係者が存在すれば、偽物であると判明してしまう。いつかは嘘であることがバレてしまい、今度は偽物の首を絞めることに繋がる。

和人は少しだけ考えて。

「多分、アインクラッドの恐怖って名乗りやすいからじゃないか？」

「どういうことだ？」

「ほら、アイツって素顔隠して活動してたら？ だから本物が誰なのか判別できないから」

「でも優希がアインクラッドの恐怖って周知されてるじゃないか」

「アイツが素顔に晒すようになってからフロアボス単騎攻略なんてしてるの誰も見てないだろ？」

「……………あつ」

和人の言わんとしていることが理解できたのか、アンドリユーは息を呑んだ。

一度頷いて、和人は続けて言う。

「アインクラッドの恐怖はある種の都市伝説みたいになりつつある。俺達と合流してから、アイツは良い意味でまともになったからな」

「優希が偽物になりつつあるってことか」

「アインクラッドの恐怖として活動しているアイツの素顔なんて見えなかったからな。最初は周りも信じてたけど、思いの外滅茶苦茶なこ
とやってないし、統一デュエルトーナメントの結果もあって、アイツ
を偽物と吹聴する奴も現れるようになったみたいだ」
「当の本物も他人の評価なんて気にしないもんだから、放って悪循
環ってか……」

ハー、つとアンドリューはため息を吐いて。

「アイツって今なんのVRMMOやってるんだっけ？」

「確か『アスカ・エンパイヤ』だったかな？ 和風な感じのやつ。木綿
季も一緒にみただけど」

「それで、お前はどっするんだ？」

「どっするって？」

「死銃デスガンの件、優希に言うのか？」

確かに、ここで優希に言えばあとは話は簡単なものだ。

彼はきつと、相談してきた和人を茶化すことなく、手を貸すに違
ない。茅場晶彦の遺産として、現在までVRMMOというジャンルは
発展を遂げていた。となれば優希が責任を感じるのは当然の帰結で
あるし、彼は関わりぬくに違いない。

和人にとってもそれはありがたい事実だ。一人よりも二人、それも
自身と何度も競い合ってきた男が手を貸してくれるともなれば、これ
ほど心強いことはない。

しかし。

「いいや、言わないよ」

和人は首を横に振って、優希に話すことを否としてしまう。

「どうしてだ？ アイツなら——」

「手を貸してくれるだろう。わかっているさ。だから言わないんだ」

今まで、どれだけ茅場優希が苦しんできたか。

全容を知らない和人はただの想像でしかない。でもこれ以上、優希に負担をかけるわけにはいかない。これ以上頼ってなんていられない。他人から見たらそれはつまらない意地なのかもしれない。だが和人にとっては、それが全てであった。肩を並べるために、ずっと研鑽してきた。ここで継るのは、和人の男の矜持に傷をつけることに他ならない。

アンドリユーも何となく理解する。

そうか、と一度頷いて。

「わかった、俺も言わねえよ。でもな、ヤバかったら言えよ。俺も力を貸すからよ」

「ああ。ありがとう、エギル」

「本当に言えよ？ お前もアイツと同じで、目を離すと直ぐ無茶やるんだからな」

和人からの返答はない。

苦笑でもって受けて、そのまま返す。

そして音楽プレーヤーの画面を指で突付き、ワイヤレス型イヤホンを耳に差し込んだ。

それこそが問題の現場の音だった。喧騒と共に一発の銃声。しんとする周囲のしずけさに耳を傾けていると、鋭くそれは告げる。

『これが本当の力、本当の恐怖だ！』

『俺と、この銃の名は死銃、『デス・ガン』だ！』

『刮目せよ！ 俺が、俺こそが、棺桶から蘇りし恐怖そのもの！』

『いいや、俺こそが！』———『恐怖を超えるものだ！』

彼の者は死銃^{デス・ガン}。

ガンゲイル・オンライン内の首都、SBCグロッケン酒場にて、『MMOストリーム』の放送中であつたゼクシードが映り込んでいた映像を銃撃し、意識不明に陥れたかもしれない容疑者。

そして、恐怖を超えると自称した者——。

幕間 銃はロマン（男の子的な意味で）

——彼にとって、その異名は、枷そのものだった。

自称したつもりもない、自身の口から零したわけでもない。正しいと行動し、その結果として彼がそう呼ばれるようになっただけに過ぎない。

無謀にも挑み、諦めを踏破し尽くし、倒れることすらも拒否し、彼は前に進み続けた。それが間違った道だとしても、彼自身信じて疑わない。自分の歩んでいる道は正しいものであると、誰よりも向いているからこそ進み続けていけるのだと。

十数人で挑むべき敵を、単騎で叩き潰し。

何十人で群がる殺人集団を、独りで蹴散らす。

そうしていつの間にか、彼はそう呼ばれるようになった。

とはいえ、彼にとってやはりその名は恥ずべき過ちでもある。

誤った選択をし続けて、誤った道を進み続けて、誤った自分を周囲に晒す。それは彼にとって、恥ずべき行為であつた。死んでも死にきれず、殺しても殺しきれない。生き恥、と彼は自分自身を嘲る。

もう二度と、誤ちを起こさないように。もう二度と、選択を誤らないように。

故に、その名は誇るべきものではない。

故に、その名は彼にとって刻むべき忌み名。

故に、その名は過去の行いを忘れない為の枷。

何者かが言った—— はじまりの英雄。

何者かが讃えた—— 紅閃。

何者かが称した—— クリエイター。

何者かが告げた—— 絶剣。

なるほど、確かに。彼にとって彼らは讃えられるべき存在であり、一目置かれるべくして置かれた存在達だ。

しかし、自分は違う。間違い続けた結果の末路。独りよがりに進んだ者の成れの果て。称賛されるべき存在でも、ましてや畏怖など論外にも程がある。

どういうわけか、好き好んで「その名」を名乗る輩が現れている。彼にとつてそれは不可解なことだ。【はじまりの英雄】、【紅閃】、【クリエーター】、【絶剣】の名を偽るのならわかる。しかし何故、よりもよつて「その名」なのか。百害あつて一利なし。偽つたところで、名声も地位も得られるわけがない。

彼は少なくともそう考えていた。だが現実には――。

「アインクラッドの恐怖う……！」

その名を呼ばれた。

三人倒れているうちの一人が倒れながら睨み怨嗟の声を上げる。敵意というには幼く、悪意というには浅い。彼に刃を向けたところで自体が好転しないことは百も承知。それでも彼に挑んだのは、きつと八つ当たりなのだろう。

どうしようもない怒りをぶつけるために、彼に刃を向けたのだろう。

彼も理解している。

理解しているが、ここで「そうか」と刃を甘んじて受けるほど聖人君子として完成された存在でもない。

彼にとつて憤りはある。自分が知らない場所で、枷として甘んじて受けていた忌み名を、勝手に名乗られているのだ。それが原因でこうして逆恨みされているなどと笑えない冗談だ。

何回、因縁をつけられたのか。

数回か、十数回か。数えるのもバカらしくなったところで、彼は数えることをやめていた。

それこそ、うんざりするほど。身に覚えのない因縁をつけられて、喧嘩を売られてそれを買う。自身の肩で担いでいる画桿の方天戟を何度振るつたか。それはいつ頃から始まったのか。全ては忘却の彼方へと消え去つていった。

「何だよ、弱くなったんじゃないのかよ、アインクラッドの恐怖……！」

か、というくらい放っていた。

誰が見ても笑えない現状。

それでも笑えるのは長年の付き合いが物を言うのだろう。

ユーキが本気でキレていないことを把握している水妖精族ウンディーネの彼女

——アスナは隣で座って笑みを浮かべて。

「放置していた癖に、今更それ言うの?」

「……うるせえな」

正論だ。

アインクラッドの恐怖を名乗る偽物の存在はユーキの耳にも入っていた。

GGO、ガンゲイル・オンラインにて、何者かがアインクラッドの恐怖を名乗り好き勝手暴れている。しかしユーキは放置していた。別に名乗られたところで気にする必要もなし、むしろその名を誇りとも思っていない彼にとって恥ずべきものであった。だからこそその放置。触れたくもないモノを好き好んで触りに行くなど、物好きにも程があるが故に。

その結果がこのザマだ。

アインクラッドの恐怖を偽る何者かは、思いの外腕が立つようで、幾多のプレイヤーを撃ち負かし、そのしわ寄せが八つ当たりとなってユーキへと押し寄せる。『本物』は弱くなった、という噂も相俟ってその数は尋常ではなかった。

「弱くなったのは事実だけどよ、ここまで喧嘩売られるかね普通?

どんだけ恨みつらみ買ってたんだよオレは」

「ユーキくんって言うよりも、その偽物が悪質なんじゃないの?」

「さてな。正直、身に覚えがありすぎる。これが偽物のせいなのか、はたまたオレの身から出た錆なのか」

うんざりした口調で言うと肩を竦めて。

「だいたい、連中の強襲がお粗末すぎんだよ」

「連中って、ユーキくんを襲った人達のこと？」

ああ、とユーキは頷くと。

「連携のれの字もない。絶対ソロでかかってきた方が強かったぜアイツら」

「元々パーティー組んでた人達じゃないのかな？」

「大方、GGOってゲーム内で知り合って偽物に返り討ちにあい、勝てないからオレをやるうぜって一時的に手を組んだんだろ」

数の有利なんてどうとでもなる、とはユーキの持論であった。

連中は数が多いほど驕る。数が多ければ多いほど、有利に事を運べると考えている。確かにその通りなのだろう。実際問題、突出した一騎の武よりも、一糸乱れぬ連携を持った数多の軍の方が脅威である。

しかしそれは、戦争での話だ。素人の喧嘩はそこまで洗練されたモノではない。数が多いからこそあぐらをかき、それが少しでも乱れるとたちまち脆くなる。烏合の衆とは良く言ったものだ。素人の喧嘩での数の有利など、何度でも覆せられる。

ときに挑発し、ときに煽り、ときに分断する。同士討ちを誘うのも一つの手だ。

頭に血が登れば登るだけ、冷静な判断ができなくなる。そうすれば、その喧嘩は詰みだ。あとは叩き潰せば済む。

しかし慣れもある。

ユーキは今まで、小学校から数えて幾多もの喧嘩をしてきた。SAOでも変わらない。ときには数多ものモンスターの大軍を相手取ることもあったし、殺人集団と相対することもあった。

一対一、という状況は以外にも少ない。むしろ一対多という状況のほうが多いといえる。故に、ユーキは本能的に理解している。複数を敵に回した際、どうやって立ち回れば良いのか。彼は本能的に理解し

ていた。

「まったく、喧嘩売ってくるのは自由だけどよ。もうちょっとは、気合い入れてほしいもんだ」

「そういう問題かなー?」

困ったように笑みを浮かべるアスナに対して、ユーキは訝しむように問う。

「そういう問題じゃねえの?」

「そもそも、ユーキくんを襲うのがおかしいと思うんだけど」

「それは、まあ別に。よっぽど偽物が強いんだろ?」

「だとしてもユーキくんを襲うのはおかしいと思う……」

アスナは面白くなさそうに呟く。

無理もない。想い人が何の謂れもない因縁をつけられて、何度も襲われているのだ。憤りはあるし、一言文句を言わないと気が済まないというもの。

だが何も言えない。何せユーキ本人が、偽物に対して穏やかそのものなのだ。第三者の自分が、とやかく言うのは違う、とアスナは考える。ユーキ風に言うと、筋が通らない、といういやつだろう。

「……ユーキくんはどうするの? 偽物、放って置くの?」

「まあ、迷惑ではあるが……」

「あるが?」

「……今更、文句言うのもなあ?」

好きにさせておけ。

それが当初のユーキのスタンスであった。自慢にもならないアイコンクラッドの恐怖を名乗りたいのなら、勝手にやらせておけばいい。そもそも、その名を誇りに思ったことなどユーキは一度たりともない

のだ。勝手に名乗らてて、文句を言うほど【アインクラッドの恐怖】という名に思入れなどない。

しかし状況が変わった。

偽物に勝てないからと、今度は本物に因縁を付けてくる、という奇妙な状況になっている。それも相手が強ければ良かった。ギリギリの勝負ができる程度であれば、ユーキも文句はない。むしろ臨む所といった展開だ。だが蓋を開けてみれば、二流や三流のプレイヤー達ばかり。一人ではどうしようもないのなら、連携し挑んでくる、というわけでもなく。何かが劣るのであれば何かで補う、といった最低限の努力すら放棄した連中ばかり。

そんなどうしようもない連中ばかりを相手にしているのだ、それはもう嫌気が差すというもの。

腕を組み、青空を見上げて、ユーキは呟いた。

「GGOか……」

「いつコンバートするの？」

「……まだ何も言ってねえんだけど？」

「わかるわよ、ユーキくんの考えることくらい」

クスクス、と笑みを零し。

「それに何だかんだ言って、気になるんでしょう？ 偽物のこと」

「まあ、な。強いつてハナシだし？ 気にならないと言えば嘘になる」

「男の子って好きだよね、そういうの。強さ比べって奴でしょ？」

「意地があるからな、男の子には」

拗ねた調子で言う幼馴染に、アスナは微笑ましく見つめた。

「それにほら、GGOって銃使うだろ？」

「うん、そうみたいだね」

「銃ってだけで放っておけねえだろ。男の子的な意味でも」

「……偽物とか建前で、本当は結構気になってたでしょGGG」

第5話 恐弾が強さを求める理由

作戦は完璧だった。

GGO内での古参プレイヤーで、かつ名の知れた男——ダインを撃つ為の段取りは完璧だった。

彼とダイン、どうして争うことになったのかなど実際の所覚えていない。SBCグロッケン内、数多く点在されている酒場にて、自分とダインは言い争いをしたところまでは覚えていてる。しかし肝心のそれ以上の記憶が、何が原因で争うことになったのか、彼はどうしても思い出せずにいた。

だがそれはきつと、ダインも同じだろうと彼は結論付ける。

どうしてこうなったのかもわからず、どうして敵対することになったかも不明瞭。あまりにも漠然としている闘争であると彼自身が理解していた。

それでも謝ることはしない。正直な話し、彼にとって原因などどうでも良かった。彼という人間は、どうしてもダインという男が気に入らなかった。その嫌悪は根が深く、一目見るだけで苛立ちが募り、声を聴くだけで虫酸が走るほど。

理由は特にない。

古参と言うだけででかい顔をして、軽薄そうな性格から、一手一足何から何まで気に入らなかった。

だから、少しは痛い目を見せてやろう、と。

彼は持ちうる人脈と仲間のコネ、更に言うところダインへの行き過ぎた嘘偽りを広め、ダインだけを殺すためのチームを作った。

とは言え所詮、烏合の衆に過ぎない。ダインという男を良く知るプレイヤーも中には存在しており、彼が語るダイン像と自分たちが良く知るダインとかけ離れており、彼が私怨で動いていることは明白であった。

少しでも粗があれば、チームは瓦解する。

だが彼は断言する。作戦は完璧であったと。

この戦いに備えてきた。

ダインと争うのに渋る仲間を金で黙らせて、GGOPレイヤーが多く集う掲示板にはダインへの虚言を吹聴し尽くし、大金をはたいて「ベヒモス」を用心棒として雇った。

彼が用いる力を、ダインを倒す為だけに注ぎ込んだのだ。これで負けていい筈がない、いい筈がない。

何度も彼は思う。

—— 作戦は完璧だった ——。

ダインには気心の知れた仲間達がいる。

だがそれ以上に厄介な、とある名の知れた狙撃手と親交があることは、彼も把握していた。ならば当然、この戦いに用心棒として雇うのは当然。

その狙撃手は、賞金首を専門に狩るプレイヤー、賞金稼ぎ。ハウンティハンター その勇

名は彼の耳にも入っている。「恐弾の射手」、それが彼女の異名であった。狙った獲物は逃さず、必ず脳天へと弾丸を叩き込む。悪天候だろうが、強風が吹こうが、関係ない。彼女の弾丸は空気の層を切り裂き、無慈悲に世界を駆けて、標的を絶命足らしめる。

聞こえによつては物騒だ。

しかし彼にはその程度の驚異でしかない。

いくらAIMが優れていようが、異名などという肩書があろうが、所詮は狙撃手。一人では何も出来ないし、近距離で戦闘すれば何も出来ずに銃弾の雨に倒れることだろう。

だからこそその包囲。用心棒として雇ったベヒモスと数名を囿としてダインと仲間達にぶつけさせて、彼と他の者は「恐弾の射手」を仕留めるために包囲殲滅という一手を打つ。

狙撃手が存在する戦場が放つプレッシャーは計り知れない。狙撃は特定の目標に対して、致命的な攻撃を行うことができる。いつでも、いかなる状態で、狙撃手という人種は正確な精度で兵士たちを打ち抜いてくる。仲間の戦意を削がせるためにはいかならず、ダイン達

の士気を挫く、だから「恐弾の射手」を討ち取る、というのは建前。彼が「恐弾の射手」を討つ本当の理由は別にある。

それは名声欲だ。巧みにチームを指揮し、かの「恐弾の射手」を討ち取った。それだけで周囲は彼を羨望するだろう、と彼自身は考える。

そして何よりも「恐弾の射手」が獲物として対物狙撃銃——ヘカートⅡの存在だ。ギリシャ神話において冥界の女神の名を冠するそれは、レアリティの高い武器でもある。GGOのシステム上、プレイヤーが何者かにキルされることがあれば、所持しているアイテムをランダムにドロップする。となれば、「恐弾の射手」を殺せば、もしかするとヘカートⅡがドロップする可能性があるということに繋がる。

これが彼の思惑である。

気に入らないダインを狙うのではなく、目先の欲に眼がくらみ選択する。

私欲に走った彼が、自身の欲に滅ぼされるのは必然と言える。故に。

「はあ?」

——彼が撃たれるのも時間の問題だった。

もう一度言おう。

作戦は、完璧、だった。

だった。つまりは過去形。

狙撃手を包囲する。その選択は間違いではないだろう。長距離から標的を撃ち抜く。それが狙撃手であるのだから。

狙撃されないために近付く。それも間違いではない。狙撃手として仕事をさせないために、不利である近接で決着をつける。

だから機動力のないベヒモスを囷にする。これも間違いじゃない。そうなればベヒモスは邪魔でしかなく、動けないのは前線でダイン達と撃ち合っていた方が良い。

彼の策は間違いではない。
ただ間違っていたとすれば――。

――

彼女の、「恐弾の射手」の戦力を、見誤っていたということだけだ。
誰が近接が不利と言った。

誰が狙撃手は近づけば何も出来ないと言った。

誰が――「恐弾の射手」など大した相手ではないと決めつけた。

包囲は完了した、と勝利を確信しニヤける彼の頬はすぐに引きつる
ソレに変わる。

「恐弾の射手」は狙撃するために身体を安定させて、地面に伏せた
伏射フクシと呼ばれる姿勢を取っていた――訳ではない。

彼女はなんと、二本の足で地面を踏みつけ、堂々とその場に立っていた。まるで彼が、自身を襲撃すると予期していたかのよう。だがそれでもおかしい。場所を変えずに、装備も変えずに、対物狙撃銃を持ったまま、彼女は迎え撃とうとしている。

まだ彼の中で勝利への確信は揺るがない。

何を血迷ったのか、とせせら笑っている余裕すらある。

だが問題はその後。彼が「恐弾の射手」の愛銃ヘカートⅡの状態を見て、戸惑いが生まれた。

狙撃する際、銃身を安定させるためにライフルのフォアエンドはバイポッドを装着するはずだ。しかしどういうわけか、今の彼女にはそれが無い。

右手にヘカートⅡを持ち、右手の人差し指は引き金に。そして左手はフォアエンドを持ち銃身を支えている。

装備も軽装。深緑のジャケットを羽織り、その下はボディラインを強調させるインナー。そして黒色のホットパンツに、膝上丈ほどの長さのブーツを履いていた。

女性のアバターであるものの、マフラーや首飾りといったアクセサリなどない。本当の意味での軽装、まるで戦うためだけに特化したような姿。

彼女は深く息を吐き、目を閉じる。

そして一言、ポツリと呟く。

——音を殺して

私の弾丸は世界を駆ける

次の瞬間、彼女は駆け出し引き金を引いた。

「なっ……!!?」

彼が驚愕する間に、一人の男の脳天が射抜かれる。同時に射抜かれた男の身体はその場に存在せず、変わりに極小のオブジェクト片がその場を漂い地面へと落ちていく。それは射抜かれた男が、キルされたことを意味していた。

間髪入れずに、「恐弾の射手」と呼ばれた狙撃手はヘカートIIのボルトハンドルを引く。金属音と共に薬莢が排出され、次弾が装填された。もう一人の男へと接近しながら、その胴体を撃ち抜く。

ここでやつと、彼は状況を正しく認識した。

排出された薬莢が地面に落ち、空の特有音が鳴る。眼球がグラグラと揺れて、ありえないモノをみるかのような怯えた眼で、「恐弾の射手」を見つめる。

——こ、コイツ、狙撃手のくせに……!!

——突撃してきやがった……!!

「う、撃て！ 撃て、この凸スナ女をお！」

思考が定まらず、残りの二名へ漠然とした指示を告げる。

叫ぶ彼の声はどこか悲鳴にも似ている。ありえない存在を認めな

いかのように、今日の前で起こっている現状をそむけるように、彼は叫んでいた。

二名の男たちが瞬時に反応できたのは、きっと彼と同じ気持ちだったからだろう。

一刻も早く、「恐弾の射手」を討ち倒したい。その一点のみが、彼を結束させている鎖でもあった。

故に、照準など定まっていな。

狙い澄ますこともなく、自棄にも近い。木霊するは連続する銃声。それは二人の獲物であるアサルトライフルが火を吹いた音でもあった。

これで「恐弾の射手」は蜂の巣——とはならない。

彼女は直ぐに——。

「——っ！」

左方へと飛びその場から離脱した。

その身軽な様子は、どこか猫のようでもある。危険を予知して、理性が働くよりも先に本能で身体を動かす。

とはいえ、猫のように脱兎する「恐弾の射手」は、銃弾の雨を避ける事が出来るほど規格外の人種ではない。彼らが黙ったままでは終わらないことを読み、彼らの行動よりも速く動いていただけに過ぎなかった。だが彼らにとってそれだけでも、「恐弾の射手」は恐怖の対象に映ったようだ。

「恐弾の射手」はその場を瞬時に離脱して、近場にあつた遮蔽物に隠れる。

だというのに、彼らはアサルトライフルを乱射をやめない。

一人は死ね死ね、と連呼しながら。一人は遮蔽物を睨めつけながら。二人は引き金を引き続けている。

そして彼はいち早く冷静さを取り戻して。

「くそっ……っ！」

悪態をつきながら、彼は手に何かを握りしめていた。

銃ではない。ボール程の大ききで、銃口がないそれを銃とは呼べない。それは——手榴弾。

安全装置であるピンを抜き、そして片手で放り投げる。場所は数寸違わず、*「恐弾の射手」*が潜伏している遮蔽物の向こうへと。

真つ直ぐ飛ぶ銃弾とは違い、手榴弾は手で放ることにより、曲線上に軌道を描いて投げる事が出来る。

そして彼の放った手榴弾は、彼の狙い通り遮蔽物の向こう側へと落ちようとしていた。

彼は笑みを浮かべて、ダブルアクション式のリボルバーを構えた。

詰みだ。手榴弾に気付き、*「恐弾の射手」*が遮蔽物から逃げようとしたところで待つているのは銃弾の雨。距離は50メートルもない。彼にとって必中の距離であり、外すことはまずないと断言できる。

手榴弾に気付かなくても同じだ。そのまま遮蔽物に隠れたままでも、手榴弾は地面に落ちると同時に爆発する。爆発した手榴弾は爆風や破片を数メートルから数十メートルで四散し範囲内の人間を殺傷させる。そして彼が投げたのは、フラグメンテーションと呼ばれる手榴弾。周囲に生成破片を飛散させる。破片は銃弾より軽量であるものの鋭く、殺傷力には申し分ない。近場で爆発したものなら、まず助からないだろう。

故に、詰み。

だからこそ、詰み。

彼はどう転んでも勝者となりえてしまう。

面を食らったことは認めよう。

まさか狙撃手のくせに、突撃してくるとは思わなかった。しかも彼女は最初から彼らを近接戦闘で仕留めると決めていたのだろう。

しかしそれが命取り。自身の腕を確信していたからこそ出来た油断。出来ないことを出来ると思いが上がった女の哀れな末路。その結果を彼は思い描いていた。無様に撃ち抜かれるさまを、間抜けに爆発四散するさまを。彼は速くも想像し、笑みを浮かべていた。

だがそれは――。

――それは、ただの妄想へとなってしまった。

なんと「恐弾の射手」は遮蔽物に隠れたまま、銃口を空中で漂っていた手榴弾に向けて、引き金を引いた。それはまるでクレー射撃のようだが、ソレとはまったく違う。クレー射撃はあくまで飛んでくるとわかった上で射出される素焼き皿を撃ち落としていくスポーツ競技。今回は違う。手榴弾の投擲など、「恐弾の射手」の頭には想定していなかった行為であり、完全なる奇襲でもあった。

だというのにも関わらず、「恐弾の射手」は慌てる様子もなく空中に漂っていた手榴弾を取り付けられていたスコープすらも覗かずに狙撃してみせた。

次に起こるは爆発。

撃ち抜かれた手榴弾は空中で爆発し、破片は文字通り雨となり彼らの身体へと降り注いだ。

彼以外の二人は、手榴弾の存在など知りもしない。何せ彼自身が合図もせずに、手榴弾を投げたのだ。それが狙撃され爆発し、敵対していた者の武器へと利用される。そんなこと誰が想定しているだろうか。

それが二人の最後だった。

自分がどうやって、どうして、どのようにして、殺されたのか。それがわからないまま殺されることとなる。

そして彼と言えば――。

「……………」

運良く生き残っていた。

彼は自身が放り投げた手榴弾が空中で爆発したと同時に生まれた衝撃が身体を叩き付けられ、後方へと数メートルも飛ばされ地面に倒

れている。

意識が朦朧とする。視界が白く染まる。爆発時に耳がやられたのか耳鳴りが止まることがない。

もはや自分がうつ伏せなのか、仰向けなのかもわからない。

「——チェックメイト」

声が聞こえた。

彼は定まらない視線を声のした方向へと向ける。

視線の先には件の「恐弾の射手」が立っており、躊躇うことなく銃口を彼へと向けていた。

ここで漸く彼は自分が仰向けで倒れていることを正しく認識する。

チェックメイトと彼女は言った。

それは言葉通りなのだろう。命乞いをしたところで無意味、と。むしろ下手な素振りを見せただけで、「恐弾の射手」は情け容赦なく引き金を引くに違いない。

「終わったわよ。ええ、多分彼がそう」

独り言、ではない。

彼女は、右耳に装着している通信するためのヘッドセットで何者かと連絡を取っていた。恐らく彼女の雇い主であるダインと連絡を取っているのだろう。

「それでそっちは？ ……そう。まあリーダーがやられたんじゃ当然よね」

彼女は驚く様子もなく、さも当然といった調子だ。

ベヒモス率いる囚達は返り討ちにあった、もしくは彼がやられたと判断するや否や逃走したのだろう。仇討ちに士気が上がる、ということはない。何せ烏合の衆だ。彼えの忠義など存在せず、義理など参加

しただけで果たしたも同然。

「それじゃ殺るけど、何か伝言ある？ わかった、伝えとくわ」

それだけ言うと、今度こそ意識を彼へと向ける。

そして「恐弾の射手」は感情を乗せることなく簡潔に言った。

「ダインからの伝言。『喧嘩を売るなら相手を選べ』だって。まあアイツも隙が多いヤツだし、次頑張りなさい」

彼は思わず笑みを零した。

それは自身に向けられたモノではなく、彼女に対してのモノだ。

ダインが言った、喧嘩を売るなら相手を選べ、とはダインに対してのものではなく、彼女に対してのものだ。

だと言うのに、目の前で銃口を向けている女はまるで理解していない。自身がどれだけ強いのか、正しく認識してい。自己評価が極端に低いのか、はたまた目標としているモノが高すぎる故に気付いていないのか。

どちらでもいい。どちらだろうと関係がない。

彼女が見下ろし、彼は見下されている。

彼女が勝者であり、彼が敗者。

その事実だけは変わらない。

——「恐弾の射手」。

もう二度と敵に回さないと彼は誓う。

彼女の名は——。

.....

2025年12月13日 PM13:10
ガンゲイル・オンライン SBCグロッケン 空中回路

「はあ」

サラサラと細いペールブルーの髪を揺らして彼女——シノン
は歩を進めていた。

そして億劫そうに吐いたため息は、先の戦闘で疲弊し自然と出てし
まった——ということではなかった。

疲労困憊というよりも、彼女の表情は非常に面倒くさそうなもの
で、億劫であると表した方が正しいのかも知れない。

現に彼女は呆れていた。

何に呆れていると言えば、男のつまらない意地。

本日12月13日、土曜日。

朝早くからダインから連絡があったと思いきや、切羽詰まった様子
で用心棒を頼まれた。シノンとしてもダインは仲間——とまで
はいかないものの、顔馴染みの間柄である。現在GGOを騒がせてい
る無差別PK【アインクラッドの恐怖】の情報を何度か教えてもらっ
たこともあった。断ることも出来る。ダインはシュピーゲルのよう
な友達ではない。他人に近い知人だ。断ることなど容易い。

だが、世話になったのもまた事実。ここで断るのは「彼」風に言う
と、筋が通らない。

渋々といった調子でシノンは、ダインの要請に応じることにした。

しかし直ぐにそれは、後悔へと変わる事となる。

ダインとその仲間達は、とあるチームと抗争を始める。

その内容も下らない。ダインにとって、敵対するチームリーダーが気に入らないから戦う程度のモノ。要は子供の喧嘩と変わらない。表面上だけ取り繕い、仲良く演じておけばいいのに、だ。

「どうして男って、こう、幼いのかしら」

呟いた声へ応じる人間はいない。

だがこれで、ダインへの義理は果たした。次このような下らない争いに巻き込まうものなら、相手に変わって自分がダインの眉間に風穴開けてやろう、と物騒なことを考えていると。

「シノンちゃん！」

件の問題男——ダインが駆け寄ってきた。

このまま来た道を引き返してやろうか、とシノンは考えるが直ぐに改めた。避けるよりも、文句の一つや二つ言う事を選んだようである。

そんな殺伐とした胸中も知らずに、ダインは茶目っ気たっぷりなウインクしながら。

「待った？」

「死になさいよ」

目の前でテハツ☆と言わんばかりに可愛い子ぶる男にイラツとしたのか、反射的にシノンは冷たく斬り捨てる。

「辛辣過ぎませんか!?!」

「うるさい。今度あんな下らない喧嘩に巻き込んだら、私があなたを殺してあげるから」

「殺伐！」

鬱陶しい。

シノンは一人で騒ぐダインをそう言いたげに睨めつけて、進行方向へと進む。

対するダインは慌てながらもその後を追いかけてながら。

「どこ行くんだよ、シノン」

「あなたに関係ないでしょ」

「そう言うなって。今回の報酬は倍支払うからさー」

「当然」

ふん、と鼻を鳴らして強い口調でシノンは言うも、依然として自身がどこに向かっているか口にはしなかった。むしろ話しは終わりだと言わんばかりに、ダインが存在していないように振る舞っている節すらある。

とはいえ、ダインも気にしている様子もない。

彼女が他人には冷たく、その癖妙なところで律儀であることを、理解している。どこの誰に教育されたのかは知らないが、シノンという少女は悪い人間ではない。

となれば予測しなければならぬ。

SBCグロッケンは大広大なフロアが幾重にも重なって存在する多層構造だ。そして彼女の進行方向にはガンショップや酒場といった娯楽施設は存在しない。となれば一つ、ダインには心当たりがあった。

「総督府か？」

ピクっ、とシノンの細い方が揺れる。

「……まさか、BOBのエントリーがまだ済んでないとか？」

ピクピクっ、と小刻みにシノンの肩が揺れる。

「つて、マジかよ。大丈夫か？ 確かエントリーの締切って15時までだろ？」

「だからこうして急いでるんでしよう。邪魔しないで」

「いやまさか、まだエントリーしてないとは思わなくてよ。やる気ある、シノンちゃん？」

「……うるさい」

やる気はもちろんある。

エントリーしようとは思っていたのだが、連日シュピーゲルと賞金首を狩り続けており、エントリーするのを忘れていたのだ。だがそれをダインにバレるわけにはいかない。バレたら何を言われるかわからず、間違いなく笑われるに決まっているからだ。

ちなみに、相棒のシュピーゲルは既にエントリーを済ませている。要領がいいとは彼のことを言うのだろうか。

「……あなたは済ませているの？」

「もちろんだろ。俺のスコードロン仲間も済ませてるぜ？」

「ぐっ……！」

謎の敗北感がシノンを襲う。

まさかマヌケ（シノン基準）なダインが自分よりも早くエントリーを済ませているとは思わなかったのだろう。

だが負けない。今は歯を食いしばろう、負け犬と罵られよう。

敗北は人を成長に繋げる大事な要素の一つだ。次があるときは、ダインよりも早くエントリーを済ませることを、ここでシノンは誓う。

「次は負けないわよ」

「お前は何と戦ってるんだ？」

呆れた調子で言って、ダインは何かに気付いた。

彼とシノンが歩いている進行方向の先、そこには下層へと降りるエレベーターがあり、何やら人垣が出来ている。

なんだ、とダインは疑問に思うと同時に、足早にエレベーター前で順番を待っている男に適当に声をかけた。

「なんでそんなに急いでる?」

「M9000番系のヤツが、アンタタッチャブルに挑むんだってさ!」
「へえ」

アンタタッチャブル。

それは下層にあるギャンブルゲーム、のようなものだ。

プレイするには500クレジットを支払わなければならない、十メートル突破で1000クレジット、十五メートルで2000クレジットが賞金として貰え、最終的にガンマンに触れることが出来れば、それまで注ぎ込まれたクレジット全額賞金となる。

プレイ方法もシンプル。プレイヤーは所定の位置から進み、NPCガンマンの銃撃を躲しどこまで近づけるか競うゲーム。聞こえによつては簡単だ。だが問題は、プレイヤーが行動できる範囲だ。左右に移動できるのであればいざしらず、ガンマンへ近付くには一直線に進むしかない。

本来であれば攻略不能のゲーム。

GGOでプレイする人間は誰もが不可能であると断じていた。故に、アンタタッチャブルに注ぎ込むのは相当の物好き、もしくはGGOを始めてまもない初心者であるというのが暗黙の了解。

本来であればこのような挑むだけで見学者が集うゲームでもない。本来であれば、だ。

「数ヶ月前にクリアした奴か?」

「違う奴さ!」

興奮気味に言う男に対して、ダインは冷静に納得した。

そう。以前までは攻略不可能と匙を投げられていたアンタツチャブルであるが、ほんの数ヶ月前にとあるプレイヤーが攻略していたのだ。

それもM9000番代と呼ばれるレアなアバターのプレイヤー。もしかしたら、再び奇跡が見れるかも知れない、とプレイヤー達は見学するためにアンタツチャブルへと集っていた。

対するダインは興味が失せたようで、反応は淡泊なモノ。

元々興味が無いのだろう。銃弾を避けるわけでもないし、クリアしたのがたまたまM9000番アバターだった者だったというだけで、まぐれだったという可能性すらある。現にクリアしたとされる黒髪のM9000番の女はあれ以降アンタツチャブルに顔を出していないとダインは聞いていた。

今回もクリアするとは限らないし、期待して見学しに行き十メートル突破も出来ず、肩透かしを食らう可能性すらある。

「M9000番代……」

呟いたのはシノンだ。

どうやら彼女も途中から話を聞いていたようで、何やら考え込んでいる。

それから何かを思い出したかのように、ダインへと問いを投げた。

「ねえ。確かアインクラッドの恐怖の情報を集めてるって二人のプレイヤーもM9000番代だったわよね？」

「ああ。黒髪と金髪の女らしい」

「今は？」

「さてな。最近は『毒鳥』とツルんでるくらいしか聞いてないな」

「毒鳥？」

「ああ、お前と同じ異名持ちだ。名前は何だっけか……」

うーん、と考え進むダインに対して、シノンは立ち止まったまま。

視線の先にはエレベーター。

「おいおい、まさか見学しに行くのか?」

「悪い?」

「悪くはねえけど、お前エントリーはどうすんだ?」

「終わったら行くわよ」

「知らねえぞー、エントリー出来なくても」

「うるさいわね。さっさと行きなさいよ」

へーへー、とダインは総督府に向かう道を進みながら、シノンに手の甲を向けながら手を降った。どうやら本当に彼は興味がないようだ。

それを静かに見送ったシノンはエレベーターが上がってくるのを待つ。

彼女は奇跡が見たいわけではない。

M9000番系のレアアバターはコンバート前のアカウントを使い込んでるほど出やすい、と噂で耳にしたことがある。

となれば、現在アンタッチャブルをやるうとしているプレイヤーはVRMMOの経験者という可能性がある。となれば、自身の敵になるかもしれない。

——これは敵情視察。

——将来、敵になるかもしれない。

——私が求める強さを手にする上での障害になるかも知れない。

そこまで考えて、まだ見ぬアンタッチャブル挑戦者にシノンは敵意を向ける。

両手はいつの間にか握り拳へと変わっており、表情は険しいモノへと変貌を遂げて、【恐弾の射手】が放つ雰囲気へと変化していく。

まるでそれはスイッチだ。今までのシノンがオフだったのに対して、今の【恐弾の射手】としてのシノンはオン。何者だろうが阻むこ

とを許しはしない、邪魔するのなら叩いて潰す、一発の弾丸。

——負けない。

——私は誰にも負けない。

——今度こそ並び立つために。

——あの人達のように。

——いいえ、あの人達よりも特別になるためにも。

「私は、先輩の、特別になるためにも——」

！。

——負けられない——

幕間 もう一人の後輩

2025年10月8日 PM 12:19

都内

金髪碧眼の少年——茅場優希はぼんやりとした様子で昼の都内を歩いていた。

いつも剣呑な様子で、注意深く周囲に神経を張り巡らせている彼にとつて、現在ののような有り様は希少と言えるのかも知れない。

だからだろうか。

普段から標準装備であった鋭い目つき、凶悪な人相は鳴りを潜め、年相応な少年の顔つきで歩いていた。

そのためか、やたらと人の目を引く。茅場優希は黙って、なおかつ顔つきを柔和にしていれば、外面は良い方である。恐らく母親に似ているからだろう。美しい長いブロンドの髪、そして透き通る蒼い瞳、凜とした顔つき。瓜二つ、とまではいかないものの優希は彼の母親によく似ている。

ならば声をかける者が必ず現れる——こともなかった。

恰好はラフであるものの、背筋を伸ばし胸を張り、堂々と居丈高に歩く彼は凜としている。世間では肉食系女子がいるというのなら、今の優希は恰好な餌食になるに違いない。

だが生憎、それは世間一般的な常識。物事には必ず例外が存在する。

優希に声を掛ける人間はいない。

むしろ目を合わせようとしなかった。彼が歩けば人垣が避け、道が出来上がる。

特に優希は威嚇している訳でもない。殺気を放っている訳でもあ、周りの人間を威圧していることもない。単純な話し、優希が纏う独特の雰囲気、相対する人間の本能を訴えているのだ。コイツに関わりを持つべきではないと。

つまりはこういうことだ。誰が好き好んで、少年の姿をした獣に声を掛けるだろうか。

「……ふん」

とはいえ、優希本人もなんとなく察してはいた。

小さい欠伸をすると、名も知らぬ誰かが一瞬だけ優希を見るも直ぐに目をそらす。

鬱陶しい、と思つたことはない。むしろ心地よくもある。何せ絡まれる必要もない、ただ何もしてこないなら、それはそれで良い。むしろそうあるべきだ。

何せ最近まで、別の世界では絡まれっぱなしだったのだ。身に覚えのない因縁をつけられて、喧嘩を売られて、それを高値で買い、完膚なきまでに叩き潰す。その繰り返しをなんどもしてきた。

正直な話し、ここで優希が黙つて粛々としていれば、争いになどに発展はしなかった。優希もそれは理解している。だが挑まれたからには、応じて白黒はつきりしないと気がすまない。優希も男の子、強さ比べというのは心が躍る。相手が強ければ尚良い。

問題はその相手が、徒党を組んだにも関わらず大したことがないということだ。スライムが現れ、何度も倒しても爽快感と高揚感を獲られないのと同じ。むしろストレスばかりが募っていく。

そんな憤りが、無意識に出てしまっているのだろう。

故に誰もが茅場優希に声を掛ける事もなく、むしろ触らぬように目をそらし避けて通っていく。触れば噛みつかれるかも知れない。

「先輩――」

「……ふん」

ぼんやりとした調子から、意識を前方へと向ける。

聞き覚えのある声が聞こえた。そしていつの間にか、目的としていた場所へと到着していたことを優希は認識する。

目的地。それは後輩と待ち合わせをしていた場所に他ならない。周りには優希と同じ目的を同じとしているのか、携帯を気にしている

男性から、どこに行こうかとその場で打ち合わせを始めるカップルも存在する。

そしてその中に、優希を「先輩」と称する人間の姿もあった。

優希に向かって、笑顔で、片手を振る。

対して優希はどこか気恥ずかしげに、「おう」と応じて、軽く片手を上げてその人物の前まで歩を進めて。

「ハズいからやめれ」

「そうですかね?」

「そうです」

気をつけます、と優希を先輩と言った人物は笑顔で応じる。

その様子はまったく悪びれる様子もない。むしろどこか、優希を困らせて嬉しい、と言わんばかりの調子だ。

先輩というからには、その人物は優希の後輩に当たるに違いない。優希は後輩を軽く睨めつけて。

「恭二さ、性格悪くなってるねえか?」

「そうですかね?」

「そうです。まあ、前までのオマエよりかは何倍もマシだけだな。堂々として楽しんでそうだし」

呆れた調子でため息を吐く優希に対して、恭二と呼ばれた少年——
——新川恭二は嬉しそうな笑みを浮かべて。

「僕が変わったのは先輩のせいですし、これは責任とって貰わないと」
「知るかよばか。オマエが勝手に変わっただけだ」

ハッ、と薄ら笑いを浮かべて優希が言うのと、なんとも言えない表情に一瞬だけ恭二は浮かべた。

何やら腑に落ちない。その評定は嬉しくもあり、どこか悲しくもあ

るような。どうした、と優希が尋ねる前に恭二は笑みを浮かべて。

「それで、今日はどうしたんですか先輩？」

「……オマエさ、今」

「はい？」

首をかしげる後輩に、いいや、と優希は首を横に振る。

恭二がそれを隠し振る舞っているということは、他人には触れてほしくないということなのだろう。確かに自分と彼は先輩と後輩の仲であるし、仲が良い部類であると自覚もしている。だとしても踏み込んでほしくない領域というのは確かに存在する。それが先程の表情であるのだろう。自分のことよりも、優希の用事を優先にしたということは、そういうことだ。誰にも、触れてほしくない、ということに違いない。

故に、優希は敢えて見なかったことにした。

触れてほしくないと思っているのなら、わざわざ触れに行く愚か者はいない。

「悪い、何でもない。オマエを呼び出した理由、だったか」

「はい。聞きたい事があるってことでしたけど……？」

「まあな。恭二って確か、GGOやってたよな？」

そうして優希と恭二は腰を落ち着かせるために、大通りを歩き始めた。

二人がこうして肩を並べて歩くのは初めて——という訳でもない。むしろその真逆、彼らは良くこうして都内へと足を運んでいた。

目的も様々。ゲーセンで暇をつぶしたり、新しい靴を見に行ったり、カラオケでストレス発散したり、甘味を求めて食べ歩きしたり、と特にこれといった目的はなかった。その様子は先輩と後輩というより、気の合う友達と遊んでいる、といったニュアンスに近い。

そうして二人が選んだ場所といえば、明らかに適当に選びましたという喫茶店であった。

此度はコーヒーを飲むためでも、スイーツを味わうためでもない。目的があり、恭二の話を聞きに来たのだ。静かで座れるならどこでも良い、と判断した結果と言えるだろう。

何事も迅速に。

優希はさっさと喫茶店のドアを開けると、恭二もその後続く。

客が来たにも関わらず、どこか無愛想な店主は「いらっしやい」とだけ告げる。

覇気もなければ、愛想もない。店内は昼時だと言うのに、客の姿は見当たらない。

なるほど、と。優希は一人納得する。これは客が誰もいないのも納得である。この様子なら料理も期待できないだろう。だが幸運なことに、本日は飲食を目的としたわけではない。

二人はコーヒーを頼むと適当に窓際のテーブル席について。

「驚いたなー」

「何がだ？」

後学のためにと店内を見渡していた優希の耳に、恭二は何気なく呟いていた。

それを優希は耳聴く拾うと、店内から恭二へと意識と視線を向けて、どういう意味なのか問いを投げた。

「先輩がGGOに興味あるとは思わなかったの。ALOを拠点にしてたし」

「興味がなかったわけじゃねえよ。ただキツカケがなかっただけさ」

最近忙しかったしな、と言いつつ続けて。

「噂の『アインクラッドの恐怖』くんの面も拝んでおきてえし」

「ああ……」

恭二は一度だけ納得したように力強く頷いて。

「偽物は僕と朝田さんも追ってるんですよ」

「あ？ 朝田もか？」

「はい。僕よりも殺る気満々」

肩を竦めて言う恭二に、どこかバツの悪そうな表情に変えて優希は問いを投げた。

「……朝田は元気なのか？」

その問いはどこか曖昧なものだ。

まるで長いこと会ってないようにも聞こえるそれは、文字通りそのままの意味なのだろう。

恭二もある程度は、朝田詩乃から話しは聞いている。

長いこと先輩と会っていないことを、本人の口から聞いたばかりだ。

隠す必要もない。

詩乃の今置かれている現状を、恭二は包み隠さずに優希へと説明することにした。

「元氣いっぱいですよ。今の彼女、GGOでも有名プレイヤーの一人

ですし」

「マジでか？」

「マジです。『異名持ち』って知ってます？」

「知らん。何じゃそれ？」

「優れたプレイヤーにだけ付けられるあだ名みたいなものですよ。その中で朝田さん、【恐弾の射手】って呼ばれてるんですよ？」

「何だその、物騒極まりないあだ名は？」

呆れた反面、感心半面。どちらも半々といった様子で呟いた優希。同時に注文しいたコーヒーが運ばれてきて、優希は一口だけ口をつける。

「苦っ」

思わず口に出てしまった。

飲めたものじゃない、と言うには言い過ぎであるがコーヒーだと考えても苦すぎるし、優希自身が甘党であるということを考えても苦すぎる。

優希は思う。こんな場所に来てよかった。ダイシーカフェのコーヒーがどれだけ美味しいのか再認識することが出来たのだから。

恭二は苦笑を浮かべながら、口を開いた。

先輩の反応を見て、どれほどのものか好奇心に勝てず、彼も一口飲んだのだろう。そして彼も思う。先輩は間違っていなかった、と。

「先輩は朝田さんとは会ってないんですか？」

「……まあ、最近遊んでねえな」

「どうしたんですかね？」

「さてな。連絡は頻繁に来るから、オレに愛想が尽きたって訳でもねえらしい」

「……朝田さんが先輩を嫌うってありえないと思いますよ？」

普段の彼女を知っているからこそ、恭二は断言することが出来る。朝田詩乃という彼女が、どれほど茅場優希という先輩を想っているのか。それが理解できるからこそ、恭二は断言する。ありえない、と。詩乃が優希を嫌うなんて、天地がひっくり返ってもありえないことである。

だがしかし、当の本人である優希は気付いていない。

自分がどれほど彼女に想われているのか、これっぽちも気付いていない様子もない。

現に優希は、不思議そうに首を傾げて。

「ンなもん、わかんねえだろ。そもそも好かれてるって保証もねえしな」

「先輩、そう言うところですよ」

「あ?」

全く要領を得なかったのかいまいち納得しきれしていない様子で、まあいい、と口にして優希は続ける。

「アイツも何か考えてんだろ。それこそ、オレなんぞと会ってる暇もないくらいにな」

「気になります?」

「気にならない、といったら嘘になる。けど邪魔する気はねえぞ。アイツの人生だ、オレが口を挟むのは筋が通らねえ。余程のことがない限り、アイツの好きにさせてやれ」

「余程のことって?」

「そりやもちろん……命に関わる状況だろ」

「命、ですか……」

邪魔をする気はない。

優希は詩乃の過去をある程度は把握している。だからこそ、今回の彼女の行動には最初戸惑ったものだ。VRMMOをやるのはいいと

しても、よりにもよって銃の世界であるGGO。普通に考えればありえない選択である。

しかしストレアは言った。自分たちがありえないことでも、本人からしてみたら違うのかも知れない、と。朝田詩乃もバカじゃない。むしろ聡明である。優希は認識している。自分が銃を主体としている世界に言っただうなるのか、詩乃がわからない筈もない。だが彼女は敢えて、過酷とも呼べる世界へ、彼女からしてみたら戦場と称してもおかしくもない世界へと飛び込んだ。

何かがあつたのだろう。彼女の中で、何かがあつたのだろう。優希にはそれがわからないものの、邪魔する気はなかった。彼女が選んだ彼女の道だ。それを邪魔するのは、筋が通らない。

そこまで考えて、優希は苦い、正直に言おうと不味いコーヒーを一口飲んでいると。

「先輩」

「ん？」

視線の先には神妙そうな顔つきで、恭二が口を開いていた。

いつもの柔和な笑みとは程遠い。鬼気迫るように、真剣な表情で。

「死銃^{デス・ガン}には気をつけてください」

「デス、ガン……？」

訝しみながら優希は続ける。

「何者だ？ ソイツも異名持ちって奴か？」

「ううん。勝手に自称しているだけです。死の銃って書いて、デスガンって」

「んだソレ。随分と寒い野郎だなオイ」

小馬鹿にする態度であるものの、口調はその真逆。至って優希は真

剣な調子で感想を漏らした。

いつもの彼ならば、人を喰ったような態度で嘲笑っていたことだろう。だがそれを、恭二の反応が許さない。そうですね、と同意はするものの、恭二は笑み一つすら零すことなく、変わらぬ真剣な表情で優希を見つめていた。

「ンで、そいつがどうした？ やばいくらい強いのか？」

「強い弱いの話しじゃないんです」

「……何が言いてえんだ、恭二。ハッキリ言えよ」

「それは……」

鋭い目つきとなり、警戒心を顕にする優希を前にして。

恭二は意を決して結論だけを言った。

「そいつに撃たれたら——死ぬんです」

「はっ？」

想像していなかった言葉に目を丸くする。

死ぬ。それはつまり文字通りのことなのか、それともゲーム内での話しなのか。

「死ぬってつまり……」

「現実世界で、死ぬんです」

「——」

言葉を失った。

ポカンと口を開けて恭二を見る。

冗談、と。バカバカしい、と。否定することは優希には出来なかった。

何故なら、数年間そんな世界に囚われていたばかりだ。仮想世界での死は、現実世界にいても死に繋がる世界——ソードア—

ト・オンライン。

亡き叔父が残した負の遺産。自身がこの手で殺めた者の消えぬ罪。そして——茅場優希が関わりぬかねばならない事象の一つ。

それがGGOで起きている。

しかし同時に、それはありえない、と否定する声も優希の中にはあった。

アレはナーヴギアを装着していたからこそ起きた。現在の次世代機であるアミユスファイアに、脳を焼き切るなんて機能は存在しない。ならば恭二の言うのは嘘なのか、と結論付けられるが。

——いいや、それもありえねえ。

——そもそも恭二がそんなことする意味がない。

——オレに嘘について、何のメリツトがある？

——つか、コイツはんな質の悪い冗談を言うやつじゃない。

——つてことは……。

すべて本当ということになってしまう。

それを踏まえて優希は口を開いた。

「オマエは死銃^{デス・ガン}ってクソが人を殺ってる現場を見たのか？」

「……見てないです」

「死銃^{デス・ガン}ってのはどんだけ有名なんだ？」

「……まだ有名じゃないです。これから行動する、と思います」

「あ？ どういう——」

そこまで言っつて、優希からこれ以上続くことはなかった。

恭二の眼、どこかで見たことがある。何かを隠しているようで、それで何かを決意するような眼。それは何度も見てきたもの。仮想世界で虜囚となっていた、身内を斬るために行動していた——自分の眼とそっくりだった。

「わかった」

「え？」

ポツリと呟いて優希は続ける。

「死銃^{デス・ガン}ってクソ野郎に気を付ければ良いんだろ？」

「そう、ですけど……」

「何だよ、まだ何かあんのか？」

「先輩は、聞かないんですか？」

「何を？」

「どうして死銃^{デス・ガン}のことに詳しくんだ、とか……」

「聞かねえよ」

曖昧な問いに、間髪入れずに優希は断言する。

「アドバイスが一つだ。——やるからには死ぬ気でやれ」

第6話 うっかりの英雄

その動きは、人のそれではなかった。

まるでその姿はネコ科のようで。

しなやかに、それでいて強靱的で力強く、前へ前へと前進してみせる。止まる素振りすら見せない。いいや、もしかしたらそれはわかっていたのかも知れない。動かなければ、銃弾の雨が降り注ぎ、蜂の巣になることを知っていたのだろう。

「――っ」

それは黒い影と形容が出来た。

影は銃弾の雨を避けて、更に避けて、なお避けて、前進する。

軽業師のように足取りは軽く、その疾駆に淀みなどまるでなかった。

影が相対するのは、一体のNPCガンマン。

感情もなく無機質な眼は、容赦なく黒い影へと向けられ、数寸違わず銃弾を走らせる。駆ける弾丸が疾速だとするのなら、装填する速度は神速と言える。

弾丸を込めて、銃弾として撃つたのだから、装填しなければ次なる弾は撃てないことは明白。そしてNPCガンマンが撃った数は六発。NPCガンマンの獲物はリボルバーだ。装填するのだから、常識的に考えれば時間がかかるのは確実だろう。

だがタイムラグを感じさせない装填リロード、そして極めつけは人の限界を等に超えている早撃ち。通常であれば十五メートルも踏破することなど不可能なゲーム。それがアンタッチャブルというゲームだ。

だというのに、件の黒い影は容易く前進していく。

その足取りは変わらず軽やかであることに変わりなく、もしかしたら実は簡単なゲームだったのかもしれないと勘違いさせるには充分すぎる挙動であった。

しかしそれは大きな間違えだ。

アンタッチャブルというゲームは簡単なゲームでもなければ、常人がクリアできる代物ではない。

ならば、黒い影の動きは軽やかなものなのか。簡単な話だ、不可能とされるゲームに挑み、涼しい顔で銃弾の雨を物ともしない黒い影が異常なだけなのだ。

何者かが呟いた、凄いい、と。

何者かが声援をあげる、頑張れ、と。

何者かが見守る、最早声すら上げない。

そして彼女も、その中の何者かの一人だった。

「……凄いい」

ポツリ、と呟いた。

不覚にも、思わず、普段の彼女からは考えられない。

有り体に言ってしまうえば、見惚れてしまった。黒い影の身体捌きは美しい。一朝一夕で手に入れられる動きではない。黒い影が存在した場所に、弾丸が殺到する。だが貫くことはない。黒い影は残像を残して、最小限の動きで躲し、再び前進していく。類稀なる反応速度、人知を超えた動体視力、それだけでは説明できない何かを秘めている。何よりも注目すべきはその動きだ。必要最低限の動作で、何一つ迷いなく、選択するその姿は自信に満ちている。

きつと黒い影は幾重にも、幾多にも、繰り返してきたのだろう。そうやって身につけて、自分のモノとし、ヒトを超えた走力と判断力を手に入れたのだろう。

どれほどの鍛錬を積み、どれほどの死線を潜れば、どれほどの——世界を駆ければ、あの動きを手に入れることができたのだろう。

生半な努力ではないはずだ。

自分は一歩の領域まで、努力だけして到達できるものだろうか——

——何を馬鹿なことを考えているの。

——出来るかどうかじゃない。

——私は、最低でも、あの領域にまで到達しなければならぬ。

——そうじゃないと、私は先輩に……！

弱気になった己を吹き飛ばすが如く、彼女は首を横に振って、直ぐに視線と意識を件の黒い影へと向ける。

今度は見惚れているわけではない。少しでも能力を盗もうと。人の域を超えた動き、そして目を見張る判断力、それらを参考にするため一心不乱に彼女はただ見つめていた。

そしていつの間にか黒い影とガンマンとの距離が残り五メートルとなつている。

更に補足するのなら、黒い影はガンマンの早撃ちを避けきつたばかり。これはいわゆる詰みというやつだ。どう考えてもガンマンに次なる手はない。いくら神速を誇るリロードといえど、必ずタイムラグがあり、その隙を黒い影が見逃すとは到底思えない。あと数歩でガンマンに手が届き、二人目のアンタッチャブル制覇の快拳が成し遂げられることだろう。

だが彼女は妙なことに気が付いた。

黒い影の雰囲気、どういうわけか過敏になつていることに、彼女だけが気付いた。

——……なに？

——何を気付いたの……？

黒い影は一体何に気付いたのか、彼女は思案する。

しかし彼女が答えを出す前に、黒い影は動いた。推進していく姿勢から、無理やり状態を起こして片足で地を蹴って、上へと跳躍する。同時に——。

——なっ!?

——うそつ……！

ガンマンから銃弾が発射されていた。その数は六発。リボルバーの弾倉と同じ数が、黒い影の進行方向を撃ち抜いていた。あのまま直進していれば、間違いなく蜂の巣にされていたことだろう。

ありえない。先程ガンマンは六発間違いなく撃ち切っている。新しい弾を装填されない限り、手に持っているリボルバーから放たれることはない。それが普通の弾丸であればの話だ。

——レーザー……!?

——なんて反則！

——それよりもおかしいのはアイツよ。

——アイツは、アイツだけは、読んでいた。

——何て洞察力なの……！
——そうだ。

現在、注目すべきは実銃だというのに、弾切れでありながらレーザーを照射したガンマンではない。

予備動作もなかった筈だ。あったとしても、些細な動きでしかなかった筈だ。なのに黒い影は読み切った。それが咄嗟な反射神経であつたにしろ、類稀なる洞察力が導き出した結論だつたにしろ、黒い影は読み躲した事実は変わらない。

どちらにしても変わらない。彼女は認める。黒い影は強く、自分が倒すべき壁の一人であることを、彼女は認めた。

踏まえて口元に手を当てて考える。
もし黒い影がB O Bに出場するとなると、あの身体能力は驚異になる。

装備は明らかに初期装備。G G O経験者ではないことは間違いない。となると情報は皆無。こちらの情報だけ一方的に開示されている状況。

——でもどうする？

——私から声を掛ける？

——無理よ。

——私はあの人のような社交的な人間じゃない。

——絶対にボロが出る。

難しい顔で、眉間に皺を寄せながら。

彼女はこれからどうするか、と悩む。視線の先には変わらず黒い影の姿。周囲は呑気に声援を送っている。なにせ数ヶ月前にアンタツチャブルを制覇され、二人目の快挙者だ。もう二度と起きないと思われていた偉業が、今度は数十人の目に留まってしまった。

もしかしたら明日にはGGO関連のBBSやまとめサイトはお祭り騒ぎのように取り上げることだろう。

そう言う意味では気の毒なのかも知れない。と、同情染みた視線を彼女は黒い影へ送る。

白い布製の初期装備。

何も装備されておらず、大きな黒い瞳、長い綺麗な黒髪。細い腰に細い足。誰が見ても可愛らしい容姿をしている。自分には似合わないが、きつとゴスロリなど着れば似合うことだろうと彼女は思う。

なるほど、確かに。M9000番台がちゃほやされるのもわかる。アレは可愛すぎる。

故に、彼女も周囲も、黒い影を女性として見ていたが。

「スゲエ、姉ちゃん！」

「おお！ まさかアンタツチャブルをクリアしたプレイヤーが見れるとは思わなかった！」

「いいぞ、姉ちゃん！ ……ところで名前何ていったっけ？」

「キリト、キリトちゃんだよ！ ん、どっかて聞いたことがあるな？」

『『はじまりの英雄』と同じ名前だよ。きつと憧れてるんだろ。可愛いぜ』

「そうだな。本物がいるわけないか！」

その名を聞いて、ピクツ、と。彼女は肩を揺らす。

——はじまりの英雄——。

その名を聞いたことがあるからだ。どこでだったかなど考えることとはない。その名は、彼女がいつも想っている人と、肩を並べて称えている人物の異名に他ならない。

「桐ヶ谷、くん……?」

無意識に出してしまった彼女の——シノンの眩きに。

「……………へ?」

マヌケな声で、ピシリと音を立てて、声援に答えていた手を上げながらぎこちなく、黒い彼女改め——キリトはシノンへと振り向いた。

.....
.....
.....

2025年12月13日 PM13:20

ガンゲイル・オンライン SBCグロッケン メインストリート

「……………じー」

「……………あはは」

ジト目でシノンには横を歩く可愛らしい女性もとい、男性とは思えない可愛らしい容姿になってしまったキリトへと視線を注いでいた。まるでそれは非難、とまではいかないものの受け止め難い視線。掻い摘んで言うと、大変居心地が悪かった。

「あの、シノンさん？ どうして俺をずっと睨んでいるんです？」

「睨んでないわよ？ 見つめているの」

「物は言いよう」

キリトの間髪入れずに叩き込んでくるツツコミに、思わず確かにとシノンは頷いてしまった。

自分がキリトを見つめているいるなんて、ありえない話だ。冗談でも口にしていいモノではなかった。そんなことをシノンは考えながら、ため息を吐いて再びキリトを見つめながら。

「桐ヶ谷くんって」

「キリトな。ネットで本名を出すのはマナー違反」

「……………ごめんなさい。キリトくんってそう言う趣味なの？」

「そう言う趣味って？」

「女装するのが。しかも可愛い姿で」

「……………はあ!？」

一瞬何を言われているの理解出来ずフリーズする。

だが直ぐに立ち直り、この世とは思えない叫び声を上げる。ここが路地裏などであれば、人目憚ることはないのだが生憎二人が歩いてい

るのはSBCグロツケンでも人通りが多く行き交う通り、言ってしまうとメインストリートのような場所だ。誰もが彼もが、キリトの叫び声に反応し、二人へと視線を送る。

不審に見つめる者、好奇心で感心を示す者、そして二人の可愛い容姿に見惚れる者、更に片方の人物が『恐弾の射手』であることがわかるや否や慌てて視線を反らす者、と様々な反応で第三者達は二人の行動を観察していた。

シノン是不快な調子で、冷静にしーつと小声で言いながら、口元の人差し指を立てるジェスチャーをする。

元々、人目につくのは避ける質だ。こうして注目されるのは不本意なのだろう。

「ちよつと、静かにしてよ」

「ご、ごめん。いいや、そうじゃなくて……!」

それはキリトも同じこと。

彼も周囲の目に着きやすく、付け加えれば『はじまりの英雄』などと呼ばれている。だが未だに慣れることなく、むしろ呼べて居心地悪さすら感じていた。そう言う意味では二人は共通していた。

それを踏まえても、意気投合出来る状態ではない。

キリトは先程のシノンの暴言に異を唱えるべく、断固として抗議する。

「俺の趣味なわけないだろう! ALOのデータをコンバートしたら勝手にこんな姿になったんだった!」

「本当かどうか怪しいものよ」

「本当だって! だいたいプレイヤーの姿なんて、ランダム形成だら! 狙ってこの姿になれるわけじゃないじゃないか!」

「……確かに」

キリトの言う通り、GGOでのプレイヤーの姿は完全なるランダ

ム。キャラクリエイトが出来ない仕様だ。その辺りはシノンも不満を感じている部分でもある。何せ、彼女は強くなるためにGGOをプレイしている。それは至って真面目であり、彼女にとっては全てと言っても過言ではない。そう、遊びではないのだ。ならばそれ相応の姿になりたいのは当然の考えと言えるだろう。

だが今の彼女——シノンは小柄で華奢。とてもではないが戦場では不釣り合いな姿。当然、シノンも即座にアカウントを破棄し、キャラクターを作り直そうとしたが、数少ないリアル友人でもある新川恭二——シユピーゲルに全力で止められ現在に至る。

シノンもキリトも、プレイヤーをランダムで作られ、不本意な姿になっている。

そう考えれば、彼女も彼もGGO。いや、VRMMOの被害者と言っても過言ではないのかも知れない。

「貴方も大変ね？」

「いや、急に同情されても困るんだけど……」

誤解が解けてホツとしたのか、キリトは胸をなでおろし苦笑を浮かべて、改めて話題を切り出すことにした。

「シノンはこのゲーム長いのか？」

「そうね。今年の6月辺りからやってるわよ」

「へえ、そうなのか。それじゃここじゃ、シノンは俺の先輩ってなるな。年下の娘に先輩ってのも妙な話だけど」

「えっ??」

そこでキョトン、と。シノンは妙な反応をする。

思いがけない言葉を受けたような、考えても見なかった奇襲を受けたような、鳩が豆鉄砲を受けてそのまま落下したような。

そのまま目を丸くさせたまま、シノンはキリトに問いを投げる。

「年下って誰が？」

「誰って、君が」

「……………なるほど」

年下だと思った。

なんて、シノンの口からは言えなかった。

シノンとキリト。朝田詩乃と桐ヶ谷和人が出会ったのは、一年と少し前のことだ。忘れもしない、シノンの先輩がデスゲームに巻き込まれ、目を覚ますことがなかった頃。

偶然にも、その病室で二人は出会った。最初は挨拶するだけの仲であり、それから何度か顔を合わせて、一言二言言葉を交わすだけ。シノンは必要以上に踏み込まれることを嫌っており、キリトも何となく察していた。故に、二人はそこまで深くお互いを知っているというわけでもない。こうして肩を並べていることすら、本来であればありえない光景である。

だからこそだろう。

シノンはキリトという人間を外面でしか判断していなかった。

先輩と同じ年、という割には幼い容姿であるし、それ故に先輩よりも年上というわけでもない。そして導き出される答えは、自分と同じ年。もしくは自分よりも年下という結論。

だからこそその桐ヶ谷くん呼び。だからこそそのキリトくん呼びだったわけだが。

「……………もしかして同じ年、もしくは年下だと思ってた？」

ギクリ、と心臓が高鳴る。

凶星だった、ピンポイントだった、的を得ていた。

しかしそれは表情には出さない。

何年も先輩と共に過ごしてきた。彼と一緒にいるときは脳内はピンク色。それを外面に出さず、冷静な表情でクールな後輩を演じて来た。

ここに来てその経験が十全に活かされる。この程度のピンチを跳ね除けることなど、シノンにとって、朝田詩乃にとって造作も無いことだ——！

表情は出さずに、冷静を保ち、冷静な声色で、シノンは氷のように答える。

「思うわけないじゃない」

「それじゃ俺を君付けしていたのは？」

「親しみを込めただけよ。嫌だったららごめんさい。直ぐに改めるけど？」

「……いいや、いいよ。むしろ呼び捨てでも構わない」

「そう。それじゃキリトって呼ぶわね」

不満そうに、更に怪訝そうに、おまけに納得していないように。キリトはシノンを見る。

しかしシノンの素振りは至って自然そのもの。怪しい素振りすら微塵もない。それこそ不自然なほどだ。

となればキリトも納得せざるを得ない。

自分の思い過ぎだったのか、とキリトは自らの視線をシノンから前方へと向ける。

——それをシノンは逃さなかった。

間髪入れずに、怪しまれない微妙な間合いで、彼女は話題を変えた。

「質問いい？」

「どうぞ？」

「どうしてキリトはGGOなんてやってるの？」

それは彼女にとっても気になる理由でもあった。

特に理由もなく、気分転換に始めるならそれならばよし。

明確な目的があって、本気でGGOをプレイする気があるというのなら、キリトというプレイヤーはシノンの敵になる。

言ってしまったえばこの質問は選定だ。隣で肩を並べて歩いている男が敵となるか、そうでないか。それをここで見極めようとしている。対してキリトは。

「……」

沈黙を保っている。

言い淀んでいるのは、シノンの内心を把握しているからではない。彼がこうしてGGOへ踏み込んだのは死銃デス・ガンという正体不明の脅威を調査するためだ。ゲーム内で撃たれれば、意識不明となり、最悪死ぬかも知れない。本来であれば一笑に伏してしまう、信憑性もない戯言だ。

だがキリトは他人事ではない。

何せそんな世界に一年と少し囚われていたのだ。とても他人事とは思えなかった。

そして真実ともわからない話を、果たしてシノンに語っても良いことなのだろうか。

信じないにしろ、信じるにしろ、気持ちの良い話でもない。だからこそ――。

「GGOでき、近いうち大会があるだろ？ それに出ようと思って」

それらしい理由を愛想笑いを浮かべて口にする。

とは言っても、ただの言い逃れというわけでもない。

死銃デス・ガンの被害があったと思われる男、ゼクシードはGGOでは名の知れたプレイヤーであることはキリトも菊岡から話は聞いている。となれば死銃デス・ガンは有名プレイヤーを狙っている可能性が高い。

ゼクシードを狙った理由が自身の憂さを晴らす私怨デス・ガンにしろ、名を売るための生贄にしろ、GGO内で名を知られれば死銃デス・ガンの耳に入り、あつちからキリトへ接触してくる可能性もある。

有名になることは確かに居心地が悪い。

同時に武器になることは、キリトも良く理解しているし、ALOでのグランドクエストの際にも経験済みだ。『はじまりの英雄』と呼ばれていた自分だったからこそ、曖昧な呼びかけにも応えてもらうことが出来た。

そして手っ取り早く名を売るために、おあつらえ向きな大会こそが――。

「大会って、BOBのこと？」

シノンの問に、何も言わずにキリトは頷いた。

それこそがBOB、バレット・オブ・バレッツ。

ネット中継もされる大会であるし、これほど条件に適したモノはない。

「キリトも大会に出るんだ」

「俺もつてことは、シノンも出るのか？」

「ええ、一応優勝候補よ」

「……………マジか」

どこか誇らしげに、自慢するように。

無表情でありクールな雰囲気ながらも居丈高にシノンは口にしていた。

立ち振る舞いからして、シノンは只者じゃないとキリトは思っていたが、まさか優勝候補の一人とは思っていなかったようで、彼は若干驚きながら。

「それでいつやるんだ？ それまでに装備とか揃えたいんだけど」

「……………呆れた、何も知らないのね？」

それはどういう意味なのか、シノンに聞こうとする。だがキリトが口に出す前に、彼女は言葉にしていた。

「B o Bのエントリーは今日の15時まで」

「そうなのか。それじゃ——」

「最後まで聞いて。エントリーは15時まで、その後から予選」
「……え、予選？」

ピタリ、とキリトの動きが止まる。

それから片言になりながら、冷や汗を流して。

「ツテ事ハ？」

「今日がB o Bよ」

第7話 迂闊な英雄

2025年12月13日 PM14:30

ガンゲイル・オンライン SBCグロツケン 総督府

迂闊だった。

キリトは自分自身をそう判断せざるを得なかった。

菊岡の依頼でガンゲイル・オンラインをプレイし潜入及び調査するまでは良い。彼自身、とある理由からガンゲイル・オンラインには興味があった。きっかけとして考えれば好都合といえれば好都合であった。

その過程でBOBという大会に参加するもの問題なかった。ほんの少し前、それこそ6ヶ月ほど前にアルヴ Heim・オンラインにて行われた「第一回統一デュエルトーナメント」での彼の成績は、彼自身の実力でいえば、イマイチな成績であった。本人はそうは思ってなくても、無意識に実力を出し切れていないことにフラストレーションが溜まっていたのかもしれない。

実のところ、キリトにしてみたらガンゲイル・オンラインの大会に出るのは割と乗り気だった。そういう意味でもキリトにとっては今の状況は好都合だった。「はじまりの英雄」というビッグゲームも関係なく、注目もされずに気兼ねなく、一プレイヤーとしてゲームを楽しむことができる。もっと掻い摘んでいうのなら、人の目を気にすることなく暴れられることができる。

もちろん、「死銃」の一件も忘れてはいるわけではない。

本当に、何かしらの力で、死銃が人を殺せる力があるのなら、それは無視できないことである。

とはいえ今のところ、被害が出ているのは一人のみ。それも本当に死銃の仕業であるかも疑わしいもの。つまりは怪しいから調査する程度でしかない。

確証も得ないで調査というのは、菊岡も勇み足がすぎるが、それほ

どまでに先のSAO事件が尾を引いているのだろう。菊岡——
その上の官僚達が過敏になるのも無理はない、とキリトは思う。

だが問題はその後。

失念していた。頭からすっぽりと抜け落ちていた。

まるで遠足を楽しみにしている小学生のように、前日の天気予報まで見るのを忘れていたかのように。

大会の日程を忘れていたのは、さすがに迂闊というほかない。

——これは恥ずかしい。

——こんなこと誰にも言えない。

——ましてあいつには特に。

絶対にバカにされるに決まっている。絶対に煽られるに決まっている。絶対に事前準備マウントを取られるに決まっている。

せつかくコンバートまでしたのに大会の日程を忘れてて受付できませんでした、となつては何を言われるかわかったものじゃない。

キリトの中の「彼」は今も邪悪に笑っている。「彼」がガンゲイル・オンラインを始めてなく本当によかったと、今回始めてキリトは思っていた。

ともあれキリトはピンチだった。

今回のBOBは出ないという選択肢はない。出場したいものは出場した。ともなれば最悪、初期装備のまま乗り込むしかない。そう考えていたキリトであったが——。

——でも意外だったな……。

そう、だった。つまりは過去形。

今のキリトは数時間前の姿とは違い、ある程度の装備が整っている。

厚手の防弾ジャケットを身にまとい、その腰にはフォトンソードと

ファイブセブンというハンドガンが装備されている。これからガンゲイル・オンラインでも有数の大会に赴くプレイヤーとは思えない軽装である。

だが買いたいものは買えた。

初期装備でB o Bを突撃するという無謀なこととはしなくてもよくなったのは、キリトを前を歩いている彼女の協力があったからこそだ。

知らない人物、というわけでもない。

ある程度であるが、キリトも彼女の人となりをなんとなくであるものの理解している。

そこまで深い仲というわけでもない。どこかでばったり会えば、挨拶して一言二言会話して別れるような仲だ。

だからこそ意外、とキリトは評した。

——良くも悪くもあいつ以外に興味がないから、てつきり、そのまま置いていかれると思った。

——意外と良いやつ、なのかな？

今のキリトがあるのも、彼女のおかげというのに、かなり失礼なことを考えていた。

もう今となっては「キリト」という名を知らない者は居ない。

二剣を巧みに使いこなすVRプレイヤー。「はじまりの英雄」と称される彼を知らないゲームプレイヤーは存在しないだろう。

とはいっても、それはソードアート・オンラインやアルヴハイム・オンラインではなしだ。すべてのゲームで彼はトッププレイヤーであるといったらそうではない。ましてやガンゲイル・オンラインは先のゲームとは戦闘方法も戦略性も大きく異なってくる。

同じスポーツでも、名サッカー選手が野球が上手いか、と言われれば間違いなくそれが違うということがわかるように、全く異なるゲームをプレイしても上手い、というわけではないのだ。

そういう意味では、情報を得たのは大いな収穫だ。

ガンゲイル・オンラインの基礎知識、武器の種類、主な戦略、Bの基本ルール。

何も知らない、というだけで初動が遅くなる。それはガンゲイル・オンラインをプレイすることにおいて致命的だ。

例えば、シヨットガン相手には近距離は無謀であり、スナイパー相手であれば遠距離のままでは分が悪い、光学銃相手には対光学銃防護フィールドが必要、と言ったように、武器だけでも勝つための事前知識は必要になってくる。そこへ地形の情報も合わさり、戦略性はそれこそ無限にあるというものだ。

それはソードアート・オンラインやアルヴヘイム・オンラインでは経験できない。

剣も魔法も存在しない、まるで世界の行く末を暗に示しているかのような、どこまでもリアル志向なゲーム。それがガンゲイル・オンライン。

とはいえ――。

――よし。

――上手く騙せてるみたいね。

すべてが善意というわけではない。

先の言ったとおり、ガンゲイル・オンラインは情報も大事な要素だ。誰がどの武器を使っているかわかっただけでも、立ち回りは大きく変わる。

彼女が――シノンがキリトに協力したのもそれが理由だ。

シノンは知っている。

キリトが凄まじい実力を有しているプレイヤーであることを。実際にアンタッチャブルをクリアしたときの状況を目の当たりにした。

この世界では素人同然であるものの、全く油断ができない男。それがシノンから見たキリトの評価である。

それは障害になる可能性があることを、彼女は認めていることになる。

となれば、使う武器を事前に知っておくなんてことをするよりも、放って置いてB0Bに参加させないように導く、または初期装備のままエントリーさせることもできただろう。

障害となるのを認めているのに、許力してやるメリットなんてないのだから。

しかし、それでは——もったいなかった。

——はじまりの英雄。

——SAOをクリアに導いた英雄。

——つてことは、あの人の近くに、先輩の近くに居た。

——先輩と同じ、強さを持った人。

——肩を並べて歩いている存在。

実のところシノンにとって今は願ってもない状況でもあった。

彼女が追い求める強さの指標が、肩を並べて歩きたいと思っていた存在が認めている者が、自身も土俵に立つための権利を持つ者が、向こうからやってきたのだ。

背後を歩く者を打ち抜き、この大会で結果を残せば、自分は漸く“あの人”なる者の存在の元へと参じることができるとシノンは考えていた。

やつとだ、やつとなのだ。この時を、彼女は待ちわびていた。試験であり、試練を、彼女は待ちわびていた。

——ここで、必ず、撃ち倒す。

——はじまりの英雄を、必ず撃ち倒す。

——それで私はやつと、対等になれる。

準備不足なんて言わせない、知識不足なんてさせない。

そんなつまらない言い訳はさせない。そのためにシノンは“あの

人”以外の人間に手を差し伸ばした。十全の状態であるキリトを倒すために、今もなお一緒に行動している。

関わりがない他人と共に行動しているのも真に自分のため。

全てはキリトを撃ち倒すため。

そのために協力し、そして手の内を見るために、装備を整える手伝いをしたのだ。

とはいえ以外だったのはキリトの選んだ武器の種類だ。

サイドアームにハンドガン〔ファイブセブン〕を選んだのは納得がいく。所詮サイドアームはメインアームよりも使用度は低く、どちらかというといざというときの為の武器であり、基本はメインアームを屈して立ち回る。つまり、サイドアームは予備武器であり、基本的な運用としては小回りの効く武器が選ばれる。

問題はキリトのメインアーム。常に携帯している武器なのだが――

――フォトンソード。

――超近距離型の剣型の武器。

――この世界において銃ではなく剣を手にするのはありえない。

――ましてやB o Bでは絶対に選ばれない武器。

曰く、光剣。

曰く、レーザーブレード。

曰く、ビームサーベル。

曰く、ロマン武器。

ガンゲイル・オンラインでは見向きもされない、この世界においての剣であり、最弱とも言える武器をキリトは選んだ。

通常ではありえない選択だ。この世界は銃の世界。弾丸が飛び交う荒廃した世界において、銃ではなく剣を握るのはいない。それこそおふぎけのときでしか、フォトンソードは選ばれない武器である。

愚策、と断じ。

失望、を下す。

しかしすぐに、シノンは思い改める。

“あの人”が認めた人達の一人だ。なにかしら考えがあるのだろうと緩んだ気を引き締めた。

シノンに油断も慢心もない。

キリトが選んだ武器を元に自身が持ち得る手段を講じて戦略を練る。

脳内で様々なシユミレートをしつつ、キリトにそれを悟らせないために世間話をしようとは何気なく話しかけた。

「そういうえば、バギーの運転上手かったわね？」

「バギー？」

キリトは少しだけ考えて、ああ、とここまで来るために使った乗り物のことを言っているのかと判断すると答えた。

「バイクと操作方法が一緒だったからな」

「へえ、貴方ってバイク乗れるんだ」

「まだ仮免だけどな。次の本免に合格したら晴れてバイカーって名乗れるぞ」

「ふーん」

興味なくつぶやき、ちょうど15通りの対キリト戦の戦略を考えたところで、

「ね、ねえ」

「ん？」

「先輩はバイク乗れるの？」

少しだけ言い淀みながら問うた。

聞き辛い、というわけではない。もし仮に乗れるとして、後ろに最

初に乗る人間は誰なのか、シノンの中で決まっている。自分以外の親しい相手、それこそ——彼の幼馴染ということになる。

言い淀んだのはそんな理由だ。自分ではない彼の初めてが取られるのが嫌だ。彼女自身どうかと思っているそんな理由に過ぎない。

対するキリトはシノンの複雑な心情とは正反対なそれ。呆れながら気楽な口調で答えた。

「乗れないよ。俺も一緒に取らないかって誘ったんだけどな断られた」

「え、どうして？」

「お金が勿体ないんだとき。チャリで充分だろって言われたよ」

あいつ一生車とか乗らないんじゃないか、という言葉の背にシノンは口元に笑みを浮かべた。

——さすが、先輩。

しつかり者よね——

そうして歩くこと数分後。

キリト達は総督府の内部へとたどり着いた。

元々は宇宙船だったものが破棄されたという設定の通り、内部もかなり広く、キリトの目の前には円形のホールが広がっていた。

いかにも未来的な作りな円柱が天井を支えており、たしかに設定の通り宇宙船の司令室のような作りとなっている。外部が荒廃した世界であるのに対して、ここはサイバー的な未来的な造形である。

ソードアート・オンラインやアルヴヘイム・オンラインのような中世時代的なものとは違う世界観に、少しだけテンションが上りつつキ

リトは訪ねた。

「どこでエントリーすれば良いんだ？」

「あそこよ」

シノンが指差した方向をキリトも見る。

そこにはずらりと、端末が数十台並んでいた。

まるでコンビニのATMを更にSF風に改造したタッチパネル式の端末こそがエントリー端末のようだ。

とはいっても、入力しているプレイヤーはいなかった。

時間が時間であるためか、BOBに出場するプレイヤーは既にエントリーを済ませているらしい。

その上には巨大モニターがあった。そこには『第三回バレット・オブ・バレット』と表示されており、その背後にもまた細かな模様がある。

「ん？」

いいや、模様ではなかった。

何かに気付いたキリトは目を細めてよく見るとそれは名前だった。

恐らくそれは出場者のプレイヤーネームであることが予想されており、その数は数百を超えている。

いや、多すぎだろ、と思う反面、それだけBOBが人気であることがわかる。

「どうしたの？」

呆気にとられているキリトを疑問に感じたシノンが問いを投げる。

「いいや、随分と参加しているプレイヤーがいるんだなって思ってたさ」

「それはそうよ。BOBで結果を残せば勝ち組になれるんだから」

「勝ち組って?」

キリトの問いをシノン は冷静な口調で答える。

「プロからのスカウトであったり、GGOを拠点としているプロゲーマーからのスカウトだったりよ。この大会で成績を残せるってことはイコール優秀ってことだもの」

「なるほど。仲間に引き入れて、一緒に稼ぐってことか」

「そうよ。ここで日々の生活費を稼いでいるプレイヤーも居るみたいね」

「ゲームコイン現実還元システムか……」

なるほど、色々なプレイヤーも居るものだ。とキリトはしみじみに思い巨大モニターを見てみると、小気味よい電子音と共に新しいプレイヤーネームが追加された。

その名は——シノン。

「って、いつの間に!?!」

「貴方がのんきにモニターを見ているときよ」

バッと勢いよく顔をシノンの方へ向けると、彼女は涼しい顔をして入力を終えてキリトの方へと帰ってきた。

意外とマイペースな性格なのか、と思っていると周囲が明らかにざわつき始める。

「シノンって……」

「恐弾の射手の……?」

「ライフルなのに突撃してくるやべえやつじゃん……」

「あいつ一人にアウトライダーズ潰されたらしいぞ」

「女の子じゃん」

「可愛くね?」

「ばかつ、逆に怖いだろ」

「今回のB o Bは荒れるな」

今回のB o Bを見学しようと思っていた多くのプレイヤーが一齐にキリト達へと意識を向けていた。

いいや、キリト達というよりシノンへと意識が集中されていく。

あまり居心地が良くないキリトとは対照的に、シノンは涼しい顔をしつつ周囲の視線を受け止めていた。

当事者でありながら我関せず。まるで氷のような反応にキリトは思わず尋ねざるを得なかった。

「シノンって有名なのか？」

「ちよつとだけね」

これがちよつとって反応か？　と言葉が出かけるもキリトはグツと飲み込むことにした。

そんな事を言ったところで、そう？　と薄い反応されるに決まっている。

それにしても【恐弾の射手】とはこれまた物騒な名前で呼ばれているものだと、心の中で感想を漏らしながらエントリー端末の前へと足を運ぶ。

そしてどこか不慣れた手付きで操作しながら、キリトはB o Bエントリー画面へとたどり着き操作を進める。

「ん？」

と、そこで指先が止まる。

エントリー画面まで辿り着いたのはいい。問題はその画面。最初にプレイヤーネームを入力する空欄があり、何気ない疑問を口にした。

「なあ、シノン。このプレイヤー名を入力するところって、自分のプレイヤー名じゃなくてもいいのか？」

「別に問題はないけど、そんなことする奴なんていないわよ」

「なんでだ？」

「メリットがないから」

バツサリとした答えに、キリトは確かにと頷いた。

彼女の言う通りメリットがない。

B o Bの優勝者は景品をもらえ、なおかつ自身の名が広まる。名が広がれば、先程シノンが言ったようにプログラマーからスカウトされる可能性すらある。その可能性すら蹴ってまで、自身のプレイヤーネーム以外でエントリーするのはありえない。

いるとすれば、自分の名を売る以外の目的を持ったプレイヤーであるが、生憎今のキリトにそんな目的は思いつかない。

そのままキリトは慣れない手つきのまま操作を再開する。

名前、職業、空欄になっている部分をすべて埋めて、一番下のS U B M I Tボタンを入力する。

すると、先程のシノンの名が表示されたように、今度はキリトの名が表示される。

同時にしん、と静まり返りポツリと何者かが呟いた。

「はじまりの英雄だ……」

次の瞬間、シノンのときを超える歓声があたりを包み込んだ。

しまった、とキリトが思ったがもう遅い。

思わずシノンに助けを乞おうと視線を向けるが彼女は巨大モニターを見上げていた。いいや、見上げていたなんて生易しいものではない。睨めつけるように見上げ、その双眸には確かな殺意が宿っていた。奥歯を噛み締めながら一点を見ている。

キリトではない。

もつと違う名を、彼女は見つけていたのだ。

それをポツリと呟いた。

聞いた者がいれば、ゾツと背筋が凍るような声色で歓声に消えたそれは確かに呟いた。

——アインクラッドの恐怖——と。

「ピトさんが言ったとおり、アインクラッドの恐怖がいるのは知ってたけど、はじまりの英雄だつて」

「……………」

「どう思う?」

「さあな」

二人の人影が一人を見つめていた。

二人共奇妙な格好だ。アサルトダイバーというボディラインがくつきり見える格好で、表情は顔を覆うヘルメットのせいで見えない。

しかし視線は間違いなくキリトとシノンへと向けられている。

「反応薄いね?」

「興味ねえからな」

少女らしい声がいうと、本当に興味がないような声は中性的なそれ。

中性的な声の持ち主はつまらなそうに続けて。

「偽物であれ、実力が不相応なら排斥されるのが道理だ」

「もし実力があつたらどうするのさ?」

「そりゃオマエ、本物つてことだろ」

「本物つて、本物のキリトつてこと?」

少女の声の間に、中性的な声は頷く。
んー、と首を上げて少女の声は問う。

「なんでここにいいのかな？」

「知らねえよ。オレ達と同じ目的ってわけでもないだろう」

そこまで言うと、仮にはじまりの英雄が本物であることを仮定して、中性的な声は話しを進める。

「ただGGOをプレイしてみたかっただけか、もしくは面倒事に巻き込まれている最中か」

「どっちだろう？」

「そもそも本物かどうかも疑わしいからな。まだなんとも言えねえよ」

この話は終わりだと言わんばかりな口調に対して、少女の声はどこか楽しげな口調で続ける。

「ねえねえ、本物だったらどうする？」

「そうだな……」

くつくつと喉を鳴らすような笑みを浮かべて、寧猛な声で中性的な声は告げた。

「叩き潰してやるのも面白いかもな？」

第8話 過去の亡霊く予選開始前く

2025年12月13日 PM14:50

ガンゲイル・オンライン SBCグロッケン 総督府

あれから興奮冷めきれぬB o Bエントリー端末機がある総督府のメインフロアをあとにし、キリトとシノンが予選会場へと向かった。件の騒ぎを引き起こしたのは間違いなく自分であると、キリトは自覚している。

しかし予想外。思いの外、“キリト”という名が広がりすぎていることを、彼は漸くここで自覚し始めた。名前を入力しただけで、キリトという大した珍しくもない名が出ただけで、あそこまで盛り上がりを見せるとはキリト自身想像もしなかった。

あの盛り上がりはまるで、B o Bの優勝者が決まったようなそれ。まだ予選すら始まっていない今の状況で、周囲があそこまでのテンションになるのはおかしく、キリトも若干引いていた。

しかしそれも当然のことだった。キリトは知らないが、はじまりの英雄の名前は凄まじい影響力を持つている。

曰く、はじまりの街付近に存在したモンスターキラーを狩った英雄。地獄のような状況であったソードアート・オンラインで囚われていた者たちの最初の希望。攻略組で先頭を切つて未開の地を切り開き、ソードアート・オンラインのクリアへと導いた。そして、アルヴヘイム・オンラインでも未帰還者であった300人を救うためグラウンドクエストの完全制覇を導いた二刀流使い。

もはやキリトはVRゲームプレイヤーの中でも生きる伝説となりつつあるのと言うまでもない。

それこそ、キリトの名を使うプレイヤーが居るものなら、そのプレイヤーは排斥されかねないほどに、ある意味で“キリト”という名は他人が語ってはならない名と化している。

しかしここで、暗黙の了解とも言われていたルールが打ち碎かれた。

キリトを名乗る者。

そんなものが居たものなら、よつぽどの馬鹿でしかない。

偽物であるのなら、そのゲームをプレイしているプレイヤーを全員敵に回すことになるのだから。

厄介事ではない。そんな名前を誰が好き好んで使用するだろうか。よつぽどの自殺志願者か、もしくは――。

「……………」

――本物ということになる。

そして問題の本物であるキリトはというと、自分に置かれた問題を腕を組みながら、目を瞑り黙考していた。

彼らは予選会場でもある地下20階を目指すべくエレベーターに乗りひたすら下っていた。

これからB o Bの予選が始まる。

にも関わらず、キリトが考えるのは今の自分の状況だ。

目立っていた、ひたすらに目立っていた。これ以上にないくらい目立っていた。

元来、キリトは目立ちたがりの性格ではない。できれば目立たずに、事の成り行きを読み、自分にとって最善の方向へと進んでいくタイプの人間だ。

だが今の状況はどうだ。それとは真逆、キリトが右といえれば周囲は右と言ひ、キリトが黒といえれば周囲も黒と同調するかのような状況。

——やりづらっ。

考えるのはどうしてこうなったのか、と今の彼に出来るのは過去の追憶。

必死に剣を振るってきただけなのに、がむしやらだっただけなのに、どうしてこんなことになってしまったのか。

今の状況はまるでアイドル。人はがむしやらに生きていけば、自然とアイドルになってしまうものなのか。

否である。

その理論から行けば、誰も彼もがアイドルになってしまう。

世は正に大アイドル時代になってしまう。

考えても考えても答えが見つからない。

いつそのこと、キリトではない違う名前を名乗ってしまうか、とま
で考えてふと同じエレベーター内にいるシノンの方へと視線を向け
た。

「……………」

彼女は無言を貫いていた。

キリトに背を向けている彼女を見ても、表情が見えないのだから感
情を読み取ることなどできない。

元々口数も少ないシノンであったが、ここに来て沈黙を保つてい
た。

何を考えているのか検討もつかない、だが原因は推察できる。

——アインクラッドの恐怖、か……。

キリトも耳にしていた。

小さな声で、はじまりの英雄を称える歓声に消えてしまった彼女の確かな眩き。その小さな口は、間違いなく“アインクラッドの恐怖”と口にしていた。

その表情も普段の彼女からは想像ができない苛烈なものであったことを覚えている。冷静とは程遠い憤怒、嫌悪といってもいい表情を浮かべ、目には殺意の炎が宿っていた。

その様子を察するに、何を目にしたのかなど安易に想像ができる。シノンには目にしてしまったのだろう、参加者の中から“アインクラッドの恐怖”の名を。

そして彼女は許せなかったのだろう。シノンの先輩以外の人間が、アインクラッドの恐怖を名乗っている輩がいるということ。

だがそれは、見間違いであるとキリトは断じていた。

あのユーキが、あの茅場優希が、アインクラッドの恐怖という名を誇りに思うはずがない。

彼にとってその名は、間違った選択を続けた結果呼ばれるようになった汚名でしかないのだから。

現に、ガンゲイル・オンラインにてアインクラッドの恐怖を名乗るプレイヤーが現れても、優希は放置していた。どうでもいい、と言わんばかりに何の反応も見せなかった。つまりは彼にとってアインクラッドの恐怖という名はその程度の価値でしかない。自分からは決して名乗らず、誰が名乗っても自由。その程度の価値でしかなかった。

しかしシノンとは違ったようだ。

アインクラッドの恐怖の名を語るのは先輩だけ。有象無象が名乗っていいものではない。先輩以外の人間が名乗ることこそが、侮辱に他ならない。彼女はそう考えていた。

そういう意味で、キリトとシノンの間に埋めようのない温度差が感じられた。

片や、どうでもいい、とすら思っているだろうと分析し。

片や、許してなるものか、と沈黙を保っている。

キリトも指摘しようか、とも考える。直ぐになんて言えば良いのか、といった新たな問題に直面した。

慎重に言葉を選ばないと伝わらず、最悪逆鱗に触れかねない。どれだけ彼女が優希を慕っているのか、そんなに交流がなかったキリトですらわかる。気付いてないのは「あの捻くれ者のバカ」だけだろうとキリトは思う。

さて、なんて言ったものか、と考えていると、リアルな減速感があり、直ぐにエレベーターの扉がスライドし開いた。

どうやら目的地でもあった地下20階に到着したらしい。

作りは半球形のドーム状で、広さはエントリー会場でもあった総督府の一階くらいの広さだろうか。

照明は申し訳程度の明るさで、ギリギリ見えるか見えないかくらいまで絞られている。

床と柱は黒光りする鋼板、壁も同じような作りだが、所々で錆びついた金網が使用されており、それが荒廃感を演出させていた。天井部には巨大なホロパネルが吊り降ろされており、画面にはノイズ混じりに「Bob3 preliminary」という文字が映し出されている。そして辺りには低音のメタル系のBGMが響き、その中で聞こ

えない程度の囁き声。

「…………へえ」

キリトは思わず声を漏らした。

圧倒、されているわけではない。むしろその逆、彼は若干の高揚を覚えていた。

見渡す。

壁際の円形テーブルに座っているプレイヤーが居た。

数人集まっているプレイヤーがいた。

床に座っているプレイヤーが居た。

愛銃をメンテナンスしているプレイヤーが居た。

十人十色。

各々、それぞれがそれぞれで、これから始まる予選へ備えていた。しかし視線と意識は同じ方へ、つまりはキリトとシノンの方へと向けられている。

元々、シノンは優勝候補の一人でもあり、ガンゲイル・オンライン内では凄腕の賞金稼ぎであり、“恐弾の射手”とまで呼ばれているプレイヤーである。どのような姿をしているのかなど知れ渡っているというもの。

問題はキリトだ。彼はガンゲイル・オンライン内ではまだ無名のプレイヤーである。なのにも関わらず注目されている理由は簡単――。

「…………情報が回るの速いわね」

「えっ?」

今まで沈黙を貫いていたシノンが口を開いたことに、キリトは驚きを隠せず声を漏らした。

そんなキリトの心情なぞ露知らず、シノンは若干の呆れを含ませて答えた。

「あんたが『はじまりの英雄』ってことがバレてる、って言ってるのよ」

「……ああ、そうみたいだな」

驚いたのはそっちじゃないんだけどな、という言葉が口の中で眩いてキリトは周囲を見渡した。

とはいえ、まだ半信半疑といったところだろう。

ただの同じ名のプレイヤーなのかもしれない、という疑念が半分。

もし本物であれば要注意である、といった警戒がもう半分。

どちらにしても、キリトが注目されていることに変わりない。一挙手一投足、キリトの動きを観察し、装備がなんなのか探りを入れている眼であった。

ただならぬ雰囲気。

対してキリトは怖気づくこともなく、そういった挑戦的な視線を堂々と受け、口元には若干の笑みを浮かべていた。

高揚している理由はこれだ。

リアルに近いゲームと言っても、所詮はゲーム。だというのにも関わらず、陽気に騒いでいる人間はいなかった。囁き合う様に言葉を交

わしているプレイヤーも居るが、笑みを浮かべて談笑しているわけではない。恐らくあれは、情報交換の類。もしくは話し相手の装備を探ろうとする駆け引きの真っ最中なのだろう。戦う前から勝負は既に始まっていた。

誰もが勝つためにここにいる。

アルヴヘイム・オンラインで行われた「統一デュエル・トーナメント」とは違ったベクトルの熱気が辺りを包んでいた。

もしかしたら、その熱気にあてられたのかもしれない。これから起きるであろう純粋な力比べに、キリトは高揚感を覚えていた。有り体で言うのなら——血が騒ぐ。

ゲーマーとしての性なのだろうか、はたまた「アイツ」の影響と言えるのだろうか、いつも以上に好戦的になっているのをキリトは自覚する。

「感想は？」

要領を得ないシノンの問いに、キリトは何も考えることなく問い返す。

「感想って？」

「周りの連中の感想よ。どう、強そう？」

ああ、そういうことか、と納得してキリトは再び周囲を見渡して一言。

「かなりやる、と思う」

「何よ、思うって。はつきりしないわね」

「しようがないだろう。雰囲気でわかるにも限度つてもものがある」

銃の種類すら全く把握していないガンゲイル・オンライン初心者の言葉に、シノンは確かにと頷いた。

その道を極めた達人でもあるまいし、キリトの言う通り雰囲気や立ち姿で判断など出来るはずがない。

「そういうシノンはどうなんだよ。連中がどれくらいの腕前か把握しているのか？」

「関係ないわ。全員討てばいいんだもの」

キツパリと、清々しいくらいはつきりと、彼女は言い切ってみせる。確かにシノンの言い分は正しいのかもしれない。相手が誰であろうと、どんな難敵であろうと、生き残っていれば必ず相対する。B o Bとはそういう大会だ。予選で決勝まで勝ち進み、最終的には勝ち進んだ者達で最後の一人になるまで執り行われるバトルロイヤル。そう考えれば、シノンの言っていることは正しい。どの道、誰と敵対しようと一人になるまで続くのだから。

対するキリトは乾いた声で笑みを漏らした。

既視感。どこか好戦的で、あまりにも狂戦士的な思考の持ち主を、キリトは知っている。

「……なによ、その微妙な反応」

「いいや、なんか似てるなって思ってる」

「誰によ?」

「優希に」

そう。言い分がとても茅場優希によく似ていた。

この場に彼が居たものなら、シノンと似たようなことを口にしてたことだろう。数年行動を共にしていたキリトにとっては安易に想像がつく。彼の幼馴染が何度か口にしていた「優希くんは分かりづらいけど、わかりやすい」とはこういう意味だったのか、とキリトはぼんやりと考えて、シノンの方へと意識を向けた。

「……」

「シノン?」

なにやら様子がおかしい。

眼を丸くしたと思ったら、顔を俯かせて、両肩が小刻みに震え始める。

怒ったのだろうか、だがどのタイミングで? キリトはそう思っているとシノンは直ぐに顔を上げた。

その表情はまるで無表情。しかしどこか浮ついた声で、

「——ふーん、そう。先輩と私が似ている。ふーん、そう。そうなの。ふーん」

「どうした? 嫌だったか?」

「——っ!? べ、別に嫌なわけ——ンンっ! 別に気にしてないわよ」

「のわりには、なんか雰囲気——」

「——気にしてないわよ。いいわね？」
「……うっす」

これ以上つつこむのはやぶ蛇だ。

実のところなんとなくだが、キリトも勘付いている。シノンが今何を思い、何を感じ、何に歓喜しているのか、なんとなく予想がついていた。

だが言わない。いいや、言えないというべきか。

シノンの鬼気迫る言葉に、そして身が震えるくらい嬉しいにも関わらず、それを表情に出さない凄まじいポーカーフェイスに、キリトは何も言えないでいた。

自分には一生習得し得ないかもしれない鉄仮面なシノンを見て、内心拍手を贈る。同時に、表に出して素直に喜ばない彼女を見て、その辺りも似ているな、とぼんやりマイペースに感想を漏らしていると。

「まあ、そうね。私から見たら、平均的に層が薄い感じかも」

「えっ?」

シノンが何を言っているのかわからず、キリトは思わず首をかしげる。

対する彼女はジト目でキリトを睨みつけて呆れた口調で。

「あんたが聞いてきたんでしよう。連中の腕前って話しよ」

「ああ、その話か」

「どうでもいいなら教えないけど」

「いいや、ごめん。是非聞かせてくれ」

似ているという言葉に気分を良くしたのか、シノンは最初の頃よりも饒舌になっている。

ガンゲイル・オンラインにおいてキリトは初心者も初心者だ。情報は多いに越したことはない。だからこそシノンの見解を聞くために、彼は続きを促した。

「ここでは、使用武器を知るだけで有利になるの。例えばハンドガンやショットガンは遠距離相手に弱く、サブマシンガンやアサルトライフルは最初の二点と比べて遠い距離からでも交戦出来るけど、取り回しが難しいから近距離では最初の二点に比べて劣るとか」

「……なるほど」

「武器に手を加えたら、別物にもなる。ライフルに銃剣バヨネットを取り付けて近接戦闘を想定したり、ショットガンにスラッグ弾を込めて遠距離でも戦えるようにしたり」

「アルヴヘイム・オンラインとは全然違うんだな」

「そっちはファンタジーよりで、こっちはガチガチの近未来。違うに決まってるわ」

どのような武器を選ぶのが、どのような魔法を使おうが、最終的に真正面から斬り合い、魔法を叩き落としていたアルヴヘイム・オンラインとは根底からまず違う。

ガンゲイル・オンラインは情報が何よりも大事だ。使う武器によっては、戦う前から勝敗が決することも十分ありえる。

「それを踏まえて、周りを見て」

「周り？」

キリトはシノンに言われるがまま、辺りを見渡した。

未だに、周囲は彼らを警戒しているが、無視して言われるがまま周囲を観察する。そしてキリトは直ぐにあることに気がついた。

「……自分の武器を見せている？」

「そう。対策をしてくれって言ってるようなものでしょ？」

「わざと見せて、自分の武器を特定させないってことは？」

「ないわね、持ち込める武器数は制限されてるもの。メインアーム一丁とサイドアームが多くて二丁。あとはグレネード系くらいなもの。だから本当に警戒すべきなのは——」

「——未だに武器を見せてないやつら、ってことか」

キリトの視線が数人のプレイヤーへと移っていく。

壁に持たれながら静観している者、荒くれに絡まれている気弱そうな者、マントを眼深く被り表情すら見えない者、様々な者がいるが、共通して自身のメインアーム、サイドアームですら携帯している様子はなかった。状況を考えて、予選が開始するまでメインアームを手にすることはないことが考えられる。

これはソードアート・オンラインやアルヴハイム・オンラインと同じような感覚だったらやばかったかもしれない。

戦略の多様性に考えを改めて、キリトはシノンに向き直り改めて礼を口にした。

「ありがとう、貴重な情報だった」

「別に。私もあんたに負けられると困るし」

「なんでだ？」

「私があんたを倒すから」

へっ？ と素っ頓狂な声をあげようとするも我慢して口を嚙み、改めて何故かと聞こうとするもシノンに遮られる。

「いずれ言うつもりだったけど、いい機会だから今言うわ。——
はじまりの英雄、あんたに宣戦布告をする」

「なんでだよ？」

「……あんたが、私の憧れに、認められているから」
「それって——」

——アイツのことか、とキリトが口にする前にシノンは頭を下げて謝意を口にした。

「身勝手でごめんなさい。でも私にはそれが全てだった」
「……………」

「あの人があんた達を見ている視線が、私は欲しい。先輩と対等なあんた達のように、私もあの人の隣に立ちたい——あんたを倒して、私も先輩に認められたい」

「シノンそれは……」
「だから私があんたを倒す。ここで、必ず。私の身勝手な願いのために、あんたを踏み台にしてあの人の元へ登る。何としても登らないといけないのよ。そうでないと私は——」

それは確かな宣戦布告だった。彼女は標的に告げて、標的はその言

葉を耳にした。これ以上、語ることはないと言ノンはキリトに背を向ける。

だが違う。

キリトは手をのばす。それは違うと言ノンを引き止めようとする。見間違いだった。キリトを倒せたからといって、茅場優希が言ノンをキリト達と同じ扱いにするかといえば、ありえないことである。勝利の意味はなく、達成感もなく、彼女はまだ守られる側のままだろう。誰に勝った、誰に負けた、その程度の結果で茅場優希という男の価値観が変わることはありえない。優希の幼馴染程ではなくとも、それくらいはキリトにも確信出来た。

故に見間違い。

この戦闘に意味はなく、無意味なことをキリトは告げようとする。

だがどうやって？

今の言ノンはそれに耳を傾けるだろうか。彼女から見た今の状況は、千載一遇のチャンス。B o Bを優勝するよりも、わかりやすい又と無い好機が舞い込んできた。なにせ言ノンはキリトを倒せば、優希が認めてくれると本気で思っている。

無論、本来の思慮深い彼女であれば気付くことだろう。もっと違う方法を模索し、行動に移していたに違いない。

しかし無情にも、今の言ノン——朝田詩乃に余裕などなかった。もはや形振り構ってはおれず、最短距離で走るしかない。間近で見ってしまった、優希の戦友達を見る優しい眼差しが、詩乃を駆り立て狂わせてしまった。

故に、彼女は立ち止まらなければならない。

間違った選択の果てに、傷つくことも意に介さずに剣を振るい続けて止まらなかった大馬鹿野郎を、キリトはよく知っている。

——違う、違うんだシノン。
——アイツに認めさせるなんて簡単なことだ。
——俺なんて相手にしなくていい。
——君がアイツを……！

そこまで考えて、キリトは口にしようとするも——ゾツ——と。

今まで感じたことがない悪寒が。背筋が凍りつくのを感じた。それは殺意であり殺気だ。殺伐としているものの、生死の心配をしなくていいこの場において、居てはならない存在がそこにいた。

いいや、感じたことはあった。

それがどこで覚えがあるのか。言うまでもない。ゲームオーバーが現実の死に直結していた世界。脳の牢獄とも言える——ソードアート・オンラインで経験した感覚だった。

振り返ると、確かにそれはいた。

裾が擦り切れたマントに身を包み、フードは目深に下し、骸骨を彷彿とさせる金属製の仮面が顔を覆っておりその表情を窺う術はない。

その目は、仮面の奥からもはつきりと見える赤目はハッキリとキリトを射抜いていた。まるでレーザーサイトで標的に狙いを定めたかのように、その男は言う。

「おまえ、本物、だな」

意味不明。

不可解な男の言葉に、キリトは眉を顰める。声を加工しているのか、倍音の混ざった不快な声。もちろん、キリトには心当たりがない。目の前の不気味な男、いいや、男かどうかもわからない人物から少しでも情報を得ようと上から下へと目を見やる。

何かを装備している形跡はなし。

幽霊のような格好であるものの、NPCではなくプレイヤーということがわかる。

得られる情報はこの程度しかなかった。

シノンのレクチャーがあつたように、出来る側のプレイヤーであり、ここにいるということはこの男もB.O.Bの出場者であることは安易に判断できる。

無視すればよかつた。無視しなければならなかつた。

こんな男は捨て置き、シノンの暴走を止めなければならなかつた。

だが――、

「……なんだよ、お前。取り込み中なんだ。後にしてくれないか？」

眼を離してはならない、意識を集中していなければならぬ、この男を野放しにしてはならない。

キリトの生存本能とも呼べる装置が、ありとあらゆる可能性を考えて警報鳴らす。全く見に覚えのないこの男が、危険であると、ソードアート・オンラインで培ってきた危険信号がそう告げていた。

くつくつ、と男は楽しそうに笑みを零した。

歓喜ともいえる感情を宿した声は続けて。

「やっと、やっとだ。この時を、俺は、待っていた」

「お前、誰だ……？」

「怯えて、いるな。俺に、*恐怖*して、いるな。はじまりの英雄」

「誰だお前は！」

振り払うように、明確な殺意の気配を前にしてキリトは声を荒げた。

男は告げた。今の自身の名を、確かに口にする。

「^{デス・ガン}死銃」

「っ！」

無意識に、キリトは片足を半歩後ろに引いた。

相手は銃。人を殺せる力があると噂される、と菊岡より聞いている。どのような仕組みなのかわからないが、最悪ここで打たれても絶命には至らないようにと、いつでも動ける準備をってしまった。

これが不味かったのか。

死銃と名乗った男はクツクツと喉を鳴らしながら。

「いいぞ、俺を、知って、いるな」

「何のことだ？ わからないな」

「恍惚、るなよ、はじまりの英雄。俺の、動きに、お前は、備えた。それ、だけで、充分」

警戒心を顕にするキリトに対して、死銃と名乗る男とは余裕な態度。

正体不明な上に意味不明、なんとかして情報を得たいキリトは、挑戦的な笑みを浮かべて死銃に挑発の言葉を投げた。

「確かに俺くらいなものかもな。お前みたいなマイナーキャラ知ってるのは」

「なに？」

「死銃なんて大層な名前の割に、知名度だけならアインクラッドの恐怖の偽物に負けてるじゃないか。名前を変えたほうがいいと思うぜ？ ジミ・ガンとかにさ」

挑発に成功したのか、今まで目に見ていた死銃と名乗る男の余裕の態度が変わった。

アインクラッドの恐怖の話題が地雷だったのか、どこか苛つくような、忌々しげな声色で。

「いずれ、アレも、殺す。本物も、含めてな」

「無理だろ。本物はここにはいない」

「なんだ、おまえ、知らない、のか」

嘲る声で死銃と名乗る男は続けた。

「やつは、ここに、いる」

「な、に……？」

「ヤツと、〃絶剣〃は、所詮前菜だ。〃紅閃〃と、〃クリエイター〃が、いないのが、残念だが、お前が、メインディッシュなのには、変わらない」

「おまえは、俺が、殺す。お前を、殺すまで、俺の、ソードアート・オンラインは、終わらん」

第9話 英雄の苦悩を笑いに來た捻くれ者

2025年12月13日 PM16:31

ガンゲイル・オンライン BOB予選

——凄い。

それが純粹な感想だった。

強がりではない。本当に心から、彼女は——シノンとは地下の待機ドームから見える予選の映像を見上げながら感想を漏らした。

彼女が見ているのは自身と同じ、Fブロックの予選の様子だ。

彼女は予選の対戦選手を速攻で撃ち倒すと、一人の選手の試合運びや癖を観察するために試合の映像を見守っていた。言ってしまうえば敵情視察。その選手を応援する気などなく、少しでも隙を探ろうとするために、シノンは見守っていた。

彼女が驚いたのは、その選手が予選を突破したからではない。

“彼”が勝つなんてわかっていたし、何より勝ち残ってもらわねば困るくらいだ。むしろ臨むところでもある。そういう意味では、“彼”と同じFブロックであることは好都合。途中では当たらないものの、勝ち残れば決勝戦で否が応でもかち合うというものだ。

彼女は勝ち残ったことには驚かない。

ならば何故、彼女は“凄い”と思ったのか。

それは問題の“彼”の試合運びにあった。

使用する武器は知っていた。

サイドアームに「FN・ファイブセブン」という片手でも扱えるハンドガン。そしてメインアームを「フォトンソード」またの名を光剣と呼ばれているこの世界の剣であった。

良く言えば近接特化。悪く言えば最弱装備。

それもその筈だ。

この世界において、近接戦闘メインで立ち回るメリットは薄い。

離れた距離で戦えるアサルトライフルやサブマシンガンのような連射性の高い武器を使用した方が良く、そんなに近接戦闘をしたいの

ならばショットガンの方が立ち回りのにも強いのだ。

それに折角、銃の世界とも呼ばれているガンゲイル・オンラインでプレイするのだ。わざわざ剣を選んで戦う物好きはおらず、所詮ロマン武器として扱われている。それがフォトンソードという武器の現状であった。

しかもサイドアームであるファイブセブンも引き金を引き続ければ弾丸が射出されるフルオートではなく、いちいち引き金を引かなければ弾がでないセミオート。連射性など皆無に等しい装備である。

圧倒的に装備が貧弱であり、極めつけは「彼」は銃撃戦など素人。誰がどう見ても、勝ち目はなかに等しかった。

それでも「彼」は勝ち上がっていた。

シノンが驚いていたのはそこである。

勝ち上がった事実ではない。その内容で、彼女は驚きを隠せなかった。

相対する相手を、「彼」は斬り伏せていたのだ。

そう。それは文字通り。この銃が覇権の担っている世界において、剣を用いて勝利を重ねていた。

弾丸を斬り伏せ、目にも留まらぬ速さで接近し、そのままの勢いで敵の首を落とす。つまりは文字通り、キリトは迫りくる弾丸を斬り落としていく、ということだ。それを行うには、自身を狙っている標準

——弾道予測線から急所に延びている線だけを瞬時に識別しなければならぬ。

それだけでも、ありえない技術なのだが、実行に移す度胸も必要になってくる。なにせ弾丸を斬る、最悪逸らすことが出来なければ大ダメージを負ってしまうのだから。

弾道を読み取る反応速度、自分の感覚を信じ切る度胸、実行に移す技術。

この三点が一つでも欠けていると失敗する神業を、キリトは難なくやって魅せる。

だからこそ、シノンは手放しに称賛した。

同時に苦虫を噛み潰したよう、歯を食いしばる。

ここまで強いとは計算外だった。考えていた勝つためのプランもあらかた潰されていた。

だが――、

――まだ、手はある……。

シノン は諦めない。

ガンゲイル・オンラインは初めてとはいえど、初心者より動けるとは思っていたものの、ここまで強いとは思っていなかった。

だがそれでも、自分の優位性は変わらないという自信があった。手はある。

弾丸を斬るといふのなら、爆発物で攻めればよい。

弾道を予測するといふのなら、弾道予測線が出ないように狙撃すればよい。

――そうよ。

――まだ勝ち目はある。

――私は諦めない。

――必ず倒して、優勝して。

――先輩の元へ。

そのために、少しでも勝率をあげるために、シノンはキリトの戦闘を観察していた。

食い入るように見ているのは、彼女だけではない。

周囲も声を上げることが忘れて、魅入ってしまった者も居た。

ある者は口を開けて、ある者は眼を離さず、ある者は握りこぶしを作り、キリトの姿を――はじまりの英雄の姿に魅入っていた。

ただ一人を除いて――。

それは中性的な声だった。

頭部を覆う仮面を被り、表情は読み取れない。

だがキリトが戦うモニターを見上げているのだから、その人物も彼

を見ているのだろう。

その人物は妙なものを見るかのように、一言不思議そうに呟いた。

「……なんだありや？」

.....
.....
.....

そうしてキリトは勝ち進んでいった。

一回戦、二回戦、三回戦、と彼は苦戦することなく勝利を重ねて、あと一回勝てば決勝というところまで登りつめた。

しかしキリトの表情は穏やかなものではない。

むしろ暗く、思い耽るかのように、一人椅子に座り込み、顔を伏し地面に視線を落としていた。

考えが纏まらなかった。

思えば目の前の敵に集中出来ておらず、ここまで来れたのも奇跡だろうと失笑する。

キリトが考えるのは先程の邂逅。

死銃と名乗る男との会話だ。

あの男は言った——アインクラッドの恐怖がここにいる——

——と。

それはつまり、アインクラッドの恐怖——茅場優希もガンゲイル・オンラインをプレイしているということだ。

何を馬鹿な、と鼻で笑うことも出来た。

でまかせだろう、と否定することも出来たはず。

だが出来なかったのは、相手が死銃であったからだ。

銃撃した人間を意識不明にさせるという謎のプレイヤー。

とは言っても、本当に死銃が原因で意識不明になったのかは定かではない。偶然なのかもしれない。死銃が撃ち込んだと同時に、件の被害者であったゼクシードが持病かなにかで意識不明になり、居合わせた者が連絡し、一命を取り留めただけ。偶然が重なった結果なのかもしれない。

「そんなわけ、ないだろう……！」

キリトの両手を握りしめる。

己の楽天的思考を握りつぶすように。

そんな偶然はありえない。

そもそも死銃は己の力を認識していた。

でなければ、殺す、という単語など使わない。

偶然ではなかったのだ。死銃は殺意を持ってゼクシードを撃ち、意識不明に追い込んだのだ。

しかし証拠がない。

誰がやったのか——死銃。

どうやったのか——わからない。

何故やったのか——わからない。

まるで虫食い回答を見ているかのようだ。

肝心の計算式すらわからず、いきなり答えが書かれている。そんなものでどうやって問題を解けというのか。

——しかも死銃は絶剣もここにいて言うて言った。
——明日奈から二人はアスカ・エンパイアで遊んでるって聞いた。
——それを知っているのは、俺達だけ。
——なのに死銃は二人は一緒にいるって言い当てた。
——どうやってだ。
——どうやって、俺達しか知らない情報を、アイツは知ったんだ。
——どうやって……。

考えても考えても、答えは見つからず纏まらない。
何よりも無視できないのが——。

——死銃のやつが、二人を狙っている……。

方法はわからない。

だが一つだけハッキリしているのは、あの兄妹の命が危ないということだ。

二人が前菜で、自分のことをメインディッシュと死銃は口にした。
それは二人を殺してから、キリトを殺すということに他ならない。明確な殺意を持って、死銃は二人へ害をなそうとしていた。

知らせなければならぬ。
しかしどうやって。死銃は二人を知っているが、キリトは知る術がない。

——呼びかけるか？
——何て言えばいい。
——言ったところで応じると思うか？
——俺がキリトなんて証拠もないのに。
——どうやって俺が俺だと証明し、
——どうやってアイツらアイツだと判断すれば良いんだ。
——そもそも、アスカ・エンパイアにいるんじゃないのかよ！

理不尽であることはキリトも理解している。

それでも、勝手気ままに振る舞っている二人に一言二言文句を言いたい衝動に駆られていた。

命狙われているだぞ馬鹿野郎、と。

心配かけんなこの野郎、と。

声を大にして叫びたいのを、キリトはグツと堪える。ここで取り乱しては正体不明の死銃を喜ばせるだけだ。

周囲を見渡しても、死銃の姿は見えない。

苛立ちが募る。舌打ちをしたいのを我慢し、再び視線を落とす。

死銃のみが優位なこの状況、そして何も出来ない情けない自分を噛み殺す勢いで、奥歯を噛みしめる。

「……ようっ」

「えっ？」

ふと視線を上げると人が立っていた。

性別はわからない。頭部を覆うヘルメットのような仮面を装備しており、表情も読み取ることができない。ボディラインをハッキリとわかる凹凸のない装備。男性なのか女性なのかわからないプレイヤーがそこに立っていた。背丈は小さく小柄である。

そのプレイヤーはどこか小馬鹿にするような調子で続ける。

「随分とイラついてるじゃねえか。何だオマエ、思春期か？」

戦い方も雑だ、と言い捨てると同時に背後から同じような格好をしたプレイヤーが現れた。

今度はわかる。新しく現れたプレイヤーは女性であり、胸の膨らみで判断できる。

先にキリトに声をかけた小柄なプレイヤーとは違い、凹凸がハッキリとわかることから、どこか扇情的に映るがそれとは裏腹に無邪気な声で小柄なプレイヤーに抗議の声をあげた。

「にーちゃん！ いきなり走らないでよお！」

「……別に走ってねえよ」

「走ってたよー！ キリトが心配だったのはわかるけどさー」

「別に心配もしてねえ」

「それじゃどうして声かけたのさ。本戦でサプライズ奇襲する予定だったじゃん」

「コイツが情けねえ顔してたから笑いに来ただけだ」

「ええー？ ほんとでござるか？」

「ムカつくから打首にしてやろうかオマエ？」

「わわっ！ 後生！ にーちゃん、後生でござるー！」

「えーつと……」

ポカンと口を開けて、キリトは恐る恐るといった調子で。

「……君たち、誰だ？」

「あ？」

「うえ？」

数秒の沈黙。

それを破ったのは女性らしきプレイヤーだ。

彼女は、ああ、と納得するようにポンと手を打ちながら。

「にーちゃん、頭の防具だよ。これ被ってたら、ボクたちのことわからないじゃん」

「……察しの悪い奴め」

対してチツと舌打ちをしながら言う小柄なプレイヤー。

その対象は彼女ではなく、自分に対してだろう、と理解できる自分自身キリトは不思議に思っていると。

「——ふう、ピトさんに進められて被ってたけど、やっぱりない方がいいなボク」

「あってもなくても変わらねえよ。あのクソ女の言うことなんざ聞くな」

「なんで？ いい人だと思うけどなピトさん」

「……オマエの前ではそうだろうな」

これでわかったかな、と黒髪女性プレイヤーは言う。身長は170センチメートル程あり、出るところは出て、引き締まっている部分は引き締まっているグラマラスな身体。どこか妖艶な雰囲気を出しても、どこか仕草が子供っぽく、言動でどこか台無しになっている部分がある。

対する150センチメートルあるかどうかかな小柄なプレイヤーは金髪碧眼。腰の辺りまである長い髪の毛で、前髪は切り揃えてあり、どこか儂い造形が大変良いフランス人形を連想させるも、言動と表情でこちらも台無しにしていた。

「これでボクたちのことわかったかな？」

「……見てみるこの間抜け顔を。わかってねえぞコイツ」

「えーつと」

——いや、だから誰だ？——

第10話 加速世界同窓会（欠員2名）

——私があの人を見つけたのは、本当に偶然だった——。

私の目的の障害になる可能性がある彼——キリトの試合を観察し、ある程度見てから自分の試合を終わらせた。

相手は誰なのかわからない。

対戦した人には悪いけど、脅威ともならない人へ意識を割くほど、今の私には余裕がない。

見敵必殺。

対戦相手を見つけたと同時に、私は腹ばいになり、狙撃をするために身体を安定させる。

一撃必殺。

こちらを視認していない相手を撃ち倒すなんて造作もない。棒立ちで警戒もしていない相手の頭を撃ち抜き、私は待機ドームへと帰還する。

そして辺りを見渡したのは無意識だった。

探すのはキリトの姿。別に彼を気にしているわけではない。彼の力が脅威であるから、自然と私は彼の姿を目で追っていた。

言ってしまうえば、警戒してのこと。一挙手一投足、彼を観察し、動きの癖を掴み、戦略に組み込む。それだけのことをしないと、私は彼に勝てないだろう。

彼は化物だ。

戦闘を重ねれば、重ねるだけ動きが洗練され、立ち回りに迷いがなくなっていくのが見て取れる。

技術も群を抜いている。弾道予測線を予測し、弾丸を弾くなんて見たこともない。少しでも予測が失敗すると致命傷を負うのは明らかであるが、彼の剣に迷いはない。類稀なる反応速度。そして己のセンスを信じ、身を任せている。

自分を信じる。

簡単そうに見えて、それは難しい。

しかしそれを可能にしてしまうのが、キリトの強さなのだろう。

“はじまりの英雄”なんて大層な呼ばれ方をしているだけはある。それ以上に、曲がりなりにも“あの人”に認められているだけはある。

認めよう。

計算外であり、予想外であったことを、私は素直に認める。

これ以上彼がGGOこの世界に順応してしまえば、今の私じゃ勝ち目がなくなる。

だがツキはまだ私を見放してはいなかったようだ。

Fブロック予選決勝。

私達が順当に勝ち上がれば、そこで戦うことになる。

叩くのならそこで。完膚なきまでに撃ち倒すしかない。

——でもそれで、彼に勝って、先輩が私を見てくれるの？

——そんな勝ち方で、あの人と。

——明日奈さんと同じ土俵に立てるの？

そこまで考えて、私は頭を振った。

邪念を振り払うように、懸念を唾棄するように、目的だけに集中する。

気付かない、気付いてはならない。予感がする。私が“それ”に気付いたら、間違いなく破綻するという確かな予感。

だから私は“それ”に気付いてはならない——。

そう雑念。全ては些事。

今は違うことに集中しなければならぬ。

目的はキリトの打倒。今はそれしか考えてはならない。そうして私は周囲を見渡した。

目的の人物を見つけるために、標的をもっと観察するために。ふと、ある集団に目が止まる。

それは三組だった。黒髪の男性と、同じく黒髪の女性が対面に座

り、黒髪の女性の傍らに立つ小柄な金髪碧眼の人。

奇妙な三人だった。殺伐としていいるB・O・Bにおいて、和気藹々と、交流を深めているプレイヤーは少ない。ましてやここまで勝ち残り、待機ドームにいるプレイヤー達は腕の立つ者達ばかり。情報を得るために会話するのならまだしも、その三人のように呑気に友人達が会話するような柔らかい雰囲気醸し出す者達はいないだろう。

不思議と私は眼を離せなかった。

黒髪の男性がキリトだったから——ではない。

黒髪の女性が無邪気だったから——ではない。

目が離せなかったのは——小柄な金髪碧眼の人がいたから。

似ても似つかない。

姿も異なる。

まるで女の子とも、男の子とも、どちらとも言える精巧な人形のような。

しかし、二人を見るその人の眼に、私は見覚えがあった。それはダイシーカフェにて、私に向ける眼とは違う、戦友たちに向けている、優しくも特別な信頼を秘めた眼差しに——私は見覚えがあった。

「……あ」

あの人が誰なのか、どうして私は思い出したのか、どうしてここにいるのか、そういった疑問の数々を無視して、考える間もなく私は駆け出した。

冷静に分析することを放棄して、私は本能のまま、あの人の元へと駆け出した。

胸が高鳴る。

頬が高揚するのを感じる。

私を見て欲しい、あの眼差しを独占したい、あの人と話したい、声が聞きたい。

感情が暴走する。

欲望のまま走り出す。

もはや抑えが効かないまま、私は駆け出して。
一言。

ありとあらゆる愛と恋をかき混ぜて、その言葉を口にしていた――

.....

2025年12月13日 PM16:45
ガンゲイル・オンライン BOB予選

「――で、お前がユウキで」
「うん！」

目の前に座っている美女を指差し、

「で、お前が――」
「オレだ」

その指は横にスライドし、美女の隣に立っている人物を指す。

キリトの目の前に見える光景。

確かな事実であり、歴とした証拠でもあり、何よりも本人たちの名乗りがあつたとしても、キリトは認めたくなかつた。

まるで妖艶な美女が——茅場木綿季であり。

まるで可憐な彼女^{彼女}が——茅場優希である。

その事実には、キリトはどうしても認めたくなかつた。

命を狙われている、かもしれない。どうして伝えるようか、悩んでいたとき。

そんなときに、笑えないジョークのようで冗談の姿で現れたのだから、それは認めたくもなくなるというもの。

なんともちぐはぐな兄妹である。

妖艶な見た目でその気になれば男性プレイヤーは虜になるような雰囲気であるのに、無邪気に振る舞うユウキが全てを台無しにしており。

微笑むだけで周囲を和やかにさせる愛らしくも、妖精のようなあどけない姿にもかかわらず、その粗暴な言動と人を食つたような表情でこれまた全てを台無しにしているユウキ。

これがもし逆であるのなら、幾分マシに見えるというものだが悲しきかな。

神様は皆に平等であり、不平等を振りまく存在。それはこの二人にも適用されているようである。

キリトは深い、これまた深いため息を吐いた。

こちらの気も知らないで。いいや、言つても意味がないし、何だつたら会つてもいなかつたのに察しろというのが無理な話だが、そう思わざるを得ない。

どうやって知らせようか、と躍起になつて考えていた自分がバカらしくなったのか、気持ちに余裕が出てきたキリトはユウキが背負っている獲物を見て尋ねる。

「随分とゴツいなそれ」

「それだと？」

どれだ、と自分の身体をゴミでも着いているのかとチェックするよう
うに確認し、

「これか？」

腰に差していた軍用スコップを取り出す。
対していいや、とキリトは横に首を振って。

「違う。いいや、それもそうだけど。なんだそのスコップ。というか、
なんでスコップ。どうするんだよそれで？」

「どうするってオマエ、ぶん殴るに決まってるんだろ」

「やだ、凄い野蛮。スコップってそういう使い方するっけ？」

本来の用途にズレた使い方をする非常識を見て、若干キリトは身を
引かず。

ユウキもその言動に同意するかのよう、腕を組んでウンウンと何
度も頷きながら。

「そうそう。わかるよキリト。にーちゃんはデリカシーが足りないん
だよ」

「デリカシーなあ？ 使い方間違ってるねえか？」

「合ってるよ。こうカッコいい感じが足りないの。ボクとキリトみ
たいに光る剣使ってさあゝ！ 勿体ないよ、そんな可愛い格好なのに
！」

それにキリトは同意する。自分と同じくユウキも剣で戦うのか、と
思うと同時に、見た目ならユウキが言ったことでもないな、と心のな
かで呟いて、二人のやり取りを静観することにする。

ユーキはというと、あー、と考えながら訪ねた。

「……もしかして、デリカシーじゃなくて、スタイリッシュって言いたいのか？」

「あつ、そうそう！ すたいりっしゅー！」

「スタイリッシュ」

「すたいりっしゅー！」

悪気もなく満面の笑みで頷く義妹に、義兄は一言だけ事実を述べた。

「オレには縁遠い言葉だな。ンで、他にゴツいもんってなると……」

これか、と背に背負っていた一丁の銃を取り出した。

見ようによってはライフルにも見える。しかしキリトに知る一般的なライフルとは違う。形状は一般的なライフルのようであるにも関わらず、弾倉がマガジン式ではなく、回転式弾倉を備えたりボルバーのような小銃だった。映画などの映像媒体ではあまり見たことがなく、銃に疎いキリトは余計にそのライフルのような小銃が物珍しく感じた。

現にキリトもまだ数人とはいえ銃相手に戦ってきたが、未だにユーキが取り出した小銃の相手をしたことがない。

「そうそれ。まさかそれでぶん殴るとか言わないよな？」

「言わねえよアホ。……いいや、偶にぶん殴ってたか？」

隣りにいるユウキに訪ねて、彼女は間髪入れずに。

「殴ってたよ？」

「銃を鈍器に使うとか、ストロング過ぎないか？ こつちまで来て、やってることがALLOとSAOと変わらないってどうなんだ？」

「オマエにだけは言われたくねえんだよ。こつちまで来て剣を使うとか、湧いてんのか？」

正直、傍目から見たら五十歩百歩なやり取りと言えるだろう。

片や、銃の世界と言われているのに関わらずスタイルは剣で戦う近距離特化。

片や、銃を使っているのに、いざとなればそれを鈍器として扱う何でもありの戦い方。

どつちもどつちとは、彼らのことを言うのだろう。

ユーキは、まあいい、と吐き捨てるように片付けて。

「MTS―255っていう銃だ。まあショットガンだな」

「えっ、その見た目で？ ライフルじゃなくて？」

「ショットガンだ。意外と使いやすい」

「……本当に色々な銃があるんだな」

「銃の世界って呼ばれてるだけはある。中には本当に使えるかわからねえ形状の銃もあるぜ」

「そういうのは大抵レアアイテムだね。使うには難しいけど、高く売れるんだよ。」

なるほど、と軽くレクチャーを受けてキリトは頷いて。

「かなり順応してるじゃないか」

「そういうオマエは、見ていられねえくらいテンパってたけどな？」

小馬鹿にするような笑みを浮かべて、意地の悪い声色で言うユーキに対してキリトは何も言えずに言葉に詰まった。

現に、二人の顔を見るまで、キリトは考えが纏まらずに八方塞がりとなっていた。この兄妹の顔を見なければ、どうしていたかわからないほど、キリトは追い詰められていた。

いつものやり取り。

売り言葉に買い言葉。どちらかが挑発し、どちらかがそれに乗る。そんな単純なやり取りを眼にして、ユウキもいつもの調子で疑問を口にした。

「それで、何があつたの？ よければボク達が話しを聞くよ？」

「おい、ナチュラルにオレも巻き込んでじゃねえよ」

「えっ、にーちゃんも心配だつたんじやないの？」

「誰がコイツの心配なんざするか。勝手に悩んでハゲ散らかせ」

「と言いつつ、声をかけたのはにーちゃんなんだけどね？ 心配だけで素直になれない人って、ツンデレって言うんだってアスナに教えてもらったよ？」

「……」

「わっ、わっ！ どうして無言でチョップするのさ！」

「そこに叩きやすい頭が合ったからだ。とりあえずあの明日奈は一回ボンキュツシメる」

現実の姿ではなく、今の姿であるからこそチグハグに見えるのだろうか。

小柄な可愛らしい姿で凄むユーキに対して、背丈の高い美女の姿だが涙目で頭を両手で守ろうとしているユウキは、第三者からみたらかなり奇妙な光景だつた。とてもではないが、現実味がない光景を見て、キリトは思わず笑みを浮かべる。

緊張をほぐすためにわざとやっているのかもしれない、はたまた素で何も考えずにやり取りした結果なのかもしれない。

どちらでもいい。何度も眼にした兄妹のやり取りに、キリトの緊迫とした雰囲気キリトが和らいだのは明らかだ。

だがすぐに気を引き締める。

先ほどとは違い程よい緊張感を保ったまま、地獄を生き抜いてきた戦友に切り出す――。

そうして、キリトは全てを語った。

今の自分の現状、死銃というプレイヤーの存在、菊岡からの依頼、そしてシノンに協力してもらいB o Bの予選に出場出来たこと。

それを聞いてユーキは沈黙を保っていた。腕を組み、熟考するかのように目を瞑ってキリトの話しを聞いている。

対するユウキは半信半疑でいまいち要領の得ない様子だ。

無理もない。ここがソードアート・オンラインであるのならまだしも、あの世界とは違い生死に関わりのないゲームの世界。人間が意識不明になる原因を作っている可能性のあるプレイヤーと聞いてもピンと来ないだろう。ましてやそんなプレイヤーが自分たちを狙っているというのなら尚更。

えーと、とユウキはキリトの言葉を整理しながら、たどたどしく訪ねた。

「死銃って人がボクたちを狙ってるんだよね？」

「ああ、そう言ってた」

「なんでかな？　ボクたちってみんなに意地悪なことしてたかな？」

本人たちに悪気はなくとも、周囲は不快な思いをし、それが恨み辛みになることもある。

それはキリトも理解している。そんな気はなかった、なんて星の数ほどあり、その数だけ争いは起きているのは承知している。

しかし今回は、今回だけは否定する。

ありえない、と。自分たちは命を狙われるだけの理由があることを否定して、キリトは首を横に振って。

「俺達に落ち度はない」

「それじゃどうして——」

「でも心当たりがないわけじゃない」

そこまで言うと、キリトは視線をユーキに移す。

見られていることに勘付いたのか、ユーキも目を開けてキリトに視線だけを送った。

キリトは問うた。

「ラフィン・コフィン笑う棺桶って覚えてるか？」

「それって、にーちゃんが……」

チラツと、ユウキは義兄を見やる。

対する彼の反応は薄いものだった。特にリアクションを起こすこともなく、再び目を瞑り熟考の海へと彼は潜っていく。

キリトはユウキの言葉に頷いて。

「そう、ユーキが潰したギルド。多分、死銃はその残党なんだと思う」

「なんで言い切れるの？」

「……ユウキは覚えてるか？ ソードアート・オンラインの最後で、俺達はアイツらと戦ったろ？」

「……うん、覚えてる」

忘れもしない。

ソードアート・オンラインで生き残っているプレイヤーが団結して挑んだラストダンジョン。

最初のダンジョンにして、最後のダンジョンであった第一層迷宮区アクセル・ワールドにて、ラフィン・コフィン加速世界と笑う棺桶は相対した。

片や、時間稼ぎのために、全力で身を守り。

片や、希望を摘み取るために、全霊を以て殺しにかかった。

ユーキに残すことなく叩きのめされ、余すことなく黒鉄宮に投獄されていた笑う棺桶ラフィン・コフィンがどうやって脱獄して、自分たちの邪魔をしてきたのかは定かではない。今となっては知ることも出来ず、この謎は永遠に解明されることもないだろう。

だが事実だけを述べると、連中は確かにキリト達の前に現れた。

どれだけ謎に包まれていようとも、これだけは変わらない。連中の全員が、加速世界アクセル・ワールドに純然たる殺意を向けていた。

構えていた剣で、突き出された槍で、隠し持っていた小刀で、躊躇アクセル・ワールドもなく斬り決りその首を落とそうとする凶刃を、誰もが加速世界に向けていた。

だからこそ、キリトは思い出した。

死銃から向けられた殺意。それには確かな既視感があり、過去に経験したそれに似ていることに。

「俺は死銃ラフィン・コフィンから笑う棺桶の存在を感じた。ていうか、あそこまで恨まれたこともなかったし、俺達を恨んでいるとしたらアイツらしいない。まっ、消去法ってやつかな」

「あの人達か……。うー、ボク嫌いなんだよね……」

「……俺もだよ」

ユウキは付け狙われていた笑う棺桶ラフィン・コフィンのプレイヤーを思い出し、キリトも自分の目の敵にしていた名も知らない赤目のプレイヤーを思い出し、気分が億劫なものに変わる。

死銃ラフィン・コフィンが笑う棺桶の元メンバーである可能性があるのことはわかった。

だがユウキにはどうしてもわからないことがあり、その疑問をキリトに相談する。

「でもどうしてボクやにーちゃんがいるってわかったのかな？ 名前もソードアート・オンラインのときと全然違うのに」

「え、そうなのか？」

「うん。ボクはY u k iのままだけど、にーちゃんは——」

そこでチラリ、とユーキを見るが彼は何も反応を示さない。

よほど深く考え集中しているのか、口を開く気配すらなかった。

それがわかったユウキは再びキリトに視線を戻し、困った笑みを浮かべて。

「今はM o b u っ て名前なんだ」

「M o b u …… 。モブ？」

「そう、モブ」

お前のようなモブがいるか、とユーキ改めモブに声をかけようとするも口を一文字にキュツと閉じた。

どうせ言ったところで、今の彼からまともな反応は期待できないと思っただのか、話しを戻す。

「わからないな。俺やユウキはソードアート・オンラインで使っていたネームが一緒だったかで通るかもしれないけど……」

「今のにーちゃんと『アインクラッドの恐怖』が同じ人だ、ってなるのは違うと思うな……」

「そう、だよな……」

ソードアート・オンラインに囚われていたプレイヤーであれば——

——S A O ^{サブバイバー} 帰還者であれば、今のユーキを『アインクラッドの恐怖』のようなだとは思えない。ましてやアインクラッドの恐怖に付け狙われていた笑う棺桶の残党であるのなら尚の事。

今のユーキからは以前のような暴威も威圧も、ましてや恐怖すら感じない。拔身だった刃のような雰囲気はなく、鞘に収まったような気配であるユーキからは何も感じない。

ましてや名前すら変えている今となっては「ユーキ＝モブ」とはとも結び付けられない。

だが死銃は知っていた。ガンゲイル・オンラインにユウキがいることを、そして「絶剣」ユウキの存在を、死銃は二人の存在を把握していた。

天真爛漫に振る舞っていたユウキの表情に影が落ちる。

銃撃した者を意識不明にする力を持っているかもしれない、そしてこちら側の情報を握っている。そんなプレイヤーに狙われているのだ。気味が悪く感じるに決まっている。

暗い表情のままユウキは口を開いた。

「なんか嫌な感じだよ。そもそも死銃なんて聞いたことなかったもん」

「やっぱり有名じゃないのか?」

「うん。アインクラッドの恐怖の偽物でガンゲイル・オンラインは大賑わいだったよ?」

キリトもガンゲイル・オンラインに来るまでの間、軽く情報サイトや掲示板等を除いてみたが、死銃の名前など見かけるほうが少なかった。

話題に上がるとしても噂程度で、直ぐに違う話題にすり替わる。その程度の話性でしかなかった。

ユウキは、そうだと声を上げて提案する。

「死銃のこと、みんなに聞いてみる? 知っている人いるかも知れないし」

「得られるものは少ないだろう。ここに残っている連中がまともに取り合ってくれるとは思えない」

「だよね。今も警戒されてるもんボクたち」

見られている、とキリトもユウキもわかっていた。

少しでも有益な情報を見逃さないと、聞く耳を立てている者がいる、動向を観察している者もいる。

それもその筈。今となつては、本物かもしれないと評されるキリトと仲良く談笑しているのだ。それは注目もされるし、観察もされるだろう。そんな連中に世間話で話したところで、死銃の情報など得られないに決まっている。

となると残りの手段と言えは――。

「なあ、二人は数ヶ月ガンゲイル・オンラインでインしてたんだろ？」

キリトは思い出す。

今の二人はアスカ・エンパイアにいますと明日奈が言っていたことを。しかし二人がアスカ・エンパイアではなく、ガンゲイル・オンラインにいたことを踏まえると、本当はガンゲイル・オンラインにいたとキリトは推察する。

そしてその推察通り、ユウキは肯定するように頷いた。

「そうだよ？」

「フレンドとかいないのか？」

フレンド、つまりは普段からガンゲイル・オンラインで組んでいるプレイヤーのこと。

数ヶ月もガンゲイル・オンラインにいるのなら、フレンド登録しているプレイヤーもいるだろう。ましてやコミュニケーション能力お化けのユウキと、猫かぶりのユーキだ。ユウキが打算がない付き合いをするが、ユーキは利用する者は利用する程度の腹黒さがある。フレンド登録しているプレイヤーがいるに決まっている。

返ってきた言葉は予想通り。

「いるよ。ピトフーイって人で、親切なんだー」

「その人に聞けないか？ GGO歴が多ければ多いほどいいんだけ」

キリトは一抹の希望を託すが、無情にもユウキは困ったように笑み

を浮かべて。

「んー、今は無理だと思う。ボクたちもB o Bの予選前に連絡したんだけど、繋がらないんだよね。ログインはしてるんだけどなー」

クエスト中なのかな、とユウキは言うのと直ぐに、そういえば、とユウキは疑問を口にする。

「シノンって誰?」

「えっ? ああ、知らないのか。シノンって朝田だよ」

「えーっ!? 本当なのそれ!? ボク知らなかったよ!」

「てつきり知っているとと思ってたぞ」

「知らないよー。あつ、それならさ。シノンに聞いてみる?」

良い案であると、キリトも思う。

共通の知り合いで、一番ガンゲイル・オンラインに精通しているのは、シノンこと朝田詩乃だろうことは断言できる。触りとは言え、キリトも彼女にガンゲイル・オンラインでの立ち回りや、銃の種類などレクチャーを受けた身。その言葉の端々には、知識と経験が見え隠れしているのは感じていた。

そう考えればなるほど、確かに彼女に聞けばなにか情報を得られるかもしれない。

「――必要ねえ」

そこで漸くユーキが口を開いた。

どこか様子がおかしい。重く、拒絶するように、否定から入る言葉に、キリトは眉を顰めて問うた。

「どうしてだ?」

「アイツの力を借りるまでもねえだろ。所詮死銃なんて雑魚だ。オレ

達がやらなければならないだけのハナシだ」

そこまで言うと、視線をキリトに向けて。

「ゴミ野郎はオレとコイツを殺して、最後にオマエを殺るって言っただな？」

「ああ」

「いつでも殺れる手段があるなら、とつくの昔にオレ達は死んでる。だがオレ達が五体満足つてことは、殺すために準備が必要、もしくは何かしらの理由があつてなんだろう。今すぐ死ぬってわけじゃねえなら簡単だ」

不安そうにしている、義妹の頭を乱暴に撫でてユーキは続けて言った。

「朝田を巻き込む必要もねえ。ゴミ野郎はそのうち処理される。それまでオレ達がゴミ野郎に殺られずに立ち回ればいいだけだ」

簡単そうに言う。

その言葉に、キリトは違和感を覚えた。

らしくないのだ。今までの茅場優希という人間の性格から言えば、死銃という存在は見過ごせないものだ。彼の言葉風というのなら目障りな対象でしかない。ともなれば、殲滅に赴くに決まっている。ましてや義妹が狙われていると言うだけで、彼が動く理由としては充分すぎる。

だが先程の彼の言葉は驚くほど受動的。事の成り行きが解決してくれるのを待つ、という彼らしくないにも程がある。

キリトは疑問を口にしようとする。

——何か知っているのか、と口にする前に遮られることになる。

それは少女の声。

期待や羨望、そして狂おしいほどの愛情込められた言葉。
それがユーキに向けられて、キリトは黙り、少女の方を見ると――

「――先輩――」

シノンが――朝田詩乃が、息を切らしてそこに居た。

幕間 その頃の欠員二名

2025年12月13日 BOB予選同時刻

都内 ファミレス

暖房のよく効いた店内。

時刻は夕方近くということもあってか、様々な客層も統一性が無い。

仕事帰りのサラリーマンが食事を楽しみ、昼ごろからいる世間話好きの主婦達が家庭内の愚痴に花を咲かせ、部活帰りらしい学生達が疲労感を漂わせながら談笑をする。

その中で、二人の帰還者学校の女子生徒がいた。

一人、栗色の長い髪の毛の女子生徒がこれまた美味しそうにパフェを食べ舌鼓を打つ。

一人、それを桃色のカーディガンを着た女子生徒が頬杖をつきながらジト目で見つめる。

相席しているということは、二人は知り合い以上の関係であることが分かる。

そしてその通り、二人はただの友人以上の関係なのだろう。

それを証拠に、桃色のカーディガンを着た女子生徒はこれまたわざとらしく、深く深くため息を吐いて。

「……それで、何のつもりだったのよ？」

ジト目で見つめるその視線の先。

その先にはこれまた間抜けな顔をしている栗色の長い髪の毛の女子生徒。

心当たりがない、と言わんばかりにスプーンを咥えながら、可愛らしく首をかしげながら。

「何のこと？」

「とぼけるんじゃないの」

手が届く距離ならチョップを食らわせているところだ、と心の中で思いながら呆れ声で桃色のカーデイガンの女子生徒——篠崎里香は続けて言う。

「あの兄妹がアスカ・エンパイアで遊んでるって嘘言っただでしょ」「うぐっ」

心当たりがあるのか、心が詰まるような苦しい声を上げる。

そのまま明後日の方向へ眼を泳がせて、栗色の長い髪的女子生徒——

結城明日奈は苦し紛れに誤魔化すように。

「な、なんのこと〜？」

「バカね。妹の方に聞いて裏は取れてんのよ」

「えー……？」

そういえば、話を合わせるようにと打ち合わせするのを忘れていたことを、ここで明日奈は思い出した。

なんて穴のある嘘だったのだろうか、と明日奈は自分の手際の悪さに失望しながら里香に問う。

「なんて言ってた？」

「にーちゃんと一緒に銃を撃つんだーって嬉しそうに言っただよ」

「ユウキらしい」

「らしいじゃないわよ。詰めが甘いのよ詰めが」

「……返す言葉もありません」

何せ事実なのだ。明日奈に反論などある筈もない。肩身を狭く、そのまま消え入りそうである。華奢な肩がますます頼りなく見えるの

は気のせいではないだろう。

そもそも、明日奈は器用な性格ではないことは里香は良く知っていた。

嘘をついたところで直ぐにバレるし、人の良い性格から嘘をつき続けても、明日奈自身が音を上げて周囲に直ぐにバレる。

誰が評したのか。きつと目つきも性格も口も悪い少年が言ったに違いない言葉。結城明日奈はポンコツであると。

確かに、と里香は思う。

外面は上手く取り繕って優等生然としているものの、いざ気を許した人間にはポンコツな部分を遺憾なく発揮していく。

ポンコツとは的を得た言葉だ、と里香は頷きながら。

「それで？ どうしてアスカ・エンパイアで遊んでるって言ったのよ？」

「んー、優希くんにそっちの方がいいかなって思ったから？」

いまいち、要領の得ない理由に里香は首を傾げてしまった。

どうしてあの捻くれ者のことを考えて、アスカ・エンパイアをプレイしていると言った方がいいとなるのか。

明日奈は困った笑みを浮かべて答えを述べた。

「ほら、GGOに偽者が出たって言ってたでしょ？」

「ああ、あの物好きね」

「うん。最初は優希くんも本当に興味なかったけど、偽者が強いって聞いて——」

「どんなものか興味が出てきてしまったと」

明日奈は、うん、と里香の言葉を肯定して。

「でも最初に興味ないって放置してたのに、今更興味が出ちゃって何だかなあ、って思ってたみたいだったから」

「アンタが気を遣って違うゲームで遊んでいる、って言ったと」

なるほど、確かに優希の性格上そう思っても仕方ない。

最初興味がなかったのに、今になって興味が出てきて、それはそうと負けたような気分になる、とか訳のわからない言い分なのだろうと里香は予測を立てる。

普通に気になったから、偽者の顔を拝みにいく、でいいと思うのは自分だけだろうか、と里香は思いながら。

「相変わらずめんどくさいわね」

「そこが優希くんの良い所なのよ」

「どこがよ」

間髪にツツコミを入れる。

ニツコリと満面の笑みで、楽しそうに語る明日奈を見て、俯瞰的な思考のまま。

しかし明日奈にはどうにも通じてないようだ。

気にすることなく、彼女は笑顔のまま。

「優希くんがGGOに遊びに行ったのは、また違う理由なんだけどね」

「また何かめんどくさい理由なの？」

「ううん。単純に鉄砲の世界ってどんなものなのか興味持ってたみたい」

男の子だよねえ、と暢気に語る明日奈を見て、里香は拍子抜けに感じてしまう。

銃が気になるから、という子供染みた理由だったとは思ってもよらなかった。というよりも、本当に偽者の存在は二の次だったようだ。ここ数ヶ月、アルヴヘイム・オンラインには戻ってこないで、ずっとガンゲイル・オンラインに入り浸っているのが証拠だ。

あの男、思いのほかどハマリしているようだ。

「しっかし、GGOねえ」

偶然か必然か、里香の周りにもアルヴ Heim・オンラインにコンバートした男がいた。

彼もそんな理由なのか、とぼんやりと思っていると。

「どうしたの、リズ？」

「キリトのやつもGGOで遊ぶみたいなのよねえ」

「えっ、いつから？」

「今日から」

数日前にいきなり「GGOにコンバートするから、装備とかアイテム預かってくれ」と頼んできた頼み込んだきた男の顔を思い出しながら、何気ない調子で続けて言う。

「まったく、人のこと倉庫か何かだと思ってるのかしらねアイツは……」

「まあまあ、頼られてるってことじゃない」

「それは、まあ、悪い気は、しないけどさ……？」

確かに悪い気はしなかった。

里香の想い人であるキリト改め桐ヶ谷和人という男を気になって
いる女性は多く存在する。

まず、大人の魅力と包容力のあるサチこと——近衛幸。

そして、義妹という禁断な属性を有し抜群なプロポーションを備えている——桐ヶ谷直葉。

最後に、幼い容姿で可憐と評せる可愛らしい性格の直葉とは違う妹系——綾野珪子。

自分を含めて、四人の女性が和人を好いている状況で、その中で里香に頼ってきたという事実であり、それに対して里香も悪い気はしなかった。

故に、怒るに怒れない。

もしくは、惚れた弱みともいえるのだろうか。

思ったよりも。

いいや、思っている以上に、自分は和人を好いていることに気付かされた里香は、若干頬を紅く染める。

それに対面している明日奈が気付かない筈がない。

彼女はニヤニヤ笑みを浮かべて。

「リズってば可愛いー!」

「う、うるさいわねっ!」

キャー、と興奮するように言う明日奈に対して、里香の顔はますます紅く火照っていく。羞恥に染めながら、里香は明日奈に勢いよく指差して。

「そういうアンタはどうなのよっ」

「ふえ?」

何のこと、と首をかしげる明日奈に対して、忠告染みた言動で里香は続けて。

「そうやってのんびりしていると盗られるわよ?」

「盗られるって?」

「優希が、誰かに、よっ!」

ぽかん、と眼を丸くする。

しかし直ぐに、明日奈は大丈夫、と力強く自信満々に頷きながら。

「優希くん、モテないから大丈夫よ!」

「……………」

知らない。

明日奈は知らない。

誰よりも危機感を持たないといけないのは明日奈だ。

油断しきっている。このままでは幼馴染は敗北するものというジ
ンクス通りになりかねない。

茅場優希には、誰よりも強力な、形振り構わない後輩がいることを、
幼馴染は気付いていない。

これは盲点だった。誰よりも付き合いが長い明日奈だからこそ
盲点。茅場優希という人間を知り尽くした上での盲点。現に、優希は
モテない。腹黒い性格、粗暴な言動、目つきが悪く、他人にモテる要
素など一欠片もない。だからこそ、明日奈は油断しきっていた。ライ
バルがいないと、暢気している。無自覚の後方理解者ヒロインである
が故の慢心であった。

そう。

いつだって例外がいることを、彼女は知らない――。

今度、優希くんと来ようかな、と暢気している里香は善意で忠告
する。呆れた声のまま――。

「――泣いても、知らないからね？」

第11話 茅場優希の悪癖

彼はヒーローではない。

彼は万能ではない。

彼は聖人でもない。

ましてや彼は、完成された人間ではない。

彼を良く知る人物であれば、何を今更と訝しみだろう。もしくは反論の余地がない故に困った笑みを浮かべるだろう。

反論の余地などどこにもない。本当の意味で、彼は英雄ではない。どこにでもいる——というには少々語弊があるかもしれないが、とにかく彼は特別な存在ではなかった。

それは事実だ。

現に彼が特別な存在であれば、ありとあらゆる悲劇は回避出来たことだろう。

目の前で死に逝く命を救えただろうし、彼の叔父を狂気から助け出すことが出来ただろうし、ましてや——己の両親がその身を犠牲にすることなどなかった。

彼は特別な存在ではない。ましてやヒーローなどといった者である筈がない。

当の本人からして見たら、それは当たり前のことだ。彼がそんな賞賛の言葉を聴いたものなら、鼻で笑いそれは違うと吐き捨てることだろう。もちろん謙遜などではない。彼は本当の意味で、自分はそんな存在ではないと思っている。

だがそれは、視点を変えたら違って見える。

それはどのような視点か。言うまでもなく、彼に救われた側から見たら違ってくる。

当の本人が否定しようにも、救われた側からしてみたら謙遜に見えることだろう。

当たり前だ。いくら否定しようが、事実は変わらない。特別な存在ではないと自身を否定している者に、彼ら彼女らは救われているのだ

から。

彼女もその中の一人である。

特別な存在ではないという彼——先輩なる存在に救われた者の一人。

彼に親愛、愛情、恋慕、傾慕を抱き、自分もいつか彼の隣に並び立ちたいと思に至る。

そのために研鑽を重ね、努力を積み上げて、自己を磨き上げてきた。心のどこかで、間違った方法であるかもしれないという疑念を振り払い、彼女は前だけを見て走り続けてきた。

だからこそだろうか。

彼女は焦燥感に駆られていた。

自分の今までしてきたことは無駄で、彼を振り向かせるに至る代物ではないのかもしれない。

それは疑念となり、心を蝕んでいき、やがては焦りとなって心象に残滓となって住み着いていく。故に彼女は焦っていた。早く結果を残そうと、早急に自分でも彼の役に立てることを証明し、彼の隣に並び立ち、彼を——先輩を振り向かせようと彼女は必死であった。

そして焦りは、人の目を曇らせる。

彼女は気付かなかつたのだ。彼の様子がどこか、剣呑な雰囲気になつていくことに。

いつもの彼女であれば気付けただろう。一言二言口にし、彼の様子がおかしいことに気付き、理由はわからずとも察して口を閉ざすに違いない。

しかし今の彼女は、いつもの彼女とは違う。余裕のない彼女に彼の様子を察しろというのは、無茶な注文でもあった。

彼女は続ける。

どれだけ自身がこの世界——ガンゲイル・オンラインを理解しているか。どれだけ自身が有能であるか、どれだけ自身が彼の役に立てるか力説を始める。

対して返ってくるのは無言。彼は静かに、恐ろしいほど静かに、静寂すぎるくらい無感情に、彼女の話に黙って耳を傾けていた。

ここで漸く、彼女も気付き始める。

彼の様子が今までとは違うものであると。

しかし、気付いた頃には遅かった。冷ややかに視線で、冷淡に彼はため息を吐いて、彼女が耳を疑うほど冷徹な声色を伴い口を開く。

聞いた事がない。

耳にしたことがない。

見たことがない表情を張り付かせて。

容赦なく未練なく彼は呟いた。

「オマエの手を借りるまでもねえ。役立たずが一人増えたところで何も変わらない」

「失せろよ。前々から思っ

いたが、鬱陶しいよオマエ」

上手く言葉が纏まらない。

思うように声にならない。

その眼はまるで、彼の敵に向けられているそれであり、そんな感情をぶつけられたことが、彼女にはなかったから――。

.....
.....
.....

ガンゲイル・オンライン BOB予選

数分後

「——なんのつもりだ？」

「質問の意図が読めねえな」

現在、テーブルを挟んで座っている人物に眼を向けてキリトの問いに、件の人物であるユーキ——この世界ではモブという少年とも少女とも見た目な彼が答えた。

明らかに白を切る彼に、キリトは呆れた口調で続けて言う。

「なんであんなことを言ったんだ？」

「事実だろうが。命のやり取りを知らねえ女とある程度は経験のあるオレ達。物の優劣なんぞ分かり切ったことだ」

だからこそ足手まといである、と彼は断じていた。

いくらガンゲイル・オンラインを自分達よりも先にプレイしているとはいえ、知識では埋めることの出来ない経験がある。それが身につかないようでは、自分達の足を引っ張ることになると。彼は結論付けていた。

つまりそれは、先程言ったように命のやり取りに他ならない。

ゲームでの死が現実の死に直結するデスゲーム。

そんな極限状態に身を置いていたからこそ、必要とし重要視する要素の一つ。

確かに、と。キリトも彼の言い分にも理解を示した。

普段であればそんな経験など必要がない。命のやり取りなど、平和に過ごす者達にとっては最も必要のない要素の一つといえるだろう。

今回ばかりは違う。

どういう方法なのか、どのようなトリックを使ったのか、キリト達にはわからないものの、問題の人物——死銃はデス・ガン確実に現実世界に干渉する力を持っている。最悪殺すことも可能としている。

だからこそ必要になってくる命のやり取りの経験。自分が殺されるかもしれない、という恐怖に打ち勝てる心の強さが必要になってくるのだ。

なるほど。

そういう意味では、彼が足手まといであると断じた彼女——シ
ノンを遠ざけた気持ちもわからないでもない。

しかし——。

「本当にそれだけか？」

それだけの理由ではないと、キリトは結論付ける。長い付き合い
だ、キリトはその程度で彼がシノンを突き放すと思えなかった。

真っ直ぐに見つめて問い質す。

彼の言い放った言葉の数々は効果が絶大であったようで、シノンは
心が折れてしまったのかこの場に既にいない。背を向けてどこかへ
走り去ってしまった。ユウキもその後を追ってこの場にはいない。

だからこそ今であった。

何者もないこの場だからこそ、彼の本音が引き出せると思った。

モブもその辺り察しているのか、足を組み不機嫌そうにキリトをに
らみつけて吐き捨てているように。

「……何が言いてえんだオマエ？」

「ムキになっているように見えたからな」

それでもキリトは譲らない。眼を離すことなくモブを見つめて言
うも、本人は小馬鹿にするように鼻で笑いキリトの問いを吐き捨てる
ように。

「節穴極まったか？ オレがムキになって何の得がある？」

「知らないよ。俺にはシノンを巻き込まないように、ムキになってい
たようにしか見えなかったよ」

「……………」

そこまで言うときリトは立ち上がる。

話は終わった。凶星を突かれ押し黙った沈黙、それが答えだった。モブ^{ユキ}の真偽を理解した今となっては、座して留まる必要はない。力になれるかわからないが、キリトには放って置けない。何せ彼はそれを経験している。一方的に突き放される痛みを、キリトは既に経験している。

オイ、とモブ^{ユキ}は声をかけて。

「余計な事をするな」

「余計な事って？」

「……今、オマエがやろうとしていることだ」

「お前の自分勝手な言い分を見逃したんだ。俺のやることも見逃せよ」

キリトが二人のやり取りを止めなかったのはそれが理由であった。止めることも出来た。口を挟むことも出来た。落ち着くように促すことも出来た。しかし敢えて彼はそれをしなかった。頭を冷やしたところで、時間を置いたところで、モブ^{ユキ}の意見が曲がらないのをわかつているから。

時間を置くことが根本的な解決にならないのなら、違う方法で解決させるしかない。

そのために、キリトは敢えて傍観者の立場になっていた。こうなった茅場優希は手強い。自分自身がどうなるかが、絶対に歩みを止めることはなく、自分から曲げる事はないだろう。

ならばどうするか。それは実は至極簡単な事である。シノンが本当に彼に認められたいのなら、彼女自身がそんな簡単なことを実行しなければならぬ。

故にキリトの最初にやることは、今までモブ^{ユキ}が行ったことを台無しにすること。

つまりはシノンの心を折り、初めて敵意を向け、正体不明な敵がいるB・O・Bから遠ざげるために突き放し作り上げた舞台を――完

膚なきままでに台無しにすることだった。

モブもその辺り察している。

だからこそその先の「余計なことをするな」であった。

「オレが素直に頷くと思っているのか？」

「他のやつなら応じないだろう。でも相手は無駄に律儀なお前だ、自分には好き勝手にして、相手のは許さないのは、それこそ筋が通らないんじゃないか？」

「そんなこと知るかよ。ふざけてんのかオマエ？」

「だったら邪魔しろよ。俺だって今回ばかりは納得出来ない」

キリトは静かであるが確かに、言葉の節々に怒気を含んでいた。

今回のモブの行動には納得が出来ない。あまりにも自分勝手に、相手のことなど考えていない。それは以前のように、自分達を置いて独りで攻略した彼に被って見えたから。置いてかれる人物の気持など考えなく、勝手に前に進み続けた彼の姿そのものだった。

だからこそキリトは苛立ちを隠せなかった。偽悪的に振舞うのもいい加減にしろ、と怒鳴りつけたくなるのをグツと堪え、彼が整えた状況をひっくり返すことを選ぶ。

それはモブも同じであった。

自分達と関わらせたことで、シノンが狙われないとも限らない。そうなつては遅いのだ。シノンを守る保証などなく、どうなるかなど予想もつかない。

ならば関わらせない方がいい。それが最短で出したモブの結論であった。

故に同じであった。

キリトはモブに苛立ちを覚え、モブもキリトに憤りを感じる。だとしても、キリトを止めることは出来なかった。

キリトの言うとおりに、自分が勝手を許されて、自分以外が勝手を許さないのは、確かに筋が通らない。

だからこそその舌打ち。

そっぽを向いてモブは忌々しげに。

「……勝手にしろ。お前が何をしようが無駄なことだ」

「ああ、助かるよ。精々吠え面かけよ」

「ハッ」

引き裂いた笑みを口元に浮かべて、背を向けて遠ざかるキリトを見る。
送る。

そして口の中で一言。

——無駄だ。

そう、無駄である。

これからのキリトが起こす行動を理解した上で、無駄であると評した。

確かにキリト達は立ち上がり、諦めずに自分に追いつくことが出来た。それは元々備わっていたから。根底にある強さを、彼や彼女達は持っていたからに他ならない。

しかしシノン、朝田詩乃は持っているだろうか。答えはNO。確実に彼女には持っていない。

だからこそ、キリトの言葉では響かない。へし折れた心はそう簡単に戻るものではない。付き合いの長い自分だからこそ断言できる。朝田詩乃が立ち上がり、再び自分の前に現れることは決してありえない。

——丁寧に叩き潰した。

——立ち上がれないようにへし折った。

——言葉を選んで確実に傷つけるように。

反吐が出る。

自分で選び選択した結末とはいえ、湧き出る嫌悪感。

一人の女を傷つけて、何が最善の選択なのか、と腸が煮えくり返るほどの怒りを煮えたぎらせていった。

そもそも、巻き込ませて不安であるのなら、彼女を守りながら死銃デス・ガンをどうにかすればいい。それで万事解決するのだが、それこそありえなかった。

キリト達のような“強さ”を持っていれば、それは可能なのかもしれない。だが自分にはそんなものはない、というのが彼の結論であった。低い自己評価で出された結論は最悪なもの、嫌われてもいいから突き放し、無理矢理安全圏に非難させるといふもの。

——ユウキは大丈夫だろう。

——いざとなればキリトと行動させる。

——死銃デス・ガンも問題はねえ。

——アイツが処理するのを待つていればいい。

——後はオレに出来ることは……。

眼を瞑り、見落としがないか、思考の海へと沈んでいく。一手でも読み間違えれば、取り返しのつかないことになる。

だが浮かぶのは先程のシノンの顔。怯えるように、ありえない物を見るような、否定し続けるような、今にも泣き出しそうな後輩の顔。もう言葉を交わすことのない後輩の顔を見て、胸に突き刺すような痛みを覚えるも。

「馬鹿が」

吐き捨てるように呟くと同時に、握り拳を造り出し、その頬を打ち抜く。

ゴツ、と鈍い音が予選会場に響き、その大きな音に何事かB O B参加者はモブユキの方へと視線を向けた。

頭が急激に揺れ脳震盪が起きたように、気分が悪くなるのを感じ、視界が狭まり意識が遠のいていく。

本来ではありえない現象だ。自身を思いっきり殴ったところで、気分が悪くなるなどありえず、アミユスフィアの構造を考えても決して起きない現象だ。仮に万に一つ起きたとしても身体の不調を検知し強制ログアウトされる。

しかしモブユキの身に起きている。

遅れて痛みが走り、脳震盪が起きたような症状となり、脳が揺れているかのような気持悪さを身体が訴えている。意識を遠のきかけるも歯を食いしばり耐える。

この程度の苦しみがどうしたのかと。朝田が感じた意味はもつと鋭く抉るものであった筈だ、と。

「……ッ！」

自己から生まれ出る嫌悪感から、彼は再び握り拳を作り、先程とは一際強く己の頬を殴りつける――。

第12話 朝田詩乃の分岐点

走った、走った、走った——。

あの場に入れなくなつた私は、言い返すという選択肢よりも、逃走を選んでいた。

息を切らすほどの全力疾走。

足がもつれるほど必死に動かし、妹ちゃんが私の名を呼ぶ声が聞こえる。それでも私は立ち止まることは出来なかつた。

否定したかつた。

悪夢であつてほしかった。

気のせいであつてほしかった。

私の聞き間違いであつてほしかった。

しかし現実是非常である。私はあの人に、私の全てであつた人に、私は彼に——先輩に否定されてしまった。

彼は言つた——足手まといだと。

彼は否定した——私の手は必要が無い、と。

彼は評した——役立たずであると。

そして彼は結果だけを残した——鬱陶しいだけの女であつた、と。

それは嘘だと言ひ返したかつた。

あれだけ優しくしてくれたのに、あれだけ私を守ってくれたのに、あれだけ私の傍にいてくれたのに。

だがそれは本当に——？

本当の意味で、彼は私を想つてくれていたのだろうか。

本当は嫌だつたのではないか。私は先輩を素直ではないと考えたこともあつたが、本当は違つていて、彼の言葉通りの意味だつたのではなからうか。

私を守ってくれたのも、私を害する連中が目障りだつただけで、私のことなど眼中になく、むしろ目障り程度の存在だつたのではないだろうか。

いいや、ありえない。そんなことは、絶対にありえない。私の先輩は、そんなことは決して――。

――だが本当に？

生まれてしまった疑念を否定出来なかった。

小さな小さな疑念。確かに小さかったそれは、今となつては大きく成長し、化膿のように私を苦しませる。

だってあの敵意は本物だったから。

私を睨み付ける先輩の眼は、敵を射抜くように見つめるそれは、拒絶された剣呑な雰囲気は、確かに本物だった。

だから私は否定できない。今までの先輩の行動を見ても、アレは演技であることが分析出来るが、現場証拠がそれを許さない。

今までの振る舞いは私に気を使つての振る舞いであり、本当は私のことなんて鬱陶しいだけの存在だったのなら。

「……………っっ！」

私にはそんな真実耐えられない。そこまでの耐えられるほどの防衛機構を私には――朝田詩乃には備わっていない。

当然として私は逃げた。最後の防衛手段のように、これ以上私という人間が壊れないように、私は先輩の前から逃げてしまった。

もし先輩の口にした言葉の数々が本当であったのなら、私は絶対に耐えられず、必ず破綻してしまうから。

私の世界にとって、全てとも呼べる存在が、よりもよつて私を否定し尽くすのなら、私が生きる理由や目的が消えてしまう。それほどまでに、私にとって先輩の存在は大きく深く、私の全てでもあった。だからこそ、私は逃げてしまった。

言い返せる筈もない、対立出来る筈もない、敵対なんて以ての外。

気がついた頃には、私は座り込んでいた。

総督府、プレイヤー達には『ブリッジ』と呼ばれている地区だ。体感的には永遠走ってきたつもりだったが、思いの外直ぐに私は挫けて

しまつたらしい。

何せブリッジとB○B予選会場は目と鼻の先だ。ブリッジから地下へと下るエレベーターに乗ってしまえば、B○B予選会場に着いてしまう、その程度の距離。

周囲のプレイヤー達はブリッジ上部に配置されている、大画面のパネルモニターに釘付けになっていた。

映し出されるのはB○B予選試合の様子。乾いた銃弾の音、モニター越しに見える戦塵、そしてプレイヤー達の裂帛とした気迫に満ちた表情。画面越しとはいえ、臨場感溢れる光景に、見ている側も胸が躍り釘付けとなっていた。

そんな状況だ。

私がブリッジの隅で、無様に膝を抱えていようと誰も気に留めなかった。

勿論、私も構って欲しいわけではない。むしろそつとしてほしい。何だったら、大音量で流れているB○B予選の戦闘音ですら邪魔だった。

アレだけ夢中になっていたのに、この日のために研鑽を重ね、腕を磨き、万全の状態で臨んだ。今となってはそれが煩わしい。全ては先輩と対等になりたいから始めたことだ。それが無駄となつては、B○Bなんて私にはどうでもいい。

喧騒の中に溶け込み、そのまま消えてしまいたい。

「あの……」

周囲とは真逆の、どこまでも墜ちている私に話しかける人は、きつと物好きなのだろう。

「あ、あのっ……!」

応答がない私に、再び声をかける。

そこでやっと、私は顔を上げた。睨み付けるように、八つ当たりす

るように、何もかもが億劫であるように、私は声をかけた人物を見上げる。

長い黒髪の女性。

現実の彼女とは似ても似つかない妖艶な雰囲気を纏った美女がそこにいた。

奇妙な光景だった。今の彼女の容姿は、他人を手玉に取る艶やかな色気があるそれだ。にも拘らず、私を心配そうに見下ろす様子は今の彼女には似合わない。

眉を八の字にしながら、彼女は必死に私にかける声を模索していた。

きっと彼女は心配してくれて、私の後を追ってくれたのだろう。かける声も思いつかないまま、ただ心配だったからというだけであの場を離れて、私を追ってきてくれたのだろう。

本当に優しい娘だ。

でもごめんなさい、本当にごめんなさい。

今の私は、その優しさに応える余裕すらないの。

「大丈夫、シノン？」

妖艶な彼女——ユウキは、妹ちゃんは本当に心配そうに声をかけてくれた。

私の視線に合わせるように、今とつてな高身長な妹ちゃんの身体。両膝を折り、しゃがみながら妹ちゃんは私の様子を見守る。

言うべきか言うべきではないか、彼女はわかりやすく表情を百面相に変えて、意を決するかのように口を開いた。

「にーちゃんも本気で言ったわけじゃないよ」

その言葉は私には無視できないものだった。

よりにもよって、今の私に、そんな心にもない、吐いて捨てる戯言を口にするのか、と。

私の視線は既に、妹ちゃんに向けられていない。顔を俯かせて、意識は内側に向けて、驚く程冷淡な声色で応じていた。

「……………どうして、言い切れるのよ」

「ボクにはわかるんだ」

ハッ、と鼻で笑ってしまった。

彼女に何がわかるというのか。

「……………どうかしらね。アレが先輩の本音かもしれないじゃない」

間違いなく最低だ。

誰なのかなんて聞くまでもない。私自身が、最低で最悪だ。

行き場のない憤りを妹ちゃんにぶつけようとしている。私を心配して来てくれた優しい子に、感情をぶつけようとしていた。

それはあってはならない。それだけは違う。お門違いにも程がある。

暴走する感情を堪えて、極めて冷静に、静かな声で何とか口を開く。

「貴女にはわからないわよ。先輩の身内である貴女には、私の気持ちなんて……………」

「……………わかるよ」

「っ！ わからないわよっ！」

嗚呼、本当に私は、どうしようもない。

冷静でいるように決めていたのに、妹ちゃんは関係ないのに、私はいつの間にか彼女に向かって叫んでいた。

視界が歪み、頬には眼から溢れた涙が、一滴となり伝って行く。

熱く熱く、なおも熱く。あふれ出した涙は止まらない。どうして私は泣いているのか。悔しいからか、悲しいからか、それとも怒りからか。きつと全部なのだろう。

先輩の妹という立場から、ありきたりな「わかる」なんて肯定をして欲しくない。わかるわけがない、先輩の妹という彼の大切な存在の一人である彼女に、蚊帳の外である私の気持なんてわかるわけがない。

何も知らないくせに、何もわからないくせに、冷たくあしらわれたことすらなくせに、彼女は何がわかるというのか。

視界が歪む。

嗚咽を漏らし、顔面をぐしゃぐしゃに歪めながら、私は妹ちゃんを見上げた。

彼女は――。

「わかるよ」

悲しそうに、困ったように続けて。

「――ボクもそうだったから」

「えっ……っ？」

耳を疑った。

聞き間違いだと思った。ありえないと思った。

私から見た彼女と先輩の関係性は明らかに仲が良いそれだ。

彼女は感情のまま先輩に懐き、先輩はわかり難いものの妹ちゃんを大事に扱っている。

そんな先輩が、そんな彼が、妹ちゃんに対して私と同じだったとはどういうことだ――？

私に気を使って、出任せを言っている――とは思えない。

彼女は困ったように、本当に辛そうに、当時のことを思い出しているのか言い辛そうに続けて言う。

「SAOで初めてにーちゃんと会ったときなんて、本当に冷たかったんだよ？」

「……本当？」

「うん。足手纏いはついてくるなって言われ事もあるし、ボクが倒れたときなんてくたばるなら街でくたばれって言ったんだよ？」

女の子に言う言葉じゃないよね？ と妹ちゃんは少しだけ怒っている口調で呟いて、

「嫌われていると思った。付き纏われて、僕のことを鬱陶しいと思っているんだって。でも今だからわかるよ。にーちゃんはボクに傷つけてほしくなかったんだよ」

迷わず、妹ちゃんは力強く断言してみせる。

そのまま確信を得たまま、彼女の口調は澱むことなく続けて。

「当時のにーちゃんのやってることは本当に危なかった。一人でSAOを攻略しようとしてた」

「……それは」

今なら私でもわかる。

数ヶ月とはいえ、私もVRMMOに本気で取り組んでいた。だからこそその無謀であることをわかってしまう。どう鼻肩目で見ても、一人では決して成し得る筈がない。むしろ一人で攻略を出来てしまっではならない。数人がかり、多いときは二桁の人数でダンジョンやレイドボスを攻略するのがVRMMOという世界だ。一人で踏破出来てしまつては、前提が破綻しているにも程がある。

妹ちゃんも私の気持を汲み取つてか、一度頷いて。

「うん、絶対に無理。でもにーちゃんは止まらなかった。ううん、止まらなかった。にーちゃんは一人で前に進んで行く。諦めればいいのに、にーちゃんは、絶対に、諦めなかった……」

安易に想像がつく。

きつと彼は顔を下げなかった。痛々しいほど真つ直ぐに前だけを見つめて、歯を食いしばり、何かもを押し殺し、諦めを塵殺し尽し、前進し続けたのだろうか。

そんな先輩だから私は――。

「だからボクはにーちゃんを一人にさせないように付き纏ったんだ。放っておけないから。目を離しちゃうと、にーちゃんが死んじゃうと思っただから……」

「それで先輩はどうしたの？」

「さっきも言った通りだよ。にーちゃんは冷たかった。ボクが付いていく度に、嫌な顔はするし、意地悪を言うんだよ。」

本当に酷いよ、と呟いて妹ちゃんは続ける。

「でも理由がなかったわけじゃないんだよ。最前線で攻略している自分につき合わせたら、付き纏っているボクが絶対に傷ついてしまう。だからボクを冷たくあしらって遠ざけてたんだ」

「それは……」

「うん、シノンと一緒にだよ。だからわかるんだ。今のにーちゃんはシノンにも、自分にも嘘をついているって」

彼女の表情が暗に語っていた。

それは悲しいことであると。誰もが幸せにならない結末になり、誰もが癒えない傷を負うことになる。

だが先輩はどうして、そんな手段を取ってしまうのだろうか。

妹ちゃんの言葉が真実であれば、このような状況になったのは初めてではない筈だ。現に、私も似たような状況を見たことがある。私が虐められて、彼が助けに入り、私以上の患者になることで標的を私から自分に逸らしていた。何度も何度も、先輩は自分を憎まれ役にし、周りへの被害を最小限にしてきたのだろう。ということはつまり、こ

れまで彼はそういった行動を何度も繰り返していたことになる。
なぜそんな、何度も自分から辛い状況へと進んでしまうのか――

「……どうして」

「えっ？」

「どうして、先輩は悪者になろうとするの?」

思わず私は疑問を口にしていた。

妹ちゃんは答えていいものか思案していると、

「――それしか他人を守れる方法を知らないからだと思う」

私の疑問に答えたのは妹ちゃんではなかった。

どこまで話を聞いていたのか、キリトの姿がそこにあつた。きっと彼も、私の後を追ってきてくれたのだろう。

キリトも私の視線に合わせるようにその場に座り込み胡坐をかいて、深いため息を吐きながら、呆れた口調で続けて言う。

「アイツは必要以上に他人を突き放そうとする。誰かが傷つくことを許さず、自分を傷つくことは是としている。幸せを放棄しているといてもいい。どうしてあんな歪んでいるのかはわからない。昔何かあつたのか、何もなかったのか」

そこで妹ちゃんを一瞥し、直ぐに私に視線を合わせて。

「まあ、どうでもいいけどな。あんな自分勝手なやつのことなんて」

「先輩が、自分勝手……?」

「勝手だろ。死なせないように、傷つかないように、俺達が頼んでもいないのにアイツは勝手に行動する。本当に進歩もない奴だよ」

呆れ半分、怒り半分。

そんな口調でキリトは先輩を評していた。自分勝手な奴であると、彼は本気で先輩のことをそう断じていた。

違う。それは違う。

先輩は勝手ばかりではない。

それは反射的な否定だった。私は考えるまでもなく、口を開きかけるがキリトに遮られることになる。

「だから俺達がアイツに出来ることは限られてくる」

「……先輩に、出来ること？」

私の力のなく、ポカンとした間抜けな問いに、キリトは頷いて。

「証明するしかないんだよ。お前が余計な真似をしなくても、俺達は大丈夫だってアイツに証明し続けるしかない」

そこまで言うと、彼は立ち上がり。

「シノン俺達がアイツと並び立つのが羨ましいといったけど、実はそれは違う、大きな間違いなんだ」

何が間違いだというのか。

私には本気でわからなかった。

だって貴方達は、先輩と分かり合えているじゃないか。私の欲しかった見解を、先輩と共有しているじゃないか。

それを並び立つと称さずに、なんと表現すればいいのか。

私の疑念が顔に出ていたのか、キリトは困ったような笑み浮かべて。

「だって、ほら。並び立ってっていうのは、つまり同じ敵を見てる、もしくは同じ視線を持つってことだろ？」

そこまで言ってキリトは私に問うた。

勿論、私はその通りだと素直に頷いた。しかしキリトは首を横に振る。つまりそれは、否定であった。

「違うんだよ。俺達は——戦っているんだ」

思いもよらない言葉だった。

戦っている、戦っていると。キリトは間違いなく、そう口にしていた。

それは誰と？

考えるまでもなくそれは——先輩と。

「アイツは俺達の言い分なんて聞かずに勝手に勝手に前に進む。俺達はアイツの行動が許せず必死に追いかける。ムカつくから、気に入らないから、俺達は対立する」

そこまで言うと、涼風のような笑みを浮かべてキリトは続けて言った。

「ほら、戦いだろ？ 誰一人として、相手の言い分に頷かないし、納得しない。となると、もう戦うしかない。曲がらないなら、譲らないなら、白黒ハッキリさせて止めるしかない」

「……………」

「君が本当にアイツを認めさせたいなら戦うしかない。俺達がやったように、力尽くでわからせるしかないんだ」

「私が、先輩と…………？」

考えつかなかった、選択肢すら現れなかった。

だっておかしいと思った。先輩を認めさせるために、先輩から見てもらうために、先輩と戦い、あまつさえ勝利するなんて、私には想像

もつかない。

無理だ。

そんなこと絶対に無理だ。

だって先輩は強い。私の全てである先輩に勝つなんて、そんなこと決して——。

「——シノン」

「……っ!？」

その声は光のように。

混乱の渦の中にいた私の心を現実世界へと引き戻した。

キリトは片膝をついて、座り込んでいる私に再び視線を合わせて問う。

「君の感情も何となく俺にはわかるよ。でも敢えて聞く、君にとっては残酷な問いかもしれない」

「……それは、なに？」

我ながら白々しいと思った。

聞くまでもない。キリトは口を開く。私が想像したとおり、私では考え付かない問いを朝田詩乃に投げかけた。

「今回だけじゃない。君はアイツと、これからも喧嘩し続ける覚悟はあるか？」

「まだ君の中に、アイツを振り向かせたいって気概が残っているか？」

私は、私は、私は——。

私は……。

第13話 BOB本選前 く当事者ではない者達く

「はあ、はあ、はあ……！」

人目がつかない路地裏を彼は走る。

薄暗く、下を見れば細かいゴミが散乱しており、道として使うには戸惑ってしまうが、彼は躊躇なく駆ける。額には玉のような汗が滲み出て、呼吸は不規則、頬を伝う汗を拭こうともしない。

そして立ち止まり、壁に体重を預けて、怯えるような眼で後方をしきりに気にする。

まるでその姿は獲物のそれだ。何者かに追われている側の人間。

「……っ！ くそっ……！」

ダン、と。

地団太を踏むように、彼は苛立ちを隠さずに一度地面を踏みつける。

順調だった。

これまでの彼は確かに順調だった。

とある「計画」を聞いて、面白そうだという理由で「彼ら」に協力していた。

いわばこれは狩りであった、一方的な搾取であった。あの世界で横行してたように、弱者から絞る取るように、甘い蜜を啜れるのなら何でもいい、と彼は浅はかな考えで「計画」に参加していた。

邪魔者なんていなかった。いる筈がなかった。それだけで彼は安心しきっていた。あの時は理不尽な化物——アインクラッドの恐怖に何もかもを台無しにされたが、此度はあんな埒外は存在しない。故に何も気にすることなく、彼は喜悦としていた。

「計画」とはつまりは殺しである。実行犯は彼を入れて三人。

オンラインゲームでキルされたと同時に、現実世界でも殺すという

もの。

いちいちゲーム内で殺してから、という流れは少々面倒、と彼は思ったが特に口を挟むことなく、それ骨子にし手段を煮詰めていく。彼は気分が高揚していた。

何せ人を殺すのは久しぶりであり、あの世界での自分に——ソードアート・オンラインでの自分に戻ったような感覚であった。

だからだろうか、彼は一人目の犠牲者のことを覚えていない。確かに名前はゼクなんたらであった筈、といった曖昧な記憶力であった。だが失敗したことは覚えている。致死量であった癖に、何故か失敗していた。この件で、協力者の一人——新川昌一は本気でキレており、彼の弟はそれ以降犯行に加担するのをやめてしまった。どうしたのか聞いても、昌一は途端に機嫌が悪くなり、はぐらかすばかり。

きっと二人の間に何かあったのだろう、と彼は察したが特に気にすることはなかった。失敗してしまったが、次があるし、何よりも証拠がないから何者かにバレることもない。世間ではソードアート・オンラインの再来と囃し立てることだろう。だがしかしだ。

昌一の弟が抜けたのは大きかった。

二人でも実行は可能であったが、やはり三人目がいるとこないとは効率も、危険性もまったく別物となってくる。

どうしたものか、と考えていたところに男は現れた。

ソードアート・オンラインで常に行動を共にしていた男。

今まで音信不通で、生きているのか死んでいるのかすらわからなかった。彼と、かつてザザと名乗っていた昌一を纏めていた。男の名前は——。

「——ッ!？」

突如、彼のズボンのポケットから着信音。

すぐに携帯を取り出して、何者がかけてきたのか確認すると、ホッと胸をなでおろして、慌てながら通話しようと画面をドラッグする。

「……っ、もしもし！」

『よう、気分はどうだい？』

焦燥している彼と比べて、電話口の主は余裕溢れる口ぶりであった。

それが癪に障ったのが、彼は若干の怒気を含ませた言葉で応じる。

「どうだいって、最悪だよッ！」

『だろうな』

電話の主の態度は崩れなかった。

男の反応が予想通りといった調子で特に気にすることなく、むしろどこか愉しんでいる調子ですらある。

まったく変わらない。

彼の記憶の男と、電話の主の態度。まったくと言っていいほど相違がなかった。

いつも余裕であり、笑みを浮かべ、人をくったような言動。しかし適当と言うわけではない。男の雰囲気には自信があり、言葉の端々には確かな経験があつた。人を率いる器、ある種のカリスマともいえる魅力が男には備わっていることを彼は覚えている。

だがそれでも、彼の冷静さが取り戻されるにはまだ足りない。

たかがカリスマでは、彼の置かれた現状が解決することなどありえないのだ。

「ヘッドどうすれば、俺はどうすればいいんだよっ！」

『落ち着けよ』

「落ち着いてなんていられるかよっ！　なんでバレルんだよ！　誰だ!?!　誰がチクリやがった!!」

『おい——』

ここで電話口の主の声色が変わる。

笑みを浮かべているような余裕の声から、威圧するかのような。言って聞かせるものではなく、命じて無理矢理にでも言うことを聞かせるような。威圧するような極めて冷たいそれに変わり、

『俺は落ち着けて言ったんだが?』

「——っ!?!」

電話越しだというのに、ゾクツ、と。

首元に刃をあてがわれたような、背筋が凍りつくのを感じる。

先程まで浮かべていた汗は冷や汗と変わり、彼は上手く言葉が紡げない。言語化できないから詰まっているわけではない。口にすることを放棄しているかのようだった。下手に口を開けば、殺されるかのような、そんな殺意を電話越しから伝わってくる。

それが数秒か、数分か、数十分か。

どれほど時間が経ったかわからない。

その沈黙を持って、先程の口答えを赦した事にしたのか、電話越しの男は打って変わって軽い口調に変わる。

『——よし、わかりやいいんだよ』

「……あ、ああ。ごめんヘッド。悪かったよ本当に」

『いいさ、いいさ。気にするなよ。お前の気持もわかる』

でも次はないぞ? と、暗にヘッドと呼ばれた男は語る。

それはそのままの意味であり、口答えをしたら自分がどうなるかはわからなかった。

逃げることも出来ない。

今の自分には、この男しかいないのだから。

「で、でも確かなの? 警察に俺達が死銃^{デス・ガン}であることがバレたって」

『ああ、確かさ。どこぞのアホがリークしたんだろう』

彼が焦っていたのはそれだった。

絶対にバレる事がないと思っていた犯行。それがあと少しで、後一歩で自分達の犯行であると詰められている。

最初は彼も質の悪い冗談であると思った。

しかし直ぐに事実であると改めさせられる。それも新しい協力者である男——電話越しに話しているヘッドと呼ばれる男に。

裏で菊岡という通信ネットワーク内仮想空間管理課の人間が動いていること、協力者としてはじまりの英雄がいること、そして容疑者に新川兄弟と彼が捜査線上にあがっていること。

なぜ、どうして、なんで。

どこで間違えたのか、誰がへまをしたのか、何者が下手を打ったのか。そしてどいつがそんな情報を流したのか。頭によぎるのはそんなことばかり。

感情のまま、思わず彼はその場で地団太を踏む。手に持っていた携帯すら地面に叩き投げようとすらしながら。

「くそっ！ クソクソクソクソ！ 誰がそんなことしやがったんだ！」

『おいおいおいおい、ジョニージョニー。今はそんなことどうでもいだらう』

荒々しく息を切らして、ジョニーと呼ばれた彼——金本敦は冷静を取り戻していく。

その通りだ、と。今はそんなことどうでもよかった。問題はどうかやって今の現状を逃げ切るか。

そこでふと疑問が金本の頭によぎった。

「でもさ、ヘッド」

『なんだ？』

「ザザには何も言わなくて良かったの？」

ザザ、つまりは新川昌一の存在。

今この場にいるのは金本ただ一人。昌一の姿は影も形もない。

この場にいらないということとはそういうことだ。電話越しの男は、昌一に危険が迫っていることを伝えておらず、金本にのみ伝えたということになる。

昌一は今頃ガンゲイル・オンラインにて「アインクラッドの恐怖」や【絶剣】。そして【はじまりの英雄】に執着していることだろう。【アインクラッドの恐怖】には二度と関わりたくないが、【絶剣】派別だった。金本としても、【絶剣】の泣き叫ぶ姿は見たいと思っている。だが現状が許さない。【絶剣】に時間をかけて捕まるくらいなら、金本は逃走を選ぶくらいには冷静だった。

それは人並みの感性といえる。リスクに対してリターン伴っていない程度には狂ってはいなかった。

昌一に対しても同じであった。

仲間、と呼ぶには清い仲ではない。文字通りの意味で共犯者といえる間柄であり、いざとなれば見捨てる程度の絆であるものの、仲間意識がまったくないといえれば嘘になる。

だからこそ尋ねた。

恐る恐る、おずおず、と。電話越しの男に金本は問う。
しかし、

『良いや』

対する男の口調は軽い。

どうでもいいと言わんばかりの口調で男は続けて。

『あの野郎は言いつけを守らなかった。俺がアレだけ言ったのに、な』

言いつけ。

つまりは【アインクラッドの恐怖】手を出すことを許さない、とい

う制約。それを昌一は破った、だから見捨てる。電話越しの男の意思は揺るがなかった。

『これは教育だ。俺の言うことを守らねえとどうなるか、ってな……』

それに、と言葉を区切り男は続ける。

『お前もそっちの方が都合がいいだろう?』

「……」

つまりは生贄。

死銃^{デス・ガン}として行動しているのなら、周りは昌一だけに意識を向けて、金本が逃げ切れる確立が上がってくるというもの。

今更、昌一に知らせたところで、直ぐに動くとは限らない。時間が有限である。昌一の逃げる準備を待っている瞬間にも、捜査の手は刻一刻と金本まで確実に伸びてくる。

『俺はどっちでもいいんだぜ? 俺の言うとおりに動き、お前だけ逃げ切るか。ザザと一緒に捕まってムシヨでクソ不味い飯を食うか』

男にとって、金本の選択など本当にどうでもいいのだろう。

急かすわけでもない。諭すわけでもない。ただどうするか、問いを投げるだけだ。まるで悪魔のようであるが、金本にとって救いの手であり、それに縋るしか道はない。

大人しく捕まり罪を償うなんて選択はない。

「……本当に」

『ああ?』

「本当にヘッドの言うとおりにすれば、俺は捕まらないんだよな?」

縋るように、恐れるように、そうであってほしいという願いを込めて、金本は尋ねる。

悪魔は気軽な口調で、余裕綽々と、愉悦に満ちた口調で。

『おお、安心しろよ。お前は俺が守ってやるよ』

——何せお前は、使いやすい駒だからな。

.....
.....
.....

帰還者学校 昼休み

食堂にて二人の学生が向かい合わせで座っていた。

二人とは男女。一人は黒髪の少年、もう一人は紺色のボブカットでカチューシャをつけている。

この二人が顔を合わせて、食事を共にすることは珍しくもない。何度も共に行動をしている姿は見ているし、談笑している姿も見ることがある。故に特に珍しくもない光景だからか、二人はガヤつく食堂の中に溶け込んでいた。

だが奇妙だった。

帰還者学校の食堂のメニューはありふれた品物。味も特に不味い、というわけではない。むしろ美味しい部類といえるだろう。

しかし二人は浮かない表情。黒髪の少年はどこか心ここにあらずといった調子でカレーを食し、ポブカットの少女は考え事をしながらラーメンを啜っていた。

二人の間に会話は無い。

重苦しい空気、とまでは言わないが、どこか居心地の悪い空気が流れていた。

そこでふと、少女はおずおずと口を開いた。

「……シノン、どうするつもりなのかな？」

「……ユウキはどうなると思う？」

「うーん」

ユウキと呼ばれた少女——紺野木綿季腕を組みうんうんと頭を捻り。

「もしシノンがボクだったら、戦うことを選ぶね」

「ん、そうなのか？」

彼女の返答に意外そうに応じるが、よく考えれば彼女らしい返答といえるものであったことを少年は思う。

どこか好戦的で、他人とぶつかることに対してあまり躊躇しないのが紺野木綿季という少女の感性であった。ならば確かに、と。戦うことを選んだ木綿季に少年は納得する。

「うん。ぶつからないと、分かり合えないこともあると思うし」

更にその通りである、と少年は思わず頷いてしまった。

ぶつかり合わない、お互いの主義主張をぶつけないと、理解し得ないことがあることは少年が痛いほど理解していたから。

でも、と木綿季は表情を曇らせて。

「シノンもボクと同じ考えを持っているわけじゃないと思うから……」

「戦えない可能性もあるよな」

「うん」

もどかしく思いながら、黒髪の少年——桐ヶ谷和人は皿に残っていたカレーをスプーンで掬い、口に運びながら。

「アイツの言い分もある程度は理解できる」

そういうと和人はもぐもぐ、と。

口に運んだカレーを噛みながら考える。

頭ごなしに否定している訳ではない。

和人とアイツと呼ばれた人物は長い付き合いだ。何度も意見を交え、何度もぶつかり合い、何度も喧嘩してきた仲だ。

「アイツ」が考えなしに他人を傷つけるわけではないということもわかっていて。つまるところ「アイツ」は——。

「要するに、大事だから巻き込みたくない、ってことなんだろうけど……」

「納得できない、ってことだよな」

「当たり前だ。アイツはそれで満足かもしれないけど、残された方はどう思う？ その辺り、アイツは疎かなんだ。少し考えればわかるだろう」

つまりはそういうことだ。

そこが和人の納得が言っていない主張である。

自分を勘定に入れてないような、その後のことなどおかまいなしに、「アイツ」は突き進む。

病的なまでに最短距離で突き進む姿は、昔も今も痛々しく見える。どうしてそんな生き方が出来るのか、何故そこまで歩む速度を緩めないのか、そこだけは和人も理解が追いつかなかった。

「にーちゃんは考えれないんだよ」

「……どういう意味だ？」

「うーん……」

木綿季はそういうと、少しだけ考えて直ぐに。

「んー、ごめんね。アスナならハッキリといえると思うんだけど……」

「仕方ないさ」

上手く言葉に出来ない彼女に対して、ため息混じりに呆れた口調で和人は続けて。

「捨くれているアイツが何もかも悪い」

「そういうわけじゃない、って言いたいんだけどダメ？」

「ダメ」

「アイツ」の義妹である彼女も、「アイツ」の幼馴染である彼女も、どこか「アイツ」に甘い。ならばせめて、自分だけでも厳しく対応せねばなるまい。

だからそのダメ。和人はきっぱりと、清清しいほどハッキリと、否定してみせて雑な口調で和人は言った。

「まどろこしいなあ。俺達がアイツをぶん殴って解決つてならないか？」

「いつから、力が全てを解決する系修羅の国育ちになったのさ？」

「ダメかな？」

「ダメでしょ」

今度は自分が否定され、そうかダメか、とぼんやりと考えていると、木綿季がジト目で軽く非難するような口調で口を開く。

「キリトがにーちゃんを殴りたいだけじゃないのー？」
「バレたか」

隠すことなく、和人は肩をすくめて。

「ユウキはどう思うんだ？」

「にーちゃんのこと？」

「そうそう。正直に言うとな、俺はムカついている」

そうだなー、と木綿季は少しだけ考えて。

「ボクもシノンが可哀想って思う」

でもね、と言葉を区切り困ったような表情を浮かべて。

「にーちゃんの気持もわかるから、複雑な気持ちってところ」

「そうか」

和人もわかっている。

悪戯に「アイツ」が他人を傷つけるわけがないことは和人もわかっている。そして同様に、「アイツ」が抱えている得体の知れない底なしの闇も、和人は認識していた。

その闇がある限り、「アイツ」の歩みを止めることはないだろう。そしてその歩みを見過ごせるほど、自分も「アイツ」の周囲にいる者達も、人間が出来ているわけではない。放っておけないからこうして自分は苛立ち、見捨てることが出来ないから「アイツ」の義妹も困っているのだ。

そのことを踏まえると、自分の問いは意地悪だったのかもしれない。

和人は思わずに罰の悪い顔になってしまいなから謝罪を口にしていた。

「なんかゴメンな」

「ううん、にーちゃんもにーちゃんだから。どれだけ大切にしているも、傷つけて突き放すやり方は間違ってるよ」

うがー、と当時のことを思い出しながら、木綿季は憤りを隠すことなく和人に力いっぱい、小さな身体で抗議してみせる。

「ボクなんてそれやられて、凄く凄く、すつごーく悲しかったんだから!!」

「ユウキも突き放された勢だったか……」

謎の仲間意識をもちながら、和人は抗議を続ける木綿季を横目で捉えながら、遠い眼でぽつりと呟く。

「アイツが吠え面をかくかどうかは、シノン次第ってことか……」

第14話 B O B本選前 く当事者達く

12月14日 AM10:45

ガンゲイル・オンライン 路地裏のバー

現在のガンゲイル・オンラインは熱狂に包まれていた。それもその筈。何せあと数時間後にはB O B本選が始まる。

表通りは人ばかりで大変なことになっていることだろう。何者が優勝するのか、誰が注目されているのか、そんな話題が尽きない。しかしそれも今だけだ。

B O B本選が始まるころには、誰も彼もが足を止めて巨大パネルに映し出されるB O B本選の映像を見上げることだろう。

そんな中、人の喧騒とは隔離されたような路地裏にひっそりと構えているバーにて、一人の人影があった。

外の熱狂とは裏腹に、その人物の雰囲気は冷め切ったそれだ。

非日常の方に騒がしい外には一切意識を向けずに、バーの中にある椅子に腰掛けて、一枚の紙切れを片手に持ち睨み付けている。

姿形は幼い少年にも見えるし、年端もいかない少女にも見える。まるで迫力がない、とは言い難い。気安く話しかけることすら許さない。そんな原始的な恐怖を彷彿とさせる雰囲気、その人影は纏っていた。

睨み付けている一枚の紙切れ。

それはB O B本選の参加者名簿に他ならない。

人影には覚えがある名前があった、無視できない名前もあった、興味注がれる名前もあった。だがそれらを一切無視する。それよりも優先すべき名前を人影は見つけたからだ。

——シノン。

本選で勝ち抜いた30人の名簿の中に、突き放した後輩の名前を見つけた。

その名前を、穴が開くような眼力で、人影は見つめる。

そこへ――。

「らしくないね？」

声をかける人物が一人。

人影が放つ剣呑な雰囲気などおかまいなし。アタシには関係が無いといわんばかりに、気軽に気安く馴れ馴れしく、人影に声をかける。顔を上げる。

そこにはありえない人物がいた。

思わず眼を見開く。何でオマエがここにいるのか、どうしているのか、どうやって。頭によぎるのはそんな言葉達。

戸惑いは言語化すること叶わず、混乱する頭のまま声を上げる。

「……いいや、待て。ちょっと待て。は？」

「えへへ、来ちゃった」

「来ちゃったじゃねえよ。なに軽く世界の壁越えてんだオマエ？」

えへへ、と笑う少女。

少女と言う割には、これでもかと強調する両胸。さりとして、大人な女性と言うにはまだまだ経験不足なあどけない表情。

紫色の髪の毛、黒と紫を強調としたボディラインがハッキリとした格好をした彼女の名は――ストレア。

思わず人影――モブは頭を抱える。

この世界にはいない人物を目の前にした人間は、こうなってしまうのかと自身を客観視し、どうにか落ち着きを取り戻した彼は改めて問いを投げる。

「軽く越えられるもんなのか？」

「ちよちよいつて感じで、やって来れちゃった」

「ンでオマエがちよつとびっくりした感じになつとんだ？」

困ったねえ、と笑うストレアに彼はため息を吐いた。
そして同時に思い出す。

コイツはこういうヤツだった、と。自分達のようなプレイヤー側ではなく、電脳世界の住人側のAIである。ならばこうして、世界の行き来など容易い、のかもしれない。

それ以上は考えようがない。門外漢の自分にとってこれ以上は考えただけ無駄であると切り上げて、改めてストレアに尋ねた。

「それで何の用だ？」

「様子を見に来たんだよ」

椅子に座る彼を足の先から、頭のとっぺんまで観察して、困った笑みを浮かべてストレアは続けた。

「重症みたいね？」

「どこがだ。いつになく絶好調だっつーの」

「どうかなー？」

そこまで言うのと、彼女はモブユークの隣に座り、彼を見ながらニヤニヤと笑みを浮かべて。

「へえ？」

対する彼は不機嫌なそれだ。

そこか余裕のあるような、見透かしたような笑みが気に入らないように、苛立ちを覚えながら口を開く。

「なんだよ？」

「初めて見るなあって。アナタもそんな顔できるんだね？」

「何が言いたいんだオマエ？」

「後悔してるんでしょ？」

心に突き刺さる感覚。

しかしモブは白を切るように、ストレアを睨み付けながら言う。

「ハナシが見えねえんだが？」

「シノンって人を突き放したこと、後悔してるんでしょ？」

思わず反射的に否定しようとして口を開きかけるが、待てよ、と。無視できない事実には彼は困惑しながらも問う。

「待て。オマエどこから見てた？」

「見てないよ？ 会話ログと音声ログを見て聞いただけ」

「いよいよ何でも有りかオマエは……」

プライバシーも何もない。

その場になくても、隣に座っているAIは見聞きすることが出来るという事実には、彼はため息を吐く。独り言の一つ、ぼやきの一つでもすれば、聞かれるということになる。下手なことなんて言えたものじゃない。

とはいっても、彼女には無駄なのかもしれない。

何せソードアート・オンラインにおいて、文字通り一心同体であったのだから。自分が何を思っているか、どんなことを考えているか、行動原理や思考パターンを記憶している彼女にとって、手に取るように明らかなのだろう。

現にストレアは揺るがない。

答え合わせをするかのように、自信に満ちた表情で彼を見つめている。

「それでどうなの？」

「うるせえな。後悔なんざするかよ」

「嘘だー。なんかいつもより暗いし、いつもより歯切れ悪いし、調子も良くなさそう?」

「オレに聞くな」

本当に調子が狂う。

妙に勘が鋭い幼馴染とはまた違ったやり辛さ。見透かされているような、居心地の悪さを彼は感じていた。

「まあまあ、話してみてもよ。楽になるかもよ?」

「おいおい、妙なことを口にしてるぞオマエ。まるでメンタルケアするヤツみたいじゃねえか」

「……一応、あたしってメンタルヘルスカウンセリングプログラムなんだよ?」

「そういえば、そういう設定だったなオマエ」

「設定じゃなくて! 事実なんですけど!!」

もー! つと手足をバタつかせて講義を試してみせるストレアを横目にどうするか考える。

このままはぐらかし続けても無駄であろう。

ユーキ
モブの本音を聞こうと付き纏い、最悪B o B本選が開始される時間まで付き纏われるかもしれない。それは良くない、普段であればノイズ程度に聞き流す余裕があるが、今の彼は心に余裕がない。それは本人が一番自覚している。

ともなれば、諦めて正直に口にする方が一番なのかもしれない。不服であるが、心の安寧のためにも、ぽつり、と口にした。

「別に後悔してる、ってわけじゃない」

「となると、自己嫌悪ってやつ?」

「……」

思わず黙ってしまった。

改めて言われると面白くなく、言い当てられるのはあまり気持が良

いものじゃなかった。

本当に調子が狂う、と言わんばかりに忌々しげに舌打ちをして。

「……やり方は間違ってる。どんな理由があれ、他人を傷つけるのは正しいやり方とは言えない」

その通りだ。

こんなこと間違った選択であることは彼本人が一番理解している。

だがそれでも――。

「それでも、だとしても。……取り返しのつかなくなる事態になるよりは、遥かにマシだ」

脳裏に過ぎるのは、自分が助けられなかった者達の顔。

助けたかった叔父の顔があった、自分の身を犠牲に救ってくれたストレアの顔があった、名前もしらない人達の絶望に染まった顔があった。そして――両親の姿があった。

手を伸ばした。

助けたかった、守りたかった。それでも両手から溢れ出してしまった。必死になったところで、容易く茅場優希の両手からそれは漏れ出す。

故に、マシであると断じる。

いくら嫌われようが、憎まれようが、死なれるよりはマシであると。生きていてくれるのなら、それだけでいいと。茅場優希は結論付ける。

「あの死銃はどうかなる。アイツが処理することだろうさ。今の状況も願ったり叶ったりだ。標的がオレ達絞られてるなら問題ねえ。あんなカスに負けるほど、オレの妹もアイツも弱くない」

その言葉には信頼があった。信用があった。絶対な確信があった。自身を打ち負かした英雄たるアイツは負けないし、どれだけ突き放

しても後を追いかけてくれた妹であれば、あの程度の輩に負ける筈がない。

しかし、

「だがアイツは、朝田はそうか？ アイツらのように動けるのか？ 巻き込んで、最悪なことになったら、それこそどうする」

それに、と言葉を区切り。

「アイツは今まで頑張ってきた。菌を食いしばって、辛いことにも耐えて、それでも精一杯生きてきたんだ」

どこか含みのある言い方であるとストレアは思った。

まるでシノンという少女の過去を知っているかのような口ぶり。

シノンに何があったのか、どのようなことを経験をしたのか、改めて説明するつもりはないのか、彼は続けて言った。

「これ以上頑張る必要なねえ筈だ。命を張って、オレ達に付き合わなくてもいい筈だろ」

そして、暗に語る——もう誰かが、目の前で死なれるのはごめんである。

今に思えば、彼はずっと考えていたことをストレアは思い出す。

ユウキとキリトが意見を交えているときも、一人ですっと考えていた。

思案するのは、死銃の正体なのではなかったのだろう。どうやって後輩を巻き込まないか。その一点のみに思考を絞らせていた。死銃が何者なのかなどどうでもよく、ただ後輩を安全な場所へ。それだけを考えていたのだろう

しかしついで思いつかなかった。当たり前だ。今まで彼はこのやり方しか知らない。このやり方しか選んでこなかった。ならば此度

も、そういつた選択になるのは火を見るよりも明らかだ。

どれだけ変わろうが、そこだけは変わらない。己を悪に見立てて、何としても助けようとする。それだけしか、彼は知らない。

だから後悔はせずに、ひたすら彼は自己嫌悪を繰り返す。

こんな最悪で最低な選択しか選べない自分自身を憎悪し続けることだろう。

ストレアには何も言えない。

間違っていることだけはわかる。だが彼の過去を見てしまったストレアには、彼が誤った選択を取るのも理解できてしまうからだ。

傷ついてほしくないから、突き放してでも守ろう、と。矛盾に満ちた彼の行動原理が理解できてしまう。

彼女は複雑そうに顔を伏して。

「でももしかしたら、今回のアナタの対応は正しいのかもしれないよ？」

「どういう意味だ？」

訝しむ表情でストレアに顔を向け、ストレアは気まずそうに目を泳がせて。

「実はね、死銃デス・ガンの正体探ってみたの」

「オマエ、大丈夫だったのか？」

「うん」

勝手な真似をしたことを咎めるのではなく、まず無事であるか確認するモブユーキに対して、どこか嬉しそうに笑みを浮かべるが、直ぐに表情に影を落としストレアは続ける。

「個人情報を見ちゃおうと思ったら、なんか妙な奴に邪魔されたんだよね」

「妙なヤツ？」

「アレは多分だけど、人じゃなかった。黒い霧みたいなの、モヤみたい

な。あたし達と同じっていうのかな？」

妙にハッキリとしない物言いであった。
ストレアらしくない、と言ってもいい。

「随分と歯切れが悪いじゃねえか」

「んー、どこかで見たんだよねえ。どこだったかなあ？」

「一番大事なことじゃねえかそれ？」

「もう必要が無いと思つて、記憶容量から消したんだと思う。多分ね」

「わざわざ消すことでもねえだろうに」

「えへへ、忘れるとか人みたいだね？」

「何で嬉しそうなのオマエ？」

深く深く、これまた深く。

彼はため息を吐いて、何者かわからない気配に意識を向けた。

何者なのか、死銃に協力するメリットは何なのか、何が目的なのか。
考えたところで材料が少ない以上、これ以上の推理をするのは無駄
だろう。

だが、

「どちらにしても、だ。死銃カスのバックに何者かがいるつてことがわ
かったことはでけえ」

「悪意はなかった感じだけどね。ただ邪魔をしたかっただけみたい」

「ますます意味がわからねえな。死銃カスが何らかの合図を出して、その
影が殺しているとかそういうのでもないのか？」

「多分無理。アミユスフィアはナーブギア違つてセーフティ機構があ
るし、人の脳を焼けるほどの出力を出せないから、影が何かしたとこ
ろで関係ないよ」

何か出来るとしても、パソコンにウイルスを送り込むくらいじゃな
い？ と、軽く言うストレアを意識の端に捕らえてモブユキは黙り込ん
だ。

可能性は考慮していた。

死銃に協力者がいるかもしれないことは考えていたが、まさかストレアやユイのような電子の世界に生きている住人が協力しているとは思わなかった。

しかしこれで合点もいく。

どうして死銃が“はじまりの英雄”や“絶剣”、そして“アインクラッドの恐怖”の存在を知っていたのか。恐らくその影に聞いていたのだろう。

——つてことは、オレ達のこと知っている野郎なのか？

——逆もありえるだろう。

——その影を、オレ達は、知っている……？

「ねえ？」

前に人の気配。

見上げるとストレアはどこか心配そうにモブユーキを見下ろしていた。急に黙り込んだ彼を心配したのだろうか、それともまた別の理由で危惧しているのか。ストレアは表情を変えないまま。

「シノンって人がそれでも、B o Bに参加してきたらどうするの？」

「ありえねえ」

きつぱりと、否定する。

「わからないよ？」

「わかる」

彼の答えは変わらない。

ありえない、と口にしながら。

「アイツは一人じゃ立ち上がれない。絶対な」

.....

同時刻 都内

あと数時間でガンゲイル・オンラインでB o B本選が始まる。だといふのに、私はログインすらしていなかった。

本来であれば、装備のメンテナンス。決戦となる戦場に、どんなギミックがあるのか、何があるのか。参加者がどのような人物達で、何を得意とし、何を不得意としているのか。勝利するためにも、ありとあらゆる準備、情報収集に奔走しなければならないのに、私は行なわなければならない必要最低限のことすらも怠っていた。

そう、勝つために、行なわないとならない。

認めよう。私にとってB o Bなんてどうでも良くなっていた。

理由がなくなったのだ。

あのとときから、先輩に否定され、拒絶されてから、私に戦う理由なんてなくなっていた。

今まで私が、ガンゲイル・オンラインで戦っていたのも、戦場に向いていたのも、全ては先輩の隣に立つたため。そのための準備のため、強くなった私を見てもらうため、対等になるために私は戦ってきた。

しかし先輩は言った。

必要が無いと、ずっと後ろについて回られて迷惑だったと、足手纏

いはいらないと。

今までやってきたことを否定され、無駄であると突きつけられてしまった。

先輩のことだ、何か理由があるのかもしれない。

そう思ったかったが、私にはそんなことを思える強さすらないみたい。

先日の光景を思い出しただけで動機が激しくなり、あのとときの先輩を思い出しただけで眼から涙が溢れ、絶望が心を支配していく。

ならば、と。

先輩と過ごした思い出の地へと足を運び、先輩の気持を怒りで満らし、行動原理にしようとした。

怒りや憎しみは単純な理由となってくれる。

もしかしたら、弱い私でも、怒りや憎しみを理由に何かしらの行動に移せるかもしれない。

——ダメね。

初めて救ってくれた小学校の中庭にいった——そこで私は助けられた。

初めて会話した小学校の図書室にいった——そこで会話らしい会話をした。

一緒に帰った通学路へ足を運んだ——いつも帰りたくないと思ったことを覚えてる。

道草を食って公園に行ったこともあった——ずっと続けばいいと思っていた。

先輩の前に住んでいたアパート——一緒に住めたらいいのにな、って。

先輩が入院していた病院——帰ってこないんじゃないかって恐かった。

高校の校門前——先輩がまた助けてくれた。

その後に行ったアーケード街——帰ってきた先輩と歩いて嬉

しかった。

初めて先輩とのデート——買ってくれたイヤリングはいつも身に着けている。

私の思い出の場所。

先輩と過ごした掛け替えのない時間。

足を運ぶ度に先輩の顔を思い出し、心が満たされていくのを感じる。

ああ、本当に。本当に私は——。

——本当に、先輩のことが好きなんだ。

——あんなことを言われたのに。

——あんなに拒絶されたのに。

——やっぱり、私は、先輩を好きなんだ……。

無意識に、私は耳つけていた三日月型のイヤリングを触っていた。もはや今となつては、私と先輩の繋がりがあるもの。幸せだったあの日々を思い出すものを、私はいつの間にか触っていた。

怒ることなんて出来ない、憎むことなんて出来ない。

私にとつてあの人が出来なかった。あの人がいれば何もいらなかった。他者との繋がりも、他人との絆も、私には必要がない。私にはあの人がいれば、それだけで十分だった。

どこで間違えたのか、私の何が悪かったのか。

考えても考えても、答えは見つからない。

そこでふと思い出す。

桐ヶ谷くんの言葉を、妹ちゃんの言葉を、思い出した。

『今回だけじゃない。君はアイツと、これからも喧嘩し続ける覚悟はあるか？』『まだ君の中に、アイツを振り向かせたいって気概が残っているか？』

それが私にとって、どれだけ難しいことなのか。どれだけ苦難なことなのか。

しかしそれが出来たから、桐ヶ谷くんも妹ちゃんも篠崎さんも、隣

に立つことを認められたのだろう。

無理だ。私には出来ない。絶対に、無理だ。

——…あの人もそうなのだろうか。

——先輩の幼馴染の、あの人も……。

——先輩と喧嘩し続けて、認められたの……？

絶対にありえない。きっと喧嘩なんてしたところがないのだろう。

あの人はズルい。何もせずに、先輩の隣に立っている。いつも笑顔で、幸せそうで、先輩の隣にすることが当然のようにしている。

私が欲しかった、一番欲しかった、先輩の笑顔を、あの人は向けられている。

嫌な女だ。

あの人がじゃない。私がだ。

何て醜い嫉妬だろうか。本当に自分が嫌になる。

立ち止まる。

目的地に着いてしまった。

先輩との最後の思い出の地。

路地に面した場所にその喫茶店があった。名前は——ダイ
シーカフェ。

ここが最後。

これで何も心に生まれなかったら、先輩の言うとおり、BOB本選
は棄権する。

深呼吸。

一度大きく息を吸って深く吐く。

先輩はいない。今日が本選だ、バイトなんてしている場合じゃない
筈だ。いるのはきつと店長さんとレヴィ。先輩はいない、きつといな
い。

意を決してドアを開ける。

木材で作られた内装で、店内の角にはジュークボックスが置かれて
おり、いい意味で手作り感のある内装。

いつもどおりの光景が広がっていた。だけど――。

「あ……」

思わず声をもれる。

カウンター席に座っている人を見て、目を見開いた。

そこにいたのは――、

「あっ、こんにちわ。今ドリユーさん……じゃない。店長さん出掛け
てて……」

今、最も私が出会いたくなった人がそこにいた。

その人は、その人の名前は――結城明日奈さん。

先輩の幼馴染で、先輩の大切な人――。

第15話 BOB本選前 く幼馴染と後輩く

「クソがッ!!」

都内にあるマンションの一室にて、叫び声にも似た怒鳴り声が響いた。

床を見れば物が散乱しており、怒鳴り声を上げた主が暴れていたことは明らかだ。

彼は肩で息をしながら、床に落ちていた携帯を手取る。

連絡は、ない。

誰からも通知は来ておらず、着信も鳴ってない。

それを確認した彼は、怒りに身体を震わせて、再び手に持っていた携帯を床に叩きつけてしまった。

苛立ちは収まることはない。

唯一散乱していないベッドの上にドカッと座り込み、頭をかきむしる。

「どうして、連絡がない。ジョニーもヘッドも、何をしている……？」

数日前から、彼の協力者と連絡が取れない。

逃げた、とは考えにくい。いいや、考えたくないといった方が正しいのかもしれない。今まで自分達のしてきたことが明るみに出れば、破壊が約束されている。とてもではないが、自首しに行くとは考えにくい。

しかしそれはジョニー・ブラックに限つてのことだ。果たしてヘッドと呼ばれたあの男は、こちらの常識が通じる相手だろうか。

わからない。

長い間あの男に従っていたものの、終ぞ理解するには至らなかつた。あの男が何を思い再び自分達の前に現れ、そして消えたのか。今となつては何もわからない。そしてこのままでは、死銃計画も満足に

執行が出来ないことも。

彼はますます苛立ちを募らせる。

煮えたぎる怒りのまま、衝動のまま、また物に当り散らそうとするが。

「――」

携帯から着信音が鳴り、動きがぴたり止まる。

ゆつくりとした動作で、床に落ちていた携帯を拾い上げて、画面を見る。

見知らぬ番号だった。

彼は応答し、耳に携帯を当てて。

「誰だ？」

『あー、君が新川昌一君かな？』

変声期を使っているからか、男なのか女なのか判断に難しい声だった。

彼――新川昌一は訝しげに。

「お前は誰だ？」

『ああ、それとも赤眼のザザって言うべき？ それとも――
死銃』
デス・ガン

「っ!？」

燃えていた憤怒が、冷えていくことを感じる。

心臓の高鳴りを押さえ、搾り出すような声で。

「どうやって俺のことを……」

『他人を調べるのが趣味って人をお願いしてね。引く趣味だよねえ、わかるよ』

電話越しの声はとても楽しそうな声のまま。

『警戒しないでほしいな。誰も君の事をチクったりしないよ』

「何が目的だ」

『いいねえ、話しが早い。B.O.Bで私と手を組まない？ 何だったら、君の犯行を手伝ってもいい』

「なんだと？」

突然の申し出に頭が追いつかない。

犯行の手伝いとはつまりはそういうこともするという。何が目的なのか判断が出来ないからか、昌一は警戒心を強めて。

「何でお前と手を組まないとならない？」

『共通の敵がいるからさ』

「敵？」

『——アインクラッドの恐怖、つて言えばわかるよね』
「なっ!!」

聴きたくない言葉。

憎悪している “はじまりの英雄” とは違う意味で、聞きたくない単語に、昌一は身体が固まる。

電話の主はそんな昌一を知らずに、極めて軽い口調で言う。

『君、アレを殺したいんでしょ？』

「……俺一人で充分だ」

『アツハハハハ!! いいや、無理でしょ!』

声の主は暗に語った。

お前では無理だ、と。 “アインクラッドの恐怖” には絶対に叶わな
いと。

それだけで、自分が侮られていると認識するには充分だったのか。憎悪ともとれる声色で昌一は口を開いていた。

「何がおかしい？」

『あ？ マジで言ってたの？ ごめんごめん、冗談だと思った』
「……」

『でもさ、無理だって君が一番知ってるんじゃない？ アイんクラツドの恐怖に叩きのめされた君なら』

その声の主はどこまで知っているのか。

確かに、昌一は過去に、ソードアート・オンラインで「アイんクラツドの恐怖」に相対し、プライドと共に叩き潰されてしまった。その傷跡は深く、今も当時の「アレ」を思い出すだけで身体が震える。まるで人と対峙している気になれなかったのは、今でも覚えている。人並み外れた力行使する暴威。余計な会話もせず、ただひたすら作業するように、雑草を筆り取るように、圧倒的な力で処理していく姿。今でも悪夢として夢に見る。

次は勝てる。

あのときよりも、確実に弱くなった。

ならば勝てる、次こそは殺せる。そう言いたくても口に出ない。助け舟のつもりなのか。

返答がない昌一に、電話の主は明るい口調で言う。

『悪い取引じゃないと思うよ？ 私はアイツを殺したい、君はアイんクラツドの恐怖を殺せる術を持っている。お互いにメリットがある』
「……そつちが裏切らない証拠は？」

『私は君を一方的に殺せる手札があるんだよ。選べる立場だと思う？』

つまりは、手を組まないと死銃計画をバラすということ。

悪魔の契約ようだった。拒否できないのを知って、こうして交渉に

持ちかけるなど悪魔以外に何とも言えるだろうか。

もはや、昌一に選択肢などない。この悪魔に縋るしかないのだから。

電話の主や『インクラッドの恐怖』に比べたら自分の感性など可愛いものだと思いますながら、昌一は応じる。

「いいだろう、手を組もう」

『よかったー。短い間だけど、よろしくね』

「待て」

『なに?』

「お前は何者だ?」

『ああ、言つてなかつたけ?』

『はじめまして、笑う棺桶ラフィン・コフィンのザザ。私はガンゲイル・オンラインのインクラッドの恐怖。アレの偽者だよ』

.....

12月14日 PM13:05

都内 ダイシーカフェ

ここに通うようになってから、ここまで静かな店内は珍しいと思っ

た。いつもは賑わいを見せているダイシーカフェ。行列が出来ている、
とまではいかないものの、私が来ていたときにはかなりの賑わいで

あつたことを覚えている。屈強な体格の店長が調理をし、小さな少女が注文を取ろうと右往左往と急がしそうに、そつなくこなしていく普段は目つきの悪いアルバイトも営業スマイルで接客。

それが私が知るダイシーカフェであつた。

だが今はそうではない。

店長さんも席を外しており、いつも手伝っている幼女——レヴィの姿はなく、ましてやいつも愛想笑いを浮かべているアルバイトの姿もない。

あるのは私と。

「……」

気まずそうに座っている女性客——結城明日奈さんだけだつた。

きまずそう、というのは私の主観。

彼女が本当は何を思っているのかわからない。でもきつと気まずいと思う。

私達は何も言わずに、何も語らずに、カウンター席に座っていた。隣同士ではない。一個席を空けて、私達は座っていた。

きつと私もテンパっていたのだろう。

折角、彼女が店長さんがいないことを教えてくれたのに、それに反応することなく店内へと進み、あろうことか彼女と肩を並べるようにカウンター席に座ってしまった。

会釈一つでもするべきだったと、後悔しても遅い。

私も非常識であるとは思うものの、頭が真っ白になっていた過去を振り返ったところでどうしようもなかった。

何せ考えてもいなかった人物がそこにいたのだ。先輩のことしか考えていなかった私にとっては、不意打ちにも程がある。

横目で彼女を見る。

まつげが長く、綺麗な顔をしていると同時に、携帯を弄る彼女の横顔はどこか憂わしげな表情を浮かべていた。

どうしたのか、と聞けるほど私はコミュニケーション能力に高い方ではない。

聞いたところで私に解決する力はないし、踏み込んでいけるほど私は彼女と仲が良いというわけでもない。

となれば、私の考えることは今後のことだ。

先輩との思い出の場所にも辿り着いてしまった。最後の頼みの綱、先輩へ怒りと言う形で心を再燃させることが出来るか。桐ヶ谷くんが言ったように、喧嘩をし続けることが出来るか。

結論から言うと、やはりと言うべきか、そんな気が起きることもなく。どうしても私には出来そうにない。

私が今まで戦ってきたのは、先輩を倒すためじゃない。少しでも彼に近づくために、そのために弱い自分を殺すために、敢えて苦手であつた銃で戦うことを主体となっていた世界へと飛び込んだ。

最初は嫌だったし、苦しかった。私の不調を検知したアミュスフィアから何度強制ログアウトされたかわからない。

それでも戦えたのは、先輩の存在があつたからだ。どんなに苦しくても、どんなに辛くても、先輩の隣にいたいと思つたから、私はこれまで銃を取ることも出来たし、『恐弾の射手』と呼ばれるようになった。

私の力は、決して先輩と戦うためのものじゃない。隣に立つために、死に物狂いで手に入れたものだ。

俯き、両手で力いっぱい握り締める。

何て小さい手だろうか、何て力弱いことだろうか。

朝田詩乃はなんと脆弱な生き物だろうか。思い人に一度拒絶されただけで、こんなにも弱っている。

そんな人間が、先輩のような強い人の隣に立とうとするのは、おこがましかつたのかもしれない。

彼の隣に立つのは、彼のように強い人間。それは桐ヶ谷くんであったり、妹ちゃんであったり、篠崎さんであったり――。

「あの、大丈夫ですか……?」

——結城明日奈さんであつたりするのだろうか。

いつの間にか彼女は空けていた隣の席に座り、私を心配するような顔で見ている。

初対面を私に声をかけねばならないほど、私は酷い顔をしていたのだろうか。自覚はある。きっと今の私は泣きそうな、それはもう酷い顔をしているのだろうか。

大丈夫です、と返したかった。

だが上手く言葉に出来ない。いま喋つたらものなら、きっと私は涙を流してしまう。

口を閉ざし、顔を俯かせて、私は自身の感情が落ち着くのを待った。だが、

「わたしで良かったら、お話聞きますよ?」

黙り込んでいる私にめげずに、明日奈さんは話しかけてきてくれた。

誰かに話しを聞いて欲しかったのかもしれない。私は思わず口を開きかけるが、直ぐに閉ざす。

何を考えているのか、と。

私はこの人を出し抜こうとしてきた。見ず知らずの私に、優しくできる様な人を、私は欺こうとした。そんな人間が、共通の想い人に冷たくされたからと、今度は話しを聞いてもらうなんて面の皮が厚いにも程がある。

それこそ、先輩が言うように筋が通らないというやつだろう。

「いえ、大丈夫です……」

「本当、ですか?」

「……はい、ありがとうございます」

だから、話さない、話せない。

こんなにも優しい人を、他人にまで気を向けるような出来た人に、迷惑をかけるわけにはいかない。

「……でも辛そうに見えますよ？」

「っ……」

彼女は放っておいてくれなかった。

だが言えない、言う資格などない。

「……わたし、前に言われたことがあるんです」

「え？」

「大切な人に『辛かったら弱音吐いて良い。苦しかったら泣いて良い。我慢する必要なんてない』って」

「……」

「だからお姉さんも、我慢する必要なんてないと思います。それにほら、初対面だから言い安いつてこともあると思いますよ？」

えへへ、と明日奈さんは笑みを浮かべる。

そこで私は思わず尋ねてしまった。

「……そんな辛そうに見えました？」

返答はなかった。

明日奈さんは申し訳なさそうに、私の顔を伺うように一度頷いた。大切な人に言われた。

それが先輩なのか、違う人なのかはわからない。だが彼女も私のように落ち込んだときがあり、先程のことを言われたのだろう。我慢する必要はない、と励まされたのだろう。

だから放っておけなかったのも知れない。

明日奈さんもあったからこそ、自分のような人間、つまりは私のような人間を放っておけなかったのかもしれない。

彼女が出来た人であることは知っている。あの先輩が常に気にしているような人だ。知的好奇心で私の話しを聞こうとしているわけがない。ましてやそんなことをして、彼女に何の得があるというのか。

純粋な他者への思いやりの精神で、彼女は私を心配している。

本当に優しい人だ。私のように打算的で動いている人とは違う。先輩が彼女を大切に想っているのもわかるかもしれない。

どの口が言うのか、どの面を下げて言うのか。

わかっている、自分が一番わかっている。それでも、私は耐えられなかった。

明日奈さんの眼を見て、いつの間にか口を開いていた。こんなに優しい目が出る人がいるのか、と思いつつながら――。

「実は――」

そうして私は今までの話しをした。

先輩との出会い、小さいころ先輩が私を助けてくれたこと、先輩と私はどういった関係か、私がVRMMOをプレイする目的、そして先輩に突き放されたこと。

もちろん、先輩が茅場優希であることは伏せている。ここで暴露できるほど、私は強くないし、神経が凶太くない。

話し終えて、ふと彼女を見ると、不思議な反応をしていた。

意外そうに、眼を少しだけ見開き、それからうんうんと首を捻って考える。

「あの、どうしました……?」

「ああ、ごめんなさい。ちよつと意外と言うか」

「意外?」

「わたしの大切な人も似たような人なんですよ。意外に周りにもいる

んだなーって」

思わず黙ってしまった。

似たような人と言うか、完全に同一人物なのだから。本当に申しわけないが、ここでは黙っていることにした。

「突き放されるのは辛いですよね……」

「はい、正直しんどいですね……」

「わかるなー。私も何度もそういうことあったし」

意外だった。

明日奈さんは違うと思っていた。いつも先輩から気にかけてもらえて、過保護なまでの声をかけてもらって、それこそ私が見たことがない顔を先輩に向けられた存在であると思った。それこそ、彼女だけ特別で、厳しい態度もきつい言葉も投げられない、そんな存在であると、私はそう思い込んでいた。

だから聞いた。

今度は明日奈さんのことを聞くために、私は彼女に聞いてみることにした。

「……貴女の大切な人ってどんな人なんですか？」

「うーん、捻くれてるけど、凄く優しい人、ですかね？」

あはは、と困ったような笑みを浮かべて明日奈さんは続ける。

「本当は優しいのに、素直じゃないから勘違いされて、でも改めないからもつと勘違いされるんですよ」

「それは、確かに。先輩もそんな人です……」

「受け取る側は困りますよね。素直に心配だから、って言ってくれればいいのに。わたしも勘違いして、何度も言い争いましたよ」

「えっ、せんぱ——その人と喧嘩したことあるんですか？」

「それはもう何度も」

二度目の衝撃を受けている私を余所に、明日奈さんは続けて懐かしむような口ぶりでそう言った。

「小さい頃なんて、嫌われてましたからね」

「そうなんですか？」

「近づくだけで睨まれちゃったりして……」

あの頃は大変だった、と呟いて。

「それから何度も距離を開けられたこともありましたね」

「それから、どうしたんですか？」

「後を追いかけてましたよ。彼、勝手に進むから追いつくこっちも必死ですよ」

何事もなく、苦もなく、軽く言う彼女が眩しく見えた。

辛かった筈だ。好いている人から一方的に距離を開けられ、置いてかれる感覚は私も経験をしたからわかる。それは辛く、耐え難いものであった筈だ。

だが彼女は諦めなかった。

諦めを踏破し、先輩に追いつき、とうとう認められたのだ。

私が出来ないことを、彼女は成し遂げた。私から見たらそれは、偉業に等しい行為。

ポツリと、思わず呟いてしまった。羨ましそうに、そんな自分を自嘲するように。

「強いですね……」

「そう、ですかね？」

「そうですよ。私なんて、先輩に初めて突き放されただけで耐えられなかった」

何度も経験した彼女に対して、私はただの一度。それだけで、心が折られてしまった。

「先輩が言ったことが本心じゃないと思いたい。でも心のどこかで本音かもしれないって思っただけで、私は逃げ出しました」

「本音じゃないですよ。何度も助けてくれたんですよ？」

「はい」

「だったら、本音なんてありえないです。それだけお姉さんが大切に思っているから、助けてくれてたんですよ」

その言葉は力強かった。きつと経験から導き出された彼女の答えなのだろう。

頼もしい。だが、問題は私にある。桐ヶ谷くんが言ったように、先輩を認めさせるには先輩に勝つしかない。となれば、先輩と対峙する必要がある。私に出来るのか、先輩の額を狙い、引き金を引くことが。

答えは火を見るよりも明らかだ。

出来ない、出来るわけがない。

「でも私には出来ません。先輩を倒すなんて無理だし、ましてや争うなんて……」

「んー、争うって考えないようにしたらどうですか？」

「それは、どういう……？」

いまいち要領の得ない私に、明日奈さんは少しだけ考えて。

「先輩って人は、お姉さんが力不足だからって言ったんですよ？」

「そうですね」

「だったらお姉さんの力を見せればいいんですよ。争って倒すんじゃないって、力を見てもらうんです」

「力を、見てもらう……」

倒す必要はない、と。

そうだった、桐ヶ谷くんは喧嘩し続けたからこそ認められたといった。誰も勝ち負けの話しをしていなかった。

勘違いしていた。私は先輩と争い勝つしかない、ずっと考えていた。そして、そんなことは出来ない、勝てるわけがないし、先輩と本気で戦うなんて無理であると断じていた。

そもそも前提が違っていた。

勝ち負けではない。私にとってこの戦いは、単純な勝ち負けの話ではない。もつと深く、抽象的で曖昧なもの。先輩を認めさせるかさせないかの戦いでしかない。

そんな戦いをしてきたのだろう。

桐ヶ谷くんも、妹ちゃんも、篠崎さんも、そして——明日奈さんも。

ならば私も立ち向かわなければ。この人が出来て、私に出来ないなんて、負けを認めているようなものだ。

負けない。負けてなんていられない。心が折れている場合じゃない。

先輩の隣に立つためにも、この人と対等になるためにも、ここで立ち止まっているわけにはいかない。

見せ付けてやるんだ。先輩に、どうだ、つて。貴方が突き放した私は、こんなにもつ強いんだぞつて。先輩にたくさん、強い私を見てもらうんだ。

「ありがとうございます。私、もうちょつと頑張ってみます」

「はい！　そうですよ、頑張りましょう！　先輩に謝ってもらいましょう！」

「ええ、そうですね」

おーっと、握り拳を作った片手を高々に上げる明日奈さんを見て、思わず笑みをこぼしてしまった。

先輩がこの人を大切に想う気持ちが、わかった気がする。

この人は光なんだ。先輩にとつての光。少しだけだけど話して、励まされて、後押しされた私にはわかる。この人と話していると心が安らぐんだ。一生懸命にこつちの話を聞いて、共感されて、応援してくれる姿は守つてあげたくなる。

だが、それはそれ、これはこれ。

先輩を譲る気は毛頭ない。

「話を聞いてもらつて、本当にありがとうございました」

「もう行くんですか？」

「はい、これから先輩に喧嘩を売りに行つてきます」

そこまで言うのと立ち上がり、私は出口へと足を進める。

ドアを開き、そういえば、と立ち止まり肩越しに振り向いて。

「私、詩乃って言います。今度お礼に来ますね——明日奈さん」

第16話 B O B本選前 く先輩と後輩く

12月14日 PM16:30

ガンゲイル・オンライン グロッケン大通

あれからストレアと別れたモブは大通りを歩いていた。

人通りの数が衰えることはない。むしろ増えていると言つてもいい。それもその筈だろう。三十分後にはB O B本選が始まる。ガンゲイル・オンラインをプレイしているユーザーは直に見ようとログインをし、他のVRMMOをプレイしているユーザーも、実況と言う形でこの大会に注目している。

興奮は治まらない。

誰を注目しているか、誰が優勝するのか、誰に賭けるか、話題はそれで持ちきりだった。

鬱陶しい、と。

モブはぼんやりと思いつながら猫背で背中を丸めて大通りを歩いていた。

当事者ながらも冷めている反応であるが無理もない。彼にとって目標はB O B優勝ではない。最初はアインクラッドの恐怖を名乗るプレイヤーに興味があり、B O Bに参加すると聞き参加したものの勝ち残り、折角だから上を目指す気持ちも微かに存在した。

しかし状況が変わった。

死銃デス・ガンと名乗る謎のプレイヤーの存在により、遊び程度の軽い動機から、危機感を持った戦場に赴くような心境へ。まるでその頃のように——ソードアート・オンラインにて攻略するために躍起になっていたあの頃のように。

感覚が研ぎ澄まされていく。

しかし致命的なまでに、あの頃には足りなかったものがあつた。

それは実力到他ならない。今の自分がどの程度の戦力になるのか、モブには判断が出来なかつた。何せ、今の自分と昔の自分では力の差

がありすぎ、敵がどの程度の実力なのか不明であるのだ。笑う棺桶ラフィン・コライの残党というのなら、以前にも戦ったことがある筈なのだが、彼にはまったく覚えがなく、その程度の実力であった筈だ。だがそれも宛てにならない。昔の自分が勝てたから、今の自分でも勝てる保障がモブユキにはなかった。

それに今回は、勝利条件が緩すぎる。

自分達が出張って死銃デス・ガンを倒さずとも、ちゃんと役者が揃っている状況だ。

出来ることといえば、耐えることだけ。

標的となっていて自分達が負けずに立ち回り、死銃デス・ガンが討伐されるのを待ってあげればいい。

言ってしまうえば持久戦に他ならない。

——オレはともかく、アイツらなら問題ねえだろ。

——いざとなれば、オレが肉壁になる。

ぼんやりと、考えながらモブユキは歩を進めていた。

視線を上げれば、プレイヤー達とすれ違う。大笑いをしている者がいれば、飲み物食べ物を片手に大騒ぎしている者まで。

記憶に新しい、アルヴ Heim・オンラインで行なわれた《第一回統一デュエルトーナメント》並みに周囲が熱狂に包まれていた。

とはいえ、このような喧騒は嫌いではない。ただ問題が山積みとなつている今の状況で愉しむことができず、彼は遠巻きに見守りため息を吐いていると。

「やっほー」

「……」

いつの間に隣にいたのか。

気配がまったくなかった。自分が思考の海に潜りすぎていたのか、と思いつながら彼は特に反応もせず歩を進める。

眼もくれずに歩き続ける彼に、声をかけた主は慌てながら後を追いかけてきて。

「ちよ、ちよつと無視!？」

「何の用だ?。」

「辛辣だなあ。ダーリンはもうちよい私に優しくしてもいいんじゃない?。」

そこで漸く、ピタツ、と足を止める。

視線を送ると女性プレイヤーが一人。紙の色は黒、髪型は動きやすさを重視してるのかポニーテール。背丈は女性ながら長身の方で、両頬には煉瓦色の幾何学模様のタトゥーが彫られており、そのせいもあつてかその面貌からは妖しさと危うさを放っていた。身体のボディラインがハッキリと視認が出来るボディースーツを装備しており、彼女の妖艶さを際立たせている。

満面の笑み浮かべた彼女——ピトフーイはどこか挑戦的で、獰猛な肉食獣を感じさせる笑みを彼女は張り付かせて、モブユキを見ている。

ダーリンなどと呼ばれて本当にいやなのか、彼は露骨に顔を歪ませて苛立ちを隠すことなく前面に押し出しながら問う。

「今日はオマエ一人か?。」

「ん? ああ、そうだけど?。」

ピトフーイにいつも付いて回る大男の存在を思い出しながら、意外そうな口調で彼は口を開いた。

「珍しいな」

「それでも——なくないか。一応、私の彼氏でもあるしねアレ」

彼氏、と言う割にどこか雑な扱いにモブユキは特に気にする素振りは見

せない。

ガンゲイル・オンラインを妹と共に始めて数ヶ月になる。

ログインする度に、ピトフーイとその彼氏である大男とクエストや賞金首を狩りに出掛けていた。その都度、彼女達のやり取りを見ているからこそ、ピトフーイの彼氏への雑な扱いも慣れたというものだ。当初はあまりの扱いに、面を食らったものだが、それが彼女達の愛情表現なのだろうと無理矢理納得し現在に至る。第三者から見たら歪極まらないが。

モブが面を食らったのは、彼氏への雑な扱いだけではない。

「うん、今日は私一人だよ。どう、嬉しい？」

「嬉しいわけねえだろ」

「またまたー。今なら、私を独り占めだよー？　どう、嬉しいでしょ？」

「全然」

「悲しいなあ。私はこんなにも君を愛しているのに」

これだ。

本気なのか冗談なのか。彼女は彼氏がいるにも関わらず、モブにも思わせぶりな口ぶりでアプローチをかけてくる。これが影でやるなら彼女の気持も本気なのかもしれないが、彼氏の前でも態度を変えることなくモブへアプローチをかけてくる。であれば、彼女の言動は冗談と捉えるのが正解なのかもしれないが、その割には言動は情熱的で、モブを見つめる視線も熱が込められている。

だが彼にはどうでも良かった。

所詮はゲーム内でのやり取り。もしかしたら、ピトフーイというプレイヤーもガワが女性で、中身が男性とすることもありえる。どこかデジャヴを感じ、それもモブがピトフーイに嫌悪感を示す理由の一つ、つまりは同属嫌悪である。

モブはため息を吐いて、億劫な気分のまま問いを投げる。

「それでマジで何の用だ」

「好きな人に会いに来るのに理由なんている？」

「迷惑だ。オマエ彼氏いるだろ」

「それはそれ、これはこれ。私って欲張りだから」

にしし、と笑みをこぼして。

「半分は冗談」

半分は本気なのか、という恐ろしい相槌は入れない。

さつきと会話を切り上げたいモブ^{ユキ}にとって、不要な受け答えなど無駄以上に何者でもないからだ。

しかし、

「BOB本選に出るんでしょう？ 応援しに来たんだよ」

どこで情報を掴んできたのか、相手にしていなかったモブ^{ユキ}がここで意識をピトフーイに向ける。

それに満足したのか、彼女は笑みを深めながら、わざとらしく辺りを見渡すように見渡して。

「あれ、ユウキちゃんは？」

「先に行ってる」

「そっか、残念。会いたかったのになあ」

あまりにも露骨な反応であった。

会えなくて残念、というのは本心なのだろう。だがそれ以上に彼女は試すように、モブ^{ユキ}を視線を送っている。

それがどういった意味を為すのか、彼女の真意はどこにあるのか、微かな悪意を彼は見逃さなかった――。

「おい」

「んー？」

「オマエが何を企んでいるかは知らん。勝手にやればいい」

「……」

「この世界で、右も左もわからなかったオレ達はオマエに世話になった。恩もある。だからある程度は見逃してやる」

だがな、と言葉を区切り表情を変える。文字通りガラリ、と。スイツチを切り替えたと言つてもいい。

先程まで億劫そうに苛立ちを募らせていた彼ではなく。その双眸には全てを呑み込み、全てを燃やし、全てを灰に変えるような瞳。深く暗く墨よりも黒い、深淵なる炎を連想させる眼の輝き。それはかつて、ッアインクラッドの恐怖”として活動していた者の威圧——その片鱗をここで開放してみせた。

化物と呼ばれた者の暴威はそのまま続けて。

「アイツを巻き込んだら関係ねえ。容赦なく潰すぞ？」

「へえ？」

対する彼女は涼しい顔で受け入れる——訳ではなかった。

身体を興奮でブルツと震わせて、治まったと思つたら、今度は熱を籠った視線をモブ^{ユキ}へと向けられ、その頬は僅かながら紅潮に染められている。

その姿はどこか扇情的で、性的感覚を覚えているかのようでもある。

異常とも呼べる状態だった。

片鱗とはいえ、今のモブ^{ユキ}の威圧だけでいえばあの時の彼——”
アインクラッドの恐怖”と呼ばれた者のそれだ。遠く及ばないにしても、その心へ訴える恐怖なる威圧を受けて平然としている人間は少なく、少なくとも彼女のように性的興奮を覚えてる人間はもっと少ない。

それでもモブは衰えることはなかった。

警戒し、次の彼女から吐かれる言葉次第では、更なる深淵を開帳することだろう。剣呑な雰囲気は変わらず、真っ直ぐにピトフーイを見据える。

彼女はそれがわかっていながら、気安く彼へと片手を伸ばす。

頬を撫で、肩口まである金色の髪を梳いて、口元には笑みを張り付かせて。

「そんな眼で睨まれたら、ねえ。——逆効果だと思わない？」

「……それは言質を取った、ってことでいいんだな？」

「ウソウソ、冗談だよ。私もあの娘が好きだからね。可愛いし」

名残惜しそうに、彼に伸びていた手を引っ込めて、安心したように笑いかけて。

「んー、バレてたのならいいか。参考程度に聞きたいんだけど、いつわかったの？」

「オマエが仕掛けるとしたらここしかありえねえからな。あとは勘だ」

「そっか、なるほどね。んー！ やっぱり私とダーリンは通じ合ってるね？」

「薄ら寒い事言うな」

「酷いなー！ そんな邪険にしないでいいと思うけど？」

その言葉に彼は応じない。

話しは終わり、あとは戦場に赴くのみ。これ以上の問答は不要であると、モブは断じる。

ピトフーイも止めない。

語ることもなく、自分がどれほど彼を想っているのかなど、行動で示した。あとはどうするかは彼——“アインクラッドの恐怖”次第であるのだから。

それでも口にせずにはいられなかった。

万感の想いを込めて、自身に秘める願望を乗せて、胸の高鳴りを抑えられず、彼女は思わず口にしていった。

「魅せてよね。今の貴方じゃない、本気の貴方を。全力のアイコンク
ラッドの恐怖を私に——」

.....
.....
.....

数分後

SBCグロッケン 総督府

モブが総督府に着いた頃には、辺りは熱狂はピークと化していた。

円形のホールにはガンゲイル・オンラインのプレイヤーが今か今かと、B○B本選が中継される予定である天井に吊るされた巨大モニターに釘付けになっている。大半のプレイヤーはそれを見るために、上を見上げているのだが、中には他のプレイヤーを観察するような視線を向けている。恐らく、B○B本選の参加者、もしくはその協力者なのだろう、とモブは予想していた。ギリギリまで情報を集めようとしている姿は、どこか必死であるものの、彼は笑わない。そこまでこの大会に賭けているのか、とむしろ感心するように探るような視線を甘んじて受けることにした。

と、ここで。

「あつ、にーちゃん！」

片手をブンブンと振り、嬉しそうな笑みを浮かべて、モブユウキに向かつて声をかける黒い髪で長身な美少女——ユウキが視線の先にした。

あまりにも目立つ行動に、アイツらしい、と呆れた混じりの笑みを浮かべて、片手で応じ進む先をユウキの方へと向ける。

彼女だけではなかった。

不機嫌そうに、視線すら合わせない人物が一人。

モブユウキの存在を視界の隅に収めたのか、視線は天井に吊るされている巨大モニター、意識をモブユウキへと向けて一言。

「よう」

「ああ」

短いやり取り。

モブユウキも思うところがあるのか、もう一人の人物——キリトの態度に何も言わない。

沈黙が流れる。

キリトも当事者ではないのでこれ以上は言わずに、キリトの態度にも理解を示していることからモブユウキからも継げる言葉もない。二人の間に沈黙が流れるのは、当然の帰結である。

とはいえ、間に挟まれるユウキは居心地が悪かった。

板挟み、とまではいかないものの、立場的には中立。だからこそその辛さと言えるのかもしれない。

パン、と。

ユウキは手を叩いて仕切りなおすように。

「そ、それでどうしようつか！」

ここで二人は反応を示した。

バツの悪そうな表情を浮かべて、ユウキの気持ちを汲み取ったキリトは「ごめん」と一言呟き。

それでも無反応を示したが、モブは意識だけを二人に向けている。キリトは少しだけ考えて。

「俺達がバラバラで行動するのは危険、だろうな」
「どっかに集まる？」

ユウキの提案に、キリトは頷いて。

「その方がいいだろう。幸いにも狙われてるってわかってるし」

そこまで言うと、今度こそ視線をモブに向ける。

それでもこちらに応じない彼に、苛立ちを募らせて、棘のある言い方でもって問うた。

「……お前もそれでいいな？」

「構わねえ。オレ達が死銃カスに負けなければゲームセット。簡単な話しだ」

それ以上語ることはない、とモブは沈黙するも、キリトはそんな彼に聞きたい事があるようで、

「あれからシノンから連絡があったか？」

「……オマエに関係あんのか？」

「答えろよ」

露骨にため息を吐くと、キリトの問いに億劫そうな口ぶりで答えた。

「ねえよ」

「そうか……」

「言っただろ、オマエの言葉はアイツには響かねえって。アイツはオ

マエ達とは違う」

「お前は良いのか。お前はずっとこんなことを続けていくのか？」
「必要ならな」

その言葉が引き金になったのか、キリトは無意識にモブの胸倉を掴んでいた。

ユウキが「わっ！」と驚いた声を上げるが、手を緩めることはない。万力のように握り締め、モブを睨みつけて。

「そんなわけ、ないだろ！ 一人の女の子を泣かせることが必要なことか!？」

「……それでも、生きてるんだから良いだろうが」

対する彼は離せ、と言わない。

拒絶することなく、キリトの怒気を受け止めて、その上で事実だけを口にした。

「オマエが吼えたところで変わらねえぞ。アイツはここにいない。それが答えだ」

「お前が突き放したからだろ」
「まあ、そうだな」

解っていた。解り切っていた。

モブは——茅場優希と言う人間は折れない。どれだけ憎まれようが、どれだけ嘆かれようが、その歩みを止めることはない。ただ真っ直ぐに、自分を貫き、痛々しいほどまでに前を見据えている。今回もそうだ。

全ては後輩である朝田詩乃を巻き込まないため。ただそれだけのために、彼は行動に移していた。例えそれが、彼女を絶望させる行為であろうとも、遠ざけるただそれだけのために専心してきた。

キリトもそれはわかっている。だがそれでも、それだけのために、

彼女の心をへし折り、底に叩き落す行為が正しいとは、到底思えない。優希が悪者になり、今は守れるかもしれない。

だが今だけだ。今後のことなど、何も考えていない。きっと優希は自身から離れるだけ、だと考えているだろうがそうではない。彼は進むだけで、残された人間の気持ちなど考えてすらいない。考えられないといった方が正しいのかもしれない。もとからそのような機構システムがないかのよう、自分が消えた後のことが優希は想像が出来ないのだろう。

だからこそ今回の行動。

朝田詩乃にとって、自分がどれほどの心の割合を占めているか解らないからこそその行動である。

こればかりはキリトも踏み込める立場ではない。口を挟めるのは野暮であると解っている。

でも、それでも、キリトにはそれでも、納得出来ない。あの時と——ソードアート・オンラインの時と同じように、進み続ける彼に納得がいかず、偽悪的に振舞う彼が気に入らなかった。

「あつ」

ここで一触即発な二人の耳に、聞き逃すことが出来ない言葉が飛び込んできた。

「シノン！」

寝耳に水とはこのことか。

嬉しそうに声を上げたユウキの視線の先を二人は追う。

胸倉を掴んだ力は緩みキリトは視線を送り、モブユウキはありえない物を見るように眼を見開いた。

ゆつくりと、しっかりとした足取りで、その者は確かに居た。

歩きたびに揺れる首元に巻かれたマフラーは尻尾のようで、蒼い双眸は真っ直ぐにキリトとモブユウキへと向けられている。

いや、キリトなど見えていなかった。意識も視線も彼女はモブだけしか見えていなかった。狙撃銃に装着されたスコープから覗くように、照準を定めるように、標的にのみ注がれている。

掴んでいた胸倉を解き、キリトは二歩後ろへと後退する。

もはや自分が出る幕ではない。これからは当事者の出番であると、舞台から自ら彼は降りる。

「――」

一步一步、近づいてくる後輩を見て、何を想ったのか。

モブは口を開く気配はない。いつもの彼であれば、直ぐに挑戦的な笑みを顔に張り付かせて、挑発混じりの言葉を吐いたことだろう。

しかし彼は何も言わない。黙って、シノンの視線を真っ直ぐに受けて、ただただ見つめていた。

そうして、漸く。

シノンは彼と相對した。

足が震える、手も握り締めてないとならず、口の中はカラカラと乾くばかり。

それでも、告げないとならない言葉がある。

「先輩」

冷静な声、とは言い難い。

少なくとも彼女本人はそう感じている。普段とは違う。もしかしたら震えていたかもしれない。

それでも――。

「……なんだ？」

そこでやっと、思い出したように彼は口を開いた。

対する彼は不気味なほど静かな声だった。苛立つこともなく、怒気

が含まれているわけでもなく、ましてや蔑んでいる様子もない。視線は自身が突き放した後輩のみに向けられ、彼はあるがままを受け入れていた。

「先輩が今回、大変なのは解っている」

「まあな」

「貴方のことだから、妹ちゃんを守ろうとするでしょう。もしかしたら、私もその中に入っているかもしれない。キリトと組んで死銃^{デス・ガン}を処理するつもりなのかもしれないし、違うのかもしれない。死銃^{デス・ガン}と対峙する前にも、B O Bに出るプレイヤーとも戦わないといけない。」

でも、とシノンは言葉を区切り。

「そんなこと——私には関係がない」

確かに彼女は口にした。

関係がないと。死銃^{デス・ガン}だろうが、何だろうが。それこそ彼の事情など知ったことじゃないと告げながら彼女は続ける。

「私は貴方だけを、先輩と戦うことだけに専心する。他のプレイヤーなんてどうでもいい、死銃^{デス・ガン}にも興味がない、B O B優勝なんて知ったことじゃない。私は貴方だけを狙い、私の弾丸は世界を駆けて——必ず貴方に届かせてみせる」

それは宣誓であった。

向けられた言葉は弾丸となって装填され、照準は彼へと迷うことなく向けられている。

後は引き金を引くのみ。つまりは彼の応じる言葉のみ。

「どう、先輩？ 私の挑^{チカ}戦^{セン}、受けいれてくれる？」

正直に言うと、彼は——見惚れていた。

心はへし折った、罵詈雑言を以て彼女を傷つけた、もはや修復など不可能であると思っていた。だがそれでも良かった。最悪なことがあつては遅い。この世界は常に残酷で、常に等しく不幸と言う現象は降り注いでくる。生きていてくれるのなら、それでいいと。自分から離れてしまつても、生きてくれるのならばそれでいいと思っていた。だからこそ突き放した。大事だからこそ、傷つけて突き放した。あまりにも矛盾した行動に、自分自身に苛立ちを常に向けていた。

だがここに来て、突き放したというのに、朝田詩乃はこうして自分の前に立った。

まるでその姿はあの時のよう、勝手に進む自分に追いついてくれた明日奈達のように。折れて立ち止まり転がつても、最後は立ち上がり前に進む。茅場優希には備わっていない強さを彼女は携えて、自身の目の前に立っている。どこでそんな強さを身に着けたのか、何が彼女を強くしたのか、彼には理外の事実だ。

しかしこれだけは変わらない。朝田詩乃は立ち上がり——茅場優希に対峙している。

故に見惚れていた。

自分にはない強さを身に着けた彼女を見て、見惚れて今の今まで何も言えなかった。

一瞬だけ、死銃デス・ガンのことなど忘れていた。言いたい事は山ほどあつた。突き放した行為に対してもキチンと謝罪しなければならぬと思つた。だがここでは、この場面だけは、そんな物は無粋であると彼は断じた。

「オマエ達は二人で行動しろ」

「……にーちゃんはどするの?」

嬉しそうに、ニコニコとした笑みで、ユウキは敢えて問いを投げる。解りきつた事だ。答えるまでもなく、表情を察するにユウキも理解

している。キリトもその様子を見て、満足そうに腕を組んで受け入れている。

決まってるだろう、と彼は寧猛に笑みを浮かべて、シノンのみを視界に納めて。

「受けよう。オマエはオレが捻じ伏せる」

「良かった。精々吠え面をかいて頂戴ね」

こうして、BOB本選は始まる。

各々を目的を秘めて――。

幕間 観戦者一同

12月14日 BOB本選開始から数分後

アルヴヘイム・オンライン 央都『アルン』のとある酒場

夜といっても差し支えない時刻。

昼間では閑散としていた酒場といった施設も、今では満席に近いほど活気に溢れていた。酒場といっても、アルヴヘイム・オンラインは昔は不祥事があったものの、今となっては健全なVRMMOゲームである。中には未成年もプレイしていることも考慮して、酒を飲んだところで身体に酔いが回ることはない。中には食事を楽しんでいる者もいるが、大半のプレイヤーはあえて酒をゲーム通貨である「ユルド」を払って飲み、娯楽として楽しんでいた。

中には飲んで本当に酔っているようにも見えるプレイヤーも散見しているのだが、つまるところ場酔いしているのだろう。

かんぱーい！ とご機嫌に木製のジョッキをぶつけ合う一団もあれば、ご機嫌な調子で食事を楽しんでいる卓もあり、来たばかりなのかNPCの店員に注文をしまくる者達もいる。

他者多様であるものの、共通していることがあった。

それはテーブルの中央の設置されているバスケットボールよりも少しだけ大きめのボール型の水晶。魔法世界であるアルヴヘイム・オンラインには、どこにでもあるようなオブジェクトが、それぞれの卓の中心部に設置されていた。

それは遠く離れた場所を魔法の力で遠見できることができる魔法石、というゲーム内の設定であるが、結局のところモニターであった。

誰も彼もがその水晶に釘付けとなっている。

固唾を呑んで見守り、時折「おーっ」と感嘆な声を漏らし、次には歓声を上げている卓まである。

その様子は、現実世界で言うところのスポーツ観戦を売りとしているバーのようでもある。

彼らが見ている映像はリアルタイムで発信されているもの。

この世界ではない戦場。魔法とは縁遠い、実弾が飛び交う硝煙の香りがする殺伐とした世界。それこそ、ガンゲイル・オンラインでのB
○B本選の生中継の映像に他ならない。

酒場が繁盛しているのもそういう理由なのだろう。

つまるところの、ここではないどこかで行なわれている大会を観戦するため。魔法でもなく、剣技でもなく、実銃によって勝敗が別れる大会の行く末を見守るため。

酒場に居る全てのプレイヤーが釘付けになっていることから、やはり興味があるのだろう。アルヴヘイム・オンラインとはまた違うこともあり、嬉々として楽しそうに生中継を楽しんでいた。

水晶に映し出された『MMOストリーム』の司会者が煽るように、B
○B本選に出場している注目プレイヤーを解説している中。

「はい、アスナ」

「うん？」

立つように促されて、水妖精族の彼女——アスナは指示通り素直に座っていた席から立ち上がると、木製の板を持つように言われて、これまた素直に持つ。

この意図になんの意味があるのか。首をかしげて、指示をしてきた
レブラコーン
工匠妖精族の女性——リズベットに向かって思わず聞いてみた。

「なにこれ？」

「なんて書いてある？」

「えーっと」

持っていた木製の板を裏返しにし、自分の顔の辺りまで持つてく

る。

「『わたしは嘘をつきました』？」

「はい、正解。復唱！ 『わたしは嘘をつきました』！」

「わ、『わたしは嘘をつきました』！」

「よしー！」

リズベツトは満足したのか、しきりなしに頷く。

満足そうにしていたのは彼女だけではない。アスナ達と卓を囲んでいる数人。クライン、リーファ、シリカ、ユイ、そしてシリカのペツトモンスターである小竜のピナも満足そうに小さく鳴き声を上げる。ますます解せないのか。

アスナは「えーつと」と困った調子で苦笑を浮かべ、困惑しながら。

「本当に何なのこれ？」

「何なのじゃねえだろー」

ニヤニヤ、と。

頬杖をつきながらだらしなく笑みを零しながら言うクラインに嫌な予感をアスナは感じた。

まるで正論で殴られるような、言い訳を許さない言葉を並べられてDVされるような、そんな感覚。

彼女の心配を余所に、クラインはニヤケ顔になりながら。

「あの兄妹がアスカ・エンパイヤで遊んでるって騙したろオレ達を」

「人聞きが悪い!？」

がーん、と思わずアスナはショックを受ける。

確かに騙したのは本当だ。真実であり、揺るがない事実である。だからこそ何も言えない。反論の余地がなく、言い訳も出来ない。

クラインはその様子を見て、満足したのか居丈高に笑い声を上げる

と。

「まあ、いいけどなあ！ めでたく三人ともB O Bだっけ？ その本選に出てることだし！」

それだけ言うと、近くで卓を囲んでいた彼がギルドリーダーを務める『風林火山』と乾杯すると、そのまた近くの卓に「俺のダチがB O Bが出場するんだよお！ しかも三人！ 凄いだろお！」と絡んでいき、その卓にいた中年の見た目な土妖精族（トウヤウセイム）の男性に「本当か兄ちゃん！ そりやすげえ！ 乾杯だあ！」と見ず知らずなのに、肩を組んで何故か意気投合していた。

あまりにも陽気なクラインを見て、リーファは乾いた笑みを浮かべて。

「テンションが高いなあ」

「気持ちはわかりますけどねえ。キリトさんとユウキはどこかなー？」

「二人ともガンガン飛ばしそうだけど、映らないねえ」

想い人であるキリトと親友であるユウキを探しているシリカを見て、リーファも二人を探すのに協力しているが見つからなかった。

そしてやけに外見が気合の入った人達が多いなあ、とリーファは思う。

崖で陣取る二の腕が丸太のような屈強な男性プレイヤー、高所を陣取っている水色髪の狙撃主、テンガロンハットを被ったいかにも西部劇に出てきそうなガンマン、ぼろ布のようなマントを纏った骸骨のようなマスクを被った人物、その隣を歩いているボデイラインが強調されている装備を身につけている女性。

見た目だけで言えば強キャラばかりであり、その中に兄がいるというものは少しだけ妙な気持ちにもなるというもの。英雄視されているキリトではなく、自身の兄である桐ヶ谷和人を知っているからこそ、

リーファは腑に落ちない感覚を覚えていた。

強いのは知っている。ソードアート・オンラインでははじまりの英雄と呼ばれ、アルヴヘイム・オンラインではシルフ百人斬りを成し遂げた猛者だ。だとしても、普段からの落差が凄すぎる。どちらが本当のお兄ちゃんなんだろう、とぼんやりと考えていると。

「ユウキのお嬢はそうかもしれねえけど、キリトってああ見えて計算高いからなあ。ある程度減るまで大人しくしてるんじゃないの？」

いつの間にか戻ってきたクラインの言葉に、ハッ、とリーファは思考の海から戻ってくると。

「あー、それは確かにお兄ちゃんっぽい。ユウキは……考えるまでもないか」

「うん！ 暴れまくると思うな。だってユウキだもん！」

ふんす、とどこか自信満々に言うシリカに、オレンジジュースを飲んでいたユイは遅れて抗議をする。

「どうやら今の彼女は、ナビゲーションピクシーではなく、ソードアート・オンラインで過ごしていたような少女形態のようだ。」

ユイが抗議するのはもちろんキリトのことである。

オレンジジュースが入っていた木製のジョッキをテーブルに置くと、クラインに小さな身体をいっぱい使って抗議をする。

「違いますよ！ パパはちゃんと正々堂々！ 後ろから斬って斬って斬りまくります！」

「……それって正々堂々なの？」

不意打ちだよな？ とクラインは首を傾げる。

彼の中の正々堂々の定義が若干ずれているところを見て、アスナは小さく笑みを零しながら。

「ねえ、リズ」

「ん？」

四人のやりとりをぼんやりと見ていたリズベットは、呼ばれたからかアスナの方へと顔を向ける。

「これっていつまで持っていればいいの??」

「ん？ ああ、下ろしていいわよ。気が済んだから」

「ええ……?」

特に重たくもなかった『わたしは嘘をつきました』と彫られた木の板を床に置く。

リズベット達の様子を見るに、本当に意味などなかったのだろうか。このとき初めてアスナは感じた。それを証拠に、四人と一匹の意識はキリトやユウキの二人を探すのに夢中となっている。しかも誰が一番最初に見つけることが出来るか、といった勝負にまで発展しそうな勢いであった。

アスナとしてはどこか複雑だ。

嘘をついたことは悪いことであるが、もう少しだけこちらに意識を向けてくれても良かったのではないかと。せめて笑ってほしかった。そうでもなければ報われない。

ギャグが滑ったような、微妙な気持ちでいるアスナを見て、全てわかってる調子でニヤニヤ笑うリズベットは意地悪く話しかける。

「それで兄貴の方はどうよ？」

「あそこにいるよっ。」

「えっ?」

アスナが指さした先。

リズベットはそこへと視線を追いかけた。

そこには確かにいた。

両手を組み天へと伸ばし、軽く準備運動している何者かの姿。

ソードアート・オンラインやアルヴヘイム・オンラインの彼とは違う。これまた可愛らしい、男の子とも女の子とも呼べるような背丈になっっている金髪碧眼の彼。いつもどおり機嫌が悪そうに、目つきの悪い姿があった。

随分と可愛らしい姿になっている。いいや、結局雰囲気で台無しにしている。ある意味で殺伐としたガンゲイル・オンラインに馴染んでいる。

そんな感想を生まれるが、それよりも見過ごせない現象を前にしてしまい、思わずリズムベツトは呆れてながら。

「……いつも思うけど、アンタの幼馴染センサーどうなってるのよ?」
「どうなってるって?」

「天然でやってるから、偶に怖いですよねこの団長さんって」

思わず敬語になってしまいうリズムベツトだが、今だに渦中のアスナは要領が得ないと言わんばかりに首を傾げるばかり。

B o B 本選の参加者は30人。

今は本選の中継ではなく『MMO ストリーム』の司会者がB o Bとはどういったものなのか、優勝候補は何人居るのか、そしてそれは誰なのか、など解説している最中だ。

まだ何も開始されてまだ目立った動きもなく、参加者の姿があると言っても、まだ米粒のような大きさで表示されているような状態。それなのに、彼女はノータイムで自身の幼馴染を見つけていた。眼がいいのか、はたまた勘が鋭いのか、それとも謎のセンサーが備わっているのか。普段はぼわぼわしている癖に、幼馴染のことになると妙に鋭くなるアスナを見て、リズムベツトは極まっていると判断することにした。

はい、とリーファは手を上げて。

「GPSとか必要なさそう」

はい、と申し訳なさそうにシリカが手を上げて。

「耳を澄ましただけで、ユウキのお兄さんがどこにいるかわかりそう……」

はいっ、と元気よくクラインが手を上げて。

「エロ本とか隠しても直ぐにバレそう」

あまりにもな言い分の数々に、思わずアスナは両手を挙げて抗議をする。

ここで自分の異常性がわかったのか、はたまた心外だと感じたのか、顔を羞恥で紅く染めて。

「そ、そこまでじゃないわよっ！ それにユーキくんはエツチな本は持ってません！」

「何で知ってるのよ……」

もはや何も言うまい、とリズベットは呆れた口調でツツコミを入れる。

そして哀れみをユーキに向けた。何故か把握されているということは、定期的にチエックされている可能性がある。

だがしかし、わからないでもない。

意中の人物が、他の女の裸体を見てうつつを抜かしている。

——うん、ギルティ有罪。

ノータイムでリズベットの脳内裁判は判決を下す。

執行猶予などない。即日即決、情状酌量もなく投獄されるのが世の

常である。理不尽と罵られ様とも構わない。女には負けられない戦いがあるのだから。

あとでアスナにどこを探したらいいか聞いておこうと、考えていると。

「んん?」

アスナが不思議そうに水晶の中を見ていた。

言うまでもなく、視線の先にはユーキの姿。

準備運動は終わったのか、片手にはリボルバー式の小銃を肩に背負い、もう片方の手にはシャベルが握られている。

どうしてシャベル? と思いながらもリズベットはアスナに向かって。

「どうしたのよ?」

「んー、うん。間違いないよ」

「何が?」

「ユーキくん、何だか凄く嬉しそうだなーって」

嬉しそうに言うアスナを見て、訝しげにリズベットはユーキを見る。彼女だけではない、リーファやシリカ、その頭の上に乗っているピナ、クラインにユイもユーキを見る。

いつものユーキだった。

不機嫌そうに、目つきが悪く、何に苛立ちを覚えているのかわからない。姿は丸つきり違うが、いつものユーキがそこにいた。

リズベットは四人と一匹に視線を向ける——どう思う?」

四人と一匹は首を傾げる——いつも通りでは?」

違いがまるでわからない。

しかしアスナは違うようで、ニコニコと嬉しそうに楽しそうに。

「久しぶりに見るなあ、こんなユーキくん」

かな？」

「SAOでキリトくんと戦っているとき以来じゃない

第17話 BOB本選 三人共々

息を吸い、吐き出した。

気配を殺し、感情を押さえつける。

うつ伏せに身体を寝かし、姿勢を制御をし続ける。

身体はボロ布で覆い風景に溶け込むように最大限の努力を怠らない。

狙撃主とは見つかつてはならない。

狙った獲物は必ず仕留め、最少の手数で最大の攻撃をするのが狙撃の王道である。一回引き金を引くだけで、敵対する者達の戦闘力を削ぎ、動きを抑制し同時に威圧する。面制圧ではなく、言うなれば点押し。それこそが、狙撃というものだとは私は考える。

となれば、私は何かを狙っていないなければならない。

私が狙撃主であるのなら、見つからずに一発で敵を撃ち倒すために、暗殺者のように、標的を狙っていないなければならない。

しかし、私の手元に得物はなかった。

片手にフィールドスコップを持ち、覗き込み辺りを観測し——
ある人物への観察を怠らない。

私が巣を張るのは山岳地帯。

眼下に広がるは、森林地帯であり、森林地帯と山岳地帯を繋げる錆びれた鉄橋があった。

スコップから見えるのは銃撃による連続した閃光、遅れて銃声が耳に入った。

BOB本選が開始されてから、既に一時間ほどが経過している。

それでも私はここまで獲物を構えることはなかった。最低限の動きでやり過ごし、接敵など許すことなく立ち回っている。

以前の私には考えられない行動だった。強さを追い求めて、名の知れたプレイヤーを狩り、我武者羅にこの世界を駆けていた人間と同一人物とは思えない。これが「恐弾の射手」と呼ばれ、いい気になって

いた人間の戦い方なんて笑わせる。もはや振る舞いが臆病者のそれだ。慎重を重ね、常に警戒している、弱い者——まるでネズミのよう。

——構わない。

——どうでもいい。

——私の標的は、あの人だけ。

——それ以外に神経を集中してられない。

——時間が勿体無い、敵意が惜しい、気力が削がれる。

笑われても構わなかった。臆病だと嘲笑されようと、卑怯だと後ろ指を指され様が知ったことではない。

私の標的は、有象無象の強者ではない。

唯一人。

私の弾丸は一人のみ。

標的はあの人だけ。

そう。

どんな状況でも、私は得物を構えない。

それがどんな状況であろうとも、私はヘカートIIを手にすることはない。

私の視線の先には、山岳地帯と森林地帯を繋ぐ鉄橋。その上で、二人組みのプレイヤーと、倒れている一人のプレイヤーが存在している。倒れているプレイヤーは見知った顔だった。何度もクエストに付き合ったことがあるし、依頼を受けたこともある。だとしても、私は行動しない。ジツと観察に徹する。

元より、BOBはバトルロイヤル方式の生存競争。眼に映る者達は全員が敵なのだ。顔見知りだろうが、助ける道理なんてあるわけがない。

二人組みのプレイヤーは肩を並べて、倒れているプレイヤーを見下ろしている。

このことから察するに、二人組みのプレイヤーは協力関係にあるこ

とがわかる。となれば必然的に二対一。数的不利であるのは明確であり、あの中に割って入るのは余程の戦闘狂か、もしくは――。

――動いたっ？

――嘘っ、この状況で……!?

思わず息を呑む。

予想はしていた。相手はあの人だ。もしかしたら、動く可能性は考えていた。だが本当に動くとは思わない。

人が好い――流石にここまでではない。

何のために――想像がつかない。

貸しがある――聞いたことがない。

だったらどうして――情報が足りない。

ありとあらゆる可能性を考えて、私は片端から否定する。

この状況でゲームオーバーになりそうだったから助けるほど、あの人人が好いわけではない。

如何なる理由で、どういう考えで、どのような思考で。

どちらでも構わない。

私は観察に徹する。

あの人と言った。私の挑戦を受け入れると、確かに口にした。

それはそういうことだ。どのような理由があろうが、私と戦うまであの人人は絶対に負けないし倒れない。

故に、私がヘカートIIを手にするのは今ではない。駆け出したい衝動を抑え、並び立ちたい欲情を堪えて、息を吸い深く吐く。

観察を続ける。

全ては勝つために。真正面から勝利するために。私は私の我俣を殺し尽くして――。

「見せて貰うわよ、先輩――」

ガンゲイル・オンライン
B o B 本選 鉄橋

鉄橋の上。

無骨な鋼鉄で作り出され、ところどころが痛み錆付き、長い年月が経過しているkとが安易に想像が出来る。特別な装飾もない施されてない橋の上に三人の人影が存在していた。

一人は男性。

仰向けに倒れ伏し、身体に妙な青色のスパークが這い回っている。その足元には彼の物だろうか、テンガロンハットが無常に転がっている。だというのに彼は起き上がらずに、倒れたまま見下ろす二人組みを睨みつけている。

起き上がらず、ではない。彼は起き上がれないのだ。

彼に打ち込まれた弾丸は電磁スタン弾。命中した対象を麻痺させる特殊な弾丸。ダメージはなく拘束させるための弾。一発の値段が高額であり、対人戦ではなく大型のモンスターを狩るために用いられるのが一般的な使い方である。

男性にとって、予想外の一手。

三十人が敵同士のB o Bにおいて、拘束するだけの電磁スタン弾など、どうやって想定出来るだろうか。

「コイツが、ターゲットか」

見下ろしている一人——声色からして男の声。

ボロボロのマントを纏い、髑髏の仮面^{マスク}を顔に張り付かせているため、表情は読み取れない。双眸が赤色に妖しく光、倒れている男性を見下しながら続ける。

「本当に、コイツか？ 全く、齒応えがない」

「そりゃ、君が狙撃したからでしょ」

もう一人は女性。

ボディラインがハッキリとわかるスーツで身を包み、頭と顔を覆うヘルメットを被っていた。

そして、彼女は暗に語る。真正面から撃ち合っていない癖に、大口を叩くな、と。倒れている男性には、そんな蔑みが込められているように聞こえる。

仮面の男も汲み取ったのか、チツ、と小さく舌打ちをしそれ以上口を開くことはなかった。

フレンド同士——というわけではないようだ。

プレイベートで付き合いがあるような距離感でも、会話の内容もどこかトゲがあるようで親しげな様子はない。

B o Bを勝ち抜くために手を組んだだけの関係。それこそ掲示板などでで募集し、たまたま利害が一致しただけの上辺だけの関係である、と倒れている男性は予想する。

面白くない、と男性は思う。

なんでこんな連中に、自分が見下ろされているのか、苛立ちが募り、やがてそれは爆発し男性は口を開いていた。

「き、汚ねえぞ！ 二人ががかりとか、恥ずかしくねえのか！」

仮面マスクの男は得に反応がなかったのだが、もう一方は、おや、と。どこか楽しげに、感心するように、男性に向かって応答した。

「暫くは動けない筈。口を聞けるってことは、対策してたってこと？」
「当たり前だ。こんなこともあるうかと、俺あスタン麻痺耐性を防具に積んでるのよっ！ G G O上位ランカー舐めんな！」

「さすが、ダイン。相変わらず用心深いじゃーん」

特に驚いている様子はない。

倒れている男性——ダインであればその程度の備えはしてあって当然、と言う口調で肯定する。ハツタリではなく、ダインというプレイヤーの行動がある程度わかった上での発言であった。

対するダインは眼を丸くする。

まさか、と。対人戦であるB o Bで自分以上の対策をしているプレイヤーは存在せず、ましてやいの一に度外視される麻痺^{スタン}への対策すら備えていることにも驚かれない。

つまりそれは、ダインのプレイヤーとしての傾向が理解しているということ。

次に生まれるのは疑問。

髑髏の仮面《マスク》が誰なのか皆目見等もつかない。

しかしもう一方は。慎重すぎるダインの備えに驚かなかった彼女は、誰なのか、という疑問。ダインを知っている彼女は、一体何者なのか。

「お前、誰だ？」

「あれ、わからない？」

事も何気に、あっさり。

両手で頭部を覆っていたヘルメットを持ち外して。

「アハツ☆」

「び、ピトフリー!？」

ダインの絶叫が木霊する。

当の本人である彼女——ピトフリーは何処吹く風といった調子で涼しげに、口元に薄く笑みを作っていた。

対するダインは本気で驚愕していた。

何度かクエストを共にした事があるし、諸金首を追って争ったこと

もある。彼女の傍に控えている大柄な男性プレイヤーの他に、金髪碧眼のプレイヤーと黒髪長髪のプレイヤーと行動を共にしていることは記憶に新しい。

ダインも彼女には注目していた。奇抜な行動には何度も頭を抱えさせられた。いわば天敵、ダインにとってピトフーイは行動の読めない危険物の一人でもある。

故に、解せない。

彼女がB O B本選にいるのがありえない。

「何でお前がここにいる。本選出場者にお前の名前なかったぞ!」

「名前変えて出てるもん。わからないの当たり前じゃん」

「はあ!?!」

意味が分からない、とピトフーイの行動に理解が出来ないダインに追い討ちをかけるように、ニツコリ笑みを浮かべてピトフーイは続けて。

「今の私、アインクラッドの恐怖だから」

「はあ!?! いいや、待て待て。ちよつと待て。アインクラッドの恐怖ってお前が!?!」

混乱するダインを余所に、そう、と頷き軽く肯定して。

「まっ、G G O限定だけどね。どう、ビツクリした？ 賞金首トップなんですよね私」

「……賞金首が賞金首を狩ったことか?」

「そうなるかな。いやあ、楽しかったなあ。クソ野郎共をブツ殺すの!」

お前がそのクソ野郎連中の頂点じゃねえか、とダインが口を開きかけるが、今まで沈黙していた髑髏の仮面の男が口を開く。

その声色は苛立ちがあった。
静かに、好き勝手行動するピトフーイが癩に障ったのか、赤い眼光が正確にピトフーイを射抜く。

「おい」

「んー？」

対する彼女は特に気にする様子もなく、涼しげな表情で殺気が込められた視線を受け止めていた。

その態度が気に入らなかつたのか、髑髏の仮面の男の殺気が鋭くなつていく。

「勝手な、行動をするな」

「冥土の土産つてヤツよ。いいでしょこれくらい」

「誰が、そんなこと、許した？」

「ていいうかなに、指図するの？ 君が私に？」

口調は彼女特有の飄々としたそれであるが、雰囲気はまるで違う。髑髏の仮面の男への明確な拒絶があった。

あまりにも異様な二人の様子に、ダインは疑問を感じざるを得なかつた。

当初は二人は手を組んでいると思っていた。しかしその様子はまるで違う。利害が一致した関係とは思えない。そう、言うなれば——
——同じ獲物を狙っている肉食獣のような。隙あらば共食いを始めるような歪な関係に見える。

とはいえ、獣とは違い、彼女達は人間だ。

会話することで、最低限の協力は出来る。

現に、髑髏の仮面の男は低い声でピトフーイに促す。

「……始めるぞ」

「はいはい」

軽く言うとアサルトライフル——KTR—09を片手に装備すると、もう片方の手を天へと掲げて握り拳を作る。そして親指と小指を立てて振った。

何かの合図であることは明確であり、何を意味しているのかは彼女達しか知らない。

何やら嫌な予感がしたダインはピトフィーに向かって焦るように。

「おい、何だその合図は？」

「可哀想なダイン。生贄なんだってさ」

どういう意味か尋ねる前に、ダインは顔を蹴られ反射的にそちらに視線を向けた。

そこに立っていたのは髑髏の仮面の男^{マスク}。その赤く光る双眸は、真っ直ぐにダインを見つめて。

「俺を、見ろ」

「なん——」

言葉が出なかった。

自身を見つめる正体不明の髑髏の仮面の視線に、ダインは思わず黙る。

その視線からは嫌な、殺意に満ちた、どす黒い気持ちの悪い何かを、ダインの本能が感じ取ってしまった。

ドクン、と。

一際心臓の音が高鳴り、脈も遅く速く不規則に流れていくのを感じる。

背筋が凍り、ここから一刻も早く逃げ出したいのに、身体が動かない。麻痺しているから、ではない。ダインは完全に吞まれている。髑髏の仮面の男^{マスク}から放たれている殺気に、完璧に吞まれてしまった。

「いいぞ、恐怖しているな。この俺を、恐れているな」

「誰がお前なんぞを怖がるかクソガキ」

精一杯の虚勢であった。

明確な怯えがあり、ダインの視線の先にいる男にもわかっているのか、くつくつと喉を鳴らすように楽しげに笑みを零して。

「お前を贄にし、俺は英雄を、打倒する」

いつの間にかその右手には拳銃が握られていた。

片手に収まるサイズ。一度の引き金で致命傷を与える散弾銃でもなければ、弾幕を張り反撃を許さない短機関銃や小銃でもない。形状からして拳銃——トカレフTT—33であった。

左手でゆつくりとした動作で、額に当て、胸へと動かし、右肩、左肩へと十字を切り、右手に持っていた拳銃の銃口をダインへと向ける。

頭を狙っているわけでもなく、身体の面積が大きい胸部へ。当てるだけが目的であるようであった。

「お前にとっての、『恐怖』はこの俺だ。お前の犠牲で、英雄は、眼を覚ます。お前の、死によって、必ず、眼を覚ます。英雄は、俺の前に、現れる」

だから、と言葉を区切り。

「——死ねよ、生贄」

確かに、現れた。

英雄でもなければ、絶剣でもない。

彗星のように。空から降ってきたほうき星のように、金色のそれは降ってきた。

轟、という轟音が辺りに鳴り響かせて、無骨な鉄橋を頼りなく揺るがせ、両足を踏みしめて金色のそれは君臨した。

そして一步、また一步。ゆつくりとした動作で金色は歩き距離を詰める。その視線の先には二人。ピトフリーと髑髏の仮面へと向ける。

「貴様、どうして……ッ！」

その存在を認め、明らかに狼狽え始めた髑髏の仮面マスクに対して、ピトフリーの表情は満面の笑み。待ちに待ち、やつと手に入れた玩具を前にした子供のような満ち足りた笑みを浮かべて。

「そんなもん、私達——いいや、この場合君か。探してたんでしょ。下手な真似しようものなら、いつでも出張れるように——」

ピトフリーの視線は「金色」に注がれたままだ。

情熱的に、情愛的に、蠱惑的に、なおかつ扇情的なまでに。「金色」に意識を向けたまま、片手に握っていたKTR-09を倒れているダインに向けて、躊躇うことなく引き金を引いた。

悲鳴はない。

辺りに連続した乾いた音が鳴り、葉莢が地に落ち金属音が響く。

声一つ漏らさずに、HPバーが削り切られ事切れたダインの頭上にはDEADの文字が浮かび上がる。

逸脱した行動、髑髏の仮面マスクの男にはそう見えたのか、困惑しながら

声を漏らしていた。

「お前、何を……」

「邪魔だったから」

ピトフーイは一步ずつ確実に近づいてくる「金色」に意識と視線を向けて続ける。

「私の大本命が来たんだ。ちよつとダインは邪魔だよね」

「計画と、違うぞ……」

「計画？ ああ、ダインを殺すつてヤツか。アイツは殺すつもりないよ最初から」

「なに……？」

ギョツ、と。髑髏の仮面マスクの男の身体が固まった。

視線の先には、漸く足を止めた「金色」の姿。両者の距離はざつと50メートルほど。一息に詰められる距離である。

ピトフーイの言葉の真意を計りかねられず、混乱している髑髏の仮面マスクの男の耳に、問題の「金色」の声が叩き込まれる。

「……オマエから厭な気配を感じた。それにキャリトの言っていた特徴と一致する」

それだけ言うと、片手に回転式弾倉を備えられて散弾銃——M T S—255を持ち、もう片方の手に軍用スコップを携えて。

「——死銃デス・ガンだな」

「アインクラッドの恐怖……ッ！」

髑髏の仮面マスクの男——死銃デス・ガンは半歩後ろに下がり、冷静さを欠き混乱した調子で、アインクラッドの恐怖——モブユーキへ問いを投げ

た。

「お前、俺を、止める気か。あの時のように、俺の邪魔を……！」

「だが、無理だ。確信した。今のお前では、俺には勝てない。SAOのときとは違う、弱くなった、お前では……！」

あの時とは、どの時のことなのか。

アインクラッドの恐怖である自分を知っていて、なおかつソードアート・オンラインでの強さを知っている人物。

そこまで考え、候補など絞られてくる。

PKに勤しんでいたプレイヤー。それもPK自体を生業としていた連中、かつてユーキが潰したギルド——ラフィン・コライン笑う棺桶の残党であると。

潰しても潰しても、どこからでも出てくる存在に、ため息を吐いて退屈そうに。

「……オマエを止めるのはオレの仕事じゃない。元からオマエなんざ眼中にねえよ」

それだけ言うと、モブ《ユーキ》は事実だけを突きつけた。

「英雄なんて大それたヤツなんて必要ない。オマエを止めるのはありふれた——身近なヤツさ」

そこで興味を失ったのか、デス・ガン死銃から、ピトフーイへ意識を向ける。相も変わらず笑みを浮かべる彼女に、面倒といった調子で問う。

「オマエがそこにいるってことは、そういうことでいいんだな？」

「んー、私も最初はそのつもりだったんだけどね」

軽い足取りで、近所のコンビニに行くような極めて気軽にモブユーキに近づく。そして、彼女の足が止まった。空から見たら、三人の位置を繋げば、綺麗な三角形を作れるような位置でピトフーイは止まり――

「――こうした方が、もつと盛り上がると思わない？」

なつ、と驚いた声が上がった。

深、と沈黙でもって応対した。

彼女は何を思ったのか、右手に持っているKTR―09をモブユーキに向けて、左手に装備していた擲弾発射器――HK69A1を手を組んでいた筈デス・ガンの死銃デス・ガンへと向けられていた。

「本当に悪いね。昨日まで迷ったんだよ本当に。でも絶対にこっちの方が楽しいって！ 片や、人を殺しまくってたクソ野郎、方やそのクソ野郎を叩き潰して回ったイカレ野郎だよ？ そう考えたら、ほら。つい引き金も軽くなっちゃったというか」

興奮するように、早口で捲くし立てるかのうように呟き、頬を紅潮させてピトフーイは言う、一際興奮した口調で。

「当然だけど、ゲームオーバーになったら死ぬから。三人だけのデスゲーム。死ぬ方法は――君が一番良く知っているよね？」

つまりは殺し合い。

二対一ではなく、一対一対一の三つ巴の争い。

バトルロイヤル形式であるB・O・Bの原点に立ち返り、細かいことなど考えずに、つまらない策略もなく、ただ純粹に殺し合おうと。ニツコリ、と満面の笑みで、死銃デス・ガンに向けて言い放つ。

異常、あまりにも異常。一步二歩、気圧される調子で死銃デス・ガンは後ろへと下がる。まともではない、と口を開きかけるが上手く言葉が出な

い。

対する、モブは深くため息を吐いて、得物を構えなおした。

散弾銃の銃口と、軍用スコップを順手に持ち直し剣先を敵対者二人に向けて。

「なるほど、つまりはアレだ。オマエらは邪魔だな——」

「——なら、キツチリ蹴り飛ばさないと、
な？」

第18話 B O B本選 く境地く

ガンゲイル・オンライン

B O B本選 I S Lラグナロク 草原地帯

。 B O B本選が開始されて、既に一時間以上は経過していた――

30人は存在していた参加者も、既に半分以上が脱落していた。辺りを少しでも散策しようものなら、地に倒れているプレイヤーの姿。その頭上には赤くD E A Dの文字が浮かんでいる。HPバーが削られログアウトも出来ず、B O B本選が終了するまでその身を地に晒す。その姿から、彼ら彼女らがB O B本選に出場したプレイヤーがであることが嫌が応にもわかるというもの。

死屍累々。どれだけ強かろうが、どれだけ慎重に立ち回ろうが、終わりは平等に訪れる。それを教えるように、刻み込むように、彼――
――キリトは地に付している一人のプレイヤーを観察し。

「相打ち、か……」

直ぐ傍で倒れているもう一人のプレイヤーを見て、そう結論付けた。

しかしあくまで、予想の範疇。キリトがもつと銃器に詳しければ、プレイヤーの身体に開いている弾痕と装備している銃器の口径、そして落ちている薬莖からどの銃で攻撃され、倒れている者同士で争っていたのかわかるというもの。

だがキリトでは相打ちしたのだろう、という予想で限界。

圧倒的に知識がないのだから、これ以上の情報は得られず、推理することなんてできるわけがない。

それでも、B O Bという大会がどれほどレベルなのかかわかるというもの。

100名以上は存在していたプレイヤー達が予選を勝ち抜き、30人程度しか進めない本B。B本選。上位ランカーしか存在しないのは目に見えているし、運だけで勝ち残るほど甘くない。倒れている二人も、強者であったのだろう。

それでも勝てない。

ガンゲイル・オンラインは今となっては数多くあるVRMMOの中でもPVPが主流、つまりは人対人で行なう対戦を重きに置いているゲームだ。

彼らだって、その中の選りすぐりの上位ランカーであり、これまで備えてきたのだろう。それでも現実はこの有様だ。地に伏し、勝ち残ることが出来ぬまま、野に姿を晒している。

——もし、もしだ。

——俺やユウキが死銃デス・ガンに遭遇したら。

——無事で済むのか……？

チラツ、と。

倒れている二人をしゃがんで観察している黒髪の女性プレイヤー——ユウキを見てキリトは考える。

きつと、彼女ならば大丈夫な筈だ。

アルヴヘイム・オンラインでの統一デュエルトーナメント、そしてこれまでに遭遇してきたプレイヤーを振り返り討ちにしてきた腕前。センスだけで言えば抜けており、仲間内でユウキ以上のVRMMO適正を持つ人間はいないだろう、とキリトは思う。

何よりも彼女の勝負に対する姿勢だ。楽しそうに笑みを浮かべたまま相手に相對し、相手の動きを分析する冷静さ持ち合わせている。油断や慢心などありえず、長いこと行動を共にしているが、今だに彼女の底をキリトは計りかねている。

故に、ユウキであれば死銃デス・ガンともし戦うことになろうが、問題はないだろうと判断を下す。

ならば自分が相對することになったとき、無事で済むだろうか、と

彼は考える。

——わからない。

——死銃デス・ガンの腕がどれほどのものなのかわからない。

——何よりも……。

対峙したのは一度だけ。

それでも、それだけでも、死銃デス・ガンが異質だったことが理解できる。

彼から放たれた嫌な気配——殺気と呼称するには十分すぎる殺す意志をキリトは感じていた。

一般的な生活を送る人間に獲得することがない強い気持ち。それを間違いない死銃デス・ガンから放たれており、キリトのみに注がれていた。しかもそれを感じたのはこれが初めてではない。

ソードアート・オンラインの最後の日。

加速世界アッセル・ワールドと笑う棺桶ラフィン・コラインの最終抗争に感じた殺気と同種のものであった。

つまりそれは。

——平和な日々に開放されたのに。

——俺への殺意が色褪せることがなく。

——保ったまま、あるいは磨かれた状態で過ごしてきたということだ。

帰ることを望んでいた筈だ。自身と同じく、デスゲームに巻き込まれて現実世界に帰還することを願っていた筈だ。

なのに、だというのに、死銃デス・ガンを名乗る異常者の心はあの時のまま。ソードアート・オンラインに囚われていたときのままであった。彼が口にした「ソードアート・オンラインは終わらない」とはつまりはそういうことだ。キリトを殺すまで、彼の心が晴れる事はないのだらう。

「ふざけるなよ……っ！」

ふつつつ、と怒りが湧き上がる。

自分が何をしたのか、と。向けられた理不尽な感情に苛立ちをキリトは覚え、奥歯を噛み締めた。

万人に好かれる性格ではないことはキリト本人もわかっているが、命を狙われるほどのことをした覚えがない。どういう見解で、如何なる理由で、どういう訳で、自分が命を狙われないとならないのか。

それこそ死銃^{デス・ガン}本人に問い質さなければ解らず、解らない以上キリトの苛立ちが解消されることがない。

現時点では八方塞り。

その事実が余計にキリトの心を曇らせていた。

「大丈夫、キリト？」

「ん、あ、ああ。大丈夫だ」

独り言が聞こえてしまったのか、それともキリトの様子を察したのか、いつの間にかキリトに近付いていたユウキが彼の顔を心配そうに覗き込んでいた。

キリトは反射的に、何でもないと伝えるが、ユウキは納得していないようだ。

「本当に？」

「本当だ。嘘ついてもしょうがないだろうっ？」

両肩を竦めて問題ないとジェスチャーをするキリトに、ユウキは訝しむ表情で疑うように視線を送る。

そして直ぐに「わかったよ」と追求しなかった。長い付き合いだ、きつとこれ以上キリトに聞いたところで、彼が素直に口を開くことがないと判断したのだろう。

彼女は話題を変えるように、

「にーちゃん大丈夫かなー？」

草原地帯から見える、B O B本選の舞台となっているI S Lラグナロクの中心部——都市廃墟のビル郡に視線を送り、ユウキは心配そうに口を開いた。

「大丈夫って何が？」

「ほら、ボク達は二人で行動しろって言ってたけど、にーちゃんは一人でしょ？」

なんだ、そんなことか、と。

キリトは自身が装備している光フォトンソード 剣の調子を確かめながら。

「大丈夫だろ」

「うわっ、即答？」

「ああ」

キリトは一度だけ頷いた。

対するユウキはおずおずとした調子で問う。

「理由とかあるの？」

キリトは特別な感情を言葉に乗せることもなく、今までのユーキという存在の人間性を分析した上で、何気ない口調のまま事実だけを口にする。

「目的が定まったアイツはしぶといからな。ユウキも知ってるだろ？」

「それは、確かに……」

困ったようにユウキは笑う。

今までのユーキというプレイヤーを見ていれば、茅場優希という人間を知れば、苦笑いを浮かべるのも理解できるというもの。

目的が定まった彼はしぶとい。

どれだけ痛めつけられようが、どれだけそれが苦難なものであろうが、どれだけ目の前に障壁があろうが、彼が足を止めることはない。痛めつけても痛みを無視して、苦難も歯牙にかけずに、障壁など壊して前に進む。

諦めを踏破し、強靱すぎる意志のまま、目的へと邁進する。それが茅場優希と言う狂人であるのだ。

だからキリトは口にする。

問題ない、と。死んでもタダでは死なない人間を心配するだけ無駄であるというかのように、不自然なほど気に留めない様子のまま。

「今のアイツはシノンしか見えてない。シノンと戦うまで斬ろうが焼こうが、目的を達成するまでアイツは負けないさ」

「ということはだよ、にーちゃんは死銃デス・ガンって人に本当に何もしいのかな……?」

「それは……」

キリトも解らなかった。

彼らしくないといえはらしくない。

ならば、自分達の知らぬまに処理をするのか、と考えるもそれも違うとキリトは思う。障害になるのなら何も言わずに影で、誰にも知られずに裏で叩き潰すのがユーキのやり方だ。

だが今回は違う。

死銃デス・ガンの事は放置して問題ない、と。此度は何故か注文オーダーを付けて、自分達が負けなければそれで勝ちであると口にしていた。

いつものように裏で処理するつもりならばそんなことを言うのはおかしく、ユーキという人間性にしては消極的な進め方でもある。

宛てがあるのか。

自分達も知らない何かを知っているのか。
今となつては確かめる術がない。

「……アイツは放置して問題ない、って言ってけどいざとなれば俺達
が止めよう」

「そうだね」

ユウキも同意見なのか、力強く頷く。

しかし直ぐに。

「でもにーちゃんの言うとおりに、大丈夫だったらさ、キリトをお願いし
たい事があるんだよね」

「お願いって、ユウキがか？」

「うん」

珍しい、というわけでもない。

しかしどこか改まって口にするのは、彼女らしくないと思ったのか
キリトは首を傾げる。

今までISLラグナロクの中心部である都市廃墟を見つめていた
ユウキは振り返り、キリトの方へと視線と意識を向ける。

その眼は真剣そのもの。

今まで見たことがないユウキの表情にキリトは奇妙に思いながら
――。

「ボクと戦ってよ、キリト――」

「――ううん、はじまりの英雄」

.....
.....
.....

ガンゲイル・オンライン
B O B 本選 I S L ラグナロク 都市廃墟

——銃声が響き、閃光が照らし、爆発となって辺りを木霊する

戦塵が周囲を舞い、視界が遮られていた。

そこへ——、

「チ——ッ」

舌打ちを伴い、いち早くその場から脱する金色の人影——モブ^{ユーキ}の姿があった。

彼の姿は五体満足無事——というわけではない。むしろ不格好なそれだ。身体の至る所が、赤色の弾痕らしきエフェクトがあり、それだけで彼がどれだけ被弾しているかわかるというもの。

忌々しげに、体勢を立て直そうとするが。

「逃がすものか、間抜け」

「っ……！」

遅れてもう一人の人影が、モブ^{ユーキ}を追うように追隨する。

その右手には鈍く輝く棒状の得物——クリーニング・ロッドが

握られている。

武器、というには頼りない。銃身清掃用の道具にしては、先端が鋭利過ぎるそれを右手に持つ人影——死銃は真つ直ぐに、モブ目掛けて推進していく。

モブが避けようとするが、何もかも遅かった。必要最小限の動きで、死銃は容赦なく、モブの右肩を刺突し貫いた。

痛みは当然ない。

ペインアブソーバーが当然に機能している現状において、刺されたという事実は違和感として処理されていく。

モブは刺された右肩を意に介さず、突き刺された得物を握り締める。

材質は金属状。だが妙であつた。ガンゲイル・オンラインにおいて金属製で本来の意味で武器と呼べるものはコンバットナイフ程度しかない。

だがしかし、現にこうして目の前にいる男は、金属製の棒状のそれでモブの右肩を貫き、HPバーを削ることに成功している。

「呆れた野郎だ。こんな所まで来ても剣士の真似事か？」

モブの軽口に対して、死銃は嘲る様にして応じた。

「それは、貴様もだろう、アインクラッドの恐怖。武器でもないスコップを振り回すなど、蛮族極まったな」

「蛮族。蛮族ねえ？」

口元を引き裂きながら笑みを浮かべる。

含みのある言い方に、死銃も違和感を覚えたのか、それともこれまでの命のやり取りを主とした経験則からか、突き刺していたクリーニング・ロッドを咄嗟に抜き、その場から離脱するように後退する。

同時にモブは散弾銃を左手に持ち、そのまま片手で構えていた。

気付かれた焦りはない。彼は照準を死銃の胴体に合わせて。

「新ネタだ」

一発、二発。

引き金を引き、死銃に向かって放つも着弾することはなかった。

奇襲は失敗。

死銃の危機察知能力に軍配が上がり、再度モブの身体へ突き立てんと駆ける。

舌打ち。

ままならない戦果に苛立ちを募らせてながら、モブは右手に軍用スコップを持ち、先端のプレート部分を面に構えてギリギリで防いだ。

金属同士がかち合った際の特有の音が辺りに鳴り響かせて、両者の間に火花が生まれる。

そうして両者は拮抗する。

片や突き刺さんと力を込めて、片や防ぐために現状を維持する事に専心する。

「本当に、弱くなったな」

「だろうな。自覚はある」

売り言葉に買い言葉。

挑発のつもりなのか、死銃は事実だけを伝え、モブは肯定する。

「お前からは、何も感じない。途方もない威圧も、身体の芯から冷やす恐怖も、何も」

「……っ」

「あのときのお前が、今のお前を見たら、どう思うだろうな？」

「……知るかよ。腹抱えて笑うんじゃないのか？ つっつかよお——」

言葉を区切り、力を込めてモブは得物を弾く。

「そこまで言うのなら、オレ程度に梃子摺ってんじやねえよ！」

態勢を崩した。

あとはいけ好かない胴体に風穴を開けるだけ、と散弾銃を構える。
だが――。

「――そうだな」

それよりも早く、速く、疾く。

死銃は既に立て直し。

「お前を、殺す」

同時に死銃の凶器が奔る。

お前には用がない、と言わんばかりに放たれるそれは先程の速度の非ではなかった。

何とかそれを辛うじて防ぐ。

必殺の刺突。一度で終わるはずがない。

一、二、三、四。

尚も連続で放つそれをギリギリで防ぐ。

響きあう二つの鋼はよく出来た音楽のように、火花と音を散らす鋭利な凶器とプレート。

銃の世界であるガンゲイル・オンラインにおいて、珍しくもありえない金属音。

己の攻撃を必死に防ぐ、かつて自分が恐怖していた人間を前にして、死銃は落胆を禁じえなかった。

この程度か、と。ここまで墜ちてしまったのか、と。
もはや見る影もない。

アインクラッドの恐怖と呼ばれた人物と同一人物とは思えなかつた。

どこにでもいる人間に成り下がり、今まさに自分に削り取られようとしている。

死銃デス・ガン自身、アインクラッドの恐怖などどうでも良く、通過点に過ぎない存在である。

彼の最終到達点は「はじまりの英雄」。アインクラッドの恐怖「など」はじまりの英雄」を本気にさせるための餌の一つでしかない。

—— そうだ。

—— オレはそのためにいる。

—— 技を磨き。

—— 牙を育て。

—— 憎悪を滾らせてきた。

—— お前じゃない。

—— アインクラッドの恐怖ではない。

—— オレの標的はお前ではない。

故に、退け、と。

邪魔をするのなら、そこを退け、と憎悪を込めて、怒りのまま、ソードアート・オンラインで愛用していたエストックの代わりとなっている今の得物を振るう。

逸る死銃デス・ガンとは裏腹に、モブユークキは大きく後退する。

それはつまり、此処に至って死銃デス・ガンを脅威と認めたとということ。

それが癪に障った。

弱くなった、脅威にもならなくなった存在が、何を自分と対等に争っている気であるのか、と。

—— ふぎけるな。

—— 取るに足らなくなった分際のお前が。

——オレとまだ争っているつもりか。
——アインクラッドの恐怖。
——既にお前は取るに足らない存在。
——生き汚いやつだ、お前は………！

もはや相手にならない。

もはや怪物でもない。

もはや敗戦処理に等しい。

死銃デス・ガンにとって、アインクラッドの恐怖はその程度の存在でしかなかった。

再三、死銃デス・ガンはモブユキキに突撃しようとするも、既の所で歩を止めて大きく後退する。

モブユキキから距離を開ける——訳ではない。

自分とモブユキキを同時に仕留めようと、バレットサークルが見えたので回避行動を取っただけに過ぎない。

同時に、連続した銃声と弾丸が空を奔った。

回避行動を取っていた死銃デス・ガンに着弾することなく、後退を始めていたモブユキキにも運良く当たらない。

脱兎の如く。

モブユキキは脇も振らずに、廃墟となっている建物へと逃げ込む。

思わず鼻で笑う。なんと無様なことか、と。あまりにも必死に様子のモブユキキに馬鹿にした様子で見送る。もはや格付けは終わった。放つておいても問題がないと結論付けて、死銃デス・ガンがぐるりと頭だけを動かし、二人目の脅威へと視線を向けた。

「ありや、当たらなかったか」

「お前か」

忘れていたわけではない。

ずっと様子を見ていたのか、かつて手を組んでいた者——ピトフリーにやつと意識を向けた。

ピトフリーも死銃^{デス・ガン}へ向けた小銃^{KTR-009}を構えたまま。

「チャンスじゃないの？」

「何がだ？」

「ほら、アインクラッドの恐怖だよ。攻めるなら今じゃない？」

「必要がない」

敵意をピトフリーに向けたまま、死銃^{デス・ガン}は続けて。

「あんな雑魚、いつでも殺すことが出来る」

「雑魚、ねえ？」

含みのある笑みを浮かべる。

奇妙に思えたのか、何が言いたい、と死銃^{デス・ガン}は問おうとするが、その前にピトフリーは遮る形で。

「ボコられた癖に、アインクラッドの恐怖を舐めすぎじゃない？」

「クソ……っつ」

脱兎の如く逃げ込んだ家屋の中で、モブは忌々しげに毒付いていた。

本当に運がよかった。あそこでもう一人の今脅威であるピトフーイが横槍をいれないと、どうなっていたかわからない。良くて致命傷、悪くてあそこで自分は敗北していた。そんな絶対の予感を感じ取っていた。

弱くなった、などわかっている。

そんな事実、百も承知だ。

そのことに恥じることはない。元から自分はこの程度であると、モブは——ユーキは受け入れる。

だがそれも何も無い状況であればの話だ。

ここにおいて、弱いだけでは許されない。この程度の相手に、手間取ることなど許されないのだ。

「ふー……」

深く、深く、息を吐く。

追撃がないことから、完全に自分など眼中にないのだと理解する。好都合だった。時間が与えられるのは、ユーキにとっても願ったり叶ったりだ。

見つめなおす。

今の自分にとって足りないものは何か。昔の自分に満ちていたものは何か。

自分への憎悪が足りない、自身への憤怒が足りない、何よりも——賭ける物が足りない。

何もかもが足りない。

技術スキルも足りない、才能センスも足りない。そんな自分が今まで生き残り、フロアボスを単騎で攻略していたのは、なけなしの命を賭け金として差し出していたからだ。

そうして辛うじて、自分は一流達の中に割って入ることが出来た。

命を賭け、怒りのままに剣を振るっていたからこそ、ソードアート・オンラインで痛覚を獲得し、そのおかげで致命傷になりえる攻撃を直感で防ぎ避けることを可能にし、ズタボロになりながら前に進むことができた。

ならばどうすればいいか。

そんなもの簡単な答えであつた。

「すー、ふー……」

息を吸い、溜め込んだ息を吐く。

自身はどうすればいいか、簡単なことだ。あの時のように、今までのように、同じ事をすればいい。何もかもが足りないのなら、賭けるものなど限られてくる。つまりは——命を賭ければいい。

やり方はわかつている。

憎悪が足りないのなら生み出せばいい。

憤怒が足りないのなら汲み取ればいい。

燃やす火種がないのなら、自身が薪となればいい。

「あー、バレたら絶対に説教コースだなこりや……」

ぼんやり、と口にする。

怒られるだろうか、泣かれるだろうか、愛想尽かされるだろうか。

どちらにしても碌でもない結末になる。

だがそれでも、だとしても——。

「アイツが、オレの後ろを付いてくるヤツが、オレに真っ直ぐに喧嘩を売ってきたんだ——」

これからユーキがやることはソードアート・オンラインでの再現だ。

致命傷となる傷を負えば、痛みとなり身体を奔らせ、最悪シヨック

死するかもしれない。百害あって一利なし。だがそれでもしなければ、自身にあった直感が作動しないというのなら仕方ない。

かつてと違うところがあるというのなら、ユーキの心境の変化だ。自分の死に場所を探すような、自暴自棄にも似た理由ではない。絶対に負けられないから、絶対に倒れていられないから、この一時のみ以前の暴威を呼び覚ます。

思い出すのは後輩の真つ直ぐな眼。

きつと今も自信を視ているであろう眼を思い出して、ユーキは獰猛に笑みを浮かべる。

「――後輩に情けねえ姿なんて見せられねえだろうがつ！」

瞬間、身体を穿っていた箇所から灼熱があり、それは直ぐに痛みと なって身体中を駆け巡る。

気が遠くなる。

それはアミュスファイアが強制ログアウトさせようとしているものであった。現実世界での優希の心拍が異常に高まった結果、アミュスファイアに備わっていたシステムが起動したのだろう。

だがそれを。

「――つ、今のは不味かったな」

ユーキは異常な意志力で耐え切った。

本来ではありえないのだが、それがユーキという人間の異常性。狂人と称されるほどの曲がらぬ意志で以て耐え切ってしまった。

次第に、視界がクリアになっていく。

痛覚が奔る、動くたびに激痛となって身体が訴える、限界であると悲鳴を上げる。

知るか、と。

無言でそれを悉くを破却して見せて、視野が広がっていくのがわかる。

何度も経験したことがある。

初めてP.O.Hと対峙したときに、フロアボスと対峙したときに、キリトと決闘したときに、そして——茅場晶彦を止めるときに。今感じている感覚を経験したことがある。

ゾーン。

それは極限の集中状態。自分以外の体感速度が遅かったり、視覚聴覚が非常に鋭くなる状態。限界を感じることなく、自分の思い通りに体が動くような、全能のような感覚。

本来であれば、何も訓練されていない人間が入れない領域。それを優希は死にかけることによって無理矢理モノにしてみせる——。

そうして、モブは再び戦場へと戻る。

尋常ならざる気配。

一人はかつて味わった気配なのか、恐怖で一步後ずさり。

もう一人は待ち望んだ展開に、冷や汗をかきながら笑みを浮かべる。

二者二様。

だが問題の彼は歯牙にもかけない。それよりも先を見据えている故に。

境地に至った彼の右目には、蒼黒色の焰が灯り、超然とあるがままを彼は口にする。

「——退けよ。アイツが待ってるんだ」

第19話 BOB本選 く先輩と後輩く①

——私が、彼らと知り合えたのは、偶然だった。

SAO失敗者^{ルーザー}と腐っている場合じゃないと、一念発起して始めた副職が軌道に乗り始めてしまった頃、私は再び腐りかけていた。

正直な話、やっていられなかった。

副職、つまりは「アインクラッドの恐怖」をガンゲイル・オンラインで名乗り、名を売り本物の興味を引き、そして誘き寄せるといった簡単なもの。

しかし一向に現れない。どれだけ私が戦場を駆け巡り、他人をブツ殺しても、偽者^{わたし}が賞金首^{バウンティ}システムの上位ランカーになろうが、本物が現れる兆しがなかった。どうでもいい雑魚を蹴散らし、返り討ちにし尽くし、健気に待っていたが、私は根気が強い方ではない。

「どうやら「アインクラッドの恐怖」は自身の異名など気にしない人間であるらしい。そうでもなければ、偽者^{わたし}をずっと放置しているわけがない。偽者^{わたし}の名が売れ始めた初期段階で、ブチ殺しに来る筈。でも来ない。偽者^{わたし}など最初からどうでもいい、と言わんばかりに無視され続ける。」

モチベーションを保てる筈がない。

腹いせに恋人を普段よりも5割増にボコっても憂さが晴れない。しまいには、「アインクラッドの恐怖」の個人情報特定するまで会わない、なんて無茶振りする始末。

私自身思う。なんて無茶なことをいうのかと。絶望し切っていた恋人の顔が記憶に新しい。

それなのに、ガンゲイル・オンラインに毎日ログインしていたのは、きつとまだ諦めついていないのだろうか。

何をするでもなくボーっと。話し掛けられても生返事。上の空で

何もする気が起きない。きつとこの頃の私は見れたものじゃなかった筈だ。死んだような魚の目をしていたに違いない。

ぼう、とその場に座り込んでいる私の視線の先には、ギャンブルゲームを楽しんでいるプレイヤー達の姿。

その中で、私の目線はある建物へ。金属バーを隔てて20メートルほどの距離。その奥には弾痕が刻まれた建物があり、その中には西部劇に出てくるような格好をしたNPCのガンマンの姿。建物の屋根の辺りにピンク色のネオンでUn touchable!の文字。

ガンマンのNPCの銃撃を避け、近づく簡単なルールだ。挑戦するのか、一人が金属バーが開くと同時に、一人が走り始める。数メートル進むが、程なくして銃撃されてゲーム終了。

私もやったことがあるからわかる。

恐ろしく難しく何度もやったが踏破出来るビジョンが浮かばない。アレをクリアした人間は存在せず、これからも現れることがないだろうと思う。

現に、何人か挑戦しては、返り討ちにあう。

次こそは、と挑戦するも、やはり撃ち倒される。

もしガンマンに触れることができれば、今までプレイヤーが掛け金として支払ってきた500クレジットの全額——ざつと30万クレジットを手に入れることができる。

一攫千金。踏破することが出来れば、ガンマンに触れることさえ出来れば、30万クレジットが手に入る。でもクリアできない。故にギャンブルゲーム。ダンジョンやクエストを回り地道に稼ぐのではなく、一発逆転を狙い大金を手に入れようと躍起になる。

そこまで楽しみたいのなら、賞金首でも狙えばいいのに。

だが彼らはそれすらも出来ないのだろう。賞金首になっているプレイヤーは上位に位置する連中ばかり。装備を整えて、狩ろうとするも返り討ちにあってしまっただけは目も当てられない。ゲームオーバーになるとペナルティが発生し、装備していた武器や防具がランダムにドロップしてしまう。しかし逆も然り。賞金首を殺せば、賞金を手に入れることができるし、装備品を手に入れることも出来る。リスクに

見合ったメリットがある。

だが腕に覚えがあればの話しだ。弱い人間は賞金首を狩るなんて選択肢はなく、地道に稼ぐ能力もなければ、ギャンブルゲームに走ってしない路銀を手に入れ繋ぐしかない。

ゲーム内にいるのに、まるで現実世界のよう。

ぼんやりと私は、世の縮図的な光景を眼にしていた。

そして、また挑戦するプレイヤーの姿を眼にした。

数は二人。先程まで挑戦していたプレイヤー達とは違い、初期装備で身を固めている。

どうやら初心者のもようであり、幾人ものやつらを食い物にしてきた魔のゲームに挑戦するようであった。

ご愁傷様。

私は心の中で十字を切る。

二人のうち、一人は黒髪の長身美人。もう一人は小さい体躯な金髪。金属バーの前に、黒髪の方が立つ。どうやら彼女が先に餌食になってしまうようだ。

結論から言うと、私の予想は大きく外れた。

なんと、クリアしてしまったのだ。初期装備の黒髪の女性が。あっさりとして、リトライもなしに、初見で余裕で。

他のプレイヤーが黒髪の彼女を囲み始めたのは無理もない。

半ば無理ゲーであると諦められていたギャンブルが、目の前でクリアされてしまったのだ。周囲が興奮するのも無理はない。心が死んでいた私も、思わず立ち上がってしまったものだ。良い物が見れたおかげか、いつの間にか私の心はやる気に満ちてしまっていた。

このようにして、私は彼らに出会った。

これが初めまして。囲まれている黒髪——ユウキちゃんを強引に連れ出して、ついでに傍に控えていた金髪の小さいの——モブも連れ出す。

我ながら、初めましての割には少しばかり強引だったかもしれない。モブには長いこと警戒されていたからね。

それからというもの、私達は一緒にクエストに回ったり、ダンジョンを攻略したり、一緒に過ごしていた。

二人とも当然のことながら初心者。教えることはたくさんあったし、やることもいっぱいあった。しかし流石、というべきだろうか。ユウキは少しレクチャーすると卒なく何でもこなす。天才とは彼女のことを言うのかもしれない。対するモブは彼女ほど器用じゃないようで、何ともデコボコ感がある二人なのだろうと思った。

ユウキがあつたの「絶剣」であるとなつたのは一緒に過ごし始めて数ヶ月たってから。別に驚きはしなかつた。むしろ納得していたのを覚えてる。

しかしそうになると、問題はモブだ。

ユウキが「絶剣」であり、SAOサブバイパー帰還者であるのなら、彼も似たような状況——ソードアート・オンラインに囚われていたのかということ。

彼が気になつたのはそれだけではない。

ある種のシンパシー、もしくは同属の気配。普段から、凶暴性を抑えている自分だから解つたのかもしれない。彼も私と同じ——こちら側であると。私はどうしようもない破壊衝動を抑圧し、死への憧れを理性で抑え付ける。

その気配は彼からも伝わる。しかし何を？ 彼は何を我慢しているのか、見当が付かない。少しでも彼が自分を語る人間であれば、推察出来るかもしれないのだが、彼は全くと言って良いほど自分を語ら

ない。私を警戒している、という訳でもない。

私が彼に興味を引かれたきっかけは、そんな理由だった。私と同じ理性で以て誤魔化す者。彼の根底に何かがあるのか、それが気になった。

数日後、憔悴していた恋人から「アインクラッドの恐怖」の正体を聞き、興味から好意へと変わった。

どうやらコイツは私の言い付けどおり、「アインクラッドの恐怖」の情報を集めていたようだ。労いの言葉の一つでも贈ってやるのが人情といえるのかもしれないが、そんなものは私にはない。人としてどうかと思うが、私は意識は恋人ではなく、「アインクラッドの恐怖」に向けられていた。

茅場優希。ソードアート・オンラインの名はユーキ。そして現在の名は——モブその人。

どこまで調べ上げたのか、過去も調べつくした恋人に引く。流石はストーリーカー野郎。調べ上げることにに関して言えば、右に出る者はいないのかもしれない。

彼の過去は悲惨なものだった。

両親は事故で亡くなり自分だけが生き残る。叔父が彼の面倒を見るも、叔父はあの茅場晶彦。

想像以上の地獄だった。もしかしたら、把握していないだけで、更なる地獄を経験しているのかもしれない。

そして推察する。

もしかしたら、彼が我慢しなかった結果が「アインクラッドの恐怖」なのかもしれない、と。

フロアボスの単騎攻略、笑う棺桶ラフィン、コフィンといった殺人集団の殲滅。正気の沙汰とは思えない行動の数々。

彼は我慢しなかった。

死にたくて、息をするのも辛く、生きるのも苦痛で、自身の破滅を望み、かといつて助かった自分が簡単に死ぬことを許さず、我慢しなのまま行動した結果が「アインクラッドの恐怖」なのではないだろうか。

うか。

どうしようもない破滅願望。それこそが彼の正体なのではないだろうか。

であるのなら、今の彼がどれほど苦痛なのか解るのも私だけだろう。

彼は我慢することを覚えた。『アインクラッドの恐怖』で居続けることが困難になったから。きつとユウキが悲しむから、もしくはもつと違う理由なのかもしれない。

だが人間はそう簡単には変わらない。それが一番私が解っている。私も彼も同じだ。この世界における異物。全うな人間には理解されない異分子。私達は我慢しないからこそ、この世界で生きていける。そうすることでは生きて行けない異物。

私が彼を——『アインクラッドの恐怖』を求めろ。

私を救ってもらうために、彼を救うために。私は彼が我慢しなくても良い状況をつくりあげる。

まあ、つまるところ——彼が辛そうにしているのを見ていられたなかった、だけなんだけどね？

そして、現在。

アインクラッドの恐怖に戻った彼に、私や死デス・ガン銃は蹂躪ズミされていた。文字通りの意味で、歯が立たない。

三つ巴の戦いだった筈だ。味方など存在せずに、己の力のみが信じられる状況を、私は作り上げた筈だ。

だが蓋を開けてみればこのザマだ。彼が本気を出しただけで、彼が全力で臨んだだけで、彼が眼を覚ましただけで、彼が我慢することを

止めただけで、私達は相手にすらならなかった。

同じ実力の者同士、優劣がない伯仲の力を持つていれば、私達は仲良く平等に殺し合いが出来ていたのだろう。

しかし現実には悲惨なものだ。三人の中で一人が突出しているのであれば、残りの二人は力を合わせないと生き残れない。死銃かれと組むのは納得がいかないが、当然の流れと言えるのかもしれない。

状況は二対一。

私達が二で、アインクラッドの恐怖に戻った彼が一。

数ではこちらが有利。それでも戦況は拮抗していると言い難いものだ。

自分の命すら顧みない彼の戦い方。

一見、自棄を起こし、捨て身に見えるがそうではない。

必要最小限の動きで、彼は私達を仕留めに来ている。全ての攻撃に我武者羅に反応していた先程とは違い、今の彼には無駄がなかった。被弾はするものの、それが致命傷になるものではない。逆に言えば、致命傷の攻撃だけ避け防ぐ。動きに迷いはなく、最少の動きで、最大の戦果を上げる。

その様子はまるで機械のよう。

敵を倒すためにプログラムされた機械のよう。

まるで、物を言わぬ怪物のよう。

まるで、何も通じない不死身の怪物のよう。

まるで——正体不明の何かのよう。

ゾツ、と。

私は鳥肌が立つような感覚を覚える。

眼が合った。

片目に蒼く黒い焰が宿った眼が、こちらを向いている。

スコープ越しに視ている狙撃主のように、彼は私だけに視線を向けている。

口元が笑みで歪んでいく。

嬉しかった。やっと私を見た。アインクラッドの恐怖が、待ち望んだ本当の彼がこうして今私だけを見ている。

私はそれを、銃弾で以て応じる。
パラパラ、と連続した乾いた音が響く。

同時に彼は駆ける。いいや、駆けるといふのは間違っているかもしれない。膝の力を抜くようにし身体の軸を重力に従ったまま、地面を滑るように距離を詰める。

銃弾は空を切るものもあるが、着実に彼の身体を穿つ。

彼の脇腹を抉り、肩に風穴を開けて、脚部の太ももにも着弾する。しかし彼は止まらない。致命傷となりえるだろう頭部への弾丸は首を動かし避け、心臓付近を推進する銃弾は片手で身を削りながら、私に向かって直進し続ける。

HPバーは確実に削られている。

負傷しているのは間違いない。

被弾率など先程の彼の非ではない。

それでも、彼は倒せない。自身が傷つくことに戸惑わずに、
“は確実に私の元へと辿りつく。自身が始める。恐怖

そこで彼は突然として、急停止を始める。
ふとみれば、彼の背後には死銃の姿。

隙が出来たと思ったのだろう。彼の右手に、先端が鋭利なものに変わっているクリーニング・ロッドが握られている。このまま私に推進していれば、確実に彼は背後から貫かれていただろう。

どういふ反応なのだろうか。

まるで後ろに眼があるかのよう。

彼はこの状況で、後ろに迫る脅威に敏感に反応をしてみせる。
不意打ちなど無意味。

慢心はなく、油断も彼にはなかった。

それを証拠に、彼は死銃へ振り返る。

同時に、左手に持っていた散弾銃の銃口を私に向ける。

ここで放置するなんてありえないと。確実に仕留めるために、私を着実に討ち取るために、銃口だけを置いていく。

回避行動を取る余裕もなかった。

放たれた散弾は、一寸の狂いもなく私の身体へと着弾する。

衝撃で後方へと吹き飛ばされる。
そのままの状態で、視界の隅で。

彼は放った散弾銃《MTs255》を手放し、軍用スコップを両手に構えていた。

いいや、それは構えと言えろのだろうか。構えとは敵の攻撃に備えるためのもの。つまりは防ぐことに重きに置いたもの。彼の姿は構えと言うよりも姿勢。剣術でいうところの八相の構えよりも天に向かつて軍用スコップを突き上げ、腰を低く落としたそれは明らかに攻撃を防ぐためのものじゃない。一撃に重きに置いたようで、あまりにも超攻撃的な姿勢。

「お前、その構えは……っ！」

吹き飛ばされながら、私の耳に死銃デス・ガンの絶望したような声が聞こえる。それはまるで、何度も見えてきた悪夢であり、どうしようもない未来であり、自分の運命が決まった故に諦観しているようでもある。

彼は答えない。一寸の容赦もなく、一切の加減なく、一際の希望もなく、彼はその天高く振り上げた得物を空を疾る稲妻の如し速度で以て――。

.....
.....
.....

ガンゲイル・オンライン
B o B 本選 I S L ラグナロク 都市廃墟

辺りは静寂に包まれる。

俟っていた戦塵も、突如と起こる爆発も、銃声も聞こえない。

先程、ここが戦場になっていたとは思えないほど、不気味なくらい静寂が都市廃墟を支配していた。

その場に立っているのは一人。

片手には散弾銃。もう片方の手には軍用スコップを握った人影――

――モブがその場に超然と君臨していた。

身体が悲鳴を上げる。

痛覚は残留し、激痛は悲鳴に変わり、鼓動が今にも停止するような感覚。

それでも、と。モブ悟らせないように、無表情で歯を食いしばる。ここで倒れたらどれほど楽だろうか。意識を手放し、気絶する事が出来たらどれほど良いだろうか。しかしそれができないからこそ彼はここにいる。

「どうして見逃したの?」

境地ゾーンに至ったまま、モブは声のした方へと視線を向ける。

そこにはもう一人。

仰向けに倒れ、地に背を預けている女性――ピトフーイの姿があった。

もはや死に体。些細なダメージでHPバーが削りきられる程度の余力しか彼女には残されていなかった。それでも警戒心は緩めることはない。彼女の実力がどれほどのものか理解しているからこそ、ど

のような行動にも反応が出来るようにモブは応じた。

「何の話だ？」

「とぼけないでよ。君、はなから死銃殺すつもりなかったでしょ」

この場にはいないもう一人。

足元を見ると、片腕が落ちており、その手にはクリーニング・ロッド。それは紛れもなく、死銃の片腕であった。しかしここにあるのは片腕のみ。本人はと言うと、モブへの恐怖心が勝ったのか、この場から逃亡していた。

しよせんはその程度。英雄を殺すと言っておきながら、自分程度にすら敵わなかった男を思い出し、どうしてもよさそうに口を開く。

「逃げ足が速い野郎だ。仕留め損なった」
「嘘だね」

そういうと、ゆつくりと。上半身を起こして、ピトフーイは傷だらけのまま笑みを浮かべて。

「最初から、倒す気なんてない。私達なんて見えてない。もつと先を視ている」

「どうして——」

「わかったかって？ 何度も言ってるでしょ。私達は思いの外、通じ合ってる。君は納得しないと思うけどね」

ピトフーイの言うとおり、モブは死銃を止めるつもりなどない。告げたとおり、死銃の対処をするのは自分ではないと考えているから。英雄でもなく絶剣でもない、もっと身近な存在こそが、死銃の凶行を止めるべきだと思っているから。

ならばどうして、死銃の前に現れたのか。

それを語るつもりはなかった。誰にも語るつもりはない。いらぬ

世話であるし、余計なお節介であるから、モブは何一つ語らない。

「……一つ、解らん事がある」

「なーにー？」

「どうしてあんな嘘をついた」

「嘘つて？」

はて、とピトフーイは首を傾げる。

彼女にはどれのことをいっているのかわからなかった。嘘なんて何度も吐いてきた。どのことを指しているのかなど、もはや皆目見当が付かない。

「オレは何度も死にかけた。数えるのも馬鹿らしくなるくらいな。だから、死ぬかもしれないって状況は気配でわかる」

例えばS A Oでのアインクラッドの恐怖として行動していた頃。

例えばA L Oでの人体実験の日々。

もつと前で言えば——両親を見殺しにした日。

幾度も茅場優希は死にかけてきた。自分で望んだことにしろ、他者に巻き込まれたにしろ、何度も何度も死という終わりを何度も経験してきた。

だからこそ腑に落ちない。

死の気配がわかる彼だからこそ、納得がいかない謎が残されていた。

「ゲームオーバーになったら死ぬなんて、なんで嘘をついた？」

「……」

理由はある。

一つは本気になった彼を見たいから。

一つは本当に殺し合いをしたかったから。

そして何よりも——我慢をしている彼を見ていられなかったから。

本当のことを口にしようと、ピトフーイは口を開きかけるが、直ぐに閉ざし押し黙る。

まだそれは口に出来ない。相手にもされていけないのに、そんなことを言うのは自殺行為であるし、何よりも気恥ずかしさが勝ってしまった。

だからおどけた口調で、ピトフーイは笑みを浮かべて、誤魔化すような口調で。

「バレちゃったかー。いや、特に理由はないよ。面白かなーって思っただけ」

「チツ、聞いたオレが馬鹿だったか」

「本当にね。これが終わったら死銃アッレも終わるんじゃないかな？ 各所にリークしておいたから」

「どうでもいい。予定が早まっただけだろ」

「ねえ、アイツの殺す方法って興味ある？」

「ない」

それだけ言うと、モブはピトフーイから背を向けた。

何をせずとも、彼はがゲームオーバーになる。もはや警戒することもない、とモブは背を向けた。

そこでピトフーイは一つ尋ねた。

どうしても聞きたかった。答えてほしかったことを。

「ねえダーリン」

「ダーリンじゃねえ。……なんだ？」

「——楽しかった？」

「——」

モブは振り返らない。

特に感情も乗せることもなく、事実だけを口にした。

「久しぶりに暴れたからな。それなりには楽しめた」

「そう、良かった。また私と戦ってくれる？」

「面倒だがな。気が向いたら、またオマエの遊びに付き合っただけでやるよ」

答えはなかった。

ドサ、と何かが地に倒れる音がモブの耳に入る。

彼の背後には満足気に笑う一人の物言わないプレイヤーの姿。その頭上にはDEADの赤い文字。

さて、とモブは呟く。

視られている感覚はあった。戦法を分析し、戦略を練り、撃ち倒すことのみを専心していたのだろう。

「オレの前に晒したって事は、勝つ算段が付いたって事でいいんだよな？」

三度、モブの右目に蒼黒色の焰が灯る。

その視線の先には廃墟となったビル郡の一角。

反射光が光る。

狙撃主は既に姿勢制御の態勢に移っている。ビルのアスファルトに付して、得物を構えている。

照準器越しから見えるレティクルはモブへと合わせている。引き金を引けば、いつでも放たれる弾丸。圧倒的に有利な状況から放たれる狙撃。

驕りはない。

深く息を吸い、そして留める。

意識はモブのみに注がれている。

もはや邪魔者はいない。ずっと待っていた。このときをひたすらに、健気なまでに、彼女はずっと待っていた。

——準備は整った。これから貴方を仕留める——、と彼女

は語る。

それはモブも同じだ。

役目は終わった、義理も果たした。あとは自らの欲望のまま、狙撃主である彼女と相對するのみ。

笑みが零れる。

獯猛に口元を歪ませて、本当に楽しそうに、身体に奔る激痛など感じさせない高揚感に包まれる。

交わる筈のない視線が交わる――。

見えない筈の敵を互いに視認する――。

「勝負よ――」

――勝負だ」

「先輩――！」

――後輩――！」

第20話 B O B本選 く先輩と後輩く②

ガンゲイル・オンライン

B O B本選 I S Lラグナロク 都市廃墟

ガンゲイル・オンラインにおいて、狙撃主はそこまでの脅威の対象となりえない。

狙撃に重要なのは場所を悟られないこと。

どこにいるかわからない状況を作り、狙われているかもしれないという危機的状況を演出し、完璧な奇襲で以て最小限の行動で最大限の戦果を手に居れ、辺りに混乱と焦燥を創造する。それこそが狙撃に重要なものである。故に、撃ち合いなどありえず、位置を悟られることは狙撃主にとっては致命的なミスであると言うほかない。

そして、ガンゲイル・オンラインにおいて、狙撃主は向かい風である。

原因は弾道予測線というシステム。銃口を向けられたら見える赤色のライン。それがある限り、誰がどこに居ても、視を隠そうとも、射手の位置は丸わかりと言うもの。何せその先に、必ず銃口を向けている射手がいるのだから。

故に、ガンゲイル・オンラインの狙撃主はそこまでの脅威となり得ない。場所がわかつているのだから、斜線を切って行動をすれば必ず狙撃されることはない。こればかりはどれほど優れた狙撃主でもどうしようもない。何せ当たらないのだ。神出鬼没に現れようが、弾道予測線よって場所を特定されてしまい、対策されてしまう。

だからガンゲイル・オンラインでは、狙撃主は脅威となり得ない——
——筈だった。

右手に軍用スコープを持ち、モブは遙か彼方に聳え立つ、今となつては無人となっている高層ビルの一角を睨め付ける。

無人、であった。今となつては、新たな主の住処。そこへ陣取る脅

威に意識を集中させる。

モブの身体に弾道予測線はない。

となれば、今は狙われ居るわけではない。ガンゲイル・オンラインの知識がある経験者であれば、そう判断することだろう。

しかしモブの結論は違った。

今の状況は不味い、と。危機的状況であると、モブは一步も動けない。

——全身が鳥肌立っている。

——隙を見せたら撃たれる。

——面倒な気配だ。

下手な行動を取ったら最後、自分の身体に無慈悲に放たれた弾丸が穿たれる。

そんな直感が、モブの頭の中で警報が絶えず鳴っていた。

モブも知識はある。

先程戦った女性——ピトフリーの恋人に狙撃主のレクチャー

を受けたことがある。弾道予測線が自分に向けられてないのだから、

狙撃される心配はないことはわかる。

しかし、モブは否であると断じる。

狙われていない、なんてとんでもない。今正に、この状況は危機的状況。詰んでいる一歩手前であると、今まで培ってきた彼の戦闘経験から来る直感が訴える。

——間違いなく、アイツはオレを狙っている。

——だが、どうやって？

——ラインなしで狙撃することは可能なのか？

そこまで考えて、モブは思い出した。

ピトフリーの恋人のレクチャーの中に、ラインなし狙撃、という単語があったことを。

射手側にあるアシスト機能弾道予測円バレット・サークルを使わないことにより、弾道予測線を見せないというテクニク。言葉にすると単純で見えるが、現実はずう。弾道予測円バレット・サークルを使わないということは、全てを人力で行なわなければならないということだ。

今の位置とスコープから覗かれた場所の位置を計算し、風の向きはどの方向か、また風速がどれほどのものか、様々な計算を狙撃主本人スナイパーが行わないとならない。そして、撃つ寸前まで指を引き金にかけてはならないという制約まである。

そんなことが出来るのは、現実世界でも実銃射撃の経験がある者、それも訓練された人間にしか出来ない、実質不可能な高等テクニクと言う他ない。

ピトフーイの恋人も練習しているが、全く上手く言っていないと聞いたことがある。

それを、そんな無茶を、物にしている。

であれば、話は変わってくる。

——物騒な異名だと思っていた。

——なるほど、道理だ。

——それが出来れば、恐弾の射手なんて言われるようになる。

ラインという、本来あるべき保険。

弾道予測線バレット・ラインを見せないという初見殺し。

不可視でありえない状況から、狙撃される恐怖は絶大な戦果あげることだろう。それこそ現実世界での狙撃のように、最小限の戦力で最大限の戦果をあげるように。

故に——恐弾の射手。

彼女の存在が、恐怖の象徴となる。

「厄介なヤツだ」

吐き捨てるように、忌々しげに呟く。

しかし表情は裏腹に、嬉しそうに、楽しそうに、笑みを浮かべている。

絶対的な状況。

少しでも気を抜けば最後、恐弾の射手は見逃すことなく、無慈悲に撃ち抜いてくるだろう。

まるで達人同士の立ち合いだ。どちらかが先に動いた方が悪手となり、それは挽回できない致命的な敗因となり、勝者と敗者が別れる事となる。

そんな緊迫した状況。

先に動いたのは――。

「――ッ！」

――モブユーキであった。

性に合わない。

一息にその一步を力強く踏み込み、放たれた砲弾の如く速度で以て推進する。

しかし、一撃。

彼方より銃声が聞こえ、遅れて弾丸がモブユーキへと放たれた。

ぞくり、と。

寒気のした方――胸部の部分へと、モブユーキは素直に軍用スコップのプレートを目にする。

そこで衝撃。面にしたプレートは弾かれ、ビリビリと片手が痺れる感覚を覚える。

間一髪。

出鼻を挫かれる形で減速するも、再びモブユーキの二本の脚が疾駆を始める。

されど、狙撃主スナイパーは動かない。移動することなく、今だに高層ビルの一角に救う主は、ボルトを引き不要となった葉莖を排莖し、次弾へ備

える。

狙撃主^{スナイパー}——シノン^{シノン}は冷静であった。

何せ状況は圧倒的に有利。今まで観察し、戦略を練り、勝利する算段もつけた。全ては標的である茅場優希を倒すために。勝ち残ることなど考えていない。全ては今このときのため、彼女はありとあらゆる物を使い、ありとあらゆる物を捨てて、この場にいる。

スコップ越しに、態勢を崩した標的を視る。

辛うじて防いだがようだが、それも当たり前だ。大口径の対物ライフルを片手で持っていた軍用スコップで受け止めたのだ。微動だにしない筈もない。

それでも軍用スコップを離さずに、右手に持ったままなのは流石と賞賛されるべきだろう、とシノンは思う。

——穴すら開いてない。

——となると、生半可な素材で造られていない。

——宇宙戦艦の装甲板を素材にしている？

——どちらにしても……。

やることは変わらない、とシノンは雑念を切断^{カット}する。

考えるのは、先輩の強さに感服している暇も、彼の武器の素材が何で出来ているのかではない。どうやってあの怪物を撃ち倒すかを考えるべきだ。

息を吸い込み、そのまま留める。

——距離、修正。

——風向、風速共になし。

——状況は圧倒的に有利。

——態勢を崩した今なら、必ず当たる。

——普通のヤツなら、ね……。

二撃目。

先程と同じように、銃声が鳴り、遅れて弾丸が大気の壁を引き裂きながら、モブ^{ユキ}へと推進していく。

先程のように、軍用スコップで防がれることはない。走り出したと同時に、放ったのだ。完璧に不意をついた一撃。必ず当たると核心を持った。

なのに――。

「……ッ!？」

シノンはずいぶん息を呑んだ。

凍りついた心から、微かな動揺が生まれる。

絶対に当たると確信した一撃は空を斬り、標的に着弾することなく、地面を穿っていた。

なんてことはない。

避けたのだ。無様に飛び込むように、勢いを殺さぬまま身を前方に投げ出し、受身を取って素早く立ち上がり、そのまま疾走を再び開始される。

ありえない。

初めからわかっているように、しかもどこを狙われているか解っているかのように、彼は事前に回避行動に移していた。

見えてない筈なのに。彼から弾道^{バレット・ライン}予測線は絶対に見えてない筈なのに、どうして撃たれるのがわかっているのか。

あまりにも常識の外側にいる。

人間の五感を屈指しても、察知できる筈がない。この危機的状況で、彼は直感で動いているというのか。

――いいや、今更ねそんなこと。

――だって相手は先輩よ。

――彼を常識に当てはめるのが可笑しい。

――それこそ非常識だわ。

ただ上手いわけではない、才能が恵まれているわけでもなければ、圧倒的な技術スキルをもっているわけでもない。だからこそ、彼は強いのだ。

ずっと観察して、それは理解していた。彼のありえない戦い方を視て学習した筈だ。それでも、それでもだ――。

「……………」

――情報がある前提でも、埒外な状況は存在する。

三撃目を放とうとするシノンの視界に、不可解なモノが移りこんでいた。

視線彼の左手。空拳であった彼の左手に、何か銀色の棒状のものが握られている。それは棒状のクリーニング・ロッド。先程戦っていた相手――死銃デス・ガンの片手を切り落としたときに、装備していた獲物だ。

どうして彼が持っているのか考えて、直ぐに理解した。転がった際に拾ったのだろう。しかし、拾ったところでどうするつもりなのか。遠距離にも対応できる銃を拾うならまだしも、あれは近距離に特化した得物。どう考えても脅威とはなりえない。シノンはそう判断するが、

疾駆していた足を止めて、大きく上半身を反らす。

まるでその姿は弓を引き絞る弓兵のよう。左手に持っていたクリーニング・ロッドを順手に持ち直し、大きく固く引き絞る。

その姿に、ゾワツ、と。

背筋が凍りつく感覚をシノンは覚える。

脳内が、直感が、経験が、ありとあらゆる感覚が、今の状況が不味いことであると、シノンを訴える。

何をするのか解らない。

解らない以上、迎撃の仕様がな。ならばどうするか。やられるよりも先にやるしかない。

シノン は三撃目を放とうと引き金に指をかけるが——遅かった。

それよりも先に、モブは行動していた。

力強く踏み込んで、引き絞られた上半身はバネのように前方へと傾き、そして——。

「——オラア!!」

——順手に持っていたクリーニング・ロッドを思いっきり投げつける。

何かが飛んできた、とシノンが感知すると同時に、それは空を切り、シノンの真横を通り過ぎて、廃ビルの天井へと突き刺さった。

思わず、シノンは振り返る。

ビイイン、と揺れるクリーニング・ロッド。その余波か、ビルも少しだけ揺れている気すら感じる。それほどまでに、力強さが伝わってくる投擲。

冷や汗が頬を伝って流れる。

反応が出来なかった。まるでその威力と速度は、鯨を捕まえるために用いられる捕鯨砲のよう。当たったら、ひとたまりもないことが安易に想像が出来る。何よりも驚嘆したのが。

——遠距離に対応する術がない。

——だからといって、あんな物を投げる？

——落ちていた武器を拾うとか、本当に出鱈目。

だからこそ、彼は「アインクラッドの恐怖」と呼ばれたのだろう。何が何でも勝つために、目の前の敵を倒すために、無様になろうとありとあらゆる手段を使って、敵と言う敵を全て塵殺し尽す。埒外の化物、それこそが「アインクラッドの恐怖」と呼ばれる所以なのだろう。

なるほど、そう考えると確かに、と。彼が自分を力不足、と評したのは理解が出来る。彼ほどの者が言うのなら、そうなのだろう、と。だが――。

「それで、はいそうですか、って引き下がれるほど、私の愛は軽くないのよ……っ！」

既に怪物は廃ビルの真下まで来ていた。

中入り、階段を使って掛がる――訳がない。

老朽化が進み、若干の傾きがある廃ビルを、彼は二本の足を使って踏破し始める。傾きがあるとはいえ、壁であることには変わりない。それを壁を走りながら上るとは何たる非常識だろうか。

しかし、シノンには驚きはしない。

各階に設置した罠が無駄になったが、目の前の脅威に比べれば些細なことである。

既に彼を肉眼で視認出来る。

着ている装備も、表情すらも視察できる。

彼は笑みを浮かべている。獰猛に、肉食獣のように、本当に楽しそうに、笑みを浮かべて、シノンだけを見ていた。

「ハハッ」

シノンも思わず笑みが零れる。

もしかしたら、自分も彼のような笑みを浮かべているのかもしれない、と考えるだけで笑えてくる。

接近されれば終わる。

遠距離での戦いにおいて、狙撃主ほど無敵な者は存在しない。相手の攻撃が届かない位置で、狙撃主だけが一方的に攻撃できるのは大きなアドバンテージという他ない。

しかし近距離戦に持ち込まれれば、戦況はガラリと変わってくる。近づかれればスコープを覗き狙い打つことも出来ず、かといってス

コープを使わずに撃つても命中するわけでもない。ましてや、狙撃銃よりも接近戦に特化した得物を装備しているのなら、不利になることは明らかだ。

だからこそ、接近を許してはならない。

だがシノンが慌てる様子はない。

今正に、真下に迫り来る脅威に対して、焦ることなく照準を合わせ三度発砲するが、モブは両手持った軍用スコップで弾く。

「獲った……ッ！」

既に次弾を放つ時間もない。

同じ土俵に立ちさえすれば、近距離に持込さえすれば、一撃で仕留められる自信がモブにはあった。

登頂は完了している。

同じ位置、同じ視線、同じ地面。ここに来て、やっと二人の視線が交わった。

既に一息で距離を詰められる。まともに戦えば必ず勝てる。そんな確信があった。対するシノンは笑みを浮かべている。観念している、ようには見えない。目が諦めていない。ここで終わるものかと、双眸は力強く訴えている。

一体何をするつもりなのか、と思わずモブは身構えると――。

「は――？？」

モブの予想を大きく上回る行動をシノンは取った。

シノンは大きく後退するように飛ぶ。

その先に地面は――ない。

空へと、躊躇なく、一寸の迷いもなく、その身を投げ出していた。思わず啞然とするモブに、落ちながらシノンはスコップ越しから狙いを定めて一撃放つ。

意識外からの一撃。

不味い、と思つたが既に遅い。放たれた弾丸は、モブの左肩を穿ち
抉つた。

「——ッ！」

苦悶の声を上げるが、視界は落ちたシノン。

彼女はそのまま重力に従い、地面に叩きつけられることはなかつた。生い茂る木々がクツションとなり、落下ダメージを最小限にし、重心を上手く制御し、そのまま高所から落ちる猫のように見事な着地を決めると脱兎の如く逃走する。

左肩に灼熱の痛みを感じ、モブは呆れた口調で呟いた。

「なんて、厭な戦い方をしやがる」

まるで自分の命すら顧みないように、一步間違えれば致命傷となる行動を戸惑いもなく実行する。

きつと落下した位置に偶々木があつたのは偶然ではない。こうなることを見越して、彼女は躊躇なく身を投げ出したのだろう。それでも間違えれば、致命傷は避けられない。

「やっ……」

最後となるであろう、サテライト・スキャン端末を操作し、生き残つているプレイヤーの位置情報を確認する。

既に数は6名。草原地帯にいる二名。田園地帯にいる二名。砂漠地帯に移動している一名に、都市廃墟に居る一名——つまりはモブ。

この二名でいる二組のうち、どちらかがキリト達で、アイツらなのだろう、とモブは分析する。

「合図を送って死銃が終わつたことを、キリト達に知らせるか。スト

レアとユイ経由で伝わるだろう。ユウキも喜ぶだろうな」

そこまで言うと、モブは片膝をつく。

苦しそうに過去急を起こしたように呼吸は荒く、玉粒のように汗が噴出し、流れ伝う。視界の端が狭まりながら、何とか意識を保つ。

境地とは極限の超集中状態。

人間、いつまでも集中できる生き物でもないし、必ず負担は掛かる。

体力は大きく消耗し、どこかで限界が訪れるのは自明の理である。

だが、と。

それでも、と。

「まだだ、そうだろう？ こっからだよな、盛り上がるのは——
！」

笑みは絶やささない。

立ち上がり、口元を割くような凶悪な笑みで、シノンが向かった先へと視線を向ける。

砂漠地帯。

斜線を切る障害物もなければ、有利と取れる高所もない。

ハイになっていることは自覚している。

楽しくて堪らない。純粹な勝負など、キリト以来だと思いつながら、

「いいな、オマエは最高だ——」

「——往こうか、オマエに勝つ算段は、も

うついた」

.....

ガンゲイル・オンライン

同時刻 ISLラグナロク 田園地帯

「クソツ、クソツ、クソツ……!!」

倒壊した家屋の中で、悪態をつく声が聞こえる。

忌々しげに、納得がいかないように、現実を受け入れられない子供のように、癩癩を起こす。

物に当たろうにも、それすらも声の主は出来ない。家屋にある家財を蹴り飛ばしたところで、破壊不能オブジェクトとして処理される。だからだろう。

苛立ちを隠しきれない割に、テーブルも椅子も、食器すらもひっくり返っているだけで、特に破損している様子もない。

その事実が、声の主を更に苛立ちを募らせる。そんなものだ、と言われているようで、戦わずに逃げることを選んだお前はその程度だと世界に蔑まれているようで。

「何だアイツは?! 弱くなった筈だ。なのにどうして——!!」

思い出すのは戦っていた化物の姿。

最初は圧倒していた。相手にもならなかった。いつでも殺せる雑魚だった筈なのだ。それなのに、どうして自分はこんな有様になっているのか——。

右腕を見る。

そこにあるべき右腕。それが無い。

ソードアート・オンラインに居た頃に装備していた自慢であったエストックを模した得物もない。拾う余裕すらなかった。それよりも先に、彼は戦場から逃走することを選んだ。

相手にすらならなかった。

本気を出した怪物に、全力を出した怪物に、一蹴されてしまった。事実、彼自身の装備は紛失し、片腕すら斬り落とされている。耐え難い現実が彼——死銃デス・ガンを叩きつける。

英雄を殺すために、殺意を滾らせて生きてきた。計画も練った、英雄を誘き寄せるために。その結果がこれである。ソードアート・オンラインのときと同じように、恐怖かいふつがまたもや立ち塞がる。

「やっと、見つけたのに。今度こそ、アイツを殺せると、思ったのに……！」

感情のまま、残っている左腕で壁を殴りつける。

許さない、と。このままでは終わらない、と。狂気染みた感情を胸に滾らせて、奥歯をかみ締める。

だが手段がない。武装は消耗し、片腕すら斬り落とされた状況で、勝ち目などゼロに等しい。

そこへ——、

「兄さん」

入り口から、声が聞こえた。

聞き覚えのある声。死銃デス・ガンはそちらへゆっくりと視線を向けた。

銀髪の髪の毛、後ろに一つに纏めている迷彩服を着込んだ男。

見間違はずがない。死銃デス・ガン計画の賛同者であり、音信不通となっていた腰抜けでもある——自分の弟の姿なのだから。

「お前、今更、何の用だ……？」

もう怒りでどうにかなってしまいそうだった。

どの面下げて、自分の前に現れたのか本当に理解が出来なかった。殺意を伴って問いかけに対して、彼の弟——シユピーゲルでもある新川恭二は答える。

「兄さんにやっとな協力できそうだからね」

「——は？」

軽く両手を挙げて、自分は無害であることをアピールしている弟が、何を言っているのかわからない。

そんな彼に追い討ちをかけるように、シユピーゲルは続けて。

「協力したいんだ、兄さんに」

「協力、だと？」

「うん。兄さんは『アインクラッドの恐怖』を殺したいんでしょ？」

「——ッ!？」

どうして、と彼が問いを投げる前にシユピーゲルは言う。

「あの人、僕が味方だと思っているからさ、今なら容易く近づけると思うよ」

「何だと……?？」

「言っておくべきだったね。僕はあの人を油断させるために、近付いたんだよ?？」

本当に苦痛でしかなかったよ、と両肩をすくめて言い放つ弟にぞくりと、死銃は背筋を凍りつかせる。

満面の笑み。気弱であった記憶の中の弟と一致しない表情。無邪気で、どこか残酷な声色で、同居してはならない感情を弟は宿して——。

「さあ、殺しに行こう。邪魔者を消しに行こう。アイツさえいなければ、シノンはまた僕を見てくれる筈だから——」

第21話 B O B本選 く先輩と後輩く③

ガンゲイル・オンライン

B O B本選 I S Lラグナロク 砂漠地帯

日も暮れ始め、地平線には太陽が沈みかけている。空は赤焼けに染まり、まるで鮮血のようであった。

既にB O B本選が始まってから、数時間が経とうとしている。三十人いたプレイヤーも既に六名。半刻と待たずに何もかもが決着するだろう。

そんな中、対峙している二人の人影。

隔てる距離は100メートルも満たない。無言で、彼と彼女は睨み合っていた。

今更であるが、こうして対峙したことがなかったことを、彼は思い出す。

いつも自分の後ろを付いて回り、無表情とは行かないが何を考えているわからない。常に苛立っていた自分とは違う、冷静で偶に零す笑みが綺麗であった後輩。自分なんかと一緒に居て、何が面白いのかでんで解らなかった。小学生からの付き合いであるが、こうして喧嘩する仲になるとは夢にも思わなかった。だからだろうか、今の状況がどこか可笑しくも感じる。

いいや、可笑しいと言うのは、正しくない。

何せ自分達が喧嘩をする原因を作ったのは彼自身なのだ。

火蓋を切り、開戦の狼煙を上げたを上げた側としては、可笑しいというのは非常識ではなだろうか。

—— そうだな。

—— 今回の原因はオレにある。

—— だったら黙って撃たれるのが筋なのかもしれねえが。

そこまで考えて、否、と断じた。

それはありえない。それだけは違う。それこそ筋が通らないと。

彼女は立ち上がった。

立ち上がれない筈だった、そこまでの強さを彼女は持っていない筈だった。それこそが自分の知る彼女——朝田詩乃という人物であつた筈だ。

だがこうして、自分と対峙し、銃口を向けて、敵を穿とうと専心している。

ならば全力で以て応じないとならない。折れて砕けた心を拾い集めて、また形を成して彼女は立ち上がった。

それがどれほど辛いか、どれほど難しいことか、彼は理解している。愚かと断ずることなど出来ない。無駄と嗤う事など以ての外。自分が持ち得ない強さを手に入れた彼女の選択を尊重し、全身全霊で持つて応じなければならぬ。

痛みは絶え間なく。

意識を保つのが限界。

もう満足に動くことすら難しい。

それでも、と。歯を食いしばり得物を握り締める。

自分だけ無様に朽ちてなんていられない。彼女が、朝田詩乃が、最高にカッコいい後輩が、自分を敵と認めてくれたのだ。ならばやることなど一つだろう。

一陣の風が吹いた。

砂埃が舞い、熱くなつた心に冷風が差し込む。

ここまで彼女の掌の上だった。念入りな準備を行い、都市廃墟で仕留める気であつたのだろう。

ここを戦場としたのなら、勝つ手段があるからこそ、ここを最後の戦場として選んだに違いない。

確かに、地面は砂で出来ている。

足はとられて、十分な走力を発揮できるとは言い難い。加えて斜線を切る建造物もない。

距離を開けられては、こちらが不利。近付ける事もなく、身体を打

ち抜かれるかもしれない。

——無駄だ。

——ここまでできたら、いくら考えてもキリがねえ。

——近付けばオレの勝ち。

——近付けないのならアイツの勝ち。

——それだけのハナシだろ。

ここに来て、彼の集中力が高まる。境地ソーンが深まる。より深く、濃く、そして深淵へと。

血の気が多いのだ。ぐだぐだと考えるだけ無駄であるし、何よりも無駄に考えても、この局面において意味をなさない。余分な思考を切り上げる。視界から溢れる過剰な情報を削除する。彼女さえ見えていれば問題ない。他は余計で余分であると断じて——。

息を吸い、そして吐く。

指先が緊張で揺れる。唇が怖くて震える。

私は——朝田詩乃は今自分がやっていることに、幾分かの後悔の念を感じていた。

どうして私が、彼に、好きな男の子に、愛している先輩に——茅場優希に銃口を向けることになったのだろうか、と後悔し始めていた。

私がシノンとしてガンゲイル・オンラインを始めたのはこんなことをする為じゃない。

全ては彼に認めてもらうために。彼の隣に立ち、彼と共に戦った人達のように、大事に思われている彼の幼馴染のように、彼の特別になりたいからではなかったのか。

それがどうして、自分はこうして彼に銃口を向けているのか。怖かった。

出来ることなら、逃げ出したい気持ちもあった。

あの時こうしていれば、というつまらない後悔もある。だがそれ以上に。

「——」

——先輩の真っ直ぐな眼が、臆病な私を奮い立たせてくれる——

彼何も言わずに、痛々しいほど真っ直ぐに、堂々とし過ぎるくらい正面から、場違いな私の挑戦を受け入れてくれた。

きつと彼は限界だ。汗は玉粒となり頬を流れ、顔色は青色を通り越して土気色。身体も無事である箇所なんて探す方が馬鹿馬鹿しいほどボロボロになっている。もしかしたら、立つことすらもやつの状態なのかもしれない。

加えて、謎の存在。得体の知れない死銃とかいう、輩の存在がいるにも関わらず、ありとあらゆる優先事項を私のみに向けてくれている。

静寂が包まれる。

一陣の風が砂埃を巻き上げて、冷え切った私の心に熱を灯す。

先輩の綺麗な蒼色の双眸が語る。

つまらないことを考えるな、と私に言うかのように、こちら側だけを見つめてくる。

それだけで、怯えきった心は晴れていく。

我ながら単純だ。つまるところ、彼に良い所を見せたいのだ。かつこ悪く情けない私ではなく、強くてカッコ良くて貴方の隣に相応しい女であることを証明したいのだ。

私が彼と対峙しているのなんて、たかがその程度。

関係のない人間を巻き込みたくない、泣いている人間を見過ごせない、不幸になつていて人を救いたい、だとか私にはそんな高尚で気高い望みはない。

不要だ、邪魔だ、必要ない。朝田詩乃の人間性には余分なものだ。戦う動機に薄味が過ぎる。それでは私は必死になれない。

もっと俗っぽく、私に絶対に必要なもので、私が私足らしめるもののためないと、この引き金を引けることはない。

全てはこのときのために。

先輩の相応しい相手と認めてもらうために、私は茅場優希を打倒する。

故に、彼女は思う——堂々と撃ち倒す。

故に、彼は応じる——正面からブチ抜く。

とはいえ、モブも余裕がないことは百も承知。

視界は朦朧とし、痛覚がないと気絶しているかもしれない。今となつては、痛みがあるからこそ意識を手放さずに、シノンと対峙することができている。

先程の、都市廃墟で見せた攻防のように、狙撃を軍用スコップで受けるなんて芸当は出来ない。

もし受けたものなら、踏ん張りが利かなくなった二本の足は地面を離れ、無様に砂原を転がり二度と立ち上がることは出来ないだろう。

そうなつてしまつては、本当の終わり。意志はまだ生きているが、

肝心の肉体が付いて来ないなんて洒落にならないにも程がある。
もはや意地だ。

彼がこうして立っていらられるのも意地でしかない。

——何を今更。

皮肉気に彼の口元が歪む。

意地を通したことなど何度もある。意地を張らなかつたことがな
いくらい、彼には呼吸をするのと同じくらいありふれたものだ。

意地があつたから戦えた。無理を通して、身体の悲鳴を無視して、
死に掛けたこともある。今もこうして、後輩をつまらない自身の意地
が原因で、心をへし折らせた。

だがそれでも、自分が戦うのはこれしかない。

つまらない意地に縋りつくしかない。

そうだ、つまらない意地があるからこそ、自分は強くもなれる。

暗転する視界で、銃口を向ける後輩の姿を捉える。

頭の中で警報が鳴り止まない。撃たれたら終わると、何度も告げ
る。

ならばどうするか。

散弾銃MTSS255の弾薬はそこを尽いている。既に持っているだけ無用な長
物といえる。

そこまで考えると、モブユキの判断は早かつた。

既に使い道のない道具に固執することもなく、彼は不要となつた相
棒を左手に持つと。

「——ッ!!」

振りかぶり、思いっきりシノンへ目掛けて放り投げる。

その速度はまるで大砲。

回転しながら、豪速となつた凶器は、一寸の狂いもなく、シノンへ

と飛んでいく。

面を食らったのか、射撃体勢であつた彼女は慌てて態勢を崩しながらも弾丸となつた銃を、狙撃銃でギリギリ防ぐが。

「——あ！」

思わずシノンには声を漏らした。

なんとここで、愛用としていた得物ごと弾かれてしまった。あまりにも威力の高い衝撃だつたのか。

今のシノンは無手。

急いで狙撃銃を拾おうとするが、その隙は致命的なモノとなる。

——勝機……ッ！

そう判断するや否や、モブの行動は早かつた。

考えるよりも先に身体が動くように、致命的な隙を見逃すことなく、右手に持っていた軍用スコップを両手に持ち、天高く振り上げてシノン目掛けて推進する。

間違っていない。

今のシノンは大きなミスを犯している。

彼と彼女を隔てる距離など、100メートルほどしかに。一息に詰められる距離だ。

その状況下で、緊迫したこの状況で、自身の得物を手放してしまうというのは、あまりにも大きなミス。

接近戦に持ち込めばこちらが有利。

何せ彼女は術を持っていない。近付かれれば最後、何も出来ないことだろう。

しかし、と。

ここでモブにノイズが奔る。

—— 待て

—— ちよつと待て。

—— ここで、この土壇場で、アイツがそんなミスをするか？

—— この手はさつき見せた。

—— アイツだって馬鹿じゃない、学習している筈だ。

—— それに、今までのアイツは用意周到だった。

—— オレを観察して、戦略を練って、算段をつけたからここにいる。

—— オレの戦法も学習もしている。

—— そんなヤツが、こんなミスをするか？

彼女はミスを犯した。

ならばモブユキはどうかと聞かれれば、是と答えられる。

—— それに、オレは何で。

彼にミスがあるとすれば——。

—— なんて、オレは、アイツが。

—— 近距離戦に対応できないと勝手に思い込んでいた……？

—— 考える前に身体が動いてしまったことだろう——。

先輩が来る。

彼なら来てくれると思った。

こんな勝機、見逃さないと、彼を信じた。

今の先輩に正面から勝てる人間などいないだろう。

それは先程の戦闘、二対一で戦っていた状況を見ていたから、導き出せた結論でもある。

致命傷のみを避けて、それ以外の攻撃は気にすることなく、最短距離で敵を殲滅する。正に戦闘の権化。力を不必要に誇示することもなく、敵を痛めつける享楽に浸ることもなく、実力を出し惜しむ慢心することもない。持っている手札を最適解で切っている。

そんな相手に勝つ方法なんて限られてくる。

むしろ賭けだ。もし先輩が私を侮っていれば、こんなこと成立しなかった。武器を手放しただけでは、彼は反応しなかった。しかし彼は反応した。それはつまり————ここで仕留めないと後がないと思ってくれているということだ。

先輩は近付いてくる。

最短距離で真っ直ぐに。

道草など食わずに私の元へ。

脇目も振らずに私だけを見て。

彼はきつと、私が接近戦が出来ないと思っっているに違いない。

出来ないからこそその先の攻防。都市廃墟で見せた逃走劇だ。私に近距離でも戦う術があるのなら、命がけで逃げるのは可笑しい。術を持ってないからこそその逃走であり、今の状況であると彼は思っっているに違いない。

間違ってない。

以前の私には彼に対抗する手段がない。

ナイフを持ったところで、彼には何も出来ない。振り上げられた一撃は、変わらずに私の肉体を切り裂くことだろう。

そう。

以前の私であれば、と話した。

腰に手を伸ばす。

装備していたそれを思いつき引き抜き、両手で先輩目掛けて構える。

既に目と鼻の先にいた先輩は目を見開いた。

「——やっぱり」

知っていたのね、と口の中で呟いた。

私と彼は小学校からの付き合いだ。

虐められた私を助けたのが先輩で、そこから私達の仲は始まっていった。

小学校、いいや学校なんて狭いコミュニティだ。閉鎖的な建物に集められて、開放される頃には夕方である。そんな中で、私の噂が飛び交わない訳がない。

人殺し。

銃を使って人を殺した殺人鬼。

子供は残酷だ。経緯や理由なんて関係ない。私が人を殺した悪者だから、と平気で正義の味方面して多人数で攻め立てて来る。私がいくらやめて、とお願いしても聞き入れられることもない。自分達は正義で、人を殺した私は悪だと、それが民意だと指差し貶し乱暴してくる。

でも先輩は助けてくれた。

違うと先輩が否定するが、私の眼には彼がヒーローに見えた。

それだけは譲らない。いくら先輩であつても、そこは曲がらない曲げられない。

私が手にしているのは、苦く悪夢そのもの。

悪夢の名は——グロッグ18。

私が殺した強盗が持っていた銃に似たモノだった。

意識的にしろ、無意識的にしろ、私がかんなモノを切り札にしているとは思っていないだろう。

私の過去を知っていれば尚更。この状況で、サイドアームにハンドガンをもっているとは思わない。だから先輩は距離を詰めたのだろう。

信じたのは私の力ではない。私が信じているのは先輩。

彼が私を脅威とみなしてくれていること。そして——私の過去を知っていても尚、一緒に居てくれた先輩を私は信じた。

手が震える。

頭の中で悪夢が蘇る。

血走った眼、泣き叫ぶ母の声、倒れて物言わない強盗の男の顔、額から流れる鮮血。

動機が激しくなる。

呼応して冷や汗が流れる。

照準が定まらない。

今にも折れてしまいそうな心でも。

——失せろ。

——今は邪魔だ。

——悪夢なんていくらでも見る。

——今このときは、この場所は、私と先輩の世界だ……！

どんな理由であれ、人を殺したのだから私は絶対に地獄に行く。

逃れることも出来ないし、言い訳をするつもりもない。

でも今は考えるのはそんなことじゃない。

逃れられない過去なんかよりも、今は——先輩と過ごす明日がほしい！

震えは止まった。

銃口を先輩に向ける。

先輩の姿勢は崩されない。

私の覚悟を察してくれたのか、笑みを深めた先輩は振り上げた得物をそのまま振り下ろし。

私は絶叫にも似た雄たけびを上げて、引き金に掛けた指に力を込める。

風が舞う。

突風を伴ったそれは私と先輩の中を風ぐ。

私の首に巻いていたマフラーは解かれて宙を舞い。

そして――。

第22話 B O B本選 く先輩と後輩く④

ガンゲイル・オンライン

B O B本選 I S Lラグナロク 砂漠地帯

——そして、私の戦いは終わった——。

静寂が辺りを包む。心地良い、とは決して言えない静寂。剣呑な雰囲気が決戦の地となった砂漠地帯を支配する。

そこにいるが私達だけのよう。でもそれは違っていると、嫌が応にも現実引き寄せられる。

空は既に漆黒に染まっていた。

いつの間にか日は落ちて、曇天であった空は珍しく晴れており、その空には星々が光り輝いている。まるで競うような美しいもので、殺伐とし暗雲がデフォルトに設定されているせいもあってか、夜空が見えるというありふれた現象はこの世界では珍しい光景でもあった。

その空には、水色の中継カメラが飛び交う。意識するほど余裕なく、こんなに絶え間なくカメラが右往左往しているとは思っても見なかった。

いつもの私なら、見せ付けてやろうと考えたのかもしれない。だがそれは——。

「おい」

——彼が許さなかった。

私の首元には彼が振るっていた軍用スコップのプレート部分が宛がわれている。

その距離は皮一枚程度の距離。彼が少しでも力を込めたものなら、私の首と胴体は切断されて、容易く頭は叩き落されることだろう。

静寂とは違う雰囲気は彼から。

怒鳴るでもなく、不機嫌な様子もなく、ただ淡々と。しかし只ならぬ凄みで辺りを支配する。

その様子は、導火線が付く前の爆弾のよう。火種は私にあり、これからの発言次第によつては、簡単に火が付き止める間もなく炸薬となるに違いない。

なのに恐ろしく平坦な声色で、彼——私の先輩は続ける。

「オマエ、何で撃たなかった」

表情は読めない。

顔を俯かせて、彼がどんな顔で私に問うているのか解らなかった。私の両手にはサイドアームに装備していたグロック18が握られている。

持つ度に震えていた両手は沈黙を保ち、不規則に動いていた心臓は静かなもの。恐怖心はなく、引き金に指を掛けて少しでも力を込めたら発射できる状態であった。

しかし弾丸は——発射されていない。

銃口は先輩の胸部へ向けられており、装填された弾丸は起きる気配がない。引き金を引き、撃鉄が落ち、火薬が炸裂され、真っ直ぐに弾丸は先輩の身体を貫く筈であった。

だが何も起きない。私の両手に眠るグロック18は眠ったまま。目覚める気配などなかった。

私は——撃たなかった。

必殺のタイミングを外し、銃口を向けたまま、私は引き金を引かなかった。

「先輩だつて攻撃を止めたじゃない」

「オマエが撃たなかったからだ。撃てなかったならまだ解る。仕方ない、そういう決着もある。だがこれは違う、オマエは敢えて撃たなかった」

ここで先輩は顔を上げる。

先程の只ならぬ雰囲気を纏った先輩ではない。右目に宿っていた焔はなく、顔は違うが眼は同じだ。いつもの私を知る先輩の、絶対の意志を伴った蒼色の双眸が、ジツと真つ直ぐに私を見る。

何故止めた、と眼で問い。

納得出来ない理由であれば許さない、と先輩の意思が断じる。

少しの欺瞞も見逃さないように、本心を告げるように、彼は無言で訴えていた。

当たり前だ。

今まで必死に、お互い死力を振り絞り、持てる力の全てを以て、私達は戦った。

ありとあらゆる手段を用いて、ありとあらゆる技術を行使し、ありとあらゆる技能を使い潰して、ここまで私達は戦ってきた。

しかしここに来て、私は手を止めた。それが先輩からして見たら、手心を加えたと思ったに違いない。第三者が見てもそう感じていることだろう。先輩が憤るのも当然だ。

解っている。先輩の気持ちも痛いほど解る。私も同じことされたら、黙ってはいないと思う。むしろ先輩以上に攻撃的になっていた筈だ。

それでも、それでもだ。私には撃てない。これまで戦ってきたのはこの時のためじゃない。先輩を倒すためじゃない。私の戦う原点は、そんなものじゃない。

「私はずっと、貴方の背中を見てきた」

それで良いと思った。

弱い私を彼は、ずっと守ってくれる。

居心地が良かった。このまま彼に甘えて、一緒に一生過ごしたいと思っていた。

「貴方は否定するだろうけど、私は貴方にずっと守られてきた。それ

が当たり前前だと思っていた」

だがそれは対等と言えるだろうか。先輩に相応しい女であるといえるだろうか、先輩の隣に立つに足る者の想いだろうか。

違う、それは違う。絶対に違う。先輩は、私の知る茅場優希と言う人間は、常に前に進み続ける。どれほど困難だろうと、どれほど苦難だろうと、彼は顔を上げて歩み続ける人間だ。そんな人に相応しい人はきつと、彼の道を共に歩める人に他ならない。例えばキリトのように、妹ちゃんのように、篠崎さんのように、店長さんのように、あの人のように——結城明日奈さんのように。

「でもそれは駄目。貴方に守られるのは素敵なことかもしれない、幸福なことなのかもしれない。でも私はそれじゃ許せない。守られているだけで満足するような、その程度で収まるような、つまらない存在になりたくない」

結局のところ私の我侷だ。

私だけ守られているのが嫌という我侷で、私は先輩に挑んだ。

先輩を傷つけるためじゃない、ましてや倒すためじゃない。全ては——。

「貴方と戦ったのは、貴方を倒すためじゃない。貴方に証明するため。朝田詩乃あしたしなほと言う存在を、茅場優希せうばゆうきの中に刻み付けるため」

なんて身勝手な願いだろうか。

私は自分の存在価値を認めてもらいたいから、全ての優先順位を放り投げて先輩だけを狙った。

浅ましく、身勝手な女だ。

でもそれが私の全てだ。誰がどうなるうが関係ない、世界が減んだとしても知ったことか。私にとって先輩は全てなのだから。

「だから私は貴方に挑んだ。凄く怖かったけど、凄く嫌だったけど。一緒に歩きたいから、貴方と一緒に居たいから、貴方に——認め
てほしいから」

先輩は何も言わない。

私の首筋に得物をあてがい、反応すらせずに、私の言葉に耳を傾けて
てくれている。

私は両手で、先輩の腕を掴む。

既に銃は掌から零れ落ちて、砂原のなかに消えていった。もう私には
必要がないもの。認めてもらうための手段の一つでしかなかった
それを、私は意図も簡単に手放していた。

私を見てほしい——貴方の後輩はまだ貴方に相応しくないの
？

私の声を聞いてほしい——隣に立つにはまだ力不足なの？

私の存在を認めてほしい——まだ私は、貴方に守られる存在で
しかないの？

私が戦う理由なんてこの程度のものだ。

まるで子供の我侷。こつちを見てほしいから不満を口にし泣き喚
く幼子のよう。聞き分けのない童のようだ。

でもそれが私の全てだった。

守られているだけでは嫌で、今度は私が彼を守れるような存在にな
りたい。

彼の隣に立つに相応しい存在になりたいから、身勝手に無謀にも彼
に挑んだ。

彼と同じ視座でいたいから、私は彼と戦った。

だから私は撃たなかった。

私が戦ったのは勝つためじゃない。彼を倒すためでもない。彼に
認めてもらうために戦ったのだから。

「——そんな理由、だったのかよ」

一方的な私の主張に耳を傾け、静寂を保っていたた先輩が口を開く。

口調は穏かなもの。

纏っていた雰囲気は憤りを含んだものではない。ただ穏かで、かみ締めるように、先輩は続けて言う。

「そんな理由で、オマエはオレと戦ってたのか。オマエにとって銃なんて最悪なモノなのに。それを飲み込んで」

そういうと、先輩は持っていた軍用スコップを地面に突き刺した。もう必要がないというかのように、私の主張を認めるかのように。

「ガキの頃からオマエは、ずっと辛い目にあってきた。周りは敵だらけで、オマエは泣き言を一つ言わない。オレはそれが我慢できなかった」

顔を上げて、こんど先輩は私を見る。

悔しそうに、許せなそうに、悲しそうな目を浮かべて、彼は続ける。

「それが今、オマエはまだ頑張ろうとしていた。オレ達に付き合っ、命すら張ろうとしていた。違うだろう、それは絶対に違う筈だ。今まで頑張ってきたヤツが、それ以上頑張る必要なんてない筈だろ」

だから彼は私を突き放した。

彼らと同じように無茶をしないように、と。

今度こそ私が普通の生活を送れるように、と。

私がそんなことを望んでいないのは百も承知だ。だけどそれでも、先輩は我慢が出来なかったのだろう。私がこれ以上、辛い目に合わないようにと、自身が悪者になろうとも、私を突き放してでも、守りた

かった。

「オレが要らない気を回して、余計なことをしたが、オマエは立ち上がった。オレの前に立って、オレに勝ちやがった」

そこまで言うと、先輩は私に向かって頭を下げた。

驚きはしない。先輩のことだ、こうでもしないと筋が通らないと考えていたのかもしれない。

「オレなんかよりもオマエは強い、オレが間違っていた。——酷いことを言って傷つけて、ごめん」

「……許すに決まってるじゃない。貴方がすることは、いつだって」

——そして、私の戦いは、

いいえ、私達の初めての喧嘩は終わった——

それからというもの私達はその場に座り込み、空白の期間を埋めるように、交流のなかった分だけ、私達は他愛のない話しに花を咲かせていた。

久しぶりの先輩とのお喋りは楽しかった。中継カメラが視界の隅に飛んでいたが知ったことではない。逆に見せ付けるように、私は先輩の腕を掴んで離さなかった。我ながら大胆な行動であると思うが、しようがない。久しぶりの先輩との触れ合いなのだから、テンション

もハイになるといふもの。今の私に怖いものなど何もなかった。

「それで先輩はこれからどうするの?」

「これからって何だ?」

対する先輩は余裕がないの力、振りほどこうともしない。

これくらい甘んじて受けてもらう。些細な勝者の特権と言うやつだ。これくらいのご褒美があつてもいい筈。

「まだB○B続けるの?」

「オマエに負けたのに続けるってのも妙なハナシだろ」

「そうね。先輩は私に負けたものね」

うんうん、と噛み締めるように私は言う。事実なのだから仕方ない。そうだとも仕方ない。余韻に浸っているとかそういうことじゃない。多分、きつと、恐らく。

先輩は見透かしたように、半眼で睨みつけながら忌々しそうに言う。

「……オマエ、良い性格になつたな?」

「先輩のおかげよ。ありがとう」

「……どういたしまして」

小さな抵抗とでもいうかのように、小さく舌打ちを一つ。

見た目も相まって、小さい子供のようで可愛らしく、子供っぽい先輩の新たな一面を発見できて嬉しい。

「今頃、キリトとユウキが戦つてる頃だろうな」

「何でわかるの?」

「ユウキが戦りたがつてたからな。死銃デス・ガンの件が終わった今なら、速攻でキリトに喧嘩を売つてる頃だろうさ」

戦闘狂ってやつか、と呆れたように肩を竦める先輩に、私は死銃デス・ガンの件の事を思い出していた。本当にどうでも良かったらしく、我ながらつくづく先輩しか見ていなかったのだな、と思う。それだけ全力だったということにしておこう。

「良い機会だ。草原地帯にいるから見て来いよ」

「先輩はどうするの？」

「オレはここでリタイアだ。ぶっちゃけ疲れた。一步も動きたくない」

堂々と言う彼に、思わず笑みが浮かべてしまう。

正直にも程があり、何よりも新鮮だった。これが先輩ではなく、等身大の彼なのかもしれない。そう考えたら可愛らしい。今までカツコいい面しか見ていなかったが、なるほどこれからはこんな一面も見れるのか。それは不味い非常に不味い。テンションがどうにかなくなってしまいそう。

一度冷静にならなければならない。

私は立ち上がり、お尻についていた砂を払い、極めて冷静な口調を意識して。

「二人がどれくらい強いのか、見ておくのもありね」

「……何で浮かれとんだオマエ？」

「浮かれてないわよっ！」

見抜かれて恥ずかしい。

顔を赤く染めて、私は誤魔化すように思わず、それこそ考えなしに口を開いていた。

いわゆる、理性が本能に追いついていない状態。浮かれた心はどうしようもないほど暴走している。

「そもそも、いつまで先輩は私のことをオマエって言うの!?! 私、勝っ

たんですけれど！ 貴方に勝ったんですけれど！ 負けた人は勝った人の言うことを聞かなければならないと思うんですけれど！」

「どういうテンションで、どういうキャラだオマエは」

呆れた口調で言うと、確かにと私の言い分を受け止めて納得して。

「だが一理ある。何でもは無理だが、オレに出来る範囲なら叶えてやるよ」

「何でも!?!」

「何でもは無理だって言ってるんだろ。善処はする。試しに言ってみろ」

じゃあ、と口を開きかけるが、私は尻込みをしてしまう。

ずっと考えていた、先輩と一緒に過ごすなんて漠然とした願いよりも、ずっと考えていたことがある。言うタイミングがなかった。何せそれは、小さい頃から言われていた。ずっと呼んでいたあだ名を言い続けるように、訂正するタイミングがなかった。

だがここに来て、絶好の状況。ここ以外でいつ訂正できるというのか。

先輩を見る。

今か今か、と私の提案を待ってくれている。

不思議そうに首を傾げて、かなり愛らしい。抱き締めたいという衝動を抑える。

女は度胸。

大丈夫だ、今の私は強い。私にとって最強の先輩に勝ったのだから、今日一日くらいは無敵の女。

意を決して私は口を開く。何だったら、先輩と戦ったとき以上に緊張している。

「名前」

「名前?」

「そう、名前」

いまいち要領の得ていない先輩に、私は消え入りそうに頼りなく震えた声で。

「これからは、名前で、呼んで……」

「……それだけでいいのか？」

「うん。今、呼んで……」

「は？ 今？」

先輩は空を見上げる。

そこには中継カメラの姿。見せ付けるためにも使っていたそれは、今となつては枷でしかない。

きっと先輩は実名は不味いと思つてくれているに違いない。

この世の中だ。名前だけで特定される可能性すらある。だが私にはそんなものどうでも良かった。暴走した欲望が後先を考えられるわけもなく、私の夢の一つでもある。先輩に名前で呼んでもらう。ことに、必死であった。

「耳元で言えば大丈夫だと思ふから」

「そうかもしれないが、そんなんでいいのか？」

もつと欲を言えば、自然と名前で呼んでほしかった。言う事を一つ聞く、という前提ではなく、ごく自然とした流れで名前呼びに変化するようになった。

だがそんなこと言つてられない。ここだ、ここしかないのだ。私はやつと先輩と肩を並べるようになった。同じ視座に立ち、守られる存在ではなくなった。であるのなら後一步、ここでもう一步踏み込まないとならない。来るべき備えとして、あの人は名前呼びで、私だけ苗字読みとかやつてられない。私だって名前で呼ばれたい。直ぐにでも。今すぐにも。

力強く頷く。

梃子でも動かない私の雰囲気、根負けした先輩は右手の人差し指を下に向けて。

「屈め。今のオレじゃ届かん」

「はい」

言うや否や私の行動は早かった。

残像を残すような勢いで膝を曲げて腰を落とす。

先輩はそんな私の耳元に唇を寄せて、誰にも聞こえない声量で。

「——詩乃」

「——ツ!!」

ぼつ、と顔が火照るのを自覚する。

爆発したように、アクセルをベタ踏みしてするように、0から100に一気に頂点に振り切るように、勢いよく私は先輩から離れた。

彼の名前呼びは、的確に私の脳を破壊していった。好きな人から名前を呼ばれるなんて、これほど破壊力があるのか。これは不味い、非常に不味い。幸せすぎてどうにかなってしまいそう。

これは麻薬だ。

少しでも摂取したものなら、定期的に味合わない、身体が中毒症状に犯されてしまう。

悟られてはいけない。

先輩に悟られてはいけない。

今が夜で本当に良かった。明るいうちであったのなら、直ぐにバレてしまう程度には、私の顔は赤く染まっていることだろう。

努めて冷静に、涼しい顔でどうとでもない様子を演出し、幾重にも仮面を被るように。

「調子が狂うわね」

「それじゃ止めるか」

「絶対に止めないで。止めたら許さないから」

それだけ言うと、私は誤魔化すように、首元から離れたマフラーを拾い上げる。

照れ隠しに、自分の首元にまた巻こうとするが手を止めた。それから先輩を見て、それを自分の首元ではなく——先輩の首に巻かせた。

きっと彼はその意味を理解していない。

情緒不安定だった後輩が急にマフラーを拾って、自分に巻いてきたくらいの感覚しかないだろう。

今はそれでいい。

私がマフラーを巻いた意味なんて先輩が知らなくても良い。

でも伝えないとならない。宣誓のように、私は事実だけを伝える。

「先輩」

「なんだ？」

「今のうちに言っておくけど、私は狙ったら逃がさないしつこい女だからね？」

.....
.....
.....

数分後

さて、と一言呟いてモブ腰ユキを上げた。

ギチギチと身体を構成している何かが砕けかけて悲鳴を上げる。既に彼の身体は活動限界一步手前。少しでも気を許したのなら、意識や闇の中に容易く落ちていくことが安易に想像ができる。

予感はしていた。

これからここに誰が来るのか。

そして自分に何を伝えに来るのか。

先程まで喧嘩して、遂に和解を果たした後輩の姿はない。

彼女は草原地帯で繰り広げられている決闘を見物に向かっている筈だ。恐らく、その決闘は頂点の一角に座する者同士の戦い。出来ることなら、モブユキも物見遊山で高みの見物をしたかった事だろう。

しかしそれは出来ない。

告げたとおり、もう一步も動けなかった。それは比喻表現ではなく、文字通りの意味で。向かったところで途中で力尽きることは目に見えているし、仮に到着出来たとしても、その頃には決闘は終わっていることだろう。

つまりは一步も動けない、というのは本当のことだった。

だがそれと同時に、予感もあり彼は後輩——シノンに着いて行かなかった。

もう一つの決着を見届けるために。

炊き付けた事への責任を取るために、来るかもしれないし来ないかもしれない待ち人を待ち続ける。

待ち人は、来た。

何かを引きずると音を伴って、地面が砂原ということもあり、足を取られながらもモブの元へと近付いてくる。

驚きはしなかった。

先程も言ったとおり、予感がした。

故にモブは驚きはしない。振り返り目にした姿がどのようなものでも。例えその姿が――

「よう」

――自分以上に痛ましい姿であっても。

眼があり、鼻があり、口もある。

髪の毛も生えているし、それが人であり、プレイヤーの一人であることが辛うじてわかる。

しかし何とか人の姿を保っているような状態でもあった。無事である箇所を探す方が難しく、右腕は肘の辺りからもがれており、左眼辺りは抉られているかのように潰されている。

他人が見たら悲鳴を上げられるかもしれない程度には痛々しい。

だがモブは片手を上げて、気安い口調でそのまま続けて。

「随分と男前になったな？」

「そういう先輩こそ」

対する彼も――新川 恭二 シュピーゲルも笑顔で応じる。

とはいっても、口角が上がっており、辛うじて笑っていると解るくらいに酷い表情だ。本人に痛覚はないとしても、見ていて気持ちのいい姿ではない。

とはいえ、モブにとってその姿が当たり前でもある。

無傷で戦いを終わらせた方が珍しく、数えるくらいしか経験したことがない。大抵の戦闘を無傷で終わらせる方がおかしい。主にそれが、忌々しい英雄であったり、常に騒がしい義妹であったりする訳だ

が。

軽口を軽口で返す余裕のあるもう一人の後輩に満足したのか、それとも彼が行なった成果を誇らしく思っているのか、口元を緩めながら問う。

「オマエがここにいてるってことは、ケリが着いたんだな？」

「はい、キツチリ倒してきましたよ」

そういうとシュピーゲルは肩をすくめる。

困ったような口調で。

「でも腐ってもS A O帰還者サバイバーでしたよ。演技してしっかり油断させたのに、一撃で倒しきれませんでした」

「あー、なるほど。だからそんな有様なのか」

「自力が違いすぎました。しっかり反撃されましたし、殺されかけましたよ」

ははは、と乾いた笑みを浮かべてシュピーゲルは続ける。

「どこかの誰かさんが手傷を負わせてくれてなければ、僕は負けてました。ありがとうございますと言いました先輩」

「……話が見えねえよ」

「ここで白を切りますか普通？」

半ば呆れた口調でシュピーゲルは言う。

彼がB O B本選に参加していたのは全ては、死銃デスガンとなった兄を止めるためでもあった。

事の発端は自分達兄弟が始めたことだ。計画を練り、殺害方法を考えて、どうやったら事故に見せかけられるか入念に下準備を始めた。シュピーゲルが——新川恭二にとって不幸なことは、事故に見せかけて人を殺せる環境が整っていたこと、何よりも実の兄が——

新川昌一がソードアート・オンラインで快樂殺人者に成り果ててしまったことだ。

順当に行けば、このまま彼も兄のような存在に成り果てていたことだろう。

しかし状況が変わった。かつては想い人でもあった人が、先輩と慕う存在が——茅場優希が現れたことで、状況が一変した。

優希と交流し、いかに自分が恐ろしい事を為そうとしていたのか、漸く恭二は気付くことができた。何を考えていたのか、と後悔しなかつた日はない。

恭二が兄とその友人と距離を開けることは必然であった。だがこれでいいと思った。自分がいないと死銃^{デス・ガン}計画は頓挫するし、兄も眼を覚ますことだろうと考えていた。

結論から言うと、恭二の判断は甘かつた。

昌一は眼を覚ますどころか、計画にのめり込み始め、ゼクシードというプレイヤーを手に掛けていた。本当に瀬戸際だった。恭二が気付いて通報したから良かったものの、何も知らずに過ごしていたものなら、ゼクシードは死んでいたことが安易に想像ができる。

説得もした。

肉親には見向きもされずに、今となってはこの世でただ一人の肉親でもある。

だが昌一は耳を傾けない。弟である恭二の言うことなど届かずに、SAOでの戦友であったという金本敦と共に死銃^{デス・ガン}計画を推し進めていく。

彼らがB o B本選にて、デモンストレーションとしてあるプレイヤーを殺す計画を練っていたことを、恭二は知っていた。

それこそが「はじまりの英雄」、「絶剣」、そして——「アインクラッドの恐怖」であった。どうして二人が彼らの存在を知っていたかなど最後までわからなかつた。もしかしたら、自分の知らないところで協力者がいたのかもしれない。

考えるだけ無駄であった。三人が狙われている。それも一人は自分が知る人物が狙われている。それだけで充分であった。恭二が兄

を止める理由としては充分すぎる理由であった。これ以上、兄に罪を重ねさせないためにも、先輩を守るためにも、恭二は戦ってきた。

今まで、自分一人で事を進めてきたつもりだ。

巻き込まないためにも、兄を刺激して犠牲者を増やさないためにも、影に身を沈めて行動してきたつもりだった。

それ故に、疑問に思う。

目の前の先輩はどこで察知したのか。

わざわざ、危険である死銃デス・ガンを狙い、自分が止める前に弱体化までさせていた。

どうせ最後だ。

こうして彼と会話出来ないかもしれない。

だからシユピーゲルは素直に疑問を口にした。

「先輩はどうして、僕が死銃デス・ガンを止めると思っただんですか？」

「喫茶店で忠告してきた時だな」

「そんな前ですか……」

おう、と言うと優希は続けて。

「オマエとアイツの関係は知らねえが、あの時のオマエは、何が何でも自分でケリをつける」って眼をしてたからな」

それに、と言うと優希は羨ましそうに、自分には持っていない強さを持っている恭二を羨望しているような口調で。

「オマエは自分の限界を知ってる。自分に出来る事が解ってるし、自分に出来ない事も解っているヤツだ。そんなオマエが、ケリを付けるって眼をしてたんだから、そうなんだろう」

そこまで言うと、オレにもオマエくらいの利口さがあればな、と

忌々しげに呟いた。

対して恭二は、驚愕したのか残った右目を大きく見開いていた。

それだけ、たったこれだけで、彼は自分を信じたというのか、と。現に優希は行動で示していた。死銃デス・ガンを仕留める事も出来たのに敢えて見逃し、片腕を切り落として弱体化させて、後の事は恭二に託し、自分の目的であるシノンとの決着を優先させた。

言葉には出さないから誤解され。

行動で示すから解り辛く。

何も言わないから理解されない。

本当に自分達の先輩はどれだけ不器用なのか、と恭二は考えていると彼が言っていた「自分は一言足りない」と口にしていたことを思い出す。自覚していてもそうなのか、と思っていると。

「まあ、今回は余計なお世話だっただろうけどな」

「余計なお世話、ですか？」

「オマエの事といい、詩乃アイツの事いい、今回のオレは空回りしっぱなしだったからな。オレが出張らずとも、オマエなら死銃デス・ガンを一人で倒してただろうさ」

「いや、本当に助かりましたよ。滅茶苦茶強かつたんですからあの人」

自身の事を過小評価し、こっちを過大評価し続ける優希を見て思わず、恭二は抗議の声を上げた。

兄が五体満足でいたのなら、確実に負けていたことは戦った本人が一番理解している。片腕を亡くし、主装備であったエストックを模した武器すらなく戦ってこれだけ致命傷を負わせられたのだ。優希の介入がなければどうなっていたかなんて、火を見るよりも明らかだろう。

当の優希は、納得していない様子だ。

自身の後輩がああ程度に後れを取るわけがない、と言いたげに不満そうに空を見上げる。

中継カメラの存在はなかった。

実質、第三回のB・O・B本選の決勝戦は草原地帯。優勝者は“はじまりの英雄”と“絶剣”の決闘と、第三戦力の“恐弾の射手”の誰かに絞られたと思われるのだろう。

敗残兵でもある優希や、既に勝ち目のない恭二に誰も見向きもしなかった。

優希はその事実には不満はない。

元より煩わしかったと思っただけくらいだ。

自分達以外に誰もいない。

空を見上げると満点の星空。

その状況で優希は問う。

「恭二、これからどうするんだ？」

「そうですね……」

彼は少しだけ考えて。

「警察に行きますよ。今回の件で僕が知っている事を話すつもりです」

「そうか」

優希も恭二の言葉に驚いた様子はない。

「コイツならそうする、と解っていたように、あるがままを受け入れた。」

「だから、先輩と話すのもこれで最後かもしれない。悔いの残したくない。だから——」

「そこまで言うと、恭二は——シユピーゲルはナイフを手にしていた。」

武装は既にこれしかない。どこにでも売られている、無骨なナイ

フ。それを手にして彼は告げる。

「僕と戦つてくれませんか」

「……ンでオレの後輩は、血気盛んなヤツしかいねえんだ」

「それは先輩がそうだからじゃないですか？」

「言うじやねえかよ」

そういうと、優希は————^{ユーキ}モブは砂原に突き刺していた軍用スコップを引き抜いた。

限界など知った事か、と言わんばかりに獰猛な笑みをもう一人の後輩に向けて。

「いいぜ、戦つてやるよ。ただし条件がある」

「条件、ですか？」

首を傾げるシユピーゲルに対して、おお、と^{ユーキ}モブは軍用スコップの剣先を向けて。

「今から一撃で叩きのめす。完膚なきまでに圧倒して終わらせる。それはもうぐう音も出ねえくらいな」

だから、と言葉を区切ると、口元に浮かべていた笑みが消える。変わりに現れたなのは真剣なそれ。真つ直ぐと、蒼い双眸がシユピーゲルに向けられて。

「必ず——リベンジしに掛かって来い」

「先輩、それは……」

「オレの後輩が、その程度も出来ねえとか言うなよ？ 最後になるかも知れないとか言ってるじゃねえ。オマエの到達点が、ここなわけねえだろが」

ドクン、と熱くなるのをシュピーゲルは感じた。冷え切っていた四肢に熱が宿り始める。

もしかしたら、諦めていたかもしれない。これから何が起こるかわからず、共犯者でもあった自分は二度と日の光を浴びれないような生活が待っているかもしれない。

だが、目の前にいる先輩は、誰も新川恭二という男を信じている彼は、諦めていなかった。

「オレも詩乃も、ずっとオマエを待つ。いつまでも待つてる。だから必ず、戻って来い」

「……っ」

ぐっ、と歯を食いしばる。

もう泣き言なんて言つてられない。こんなにも先輩に、尊敬する男に言わせてしまったのだ。

であるのなら立ち上がらないと。背中を思いつき押ししてくれたのだから走り出さないと。茅場優希も朝田詩乃も、前に進み続けるだろう。ならば追いつかないと。これから待っているかもしれない障害に負けずに、二人に追いつかないと。

シュピーゲルは頷く。

そして走り出す。

負けると解っている。

だがそれでもと、と。

シュピーゲルは走り出した――。

第23話 B O B本選 〈終幕〉

ガンゲイル・オンライン

B O B本選 I S Lラグナロク 草原地帯

今思えば、こうして落ち着いて空を見上げる時間もなかった。

私は一人、歩を進めてぼんやりと、そんなことを考えていた。

私の視界には満点の星空。

いつもは層が厚く、晴れる事が極めて珍しいガンゲイル・オンラインの空であるが、今となつては雲ひとつもない。正に快晴といって差し支えない空だった。

いいや、もしかしたら、こんな空になった事が何度もあったのかもしれない。私が気付かないだけだったのかもしれない。

だがそれも仕方ない事といえる。他のVRMMOではいざ知らず、ガンゲイル・オンラインはフィールドに出たものなら、戦地に赴いているといつてもいい。

極限な環境下。

銃弾が飛び交い、待ち伏せがもあり、少しでも気を緩める事があれば死に繋がる。

そんな状況で空を見上げるのなんてありえない。

何よりも――。

「そんなことを考える余裕も、なかったことね……」

思わず独り言を呟いた。

そうだ。考える余裕も、空を見上げて一息を吐くといった選択肢すらも、私の頭にはなかった。

全てはあの人に――先輩に追い付く為に。一人でドンドン先に進む、彼の隣に立つために、私はこの世界で戦ってきた。

先輩は否定するだろうけど、ソードアート・オンラインから帰って

きた先輩は、何かが変わっていた。戦友を見る時の眼差しが穏かになり、妹ちゃんを見守る視線は優しく、そして幼馴染である彼女を語る口調は高邁を感じさせる。

先輩が何を見たのか、何を感じたのか。仮想世界で先輩は何を見出し、どの様な答えを得たのか。それが知りたかった。そして同じ視座に立ち、先輩と並び立ちたかった。

故に、私にとってガンゲイル・オンラインは娯楽ではない。

菌を食いしぼり、過去と向き合い、精神をすり減らせて、今までこの世界で戦ってきた。

そして、今。

戦う必要がなくなった今。

こうして初めて私は、落ち着いた気持ちで空を見上げる。

「うん、そうね」

悪くない景色だった。

戦いの後でもあったからか、万感の思いを達成出来たからか、もしくは先輩に名前でも呼んでもらえたからか。

気持ちのいいほど、私の心は軽やかだった。

何だかんだで、私はこの世界が好きなようだ。

鼻腔に香る微かな硝煙の匂い。幻聴である銃声の音、一寸の油断も出来ない戦闘、今日は敵でも明日には味方になるかもしれないという腹の探り合い。

プレイしていて染まってきたからか、それとも元々そういう素質があるからか、私にとってガンゲイル・オンラインは悪くない世界であり、いつの間にか好ましく思っていたようだ。

それを証拠に私は、こうして足を運んでいる。

この世界での実質的な決勝戦を見るために、私達を下した二人がどの程度の腕なのかを見物するために。

先輩は言った。

良い機会だから見ておけ、と。

二人の決闘はそこまでの価値があると、彼は一言足りないもの確かな評価を下していた。

ならば行くしかない。他ならぬ先輩がそこまでの評価を下したのだから、それを見ないという選択肢は私にはなかった。——先輩と一緒に見たかったというのが本音だが。

到着するは草原地帯。

先程確認したら、生き残っているの私を含めて三人。

残りの二人は草原地帯におり、どの位置にいるのかも解っていた。

砂丘を越えて、二つの地帯を流れていた川を渡り、そうして漸く私は草原地帯に足を踏み入れた。

辺りを見渡すも、目的の二人は直ぐに見つける事ができた。

そして——。

「……」

思わず私は息を呑んだ。

闇夜を切り裂く光剣。片や紫色のキリト、片や蒼色の妹ちゃん。銃の世界でもあるガンゲイル・オンラインに来ても銃ではなく剣を使う二人に呆れる、といった気持ち私には湧かなかった。

いちやもんを付ける暇も、皮肉を一つ呟く余裕も、瞬きをする時間すら惜しい。

私は不覚にも、二人の決闘に目を奪われてしまっていた。

先輩が野性染みた本能と超直感に任せた狂戦士バーサーカーの如し戦闘スタイルであるのなら、あの二人の剣技は正にその真逆。洗練で完成されたような舞踊。まるで踊るように、光剣を唸らせながら、二人は笑みを浮かべて剣を交えていた。

なるほど。確かに先輩の言うとおりだ。流石は先輩。

これは見ておいて損はない。中継越しでもなく、間近で見れる私は

幸運といえるだろう。

二人の決闘は、VRMMOにおいて頂点同士の戦いといえるのかもしれない。先輩以上とは言わないが、彼らの実力は先輩に迫るものがある。

戦うとしたら遠距離で仕留めるしかない。

だが倒しきれんだろうか。先輩は超直感とも言える、常識では説明できない感覚で私の狙撃を防いでいた。彼らも同じことが出来るかもしれない。そうなれば、私の勝ち目は薄くなる。

私には狙撃しかない。近距離は出来なくもないが、彼らに一步見劣りするのも事実だ。となれば接近されてはならない。常に遠距離を心がけ――。

「……って違うでしょ」

そこまで考えて、私は頭を振るう。

いつもの癖だ。強敵を見ると、観察し、戦いの癖を見て、そこを攻めようとしている私がいる。誰の影響かなんて言うまでもない。

ここでにおいて、これが決勝戦。ここで乱入、もしくは勝利した方と戦っても、私に勝ち目がなくらい、二人の力量は上だ。何よりも私にはもうやる気がない。燃え尽きたといっても過言ではないくらい、私の心は穏かなものだった。

だから私は二人の決闘に手を出さない。

両手は空けたまま、舞踏にも似た決闘を、私は眼に焼き付けていた。ずっと見ていたいとすら思ってしまう剣技。

しかし終わりはやってくる。突如として、二人の動きが止まった。ポツリと。

「相打ち、か」

蒼色の光剣が首筋に寸止めされたキリトが眩き、

「そうみたいだね」

対する妹ちゃんの胸部には、紫色の光剣が止められている。
あまりにも一瞬の出来事。

突如終わった舞を見て、私は少しだけ混乱してしまう。
しかし当の本人達は違うようだ。

妹ちゃんは悔しそうに、されど満足気に笑みを零して。

「SAOのときより強くなってない?」

「まあ、そうかもな。いつ再挑戦されてもいいように、実は特訓してたんだよ俺」

「そっかー。にしてもちよつと悔しいなあ! 二刀流だったらボク負けてたかも」

「そうでもないだろう。ユウキなら直ぐに対応できてたと思うぜ」

称え合う二人を見て、呆氣に取られている私を見て、キリトが気付いたのか片手を上げて声をかけた。

「シノン」

「あつ、シノンだー!」

おーい、と両手を振る妹ちゃんに答えるように、私はやっと反応する事が出来た。

先程まで、圧倒的な力量を用いて戦っていた二人とは思えないくらい、あまりにも普通な様子を見て、少しだけ面白かったのか私は笑みを浮かべて。

「お疲れ様、二人とも」

「シノンもねー。って、ここにシノンがいるってことは?」

妹ちゃんの疑問に答えるように、私はピースサインを作って応じ

る。

「キツチリ倒してきたわよ」

「凄い！ にーちゃんに勝ったんだね！」

「余裕よ」

そこまで言つて、直ぐに私は白状をする。

余裕なんてとんでもない。余裕などありえない。勝った方が奇跡であつたと。両肩を大きく竦めて、ため息を吐いて私は訂正する。

「嘘。先輩が万全なら負けてたし、ズルした上に勝ちを譲ってもらつた感じね」

「ズルって？」

興味津々といった調子で、私に近付いて目を輝かせて聞いてくる妹ちゃんだが、こればかりは言わない。

先輩を信じたからこそ出来た戦術。

私の過去を知つた上で、一緒に居てくれた事を信じたからこそ、私は勝つことが出来た。

信じていなければ手を緩める事がない。グロック18。拳銃を手にとつた際に彼は明らかに戸惑い狼狽していた。

だからこそズル。先輩の心に付け込んだ勝利といえるし、これは私と先輩との秘密。

妹ちゃんと言えど、こればかりは教えられない。

悪戯を成功したように、人差し指を立てて自分の口元まで持つていき、笑みを浮かべて答える。

「秘密よ」

「えーっ!!」

「ふふっ、ごめんね？」

不満そうにする妹ちゃんの頭を撫でる。

反応が本当に可愛く小動物のようで、先輩が甘くなるのも理解が出来る。彼女にはこのままで居てほしい。悲しんでいる顔なんて見たくない。

だから。

「妹ちゃん」

「なに？」

「八つ当たりしてごめんなさい」

あの時は本当にどうかしていたと思う。

先輩に突き放されて、冷静な判断が出来なくて、よりもよって彼女に八つ当たりしてしまっていた。

励まそうと追いかけてくれたのに、私に寄り添ってくれていたのに、私は彼女に最低な事をしてしまった。

だが妹ちゃんは笑みを浮かべる。

怒るでもなく、憤るでもなく、満足そうに笑みを浮かべて。

「ううん、大丈夫だよ！ 終わり良ければ全て良しっていうでしょ？」

「——ありがとう。そう言って貰えると、私は嬉しいわ」

「うん、ボクも嬉しいよ」

「それは、どうして？」

思わず首を傾げる。

どうして彼女が嬉しく思うのかわからなかったから。

妹ちゃんは天真爛漫に笑みを浮かべたまま。

「シノンが幸せそうだからに決まってるよー！」

ねっ、キリト、と話しを振って、今まで傍観していたキリトが、ああ、

と頷いて。

「良い顔していると思うぞ。何か吹っ切れた顔というか、そんな感じに見える」

自覚はあった。

先輩に認められて、隣に立つ事が出来て、名前まで呼んでもらえて、私は心のモヤが晴れていたことを自覚していた。

なるほど、と。顔に出るまで私は浮かれていたようだ。そう考えるとちよつと恥ずかしい。まるで恋する乙女だ。いいや、恋もしているし、乙女でもあるのだが。

しかし良くない、あまりにも良くない。

浮かれたままでは足元を掬われるというもの。油断なく慢心することなく、事に当たらねばならない。

咳払い。

仕切り直すことを目的とした咳払いを一つして、私は改めて仮面を被り二人に応じる。

「——それで、どうするの?」

「どうするって、何を?」

キリトは首を傾げる。

外見の影響もあつてか可愛く見えたのが悔しい。

私は呆れた口調で、ため息混じりに。

「三人生き残ってるでしょ。最後の一人になるまで、BOBは終わらないわよ」

「んー、ボクは負けてもいいかな」

いの一番に、妹ちゃんが手を上げて答える。

満足したような口調で。

「ボクの目的って、優勝じゃなくてキリトと戦うためにだったしねー。出来れば勝って、にーちゃんの仇を討ちたかったけど」

「先輩の、仇……?」

周囲が凍りつく。

気付いてないのは妹ちゃんのみ。キリトはやべっ、と身体を固めるが遅い。

私の耳に入ってしまった。聞き捨てならないワードが、無視してはならない言葉が、反復するように何度も何度も。

私は妹ちゃんからキリトへと。

首を動かして視線を向ける。キリトは冷や汗を掻いているが関係ない。ジツと見据えて、再度私は妹ちゃんに尋ねた。

「妹ちゃん、仇って?」

「えっ? キリトってにーちゃんに勝った事があって、ボクもキリトと戦いたかったから、ついでに敵討ちしよう、って思ったんだけど……」

もしかして、ボク変な事言った? と漸く妹ちゃんは辺りの雰囲気
が妙な事になっていくことに気付く。空気が読めていないわけでは
なく、ただ純粹だから私やキリトの様子に気付かなかったのだろう。

それは長所だ。彼女はそんな性格だからこそ、周りに愛され、穏か
な空気にさせてくれる。

しかし今回は、今回ばかりは、妹ちゃんと言えども変えることは出
来ない。

「妹ちゃん、ちよつと離れてて」

「?? うん、わかったよ?」

純粹な彼女をここに居てはならない、と私は離れるように言うのと、

腑に落ちない様子で従ってくれた。

視線と意識はずっとキリトの方へと。

蛇に睨まれたカエルのように、彼は動く様子はない。

もしかしたら、私の動きに反応するために、一挙手一投足監視しているのかもしれない。

「先輩の仇、ねえ？」

「言っておくけど、俺は決着が付いたなんて思っていないからな」

「当たり前でしょう。先輩が負けるわけないわ」

断言して、ため息が出る。

先輩は敵討ちなんて望んでないし、何よりも私はキリトに勝てない。そこまでの領域に達していない。悔しいが正々堂々と戦っても勝ち目はない。

「悔しいけど、今の私じゃ貴方には勝てない」

ゆっくりと歩を進める。

ため息をついて、得物を出さずに、ゆっくりと。

キリトも警戒心を薄めていく。

当然だ。私の両手には何も持っていない。この状態で戦えるわけがなく、どのような攻撃にも対応できるといった自信が彼にはあるのだろう。

私はニツコリ笑みを浮かべて、左手を差し出す。

「だから、もつと腕を上げて、先輩の無念を晴らす事にするわ」

「……アイツはそんなこと望んでないと思うぞ」

「知ってる」

そんなこと私が一番良く知っている。

自分の黒星を帳消しにする為に、私や妹ちゃんに任せるわけがな

い。故に、これは自己満足。

キリトはわかつているのならいい、と私の差し出した手に応じる。握手。友好を示す行為。

私は笑みを深める。

それは悪手であると。求めていない方の手を、キリトから死角になっっているポーチから取り出して、直ぐにピンを抜きキリトの足元へと落とす。

グレネード。手榴弾。爆弾。

パイナップル型とも呼ばれる、グレネードを無造作に放り投げる。キリトはギョツ、と眼を丸くし、足元から私へと視線を移す。

「シノン、おまつ」

「キリト、それはそれこれはこれよ」

私はニツコリ、と。

満面の笑みで、狼狽えるキリトに応じてみせる。

「先輩はこんなこと求めてないけど——アンタはここで爆ぜて頂戴」

最初は抵抗する。

しかしビクともしない。やはりSTR^{筋力}こそパワーで正義だ。キリトの抵抗などモノの問題ではない。筋力は私の方が上である。

はあ、と深いため息。

観念したのかキリトは後悔するような口調で。

「学んだよ。シノンはアイツが絡むと、見境がなくなるんだな？」

「そうよ。次からは気をつけてね？」

瞬間、爆発。

跡形もなく、先程見た舞踏のような決闘とは程遠い決着。

第三回 バレット・オブ・バレッツはここに決着する。
優勝者——Y u k i

戦いは終わった。

野望を碎かれた者が居た、自分の欲望を満たすために動いていた者が居た、戦い者が居たから参加した者がいた、凶行を止めたいから戦う者が居た、認めてもらいたいから銃を手にした者が居た。

戦いは終わった。

目的を果たした者、道半ばで散った者、後一步で届かなかった者、全て者が戦った。

「痛っ」

彼もその一人。

命を懸けて、痛みを伴って、戦場を駆け抜けた。

後遺症があるのか、身体を動かすのもままならない。それこそ、常人であれば指一步すら動かすことも出来ず、想像を絶する苦痛だけが全身を蝕んでいたことだろう。

彼はそれさえも無視して、当たり前前の様に頭に装着していたアミュスファイアを外す。

そんな彼に。

「へえー、痛いんだ？」

「まあ、そりゃ——」

反射的に答えようとし、直ぐに口を閉じる。

そしてギギギツ、と。油をまともに注していないブリキの人形のよ
うに、軋みを上げて声のした方へと首を向ける。

鬼が居た。

満面の笑みで見下ろしている、鬼の姿がそこにいた。

鬼は言う。

「お疲れ様」

「オマエ、どうして」

「寮母さんが入れてくれたんだ」

「……どこから見てた」

「君が無理し始めた辺りからだよ？」

——言い逃れなど許さない、と言わんばかりに笑みを深めた鬼は——

——結城明日奈は無慈悲に言う。

「無理したよね？」

「ちよつと」

「ちよつと？」

「ちよつぴり」

「そう、わかったわ。優希くん、お話、しようか？」

「……うす」

訂正。

戦いは終わらない。

彼——茅場優希はこれから説教という名の戦いが始まる——

最終話　ファイアー・バレット

12月19日　放課後

都内進学校　教室

全ての授業が終わり放課後を迎えた。

担任が簡単な挨拶を手短に終えて、学生達にとっては待ちに待った時間。

次の日が休みと言うこともあつてか、周りの学生達は幾分か騒がしい。

放課後にマツクに誘う男子生徒がいれば、これからどこに行くかと計画を建て始める数名の女子生徒。あくびを噛み殺して部活に向かう生徒もいれば、いそいそと帰り支度をし始める者もいる。

多種多様。

学校と言う集団生活において一貫性などない。誰もが異なる反応をみせ、異なる感情のまますごし、それは喧騒となり狭い教室を騒がしく彩らせていた。

私はため息を吐く。

別に、騒がしくて嫌、という訳ではない。

気持ちちは解る。私も似たような気持ちだ。これからの予定を考えると、胸が弾む気持ちにもなる。あの人と待ち合わせをして、あの人と他愛のない会話をして、あの人と一緒に共に歩く。

考えるだけでも高揚する。

正に足が浮き立つというものだ。何もなければ、鼻歌の一つでも口ずさんでいるかもしれない。

幸か不幸か、そんな愉快なことにはならなかった。

となれば、私に何かがあつたことは明確。実際にあつた。目の前で、6人、いいや7人。私の前にいる男子生徒と女子生徒。腕っ節の強そうな男子もいれば、気の弱そうな女の子もいる。

正に多種多様。一緒にいる事が不自然といったような、一貫性のない生徒達が私の前にいた。

代表格の女子生徒。

一步前に進んで思いつきり頭を下げて。

「朝田さん、お疲れ様です!!」

彼女の一言が号令となり、一斉に「お疲れ様です!」と頭を下げながら続く。

息がぴったりだ。思わず感心するくらい、頭を下げるタイミングもバツチリだし、声も綺麗なくらい揃っている。

いいや、感心している場合じゃない。

思わず私は頭を抱える。

辺りを軽く見渡す。

何事かと、手を止め足を止め口を閉ざした生徒達は遠巻きにこちらを見る。だが騒がしい元凶がわかると「何だ朝田達か」と見慣れた光景だったように、直ぐに直前まで行なっていた談笑であったり相談であったり歩みを進めていく。

冗談じゃない。

私——朝田詩乃にとってこんなの見慣れたものじゃない。

何だで済ませてほしくない。まるでこれでは、私が彼ら彼女らの纏めている中心人物のよう。

どうしてこうなったのか。

最初は遠藤だけだった筈だ。なのにいつの間にか増えてる。影で朝田軍団とか言われているらしいが、本当に冗談じゃない。求めるのは平穏な学校生活。誰が一大勢力を築く事を望んだのか。少なくとも私は望んでない。もつと静かに暮らしたい。

眩暈がするが気のせいではないだろう。

目頭をきつく押さえて、恐らく諸悪根源である代表格である彼女——遠藤に声をかける。

「……あのね、遠藤」

「はい、なんででしょう！ パン買ってきますか！」

「いいえ、今はいいわ。何度も言ってるんだけど、やめてくれないそれ？」

切実な訴えだったと思う。お願いするように、懇願するように、勘弁してもらえないか訴えるいじめっ子のように、私は遠藤に訴える。でも遠藤は首をかしげて。

「それとは？」

「……ごめんなさい。ハッキリ言わなかった私が悪かったわ」

本当に私が悪い。

彼女に気を使った私が悪かった。

ここはやはりガツンというしかないようだ。

ニツコリと満面の笑みで。

感情のまま怒りを隠し、冷たい声色で遠藤に再度お願いをする。

「私に付き纏うの、やめてくれない？」

「そ、そんな！ 私のこと嫌いになったんですか!？」

「いや、最初から貴方のことは好きでもないし」

「塩っ!? なんって塩対応！ でもアレですよ。嫌も嫌も好きのうちってヤツですよね!？」

「いや、嫌も嫌も嫌なもの嫌なんだけど」

「ありがとうございます!!」

コイツ無敵か？

何を言っても通じないようだ。むしろどこか喜んでいる節がある。頬を染めて、鼻息を荒くして、どこか興奮している彼女に、若干の嫌悪感を抱きながら私は素朴な疑問を口にした。

「……それで何で増えるの?」

「増えてるとは? ……ああ、コイツらですか」

おい、挨拶をしろ! と遠藤が言う一人、前に進み出る。いや本
当に挨拶なんて求めてないから、そういうの止めてほしい。

でも私の願いなど彼ら彼女らに届かないようで、一歩前に進み出た
メガネをかけた男子生徒は興奮気味に口を開いた。

「は、初めまして朝田さん! 自分、霧夜って言います!」

「初めまして。あと、タメ口でいいから」

年下、ということはないだろう。

だがその辺り不安だ。キリトという童顔のせいもあり、私の観察眼
も大したことがないことが思い知らされたばかり。年下だと思っ
ていた男の子が、実は年上でしたなんて節穴にも程がある。

どちらにしても、仰々しく来られても困る。

普通に接してほしいのだが。

「そんな恐れ多い!」

ぶんぶん、と風切り音が聞こえそうなくらい首を横に振られてし
まった。

恐れ多くない。是非ともその態度はやめてほしい。本当にやめて。

「あのっ、自分ガンゲイル・オンラインをやってます、先日のB O B
拝見させて頂きました。カッコ良かったです!!」

カッコ良かった、なんて他人に言われても、普段の私であれば何も
感じなかっただろう。私にとって他人からの賛辞はどうでもいいも
ので、褒められても実のところ何も嬉しくもない。

でもあの時の、第三回B○B本選での賛辞は別だ。

あの戦いは、あの数時間のひと時は。私にとって人生を左右するものであり、忘れられない貴重な時間。

私の全てを賭け、私の用いる力を使い挑み、そして遂にはあの人に認められた。隣に並び立つ事を許された記念日。優勝する事など眼中に無く、誰が勝ち残ろうが興味がなかった。私にとって第三回B○B本選は、他人に自身の強さを誇示するための場ではない。全てはあの人に見てもらったためのモノでしかない。

それが、カツコ良かったといわれるのは悪い気がしない。むしろ少しだけ気分が良くなった。

「……ありがとう」

「シノンさんって呼んでいいですか!？」

「ここでその名前で呼ばれるのはちよつと……」

それはそれこれはこれ。

いきなり名前呼びされたみたいで、それはそれで不快な気持ちになる。我ながら難儀な性格だ。

しょうがない。

嫌なものは嫌なのだ。

特別に仲が良い訳でもないのに、いきなり名前で呼ばれて不快に思ってしまうのだから仕方ない。

「わかりましたっ、詩乃さんって呼びま——」

「ダメエ！ 何考えてんだコラア！」

「そうだ！ このクソにわかがあ！ 私だって名前で呼びてえのにお前は恐れを知らねえ勇者か！」

「私だって詩乃のんって呼びたい!!」

「今言ったヤツ、何段飛ばしてんだッ！ 苗字にさんを付けろよデコスケ野郎！」

「野郎じゃありません！ 女ですう！ 正しくは女郎ですう!!」

「ちくわ大明神」

「戦争かあー？ ひき肉にしてやるぞー？」

名前はもつと止めて、と言う前に取っ組み合いが始まってしまった。

わちゃわちゃ、と罵詈雑言を吐きながら。だが殴り合いにまでは発展しない。騒がしいのは変わりないのだが、他人に迷惑をかけない程度の騒がしさ。器用に周囲に不快に思わなくらいには、配慮されていた。

気を使うにしてもどこかズレている、と思いながらため息を吐く。もしかしたら、関係のない人達に迷惑をかけて、私に悪評が立たないように彼ら彼女らは気を使っているのかもしれない。だとしても、もつと違うところで気を使ってほしい。例えるのならそう。私に付き纏うのをやめるとか。

「遠藤」

「はいっ」

気持ちのいいくらい通った遠藤の返事。

同時に、戯れ合い染み取っ組み合いも止めて、遠藤の後ろで横並びに整列する。教育が行き届いている。その努力を違うところに使ってほしいと思いつながら。

「私に用があつたんじゃないの？」

「そうでした！」

「それじゃ何しに来たの？ 端的に教えて。無駄を省いてね」

「はいっ」

遠藤は元気良く言う。

「茅場さんが校門前で待ってますっ！」

あれから、私は遠藤を振り切り、校門前で待っていてくれたあの人
こと——先輩と合流をして見慣れた街並みを歩いていた。

先輩が私を待っていたのは、もちろん偶然ではない。

少しでも一緒にいたかった私の我侷を聞いてもらった。つまりは、
放課後に予定があるか聞いて、時間があれば、ダイシーカフェで催さ
れる宴まで私と一緒にいよう、と誘ったわけだ。我ながら何とと言う行
動力だ。先輩に予定があるから無理、といわれた日にはその日一日ブ
ルーだったかもしれない。本当に先輩に時間が合ってよかった。

とはいっても、校門前にいてくれたのは予想外だった。

連絡をくれる筈だったのだが、どうやら先輩はサプライズも兼ね
て、校門前で待っていてくれていたらしい。

そういうところが可愛らしい。驚かせようとしてくれたのだろう。
良い意味で子供らしい。

いつも仏頂面の先輩がそんなことをするのは、破壊力があると思
う。

ギャップというやつだ。嬉しきで心が躍り、思わず周りに見せ付け
ようとするが何とか我慢。

私も必死だ。

クールを装いながら、内心は湧いている。

一人じゃなくて良かった。もし私がこのまま先輩と別行動を取っ
た日には、暫くはニヤケ顔になることは目に見えている。

しかしこうして、二人で歩くのは久しぶりだ。

形振り構わず、先輩に認めてもらおうと駆け、先輩が仮想世界で何
を見出したのか理解しようと遮二無二行動してのが、今となっては懐
かしい。

無駄とは言わない。

これまでの行動はこうして、先輩と過ごすために。だとしても、先輩と離れた日々に比べたら、苦痛そのものであった。

そう考えると今の私は幸福そのものだろう。他愛もなく、ありふれた日々を先輩と共に過ごせるのは、今まで戦ってきた私のへの最大の報酬といえる。

漸く勝ち取った幸せを噛み締めている私に対して、先輩は前方を見ながら。

「随分遅かったな」

「ええ、変なヤツに絡まれてて」

思い出すだけでも疲れる。

今まで、私が気に入らないと絡んできていた彼女はもういないようだ。絡んでくるのは犬のような遠藤。駄犬なのか、忠犬なのか、良く解らない生物。^{ナマモノ}このまま、ガンゲイル・オンラインまで始めてきたらどうしよう。

先輩は少しだけ考えて。

「変なヤツ……。ああ、遠藤か」

「ええ、最近また酷くなったのよ」

そこまで言うと、先輩は立ち止まる。

その表情はどこか難しそうなもので、雰囲気が若干であるものの剣呑なそれを纏っている。

「酷くなったって、どんなだ？」

そこで私は理解する。

先輩は違う事を想像しているようだった。

私が昔のように、遠藤に理不尽な感情を向けられている、と彼は

思ってくれていたようだ。

先輩には申し訳ないが、そこまでシリアスなものではない。もつと奇天烈で、笑い話にしかない内容だ。当事者の私としては、全く笑えない状況であるのだが。

「大丈夫よ。別に敵意があるとかそういう類じゃないから」

「……そうか」

端的に呟いて、仏頂面であることは変わりなく、口調もぶつきらばうであるが、穏かそのもの。

心配してくれた事実には笑みを零しそうになるが何とか我慢。困ったように、誤魔化すように、演技するように私は片手で額を抑えて。

「妙に慕ってくるというか、前よりもそれが増しているというか……」

そこまで言って、私はふと考えた。

そう言えば人数が増えていた。というか、日に日に増えている。どうしてか少しだけ考えて。

「BOB見たって言ってたし、それが原因かも」

「ただだけが原因じゃねえけどな」

小さくポツリ、と先輩が呟く。

きつとそれは思わず出た言葉だったのだろう。それを証拠に、誤魔化すように先輩は「行くぞ」と再び歩き出した。

だが甘い。

見くびらないでほしい。

貴方の後輩は、常に貴方の発言に耳を傾けている。その程度聞き逃すわけがない。

迂闊な人を追いかけて、私は追及する。

「ねえ、先輩。やっぱり何かしたでしょ？」

「別に、何も」

「ふーん？」

どれだけ誤魔化すのが下手なのだろうか。同時にそれが解る私の成長具合も、我ながら眼を見張るものがある。

少し前の私であれば、違和感しか覚えず確信にまでは至らなかったと思う。しかし今は違う。先輩が何かをしたのは明白であり、遠藤が先輩に絶対服従であるのも納得がいく。間違いなく先輩は、遠藤に何かをしたようだ。

これ以上追求するは止そう。

先輩が何も言わないという事はいつものことであり、遠藤を何とかしたのだって私を思つての行動だったのだろう。

私にはそれだけで充分だ。

両肩を竦めて、呆れた口調で私は言う。

「まあ、いいけどね。騒がしいけど、便利といえば便利なもの。新川君も使えるものは使つておけばいいよ、つて言つてたし」

「恭二が？」

「ええ。妙に遠藤の扱いが上手かったわねそういえば」

「らしいといえばらしい。アイツも腹黒いからなあ」

そこまで言うのと、仏頂面であつた先輩の口元に小さな笑みが零れるのを、見逃さなかつた。

先程、私は幸せといったが、それは正確ではない。

厳密に言えば、現在甘受出来る範囲での最大の幸せだ。今ここにいない先輩のもう一人の後輩——新川君がいれば、私はもっと幸福であつたに違いない。

彼はここにはいない。

学校も転校しており、私も彼が現在どこにいるかわからない。

私が彼が死銃デス・ガンと関係があったのを知ったのは、B o B本選が終わって二日経つての事だった。彼が死銃計画の一端を画策し、墜ちる前に眼を覚まし、死銃デス・ガンと距離を開けていたところ、彼抜きで計画が進んでいた事を知り、命がけでそれを止めた。その程度しか、私は知らない。だが充分だった。新川君が私達の知らないところで一人で戦い、そして彼は勝った。それだけで充分だ。新川君が何を思い、死銃計画を思いついてしまったのかなんて瑣末な事だ。

彼は戦い、勝利した。

彼の友人として、私は誇らしい。

対する先輩は、どこか寂しそうだった。

勿論、様子は変わらない。口は悪く、新川君のことなど気にも留めてない様子だったが、確かにその背中は寂しそうであった。

「おい、詩乃。ボーつとしてんじゃねえ。危ねえだろうが」

「あつ、うん」

ぼんやりと立ち止まり、先輩の背中を見ていた私に、彼は立ち止まり振り返る。

どこか奇妙な光景だった。ずっと前だけ見て、一人で進み続けた先輩が、私のために立ち止まり振り返る。

それが嬉しくて、我慢が出来ず口元に笑みを浮かべてしまう。

足早に彼に追いつき、私達はまた歩き始めて。

「そういえば先輩、いつから新川君を名前で呼ぶようになったの？」

「ンなもん、覚えてねえよ」

「ざつくりでもいいから。覚えてないの？」

私のどうでもいい疑問に、うーん、と先輩は考えて。

「オマエが急に音信不通になった辺りからじゃねえか？」

「いっふっ」

胸を押さえる。

吐血しないが、気分は血反吐を吐いている。

苦しそうにしている私を見て、先輩は呆れた口調で。

「何しとんだ急に？」

「いえ、過去の過ちから来るダメージが……」

はあ？ とよく解ってなさそうだったが、それ以上聞かないでいてくれる先輩に私はありがたくなってくる。

本当に助かった。無駄な時間とは言わないが、先輩と連絡を絶っていた日々を考えるのは辛いものがある。出来る事ならあまり思い出したくもない。

頭を振るう。

違う事を考えるために、これから起きる楽しい催しを考えながら、違う話題を振る。

「先輩は後から来るんだっけ？」

「ああ。先に用を済ませてから行く」

「そっか」

一緒に行けないのは残念だ。

先輩とはここで別行動になるのだが、目的地は同じダイシーカフェ。

BOBでのトップ3でもあった私とキリト、そして優勝者の妹ちゃんを店長さんが祝ってくれるらしい。

実のところ、私は楽しみでいた。

ダイシーカフェのデザート。中でもパンケーキは格別だ。それを好きだけ食べてもいいというのだから、テンションも高くなるというもの。この日のために数日前から食事も我慢してきたし、体調は

バツチリだ。

それともう一つ。

私は何が何でもしなければならぬ事がある。

「なんだ？」

「いいえ。先輩がいない方が都合が良くなって思っただけ」

並々ならぬ決意を秘めた私を察したのか、先輩は尋ねてくるが流石にこれは言えない。

これはある種の決着であり、宣戦布告でもある。私一人で告げないという意味がないものだから。

「それじゃ、先輩また後で」

「ああ」

そうして私達は別れる。

先輩は立ち止まり、私はそのまま歩を進める。

各々進むべき場所が違うのだから、別れるのは当たり前である。

「詩乃」

先輩はそんな私を呼び止める。

振り返り、私は先輩を視界に収めた。

やはりというべきか、仏頂面でぶっきらぼうで、目つきの悪い私の先輩は一言だけ。

「気を付けてな」

「うん。先輩もね——」

それから私はダイシーカフェの前に立っていた。
何度も通った木製の扉の前で、私は深呼吸をしていた。
簡単な事だ。

ドアを開き中に入るだけなのに、たったそれだけのことなのに。

「ふう」

私は酷く緊張している。

これから私が行なわないとならない清算を考えると、心臓が高鳴ってくる。

どんな顔をされるだろうか、どんな言葉を聴くことだろうか。喧嘩になったらどうしよう、と考えるのは私らしくない。つい最近まで出し抜いてやろうと暗躍していたのに、どういう風の吹き回しだろうか。

仕方ないと思う。

彼女の善性を知った今となつては、出し抜いてやろうと躍起になっていた私自身が恥ずかしい。

戦うからには正々堂々と。

卑怯な事を抜きにして、彼女と向き合おうと決めただけなのに、この体たらく。なんと情けないことか。

しかし、ここで尻込みしても始まらないのも事実。

意を決して私はドアを開けて店内へと足を踏み入れる。

「いらっしやい——つて、今日の主役の一人じゃないか」

カウンターには店長さん——アンドリユー・ギルバート・ミルズさんがエプロン姿で立っていた。

ガンゲイル・オンラインにいそうな屈強な姿で、手馴れた手付きでコップを磨いている姿を見て、幾分か私は冷静になっていく。

「こんにちは、店長さん。今日はお招きありがとうございます」

「おいしい、仰々しいな。リラックスして、楽しんでくれよ。このパーティーはお前さん達を祝うものなんだからさ」

「ええ、そうさせてもらいますね」

私はそういうと、カウンター席に腰をかける。

店内には数名の姿。貸切と聞いていたので、ここにいるのは店長さんに招待された人達ということになるのだろう。

主役の一人、ということもあってか私を見てくる視線が多い。

その中で「あの子がユーキの後輩か」と呟く声を聞き逃さなかった。横目で確認すると、口にしたのは革ジャンを着ている額に個性的なバンドナを巻いている男の人だ。

そうです。

私が先輩の後輩です、と誇らしげに思っていると。

「ところで、優希はどうした？」

「先輩なら用事を済ませてから来るって言っていましたよ」

「用事ねえ。また悪巧みか？」

「どうですかね？ 先輩だしありえるかも」

悪巧み、というよりも暗躍。

どうやら先輩は仲間内でも、影で行動していると思われるようだ。

私は思わず笑みを零す。

私の知らない先輩の知る人と、私の知る先輩が合致して、どこか嬉しさを感ずる。

やっと、初めて。

先輩を囲う輪の中に入れた気持ちになった。

そこでドアを開けて、

「いらっしやい」

「ドリユーさんこんにちわー」

聞き覚えのある声。

私はカウンターから立ち上がり、その人物へと視線を向けた。

先輩と同じ帰還者学校の制服に身を包み、カバンを両手に持ち、満面の笑みを浮かべている栗色の綺麗な長い髪の彼女——結城明日奈さんの姿がそこにいた。

待ち人が来る。

私は高まる鼓動とは真逆に、平静を保ち、冷静な口調で。

「明日奈さん」

「あつ、詩乃さんー！」

対する明日奈さんは笑みを浮かべたまま私に駆け寄り。

「ビックリしましたよー。詩乃さんってGGOやってて、優希くんと戦ってた人だったなんて」

「ええ、実はやってたの。見てくれてました？」

「えっと、ごめんなさい。ちょっと用事が出来て、わたし途中から見れなくて……。でもハイライトで見させてもらいました！」

申し訳なさそうに言うと、直ぐに表情を変えて興奮気味に、カッコ良かったです！と彼女は言ってくれた。

本当に表情がコロコロ変わり可愛らしい。私にはない愛想の良さで、先輩が放っておかないのも解る。

「ありがとうございます。明日奈さんにはお世話になりました。貴女に背中を押してくれなかったら、先輩と向き合うことなんて出来な

かったから」

「わたしは何もしてませんよ。わたしはお話を聞いただけです。答えを出したのは詩乃さんですよ」

ニツコリと、花の咲いたような笑みを明日奈さんは浮かべる。我が事のように嬉しく思ってくれているのが伝わってくる。

「ううん、貴女のおかげ。先輩が特別視するのもわかる気がする。譲る気はありませんけど」

「えっ？ それはどういう——」

私の言葉に理解が出来ないのか、首を傾げる姿も愛らしい。でも譲れない、これだけは譲れない。

これは清算だ。彼女の善性に漬け込み、出し抜こうとした私はこうして彼女に堂々と真正面から宣言をする。

私のもう一つの目的、先輩はいない方がいいと言った意味。

それはつまるところ宣戦布告。同じ人を好きになった人へ、投げた手袋を拾ってもらうために、打算抜きで堂々と先輩を奪い合うために、私は彼女に真正面から向き合う。

笑みを浮かべて、手を差し出し告げる。

「改めて自己紹介させてもらいます。朝田詩乃って言います。これから、よろしくお願いしますね？」

「えっ、えっ？ あ、はい。結城明日奈ですよろしく——」

混乱している彼女はそれでも応じる。

差し出した私の片手を握り、握手をしながら。

「朝田。えっ、朝田？ ん、んん?? あれ……?」

「ここで何となく察しつつある彼女にトドメを刺すかのように。」

もすることがないからボーッと風景を眺めていた。

テーブルの上にはコーヒードリンクが入ったカップが置かれていた。

湯気が出ており、置かれて間もない事がわかる。

時刻は定かではないものの、太陽が傾き空は茜色に染まっている。くたびれたサラリーマンが帰路に着き、まだ遊び足りないのか快活な笑みを浮かべた学生服を来た少年少女がすれ違う。その光景を見て、まるで自分のようだ、と、ぼんやりと優希は既視感を覚える。歳が近く、同じ学生という意味では通常は後者だろうと予想出来るのだが、優希が既視感を覚えていたのは前者の方。くたびれたサラリーマンの方である。

もちろん、優希は年齢を偽り、実はサラリーマンだったという驚愕の経歴の持ち主と言うわけではない。

労働をしていると言っても、所詮はバイト。学生レベルの労働であり、過剰な業務を強いられるわけでもない。

だというのに、何故か道歩いている、疲れ切ったサラリーマンに既視感を覚え、今となつては親近感すら湧いている始末。

もしかしたら思った以上に、自分が考えている以上に、枯れているのではないだろうか、と生産性のないことを考えていると。

「よう」

「ああ」

短いやり取り。

優希に声をかけてきた人物はいつの間にか近付いて、気配もなく優希に声をかけていた。

驚いた様子はない。

何せ優希が一人で待っていたのはその人物だ。

詩乃に用があるといったのは、彼と待ち合わせをするため。

同じ制服。

つまりはソードアート・オンラインに囚われた者が通う学校。

彼もまた帰還者学校の生徒である事が解る。

その人物が「座つてもいいか」と訪ね、優希は無言で手で座るよう
に促す。

「なに飲んでんだ」

「エスプレッソ」

「俺も同じのを頼むかな」

「好きにしろ」

その人物——桐ヶ谷和人は店員を呼び、手馴れたように注文し
ていた。

そして店員が少々お待ちください、と笑みを浮かべ立ち去つたのを
見届けた後に。

「それで何だよ。俺だけ呼び出したってことは、みんなに聞かれちゃ
不味い内容なのか？」

「不味くはねえよ。ただキツチリ聞いておこうと思つてな」

優希も店員が立ち去るのを横目で確認すると、そこでやっと和人に
向き直る。

仲良く談笑、という雰囲気ではない。そもそも、彼らはそこまで気
軽に世間話をするような仲でもない。顔を合わせればいがみ合い、軽
口を叩き合う間柄である。

だとしても違和感。

皮肉の一つや二つを言うこともなく、有無を言わさない様子でいる
優希に、和人は幾分かの違和感を覚えていた。

「死銃事件の顛末、お前なら聞かされてんだろ」

「まあ、正式に依頼を受けてたの俺だしな」

そこまで言つて、和人は意外そうな表情で。

「お前は何も聞いてないのか？」

「捜査中だから答えられないだとき。菊岡さんって言ったか。オレは随分と警戒されているらしい」

「あー……」

心当たりがあった。

政府の役人とはいくつもある顔の一つであり、調べては見たものの和人も彼が何者なのかいまいち把握しきれしていない。

腹に一物を抱えているような食えない人物。それが和人に今回の死銃事件の調査を依頼した人物——菊岡誠二郎という男だった。そんな彼が明確に、茅場優希が理解できない存在であると、口を滑らせていたことを思い出す。

狂気の天才——茅場晶彦の家族であった事をあつさり認め、自分を勘定に入れていない思考と行動をする優希を、彼は不気味であると口にしていた。自分の物差しで把握しきれない、理解の外で存在する優希を、菊岡は化物に見ているのだろう。

故に、菊岡は優希を信用していない。

信用していないからこそ、死銃事件の全容を話すことを避けたのだろう。

「渦中にいたオマエなら知ってるだろうと思つてな。話せないんだつたら別に良い」

「いいよ。いずれはお前の耳にも入る事だし」

とはいっても、和人には関係がなかった。

菊岡が信用していないようであるが、和人は違う。癩であるが、茅場優希は悪人でないことは嫌ってほど理解しており、彼には知る権利があると思つたから。

有無を言わさなかつた優希の違和感の正体。

それがなんなのか把握し、彼には知る権利があると感じ、和人は敢

えて問う。

「お前が聞きたいのは新川恭二——お前のもう一人の後輩がどうなったか、だろ？」

「……………」

優希は何も言わない。

つまりそれは凶星と言う事。

突然消えた——訳ではない。

優希と新川恭二の間で離別の言葉があり、優希も納得しているのだろう。そうでもなければ、目の前の男がこうして冷静である筈がない。彼と恭二の間で別れの言葉があり、それでも優希は気にしている、と和人推理をして、事実だけを口にする。

「実際、彼は計画に加担してないし、ゼクシード——茂村保の命も救ったこともあって、情状酌量の余地ありつて判断されているらしい。どっかの誰かさんが、菊岡さんに直談判しに行ったのも効いてるみたいだな？」

「……………何が言いてえんだオマエ」

「別に。本当に暗躍するの好きだなお前」

「暗躍なんざしてねえ。オレは事実を口にただけだ」

なんと素直でない言葉なのだろう、と和人呆れた表情で見る。

対する優希はカップに入っているコーヒーを口にして、涼しい表情で受け止めていた。

心配だからあずかり知らぬところで、菊岡に直談判しに出向いたのだろうと、と思わず言おうとするが口を閉ざす。指摘したところで、目の前の捻くれ者が「そうだ」と素直に肯定するわけがない。あの手この手で言い逃れるに決まっている。指摘するだけ無駄、と判断した和人はからかうような口調で。

「にしても面倒な人に借りを作ったな。ただの役人じゃないぞあの
人」

「構わねえ。いずれは返せる借りだ」

それだけ言うと、今度は優希が皮肉気に口元を歪めて。

「それともなんだ、オマエはオレの心配でもしてんのか？」

「……誰がお前の心配なんて」

今度は和人がやり返される。

同時に店員が注文していたコーヒーを入れたカップをテーブルに
置き、和人に向かってお待たせしました、と声をかけた。

ナイスタイミングだ。

和人は誤魔化すようにカップを持ち、息を吹きかけ熱を冷ましなが
ら、コーヒーを口に運びながら。

「新川昌一、赤眼のザザ。恭二君の兄で、今回の事件の主犯だが、ずつ
と黙秘を続けているらしい」

「黙ったところで、恭二が全部証言するだろう」

「そう。どちらにしても、医療少年院に収容されるだろうってさ」

そうか、と優希が興味なさそうに口にする。

全て終わった今となつては、終ぞ新川昌一が何故自分達を狙ってい
たのか解らなかつた。

何せ、和人や木綿季は邂逅する事が叶わず、唯一相對した優希も動
機が解らなかつた。私怨によるものなのか、復讐心からくるものなの
か、それとももつと根深い和人が与り知らぬ事情があるのか。黙秘を
続けている以上、和人が知る事はないだろう。

「問題はもう一人。金本敦、ジョニー・ブラック。ザザと一緒に
笑う棺桶に居たらしいけど、覚えてるか？」

「覚えてねえよ。蹴散らした雑魚のことなんざ、いちいち記憶に留めておく必要もねえだろう」

どこまでも素直ではない。

覚えていないわけがない。彼が周囲に害を及ぼす可能性がある人物を忘れるわけがない。新川昌一こと赤眼のザザのことも、ジョニー・ブラックのことも、彼は記憶している筈だ。それなのに優希は何も言わない。たかが雑魚と嘲り、小石程度の存在と気にも留めていない素振りをする。

目の前にいる男を和人は、自然と生暖かい眼で見ていた。

その呆れ返った眼が不快に感じたのか、優希は訝しむ表情に歪めて。

「……なんだ？」

「いいや、何でもない」

話を戻すぞ、と強引に話題を戻して。

「こいつはまだ捕まっていないらしい」

「……オレ達に復讐するって可能性は？」

優希の言葉に和人は首を横に振って。

「それはありえないだろう。そもそも金本はB O B本選前に雲隠れしているらしい。そんなヤツが、復讐しになんて来るとは思えない」

「……随分とタイミングが良いな」

「確かに、いいや良すぎる。捜査の手が伸びる前に消えるなんて、勘が良いってだけじゃ説明がつかない」

「しかも、死銃ヤツらにとってオレ達は殺したくてたまらなかつた筈だ。揃いも揃って雁首そろえているのに、手を出して来なかつた」

「ザザだけが、俺達を殺す気で、ジョニーは特にやる気はなかつた可能

性は？」

優希は少しだけ考えて、いいや、と和人の口にした可能性を否定する。

「ありえねえよ。そんな野郎が死銃計画なんて乗ってくるわけがない。金本もオレ達を殺したくてたまらなかつた筈だ」

そこまで言うと、腑に落ちない様子で優希は和人に問う。

「これで全員か？ 他に協力者はいないのか？」

「ああ。菊岡さんが調べた関係者は、これで全員らしいな」

納得がいかない、と優希は難しい顔をして黙り込む。

対する和人はその姿を見て疑問に思った。何か足りない、と押し黙り考える優希に向けて、どうしてそんな表情を浮かべているのか気になり疑問を投げる。

「何か気になることでもあるのか？」

「ああ、ストレアの邪魔をしたヤツがいる」

「邪魔って、何をしたんだ？」

「死銃デス・ガンの個人情報調べようとしたらしい」

そういう前提があるのなら、優希の反応にも納得がいく。

確かに足りない。計画を途中で抜けた恭二、計画を一人で推し進めた昌一、裏切るように計画から逃げた金本。そうなると一人、邪魔をした何者が足りない。

菊岡が知らない、ということとは供述している恭二も知らないということにもなる。

昌一は黙秘を続け、金本も逃走していることから、その人物が何者であるか調べる術はない。完全に正体不明な四人目の人物。

それが誰なのか考えながら、和人は苦笑を浮かべてストレアの行動に戦慄を覚えながら。

「……さらつと言ってるけど、とんでもないことしようとしてたな」
「未遂に終わったけどな。黒い霧みたいなのヤツが邪魔してきたらしい」

「……気味が悪い。何が狙いなんだ」
「もしかしたら、そいつが金本を逃がしたのか。どちらにしても、材料が少なすぎる。いくら考えても罫が明かねえよ」

優希の言うとおり、考察しようにも推理を始めようにも、材料が少なすぎる。

もしかしたら、四人目の人物なんていないのかもしれない。恭二が知らないだけで、昌一がやった可能性があるし、金本が何か細工した可能性もある。どちらにしても、驚くべき事実であることは変わりない。何せストレアが邪魔をされて、特定に至らなかったのだ。AIすらも突破できなかった技術力は、生半可なモノではない筈だ。

とはいっても、主犯格は捕まり、協力者は逃走中。

菊岡の話では時期に捕まるようでもあるし、和人は楽観的に考えながら、試すような口調で優希に問う。

「それでどうする？ 金本の動向探るのか？」

優希は少しだけ考えて。

「いいや、菊岡さんに任せる」

和人が眼を丸くして優希を見るが、枯れの反応も無理もないだろう。

何せあの茅場優希が、大抵の事を自分だけで進める男が、他人に任せると口にした事実。それが和人にとって衝撃的なことであった。

へえ、と呟いて和人は意外そうな口ぶりだ。

「珍しいな、お前が他人に任せるなんて。少しは大人になったのか？」
「馬鹿か。オレが少しでも利口で大人だったら、詩乃が泣くことはなかった筈だ」

自嘲気味に口にした優希は、窓の外に眼を向ける。

今までの自分の行動を省みるように、遠い眼をしながら優希は続けて言う。

「結局、オレはクソガキのままだった。オマエに負けて、ちよつとは自分の中でケリが付いたかと思っただが、何も変わっていない。燻ったままだ」

その言葉には苛立ちがあり、憤りがあり、怒りがあつた。

何も変わっていない自分に対しての怒り。失いたくないからと突き放し、自分以外傷つく事を許さないと傲岸不遜に黙し、我慢できないまま走り続ける。

まるで変わっていない。あの頃のように——ソードアート・オンラインに囚われたままのように、何も成長していないと優希は断ずる。

だからこそ、彼は魅せられたのだろう。

突き放しても心が折れても、それでもと歯を食いしばり立ち上がった後輩に。

自分に出来ることを弁えて、その範囲で命がけで事に辺り終ぞ身内の凶行を止めた後輩に。

変わらぬまま進み続けた自分に、変わった二人の後輩はいつの間にか肩を並べていた。

いいや、優希の中では肩を並べているという認識はない。むしろ、二人に追い越された、と思っていた。

突き放したと思っていた、がそれは違うと自分と向き合った詩乃。

自分の知らないところで行動し、遂には自分が出来なかった事を達成した恭二。

誇らしかった。

そんな二人に先輩といわれるのだから、少しでも誇れるように、どうしようもない我が身なれど、自分も変わらなければならぬと考えていた。

「オレは恵まれている。オレが間違っても、ぶん殴って止めてくれるヤツらがいる。とはいっても、甘えたままじゃいられねえ。少しずつ借りを返さないと筋が通らない」

そこまで呟き、再び優希は和人に向き直る。

その蒼い双眸は真っ直ぐなもので、久しく見る眼差し。コイツのこんな眼を見るのはいつ振りであったか、と和人は考えて。

「最初はオマエだ、桐ヶ谷」

「具体的に何をするんだ？」

それは直ぐに思い出される。

「オレと、もう一度戦え」

」

そうだと。

この眼は自分達が競い合っていた頃に向けられたモノ。

決着は付いたなんて言っていた燃え尽きたような眼をしていた優希ではない。

気に入らないと、目の前の男に負けたくない、我武者羅に勝負を楽しんでいた頃の眼を、優希は浮かべていた。

きっと自分も同じ目をしている事だろう。

それを証拠に、魂に熱が宿り、心のそこから沸き立つ衝動を覚えて

いる。

「お前は俺と戦いたいのか？」

「言ったら、燻ったままなんだ。オマエに負けて、大人ぶって悟ったつもりでいたが、全く駄目だな。オレはオマエに勝ちたがってる。そう魂が叫んでいやがる」

二人とも同じであった。

片や勝ちはずれど納得はいかず、片や負けて無理矢理納得しようとした。

されど両者の心は燻っており、一人は再戦を望み、一人は心に蓋をしようとしていた。

結局のところ、二人とも納得していない。

オレはまだやれると、俺のほうが強い、と決着などと思っておらず、戦いが終わるなどと考えてもいない。

優希にとつて、和人に借りていたモノとはそういうことだ。

色々な連中に出来た借りを返すために行動する上で、桐ヶ谷和人に借りてたものとは敗北そのもの。

「あの時負けた借りを、オマエに返す。オレと戦え、桐ヶ谷」

「俺だけ借りを返す意味が違うんじゃないか？」

苦笑を浮かべようと、クールを装うとするが、上手く笑えただろうかと和人は思う。

確かに笑えた事だろう。だがそれはクールとは真逆のもの。来るべき闘争に心が躍る剣士のような、凶暴で狂猛なそれだったに違いないと和人思う

何せ目の前の男も、自分が追いかけて来た男も、自分と同じ気持ちだったのだ。

——あれが決着だなんて馬鹿馬鹿しい、

——俺が勝ったなんてどうでもよく

——オマエが負けたなんてありえない。

——俺達の決着は、こんな終わりじゃない。

「いいぜ、願ったり叶ったりだ——」

「——戦おう優希。俺達の決着はまだ付

いてない」